

# 深緑の火星の物語

子無しししやも

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アネックス計画。

火星より地球にもたらされた謎のウイルスの脅威を取り除くべく、各国から選ばれた100人のパイロット達は火星へと地球の希望を背負って飛び立つ。

しかし、それだけではなかった。

「裏切り者がいる」

脅威を取り除くべく、各国から送り込まれたもうひとつの『火星組』。

未来の地球を襲う脅威に立ち向かう人々の、火星で紡がれる奇譚。その裏で繰り広げられた、戦いの物語。

※文章作法的にちよつとおかしい部分を少しづつ修正中です

※原作の裏で起こっていた戦い、という内容のため、登場人物はオリキャラ中心で進行するタイプの小説となっています。ご了承ください。

作者は読者さんの感想を聞くのが大好きです！

お気軽に感想書いていってください！

# 目次

## 第1部 新緑の火星の物語

プロローグ | 1

第1話 幹部搭乗員 | 8

第2話 数と力 | 18

第3話 双刃の執行者 | 27

第4話 北国の腹事情 | 37

第5話 新技術 | 44

第6話 日本班の決定 | 51

第7話 森羅の断頭台 | 59

第8話 吹雪に漂う狂気 | 66

番外編 オフィサーの休日 | 76

登場人物紹介その1 (俊輝、拓也、エリシア) | 90

第9話 要塞の弱点 | 93

第10話 暗雲 | 102

第11話 Biosafety Level 1 | 108

第12話 Biosafety Level 2 | 116

第13話 Biosafety Level 3 | 124

第14話 Biosafety Level 4 | 137

第15話 決別 | 143

第16話 帰宅 | 150

登場人物紹介その2 (ヨーゼフ、ナターシャ、アントニー)

156

第17話 日米、時々ドイツ | 159

第18話 陰謀の火星とローマの血雨 | 165

第19話	紅色の老婆	171
第20話	群	177
番外編	六つの時間、六つの記憶	183
第21話	戦闘、静と動	195
第22話	ロシアと裏切り者の憂鬱	201
番外編	そうだ、アームレスリングをしよう	206
第23話	群勢	216
第24話	魔毒	223
番外編	懇談会	231
第25話	光芒	244
第26話	悪夢	250
第27話	ロシアの意地	258
第28話	かつての三人	266
番外地球編1話	二人の逃亡者	271
地球番外編2話	追手	279
地球番外編3話	まな板の上の	287
地球番外編4話	シロの傷跡	297
地球番外編5話	研究所にて	306
地球番外編6話	いざパスタの国へ	315
地球番外編7話	魔人の回廊	323
地球番外編8話	深海の迷宮	334
地球番外編	9話 血戦	348
地球番外編最終話	不安定に平穏な世界で	360
登場人物紹介(番外編の三人)		368
第29話	それぞれの疑問	371

第30話	鳴動	378
第31話	地中の決闘	388
第32話	侵食の地下道	395
第33話	魔物と魔物	403
第34話	悪魔のはらわた	410
第35話	血の海の冥獣	421
第36話	朽ちる世界、記憶の残滓	436
第37話	死に至る病	444
第38話	病蝕	457
第39話	”私”の話 (前編)	468
第40話	”私”の話 (後編)	481
	登場人物紹介(裏切り者幹部編その1)	494
第41話	決戦の火蓋	498
第42話	決闘と諦観と狂乱と	503
第43話	曇りのち晴れ	515
第44話	空、黒く染まりて	532
第45話	裏切り者	543
第46話	赤い決戦	553
第46・5話	疑念の砂漠の底より	563
第47話	黒い胎動	574
幕間	神のスペア	586
第48話	死の戦列	591
第49話	呪歌の残響	606
第50話	悪意の囊	620
第51話	裏切った者	630

	第52話	陰謀の穂先	641
	第53話	御託の前に	651
	第53話	哀れな神の出来そこない	662
	第54話	善と悪の彼岸にて	673
	幕間	ある施設にて	684
	第55話	最果ての始動	690
	第56話	災いへの反逆者達	700
		登場人物紹介(裏切り者幹部編その2+欣)	711
	第57話	争いの凶星	715
	幕間	腐った林檎	727
	幕間	陰謀の星のプロローグ	733
	幕間	青き命の星のプロローグ	744
EXTRA			
■ ■	とある世界		761
Mind	Game:プロローグ	二局の理	769
Mind	Game:第1話	盤外整列	792
Mind	Game:第2話	狂気螺旋	806
Mind	Game:第3話	剣盾会合	824
Mind	Game:第4話	厄災放浪	841
Mind	Game:第5話	冒瀆楽園	860
Mind	Game:第6話	正負天秤	883
Mind	Game:第7話	魍魎跋扈	901
Mind	Game:第8話	偽神繁茂	926
Mind	Game:第9話	守護と救済	946
Mind	Game:第10話	暗中放蕩	973

Mind Game：第10・5話 赤き虚栄

Mind Game：第11話 白亜双哮

Mind Game：第12話 比翼連理

Mind Game：第13話 上帝脈動

Mind Game：第14話 七罪番外

Mind Game：第15話 虚栄の庭（前編）

Mind Game：第16話 虚栄の庭（後編）

Mind Game：第17話 狂乱怒涛

Mind Game：第18話 常在夢中

Mind Game：エピローグ 盤外終結

Mind Game：■■■■の■■■

第2部 青き命の星の物語

第58話 生還者達

第59話 穢れた聖槍と人類の到達点

第60話 槍と剣

第61話 裏切り者狩り

第62話 日陰の兵团

第63話 出会い

特別番外編 エリシア「体を鍛えたいです」

第64話 The Inner GOD 夢見るままに待ちいた

り

第65話 奈落の宣戦

第66話 U|N|A|S|A防衛戦（1）

第67話 U|N|A|S|A防衛戦（2）

第68話 U|N|A|S|A防衛戦（3）

第69話	U   N A S A 防衛戦 (4)
第70話	U   N A S A 防衛戦 (5)
第71話	U   N A S A 防衛戦 (6)
幕間	赤の花とりフレイン
第72話	黒の萌芽
第2部	1章 貪欲の食卓
第73話	惨劇の歌
幕間	夜明け前
第74話	深山に爆音の響く
番外編	副官会議
第75話	糸巻き
第76話	偏執の糸
第77話	炎禍
第78話	縁の下
第79話	黒の射手
第80話	第七と第一
第81話	人喰らいエスメラルダ
第81・5話	エスメラルダ・オースティン
第82話	呪いの歌
第83話	赤の残響
第84話	邪悪の根
第85話	第二楽章
第86話	真黒のクオリア
登場人物紹介	(ダリウス、エスメラルダ)
第2部	2章 思慕と剣聖



第87話	平穩と恍惚	1469
第88話	地の底へ	1478
第89話	底の底	1486
第90話	暗底の騒乱	1495
第91話	暗闇に剣光る	1511
第92話	月下氷刃	1521
第93話	朔月に誓う	1533
第94話	月と神	1550
第95話	第三楽節	1564
第2部 3章	生命の樹	1572
第96話	夜明け時	1576
第97話	朝焼けに幕が開く	1585
第98話	権力の価値	1597
第99話	Far away 遠き友よ	1613
第100話	昏き底	1628
第101話	苦痛の棘	1641
第102話	Project: Garden of Eden	1657

## 第1部 新緑の火星の物語 プロローグ

「しかし、裏切り者つてのも発覚してないのに、気が早すぎませんかね」

とある一室で筋トレをしながら、ぼやく青年が一人。

短い黒髪に、体型は細めながらも付くところには付いている筋肉という、ちよつと鍛えた一般人、という風体の彼は、同じようにトレーニングをしている隣に話を振る。

「そもそもいるかもわからんしなあ」

それに答えるのは、同年代くらいの青年。

黒髪の青年よりも若干細いが、体格としてはそこまで違いは無い。それがごく普通の日常であるかのように会話を交わす二人。

しかし、この茶髪の方の青年は本来この場所にいるべき人間ではない。

「そういえば拓也、お前って中国班じゃなかったっけ？」

今現在二人が搭乗しているとある乗り物が目的地に向けて出発した直後に、黒髪の青年はもう一人の青年、拓也に尋ねた。

それに対し、拓也は一瞬黒髪の青年の方を向き、すぐに目を逸らす。青ざめた顔。体調を心配する青年に、拓也はぼつりと言葉をこぼしたのだった。

「やべえ、乗るヤツミスった」

これが、実に滑稽で悲しい、拓也がここにいる理由である。

名前こそ日本のそれだが、拓也は日本生まれ中国育ち。そのため、国別で所属が分けられているこの計画では人員が十分だった日本と

米国では無く、中国に配属されていた。だが、そんな計画責任者の配置は一発で無駄になったようだ。

さて、そろそろ詳しく彼らの今置かれている状況を語るとしよう。簡潔に結論から明かせば、彼らは2620年現在、宇宙を旅している。

『テラフォーミング計画』。火星にとある黒い生物と苔を放ち、火星を人間の住める星に改造するという、人口過多や環境汚染といった様々な問題が首をもたげ始めた地球で提唱され、実行されてきた計画だ。

まず最初に、その黒い生物と苔をばら撒き。

苔が十分に広がり火星の地表が緑に染められた現在、その第二段階として二十年前にも火星に人類は派遣された。総員20名の人員を送り込むその計画によって、いよいよテラフォーミングは次の段階に進むかと思われた。しかし結果は生存者二名、他全員死亡という凄惨なものとなった。

その失敗により計画は凍結されていたのだが、意外な所で人類にその計画は牙を剥いた。

火星は新天地にはならなかった。長年の努力と多額の費用は無駄となった。それだけで被害が済んだのならば、どれだけ幸せだっただろうか。

新たに生じた問題。それは、火星の生物由来と思われる謎のウイルスが地球で人間に感染、ある特殊な性質により研究は困難を極めるそれは、ついに死者が出るまでに発展したというものだった。

これを重く見た各国は、再び計画に手を伸ばす。

新たな計画の名。それは『アネックス計画』。

火星を開拓するためでなく、火星に住まうある生物をサンプルとして捕獲し、ワクチンの研究を進めるために。

その為に作られた、人類の最新鋭技術の結晶である大型宇宙艦、『ア

ネックス1号』。

そこに乗り込むのは、日本、アメリカ、ロシア、中国、ドイツ、ローマ連邦。世界の大国が選りすぐった、特殊な手術を受けた100人の搭乗員達。彼らは人類の希望を背負って火星に向かい、任務を遂行する、はずだった。

しかし、ある心配があった。

それは、各国でまことしやかに囁かれていた噂。

「この計画には、裏切り者がいる」

さて、どうしようか。表向きはみんな仲良く協力して、艦内の設備でウイルスを研究してワクチンを作って人類のため頑張ろう！ といった調子である。

だが、裏では大国の陰謀が渦巻くドス黒い駆け引きが行われていた。

どの国が、最も甘い汁を吸えるか。例の『手術』は、兵器足りえるものなのか。

どこの国にも、完璧な信用などない。

20年前に前科がある日本か。

計画を主導しているアメリカか。

黒い噂の絶えない中国か。

世界の覇権国家へ返り咲く事を狙うロシアか。

例の『手術』の本場、ドイツか。

密やかな野心を燃やす新興国、ローマ連邦か。

そして、各国は決意する。それぞれ独自で増援部隊を派遣し、表向きは各国の戦力の不安を解消するため。

裏では、裏切り者を始末し、……あるいは、裏切り者を援護し、各々の計画を成功させるため。

アネックス1号の裏で、それは進められた。だが、ある日事件が起こる。

U—N—A—S—A、彼らが宇宙へ旅立つための本部である国連宇宙局が、国民にはただの陰謀論と言われていたその計画を公開し、世論を煽ったのだ。アメリカが、それを計画している。だったら、自分の国は？ 各国は、対応に追われる事となった。

もしそんなものは無い、と言っても国民は信じないだろう。アメリカは人員を増派するのに自国はしないと、乗組員を見殺しにするつもりか、という意見も出てきかねない。

そしてまんまとアメリカに引き摺られ、各国は計画を公表、結局アネックス一号と同じく各国共同での計画となった。

しかし、共同計画になった事による計画の修正などで、計画は大きく遅れる。

どう考えてもアネックス1号の出発には間に合わない。

さて、どう対処すべきか。

結論は簡単なものだった。後追いつけて追いつけばいいのだ。

計画は変更され、各国がそれぞれ食料や水などの必需品と居住区だけの小型超高速な宇宙艦を作り、アネックス1号を追ってほぼ同時に火星に到達するようにする。

そこからは、アネックス1号と合流し、共同で任務をこなせばいい。

とんぱんと拍子に計画は進み、任務に適應した新たな幹部搭乗員も選ばされ、ついにその計画は実行に移された。

そして今、一日ほどの遅延はあったものの、六機の宇宙艦はほぼ同じタイミングで火星に到達しようとしていた。

「これより着陸態勢に……!!? 大変です艦長！ 機関部に異常が！」

それは突然に訪れた。機関室から、悲鳴が響く。それと同時に、各

国の宇宙艦から通信が入る。

「あああのごめんなさい！ ロシア・北欧第三班機、機関部異常で目的地点に着陸できそうにないです！」

雪のように白い肌のロシア帽を被った長髪の可憐な少女がモニターに映し出される。

年齢はまだ高校生くらいだろうか。別に誰に怒られる訳でも無いのに、顔を真っ赤にしてしきりに頭を下げている。

「おつ、かわいいこちゃんだな」

「バカ、状況的にあの子ロシアの……」

急ごしらえな上にアネックス1号を上回るスピードを要求されたこの宇宙艦は狭い。

そのため、トレーニングルームと指令・操縦室は隣り合わせ。

二人は機体の揺れで開いたドアから、司令室の様子を眺めていた。その姿に、緊張感というものはみじんも感じられない。

……表面上は。

「こちらヨーロッパ・アフリカ第六班です。あらあらまいった事。機関部の異常でちよつと大変みたいね」

その隣のモニターには、やせ細っているがそれを見る人間の本能に恐怖を感じさせる、穏やかな顔で微笑んでいる老婆。座っている椅子の大きさを考えると、かなりの長身である事が伺える。そんな彼女は、この状況に全く動じていない様子だった。

「……ご老人が戦えるのか？」

「同感だな」

筋トレをやめ、揺れる艦内でなんとか服を着ようとする二人。

周りでは急いで司令室に集まる音がするが、二人は呑気に着替えをする。

「ドイツ・南米第五班だ。恐らく君達と同じ状況だよ。なんだか困った事になったな、諸君」

次に映されたのは、？せぎすに白衣を身に纏って丸眼鏡をかけた、科学者と言われてイメージするそのもの、という風貌の男。

椅子に悠然と座り、腕を組んで口の端に皮肉げな笑みを浮かべるその姿は、気むずかしげで嫌味な人格を彷彿とさせる。

「あの人俺が中二の時の理科教師に似てるわ……」

「へんな煙立ててるフラスコ持って笑ってそうだな……」

「中国・アジア四班。艦長代理だ。これはまずい事になったな、皆、力を合わせ生存しようではないか」

4班のモニターには、筋骨隆々の明らかに武人、といった壮年の男性が映される。

落ち着き払っていて、余裕すら感じさせているその男は歴戦の軍人といったオーラを醸し出し、一際存在感を放っている。

「なんで艦長じゃなんだろう」

「さあ」

自分達が乗っている日本組の艦長の怒号が響いているため、いそいそと用意をする二人。

「北米一班。まさか全ての班がこうなるとはね……。設計のミスかな？ とにかく、今は生存する事を考えよう」

きりつとした若々しい、しかしどこか不安を感じさせる整った顔の赤毛の青年が、静かに告げる。

だが、彼も含め各班の大多数はこう思っている事だろう。

(嵌められた)

すでに各機は成層圏に突入している。このまま帰るのは無理な状況。

彼らは、考えるべきだったのだ。いや、それは考えていただろう。だから、もつと対策を講ずるべきであったのだ。『裏切り者』が、裏切り者を始末するための計画に素直に参加するわけがないと。破壊工事を仕掛けてくるのが普通だと。

だが、時すでに遅し。今できる事は、無事着陸できる事を祈るばかり。

幸い、故障のタイミングが遅かったので、各班の予測不時着地点はそこまで遠くない。

無事に降りられさえすれば、距離だけを見れば合流は容易だ。

しかし、それは更なる絶望の幕開けだった。

「馬鹿な、アネックス1号の着陸地点と大きく離れているぞ！ どういうことだ！」

何故、このような事態になっているのか、果たして、彼らの火星での戦いはどうなるのか。

「山野俊輝！ こぼるかわ 古原川拓也！ 早く指令室に集まらんか!!」  
「イエッサーー！」

「ごめんなさい、ホントごめんなさい」

そして、この二人の青年は、どのような運命を辿るのか。

『アネックス1号計画』。100人の選ばれし戦士達による、黒い絶望に立ち向かう、人類の存亡を賭けた戦い。深緑に染まった争いの星で繰り広げられる陰謀と意志の激突。

これは、その裏で密やかに巻き起こった、もう一つの戦いの物語である。



## 第1話 幹部搭乗員

「ふう、なんとか着陸には成功したようだ。全員、艦体の損傷を確認しろ！」

『裏アネックス計画』実行部隊の一つ、日本第二班の宇宙艦は、若干地面にめり込みながらも何とか形を保ち火星の大地に辿り着いていた。

半ば墜落に近い形の不時着。生きているだけでも儲けもの、と思わなければいけないのかもしれないが、いつ敵の襲撃を受けるかもわからないこの状況では、のんびりと神に感謝している暇は無い。

自体は一刻を争う。

艦内の指令室に集まった班員達は、慌ただしく動き始めた。各々担当の場所へ移動し、配線を繋いだり、機器の動作を確認したりしている。思いの外艦体への被害が少ない事に安堵する船員達だったが、ある重大な欠陥を発見し、それが通達された事により艦内に緊張が走る。

「なんだこれは……通信関連が全部イカレてやがる……」

先程まで映っていた各国のモニターは全て砂嵐。スピーカーからも雑音しか流れない。

「復旧できそうか？」

「わからん」

直接的な損害こそないものの、情報を得られないというのは間接的に大きな被害をもたらす事がある。

特に、何が起こるかかわからないこの火星では。

そんな窮状に、黒髪の青年、俊輝は隣の友人、拓也とため息をつく。

「通信機器だけ損壊とか露骨すぎるよなあ……」

「全くだぜ」

自分の持ち場で仕事をこなしながらも軽口を叩いて、ついでに外の様子を眺めている。

話しながらなので作業の進みが悪いのは少し問題だが。

「ん……？ あれは」

「ちよつと二人とも！ ちゃんと仕事しなきゃダメだよ！」

ふと、俊輝の視界の端、窓の外に見えていた無機質な火星の大地に、一瞬何かが映った気がする。

次の瞬間、にわかには俊輝の頭に一撃が加えられる。突然の事に驚きながらも振り返る二人。

そこに立っていたのは一人の女性。

少し幼いものの顔立ちから二人と同年代という事だけはわかる。だが、その身長は俊輝の胸ほども無い。

これで頭を叩けたのは、俊輝が座っていたからと、雑談をしていて油断していたからだ。

「痛ッ！ なにすんだよ、静香」

「あんたらがサボッてるのがいけないんですー」

静香と呼ばれた女性はいたずらな笑みを浮かべながら、逃げるように遠ざかる。

それを追う気力も無く、二人はまた配線を繋ぐ作業に戻った。

俊輝は溜息を付く。変な事態になってしまった。火星までの短い旅だったが、宇宙艦という狭い空間の中で共同生活を送り、他の乗組員との交流は深めたつもりだ。

だけど、これからの戦いではその仲良くなった連中が死ぬかもしれない。あの地球にいた時からの悪友のチビ女も、U—N—S—Aでできた自分の隣にいる友人も。

少し気分が沈む俊輝だったが、もう一度、先程一瞬だけ見えたものが視界に入り、その背筋に寒気が走る。

人間が、艦に歩いてきている。まさか、火星人が。いや、この火星の原住民は、もつと違う姿をしていたはずだ。だとすれば、考えられるのは。

『アネックス一号』の搭乗員。こんな外れた着陸地点に何故いるのか、それはわからない。

だが、偶然自分達の不時着地点を見つけ、急いで駆け付けてきてくれたのかもしれない。

そうだとしたら好都合だ。早々にアネックス一号のチームと合流できるのは、自分達の班の評価アップに繋がるだろう。

これが、仲良く手を繋いで一緒にゴール、というだけの話で済まない計画である以上、各国の手柄の奪い合いで先に行く事ができるのは大きな利益となるのである。

窓から見える範囲にはいなくなってしまうたものの、あの人間がこの艦を見つけ、入って来ようとしている事はほぼ確定だ。少し安堵する俊輝であったが、一つの違和感を覚える。

「なあ、なんでゴキが襲ってこないんだ」

彼らが宇宙を旅していた時に入ってきた通信。それは、成層圏に突入中の『アネックス一号』がゴキブリに襲撃されたという情報だ。

それだけ聞くと質の悪い冗談のようにはしか思えないが、この話はほ

ほぼ本当の事である。

アネックス計画の前身、テラフォーミング計画。その第一段階である火星に苔と黒い生き物を撒き、火星を温かくするというそれは、意外な方向に進んでいた。五百年の間に火星の黒い生き物、ゴキブリは進化し、人型にまでなっていたのだ。

そしてそれだけではない。その進化したゴキブリ、『テラフォーマー』と名付けられたそれは、素手で人間を殺傷し得る凄まじい身体能力を持っていた。

武器を持った軍人ですら殺傷し得るそれ。しかも知能まで人間のものに近くなっており、武器を逆に利用される危険性すら出てきている。

ここで問題が発生した。武器が使えない。生身では勝てない。どうしようか。

解決方法は簡単……ではなかったが、人の英知によって示された。だったら、人間自体が変わればいい。

そして極秘裏に開発されたのが、テラフォーマー特有の臓器、『モザイクオーガン免疫寛容臓』を利用して薬の力で遺伝子を昆虫のそれに近づけ、その力を人間が使用できるようにする『バグズ手術』。

だが、これできえもテラフォーマーに完全に通用したとは言えなかった。

計画は失敗、死者多数。

人類はテラフォーミング計画を放棄した。だが、火星に由来するとされる謎のウイルスが地球で蔓延、培養できないという通常のウイルスの性質に反したそのサンプルを採りに行く為に人類は再び火星

へ。

これの目的がテラフォーマーの殲滅なら、水爆でも落とせばいい。だが、今回はサンプルの採集。

結局のところ、人間が生身で集めなければいけない。バグズ手術では完全とは言えなかった。では、今回は。

という事で計画は進んだのだが、大元のアネックス一号がテラフォーマーに強襲され、死者も出た。

どんな手術であろうと、生身のままではただの人間。力を使う為の『薬』が無ければ意味が無い。

そして、テラフォーマーはその『薬』を優先的に破壊するという行動を取った。この時点で、テラフォーマーに情報を流した裏切り者がいるという事はわかった。

情報が漏れていたなら、この墜落も計画の内のはず。不時着地点を読まれ、テラフォーマーが殺到してきてもおかしくない。だが、この艦にはやってきていない。

「まあ運良く見つからなかったんだろ」

その違和感は運がいい、の一言で終了してしまう。だが。

「ん？ おお、君は本艦の人間か！」

入口が開かれ、先程の人間が艦の中に入って来る。

すでに戦闘を行っていたのか、『変態』を行った状態で。

火星での厳しい戦いのせいなのか、厳しく凶悪な人相をしているその男は彼を労っている入口近くにいた乗員の一人に近づき、

「やあ、よく生き」

力任せにその頭をもぎ取った。

「う、うわあああああー!」

当然、艦内は混乱状態。そして、それは他の艦でも起こっていた。

「馬鹿な、君は一体!？」

「きゃっ!？」

「クソツ、なんだてめえは!」

「……………」

「博士、早くお逃げください!」

「……………なるほど、面白い」

「あらあら、参ったわね、これは」

手術で得た力を使う為の薬の保管庫は、艦の入り口付近にある。

それは、ちょうどその男が差ししかかっているあたり。

繰り返してしまうのか。本艦の失敗を。しかも、敵が人間という状況で。

男は乗員が薬を持っていないのがわかっているのか、悠然と艦の奥の方へと歩み始める。

その進路に倒れていたのは、先程の女性、静香。腰が抜けて、立つこともできずに震えている。

それを見て男は悪意を込めた笑みを浮かべ、そのテラフォーマーとも争える剛腕を振り下ろそうとした。

だが。

「ソイツに手を出すんじゃない!!」

俊輝が懐から注射器を取り出し、首筋に突き刺す。

勿論、自殺などではない。静香を殺そうとしていた男は、驚きで動きを止め目を丸くしている。

「貴様……なぜそれを!?!」

侵入者の男は、驚愕の表情を見せた。何故ならば、男が行ったのは、それをさせない為の奇襲だったからだ。

だんだんと俊輝の体が異形へと変わっていく。人間の体型そのものは変わらないものの、体中を薄黄色と黒色の模様を持つ甲皮が包み、頭には触角、腕の付け根から二本の刃が姿を見せる。

カマキリの鎌のように内側に小刻みな鋸歯のついたそれは、クワガタに近いものを想像させる。

『モザイクオーガンオペレーション』  
M O 手術』

それは、人類の新たな力。昆虫に限らず、地球に存在する全生物をベースにできる上に、さまざまな生き物に合う多様性に富んだツノゼミと言う昆虫を上乘せし、バグズ手術の強みである甲皮、筋力、開放血管系を上乘せし基礎能力を強化するという手術。

それにより他の生物に近い姿に変わった俊輝は、人間には出せない速度で男の場所に向かい、静香を庇う。だが当然、そんな麗しい友情に男は容赦をすることなどなく、背を向けた俊輝に向かって容赦無く拳を振り下ろす。

たとえ強化されていたとしても、相手もそれは同じ。振り下ろされた拳は俊輝の背の変質して硬くなった表皮の層にヒビを入れる。

「がつ……！」

苦悶の声を上げる俊輝。元々彼のベースになっている生物は甲虫でこそあるもの、そこまで頑丈な甲皮は有していない。たとえ俊輝が男を上回る戦闘能力を持っていても、このままではなぶり殺しである。

「薬を密かに持ち出すとは、重大な規則違反だ。後に厳しく罰する」  
身を挺して仲間の盾になる俊輝。暴力に愉悦を覚え腕を振るう男。両者の耳に、厳然とした声色の言葉が入ってくる。

「だが、仲間を守ったというこの成果、評価に値する。……プラマイゼ口だな」

その直後、男の手は止まった。何かに掴まれ、動けないからだ。そして、その腹に何かが突き刺される。先ほどの俊輝が使ったような注射器では無く、殺傷を目的とした針が。  
薬がある場所。それは保管庫、艦長の部屋、そして……

各艦艦長が、携帯を義務付けられている。

地球 某所

洒落たバーの中で、二人の男が会話をしていた。

一人は若いながらも威風堂々、という様子の青年。『アネックス1号計画』副司令官の一人、蛭間七星。

もう一人は、初老の眼鏡をかけたバーのマスター。その存在は世界すらを動かしかねない男、本多晃。

「裏マーズランキング……？」



「ええ、マーズランキングに合わせて、こちらの計画でも、という事で。ごく単純な名前ですが」

「アネックス計画と同じく、上位に名を連ねる各国の『幹部』達は人間側の兵器といっても差し支えがない」

「だが、その兵器はアネックス一号とは別の危険性を秘めているものが多い」

「ほう」

蛭間七星は、初めて笑った。それは、素直に認める事ができない、という苦々しいものであったが。

そして、続きを口にする。

「各国クルーを指揮し、だが、ほぼ全員が軍隊出身者ではなく……」

「選ばれたベースに適合し訓練を受けた彼らは——」

対人でも

対虫でも

対テラフォーマーでもない

「耳栓でもして部屋に隠れていなさい、みんな」

「みなさん、なんでもいいので肌を出さないようにしてください……」

「諸君、息を止めて自室に引きこもっていてくれたまえ」

「ちよつとグロテスクだから嫌な子は見ないでねー」

日本、アメリカ、ロシア、中国、ドイツ、ローマ連邦。

「各加盟国より選り抜きの、対MO手術被術者戦のプロフェッショナルです」

## 第2話 数と力

MO手術において、誰が手術を受けようと安定した実力を発揮できる生物がいる。

その利便性、種によっては特殊な能力を持っている事があるその生物は、採取が楽で数も揃えやすく、能力も十分に高いというMO手術にうってつけのものだった。

実際に『バグズ二号』でもその生物の一種をベースにした人間は本人の優れた肉体と技術も合わせりテラフォーマー一体にも叶わず散っていく人間が多い中で凄まじい戦果を叩きだした。

とても身近でよく見かける、しかしその小さな体には無限の可能性がある、その生物は……

「その触角、甲虫の甲皮に傷を付けられる腕力、なるほど、お前、『アリ』だな？」

俊輝を庇うように侵入者の男との間に割って入り、剣を男の胸に突き立てたのは、日本第二班の班長、この宇宙艦の艦長だった。

その頭からは昆虫と思われるものの触角が生え、体にはその昆虫の体表と思われる黒色を纏っている。

そして両手首の辺りから生えているのは、レイピア 飴色の刺突剣。

動揺した男に反撃の隙を許す事無く、班長は廻し蹴りを見舞い男を艦の外に放り出す。

その距離、約15m。一瞬で宇宙艦の中から脅威は消え去った。

乗員達はこれを好機とばかりに入口付近の薬保管庫に駆け入り、薬を取りに。

俊輝は先程のショックで戦闘では役に立ちそうもない静香を抱え、艦の奥に避難する。

自分も戦闘員としては十分な実力を持っていると自負している俊輝だったが、今は優先すべきものがあると考えたのだ。

そしてそれ以上に、自分が出る幕など今のこの戦いではもう無いとわかっていたから。

艦の外。今度は逆に、男が恐怖を覚える番だった。先程の女性、静香のように腰が抜けて動けないのか、無防備な体勢で立ちあがる事もできずに後ずさるだけの男。それを威圧するようにゆつくりと近寄っていく班長。

そこには乗員の薬の不所持を信じて一方的な暴力に愉悦を感じていた侵入者の姿はどこにも無い。

だが。

「背中がガラ空きだぜえ！」

品の無い声と共に、男を追って宇宙艦から出た班長に死角から襲いかかる、二つの影。どちらも、男と同じような特徴が体に現われている。

アリの最大の武器。それは、力でも無く、顎でも無い。

数、である。

西暦2619年10月20日 U—N—A—S—A

薄暗い会議室。前方にはモニターが置かれ、それとささやかな照明のみがこの部屋の光を占めていた。

部屋の隅には大勢の武装した兵士。彼らには今すぐにも戦場に行くかのような緊張した雰囲気の流れている。

その原因は二つ。

一つはモニターに映し出された資料、映像の説明をしている青年、  
蛭間七星。

もう一つは、それに各々違った反応を見せる六人の男女。

「へえ、ゴキブリが。僕の敵だね」

頬杖について暇そうにしている赤髪の青年が、資料を見てひとり呟く。

スーツを着て身なりこそ立派な社会人であるものの、その態度から真面目さは微塵も感じられない。

「あらあら、意外と可愛いじゃない」

今モニターに映しだされているのは、テラフォーマーの解剖図。それを見て常人がしそうなでもない発言をしたのは、紫を基調にしたシックなドレスを身に纏う長身の老婆。枯れ木のようにやせ細ってはいるものの、その身からは殺気に近い威圧感が常に放たれている。

「気持ち悪いです……」

至極まともな一般的感性での感想を述べ、若干青ざめながらも真面目に見なければいけないという使命感に駆られているのか硬直して画面から目を離さないのは、長く伸ばした銀髪にロシア帽を乗せた小

柄な少女。

「これが火星での任務における最大の障害、テラフォーマーに関する資料です。しかし、幹部の皆様は基本的に別のモノを相手にしてもらおう事になるかと思えます」

モニターを切り替え、テラフォーマーの画像が消滅する。それからホツとした様子を見せるロシア帽の少女。

「次に行かせてもらいます。上位ランカーの装備の携帯に関して。各艦16人、計96人が参加するこの計画は、本艦への増援部隊という都合上、戦闘員の数が多いので、武器にしましてはアネックス一号より多い25位までのランカーに武器の携帯を許可する事に致しました」

簡潔に話を進める七星。冷静沈着な彼でさえ、早くこの会議を終えたいと願っているように見える。

「その中でも特に幹部オフィサーの専用装備に関して説明を。ヨーゼフ博士、どうぞ」

幹部の席を立ち七星がいるモニター前まで歩いてきたのは、白衣の男性。丸眼鏡にツンツン頭という見るからに科学者というオーラを放っている彼は、七星を追いだすかのように正面に立ち、説明を始めた。

「改めて名乗らせてもらおう。ドイツ・南米第五班班長、ヨーゼフ・ベルトルトだ。よろしく頼む」

名乗り、モニターの準備をするヨーゼフ。切り替えられたモニターには、複雑な計算式が並んでいる。

「まあこんな物を君達に見せても理解できないと思う。では手短に説明させてもらおうよ」

じゃあ映すなよ、と心の中でツツコミをする他の幹部達。

「君達五人と私の専用装備は特別製、私が丹精込めて技術の持てる限りを尽くした傑作だ、感謝したまえ」

「私、マーズランキングの方で88位だったのに、大丈夫なんですか……」

少女が不安そうに呟く。だが、ここにいる人間で誰もそれを気に止める者はいない。今の彼女が、自分達に並ぶ存在だとわかっているからだ。

満足げに笑うヨーゼフを白い目で見る幹部達だったが、研究の日々を思い出して感慨に浸っているヨーゼフは全く気がついていない様子。

「アネックスの幹部の物も私に任せてくれてよかったのだがね、全く」

「お前みたいなキチガイの作るものが信用できるわけねーだろ」

小声で呟いたのは、部屋で待機する兵士の一人。怨みを込めた声で、ヨーゼフを睨みつけている。

もちろん、本人がそれに気が付いている様子は無いが。

「これを存分に使いこなしてくれたまえ。でなければ、過労死寸前の開発局の皆に申し訳が立たないからな」

その言葉が合図だった。兵士の一人が怒りに身を震わせモニターに近づき、ヨーゼフの襟を掴んで怒鳴る。

「ふざけてんのかテメエ！ あの時と全く変わっていないみたいだな、ここでブツ殺してやる!!」

その場にいる全員に緊張が走ったが、真っ先に口を開いたのはヨーゼフだった。

「私を殺す？ では、私のベースの新しい適合者は見つかったのかい？」

悠然と、自分の命が目の前の兵士に委ねられているなどとは全く思っていないかの様子で、ヨーゼフは言葉を紡ぐ。

だが、その言葉で兵士はひるんでしまう。

「私含めここにいる幹部の存在価値は手術ベースにある事、忘れてはいけないよ。今なら不問にしてあげよう、持ち場に戻りなさい」

まるでやんちゃな生徒に語りかける先生のように優しくヨーゼフは告げた。

それを聞き、先程までの強気が嘘だったかのように兵士は力を弱める。

「では、私の話はこれまでだ。清聴、感謝する」

兵士も他国の幹部達も、席に戻っていく科学者をただ見つめる事しかできなかつた。

彼が最後に言った事。幹部の存在価値は手術ベースにある。これは事実である。

MO手術に使用される生物の中には、免疫寛容臓モザイクオーガンだの技術力なのに関係無く非常に適応しにくい、もしくは不可能ものがある。どんな素晴らしい能力を持った生き物でも、それに適合できる人間がいらないと意味がない。

アネックス計画の幹部は各国の優秀な軍人を集めその人間に適合した生物をベースにした。結果として彼ら全員が最上位ランカーの戦闘力を持てた事は一種の奇跡といっても過言ではないだろう。

基本的に生身でテラフォーマーと戦える人間は存在しない。

例外はアネックス計画の上位ランカーの数人や他ごく少数いるものの、特例も特例だ。

どんな優秀な人間でも、ランキング上位に入るにはベースとなる生物の能力も必要なのだ。

なので、この点を鑑みて今回はその逆をする事にした。あらかじめ



強力なベースを選び、それに適合できる人間を世界中から探し出す。だが、その強力なベースは極めて人間に適合しにくいものだった。そして、彼らには極めて成功確率の低い、MO手術の後継と言える特殊な術式が施されている。

世界各国で適正検査が行われ、ベースに適合し、その術式に耐え生き残ったのはここに立っている六人のみ。

人間ではなく、ベースありきの選定。だからこそ、彼らは戦闘という点で他者を圧倒するものを持っている。

「ではもうお開きでいいですよね！ 剛大さん、エリシアちゃん、昼食でもご一緒にいかがでしょう？」

日本とロシアの幹部を半ば無理やり連れ、赤髪の青年は部屋を出て行ってしまふ。

確かに今話すべき事は無いものの、なんて自由で勝手な連中だ、と愚痴をこぼしそうになる七星。

出発数か月前、裏の幹部会議の一コマである。

「……お前らと我々では絶対的に違うものがある」

背後から渾身の一撃を繰りだそうとした男の腹に剣が突き刺さり、そのまま凄まじい力で地面に叩きつけられる。

先程その剣を身に受けた侵入者は、ガクガクと震えだした。

それは恐怖では無く、体内に擦りこまれた物質の影響。

数は力なり。それは不変の真実だ。だが、それを覆す存在がいるのもまた事実。

そして、力を持ち数も持つ存在がいる事も。

昆虫界最強の猛毒。それを持つ生物は何であるのか。毒に頼るのだ、さぞかし非力な存在に違い無い。

最初はそう考えるだろう。だが、それは間違いだと気付かされる。

その生物は毒に頼る虫と呼ばれるにはあまりに力強く、凶暴。

猛毒の針だけでは物足りず、さらに二本の劔つるぎを携え、さらに極限まで視力を持った。

その二本の劔と猛毒の刃を用いるのは、礼儀を重んじる騎士などではなく、無策に見境なく敵に襲いかかる蛮族と呼んだ方が正確な軍団だ。

されどその刃に己無く、全ては主の為に。蛮族であれど女王に全てを捧げる騎士の如く。

日本第二班班長、島原剛大。

彼は己の腕から生えた二本の劔つるぎを見て、静かに目を閉じる。

同族でありながら、これほどの力の差を持つてしまった彼の目には、何が映っているのか、それは本人以外の誰にもわかるものではなかった。

島原剛大

国籍：日本

24歳 ♂

187cm 91kg

『裏マーズ・ランキング』4位

αMO手術 “昆虫型”

トビキバアリ

### 第3話 双刃の執行者

トビキバアリ。ブルドックアリの亜種である。

この仲間は世界に90種近く存在し、アリの中でも大型の種が多いが、このトビキバアリはその中でも小柄だ。

その大きさは近縁種に3cm、4cm級の怪物が闊歩する中で、日本のアリよりわずかに大きい1cmほど。

ではこのアリは弱いのか。そうではなかった。

弱視が当然のアリとしては異例の、2、3m先まで見渡す事のできる視力。

己の体長の20倍近い高さを跳ぶジャンプ力。

そして、二本の頑丈な長い牙に加えて有する毒針。

その毒は昆虫界最強の一つに数えられ、1cmの小さな体には人間すら殺し得るものが秘められている。

しかもこのアリは、一般的なアリと違い集団で狩りを行わず単独、または少数で獲物を狙う。

ごく少数で自分の数倍、数十倍の体躯を持つ獲物に襲いかかりそれを打ち倒す姿は、大自然の狩人と呼べるだろう。

「ひ、ひいいい……」

「は、はあ？」

三人の刺客を相手にし、日本班班長、島原剛大はなんの感情も示さない。

『薬』を持たない無防備な宇宙艦内の人間を皆殺しにする。もし何らかの反撃があっても待機していた二人が加勢し、三人掛かりで挑む。侵入者達はこれを簡単な任務だと思っていた。

だが、それはたった一人のイレギュラーによって崩される。

アネックス計画では班長の部屋に薬の一部を置いておく、というだけで班長自体は常備しているはずではなかった。今回の計画でもアネックス1号に準じてそうなっているはず。

少なくとも、彼らの依頼人はそう話していた。だからこそ、強力なベースを持っていると言われていた幹部搭乗員を変態前に戦闘する事無く始末する事ができると思っていたのだ。

しかし結果はこのありさまである。

最初にかかった一人は打ち込まれた毒の影響で動けず、背後から襲った内の一人は頭から地面に突き刺さり、間欠泉のように血を噴き出している。

無事なのは一人だけ。普通ならばここで退くだろう。だが、最後の一人はそうはしなかった。

「ザツケンなやコラアアアア！」

半ばヤケクソ気味に叫び、背を向けている剛大に突貫をかける。だが、剛大は振り向きもしない。

こちらを舐めているという怒りと油断しているなら殺れるという少しの希望。

二つが入り混じったままその拳は剛大に到達した……かと思われた。

「なっ!？」

目の前から、剛大が消えている。自分達三人のベースは『クロオオアリ』。

特にこれといって特別な要素は無い、力持ちで筋肉の鎧をまとった一般的なアリだ。

体格ではトビキバアリに劣っているが、これは虫同士の対決ではなくあらゆる生物がほぼ同サイズになって戦うMO手術被術者同士の戦い。力では決して劣らないはず。まだ勝機はある。

そんな希望はいとも簡単に打ち碎かれる。

「どこを見ている？　ここだよ」

慌てて辺りを見回す男の耳に入った声。それは、頭上から聞こえてきた。

同じアリでも、この二種の力はここまで違う。トビキバアリの跳躍力を、この哀れな刺客は知らなかったのだ。

慌てて上を見た男の顔に容赦なくトビキバアリの剣が突き刺さる。

音も無く崩れ落ち、貫通した頭から赤と薄いピンクの入り混じった何かを地面に散らせる男。

その体が動く事は二度と無い。

「さて、最後の一名。情報を吐けば生かしてやらんでもない。どうだ

「?」  
右腕の劔（つるぎ）に付いた犠牲者の一部を振って払い、毒が体に回り喋るのも辛そうな相手に剛大は話しかける。

「お前の仲間は何人いる? お前達のような人間はアネックス本艦の乗員名簿には無かった。何者だ? お前達の依頼主とは誰だ?」

矢継ぎ早に質問する剛大だが、もちろん襲撃者はそれに答える事はできない。

「頼む、見逃してくれ……俺には故郷に残してきた家族が……あつ」  
突然の風を切る音。剛大の目の前に吹き出た大量の血液。

ひざまずき命乞いをする襲撃者。剛大も元から一人だけは生かしておいて情報を聞きだそうという考えだったが、それは失敗に終わった。突然飛んできた石が襲撃者の胸を貫いたのだ。

何が起こったのかわからないまま絶命した襲撃者から目を離し、石が飛んできた方角を見る剛大。

「じょうじ」

「じょうじょう」

の。  
小高い崖の上から宇宙艦を見据える人型。だがそれは人でないもの。

テラフォーマー。火星でのミッションにおける最大の障害が謎の襲撃者を退けた日本班に襲いかかろうとしていた。その数、十数匹。

だが、剛大はそれに動じない。先程の投石攻撃は脅威であるものの、日本班の戦力は彼だけではない。

職務に忠実な班長は告げる。『薬』を持ち艦から出てきた個性的か

つ優秀な部下達に。

「総員、戦闘態勢！ 薬は使えるだけ使って構わん、良い演習だ、奴らを殲滅するぞ！」

「おうおう、初陣の相手はゴキブリっすか班長。腕が鳴るな！」

静香を艦の奥に避難させ戻ってきた俊輝が剛大の隣に立ち、テラフォーマーに指を突き付ける。

その隣では、ピアスを付け髪を何色にも染めた見るからに素行が悪そうな青年。

「ばねえな、マジばねえわ。艦長、こいつら俺と俊輝っちだけでやっちやあっていい感じ？」

その後ろでは他の戦闘員達が薬を使い変態を終え、臨戦態勢に入っている。

「流石に二人じゃきついだろ、勘弁してくれ、健悟けんご」

「いやいや、俺ら割りと上位だし、俊輝っちがいれば楽勝っしょ？」

「お前なあ……」

「そうだ、あの子とどこまでいったんだ？ 幼馴染だつて聞いてるぜえー？」

テラフォーマーはそんな集団を見て完全に敵と判断したのか、全速で日本班へと駆けてくる。

瞬く間に乱戦へと突入。お互いの怒号が響き、それぞれが独立して戦闘を開始する。

そこに、作戦などというものは無い。

そして、彼ら二人も当然戦闘に参加することになる。

にやいやと笑いながら俊輝をからかう健悟と呼ばれた青年に突進してくるテラフォーマー。



一撃で人体を粉碎する一撃が健悟を襲った。

だが。

「人がダチと恋バナしてるときに邪魔すんな、ゴキブリ野郎が」

その攻撃は、まるで届かない。それは健悟の左腕が変化した長い槍がその胸部を貫いたからだ。

恐怖や痛みを感じないテラフォーマーだったが、それは決して死なないというわけではない。

どんな生物でも、生存に必要な中枢が機能しなくなれば絶命する。それは当然の事だ。

テラフォーマーの体のコントロールを担う中枢はゴキブリの特徴を残しており、胸部の食道下神経節にある。

そこを破壊されれば活動は停止する事になるというわけだ。

「チツ、手が汚れちゃったぜ」

両腕が2 m近い巨大なノコ歯を持つ大顎に変化したその姿は、二刀流の剣士の様相。

テラフォーマーを貫いた大顎をそのまま振るいその体を引き裂いてもう一体のテラフォーマーに再び突き刺す。

だが、その二本の大顎を使っても一度に相手にできる数は限られている。

大顎に刺さった仲間の死体を潜り抜け、無防備になった体に拳を叩

きこもうとするテラフォーマー。

その拳は、あと数センチで華奢な人間の首に到達するという所で体から離れ、地に落ちた。

「お前なあ、一対多戦闘に向いてないベースなんだからもうちよつと考えろつて」

手を失った事で一瞬動きを止めたテラフォーマーの喉が引き裂かれ、臓腑を撒き散らす。

先程は受け身になったせいとその能力を活用できなかつたが今は遠慮なく全力を出せる、と再び変態した俊輝が健悟の傍らに立ち、したり顔で動きを止めた後続のテラフォーマーを見つめていた。

「ヒューッ！ 相変わらず鮮やかあー！ お前になら抱かれてもいいぜえ！」

健悟が軽い口調で、変質していない肩に近い部分の腕で俊輝の肩を押す。

「俺にそういう趣味ねーから」

それに対し、冷ややかな目で返す俊輝。

この命の懸った状況で、あまりに日常的な会話。まるで登校中の男子高校生が交わすようなそれに、周りからも笑いが漏れる。

「俺の事忘れてないか？」

赤く変色した皮膚の青年が二人の後ろから現われ、地面に持っている荷物を乱暴に下ろす。

それは、絶命したテラフォーマー。だが、青年もかなり疲れている様子で、呼吸が乱れている。

「やるじゃんか、拓也」

「拓也つち、ひよつとしてランキング上位勢？ 中国三千年の技術力

？」

「何やらわけのわからない事を言っている健悟を放置し、拓也は息を整える。」

「俺のベース知ってるか!? 『ゴカイ』だぜ? 強いわけねえだろ!? バリバリの下位だよ!」

ゴカイ。簡単に説明すると、ムカデとミミズを足して二で割ったような生き物である。

主に釣り餌で使われる。

もう大勢は決したようで、三人も雑談に花を咲かせる余裕ができていた。

「しかも環形動物型特有の薬は予算の無駄だったとか言われてるんだぜ?」

MO手術の力を使うのに必要な薬は、ベースとなった生物の種類によつて摂取方法が異なっている。

カニやシヤコなどの甲殻類なら葉巻型、アリや蛾などの昆虫ならば注射型、植物ならばカプセル型、といったように。

それを、拓也が偶然適合したゴカイの属する環形動物用の薬が無かったからといってわざわざ新しく開発したのである。しかも、そのくせして強くない。環形動物にはヒルやミミズが属しているが、百歩譲ってもベースに向いているとは言い難いだろう。

「じよ……う……」

テラフォーマーの断末魔が、試合終了を告げた。

立っているのは、異星からの来訪者達。一人として地に伏せる者がいないという圧勝である。

本来ならここで息のありそうなテラフォーマーを確保する所だろう。

だが彼らの仕事はテラフォーマーのサンプルの採集では無く、別の所にある。

『アネックス1号』の名簿には無かった謎の襲撃者。嫌な予感はきつちりと当たっていた。

裏切り者は、確かに存在した。

三人組は班長の方を見る。テラフォーマーの頭を持った剛大は、それに答えるかのように班の全員に告げる。

「我々は本艦への合流の前に、この襲撃者達への対処を優先する」

「休むのはもう少し後だ」

彼らの方針は、班長の手によって決定される。それは、各班で独立して行われる事だ。

テラフォーマーの掃討をするも、サンプルを集めるも、宇宙艦で引き籠るも自由。

なぜなら、これは6団体合同の任務では無く、各国それぞれで行う任務だから。

「さあ、お前達」

呆けた顔の体が歪に曲がっている死体を持った博士が。

耳から血を流し体中が爛れている死体を足でつつく赤髪の青年が。

苦悶の形相で倒れている死体を悲しげに見つめる少女が。

軍服をたなびかせ、腕を組み地平線を眺める武人が。

あらぬ方向に間接が曲がりマリオネットのようになっていて死体  
を見て微笑む老婆が。

「調査<sup>で</sup>るぞ」

ほぼ同時に、己の班のあり方を宣言していた。

## 第4話 北国の腹事情

各班による謎の襲撃者の各個調査、そして撃破。

それぞれの班の長達は示し合わせたわけでもなくそれを決定し、実行に移した。

基本的にこの計画の幹部搭乗員オフラィサー達は好奇心が強い、または職務に忠実で国への忠誠心が強い、という人間で構成されている。

テラフォーマーを可愛い、と言つてのけたり、それを研究材料程度にしか思つていなかったり。

だが、例外な、いや、これがその人間と同年代の一般人の普通の反応だ、というものを見せる人間が一人。

「お嬢、大丈夫か？」

所変わり、ここはロシア班の宇宙艦の不時着地点。体中に古傷を持ったアジア系の大柄な男が、震える小柄な少女に手を差し伸べていた。その周りには、無数のテラフォーマーの死骸。いずれも急所である喉を何かに貫かれ、ぴくりとも動かない。その二人の後ろに続くのは、選ばれし搭乗員達。

しかし、彼らは一般的にエリート揃いと言われる宇宙飛行士という職業のイメージとはかけ離れていた。

全員が全員目つきが悪く、動作もどこか粗暴だ。この荒れた岩場という環境と合わせてみれば、きつとこれを見た人は数百年前の地球のマンガ、某世紀末救世主伝説のエキストラの集団だと思う事だろう。

だが、彼らは統率を持つて自分達のリーダーに従っていた。その忠誠に、一人たりとも違う者はいない。

では、彼らのリーダーとは。

「オラア、てめえら、お嬢が話したいみてえだ、静粛にしやがれ！」

彼らの前に立っている大柄な男が、付き従う彼らに怒鳴る。だが、彼が命令を下す様子は無い。

その代わり、隣に立っているロシア帽を被った少女がおどおどとした様子で話し始めた。

「あの、その……皆さん、お疲れ様でした！ ごめんなさい、お役に立てなくて」

その声はみるみる小さくなっていき、後半は掠れるような小声に。一応彼女も変態はしていたらしく、虫ではない何かの触角状のものが額から生え、背中も無数に謎の物体が生え揺れている。そして美しく長い銀髪を振って、ふるふると震えている。どう考えても寒がっているか怖がっている様子だ。

そんな小動物的な少女を威圧的なオーラを放ちながら見ていた荒くれ揃いの班員達。だが、その顔はみるみるうちに笑顔に変わっていく。

「気にすんなよリーダー！ あんたのおかげで最初に襲撃された時も被害ナシで済んだんだぜ！」

「適材適所ってやつよ、こんな時は！」  
「とにかく誰も犠牲にならなかつたんだ、終わりよければ全てよし、だ！」

もうその時点で完全に隊列は崩れ、班員達は男と少女を囲んでワイワイと騒ぎ合っている。

男はその状況に苦笑しながらも止めようとはしない。自分達のリーダーは規則にこだわらない性格であるし、自分達も規則というものが苦手だからだ。だが、自分達の立場を考えるにあまりにはっちゃけていると後々行う事になる地球への報告で面倒な事になる。

だから、彼もオフィサーの彼女も申し訳程度に規則で行動しているのだ。

アネックス一号のロシア班は全員が戦闘員だ。その勇猛さは出発

前から知られ、特に班長であるシルヴェスター・アシモフは軍神と呼ばれた超有名人。憧れている人間はこの援軍組にも多い。

そして、彼らもとある共通点がある。

「わ、私なんかについてきてくれて、ありがとうございます……！」  
下を向いて顔を赤くしながら小さな声でその場の全員に告げる少女。

それに優しげな笑顔を向け微笑ましそうにする強面の男達。

幹部搭乗員が上司というよりは娘の様に扱われているロシア班のひとつ時であった。

宇宙艦付近に戻り、食事をとっている荒くれ者の集団とどう見ても場違いな可憐な少女。

そんなロシア班に近づく、無数の影があった。

それらは休憩時間にも油断無く見張りをしているロシア班の数人にも発見されず、彼らの本丸に狙いを定めている。

そんな事には全く気が付いていないロシア班。なぜなら、彼らは火星の大地、その内側から迫っているからだ。

各班を相手に先陣を切った者は一班も変わらず失敗した。他の班への襲撃は一旦収まってはいたのだが、このロシア班の襲撃を担当している集団は今だに諦めていなかった。

坑道があらかじめ掘ってあるわけではない。そもそも、そこまで正確に不時着地点を予測してあらかじめ準備をしておく事は不可能に等しい。

そんな理由で、襲撃者達は現在進行形で穴を掘っていた。いや、達、という用語弊がある。



正確には、その先陣を切る一人が凄まじいスピードで砂を、土を、岩を掘り進んでいる。

環形動物門貧毛綱、ミミズ。皮肉にも、拓也が使えないと言っていた環形動物のお仲間、他班襲撃に大いに役立っていた。そもそも、環形動物には種によるが基本的に体中が筋肉の塊である。筋肉といってもミミズのそれは人間とは違い脆弱なため、これが有効な強化になるかと言えば疑問であるが、その掘削能力は衰えていない。単純に筋肉量が増すというだけでも身体能力の強化になるだろう。

戦闘での特殊な能力は持っていないためこの火星での任務には優先度の低い生物であるが、今回の相手はテラフォーマーでなく人間。陣地を構築する人間を奇襲するのに、地中からの攻撃はポイントが高いと思われる。

「よし、あと一発で貫通だ。お前ら、わかっているな？　まずは幹部搭乗員オファイサーのガキから殺るぞ」

「おう、全員、変態は済ませたな？」

「……。全員大丈夫だ」

「よし、では」

穴が開通し、地上への扉が開かれる。変態する暇は与えない。一瞬で仕留める。

偵察班の報告によれば先程奴らは襲撃してきたテラフォーマーの一団を撃退したところだという。

だから、疲労しているし安心しきって地中からの奇襲なんか気付いていないに違いない。

そして、この敵班の幹部搭乗員オファイサーは女性、しかも年端もいかない子どもだ。

単に強力なベースに適合しただけで、人殺しになんて慣れているわけがないし、そもそも先程のテラフォーマーとの戦闘に参加していない事を思うに、戦闘向きのベースではないのだろう。

強力なベースといえど、その全てが戦闘向きとは限らない。味方を支援するのに向いている、たとえば薬草のようなものも一応強力なベースといえよう。暴論のように思えるが、それは彼女が変態しながらも戦闘に参加していなかったという一点から導き出された確かな答えだ。

そう思った彼らはいつでも突撃できる準備を整え、先頭が敵陣の真ん中に躍り出るのを待つだけだった。

のだが。

「Здравствуйте！」

開かれたはずの視界には、一人の男が立っていた。彼らには聞きなれない、ロシア語の挨拶と共に。

すでに変態を終わらせていたのか、頑丈そうな両爪と、鼻の部分が変異した放射状に広がった器官。

あつけにとられるミミズ男の首を掴み、釣りでもするかのように穴から引きずり出し、投げ飛ばす。

穴の中にいる襲撃者達はそれ以上地上に放り出された彼の姿を見る事ができなかった。

といつても、地上に引きずり出されたミミズの運命など、推して知るべしだろう。

「クツ、何故バレていた!? 撤退だ、急げ！」

このまま外に出ても、待ち伏せにあつて全滅するのが関の山だ。それならまだこれまでやってきた道に戻って、態勢を立て直してから挑んだ方が何倍もマシだろう。

「急げ急げ、やべえぞおおー！」

後ろを振り向く事もできず、慌てて逃げ出す襲撃者達。しかし、当然タダでそんな事を許すわけがない。

自分の仲間が最後尾から順に悲鳴を上げ、また一人、また一人と悲鳴が近づいてくる。

そして、ついに最後の一人。自分の真後ろにいた仲間の悲鳴が聞こえ、その気配が消える。

背後を振り向き、覚悟を決めて振り向く襲撃者。

「その……あなたが最後の一人、ですね。今降参してくれるなら殺しはしません。いかがですか……？」

そこにいたのは、ロシアの幹部搭乗員<sup>オフライス</sup>。小柄で自信なさげな少女だ。他の班員は一人としていない。

戦闘要員とは思っていなかった意外な存在に焦るも、あくまで彼はポジティブな考えを捨ててはいなかった。

ここで幹部搭乗員<sup>オフライス</sup>を仕留めれば、依頼人からどれだけの報酬がもらえる事だろうか。

そうなれば、地球に帰った後で自分に待っているのはバラ色の余生だ。

そして、自分にはそれを遂行できる力がある。

「言っておくがな、俺の手術ベースは『イルカンジクラゲ』！狭い場所で俺と出会ったのが運のツキだったな、ココで死にやがれ！」

そう信じて止まない彼は無謀にも自分のベースを目の前の気弱そうな少女に語り始める。

彼の言葉に偽りなく、これまで仲間を巻きこまないように収納していた猛毒の触手が解放され、少女に襲いかかる。

それがいけなかった。彼がこの少女を仕留めようなどと思わず、降参していたら。ベースが何なのか話したりしないで、素手で殴りかかって拘束されていれば。

彼は、命を繋ぐ事ができただろうに。

襲いかかる触手を目前に望み、北の<sup>ロシア</sup>大国の荒くれを統べる少女は、先程の震えとは違い、歓喜に打ち震えていた。

「いるかんじ……？ クラゲ、クラゲじゃないですか！それも猛毒！えっ、それを私にくれるんですか？ 嬉しい、嬉しいです！ 班の皆さんに見られてたら恥ずかしくてできませんが、今日の私は運がいいです！最高です！ 皆さんは外で待機してます！これってどういう事かわかりますかお兄さん！ここには私とあなたしかいないんです！これってどういうことかわかりますか！つまりここには見ている人がいないんです！わーい、わーい！えへへー、きつとこれは神様のプレゼントなんです！私がんばったから、火星に神様がいるかは知らないけど、私にご褒美をくれたんです！感動です！そうですよね、ね、ね!! どうしたんですか、浮かない顔をしますよ！ああ、こんな所で！私は幸せ者です！うっふふふふふふ、あははははははははははははははっ!!」

「なあ、嬢ちゃん、帰って来るの遅くないか？」

「ああ、たぶんあいつらのベースに『アレ』がいたんだろうな」

「素直ないい子なのに、あれさえなければ完璧なものにな……」

「ま、俺達みたいなクズの集まりにずっと優しく接してくれてんだ、ストレス解消くらい自由にやってもらおうぜ」

「おう、そうだ、班長のために料理用意しとこうぜ！ どうせ満腹だろうから、女の子が好きそうなデザートでも用意してな！」

「いいな、よし、お前ら、スイーツの準備だ！」

むさ苦しい野郎どもが総出で可愛らしいお菓子やアイスを用意する、そんなロシア・北欧班的一幕。

これから始まる死闘の前の、一息の休息である。

## 第5話 新技術

「MO手術の後継を開発する」

それは、最初のMO手術成功者が誕生してからわずか五年後にとある国の研究所に下された命令だった。

この地球のあらゆる生物をベースに手術ができる、革新的な事だ。だがしかし、今だに一部の生物は適合者が確認できない、もしくは元々適合が不可能だ。それに、不慮の事態で『薬』が使えなかったら。

根本的な見直しが為され、徹底的に問題点や改善点が洗い出された。

それらが十分に考慮され、開発は開始されたのだったが……

計画は、困難を極めた。全てがシミュレーションで対処できるわけがない以上、当然、人体実験も視野に入って来るだろう。そうなれば、人間を集めてくる必要がある。しかも改善点が見つかった、というだけで具体的にどのようにそれを改善していくのかは全くわかっていなかった。

当然スタッフはMO手術開発時と同じ人材が大多数。MO手術が成功してその安全性などのチェックも終わり、やっと一息ついた、という所での新たな激務。

士気も上がらず、時間を空費する日々が続いた。

結果だけを言ってしまうえば、六年で手術は完成、最初の成功者も無事に現われここまでではよかった。

その後研究チームの主任が発展途上国から多数の人間を買い取り人体実験を進めていたとして全ての罪を押し付けられ、死刑に処され投獄されるとい痛ましい事件もあったものの、新たな手術はMO手術を超えるものとして秘密裏に誕生した。

だが、この手術には欠点も多かった。急ごしらえと追いつめられた研究者の狂気が、力と引き換えに大きな代償を生んでしまったのだ。

成功確率：約0.3%。

最初の被験者が成功したのは、奇跡にも近かったのだ。

一人目で成功したので成功確率も安定していると思っていたのだが、その考えは甘かった。

そして、この手術で使う特殊な材料のために、必要経費も激増。

ただでさえ危険を伴うMO手術の約100分の1の成功確率で、一回当たりにも十数倍の費用。

その他にも問題点があったのだが、これは闇に葬られてしまった。それは研究者はもちろん、被術者でも察しのいい人間は気付くものであったが。

軍用語で『ハイローミックス』という言葉がある。

高性能だが高価な兵器とそれなりの性能だが安価な兵器を混合して採用するという意味で、全て高級品で揃えようと思うと予算がかさみ過ぎるため、必要な部分だけ高級品を、そうでなくてもいい部分には廉価品を、という兵器の配備方式だ。

思想としてはこれと同じなのだが、ハイの方があまりにハイ過ぎた。

いざアネックス計画が発表され、人員が募集された時も、この手術は敬遠され、普通のMO手術がメインに据えられた。それも当然だ。誰が単純計算で1000人に3人しか生き残れない手術なんか受けようと思うのか。

リターンに対してリスクがあまりにも大きい、だが成功した時のその性能は一級のもので、捨てるにはあまりにも惜しい。そう考えた政府は、とある策に出る。

それは、この手術を公表し、各国から幅広く被術者を集めるという

ものだった。

そこまでしても結局アネックス計画の枠は埋まってしまい、その国の幹部搭乗員オフィサイサーもMO手術を受けた人間が務める事になったのだが。

悲嘆に暮れる関係者に、ある吉報が入る。アネックス計画に加え、追加で人員を火星に送る計画があると。

これを好機とみた関係者はこの手術を大々的に薦めた。MO手術に勝る能力。これまで不可能だった強力なベースへの適合。ここで、各国から少しづつ人は集まった。

各国の上層部には要求した能力を満たすベースがあり、それに適合する人間が欲しかったのだが、残念ながら提示されたそのベースに合う人間は一人としていなかった。だからこそ、この新たな手術に注目したのだ。

当然、手術に成功したからと言ってその生物をベースに出来るとは限らない。

個人個人の適性もMO手術と同様に存在するからだ。

だが、自国民を何万と調べても適応しそうになかったベースをもしかしたら……という希望がある。

賭け、というと聞こえが悪いが、結局はそういう事である。

当然政府が手術を望んでも、受ける当人はそんなものは望まないに決まっている。

犯罪者にも人権があるし、軍人を使うにはあまりにもコストが大きすぎる。

結局は0.3%か死刑か、という話になったり、金が無い人間が集まってきたりして、ある程度の人数は揃った。そして運命の手術。手術開始前は四ケタいた人間が、最終的には二ケタまで減った。手術の成功確率からして、奇跡のような成功数だ。

その中でも各国が要求したベースに適合した人間が選び抜かれ、火星に飛び立つ事に。

残りは地球でお留守番である。

なぜこの力を使わないのか？ それは、一重に和を乱さないためだ。

この手術を受けた人間は、その殆どが訳ありである。

その中には、凶悪な犯罪者も混じっている。そんな連中が任務に参加して、それをこなす事ができるだろうか？

単純な理由であるが、そのような事情があるのだ。

長い通路を歩きながら、壮年の女性が歩いていった。

今回の計画について、臨時の首脳会談があるのだ。

ドイツ首脳、ペトラ。彼女はある資料を見ながら、馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。

それは、『裏マーズランキング』のまとめ。幹部搭乗員の欄だ。

- 
- ―位 ダリウス・オースティン (米) 昆虫型 『ツエツエバエ』
  - 4位 島原剛大 (日) 昆虫型 『トビキバアリ』
  - ―位 エリシア・エリサーエフ (露) 爬虫類型 『アカウミガメ』
  - ―位 エレオノーラ・スノーレソン (伊) 棘皮動物型 『テヅルモヅル』
  - ―位 ヨーゼフ・ベルトルト (独) アメーバ動物型 『ネグレリア・フオーレリ』
- 

「ふふ、どの国も嘘つきばかりだわ。本当の事が書いてあるのは一つあるかどうかくらいじゃないのかしら」

彼女はこの計画の自国幹部搭乗員から話を聞いていた。

どいつもこいつも化物じみたスペックの生物の癖に、実力を出しなからうまくごまかしていた、と。



あの尊大で自分に敬意なんて払っていないのがあらかさまに見てとれる博士も、仕事に関しては忠実にやってくれるじゃないか、と薄く笑みを浮かべる

「まあ、あの無礼者に頼らざるをえない時点で私にも問題があるけど」  
そんな事を考えながら、ペトラはページをめくる。

ランキング上位者の欄。そこには、偽りない強力なベース生物達とその適合者が記されていた。

それを自国の人間を探して読み進め、MO手術発祥の国、その女王はため息をつく。

「それにしてもウチの国は武闘派が少ないわね……」

「薬の使用数は……14本か。まあこんなものだろうな」

戦闘を終え、調査の準備を整えるために宇宙艦に戻った日本班。

その班長、剛大は今後の計画を練るために自室に籠っていた。

班員には十分な準備が整うまでは警戒は怠らずに自由時間を過ごしてくれと告げてある。

突然の奇襲とはいえ、一人が犠牲になってしまった。班長として、日本の幹部搭乗員オフィサイサーとしてこの責任はとらなければならない。そう考えながらも、剛大は書類を書き留める。

勝手に薬を持ちだしていたり、最近の若者は……と言われそうな言葉づかいをしていたりとところどころ問題こそあるものの、この日本班の部下達は皆優秀だ。

戦闘に関しても、十分に対応できるだろう。逆に、戦闘員の少ない班が危険に晒される可能性が高い。

そのあたりと連絡をとって合流できないものだろうか。

今回の任務は各国で独立して行う事になってしまった。だが、他の班と合流できれば、それはやはり心強いものとなるだろう。

そこまで思考を巡らせて、剛大は自分の考え方が昔と比べて大きく異なっている事に気が付く。

冗談なのか本当なのか、自分が受けたMO手術と似て非なる何かは、さらにベースの生物に自分が近づくらしい。だから好物や行動が無意識の内にそれに近いものになる、と。これが怖い話なのか愉快な話なのか、剛大は固いと自覚している自分の頭で考える事もしなかったが、案外事実なのかもしれない。

自分のベース『トビキバアリ』は集団生活をする昆虫の代表、アリでありながら単独で狩りを行う。

では自分は、そのどちらが近いのだろうか。

「班長！ 静香がケーキ作ったんです、一緒に食べましょうよ！」

部屋の外からの声で、その考えはかき消される。

すぐに行く、と返事をして、書類に手早く書き加え、剛大は部屋を後にした。

「皆、さつきは戦いに参加できなくて本当にごめんなさい！ おわびにもならないけど、ケーキ作ったから食べてください！」

シヨックで動けずに戦闘に参加できず、宇宙艦の奥で待機していた静香。そんな彼女の趣味はお菓子作りである。激しい運動後の甘いおやつに、歓声を上げる搭乗員達。

狭い船内でのせめてもの娯楽、という事で、食料品類は豊富に積み込んであったため、こうしてお菓子を作る事も可能なのである。

「イエーイ」

「うええええい！」

「……」

剛大もテーブルに座り、自分の目の前に差し込まれた小さなシヨトケーキを見て、心の中で苦笑する。

やっぱり自分は、『アリ』なんだな、と。

「では、いただきまーす！」

静香の隣に座っている俊輝がジュースの入ったコップを持ちあげ、ハイテンションで食べ始める。

それを見て、恥ずかしそうにする静香。

もちろん、身内の恥的な意味である。

しかし、そう上手くはいかない。皆が同時にケーキに口を付けた途端、その顔は難しいものになった。

「しよっぱい……?」

「パねえっすわ」

「塩だこれ!」

もはや定番ともいえるミスをやらかした静香の顔が、蒼白になっていく。

「重ねがさねごめんみんな!　すぐ作り直すから!　班長もすいません!」

「……」

剛大は、無言でケーキを口にしていた。顎に手をあて、何かを考え込んでいる様子だ。

「……班長?　まさか塩にアレルギーとかが……」

「流石にそんなのではないだろ」

何人かが心配そうに声をかけるが、剛大はすぐに頭を上げ、全員を安心させる。

「ああ、いや大丈夫だ、静香、ありがとう」

そのまま席を立ち自分の部屋に戻っていく剛大。

日本班出勤まで、あと94分。

## 第6話 日本班の決定

“2位”を迅速に確保する。

それは、彼らに下された至上命令だった。

極めて強力なベース。訓練時の映像などの公開情報から考えるに他の追隨を許さぬ広域制圧能力。

そして、『新手術』の技術。

なんとかして、この力を手に入れたい。できれば無傷で、最悪死体でも、それを解析すれば有益な情報が手に入る。そのベースとなっている生物を手に入れられれば、他の上位ランカーの制圧にも使えるだろう。

岩をくりぬいて作られた一室で、数人の影が話しあっていた。

妖しく揺らめく蠟燭に、これまた岩を加工して作ったと思われる円卓。

それは奇しくも同時刻、地球で行われている各国の首脳会談のようであったが、それと比べてこの会議はあまりに薄汚く、暗く陰謀に満ちたものだった。

上位ランカーの捕獲と解析、それは大きな戦力になるに違いない。

そう考え、この火星に築かれた基地、天然素材に手を加えた要塞で策略を練る彼らは出撃命令を下す。

先の戦闘では先陣を切った部隊が各班を襲撃したものの、全て撃退されてしまった。

ロシア班に向かった部隊に至っては、全滅である。どれが本当でどれが嘘かもわからない各国の幹部搭乗員のMOベース。

それを確かめるためという目的もあったのだが、どれもはつきりとはしなかった。

そして不明な物がもう一つ。各幹部の専用装備。

彼らはこの任務に従事する前、地球で依頼人からこのアネックス第二計画の資料をもらっている。

今計画搭乗員のプロフィールが書かれたそれは、敵を知るという点で重要なものだ。

当然そこには、上位ランカーのみ持つ事を許された専用装備も書いてある。

ベースの性能をさらに強化するものだったり、汎用性の高い近接武器だったり。

だがしかし、幹部のそれは。

『SYSTEM:A』

『SYSTEM:N』

『SYSTEM:Y』

『SYSTEM:I』

『SYSTEM:K』

『SYSTEM:Ar』

以上6つ。それ以上の詳細情報、何も無し。

開発時のコードネームであろうものしか書かれていないのだ。これでは、専用装備から真のベースを予測することもできない。

彼らは、最大の敵のMO手術ベースを知らないまま戦わなくてはならない。

だがそれは、彼らとて同じ。彼らはここまで、自分達の存在すら知らなかったのだ。

ならば、十分に勝機はある。

そして、彼らの一人、フードを被ったまるで占い師の様な姿の男が、口を開く。

「俺が行って来よう。奴には死相が見えるんでな」

言ったきり、答えを聞くこともなく男は部屋を出て行く。

その場に居並ぶ人間は、無言でそれを見送った。

「うし、じゃあそろそろ行動開始といきますか」

休息を終えた日本班。静香の塩ケーキという事件こそあったものの、作り直されたケーキを食べ、軽食で腹ごしらえを終えた彼らは、それぞれ自分のベースとなっている生物に合った『薬』を持って外に出ていた。

宇宙艦の外、日本班の15名+1名が立ち並び、これからの任務のための編成を行っている。

指揮をとるのは、日本班班長、島原剛大。

「まずは今後の作戦についてだ」

「先程襲撃してきた三人に関してだが、奴らに該当するデータはこちらの搭乗員にもアネックス一号の方にも無かった」

それを聞き、ざわつく日本班。

無理も無い。襲撃者達のデータはアネックス一号の100人、今計画の96人、そのどちらにもなかったのだ。

と、いうことは。彼らは、アネックス計画で無い何かで火星に居る人間、という事だ。

裏切り者、と言ってもそれが2つのアネックス計画、合わせて196人の中から出てきたものだけならば、その数はたかが知れている。

だが、これで一気に状況は悪化してしまった。『裏切り者』の戦力は、また別の方法で火星にやってきていたのだ。

これでは、数も特定できないし、どのような装備を持ち、それらがどのくらいの規模なのかもわからない。

相手の全容をまず知らない事には、対策の立てようがない。

「恐らく奴らは我々の出発より前に火星に辿りつき、拠点を構築しているものと考えられる」

少し落ち着きを取り戻したものの、騒ぎそのものは収まらない。

元々彼らは対テラフォーマーではなく、対人戦も考慮して構成されたメンバーだ。

特に幹部搭乗員オプサイサーの中には、対テラフォーマーを捨て去り対MO手術被術者戦に特化している者もいる。

しかし、『裏切り者』と襲いかかって来るテラフォーマー、二つを秤にかけて、どちらが脅威か。

そう言われると、微妙な所がある。

着陸後、アネックス本艦と合流して共同で任務をこなす、それが元々の任務である。

その上で『裏切り者』が行動を起こしたならば始末する。

だが、計画は大きく歪んでしまった。彼らはまだ知らないが、アネックス1号は熱圏上部でテラフォーマーに襲われ、6つの班に分かれて脱出するという『プランδ』に移行している。

当の彼らも艦自体の制御が失われ、不時着という事態になってしまった。

そして、アネックス計画以外で火星に到達できている人間がいるのだとしたら、それは別のロケットでアネックス計画以前にどこかの誰かが火星に人員を送り込んだに違いない。

だとすれば、どのようにテラフォーマーの攻撃を凌いだのかはわからないが、アネックス計画の人員がやってくるまで火星で待機していたという事になる。

いつまでも宇宙艦に籠っているわけにもいかない以上、敵は司令部を構築し、一つの組織としてこの火星で自分達を狙っているという事がある。

このまま各班バラバラになってしまえば、組織化している敵に各個撃破されるのは目に見えている。

「どのような形かはわからんが、大規模な施設があるはずだ、それを少人数でいくつかの班に分けて搜索する。そして、あわよくば他の班と合流し、戦力を増強するぞ！」

小規模偵察による敵拠点発見と他班との合流。それが、日本の決定だった。

当然、それに異議を唱える者はいない。全員が、これからの戦いに気を引き締めていた。

その班員達の様子を見て、剛大は真剣な顔で首を縦に振る。

「諸君らの活躍に期待する。では、役割分けだが……」

「つたく、俺らが偵察役かあ」

「しようがないでしょ、ある程度の戦力が無いと危険な任務なんだから……」

「頼りにしてるぜ、上位ランカーさん」

宇宙艦でもやりとりがあった三人組、俊輝と静香、拓也。彼ら三人は火星の岩影に身を隠しながら宇宙艦を離れ、周囲の様子を見張っていた。

ここでは何が起こるかわからない。偶然他の班員に会うかもしれないし、敵に会うかもしれない。

でかいゴキブリテラフォーマーに出くわさないとも限らない。

だからこそ、慎重を期さなくてはならないのだ。

上位ランカーでなくとも、班員を失ってしまえば遂行できる作戦の幅は大きく狭まる。

今回の計画、各班16人という少人数では特に。

「やしてやて、では」

俊輝は自分のポケットから注射器型の薬を取り出し、自分の首に突き刺す。

「ん……？」

「おいおい、薬の無駄遣いはダメって班長に……」

その唐突な行動に静香も拓也も不思議そうな顔をする。俊輝の行



動が理解できていない様子だ。

二人の反応を無視し、変態した俊輝は腕の付け根に生えた二本の刃で近くの岩を力任せに切り裂いた。

「なっ、テメツ、何故わかった!?!」

一人の男が、慌てて岩影から退避する。その姿は甲殻に覆われ、すでに変態を終えている様子。

その重厚な黒色の甲皮は、バグズ手術でもベースの一つにさされていた昆虫、『クロカタゾウムシ』のもの。

あのまま反応が遅かったらいくら頑丈とはいえダメージは避けられなかっただろう。

「よう、裏切り者さん。アンタも偵察かい？ 俺達もなんだ、仲良くしてくれよ?」

男が戦闘態勢を整えようと身構えた瞬間、俊輝の左腕が振るわれる。

そして、くるくると宙を舞う棒状の物。

男がその正体に気がついた時、その顔は見つかった事への焦りから絶望へと変わっていった。

「あああ！ 腕が、腕がああ！」

血を撒き散らして地面に落ちた男の腕を踏みつけ、俊輝は一步前に出る。

人間に踏まれても平気な『クロカタゾウムシ』の甲皮を一撃で破るほどの力は俊輝にはない。

だから、どんなに堅い装甲を有する昆虫でも持っている弱点、間接の隙間を『切断』したのだ。

---

その生物は、基本的にはとても温厚である。

だが、その顎の力は強靱で、人間の髪の毛でも切断できる力を持っている。

しかし。

そんな生物の分類の一つ、ある一族は、非常に獰猛。

複数の個体を同居させれば、そこは凄惨な戦場へと姿を変える。

そもそも人為的に同居させなくても、捕獲された野生個体ですら欠損が多い事を見れば、この生物の性格というものがよくわかる。

そして、その一族でも随一に獰猛、さらにはそれだけで飽き足らず大顎を発達させた種がいる。

人間でも挟まれたら出血は免れず、その顎の力は太さ2cmの枝ですら切断してしまう。

その草食昆虫、という響きとは程遠い姿に、その科が関する名のよきな控え目な表現は全くお似合いではない。

無敵のはずの甲皮をあっさり突破され、落ちた腕を茫然と見つめる男。

それを俊輝は、真正面から見つめる。

その姿は、獲物を、本来喰らう必要もない他者の命を奪う暴君のそれだった。

「そのイカしたお兄さん、俺は年中無休、15時間くらい営業だ」

「お安くしとくぜ、ちょっとその命、切ってつてくれよ」

山野俊輝

国籍：日本

20歳 ♂ 182cm 79kg

『裏マーズ・ランキング』9位

MO手術 “昆虫型”

オオキバウスバカミキリ

## 第7話 森羅の断頭台

床屋に行った事はあるだろうか？

髭剃りとか、気持ちいいよな。みんな目を瞑つぶっているだろう？

そんな時、俺は思うんだ。

「首を掻き切られないという保障もないのに、なんで皆バカみたい  
に安心してるんだ？」

いや、皆の言いたい事はわかるよ。バカは俺だつてことも。

でも、俺は油断してたらそうなる世界で生きてきたんだ。そう、平和な国の中だというのに。床屋で隣に座つて談笑してた奴が次の瞬間に朱に染まつているような、そんな場所で。

だから、俺を許してほしい。虫のいい話だと自分でも思うけど、俺はきつとこれから、大切なものを失いたくなくて、酷い事をすると思うから。

---

オオキバウスバカミキリ。

カミキリムシの仲間です最大の顎を持ち、世界第二位の体軀を誇る、カミキリムシ界の怪物。

草食で争いを好まない一般的なカミキリムシとは違い、獰猛でその顎を武器に積極的な自己防衛を行う。

普通、カミキリムシの顎は下向きに生えている、つまりは摂食器官の一部のようなもののだが、このカミキリムシの大顎はクワガタムシと同じ前方、敵をしつかりと見据えるように生えている。

それは何故なのか。

全くわかつてはいない。

ただ一つ言える事は、この昆虫はその大顎を最大限に利用して敵を追い払い、活用しているということだ。

その大顎に戦いを挑む者は、たとえ堅牢な甲皮を持った甲虫であろうと死を覚悟する必要がある。

「なるほど、敵さんも斥候にするんなら頑丈なヤツがいいって思ったのか」

俊輝は、冷静に身の回りの情報を整理していた。

自分の背後には唐突な戦闘で硬直している静香と拓也。

目の前には、先程のショックから立ち直っているものの、左腕を失っている恐らく甲虫の仲間がベースの男。

ぱっと見でめちやくちや頑丈そうだったから関節から攻める事にした。

その適当に下した判断は、この状況において非常に正しいものだった。

『クロカタゾウムシ』。身を守るため、『堅さ』に特化した昆虫。

鳥に食われても消化されずに出てくるというほどの堅牢な甲皮は、人間の踏みつけすら意に介さない。

それを正面から力押しするのは分が悪い。

「静香、一応薬使つといてくれ。いつでも逃げれるように」  
「う、うん。わかった」

俊輝の呼びかけで、静香は自分のポケットから彼女の薬、アンブル型のそれを取り出す。そのやりとりを眺めていた男が、口を開いた。

「その色、その武器。てめえ、『9位』だな」

唐突な相手の問いかけに、俊輝が答えることはない。その代わりに、思考を張り巡らせる。

こいつ、ガラが悪くて裏の店の用心棒、って感じの見た目しているくせに、なかなか洞察力があるじゃないか、と。恐らく敵の持っている情報は、MO手術のベース生物だけで、それを持つ人間の顔は無いのだろう。それは、自分の変態した甲皮の色と大顎を見て9位と判断

した事から予想できる。なぜそのような不完全な情報を持っているのか、それはまだわからない。

だが、敵はこちらの戦力がある程度理解している。その情報だけで、十分だ。

ベースを偽装している可能性のある幹部オ搭乗員ファイサーの皆さまはベースから判別できない以上顔が割れているかもしれないが、それはまあいい。

相手が動く気配。仕掛けるチャンスを伺っている。それは、他人の様子を観察するのに慣れている俊輝にはよくわかった。

「なあ、俺もできる限り殺す人数は減らしたいって思ってたんだよ……」

自分に向けられている殺気を感じながらも、俊輝は言葉を紡ぐのをやめない。

「アンタ、家族とかいたりするか？　奥さんは？　お子さんか？　親父とかお袋とかいんだろ？」

当然、相手も無言。戦場で無駄口は不要。相手も相手で、考える事はあるようだ。

「……だから、降参してくれ。ウチの班長も、少しなら捕虜として生かしておくと言っていた」

左腕を切り落として戦意を削ぎ、降伏を呼び掛ける。特に策略などはなく、自然にそれは行われていた。

自分がかかり好戦的な性格だとは理解している俊輝だったが、流石に快楽殺人を行う程ではない。

これが乱戦ならともかく、見守る人間もない1対1。救える命なら、できれば救いたい。そんな、一般市民ならほぼ誰もが持っている感覚で、この戦場に立った青年は話をしていった。

「丁寧な勧告、感謝する。だが、それを受け入れる事はできねえんだよ、俺にも任務つてのがあるんでな」

敵にも敵の矜持というものがある。それも当然の事だ。だって、目の前にいるのは、ゲームに出てくる雑魚キャラじゃなくて、一人の人間なのだから。そう思い、俊輝は手の付け根に生えた大顎を男に向け

る。

「そりゃあ残念。じゃあ、」

「行くぜ」

その言葉と同時に駆ける俊輝。それに対して真正面から突撃する男。

『クロカタゾウムシ』は攻撃的な生物ではない。

だがしかし、人間サイズでその重厚な甲皮を持って突撃してきたとしたら、その威力は単純ながらも強大。

そこまで頑丈ではないオオキバウスバカミキリの甲皮では、それに耐える事はできないだろう。

だから、俊輝は当然と言えば当然だがそれを回避する。

体を少しずらし、あわや激突、という瞬間に体を横に滑らせて回避、すれ違いざまに左足に大顎の一撃を放つ。

切断、とまではいかなかったものの、それは見事に関節の隙間を切り裂き、大量の血液を噴出させた。

だが、男はそのまま止まらずに走り続けた。その先にいるのは、薬を使って変態を終えているか終えていないか、という状態の静香。

立ち止まって再び自分に向かい合ってくるか、と思つて足を止め身構えていた俊輝の顔が青くなる。

まずい。このままでは。自分はまた、助けられない。

慌てて駆けだす俊輝だったが、それは間に合いそうもない。

「やめろ……待ってくれ、そっちに行かないでくれ」

顔を歪ませ、俊輝は懇願する。脳裏には、かつて何もできなかった自分の姿がはつきりと映る。

こうなったらやるしかない。決心し、俊輝は自分の専用装備を取り出そうとする。

「……!? かっ……ハアッ……!」

突然、あと数歩という所まで静香に近づいていた男に変化が現れた。

その動きが止まり、その場に崩れ落ちる。体はガタガタと震え、それが己の意思で無いことは誰にでも見てとれる。

少しの間をおき、痙攣していたその体が動きを止める。完全に生命活動が止まり、徐々にその体は人間のそれに戻っていく。

それを、俊輝は立ち止まってただ虚ろな目で見つめていた。もし静香が変態を終わらせていなかったら。拓也と静香、どちらかは恐らく死んでいただろう。

それを想像し、俊輝の胸の中には冷たいものが姿を見せていた。

「大丈夫、私は大丈夫だから」

そんな俊輝に近づいたのは、変態を終えていた静香。

俊輝に歩み寄り、優しく言葉をかける。

「ああ、無事でよかったぜ、静香。間に合ってたみたいだな、よかったよ」

はっと我に帰り、言葉を返す。その声が震えているのは、俊輝自身にもよくわかっていた。

そして、自分の目の前にいる幼馴染にも。

「この人、単独行動って事は見張っばいけど……近くにあるのかな、基地ってやつ」

自分達の任務。それは、あくまで偵察だ。

敵とガチバトルをするためではない。

最初の襲撃があった以上はこちらの本陣である宇宙艦の位置は割れていると思っ正しい。

だとすれば、敵がわざわざ偵察部隊を出してくるとは考えにくい。それでも敵は単独でこの場にいた。ならば、この男の役割は拠点に



近づくと敵の見張り、という可能性が高い。

「よし、じゃあ静香、ちよつとこのあたりの偵察頼むわ。できる限り低空でな。危ないから」

「もう、心配性なんだから……」

「じゃ、なにも見つからなかったら30分で終了。向こうにある小さい洞穴で合流だ」

静香が偵察の準備を進めている後方、ふとある事に気がついた俊輝は、絶命している男に近づき、かがみこんでその首にかかっていた口ケツトペンダントを取り外し、それを開いた。

そこにあつたのは、幸せそうな男とピースして一緒に映っている若い女性の写真。

無言のまま俊輝はそれを男の首につけ直し、静かに手を合わせてその場を後にした。

「暗いのは嫌いです……」

薄暗い洞窟の中、十数人の男女が歩みを進めていた。

かといって、彼女達は探険隊ではない。アネックス補助計画、そのロシア班の面々である。

そして、歩いているこの地下洞窟も、天然のものではない。先程襲撃してきた『裏切り者』がここまで掘ってきた穴だ。

そこを班員の一人、優秀な触覚器官を持つ『ホシハナモグラ』がベースの男が先導して穴を掘り進めている。

穴は途中で地上への入り口が見えていたのだが、同じ方向にさらに掘り進んでいけば敵の基地の直下に辿りつくのではないか？ とう考えにより、宇宙艦を護衛させている少数以外はこの地下道に移動している。

だがしかし、彼らは全員が敵陣に突入して戦う気ではない。わけでもない。

この場で、敵陣に押し入るのはわずか数人、しかも、先行して突入するのはたった1人だ。

「……上から声が聞こえるな。でもそんなに数がいるわけじゃない。たぶん前線基地みたいな感じだろう」

トンネルを掘り続け数時間。彼らの考えは当たっていたらしく、頭上からは遊んでいるのか楽しそうな声が聞こえてくる。これが他班の仲間だったら問題なのだが、聴覚に優れたベースを持った数人が調査した結果、少数といえど三十人近くが付近にいる事がわかった。これは約2班分の人数だ。すでに合流した可能性は低いし、もし合流していたのだとしてもこんなに楽しそうなのはおかしい。

「じゃあ行つてらっしゃいませ、リーダー」

「俺達もできれば行きてえが、お嬢が本気で戦つてたら死んじゃうしな、俺ら」

「はい、私、頑張ります!」

美しい銀髪をなびかせ、ロシアの幹部搭乗員オフライサーの少女は、緊張しながらも覚悟を決めた顔つきで頷いた。

「じゃ、俺らも後で行きますんで」

頭上の岩が砕き割られ、人口の光が漏れだす。そこは、間違いなく人工物として巨岩を加工したものだだった。

「な、何だ!?!」

「敵襲だ、急げえ!」

慌てふためく穴付近の人間。だが、それは空中を漂う糸のようなものに触れた瞬間に沈黙した。

そして、岩を砕いたせいで発生していた砂煙が晴れた時、偶然にも穴の近くにいなながら生き長らえていた一人は、侵入者の姿を見た。

小さな体と特徴的な北国の帽子。

その顔は、天使のような表情を浮かべていた。

「たっち、です」

その柔らかな手が肩に置かれた直後、彼は別の天使の顔を見ることがなったのだが。

## 第8話 吹雪に漂う狂気

ゆらゆらと空中を漂う糸。喧騒。怒号。悲鳴。  
それら全てを聞きながら、歩みを進める少女が一人。

人口の光を身に浴び、その周囲に漂う糸が人間に絡みつき、次々とその命を奪っていく。

その姿は、あまりに幽玄で、あまりにおぞましいものだった。

北の大国、ロシア。かの国は、火星開発計画に関してとある悩みを抱えていた。

自分達には、計画で十分にアドバンテージを取ることのできるものがない。

いまだ衰えぬ技術大国、日本。

自分達が火星に旅立つ拠点、U—N—A—S—Aを擁する米国<sup>アメリカ</sup>。

多くの国を統べ、一大勢力に成長したローマ連邦。

実用性には疑問が残るものの、MO手術を超える新技術を開発しようとしているという噂の独逸<sup>ドイツ</sup>。

もはや言うまでもない、世界の覇権に最も近い中国。

我々はどうなのか。宇宙開発で米国に先を越され、軍事力も今となつては過去の栄光だ。

何かを生み出さなければならぬ。そう、他国に退けをとらぬ何かを。

焦った彼らは、以前より研究を進めていたある計画を本格的に実行に移した。

MO手術の成功率は約36%。新手術に至ってはさらに低くなる

可能性がある。人間を使うには、あまりに無謀な賭けだ。

死刑囚を使うのも一考だが、それでも数に限りがあるし、そんな連中に力を与えたらどうなるかわからない。

各国も頭を抱えるこの問題を解決する技術がこの国は持っていた。

それは、禁忌の研究。神に近づこうとする愚かな行為。

——人間がたくさん必要なのなら、造ればいいじゃないか

簡単な事だった。足りないのなら、造ればいいのだ。

死刑囚のように我儘でなく、軍人のように金がかかるわけでもなく、一般人のように人権に触れる事もない。

そんな、『製品』を。

巧みに隠された地下工場で、計画は始動した。

MO手術の成功率が若干高い女性で。

御しやすいするために、大人しく気弱な性格で。

無駄な栄養を消費しないために、コンパクトな小さな体に。

全てが目的の為、円滑に進められた。

無数の試験管の中、すやすやと眠る赤ん坊達。

多くの研究者が心を病み、計画を去った。

だが、代わりはいくらでもいたのだ。

その計画は止まる事がなかった。

次々と『製品』は製造され、大きくなっていった。

必要な知識を『植え付け』られ、死への恐怖を『かき消さ』れる。

百を飛び越え、千を追い越し、万をも超えたその体。

当の研究者以外の誰がこの狂気に満ちた光景を想像できるだろうか。

しかしである。ここで大きな問題が発覚した。

彼女達は、非常に弱かったのだ。

各国で訓練、研究用に生み出されたクローンのテラフォーマーは、劣化コピーでしかなかった。

それと同じ、不十分な技術の上で生み出された彼女達は、人間未満の肉体しか持っていなかったのだ。とある天才的な科学者が計画には携わっていたが、それでも、そこまでが限界であった。

人間の劣化コピー。ただでさえ36%、もしくはそれ以下。

それを劣化コピーで行おうとしたならば、どれほど低い確率になってしまうのか。

困った事態だ。さてどうしようか。廃棄処分するのか。いや、そうではなかった。

科学者達は、彼女達を殺すことはしなかった。

あまりに可哀想になったからか。いや、そんな甘い考えではない。ここに至るまで計画に残っていた化学者達が、まともなはずがないのだから。

簡潔に言えば、『肉体改造手術』である。

体をいじくりまわし、手術に持ちこたえられる体に改造する。

これまでにかかった予算から考えると、これが一番合理的な考えだった。

かくして、施設は同じ顔の子ども達の学びやから、苦悶の叫び声が絶えない地獄へと姿を変えた。

改造手術の痛みなど関係無い。なぜなら、それを施すのはいくらでも代わりがある、人間などではない、ただの『製品』なのだから。

被術者の負担など見ず、一番効果の高いものを。元々弱い彼女達がそんな手術の日々に耐えられるわけもなく、次々と死んでいった。

生き残った個体は、さらに苦痛の増す手術に。彼女達の地獄は、終わる事が無かった。

そして、それでも耐え続け、MO手術を受ける水準に達した生き残り。

ここでも、不幸は続く。十数年続けられたその結果は、ただの無駄骨だった。

再び行われる事となった火星計画、正式名称『アネックス計画』のロシア担当班が、志願者のみで埋まってしまったのだ。

かくして、彼女達は存在価値を失った。研究者も暴走し、死への恐怖も世間の常識も無く育てられた彼女達は、さまざま用途で酷使される事になった。労働力、被検体、そして、あまり表で言えないような目的にも。

その中でも次々と死んでいった。そう、手術の後遺症で弱っていた体は、耐える事ができなかつたのだ。

しかし、それはある日終わりを迎える。

『アネックス計画』の戦力不足が危惧され、増援部隊が結成される事になった。

それと同時にドイツが例の新技术、正式名称『 $\alpha$ MO手術』被験者の公募を開始。

今更なんなんだ、という文句もあつたが、新技術には、ロシアが望んでいたある条件を満たしたベースに適応できるかもしれないという希望があつた。

そして、自分達には格好の素材がいる。

これには、食いつかないわけにはいかない。至急、生き残つた『製品』達が集められ、強制的に手術を受けさせられた。処分に困つていたんだ、一人でも成功すれば儲けものだし、失敗だつたとしても面倒な余りものを処分できる。

何も感じず、無表情で手術室に入り、無表情で順番を待つ同じ顔の少女達。

それを見て、手術の担当者は何を思ったのだろうか。わかつてはいたが、あえて何も言わなかつたに違いない。

そして、たった一人、生き残つた。

手術に成功したたった一つの『製品』は『ヒト』に格上げされ、厚待遇と庇護の下、任務の遂行に必要な訓練を受けてきた。

これが、北の大国、その隠された計画である。

「どうですか、私の『能力』は」

誰に言うでなく、ロシア・北欧第三班班長、エリシアは呟く。

もちろん、その言葉に耳を傾ける人間はその場にはいない。

彼女の声に答えるのは、悲鳴、怒号、断末魔の声。

恐らくは昆虫型であろう、黒々とした甲皮の男が勇敢にも挑みかかって来る。

だが、エリシアは退く事すらしらない。

飛びかかってきた男の体が、無数の糸のようなもの、『触手』と呼ば

れる器官に飲み込まれる。

彼女の能力はテラフォーマーに対してはほとんど効果を持たない。全身を甲皮に包んだ火星のゴキブリに、その針は関節の隙間に当たるといふ奇跡でも起こらない限り通らないからだ。

空中で男の体がぐらつき、地に落ちる。

いくら甲虫の甲皮を変態で得られると言っても、それは体全体をカバーしているわけではない。

当然、人間の皮膚のままの部分もあるのだ。

その毒、全生物で最強クラス。

ボツリヌス菌により産生される毒素、ボツリヌストキシン。その毒性は、500gあれば全人類を殺す事ができるほどのもの。

そして、それを武器として持つ生物がいる。

『オーストラリアウンバチクラゲ』

学名『キロネックス・フレツケリ』

高い遊泳能力を持ち、発達した目で獲物を探して彷徨う海の亡霊。その身は非常に透明度が高く、姿を捉える事はまさに幽霊を捉えるかのごとき難易度。

60本の触手とそれに仕込まれた50億の刺胞針。



この生物の抱擁を受けた者には、例外無く死が訪れる。

それが、彼女の有する能力の一つである。

---

進化論は間違っている

この生物はしばし議論の材料にされる。

あまりに複雑な機構を体内に有するその生物を見て、世の人々は思ったのだ。

このような複雑なシステムが自然選択によって完成するはずもないと。

しかし、それが生存確率を高めるのに少しでも貢献するのであれば。

進化の繰り返しで、複雑なシステムでも完成される可能性はある。

そして、この生物は徹底的に他者を利用する。

喰らった相手の武器を自分の体に取り込み。

また別の喰らった相手を体内に住ませ、家賃だと言わんばかりにその相手が生み出したエネルギーを得て。

彼女の専用装備、『SYSTEM:Y』。

ドイツ班班長、ヨーゼフ・ベルトルトの最高傑作の一つにして、そ

の生物の能力をさらに高みに押し上げるもの。

体内に取り込んだ他の生物の刺胞、正確にはそれに付随している細胞からDNAを解析し、元の生物の刺胞を有する器官を再現するという代物。さらには、本来彼女のベースとなっている生物が耐性を持ち得ない毒素が体内に入った場合、それを解析し、その毒素に対する血清を生成し、体内に散布するという機能も。

まるで体内から他の生物が現れるようなその姿から、『虚空の門』と呼ばれる地球の物語の邪神かみの名が付けられたその装備は、彼女の体内で冷たく青い輝きを放っていた。

次々と積み重なる死体を横目に見ながら、エリシアは静かに微笑んだ。

「わたしは、これまでずっと利用されてきました」

その表情を見ることができた人間はいなかったが、

きつとそれは、喜びと狂気、哀憐の色に染まっていたに違いない。

「だから、今度はわたしがあなた達を利用する番です」

エリシア・エリセーエフ

国籍：ロシア

16歳 ♀

144cm 35kg

能力使用可能MOベース

“刺胞動物型”

— キロネツクス

“刺胞動物型”

— イルカンジクラゲ

“刺胞動物型”

— アナサンゴモドキ

“刺胞動物型”

— ヘビイソギンチャク

“刺胞動物型”

シロガヤ

: : : :

専用装備：体内内蔵型刺胞運用器官再現機構

『SYSTEM:Yog-Sothoth』

αMO手術 “軟体動物型”

『裏マーズ・ランキング』3位

ムカデミノウミウシ

## 番外編 オフィサーの休日

貸切られた宴会室で、和やかな空気が流れていた。だが、その空気はどこか重い。

11人の男女が集うこの場所。机にはさまざまな料理が彩られ、本来ならドンチャン騒ぎが繰り広げられるはずのこの場所。

「第一回！ 表裏アネックス計画幹部搭乗員親睦会！」と書かれ部屋前方のお立ち台の上に貼られた紙は、どこか悲しげな雰囲気を持っていた。

「み、皆もつと盛り上がってもいいんだぞ……？」

前に立って乾杯の音頭をとっていたガタイのいい男性、『アネックス1号』艦長にして日米合同第1班班長、小町小吉が出鼻をくじかれた様子でその場に集まる面々に話しかける。

今回の集まり、それは張られている紙に書いてあるとおり、表裏のアネックス計画実働部隊を率いる幹部搭乗員達のために小吉が催した親睦会である。

『アネックス計画』の幹部搭乗員達は以前に小吉が食事に誘い、親睦を深めるという目的ではそこそこの成功を収めたのだが、アネックス計画の戦力不安を払拭するために増援部隊が、しかも新たに各国そのための幹部搭乗員が選ばれたという。

ならばもう一度、という事で今回の会合が開かれたのである。

お互いの事をよく知らないままに任務に臨んでも良い結果は出ない、そう考えた小吉の計らいによって開催されたそれは、開始直後から失敗の空気が漂っていた。

日本

「剛大君、何かして欲しい事とかあるかな!? 俺、隠し芸でもなんでも

「やっちやうぞど？」

「いえ、結構です」

——アメリカ

「お近づきの証に一杯いかがですか」

「いや、私は自分でするからいいぜ」

——ロシア

「……スマンな、おじさん最近の若い子に合う話はできないんだ」

「そ、そんな、わたしなんかのために無理してもらわなくても大丈夫です—」

——中国

「すいません艦長、彼、本国から召集かかって来られないみたいで」

——ドイツ

「艦長、帰ってもいいですか」

「ふむ、ここを改良すれば完成のようだ」

——ローマ連邦

「それでねえ、うちの甥っ子が私の姿を見るなり腰を抜かしちゃって

！ その時のあの子の顔と来たら—」

「は、はあ……」

各国から選りすぐられた精鋭達。

アネックス計画の要石たる彼らの協力なしには成功はないだろう。

だというのに、彼らは他国どころか自国のもう一人の幹部搭乗員<sup>オ</sup>とささえも打ち解けられていない状況だ。

必死で場を盛り上げようとする小吉と、それを遠慮がちにスルーする寡黙な青年、剛大。

酒を注ごうとする赤毛の青年、裏アネックス計画北米第一班班長、

『ダリウス・オースティン』。

それを拒否して一人で黙々と飲み食いしている眼鏡の美女、アネックス計画副長にして日米合同第二班班長、『ミツシエル・K・デイヴ

ス』。

筋骨隆々の巨漢、豪胆な普段の態度は目の前のあまり接したことがないタイプの人間を前にひっこんでしまっているアネックス計画ロシア・北欧第三班班長、北国諸国では軍神と呼ばれている男、『シルヴェスター・アシモフ』とおどおどしながらも食欲旺盛なのか、どこか幸せそうな表情で次々と料理をたいらげている銀髪の少女、裏アネックス計画ロシア・北欧第三班班長、『エリシア・エリサーエフ』。

裏アネックス計画の幹部搭乗員オ  
フイ  
サーが不在のため一人ぼつんと食事をしている長身の男性、アジア・中国第4班班長、『劉翊武』。

今にも席を立ちあがって出て行きそうな襟長の服を着た青年、アネックス計画ドイツ・南米第五班班長、『アドルフ・ラインハルト』。そんな彼に構う事なく机の上の料理を横にどかし、何かの凶面を広げて見ている眼鏡に白衣といった出で立ちの男性、裏アネックス計画ドイツ・南米第五班班長、『ヨーゼフ・ベルトルト』。

ミッシェルの所に行こうとしているが服の裾を凄まじい力で掴まれて動けない美青年、ヨーロッパ・アフリカ第六班班長、『ジョセフ・G・ニュートン』とその袖を掴んで上機嫌で話をしている、ジョセフ以上の長身を持つ老婆、裏アネックス計画ヨーロッパ・アフリカ第六班班長、『エレオノーラ・スノーレソン』。

彼らは反応こそまちまちなものの、全体的に見て一方通行なコミュニケーションかそもそもお互いに興味が無いという二つに分かれてしまっていて、親睦など望めそうに無い状態だ。

「ミッシェルさん！ 僕と一緒にお食事を……」

小吉がどうしたものかと考えこんでいる間に、エレオノーラに拘束されていたジョセフがわずかな隙を掻い潜り、まるでゴキブリのよう

に床を這ってミッシェルの下に向かう。

「……ゲスが」

それを見ての凍りつくような目と非情の一言。ジョセフは崩れ落ち、頭を床に付けてさめざめと泣きながらも、止まる事はなかった。顔を床にこすりつけながらも向かってくるジョセフにどん引きした表情を見せるミッシェルだったが、その表情は自分に突き刺さる殺気ですぐに不機嫌なものへと変わった。

それをミッシェルに放っていたのは、ジョセフを追う事もせず座ったままのエレオノーラ。

元から皺の寄っている額に更に皺がより、こちらもあまり機嫌が良さそうではない。

「あらあら……ローマ連邦の大切な切り札ちゃんを泣かせて、ただで帰れるなんて思ってないでしょうね、『一人目』さん？」

完全なジョセフの自爆なのだが、エレオノーラはそんな事は問題では無いと言った風に立ちあがり、ミッシェルに近づいていく。

「アナタのお父さん、ドナテロさんでしたっけねえ……」

「私達がこれから行く火星で無駄死にしたそうで、本当に残念だったわねえ」

安い挑発。だが、彼女は知っていたのだ。ミッシェルを最大限に怒らせる言葉を。

それをエレオノーラが言い終わるか言い終わらないかという内に、ミッシェルが無言のまま周囲の膳をなぎ倒し、一直線に突進する。

「まずい！ 誰でもいい、ミッシェルちゃんを止めてくれ!!」

小吉が慌てて叫ぶが、この状態ではどうしようもない。

ミッシェルは親のモザイクオーガンとバグズ手術が遺伝したという『奇跡の子』。

その存在は各国の注目を一身に集め、アネックス計画にも大きな影



響を与えたという。

そして、彼女は『薬』を使っていない状態でも生来の能力、最強のアリ『パラポネラ』の力を発揮する事ができた。そして今、感情が昂っている彼女は、その制御ができていない状態だ。

この状態では、変態をしなければ止めようがない。ここに集まったメンバーの中で最も素で強いと思われるアシモフですら力づくで止める事はほぼ不可能だろう。そして、アリのMOベースによって強化された筋力から繰り出される拳をただの人間が受ければ、耐えられるわけもない。

「へえ……流石ね」

目の前の光景に、小吉を始めとしたアネックス計画の幹部搭乗員達は驚愕で言葉を失った。パラポネラの力を持った拳が、やせ細った老婆の左手に受けられたのだ。

当然エレオノーラも全く衝撃が無かったというわけではなく、数歩後退したものの、その体には傷というものは全くついていない。

そして、その左手は黒色に、手の付け根の近くは淡い赤色に染まっていた。形状も心なしか人間から離れたものになっている。

「人為変態……だど？」

その言葉を漏らしたのは、小吉。エレオノーラは別に体自体はただの人間であるし、ミッシェルのように先天的なM<sup>モザイクオーガン</sup>・Oを持つているわけでもない……はずである。

それが、体の一部分とはいえ変態を行っている。

だとしたら、この突然の変態は何なのか。考えこむ小吉だったが、それは睨みあっている二人が起こした次の動作に目を取られたせい

でどこかへ行ってしまった。

拳を受け止め受け止められたままの体勢で硬直している二人だったが、突然ミツシエルが怪訝そうな顔をして拳を引っ込めて引き下がる。

そして、両者の戦闘態勢が解けた次の瞬間、エレオノーラが動作を見せる。

また何かやらかすつもりか、とその場にいるアシモフ、小吉、剛大といった武闘派の数名が構えるが、それは杞憂に終わった。

「本当にごめんなさい、ミツシエルさん。貴女の実力を見るためとはいえ、貴女の何よりも大切なものを汚すような事を言ってしまった」  
エレオノーラが、ミツシエルに対して深々と頭を下げたのだ。

それに対して、再び構えをとったミツシエルも面喰らい、手を下げる。

突然の出来事に、アドルフでさえも硬直して動けなくなっていたが、ミツシエルがこれ以上の追求をしない所を見るにこれ以上の悪化はしないだろう、と考え、各国の幹部オフィサー搭乗員達は再び平静を取り戻しつつあった。

「では私はこのあたりで失礼させていただきますわ、小町艦長。この謝罪は改めてしますので、今は私がこの場を去るという事で矛を収めてくださいませ」

ただ一言言い残し、エレオノーラは部屋を去っていく。

嵐が過ぎ去ったようにひっくり返された膳と、立ちつくすミツシエル。

それぞれがそれぞれの顔を見まわし、どうするんだよこれ……という表情を浮かべている。

「ま、まあトラブルはあったが……みんな、仕切り直しとこうじゃないか！ 何か食べたいものとかあるかな？」

小吉の一言で、全員が救われたようにほっと息をつく。

この中で一番偉い人間が場を仕切り直している事により、拒否する人間もいなければこれ以上なにか行動を起こそうとする人間もいなし

い。言葉こそないものの全員が『仕切り直し』に賛同し、各々の希望を言い始める。

「あの、クラゲとか……ありますか？」

「か、変わったものが好きだねエリシアちゃん……」

「料理は十分にいただいたので何か甘い物をお願いできれば……」

「OKだ剛大君！」

「私は……生魚が食べたいな。艦長、日本料理は生魚が美味いと聞くが、頼めるかな？」

「もちろんですよ博士！　ウチの連中の健康診断や裏の方の装備品の研究お疲れ様です！」

「僕はホットケーキとか食べたいです。メイプルシロップがたっぷりのを」

「合点承知だダリウス君！　よかつたら今度君の料理も食べさせてくれ！」

もちろんです、と苦笑するダリウス。一応裏の方の幹部達の事情も知っている小吉は、彼らと仲良くなるための計画をしっかりとこの場を持ってきていた。彼らが興味を持っている話題。食い付きそうな話。それらの情報は、本来とは少し違う事になったがしっかりと役立っている。

なぜかすつかり接待する側となっている小吉の姿に、アネックス計画の幹部達も笑いを漏らす。

「艦長、僕、ラーメンが食べたいです」

「おつ、いいねえ劉さん！」

「じゃあ僕もご一緒しましょう」

「ただこうか」

劉の希望に、ジヨセフ、アシモフも乗り、だんだんにぎやかになってきた。

「……そろそろ帰っても」

「お前も一緒に食うぞアドルフ！」

「……」

「ミッシェルちゃんも一緒に……って大丈夫!？」

劉達と談笑していた小吉。当然流れでミッシェルにも声をかけたのだが、その手を見て声が震える。

ミッシェルの右手、パラポネラの能力が発現したそれに、ヒビが入っていたのだ。

「なんだこりゃ……」

小吉が思わず呟くが、ミッシェルは当然、自分の手が傷を負った理由を理解していた。

「あのまま拳を離さなかったら、いや、無理やり振りほどかなかったら、握りつぶされてたな」

その言葉に、小吉は寒気を感じる。

あの老婆は、本気でミッシェルと相対していたのだ。ミッシェルを試す、という言葉からは自分のお眼鏡にかからなかったら潰しても構わない、というエレオノーラの意思がにじみ出ている事を小吉も理解し、冷たいものが背中を這いまわる感覚を覚えた。

だが、ミッシェルは笑っていた。

「全くトンでもないババアだな。父を侮辱した事も許せないが、今日は争いに来たんじゃないんだ、私も付き合わせ、ラーメン」

穏やかな春の日、そんな日に行われた幹部搭乗員の親睦会。この親睦会がもたらした計画への影響はわからない。だが、決して悪い方向には向かわなかった、それだけは確かである。

「ちよつとやりすぎちゃったかしら」

通路を歩く一人の老婆。先程ミッシェルとひと騒動起こした張本人、エレオノーラ。

彼女は自分の部屋に帰ろうとしているところだった。

ヒビを入れられた自分の左手を治療するために。

人為変態のおかげで出血こそしていないものの、決して軽い傷では無い。

早く帰ろう、と歩調を早めた時、声をかけられる。

「こんにちは！」

パジャマを着た少年である。年齢は中学生くらいだろうか。柔道着を着たマスコットを持っている。

なかなか元気そうで、自分にはない若さを持つこの少年を、エレオノーラは微笑ましく思いながら見た。

だが同時に、こんな場所にただの子どもがいるはずがない、という考えも浮かぶ。

そして、その理由もエレオノーラには簡単に想像がたった。

恐らくこの子は、例の病気だ。自分達が火星に行く最大の目的である。

「あらあら、どうしたの、こんな時間に」

話しかけられたのは日本語だが、幸運な事にエレオノーラは自身の仕事の関係で日本語をマスターしていた。恐らくこれが話せなかったら会話は成り立たなかっただろう。

「ねえ、おばあちゃんって『神様』なの？」

唐突にかけられた質問に、目を丸くするエレオノーラ。

内容もあまりに突飛である。

「あれ、違った？　じゃあ、『お父さん』？」

さらに不可解な質問である。

「あ、あのね？ おばあちゃんは神様じゃないし、女の人だからお父さんでもないのよ」

謎の質問に少し動揺しながらも、エレオノーラは必死に言葉を選んで返答していた。

意味のわからないまま突然謎かけをされる、偶然スフィンクスの前を通りかかった旅人のような心境である。

「なんでそんな事を聞くの？」

「えー、だっておばあちゃんの部下だっていう人が話してたんだよー」

瞬間的に全てを理解したエレオノーラ。

「ごめんなさいね、おばあちゃん、用事ができちゃって。マタネー」

最後の一言はカタコトになりつつも、少年とお別れしエレオノーラは歩を進める。

彼女の考えている事はただ一つ。

「あいつら、あとでおしおきね」

「今日はいい天気ですー……」

親睦会終了後。U—N—A—S—A敷地内の中庭、温かな空気と太陽という絶好の日光浴日和。

そんな場所の芝生の上に、寝転がる少女がいた。

太陽光を反射して輝く銀髪に、常に身に着けているロシア帽。

小柄ながら整った容姿の彼女は、服に芝が付くのも気にしない様子で日光浴を満喫していた。

エリシア・エリサーエフ。裏アネックス計画、ロシア・北欧第三班班長にして、

マーズランキングに対応してこちらの計画でも作られた『裏マーズランキング』3位の実力者だ。

彼女も最初はアネックス計画の方に送られ、『マーズランキング』8位という壮絶な結果を残したという経験がある。それもそのはず、二つのランキングは、審査基準が違うのだから。

『マーズランキング』は『火星環境下におけるテラフォーマー制圧能力』の格付けである。

よって、対テラフォーマーに優れたベースを持つ人間がランキング上位に名を連ねる傾向がある。

一方の『裏マーズランキング』。

裏アネックス計画の任務、それは、『裏切り者の始末』である。

当然対テラフォーマーの能力もある程度は評価の対象なのだが、重視されるのは対人戦能力の高さ。

そしてエリシアのベース、『ムカデミノウミウシ』の能力はテラフォーマーには通用しないものの、

対人戦においては無類の強さを発揮する。そんなわけで、アネックス計画で下位だった彼女は裏アネックス計画では最上位ランカーの一人として名を連ねているのだ。

「なんでわたし、日向ぼっこが好きなんだろう……」

ふとした疑問がエリシアの頭の中に現われる。

エリシアはクローン、それも大量生産された内の一人だ。

改造手術を受けてある程度は強くなっているものの、本来なら紫外線を含む太陽光に当たるのは好きではないはず。

だが現に彼女は日向ぼっこを楽しんでいる。自分でもそれはわかっていない様子だ。

「ん？ 君は……ロシアのエリシア君かね」

突然の来客、しかも意外な人物に、エリシアは目を丸くしていた。丸眼鏡に白衣の男性。その姿は自分に苦痛を伴う手術を強制した研究者達を思い起こさせてあまり好きではない。

「こんにちは、ヨーゼフさん」

ドイツの幹部搭乗員、ヨーゼフ。科学者であり研究者である彼は、

何故か用が無いと通りがかるわけがない場所にあるこの中庭にやってきていた。

「ここに何か用なんですか……？ サンプルの採集とか？」

「いや、ちよつと寝転んで日にでも当たろうと思つてね」

無難なエリシアの質問に対して、その回答は予想外のものだった。

彼もまた、日向ぼつこの魅力を理解する者なのか。

意外な人間と趣味が合い、少し嬉しい気分になるエリシアだったが、それでも体勢は寝転んだままである。

そして、ヨーゼフも隣に寝転んでいる。

「ヨーゼフさんも日向ぼっこ、好きなんですか？」

「ああ、私も昔は暗い所が好きだったんだけどね、8年くらい前からかな、例の手術を受けた後から何だか楽しめるようになってきたんだよ」

研究者と実験材料。相反する二つの立場の共通点。

それが二人ともどこかおかしく感じ、知らない間に笑顔になっていた。

「ねえ、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだね」

エリシアの質問に、ヨーゼフは珍しくも聞く姿勢を見せる。

「ヨーゼフさんは、研究とかしてて後悔した事とか、清算したい過去つてありますか」

だが、それつきりだった。エリシアの質問には少し含みがあったものの、ヨーゼフは遠慮なく答えを返す。

「清算したい過去……？ 馬鹿馬鹿しい、そんなくだらない言葉は嫌いなんだ」

「そうですね……」

そして、会話は途切れる。しばらくの沈黙。



「……ひよっとして」

意外にも、次の会話を始めようとしたのはヨーゼフの方だった。だが、その言葉はエリシアの方を見て止まる。

「寝てしまったか……」

穏やかで温かい陽気、そんな状況で無言の状態が続き、エリシアはすっかり夢の中に入っていた。

その寝顔を見て、ヨーゼフは少し自分の過去を思い返す。

「全く、人間という生き物は勝手なものだ」

思考に入ろうとしていたヨーゼフだったが、ある事に気が付いてそれを止めた。

エリシアが、寝たまま涙を流していたからだ。

「ナターシャお姉ちゃん……わたし、強くなったよ……」

小さな声の寝言に気が付いているのか気が付いていないのか、ヨーゼフは空を見上げ、一人ぼやいた。

「曇ってきたな」

そして、数少ない幸せな過去か、辛い過去か、ヨーゼフはその涙の意味を理解していなかったが、

そつとその頬に手を伸ばしていた。

「こんな所で何をやっているんだ、博士？」

突然の新たな来客に、ヨーゼフは振り向く。そこには、怪訝そうな顔をしてこちらを見ているミツシエル。

ヨーゼフは己の頭脳を総動員し、この表情の意味を考えていた。

ここは、人つけの少ない中庭。

自分は、エリシアに手を伸ばそうとしていた。

エリシアは、まだ成人していない少女である。  
そして、彼女は、横たわって涙を流している。

——ドイツ人男性がロシア少女に無理やり  
いかがわしい事をしようとしているという事案が発生

「ちよつと待ちたまえ、誤解だ！ 私は何もしていない！」

この事件（？）の後、ヨーゼフに対するアネックス計画搭乗員（主に女性）の好感度がガタ落ちした事は言うまでもない。

## 登場人物紹介その1 (俊輝、拓也、エリシア)

—— 山野俊輝 ♂

・ 20歳 182cm 79kg 日本

・ 『裏マーズランキング』9位

・ MO手術ベース：『昆虫型』 『森羅の断頭台』 オオキバウスバカミキリ

・ 好きな食べ物：クリームシチュー、チョコレート

・ 嫌いなもの：幼馴染が作ったどう考えても人間が食べるものとは思えない料理

・ 瞳の色：黒

・ 血液型 AB型

・ 誕生日：12月23日 (やぎ座)

閑散とした商店街の八百屋の息子として生まれる。

本人はバリバリの理系で将来は物理学者になりたいと思っていたのだが、家業を継いで欲しいという両親と対立し家を出る。その後は生活費や大学に行くための金を稼ぐためアルバイトに励むが、詐欺にあって全財産をだまし取られて絶望、元々の荒い性格も相まってマナーの悪い客とトラブルを起こしアルバイトも首になり、その後は抜け殻のようになっていた。

そして気が付いたら火星に行くという計画に参加しており、気が付いたら成功率36%とかいう手術を受け、気が付いたらそれに成功していて、気が付いたら火星行きのロケットの中にいた。

自分ではドジな幼馴染を助けてやっていると思っているのだが、実際は逆である。

—— 古原川拓也 ♂

・ 20歳 181cm 80kg 中国/日本

・ 『裏マーズランキング』86位

・ 手術ベース：環形動物の一種

・ 好きな食べ物：手術前：レタスのサラダ 手術後：ステーキと黄

色のパプリカ

- ・嫌いなもの：ハーフは二ヶ国語以上話せて当然という空気
- ・瞳の色：黒
- ・血液型 B型
- ・誕生日：5月16日（おうし座）

日本人の母と中国人の父の間に生まれる。

生まれてすぐに両親の仕事の都合で中国に渡り日本にいた記憶がほとんど無いので、一度旅行に行きたいと思っていたのだが、それは叶わないまま多額の借金を抱えた両親に売られ、火星に送り出される事になった。

PCを使っている時によく出てくるアダルトサイトや18禁マンガのバナーをつい反射的に押してしまう事が長年の悩み。

—— エリシア・エリサーエフ 女

・16歳 144cm 35kg ロシア

・『マーズランキング』元88位 『裏マーズランキング』3位

・αMO手術ベース：『軟体動物型』 『毒魔の篡奪者』 ムカデミノウ

ミウシ

- ・好きな食べ物：手術前：きくらげ 手術後：くらげ
- ・嫌いなもの：ロシア人女性は胸が大きいという風潮
- ・瞳の色：空色
- ・血液型 B型
- ・誕生日（製造日）：8月8日（しし座）

ロシアの研究所でMO手術の素材にするために作りだされたクローンの唯一の生き残り。3725人の姉と8451人の妹がいた。クローン全員に言える事だが生まれつき体が弱く、改造手術でそれを補っているため、時々吐血して周囲を騒がせるが、その弱気で優しく、遠慮しがちな性格が悪人揃いの裏アネックス計画ロシア班の癒しになっている。

長年外界から隔離された研究所で過ごしてきたため常識に疎く、時々とんでもない行動をとる事がある。

他班班長とはアネックス裏表問わず仲が良く、他の班長同士の交流のきっかけになっていたりもする。Aカップ。

## 第9話 要塞の弱点

ウミウシ、と聞いてあなたはどのようなイメージを思い浮かべるだろうか。

実物を見たことがないのなら、恐らく「海に居るナメクジっぽい生物」程度のイメージしかないだろう。

しかし、実際のウミウシはナメクジとは違い、体型はともかくその色はさまざまなバリエーションが、その身に付いている装飾品にはさらに多くのバリエーションがある。

その美しい姿は人間にも愛され、水族館などではあまりメジャーとはいえないものの、見に来た人間の目を楽しませている。

だがしかし、その中のどれほどの人間が知っているのだろうか。

かの生物の、常軌を逸した生態を。

敵を喰らい刺胞を己が身に取り込み、自己の防衛のために利用する事を。

葉緑体を取り込み、自己の栄養摂取の為に利用すること。

刺胞の暴発を防いだままの運搬機構、それを利用できるミノ、毒への耐性。

その全てがただ一つの目的のために完成され、不落の要塞として機

能している。

細胞という住人を住ませ、生産施設を持ち、外敵から身を守る防衛施設を有する。この優美な海の獣は、一つの『都市』なのである。

自分は、自分である事に価値を見いだせなかった。

隣にいる妹（いやもしかしたら姉なのかもしれない）も、自分と全く同じ顔をし、同じような性格で、同じように苦痛を受けていた。

毎日が同じ事の繰り返し。味の無い何かを口に入れ、白衣の人達に体をいじくりまわされ、少しばかりの休息を取る。

日によつては銃を持たされたり運動をさせられたりもしたけど、それは楽しい、なんて感情とは程遠かった。

自分がなんなのかもわからない。本で読んだけど、『親』という存在も自分達には存在しない。

自分はなんで生まれて、なんで生きているんだろうか。そもそも、自分は本当に生きている存在なのだろうか。わからないまま、ただ流されるように生きていた。

でも、そんな繰り返しだったとある日。

「こんにちは！ あなたののお名前は？」

休憩時間に本を読んでいた時、声をかけられた。わたし達は考えている事も話し方も似たようなものだったので、会話という行為に楽しみを見出せなかった。だから、わたしは本当に驚いてしまったのだ。

声をかけてきたのは、わたしよりも成長している個体。でも、その顔はわたしが鏡を見た時とほぼ同じものだろう。

「……………3726番ですが、何か用でしょうか？」

名前？ わたしにそれにあてはまる物があつただろうか。どう答えていいかわからなかったけど、とりあえずいつも研究者がわたしを呼ぶ時のものを答えてみた。

それを聞いて、わたしと同じ顔をした彼女は、困ったように笑っていた。

「ダメダメ、ですよ？ そんな機械的な番号じゃなくて、もーっとちゃんとしたいい名前を、ね？」

正直、彼女の言っている事の意味がわからなかったです。

だって、わたし達の名前なんて意味がないものだし、数字の名前で十分に事足りてましたから。

「あなたは……そう、エリシア、エリシアって名前の顔してます！ 今からあなたの名前はエリシアです！」

同じ顔だろうに。なぜあなたにたくさんクロンからわたしを見分けられたんですか？

「……わたしに名前なんていりませんよ、番号で十分です」

「私はナターシャって言うんです、よろしくね、エリシア！」

「……」

なんだかよくわからないうちに、わたしの名前が決定した。当然、それを使うつもりなんてわたしには無かったけど。

その後も0024番（研究者から聞いた彼女の『名前』だ）はわたしにしつこく話しかけてきたし、私の日常は変わらなかった。どうやら彼女は私達量産型が生み出される以前に造られたプロトタイプのようで、番号が若いのもその都合らしい。そしてこの施設では古株なので、名前とかいろんな事を知っているし感情表現が豊かなのだろう。

「ねーねーエリシアー、遊ぼうよー」

「いえ、わたしはいいです……0024番」

「む、私の事はそれじゃなくて名前で、そしてお姉ちゃんと呼びなさい



！」

「わかりましたから離れてください……お姉ちゃん」

「違う違う、わんもあぷりーず！」

抱きつかれてとても暑いです。ただでさえこの施設は機械の放射熱がどうかで温度が高いのに。

「ナターシャお姉ちゃん、はい言いましたよ離れてください！」

「だめだめー、可愛い妹を離すもんですかー」

気弱で臆病な性格として造られているわたし達、彼女もそれは同じはず。でも彼女はどこか明るかった。

この時わたしに感情とか心とかはあんまりなかった気がするけど、きつと温かいものを感じていたんだと思います。

それからは騒がしかったけれどちよつと楽しい日々が続きました。

わたしと同じく、彼女に名前を付けられた子達が集まって、みんなで何かをしたり、他愛もない話をしたり。

この日々ができれば続いてほしかった。でも、それは叶いませんでした。

ある日、彼女は休憩時間に研究者に呼び出されました。

その時はわたし達は特に何も思いませんでしたが、少しだけ嫌な予感がしていました。

そしてほぼ一日経ってようやく彼女は帰ってきました。

わたしは薄々感づいていたのです。わたし達量産型の思考に影響を与える存在である彼女は、排除されてしまうのではないかと。

彼女が帰ってきてその考えは間違いだつたと安心した私でしたが、その日を境に彼女から明るさが消えてしまったのを見て、それは再び確信に変わりました。

みんな、もちろんわたしも心配はしていたのです。つつけんどんな態度をとったりはしていたけど、ナターシャお姉ちゃんの事、わたし

もみんなも大好きでした。

でも、それから数日してお姉ちゃんはいなくなってしまうました。研究員の人に聞いてみると、他国の研究所にサンプルとして売られたとか。

そんなストレートな言葉でわたしに伝えたのは、きつとわたしが感情も心も無い人形だから安心、とでも思っていたからでしょう。

それからの日々は地獄そのものでした。

なんだか研究所の様子が変わり、これまでとはレベルの違う痛みを伴った実験が繰り返され、わたしの姉妹達は次々と帰らぬ人になりました。

でも、わたしはそれに耐え続けた。そう、全ては姉を追いやった研究者達に復讐するために。

わたしはくたばるわけにはいかなかったのです。

そして、最後の手術。まるでベルトコンベアーを流れる商品のようになわたし達は順番に手術室に入り、出てくる人はいません。わたしの番が来た時、姉妹と一緒に生き残ろうねと話した時、わたしは何を考えていたのでしょうか。それは、もう思い出せません。

「手術お疲れさまだった、3726番。君にはこれからロシア国民として暮らしてもらおう事に……」

そして、気が付けばわたしは、部屋で男の人と向かい合って二人きりでした。

その話の内容は、わたしが、わたしだけが手術で生き残った事と、わたしが今度行われるという火星に行くという計画に参加する事になった、というものでした。

だから、私は言ったのです。それに素直に従う条件を。

「一つだけお願いがあります」

「なんだね？ できる限りの事は叶えてあげよう」

「あの——の——を全員——してください」

それを聞いて一瞬固まった男の人でしたが、少し考えてから快諾してくれました。

そして私は確信を得たのです。こんな無茶な要求を呑むほどの価値が、私にはあるのだと。

最後に男の人は言いました。それは、私にとっては甘くもあり苦くもある記憶を思い起こさせるものです。

「君に名前をプレゼントしたいと思う。といっても慣れないものだろうから、我々の方で決めるといいう事になるが……」

そして、これだけは譲れないのです。

「———でお願いします」

「……？」

「わたしの名前はエリシア、です。どうぞよろしくお願いします、スミレス大統領」

「ひい、ひい、なんだありやあ……！ 完全にバケモンじゃねえか……

！ こんな話聞いてねえぞ！」

一人の男が、暗い部屋に身を隠していた。

地中からの突然の強襲。それは、自分達の別働隊がロシア班を奇襲した手口そのものだった。

意趣返しなのか、その手口をそのままそっくり返され、今度は防衛側である自分達が壊滅状態だ。

しかも、たった一人の少女によって。

彼は偶然部屋の隅でトランプをしていたので助かった。

だが、他の仲間達は。ある者は何か糸のようなものに触れた途端に

崩れ落ち、またある者は少女に触れられた途端に目から光が消えた。

最初はたかが女一人、簡単に始末できると思ってた次々と彼らは突撃していったのだが、その能力に気が付くのが遅すぎた。撤退を判断する頃には最初は28人いたその数は6人にまで減ってしまい、今更撃退できたところでこの前線基地を維持するのは不可能な状態に。

アネックス計画搭乗員のように教養のある軍人や優秀な民間人の割合が多いならともかく、彼らは地球では落ちこぼれや死刑を待つだけの存在だった人間達。一応最低限の技術者は『依頼人』から用意されていたのだが、ここに配備されていた貴重な彼らはもう全滅してしまった。

男はエリシアが侵入してきた穴から一番遠い場所に居たので逃げ果せる事ができたものの、ここを破られるのも時間の問題だ。

そして、今男が隠れているこの場所は倉庫。人為変態を行う為の『薬』こそいくらでもあるものの、彼のベースでは、あの悪魔のような生物に対抗できそうもなかった。

『アカウミガメ』。

偶然にもエリシアが偽装していたベースと同じ生物である。

「甲羅があるから味方の盾になれるんじゃないか？」という適当すぎる理由で選ばれたベースの彼は、恐らくはアネックス計画幹部であろう少女を倒せるなどとは思っていなかった。

恐らく侵入者の少女のベースはクラゲか何かだ。攻撃面で見られるものは何も無いこのベースに、あの糸、無数の触手を搔い潜って仕留められる可能性は無い。選抜された理由である甲羅は何の意味も無いだろう。

だがしかし、ここに食料はほとんど無い。ここにあるのは、この前線基地を作った時に使用した掘削機や対テラフォーマー用の近接武

器が少しあるだけだ。なぜ銃火器が置いてないのかと思った男だったが、テラフォーマーに奪われると面倒な事になるため、そもそも本部にもないという話を聞いたのを思い出し、素直に諦める。

もう自分が助からないのはわかりきっている。ひきこもっていてもいつかこの扉は開けられ、奴らが侵入してくるだろう。そうなれば、対抗する手段はない。

……本当じゃないのか？

どうせ死ぬなら、最後に一発賭けをしてみてもいいんじゃないだろうか？

自分はこれまで負け組の人生を続けてきた。ここ一番という賭けではないつも失敗し、気がつけばもう後戻りできない泥沼の中にいた。だからこそ、こんな場所にいるのだ。どうせ今回も失敗するのだから、最後に一発、やってやろう。

決起した彼は、倉庫にあったある物を手に取る。

さあ、人生最後の賭けといこうじゃないか。

「制圧終わり、でしょうか。皆さんを呼んで調査をお願いします」  
エリシアは部屋にいた連中をあらかた始末し、穴に戻って巻き込まれないように待機していた班員を呼び出そうとしていた。

と、その時。

「うおおおおお!!」

背後からの大声に、エリシアはびくつと体を震わせ、振り向く。

その目に映ったのは、時代遅れも時代遅れの武器、刀を持って自分に突撃してくる男の姿だった。

突然の攻撃に少し驚いたものの、素早く自分の専用装備を起動し、『キロネックス』の触手を展開する。

猪突猛進で突っ込んできた男の体は、当然のごとく触手の束に飲み込まれる。

体中を刺されれば、当然即死という状況。ほっと一息ついたエリシア。だが、直後、彼女は己の眼を疑った。

男が、触手に包まれながらも突撃してくるのだ。

アネックス計画搭乗員としてMO手術を受けた人間は、手術ベースの生物に関して学ぶ機会が与えられる。

自分の武器を知っておくのは、言うまでもなく重要だからだ。

他者とは違い自分のベース『ムカデミノウミウシ』だけでなく他の刺胞動物の能力を利用するエリシアは、当然ながらそれらの生物についても知識を得ている。どの生物がどのくらいの毒性を持ち、どのような症状がどのような時間で出るのか。

そして当然、それが通用しない生物に関しても。

だからエリシアは知っていたのだ。キロネックスの毒が通用しない生物を。

だが、半ばヤケクソで奇襲をかけてきた男のベースが偶然にもそれであると予想できるわけもないし、成功率0.3%の手術を潜り抜けてきたとはいえ、肉体自体はちよつと訳アリとはいえただの16歳の少女。動体視力もそこまで優れているわけではない。

遅かった。敵のベースを判断し、それに通用する生物を判断し、その毒を放つには。

突撃し、その無敵ともいえる触手の防衛戦を打ち破った、賭けに勝利した男は、とっさの防御姿勢をとったエリシアの肩口からその小さな左腕を切り離していた。

## 第10話 暗雲

自分でも何が起こったのかわからなかった。

最後に賭けをしてそれに負け、結局自分は不幸な男だと笑いながら死ぬことができればそれでよかった。

あの触れただけで地獄行きの触手に飛び込んだ後、どこまで自分はこの世に留まれるかな、と考えながらがむしやらに歩を進めていた。だけど、いつまで経つても最後の瞬間は訪れず、目の前には仲間達を葬り去った悪魔の様な少女が唾然としながらも焦った顔でこちらを眺めてくる。

だから思っただ、賭けは俺の勝ちだと。どうせこの後援軍が来て自分は殺されるだろうが、それもそれで満足だ。そう考え、どこか気持ちいい感覚の中でその手に持った刃を振り下ろした。

「…………めんなさい。でも、わたしも退くわけにはいかないの」

腕を切り落とされるといふ苦痛に耐え、ぼろぼろと涙をこぼしながらも、エリシアは男の首を右腕で掴む。

その直後、刀を振り上げ再び攻撃を加えようとした男は苦痛に身をよじった。

エリシアが触れた箇所が赤く染まり、見るからに痛々しいものへと姿を変える。

「うぐう…………アアアアアア!!」

その身に擦りこまれた毒素は、海を彩る美しい宝石の仲間のものであった。

おそらくは多くの人間が知っているであろうサンゴ。

だがしかし、サンゴとはどんな生物で、あの植物状のものは一体何なのか説明できる者はそう多くはないだろう。

かの生物を植物の仲間だと思っっている人間も多い。だがその正体は、クラゲやイソギンチャクと同じ刺胞動物の仲間である。あの植物

状の体も、ポリプやヒドロ虫と呼ばれる小型の刺胞動物の群によって形成された住居のようなものだ。

その美しい造形は古くから宝石の一つとして扱われ高値で取引されてきた。

だが、そんなサンゴの一部の種類は、人間に害を為すまでに強まった毒を有している。

エリシアが有しているのも、そのサンゴの近縁種の中で最も強い毒を持つと言われている種類の一つ、『アナサンゴモドキ』である。

巧みに他の無害なサンゴの間に潜み、何も知らぬ人間が触れようものなら、その異名のとおり焼かれたような強烈な痛みが走る毒の刺胞を打ち込む暗殺者のような存在だ。

その痛みの強さから『火のサンゴ』ファイヤーコーラルと呼ばれ恐れられている。

海の中で美しい物を見つけても、不用意に触れてはならない。大自らの造形、それは時に人に牙を剥く時があるのだから。

「……大丈夫ですよ、死にはしませんから」

地に倒れ転げ回っている男を見下ろし、エリシアは告げる。

だが、男は諦めてもいないし聞いてもいないようだった。身を刺すような痛みをなんとか耐え、落ちている刀を拾いに向かおうとする。

しかしこの状況でエリシアがそれを許すわけもなく。

無情にも彼がエリシアにダメージを与え得る唯一の武器は蹴り飛ばされ、彼の手の届かない場所まで滑っていった。その彼が求めて這いずって行った刀の場所には、代わりにしやがみ込んで彼の顔をじつと見るエリシアの姿。

そして、彼はさらなる絶望を突き付けられる事になる。

「これ、するときにはちよつと痛いんですよ」

少し不満そうに頬を膨らませ、エリシアが肩にできた痛ましい切断の後を撫でる。

すると、男が賭けに勝利した証、切り落とした左腕が、肩口の傷から延長され、瞬く間に元の姿を取り戻した。



軟体動物の比較的多くの種類に見られる特性、再生能力だ。この時点で、彼はエリシアのベースがクラゲではないとなんとなしに考えた。たとえ真のベースがなんなのかわかったところで何ができるといっわけでもないのだが。

「ははっ……結局賭けには負けちまったか……でも無駄になったとはいえアネックスの化物幹部サマに一発入れられたんだ、地獄でいい土産話ができたぜ、さあ、殺してくれ。正直かなり苦しいんだ」

諦め、少し慣れてきた痛みを感じながら、男は弱り切っているのか小さな声で目の前のエリシアに話しかける。

「何言ってるんですか、殺したりしませんよ。あなたは捕虜にします」  
「……はい？」

言っている意味がわからず、困惑する男だったが、数秒してからその意味を理解し、かくんと頭を垂れた。

「ちなみに舌を噛み切ろうとか切腹しようとか考えたら、色々混ぜた毒を入れて黙らせませす」

「お嬢ちゃん、俺が刀持ってるから誤解してるんだらうけど、舌を噛み切って死ぬほど意志も強くないし、別に俺はサムライじゃないから切腹はしないんだよ」

「なんと」

心底驚いた様子を見せるエリシア。彼女はロシア国民として暮らすようになってから一般的な常識なども勉強していたのだが、その辺りの知識は偏ったものしか持っていないようだった。

「おーい班長、大丈夫か……ってなんじゃこりゃあ!？」

「なんか生きてるな、この亀野郎」

静かになったのを確認した班員達が突入穴から顔を出している。

それを見て、エリシアはのんびりと報告を始めた。

思いの他強い力で倒れている男を引きずりながら。

ロシア班、現在16+1名。

——同時刻

「うーん、本当に何にもないなあ……」

動くものがない火星の空を、低空飛行で飛ぶ影が一つあった。

裏アネックス計画日本第2班、偵察部隊の静香だ。

俊輝や拓也と違い飛ぶ事のできる生物が、正確にはMO手術ベースになっても飛行能力を残している生物がベースである彼女は、遮蔽物の無いこの火星の空を飛びまわって情報を集めていた。

「しつかしまあ敵さんの施設はそう簡単に見つからないだろうけど、テラフォーマーの一匹もないなんて……」

これまで15分間の偵察で、空はおろか地上にすら生き物の気配が見えない。

この辺りはテラフォーマーの少ない地域だとは聞いていたが、まさかこれほどとは。

敵の戦力がアネックス1号に集中しているからなのだろうか。

「いやはや……これは一旦帰って二人に報告した方がいいのかな」

踵を返して帰還しようと思った静香だったが、視界に銀色の何か小さく映ったのを感じ、振り返る。

確かに、銀色の、人工物のような物が小さく見えている。恐らく少し遠くにあるのだろう。

敵なのか味方なのかわからないが、とりあえず確認だけはしてみようとしてそれに近づき、その全容を拝んだ。

そこにあつたのは、一隻の宇宙艦だった。

自分達日本班のロケットと同型の、裏アネックス計画用小型高速のそれだ。

機体側面には5、という数字が描かれている。

「第五班……ドイツだっけ」

仲間を見つけた。それはこの各班独立した状況で非常に喜ばしい事で、勿論静香はそれにさらに近づこうとしたのだが、とある事に気付いてその羽を止めてしまう。

宇宙艦の足元に、艦を取り囲むように巨大な水たまりのような何かできていた。

それが本当に水たまりなら、ただ単に不時着した場所が水たまりだったというだけで済んだだろう。

しかし、その水たまりは、ぐにやぐにやと脈動していた。

どちらかという水というよりも、スライムのような粘性の高い何かに見える。

その不気味な姿に、静香は動く事もできずに見つめていた。

だが、その停止した時間も長くは続かなかった。

「うあつ……くう、何コレっ……!？」

突然の頭痛、そして目の痛みで視界が不鮮明になる。

不自然な体調不良。そして、空気の流れが変わったのも静香はその痛む頭を抱えながらも見逃さなかった。

自分とは逆の方向から、空を飛ぶ団体が宇宙艦に接近してくる。それはテラフォーマーではなく、人間のように見えた。恐らくは自分では無く宇宙艦を狙っているのだろう、とすばやく判断し、発見されないように静香は宇宙艦から離れながらも半分反射的に高度を落とす。

その次の瞬間だった。水たまりの一部がプロミネンスのように噴き上がり、静香の頭上を通過した。乱れて立っていた前髪の一部がそれにかすり、凍りつくような恐怖心を与える。

あとコンマ一秒でも遅ければ、あれに飲み込まれていただろう。頭痛は治まらず、ある程度離れていてもあの水たまりのような何かは自分を探知している様子でその一部をこちらに向けているが、しばらく離れると興味を失ったように元の宇宙艦近くへと縮んでいった。

怖い物見たさも一部あり、離脱しながら宇宙艦の方を見た静香。そこには、地獄が広がっていた。

宇宙艦に近づいていく鳥類ベースの集団。だが、一定の距離まで近づいたところでその体がぐらついたように見える。飛行不能、という程ではないが明らかに動きが鈍っている様子だ。そこを好機とばかりに水たまりの一部分が噴き上がり、それを飲み込んでいく。流石にそこから先は完全には見えなかったが、水たまりの中で苦しむ様子や、地面に叩きつけられ全身の骨がさようならしてしまっているだろうな、という様子が少しだけ映った。

早く、少しでも早くここから離れて、二人にこの事を伝えなくては。テラフォーマー以外の宇宙生物がいる、その事を。

焦る静香。だが、再びその翼は空中で止まってしまふ。彼女の顔に現われたのは、困惑の色だった。

「あれ……？ 私、どっちから来たんだっけ……？」

## 第11話 Biosafety Level

「ク……ソが……」

「痛え……痛えよお……」

静香があの場合を去って数分後、そこには凄惨な光景が広がっていた。

謎の水たまりはすでに姿を消しており、そこに残されているのは、翼をもがれて苦痛に叫び苦しむ鳥たちの集団。あるものはその変態した翼ごと腕をへし折られうめきながら動けず倒れており、またある者は地面に思い切り叩きつけられた衝撃で要所の骨が砕け絶命している。

おびただしい量の血が流れ出し火星の大地を染め、飛び散った肉塊がそれを彩る、まさに地獄の様相であった。

そんな光景の中で、ただ一人だけ平然とその場に立っている人間がいた。

中年くらいの男だ。研究者、というイメージをそのまま反映したかのような丸眼鏡とやせ気味の体、U—N—S—A配給のスーツを身に纏う事もせずに白衣を着ている。

「ふむ、これほどまでに大規模な展開は初めてしてみたが、なるほど、悪くない」

薬剤を注入され苦しむモルモットを観察する研究者か何かのように、実際にその男は研究者なのだが、とにかくその男は無表情でそれを見つめていた。

それ以外の存在はこの場には無く、宇宙艦の入り口は固く閉じられている。

ただ一つ確かに言えることは、正常な人間はこの場には存在しないという事だ。

男はしばらく観察を続けた後、興味を失ったかのように背を向け、宇宙艦の入り口を叩く。

その動作はまるで知り合いの家を尋ねるような軽いもので、だがしかしそれに対応して宇宙艦の扉が開く事はなかった。

「……おつといけない、忘れていたよ。君達、まだ出てこないでくれ」  
少しだけ思考を巡らせた後、男は宇宙艦の内部に向かって呼びかける。本来ならその声は聞こえるはずはないのだが、着陸後宇宙艦外部に取りつけられたマイクとスピーカーが内部の人間との意思疎通を可能にしていた。

「マジでその冗談やめてください、ヨーゼフ博士……俺達まだ死にたくないですよ……」

「すまないね」

無表情のまま申し訳ないというそぶりも見せず謝った男、ドイツ・南米第5班班長、ヨーゼフ。

そんなヨーゼフに、近づく影が一つ。

いくつもの骨を砕かれながら、怒り怨みと根性だけで再び立ちあがり、今まさに復讐を果たそうとしている襲撃者の一人だ。

彼はその身を包む怒りと鈍る体、何故か頻発する肉体と精神の異常でまともな思考能力を失っていたが、それでも立ちあがっていた。もう手柄などどうでもいい。地球に帰られる可能性などどうでもいい。仲間達の仇をとるため、少しでも後続の負担を減らすため、ここでこの化物を討ち取る。今なら背を向けている奴に一撃くらわせる事ができるだろう。

相手は変態を解いている状態だし、ここで仕留められるはずだ。

彼は一步一步、ヨーゼフに歩み寄って行く。近づくとたびに強まる頭痛や体中を駆け巡る痛み。

だが、もはや根性だけで歩いている彼にそんな事は関係なかった。

あと数歩。ここで彼は最後の力を振り絞り、駆け出す。

己のベースとなっている生物である猛禽類の強靱な握力で、その頭

を握りつぶし、死んだ仲間の仇をとり、生きている仲間の安全を確保する。

「……そこで大人しく寝ていれば、恐らくこの場だけは凌げただろう」突然、自分が襲いかかっている相手が言葉を発し、背を向けたまま頭だけ振り向いた。

しかし、彼は止まらない。今更止めて何になるのか。捕虜の屈辱を受けろというのか。

だったら、このまま突っ込んだ方がましだ。

「仲間を庇い、死んだ仲間の為に立ちあがり、己を犠牲にしても戦果を待つ仲間を安心させようとする、そう、君は主人公みたいな奴だな。さつきだって、ふらついた仲間を庇わなかったら、私から逃げ切れただろう？」

目の前の無表情な科学者が何かを言っている。そんな事はもうどうでもいい。それに、長時間この地帯に留まっていた事により、すでに彼の感覚器はいくつかが機能不全を起こし、靄がかかっているかのように聞こえない。

「きつとあの子が生きていたのならこんな時にも『捕虜として生かしてあげましょう！』などと言うのだろうか」

あと一步、あと数十センチ。そこで、目の前の科学者の姿が変わる。背中の形が不気味に歪み、沸き立つかのように不定形へと変化してその質量を増していく。それとほぼ同時に彼が振りかざした手は巨大なスライム状の何かに絡め取られ動かせなくなった。足もまた同様だ。

「すまないね、私はあの子のように優しくはないんだ」

彼が最後に見たのは、ようやくこちらに体を向け、背中から巨大なスライム状の何かを展開しながら無表情で自分を見つめる科学者の姿だった。

「終わりましたか、博士」

戦闘を終え佇むヨーゼフに、何者かが声をかける。その声は、宇宙

艦付近の地中から聞こえてきていた。

「どうやらその声はドイツ班の一員のようで、ヨーゼフも警戒などはせず普通に話している。」

「ああ、もう散布も止めたし出した分も大気に散って行っただろう、大丈夫だよ」

「ではご報告を。偵察の結果、小山を加工したサイズの大規模な基地が発見されました。班員に準備を整えさせ、攻撃を命じるべきかと」

「いや、大丈夫だよ」

「……と、申しますと?」

それからも少し会話が交わされ、両者は情報を交換しあい、宇宙艦の内部とも通信して今後の目標を話しあった。そしてついに、敵基地攻撃作戦が敢行されたのである。

U—N A S A 2619年某月某日

「くうく、今日の仕事は疲れたなあ、劉さんよ」

一日の業務を終えたアネックス1号艦長、小町小吉はのびをしながら宿泊施設へと向かっていた。

その隣を歩くのは、長身の中年男性。アネックス計画中国班班長、劉である。

二人はU—N A S Aの研究棟を通り抜け、次の区画に進もうとしていた。

そこで、二人は足を止める。そこは、研究棟の中にあるアネックス計画搭乗員の訓練施設。その中でも最も厳重な警戒態勢が敷かれているクローンのテラフォーマーとの実戦戦闘訓練を行う設備の照明が、点いていたのだ。

二人はその戦闘訓練室の上階、何重もの層で固められた強化ガラスで守られた客席へと移動する。



この時間はアネックス計画の『戦闘要員』は業務を終え、帰途についている。

この棟で勤務している研究員は徹夜の日々で大変だという話を聞いて同情する小吉である。

幹部である小吉と劉ですら業務を終えたのだ。一般の戦闘要員はもう残っていない事だろう。

だとしたら、この施設が稼働している今のこの状況は。

何らかのトラブルにより、クローンのテラフォーマーが訓練の相手もないのに出てしまった事が考えられる。

二人の懸念通り、さまざまな種のベース生物を持った人間が訓練を行えるようになり広く作られた訓練室の中には、十数体のテラフォーマーが放たれていた。

そして、もうひとつの考えられる可能性。それは。

「ああ、そういえばこの人、一応戦闘要員扱いじゃないんだっただね」

「ストレス解消でもしてんのかな？」

アネックス計画に参加する『研究員』がこの戦闘用施設を利用しているというものだ。

一体のテラフォーマーの動きが止まる。喉を何かストローのようなもので貫かれたからだ。

テラフォーマーには仲間意識というものは存在しない。だがしかし、目の前に本能的に嫌う存在にんげんが現れば、すぐにでも殺しにかかるのだ。

喉を貫かれ絶命したテラフォーマーの背後から、一人の人間が姿を見せる。

痩せ型の少し頼りない体型に、丸眼鏡と白衣。すでに変態を終えているのか、そのテラフォーマーを屠ったストローのようなものが二本、左腕から生えている。

小吉はその姿を見て、自分の鞆の中からある資料を取り出す。

「ん？ 艦長、それなんですか？」

劉が小吉を見て疑問を投げかける。

「ああ、名簿表だよ、アネックス裏表の」

小吉がぺらぺらとページをめくり、あるページを開く。

そこは、『裏アネックス計画』の幹部のページだった。

ヨーゼフ・ベルトルト MO手術ベース：アメーバ動物型  
ネグレリア・フォーレリ  
『増殖する悪夢』

「おや、あの人のプロフィールとベースですか。ネグレリア・フォーレリ？ 聞きなれないなあ」

眼前でテラフォーマーと対峙する男、ヨーゼフと小吉の持った資料を交互に見て、劉は顎に手を当てる。

「ふっ、劉さんよ、俺はちゃんと幹部のベースに関して勉強してきたのだよー！」

「ご教授願えますか」

「モチのロンだ！」

劉の反応に満足げに頷き、小吉は恐らく本を読んでそのまま暗記してきたであろう内容を劉に話す。

そんなさ中、訓練場では大きく状況が変化していた。

ヨーゼフの右腕が変形し、スライムの様な半固体の形状になっている。

それはテラフォーマーの頭を丸ごと包み込み、それを握り潰した。そして次々と襲いかかる後続のテラフォーマーだったが、どこか様子がおかしい。

足腰もおぼつかないし、どこか反応が鈍くなっている。

それを次々と変形した右腕で喰らうヨーゼフ。

「あー、ひとつ質問いいですか、艦長」

「なんだ？」

「なんか完全にあの人、人外っぽい姿になっているんですが、MO手

術ってあんなに体が変化するもんなんですか？」

今は隠しているが、『ヒョウモンダコ』をベースに持つ劉は、変態すると触腕が3本生えてくる。

そんな大きな変化をする劉ですら、目の前の光景は奇異なものに見えていたのだ。

劉の触腕は後付けで生えてくるものだ。だが、ヨーゼフのそれは明らかに元々あった右腕という部位が異形のものに変質している。そんな事が可能なのだろうか。

ネグレリア・フォーレリ。人間の体内に入り込みさまざまな障害を引き起こし、最終的には脳で急激に増殖してそれを喰らい尽くしほぼ確実に死に至らしめる恐怖のアメーバ。恐らく右腕の変質はアメーバのそれなのだろうが、正直言っただけかなり不気味だ。

「あー。劉さんも説明されてないパターンかあ……」

「？」

小吉の、何故か安心したかのようなため息に不思議そうな顔をする劉。

「どうやら裏の方の幹部が受けてる手術って特別らしくてさ」

「ああ、それは知ってます」

「いや、俺もそれだけは知ってたけど、それがどんな手術なのか詳細は知らなかったんだよ」

テラフォーマーを全て始末し、部屋を出て行くヨーゼフを背景に、小吉は話を続ける。

「どうやらその手術、メツチャ成功率低い代わりに、かなりベースの生物との親和性が高いみたいなんだ」

ベースの生物との親和性。それは、ベースの生物の能力をどこまで使いこなせるかに影響してくる。

簡単に言えば、もう一つの手術、小吉がまだその名を知らないαM O手術は、普通に変態しただけでも普通のMO手術で言う過剰摂取に近い力を出すことができるのだ。

「へえ。今度うちの裏の方にも聞いてみましょうか……ッ！ すいません艦長、僕先に帰りますんで！」

話をしている途中で突然弾かれたかのように立ちあがり、早足で部屋を去っていく劉。

それを唾然とした様子で見守ることしかできなかった小吉は、背後の気配に気がつき、そしてその人物の発言を聞き、劉の行動を理解した。

「これはこれは、艦長ではないか。……ふむ、この本は……世界の危険な微生物、か。よろしい、私がネグレリアでもなんでもゆつくりと解説してさしあげよう」

もうこれは逃げることはできない、睡眠時間はほぼナシだと悟った小吉は、小さな声で呟いていた。

「劉さん、ホント判断早いよねー」

## 第12話 Biosafety Level 2

——日本班第二班 宇宙艦

「フッ！」

テラフォーマーの頭部が、強靱なトビキバアリの筋力によって砕かれる。

背後から近づいたテラフォーマーも自身の20倍の距離を跳躍する脚力から繰り出される廻し蹴りによって喉を抉り取られ、無表情のまま崩れ落ちる。

そして、捕食者の足元には、現在交戦している数より数倍のテラフォーマーの死骸が転がっていた。

周りに味方無く、この場に立つ人間はただ一人だけ。

トビキバアリ。アリ最大の武器である『数』を使わずただ独りで敵を屠る孤高の狩人。

それをベースに持つ男、日本第2班班長、島原剛大<sup>じょうだい</sup>。

黒の大群が襲いかかり、直後にはもの言わぬ屍に姿を変える。この地獄絵図を、彼はたった一人で作り上げていた。裏アネックス計画の幹部搭乗員<sup>オブリイサー</sup>総じて一対多数に適した能力を持ち、だからこそ最上位ランカーとしての名を欲しいままにしている。それに例外は一つあるが三位以上は広域の制圧を可能とするベースを持ち、それこそが最上位ランカーの証とされる。

五位以下にも限定的ながら専用装備などの力を借りてそれを行える人間が存在しており、範囲攻撃という要素がランキングに大きな影響を与えている事は間違いない。

だが、トビキバアリは強力な範囲攻撃を持っていないければ、一対多数の能力も持っていない。

そこにあるのは、強靱な二本の顎と致死性の毒、高い視力に脚力と、ただ総合的に優れた圧倒的なタイムン性能のみ。

テラフォーマーの死骸はますます増え、大地を黒色と体液の色に染めて行く。

「1匹いれば30匹いるというが……最初に来たのが30匹ほどだったからあと900匹はいるのかな?」

軽い冗談を交えながらもその動きは機敏で鋭い。疲れを知らぬその体、剛大が一度は失い、97.7%の死を乗り越えて取り戻したものの。

続々とやってくるテラフォーマーを剛大は静かに見つめていた。

それは、テラフォーマーに対する恐れでなく。怒りでなく。かと言って軽蔑ですらなかった。

「……きつと今の俺の心境を知ったら、班員の連中は幻滅するだろうな」

心に少しだけ映る寂しさを振り払い、剛大は一步踏み出す。

その顔には、顔だけには何の色も映ってはいなかった。

「……ん? なんだありゃ」

一方こちら日本班別働隊。俊輝達の他にもう一つ結成された偵察部隊であり、戦闘力にも優れている。

そこに所属する俊輝の友人、見るからに節操の無い俗に言うチャラ男と言われる人種の男、健悟である。

その健悟は空を見上げていた。何やら、無数の黒い点が見えるからだ。そしてそれは、次第に大きくなっていつていつて見えるようになる。

その中でも一つ、急激に近づいてくるものがあつた、銀色の何かだ。

「んー、健悟、美晴、あれ、なんだかわかるか」

大柄な男が二人に空を指差して話しかけた。

同じ偵察班の美晴と呼ばれた少女が何やら怪しい雰囲気を感じ取ったのか、薬を使い変態し、空を見上げる。

そして、一秒と経たずして悲鳴を上げた。

「あれ、燃料の匂いがする! ……ここにいるとまずいよ、逃げよう!」  
にわかには信じ難かった、だが、最悪の事態が頭をよぎる。

逃げようにも逃げる場所が無い。だから、大柄な男は二人を体の下に庇い、自分の体で盾をするかのようにして攻撃に備えた。

その予想を証明するかのようにその銀色の物体、明らかに機械であるそれは着弾し、周囲を火の海に変える。

「焼夷弾、だと……アイツら、あんなものまで……」

庇われたまま健悟が顔を歪ませるが、攻撃はそれだけでは終わらなかった。

数人の鳥類型と思われる人間が着地し、嫌みな顔で三人を見ている。

「おっ、こいつら間違いないぜ、日本のランカー様だ」

「このデカブツは動けねえし、やっちまええ！」

背中にモロに爆風と高熱を浴び、動かない大柄な男。

その下から這い出るのは、チャラ男と少女。どう考えても戦闘向きには見えない。

「諦めて死んでくれよお！ お前らを殺したらボーナスが出るんだからよお！」

一人が駆け出して猛然と襲いかかって来る。だが、健悟は落ち着いていた。

この相手の素早さでは変態する前に首を折られるだろう。だから、健悟は別の方法をとる。

「わりいタケシ、ちよっち任せた」

高熱をもろに浴びたはずのタケシと呼ばれた大柄な男の腕が、つっこんできた鳥類ベースの男の首を的確に捉えたラリアットを繰り出し、それを吹き飛ばす。

「うそ……だろ……？」

驚きで目を見開いたまま地面に叩きつけられ気絶する男。その驚きの原因は、タケシにあった。

日本第2班班員、熊崎 武<sup>たけし</sup>。MO手術ベース『トゲクマムシ』裏マーズランキング：17位

不死身の生物、と聞いてどのようなものを思い浮かべるだろうか。物語に登場する巨大な怪物のようなものを思い浮かべる人が多いのではないか。

しかし、現実で不死身の生物は、人間の目にも見えぬサイズで、だが確かに存在する。

高熱、極低温、放射線、あらゆる悪環境に耐え抜き、生存する。

己の体を休眠状態にし、長い時間を耐え抜くその姿は、しばし『無敵の生物』として紹介される。

だが、そんなクマムシにも欠点があった。それは、物理的な手段ではあつさり死を迎えるという事だ。

しかし、それは肉眼で確認できないサイズでの話。

MO手術ベースとして、2m近い巨体として生まれ変わったこの生命を止める事などできない。

全身を頑丈なクチクラに覆われたその肉体は、ただ存在しているだけで武器となる。

しかし、吹き飛ばされた男の疑問点はそこではなかった。

クマムシが環境に耐えるために変化する形態は、長い時間をかけてゆっくりと変化する事が必要だった。

強襲したのだから、そんな時間はなかったはず。しかも、それを解除して活動状態に戻るためにも時間が必要。なぜ、その時間を無視して動く事ができたのか。

予想だにしなかった自体に怯える敵。タネを明かせば簡単な、しかし卑怯な手なのである。

『SYSTEM・N PROTO』。それが彼の専用装備である。

ドイツへの技術協力の見返りとしてヨーゼフから贈られた、彼の専用装備のプロトタイプである。

それは、使用者のベース生物が一生の内にとる形態を、複数同時に、



そして迅速に体の別々の箇所が発現させる事ができる装置である。

例をあげれば、成虫になると毒性が失われる蛾のベースがあつた場合、飛行能力という成虫の力を使いつつ毒という幼虫の能力を発動できる。ベースを選ぶが、強力な装備なのである。

これを使い武は自分が爆風や熱を被る部分だけを休眠状態にし、すぐに解除できる状態にしていたのだ。

慌てて逃げ出そうとする敵の残り二人だったが、ほぼ同時に翼を二本の大槍で貫かれ、地に落ちる。

「おいおい、ゆっくりしていけよ。俺達がお・も・て・な・ししてやるぜ?」

数でこそあまり開きはないものの、実力差は歴然。二人に許された時間は、ごくわずかだった。

???

地下に掘られたトンネルを二人の男が進んでいる。

一人は白衣の科学者、ドイツ・南米第5班班長、ヨーゼフ。もう一人はU—N—A—S—Aの宇宙服に身を包んだ生真面目そうな青年である。

「博士、本当によろしいのですか?」

「ああ、問題無いよ、ダニエル君」

ダニエルと呼ばれた青年が心配そうにヨーゼフに問いかけるが、ヨーゼフはそれをぼつさりと切り捨てる。

それからしばらく会話は無かったのだが、あまりに長いトンネルにしばれを切らし、再びダニエルが話しかける。

「僕、研究者になりたくて、必死で勉強してたんですよ。立派な研究者になるアドバイザー、してくれませんか?」

それを聞き、ヨーゼフは苦笑する。立派な科学者。自分が立派とは言えない存在なのに、それになるアドバイザーをしろというのか。だが、話す事のできる話はあつたな、とヨーゼフはこれまでで忘れた事のない話を頭に浮かべていた。

「私の知っている男の話をしようか」

その男はとても優秀で、その頭脳をこの世界の未来のために使いたい、と考えていた。

妻と子にも恵まれ、とても幸せな人間だったよ。

好みで行っていた個人的な研究をやめ、家族を養うためにドイツの有名な研究所に入り、そこでも男はみるみる内に頭角を現わしていった。同僚の研究者達もその男を嫉妬と羨望の混じった目で見ていたよ。

そんなある日だ。とある一大プロジェクトが発表され、そのプロジェクト内容であるとあるものの開発、その主任に男は抜擢された。

その開発は前身となる技術があり、その開発チームが再び中心となつて行う事になっていたのだが、男はその前身となる技術の開発チームを押しつけて主任に選ばれたのだ。名誉な事だろう。

まずは人間に使用するその技術の適性検査のため、各国からサンプルとして貧しい子ども達がい取られてきた。まあその子達のためにプチ孤児院みたいなものを作ったんだ。

次に最新鋭の設備が与えられた。スタッフにも恵まれ、研究は調子良く進むと思われていたよ。

だが、作業は難航した。手掛かりはつかめず、優秀なスタッフは矢継ぎ早な研究に疲弊し力を出せず、男にとっては少しだけ困った日々だった。

そしてある日、男は大きく変わる事になる。

いつものように疲れを見せる開発チーム達を励ましながら仕事をしていた男は、職員に電話が来ています、と伝えられた。男の妻は心配性だったからね、よく電話をかけてきてたのだよ。男もそれに幸せを感じていたのさ。だが、電話口から語られたのは、愛しの妻の声ではなく、その妻と娘の死の報告だったよ。

とある不治の病にかかり精神が衰弱した男による犯行。妻と子を

手にかけて後すぐ犯人は自殺。

幸せなんて続かないものだね、そう思うだろう？

男は一気に絶望に叩き落とされたよ。愛する者を失い、研究は進まない。

だが、男はある事を知ったんだ。自分の研究は、その不治の病の治療に関係していると。

そこから、歯車が狂いだした。

もう二度と自分のような思いをする人が出てきて欲しくない。この病に苦しむ子ども達の未来を守りたい。男は研究に没頭し始めた。他の研究所の資金を横取りし、自分に反対する人間を次々と排除して。国家の一大プロジェクトの主任には、それだけの権力が与えられていたのさ。

そして、その手は子ども達にも及んだ。一秒でも早く研究を完成させるために。凄惨な人体実験を繰り返し、まるで消耗品を買い足す主婦のように男は海外に出向き、貧しい子どもを買い取って連れてきた。

その子ども達も当然、実験材料さ。

そしてその歪んだ努力は功を奏し、研究はついに完成した。

そして、男も少しづつ正気を取り戻していった。

気が付いたら、男は守ると誓った未来の屍の山に立っていたのだよ。滑稽だとは思わんかね？

そして男は、せめてもの償いとばかりに、そのあまりにも成功確率の低い手術を自分の身に施した。

皆は成功率の事など知らず、男の事をただ単に研究に没頭して狂った科学者だと思っただろうな。

でも、男はそこで死にたかつたんだ。償うため、

過去を清算するために

だが、手術はあっさり成功、男は許される事はなかった。

そして、男が積み重ねてきた罪の報いはすぐに降りかかったよ。

人体実験の罪、多額の予算の不法使用、その他、身に覚えが無いモノの数々。

全てを背負った男に下された判決は死刑。当然の結果さ。男は何十という命を弄んだんだから。

正直男はほつとしていたよ。これでようやく死ぬる、とね。

牢獄の中でも静かに最後の時を待っていた、でも、

「博士、つきましたよ」

話がいいところで途切れてしまっていて、正直なところ続きが気になつていたダニエルだが、目的地に着いた以上話を続けてもらおうわけにはいかない。

「ああ、ありがとう。では、行つてくるよ」

ヨーゼフは一人歩き、その先へと向かう。

それを見送り、姿が見えなくなったのを確認して帰って行くダニエル。

そのトンネルは、火星の小山の中に続いていた。

## 第13話 Biosafety Level 3

「第一通路、異常なし」

「第二通路、異常なし」

「武器庫、異常なし」

岩に囲まれた大広間で、無数の通信機がその業務を果たしていた。続々と報告される『異常なし』。それを満足げに聞くのは、占い師風の怪しいローブに身を包んだ黒人の男。

アントニー・ウエリントン

裏マーズランキング：未定

強固な甲殻とMO手術ベース特有の武器として尾の部分を転用した剣を持つ『アメリカカブトガニ』をベースに持つ、『裏切り者』の幹部の一人。

この火星の司令基地の一つを任せられた男にして、かつてUINAS Aの職員だった男。

そんな彼は、火星の小山を掘りだして作った巨大な要塞の指令室で悠然と椅子に座っていた。

現在も大きな問題は無い。あるとすれば、ドイツ班の襲撃を命じた鳥類ベースの部隊からの連絡が途切れた事くらいだ。

「……見える、かの男が捉えられ、我々の兵器として利用されているのが」

懐から取り出した水晶玉をのぞき込み、なにやらぶつぶつと話しかけている様子に、周囲で護衛をしている部下達は何も言えない。

「さあ、攻撃部隊からの報告を待とう。そして、万が一侵入者が現われたところで、この城を崩す事など不可能。我々は安全な所から祈っていればいい」

アントニーの言葉に間違いなどなかった。この基地は、無数のMO手術を受けた部隊で強固に防衛され、多数設置された監視カメラは侵入者の姿を逃がさない。攻略しようと思えば、裏アネックス計画の精

銃部隊でも大きな被害を出す事になるだろう。

自分達の持つ力の意味をよく理解しているアントニーと部下達は、そこから動く事なく静かに動向を見ていた。

「あーあ、それにしても人使い荒いよな。どうせ敵なんて来るわけないんだから適当にサボろうぜ」

「ここに攻め込んでくる奴なんてよっほどの死にたがりか狂人だよな」

岩をくりぬいた通路を、『裏切り者』の二人の男が哨戒のため歩いていた。

巧妙に山に隠れたこの基地が発見される可能性は低い。だがしかし、この基地は非常に広く、警戒に多くの人員を割く必要があった。内部も複雑で、その全容を知る人間はそういない。自分の警備範囲を知っておくのが関の山だ。

この二人もそうで、ひたすら薄暗い通路を往復するのに飽き、壁にもたれて座りこんでいた。

「……ん？なんだこりゃ」

一人が首をかしげる。ふと目を上げた天井に、何やら透明な液体のようなものが流れていたからだ。

奇妙な光景だったが、それは自分が飲んだ酒のせいだ、と無理やり納得し、再び目線を落とす。

団欒している二人は、全く気がつかなかった。その透明な液体が集結し、監視カメラを包み込んでそのまま圧壊させた事に。

「うわっ、冷たっ！」

足元を、粘性の強い水のような何かが流れている。それに気がついた一人が、異常を報告した。

それは設置された通信システムによってすぐに報告される事になった。

だが、返ってきた答えは、『タンクから水漏れしているんだろうから直してこい』。

面倒だな、と思いながらも通路を進み、飲料水用のタンクの整備に向かおうとしていた『裏切り者』の一人は、奇妙な事態に陥っていた。自分の仕事は、このあたり一帯の通路の警備と施設設備の整備。だというのに、飲料水用タンクの位置が、わからない。

どの通路を曲がればいいのか、どこの階段を上って行けばいいのか、記憶が頭から抜け落ちてきている。

しかも頭痛までしてきた。働き過ぎなのだろうか。一旦医務室に行った方がいいのだろうか。

踵を返し、医務室に向かおうとする。だが。

「……あれ?」

その記憶から、医務室の位置はすでに消えていた。

「あれ、お前、なんでこんな所にいるんだ?」

「いやいや、お前こそ。ここは俺の担当場だぜ?」

「なあ、武器庫ってどっちだっけ」

「そこを左に……右だったか?」

「おい、水漏れしてるぞ! しかも監視カメラが故障してる!」

「修理器具もってこい!」

「どこにあるんだそれはよお!」

「あ? 俺が知るわけねえだろうが!」

基地のあらゆる所で、混乱が起こっていた。

ある者は他者の持ち場に迷い込み、またある者は頭痛や吐き気などの体調不良を訴え医務室へと向かう。

だが、その医務室の位置がわからない。

これだけなら、集団食中毒だのなんだので済んだのかもしれない。だがしかし、今は状況が違っていた。

監視カメラが、次々と壊されている。

そして、混乱の渦に巻き込まれ、冷静な思考能力を失っている『裏切り者』達に足元や天井を這う謎の液体を気にかける、などという事

ができるわけもなく。

「お前ら！ 何やってやがるんだ！」

次々と監視カメラが壊れていくという異常な状況に、指令室のアントニーから怒号が浴びせられる。

だが、理解を超えた状況に直面して混乱と怒りに満ちている部下達はそれを無視したり怒鳴り返したりと、もうすでにそれは組織の体を成してはいなかった。

「……恐らくヤツが来やがったな」

指令室でも、不安を感じた数人が騒ぎ出す。だが、アントニーはあくまで冷静だった。

これは敵襲に違いはない。しかも、自分が狙っていた大物だ。

ローブの奥で笑みを浮かべるアントニー。

指令室にいる部下達は、その笑みを見る事こそできなかったが、自信に溢れる自分達のリーダーを見て、少しだけ落ち着きを取り戻していた。

「全員、落ち着けエ！ ひとまずは自分の持ち場を離れるな。怪しい奴がいたらすぐに報告するんだ！」

アントニーは少しの違和感を感じていた。普通なら、侵入者は自分の近くの監視カメラを破壊するし、そもそも遠くのものではできないだろう。だが、今回は違った。全く繋がり無い場所の監視カメラが、ランダムに破壊されていく。1階中央部のものが破壊されたと思ったら、次は2階西端のものだ。

敵は一体、どこにいるのだろうか。侵入者が複数という可能性も考えられるが、それでも普通に考えて部下達が一人たりとも怪しい人間を見ていないというのはおかしい。

「俺が戦う事になるかもしれないな」

アントニーは水晶玉を眺め、ため息をついた。

この基地は複雑極まりない構造のため、この最上階にある指令室に



敵が辿りつくにはかなりの時間がかかるだろう。それまでに、部下達と接触せずに来ることなど不可能。だがしかし、得体の知れない不安があるのだ。

「おい、お前、どこに行こうとしている？ 持ち場はどこだ？」

アントニーの命令どおり持ち場で待機していた『裏切り者』の一人が、上階に向かおうとする男を呼びとめた。確か、詳しくは思い出せないが、階をまたいで持ち場を持っている人間はいなかったはず。

医務室も一階に一つはあったはず。そもそも、男の衣装は自分達のものとは違う……はず。

「取りに行くのだよ」

「何をだ」

「君達の大將の首さ」

直後、『裏切り者』は見た。男が何かを口に含むのを。

それを境に、凄まじい頭痛、吐き気、目の痛みや体内の異常など、体中を狂わされ、意識は闇に消え去った。

「馬鹿な……監視カメラは全滅、これだけの数がいながら敵の正確な正体すら把握できない」

少し苛立っているアントニーに、周囲の部下達はかける言葉もない。目を潰された以上、できる事は、通信をつかって状況を聞く事ばかり。だが、どの場所でも返答は要領を得ず、どこか夢の中にもいるかのようだ。

しかし、直後に指令室の入り口から現われた姿を見て、それは夢などでない事に気づかされる。

「やあ諸君、元気かな？」

入口の壁という壁を埋め尽くし侵入してくるアメーバと、その中心に立つ人間。

白衣の科学者だ。ひよいと手を上げて挨拶をするその姿にはどこ

かコミカルなものがあつたが、丸眼鏡の内にある目は冷酷な光を持っている。

「裏アネックス第五班班長……ヨーゼフ……!」

それを見て、アントニーはうめき声混じりの声をあげる。

彼が捕縛すべき対象であり、『裏切り者』最大の敵である幹部搭乗員オフィサーの一人。

その圧倒的な存在感は、ただでさえ冷たい指令室の温度をさらに下げていた。

「何故……こんなにも速くここに?」

アントニーが問いかける。単純に、謎だったのだ。

この複雑な迷路をここまで速く攻略できたのが。

「簡単な事だよ。体の一部を壁に這わせれば、基地の形くらい簡単に把握できるさ」

軽く言い、ヨーゼフは自分の背中から展開しているアミーバを指差す。

そう、ヨーゼフは基地の壁にアミーバを這わせ、その型をとつていたのである。

これにより、迅速に基地の内容を知る事ができた。

「部下達の異常も貴様の仕業だな……!」

「ネグレリア・フォーレリ、あのアミーバを部下達の体内に送り込み、異常を引き起こして混乱させる。立派な戦略だ。だがな……」

余裕綽々のヨーゼフを嘲笑うように、アントニーは『薬』を摂取して彼のベースである『アメリカカブトガニ』の尾が変化した剣を持つてヨーゼフに突撃する。

それを動く事なくアミーバの壁で自分とアントニーを遮り防御するヨーゼフだったが、アントニーは部下達に起こったような精神と肉体の異常を感じている様子も無くアミーバを攻撃し、切り裂く。

「クククツ、俺はお前の対策としてここにいるんだぜ?」

『アメリカカブトガニ』にはある特徴があるのだ。

それは、あらゆる病原体に対して高い抵抗性を持っているというも

のである。

特殊な血球が、体内に侵入した病原体を阻むのだ。

それは人間の脳を喰らう『ネグレリア・フォーレリ』といえど例外ではない。

高い抵抗力によつて病原体を無効化し、その頑丈な体と剣により本体を叩く。

確かに、相性としてはすばらしいものがある。『ネグレリア・フォーレリ』相手なら完封できるだろう。

だが。それは、ヨーゼフのたった一言で崩れ去る事となる。

「昨日の朝食はなんだったか覚えてるかね」

一瞬、ごく一瞬だがアントニーはそのくだらない質問を頭で反復し、思考する。

昨日の朝食。この基地に新鮮な食べ物なんてあまりない。だから淡泊な宇宙食だったか。

いや、贅沢をして地球から持って来た生の食材を食べたのだろうか。

おかしい。何故だ。何故思いだせない？

記憶に穴が空き、それを否定しようとする別の事柄を思いだそうとする。故郷の家族の顔。ケンカした友人の顔。商売敵の顔。

何も、浮かんでこない。頭の中が空白になっていく。何故？ 対策は完璧だったはず。脳を喰うバクテリアなんて、自分のベースの力が通さないはず。おかしい。嘘だ。

言葉が生まれては消えていく。明らかに攻撃の手が鈍り、アントニーの体は次から次へと襲い来るアメーバに押し返されていく。

「二つ面白い話をしてあげよう」

ヨーゼフが、体勢を変えないまま人差し指を持ちあげ、提案するようなポーズをとる。

「MO手術による変態というのは、『人間大のベース生物』が一つ出来るのであって、『大量にベースとなった生物を生み出す』などとい

う事はできない」

それは、致命的なミスだった。ネグレリア・フォーレリはヨーゼフ自身なのだ。

その体から新たに元のサイズのネグレリア・フォーレリを生み出す事などできない。

だったら、目の前の化物は一体何をして身体異常を引き起こしていた？

「それにもう一つ。ネグレリア・フォーレリは水棲のアメーバだ。もし仮に生み出す事ができても、空中散布は全く効果がない。それに、私の体の何倍もデカイのは明らかにおかしいだろう」

二つ目は、対ネグレリア・フォーレリを想定していたアントニーが見落としていた事。

ネグレリア・フォーレリは水中のアメーバであり、人間への感染も水を介して行われる。

それを空中散布したところで、人間に感染するわけがない。

そしてあくまでMO手術でできあがるのは、『人間サイズのネグレリア・フォーレリ』。

それ以下のサイズになることもないはずだ。

もう何もわからなくなってきた。記憶の欠落に気がついたのを皮切りにするかのようになさまざまな症状が体を襲う。アンソニーはヤケクソになって叫んでいた。

「見える、見えるぞ！ 貴様がこれまでに殺めて来た罪なき魂が、貴様の背中にとりついている……！」

それは、ヨーゼフの過去を抉るためだ。

これで少しでも動揺し、隙を見せてくれれば。

アンソニーのささやかな願いだったが、ヨーゼフの反応は予想だにしないものだった。

「そうか、私は、まだ許されていないんだな……」

ヨーゼフは、首を振って自分の背後を振り返り、心底安心したかの

ように微笑んでいたのだ。

そのどこか狂気を感じさせる様子に、アントニーは心の底から恐怖を感じていた。

ヨージェフは、アントニーの言葉をたとえ嘘だとしても信じたかった。

自分がかつて殺めてしまった彼らが自分を許さないのであれば、自分はその償うために戦い続ける事ができる。

心の弱い自分は、許されたとわかつてしまえば、自ら死を選ぶだろうから。

過去は償わなければならない。だが、過去を見続けてはいけない。自分は、未来を救って償うのだ。

過去を清算する？ 自分が十分に良い事をしたら、自分が殺した罪の無い彼らの事は無かった事になるとでも？ ハイ人の為になることとしたから君達は私への怨み忘れてね、と言う権利があるとでも？

一人、また一人とその記憶は浮上し、ヨージェフの頭に明確な姿を見せる。

——ミゲル、君はとても真面目な子だったね。いつでもみんなを引っ張ってくれていた。

——ソーニャ、君は芯の強い子だった。皆を守って最初に実験材料になったのは君だった。……すまない。

——アベル、君はいつもヤンチャをして皆を困らせていたっけな。……注意ばかりしていたが、そんな君を見るのは少し楽しかったよ。

「なんなんだよ、お前は……やめろ、来るな、来るなあ！」

背後を振り返って独り言を言いながら近づいてくるヨージェフに、アントニーは後ずさりしながら逃げている。

もう、この場に正常な人間などいなかった。

あるのは、ただ狂気と贖罪に彩られた人間ののみ。

そして、ヨーゼフはとつくの前に『薬』を使っていた。

アメーバが変形しては元に戻り、時々ラツパの様な形の器官が姿を見せる。

『SYSTEM: N<sup>ナ</sup>y<sup>イ</sup>a<sup>ア</sup>r<sup>ラ</sup>i<sup>イ</sup>a<sup>ア</sup>t<sup>ト</sup>h<sup>ト</sup>o<sup>ト</sup>t<sup>テ</sup>e<sup>テ</sup>p<sup>プ</sup>』

ヨーゼフ本人が開発した最高傑作のひとつにして、日本と独逸の最高技術を組み合わせた狂気の結晶体。

その能力は、生物が一生の内にとる姿をいくつでも同時に体の別々の部位に発現できるといふもの。

ただ、普通のベース生物にはこれは必要ない。そんないくつもの形態を持ち、それら全てが戦闘に適した能力を持つ生物など、ほぼ存在しないからだ。

『ネグレリア・フォーレリ』とて、普通の生物の範疇でしかない。いくつかの形態はあるものの、それは日本に供与されたプロトタイプで十分に使いこなせるレベルである。

ではなぜ、こんなオーバースペックなものを作ったのか。

この専用装備は、ヨーゼフの本来のベース生物の力を最大限に引き出す物だからだ。

---

決して、その生物の領域に近づいてはならない

その体から放出される毒素は、水中の生物に等しく死を与え、人間にもさまざまな障害を引き起こす。

しかし、その生物はそれだけの単純な存在ではなかった。

外敵から身を守るために数百倍のサイズへと変形し、毒で弱った獲物を発見すれば追う為に泳ぎに適した形に変化し、植物プランクトンを喰らいその葉緑体を取り込んで植物のような生活を送ったりする。

餌が無くなれば水中で静かに眠り、その形態は硫酸すらものともしない耐性を有する事すら可能である。

生き抜くために進化を重ね、あらゆる状況に適応できるようにその姿を増やし、24もの姿を持つその生物は瞬く間に水域を支配し、死を撒き散らす。

魚の死骸に溢れた水域などにはどんな興味があろうと絶対に近づいてはならない。

そこはもはや、猛毒と彼らの支配する楽園へと姿を変えているのだから。

「君はなぜか最後まで私になついていたな。プレゼントをしてくれて、それを無碍にしてしまった事を覚えている」

一人一人思いだし、最後に頭に浮かんだのは、一人の少女だった。一度たりとも忘れたことの無い記憶が浮かびあがり、頭の中の空白を埋めていく。

それは、αMO手術開発主任にして最初の被術者、狂人と恐れられた天才の追憶にしては、とてもちっぽけなものだった。

「実験の前に、ひとつだけプレゼントがあるのです」

「くだらん、実験動物は黙って実験室に行け」

「そんな事言わずに、はい、どうぞ！」

「一体なんなのだ、これは」

「今日は父の日です！ だからはおかせにはプレゼントです！」

「……何故父の日に私にプレゼントを？」

「だってはおかせは……わたし達のお父さんみたいなものでしたから」

「……本当にくだらないな。私のような人間が父なわけがなकारうに。さっさと行きたまえ」

「わたしとの約束、忘れないでくださいね。さようなら、おかせ」

「でもね、本当はとても嬉しかったよ、ナターシャ」

ヨーゼフ・ベルトルト

国籍：ドイツ

46歳 ♂ 185cm 75kg



『裏マーズ・ランキング』2位

$\alpha$ MO手術 // 渦鞭毛植物型 //

— フィエステリア・ピシシーダ —

## 第14話 Biosafety Level 4

——ファイエステリア・ピシシーダ

学名『Pfisteria piscicida』

日本の探偵小説に登場する大怪盗『怪人二十面相』。

神話の名をとった一種のホラー小説に登場する邪神『ナイアールトテップ』。

人間は、無数の『顔』を持つモノに恐怖を抱き、また、大なり小なりの畏敬の念を抱く。

だがそれは、現実には存在しようもないものであるからだ。

そこら中に無数の顔を持つものが溢れていたとして、空想の世界に存在する悪人、邪神に感情を大きく動かされるだろうか。

あるわけもないものだからこそ人はその世界に入り込み、一つに固定されない多くの『顔』を持つ異形の存在に心を動かされるのではないだろうか。

しかし、それは実際に存在した。

さらに悪い事に、それは人間を蝕み、体を侵して苦しめる厄介な存在だった。

『渦鞭毛藻類』。水産業に大損害を与える赤潮の原因となる生物達だ。

その一種であるこの生物は、あらゆる生物と比べても度を越えた特殊な生活環を有している。

泥の中で休眠形態となって眠り、獲物である魚類が現れればそれを敏感に察知、遊泳に適した形へとその姿を変え、毒素を放出し獲物の動きを鈍らせる。

動きの鈍った獲物の体に取りついた後は、ストローのような形の器官を突き刺し血球を吸い取り、餌を得ながらさらに毒を放出する。

この生物と同じ水域に存在してしまった哀れな獲物は、そう長い間にその腹を水面に浮かべる事となる。

フィエステリアは植物プランクトン、本来ならば一方的な被捕食者というのが一般の考えだ。

だが、この見えない脅威は襲い来る他の動物プランクトンを感じすると数百倍ものサイズになる大型のアメーバ形態へと姿を変え、逆に捕食し返してしまう。

これらの活動、さらに細かい領域まで含めて、その変化する形態数は24にも達する。

だが、これで終わりではない。これだけなら、フィエステリアはただのおもしろ生物で済んだはずだ。

動物番組で変わった生態の生き物、として紹介され、お茶の間のひと時の興味を引いたりする、それだけだったはずである。

その魔の手は水域の外にまで及ぶ事となる。

生成された毒素はエアロゾル化し、宙を飛ぶ海鳥や水浴びをする動物にまで効力を及ぼす。

そしてその対象は、人間とて例外ではないのだ。

実際に起こった事例としては、この生物が大量発生した河で魚を獲っていた漁師が、突然の体調不良に悩まされた、というものがある。きつと疲れているんだ、仕事を切り上げ早く帰ろうと思いつくとうとしたものの、長年慣れ親しんできたはずの河、その帰り道がわからない。

迷いに迷い、結局数時間かけてようやく帰宅できたのだ。

さらに被害は拡大、繁殖した河の水面は魚の死骸で埋め尽くされ、数百人規模がこの毒に侵された。この生物を解析していた研究所ですら、この毒が漏れ出し封鎖騒ぎになった程だ。一時期は謎の病として医師を悩ませる事になった。

その症状は、記憶障害を主とし、腸の不調、視界の不鮮明化、喘息に似た症状の呼吸器異常、腎臓や肝臓の機能不全など、部位に関係無

く、そして重たいものである。

ただの単細胞生物、されど、それは無数の顔を持つ異形の存在。決して触れてはならない領域に、この生物は足を踏み入れているのだ。

「わかるか？ この力の差が。目の前に移る絶望が」

ヨーゼフは静かに、無表情の瞳でアントニーに告げる。

次々と展開し、本体には指一本触れさせない巨大なアメーバに、時間が経てば経つほど濃度を増し、心身を侵していく毒素。

アントニーが頼りにしていた部下はすでにアメーバの海に飲み込まれ、その体を漂わせている。

これが、0.3%。これが、『2位』。狂気に墜ち、正気に苦しんだ博士が自殺に失敗して得た力。

「私の肉体は非力なのだよ、エセ占い師君」

なんとか立ち上がり、気丈に剣を持つアントニー。だが、その目から勝利の意思はもう消え去っている。

「私はただの研究者だ。ローマのジョセフ君のように人類最高の肉体を持っているわけでもなければ、ドイツの……アドルフ君の様に部下に慕われているわけでもない。ま、当然だろうな。彼らは私の過去を知っている。それで私についてくるわけがないだろう？」

問いかける。答えは求めていないし、アントニーにその質問に答える気力はない。

「だがね、そんなものは必要ないのだよ。私という個人の身体能力も、他者と協力して戦う術も、関係無い」

「私は、この呪われた手術によって手に入れた最高の『ベース生物』、そして、そのベースを完全に理解して使いこなすだけの『知識』。それしか持っていない。だが、これだけあれば、十分すぎると思わんかね？」

「……私に何か用かね？ 多くの未来ある命を奪い、もう処刑台への階段を上る事しかできないこの私に」

「その未来ある命に償いたいとは思わないか？」

「なるほどね。だいたい事情は理解できたよ。私に合う、いや、君達が望むベース生物でも見つかったのかな？」

「ええ、その通りです」

「だとしても御免だな。私は見ての通り身体能力は低い上に、部下を率いる将としての才もないのでね」

「誤魔化さないでくれませんか？ 開発者の貴方なら、この手術の理念に関しては一歩良く知っているでしょう」

「……」

『個対群を想定した、広域殲滅能力及び従来技術では不可能な生物の適合』

ヨーゼフは、目の前のアントニーを見ながらも、独り言をつぶやく。

それは、自分が提唱した、自分が作り上げた、αMO手術、その理念だった。

1対多数戦闘を前提とし、そこに味方が介在する余地など無く、そのベース生物は従来のMO手術では不可能な代物を可能とする。それに加え、通常の投薬でもMO手術における『過剰摂取』に近い力を発揮する事ができ、この手術を受け、訓練を積んだ人間には、まともな戦力では触れる事すらできなくなる。

フィエステリアの毒は無差別攻撃である。その範囲内に存在する味方は、例外なく毒に侵される事となる。

背や腕から展開したアメーバは全方位をカバーし、獲物の分泌物質による感知と組み合わせたその守りは鉄壁。人体からアメーバという本来無茶な変質は、常時過剰摂取、つまりMO手術よりもさらにベース生物の肉体に近付いている状態だからこそ可能なものだ。

それでもできる本体の隙は専用装備による高速変態でカバーする。

その布陣を突破するには多大な戦力が必要となり、またその戦力ですら時間が経過すれば毒に侵され全滅する事になる。

もちろん、ミサイルや重火器があれば突破は可能だろう。だが、この状況でそれはあまりに夢見ともいえる考え方だ。

「……わかった、降参だ。この通り、武器も捨てた、変態も終わった。だから許してくれ」

アントニーは勝機が無い事を悟ったのか、剣を明後日の方向に放り、両手を上げる。

ヨーゼフはそんなアントニーを見て少し考えるが、静かに頷いて展開していたアメーバを体に戻し、変態を解除する。

「私とて無駄な犠牲は払いたくはないからね。君が降伏してくれてよかったよ」

歩み寄ったヨーゼフはアントニーに笑いかけ、構えていた左手をアントニーに差し出し、握手を求める。

そんなヨーゼフにアントニーも笑いかけ、その手を取って握手を

するわけがない。アントニーは差しだしたかのように見えた手を、思いつきりヨーゼフの顔面に向かって繰り返し出した。それは、変態していないにも関わらず、人間の頭程度なら碎き割れる力をもった一撃だ。

戦争とは油断した方が負ける。やはり自分の占いは当たっていたようだ。

アントニーはほくそ笑み、その一撃の感触が手に伝わるのを待ったが……

手が、止められていた。それは、ヨーゼフの右腕が変質したアメーバによるものだった。

「……なん……で」

呆然とアントニーが眩ぐが、その声は掠れ、ヨーゼフに届いたのか

すらわからない。

「なるほどね、『紅式手術』か。ありがとう。これでもう君に用は無  
いよ」

アントニーには目の前で起こった事が理解できなかった。

なんで。なんでヨーゼフはこの不意打ちを防ぐ事ができた？

なんで変態してもいないのにアマーバへの変質を行える？

疑問は尽きず、すでにフィエステリアの毒と焦りで支配されたアン  
トニーに思考する能力は残っていなかったが、意識が潰える直前、  
ヨーゼフが呟いた内容だけは臆ながら聞きとる事ができた。

「薬非使用時の能力 on/off 不可能、選択できるベース生物も M  
O 手術基準、だが成功率は格段に上昇。なるほど、あの国らしい改造  
だな。全く、この技術も嫌な形で利用されているものだな」

## 第15話 決別

血の海が広がっていた。

人間とテラフォーマー、そしてもう1グループの人間。偵察部隊なのか、片側の人数は少ない。三つ巴と思われた戦いは、突然、何かの命令に従うかのように動きを変えたテラフォーマーがただでさえ数で劣る片側の人間達に襲いかかりはじめ、戦いの決着がつくのにあまり時間はかからなかった。

赤色のカーペットを敷き詰めたかのように染め抜かれた大地。その上をのたうち回る、無数の人間。

凄まじい力で無理やりねじ切られたかのような腕、足、頭。それはまるで悪趣味なオブジェのように、無造作に転がっている。

そして、それに色を加える、黒色の残骸。

そこにたった一人立つ、一人のニンゲン。

「や、やめっー!」

敗軍の兵の一人、まだ年若い少年が、悠然と近づいてくるそのニンゲンに懇願する。だがそれは、二本の腕で体を持ちあげられた直後に悲鳴に変わった。

「貴方を怨んでなんかないわよ、抗争で人が死ぬのは当然のこと。ウチの子達も、それを割りきっていたから」

怯える子どもをなだめるように、柔らかな笑顔で、そのニンゲンは語りかける。だが、その瞳は深海よりなおほの暗い。

その笑顔のまま、和やかな調子で、まるで撫でるように、

少年の耳をもぎ取った。

「ーあ」

悲鳴を上げる暇も与えず、もう片方の耳が抉り飛ばされる。

そして、それを行った腕は、両耳にぽっかりと開いた傷口をぐりぐ



りと撫でまわす。

声にならない悲痛な叫び声を上げる少年。しかし、腕を拘束されたまま持ちあげられているため、抵抗する事は儘ならなかった。

そんな少年を心底愛おしそうにそのニンゲンは眺め、両手でその弱り切った頬をはさむ。

『エメラルドゴキブリバチ』。楽しい生き物よね。このゴキブリどもを意のままに操って、自分達の戦力にしちゃうんだもの。ねえ、教えて？これをベースに持っているの、貴方達の中にあと何人くらいいるの？』

その口調に威圧的なものは感じ取れない。だが少年は、目の前のこの存在に底知れない恐怖を抱いていた。

沈黙を守る。今の少年にできる抵抗は、それだけだった。

ビツ

風を切る音と目の前を何かが通過する音を少年は聞いた。

直後、自分の顔の中心辺りに激痛が走り、何かが無くなった感覚を覚えた。

顔を伝って口に流れ込んでくる多量の血。もう、いちいち説明されなくても少年は自分の身に起こった事を感じ取る。

「耳、鼻、さてはて、次はどこにしましょうか♪」

殺される。自分が吐かなかつたら、おそらくこのニンゲンは何の感慨も抱かずに自分を殺すだろう。

それこそ、鼻をかんだテツシユをゴミ箱に投げ入れる、そのくらいの感覚で。

ニンゲンは少年の手を足を眺め、指でわざわざ数を数える。

「あと二十本、楽しめそうね。目は最後にとっておいてあげるわ。ゆっくり自分の体が小さくなっていくのを見なさいな」

「遅い、遅すぎる」

「……」

俊輝と拓也、二人は打ち合わせ通り、洞窟の中で待機していた。異常なければ30分で終了、だが、すでに日は落ち暗くなりはじめ、もう3時間は経過している。

最悪の考えが頭をよぎる。しかし、だからといって今自分達にできる事は帰りを待つだけである。

最初の方はひそひそ声で雑談に花を咲かせ、笑っていた二人だったが、片道30分、折り返し1時間という偵察の最低時間を過ぎ、さらに1時間経つ頃には、ただ無言になっていた。

「なあ、薬ってあと何個くらいあるよ」

「……さつき入ってきたゴキを倒した時点で無くなっちまった」

「そうか、俺ももうこれだけだ」

拓也が懐から取り出したのは、環形動物型特有の点鼻薬型の『薬』。二人とも、戦力が底をついていた。

そもそも戦闘要員でなかった拓也は元々あまり持っていなかったのだろう。

俊輝も、たび重なる戦いで消耗している。

「ああ、静香が帰ってきたらとつとと帰還しようぜ。こんな所にいたら気が滅入るぜ」

「なあ、俊輝。もうさ」

「頼む、そこから先は……言わないでくれ」

拓也の言いたい事はよく理解できている。だが、それを認めたくは無。

もう静香は戻ってこない、だから、俺達もここを放棄して任務に戻ろう。

こんな簡単な、大局を見れば俊輝の我儘よりもずっと合理的で正しい答え。

もちろん、死の覚悟がある任務って事くらい、出発の前からわかっていて。

自分の大切な友人や知り合いが死ぬ可能性がある事くらい、わかっていた。

でも、実際、それに向き合う事なんて自分はできなかった。

俊輝は自分の心の弱さに苦笑していた。今撤退すれば、犠牲はもうすでに手遅れな静香一人だけで済むかもしれない。

ここで退かなければ、敵がやってきて、薬の無い自分と戦闘要員でない拓也は殺されるかもしれない。

何を選ぶべきかは、わかりきっているのに。ただ一言、もう撤退しよう、それだけで今現在この状況で最良の結果が得られるはずなのに。

頭が、喉が、口が、鉛のように重くなって言葉が出てこない。拓也も、グループリーダーである自分の考えに従うつもりなのだろう。言わなければ、たとえ後悔しか残らないとしても、言わなければいけない。

「よし、拓也―」

俊輝が決断し、ためらいながらも拓也に話しかけた瞬間。

洞窟の外で、何かに着地、いや、墜落する音がした。それと同時に聞こえてくるのは、悪意に満ちた下品な笑い声。状況を予想した二人は同時に頷き、外に駆け出していった。

外にあったのは、二人の予想とは少し外れた光景だった。

ぐったりとした静香が横たわっているのを確認した途端、俊輝が慌てて傍に駆け寄り庇うように前に立つ。

「うえ……？ 俊輝？ 拓也？ よかった、戻ってこられたんだ……」

息も絶え絶え、熱があるのか顔も赤くなっているけどどう考えても無事ではなさそうだが、ひとまず生きてはいる。心底安心した様子の俊輝を見て少し申し訳なさそうな表情をしていたが、それは二人の様子から状況を把握して、すぐに冷静な顔に変わった。

「敵がいるの……？」

「まだわかんねえが、たぶんいるだろうな」

「だったら私も……!」

立ち上がるとうとする静香、しかし体調不良には抗えず、すぐにへたりこんでしまう。

「無理すんなって、大丈夫だ、俺達二人で何とかするから」

そうは言ってみたものの、現在まともに動けそうな二人では、勝てるかどうか。

二人に勝ち目の薄さを悟らせたのは、洞窟の向こう側から現われた大柄な男だった。

無精ひげに薄暗い目、体は鍛えられているものの、どこか不健康そうな雰囲気を漂わせている。

「んー、なんだあ、女がフラフラ飛んでやがるからコツソリ追いかけてみたらツレがいんのかよ! あーあ、久しぶりにストレス解消できると思ったのによ!」

ストレス解消、暴力か性的なものか、その意味がどうであれ、静香がまともな扱いをされるわけがない。

二人は構えるものの、恐らく相手は裏切り者、U—N—A—S—Aの配給服を着ている自分達を見てそんな発言が出来る時点で、味方とは言い難い存在だ。

だが、今自分達には全く武器がない。戦闘員である俊輝の薬は尽き、静香はこの体調なので戦力としては数えられそうにない。

困った事に、これは詰んでいる、という状況だ。

だからこそ。ためらいなく、彼は前に出た。

「俊輝、静香を連れて逃げろ。時間なら俺が稼いでやるからさ」

男の前に立ち、拓也は堂々と宣言する。

「やめろ拓也、お前がここで死ぬ必要は無い!」

当然、拓也の発言に俊輝は反対する。しかし。

「よくよく考えてみるよ、生身のお前と下位だけど薬が残ってる俺、どっちが時間稼ぎできそうだ？」

その一言で俊輝は黙り込んでしまう。最良の選択、それは仲間を捨てる事。せつかく、静香が生きていたのに。結局、自分は仲間を失ってしまうのか。

「それとこれ、やるよ」

拓也がおもむろに何かを投げる。受け取り、確認すると、それは何かの薬のようだった。

「静香にあげてくれ。きつと治ると思うから」

何故薬なんて持っているのか。静香の症状の原因がわかっていいのか。聞きたいことは色々があるが、今はそれどころではなかった。

男が薬を、拓也と同じ環形動物型の点鼻薬を使用し、変態を済ませる。

「じゃあ静香、俊輝を頼む。俊輝、静香を頼んだぞ」

「わかってるさ……お前も帰ってこいよ！ 待ってるからな！」

強く言う、自分の生還を信じている俊輝に対して、静かに告げる。

「なあ、俊輝」

「なんだよ……」

「悪いな、あの時立て替えてくれたラーメンライス代、返せそうにねえや」

暗に自分の事は諦める、という拓也に悲しげな目を向ける俊輝。

何度も後ろを振り返りながら去って行く二人の友人を見送り、安心した表情を見せる拓也。

「おーおー、時間稼ぎとは言ってくれるなあ！ この俺様によお！」

男の身体は暗色に光沢を持った不気味な姿に変わり、額には五本の触角、腕にはおそらく牙と思われる鋭い刃が付いている。

その禍々しい姿は、普通の環形動物とは一線を画するものだった。

「あーあ、楽しかったなあ……」

拓也は先ほど俊輝に見せた自分の環形動物型の薬を取り出す。

中身なんてもう入っていないそれを見て、拓也は虚しそうに笑っていた。

## 第16話 帰宅

「ハア……ハア……クソツ！」

火星の荒れた大地を、背にぐったりした様子の静香を背負いながら俊輝が走る。

頭の中を巡るのは、後悔と無力な自分への怒りが合わさった苦い感情。

なぜ、あそこで自分が残ると言えなかったのか。

いや、わかっている。あの場で最良の手段はあれだったのだと。

『裏マーズランキング』9位である俊輝と相当な下位である拓也。どちらを生き残らせた方がいいかと言われれば、任務を遂行するという都合上答えは言うまでもないだろう。

むしろ、仮に俊輝に葉が残っていて拓也に葉が残っていなかった、という状況であろうと、強敵が現れた場合には拓也を犠牲にした方がいいのかもしれないとさえ思える。

周囲から見れば。裏アネックス計画実働班というコマでゲームをする政治家プレイヤーからすれば。

拓也はここで『捨て駒』にするべきだ。どんな初心者でも、その選択をするだろう。

だがしかし。実際のコマからすれば、どうなのだろうか。

その捨て駒扱いされてランキング下位なのに強敵の前に立たされた青年は。

俊輝の、かけがえのない友人である。

コマの感情にいちいち耳を傾けて大局を見失う。それは、結局皆を不幸せな結果に導いてしまうことだろう。

しかし、当のコマは。現在の大局など何も知らないコマにとっては、それは、ただ仲間を一人失った、それだけの事なのである。

だからこそ、俊輝は走る。間に合うとは思えない。すでに手遅れかもしれない。

だけれど、自分の頼りになる仲間に、上司に、捨て駒しんゆうを助けてもらうために。

—————

——某年某月 U—N—A—S—A

「うぐう……馬鹿な……こんな事が……」

U—N—A—S—A職員の居住・訓練施設。ここは日本や中国、アジア班の区画である。

そんな中、食堂へと向かう廊下で、一人の男が倒れていた。

見た目からすれば成人したかしていないかという微妙なライン。そこそこ整った容姿で、体も健康そうではあるものの、今現在倒れているその姿ではそんな説明をされても信じる事はできないだろう。

何人かの職員、アネックス、裏アネックスの実働部隊と思われる人間がその場を通る。が、誰もが怪訝そうな顔をしながら通り過ぎ、数人のまだ10歳にも達していないかという幼い少年少女は木の棒で男の体をつつき、うめき声以外の反応が期待できないのを知ると足早に騒がしく通り過ぎた。

「ちくしよめ……これだから人間は……」

ぶつぶつ呟くが、その声はうつ伏せで倒れこんでいるせいで全く周囲には聞こえない。

とさつ、と軽い音を立てて、男が腰に付けていた巾着袋が床に落ち、数枚の硬貨が散らばる。

どう考えても、何かを食えるには全く足りない量の資金である。

裏アネックス計画実働部隊、中国・アジア第四班所属、のちになぜか日本班に参加する事になる男、小原川拓也。彼は、この文明社会の極みとも言える建物の中で、空腹に苦しんでいた。

「おーい、大丈夫ですかー。えっと、死んでないよな……」

遠のく意識の中、走馬灯が中学時代の恋愛編に突入しかけた時、その意識を現実押し戻すかのように声がかけられた。ひとまず、まだ聴力は残っているみたいだな、と安心し、その声の主を見ようと体を



起こし、目を開いた。

次の瞬間、頭の中に星が散った。簡単に言えば、頭と頭が正面衝突したのである。

やっぱり自分は不幸だ、と思いながら、拓也は痛む頭を押さえながら、星が消えるのを待っていた。

「へー、変わった苗字だな。それに中国なのに名前日本人？ あれ？」

「ああ、俺ハーフだから」

廊下を歩く二人組。どちらもアジア系の青年だ。特にこの場所においてはおかしくない姿であった。

……二人とも頭に大きなタンコブを作っている事以外は。

先ほどまで他人だった二人だが、すっかり打ち解けた様子で、仲良さげに廊下を歩いている。

拓也の空腹は、もう一人の青年、俊輝の持っていたおにぎりによって救われたものの、いまだに腹は定期的になっているという状態。

「なあ、とりあえず食堂行かないか？」

「えっ、でも俺金が……」

「いいからいいから」

なんだかんだで俊輝に連れ込まれた食堂で、俊輝はこの場の主導権は俺のものだ！ と言わんばかりに勝手に二人分の注文をする。それに対して、少し溜息をつく拓也。

もちろん、払えるだけの金なんて持っていないからである。

食堂はさまざまな人々で溢れていた。

黙々と食べる大柄な男、それに親しげに絡む俗に言うチャラ男風の青年。

どう見てもあなたアジア人ちやいますよね？ という大食い選手権にでも参加しているのかと思うほどに皿を高く積み上げている雪のように白い肌を持った銀髪の小柄な少女と、その横で顔を手で覆っ

ている白衣の男性。

さまざまな人々の喜怒哀楽に満ちたこの場所に、俊輝は故郷を、拓也は中国の商店街を思い浮かべていた。

そもそもなぜ金を持っていないのか。それは、簡単に言ってしまうば、カードを落としてしまったからだ。

再発行しようにも相当な時間がかかるし、拓也はあまり現金を持ち歩かないタイプだった。

そして、理由は色々とあるが頼れる友人もいない。

そんなこんなで、拓也は食事をとる事ができないでいたのだ。

やってきた食事は、二人分のラーメンライス。

中国暮らしの長かった拓也は、ラーメンの隣にご飯が据えられているという光景に首をかしげていた。

「あ、これな、こうやって食べるんだよ！」

言うや否や、いきなりラーメンの中にご飯をぶち込む俊輝。

その光景に、間拔けた顔で口を開ける事しかできない拓也。

だがしかし、この料理はこの食べ方が正しいのだ、と無理やり自分を納得させ、俊輝に倣ってご飯をラーメンに投入し、一口、二口と食べる。

「美味いなこれは……でもアジアの公序良俗的にどうなんだ……」

ぽつんと呟かれた拓也のセリフに、俊輝が噴き出す。

鼻にご飯粒が入ったようで、とてつもなく気持ちが悪そうだ。

「あの……ふがつ、あのな、拓也……」

鼻の奥に物が触れる痛みになりながらの反論である。

「ご飯ってのは日本の主食なわけよ。で、ラーメンってのは中国料理だろう？ つまり二つ合わさったこれ、日中友好ってやつだ！」

俊輝のトンデモ論理にたまらず噴き出す拓也。だが、その顔には笑みが浮かんでいた。

やはり鼻にご飯粒が入った様子で苦しんでいたが。

「ハハッ、いつつ……なんだそれ……なんか面白いじゃねえか！」

二人して大声で笑い、他の客ににらまれる。だが、それすらも気にならないほどに、なぜだかとても楽しい気分だった。

「はい、ラーメンライス二つで……になります」

そして、運命のお会計。自分は金を持っていない事をいつカミングアウトしようかと迷っていた拓也だったが、それはあっさりと二人分の代金を出した俊輝によつてあっさりと解決されてしまった。

「悪い！ 今度金入ったら返すからー」

それぞれの自室への帰り道、拓也は俊輝に手を合わせていた。

だが、俊輝はそれが何だ、とばかりに取り合わない。

「あー、気にすんなよー」

「いや、でも……」

それでも迷う拓也。だが。

「拓也、素直に奢らせてくれよ？ 友達だろ、俺たち」

俊輝の一言で、拓也は自分の中の暗い部分が少しだけ晴れた、そんな気がした。

そうか、これが友達つてやつか、とおぼろげながらに感じ、だが、その直後に頭を過るものがある。

「……ああ」

拓也は、ぼんやりとした返事を返した。

「よく帰ってきたな、俊輝、静香。報告を聞かせてくれ」

ようやく帰還した日本の宇宙艦。そこで二人を待っていたのは、無数のテラフォーマーの残骸を背景に佇む日本班班長、剛大だった。

当然、班長である剛大は班員の編成を知っている。もちろん、拓也が帰ってきていない事もわかっていいるだろう。だが、そこになんら動揺している様子は無い。

犠牲者が出る任務だと割り切っているのだろうか。それとも、班長も班員を捨て駒程度の存在だと考えているのだろうか。だが、今そんな事はどうでもよかった。

静香を優しく地面に降ろし、俊輝は剛大の目の前まで歩みを進めて

いき、そして、跪いた。

もちろん、これが私情であることはわかっている。だが。

「頼みます、班長。俺の友達を、あなたの部下を助ける為に、力を貸してください」

諦める事なんて、俊輝にはできなかつた。

登場人物紹介その2（ヨーゼフ、ナターシャ、アントニー）

——ヨーゼフ・ベルトルト ♂

・46歳 185cm 75kg ドイツ

・『裏マーズランキング』2位

・αMO手術ベース：『渦鞭毛植物型』 “無貌の死神” フィエステ

リア・ピシシーダ

・好きな食べ物：手術前：ザワークラフト 手術後：魚料理（特に生魚）

・嫌いなもの：眼鏡の鼻当てに付着する鼻の垢

・瞳の色：青

・血液型 B型

・誕生日：10月30日（さそり座）

ドイツの富豪の長兄として産まれる。学生の頃から遺伝子工学に興味を持ち、その才能は大学で開花し若くして数多くの科学コンテストで受賞する優秀な科学者になった。

ごく普通の中流家庭の娘と結婚、しばらくは個人での研究を続けていたが、MO手術の発展形の開発、という国家プロジェクトの主任に抜擢され、家計を安定させるためにもそれを快く承諾。

その後はサンプルとして各国から集められた貧しい子供たちを世話しながらも研究を続けていたが、ある日妻と娘がA，Eウイルスに感染し人生に絶望した男の自殺に巻き込まれて死亡。

その後は研究に狂い、サンプルの子供たちを次々と凄惨な人体実験の材料にして国の見積もりよりもずっと早期にMO手術の発展形、αMO手術を完成させたものの、用済みとばかりに人体実験、予算の横領、その他政治家の罪を被せられ死刑判決を受け渡された。

正気に戻った後は子供たちへの償いとしてαMO手術を己に施すも成功し生存、火星での任務を成功させ未来を閉ざされている人々を救う事によって子供たちへの償いとする、と決意を新たにして任務に

参加している。

案外料理もできるが、空気は読まないし読めない。

—— ナターシャ・エリセーエフ ♀

・ 17歳 151cm 32kg ロシア

- ・ 好きな食べ物：ザワークラフト
- ・ 嫌いなもの：シャンプーをしている時に目を瞑らなければならぬ

い事

・ 瞳の色：空色

・ 血液型 B型

・ 誕生日：2月20日（うお座）

ロシアの研究所での機密計画により生み出された初期型の一体で、エリシアの姉。

ほとんどのクローン体が内気な性格の中、例外的に非常に元気な性格で、いつも施設の姉妹達に積極的に話しかけ、コミュニケーションをとっていた。エリシアの名付け主であり、同じく名前を付けられた姉妹は多い。しかし、他の性格が性格であるためスルーされる事も多かった。

最終的には姉妹と打ち解け、非常に良好な関係を築いていたものの、それによって計画に支障が出る事を危惧した研究者によって姉妹と引き離され、サンプルとして若い肉体を求めていたドイツの研究所に送られる。

その後は施設の研究者や同じく集められた孤児達と仲良く過ごしていたが、方針転換した研究所の人体実験によって死亡している。各種データは死亡時のもの。

年齢は試験的な肉体重成長措置がとられ強制的に成長させられているため実際の年齢はもっと小さい。Aカップ。

—— アントニー・ウエリントン

・ 34歳 174cm 72kg コンゴ共和国

- ・ MO手術ベース：『甲殻型』 『病無き武者』 アメリカカブトガニ
- ・ 好きな食べ物：食べられればなんでも
- ・ 嫌いなもの：水晶玉に付く結露
- ・ 瞳の色：黒
- ・ 血液型 O型
- ・ 誕生日 3月29日（おひつじ座）

裏切り者の幹部の一人。貧しい農村に生まれ、兄弟や友人が自分の必死の祈り虚しく死んでいった経験から、神を恨み、それを利用しての上がつてやろうと心に刻んでいる。

その後はU—N—A—S—Aに就職するもののある事件の責任を押し付けられてクビとなり、占い師として生計を立てていた。当然インチキであり本人もそれをよく自覚しているが、全く悪いとは思っていない。

そしてとある人物との契約により火星に渡る事となる。

少年時代に過ごした貧しい環境とベース生物の特性から、病気への耐性には人一倍自信があるらしい。

## 第17話 日米、時々ドイツ

「……さて、この辺りのはずだな、俊輝」

「そうつす、班長」

すでに日は落ち、暗闇が世界を覆っている中、4人の人影が荒野を進んでいく。

日本班班長、剛大と班員の俊輝、その他日本班2名だ。

油断なく周囲を警戒し、奇襲に備えながらも歩き回り、行方不明の班員、拓也を搜索する。

単調な風景が多い火星では正確な位置を把握する事は難しいが、それでも俊輝が覚えていた方角と距離を頼りに足を進め、この場にたどり着いていた。

「我々が探しに来る事を読んで伏兵を配置してある可能性も高い、いつでも薬は使えるようにしておけよ」

「わかってます」

俊輝は注射を、班員の一人もそれぞれの薬を持ち、いつでも使用できる状態に。もう一人はすでに変態を済ませている。常に一人は変態し、敵襲に備えている状態だ。

だが、常に変態ができるようになっておくというその行為は気休め以上の何物でもなく、実際に奇襲を受ければ間に合わない可能性が高い。それほどまでに危険な任務なのであるが、剛大は俊輝の懇願を受け、ここに来ているのだ。本来ならば危険も多く、見返りも少ないという行うべきではない作戦。しかし。剛大の一番の心配である『本艦の防衛』が解決された。さらに、俊輝の報告から敵は『裏切り者』陣営の上層部だと判断し、その尻尾を掴む事ができたのならと思いい、今回の作戦を決行したのである。

もちろん、1%たりとも情に流されなかったのか、と言われれば剛大は否定しない。狭い艦内での集団生活で火星までやってきたので班員達の仲は非常に深く良好になっている。複数人での作戦の最終的な決定権は班長である剛大が有しているが、それでも班員全員に決を採ればその多くが搜索を望むだろう。それを独断で自分が切り捨



てれば、士気は下がり今後の作戦に影響が出る可能性は高い。

そんな事を考えはしたが、結局は『仲間』を救いたいのが立場に縛られて動けない自分に色々理由をつけて作戦決行やむなし、と言いつくしてを正当化しているだけだな、と剛大は心の中で苦笑していた。

「班長、何か物音がします」

班員の一人が剛大に話しかける。それに無言で頷き、耳を澄ませる。

岩陰で動く音。俊輝ともう一人も実際に聞いたわけではないが、状況を察して歩みを止め、押し黙る。

その時だった。

剛大の持っていた小型通信機が突然鳴り出し、急用を告げた。現在は作戦中なので消音状態にしてあったのだが、これは緊急事態用の仕様だ。いくら緊急事態でも潜伏時などにいきなり鳴ったりしたらどうするんだ、とこの通信機の製作者に物申したいところだったが、今は潜伏中よりマシンな状態か、と考えて通信に答えた。

もちろん、三人には岩陰を見張らせたままでだ。

「あ、班長、大変だ！なんかまずい事態が起こってるみたいだぜ！」

通信を送ってきたのは、本陣に戻っている健吾だった。彼らの偵察班が帰還したからこそ、剛大は本艦を離れていたのである。やはり数名はランキング上位者がいた方がいいという判断だ。

「どうした、簡潔に報告を」

「通信設備が回復したんすよーとりあえずは他班との連絡が取れる状態です！後はややこしいので直接繋がります」

ガチャツと古典的な無駄に大音量な音と共に健吾の声は途切れ、入れ替わりに別人の声が耳に入ってくる。

「こちら、ドイツ・南米第5班。今現在わかっている事を情報共有しようと思う。通信が可能な班は応答、現状を報告していただきたい」

所変わり、ここは北米第一班の宇宙艦周辺。不時着直後にテラフォーマーの大群に襲われ、それを撃退した直後に裏切り者勢の大攻勢を受けているという不幸極まりない班である。

「みんな、大丈夫かい？」

先頭を切って戦っている赤毛の青年、班長であるダリウスが班員達に呼びかける。

物量では押し負けているものの、今現在立っているダリウスを含む6人は全員が戦闘員らしく、一歩も退いていない。

「ジョニーが殺られました、畜生！」

「あまり戦況はよろしくないみたいだね……君たちが艦に避難する隙が作ればいいんだけど難しいか」

通信設備こそなんとか修復できているものの、地球への通信は行えない状態だ。修理も簡単だし遠くの親族より近所の他人、という事で火星内通信こそ修復できたものの、自分たちが最後に確認した時にはまだ応答してくれる班はいなかった。さてはて、援軍は望めない。敵は数こそ少し減ったものの多い。どうしたものか。

そんな事を考えているダリウスとは裏腹に、艦内では絶賛情報共有中なのだが、戦闘中の彼らにそれを確かめる余裕はあるわけがなく、全員がいつ終わるかもわからない戦闘に不安を募らせていた。

「オラァー！」

「うおっ、あぶなっ！」

クワガタムシ系と思われるベースの男が繰り出した一撃を紙一重で回避し、ダリウスは一歩後ろに下がる。そして小吉と同じように両腕から生えた針を素早い動作で男の首に突き刺す。

「ぐっ……」

苦しむ男。だが、それだけではなかった。首の筋肉と皮膚が爛れ、醜い傷跡を血と変色した皮膚が赤く染める。

「どうよ？ 死ぬ程強い毒でもないけど、人間サイズになれば戦闘の補助くらいには使えるでしょ」

激怒した男の仲間たちの攻撃を避けながら、ダリウスは軽い調子で話す。

しかし、内心ではあまり余裕が無い。早く、仲間たちを艦内に逃がさねば。ここで自分が死ぬわけにもいかないし、班員を死なせるわけにもいかない。

「なあ、君たちさあ、どっかに雇われてるの？」

相手は何も話さない。

まあ当然だとダリウスは思うが、それにしてもおかしい。

この人数を、他の班も襲撃を受けているのだと仮定すればこの何倍もの人数を、誰にも気づかれず、どのようなにして火星に送ったのか。

独立した勢力に、こんな事ができるとは思えない。だとすれば、考えられるのは。

——どこかの大国が音頭をとっている

やはり来たか、という感覚だった。

自分は半強制的にこの計画に参加させられた身であるし、本国からしても処分したい人間である事は自覚している。しかし、そんなくならない事のためにわざわざここまで手の込んだ事をする事はないだろう。仮にそうだとしたら、到着直後に全ての班に機関部異常が発生した事の説明がつかない。

どこかの国はそれを偽装していた事も考えられるが、少なくともこの班の不時着は本当だ。

他の全部の班が不時着を偽装していたなんて、それはギャグの領域だろう。

これはそんなに簡単な問題ではない。

通信設備が破損したと言っても、それは時間をかければ十分に修復できるレベルだ。仮にどこかの国が裏切り者だとして、正体を現すのが早ければ、一瞬で地球にチクられてしまうだろう。

その対策も恐らくあるはずだ。だとすれば、さらに急がなければならない。

相手の準備が終わるまでに、通信を回復せねば。地球への、などという贅沢は言わない。

急いで他の班と連絡を取り、連携を行える態勢を整えねばならない。いつでもお前ら以外の全ての国が相手になるぞ、という状態になれば、その国は動けなくなるだろう。裏切り者勢のまだ見ぬ強者はともかく、他国の班員、特に自分と同じ幹部搭乗員は一人違わず危険だ。

ダリウスは一人一人、班長達の顔を思い浮かべる。

自分と仲のいい日本班班長、剛大さん。おそらく彼は、いや彼の国は馬鹿正直にベースを公開しているのだろう、トビキバアリ、あの総合的にハイスペックな能力は脅威になる。

北の大国、ロシア班班長、エリシアちゃん。本人はまだ成人もしていないし気弱な性格の優しい少女で公表されているベースはアカウミガメという明らかに戦闘向きではないそれだが、訓練の時に見た彼女は人間想定の外骨格除去版テラフォーマーを次々と即死させる恐ろしいものだった。クラゲか何かなのだろうか、あの強力な毒は絶対に相手取りたくない。

我が国を超え、世界の覇権に最も近い、中国・アジア班、欣さん。剛大さんに似て物静かで任務に忠実な軍人だ。公表されているベースは『イイジマフクロウニ』。訓練の時もなんかトゲトゲになっていたし、これも正しいベースなのだろうか。だが、本人の高い身体能力、長年の経験から来る判断力と合わさって、物理攻撃を躊躇させるその性質は厄介な相手になりそうだ。あれ、彼は幹部搭乗員だったのだろうか？ 確か専用装備は彼に渡されていたはずだが。

自分もその身に宿しているαMO手術の開発元、ドイツ・南米班班長、ヨーゼフ博士。気難しそうな人だったのであまり話をした事が無いが、彼がそのαMO手術の開発者、しかも主任だった男だ。悪い事に、幹部搭乗員の専用装備開発は彼が行っており、各幹部の特性を最大限に強化する装備を制作した。これがなぜ悪い事かと言うと簡単で、自分含め幹部搭乗員のベースが全部筒抜けである。本人の実力はよくわからないし腕相撲はハンパ無く弱かったが、おっかないベースだった気がする。

そしてローマ班、エレオノーラさん。いつも穏やかな笑顔を浮かべているお婆さんだ。かなりやせ細っているように見えるのに、めっちゃ力が強かった。しかも、時々おっかない事を言い出したり行動を起こしたりする。

ベースはヒトデの仲間、テヅルモヅルだって書いてあったが、どう

なんだろうな。

彼らの内、一人でも敵に回すと考えると嫌になってくる。自分も彼らと戦って勝利できる自信はあるが、それは条件が整っていたらの話だ。状況によっては何もできずに殺される事もあるかもしれない。

だがそれも、他の幹部と共に五人でかかれば大した問題ではない。そのために今自分たちは時間を稼いでいるし、艦内の皆は修理に全力を尽くしてくれているのだ。

「さあみんな、もう一働きするぞ！ 命令は一つ、『死ぬな』だ！」  
ダリウスが倒した死体を持ち上げ盾にしながら班員達に呼びかける。

北米第一班の戦いは、まだ続きそうだった。

## 第18話 陰謀の火星とローマの血雨

「その声、博士ですね。ひとまずは火星内とはいえ通信が繋がった事、安心していきます」

剛大が、通信機の向こう側のヨーゼフに話しかける。

相変わらずの内心を見せない固い口調と雰囲気だったが、それでもどこかほっとしているかののように俊輝には見えた。

「日本班は班長以下3名が現在行方不明となった班員の捜索中、残り  
は偵察及び本艦の防衛を任せている」

「了解した。という事はこれは貴国の本艦からの接続かね。班長と本艦、どちらも無事であると」

「そういう事です」

「なるほど、日本は健在のようだね」

両者が会話している間、他の三人は周囲を警戒する。先ほど岩陰に気配が見えたところだ。いつ襲い掛かってくるのか油断できたものではない。

「他の班も応答を頼む。混乱を避けるために、班長及び班長から通信を任された人間以外の発言は控える事」

「ああ!? 俺らはてめえの部下じゃねえぞ? なんでいちいちてめえの命令に従ってやらなくちゃなんねえんだ?」

「や、やめてください! 今は喧嘩してる場合じゃないです!」

ヨーゼフの言葉の直後に荒々しい男性の言葉が飛んでくる。その直後に、それを諫める少女の声も。本艦の通信設備からさらに通信機を經由して聞こえてくる声なので、剛大にはあまり大きくは聞こえなかったが。

通信は第3班、ロシアからだった。

「ちっ、わかりましたよ。でも、ムチャな命令されたらすぐ断るんですよ?」

渋々引き下がったと思われる男の声。ヨーゼフが溜息をつく。

「やれやれ、エリシア君、君の国の事情は知っているが、もう少し班員を静まらせておいてくれないか。これでは話がなかなか進まない」

「うう……すみません……」

「第3班は前線基地と思われる施設を1つ制圧、捕虜を一人確保しています。少し尋問した後、疲労と戦闘で今はぐっすりですが、起きしだい尋問を続行します」

シヨボーンとした様子のエリシアだったが、すぐに仕事モードに戻り、話を始めた。

尋問をしながら昼寝休憩を挟む甘さにこれまた溜息をつくヨーゼフ。だがしかし、ロシア班はその『少し尋問』の様子を話そうとする様子はなかった。だが、今それを詮索する必要は薄いだらう。それよりも、他の班の報告を聞くのが先だ。

「……あ、繋がった！　こちら第1班！　至急救援を要請します！　現在敵の大攻勢を受け、班長他上位戦闘員は艦外で交戦中、艦内では復旧作業を続けています！」

北米第1班からの通信は、班長のダリウスではなく、年若い女性の声だった。

どこかの班に戦力を集中させ早期に協力の可能性を絶たせる。予想できていた事だったが、アメリカ米国がハズレを引いたか。少し考えるが、今は救援どころか無事な班の合流すら成り立っていない。救援は後回しだ。

「すまないが、まだ救援はできそうにない。もう少しもたせてくれ」「さて、ローマはまだのようだね。では、第5班の状況を説明しよう」「我々は、敵の大規模な拠点と思われる場を制圧した」

各班それぞれがそれぞれの反応を見せるが、気にせずニョーゼフは続ける。

「手短に話そう、敵は火星の山中に基地を築いていた。それを占拠し内部の設備を調べていた時、いくつかの事実がわかったよ」

「まず一つ、彼らは我が班が制圧した基地の他にも同等の設備をいくつか有している、そして手に入れたデータによれば、彼らは宇宙船の試運転を口実に地球を抜け出し、この火星に資材を運搬したそうだ」

「二つ目、彼らにも彼らで指揮を執っている人間が存在する」

「三つめ、私が倒した彼らの指揮官は『紅式手術』を施されていた」

山中に築かれた基地、それが複数。大規模といった発言から、敵の戦力は相当なものである事が伺える。そして、大規模な宇宙船の試運転を行った国。剛大の頭には、1つの国が頭に浮かんでいた。

さらに、彼らにも自分たち幹部搭乗員オブリイサーのような人間がいるのだ。

だが、それを聞く各班には3つ目の『紅式手術』という言葉だけがわからなかった。

「……なんで、裏切ったのですか」

……通信では聞こえない声で小さく呻く、銀髪の少女を除いて。

「詳細は今後資料を提供しよう。ひとまずは各班の合流を目指す、偵察に出している人間がいる班は通信機で連絡、今この座標データを渡すので素早い合流を実行したい」

「あれ？ 第4班の人たちってどうしたんですか？ 第6班はまだ修理が終わってないってわかってるのに」

きよとんとした声で1班の通信員が質問する。それに対する答えは、理解していながらも、各班に重く押し掛かるのだった。

「第4班には、あえて連絡をしていない。この意味、君たちなら理解してくれるね？」

「……さて、どうしようかしら」

すでに日の落ちた火星を一人の老婆が歩いている。

右手には苦悶と恐怖が口からあふれ出す血に混じったゴボゴボという音を紡ぎだす人間だった何かを持ち、とぼとぼと変わり映えしない景色に飽き飽きした様子だ。

そしてその周囲には、怒りに狂った約10人の集団があった。

「オイばあさん、ちよつと待てよ？ その手に持つてるやつ、なんだよ」

「こんばんは、今夜は良いお天気ね。地球がよく見えますよ」

「一人か、これはもらったな。老人愛護は大切だと思うが、俺たちはそんなに優しくないんだぜ」

「皆さんも帰ったらいかがかしら。きっと仲間の人たちもご飯を作っ



て待っていると思うわよ」

「アンタを殺せば報酬が出るんだ、悪いがここで消えてもらうぜ」  
「残念だけど私はあなたたちを殺しても何もないのよ」

「飄々とした返しをする老婆に周囲の苛立ちは募っていく。」

だが、突つ込む事はできない。彼らの一団がこの老婆に壊滅させられたというのは事実。数人いた班員こそ始末したものの、ただ一人生き残っている。『エメラルドゴキブリバチ』の能力で操ったテラフォーマーも用いた完全な奇襲だったにも関わらずだ。

不用意に飛び込めば、恐らくは確実に死が待っている。それに、あの老婆は急いでいる様子だが、囲まれて何か動きを見せる様子は無い。つまりは、自分たちを一掃できるような範囲攻撃は持っていないのではないだろうか？ 硬直戦になりつつあったが、そうなれば数が多く、囲んでいるこちらの方が当然有利。

「どいて頂戴？ 私、これから仕事があるのよ？ この『捕虜』を持って帰っているいろと聞かないといけないしね？」

だがしかし、その硬直は長く続かなかつた。

「あんだああああああ！ 私の弟をおおおおお!!」

激昂した集団の中の一人、手に持った物体を見た若い女性が、裏アネットワーク計画戦力の中核、その一角を担う幹部搭乗員オフライサーが一人、エレオノーラに戦いを挑む。

周囲の静止を振り切り、怒りに我を忘れている様子だ。

すでに変態を済ませているその姿と俊敏な動きは、最速の肉食獣、

『チーター』のもの。

強力な脚力から生み出される時速80kmに匹敵するスピード。

エレオノーラに変態を行う間を与えず、その一撃はまっすぐに弟の敵かたきである老婆の首めがけて繰り出されていた。

だが、その攻撃は空中で止められる。エレオノーラは、その爪を立てた腕を変態の様子も見られない左腕で難なく受け止めている。

「死ねえっー！」

だが、怒りに支配されている彼女はそれに驚くという事も忘れ、次の一撃を繰り出した。

しかし、それさえも、軽く頭の位置をずらしてエレオノーラは回避する。

「あら」

だが、攻撃を回避した拍子に、エレオノーラのポケットから注射器が、『薬』が落ち、割れる。

それを見た周囲は、勝利を確信し、突撃した。

突っ込んだ女性は押している。敵は変態できる状態ではない。仲間たちの敵討ちのチャンス。多額の報酬。

自分たちに有利な戦況と、エレオノーラを始末した後で自分たちが得られるもの。

これら全てが判断をさせた。

だが、やりすぎる包囲は逆に被害を増してしまう。十分に戦闘できる空間を作ろうと思えば、お互いの体が邪魔になってしまったため、4人が突撃するのがやつとだ。だがしかし、それで十分すぎる。何故ならば、敵は変態すらしていないのだから。

全員が、一撃で相手を殺傷できるように大振りな攻撃を繰り出した。

「はい、残念でした」

彼らは、あまりにも単純で、あまりにも純粹すぎた。敵の事を信じてしまっていた。

あの薬が、彼女の物であるとは誰も言っていないのに。

エレオノーラの右手に握られていたのは、一つのスイッチ。

「よい夢を」

刹那。何が起こったのかわからないまま、女性の右眼をエレオノーラの左腕が貫き、そのまま頭蓋を貫通し後ろに抜ける。

そして、渾身の一撃を与えようと振り上げられた4人の腕が、何かに絡みつかれれば同時にねじ切られた。

「あらあらうふふ、さあ」

暗い赤色とそれを飾る白色の斑点。腰から生えた四本の触手。そして、何の感情も映さないにこやかな笑み。

「次に私とダンスを踊ってくれるのは誰かしら♪」

彼らの舞踏会が、幕を開けた。

## 第19話 紅色の老婆

エレオノーラ・スノーレソン

MO手術ベース 軟体動物型 『サメハダテナガダコ』

ヨーロッパの多くで悪魔と忌み嫌われる生物、蛸。それが彼女のベースである。

その体軀はヒョウモンダコのように小柄ではなく、かといってミズダコのように人間を上回る巨軀でもない。タコとしては標準的なサイズだ。その腕は、体長の半分に達するほどに長く、そして強靱な筋肉の塊である。

引きちぎった腕をまるで玩具のように弄び、すぐに飽きたかのように放り投げる。

「っ!？」

腕をねじ切られ、一瞬の事で反応が遅れたが、エレオノーラに襲い掛かった4人はそれでも戦士、苦痛の唸り声をあげながらも一步下がる。

だが、ほんの少し遅かった。4本の触手が2本づつ襲い掛かり2人の首に巻きつく。そして、もう一人はすでに絶命した女性の頭から手を抜き地を抉るほどの脚力で追撃してくるエレオノーラに頭を掴まれた。

直後、骨が砕け割れる音が三つ。ただ一人、追撃を逃れた男はすでに戦意を喪失している。

仲間たちの死に、勝利を確信していた周囲の残る5人は撤退すべきか攻勢を仕掛けるべきか悩んでいた。

自分たちはまだ有利な側だ。有利ならこれまで通りの硬直戦にもちこめるはず。

その安心が一瞬の間を生み出す。4人が襲いかかった段階で変態こそ終わらせていたものの、回避が遅れた。

戦意を喪失した男を無視しそのまま走るのをやめなかったエレオノーラが包囲の一角にいた裏切り者の一人を

目に映し突貫する。同時に、いつのまにやら拾っていた小石を思いつきりその一人以外に投擲し牽制。流石に致命傷にはならないが、タコの筋力と本人の剛腕で投げられた石を体に受け、出血程度のダメージを受けてしまっていた。それと同時に動きも少しだけだが止められ、救援が遅れる。狙われた男は慌てて腕をクロスさせ無意識の内三人の死亡原因である首と頭を守ろうと試みた。

だが、一撃は訪れない。疑念を抱いた直後、腕の防御を強制的に引きはがされ、足も何かに拘束され宙に持ち上げられる。

触手4本で両手両足を縛られ、大の字になる形で浮かされていたのだ。

「なんだよ……人質をとったから見逃せつてか？」

それに対し、エレオノーラは何も答えない。ただにこやかな、老婆が孫が走り回っているのをロッキングチェアに座って編み物でもしながら見ている時のような笑顔を浮かべているだけだ。

4人は慎重に再び包囲を作ろうとエレオノーラの四方に移動する。まだだ、まだわからない。これまで死んだ4人は不意打ちによるものだ。正面から戦えばまだわからない。

それに自分たちには、こいつと戦った経験がある。

訓練を思い出せ。あの人も、恐らくこの妖怪ババアと同じくらい強いに決まっている。マニュアル通り戦えば、対処できない相手ではないはずだ。そう考え、4人は沈黙を守る

数秒、数十秒、緊張して時間の進みもわからないが硬直状態で時間が流れる。

「いだ……痛い痛い痛い痛いアアアアア!!」

それを破ったのは、絶叫だった。エレオノーラに拘束されている男が、明らかにおかしい様子を見せていた。白目を剥き、体が震えている。最初こそ絶叫にかき消されたがそれと同時に確かに聞こえる、ミシミシやブチブチという音。

「あら、人質？ なんの話をしているのかしら」

直後、その異音は最高潮に達し、そして聞こえる事は無くなった。4本の触手が力余ってアーチのように2本づつ、きれいに左右に散開する。背に夥しいおびただ返り血を浴びながらもエレオノーラの笑みは崩れない。変態により赤みのかかった触手と本人の体をさらに赤く染め上げ、二分割された人間だったものの残骸は無残に地に落ちた。「てめえ……」

交渉なんて通じる相手ではない。それを仲間一人の尊い犠牲によって理解した彼らは、同時に走り出し、それぞれの武器を取り出した。

一人が変態によって手にした大振りな刃で襲い掛かる。カマキリ系列の生物だろうか。

「私はね、ここに来てよかったと思っているのよ」  
エレオノーラは相性が悪いと即座に判断し、触手で顔を突きに行く。

それを回避したものの、頬にかすり、皮膚を引きはがして血が噴出した。攻撃もバランスを崩して中断させられてしまう。迂闊に飛び込めば、触手4本による熱烈な抱擁が待っている事は想像に難くない。

だが、一人ではない。それが、彼に安心して攻撃を中止し退けさせた。

エレオノーラの左方から、両腕を組んで振り下ろす重たい一撃が加えられる。

本人の体格とベース生物『ゴライアスオオツノハナムグリ』によるものだ。

対応し、左腕でガードするものの、腕一本では分が悪かったようで、徐々に押されていく。

エレオノーラが固定されたのをいいことに、右方より鋭く尖った爪の一撃が触手を、その先にある心臓を狙って放たれる。

「おしゃべりとは余裕だなババア」

その攻撃の結果は成功とも失敗ともいえない。触手の一本に突き

刺さり、さらに勢いに乗ってエレオノーラの体にも到達したからだ。致命傷ではないが、ようやくダメージを入れる事ができた。

「よっしゃ、決めてやれ！」

現在のエレオノーラの持つ手札は、触手2本と右腕のみ。突き刺された触手と防御に使っている左腕は当然使えず、前方に突き出した触手を引きもどしている時間はない。

背後から最後に繰り出されるのは、昆虫界最強の力を持つとされる『フンコロガシ』による打撃。

その力、自分の体重の300倍を持ち上げられるほど。これを受ければ、さすがに強靱なタコといえど……

——ヤットアソビバガテニハイッタ

その声を聞いたのは、4人の内何人だっただろうか。だが、そんな事は問題ではなかった。

エレオノーラの姿勢が、ゴライアスオオツノハナムグリの力によって抑え込まれていたはずの体が急に前倒しになる。それと同時に左手の力が抜け、左方からの攻撃は抵抗を無くした腕ではなく地面に叩きつけられた。

そして後ろに下がった男の顔に黒い液体が吐きつけられる。

爪で磔はりつけにされていた触手が動き、背中に刺さった爪を引き抜いた。慌てた裏切り者勢がそれを触手から抜こうとするものの、触手の筋肉は強力に凝縮され力が込められており、ぴくりとも動かない。そして爪を食い込ませたままその腕を残り3本の触手が引きちぎる。

急激な重心移動、視界を一瞬で奪い去る墨、あらゆる方向に自由自在に力を加えられる強靱な筋肉。

これら全てが、蛸という生物。西洋で古くから忌まれ、恐れられてきた海の魔物の力。

全ての戒めから解放されたエレオノーラがターンし背後へと向き直る。

その武器、4本の触手と四肢、合計8本。

4本の触手が容赦無く振り上げられた、力が失われているその瞬間の腕を縛り付け、骨を砕く。

左右の足で交互に蹴りを放ち足元を崩し、ぐらついた体を両腕でつかみ掲げる。

「くそっ、待ってるよ、今助け」

なんとか復帰した3人が、背を向けているエレオノーラを再び力強く見据える。

だが、拘束され、唯一エレオノーラと向き合っている彼は見てしまった。

エレオノーラの口から、何かの気体が漏れ出しているのを。

「うっ」

「なっ!?!」

「……え」

3人が、同時に崩れ落ちた。

もう一つだけ、『サメハダテナガダコ』には特徴がある。

それは、ヒョウモンダコほどではないにしろ強力な毒を持っているという点である。

人体を痺れさせる効果のあるそれは、死亡事例こそないものの、対応が遅れば死に至る可能性もあるという代物だ。もちろん、即効性の毒ではないし、空中散布するならば傷口が無いと効果的には機能しない。

「ババア……まさか、俺たちに石を投げて傷を付けたのは……」

エレオノーラは何も答えない。

もう興味を失ったかのように、ちらりと横を見る。そこには、エレオノーラが戦闘前に持っていた肉塊。苦しそうに呼吸をしているさまが見て取れる。

「さて、捕虜が増えちゃったわね。この数はさすがに老人一人では大変だわ。だから」

毒で薄れゆく意識の中、男はエレオノーラが自分の腕に手を伸ばすのを見た。

「もうちよつと、軽くしないとね」



ぼとつ、と何かが地面に落ちる音を聞きながら、男の意識は闇に沈んでいった。

## 第20話 群

「おいおい、なんだよこれ……」

剛大が通信を終え、指令を出そうと振り返る。

すると、十数メートル離れた位置に移動していた俊輝が見えた。

勝手に場を離れるな、と叱ろうとした剛大だったが、その俊輝の様子を見て少し固まる。

手と膝を地に付き、その目線の先、といつてもすぐ近くの大地にあるのは、大量の血液。

すでに時間が経過しているのか赤黒いシミとなっているそれは、かなりの量だった。

剛大にも、他の二人にもここで何があつたのか、容易に想像はできなかった。

俊輝にかける言葉が見当たらない。

「なあ、班長、俺って何がしたかつたんだろうな。本艦の守りを手薄にしてまで一緒に来てもらって、警戒する分の薬まで使わしちまって、それで得られた結果がこれか……はは……」

血の跡、いくつか挟れている大地。ここで戦闘があつたのははつきりとわかる。そしてこの場が、俊輝の記憶にあるものだという事も、彼の様子を見れば理解できる。

その上で、自分達が探している拓也は見つけられず、敵の幹部と思われる人間の姿もない。

もし拓也が勝利または逃走に成功したならば、本艦に戻ろうとするだろう。

本艦の位置を悟られまいと別方向に逃走したのだとしたら、血の跡が道のように続いているはずだ。

だからこそ。ここで行われた戦闘の結果は簡単に想像がつくからこそ。

「班長、翔、健太、ありがとう。もういい。本艦を守りに戻ろう」

絶望に染まった顔で、3人に帰還を促した。

「……俊輝、こんな時になんだが、我々の今後の行動方針を通達する」  
剛大は、あくまでも冷静に話を進めた。自分の声が震えてはいないか、確認しながら。

各班との協議の結果、ひとまずはドイツ班の制圧したという拠点、そこを集合地点に設定して戦力の合流を行う事が決定した。かといつて各国には自国の宇宙艦がある。全てを回すわけにはいかないだろう。

なので各班に受け渡されたノルマは、『現在生存している班員のうち、戦闘員を含む1/3以上の人員』。

連合軍を組織するのに、少しでも人数が欲しい。各国の思惑でそう簡単に人は集まらないだろう。

だが、今は自己利益を優先している場合ではない。

敵の全容がわからない以上は、協力するべきだ。各々の目的を果たすのは、その後でいいではないか。

それが今回のスタンスのようだった。ヨーゼフとエリシア、それに無線機から唐突に通信を繋げてきたエレオノーラ。自分含め4人の幹部搭乗員オブリイサーで決定した事項だ。

それを踏まえた上で、地球艦の最高司令官相がこんな時にどのような命令を下すのか想像し、剛大は指示を出した。

「我々は本艦の機密情報を抹消し、総員で新たな拠点へと向かう。本艦の連中にもそれはすでに通達している。わかったな」

少しの間。自分の国の利益を捨ててでも、協力の道を歩む。馬鹿だ。だが、馬鹿正直だ。

この馬鹿馬鹿しいほどの正直さこそウチの国の長所なのかもな、と三人は少し笑みを浮かべる。

もちろん、疲れている様子の俊輝もだ。

「新拠点の座標データもすでに手に入れてある。通信は本艦の設備が整っていない状態だが、向こうの拠点の通信設備は思ったより強力らしくてな。通信機があれば会話だけは可能なようだ」

「了解です。そうと決まったら急ぎましょう！」

「だがな、その前に」

「その奴、出てきやがれ」

俊輝の言葉に、岩陰に潜んでいた人間が姿を現す。

それは、一人の青年だった。意思の籠った目で三人を見つめ、静かに近づいてくる。

「……」

「君は確か……第四班の」

どうしたのだろうか。剛大が三人の前に出て、青年に近づく。歩みを進める青年。

そして、剛大と正面から向かい合い、名乗りをあげた。

「僕は第四班所属、プラチャオと申します」

そういうと、青年、プラチャオは拳と開いた手を合わせ、頭を下げる。

「島原剛大殿、我が班の悲願の為、貴方の首をいただきたい」

少しの間、剛大がその言葉を聞き終わり、薬を自分の体に打ち込み変態したのを見届けた後、プラチャオはベースの特徴なのか鉤爪のような物に変化している足で薙ぎ払うような蹴りを剛大の首めがけて繰り出す。

剛大はバックステップでそれを回避し、素早く左腕から生えているトビキバアリの牙でプラチャオを狙う。

「流石だ、班長が絶賛するだけの事はある」

一瞬だけ感心した様子のプラチャオの動きが止まるが、即座に状況を判断し、身を反らせて打撃を回避する。

たとえ牙を回避しても剛大のベースはアリ、そのパワーで殴っただけでも致命傷だ。

猛毒を備えた鋭い針、強靱な牙、力持ちの虫の代表格ともいえるアリのパワー。あらゆる攻撃が致死。

だが、プラチャオはひるまない。

剛大の懐に潜り込み、肘の打撃を叩きこむ。それは胸部に直撃し、一瞬剛大の呼吸が止まる。だが、そこまでだった。アリの筋肉は、た

だそれだけでも攻撃に対する鎧として機能する。

捉えた。剛大は空いている右腕を構え、自分の胸に繰り出されている肘に叩きこむ。

骨が折れる音。プラチャオは退き、剛大も姿勢を整える。

「悪いな、決闘の途中で済まないが俺たちは一人じゃないんだよ」

退いたプラチャオに攻勢を仕掛けるのは、剛大の後ろで変態を済ませた俊輝。

折れ、動かなくなった右腕を垂らすプラチャオに、右側寄りに近づき、オオキバウスバカミキリの刃を繰り出そうとするが。

「それは我々もそうではない」

俊輝の右腕が、突然現れた人間に掴まれる。気配は無かった。剛大でさえも驚きの表情を浮かべている。

探知能力を考慮して連れてきた他の二人も全く気が付いていなかった存在。

魚類型と思われる鱗の生えているその人間にそのまま俊輝は投げ飛ばされ、戦線から引き離される。

再び始まる、剛大とプラチャオ、二人の決闘。そして、俊輝と新手。

1対2、ではなく、戦いは二つの1対1となっていた。

「さて、これから諸君には働いてもらう事になる、訓練の成果を存分に発揮してくれ」

1隻の宇宙艦。極めてテラフォーマーに見つかり辛く、さらにテラフォーマーもほとんどいない地域に在るその宇宙艦の前で、短めの髪をオールバックにした、見るからに頑強そうな体つきの男と隣に立っている青年が並んでいる班員達に向かって話をしている。

「早くも彼らは通信を回復し、どうやら合流を目指している様子だ。君たちには、この場所の防衛と私と共に合流しようとする敵の攻撃、この二つに分かれてもらう。哨戒に出ている二人も、もうすぐ帰ってくる事だろう」

それを班員は黙って聞いていた。ついにこの時が来たか、と士気を

上げる者もいれば、面倒くさい、とこつそり溜息をついている者もいる。

だが、その空気も少しだけしか続かなかった。班員達が、飛び退くかのように左右に分かれたのだ。

その飛び退いた隙間を通って悠然とやってきたのは、5人の男女だった。

「へいへーい、欣ちゃん、調子はどうよー」

軽い口調で男、欣に話しかけるまだ若い金髪の男。だが、その目は暗い光が宿っている。

「ダメですよ、バイロン。私達の上司さんなのですから、もう少し丁寧に話すのです」

静かに、少し弱気で金髪の男を窘める、パツと見少女にしか見えない銀髪の小柄な色白の女性。

「まあまあ、いいじゃねーか、アナスタシアちゃんよお、俺たち、この火星の仕事仲間の上司ポジションって事で対等みたいなもんだろ？」  
金髪の男を庇っている、巨体の、しかしそれは脂肪ではなく筋肉であるという事が見て取れるアジア系の顔つきの強面の男。

「あははっ、わざわざ来てやってんだから感謝しなさいよね！」

明らかに節操が無さそうな、染められている金髪と体中に高級そうなアクセサリーを付けている女性。

「全くキミたちは粗野で困る。僕みたいに高貴な振る舞いをしてみればどうなんだ」

銀髪の女性以外の三人とは打って変わって上品な立ち振る舞いの、貴族という印象がぴったりの、軍服に身を包んだ青年。

集まった5人に、静かにうなずきながら、中国・アジア第4班班長代理、欣は告げる。

「わかっているとは思いますが、アントニーが敗れ、基地を奪われたようだ。君たちに下す命令はただ一つ」

そして、欣の隣に立っている『班長』が、その続きを伝えた。  
「持てる全戦力を率いて、奴らを残滅するんだ！」

## 番外編 六つの時間、六つの記憶

×××  
×年 6月 24日

「おいに我々の計画が始動する。」

これはあの神に反する考えを持つ一族どもへの抵抗の、神を作り出すための第一歩なのだ。

人間の『進化』などがくだらない事を、思い知らせてやる。

これが成功すれば、今回の音頭を執っている私の評価はうなぎ登りだろう。

×××  
×年 9月 14日

計画の第一段階は成功した。報告員も潜入させた。後は成り行きを見守るだけだ。

あの家の人々には罪悪感を感じているが、これも人類の発展に必要な事なのだ。

×××  
×年 2月 8日

計画は何事も無く進行中。生存も確認できている。すでに数回死線から生還したそうさ。

実にいい調子である。

×××  
×年 12月 某日

徐々に立場を上げてきたようだ。監視員の一人が流れ弾により命を落とす。

追加を送り込まなくては。

×××  
×年 7月 某日

順調に力を増しているようだ。今回の『カミサマ』は実にうまくいっている。

×××  
×年 6月 某日

×××  
×年 6月 某日



成功の可能性が高くなり、いよいよ機密性が高くなってきた。

このプロジェクトにはさらに多くの資金がつき込まれる事だろう。

×××  
×年 9月

監視員3人が流れ弾により命を落とす。最近、監視時に巻き込まれて死ぬのが多くなってきた。

対策を考える必要があるだろう。

×××  
×年 8月

今回はこれまでで最高の成功例である。

今度こそは成功するのではないだろうか。

監視員を5人手配する。

×××  
×年 6月

あの家の子が……そんな……まさか……この計画だけは知られてはならない。絶対に。

×××  
×年 7月 14日

全ての監視員からの連絡が途絶えた。何か非常事態でも起こったのだろうか。

会議が開かれた。

×××  
×年 9月 2日

△の本部に暴漢が侵入し、同志の一人が犠牲になったそうだ。警官に踏み込まれでもしたら面倒だ、秘密裡に始末する。

×××  
×年 10月 20日

本部の施設が爆破された。どうやら自爆テロのようだ。

今回もなんとか隠し通せたが、例の計画のための施設が少し損傷してしまった。

×××  
×年 11月 11日





だ。

もちろん、他の発表者は団体だったり、国家的な支援を受けていたりする。

だが、だからこそ、個人で挑む価値があるのだ。

強力なライバルも多い。自分より恵まれている環境で研究をしてきた人間も多い。

特にあの、日本の誰だったか、車メーカーみたいな姓の彼は大きな壁となりそうだ。

そんな彼らを打ち破ってこそ、自分の力を証明できる。

表彰されれば、多額の賞金と科学者として最高の栄誉。

妻にも、今度産まれる娘にも楽をさせてやる事ができる。

これまで迷惑をかけてきた分、償わなくてはならない。

賞金が出たら、まずは指輪の一つでも……

いかんいかん、これはあれだな、『タヌキの皮がどうとやら』とかいうやつだ。

ふむ、最近目が少し悪くなったようだ。少し視界の奥の方が見えにくい。眼鏡でも買おうか。

我ながらきつと似合うと思う。同窓会でクラスメイトにも似合いそうとよく言われたものだ。

「ぎゃうっ」

唐突に耳に入ってきた可愛らしい悲鳴と共に、腰のあたりに軽い衝撃。そして、バサバサと紙が散らばる音。

いけない、考え事に夢中で前を見ていなかった。どうやらご婦人とぶつかってしまったらしい。

「これは失礼。大丈夫？」

一旦難しい考え事を止め、目の前でこけている女性を見てみる。

「すすすすみません！ わたし、考え事に夢中で前を見てなくて！」

散らばった彼女の物と思われる資料を後回しにぺこぺここと平謝り

するその女性は、ご婦人というよりはお嬢さん、といった年齢のようだった。

年はまだ十歳にも満たないくらいだろうか。

電燈からの光を弾き輝く、思わずため息が出そうな程美しい銀髪に、北欧の方の出なのか、白い肌。同年代と比べて明らかに小柄な体躯は、まるで妖精のようだ。

顔も、道ですれ違えば二度見してしまいそうな整ったものだ。

「いやいや、僕の方こそよそ見をしちゃってたからね」

そう言いながら資料を一緒にかき集め、渡す。

彼女は少し要領が悪いみたいで、時間がかかっていた。

「私なんか、優しくしてくれるんですね」

そして、その直後に唐突に言われた一言。そこには負の感情が籠っているのが感じられた。

自己評価が低い子なんだろうか。

「君みたいな子がいたら、皆放っておかないと思うけどね」

もちろんお世辞ではなく本心だ。この子にはどこか、近くで見てもかかないと危ういと思わせるものがある。

妻がいないのが幸いだ。ここに彼女がいたら、この子と別れた後で私はひどい目に遭わされる事だろう。

特に、こんな初対面の少女を内心でベタ褒めしたなんて知られてしまったら。

「わたし、どんくさいんです。間違えてばっかりなんです。だから友達もいなくて……皆にも嫌われて……」

褒められ慣れていないのか、少し顔を赤くしながら小さな声で話しかけてくる。

確かにそれはある。だが、それだけで友達がないという事はないだろう。

たぶんこの子が受けているのは、女子からの嫉妬から来るいじめ、

男子からは好意の裏返しという意味のいじめではなからうか。何より、ジャパニーズマンガによるとドジっ娘とやらは人気があるらしいではないか。

ありがとうルドルフ、お前のオタク知識が初めて役に立ったよ。

「だから、この研究で見返してやるのです！　つて事はおにいさんとも勝負ですね！　負けませんよ！　それもそのはず、この私が頑張つて研究してきたこの成果が誰にも負けるはずがないのです！　ふふふ……これはもらいました！　ここからわたしの新たなスタートが始まるのです！　だからおにいさん、残念ですが勝つのはわたしなのですよ、えへへへ……」

早口で長文でまくし立ててきて、いきなりのライバル宣言。困つたなこれは。負けるわけにはいかない。

小さなライバルの誕生に内心嬉しさを覚えないでもないが。

「じゃあはい、指切りです！」

「はいはい」

その後は赤い顔のままぶんぶん手を振る少女と別れ、自分の待機室に。さあ、負けないぜ！

僕の研究発表は始まったばかりだ！

「お前、そろそろここには慣れたか？」

強化ガラスで作られた分厚い水槽の中のそいつに話しかける。俺の日課だ。

べしべしと体をガラスに打ち付けている。肯定なのだろうか。

「お前も可哀想にな。実験でいろいろムチャヤさせられたりしてさ。

……俺と一緒だな」

ガラスに体をすりすりとしている。懐いている……のか？

そんなに知能が高い生き物じゃなさそうだが。

「そうそう、聞いてくれよ。俺さ、初めて友達ができただよ」  
何の動きも見せない。丸まってしまった。

「いやいや、お前もある意味友達、だぜ。心配すんなって！」  
ちらつと頭をこっちに向けてくる。こいつ、実はかなり賢いんじゃないだろうか。

「いやー、変な事ばっか言う奴でさ、でもバカ話してるとめっちゃ楽しいのよ。いいもんだな、お前にもいたのか、友達」

ぐったりしている様子だ。……元気が無い？

「でもさ、せつかくできたのに、火星に着いたらさ……」

動かない。反応ナシだ。いつも俺の話には耳……はないけど興味深そうに体を向けてくるのに。

「おいおい、どうしたんだよ、サンプルも採取されて、移植も終わって、お前もうすぐ故郷に帰れるんだろ？」

動かない。力なく垂れ下がっている。おいおい、どういう事だよ。

お前、帰れるんだぞ？ また野生の、仲間が待っている場所に戻るんだぞ？

……俺と違って。だから、頑張れよ、ぴくりとでも動いてみろよ。  
なあ、何とか言えよ、なあ……

---

俺は自由だ。

俺は自由なんだ。

逃げ出した。あのクソ看守共はみんなブツ殺してやった。

この力があれば。今まで以上に幸せな人生を送れる。

何が手術に成功して作業に従事すれば自由の身、だ。

俺は無敵だ。

雨が降っている。現在は深夜、真つ暗闇で逃走にはもってこいだ。  
警官が追ってくる。拳銃を手に持っているな。

「即射殺つてか。俺が怖いんだろ？ そうなんだろ？」

素早く薬を体に取り込み、俺が手に入れた力を使わせてもらう。体から無数の糸が、触手と呼ばれるらしいそれが瞬く間に警官の体に絡みつく。

声もあげずに崩れ落ちる警官。

「オレ、サイキョー！！」

説明なんて碌に聞かなかったが、この能力は、世界一の毒を持つクラゲの力らしい。

もう俺に敵なんていねえ。検問にも探知機に引つかかる事もない最強の武器が手に入った。

ここから俺の第二の人生が……

「こんにちは、今日はいいお天気ですね」

ふと気が付くと、ガキが目の前にいた。

……ロシア帽なんて、国籍アピール激しいじゃねえか。

よく見れば結構な上玉だ、まずはこいつを拉致って奴隷市にでも……

「それ、もしかしてくらげさんですか？」

俺があの手を使ったのを見ていたらしい。

もっと先に突っ込む所があるだろうが。なんで人からクラゲ生えてるのとかよ。

ボケたガキだぜ。まあいいや、今はそんな事は。

「おうよ、嬢ちゃん、クラゲ、好きなのか？ 俺と一緒に来たら、見せてやるぜ？」

それになつこりと笑うガキ。

「よし、じゃあ着いてきな」

いやはや、力は手に入るは、こいつを売りとばして先立つ金は手に入るは、全く、U—N—A—S—A様様だぜ！



——本日未明、特殊収容所から脱獄したと見られる死刑囚が、死体となって発見され——

「あーあ、最近は物騒な話題が多いな。おじさん悲しいよ」

「まあまあ、きつといいニュースもたくさんありますよ」

「ん？ その触手、例のベースの奴か？ おじさん固い力ニだから効かないぞー」

「違います、攻撃しようとか思ってます！ ちょっと見せたかっただけです！」

「ほう、なんか凄い種類なのか？」

「はい！ キロネックス、っていうらしいですよ」

---

——文科大臣を凶弾から救ったお手柄！

——国の未来を守った英雄、盾となり緊急搬送

——大手柄、日本警察の誇り

「どの新聞も、君を褒め称える内容ばかりだ。今回の働きは本当に素晴らしかった」

……声が聞こえる。この職に就いた時から、命を捨てる覚悟は出来ていた。

だが、こんな事になるなんて。こんな情けない……

「君の治療費は、我々が責任を持って支払おうと思う。君の親族にも、謝礼が出ているよ」

……そんな事は、上辺だけの話はどうでもいい。その謝礼とやらは、あいつらが社会に出るまで暮らせる程じゃない事、俺はよく知っている。

「そして今回の件、本当に残念に思うよ。君を失ってしまったのは、

我々にとつても苦痛だ」

……治療してもこれがどうしようもないものである事くらい、俺が一番よくわかっている。

二度と現場に立てないばかりか、まだ育ちざかりのあいつらとキャッチボールもしてやれない体になってしまった。

「一つお聞きしてよろしいでしょうか」

「なんだね？」

「私の親族への補償はどこまで出るのでしょうか」

「そ、それはまた相談してみただねえ……」

ほらな。結局こうなるんだよ。せつかく、あいつらを養えると思っていたのに。

生きたまま、自分の家族が苦しむ所を見せられるのか。

いつその事、殺してくれ。そうしたら、楽になれるだろう。俺も、俺の家族も。

「あの店のオーナー兼シェフ、知ってるか？ 有名な歌手の……」

「知ってる知ってる、超カッコイイよねー」

「行ってみた事ある？」

「あの人の歌聞きながら美味しい飯食えるの？ 最高じゃん」

「ただ、ちよつと怖い噂があるんだよ」

「なにそれー」

「たまにお客さんが、行方不明になるとか。そしてその次の日のステーキはいつもより美味しいと……」

「……うわあ……」

「なんてな、都市伝説都市伝説！ あの人に嫉妬したどっかの奴が流した噂だろ、どうせ」

「だよねー」

「じゃあ今日行ってみようぜ？ 開店日なんだろう？」

「賛成ー」

「今日はいい夜になりそうだぜ！」

## 第21話 戦闘、静と動

剛大と向かい合うプラチャオ。右腕の骨は先ほどの攻防でその機能を失い、力なく垂れ下がっている。

だが、彼の目から闘志は全く消えていない。

一瞬の、瞬き一つで生死が分かれるのではと思う程の緊張の中、プラチャオは考える。

自分が任された任務は他班の偵察、いざという時はそれらと交戦する事。

もし自分が敗れ、力尽きたとしても、相棒である隠密活動担当の娘が情報を持ち帰ってくれる。

自分はスラム出身の貧乏人だ。だから、国の陰謀とか、高度な機械とかそんな事はわからない。

そんな自分が持っているのは、神が憐れんでくれたからなのか与えられたこの格闘技の才能と、班長からもよく言われる不器用な性格、それだけ。

なぜリーダー機器などで探知せず、わざわざ人間を斥候に出すのか。そもそも自分達のやっている事は正しいのか。

……そんな事はどうでもいいのだ。自分はただ、自分を救ってくれた第四班仲間たちのために戦う、それができれば十分だ。

目の前の相手は、我々の任務の最大の障害の一人、裏アネックス計画の幹部搭乗員が一角、日本班班長、島原剛大。

自分の出発とすれ違いざまに帰ってきた班長は、彼の事を少し頭が固いが強い信念を持っていて任務に忠実で、そして何よりも強い人間だと評価していた。その時の班長の少し悲しげな顔の理由を自分は理解できなかったが。彼は強い。その一言が、自分の中の闘志に火をつけた。

今の自分は、久しぶりに熱くなれそうだ。

「フッ！」

掛け声と共に一瞬でプラチャオの目の前に移動しトビキバアリの牙で腹を狙う一撃を放つ剛大。

この時初めて、プラチャオはトビキバアリが瞬発力に関しても優れた能力を持つベースである事を理解する。

できる限り体力の消耗を防ぐため紙一重で回避するが、少し掠っただけでその攻撃は容赦無く皮膚を切り裂く。そして、その隙を潜ってプラチャオがストレートを剛大の顔に向かって繰り出す。

それは読めていた、とばかりに腕でガードする剛大。

筋肉の塊であるその腕は、先ほどプラチャオを退けた時と同じように、ダメージを軽減する。

だが。

「ツッ！」

剛大は違和感に気づいた。軽すぎる。力が全く入っていない。その理由にはつと気が付き、回避行動を取ろうとした。

「……？」

突然、視界がぼやける。敵の攻撃ではない。一体どうした事か。瞬間の事であるが、そのせいで対応が遅れた。

剛大の脚から鈍い音が響く。見るまでもない。脚には、ベースの影響でナイフの様に鋭くなったプラチャオの足が突き刺さっていた。そして、剛大が受け止めたプラチャオの腕は、右腕。折れていてまともな戦闘では使えようが無い部分だ。そう、それに攻撃力を要求するならば。

だが、それを考えなければいくらでも使い道はある。例えば、フェイント。

「確かに貴方は強い、欣將軍とタメを張れる程に。けれど」

「僕だって、単純なガチンコなら貴方<sup>オフィサー</sup>たちに負けていない」

脚にダメージを受け、姿勢が崩れた剛大の顔に、プラチャオは本命の左腕で拳打を繰り出す。

それをまともに受け、吹き飛ばされる剛大。

立ち技において世界最強を誇る格闘技、ムエタイ。その語源は、タイで使用される言語の一つ、クメール語で『1』。1対1の格闘を意味する言葉である。多様かつ高度な足技を中心に激しいパンチ、フエイントを特徴とし、するかつてタイで興った王国では軍隊で実戦格闘術として使われていた伝統的なものだ。

そして、彼はその優れた格闘技の才能を最大限に発揮できるベースを授かった。

彼の生物もまた、彼に類似している凶悪な力を持っている。

その脚力、時速50kmを叩き出し、怒り狂う彼から逃れる事など叶わない。

足に備えられた丈夫な刃物のような鉤爪、その標的となった獲物に生存を許さず。

空への憧れなどとうに捨てた。

彼もまた、一つの世界最強を有している。

それは、『世界で最も危険な鳥類』。

プラチャオ・ムアンスリン

MO手術”鳥類型”『ヒクイドリ』

剛大は受け身を取り、起き上がる。脚にダメージを受けたが折れてはいない。だが、戦闘に支障が出るほどに動きが鈍るのが自分でもわかり、舌打ちする。

「さあ、急いで僕を倒さないと、大変な事になるかもしれませんよ。」

「ちっ、あいつ、どこ行きやがった」

徐々に戦線が引き離されていく。懐から攻撃してくる相手。敵の攻撃、その全てが奇襲だ。

非戦闘員の二人には危険すぎるので少し距離を置いて逃げるよう言った。

だが、自分は剛大はんちようと合流しなければいけない。だというのに、敵の奇襲を寸前で察知し弾き、一撃やり返すために少し場所を動く。そのたびに剛大との距離は離れていく。

敵はカメレオンか？ それとも、変色できるイカか何かだろうか。いや、そもそも理屈から違う。

目視できないわけではない。気配が全く感じ取れないのだ。

先ほどから、相手の攻撃の直前になるまで全くその存在がわかららない。

目の前に相手が現れる。相手の動きによつて起こった風が体に触れる。そこで初めて、相手の場所を把握して反撃できるという状態だ。

「どうなってやがるんだ、こりゃあ……」

周囲を見渡す。どこにいるのだろうか。いざ相手が攻撃してきて、それに対応するという時になれば、相手は明確に目に見える姿をしている。だから、相手は見えなくなるベースではない。

見えないだけなら、気配や殺気を感じ取る事ができるし、そもそも攻撃の寸前にのみ透明化を解くというのはおかしい話だろう。

「360。どこにもいません、もちろん前方にも……っっておわっ！」

ぐるりと周囲を見渡して、正面に向き直った俊輝の心臓目掛けて機敏な動きで大振りのナイフを構えた男が襲い掛かってくる。

俊輝は内心大慌てだったが、必死に冷静を装って対策を考えていた。

ガスマスクのような顔全体にかかるものはめているので顔は見

えないけど、たぶん男。いや、今そんな事はどうでもいい！

まただ。きつと奴は、ずつと前方にいたに違いない。自分が気が付かなかっただけで。でも、なぜ？

疑問に思うが、今は対応するのが先だ。変態した事で腕から生えているオオキバウスバカミキリの刃でナイフを撫ぜるように接触させ、軌道を逸らさせる。よし、これで反撃を……

「ちっ」

だが、その俊輝の願いは残念ながら叶わなかった。

舌打ちし、身を翻し素早く離脱する男。俊輝の右腕は虚しく宙を切る。

「……くそ、今度はどつちに逃げたんだ？」

さつきからずつとこの調子である。相手は全く深追いをしてこない。徹底した一撃離脱、その上致命傷を与えるような大振りの攻撃も全く行ってこない。浅い一撃を繰り返し、あくまでじわじわと俊輝を追い詰めに来ている。

すでに十数回に及ぶ攻防の結果、俊輝の体にはいくつもの切り傷が付き、不運にも甲皮が無い部分に当たった3カ所からは血が流れ出していた。

「げっ、班長押されてねえかこれ!? そろそろコイツに構っている暇も無くなってきたな」

背後を振り向き剛大の戦闘を見て俊輝は焦っていた。

何か、この状況を打開する策はないのか。

時間稼ぎをする。無理だ、このまま時間を稼いで有利になるのは向こうだ。

ここから猛ダッシュ、敵を無視して班長の元に急ぐ。いや、そうなったら相手は致命傷になる一撃を放ってくるかもしれない。

静かな戦場で、じりじりと時間だけが過ぎ去っていく。そして時たまその静寂を破るナイフとオオキバウスバカミキリの攻防。

もう片方では、高い脚力を持つ2つのベースの激突。



だが、二つとも徐々に押されつつある。  
日本班分隊の連合軍への合流は、ここに来て現実味を失いかけてつ  
あつた。

## 第22話　ロシアと裏切り者の憂鬱

「ふう、あとどれくらいで到着でしょうか」

一旦制圧した基地を離れ、自国の宇宙艦に護衛を置き、ロシア・北欧第3班は第5班が制圧した新たな本部への道を急いでいた。

第3班は、班員を集める時に生じたある都合上、16人中13人が戦闘員という構成になっている。本部へと提供するのも、その豊富な戦闘員だ。追加戦力としての色合いが強く、ランキングが半分以下でもある程度ならテラフォーマーと戦えるほど戦闘能力を重視して構成された裏アネックス計画とはいえ、この戦闘員の数は相当である。

現在拠点へと向かっているのは班長を含んだ8人。実際に本部に待機させるのは5人なのだが、班長であるエリシアと2人の副官が万全を期して、という事で護衛についているのである。

戦闘員を護衛する戦闘員。なんともいえない状況である。

「しかし、なんとも嫌な情報を聞いちゃいましたね、お嬢」

「はい……それに、あの人たちが私達まで裏切るなんて、予想外の事態なのですよ」

無意識の内に足を速める副官の男とそれに早足でついていくエリシア。

付き従う班員もそうなのだが、全体的に表情が硬い。

「まさか、αMO手術持ちを送り込んできていたとはな」

各国の幹部搭乗員のみが施されているαMO手術。本来ならばそれはドイツの独占技術であり、術式に使用するとある特別な材料はドイツの技術でしか生産できない。

逆に言えばその材料さえなんとか出来れば後は普通のMO手術と同様の方法で手術を行う事が可能なのだが。

それが不可能であるため、αMO手術はドイツからその材料を買い

取って各国で行う事になっている。

「ロシアではわたしを含めて成功例はたった6例、わたし以外の5人は地球で留守番していますね」

「中国での成功は確か4例、公開情報ではあの欣って奴がその内の一人だったはずだ」

成功確率0・3%。なぜ次代の技術であるのに逆に成功確率が下がってしまったているのか。

それは、開発者が戦闘能力の追求に走ったから、その一言に尽きる。通常のMO手術では適性を得られない一部のベース生物への適合。それは、人間に移植するにはあまりに複雑な能力を有している生物を始めとした多種の生物が当てはまっている。盗刺胞という特性を持つ『ムカデミノウミウシ』や、24形態にも及ぶ変化を見せる『フイエステリア』などはその代表例である。

その中には、各国が戦力化を望んでいながらも諦めていたベースが多数あった。それに成功するかもしれないのだ、賭けてみる価値はある。

結果として4ケタを上回り5ケタに到達するほどの屍の上に数十人が生き残り、その中でも選ばれしベースに適合した人間のみが、この火星の戦線に幹部搭乗員オフィサーとして立っている。

「はい、レナートさん、お水です」

「ありがとう」

エリシアが首に下げていた水筒を手渡されたのは、副官の一人、レナートと呼ばれた男。第3班の実質的な副班長であり、顔に多くの古傷を持つアジア系の顔つきをした大男だ。

華奢で低身長のエリシアとU—N—S—A支給の戦闘服の上からでもわかる筋肉を持ち、身長は190を超すレナート。

どちらが班長なのかパツと見では明らかにレナートに軍配が上がりそうなものだ。

「……何かがおかしい気がするんです」

エリシアがぽつりと呟く。

それに対し、レナートは少し考えを巡らす。

何かに違和感がある。だが、それが何なのか、答えまでには至らない。

捕虜の情報では火星で待ち構えていた裏切り者勢力の中にもαMO手術を施されている人間がいるという。

だが、MO手術を超える『兵器』をそう簡単に野放しにしておくだろうか。

非常にコストが高いαMO手術を1回でも成功させるには大金と多くの尊い犠牲が必要だ。

中小国が参加できるようなものではない。そもそも、材料はドイツだけしか生産できず、そこから輸出されているのだから、どの国にどれだけの材料が渡ったのかは嚴重に管理され、完全に把握されていないはずだ。

それに、中国が買い取った材料の数は他国と大差ない。成功者数も特別多いわけではないだろう。地球で留守番している各国の手術成功者の情報だつて出ているのだから、今現在火星にいる裏切り者勢力のαMO手術被術者はどこからともなく湧いてきた事になる。

「もしかして、中国はαMO手術の成功率を高める技術を持っているのか……?」

中国のαMO手術成功者数は他の国と大差ない。だが、成功率を高める技術を有していて、それで多く成功した分の人間を隠蔽したのだとしたら。納得がいくのではないだろうか。

だとしたら誰がその技術を開発した? 我が国<sup>ロシア</sup>のある研究者がそんな技術を開発したという話をどこかで聞いた事があるような気がする。若き天才と言われていたその人間は、かつてとある禁忌の研究に参加し、その研究が開始された直後に証拠隠滅のために国から命を狙われていたという。まさか、その技術が流出したのではないだろうか。いや、それは思い上がり過ぎるか。そもそもこれ自体、ただの都市伝説だ。

禁忌の研究。ちらりと横を歩く少女を見て、レナートの頭にある予想が浮かぶ。

考えすぎか、とレナートは首を振り、周囲を警戒しながら歩みを進めるのであった。

「あいあい、はい、いえつきー。了解つす」

岩陰で、通信機を耳に当てている金髪の男。その隣には、その男の保護者のように立っている銀髪の女性とそれを護衛するかのような姿勢を固くする軍服の青年。

女性は体調が優れないのか杖をつき、時々咳をしている。

「どうでしたか、詳細な作戦内容は」

女性がにこにこしながら、少し退き気味に男に話しかける。

その様子は、内容に興味があるというよりは単に話のタネが欲しいだけのようにも見えた。

「あ？ てめえには別の命令があるだろうが、アナスタシア。俺の手柄でも狙ってんのか？」

だが、金髪の男はそれに対して乱暴に返し、杖を足で小突く。

支点が変わり、ぐらついて倒れそうになるアナスタシアと呼ばれた女性。

「何をする、バイロン！」

青年がアナスタシアを庇うように前に立ち、『薬』を取り出す。

それを見たバイロンと呼ばれた男も対抗するように自分の薬を取り出すが、それは足を引きずりながら仲裁に入ったアナスタシアによって制止された。その手には、粉末型の『薬』が握られている。

「二人とも、任務を忘れたらいけませんよ。それにバイロンを叱ってあげないでください、子どもはこれくらい元気な方がいいのです」

穏やかな顔でバイロンの頭を撫でながら、青年を鎮める。

「ケツ、お前ら、俺の邪魔をすんなよ？ 特にアナスタシア、あんたなんて俺に敵うわけがないんだ」

「まだ続けるつもりか、バイロン」

「アンタのベース、知ってるぞ。アッチの手術のくせに『マンボウ』な

んだってな！ その病弱っぷりにも納得がいくってもんだぜ！」

馬鹿にするようなバイロンの口調に、二人は何も言わない。青年は軽蔑の目を向け、アナスタシアは静かに微笑んでいる。

「……ケツ、お前らの出番なんてないぜ、俺が全部片づけてきてやる」  
その空気に耐えられなくなったのか、バイロンは吐き捨て、その場を去って行った。

「やれやれ、いくら表面上は対等だからと言って、あの態度は問題ではないですか、ドクター」

バイロンの背を見送り、青年がアナスタシアに話しかける。

「そうですね、昔は素直で聞きわけのいいよい子だったのに」

「もうすでに影響が出ているのですか」

青年の質問に、アナスタシアはこれまでとは少し色の違う、寂しそうな笑みを見せる。

「ええ、成功率と引き換えとはいえ、悲しいものですね」

## 番外編 そうだ、アームレスリングをしよう

「……小吉さん、これはなんでしょう？ アシモフさんが1位、小吉さんが6位……」

U—N—A—S—Aの夜は長い。実働部隊であるアネックス1号&裏アネックス計画の班員達は戦闘訓練や火星に関する様々な知識を学び、実働部隊を援護するため、一刻も早くA・E・ウィルスの脅威から地球を救うため、様々な目的で研究員たちは栄養ドリンクと仮眠用枕を手にそれぞれの区画で努力を続けている。

その職務練から明かりが消える事はない。

「ん？ ああ、それね、この前やった幹部搭乗員対抗腕相撲の結果だよ」  
そして、特に忙しいのが、彼ら。アネックス計画の各国部隊を率いる幹部搭乗員<sup>オフライサー</sup>である。

激しい訓練を日々行い、各国の思惑が入り乱れる会議に参加し、自国が最大限の利益を得られるような計画を立て、表裏共に最強クラスのベース生物を有する彼らは、非常にハードな職務を行っている。

「そうですね。それよりもこのダンボール、二号室に運ばばよろしいのでしょうか？」

「ってスルー!? 今の流れだったらもっと別の回答をしてくれてもいいんじゃないか!？」

「……仕事の途中ですので」

その班長の中の日本人二人。『アネックス一号』艦長、小町小吉と『裏アネックス計画』日本第2班班長、『島原剛大』。

彼らはダンボールを持っては他の部屋に運ぶという地味極まりない業務を行っていた。

「ああ、もう止めだ止め！ 今日の業務は終了とする！ 剛大君、裏の方の幹部さん達を集めてくれ！」

「わかりましたが……何をするのですか？」

……三時間後。

いつ終わるとも知れないダンボール輸送任務に小吉が叫び、終了を宣言する。

真面目だが、それ以上に上司の命令に忠実な剛大もそれに従い、運ぼうとしていたダンボールを下す。

「決まってるだろ！ そりゃあ」

その後始まった小吉の解説に、剛大は無表情のまま頷く。なるほど、それは良い案かもしれないと。

「あらあらー……面白そうじゃない……」

小吉が話を聞いていた直後、背後から一人の老婆が姿を見せた。全く気配を感じ取れなかった二人の肩がビクッと震える。

裏アネックス計画ヨーロッパ・アフリカ第6班班長

ローマの恐怖” 悪魔に最も近い女エレオノーラ”!!

「エレオノーラ……いつの間に」

小吉が驚きで鳴り響く心臓を抑えながらエレオノーラに質問する。

「うふふ、『……小吉さん、これは』の辺りからですわ、艦長」

「かなり前じゃないかそれ！ 手伝ってくれよ！」

「<sup>たお</sup>嫺やかなレディーに、しかもこんなよぼよぼの年寄りに力仕事を任せないで頂戴」

「エレオノーラさん、話を聞いていたのなら早い。参加しますか」

突っ込みどころは満載だが、それをあえて無視する剛大。

「ええ、やりましょうか、『アーム・ランキングと裏アネックス編』！」

裏のありそうな暗い笑みを浮かべるエレオノーラに不安な顔を突き合わせる日本班長二人。

こうして、彼らの長い夜が幕を開ける事となった。



「班長！腕相撲するんだってな！俺も見届けますよ！」  
「すみません班長、うちのバカが見に行く見に行くって聞かなくて……」

戰士たちを待つ三人の元に訪れたのは、男女のペアだった。

深夜テンションで盛り上がる青年と、その頭をべしべし叩きながら剛大に謝る青年と同じ年くらいの女性。

「えーと、2班の俊輝くんが静香ちゃん……だったかしら？」

「はい、そうです！」

「はい……」

主に俊輝が地味に嫌そうな目を剛大に向けられるが、そんな事はどこ吹く風。

興味深そうに周囲を歩き回っている。

「うおお、すげーぞ静香！開いてるダンボールの中に堂々とエロ本があるぜ！何々、『私物 膝丸 燈』……すまねえ燈、お前の秘密、守れなかったよ……」

いきなりガムテープが外れて開いているダンボールの中と貼つてあるタグを覗き込み、中身と所有者を堂々と言い放った後、天を仰いでさめざめと涙を流す俊輝。凄まじい情緒不安定っぷりである。酔っているのではないだろうか。

「むう、艦長と剛大君からの招集、何事かと思っただがこんな事だったとは……」

裏アネックス中国・アジア第4班班長（代理）

この筋肉がすごい！裏アネックス編く1位”不動の欣”!!

次にやってきたのは、筋骨隆々の武人。オールバックにした短めの髪と相まって、凄まじい威圧感である。

中国班班長、欣。

「すまないな欣！ 劉さんも参加したんだ、我慢してくれ！」

「アームレスリング、ですか。興味深いです」

「ねえプラチャオ君、私達こんな所においていいのかな……？」

欣の背後で並んでいた二人、長めの髪を三つ編みにして後頭部に流した礼儀正しそうな青年と少し気弱そうな黒髪の少女が顔を見せる。

最も、少女の方はなんかヤバイオーラを出している老婆、ムキムキの大男3人、なぜだか走り回っている馬鹿、それを追いかける女性という謎のメンバーにすっかり萎縮してしまっているが。

「二人とも、私の勇姿をしっかりと見ておくのだぞ」

腕まくりをする欣。案外ノリノリなのである。

「……馬鹿馬鹿しい、私は帰るぞ」

裏アネックス計画ドイツ・南アフリカ第5班班長

この筋肉がすごい！〜表裏アネックス混合編〜167位（男女混合）”毒薬のヨーゼフ”!!

次に、部屋を覗き込んだ後、何かを察した顔でそのまま通り過ぎて行ったのは丸眼鏡に白衣というステレオタイプな博士、ヨーゼフ。

慌てて小吉が外に出てヨーゼフを呼び止める。

小吉とヨーゼフに付き従っていた青年の説得の結果、渋々と部屋に戻ってくるヨーゼフ。

「ダニエル君、君が私を裏切るとはな……」

「誤解ですよ博士！ こんな楽しいイベント参加しなけりや損ですつて！」

ダニエルと呼ばれた、見るからに生真面目なドイツ人、という風貌の青年は笑顔で俊輝が作り上げた即席観客席（ダンボール製）に腰を下ろす。

ーそして

「剛大君、艦長、俺の存在忘れてたでしょ！ エレオノーラさんから連絡来ましたよ！」

裏アネックス北米第1班班長、ダリウスがノリノリでやってきた。顔は赤く染まっただけで、飲み会の最中だったのでは……という予想を抱かせ、小脇に抱えている酔いつぶれた二人の部下がその予想を確信へと変える。

「こんなよるおそくにーなんのようなのですかみなさんー」

眼を擦りながらふらふらと入っていた銀髪の少女、裏アネックスロシア・北欧第3班班長、エリシアと彼女をここまで連れてきたと思われるスキンヘッドの強面の男。

時刻は午前1時30分……今ここに、戦いの火蓋が切って落とされた！

ー第一試合 剛大VSヨーゼフ

「では私はこれで」

「待って博士！ これ総当たりだからー！」

無表情のまま腫れた手をぶら下げ、不機嫌オーラを出しながら部屋を出るヨーゼフ。追う小吉と剛大。

ー第二試合 エレオノーラVSエリシア

「んー！ んんー!!」

顔を真っ赤にして必死に力を入れるエリシアと、微動だにしないエレオノーラ。その顔は孫を慈しむ祖母のように穏やかだ。皆のひと時の癒しタイムである。

―第三試合 欣VSダリウス

「W a s s y o i !」

「英語っぽく言えばアメリカンな雰囲気出ると思うなよ若造」

思いつきり机に叩きつけられ、悶絶するダリウス。観客席の全員が目を背けた。

一回目の組み合わせで、早くも力の差が現れた。

すでにぐったりしているエリシア、腫れた手を水袋で冷やしているヨーゼフ、手を押さえてうずくまっているダリウス。

そう、彼らはわかっていなかったのだ。アネックス計画の幹部はベースの強さに加えて個人の能力も同時に評価が高い。だから、幹部搭乗員は4人がマツスルを誇る男性、アドルフこそ彼らと比べれば劣るものの、決して平均を下回っているわけではない。他が強すぎるだけなのだ。唯一の女性であるミッシェルもその生い立ちから筋力は決して他の5人に劣らない。

だが、裏アネックスは違う。例外は約1名いるが、ベースを重視して集められた彼らにとって本人の身体能力は二の次。立派な研究室栽培のモヤシ、ヨーゼフと生い立ちの関係もあって身体能力普通以下、未成年の女の子というそれだけで圧倒的な差、しかも時々吐血するという嫌すぎるオブション付きのエリシア。あと碌に鍛えていないダリウス。

他の三人は身体能力が高いが、それと比べて弱すぎる。

なので、不機嫌な顔で敗北するヨーゼフ、必死に頑張るが結局力尽きるエリシア、もうなんか目が死んでるダリウスという三人の構図が試合のたびに見られる事となった。ダリウスは二人に勝つてはいたが。

その後は剛大と欣の激しく、暑苦しい戦争かと思える程の戦いの末に欣が勝利したり、ヨーゼフが怪しい薬を飲もうとして小吉に押さえつけられたりと見どころはあった。そして、最後の三戦である。

エレオノーラVS剛大

「うおおおおお！」

「おほほほほほ！」

凄まじい力と力のぶつかり合い。両者、一步も退いていないし退く気もない様子だ。

観客席でも俊輝と静香が剛大を応援し、息ピッタリで盛り上がっている。

だがその均衡は徐々に崩れ始めた。歳から来るスタミナの差なのか、単純な腕力の差なのか、剛大の腕がエレオノーラの腕を押し、傾けていく。

あと3秒、このペースでいけば剛大の勝ちだ。

客席も、他の搭乗員も結果を察したその時。

剛大だけが、それを確認できた。エレオノーラの目の色が変わる。

どこか、ぼんやりしたような、不思議な目だ。そして次の瞬間。

「ぬおおおっ!?!」

一瞬で戦局が逆転。剛大の腕が机に叩きつけられる。そして砕ける机。飛び散った破片の一つが俊輝の頭を直撃し、俊輝がその場にどさっと倒れる。

何が起こったのかわからず、目を白黒させる剛大。それに、立ち上がったエレオノーラが楽しげに告げた。

「ババアの負けず嫌いを舐めちゃいけないよ、若人ちゃん」

ー欣VSエレオノーラ

実質の決勝戦。どちらも他4人に対して全勝している。ここが盛り上がり場だ。

中国班の二人は緊張した顔つきで戦いが始まるのを見守り、他の皆も足を延ばして観戦している。

静香は俊輝の看病中である。

「それでは開始しますよー。よーい、どん！」

瞬間、衝撃波でも起こったのではないかという激突。お互いの筋肉がうなりを上げ、目の前の敵を全力で押し倒さんと力を与えている。エレオノーラはやせ身のはずなのだが、どこからそんな力が出ているのか。

U—N—S—A—7 不思議に入れてもいいのではないだろうか、という疑問だ。

「悪いが婆さん、私はこの戦いに勝って、班員達に力を示さなくてはならん！」

「ほほほ、私の方は見に来てくれる班員がいなくてよ！」

寂しいなそれは……と観客席の空気がブルーになるが、戦いは熱い。

だがやはり、剛大に押し勝った欣とエレオノーラでは欣が優勢だ。

そして再び、エレオノーラの目が……

と思った瞬間、エレオノーラの腰から響く鈍い音。

それと同時に体は崩れ落ち、手はあっさりテールと地に沈む。

えっ？ という疑問渦巻く中、駆け付けたヨーロッパ班の班員達が担架でエレオノーラを輸送していった。

決勝でのまさかのぎっくり腰。無理が祟ったようだった。こうして決勝戦はなんだか微妙な雰囲気の中、幕を閉じた。

ーヨーゼフVSエリシア

そして残っていた最終戦。最弱決定戦である。

成人男性と未成年の少女、お互いひ弱なら、どっちに軍配が上がるかは明らかだ。

エリシアは最初からわかっていたとはいえ度重なる負けに少し涙目になってしまっている。

その場にいる全員の目が、ヨーゼフに向けられる。

「(どうすればいいのかわかってるだろうな、博士!)」

わかっている心配するな、と無言で頷くヨーゼフ。

「よいい、スタート!」

「ふんッ!」

「あう」

ヨーゼフの本気。一瞬で沈むエリシアの細く、小さい腕。

「ふざけてんじゃねーぞ博士え!」

「もうちよつと容赦してあげるとか……した方が……」

「お嬢になにしやがるこの×野郎!」

ブーイングと野次が飛び交う。この博士は難しい論文は読めても空気が読めないのだ。

「エリシア君は少し腕が細すぎるな。栄養が足りていないと見える。もう少し肉類を中心に多くを食べた方がいいようだ」

「は、はい……」

どうやらあの皆の目は、アドバイスしてやってくれ、という意味に捉えていたらしい。

各国のお客さん方は帰り、やはり微妙な雰囲気の中、片づけ作業に入る小吉と剛大。

「結局片づけで手間ですね」

「まあいいじゃないか、それに剛大君」

「はい、なんででしょうか」

「これだけ仲良くなれば、各国班が一つになって任務をこなせるんじゃないのか?」

小吉の一言で剛大は理解する。

ああなるほど、この人は、自分達裏アネックスの幹部に仲良くなつてもらいたかったのか、と。

自分達裏アネックスの真の目的、それは『裏切り者の排除』。けれども、その裏切り者なんていないのがベストに決まっている。

「はい、そうありたいと願っています」

「じゃ、俺はこの辺で」

「お疲れ様です、小吉さん」

小吉が帰った後、剛大はようやく目を覚ました俊輝、看病していた静香、そして。

部屋の外からこっそり様子を伺っていた拓也に声をかけた。

「お前ら、今から食堂にでも行くか？ そうだな、アジアの良心ともいえる具なんてほとんどないラーメンくらいなら作ってもらえるかもしれない」



## 第23話 群勢

「気配は、全くない。姿は見える。でも、視界に入っても存在感のせいで感知できない」

俊輝は先ほどと同じ攻防を繰り返しながら、自分の考えを整理していた。敵のベースは一瞬見えた鱗のようなものからして魚類型。あ

のガスマスクの様なものは、素顔を隠して印象を薄くするためか。武器は何の変哲もない大振りのナイフ。という事は、ベース生物自体の攻撃性能は低いと思われる。

「おっと、危ねえ」

思考の最中に左腕を狙って繰り出されたナイフを危なげながらも避け、避けられると分かっているが変態によって腕に発現したカミキリムシの大顎であるブレードで反撃する。

何かに当たった感触は無い。

「……時間稼ぎか？」

どこにいるかわからない相手に対して俊輝は問いかける。反応は無いが、少し空気が揺らいだ気がした。

凶星か、と納得する俊輝だったが、だからといって今自分の力で何かできるというわけでも無い。

「だからって俺にはどうする事もできねえや、班長の方が終わるまではまあ付き合ってやるよ」

死角から襲い来るナイフを迎撃し、一步下がる俊輝。

戦いは、静かながらもまだ終わりを見せなかった。

もう一方では、両者常に動き続ける果てのない攻防が行われていた。

ムエタイの強力な武器、肘と蹴りを最大限に用いた連撃。

それを剛大は、ある時は自身の筋肉で受け止め、ある時は絶妙の夕

イミングで受け流す。

パワーでは鳥類とアリ、明らかに剛大に分があるが足にダメージを受けているので踏ん張るのは難しい。

一方、片腕を折られているプラチャオは攻撃面に大きなハンデを負っている。

それでも幹部オ搭乗員ファイと互角に打ち合っているのは、彼の實力の高さを表していると言うべきか。

「君は先ほどから私にトドメを刺そうとする攻撃をしていないな。何故だ？」

「……」

その答えは、おしゃべりするヒマなどあるのか？ とでも言いたげな蹴りと沈黙。

自分を警戒しているのか、それとも他に目的でもあるのか。

剛大の薙ぎ払うような蹴りを姿勢を低くして髪に掠めるほどのギリギリの高さで回避し、現在体を支えているもう片方の足に蹴りで払いを繰り出すプラチャオ。

それを剛大は、片足だけで跳躍して回避する。自身の体長の20倍の距離をジャンプする跳躍力。

実際のトビキバアリは、それをどのように使用するのか。

蹴り？ いや、それは人間の技術だ。

逃走？ いや、彼らは退く事を知らぬ孤高の狩人である。

プラチャオは剛大の意図を察し、素早くその場を離れる。空を見ている暇などない。

だが、離脱した後もプラチャオは移動後の地点からさらに横に飛びのいた。

必死の回避。姿勢が崩れるのも厭わずにプラチャオは恐怖を感じ、転がるように体を動かす。

その直後、プラチャオが一度回避した移動後の地点に剛大の一撃が突き刺さる。

地面の岩が砕け割れ、いくつもの破片が飛び散った。

トビキバアリの跳躍、それは専ら、哀れな獲物に襲撃をかける時に使用されるのだ。

プラチャオの額に冷や汗が浮かぶ。自分があの場で本能的に危険を感じていなかったら。

今頃、自分の名称は肉塊へと変更されていただろう。

足にダメージを与えたはずなのに。もう回復しているのか。

理由が何であれ、剛大は足を用いた技を使用することができる。

自分の片腕は使い物にならない。

プラチャオは自分の未来を想像する。姿勢は崩れたまま、自分が立ち上がるうとした瞬間に一撃が叩き込まれるだろう。猛毒の針、鋭い劔、岩を容易く砕くパワー。どれが来ても、終了だ。

この勝負は、完全に自分の負けだ。だが。

「この戦いは、僕の勝ちです、剛大殿」

何らかの気配を感じ、剛大が空を見上げる。そこにあつたのは、猛然と向かってくる一つの鳥のような影と、それから投下された何か。

プラチャオと俊輝の相手が二人に勝負を仕掛けたのは、彼ら日本班を連合軍へ合流させない事。それともう一つ。そのために、プラチャオ達は時間稼ぎをしていた。そして、その理由が明らかとなる。

その何か、は剛大が目で追う中、プラチャオの横に着地し、起き上がった。

戦闘服に身を包むのは頑強な筋肉。オールバックにされた短い髪は、周囲に暴力的ながらも規則だった雰囲気を与えている。

「お待ちしております、欣<sup>キン</sup>將軍」

中国・アジア第四班班長代理、欣。

班長不在で無くなった今、中国班の元最高戦力は、前線に現れた。

「久しぶりだな、剛大君。その後、調子はいかがかな？」

「ええー、ちょっと、これ冗談きついんじゃないか」

俊輝が間の抜けた、どこか諦めすら感じられる表情で呟く。

目の前の光景に、彼は剛大の方を確認する事すら忘れていた。

その視線の先には、裏切者勢の一団。7・8人はいるだろうか。

なんとという事だ。自分を足止めしている理由は、これだったのか。

そりやそうだ、時間稼ぎをわざわざするんだったら、しつかりとした勝算があるに決まっているのだ。

非戦闘員の二人は逃がした。今頼れるのは自分の力と班長、剛大のみ。

ただ、自分のベースはタイマンを想定したもの。1対多数は少し厳しい。

しかも、何か所か流血していて、眩暈を感じるくらいの状態だ。

それらを総合的に判断して、俊輝は考える。

すでにその思考は、『どう生き抜くか』ではなく『どれだけの数を道連れにするか』へと変わっていた。

生への執着が無いわけでもない。ただ、今回はもう終わりだろう。驚くほどあっさりとして、俊輝は決断していた。

「さあ、同時にでもなんでもかかってこいよ。ただじゃ死んでやらねえけどな！」

変態を始める眼前の敵を見据えたその時、奇妙な物を俊輝は見た。

黒とオレンジの混ざった雪が、空から落ちてくる。

「……はは、そういえば今年のクリスマスにはあいつに何か買ってやるって約束したっけ」

ついに貧血からの幻覚かと苦笑する。

だが、その雪のような物体が裏切り者の一団に触れた瞬間、変化が現れる。

集団が、地に膝をつき、次々と苦しみだしたのだ。気配を消していた俊輝の相手も、大部分は回避したもののその雪のようなものを少しだけ浴び、ふらふらしている。その姿は、もう俊輝の目にも見えるようになっていた。

ここで初めて、俊輝はこれが夢でない事に気が付いた。

「これは……」

ふと空を見上げると、その雪のようなものは俊輝の上にも降り注いでくる。

これ、結局自分も終わりなんじゃないか。そう俊輝はぼんやり考えていた。

欣とプラチャオ、二人にじりじりと間を詰められる剛大。

ここで戦局が逆転してしまったか、と冷静に考える。

「ウラアツ！」

突然の掛け声と同時に、欣の背目がけて槍のように長いものが繰り出された。それを欣は腕で受け止める。

それと同時に側面から巨体が体当たりし、その姿勢を崩す。

「いやー、あの二人が慌てて戻って来るから何かと思ったら」

プラチャオが想定外の事ながらも慌てて対応し、その二人に対して攻撃を仕掛ける。

それを受け止めながらも、そのおしゃべりは止むことがない。

「なんか班長と俊輝っちがマジパナイ状況らしいから助けにきたんすよ」

国籍：日本

20歳 ♂

179cm 84kg

MO手術 ”昆虫型”

『コガシラクワガタ』

裏マーズランキング：13位

俊輝は謎の雪のようなもので死を覚悟し、目を閉じたがいつまで経ってもその瞬間は訪れない。

ぽすっという効果音が聞こえてきそうに優しく、静かに自分の肩にかかる重量。

怖々と目を開けるとそこには自分に降ってくる雪を遮る黒とオレンジの翼。

「あの約束、絶対守ってもらうからね」

そして、その肩に乗っていたのは、俊輝に対して少しいたずらな表情を浮かべる幼馴染の姿だった。

御崎 静香

19歳 ♀ 148cm 44kg

専用装備：装着型粉碎散布装置『雷の卵』  
サンダーエッグ

MO手術 ” 鳥類型 ”

ズグロモリモズ

『裏マーズランキング』 8位

## 第24話 魔毒

——誰が、この生物がこの性質を有していると想像しただろうか。

空を領域とする鳥、ある種は雄々しく獲物を狩り、ある種は可愛らしい容姿と美しい鳴き声で人間を楽しませる。人の赤ん坊すら掴んで飛ぶ事のできる筋力。人間の声を覚え、それを再生できる声帯。大型動物の血を吸う狡猾さ。その特性は多種多様という他無い。

しかし、この鳥は、オレンジと黒の美しい羽を持つ小鳥は、想像し難い特性を秘めていた。

それは、極めて強力な毒性。

もちろん、毒を吐きかけるなど攻撃的な真似はしない。

だが、その羽と筋肉には、生物毒でトックラスの強さを有するものが隠されている。

もっぱら防衛の為に使われるその毒素。では。

それを、科学の力を借りて攻撃的に使用したとしたら？

「しかしあれだな、静香」

「何？」

「相変わらずえげつない攻撃だ」

裏切り者の援軍達は次々と地に伏せ、それにも容赦無く黒とオレンジの雪が降り注ぐ。

それは、一部だけを風景に切り取れば幻想的に見えない事もない。攻撃を受けている本人たちにとっては地獄そのものだが。

それを、変態した事によって軽くなり、俊輝とその肩に乗っている静香が見守る。



猛毒の雪は俊輝の上にも容赦なく降り注いでいる。静香が羽を傘替わりにして守っていななければ、俊輝は今頃裏切り者達と同じ末路をたどっていた事だろう。

「おっと、まだコイツが残ってるんだったぜ」

静香を狙って繰り出される、投擲されたナイフ。それを空中で弾き飛ばし、俊輝は大げさにファイティングポーズをとる。

「ありがと……ってちよ、動くなバカ！ あたしの羽から離れたら死んじやうでしょ!？」

「うお、あぶねっ!」

そのポーズは、いきなりの俊輝の動きで肩から落ちそうになった静香の一声ですぐに止める事になってしまったが。

「……参ったな、これ、このまま動けないでまた硬直戦に突入する感じか？」

「いいぞ、タケシ!」

『トゲクマムシ』の丈夫なクチクラと100kgオーバーの巨体の体当たり。

たまらず、欣がぐらつく。それを好機とばかりに健吾が『コガシラクワガタ』の長槍を繰り出す、それを受け止め、弾くプラチャオ。どのような強力なベースでも、変態できなければただの人。

ここで仕留める。意志を持った猛攻が、欣を襲う。

近接戦闘での多人数攻撃は、タイミングを上手くとらないと味方の攻撃を邪魔したり邪魔になったりと難しい。しかし、健吾と武、もう一つの偵察班の二人はそれを堅実にこなしていた。

「見事な奇襲だ、日本の若人よ。だが、まだ甘い」

さらなる追撃を仕掛けようとする武だったが、その体当たりは、あと少しというところで止められる。

正確には、自分で止めたと言った方がよいのだろうか。

「カハッ……!？」

武の腹に、欣のガードした腕が、正確には、その腕から生えている無数の棘が突き刺さっていた。

馬鹿な。変態なんてしている暇はなかったはずだ。その隙も与えていない。ならば、その理由は。

「紅式手術……いや、違うな」

健吾が一瞬仮定をつぶやき、すぐに否定する。

紅式手術。ヨーゼフ経由で剛大、日本班に情報が伝わったそれは、被験者の少女からその名が取られた中国の独自技術。『不完全変態手術』とも言われるそれは、変態を行うのに必須な『薬』を使わずとも常に能力を使用できるという特性を持っている。

しかし、それには目に見える変化はほとんど無い。今ここにいる日本班の彼らは知りえない事だが、アネックス計画第四班班長、劉のベースは『ヒョウモンダコ』。変態すると3本の触腕が生えてくる。

だが、平常時にはその触腕は存在しない。つまりは、薬を用いて変態していなければ見た目そのまままで各種能力だけが向上しているという状態なのだ。哺乳類型の嗅覚など一部の能力は使用できるが、それは外見上の変化とは関係がない。

つまり、棘が生えているという明確な外観の変化が起こるという事は紅式手術の影響では無いという事だ。

もう一つだけ、心当たりが健吾にはある。火星への旅の途中で、剛大から聞かされていたものが。

「……αMO手術か」

成功率0・3パーセント、生きる事を放棄しろと言わんばかりのその手術。

その長所は大きく分類して三つ。

通常のMO手術で適合不可能な特殊なベースへの対応。

ベース生物への高い親和性による戦闘能力の向上。

そして。

MO手術より大幅にベース生物側に偏った細胞のバランスが可能とする、薬未使用時の変態。

薬を使わずとも自由自在にオンオフの切り替えが可能な、体の一部のみ、または薬使用時より大幅に弱体化はするが全身の変態。それこそが、αMO手術の最も大きい恩恵。

奇襲にも対応でき、薬を持っていない状態でも自衛が可能な戦闘能力を発現させる事ができる。

「下がれ、タケシ」

腹に傷を受けながらも武は後退する。その隙に、欣は粉薬のようなものを口に含み、変態を行った。

自分たちの持っていた大きなアドバンテージ、敵の未変態。それを捨ててまで下がった理由。それは。

「班長がつつこんでくるぞ」

一度変態を解き、再度変態を行って足の傷を治した剛大の強烈な飛び込み蹴りが、欣の胸に直撃する。

本来ならば即死は免れない一撃。だが欣は、即座に受け身を取り、起き上がる。

健吾と武、二人はプラチャオとにらみ合い、攻防を始めた。

右腕を負傷しているとはいえ、相手は格闘技の達人、二人は全く油断をしない。武は腹を刺されているのだ。

そして健吾も、長い大顎による中距離戦を得意とする『コガシラクワガタ』は素早い動きのインファイターである『ヒクイドリ』のプラ

チャオと相性の悪い事は理解している。

それは、プラチャオと同じ考えだった。うかつに接近戦を仕掛けようとすれば、あの長い槍の餌食になりかねない。一度懐に入り込めば勝利は確実だが、今は2対1。あの大男が邪魔してきたら、最悪自分は何もできずに死ぬだろう。

一刻も早く自分たちのリーダーに加勢したい。その考えは3人も同じ。

だが、戦いは接近を試みるプラチャオを健吾が大槍で食い止め最適射程を保つ、その繰り返しで一向に進もうとしない。『ヒクイドリ』の脚力ではクマムシの装甲を抜かれるかもしれないと考え、武はプラチャオには挑まず援護に徹している。

どちらが有利とも言えない戦い。このままでは、リーダー同士の決着がついてしまう。そうなれば後はどのようになるのかは明らか。焦りを抑えられないまま、戦いは続く。

(……硬いな)

剛大は自分の足の感触を確かめ、敵が防御力に優れているベースである事を確信した。

それは、甲殻やククラの鎧とは別の硬さのように感じられた。単純な硬度で受け止めるのでなく、なにやら衝撃を分散しているような、そんな感覚。

そして、足に数本刺さった棘。穴が開き、少量だが出血している。物理攻撃は中々通らない厄介な相手のようだ、と判断し、剛大は姿勢を戻す。

「今のはなかなか応えたよ。流石のパワーだ」

反撃に繰り出される欣の拳。即死するような猛烈な力は感じられない。だが、本人の筋力が高いためそれは十分な脅威だ。

剛大はそれをギリギリの位置で見切り、回避して拳を叩き込む。

全身を覆う棘による防御は厄介だが、完全というわけではない。左

肩に繰り出した拳は、その肉では無くそこを守る棘をへし折り、取り除いた。

それとほぼ同時に欣のもう片方の拳が剛大の腹に突き刺さる。プラチャオより重い一撃。だが、剛大はあえてそれを受け止めた。

そしてそのまま、渾身の一撃を再び左肩に放つ。

棘があれば、それを恐れて本能的に力をセーブして攻撃してしまふ。

だが、棘を事前に取り除いておいた今、その心配は全く無い。

トビキバアリの脚力、腕力を惜しみなく使用したその高速の拳打は、打撃と言うよりも切断という勢いで欣の左肩から腕を引き裂き、千切り取った。

吹き飛ばされ、地に落ちる左腕。これでいける。人間の攻撃、防御の要である腕を取った。

そして、それは左側。今なら、心臓ががら空きだ。

姿勢を低くして欣の右腕による追撃を躲し、猛毒の針の射程に欣の心臓を入れる。

後は、これを放てば終わりだ。

「何……だとッ!?!」

その剛大の腕は、欣の左腕によって抑え込まれていた。

続いている引き戻された右腕が剛大の頭を握り、凄まじい握力で締め上げる。

再生した？ この一瞬で？ 頭に来る激痛に苦しみながらも、剛大の頭には疑問が浮かぶ。

——MO手術において、元の生物より大幅に強化される能力がある。

それは、『再生能力』。

例を挙げるとロシア、北欧第三班班長である『シルヴェスター・アシモフ』。

彼は戦闘中にある程度の時間があれば失った腕を再度生やす事が可能である。

だが、彼のベースである『タスマニアアンキングクラブ』にはそんな真似は不可能だ。

本来自切した足は、数週間、数か月をかけて再生するものなのだ。生物の持つ再生能力、MO手術はそれを大幅に強化して戦闘に堪える形で使用する事ができる。

……では、『蟹<sup>カニ</sup>』や『蝟<sup>タコ</sup>』以上の再生能力を持つベースを使用したなら？

その能力は、想像に容易い。

その生物は、極めて厄介な特性を持っている。

英名も、神の子が処刑された時に頭に付けていた物、その名を冠している。

その名は、人間の海に対する罪深さを表してでもいるかのように思えた。

「残念だよ、剛大君。君とは、最後まで仲良くしたかったものだ。……あの時の演習のように」

欣はその顔を歪めて笑う。その体全体を覆う無数の棘は、彼の身を守る鎧であると同時に、彼を幽閉する監獄のように見えるのは、気のせいなのだろうか。

欣<sup>キ</sup>  
焯<sup>ケイ</sup>明<sup>メイ</sup>

国籍：中国

53歳 ♂  
194cm  
141kg

『裏マーズランキング』6位

αMO手術 “棘皮動物型”

オニヒトデ

## 番外編 懇談会

小町 小吉様

アネックス増援派遣計画の実戦部隊、その中核となる新規に採用された貴国の幹部搭乗員との会談を

設定いたしました。

つきましては、×月×日に指定の時刻、場所への出向を願います。

豪奢とはとても言えない質素な和食店。この場所で、アネックス1号艦長にして日米合同第一班班長、小吉は一人の男と向き合っていた。

髪型は程々の長さで、あまり気取る事はなく、しかしきっちり整えられている。身に纏っているのはこれもまた規律正しく整えられ、埃一つついていない背広。なぜかボタンが外されているものの、それ以外には特に変わった点は見られない。

「初めまして、俺は国連航空宇宙局、火星探索チームの隊長、小町小吉だ」

「……初めまして、俺は……いえ、私は元警視庁警備部警護課所属、現火星探索チーム補助計画日本班現場部隊長、島原剛大と申します」

「あ、もうちよつと素で話してくれても構わないぞ？ そんな堅苦しい場でもないわけだしな」

「そう仰られるのであれば、その通りにでも」

見た目は二十代半ばといったところ。人格としてもあまり問題があるようには見えない。この計画の参加者、特に新たな幹部搭乗員には問題児が多いと風のうわさで聞いたが、あまりそうは見えない。少しお堅い人間、一郎の所の七星を思い起させるものはあるが、それはただの性格だろう。

いや、初見の印象だけで決めつけるのはよくない。これから彼が



はつちやけた所を見せるかもしれないではないか。そんな不安と若干の期待を胸にしなから、小吉は話を続ける。

「ではまず初めに。君の得た『能力』を教えてくださいたい」

小吉はそう言いながら、剛大に『薬』を差し出す。

このアネックス1号への増援はかなりの急ピッチで計画されたもので、その内情は増援を受けるアネックス1号の側にすら碌に伝わっていない。本来ならアネックス計画実働部隊を総べる立場である小吉ならば知っていて当然の情報さえも、流れてきてはいなかった。

だから、これはただの確認である。

他の国の班員達の資料は後日送られると聞いているが、せめて先頭に立つ人間だけでも戦力を把握しておきたい。

「わかりました」

注射器型の薬を受け取り、首に刺す剛大。みるみる内にその姿が変化していく。

昆虫の触覚と、腕の付け根から生えた牙と針。

少しだけ届いた前情報によれば昆虫型、しかも自分のベースハチに近いアリの一種だと聞いていたが、まさか針まである種類だったとは。

自分と同じタイプの生物か、と奇妙な偶然に少し笑みを浮かべる小吉。

「よし、剛大君、いまからちよつと組手でもしようか！」

男と男、親睦を深めるのなら拳で語り合うのが一番、と少し熱くなっている自分に苦笑しながらも立ち上がる小吉。

「いいですよ」

剛大も負けじと立ち上がる。生真面目な人間だと思っていたが、案外熱い所もあるじゃないか、と闘志を燃やす小吉。そして戦いが始ま

「お客さん！ 暴れるなら外でやってください！」

「申し訳ありません」

ここは飲食店。なんか変なものを頭から手から生やしてはたから見れば喧嘩を始めようとする大の男二人。

二人は気が付いた。

これじゃあ自分達、ただのアホじゃないかと……

---

シルヴェスター・アシモフ様

アネックス増援派遣計画の実戦部隊、その中核となる新規に採用された貴国の幹部搭乗員との会談を

設定いたしました。

つきましては、×月×日に指定の時刻、場所への出向を願います。

「……お嬢ちゃん、おじさんはこれから待ち合わせしてる人がいるんだ、秘密のお仕事だからどこかに行ってくれないか」

小雨が降る中、アシモフは待ち合わせ場所である十字路の隅にある銅像のそばで立っていた。

遅い。今回の任務は簡単なものだ。ただ初対面の相手と会って話をするだけなのだから。

しかし、その相手がいつまで経ってもやってこない。周りの人も、アシモフの巨体とその体から放たれる威圧感によって近づいてこない。ただ一人、クラゲ柄の傘を持った小柄な銀髪の少女が何か言いたげにアシモフを見上げているだけである。

アシモフは今回の会談を楽しみにしていたのだ。聞くところによると、増援計画のロシア部隊は筋金入りの悪党で固められているらしい。そんな部隊を統率しているのだ、どんな強者なのだろうか、と。会ってみたら、手合せ願いたいものだ、と。ほぼ同時に小吉がそれをやって店員さんに怒られている所なのだが、そんな事は彼は知る余地もない。

「あの一」

「あのな、お嬢ちゃん、さつきから言っているがおじさんは仕事で……」

「しるべすたーさん、でしょうか？」

硬直するアシモフ。何故だ？ このどこにでもいそうなロシアン少女は何故自分の名前を知っている!?

考えてみたが、可能性としては二つ。一つ目、自分で言うのもなんだが、自分は軍人界限ではそこそこの有名人だ。この少女は熱烈な軍事マニアで、自分の事を知ったのだろう。

二つ目、少女は裏アネックスの関係者である。

だとしたら、恐らくは幹部搭乗員のおつかいか何かだろう。状況からして、可能性としてはこちらの方が有力だ。

だから、一応確認の意味も込めてこっちの方向で話を進める事に。

「その通りだ、俺がアネックス計画ロシア・北欧班班長、シルヴェスター・アシモフだ。よろしくな」

アシモフと少女、身長差は50cm近い。だから、握手をするために手を差し出すのにもしやがみこまなければならなかった。びくつと肩を震わせる少女。しまった、怖がらせてしまっただろうか。少し後悔するアシモフ。

少女は少し戸惑った後、アシモフの手にその小さな手を乗せ、柔らかに笑った。

「私はアネックス計画増援部隊ロシア・北欧班班長、エリシア・エリセーエフと申します。よろしくです!」

「おう……ん?」

それに対して微笑み返すアシモフだったが、少女、エリシアの発言を頭の中で反芻する。

増援部隊。班長。ロシア・北欧班。

どういう……事だ!?

「えーつと、まさかお嬢ちゃん、立場的に言えばおじさんの同僚?」

こくりと頷くエリシア。全く印象が異なっていた。自分と互角に戦えるような巨漢かと思いきや、こんな触れば壊れそうな少女だったとは。そして、もう一つの疑問、あらくれどもをこの虚弱そうな少女が率いる事ができている理由をアシモフはすぐに知る事となった。

「おい、お嬢はどうなってる」

「ちよつとあんた邪魔だつーの!」

「あの軍神のシルヴェスターさんだぜ、ちゃんとお話はできているのか」

「迷子になってないか」

数人の明らかにガラの悪そうな集団が、曲がり角からこちらの様子を伺っている。どいつもこいつも、自分の娘が初めてのおつかいに出発している時のような心配そうな顔をしている。

アシモフは全てを理解し、残念やらほつとするやらで肩を落としたりした。

なんだ、率いているというよりは可愛がられてる、じゃないか。

---

アドルフ・ラインハルト様

アネックス増援派遣計画の実戦部隊、その中核となる新規に採用された貴国の幹部搭乗員との会談を

設定いたしました。

つきましては、×月×日に指定の時刻、場所への出向を願います。

「ようこそ、私の研究室に」

ドイツの某所。

ここで行われていたのは、数多くの命を奪う結果となった凄惨な実験。アドルフの目の前にいるのは、その命を奪う原因となった狂人。

見張り役の数人の兵士に銃口を向けられながらも、その不遜な態度は変わらず、事務的な椅子に座っているのは中年の博士だ。

その二人の周囲にある棚に飾られた無数の生物の標本は、二人を観察しているかのような不気味な雰囲気を持つていた。

「本日は顔合わせだけと聞いていますので。僕はこれで」

椅子から立ち上がるアドルフ。

アドルフは、かつて実験動物として扱われていた。だから、研究者という人種には少し抵抗を持っている。

しかも、目の前にいるのは数多くの幼い命を人体実験で奪い、死を受け渡された研究者という名の悪魔である。

ドイツでは大衆の話題を攫った凶悪犯罪者だ。

はつきりと言って、嫌悪感しか感じない。一刻も早く立ち去りたい。そう考えていたのだが。

「一つだけ、君に伝えたい事がある」

「なんででしょうか」

「君は、生きてくれ」

ただ一言、それだけ。背を向けているアドルフには、その言葉を放った博士の表情は想像もつかなかった。

態度は嫌味だし、その所業は決して許されるものではない。だが、

その声には、どこか後悔と虚しさのような物が感じられた。

それには、かつて彼が実験の犠牲にした子供達と自分を重ね合わせているだけでなく、彼自身と自分を重ね合わせているようにも思える。

彼は、自分自身が開発した、MO手術の100分の1という成功率の手術を自分に施したらしい。

その時彼は、一体何を考えていたのだろうか。

考えても仕方の無い事だ。だからアドルフは、軽く手を挙げ、たった一言、聞こえているのか聞こえていないのかわからないような声で呟いていた。

「言われるまでもありません」

ミッシェル・K・デイクス様

アネックス増援派遣計画の実戦部隊、その中核となる新規に採用された貴国の幹部搭乗員との会談を

設定いたしました。

つきましては、×月×日に指定の時刻、場所への出向を願います。

「お待たせしましたー！」

威勢のいい声と共に、ミッシェルの目の前に料理の皿が並べられる。どれもこれも、一級レストランでもなかなかお目にかかれないような精巧かつ大胆なものばかりだ。

ミッシェルが食べ始めるのを今か今かと待ちわびているのは、天然パーマ気味の赤毛の青年だ。数本の髪がまとまって飛び出した、属に言うアホ毛というものがちよつと目を引く。

ここは、地下室に作られたアパートの一室のような部屋である。調理場がやたらと豪華な所を考えると、彼、ダリウスの為に作られた専

用の場所なのだろうか。

そんな事を考えるよりも、今は目の前の料理である。自分はこの僻地まで長く歩いて来て空腹なんだ、話は後にしよう！ という腹の虫の主張には流石の彼女も逆らえず、料理の方へと目が向けられている。

「なあ、ダリウス」

「なんででしょうか、ミッシェルさん」

そわそわしながら、ダリウスは呼びかけに答える。

「なんで全部、野菜料理なんだ？」

そう、ミッシェルの目の前に並んでいたのは、全て野菜を用いた料理だった。

サラダなどの生野菜を用いたものから、和風と思われる汁物やフランス料理のように手の込んだもの。

しかしその材料は全て野菜。

「そ、そりゃあ女性の健康の事を考えまして……」  
どもるダリウス。

ミッシェルがこれを聞いたのは、普通に疑問だったからでも肉が食べたかったからでもない。

それが、ダリウスの過去に関わりがある事だから。

ミッシェルは彼に関する資料を受け取っていた。だからこそ、気になったのだ。

一口。うん、おいしい。二口。いい味だ。

味は素晴らしく、ミッシェルがこれまで食べてきたどんな高級料理にも劣らない、あるいは追い越しているのではないかという程。

「適度に肉も取らないと筋肉を維持できないんだよ。私が軍人だった事、知ってるだろ？」

クレームのような物言い。もちろん、ダリウスが知っていて当然の事だ。

そして、彼がこれまで個人に対して料理を出す時、このくらいの気

遣いは当然として行っていた事だ。

「反省か？ それとも、アレ以外では作れないか？ ……なんで、あんな事をしたんだ？」

知らない人間が聞いても意味が分からない質問。

だが、ダリウスはその意味を十分に理解していた。

「な、なんか好きな歌とかありますか？ 俺、歌には自信あるんですよ！」

「知っている。だが今は質問に答えろ」

ミツシエルの追及に、うなだれるダリウス。

観念したかのように、ダリウスは眼を閉じた。

「俺はね、一族の呪いに勝てなかったんですよ」

—数十分後、ダリウスとミツシエルは建物、重厚で高い壁が築かれた監獄を後にしていた。

出口では数十名の男女が待ち構えていた。

「おお、ダリウス様が出てきたぞ！」

「おおおー！！！」

全員が絶叫のような大声を上げる。その言葉はどれも、まるでダリウスを神か何かであるかのように褒め称える言葉であった。

「しっかしわかりませんねー。なんであんな人が……」

それを見送るのは二人の警備員。

その内の若い方が中年に疑問を呈する。

「そうだな、新入り、お前は狂信的なファンが付く人間の条件、なんだからわかるか？」



若い方は困ったという風に首を振る。

「じゃあ教えてやる、それはな」

「とてつもなく優れた才能を持った人間か」

「すげえ特徴的で独自性のある芸術家か」

「イカれた殺人鬼さ」

---

ジョセフ・G・ニュートン様

アネックス増援派遣計画の実戦部隊、その中核となる新規に採用された貴国の幹部搭乗員との会談を

設定いたしました。

つきましては、×月×日に指定の時刻、場所への出向を願います。

特記事項：いつ命の危険に晒されてもいのように万全の準備をお願いします

明らかに機密施設、といった場所に案内され、ジョセフは案内されるがままにひたすら地下へと下っていた。

ここはさまざま施設が複合されているらしく、途中には食糧の加工場や何かの機械を制作している様子もあった。

「あれ？ ナイフが一本ないぞ？」

「バカヤロウ！ 早く探せ！」

調理状と思われる場所でのコックの日常風景にこんな物々しい施設でも普通な場所もあるんだな、と少し微笑ましい気持ちになるジョセフ。だが、これから会いに行くであろう相手の事を考えると、少し憂鬱な気分でもあった。

最下層の一室、壁は全面真っ白で部屋の形は立方体。1日いれば気

が狂いそうなこの部屋で、ジョセフを待ち構えている人間がいた。いや、正確には待ち構えさせられているというべきだろうか。

「なんだこれ……」

そこには、椅子に雁字搦めに縛り付けられた人間がいた。肌などを見るに老人か。目隠しをされ、手、足、首、胴を数十個の素材不明な頑丈そうな紐で縛り付けられ、全く身動きが取れないでいる。そして、部屋の隅には、二人の銃を構え、全身を戦闘用の装備に身を包んだ兵士が。ジョセフを警戒、監視しているわけがない。では、この完全武装の兵士達は、この全く身動きのできない老人を警戒しているのか。

「おやおや、お客さんが来たようね」

静かな、この状況に似合わない能天気すら感じさせる声。声からして女性だ。

ジョセフは深呼吸し、場に臨む。

「ちよいと、部屋の隅のお二人さん。この拘束具を外してもらっても？ きちんとした身でご挨拶がしたいの」

老婆の要請に、兵士は何も答えない。二人とも無表情だが、どこか怯えている雰囲気だ。

「じゃあ、沈黙は肯定って事で」

ジョセフと兵士は眼を疑った。

まるでなんて事はないという風に、老婆が紐を無いものであるかのように普通に立ち上がったのだから。

体を拘束する紐は全て、真つ二つに両断されていた。

「なっ!?!」

突然の事だったが、片方の兵士が反応し、銃を向ける。だが次の瞬間、兵士の腕に料理用のナイフが投擲され、その銃を取り落させる。

もう一人の兵士も遅れて反応するが、銃よりも内側に間合いを詰められ、喉に拳を叩きこまれて崩れ落ちた。

そして老婆はジョセフの目の前に一瞬で移動してきた。喉を狙って繰り出される手刀、それをジョセフは弾く。

次に足払い。軽いジャンプで回避、両腕による左右からの同時攻撃。両目を別々に動かして対処。

いくつかの攻撃を避け、さらなる攻撃に備えようとしたジョセフだったが、老婆はそれで敵意を失ったようだった。

おれには勝てないとわかったのか、それとも何らかの目的があるのか、と思索するジョセフ。

「あらあらー、なかなかやるわね。ふう、目が見えないとやり辛いものね」

ここでようやく老婆は目隠しを外しジョセフを見た。

そして、老婆の目が一瞬だけであるが見開かれ、それより少しだけ長い時間体は硬直する。

「……なるほど、ね。神様も粋な客を寄越すもんだねえ」

老婆は、銃を拾い直し構えている兵士に近づき、伝えた。

「気が変わったわ。例の件、受けましょう」

力無く銃を下す兵士。

何をすべきか判断しかねるジョセフを横目に、老婆は笑顔で話しかけていた。

「もう知ってるでしょうけど一応自己紹介。エレオノーラよ。よろしくね、神の一族さん」

そして、何事も起らなかつたとしてもいう風に部屋を出ていくエレオノーラは、ジョセフに楽しそうに告げた。

「合格よ。あなたならルークちゃんの庭を守るお仕事、十二分にこな

せるわ「

## 第25話 光芒

### 『棘皮動物』

ヒトデ、ウニ、ナマコ、ウミユリなどの仲間を指す。

彼らは動物界全体から見ても特異な構造を持ち、多くが明確な進行方向を決める前後の体軸を持たず、頭すら存在しない。そして、それに付随する感覚器や中枢神経も。

その中でも最も凶暴な捕食者の仲間である『ヒトデ綱』。  
彼らは小型の底生生物にとって緩慢な怪物である。

その進行方向に存在する生物は体の裏側にある口で食らいつくされ、骨片と言われる多数の部分に分かれた内骨格は強固な構造を保ちつつ柔軟な動きを可能にし、骨片で形成された頑丈な皮膚と原始的で単純な体構造が可能とする著しく高い再生能力は反撃で致命傷を与える事を許さない。

人間にはその見た目から装飾品や生きたおもちゃとして扱われる事が多い彼らは、海の小動物達にとって災禍以外の何物でもない。

「う……おお……」

剛大は欣の拘束を解こうと己の頭を掴んでいる欣の腕を攻撃する。だが、思うように力を加えられない上に変態した事で得ている強固な防御力によってあまりダメージを与える事はできないでいる。脚技も、欣の腕と位置で巧みに封じられている状態だ。

一方の欣は、剛大の頭を掴んで締め上げる事でトドメを刺そうとしていた。

剛大の抵抗によって傷つけられた腕はほぼ一瞬で修復され、先ほど腕ごと引き裂かれた肩もほぼ元通りになり、新たな棘が生えてきている。

「君の頭が砕けるまで少し時間があるようだ。君にも理解できているだろうが、解説してあげよう」

欣の声色は冷静だった。油断する事も無く、だが自分が敗北するというイメージも無い。軍人としての彼の状況判断だ。

「私のベースは『オニヒトデ』。我々の住むアジアでは、美しいサンゴを食い荒らす害獣だな。……尤も、今の地球にサンゴなんてろくに残っていないがな」

力を緩めるでも強めるでもなく、欣は続ける。力を強めれば火事場の馬鹿力でさらなる抵抗をされてこの優位を覆されるかもしれないし、緩めればその隙に抜けだされる可能性が高い。ならば、現状維持が一番だ。

「先ほどの攻防でわかった通り、非常に高い再生能力と毒棘によるアクトイブな防御と骨片の集合体によるパッシブな防御を併せ持った強力なベースだ。近接戦闘を主体とする君には最悪な相手と言えるだろうな」

武と健吾、日本班の二人が援軍に駆け付けようとするが、それをプラチャオが牽制し、近づけさせない。

このままでは、剛大が死ぬのはほぼ確定といえる。

「そこでだ、君の死はもうすでに確定している。だが、それを回避する手段がある、と言ったら君はどうするかな？」

苦悶の表情を浮かべている剛大の目に疑問の光が宿る。この状況で自分を生かす？ どういう事だ？ と。

「無論、タダとは言えないな。こちらが出すカードは君と部下たちの命、君が出すカードは今君たちが持っている本部の情報、設備は我々で把握しているのでね、そこにいる人員など……といった形でどうだろうか」

今現在、ここでは大きく分けて3つの戦いが行われていた。欣と剛大、班長同士の一騎打ち。プラチャオと日本班のランカー二人の戦

闘。俊輝と静香に対する、気配を消すガスマスクの人間と欣を運んできた鳥類ベースの中国班員、裏切り者勢数人の部隊。

剛大が危険状態、後の二つは互角。俊輝達は若干押し気味ともいえる。

しかしこの状況、日本班は上位戦闘員のほとんどを投入している戦いだ。しかし、中国班には少なくともここにいる4人を除いてまだ12人の班員が控えている。

それが未知数であり、さらに裏切り者勢のまだ見ぬ強者もいるだろう。

総合的な戦況からすれば、非常に危険な状況と言わざるを得ない。「断る」

剛大は一瞬思考し、答えを出した。自分が仲間たちの情報を吐けば、その情報を元に本部は襲撃を受け、大きな損害を受けるだろう。自分の命だけなら判断する間も無くその答えが出せた。だが。

「……すまない、お前ら」

仲間たちの命を捨てる、その事実が判断を鈍らせた。

「そうか、残念だ。ではもうそろそろさようならだな。君には生きていて欲しかったのだが」

剛大の頭から響くミシミシという音。ここまでか、と覚悟を決める剛大。

だが、ふいに頭をがっしりと掴んでいた欣の腕が放される。

「むおおおッ!?!」

それとほぼ同時に、驚きの声と共に目の前の欣の姿が消えた。何が起こったのかわからず、困惑する剛大。

足元を見ると、そこには大きな穴が開いていた。

そして、もう一カ所、剛大の近くに穴が開く。

「柔らかか地面で助かった……あー、疲れた！　じゃなくて！　班長、武、健吾、俊輝、静香、とつとと入れ！」

穴からひよこつと顔を出し、矢継ぎ早に告げたのは、剛大、俊輝と

一緒に拓也の搜索を手伝い、静香たち援軍を呼びに戻っていた非戦闘員、翔だった。変態による影響であるピンク色になった肌と出っ歯がコミカルだが、本人は至って真面目だし、今この場にいる日本班の皆にとつては救世主以外の何物でもなかった。

泥だらけのその姿からは、ずいぶんな量の土を掘り進んで来た事を思わせる。

「し、將軍！」

プラチャオが慌てて落とし穴に落ちた欣を救出しようとするが、欣の重量と深い穴によって簡単にはいかない。

ここぞとばかりにその脇を抜け、穴へと駆ける武と健吾。

「何をしている！ 私的事はいい、早く奴らを追え！」

欣の怒号でプラチャオははっと顔を上げ、穴に入る二人に向かってダツシユする。ヒクイドリの脚力なら追いつく事は容易だ。

「させるとでも思ったか」

しかし、プラチャオの追撃を全力ダツシユで阻む男が一人。

カミキリの大顎が、後ろに飛び退いたプラチャオの眼前を通過する。

毒の散布を終え、欣を輸送してきた鳥類ベースの中国班班員と空中戦を繰り広げていた静香も、一直線に穴へと突っ込む。

「逃がさないよー！」

そんな静香の頭上から、勝気な高い声と共に翼を広げた女性が猛追してくる。こちらにも、運動能力としては普通の小鳥であるズグロモリモズと比べて明らかに優位だ。

「早まったね、中国の人！」

だが、身を翻し女性の方に向き直り、脱出穴を小柄ながらも翼で覆い隠すような体勢となった静香が、両翼に付いている小型の扇風機のような器具を向ける。

直後、オレンジと黒の粉塵が舞い散り、周囲の空間を猛毒の結界が包み込んだ。



たまらず後退する女性だったが、その顔には笑みが浮かんでいた。はつと何かに気づいた静香。自分に向けて、大振りのナイフが飛んでくる。

翼を広げたままでは、穴に避難もできない。思わず目を瞑る。

だが、そのナイフが喉を貫く前に俊輝が静香を抱きかかえ、穴に半ば落ちる勢いでダイブした。翼が思いつきり穴に当たり見るからに痛そうだな、と俊輝は一瞬申し訳なく思ったが、今はそんな事を考えている場合ではない。

出来る限りの力で入口付近の土を砕き穴を埋め、緩やかな下り坂と なっている脱出経路を猛ダツシュ。

時々通路周囲の土を大顎で薙ぎ払い穴を塞ぐのを忘れない。毒が空中に拡散しているので穴の入口にはしばらくは近づけないだろうが、一応の措置である。

前を走っていた四人と合流し、相当離れた地上に出た時には、全員が疲弊しきった顔をしていた。

「あ、えと、どこ触つてんのよ、じゃなくてそのえつと、ありがと……」目を白黒させて顔を真っ赤にした静香とその言葉を照れくさそうに受ける俊輝、はやし立てる健吾に溜息をついて栄養補給をする三人。

脱出口の向きは本部側に向いていて、穴を掘った翔いわく、『掘り進みすぎて戦場を通りすぎてしまった。せつかくだから本部への安全な通路に使おうと思った。反省はしていないしむしろ感謝してもらいたいと思っている』

という言い訳がましい謝罪会見のような口調で冗談めいて話していたが、皆は本当にそれに感謝し、翔を胴上げでもしたい気分であった。

だが、いつ中国班や裏切り者の追撃が来るかわからない。道を急ぐべきだ、という剛大の意見に全員が賛成し、疲れた足取りで再び歩を進めるのであった。そして、彼らが見る空には、夜の闇を追い出し、再び太陽が昇りつつあった。

「え、本部と合流？　火星の基地を制圧？　あー、博士に一步リードされちゃったかあ」

赤毛の青年が、宇宙艦から怖々と顔を出した通信員の少女の報告を聞いて少し考え込んだ後、顔を押しさえた。

ライバルである他班に先を越された悔しさと、戦況の好転。良くもあり、少し悪くもある展開だ。

「ん？　どうしたの？　もう終わったから出てきていいよ」

「それはわかっているんですけど……班長、これは」

「ああ、気にしないで、宇宙艦の中にいれば君たちは大丈夫だったから。避難した戦闘員の皆も無事だったろ？」

班員を全員集めてくれ、という指示で、通信員の少女は怯えた顔で弾かれたように宇宙艦の中に戻って行った。

「やっぱ怖がるよねえ、これは」

戦闘が終了し、静寂に包まれた夜明けを迎えた米国第一班。

クレーター底に存在する自分の宇宙艦を一瞥し、ひとつ嘆息する。

そして、そのクレーターの爆心地に佇む青年は、静かに笑みを浮かべた。

## 第26話 悪夢

「追手は見えるか」

「いえ」

夜が明け、陽光が疲弊した日本班の皆を照らしていた。

中国班が裏切った。それは予想できていた事だった。

だが、想像以上に敵の戦力は強大だった。

班員のプラチャオでさえ剛大とほぼ互角に戦えるほどで、副班長の欣はさらに強い。

こちらは戦闘員のほぼ全てを投入したというのに、結果は這う這うの体で何とか逃げ出せた、というだけである。

だが、自分達だけでは勝てないという事がわかったただけでも幸運だ。

あの場で死んでしまつては、それすらわからなかったのだから。

敵の主戦力のベース生物もある程度は判明した。

合流後、今後の対策としていい情報になるだろう。

目の前に見えるのは、火星の岩山。その麓には、小さな入口があった。

基地の中は、班の皆が思っていたよりもずっと快適そうな空間だった。

入口付近こそ洞窟そのものだが、奥に進むと簡易な電燈とそれに電氣を送っている配線が張り巡らされており、

岩も綺麗に削られていて歩くのにも困らないそこそこ平坦に加工された床が広がっている。壁には時折監視カメラのようなものが見えるが、全て壊されている様子。

そして、複雑な分かれ道に班の皆が困っていた時、一人の青年が彼らの目の前に姿を見せた。

金髪碧眼に、真面目な印象も与えるが人懐っこそうな笑顔。

「ようこそいらつしやいました！ 遠路はるばる、ご無事で何よりです」

「おお、ダニエルじゃねーか！」

「ダニエル君、久しぶり」

「君は第5班のダニエル君だったか。こちらは日本第2班の合流組……と言っても14人全員が合流するつもりでいる」

俊輝と静香の挨拶と、剛大の状況説明。

それを聞き、ダニエルは少し驚いた表情を見せる。

「えっ、全員ですか!? それはありがたい話なのですが、そちらの宇宙艦は……」

「必要な情報だけ持って処分してきた。こうなったら総力戦だ、と思つてな」

その後はここまでの経緯を説明し、今後の予定を尋ねる剛大と、それに対し基地の設備を説明するダニエルという一幕があり、最後にダニエルがヨーゼフの伝言を伝えた。

「では剛大様と静香さんは僕に付いて来てください。うちの班長からお伝えしたい事があるそうなので」

「えっ、私が？」

頷く剛大と、驚く静香。

班長である剛大が呼ばれるのは当然の事だろう。今後の事について班長同士で話し合わなければならぬし、詳しい状況報告も必要だ。

だが、静香は違う。自分は上位ランカーであるが、それだけだ。その理由で呼ばれたのなら俊輝も呼ばれて然るべきだし、自分だけが呼ばれる理由が無い、と静香はドイツの班長の考えを読めずに不思議そうな顔をしていた。

「では他の方は休憩室へどうぞ。ここを左に曲がって見える三番目の部屋です、怪我をした方は医務室へどうぞ」

その言葉に従い、俊輝、翔、健吾の三人は休憩室へ向かい、欣との

戦いで毒棘が刺さった武は医務室へ向かう。

ダニエルと剛大、静香は4人とは別の道へと向かい、階段やはしごを使って上階を目指して登っていく。

「君たちの班に被害は出たか」

移動の暇に、剛大がダニエルに質問を投げかける。

幸い、自分達日本班は最初の奇襲で犠牲になった一人だけでそれ以上の死者は出ていない。他の班はどうなのだろうか、という疑問である。

後追いで合流する予定の残り8人が心配だが、今はまだ無事を祈る他無い。

「ああ、僕らにはまだ被害は出ていません。博士が一人で宇宙艦の防衛からこの基地の制圧までしてしまいましたから」

軽く言うダニエルに驚きを隠せない二人。ランキング二位、アネツクス1号計画のドイツ班も上位ランカーが少ない分班長の強さが飛びぬけていたが、こつちもそうなのか。

腕相撲の時といい体力テストの時といい、『身体能力』という点では全くもって論外な博士だが、2位という称号は伊達ではないようだ。ベース生物に依存している強さなのか、それとも他にも何かあるのか、少し思案する剛大。

「到着です。博士、2班のお二人をお連れしました」

そんな事を考えている内に最上階に。

そこは、通信設備や監視カメラのモニターと思われる機器を中心にいくつかのコンピュータが置かれた、司令室のような場所だった。

そして、椅子に座り資料を見ている、ドイツの班長の姿。ダニエルの声に反応し顔を上げた彼は、二人に席を勧め、自分は立ち上がった。「ようこそ、生きていて何よりだよ。まあ座りたまえ」

ヨーゼフの言葉に従い、ダニエルが運んできた椅子に腰を下ろす二人。

腕を後ろ手で組み、資料をしまいながらヨーゼフは話を始めた。

「まず最初に謝らせてくれ、静香君」

「……はい？」

突然の謝罪に混乱する静香。全く思いあたる節が無い。

「君が我が班の宇宙艦に近づいた時、反射的に敵と認識して攻撃してしまつた。すまなかつた」

「え、あれつてヨーゼフさんだつたんですか……？」

静香が偵察に出ていた時、巨大なアメーバのような何かが第5班の宇宙艦を取り囲んでいるのを見た。

それは宇宙艦を襲つていた裏切り者勢に対して反撃を仕掛けていたのだが、静香は近づきすぎてそれに襲われ、回避したが頭痛と記憶が混濁した……という事があつたのだ。

症状自体は拓也が残してくれた薬が効いたおかげで何とかなつたが、テラフォーマー以外の宇宙生物がいるのか、と慌てたものだったが、だがその正体がまさか仲間だつたとは。

「ああ、私の能力だよ。あの時は宇宙艦が襲撃されていたため広域に毒の散布を行い無差別攻撃を行つていた」

「そうだつたんですか!?!でもよかつた、得体のしれない生き物じやなく……」

ほつと胸をなでおろす静香と、懐から薬瓶を取り出すヨーゼフ。

「これが特效薬だ、症状はこれを飲めば大丈夫だ」

「いえ……班員にもらつた薬で治りましたから」

薬を渡されるが、静香はそれをやんわりとヨーゼフに返却する。

ぼんやりと頭に浮かぶのは、その時は毒の影響で朧げにしか映らなかつた拓也の最後の姿。

「……その薬、貸してもらえないか」

怪訝そうな顔をしたヨーゼフに、静香は薬を渡す。

それを確認し、数粒を取り出して口に含み、苦い顔でそれを吐き出す。

静香はその行動の意味を理解できなかったが、ヨーゼフは一言、二人に聞こえないような声で呟いていた。

「……なぜ同じものがここに……」

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ、気にしないでくれ」

渋い顔のヨーゼフに静香が話しかけ、ヨーゼフはその話を打ち切る。

「わざわざ呼び出して済まなかったね、君も休憩室に戻るといい。想い人が待っているのではないのかね」

そして、いきなりヨーゼフからキラーパスが送られる。

相変わらず無表情のままだが、その目にはどこか憧憬の色が浮かんでいるように思えた。

「ほえ？……ちちちち違いますから！ そんなのじゃないですから！」

一瞬その意味を考え込み、手をぶんぶん振って否定する静香。

その反応に、ヨーゼフは顎に手を当て考える姿勢に。

「ふむ……？ うちのお喋り好きの副官が『日本班の友達が二人ともそれぞれ自分の幼馴染の話ばかりでウザイ』と言っていたが君と9位の彼の事では無かったのかな？ 私の人違いか」

「あ……う……ほえ……」

予想外の状況でメンタルを削られる静香と、音もなく逃走するダニエル。

「でわ、しつれいします」

椅子から立ち上がり、日独の班長に見送られながらカチコチに固まった表情で階段を降りていく静香。

「博士、貴方はずいぶんと変わりましたね」

「何の事かね？」

「仕事上の付き合いの人間に日常会話をするような人じゃなかった」

ふらふらと階段を降りる静香からヨーゼフへと目を向け、剛大が話しかける。

「まあ、仕事柄上そうなるのも仕方ない。人とは常に周りの環境に染まり変化していくものなのだから」

「生真面目な君がそういうのなら本当にそうなのかもしれない。さて、ここからは現状の話に移ろうか」

軽く流された気がするが、剛大は気にせず話を続ける。

「その前に、一つ聞きたい事がある」

剛大の言葉に、空気が凍り付いた。ヨーゼフが、その声色から何か重大な事である、と感じ取ったからだ。

剛大が口を開きかける。だが、一瞬何かを躊躇するような表情になり、口を閉じる。

「……どうかしたか」

「いえ、うちの班員が作ったケーキがあるんです」

剛大が取り出したのは、出発前に班で作られたケーキ。

ヨーゼフは少し訝しげにそれを受け取ったが、口にする。何か危ない物が入っているわけでもなからう。

「どうですか？ 美味しいですか？」

「ああ、普通に美味しいケーキだが、これがどうかしたのかね」

「……」

剛大はヨーゼフの様子を見て、何かを確信した様子だった。

それが何なのかは、ヨーゼフのうかがい知れる所ではなかったが。

「いえ、頭脳労働には甘い物、つてだけです。すいませんがさっきの戦闘で毒を受けてしましまして、これからの議論の前に、一度医務室で軽い治療だけ受けたいな、と」

「そうか。なら3階の医務室なら開いているだろう、私はここで待っているよ」

その言葉を聞き、剛大もまた、部屋を後にする。

後は、ケーキの続きに取り掛かり、ぼんやりと冷たい岩の天井を眺めるヨーゼフの姿だけが残った。

「到着ですよ、皆さん！」

その少し後、第3班もまた、日本班とは別の方向から基地に辿り着



いていた。

エリシアが、喜びを隠しきれないのか両手を上げてはしゃいでいるのを和やかに見つめる班員たち。

その班員達にも、疲労こそあったがようやく到着、という事で安堵の色が浮かんでいた。

だが、その穏やかな時間もそう長くは続かなかった。

「じょう」

「じょうご」

「つぎゃり」

十数匹のテラフォーマーが、地中から飛び出してきたからである。

だが、実戦慣れしている第3班は冷静に対処し、対テラフォーマー能力の低いエリシアを庇うようにテラフォーマーの一団の前に立ちふさがる。

「チツ、間の悪い……」

二人の班員が変態を終え、集団に突貫をかける。

数匹のテラフォーマーがそれに対応するが、二人は攻撃を巧みに回避し、一撃を叩きこんでいく。

「お前ら、お嬢をとつとと基地に逃がせ！　ここは俺たちが始末する！」

副官、レナートが後ろを振り向き、エリシアとその左右を守っている班員に告げる。

だが、レナートはエリシアと護衛の二人の様子がおかしいのを見た。

三人とも何か悪い夢でも見てしまったかのように驚きと恐怖の入り混じった顔をしている。

直後響く、叫び声と骨肉の潰れる音。

その意味がわからず、視線を戻すレナート。

突っ込んだ内の一人が、肉塊へと姿を変えていた。

そして、恐怖という感情を持たないはずのテラフォーマーが何かを

恐れるようにある地点を境に左右に分かれる。

——キイイイ……

レナートの耳に聞こえてきたのは、テラフォーマーの断末魔の声のような何か。

そして、目に入ったのは、テラフォーマーのような何か。

左右に分かれたテラフォーマーの間から、異形の生命体が姿を現した。

ベースとなっているのは力士型とかマッチョゴキとか言われている、カイコガの動物性タンパク質により強化されている個体、という事はわかる。というか、それしかわからない。

「キイイイ……キイイ……」

腕が、腹の辺りからもう一本生えて三本に。脚が、右のわき腹から、二つの尾葉の間から、左尻から、本来のものと合わせて5本に。

あらゆる場所に存在するそれは、元々の足と高さが合っていないために歩行の役には立たず宙に浮き、腹から生えている腕は、何かを求めるときのようにぶらぶらと揺れながらも手のひらをロシア班に向けている。

白目を剥いて泡を吐くその顔とそれが存在する頭部は体の上に乗っている付属品、程度の扱いであるかのように体の動きにつられて揺れ、半開きになったその口からは断末魔のような声が常に響く。

「……ちよつと俺の理解を超えてやがるな、俺の学歴の低さとはたぶん無関係に」

そう冗談めいていながらも震える声を隠せないレナートの前に、もう一人の仲間だったものが無造作に投げ捨てられた。

## 第27話 ロシアの意地

テラフォーマーの一群は、明らかに動揺していた。

汚らしいものを避けるかのように異形のテラフォーマーから距離を取り、お互いで何か話し合っている様子だ。

異形のテラフォーマーの最も近くにいた一匹が、異形のテラフォーマーに近づき、鳴き声を出す。

興味本位なのか、何かコミュニケーションを取ろうとしているのか。

だが、その答えは左腕による鉄槌だった。一撃で頭が叩き潰され、喉まで貫通して腹のあたりまで体を裂き、ようやくその一撃は止まる。その間、異形のテラフォーマーの頭部は全く動きを見せていなかった。

興味が無い、というよりはそもそも仲間の存在など見えていない、という様子で。

それを見て、他のテラフォーマーたちはさらに距離を置いた。

レナートはその様子から、このテラフォーマーのような何か、はテラフォーマーの味方では無い、という事を推測する。

恐らくは、突然変異か何かで奇形になったテラフォーマー。

だが、疑問も残る。

『そんなバケモノを、テラフォーマー達は育てたのか？』

同種族を何の躊躇も無く叩き殺すこの怪物が、成体になるまで生かされていたとは思えない。

普通なら、生まれた直後か、仲間を手にかけて時点で処分されるはずだ。

「キィィィ……」

そして、白目を剥き、泡を吐くその姿は、まともに摂食をできるだけの知能が残っているのかすらわからない。

声も、コミュニケーションの意味が全く感じられない。

こいつは、完全にテラフォーマーという生物の社会には存在できない生物だ。

そう結論付け、レナートは注射器を首に打ち込み、変態を行う。

甲皮が体を包み、その筋肉質の身を黒と茶が染め上げる。

頭には一本の長角、両肩には一対の短角。

その姿は、まさに重量級の甲虫そのもの。

縦にも横にも大柄な体を持つ人間は、厳つい顔でなければ大らかで優しい印象を与えるものだ。

甲虫の王者、カブトムシ。その中でも、そんな者達がいる。

決して争いを好まず。されど、力強く。特にその重量級の体躯を支えるために発達した太い脚と鉤爪はあらゆるカブトムシの種を上回る勢いで木にしがみ付く事を可能としている。

そして、その中に例外的に闘争的な性格を持っている種がある。

角こそ長くないが、その湧き出る闘争心と重戦車のような力強さからその種に付けられた名は『軍神』。

学名『Megasoma mars』。

それは、火星の名を冠する兜虫。

レナート・ベレゾフスキー

国籍：ロシア

32歳 ♂

197cm 94kg

『裏マーズ・ランキング』10位

凶暴な笑みを浮かべた前科もちの戦闘員揃いの3班副長は、一直線に異形のテラフォーマーへと突っ込んでいった。

それを、異形のテラフォーマーは三本の腕を最大限に使って迎撃する。

左腕でレナートの左肩を掴み、そのまま引きちぎろうとする。だが、レナートはそれを振りほどき、力任せに腹に腹へと拳を打ち込む。それに対し、腹から生えている腕でその拳を軽く弾き、実際に腹にぶつかるダメージを軽減する異形のテラフォーマー。

「戦闘に関しちやずいぶんキレがいいなオイ！」

身を翻し、レナートは異形のテラフォーマーの背後に回ろうとする。だが。

「キィイ」

左尻から生えた足が、レナートの進路を遮った。そのまま体をよじり、尻から生えている足でまるでバットでも振るかのようにレナートの腹を打つ。

「グッ……」

血を吐くレナート。ふと背後を見れば、エリシア達が基地へと入っていくのが見える。

ひとまずは安心だ。後は、自分が何とかすれば。時間を稼げば、恐らく増援が来る。それを待つか。

いや、ここには別のテラフォーマーもいる。いたずらに被害を広げる事になりかねない。

こんなな考え事をするなんて自分らしく無いな、と思うが、そうは

言っていてられない状況である。

「イイ?」

その時だった。異形のテラフォーマーの頭部に、石が突き刺さった。

石が投げられた方向にレナートが目を向けると、そこには石を構えるテラフォーマー達。

異形のテラフォーマーは、レナートよりも優先して排除すべき存在としてみなされたようだった。

だが、異形のテラフォーマーは動じない。

頭部から石が落ちる。そこに残されていた傷跡は、ほとんど無かった。

テラフォーマーの甲皮の色が一瞬変色し、石がぶつけられた後に元に戻った。黒系の色から黒系の色だったのでその変化は微々たるものだったが、レナートはそれを見逃さなかった。

(ゴキがMO手術を受けていやがるのか!?)

驚きと共に、苦い表情を見せるレナート。そして、その正体に一つの結論を出す。

テラフォーマー社会に適合できない異常性。

推測の域を出ないがMO手術のような能力持ち。

そして、一番の理由。それは、奇形化している手足を戦闘に利用している事。

様々な原因であらゆる生物には奇形が存在する。だが、本来存在しないものが奇形によってプラスされても、それは利益にはならない。足が増えても、本来以上の歩行を行う事は不可能でその足は邪魔になるだけだし、手が増えても体がコントロールしきれない場合が多い。だが、このテラフォーマーはそれらを使いこなしている。そこから導き出される結論、それは。

『このテラフォーマーは人為的に奇形化、または改造されて作られたものだ』

口に溜まった血を吐き捨て、再びレナートはファイティングポーズを取る。

「……かわいそうにな」

その一言は、かつて自己のためなら他者の全てを奪う事すら厭わなかった彼を知る者からすれば、さぞかし奇異に聞こえる事だろう。

「キィィー！」

三本の腕が次々と岩を砕き、それを付近のテラフォーマーに投げて潰していく。反撃の石も次々と飛んでくるが、

それを難なく異形のテラフォーマーはその身で受け止める。一瞬だけ体が少し違う黒に染まり、また元に戻る。

そして、その石と岩の応酬に飛び込み、異形のテラフォーマーに格闘戦を仕掛けるレナート。

恐らくは一瞬だけ硬化できる生物……では無い。変態と非変態を瞬間的に制御している。

瞬間で体の一部のみ硬化できる生物など聞いた事がない。ならば、そう考えるのが自然だ。

テラフォーマーでは無い、恐らく何か別のものがこの力を制御している。

このテラフォーマーはもうすでに死に体だろう。何かに操られているようにも見える。だったら。

右腰から生える脚がレナートに蹴りを繰り返す。それを正面から受け止め、その脚の根本に拳を叩きこむ。

硬化したのか、カブトムシのパワーで打撃を繰り返したにもかかわらず、ダメージはほとんど無い様子だ。

だが、瞬間。ゾウカブトの強靱な脚で右腰から生えた脚にしがみ付き踏み台にし、レナートの拳が首を、テラフォーマーの肉体で最も防御に乏しいと思われる部位を引き裂く。硬化しても耐えきれなかったのか硬化が追いつかなかったのか、ちぎれ落ちる首。

テラフォーマーの中枢は食道下神経節に存在し、頭部が欠損しても活動が可能である。そう、普通のテラフォーマーならば。

崩れ落ちたテラフォーマーの体は、もう動かなかった。そして、その傷口からは糸のようなうねうねと動く何かが無数に体の外に出ていく。

それが何かはレナートにはわからなかったが、どこか安らかそうに見える表情の落とされたテラフォーマーの首を一瞥し、レナートはその何かを踏みつけた。

「ドクター、ただいま帰りました」

暗い岩山の中、その最奥部と思われる研究室の中に、軍服の青年が足を踏み入れる。

背に抱えているのは、テラフォーマーの幼体。死んではない様子だが、その体はぴくぴくと痙攣し、それ以上の動きを見せない。

そんな青年を出迎えたのは、銀髪の女性。 ”裏切り者、幹部の一人、アナスタシアである。

「お帰りなさい。怪我はしていませんか？」

パツと見小学生か中学生にも見える童顔と低身長に、穏やかで柔らかい笑み。

だが、杖をついていて少し顔の隅に見える皺は、彼女が決して健康な体では無い、という事を青年に実感させる。

「これはこれは、元気な子ですねえ。きっと、いいものができあがりますよ」

テラフォーマーの幼体を部屋の隅に置くように指示するアナスタシア。それに従い幼体を置きに行った青年は、壁に拘束具で磔にされている何体ものテラフォーマーのような何かを一瞬見て、すぐに目を逸らす。



「おや、どうしたんですかその衣装は」

緊張の糸が途切れたのか、青年はこれまで注目していなかったアナスタシアの衣装を見て、顎に手を当てる。

「……えへへ、おめかし、です」

照れくさそうに笑うアナスタシアの服装は、一言で言えばセーラー服だった。

実際の年齢はよく知らないが恐らく二十歳は超えていると思われるアナスタシアのそんな姿を見て、青年は感想に詰まる。見た目的には全然通るだろう。でも……なんか……なんか……

「……他には何か無いのですか」

その質問を待っていた、と言わんばかりにアナスタシアが杖を持つていない方の指を鳴らす。

すると、岩の壁が開き、隠し部屋のような何かが姿を現した。

その奥には、とてつもない数と種類の服が保管されているのが見える。

「ねえヨハン君はどう思いますか困るんですあと三日しか時間が無いのにまだ服が決まらないんですよせつかくあの人に合うかもしれないのにああどうしまししょうみっともない姿は見せられません！でも私よくよく考えたらなんにも知らないんですあの人の好みそうだ直接聞いてくるというのはいやまだ会うのは早いですよねその時の事を悩んでいるのに私ツたらいけませんねーほんと昔からこんなにごんくさくてまいったものですああヨハン君確かあの人と出身国一緒でしたよね何かわかりませんかちよつとした事でもいいんです私を助けると思ってお願いします後でちゃんとお礼をしますからそうだ私小食なのでこの基地にまだ新鮮な食糧残っているんですよそれどうでしょう」

「……無難に白衣でいいのでは」

「それです！」

あまり緊張感の無い流れで、裏切り者幹部の二人の話はあっさりと終了した。

## 第28話 かつての三人

「今回の選考は荒れたらしいな」

「2位と3位が甲乙付け難かったそうだ」

「2位はドイツの無名の研究者、3位なんて8歳の女の子だぞ」

「ま、1位は流石と言うべきか、飛びぬけていたがね」

「はっはっは、面白いものが見られましたな」

部屋の外から聞こえる世間話を聞きながら、三人の科学者が一つの部屋に集まっていた。

さぞかし難しい、凡人には理解できないであろう会話をしているのかと思いきや、二人は笑顔時々困り顔、一人は泣き顔を見せながら穏やかな時間を過ごしていた。

「うう……勝てませんでした」

小さな女の子が、バーの席に顎を乗せながら後の二人から差し出されたハンカチで涙をぬぐう。

「いや、君の年齢でこんな所にいられる事自体がありえないレベルで凄いからね……」

眼鏡をかけた年若い日本人研究者の青年が、慰めながら女の子の頭を撫でる。

それでも女の子は悔しさが払えないのか、頭を上げない。

「それにしても本多博士、貴方の発表は素晴らしかった。貴方に追いつく事が僕の今後の目標です」

もう一人、茶髪に少し金髪の混じった髪のも、これまた年若い研究者の青年が、グラスに注がれたワインをちびちびと飲みながら溜息まじりに本多と呼んだ日本人の研究者を褒め称える。

「いやいや、貴方の発表も私に全く負けていなかったですよ、今でもいつ追い越されるかと危機感を覚えています」

「ははは……日本人はお世辞が上手だ……」

真ん中に女の子、その左右を二人の青年が挟むように座り、どこか仲睦まじい雰囲気醸し出している。

同じ科学者という人種、という事もあるのだろうが、その中でも三人ともバイオテクノロジーに関わる研究を自分の持ち分野の一つとしている、というさらに狭い範囲での共通点もあった。

「うー、二人ともわたしから見たら凄すぎますー」

「マスター、この子にオレンジジュースを」

この場はとある世界的な学術研究発表会で最高の賞を取った上位三人の研究者が集まるという、学術的な価値からすればとんでもない、それこそ取材が殺到しそうな集まりだった。だが、そんな彼らもひとたび日常に戻ってしまえばこんな風に一般人と大して変わらない会話や仕草なのである。

運ばれてきたオレンジジュースにストローを刺して飲みながら、女の子はようやく頭を上げた。

「本多さんの惑星開発論、はかせの次世代型遺伝子改造技術、それに比べてわたしなんて……」

自己評価が低いのか、まだローテンションの女の子に、大人の二人は苦笑する。

「いや、君の研究も実を結べばとんでもないものになるよ、少し倫理的な問題はあると思うが……」

「そうだよ、これまで救われなかった多くの人が助かるかもしれない」

二人の慰めに少しは元氣を取り戻したのか、背筋がまっすぐになる女の子。

「そうですね……この技術、きつと役立ってます！　そして困っている人たちを助けるのですー！」

「うんうん、その意気だ」

「僕や本多君と比べて、君には十数年の年齢というアドバンテージがあるんだ、君が僕たちと同じ年になる頃には僕たちを遥かに凌ぐすごい研究者になっているかもしれないよ」

「えへへ……きつとその時には……ねえはかせ、一つ約束してくれませんか？」

「僕でよかつたら」

それを聞き、ぱつと輝いた表情を見せた女の子は、本田から隠すようにドイツ人の青年に耳打ちする。

その内容を聞いた青年は顔を赤くしたり青くしたり信号機のようになりながらも、絞り出すかのように返答する。

「それはちよつと……私には帰りを待っている妻が……」

「一体君たちはどんな不埒な会話をしているんだ」

本多のツツコミに二人同時に笑い、飲んでいたワインを吹き出しそうになる青年と、その裏で少し寂しそうな表情を見せる女の子。

「は、話を変えよう本多博士。えーと、いよいよ今年だったかな？ 貴方が関わっているという計画は」

「ええ。火星開発の第二段階、『バグズ2号』計画です」

慌てて内容を変更する青年に、笑いながら応じる本田。『バグズ2号』計画。それは、テラフォーミングという地球人の新天地を作り上げる壮大な計画の段階の1つだ。

まず始めに、地球に近い環境を持つ惑星、火星に苔とゴキブリを打ち上げる。

そして、酸素を生む苔と黒いゴキブリで火星を温め、なんとか人間が生存できる環境を作り上げる。

これが第一段階。この段階は数百年前から行われており、多に苔が繁茂した火星は緑色に見える星となっていた。

次に、厄介な先人を片づけなければならぬ。つまり、ゴキブリの駆除である。

そのために選ばれた宇宙飛行士たちが火星に向かい殺虫剤を使ってゴキブリを駆除し清掃する、というのが今計画である。表向きは。

「まさか人類が宇宙に新たな地を求める日が来るとは思ってもいませんでしたよ」

「……我々は増えすぎましたからね」

本多の言葉に、青年は静かに頷く。この地球は、いや、人類は明らかに破滅へと突き進んでいる。

それは、数百年前から叫ばれていたのと同じ事だ。

人口爆発、環境汚染。それに伴う治安の悪化、人類の生活圏の減少。あまり、未来に期待はできない状態なのである。

それは、かつての先進国の集まり、ヨーロッパでも同じだった。

一部の勢力を保ち続けている国を除いては俗にスラム街と言われるものが大量にできて社会問題となり、先進国でも数多くの犯罪組織がまるで戦国時代のように勢力を争っている。

その中でもひととき巨大な犯罪組織のドンが新進気鋭のとある政治家の身内だ、などという黒い噂が都市伝説と捨てきれない信憑性を持つほど、かつての大国たちですら腐食が進んでいるのだ。

「火星には、未来が、希望があるんですかねえ」

溜息をつき、青年は皮肉そうに薄笑いを浮かべる。

彼は恵まれた経済環境で育ったものの、自国の底の環境もよく見えてきた。

だからこそ、高みから底を覗いてしまったからこそ、その高みにさえ希望が無い事を知ってしまったし、底がどんなに絶望深き場所かも知ってしまった。

「それを生み出すのが、我々研究者の仕事ではないですか？」

本多は、真剣な顔でそれに答える。彼自身にはこの思わずしてできた知識を競い合える友人に隠している事実がある。祖国、日本の抑止力のため、計画の深部にしか知られていない存在、火星に巢食う『害虫の王』を手中に収める事。その為に、息のかかった搭乗員を送り込んでいる事。そして、変身ヒーロー紛いの手術が計画に参加している搭乗員たちに施されている事。

それらを除いてでも見せた彼の研究者としての情熱。ひしひしとそれを感じ、青年ははつと顔を上げる。

「その通りかもしれませんがね」

それに対し、先ほどまでと同じく自嘲するような笑みを浮かべながらも目には熱の籠った表情を見せ、青年は短く曖昧な、しかし本心では確信に満ちた返事を返した。

「むにゃ……はかせ……本多さん……わたしは……すごい研究者に……」

夜も遅く、幼い体には辛かったのか、突つ伏してすやすやと寝息を立てる女の子の寝言に二人同時にその顔の方を向き、一間おいて心から楽しげに笑う。

「我らの積み重ねた物が、未来への道標とならん事を」

そして、将来に火星で巻き起こる各国の仲間割れ、その大きな原因となる人間を作り出した男。大切なものを失った狂気から人体実験を繰り返し、その贖罪の為に火星に赴く事となった男。二人の科学者は、空のグラスで乾杯した。

## 番外地球編1話 二人の逃亡者

——2617年 4月10日 中国某所

孤児院のような施設が、山奥にひっそりと建っていた。

山奥、と言つてもただの山奥では無く、それこそ中国の古い絵に描かれていたような切り立った崖の数々を深い霧が覆っているような、そんな場所である。そして、孤児院と言つても灰色の壁に囲まれたその施設は、まるで刑務所か何かのようだ。

霧が全てを包み隠す静けさの中に、子ども達の笑い声。これが、この施設の日常だった。そう、数か月前までは。それからはどうなったか。苦痛、嘆き、怒りといった負の感情が込められた叫び声。日夜間わず聞こえ続ける人体と人体がぶつかり合う音。静かな霧の峡谷と山々に、その音はよく響く。だが、それに対し苦情を言う近隣住民も、どこかに通報する良識ある一般人もいなかった。

何故ならば、ここはほとんど人の通らぬ僻地であるし、人が通つてはいけないように定められていたからである。

そして今日も、奇妙な木霊のようなその音が聞こえ続ける……と思っていたのだが。

その日だけは勝手が違った。

子ども達が、まだ小学生にも満たない年齢からもうそろそろ成人なのではないか、金髪もいれば黒髪も、という年齢から国籍まで様々な彼らが『薬』を使用した戦闘訓練を終え、施設内の宿舎に帰る真夜中の出来事だった。

突然の爆発音と、見張りと思われる数人の怒号。

そして、爆破された壁の穴から孤児院を抜け出す二つの影。

「オイ、二人いねぞー！」

「……追いかける、増援も要請するんだ！」

わらわらと、クモの子を散らすかのように壁の穴から追っ手が飛び



出していく。

そして、孤児院の最上階、ガラス張りのドーム型天井と外を見られる窓が多く設置され、ワークデスクが置かれた管理者の部屋と思われる一室で、数人の男女がその逃走劇を見守っている。

「ハッハー！ あいつら、ついにやらかしやがった！」

窓を覗きながらゲラゲラと文字通り腹を抱えて大笑いしているのは、アジア系と思われる巨体の強面の男。

顔中を走る古傷が痛ましいが、それを無視できるほどに本人の体格と人相が凶悪である。

「ちよ、マジ邪魔なんですけど！ おっさんどいて、先生が見られないじゃん！」

その男を肘で押しつけるのが、髪を金髪に染めてアクセサリーを千羽鶴のようにぶら下げた少女。

「二人か……逃げ切れるのだろうか」

心配そうに眉を動かすのは、見るからに真面目で堅物そうな軍服の青年。

他の観戦をしている皆の邪魔にならないよう一歩後ろに下がっているあたり、遠慮がちな性格がうかがえる。

「心配すんなヨハン、お役人様ごときに俺たちの弟妹分が捕まるかよ……くくつ……！」

車椅子を引いて窓際に移動し、外の喧騒をチラ見して笑みを漏らすのは、金髪の少年。

トゲトゲ頭と少しアウトローな外見をしているものの、いたずらな表情の中に優しい笑みが浮かんでいる。

「ダメですよバイロン、笑っちゃあ……私達、この後お役人さんたちに申し訳ない顔で言い訳しなきゃいけないんですから……ぷ……あは

「ははっ、頑張れ、頑張れー！」

そして、車椅子に乗っていた銀髪の女性が、最初こそ笑っている金髪の少年を窘めていたものの、途中から目に涙を浮かべて感極まった様子で逃走者を応援する。

彼らは逃走者の姿が霧の彼方に消え去るまでずっと見守っていた。

「ダツシユダツシユダツシユだ急げえええ!!」

そして一方逃走者。高校生くらいの少年である。黒髪黒目のその色は、夜の闇に都合よく溶け込み、その健脚と合わさって逃走を後押ししていた。しかし。

「い、いきなりなんですの!?! え? ちよつと? 状況がー」

少年が手を引いている少女が、逃走の大きな足かせとなっていた。金髪碧眼に、状況がよく理解できていない様子のフラフラとした足取り。少年に半ば引きずられているような状態だ。

「えーつと、アレ? お前、今日の晩飯の時にこんな生活いやですのーって言ってなかった?」

混乱する少女に少年は疑問符を浮かべ、足を止める事こそしなかったが問いかける。

「確かにいいましたけど……」

毎日の苛酷な訓練の疲れからふと漏らした言葉。確かに言った。

「だから一緒に連れてきたんだけど」

「本人の意思関係無し!? しかも行動早すぎますわ!?!」

「いや、逃げ出したってのはお前の意思だろうよ」

「……」

そうだけど。確かに間違っていないが。だが、効果的な反論も何も思い浮かばず、少女は黙り込む。

その足は、もう先ほどのように少年に引きずられるでなく、しっかりと自分で走っていた。

「ひゃっ!？」

敵から逃走中にずっこけるといってお決まりの展開を挟みながらであつたが。

「何とか巻いた……か……」

「人生で一番長く走りました……わ……」

時には息を潜め、時には全速のダツシユで、数時間の逃避行の末に追撃の声は聞こえなくなり、逃走に成功した二人。そんな二人は草陰にこそそそと隠れ、肩で息をしていた。

その草陰を抜けければ、港が見える。一隻の停泊している船が、もう少しで出航しそうな様子だ。

甲板では西洋人と思われる船乗りが数人、ワインとピザを肴に馬鹿話で盛り上がっている。

「まさか逃げ切れるとは思いませんでしたわ……」

「うん、俺もそう思う」

「ええー……」

真顔でそういう少年に驚きである。行き当たりばったりでここまで逃げてこられたというのか。

あの数の追手を潜りぬけて？ 自分という足枷を背負いながら？

少女は疑問で頭がいっぱいである。

どちらかと言うとアレコレ考えてから実行に移すタイプの少女にとつて、未知との遭遇であつた。

「じゃあ、まずは自己紹介でもしますか!」

「ええー……」

本日二回目のええー、である。数か月同じ環境で生活していながらも、まだ名前を憶えられていなかった。

それがショックといふかなんといふかで、少女は肩を落とす。

「そちらの名乗りは結構ですわ、シロ君。えーっと、日本人です？ それとも中国人？」

「何故俺の名前を知っているんだ!？」

今度は少年、シロが驚く番だった。彼の本名は『白』まんま一文字。日本人の名前でも通りそうだし、中国人名でもいけそうだ。

何故これまで時々顔を合わせるだけの仲だった女の子に自分の名前がわかったのか、それは人の名前に無頓着な彼にとってはやっぱり未知との遭遇。

「私はエミリー、フルネームはエミリー・オーランシュですわ! 出身はフランス、これでもイトコの出ですよ!」

「本物のお嬢様はイトコなんて言葉使わない」

「……?」

孤児院の個性的な面々に交わってお嬢様時代の礼儀が薄れていつている事に気が付かず、小首を傾げる少女、エミリー。

「まあいいや、えと、俺の国籍だっけ? 一言で言えば『不明』かな」  
「不明?」

頬を指でかいて、少し寂しそうにシロは話を始める。

「俺、海を漂ってたのを拾われたんだ。で、赤ん坊だったからなんかうやむやになっちゃったわけ。まあそのちよつと前に客船が事故で沈んだからその生き残りだろうってさ、その船が日中の親善パーティーだったからそのどっちかだろう、ってどっちでもいける名前が付けられたんだ」

「ご、ごめんなさい」

嫌な事を話させてしまった、と謝るエミリー。いやいや、と手を振って笑いながら返すシロ。

それっきり会話は途切れ、二人は黙り込む。

「……これからどうするんですの?」

その気まずい沈黙を破ったのはエミリーだった。

この状況において当然の質問だったが、エミリーは単純に今後の自分達が気になって聞いたわけではなく、どちらかというと何か話を作らねば、というこの空気を打破する、という意図の方が大きかった。

「あー、どうしようなー。ここにいてもどうせその内捕まるだろうし、かといって国から脱出つてのも……」

「……ん」

エミリーがシロの袖を引っ張る。それに気が付いたシロがエミリーの目線を追うと、そこには一隻の船が。ここに辿り着いた時からあった高速輸送船である。エミリーの言わんとする事にすぐに気が付いたシロは、エミリーの背中を叩いて笑った。

「お前、やっぱりお嬢様向いてないや」

「失礼な事を言わないでくださいまし」

「こそこそと、しかし一步一步を確かに踏みしめながら、二人は船に近づく。」

もちろん、すっかり出航前パーティで酔っている船員は二人を甲板掃除のバイトくらいにしか見ていない様子だった。

「さあ、ヨーロッパデビュー、しちやいますか!」

「目指すは花の都ですよー!」

こうして、二人の逃亡者たちの物語が始まった。

「ルークちゃん、元気にしていたかしら? ご飯はちゃんと食べてる? 国際会議でいじめられたりしてない?」

「うるせえ」

黒塗りの車を二人のボディガードと秘書と共に降りた男、ローマ連邦首脳、ルーク・スノーレソンは出迎えに来た一人の老婆を見て顔をしかめ、短く悪態をついた。老婆の後ろにも黒服サンングラスというボディガードの典型のような二人の男が付き従い、何も知らない人間がこれを見たら政治家同士の対談とでも思うかもしれない。

既に人払いが済ませてあるようで、周りには一般人の姿は見えない。かかった。

「ダメよ、貴方は偉いんだから、言葉遣いとかもお行儀よくしないとね」

「……首脳にそんな事を言える立場なのですか、エレオノーラ氏」

それに対し、ルークの秘書が自分より三周りは大きい長身の老婆

に、表情は穏やかに、しかし声色はエレオノーラを威嚇するような調子で窘める。

「ごめんなさいねえ。ついいつもの調子で言ってしまったて」

ニコニコとした笑顔を崩さず秘書に謝るエレオノーラ。ここまで反省の色が見えないように謝罪できる人間もそうはいない、と内心毒づくルーク。

「手術後の調子はどうだ、ババア」

ルークが自分の秘書を制し一歩前に出て、エレオノーラに話しかける。

秘書が邪魔だったわけでも、エレオノーラを擁護したわけでもない。その行為は、自分の秘書を危険から遠ざけるためだ。このバケモノに自分以外が余計な事を言ってしまうば、無事で済む保障が無い。

「ええ、おかげさまでとてもよろしくてよ。ホーラ、こんなにも」

言うやいなや、エレオノーラの纏う紫色のドレスの腰布を突き破り、一本の触手が目にも止まらない速さで秘書の首に巻きつく。

「やめろ、人の秘書に手エ出すんじゃないやねえよ」

ルークの言葉もあり、青ざめてへたり込む秘書を見て満足したのか、エレオノーラは触手を引き戻し、ドレスの腰にある膨らみの部分に収める。その戻った時の勢いか、エレオノーラが持っていた鞆から小さな財布が落ちる。

「あらやだ、うっかりしちゃったわ。ルークちゃん、取って頂戴」

自分の配下でもルークのボディガードでも無く、本人を名指し。ローマ連邦首脳になんたる無礼だ、とルークは本人でも思っているしボディガードと秘書もそれは同じだが、この気まぐれで残虐な老婆が何をやらかすかわかったものではないため、舌打ちしながらも膝を屈め、財布に手を伸ばした。

その時、一発の銃声。機敏に反応し、ルークのボディガードが動く。その弾丸は、正確な弾道でルークの頭を捉えており、そして、正確な弾は屈んだルークの頭上を通過した。ルークの背後にあった植木鉢が派手な音と共に割れる。

左手を上げるエレオノーラ。それを合図に、エレオノーラの部下二人が銃が放たれた方向に駆けていく。

しばらくの間を置き、数発の銃声。その後、場は沈黙に包まれた。「あらあら、運が良かったわねルークちゃん、私と違って政治家つても結構恨みを買うのねー」

エレオノーラはのほほんとした調子でルークから財布を受け取り、鞆に収める。

「俺はこれでも愛され系首脳だ、国内の恨みなんて買ってないぞ」

冗談を言うルークに、息を吐き出して笑うエレオノーラ。

直前に暗殺されかけたのに冗談を言って笑うメンタル。それは、首脳の座まで上り詰めた彼の胆力と賢さなのか。

それとも、目の前にいる怪物への信頼なのか。

秘書は以前ルークの言っていた事を思い出していた。「コイツが生きている、なんて国民が知ったら俺の支持率なんて0パー確定だ」と。プライベートのルークが見せるユーモラスな姿だ、と思っていたかったが、自分ももし今のこの職でなくてこの老婆がこっさり生かされていた、なんて知ったら首脳をリコールするデモに参加するだろう、と溜息をつく。

「ところでなんか気分が良さそうだな、いい事でもあったか？ 珍しく処刑台の夢を見なかったか？」

ルークの軽い嫌味に、エレオノーラはいつもの笑みを、何やら普段より楽しげな笑みを見せた。

「近いうちに可愛らしいお客さんが遊びに来てくれる気がするのよ、勘だけどね」

## 地球番外編2話 追手

「今回の事件、どう責任をとっていたただけなのか？」

二人が船に乗り込んだのと同時刻、孤児院では管理者である車椅子の女性、アナスタシアとそのお供達が到着した政府の役人に追及を受けていた。

兵士を連れ、かなり差し迫った状況である事が伺える。

「今回の件、施設の警備と管理体制の甘かったこちらの責任です、申し訳ありません」

頭を下げるアナスタシアと、それに追従して頭を渋々下げのお供の4人。

だが、役人はその態度、主に4人のものが気に入らなかったのか、怒りを露わにする。

「この施設が我々にとっていかに重要なものか理解しているのかアンタらは！」

「少し疑問に思いますね。我々はこの孤児院の子ども達の世話と研究を任されている身。施設そのものの管理と警備については国から人員が派遣されているはずでは」

しかし、その役人の態度に対して軍服の青年、ヨハンが反論する。

この施設は、選び抜かれた孤児にMO手術を施し、兵士を要請する施設である。だが、その秘匿性とMO手術というものを扱っている事に着目し、その応用研究が行われている研究所でもあるのだ。

なので、いつ不満を持った孤児達が反乱を起こさないか政府から監査官や兵士が送られているし、研究所には子ども達を使って人体実験を行う権限が与えられている。

「アンタらが普通に仕事をしているならいいだろう。だがな、『手術』に関するレポートはこれまで百数十回分送られてきているが子どもは一人たりとも減っていない。これはどういう事だ？ 情が湧いて虚偽の報告をしているんじゃない」

「けほっ…」



早口でまくし立てる役人。だが、4人の注目は咳をして赤い液体を吐き出したアナスタシアの方に向いてしまった。

「うわっ、先生ヤバイ！ 大丈夫!？」

「早く医務室に！」

「安静にさせねえと！」

話の腰を折られ、苛立った様子の役人。だが、その表情はすぐに困惑と怯えの混じった色に変わった。

金髪の少年、バイロンがアナスタシアを守るように二人の間に割り込んできたからである。

「なあ、あんた、ここのがキ共のために先生が何をしているのか知ってるのか？」

「結果さえあればそんな事は知った事じゃないな。お前たちは偶然あの手術から生き残っただけ、博士は命を狙われ死にかけていた所を我々救ってやった存在だ。どう使い潰そうが我々の自由だ。ま、もう先は長くなさそうだから使い潰せそうにもない欠陥品か」

背後に銃を構えた兵士がいる余裕なのか、役人は堂々と4人とアナスタシアを侮辱する。

兵士も、どこかその言葉に同調するかのような下卑た笑みを浮かべている。

「次にそれを言ったらブツ殺すぞ」

次の瞬間、バイロンの右手が、手首の辺りから生えた黒い湾曲した鎌のような何らかの生物の顎が役人の首に添えられる。

当然、その蛮行に対しその場にいた3人の兵士が銃を構える。

「癩だがバイロンと同意見だ。ドクターに対する無礼は私が許さん」  
だが、その銃はバイロンに向けられる事なく下ろされる。そして、その動きに合わせて兵士が崩れ落ちた。

死んではいけないようだが、地面に這いつくばり、がくがくと痙攣している。

驚愕しながら振り返った役人が見たのは、いつの間にか自分と兵士達の背後に回っていたヨハンの姿。

その額からは触覚が生え、体は青みのかかった黒色に、背からは才

レンジ色の羽が生えている。

そして、手首からは針が伸びていた。

「ヨハン、薬使って変態とか本気モードじゃねえか」

「あの子先生の事大好きだもんね」

看病している残りの二人も、会話しながら役人を殺意の籠った目で睨み付ける。

「お前たち…我々に反旗を翻すつもりか！」

身を守る盾を全て失い、顔面蒼白で役人は震え声で話す。

「ちげーよ、お前1人に反旗を翻してんだ」

その姿を鼻で笑い、バイロンは役人を蹴り倒す。

「お前たちあの片方がどれだけ価値があるものなのかわかって…」

「追いかけるなら勝手にしろよ、捕まえられるかどうかは知らねえけどな」

逃げてしまった子どもには特別な価値がある、そう呻く役人。だが、それを否定したのは、口元の血を拭い車椅子から立ち上がったアナスタシアだった。

「あの子の特別な価値なんて知りません。こここの施設の子たちは、皆同じく私たちの可愛い子どもで、弟妹です」

「ねえシロ君、なんであの嚴重な警備の中で脱出できましたの？」

「なんで、って言われても困るけど…：うーん、ああ、爆破する時と逃げ出す時に警備員が居眠りしてた」

「何とも都合のいい話ですわね」

「なんか皆めっちゃピクピク小刻みに動いてたけどな」

「それって…」

船の甲板をモップで掃除しながら、エミリーがシロに話しかける。暇なのである。

この船にこっそりと乗り込んで、もう一週間と三日になるだろうか。このままのペースであれば、明日には目的地であるドイツの港

町、ハンブルクに到着するらしい。数百年前の技術では1ヶ月近くかかるルートだという事を聞いて、科学の進歩を実感する二人。

二人は密航しているものの、何もしていないで船内に隠れていれば見つかってしまうであろうという危機感と、流石にヨーロッパまでの船をタダ乗りするのは……という罪悪感から、自主的に甲板掃除をしているのである。

それが功を奏し、二人は細かい事は気にしないスタイルの船員たちからすっかり甲板掃除のアルバイトとして扱われ、船員たちの食事も普通に参加できていた。密航というか、すっかり船の一員である。

「おう新入り、ご苦労様！」

「あ、お疲れ様ーッス！」

「お疲れ様ですわ」

船員が船内へと続く梯子から顔を出し、二人に声をかける。唐突な登場に二人は驚きで肩をぶるつと震わせた。

自分達の事情が悟られてはまずい。適当にごまかして会話しながら、二人は掃除を続ける。

「そうそう、なんかこの船に密航者がいるみたいでさ」

その発言は、とても唐突だった。二人揃って動きと呼吸も一瞬止まったような感覚になり、頭の中が真っ白になる。

「ホー、ブツソウツスネー」

「ソウデスワネー」

「お前らもなんか知ってたりしたら教えてくれよな。じゃ、適当に切り上げてメシ食いに来いよー」

二人は片言になりながらも辛うじて返事を返す。船員はその謎の発音に少し不思議そうな顔をするが、すぐに船内に戻って行った。

「し、心臓が止まるかと思いましたわ……」

「超怖え……」

二人ともモップを床に置いて胸を押さえる。すでにばれていた、というわけではなさそうだった。

しかし、何らかの証拠があったのだろうか。自分達は空いている小

部屋の倉庫に寝泊まりさせてもらっている。

もちろん、船員たち公認である。乗組員に認められているのに、いまさら何かの証拠があるものなのだろうか。

「極力証拠を残さないように、って言ってもそもそも証拠自体が何でどこにあるのかもわからないなあ」

密航者がいる、という噂があるという事は、見知らぬ人間を船内で見た、又は船内に生活している痕跡があるという事だろう。

しかし自分達は密航者ではあるが既に船員たちにとって見知らぬ人間ではないし、生活に使う場所も許可済みだ。

一体どこからそんな話が出てきたのか、と二人は考えるが、やっぱりいくら考えても答えは出てこない。

「まあ、今は気にしても仕方がないか」

「そうですね、今大切なのはご飯ですわ」

あまり深く考えても仕方がない。二人は軽い調子で、船内の食堂に急いだ。

これから昼食だ。この船は夜に行う業務が多いため、昼食に量や質のあるものを、夕食に軽食、という形式ができていく。そして、明日到着なので今日はパーティだ。夜の業務も事前にある程度済ませてあるため、今日は船全体で休息のようなものである。さあ、どんな美味しい食事をとる事ができるだろうか。二人は期待に胸を膨らませ、食堂の扉を叩いた。

「……では、今夜も穏やかで実り多き海に乾杯！」

「乾杯！」

食事前の恒例行事である船長の挨拶が終わり、集まった乗組員たちが業務によって空かせた腹を満たすべく食事に突撃する。シロとエミリーも例外ではない。二人は甲板掃除だけではなく荷物運びや見張りなどさまざまな業務をこなしていた。

もちろん、こつそりと乗せてもらっているこの船への恩返しの意味

もあるが、いざという時のために脱出経路を確保する、という意味で船内の構造を知っておく、という意味もあった。

「二人とも、今日は無礼講だ、飲め飲めー!」

「エミちゃん、一杯どうよ」

「おいシロ逃げるな、立派な男だろうがお前は!」

しかし、そんな密航者の考えもここではあまり意味が無く。海の陽気な荒くれ者たちに酒を勧められ、未成年の二人であるが断れずに飲まされている。女の子であるエミリーに対してはまだ遠慮が見られるものの、シロに対しては容赦がない。ワインの瓶を口に突っ込まれるなどの惨劇が繰り返り広げられている。

「何ですかその怯えた目は! 早くおかわりを持ってきなさいな!」

「そ、そんなに飲んだら体に悪いぞ……」

「……」

「シロ? シロオオオオオオ!」

数十分後。翌日に目標到着を控えた輸送船の少し豪華な昼食会場で、机に片足を乗せ高飛車に歴戦の海の男たちにワインのおかわりを要求するエミリーと光が消えた目で天井に描かれている足が10本あるタコのような生物が船を襲っている絵画を見つめて動かないシロという光景が展開されていた。

「記憶がありませんし頭が痛いのです……」

「オウエエ……」

グロッキー状態の二人が目を覚ましたのは真夜中の事だった。頭を押さえるエミリーと窓を開けて海に向かって吐いているシロ。吐瀉物に魚が集まって来るの見て思わず真顔になるシロだったが、最終的にはエミリー程飲んでいなかったので症状は軽く、一通り吐いた後は少し酔いも醒めてきていた。

「……ん? なんだありや……?」

そんなシロは、夜の海で何かがこちらの船に向かってやって来るのを見つけた。

イルカやシャチやのような大型の生き物だろうか、とぼんやり考えていたが、その姿は船に近づくとつれて鮮明になっていく。

「オイ、ぶつかるぞ！ 危ない！」

それは、1艘のモーターボートのようなものだった。もう間に合わないという事はわかっているものの、思わずシロは叫んでいた。騒ぎを聞いて、エミリーも窓を覗き込む。

だが、そこからの光景は二人の予想とは全く違うものとなっていた。

モーターボートが激突、それよりもずっと大型であるものの、輸送船が衝撃で揺れる。

しかし、モーターボートに乗っている人々は海に飛び込む、などという事はせず、輸送船に梯子をかけている。

そして、二人は見てしまった。

こちらの船に移ってこようとするモーターボートの乗組員たちが、注射器、タブレット、葉巻といったシロもよく知る例の『薬』を持っているのを。

「エミリー、行くぞ！」

「ええ！」

二人の手を引き、走り出す。追手だ。そして、こうなった原因は自分達だ。

分かれ道。左に行けば潜水用装備の用具庫。右に行けば甲板。

二人で一瞬迷い、そしてお互いを見つめ、覚悟を決めて頷く。

「撒いた種は何とかしないとな」

甲板に上がり、二人を見て手に持った紙を確認し、ニヤリと笑う侵入者たち。

それに対し、シロはポケットから注射器を、エミリーは護身用の拳銃を取り出す。

夜の船の甲板を、輸送艦か侵入者、どちらが使ったともわからない照明弾が明るく照らし出した。

## 地球番外編3話 まな板の上の

「先に聞いておく。素直に戻る気はあるか？」

甲板で、ア리가ベースと思われる男が二人に問いかける。

だが、二人の答えは当然決まっている。

「断る」

「お断りですわ！」

脱出する際に盗んだ『薬』の入った注射器を持っているが、使用せずじりじりと下がるシロ。油断なく拳銃を構え、シロに倣って下がるエミリー。

乗り込んできた敵は8人。シロは変態ができるものの、エミリーは『薬』を持っていない。護身用の銃だけでは少し力不足かもしれない。『なるほど。ではいいニュースを教えてくださいやろう』

追手の8人もじわじわと距離を詰め、二人に近づいていく。

「へえ、あの太眉の首席が心臓マヒとかか？」

憎まれ口を叩いて様子を伺うが、先ほどまで笑っていた男の顔は能面のように無表情となっている。

『死体が確保できれば構わない』だそうだ

表情を変えないまま、男はシロに言い放つ。シロはそれを聞いても予想通りだ、という表情。

そもそも、自分達が逃走して中国が困る事など、情報の漏洩くらいだ。たとえ生きて連れ戻したところで自分達のような反乱分子など危険すぎて任務には使えないだろうし、他への見せしめのためにも処分されて当然だろう。

始末すれば、でなく死体が確保できれば、というのが少し気になるところだが、今は全く余裕が無い状態だ。

シロは時間を稼ぎながらも、退路を頭の中でシュミレートする。

もちろんここまで来て船を見捨てて逃げ出そう、というつもりではない。

「え……」



しかし、エミリーはそんな事を言われると思っていなかったのか、少しショックを受けた様子だった。

少し顔が青ざめ、小刻みに膝が震えている。

無理もない、とシロは思うが、このままこの場所においては形勢は悪いままだ。

「そういえばさあ……あんたら中国語にちよつと訛り入ってるよね？」

もしかして半島の方？」

ふとシロが時間稼ぎに言った一言に、男の眉がぴくりと動いた。そして、その顔がみるみる間に怒りで赤く染まる。

数百年前には中国と日本、アメリカの緩衝地帯となっていた朝鮮半島。

今現在、南北に分かれて戦っていた二つの国は和平し、北では独裁政治がいまだに続き統合こそ叶っていないものの、南はアメリカ、北は中国といった超大国の経済的、軍事的庇護の元、新たな時代を築き上げている。だが。

「我々を……軟弱で卑劣な南のウジ虫共と一纏めにするな！」

二国間のそれぞれの差別意識は根強い。たとえ最高部同士が仲良くしましょう、と言っても国民感情はそう容易く変わるものではない。

事実、南から北、北から南への旅行者への扱いは酷いものがあるし、留学生への苛めも問題となっている。

同じ民族が暮らす二つの国、一見丸く収まったように見えていても、それは表面だけなのである。

シロはぼんやりと予想を立てる。恐らく自分達が逃げてから追手を差し向けたのではない、元々この国にいた子飼いに自分達を追わせているのだろう、と。

超大国である中国だ、世界中にいつでも動ける兵隊を置いておく事くらいわけが無いのであろう。

そして、MO手術は葉さえあれば金属探知機にも引つかからない最

高の武器である。

何かあった時に即応させるにはぴったりの戦力だ。

そこで、シロの思考は途切れる。怒りに我を忘れた男が、怒りのままに突撃してきたからだ。

後ろの7人もそれに続く。

よし、釣れた、とエミリーの手を引き、シロは艦内に踵を返してダツシュしようとしたが、目の前の光景で思わず足を止めてしまった。

「あがつ!？」

「ぐあああ!？」

突然、追手のうちの二人が空から降ってきたかのように見える弾丸に打ち据えられ、血を吹いて崩れ落ちる。

驚きに駆られてその場にいる全員が弾丸が放たれた方向を向く。

「おうおう、また襲撃かよ! 今回はどこのモンだ!」

「シヨーンさん!？」

昼に二人を食事に呼びに来ていた船員、名をシヨーンという男が、軽機関銃を構えてブリッジの上の開けた見張り台に立っている。その鋭い目は、追手たちに向けられていた。

すぐさま反撃が追手たちの取り出した拳銃から放たれるが、シヨーンは器用に身を隠しそれを回避する。

「シロとエミちゃん、こっちだ逃げるぞ!」

そして軽業でシロとエミリーの後ろに飛び降りてきたシヨーンが二人を船内に引っ張り込み、扉を閉める。

扉が閉まる直前、牙のようなものがドアに突き刺さるが、間一髪でそれはドアの厚みに阻まれる。

「ふいー、あぶねえあぶねえ、二人とも大丈夫か?」

船内をシヨーンの後に続き走るシロとエミリーはこくりと頷く。だがその表情は暗く、精神的には大丈夫とは言い難い状態だ。

「ん? どした? ……ああ、襲撃の事ね。ビツクリさせてごめ!」

「違うんですの!」

シヨーンの謝る声をエミリーの大声が遮る。

思わず足を止め、エミリーの方に振り返る船員。

だが、その顔には小さな子を安心させるような笑みが浮かんでいた。

「気にすんなよ、密航者のお二人さん」

シヨーンは軽く言い放ち、二人の頭をそれぞれ片手でぽんぽんと叩く。

「へっ……!?」

「……!」

二人の顔が驚愕に染まり、それからみるみる間に青ざめる。

それをシヨーンはすこし面白おかしい光景であるかのように眺めた後、こんな修羅場なんて慣れっこな様子で再び笑う。

「船長も皆最初から気づいてたよ、裏では何日目に自白するか、なんて賭けをやっていたぐらいだからな!」

「じゃ、じゃあ密航者のウワサって?」

船全体からバレていた、しかし見逃されていたという事実を理解が追いつかず、目を白黒させるばかり。

シロもまた、茫然とした顔をしている。

「もちろん、二人を焦らせて自首させるためのウソ……」

「オラツ、神妙にしやがれ! この密航者!」

「待つてよ船員のおんちゃん! ホラ、俺はあれだ、そう、甲板掃除のアルバイト!」

通路の曲がり角から、左手に黒い手袋をした一人の青年と彼をがちりと捕えて連行する船員が現れる。

抵抗するが、頑強な海の男に捕えられてはどうしようもない。

「……あー、まあ、よくある事だな、うん」

しきりに頷くシヨーンを見て、二人はこの非常時だというのにこの船の監視体制に一抹の不安を覚えるのであった。

「本当にすいませんでした」  
「おうおう、若い内にはいろいろな冒険してみるもんだ、むしろ気に入ったぜ」

船の一室で、騒ぎを聞きつけて合流してきた船長に正座をして頭を下げる三人。

髭を撫でながら、笑顔で聞き入れる船長。

密航者が発見された。船では時々ある事だろう。船長がそれを許す。人柄にもよるがあり得ない事ではないのかもしれない。この船長の寛大さには感謝しかないが、シロはそれ以外の事がおかしいと考える。

まず一つ目。今現在、この船は襲撃を受けている。それは船長も知っているはずだ。だが、全く動じている様子は無い。

二つ目。襲撃に対応するために銃を持った船員たちが続々と甲板に向かつていくのが部屋から見えるが、その装備は一介の輸送船が護身用に配備している装備の枠を超えている。完全に軍隊の実戦装備のレベルだ。

「船長、私とシロ君を行かせてくださいませ、急がないと船員の皆さんが……」

焦った様子のエミリー。MO手術被術者相手に銃火器と船員がどこまで対抗できるかわからない。早く自分達が助けに行かなくては、という考えからの言葉だが、船長はあつさりとしてそれを否定する。

「いいや、ガキは守られるもんだ、それにお前らには質問がある」

本当なら、ここで船長を押しつけてでも戦いに行くべきなのだ。それはシロもよくわかっているが、今ここで船長に納得してもらおう必要がある、そうとも感じていた。

「船長、その前に一つ聞かせてください」

「なんだ、シロ」

「あなたたちは、何者ですか」

シロが手を挙げ、船長に質問する。抽象的な内容だが、それはシロの様々な疑問が入り混じったものだった。

異常に実戦慣れした様子の船員たち。ただの輸送船とは思えない装備。さらにもう一つ、以前から疑問に思っていて、そして確信に変わったものがある。

掃除をしながら船の設備や部屋の配置を調べていて何か違和感を感じていた。そして、今気が付いてしまった。

この船の構造は、軍艦のものだ。貨物室のスペースを広くとってあるなど輸送船としての設備こそあるものの、完全にこの船は元々は戦闘を行うために設計されていたものだった。

「シロにエミリー、『カラマール』って知ってるか」

にやりと笑った船長の答えに、二人は首を横に振った。二人は世間から隔離された山奥の施設で育ったため、世間の情報はほとんど入ってきていなかったのだ。だが、隣で何かを察して驚きと恐怖の混じった顔をしている青年を見て、これはろくでもないものだ、と何となく考える。

「カラマールってアレ？ えっ、ちよつと待ってウソだろ……」

「そんなんじゃないや何言ってるのか二人にわかんねえだろうが」

震え声の青年に苦笑し、船長が言葉を続ける。

「かつてヨーロッパ最大規模を誇った組織犯罪集団、まあマフィアって言った方が簡単だな、その名前だよ」

「軍隊でもない一つの組織が戦闘艦を保有してる、なんて言ったら規模のでかさがわかるか？」

続きを聞くまでも無く、シロの頭の中では自分の疑問への回答がぐるぐると回っていた。

なんで輸送船の船員が実戦慣れしているの？ 簡単な事だ、幾度となく死線を潜って来たからだ。

なんであんな重武装なの？ 簡単な事だ、元々この船と船員は血み

どろの殺し合いをするために存在していたのだから。

「そんなのも過去の栄光、数年前に軍隊まで持ち出して本部が襲撃されてね、組織は壊滅しちまったよ、幹部の連中もほとんど死んじまつたらしいし、敵討ちだなんだ言っただけで国とドンパチやらかしても勝てるわけねえ、だからこの船は降伏したのさ」

「しっかし大統領が中々優しい人だな、この船は国の仕事に従事するって条件で俺と部下たちは罪を免れたってワケだ」

「え、じゃあこの船の乗組員って……」

「俺含め全員マフィアだが何か？」

恐る恐る質問し、とんでもない船に乗っちゃった、と絶望的な表情をしている青年。

「ま、んな訳で密航者とマフィア、同じ穴の貉だからお前らにはあんまり強く言いたくもないわけだ。同類だからな！」

船長とこの船の意外にブラツクな経歴を聞き、何も言えないシロとエミリー。

「よしよし、じゃあ今度はこつちから質問だ。今襲ってきている奴らはアレだ、お前らを追ってきたんだろ？」

「いやいや、オレそんなの知りませんよ！」

「はい」

艦長の目が鋭く光る。それに対して、慌てて否定する青年と、申し訳なさそうに肯定する二人。

「へ？」

何故か、青年が間拔けな声を上げる。当然その謎の反応にその場の全員が一斉に青年を見る。

しまった、やらかしたと汗をだらだら流す青年。

「二人と違って仕事もしてないニート密航者の兄ちゃんよ、何か知ってんのか？」

船長の事実を突いた辛辣な言葉と威厳と威圧感に満ちた目線に震える青年。

しばらくの沈黙を経て、ついに観念した様子で青年はうなだれた。

「すいません、バリバリに俺狙いの追手です」

「へ？」

今度は逆に、二人が間抜けな驚き声を出す番だった。

MO手術を受けた追手。目標は二人だし、襲撃者本人の言葉からもそれは確定している。

なのに、この青年の確信を持った言葉。それが意味する答えは一つだった。

「お兄さん、もしかして『手術』を受けましたの……？」

それに対する答えは、左手に嵌めている手袋を外す事だった。

二人の会話がわからず黙って聞いている船長は、むき出しになった青年の左手を見て思わず息を飲む。

「正解だぜ、エミリーとやら」

青年の左手には、穴が開いていたのだ。

それは、『能力』を効率良く使い、さらに強化するために人体に施された手術のものだった。

二人も施設の仲間で何人か、このような人体改造を施された人間を知っていた。

「……知ってるって事は二人も施設から逃げてきたクチか」

「ああ」

「ですの」

「悪い、俺にはてめえらが何言ってるのかサツパリ……」

船長が三人に説明を求めたのと、部屋のドアが蹴破られるのはほぼ同時だった。

現れたのは、首の折れた船員を片腕で持ち上げている襲撃者の先頭にいた男の姿。

数発の銃弾を受けて出血しているものの、その力が衰えている様子はない。

「俺の目の錯覚じゃなかった!？」

「なんでい、あいつどうなってやがるんだ」

額から生えた触覚とベースとなっている生物の特徴に近くなり変

形した体は三人には見慣れたものだが、船長とシヨーンはその人間から少し離れた姿に驚きの目を向けていた。

エモノを見つけた。再び、男は下卑た笑みを浮かべる。

「何回も謝ってるけどごめんなさい、船長、シヨーンさん」

「お、おい、そんな事言ってる場合じゃ……」

シロが船長に向き直り、頭を下げる。その手には、注射器が握られている。

男に背を向けた形となるシロの首めがけて、男の腕の一振りが襲い掛かる。

一陣の風。黄色と黒、そして白の混じった色が、吹き抜ける風に目を閉じる前のエミリーの、船長の、シヨーンの目に刹那の瞬間映る。

——一撃必殺。それは、自然界における最強の狩りの、そして身を守る手段。

その生物が何の仲間に属するか、と聞けば、ある人は汚らしいというかもしれない。

ある人は明らかな嫌悪感を示すだろう。だが、その生物は彼の親類達の持つ一般的なイメージとかけ離れた生存術を実践している。

空の王者『オニヤンマ』。卓越した空中機動で獲物を屠る大空の狩人。

猛毒の軍勢『オオスズメバチ』あらゆる昆虫は彼らの食糧でしかなく、その針は生物の頂点、人間すら死に至らしめる。

どちらもかつて『バグズ2号』計画のベースに選出された強靱な空の昆虫である。

……では、その両者すらも糧とする昆虫が存在する事をご存じだろ



うか？

圧倒的な速度も持たず。強力な毒も持たず。ただ、一本だけの鋭く硬い針のみを武器に『昆虫最強の暗殺者』と謳われたその生物。

一瞬だけ閉じた視界を再び開いた四人の目に映ったのは、男の首に開いた大穴から吹き出す血の赤に染められた光景。

「俺たちは、いや、俺は、バケモノなんですよ」

そして、波風一つ立たない水面のような、穏やかで虚しい笑みを浮かべたシロの姿だった。

白<sup>シロ</sup>

国籍：中国

18歳 ♂ 176cm 66kg

MO手術 『昆虫型』

シオヤアブ

## 地球番外編4話 シロの傷跡

物陰から音も立てずに忍び寄り、首を掻き切る一撃必殺。そんな古典的な暗殺のイメージそのものを、この昆虫は実践する。

獲物がたとえ、頑丈な装甲に身を包んだ甲虫であろうとその硬く鋭い口吻はそれを貫き、それが高速飛行を可能とする蜻蛉であろうと、一たびその奇襲が成功すれば逃れる術は無い。

『オオスズメバチ』のような猛毒を持たず。

『オニヤンマ』のようなスピードも持たず。

『トビキバアリ』のような瞬発力も持っていない。

ただ、あらゆる昆虫の中枢神経を一撃の元に貫く『センス』とそれを可能にする『針』。

そして、失敗すれば待っているのは紛れもない己の『死』。

それらの要素が、この昆虫を暗殺者、という賞号にふさわしいものとしている。

……ごぼつ、と声の代わりに血反吐を吐き出す音。どうだ？ 自分に何が起こったか理解できたか？

「シロ、お前……」

……船長とショーンさんの驚く顔が見える。当たり前だ、目の前の人間が突然特撮の怪人になったら驚かない人なんていない。

「や、やるじゃねえか」

少し退き気味に、密航者の兄ちゃんが俺を見つめる。ああ、慣れている。同類にすら拒絶されるこの感覚は。

「シロ君……」

エミリーが涙目で両手を固く結んでいる。怖いのか？ この状況が？ ……いや、俺が、だろ？

追手のリーダーと思われる男が、一瞬恨めしそうな表情を浮かべ、

崩れ落ちた。

床がみるみる間に血で覆われていく。

「簡単に説明します。俺たちは『化け物』です。今襲ってきている連中と同じ」

化け物。なんともわかりやすい説明だ、とシロは自嘲する。

もう船長も理解しただろう。自分達が立ち入れる領域ではないと。

シロは踵を返し、部屋を出ていく。二つの足音が自分達とは逆方向に、もう二つの足音がこちらにやってくるのが聞こえるが、振り向かず一直線に甲板に。

曲がり角に敵がいる。

なんの策も無く一直線に進み、一瞬の動揺をつき左胸を貫き、心臓と背骨を破壊して抜く。もう慣れたものだ。

最初に人を殺したのは、初めて変態をした時だった。といってもそんなに昔でもない。数年前の事だ。戦闘訓練で日頃から嫌がらせをしてきた相手と『薬』を使った実戦演習を行った時、演習開始から早々に相手は挑発の言葉を吐き始めた。

今思えばそれは安っぽい悪口で、鼻で笑うようなものだったと思う。でも、その時の自分は頭に血が上り、視界が赤く染まったのを覚えてる。

……たぶん、相手は挑発の言葉を最後まで言えなかったと思う。

気が付けば自分の右手は血に染まっていて、相手の全身も血に染まっていた。慌てて駆け付けた医者は顔を真っ青にしていたけど、研究員の連中は何故かとても喜んでいたので記憶に残っている。そして、その後孤児院の院長先生が抱きしめて慰めてくれた事も。自分よりも小さい院長先生の手のひらがなんだかとても大きく見えて、罪悪感と混乱と興奮で何もわからなくなっていた自分はなんだか安らかな気分になった。

その後も、自分だけが何度も人殺しをさせられた。ある時は孤児として外国から買われてきて怯えている同年代の子どもを。

またある時は刑務所に連れられて死刑囚と思われる大人を。断れば、孤児院の友達を人体実験の材料にすると研究員に脅された。

だから殺し続けた。でも、自分が守りたかった友達は離れていった。まるで、別の生き物を見るような目で。同じ手術を受けた身なのに、まるでおぞましい怪物でも見たかのように怯えながら。

きっと、今回もまた同じなのだろう。エミリーも手術を受けている身とはいえ、性格からして戦闘向きじゃない。

あの兄ちゃんも、逃げ出せるような警備の甘い施設にいたのだから、そこまで重要な戦力ではないはずだ。

訳アリだけど一般人の船乗りの二人なんてなおさらだ。

また、一人ぼっちになるんだろうか。自分が敵を皆殺しにしてこの窮地を脱して、エミリーと一緒にヨーロッパに辿り着く。それで、エミリーは血に染まった俺に心を開いてくれるだろうか？ お互いぎくしゃくしながら、追手に怯えて細々と暮らす。……仲良く二人で、ならそれでも少しは幸せかもしれない。……もう叶わない事だけど。

もう一度自嘲の笑みを漏らし、シロは甲板に突撃する。

戦闘は続いており、甲板にいる敵は四人。最初の8人と数が合わない。もしかして、自分が最初に甲板に上がった時にいたのが全員では無かったのか？ とシロは思うが、今は目の前の敵に集中するべきだ、と頭を振り、敵を睨む。

船員もまだ戦っているが、その攻撃の手は鈍っている。

シロを確認したそのうちの一人が向かってくる。それを両の手首から生えた口吻で迎撃する。

「おいシロ坊、なんだよそれコスプレか!？」

船についている機銃座を操作していた船員が手首から武器を生やし、触覚の生えたシロに率直な感想を投げかける。だが、シロは無視して先に進んだ。

「おい、リーダーをどこにやりやがった」

「殺したよ」

質問に軽く答えるシロに、襲撃者は少し怯えた様子を見せる。その

次の瞬間には、怯えた顔を保ったまま襲撃者の一人は胸から血を吹きだしその場に倒れた。

「……かかってこいよ。バケモノ同士、存分に殺し合おうじゃねえか」

「まあ、多少同情するけどさ」

シロに背を向け、艦内を疾走するのは密航者の青年。

簡単に言うとは彼は逃げたのである。何故なら彼は臆病者で、ヘタレだからだ。

あの少年、シロには同情する。あの目を見ればわかる。あれは、自分が拒絶されると思いこんで閉じこもってしまっただ。誰かが傍にいてやらなければいけない目だ。あの隣にいた女の子は、シロが敵を皆殺しにして血に染まった光景を見てもシロを受け入れられるだろうか。そんな事をふと考えたりもするが、自分の命が一番大事。そんなこんなで、彼は今現在、この船からの脱出を目指している。

この通路を曲がれば窓のある部屋がある。そうしたら海に飛び込んでおさらばだ。

たぶん、この船は助かる。敵はシロが壊滅させるだろう。追手が狙っているのは恐らくあの二人だろう。ならば、自分は大した追手も差し向けられないはず。では皆さんお元気で、と心の中で青年が思った途端、首に強烈な衝撃が走る。げぶつという鈍い音が喉から出てきて、誰かに首を掴まれた事を青年は理解した。

「おいおい七彦君よ、どこに行くんだよ」

恐る恐る背後を振り返った青年、七彦の目に映ったのは、髭もじやの大男、船長だった。

さーっと七彦の顔が青ざめ、体は無意識の内に震えだす。

「せ、せせせ船長？　なんで俺の名前知って……」

「お前が部屋に置いてった鞆に書いてあったんだよ、手作り感溢れる可愛らしいネームプレートがな」

「七彦、お前は物をよく無くすからつけておきなさい」

「カツコ悪いからやだー」

「でもね、お前の事が心配だから……」

「母ちゃん……!」

「母ちゃん、超オウンゴールだよ……!」

今は遠く離れた島国の母を思いさめざめと涙を流しながら、渡された鞆を手に七彦は船長に必死に謝っていた。

「命だけは! 頼みます、命だけはお許しを! ここで死んでは宇宙に旅立つ予定の従妹に申し訳が立ちません!」

「何わけわからん言い訳してるんでい! お前もなんか戦えるんだろ、はよ他の野郎どもを助けに行つてこい!」

「いや言い訳じゃなくて!」

「うるせえ!」

こんなわけで、顔が若干陥没した七彦は操舵室に向かった船長と別れ、船員の救出に向かう事に……せずそのままダツシユで逃げ出そうとしていた。

「あ……あ……」

「おいおい、女がいやがったぞ!」

そんな七彦が脱出しようとした直前、横を通り過ぎた通路で見たのは、船員の娘か何か、小さな女の子が、変態を済ませ腕が鎌のようになってる襲撃者に一歩一歩近寄られている、という光景だった。

七彦の思考回路が一瞬ストップ。そしてすぐに回り出す。

船自体は無事だ。シロが何とかするだろう。最悪船員だけでも対処できるかもしれない。そう、船は無事なんだ……、船は……

「多少の犠牲はしようがないとかいうけど無理!!」

「な、何だお前は!」

「脱出ルートに背を向け、通路を曲がって突撃。襲撃者に対して、手の孔を見せて威嚇する。」

その孔の意味を理解しているのか、襲撃者は後ずさる。隙を突き、女の子を脇に抱えて七彦は素早く逃げ出す。

「なっ、てめえ変態してねえじゃねーか!」

気づかれたか、……さっきの威嚇が完全なハツタリであった事に。

「ひゃああああ!! お兄さん誰ですかああああ!!」

「うわこれ俺ハタからみたら変質者か誘拐犯もしくは両方!」

助けられた者、助けた物、追う者、全員が叫びながら繰り広げる攻防戦。

薬はこっそり盗んできたから持っているものの、逃げながらでは使用する暇もない。なので。

七彦は目に入った壁の複数のスイッチを全てオフにする。どれがあたりだったのかはわからないが、一瞬で辺りは真っ暗に。

それでもまだ、足音で追いつがって来る襲撃者。視界が無くとも、音で。そんな彼の耳に入ってきたのは、ドアを開ける音。

部屋を覗き込んだ男の目に映ったのは、空っぽの小部屋だった。フェイントか、と舌打ちし向こう側の通路を向こうとした途端、何かに押され部屋の中に押し込まれる。そして流れるような動作でドアが閉められた。

「クソがあっ!」

体当たりするも、ドアは開かない。その手が変化した鎌をドアに突き立てるも、傷が付くだけで貫通する様子は無い。

「残念だったな、お前はもう……詰みだ」

「ああ?」

小窓から見える七彦は、すでに変態を済ませていた。そして、ドアには通気用の穴が開いている事に襲撃者は気が付く。悪態をついていたその顔は、全てを理解しみる間に青ざめていく。

「……ここから、俺の『能力』を流し込む。お前はもう終わりだ」

「待て、やめろ……やめろおとおおお!!」

「よう、エミリー、シヨンさん。怖いか？」

血の海の中、追ってきたエミリーとシヨンに対して背を向けてシロは震える声で話しかける。

すでに戦いは終わり、シロ以外に甲板に立っている者は誰もいない。

シロの戦いに、二人は参加できなかった。と言うより、戦いではない一方的な虐殺劇だった。

「シロ君、一つ言いたい事がありますわ」

「ああ……」

シロが振り向かないのは、エミリーの目を見るのが怖かったからだ。

一緒に、性格には半ば向こうが望まない形で連れ出してしまった、しかもこんな惨劇を見せてしまった。

もちろん、一人も殺さずに最後まで幸せに、なんて夢を見ていたわけではない。

でも、これだけの数を殺して。自分がまともな人間である、と受け入れられる自信が、かつての事もありシロにはなかった。

「よかった……シロ君が生きててよかったですわ……」

その答えは予想に反するもので、シロは思わず振り向く。その瞬間に、エミリーとシヨンに同時に抱きしめられた。二人分の重量でふらつき、たまらず倒れるシロ。しかし、ぼろぼろと涙を零す二人はシロから離れようとはしない。

「シロオ！ ごめんなあ……俺たちが弱いばかりにお前にだけ汚れ役をやらせちゃって……！」

「あんな沢山の相手に一人でシロ君が死んじやったらどうしようって……うわっ、うわあああん！」

「ちよっ、落ち着けて二人とも、重い、潰れるーッ」

動けずに、やってきた船員に助けを求めるシロだったが、何やら温かい目を向けられて放置されるというそういうのが恥ずかしいと思



えてしまう思春期の少年にはきつい仕打ちを受けながらも、シロの心は、少し穏やかで暖かくなっていた。

その後、乗員が全員集まって被害報告と船長の話を聞く事となった。

三人が死亡、五人が重傷という決して軽くない被害の中、シロ達が自分達の責任だと自ら話し、それを船員は受け入れた。結局悪いのは襲ってきた連中なのだ、という船長の一言で話は纏まり、犠牲になった三人を水葬にするのをシロ達は見守った。

「お前らが責任を取る、とか考えなくてもいいよ。ただ、三人の事を忘れないでやってくれ」

船員の代表にそう言われた時、シロはこれまで耐えていたものが崩れ落ち男泣きに泣き、エミリーに頭を抱きしめられてそのまま疲れから寝てしまった、というエピソードは前半と分離して笑い話として船員たちに語られる事となった。

「お前ら、もう知っていると思うがシロとエミリー、あとこの無賃乗船野郎の七彦は変身ヒーローみたいな何かだそうだ！」

そして、船長の話した人為変態に関する彼なりの解釈は船員たちに大好評を博し、三人は瞬間にスゲー奴として祭り上げられた。シロの想像していたバケモノ扱いとは大違いである。

「oh……オメンライダー……」

「すげえ！ 記念写真を頼む、故郷にオタクの友人がいるんだ！」

「世の中にはまだ俺らが知らない事がいくくらでもあるんだな……すげーロマンだ！」

「俺の扱いだけなんかひどくない!？」

「酷いのはお前の労働に対する意欲だよ」

「お前あの部屋もう二度と使えねーよ酷すぎる！」

船員の総ブーイングを受け、体育座りとなった七彦を庇うように彼が助けた女の子が立ちふさがり、「七彦さんはかつこいいもんヒー

ローだもん！」との事で純真な女の子の力に海の男たちはたまらず撤退、だが明らかに尊敬以上の感情である熱を持った目を向ける女の子と、それに気が付いていない様子の七彦に女の子の父親の船員は現役マフィア時代を彷彿とさせる凄まじく鋭い眼光を向けるという一幕があつたりした。

そんなこんなで数時間後船は無事到着、船員たちに見送られながらも三人はついにヨーロッパの土を踏んだ。

期待に胸を膨らませるシロとエミリー、プラスチックの指輪を指にはめて複雑そうな表情の七彦。

だから贈られたものかは殺意の籠った視線を向ける船員の存在から明らかである。

数十分後に七彦が屋台のケバブを食い逃げしようとして見回りの警察官に連行されて早速別れる事になったが、とにかく彼らの新たな旅が始まったのであつた。

## 地球番外編5話 研究所にて

ドイツの最南端に位置する農村地帯にぽつんと建っている研究所があった。

いや、正確には居住区と研究所が混合されている建物と言った方がいいのだろうか。

二人が各地を時には駆けずり回り、時には非合法の手段を駆使して集めた情報によれば、ここがかつてMO手術に関する研究が行われ、今では資料の保管庫兼研究員の貸家になっているという。

ならば、二人が望む『薬』をここで手に入れられる可能性が高いかもしれない。

研究そのものはすでに終了しているため資材や『薬』などが撤去されている可能性もあるが、それでも一番リスクが少なく侵入でき、かつ手に入れられる可能性が高いのがここだった。

現役で研究が行われているドイツの国家研究所に忍び込むのは泥棒稼業一日目の二人にとっては危険すぎるし、ヘタをすれば死にかねない。そんなこんなで、今現在二人は研究所の入口門をくぐったすぐ先に位置する庭園に来ていた。

「広いですね、シロ君」

「そうだな。しかも錆びびついているけど遊具が置いてある」

よくある噴水と植木の数々。これだけならよくある庭園なのだが、なぜか鉄棒や滑り台、その他諸々の公園にあるような遊具が多く設置されている。しばらく整備されていないようですっかり赤茶けてしまっているのが不気味な雰囲気を漂わせていた。

「まさか研究者の人が遊んでいたわけでもないでしょうし……不思議ですわ」

「たぶん職員の子どもが見学にでも来た時のためなんだろう」

まあ重要なのはそこではないため、適当な答えを出して先に進む二人。

庭園は部分的に生垣で迷路のように入り組んでおり、思わず迷いそ

うになったので、先に見えた何か塔のようなものを目印にそこに向かっていく。音を立てないようできるかぎり生垣には接触せずに、そろそろと慎重に。すでに大きな研究は行われていないとはいえ一般人に対しては存在自体が機密のMO手術なのだ、警備員がいるのはほぼ確実だと思っていいたいだろう。

「入口に到着、か」

その塔はちょうど生垣を抜けた先にあり、二人の間に一安心の笑みが漏れる。

少しの間を置き、エミリーが塔に何か文字が描かれているのを発見し近寄った。

「あら、実験慰霊碑って書いてありますわ」

「へえ」

「やっぱり遺伝子関連ですし実験動物とか使うん……っ!？」

シロはあまり興味が無さそうに塔よりもその先の研究所を眺めていたが、エミリーが何かに気が付いた様子で突然言葉を切ったのを聞き、振り向く。

「どした？」

「シロ君……これ……」

暗くてよくわからないが、何やら青ざめた様子のエミリーの顔を見て、シロはその視線の先にあるものに目を向ける。そして、言葉を失った。

二人が見ている慰霊碑、その説明の下に、数十人の人間の名前が列挙されていた。

まさかここに所属していた研究者の名前が書いてあるわけではないだろう。

二人はすぐにこの名前の数々が記されている意味を察し、押し黙った。

二人とも目を瞑ったまま手を合わせ、何も言わずに立ち上がって研究所の入口へと向かう。

「……俺たちが幸せだったとは言わねえけどよ、やっぱ命あつてのもんだよな」

シロがエミリーに聞こえないようぼつんと呟き、エミリーの手伝いで入口のドアのロック解除を始める。

このような手先を使う技術ではエミリーがシロを大きくリードしている事は、これまでの共同生活でよくわかっていた事だ。というよりも、二人のいた孤児院兼訓練施設では男は前線の兵士として、女はスパイとしての技術を主に仕込まれていたため、その影響といえよう。

ものの数分でドアは開き、研究所内部への道が開かれる。

シロは手早く研究所の中に入っていき、少し遅れているエミリーに声をかける。

エミリーは振り向き、慰霊碑を眺めていた。シロは気が付かなかつたとあるもの。列挙されていた人名の一番下にあつた人間の姓。なにやらもやもやするものがある。だが、それは後で考えるべきだ、と首を振り、ドアを再び閉めてシロを追いかけていくのであつた。

入り組んだ迷路のような研究所の内部。唐突に現れた巨大な容器に入れられた動物の死骸を見てエミリーが悲鳴をあげそうになつたり警備員のものと思われる足音に耳を澄ましながらこそそそ歩いたりと様々な事がありながらもなんとか研究所を巡り、いくつかの部屋に侵入してみた。

しかし、ほぼ成果はゼロ。それどころか、生活の跡すら無い部屋や実験室内でほこりを被つた器具などばかりだ。

壁も古びており、いかにも何かが出そうな雰囲気だ。

二人の間に、嫌な予感が駆け巡る。  
これひよつとしてもう完全に放棄されている建物なんじゃないだろうか。

そもそもここに住んでいる研究員なんていないんじゃないだろうか。

でも、ここまで来たからには最後まで。そんな感覚で二人は廃墟探検を続行する事にした。

入口のドアに仕掛けてあった電子ロックが生きている以上、この建物にはまだ電気が通っており、ならば電気を必要とする何かがあるはずだ。二人はそう考えて先へ先へと進んでいき、研究所の最奥部へとたどり着いた。

入口に特別な仕掛けは無い。ただの木製のドアだ。遠くに聞こえる微かな足音を警戒しつつ、二人はドアを開け素早く中に入った。

その部屋は、書斎と居住区、そして研究室が融合したような歪な構造になっていた。一応研究用の区画と書斎、居住区は強化ガラス製と思われる壁で区切られているが、何やらおかしい場所に迷い込んだ気分だ。

研究こそ我が生きがい、みたいな人が持ち主なのだろうか、と二人はなんとなくに考える。

明かりが部屋の外に漏れるようなガラスなどが無い事を確認した後、シロはライトを付ける。

ある程度は夜目が利く二人であるが、詳しく調べるならやはり明かりはあった方がいい。

「うーん、シンプルな部屋だ」

「無趣味な人なのかしら」

ライトで部屋の端々まで照らしてみてもわかったのは、自宅のような区画にも特に趣味といえるような品は何もなかったという事だ。シンプルなデザインの家具の数々に、書斎に隙間なく並べられたタイトルからしてよくわからない難しげな本の数々。

どんな人物なのかわからない。だが、エミリーが書斎の一部にあった学術とは関係なさそうな本の数々を見つけ、引っぱり出してくる。五冊だけ周囲から浮いている本や資料と、その本に挟まれていた学術書と思われる一冊。

二人はテーブルの上にそれを並べ、一冊一冊確認する。

一冊目は警視庁報告書と短く書かれたクリアファイルに入っている資料だ。

日本語で書かれていて、どうやら国の重役が襲撃された事件の報告書らしい。

二冊目はサンゴ礁の写真集だった。数十年前、ヘタすれば百年以上前のまだ豊富にあったサンゴ礁の写真を集めた本のようなだった。

三冊目は絵本だ。題名は『人喰らいエスメラルダ』。表紙絵はボロ布を纏った赤毛の女の子がナイフとフォークを手に食卓に座っていて、食卓の皿の上に盛られた料理は肉の塊の上に何かの生き物の手が乗っているというもの。何か寒気がしたため、二人は読まずに本棚に戻した。

四冊目は学術書のようだった。次世代の遺伝子工学の発展について書かれた本だ。

五冊目は、クローン生物を扱う倫理に関して書かれた本だった。特に人間のクローンに関する是非が子どもにもわかるような表現を使って議論形式で描かれていて、二人は少しの間興味深く読んでいた。

六冊目はヨーロッパ全土の裏社会を支配していた犯罪組織『カラマール』のプロファイルだった。扱われている情報を見るに機密資料のようなので普通に手に入るとは思えない。アジアやアメリカにまで魔手を伸ばしていたという情報を見て、改めてあの船の人たちはほとんどもない人たちだったんだな、と思わされた二人である。

……絵本から機密資料まで整合性が無く、結局この部屋の住人はどんな人間かわからなかった。

少し無駄な時間を使ってしまったかな、と反省し、部屋の散策を続ける。

「ん、これは」

金庫を発見し、何とか開けようとしているエミリーを横目に、シロは棚で倒れていた写真立てを発見した。

そこに入っていた写真は、茶髪と金髪の混じった青年、眼鏡をかけたアジア系の青年、その二人の間で楽しそうに笑う銀髪の女の子とい

うものだった。全員白衣である。

微笑ましい光景だ。だが、全員白衣というのに何か違和感があるし、それに……

「なあ、エミリー」

「どうしましたの？」

エミリーが振り向くのと、金庫が開いたのはほぼ同時だった。

「これってさ、院長じゃね？」

そういつてシロが指をさしたのは、真ん中の女の子。

「院長先生って本業は科学者みたいですし、そうかもしれないですね」

エミリーも納得した様子で頷く。左右どちらの青年がこの部屋の主かはわからなかったが、二人の孤児院の院長、アナスタシアと面識がある様子だ。偶然が重なった事に、ひそかな驚きを見せる二人。

「金庫の中身は……ん、写真と資料ですわね」

壁に埋め込むタイプの金庫だが、あっさりとは開きすぎた。中身を盗まれないよう守る、というよりも外に出さないようにする、という意思をエミリーは感じていた。

写真の一枚目は、家族と思われる三人の写真だ。澆刺とした様子の金髪の美しい女性と先ほどの写真の西洋人らしい青年が眼鏡をかけたと思われる男性と、その男性が少し困った表情で抱いているまだ3・4歳ほどの小さな女の子。

裏側には日付と共にゼツプルと、という文字がドイツ語で書かれている。字面からしてこの男性の愛称か何かだろうか。

もう一枚はどうやらこの研究所で撮られたもののように、眼鏡に白衣の男性が多くの子ども達と共に笑顔で写っていた。

子ども達は黒人も白人も黄色人種もごちゃごちゃで統一感が無い様子。

「あら、これも院長先生かしら」

エミリーが見ていたのは、青年の白衣の袖をぎゅっと握って俯いている女の子。



他の子ども達よりも青年にくつついている所を見ると、懐いていたのだろうか。

「いや、よく似てるけど他人のそら似、ってやつじゃないか？ 流石にこんなになっちゃうくは無いだろう」

「……言われてみればそうですね。でも……」

シロの不思議そうな目になんでもない、と慌てて手を振るエミリー。

二人の興味は次の資料に映った。ほとんどが難しい用語や化学式で読める部分は少ない。だが、一部分に二人の見慣れた単語があり、それが目をひいた。

—MO手術の重ね掛けについて—

人間とツノゼミ、そしてさらにもう一種の遺伝子を一つの体に共存させるといふ一昔前なら絵空事として切り捨てられていた事案、それを可能とする免疫寛容臓の力には驚嘆を隠せない。

しかし、一つの疑問がある。三種の遺伝子に対応できる。……ならば、もう一種加える事は可能だろうか？

遺伝によつて能力が子に受け継がれ、その子にMO手術を施す事によつて複数の能力を適応させる事が可能である、という事はすでに判明しており、日本で一例、米国で一例が報告されている。中国にも一例があるという噂もあるが、正確な情報はこちらにきていない。すなわち、理論的にはもう一種の生物に適応できるだけの容量が免疫寛容臓にはあるという事だ。しかし、実際には日本と米国の二例は再現性が無く、恐らく何らかの偶然と考えられる。日本の例は人工的に作り出された存在、との噂もあるが、確定情報ではない。

ならば、私が行うべきアプローチは、普通の人間に二種以上の手術を可能にする事である。

どのような条件なら可能になるのか。可能にできるのか。

幾度もの実験が行われ、出た答えと得られた技術は、半分は想像通

りだった。

組み込んだ一種目の生物と遺伝的に近い種類の生物なら、十分に成功は望める事が判明した。

また、想定外だったもう一つの条件として、一種目と生態的に関わりの深い生物での成功が望める、という事も判明した。

具体例を挙げると、蟹の一種とその蟹と共生関係にあるイソギンチャクの一種の掛け合わせが成功したのだ。

また、αMO手術においては二種目で通常のMO手術を施した場合に成功する可能性は非常に高く――

「……複数能力ってカッコよくな？」

「私にはよくわからない世界ですわ」

雑談をしながらも写真と共に資料を丁寧に金庫に戻し、実験室の扉を開ける。

二人には理解できない実験器具が並んでいるが、二人はそれを無視して棚を開けた。

そこにあっただのは、無数の注射器状の装置とそこに入っている液体。

運がよかったのか、拍子抜けするほどあっさりと、薬は見つかった。

「えーと……こんなにすぐに見つかっていいものなのか……」

「ま、まあいいんじゃないですの」

「……これって使えるのかなあ」

「うーん」

「じゃ、俺が試してみる」

「へっ!？」

思い切りの良さにエミリーが止める間も無くシロは首筋に注射器を刺す。

みるみる間にシロの姿は変わっていき、船で見せた姿に。

「うん、使えるな」

満足げに頷き、シロは注射器の一本をエミリーに差し出す。

「じゃあ、エミリーも試しに一回」

「……え、ええ」

少しためらう様子を見せながらも、エミリーは注射器を受け取り、自分の首に近づける。

「ん？」

シロが不思議そうな顔をしているのを見ながら、注射器を首へ、首へ。

手が震え、定まらない。必死に左手で震える右腕を押さえるが、あまり効果は無い様子だ。

シロが何かを言っている。けれども、頭の中に様々な色がバラまかれてその内容は耳に入ってこない。

「ゲホッ……うええ……」

異変を感じ取ったシロがエミリーの体を支えようとするのとエミリーが吐いてその体が崩れ落ちるのは、ほぼ同時だった。

そして、壁にもたれかかってへたりこみ、辛そうに、申し訳なさそうに涙を浮かべた目でエミリーは、シロにこれまで隠していた自分の秘密を明かしたのだった。

「ごめんなさいシロ君……私は……『薬』が……変態をするのが……怖いんですの……」

## 地球番外編6話 いざパスタの国へ

フランスのとある名家の一人娘。漫画やアニメで想像される典型的なお嬢様。

エミリーは、そのような立場で生を受けた。

しかし、その暮らしは長くは続かなかつた。彼女がまだ10歳になるかならないか、という時だっただろうか。

家が炎上し、暴漢に襲撃された。一言で表せばそれしかない。もう少し詳しく言えば、ギャングに煽動された家の使用人の手引きによって火災が発生、騒ぎに乗じてギャングが襲撃したのだ。

家の人間はこの一件によりほぼ全員死亡、友人の家に泊まっていた彼女のみが難を逃れた。

貧しく、暗い世の中で上流階級から一気に孤児になった彼女を引き取ろうとする家はどこにもなく、彼女は半ば売られる形でオンボロな孤児院から中国の孤児院と言う名のスパイ・兵士養成施設に送られる事となった。

厳しい訓練。半分以上の確率で死ぬという謎の手術。辛い事は沢山あったが、彼女はいつかこの現状が変わると信じて日々を過ごしていた。

そんなある日。『薬』を使った初めての実戦形式の演習が行われたのだ。彼女の相手は施設の中でも仲の良い少女だった。

病気がちで体も弱く、演習当日は特に体を壊していた少女を見て、エミリーと孤児院の院長は少女を演習に出させず休ませろ、と訴えたが、施設の運営側はそれを認めず。演習は普通に行われる事となった。

大丈夫、大丈夫だから。

咳こみ、青ざめた顔で目の前のエミリーに告げる少女。

安心して、戦いはせずに適当に終わらせるから、とエミリーは耳打ちし、演習が始まった。

全員の能力が正常に作用するか確認する、との事で施設の子ども達

は順番に変態していく事に。

少女の順番はエミリーの一つ前だった。

少女が弱った体で『薬』を打ち込み、その姿がベースとなった生物の特徴に染まっていく。

……途中で、上手く行っているはずだった。

少女の体についての情報が施設側に十分に把握されていなかったのか。バグズおよびMO手術の特性に関する情報が十分ではなかったのか。今となってはそれはわからない。

少女が、苦しみだした。いつもの体調不良だ、放っておけ。訓練が嫌だから仮病を使っているのだろう。

そういつて職員は無視した。

少女の体調不良。それは、先天的な内臓、特に肝臓と腎臓の機能不全だった。

少女の経歴をエミリーは知らなかった。西洋人の少女がここにいるという事は自分と同じく何かの事故や事件でここにいるのだろう。そう思つてエミリーはあえて聞かなかつた。でも、親友だった。

そんな親友は、エミリーの目の前で、巨大な昆虫に姿を変えて死んだ。

「……ねえ、シロ君。いざという時は私を捨ててくださいまし」

時すでに遅しであるが侵入者を探知したからなのか明かりの付けられた研究所を後目に、二人は夜道を歩いていた。

シロは何も言えない。力を持っていながらそれを使えない、外から見たら使いたくない、と言っているだけの彼女を責める事ができない。物心ついた時には家族が死んでいて、友達もいなくて一人ぼっち

だったシロに友達が死ぬというのがどんな気持ちなのかはわからない。でもきつと、それはとても悲しい事なのだろう。その出来事がどんなにトラウマなのかは実際に見ていなかったからわからない。でも、それは心に恐怖を刻むには十分すぎる出来事だったのだろう。

かといって、彼女に全面的に同情してそんな事なら『薬』なんか使わなくていい、とも言えない。

二人は決して余裕があるような状態ではない。いつ追手がくるかもわからない、こんな生活がいつまで続くかもわからない。金も船長の厚意でもらった給料以外ない、パスポートが無いからアルバイトもできない二人の生活は、山で食材を探してそれを食べたり闇市に売ったりして小金を稼いで成り立っていた。

追手が来たら戦わなければならないし、そうなったら変態が手っ取り早く、それでいて有効な手段でもある。

考え無しの若者二人の逃避行。そう言い切れるほど軽い話ではないのだが、それでも資金の確保ができない以上生きていく事はできない。

「なあ、エミリー」

「なんですの……」

「これ、やるよ」

シロはエミリーに自分の持っていた拳銃を投げ渡した。突然の事で少し反応が遅れたが、エミリーはそれをあわあわと受け取る。その際に、シロはエミリーのポケットに入っていた薬を一つだけ残して奪い取る。

「役割分担だ。俺が変態担当、お前は銃担当で」

「……へ？」

シロは横を向いたままでエミリーにその表情は何えなかった。

でも、自分の持っている銃を渡して薬を奪ったという事は、自分に変態だけで戦うからそっちは銃だけで戦ってくれ、という考えの現れだった。

「俺にはその……お前がどれだけトラウマ持ってるかなんてわかんない

いけどさ」

シロは恐らく自分より少しだけ年下と思われるエミリーの頭にぽふん、と手を乗せる。

「本当に辛くなったら相談してくれよな、いつでも話聞いてやれるの今は俺くらいだしさ」

「ごめん……なさい……」

何かを失う、という生い立ちと最初から何もない空っぽ、という生い立ち。それはどちらも辛い。

それでも、シロは自分の事を気にかけてくれるという。

自分と同じくらい、もしかしたらそれ以上に辛いはずなのに、甘えたりせずに強く生きようとしている。

自分はそれができずに頼ってばかりで、それがエミリーにとっては辛かった。

「あとアレだ……まあこんな状況になっちゃったけどさ」

「楽しくいこうぜ、せつかくここまで来たんだからさ！」

「……！ ……はいっ！」

「君たち、こんな時間にこんな場所で何をしているのかね？」

巡視の警官に声をかけられ、二人揃って慌てて逃走する。

何やら面白おかしそうな笑顔を浮かべるシロにつられてエミリーまで自然に笑いが浮かんでくる。

いつかは解決しなければいけないのはわかっている。でも今は、彼の好意に甘えよう。

折り合いがついたとはとても言えない過去と先に広がる薄暗い未来、しかし今だけは。

そんな事を考えながら、エミリーは夜道をへろへろになりながらひたすらに走っていた。

「ケバブー、おいしいケバブはいかがすかー」

街中でケバブを売る青年、七彦。

食い逃げに失敗しアルバイトをする事になった不幸、というか因果応報なシロとエミリーと同じ逃亡者である。

そんな彼の朝は早く、起きてすぐに朝の支度、それから屋台の用意を始める。

あまり価値が無いと判断されたのか規則のゆるい訓練所にいた彼は基本的に夜型で、早寝早起きの生活は少し辛い。

「眠い……」

人通りが少ないのをいい事に大きなあくびを一つ。それからうとうとし始めたのだが……

「君……おい、君……」

声をかけられ、その眠りは急に覚まされた。

「うおおおおおおおい！ すいません寝てましたクレームだけのご勘弁を！」

情けないほどにふるふると震えながら目の前の声をかけてきた人間に頭を下げる。

彼に声をかけてきたのは身長二メートルに近い長身にがっしりとした体格、短めの髪をオールバックにした軍服の中年男性だった。七彦と同じアジア人である。

「おお、中国語は通じるようだな」

うとうとしていた所を急に呼ばれたので頭が回らなかったが、彼にかけられた言葉は中国語。

「少し道を聞きたいのだが……」

「ああ、イタリア行の鉄道線ですか。それなら」

七彦は地図を開き、男性に説明する。バイトを重ねる事によって何故か得た道案内能力である。

「おお、ありがとう、お礼にケバブを二ついただこうかな」

「ありがとうございすー」

男性は説明を理解した様子で頭を下げ、ケバブを受け取りその場を去っていく。



「ふう、危ない危ない」

客は去り、再び静寂が戻る。心地よい日差しの中、再び七彦は眠りにつこうと……

「おーい、君ー」

「ハイイラツシャツセー!!」

素早く身を起こし、客に対応する七彦。

ふと思ったが、また中国語で話しかけられた。今日はやたらと中国人に遭遇する日だ。

今度の客もまた中年の男性、長い髭を蓄え、先ほどの客よりさらに長身で眼鏡をかけている。

「心地よさそうなところごめんね、イタリア行の鉄道線は……」

「はい、ああいつてこういつたら着きますね」

「なるほどなるほど、ありがとう。お礼と言うのも変だけどケバブ二つ注文しようかな」

「あぎーつす」

「いやー、仕事でこっちに來ただけで連れに置いていかれちゃってね」

両手にケバブを持ち、フレンドリーに七彦に話しかける男性。

「そういえばさつきの人って……と思う七彦だったが、眠気で頭が回らない。」

「そういえば君、どっかで見たことあるなあ……」

「ハハ……気のせいじゃないっすか?」

「だよね、うちの国の施設を逃亡した人に似てるなあ、とか思ったけど他人のそら似か」

「そう言い残し、男性は屋台を後にした。」

冷や汗ダラダラの夏彦である。

数日前にそんなやり取りがあったとも知らず、シロとエミリーは無賃乗車でイタリアにやってきていた。

「しかし俺たち、結構ハイペースで移動してんな……」

「追手がいつ来るかわかりませんもの、仕方ないですわ」

どこから証拠が出るかわからない現状、一カ所に留まるのは得策ではない。

そう考えた二人が次に選んだのは、イタリアの荒原地帯だった。

ほとんど住宅の無い、申し訳程度の山と森、後は荒野というこの場所。

一つだけ周りの住宅と比べて大きな博物館のような建物があるが、それ以外は辺鄙な田舎だ。

隠れるところこそ少ないが、人口の少なさから地元住民からの情報で見つかる、という事は少なそうだ。潜伏するには悪くない場所だ。

「さて、今日泊まる所を探すか」

「わ、牛さんがいますのー！」

放牧されている牛、確か施設にも牛がいたな、とシロは牛を追いかけようと走り出す。

……と、数歩走った途端に博物館のような建物の庭の植木を整えていた老婆に気づかず、体当たりをしてしまった。

「あいたたた……」

ひねったのか、足首を押さえる老婆。慌てて謝るシロとエミリー。

二人は謝るが、その老婆を確認して一瞬びくつと体を震わせる。

何故なら、その老婆の背丈はシロよりも二回りは大きかったからだ。

「ごめんなさい！ お家にお運びしますー！」

「あらあら、ありがとう」

二人がかりで老婆を背負おうとしゃがみこむ。

老婆は朗らかな笑顔で二人に対応する。怒ってはいない様子。

だが、シロは直感でこの老婆に自分と同類の雰囲気を感じていた。

表面では穏やかだ、でも、何か底に暗く冷たいものがあるように思える深き海のような雰囲気。

そして、何の根拠もないが、きつとこの老婆は自分と同じく人を殺した事がある。

そんなシロの見定めを知ってか知らずか、老婆は穏やかな笑顔のまま二人に話しかけた。

「……そうそう、二人とも、時間があればお茶していかない？ 一人で寂しかったのよ、お客さんになってくれないかしら」

## 地球番外編7話 魔人の回廊

二人は足をひねった老婆を自宅に運び、そしてその自宅を見て驚いた。

そこは、老婆が作業をしていた博物館のような建物だったからだ。

老婆の足を水で冷やしながらか、シロが質問する。

「お婆さん、こんな所に住んでいるのか!？」

「ええ、昔は部下とかがよく遊びに来ていたんだけど、隠居してからはすっかり人が来なくなっちゃってね。今は個人的なコレクションの場なのよ」

「へー、じゃあ高価な品とかも盛りだくさんですよ」

「ええ、それはもう沢山。でも昔に友人や仕事仲間が集めてきた物だから私としては正直どうでもいい、つてのが本音なのだけど」

エミリーのいきなりの率直すぎる質問にシロは焦るが、老婆はそれに対し特に疑念も抱いていない様子で答える。

ホッと一安心するシロ。

老婆の軽い治療も終わり、二人は先ほどの言葉通り老婆の自宅である博物館の庭に招待される事に。

そこには、生垣と色とりどりの花々、見るからに高価そうなテーブルと椅子、ティーセットがあった。

「さあさあ、座りなさいな。お菓子とお茶はちゃんと用意してありますからね」

老婆が先ほどまでだけが人だったとは思えないような素早さで二人の背を押し、着席を促す。

二人が座って数分後、洒落たデザインのティーカップに入れられた紅茶と数種類の菓子が二人の前に出される。

思えば、食事をとっていなかった。二人は嬉しそうに降ってわいた食べ物に飛びついた。

「この紅茶、いい茶葉を使っていますわね!」

「近所のコンビニで12パック4セントよ」

「あうう……」

お嬢様アピール失敗。現実には甘くなかったようだ。

「お婆さん、そういうええお名前はなんですか？」

しょんぼりしたエミリーの少し暗いトーンの質問に生垣をカットしていた老婆は振り向き、笑みを浮かべながら楽しそうに答える。

「エレオノーラ。エレオノーラ・スノーレソンよ。お二人は何というのかしら、可愛いお客さん」

シロはそれを聞き、ある人物の顔を思い浮かべる。だがその直後。偶然の一致だ、考えすぎか、と首を振る。

ただ姓が被っているだけで、老婆がこのイタリアを含む大国、ローマ連邦の最高指導者の親族であるとは少し飛躍した考えだと。

一方のエミリーは、誰かの顔を連想したのではなく、老婆、エレオノーラその人の名前をどこかで聞いた事があるような気がしていた。

そこからも何気ない世間話をしながらお茶会は進み、若い二人が長時間の着席に痺れてきた頃。

何かないかときよろきよろ辺りを見回したエミリーは、生垣であるものを発見した。

蜘蛛の巣に引っかかった蝶だ。

「可愛そうに……」

エミリーは席を立ち、その蜘蛛の巣から蝶を解放してやる。

その様子を見て、エレオノーラは何か含みのある様子で口を開いた。

「ねえ、エミリーちゃん。その蜘蛛はどうなるのかしら」

「……と、言いますと？」

エミリーはその意味がわからず、聞き返す。

「その蜘蛛は、もしかしたらあと少しで餓死してしまうかもしれない。その蝶は、もしかしたら卵も産み終わり、後は老いて死ぬのを待つだけの個体だったかもしれない。貴方は、何故蝶を助けたのかしら？」

老婆は笑顔な無表情とでも言うべき全く形の変わらない笑顔でエミリーに問いかける。

その声色に責めるようなものは無い。だが、何やら得体の知れない

息苦しさをエミリーは感じていた。

「そ、それは蝶がかわいそうだったからで……」

エミリーの回答は蜘蛛の巣から蝶を救った人間が言うであろうごく一般的な理由。誰もが一度くらいは聞いた事があるのではないだろうか。

エレオノーラは続ける。

「待つて待つてやっと手に入れた獲物を気まぐれで奪われた蜘蛛の事は可愛そうと思わないのかしら」

相変わらず、責めるような口調ではなく平坦な口調だ。

だが、それが何故だか恐ろしく感じる。

「救われた蝶と奪われた蜘蛛、気まぐれで蝶を助けた人間。悪いのはどれかしらね？」

「ごめん……なさい……」

このやり取りを見て、シロは馬鹿らしい、と思う。エレオノーラの言っている事は正論だ。感情論以外での反論は難しいだろう。だが、見た目で物事を判断してしまう感性をそこまで責め立てるのはどうかとシロは思うのだ。

それは確かに批判されるかもしれない。しかし、軽く諭せばそれでいいのではないか。

「蜘蛛よ」

「……はい？」

「はっ」

直後に口を開いたエレオノーラの内容が二人には理解できなかった。

蜘蛛？ どれが悪いか、という今の流れの答えはそれなのか？

「餌の効率ばかりを追い求めて、気まぐれで獲物を解放してやれる人間という強大な生物が容易に干渉できる領域に巣を作る。その状態でエミリーちゃんに蝶を逃がされたのは、蜘蛛の自己責任だと私は思うよ。餌の取りやすさという利益と目立った場所に巣を作る事に

よる外部からの邪魔というリスク。それを秤にかけて蜘蛛はここに巣を作り、そしてリスクが降りかかった。それで蜘蛛が騒いだところで、自業自得でしょう?」

巣に引つかかった蜘蛛を逃がしてやる話。それは本来、見目麗しい蝶を助け醜い蜘蛛を害するという外見だけを見た考えや自然の摂理に人間が干渉する事への批判、といった意味で語られる内容のはずだ。

だというのに、老婆はその事など全く考えていない。ただ、弱者が強者の存在し、弱者の活動に干渉できる領域に存在していたのが悪く、その己の生命をかけた活動が面白半分や獲物への憐憫の感情で邪魔されようがそれは全て場違いな所にいる弱者が悪い、と。

気持ち悪い。率直に、シロはそう感じていた。

一体どんな人生を送れば、今の話からこんな結論に辿り着く?

一体どんな思考回路をしていれば、こんな結論が導き出せる?

危険だ。やはり、この老婆には何かがある。

今の所敵意は見えない。いざ戦闘になっても、エミリーには銃が、自分には人為変態がある。

理屈で考えれば負ける要素は皆無だ。

しかし、それでも本能的に自分はこの老婆に恐怖している。

エミリーもそれは同じなようで、怯えた表情で絶句している。

「忘れちゃダメよ、二人とも。強者からすれば弱者の命などゴミに等しく、命がけの抵抗でさえ享楽に過ぎない。強くなりなさい、貴方たちの生きる世界で強者となれるように」

エレオノーラの口調はまるでシロ達の立場を全て知り尽くしているかのような雰囲気を纏っている。

「……なんでアンタが、俺達の事を知っている?」

シロを切る、という選択肢をシロは即座に切り捨て、疑問を口にした。

相手は、自分達の事情を全て知り尽くした上で話している。

声色が、同じなのだ。シロがこれまでに遭遇してきた悪意に満ち

た、それでいてシロの手が届かない、敵わない場所に立っている存在と。

「そんな事はどうでもいいでしょう？　好意からのアドバイスよ、素直に聞いておきなさいな」

少しだけ、ほんの少しだけ変わったエレオノーラの声色。それは、まるで彼女もシロ達と同じような世界で生きてきたかのような。

かつて、踏みつぶされる側だった弱者であつたかのような真に迫つたものだつた。

二人の方を振り向かずには話しながら、エレオノーラは蜘蛛の巣に近づいていった。

そして手を振って生垣から蜘蛛の巣を引きはがし、慌てて地面に落ちて退避しようとする蜘蛛を踏みつぶす。

「なんで……ですの……」

なんで蜘蛛を殺したのか。

なんでそのような考え方ができるのか。

なんで……こんな捻じ曲がった存在がこんな場所にいるのか。

エミリーの発言からは聞きたい内容が複数推測できたが、エレオノーラは一番最初の内容と解釈したらしく、振り向いてその回答を言い放つた。

悪意に満ちた、一声で弱者の命を好き勝手にできる無慈悲な強者の威風で。表面上は普段と変わらない笑みを浮かべて。

「だって生垣に蜘蛛の巣がついていたら見栄えが悪いじゃない？」

もやもやした気分の二人は、その後エレオノーラに連れられて博物館の内部を見学する事となった。

二人が断つて早く帰りたいと考えていた事は言うまでもないが、エレオノーラの雰囲気からしてそれを口にする事は不可能であつたという事もまた言うまでもない事だろう。

(金目の物はほとんどないな。警備員は一人もいないみたいだ)



無言の威圧感で無理やり連れられてきたものの、シロはそれとは話は別だ、と慎重にこの博物館のセキュリティ、展示物の価値などを品定めしていた。

この場所は忍び込んで何らかの利益があるのか？ 結論は、ローリスクローリターン。

考古学的な価値がありそうな仮面やら何やらの怪しげな品は多いが、売りさばくあてが無い。

絵画はある程度値が張るのかもしれないが、大きすぎて二人で運び出すのは少し辛そうだ。

それにしても、あまり真面目に展示、保管をしようとしている様子がかげえない。

盗難防止の措置もほとんどない様子だし、展示物の劣化を防ごうとする措置も見られない。

エレオノーラが言っていたような高価な品はぱっと見る限りほとんどなさそうだった。

ここに忍び込んで当面の路銀と生活費を稼げるかはわからない。だが、忍び込むしかなさそうだ。

二人のお財布はすでに餓死寸前なのである。

「さて、ここが一番奥、一応館長の私の部屋よ」

一本道となった通路を通り最後に招待されたのは、博物館の館長室だった。

大理石の机に少し豪華そうな椅子、その背後には無数の分厚い本が収められた本棚。

そして、その本棚の上の壁には、船を襲っている巨大なイカの絵画が飾られていた。

「クラーケン、ってやつですか」

「エレオノーラさん、イカがお好きなんですよ」

「ええ。昔の仕事の部下に描ってもらったのよ。上手だと思わない？」

「ほえー、画家さんじゃなくて素人さんの絵なのですね、凄いですわ」

「ええ、私のお気に入りの絵なのよ」

絵に関してはエミリーが興味を示したようで、エレオノーラに色々質問して話が盛り上がっている。

今のエレオノーラは、先ほどのような酷薄な様子は無く普通のどこにでもいるおばあちゃん、といった様子だ。

この隙にシロはこの館長室も見渡した。

やはり金銀財宝のような金目のものはここにもない。

ただ一つ、壁に無造作に立てかけてある装飾のなされた短剣は高価そうだったが。

「そういえば展示していないものとかはどこに保管してあるんですの？」

エミリーが首をかしげて質問する。この博物館は外から見るに一階こそ非常に広いが二階は非常に小さい、それこそオマケのようなものが建っている。恐らく博物館の区画は一階で二階はエレオノーラの自宅なのだろう。

だったら、所蔵品はどこに置いてあるのだろうか。

「ああ、そうね。お高い宝石や私の個人的なコレクションは地下に置いてあるのよ」

「地下への入口はどこへ？」

さつきから率直に聞きすぎ！ とエミリーに注意したいシロである。

「うふふ、ヒミツよ。防犯対策も少しだけは、ね？」

ですよねー。という様子でエミリーは引き下がる。

「……まあ見てのとおり、つまらない場所だったと思うけれど少しは楽しんでくれたかしら？」

ニコニコと今度は裏の無い笑顔でエレオノーラは二人に楽しそうに質問する。

基本的に笑顔のまま表情が変わらないから厄介な人である。

「はい、楽しかったですわ！」

「目新しいものが多くて面白かったです」

率直に思ったままの感想を口にする二人。エミリーは元お嬢様、芸術品などには少しは興味があるから楽しめたのかもしれないな、となんとなく考えるシロ。

「では、よい旅を……つとそうだ、二人には泊まる場所はあるかしら？」

よかつたらここに……」

「いえそこまでしていただかなくても……」

「宿はちゃんとあるので大丈夫です！」

慌てて踵を返して博物館を去る二人。

今夜の計画を練らねばならないし、あの油断ならない老婆と同じ場所に泊まる、というのは……という理由で、二人は屋根のある暮らしより野宿を選んだのであった。

日も暮れ闇が辺りを覆い始めた頃。平和でのどかな農村に数人の黒い影が姿を現した。

「……あいつらは失敗したそうだ」

「祖国の面汚しめ」

「ここで取り返せば問題ない」

これまた場違いな物騒な発言。しかし、仮にこの農村の住民が彼らの会話を聞いていたからといって彼らの話の内容を理解することは恐らくできない。何故なら、彼らの話す言語は遠いアジアで話されているそれだからだ。

彼らに与えられた任務は彼らにとっては簡単なものだ。

彼らの同盟国から逃走したという二人の人間の確保。

そして、数年後の未来に繰り広げられるであろう地球から離れた戦いの場で確実に脅威となるとある人間の始末。

本来なら彼らは後者のみを遂行する予定だった。しかし、前者の任務を受け持っていた部隊が任務に失敗、壊滅したのだ。

ターゲットがちょうどこにいてという情報があったという事もあり、彼らは二つの任務を遂行する事となった。

「……優先目標は」

「例のヤツの始末だ」

戦闘に立つ男の低く小さい一声で部隊六人はまとまり、行動を開始する。目指すは、寂れた農村でひととき目立つ博物館。

音を立てないように慎重に鍵をこじ開け、突入する。

彼らは暗視装置と赤外線探知機の合わさったスコープを覗き、状況を確認する。

赤外線センサーは無い。カメラもない。ザルな警備態勢だ。

展示物には特別に何かの装置があるのかもしれないが、彼らは盗人ではないためそれはどうでもいい事だ。

最奥部をめざし進んでいく。

彼らの手際の良さもあり、数分で一番奥の部屋、館長室までたどり着いた。二階への階段を発見し、四人が軽機関銃を手にながら上がついていく。

すぐに四人は戻って来た。

二階には標的はいないようだ。

一旦部隊の動きが止まるが、隊長が本棚を調べていると、奥にスイツチがあるのを発見した。

一応の警戒をしながら押すと、本棚が左右に開きその奥から地下室への階段が姿を見せる。

日本の漫画が参考資料だ、と隊長がジョークを飛ばし、他の五人は音を立てずに笑う。

そのまま、六つの影は地下へと降りていった。

地下へと降りた六人は、その様子に顔をしかめた。

まるで、洞窟を掘り広げて作ったかのようなゴツゴツとした床、壁、天井の通路。

天井を通る、薄汚れたパイプ。

パラパラつと隊長の肩に上から落ちてきた錆がかかる。鬱陶しい、と錆を払いながら隊長は自身のスコープと銃、手榴弾を確認する。

博物館のきれいに保たれた様子とは打って変わって不気味な雰囲気だ。

だが、そんな事を気にしているわけにはいかない。六人は少し横広の一本道を進む。

少し進むと、ちよつとした広間に出た。

相変わらず薄汚いままだが、この場所はこころなしか整えられているように見える。

「……クソ野郎が」

「狂人め……」

広間に飾られている無数のコレクションを眺め、隊員が各々感想を口にする。

このコレクションに悪い意味で眼を奪われている隊員を横目に、隊長はさらに奥へと続く通路を見やった。

奥に、光が見える。そして、また館長室のような部屋が確認できた。

隊員へと檄を飛ばし、コレクションを後目に最後の部屋へと進む。

最後の部屋の内装がはつきりと見え始めた時、隊長は思わず渋い表情を浮かべていた。

なんだこの部屋は。きれいすぎる。

これまで通って来た通路と違い、埃一つ無い。

病的なまでに清潔に片づけられた部屋だ。

恐らく、この部屋に標的はある。

全員に、武装準備の命令を下す。

この地下だ、ドンパチが始まったらいちいち音を立てる必要もないだろう。

爆発物の使用も地下室を崩さない程度に。

隊員の装備をチェックする隊長の肩に、頭上のパイプから落ちてきた錆がかかる。

パイプくらい買い換えろ、と隊長は半ば反射的にそれが落ちてきた頭上へと視線を上げた。

老婆と、目が合った。

「ふぁーあ、私、夜は弱いんですわ」

「ああ、俺も。施設は早寝早起きだったもんな」

村で飼われている牛たちが寝静まった深夜、計画を立て終えたシロとエミリーが闇夜を走っていた。

目指すは、博物館。逃避行のため、生きるため。

二人の弱者は、悪夢の回廊へと足を踏み入れる事になった。

## 地球番外編8話 深海の迷宮

博物館に辿り着いた二人は、何やら様子がおかしい事に気が付く。入口の扉が開いているのだ。しかもそれは普通に開いている、というわけではなくこじ開けられている痕跡がある。

「……先客でもいるのかな」

「先を越されそうですの」

少し焦った様子で建物に入り、二人は先を急ぐ。

まず初めに入口近くに展示してあった骨董品を。

次に少し奥に進んでできる限り軽くて金になりそうな品を。

特に警備システムもなく、作業は終了した。

普通ならば喜ぶべき展開なのだが、二人は何か違和感を感じていた。

扉をこじ開けた痕跡。それは誰かが二人より先に侵入した、という事を意味している。しかし、減っている展示物はなかった。何故だ？

「ま、俺達別に探偵とかでもないんだし、終わりよければ……って事でもいいか」

そう言つてエミリーを促し、入口の方へと足を向けるシロ。だが、何かを思い出した様子で再び博物館の奥の方を向き、足を進める。

「シロ君、どうしたんですの？」

「うん、そういえば館長室に高そうな短剣が置いてあったなつて。それだけ持っていこうぜ」

「ほうほう、たまにや週刊誌なんてモンを読んでみるのも面白いな」

豪華な装飾の待合室で、ローマ連邦首脳、ルーク・スノーレソンはコーヒーを片手に雑誌を読んでいた。

本棚に刺さっていた怪しげな都市伝説がどうのこうの書かれた雑誌だったが、読んでみるとこれが案外面白いのだ。

ルークはそれの中で一つ、気になるものを発見した。

最近、世界各国、特にヨーロッパで旅行者が行方不明になっているというものだ。これだけなら、犯罪傾向の変化やらで説明できるだろう。しかし、その次を読んでルークは眉をひそめる。

数人の旅行者が消息を絶った前の事を調べると、皆が皆このイタリアへの旅行を最後にしている、というらしいのだ。しかも、その数人の旅行者はいずれもこのイタリアへの旅行の事を隠すように振る舞っていたらしい。

「……どこの出版社か知らねえが、ウチへの風評被害はやめてもらいたいもんだ」

「首相、お客様が参りました！」

部屋に入ってくる秘書の姿を見て、ルークは慌てて本を棚に戻す。今日彼がここにいるのは、U—N—S—A中国支局の客人がやってくるからなのだ。

このご時世での用事とは、アネックス計画関連で間違いないだろう。

さあ、ここからは自分の仕事だ。

ルークは心の中で気合を入れ、やってきた二人の客人を出迎えた。

館長室に入った二人は言葉を失った。本棚が二手に分かれ、地下へと続く穴が顔を見せていたからだ。

昼間にはもちろん、こんなものは無かった。一体何が起こっているのだろうか。

「先に進みますの？」

「……ああ、行こうぜ」

— 宝石や個人的なコレクションは地下に保管してある

一瞬ためらったものの、シロは昼間の話を思い出し、地下へと降りる事を決意した。

想定されるのは、侵入者との戦闘。…もしくは、老婆、エレオノー



ラとの戦闘。

しかし、自分には人為変態が、エミリーには拳銃がある。侵入者は恐らく自分達と同じこそ泥だろう。

エレオノーラは……雰囲気として非常に危険なものを持っているが、とりあえず現在は一般人として暮らしているのだ、本人も老体だろうし、銃と人為変態があれば苦戦するような要素はないだろう。

殺してしまう、というのは流石に忍びない上にこそ泥目的の自分達があまり血を流すのは好ましくないので気絶させる、くらいで。何より、エミリーに人を殺させたくない。

そう考え、シロは地下への侵入を決意した。いつでも『薬』を使えるように手に持って。

階段を降りると、そこには洞窟のような薄暗い通路が広がっていた。

雰囲気も合わさり、かなり不気味だ。

こんな場所に本当に財宝が保管してあるのか。二人は疑念を持ったが、ひとまずは奥に進んでみよう、と一歩踏み出した。

次の瞬間、二人は同時に顔をしかめる。

「なあ、これって……」

「血の臭い……ですわよね」

鉄のような、あの特有の臭いが二人の鼻先をかすめる……などという優しい表現では無く、空間に満ちていた。

この先で何が起こったのか、想像するのは容易かった。

恐らく、侵入者なのか老婆なのか、どちらかが……。

可能性としては、丸腰だったエレオノーラがやられた可能性が高い、と二人は想像する。

ならば、侵入者は武器を持っているはずだ。

二人はさらに警戒を強め、いつでも対応できるように慎重に先へと進んでいく。

途中から、足元に水たまりが広がっていた。浅い部分に上がってきた地下水か、それとも天井のパイプから水が漏れているのだろうか。

不快な感覚だ。何故エレオノーラは、こんな地下なんかに関心したのか？

疑問に思う二人。その答えの一端を、二人は直後に知る事となった。

二人の目の前に、広間が姿を見せた。これまでの灯が一切なかった通路と違って、薄暗いながらも少数の電球が天井から吊るされていて、ぼんやりとした光がその部屋を照らしていた。

二人は部屋に入り、周囲を見回す。そして、絶句した。

部屋の中央、奥の通路へと続く一直線の道を除いて、エレオノーラのコレクションが数十個、並んでいた。

ギロチン、鉄の処女<sup>アイアンメイデン</sup>、フアラリスの牡牛、三角木馬といった有名どころの大型のものから、ペンチや鉤爪状の名前もよくわからない小型のものまで。

その部屋は、拷問・処刑器具で埋め尽くされていた。

「そりゃあこんなもん、地下においとくわな」

……そして。

その壁には、一面にびっしりと人間の顔が写された写真が貼られている。

壁の面積が足りず、二重三重に貼ってあるようだ。

「来館者は記念撮影！ つてイベントではないですわよね……」

いや、写っている人間の表情を見る限り、これは記念撮影、なのだろう。この館の主にとっての。

まあ拷問器具コレクションが展示してあるだけなら、まだそういう博物館なんだな、と納得できるかもしれない。趣味の良し悪しの事は

無視するとして。

だが、この部屋に置いてあるコレクションは展示できない、いや、展示したくないのだろう。

何故なら、このコレクションの数々には最近使用した痕跡があるのだから。最近なんてものじゃない、その中のいくつかには、ほんの数時間前に使用したようなまだ生乾きの血が付着しているものもあった。

「……ちよつと悪趣味、を通り越してるかな」

「……そうですね」

二人で押し黙り、それからは無言のままその部屋を通り過ぎる。

通路はまだ奥に続いている。そして先ほどの電灯のせいで見えてしまった、足元に広がる血と水の混じった水たまりを踏みながら、二人はそろそろと歩いていく。

ぱらぱら、と何かが上から落ちてくる音がする。

錆か、天井の土か。

シロはその音を聞き、本能のままに一瞬で判断した。エミリーを突き飛ばし、自分は地面に転がって回避動作をとる。

刹那、二人がいた場所を二本の腕が挟み込んだ。

「上だッ!!」

シロはそういうものの、もう上を見る必要はなくなっていた。そこそこの重量のものが着地する音が聞こえたから。

二人は起き上がり、音のした方向へと目をやる。

「ようこそいらっしやい、歓迎するわ」

そこには、嬉しそうな表情で二人を見つめるエレオノーラの姿があった。

普通じゃない。そんな事、さっきの部屋でわかっていた事。

気絶させる？ 甘すぎる考えだった。無力化する手段を選んでいられるような相手か？

シロは素早く注射器を自分の腕に打ち、変態する。  
エミリーは拳銃を構え、エレオノーラを威嚇する。

武器では圧倒的優勢。だが、実戦経験は恐らく比べるまでもない事だろう。

先手必勝。シロは変態によって手に入れた針を構え、突撃しようとする。

だが、それはあつさり回避された。エレオノーラの動きはまるでシロが動き出す前からその行動がわかっていた、というようなもので、完全に読まれていたとシロは歯噛みする。

「そーれ」

軽い掛け声とともに、シロはエレオノーラの蹴りで壁に叩きつけられる。そこまで力を加えられていなかったからなのか、ダメージは少ないが。

さらにシロの突貫と同時にエミリーが放った銃弾もまた回避されていた。

銃弾を回避するには、銃口の向けられている先を読んで射線から外れるように動く、それしかない。

少なくとも、この近距離では発射されてからの回避はかなり難しい。

だが、それが回避された。

シロの攻撃に対応しながら発射された後の銃弾を回避する。

エミリーはその冗談のような展開に一瞬頭が真っ白になるが、エレオノーラが壁に叩きつけられたシロの方へ向かうのを見て慌てて数発の銃弾を放つ。

しかし、それもまた回避される。今度は発射後の回避ではない、他所を向いたまま射線を読まれて回避された。

エレオノーラはシロの脚をつかみ、宙吊りになるように持ち上げる。無抵抗のシロ。

シロは気絶してしまったのだろうか。エミリーは考える。しかし、銃弾を容易く回避する相手だ、近接戦闘ならさらに勝ち目はないだろう。どうするのか。

その時、シロが眼を開きこちらにアイコンタクトを送ってきた。  
シロは何を伝えたいのだろうか。少し考える。

そして、エミリーは考えに考え、エレオノーラに向かって走り出す。  
それをエレオノーラはちらりと一瞬だけ見るが、気にも留めない様子  
でシロへと再び視線を移す。

「私を……舐めるんじゃないですわ!」

さらに近づき、それからの射撃。距離はわずか3メートルほどだ。  
シロの首に手を伸ばそうとしているエレオノーラの左手を狙う。  
この近距離でも恐らく回避されるだろう。しかし。

エレオノーラは狙われた左腕をひよいと動かし、銃弾を避けた。  
瞬間、シロが眼を開く。左腕は回避動作、右腕は自分の脚を掴んで  
いる。

今なら、針を叩きこめる。

よく意味を理解してくれた、とエミリーに感謝しつつ、シロは宙吊  
りながらも全身の力を込め、必殺の一撃をエレオノーラの胴体に叩き  
こむ。

今ならスキだらけだ。これが当たれば、生身の人間ならばどうしよ  
うもないはず。

……だが、何か見落としているものがある気がする。仕留められる  
という確信が、少しづつ疑念へと変わっていった。何だ? 何を見落  
とした? 異常な回避能力か? 攻撃を先読みされた事か? ……  
違う。

エレオノーラは、どのようにして天井からぶら下がっていたのだ?

「逃げろエミリー」

慌ててシロは思考を声に出す。しかし、それは一步遅かった。

エレオノーラのドレスの腰布を突き破り、四本の触手が姿を見せ  
る。

その悪夢のような光景をスローモーションで眺めつつ、シロは自分の行いを後悔していた。

足の力だけで天井からぶら下がり、さらにある程度自由に動くのは不可能じゃないか。

だったら、何か体から生えているもので体を支えているのだ。

触手が人間に生えているなんて想像できるわけがない、仕方ない？  
何を馬鹿な、自分はそれを可能にする技術が存在する事を身を持って知っているではないか。

判断ミスへの代償は、容赦無く二人に降り注いだ。

二本の触手がシロの攻撃を受け止め、貫通するまではいったもののその威力を殺す。

「がっ……いー」

それと同時にシロを宙吊りにしていたエレオノーラの右腕に人間離れた力が込められ、シロの右足が砕かれる。

残り二本の触手はエミリーへと襲い掛かり、銃を持つ左手を包み込んだ。直後響く、肉と骨をすり潰す音。

「あつう……いー」

あまりの痛みで絶叫する事もできないエミリーの悲鳴。

倒れ、死にかけの虫のように体をびくびくと震わせる二人を見て、八脚の怪物は楽しそうに笑う。

「うふふ、可愛い悲鳴ねエミリーちゃん、もっと聞かせて頂戴な！ おばあちゃんに危ないものを向ける子はお仕置きしないとイケないわねえ」

シロをエミリーのいる方向の通路へと放り、今度はエミリーの方へと歩いていくエレオノーラ。複数を相手にした際は一人一人を確実に仕留めるのが碇石というもの。しかし、そんな事はどうでも余裕があった。

MO手術……タコか。何故？ 何故こんな国の陰謀とは関係のない場所に手術を受けた人間が野放しにされている？

非常事態だが、シロの頭は冷静に疑問を打ち出す。

「そうそう、二人とも、こんな噂を聞いた事はあるかしら？ 『イタリアの片田舎にあるザル警備の博物館の隠し地下室には金銀財宝が眠っている』」

「……知らねえよ、そんなの」

シロは血反吐を吐き答える。

「そう、貴方たちは偶然なのね」

偶然。その言葉の意味は。アナタタチは偶然？　じゃあ、偶然ではなくここに侵入した人間がいる？

「こんなバカみたいな噂を流しただけで、沢山の人が夜中に遊びに来てくれるのよ？　私がするまでもなくこの村に来たって証拠を自分で消してね。何もしないでも玩具が手に入る、最高だと思わないかしら」

もう大勢は決している、諦めろ。エレオノーラの今の状況とは関係ない発言からは、そんな意思が伺える。

ああ、この博物館は、食虫植物のようなものなのだ。甘美な匂いに誘われ入ってきた哀れな獲物を消化してしまう、仕組みられた罠。

ぼんやりと遠のく意識の中、シロはそんな事を思った。

前にはエミリー、そしてそれに近づくエレオノーラ。この位置に自分を放り投げたのは、エミリーが殺される、又はあのコレクションを動かす犠牲者にされるのを自分に見せるためなのだろう。

こそ泥への見せしめ、というわけではない。きっとあの老婆は、それが楽しくてたまらないのだ。

背中から見ても、エミリーが怯えているのがはっきりとわかる。元々心が強い子ではなかった。

そんなあの子を何回も修羅場へと同行させてしまった。

懺悔、というには自分勝手すぎるだろうか。自分への怒りがふつふつと湧いてくる。

何だか、こんな追い詰められた状況だというのに怒りと同時に力が

湧いてくるような気がする。

そんなシロは、昔の事を思い出していた。

自分の最初の記憶は、お腹にできた大きな傷口を馬鹿にされている場面だった。

なぜこんな傷口が自分にあるのか。それは、まだ赤ん坊だった時に父母が自分を連れていった客船のパーティでの事故によってできたものだった。父母はその事故で死んでしまったが、父と思われる死にかけの人物から臓器の一部を移植してもらい、奇跡的に自分は助かった。その人は助からないのが自分でわかっていたようで、何も語らずその後すぐに命を落としたそうだったが。

自分に臓器を提供してくれた人が本当の父だったのかは定かではない。良心ある他人がくれた臓器が偶然自分の体に適合しただけかもしれないだが、自分はその父なのかわからない人物の事を誇りに思っていた。

そして、ずっといじめは続き、自分はだんだんとその父を恨むようになってきた。

こんな事になるのなら、何故自分を死なせてくれなかったのか。貴方は、呪われた生を俺に押し付けたのか。そう思い続けて生きてきた。

ある日訓練で相手を殺した。普段と同じくただ薬で変態しただけなのに、相手の挑発に駆られて自分の意識が制御できなくなったからなのだろうか。思い返せば、あの時相手は父を侮辱したのだっただろうか。自分は何故恨んでいる父を侮辱されて怒りに駆られたのだろうか。

その後も何故か自分は特別扱いされ、次々と人を殺させられた。

自分の何が特別なのかは自分でもわからなかった。

……ただ、ある日偶然その理由を知ってしまったのだ。

「なあ、俺さあ、助けたい娘がいるんだよ」

怒りと苦痛で意識を手放しそうになりながら、シロは心の中で誰か



に告げる。

「力を貸してくれ、父さん」

それは、顔も知らない父で。この力を与えた父がこんなに恨めしかったはずなのに、今この瞬間、自分は父に感謝していた。

何故ならば、父はこの呪われたもう一つの力をプレゼントしてくれたのだから。

「……あらっ？」

エレオノーラがびくん、と何かを感じ取った様子で顔を上げる。

目の前には動けないエミリーと満身創痍のシロ。だが、彼女の本能が、数十年もの間彼女を守り続けてきた直感が警鐘を鳴らしている。

横に飛ぶエレオノーラ。だが弾丸のような、と形容するしかない、しかし弾丸より速い物体を回避しきれず、右頬が引き裂かれ、回避し損なった二本の触手がその物体に直撃し消し飛ぶ。

「あら……あらあらあら」

これまでとは明らかに違う凶暴な笑みを浮かべ、エレオノーラは自分の背後を振り向く。

そこには、シロの姿が、しかし彼本人のベースであるシオヤアブとは異なった色に染まった彼がいた。

——かつて音速を超えた速さで飛ぶと言われた生物がいる

その昔、その生物は時速約1300kmで飛ぶとされていた。

しかしそれは当然間違いだったと判明し、計算され直された値が公表値となる。

それは、時速7、80km。現実的な値となってしまった。

しかし、その1cmにも満たない体長で時速80kmを叩き出す生物が人間大になれば――

その生物が属する目の特徴である、蜻蛉に匹敵する、一部では上回るほどの旋回、加速、ホバリング能力が合わされば――

速度を大幅に落としながらも急旋回を行って方向転換した追撃が、再度の回避動作を行う隙も与えずエレオノーラの腹に突き刺さる。

――その速度は時速800kmに到達し、本来腐肉を好む平和主義者は圧倒的空戦機動と速度を併せ持った存在へと姿を変える

白

国籍：中国

18歳 ♂ 176cm 66kg

MO手術 『昆虫型』

―― シオヤアブ

+

―― 『バグズ手術』

―― セフェノミアヒツジバエ

生まれつきのモザイクオーガン。それは手術の確実な成功を約束する。

では、後天的に親、もしくは他人の体細胞内に存在していた他の生

物の遺伝子を移植された場合その能力は発現するのか？

その答えは、今ここに立って戦っている少年、ただ一つだけの成功例だった。

まだ意識は保っている。我を忘れるまでいいっていない。

シロは自分のもう一つの能力を制御するのに必死だった。

なにせ、イレギュラーな展開でいつの間にか体内にあった能力だ。本来自分のものでない能力を制御するにはそれだけ神経を使う。

二本の触手と再生間もないためまだ短い二本の触手がシロを捕えようと網のように展開する。

だが、その高速は包囲網を軽く抜け、打撃をエレオノーラに叩きこんだ。

エレオノーラは早くもこの攻撃に対応し回避したが、避けきれなかった腕の皮膚が引き裂かれ、血が噴き出る。

「エミリー！ 早く逃げろ！」

エレオノーラが後ろを向いた隙に声の限り叫ぶ。

「わかりました……わ……」

エミリーは躊躇っていたが、拳をぎゅつと握って地下室の出口へとよろよろと走り去っていった。

いいんだ、これでいい。シロはエミリーを見送り、そしてエレオノーラを睨み付ける。

エミリーはきつと、自分が勝って後を追いかけてきてくれると思ったのだろう。だから逃げたに違いない。

それでいい、とシロは薄い笑みを浮かべる。

シロの耳から、血が流れ出した。

元々傷ついている状態での無茶な変態だ、ガタが来るのは当然の

事。

あまり長く持ちそうにもない。そもそも、減速したからといってあの速度の攻撃に耐えられるエレオノーラの耐久力が異常なのだ。

再び触手が襲い掛かってくる。背に生えた羽を休める事なく動かし、それを避けようとするが避けきれず、拘束されないまでもその重たい触手をぶつける一撃を受けてしまう。

よろめきながらも、シロはエレオノーラへと一直線に向かっていった。

——なあ、エミリー、謝りたい事があるんだよ。

歪む視界の中、シロは独白していた。

それは、彼が一生心にしまっておこうと思っていた事で。

——俺がお前を一緒に連れてきたの、お前が逃げだしたいって言ってたからじゃないんだ

眼前に迫る触手と怪物の枯れ木のようで、しかし圧倒的な力を持つ両腕。

速度は落ち続ける。こっちの能力の訓練をしないで使ったツケなのだろうか。

——ごめんな、でもさ、言えるわけじゃないじゃんか……

『死』を間近に感じながら、シロは心の中でその本心を口にしていた。

——独りが寂しかったただけなんて……さ……

地球番外編 9話 血戦

「……はあ、はあ」

足が重たい。それは、疲れが理由では無い気がする。……いや、疲れが理由の一つである事に疑いは無い。

正確には、疲れだけが理由では無い気がする。

「大丈夫、ですわよね……？」

拷問具コレクシヨンの部屋を抜け、よろよろと遅い足取りでエミリーは地上への階段を目指していた。

先ほどの光景、シロが目にもとまらぬ速さでエレオノーラに突撃し、逃げろ、と言った。

ベースはシオヤアブ。そう聞いていた。でも、あれは明らかにこれまでのシロが見せた動きではなかった。

何かを隠していたのか。土壇場で新しい力に目覚めたのか。考えても意味は無い。何故なら、今の自分はそのシロを見捨てて逃げているのだから。

「早くここから出て……」

早くここから出て。

「それから……」

それから？

それから、何ができるのか？

助けを呼ぶ？ 誰に？ 何と言って？ アレを止められる人間がこんな所にいるのか？ 博物館の地下にとんでもない魔境があつて自分の仲間が館長に襲われているので助けてください、なんて話を誰が信じてくれるのか？

じゃあ、答えなんて最初から一つしかないじゃないか。

シロの事は忘れて、見捨てて、自分一人で逃亡する。

エミリーは自分の心に黒い棘が刺さるような感覚を覚える。

それで本当にいいのか。いいじゃないか、逃げろ、と言ったのは他

ならぬシロだ。

逃げるんだ、シロが勝ったら合流する。それで元通りじゃないか。収穫があるのかはわからないけど、それで逃亡生活を続けられればいい。

今戻ってどうなる？ むぎむぎ彼が作ってくれたチャンスを手放すのか？

考えれば考えるほど、このまま逃げるべきだ、という思考が頭の中を埋めていく。

体を疲れが覆い、視界がぼやける。

そもそも、この旅が始まったのは、シロが自分を無理やり連れだしたから始まったのだ。

先の見通しも立たない、今現在死にかけている、何故私を連れだしたんだ。こんな事になるのなら、こんな事になるのなら。

「つう……」

その続きの思考は、左手を走る痛みでキャンセルされた。

エレオノーラの触手に挽き潰されたそれは、原型こそ残っているものの、ぱっと見では血と肉の塊と化し、痛ましい状態となっている。

その現実をまじまじと見て、エミリーの頭は少しづつ思考を早めていた。冷静になった、というわけではなく、それはむしろ熱くなっていく。

これまでの旅。暗く、ただ国の為に生きて国の為に死ぬ兵器として育成される毎日。

かつての親友は、それに食いつぶされた。

でも、ある日その日常はすっかりとぶち壊された。自分を連れだして外の世界へと足を進めたあの少年。

船の襲撃では、力を得てしまったが故にそれに苦しむ彼の弱さに触れた。

研究所では、過去に苦しみ、現実への対応を拒否した甘い自分を支え、理解してくれた彼の強さに触れた。

……なら、今は。

いつ死ぬかもわからない、無計画で勝手な旅。

それは、兵器として生きる人生と何が違うのか？

彼はいない。よくよく考えれば、そんな状況は逃亡から初めてだった。

この状況で、考えられるのは自分だけ。

さあ、どうする？

「言い残す事はあるかしら」

シロの首を捕え持ち上げながら、エレオノーラは静かに告げる。

答えは無い。何を考えているのかわからない表情で、シロはエレオノーラの目を見返す。

「よかったわね、今からあの娘を追いかける時間は無いみたい。貴方の勝ちよ」

残念そうにエレオノーラは呟く。その体の数カ所からは出血し、四本の触手はすでに変態が解けているのか消滅している。

「貴方は最後まで弱者だったわね。情に流されて、ヒーロー気取りで他人を庇って自分が死ぬ。あんなに素晴らしい力を持っているというのに、惜しくて仕方がないわ」

エレオノーラの言葉にシロは満足げな笑みを浮かべる。その顔を見て何を感じたのかはシロにはわからなかったが、エレオノーラは目を細めた。

「お褒めに預かり光栄……だぜ……」

自分の首に力がかかり、圧迫されるのを感じながらシロはぼんやりと考えていた。

エミリーは一人で生きていけるだろうか。

寂しがりで弱い自分の支えになってくれたあの子は、幸せになってくれるだろうか。

思考が、日が落ち夜が訪れるようにゆっくりと闇に閉ざされていく。

「待ちなさいなあああああ!!!」

唐突に、絞り出すような絶叫が通路に響き渡った。首にかけられる力が緩み、シロの意識が戻ってくる。

ああ、嘘だろ。やめてくれ。シロは青ざめながら、今の声が自分の幻聴である事を祈ってその声の方向へと目線を向ける。

そこには、原型を失った左手を押さえながら、エレオノーラを睨み付ける少女の姿があった。

次いで、エレオノーラの方を見る。

「……」

無言だ。だが、その目はぎらぎらと輝き、邪悪な光が宿っていた。最悪の展開だった。

「あら、おかえりなさい……何をしにきたのかしら、エミリーちゃん」  
シロを床に置き、エレオノーラは再び臨戦態勢に入った。懐からスイッチを取り出し、それを押す。

……だが、何も起こらない。

「……あら、ストックが切れちゃってるわ」

残念そうなエレオノーラが言葉を言い終わるや否や、その顔に向けて銃弾が放たれる。

それをひよいと回避して、エレオノーラはエミリーに近づいていく。

逃げろ、と再びシロは声を出そうとするものの、声は出なかった。

「シロ君を返してくださいまし、エレオノーラさん」

「いやよ、私の可愛い甥っ子への手土産にするんですもの」

交渉になっていない交渉は即決裂。ふっと笑い、エレオノーラの長い腕が棒立ちのエミリーに伸びる。

しかしその腕は空を切った。エミリーはエレオノーラを回避し、シロに駆け寄っていく。

「バカかお前ッ!」

近づいてくるエミリーにシロは怒りをぶつけた。



あのまま逃げてくれればよかったのに。最悪の状況の中で考え得る限り最良の結果が得られたのに。

「お説教なら後で聞きますわシロ君！」

シロの服を漁り、お目当ての二つのものを入手する。一つは、何故か落ちていた手榴弾。以前の侵入者が落としたものだろうか。もう一つは、シロにとっては見慣れたもの。それを見て、シロは驚きの表情を浮かべていた。

「薬、借りていきますわ」

エミリーは薬を首に当て、少し考える。膝は笑っている。吐き気は止まらない。あの時と同じだ。

でも、この力を使って未来が見えるのなら。そこに、シロと笑い合って生きる光景があるのなら。

過去なんて、いくらでも捨ててやる。

そして、エミリーの脳裏にはかつての親友の表情が浮かんでいた。

「……私の事、見守っていてくださいまし」

逃げて苦労しながら自由に生きるという選択肢。兵器として生きる選択肢。どちらもできず世を去った彼女に心の中で一言謝り、エミリーは、その注射器のピストンを押し込んだ。

左手が、完全に元通りとまではいかななくても原型を取り戻す。

両腕の付け根からはそのベースとなった生き物のものである小さな、しかし鋭い牙が姿を見せる。

全身は赤茶のような色へと変わり、甲殻の類は見られない。

ああ、あの時と同じ、この姿。

でも、身を襲うトラウマはいつの間にか消えていて、不思議とすつきりとしたものをエミリーは感じていた。

目の前には2mを超える巨躯の怪物。動けないシロには見向きもしない様子で、笑顔のままエミリーを観察するかのように見つめてい

る。まるで、眼前の食糧よりも動く獲物に反応する肉食昆虫のようだ、となんとなしに思う。

「……参りますわ」

たつ、と地を蹴り、エレオノーラの頭目掛けて腕の牙を振りかざす。それを見てエレオノーラは姿勢の崩れた状態で脚の筋力だけで後ろに跳び、回避。そのまま体を無理やり前に倒して姿勢を変え、エミリーの喉にその右手を伸ばした。だが、その腕の動きは鈍重で、エミリーはあっさりとしてそれを回避する。

表情を変えるエレオノーラ。何が起こったのだろうか。自分の腕の動きが思い通りにならない、とその腕を見ると、そこには白い糸のような液体のようなものがこびり付いていた。

それが何かを考える暇なく、エミリーの頭を狙った攻撃が繰り出される。

「懐かしい……感覚ですわ」

#### 節足動物

地球上で最も繁栄した生物、とも言われている昆虫を始めとした、カニ、エビ、シヤコなどの属する動物門。

非常に多彩に分化した生物の数々は地球上の様々な場所で生を育み、時に人間を驚嘆させるその生態や特徴は、MO手術の原型、『バグズ手術』や『MO手術』のベース生物として遺憾なくその性能を発揮している。

そして、節足動物の祖である生物が存在する。

生きた化石と呼ばれ、かつては世界にその勢力を広げながらも現在は森の影で密かに暮らすその生物。

長射程高命中精度を誇る糸状の粘液で獲物を絡めとり、口内に隠された牙でそれを喰らう。

その身には太古の遺伝子が、そして今現在地球の自然世界で覇を唱える一族の始祖の血が流れているのだ。

エミリー・オーランシユ

国籍：フランス

18歳 ♀ 151cm 48kg

MO手術 “有爪動物型”

バルバドスカギムシ

「……虫かしらねえ」

エレオノーラは粘液を浴びていない方である左腕で飛びかかって来るエミリーを迎撃する。

その動きは俊敏だったが、それは所詮生身の人間の範疇でしかない。

大丈夫だ、恐ろしい練度であるがこの老婆の肉体は決して人間を超えているわけではない。

今なら、その動きをはつきりと捉える事ができる。

エミリーは姿勢を下げ、無理やり左腕を避ける。

そして、まだ不完全ではあるが変態の影響で治った左腕とそれに付いている牙をエレオノーラに叩きこんだ。

「ふうふうふうでをふういてひるふあ」

エレオノーラの何やらよくわからない言葉。頭を狙った攻撃は、エレオノーラが歯で受け止めていた。

反応速度は若干人間を止めている領域な気がしない事も無いが、想定範囲内。エミリーはもう一本の腕、完全な右腕をもう一発頭に打ち込もうとする。

狙いを定めようとエレオノーラの顔を見る。その目からは、光が消えていた。これまでと違って何かがおかしい。

……そこで背に悪寒が走った。

本能に従って左腕の牙をエレオノーラの口から引き抜き、全速で離脱する。そのエミリーを狙ったエレオノーラの右フックは空振り、通路の壁に当たる。

そして、通路の壁にヒビが入り砕けた。

「……?!」

相手は変態をしていない。だということのに、なんだこの力は。

前言撤回。完全に人間を辞めている。

「私は人間よ、人間にできる技術でしかないわ」

そのエミリーの思考を読んだように、エレオノーラは呟く。

ルークは、秘書にプレゼンテーションで説明をしていた。客人であるアネックス・裏アネックス計画中国班幹部クラスである彼らが面会を望んだ人物がどんなに危険であるかという事、命の保証はできないという事。それを解説する際の予行演習である。客は客室に待たせている。

「これくらいでいいと思うか?」

「はい、大丈夫かと」

納得した様子の秘書。とりあえず安心なようだ。

「……あ、これ何ですか?」

秘書の質問に、ルークは画面を見る。

そこには、消し忘れていた資料のスライド。

『人間の脳にはリミッターがかかっている』って知っているか？」  
「ええ、聞いた事があります」

「それ自体はもうだいぶ昔に否定された話だがな。けど、人間つてのは元々本来のスペックを出せないように脳が抑え込んでるらしいぜ」  
「本気出したら体がぶっ壊れちゃう、ってな。車の下敷きになった親を助けるために車を持ち上げた女の子、とかが聞いたことあるか？」  
「昔の記事にありましたね」

「本来人間つて凄いパワーがあるんだな」

「そうですね」

「じゃあ、それを意図的に使用できるとしたらどうなるよ」

のんびりとノートパソコンをしまいながらルークは秘書に尋ねる。

「それは……コミックのヒーローみたいなものかと」

「ま、実際やってるのはバケモノだけだな」

「それと、アイツはお前が思ってるような奴とは少し違うな」

「と、言うと」

「アイツの本気は遊ぶために殺す、とか楽しいから殺す、とかじゃないんだよ」

「……」

秘書はそこで黙る。制御できるのかもわからない、あの怪物。遊びで楽しみで人を踏みじめる姿は、今もトラウマとして焼き付いている。

「殺すために殺す、邪魔をするのであれば敵だろうが味方だろうが関係なく、な」

「そこにそれ以上の理由なんてない、生粋の狂戦士だ」

自己催眠によるリミッター解除とアドレナリンの異常分泌による人為的な痛覚麻痺。

それが、エレオノーラの人外の身体能力の根拠である。

次に気が付いた時、エミリーは廻し蹴りを食らって吹き飛ばされて

いた。

あれだけの力を使ったら自分の骨や筋肉も無事では済まないはずなのに。エミリーは体勢を立て直すのが、次いでの一撃を回避するのに精いっぱい反撃の糸口がつかめない。ほんの少しの隙を見つけて粘液を繰り出すのが、全て軽い動きで回避されてしまう。

「遅いわね、ホントに変態しているのかしら」

情け容赦ない猛攻を避けながら、エミリーは必死にエレオノーラの一挙一動を観察する。

全く規則性の無い、一撃一撃が岩壁をも砕く攻撃。暴風雨の中で綱渡りをするような攻防に、次第にエミリーの疲労は溜まっていく。

変態が解けてしまえば、恐らくその次の瞬間に自分は肉塊に変わる事となるだろう。時間制限もある。

だったら、その前に。

「そこですわー！」

一種の賭けだった。次にどこに飛んでくるのかわからない手の、足の攻撃の隙間を見つけ、そこに攻撃を叩きこむ。次の瞬間にはその抜け穴に攻撃が叩きこまれるかもしれない。でも、やるしかない。

そして。

「あらっ？」

がくり、とエレオノーラの体がぐらつく。エミリーにも何が起こったのかわからなかった。

エレオノーラの左足の太腿に穴が開き、血が噴き出す。

痛覚が麻痺している。それは、苦痛に関係無く戦闘を続行できるという利点の為に……体の異常を知らせる機能を切り捨てる、という事なのだ。

「女の子だけに無茶させる……ってわけにもいかねえもんなあー！」

シロが起き上がり、その針をエレオノーラの膝に横から打ち込んだのだ。

今がチャンスだった。止んだ攻撃の抜け道に、両腕でエレオノーラの首を挟み込むように牙を振りかざした。

咄嗟に首をガードしたエレオノーラ。人間という種の極限まで磨き抜かれた反射神経は、寸分の狂いも無く持ち主を守ろうとする。

「残念、違いますわ」

そのエレオノーラの顔の前に構えた腕をエミリーは無理やり、両手で力いっぱい押す。

致死の一撃がガードされるのは最初からわかっていた。

体格差もありエレオノーラは数歩後退しただけだったが、それで十分だった。

エレオノーラの体は、壁にぶつかる。

ぎろりと目を開き、壁を足で蹴りながら二人を葬ろうと再びその両腕を振ろうとするが……

その体は、一步も動かなかった。

そこには、先ほどの攻防で避けられたカギムシの粘液がたつぷりとあつたからだ。

「これで最後！ ですわ！」

そしてエミリーは手榴弾を投げつけた。

それは壁に固定されたエレオノーラの鼻先で輝きを放ち、轟音と共に周囲を爆炎で包み込んだ。

「シロ君、逃げますわよ！」

「ああ！」

威勢よく声を上げるものの、二人ともけが人である。

二人で肩を支え合ってゆっくりと確実に、外界への道を歩いていく。

途中、エミリーのポケットに上から何か落ちてきて入ったが、もうそんな事はどうでもよかった。

地下を抜け博物館にを抜け、外に出る。

「ねえシロ君、私、この通り凄く強いんですよ、頼ってくれてもよろ

しくてよ」

「何言ってるんだ、俺の方が強いから。あとこれでも男だ！」

意地を見せる、と言わんばかりに叫ぶシロ。痛みで飛びそうな意識を保つ、という意味でもあった。

「あら、シロ君……それを言うなら、私、シロ君より一か月ほどお姉さんでしてよ」

くすりと笑みを浮かべ、わいわいと騒ぐシロの唇に手を当て黙らせる。

どきつとした様子で押し黙るシロ。

二人で冗談を言い合い、他愛ない話で生き残れた事を喜び合う。

そんな二人の眺める空では、夜が明け始めていた。



## 地球番外編最終話 不安定に平穏な世界で

「……少々お待ちください」

まだ太陽が昇り切ってもいない朝早く、イタリアの片田舎の博物館を数人の男女が訪問していた。

屈強な軍人が二人と政治家が一人、その秘書が一人。軍人二人はここまで案内されてきた様子で、二人ともこの村の和かな風景に興味津々なのか隙を見てはあたりを見渡している。

一方の政治家、ルークと秘書は異常に気が付いたようで少し焦っている様子だった。

博物館の入り口の扉がこじ開けられているのと、血の跡が点々と博物館の内から外に道しるべのように続いている。

「……ずいぶんと前衛的な装飾ですね」

軍人の片方、2mを超える大柄に長い髭とメガネを付けた男が、啞然としているルークに声をかける。

ここまでは男、劉にとっては想定内の範囲内だった。一方ルークは、少し焦った様子である。

今回の来訪、表向きは中国の表裏アネックス計画現場指揮官がローマ連邦の同じく現場指揮官と会談を行いたい、という理由のものだった。だが、裏では迎えるローマと迎えられる中国、両者ともに黒い考えが渦巻いていた。

まずローマ。ジョセフとエレオノーラという超人と人外、アネックス計画におけるローマ連邦の切り札たる二人の力を見せつけるという示威。

一方の中国。アネックス計画におけるローマ連邦の最大戦力の確認と可能であればなんらかの形での懐柔。不可能であれば、それを暗殺しローマ連邦の立場を貶めると同時に火星での計画の障害を排除する。

もう一つは、急な事情であるがMO手術関連の逃亡者がイタリア方面に向かったということのを重要な部分を隠して通達し、協力を要請すること。

お互いがお互いの目的をわざわざ語らないまでも理解している。だから、ルークには見えるのだ。中国からの使者である二人が内心ではぎらぎらとした笑みを浮かべているのを。

「失礼、呼んできますのでお二人は日陰でお待ちを」

秘書に二人を博物館の庭へと案内し、ルークは博物館の中に入っていく。

一直線に血の跡はあり、それは博物館の奥へ奥へと続いている。

ジョセフからは今朝の連絡でハイジャックに遭ったがなんとかした、との連絡があったばかりだ。ならば、こちらでも何かあったと考えるのが自然だろう。

最奥部の館長室。その椅子の背後にある本棚は二つに割れ、地下への薄暗い入口が姿を見せている。

血の跡もその中へと入っていつている。

なぜ自分が、と独りという事もあり悪態をつくルークだったが、気を取り直して地下へと降りていく。

地下を進み、暗い通路を通ってエレオノーラのコレクションのある広間へと。

そこを舌打ちしながら通り抜ける。いつ見ても気分の悪くなる光景だ。

さらに進んだ奥の通路で一人のニンゲンが何かを眺めているのを見て、ルークはそれに声をかける。

「よう、こっ酷くやられたようだな」

ルークに背を向けていたその人物は声を聞いてその存在に気が付いたのかくるとルークへと向き直る。

「あらあら、いらっしやいルークちゃん」

ルークが最初に見た背中側の服はちぎれたように無くなっていて生の背を晒し、その晒されている背の皮膚はほぼ全て無くなり、出血

と肉の赤が合わさってグロテスクな様相となっていた。

また、一瞬わからなかつたが左腕は肩口から無くなり、その傷跡は焼け焦げたかのように水ぶくれの赤と黒色へと姿を変えている。体の全面にもところどころに火傷らしい跡があった。

背側の腰からは長い二本の触腕が生え、その頭上の二か所ひしゃげているパイプからはぼたぼたと水が零れ落ちている。これであるのパイプに恐ろしいまでの力でぶらさがっていたのか、とルークは推測した。

「ああ、これはいらっしやってるお客様と同郷の団体様からもらったものではないわよ」

エレオノーラはルークの表情を見てすぐに、彼の思考を否定した。

エミリーの手榴弾を目前に受けたあの瞬間、エレオノーラは左腕で顔を庇って顔へのダメージを遮断。同時に粘液で拘束されていた背を力任せに皮膚をちぎって脱出し、この二本の触腕を展開して跳躍、天井へと避難したのだった。

「……ならいいがな」

エレオノーラがなぜ全身に重傷を負っているのかはよくわからないが、推測した理由ではないと聞いて一旦は安心するルーク。

次の瞬間、エレオノーラの欠損した左腕がめきめきと伸び、元の姿を取り戻す。それが終わった後、背側の腰から生えていた二本の触腕はまるで掃除機のコードを巻き取るかのように体内へとするする入っていく、消滅した。

急なモーションにびくつとするルークだったが、それを悟られないよう隠す。

「で、リハビリは済んだかよ」

「ええ、楽しかったわ、とても。まだ元通り、とは程遠いけどね」

MO手術。それは元々人間に存在しない臓器を移植する上に細胞レベルで全身をいじくるというもの。手術を受ければ、健康な成人男性でも術後一週間は昏睡し、その後も元の身体能力を取り戻すまでにそれなりの期間を必要とする。スペック自体は高いといっても老人であるエレオノーラだ、それは例外ではなかった。

だから、この隙をつかれて殺される……とルークは懸念していたが、それは杞憂だったようで。

「それでだ、客を——」

「はいはい、わかっているわよ」

ルークの言葉を、最後まで言うなわかっている、と再生したばかりの左手で制し、エレオノーラは地下室の出口へとルークと共に歩いていく。

「……で、負けたんだろ？」

「……」

ルークが何気なく言った一言に、エレオノーラは顔をしかめる。常に笑顔の彼女には珍しい、それ以外の表情だった。

「体中の傷に加え、天井のひしやげたパイプ。ただぶらさがるだけならひしやげさせるほどの力なんて必要ないはずだ。相当焦っていて思わず力を込めたからああなったんだろ？」

「ルークちゃん、貴方の事アホだと思っていたけど見直すわ、流石は大統領ね」

凶星なのか、渋い顔のエレオノーラはルークにせめてもの反撃だ、とばかりに子供っぽい嫌味を返す。

ケツ、と笑い、歩調を早めるルーク。してやった、と内心ガッツポーズをとっていたのは内緒である。

「ドクター、非常に心苦しいことをお伝えしなければいけないのですが……」

昼時、孤児院の子どもたちと共に昼食を食べ、院長室に戻って休んでいたアナスタシアの元を軍服の青年、ヨハンが訪れた。

彼はアナスタシアのボディガードを担当しているが、平時はこの施設の職員として業務に勤しんでいた。

生真面目な彼は軽いワーカーホリックの域に達していると言っているほど仕事熱心で、今の休憩時間でも施設の雑用を行っていた。そんな彼が唐突に戻ってきたのだ。アナスタシアと彼女を囲む三人の男女は少し驚いた様子でそれを見つめていた。

「イタリアに出向中の欣<sup>キン</sup>將軍がローマ連邦のルーク大統領と例の計画の幹部と対談なさったらしく」

そこで一つヨハンは咳をする。それは言うまでもなくわざとで、先を言いたくない、といった様子だった。

「この国からの脱走者の確保を要請した結果ですね」

またヨハンは言葉を詰まらせる。ずばずばと物を言う彼がここま  
で言いよどむのは非常に珍しいことだった。

その話の内容は、この施設から脱走した二人に関してのようだった。確かに二人はMO手術を施した兵士という価値が、その上片方にはそれ以上の価値がある。もつとも、そんな価値は誰でもよく施設の子供たちを実の弟妹のように可愛がっていた彼らからしたらそれはごく普通に興味のある話なのであるが。

「盗難目的で侵入してきたから二人とも殺害した、と例の計画の幹部が語ったらしく」

ぽろっとアナスタシアの持っていたプリンのスプーンが床に落ちた。他の三人もそれを聞き、目を伏せたり愕然としたりそれぞれ  
の反応を見せていた。

「……そう、ですか」

少し声の震えているアナスタシアの返答を聞き、無言で頭を下げるヨハン。そのまま場の空気に耐えかねたのか部屋を出ていつてしまった。

「先生、元気出して」

「……残念だったな、あいつら」

「クソツ……もう少し協力してやれてれば」

三人の慰めを制し、アナスタシアは車椅子から立ち上がる。

手に持った機械的な装飾がなされている杖でふらつく足を支え、その軽いであろう小柄な体を重たそうに持ち上げる。

そして一言、また目的が増えてしまった、と内心で覚悟を決めながら、三人になんとか聞こえるくらいの小さな声で呟いた。

「……この敵は、火星でとりましょう」

博物館での戦いから数日後。二人は山奥の古びた小屋、そのそばにある開けた花畑で朝食をとっていた。

「空が青いですよー!」

「ホント、いい天気だな」

雲一つない晴天、そこで皿を広げ、少し遅くなったがここまで逃げ延びた、そして二人そろって生きていられた、という記念に少し豪華なメニューに舌鼓を打つ。

エミリーのポケットに何故か入っていた大粒の宝石、二人は名も聞いた事がないものだったが、それは足元を見て安く買ったたく闇商人に売ったにも関わらずかなりの額となり、当面の生活資金の問題は無くなった。

だがそれよりも二人が安堵したのは、博物館の戦闘以来、追手の手が途切れている、ということだった。

これまでの逃亡生活では執拗に二人を追いついてきた追手がぱったりといなくなってしまうのだ。

輸送船の襲撃、二人が裏で始末してきた数人の斥候、そして二人は知る由もないが博物館の襲撃犯。

追うことを諦めたのか、別な理由でもあるのか。

いくつか考えられたが、答えを知ることにはできそうにもないのでこれ以上考えることはしなかった。

「偽装パスポートとかどっかで作れるかな」

「船の皆さんなら知ってそうですね」

小さなカップケーキをつつきながら二人はのんびりと今後について話し合う。

今現在、この国の裏社会境界は輸送船の時に聞いた話でもあるがヨーロッパ全土を支配していた巨大犯罪組織が壊滅した事によって再び戦国時代を迎えているらしい。

競合相手が多いなら安くいけるかもしれない、とキャラに合わない計算を見せるエミリー。

「まあ、なんだな」

「この生活がずっと続けば、とか思っちゃいますの」

言いたい事を先に言われた、と少ししょんぼりするシロ。

このまま何事もなければ。追手もこなければ。そう考えてしまう。今のようなやつと手に入れた、少し貧しいながらも穏やかな生活。一日中訓練を繰り返し、争いの道具として捨てられることもない自由な暮らし。

でも、それはいつまでも続かないだろう。

いつ追手がふたたびやってくるかもわからなければ、不測の事態が起こらない保障もない。この山も今の不景気で管理できず打ち捨てられていた土地だ。だが、その現状がいつまでも変わらないとも限らない。

そうなった時、自分たちはどうすればいいのだろうか。

「大丈夫ですわ、これまで何とかなつたのですもの」

「ああ、そうだな、それにさ」

目の前の現実から逃げることで始まったこの旅、一つの山を乗り越えていったんの平穏を得たものの、まだ何も不安は解決できていない。向き合わなければならぬ事も沢山出てくるだろう。でも。

「それに、なんですかの?」

「いや、なんでもない」

二人ならきつと乗り切れるじゃないか、そんなセリフを頭の中に浮かべ、そして気恥ずかしくなってシロはひっこめた。

「さ、食い終わったら自家菜園にでもチャレンジするか!」

「それって肉体労働……ですかの?」

「無論」

「うう……」

いやいやと歯医者に行く事を拒否する子供のように動かなくなる  
エミリーを引っ張りながら、シロはなんだか楽しい気分になる。さあ  
これから何をしようか。なんでもできるじゃないか。根拠の無い全  
能感。それが面白くておかしくてたまらない。

太陽が昇り始めた空には、そんな二人を眺めるように、肉眼ではほ  
とんど見えない暗く緑色の惑星が浮かんでいた。



## 登場人物紹介（番外編の三人）

——白♂

・18歳 176cm 66kg 国籍：中国

・MO手術ベース：『閃槍の暗殺者』 シオヤアブ

・バグズ手術（移植細胞）：『音速伝説』 セフェノミアヒツジバエ

・好きな食べ物：特に無し

・嫌いなもの：部屋の隅に放置されて中が大変なことになっている  
ペットボトル

・瞳の色：黒

・血液型 A型

・誕生日：6月18日（ふたご座）

まだ物心ついていない幼少時に両親に連れられて行ったバグズ二号出発成功を祝うパーティーで事故に遭い船は沈没、そこで両親を失い中国の孤児院に引き取られる。その後方針転換によりMO手術を施された将来の兵士を養成する機関となった孤児院で育つ。

身元不明であるが、日本か中国のどちらかと思われる。

事故の際に同じく事故に遭った男性から臓器移植を受け生き延びるが、その男性がバグズ手術を受けたものの諸事情によりメンバーに選ばれなかった人物であったため、その手術を受けた細胞が体内に取り入れられている。そのため、100%ではないがそちらのベースの能力も使用する事ができ、研究の対象にされていた。  
どちらかといえば年上好き。

——エミリー・オーランシユ ♀

・18歳 151cm 48kg フランス

・MO手術ベース：『百虫の始祖』 バルバドスカギムシ

・好きな食べ物：かぼちゃパン

・嫌いなもの：黒光りするアレ

・瞳の色：藍

・血液型：O型

・誕生日：5月12日（おうし座）

フランスの貴族の一人娘として生まれた典型的なお嬢様。ギャングの襲撃で家と家族を失い、頼れる親戚もおらず身売りのような形で中国の孤児院へと送られる。

訓練の最中で病弱な親友が変態から元に戻ることができず死亡したというエピソードがトラウマとなっていて、そのせいで人為変態を行おうとすると無意識のうちに体が震えたり吐き気がするようになってしまった。

口調も幼少時代からのお嬢様のそれで、基本はおっとりポケポケとした性格だが、孤児院時代に色々影響されてたまに口調が崩れたり思考が黒くなったりする。Dカップ。

——柳瀬川 七彦 ♂

・21歳 177cm 79kg 日本

・MO手術ベース：？

・好きな食べ物：土手鍋

・嫌いなもの：鞆やリュックの底にいつの間にか落ちている小さなゴミ

・瞳の色：黒

・血液型：AB型

・誕生日：8月31日（おとめ座）

日本の貧しい自家経営の工場の一人息子として生まれる。中学生の頃に倒産、家族がバラバラになり、日本から抜け出せば何かが変わるんじゃないかという謎の考えにより密航で中国に渡る。

その後あっさり捕まったもののそのゴキブリのような生命力と生存能力は役に立つのではないかと考えられ孤児院という名の隠れスパイ養成機関へ。その後脱走して密航して捕まって許されて食

逃げして捕まってケバブ売りになって今に至る。  
アネックス一号計画の八重子とはいとこの関係である。

## 第29話 それぞれの疑問

「もう六日目、ですか」

制圧した基地、その司令室での定例会議。一つの議題が終わり次に移る準備をしている合間、エリシアが呟く。

あの後、第一班の生き残りも合流し、全ての班が合流することには成功した。そこまではまだよかった。

だが、その後にはさまざま問題が待ち構えていたのだ。

基地の内部配置の確認、通信ログの解析、今後の身の振り方。戦闘員重視で構成された裏アネックス計画は、技術者に関しては最低限でアネックス一号との合流を第一に考えていたため、多くの技術者を必要とする今は非常に辛い状況である。さらに各班自分の艦をがら空きにするわけにもいかず、留守番のため班員の一部はこの基地へは来ていない。

戦力が分散されるのは非常に痛いものの、各国それぞれ己の利益が一番なため、あまり強く言うこともできない。

そんなこんなで、少ない人員の中基地の整備を休みなしのハードワークで行っていた。

いつ敵が奪還のため動くのかわからない以上、現状の把握は最優先事項であった。

しかし、懸念していた敵の襲撃は全くなくすでに五日が経とうとしている。

アネックス一号との通信はつながらず、偵察や搜索部隊を時々出しではみるものの、成果は全くなし。

唯一得られた情報は、この付近のテラフォーマーの個体数が少しずつ増加していることだった。

不審であるし嫌な予感がしたが、差し迫った危機というわけでもない。

「ああ、我々にはいくら時間があっても足りない。しかしだ、これは少し……不自然」

剛大も同じ事を考えていたのか、それに答える。

班員たちを休ませる時間ができたのはありがたい。だが、アネツクス一号といまだに連絡がつかない事は不安材料以外の何物でもなかった。

「……では次に、私から。例の特殊個体のテラフォーマーの解析結果が出た」

準備を終え、次の議題。担当であるヨーゼフが前に立ち、資料を広げる。

二人は再び、話を聞く態勢に。

「簡潔に言えば、奴の異常な姿は寄生虫によって引き起こされたものだ」

ロシアの副官、レナートが遭遇した手が三本、足が五本の異形のテラフォーマー。それに関する話のようだ。

まだ一個体しか確認されていないとはいえ、それだけしかない保障はない。警戒は必要だ、ということまでヨーゼフは死骸を回収、この基地の設備を使つて解析を行っていた。

もちろん研究所のような設備はほとんど無かったが、それでもテラフォーマーに関する研究はこの基地でも行われていたようで、ある程度の機器は整っているという状態。これは幸運と言えるだろう。

「寄生虫つてただけであんな姿になるんですかね？」

第一班班長、ダリウスが疑問を口にする。筋力の大幅な強化、部分的硬質化、まるで死にかけのような表情。筋力はタンパク質の摂取という答えて片付くものの、他は少し考えづらい。

「この寄生虫は本来鳥類を終宿主とする種であり、この手足の本数の異常というのは中間宿主である両生類に見られる特徴だ」

「さらにもう一種、ハリガネムシに近いゲノム配列を持つ個体が複数確認できた」

つまり、何が言いたいのか。なんとなく察している者、全く見当がつかない者、反応は二者に分かれていた。

「結論を言えばこの二種の寄生虫は遺伝子改造されている。前者はテラフォーマーを宿主とし、手足の異常を発生させられるように、後者

は宿主の脳に対しての影響力を増すという形で」

遺伝子改造。その言葉が示す意味をわからない人間はいなかった。

このテラフォーマーは、正確にはこのテラフォーマーをこのような状態にした寄生虫は、人の手によって作られたものである、と。

「黒色の硬化、これもまた解析の結果から『ハリガネムシ』のMO手術が施されているという事が判明している」

ハリガネムシ。カマキリの寄生虫として代表的な、誰もが一度は名前を聞いた事があるであろう生物。

その印象の多くは気持ち悪い、でありその生態や特徴に目が向けられる事は少ない。

「硬くてぐねぐね動くんですよね」

そう、ハリガネムシの特徴。それはその名の由来にもなっている全身を覆う強固なクチクラ。

その細い体からは考えられないような頑丈な構造を持ち、甲虫のような同じクチクラの鎧を持つ生物の弱点である関節の継ぎ目も存在しない。さらに、体の最外部を守るクチクラだけでなく内部の筋肉を構成する筋繊維構造も非常に強い、という研究結果が報告されている。

体表を覆うクチクラ故か芋虫やミミズのような柔軟な動きはできず、のたうち回るかのような動きをするが、その欠点もMO手術ベースとしてしまえば一気に解消されるだろう。

「今回見られたケースは部分硬化だけだったが、今後同様のMO手術ベースで筋力の増大などさらに能力を増した個体が現れる可能性も見られる。外見的特徴は配布しておくので確認されたし」

以上で報告を終える、とヨーゼフは言葉を切り、資料を片づけて自分の席に戻った。

「ひとつ、質問があります」

少しためらい気味に手を上げ、ヨーゼフに言葉を投げかけたのは、エリシアだった。

以外な人間の発言に少し驚く他の五人。

「寄生虫、ってテラフォーマーに寄生できるようになっているんです

よね?」

「ああ、今行える簡易な遺伝子解析と状況からの予想ではあるがそのような形質が見られている」

「……じゃあ、この火星に辿り着くまでにはどうやって生きてまま運んできたのですか?」

それは、あまり大切ではないようで、何か重要な意味を持っている、そんな気がする疑問であった。

寄生虫は他の生物の体内を転々として一生を送っている。葉っぱの上にされた糞に混じった卵を芋虫が取り込んでその体内で孵化、それを鳥が食べてその体内で成虫になって産卵、卵は糞に混じって葉に落ちた卵のみが次の世代へと移るチャンスを得る……というように、複数の生物の体内を転々とし、さらにその上で特定条件でのみ成長できる、という複雑な生態を持つ種も多い。

そんな寄生虫の数々を、火星に運んできてテラフォーマーに感染させる、さらにはMO手術のベースとして使用できるほどの数を確保する事が可能なのだろうか?

手術ベースとして使用するだけならば冷凍保存でもしておけばいい。サンプルと遺伝子だけ残っていればいいのだから。だが、テラフォーマーに感染させる分は別だ。卵だけを持って来てもその生体の中でテラフォーマーに感染するまでの中間の宿主まで火星に持ってくるのは現実的ではない。

他の生物を持ち込んでしまえば、何かあってテラフォーマーに奪われた際にベースとして使用される危険もある。

そんな危険を冒してまでこのような事をする必要があるのだろうか?

それによって得られる利益は強化した、しかし制御できるかもわからない異形のテラフォーマー。

戦力といえば戦力だが、それだけだ。それなら、その寄生虫や宿主を持ち込む際のリソースをMO手術被術者に割り振った方がはるかに有用であろう。

この話は、明らかに相手にとって利益が出るものとは思えないの

だ。

「わからない、というのが答えだ」

ヨーゼフは溜息をつき、首を振る。その表情からは、不確定情報があるという苛立ちと、研究者としてすぐに解き明かせないのが残念、という二つの感情が読み取れた。

「そう、ですか……」

わからないと言われた以上、仕方がない。エリシアは手をと頭を下げ、そのまま押し黙った。

「では本日の会議は終了、にしましょうか」

エレオノーラの一言により、今回の集まりは解散。班長達はそれぞれ、配布された資料を持って自らの班員達が待つ班に帰っていく。

ここ数日の情報交換、得られた情報は正直に言っただけ。地球からの救援の目途も立っていないければ、彼らが合流すべきアネックス一号との連絡も取れていない。

「……さて、解析の続きをするか」

一人残ったヨーゼフは立ち上がり、のびをする。エリシアの先ほどの質問。正直に言っただけだった。

何故寄生虫などというものが持ち込まれているのか。この疑問に対する答えは二つ。

そこまでのほどの利益があるか、そこまでしなくても持ち込めるか、だ。

異形のテラフォーマー。それ以外にも何か重大な研究がある。それならば、多少のリスクを覚悟してでも各種宿主とその飼育設備を持ち入ってまでする事は理解できる。

そうでないなら、何か特殊な事情か技術があつて寄生虫を軽く持ち込む事ができるのだろうか。

どちらにせよ、厄介な話だった。

「何かを、見落としているのだ」

独り言をつぶやく。

本来の宿主ではないテラフォーマーに適應している寄生虫。



今回の件はテラフォーマーに適應するように遺伝子改造がなされている、と考えるのが自然だろう。

だが、それが違うとしたら？ テラフォーマーではない、何か他の生物に適應できるように改造された寄生虫が偶然テラフォーマーにも適應していたから使った、などとは考えられないだろうか。

いや、くだらない仮定だ、とヨーゼフは考えを放棄し、部屋を出ようとした。

「博士、もう一度聞きたい事がある」

声をかけられ、足を止めるヨーゼフ。

部屋の出口に、剛大が立っていたのだ。

「機密に抵触しない限りなら構わん」

少し警戒した様子で言葉を返すヨーゼフ。

それに対し剛大は、ヨーゼフを睨み付けるような固い表情でその質問を口にした。

「貴方は食べ物の味がわかってるか？」

「……」

答えは無言だった。それは、質問の意味がわからない、という風ではなくて。

「逆に聞こうか。視界が突然真っ暗になる事はあるか？ 内臓に焼けるような痛みを感じた事は？ 体が突然動かなくなる事は？ 目の前の仲間が仲間と認識できなくなる事はあるか？」

いくつもの言葉を並べ立てるヨーゼフ。

剛大はその質問の意味を解する事ができなかった。

「何を……言っている？」

「わからないか、ならまだ君は大丈夫という事だ」

言い捨て、ヨーゼフは剛大の隣を通り過ぎ階段を下っていく。

「長生きしたければ、『薬』を使わない変態は控える事だ」

剛大に施された術式、MO手術の次世代型。その開発者である博士

はそれだけを言い、剛大の視界から消えていった。

剛大は自分のポケットからケーキを取り出す。

それは、先日ヨーゼフにもおすそ分けしたものと同じで。

ヨーゼフがごく普通に美味しい、と感想を述べたそれで。

静香が砂糖と間違えて塩を投入した、美味しいなどと言えるはずのない代物だった。

### 第30話 鳴動

「警戒を怠るなよ」

基地の夜。もちろん全員就寝、というわけにもいかない。で敵襲に備えるために限られた人員の中で見回りを編成し、巡回していた。

たとえば『裏切り者』が来なかったとしても、テラフォーマーが侵入してくる事は時々ある。

この基地の出入り口にはテラフォーマーが嫌う何らかの成分が散布されていたらしいが、その正体がわからないので追加する、という事も不可能だ。

今後テラフォーマーの侵入はほぼ確実に増加するだろう、という研究者たちの予想に憂鬱な気分になってしまいが、だからといってこの見回りをやめるわけにもいかない。

「わかつてるさ、でもずっとこのままなのか？」

見回りの二人組、もう一人が少し不満を含んだ口調で言い返す。

こんな事がもう五日。広い基地をできる限り隙無く見張るには相應の人員が必要だ。

彼らが毎日のように駆り出されているという事もあり、その疲れとストレスは限界に近くなっていた。

これが地球での警備ならまだしも、ここは容赦無く命を狙ってくる存在がいつ襲ってくるかわからない火星だ。

「おわっ!？」

「ただの石だ、ビビるな」

壁に埋まっていた小石が転げ落ちる音。一人がそれに反応し、そちらを向いて構える。

小石一つ。たったそれだけの事にも、神経をすり減らされてしまう。

「全くお前は、慎重なのは結構だけどな」

自分の相手もだいたい参っている。今日の仕事が終わったら配置換えを要求しよう。

そう考え、見回りの片方は先を歩く。

「班長達も班長達で忙しいみたいだしな、甘い事は言つてられないぞ」  
返事は返つてこない。相方の疲れはよくわかる、少し言い過ぎたか、と少し反省。

「ま、かつたるい仕事だよな、ホント」

相方に肯定を示す見回りだが、やはり返事は返つてこない。  
不審に思い、後ろを振り向く。

そこには、首から血を流して力なく横たわっている相方の姿。

「ッ！ 本部、応答をー」

非常事態に同様しつつも、我を失わず本部への連絡。彼の動きは今の状況として正しいものだ。

だが、その声は最後まで発せられなかった。

大振りのナイフが一本、首を貫く。

何故だ。自分達も訓練された軍人だ。なのに、何故。全く気配が感じ取れなかった。

その思考を最後に、見回りは変態する事もできず崩れ落ちた。

「……」

二人が息絶えたのを確認した後、一つの影がほっと一息つき、その獲物を下した。

その後、顔全体を覆い隠すように被っていたガスマスクのようなものを外して『葉』を懐にしまう。

そこにいたのは、黒髪の少女だった。底の厚い靴で身長をごまかしているが、その本来の体軀は小柄で、自信なさげな表情を浮かべている。

「……しようがないですよね、戦場ですから」

そんな、自分に言い訳するような言葉を一つ吐き、少女は無線機を耳に当てた。

——基地一階

轟音。それ以外に言い表す事のできない音が響き渡り、元は火星の山肌であった硬い基地の壁が粉碎される。

それを聞きつけ、近場で作業していた戦闘員が三人、駆け付けた。三人は『薬』を手にし、素早く変態を済ませて状況を確認しようとする。

壁を粉々に破壊したため立ち込めている砂埃。それが徐々に時間と共に晴れていき、壁を破壊したその存在の姿を確認できるようになる。

それは、一人の男だった。

黒色につやを持った外殻。威圧感を与える巨体とそれに相応しい頑強な筋肉。歴戦の戦士である事を予感させる、顔についた無数の傷。

そして、その頭部から王冠のように生える三本の角。

深夜の来訪者は、極悪な笑みを浮かべ、迎撃に出た三人を見る。

「お邪魔するぜ、せいぜい楽しませてくれよ?」

その男の威圧感にいつでも戦闘できるよう構えながらも一歩、また一歩と下がる三人。救援要求は送った。

だから、少しでも時間を稼げば援軍は訪れるだろう。さらに悪い事に、開いた壁の向こうには、軍団が見える。こちらに向かっているわけではないが、敵が大攻勢を仕掛けてきているのははつきりしていた。

しかし。

肌を感じるこの圧倒される感覚。果たして、自分達は時間稼ぎになるのか?

そんな疑問にふと襲われる。

だが、ここで退くわけにはいかないのだ。

三人は覚悟を決め、一歩前へと踏み出した。

同時刻、基地の地下部でも、また変化が起こっていた。

こちらでも、見回りと通信が突如として途切れたのだ。非常事態と認識し、重要度の低い任務に就いていた戦闘員が向かう事に。

「暗いな……」

「地下、か」

地下への通路を下り、さらに下へと降りていくのは二人の青年。

「穴でも掘ってきやがったのか？」

その片方は日本班所属、『裏マーズランキング』9位の強者、俊輝。もう片方はドイツの副官、見るからに真面目人間のダニエル。

二人とも、即応できる戦闘員としては最強の部類に入る。幹部搭乗員たちは最上階にいたのでいざ敵襲があつてそれを迎撃しようとしても時間がかかってしまう。

それに、各国の上に立つ幹部搭乗員だ、その役割の割り振りにも少し時間がかかるだろう。

ならば、自分達が動いて敵を叩き潰す。それが、今の状況に合った選択肢というものだ。

「それが一つ。もう一つ、明らかな侵入口があるんだ。ちよつとここから侵入は難しいだろうからまだ各国班員には知らされていないけどね」

ダニエルの言葉に疑問符を浮かべる俊輝だったが、敵襲の可能性が上がった、という事は理解できた。

二人は足を早め、地下通路の奥へと急ぐ。

「……生まれ、ダニエル！」

何かに気が付き、ダニエルを押しとどめる俊輝。

その行動の意味がわからなかったダニエルだが、その焦った口調から何かがある、という事はよくわかったため素直に言葉に従い足を止めた。

ダニエルの疑問に答えるように俊輝は通路の中空へと目をやる。

その目線を追ったダニエルは、とある事に気が付いた。

透明な糸が無数に張り巡らされていたのだ。

このまま突っ込めば、硬く鋭い糸なら体を切り裂かれて、そうでないならからめとられて身動きが取れなくなっていただろう。

「この糸……ただのピアノ線とかのトラップか、それとも……」  
変態した俊輝の腕から生えた刃で糸を切りながら少しづつ先へと進んでいく。

「おー、ひっかからなかった？ やるじゃん」

二人の疑問に答えるように、洞窟の壁を声が反響する。

その声が発せられた方向に顔を向ける二人。

そこには、壁にもたれかかってガムを膨らませる金髪の少年の姿。

その体は青みがかかった黒色に染まり、腕にはベース生物のものと思われる黒い湾曲した牙が生えている。

ぱちぱちと手を叩いているが、そこに賞賛の色は薄く、二人を嘲っているような調子だ。

「ん？ どした、そんな怖い顔して？ ああ、俺？ バイロンっていうのよ、シクヨロー」

へらへらとあくまでも軽い調子を崩さない少年、バイロン。

その瞳に宿る暗い光は、二人を測るように動いている。

「念の為に聞いておくが……お前は俺たちの敵か？」

「勿論。それに俺、結構偉いさんだから殺せりやお前ら、きつと褒められると思うぜ」

首に手刀を当て引くジェスチャーをするバイロン。

「まあ、無理だけどなあー！」

そして、その動作を終えるや否や、二人へと飛びかかった。

### 基地地下湖

基地の地下にある地底湖。ここは飲料水を確保する場所であり、地上の水源とも繋がっている場所だ。

基地内部に水の補給地があるというのは籠城戦においては非常に便利な点なのであるが、もう一つの特徴が問題だった。

バシヤ、と水から何かが上がる音を聞き、水汲み係の男はびくつと体を震わせそちらに振り向く。

この場所からテラフォーマーが侵入してきた事はなかった。だったら、何だというのだ。

「ふいー、到着到着」

軽い疲れの溜息と楽しさが入り混じった声。

年若い少女のものだった。

髪は染められた金髪、ストラップのようなものが無数についた薄手の学校の制服に軍服の要素を取り入れた、という以外には表現しがたい衣装を身に纏っている。

「あ、どうもこんにちはー。ねえねえ、この基地の司令室、ここからどうやって行くのか案内してくんない?」

無邪気で明るい雰囲気の今時の女の子。そんな雰囲気。しかし、今の状況でのこれは、明らかに……

「動くなー」

『薬』を構え、油断なく少女の方を向く。だが、その緊迫した雰囲気などどこ吹く風という様子で、少女は男に近づき、艶やかな笑みを浮かべる。

「教えてくれるなら、私がイイコトしてあげるんだけどなー」

何を言っている? 頭がおかしいのか? 男は警戒するものの、一瞬だけ少女の言葉に意識が逸れてしまう。

イイコト。この少女は大人びているし、水に濡れて透けているこの服装は煽情的、と言える。胸の膨らみも結構なものだ。

……今の状況で何を馬鹿な事を、と男は自分を恥じ、再び少女へと目を戻す。

だが、その一瞬の隙が命取りとなった。

「ちゅー」

少女が素早い動作で飛びつき、男の唇を奪う。暗い地下洞窟という背景は無視するとしてここだけ切り取れば、メロドラマ的一幕としても成り立つかもしれない。しかし、その直後。

「ぐああああ!!」



男が苦しみ、がくがくと痙攣する。こんなにも密着している少女に反撃の一つもする事ができない。

ただ、苦痛の叫び声を上げるだけだ。

数秒後、男の全身から力が抜け、倒れ伏す。その倒れた時の音は、まるで水袋を落とした時のようなべちゃ、という鈍いものだった。

「ヤーとと」

少女はポケットから取り出した地図を見て、しばらく考える。

先ほどまで楽しげだった表情は、渋いものへと変わっていった。

「……ま、適当にあるけばつくでしょ」

——司令室

「内部には侵入者、外には軍勢。我々がここに集まっている暇などあるか？」

剛大が、静かながらも苛立ちを隠せない様子で全員に話しかける。

基地の各部で起こっている戦闘。今すぐにでも救援に向かいたい、というのが本音だろう。しかし。

一度話し合わなければならぬ理由があった。

「第四班の宇宙艦の位置を特定した」

ヨーゼフのその言葉。一瞬で幹部搭乗員たちの表情が変化し、それぞれ反応を見せる。

基地内の救援と迎撃を第一に、のエリシアとダリウス、剛大。

即座に兵力を派遣、元凶を叩くべき、のエレオノーラ、ヨーゼフ。

意見は二つに割れている。

こちらの本陣が壊滅してはたとえ相手の本陣を叩けたとしても意味が無い、味方の救援を優先し、第四班への攻撃はその後行うべきである。

『裏切り者』の大部分がこちらに来ているのであれば、あちらの本陣は

班員以上の守りは薄いはず。即座に攻撃をしかけ、制圧すべきである。

多数決で言えば本陣の守りを固めるべき、が選ばれるだろう。しかし、班員全体への命令を行えるのは彼らだ。

エレオノーラとヨーゼフが納得しなければ、彼らの班員は防衛の戦力にできなくなるかもしれない。

そうなれば、たとえ防衛側の意見が通ったとしてもむしろ防衛能力を下げる事になってしまうだろう。

だが、このまま待つについても最大戦力たる幹部搭乗員が動けないのであれば無駄な犠牲を広げる事になりかねない。

ここに來てのまさかの不和。

「……いいでしょう。私が、私達が第四班を叩きましょう」

そう言い放った一人の発言に、他の五人は驚きの様子を見せていた。

それを言ったのは、剛大。防衛派の筆頭だったからだ。

「私ともう一人、ダリウスが班員を率いて第四班への襲撃を行う、と言ったのです」

剛大は冗談を言うような人間ではない。その表情も真剣そのものだ。

「だが、博士。貴方の能力は毒を使わないでも防衛向きだ、そちらに専念してほしい。それと、各班の宇宙艦に待機している人員の参戦を各班に要求したい」

剛大の発言から、幹部搭乗員たちは彼の意図をだいたい察していた。

このまま硬直して幹部搭乗員が動けないよりも、戦力を分けてでも動くべきだ。

防衛派である自分とダリウスがあえて出るのだから、防衛に適したヨーゼフには逆に自分の案である基地防衛を受け持ってもらおう、というわけだ。

その上、第四班襲撃の人員が不足しないように各班の宇宙艦で留守番している戦力も加える、と。

「いいと思います。皆さん、急ぎませう！」

「まあ、僕の能力防衛向けじゃないですしね」

「いいでしょう、賛成するわ」

各班長もそれで納得し、勢いよく立ち上がる。

結局はこの班長も早く動きたかったのだ。

「第一班と第二班は交戦地帯から遠い戦闘員を司令室に！ 各班宇宙艦と通信し出撃するように！ 合流地点は後ほど連絡する！」

「第三、第五、第六班は防衛に専念するのだ！ 通信設備を最大限に利用して戦況確認を怠るな！」

剛大とヨーゼフ、逆襲と防衛の指揮者が動き始める。他の班長もそれぞれの戦線に向かい、司令室から去っていった。

『裏切り者』VS『裏アネックス』。アネックス計画の裏を担う二つの陣営の決戦は、こうして幕を開けたのだった。

「〜♪」

「始まったか」

鼻歌を歌いながら、上機嫌で火星の小山を眺める銀髪の女性。

その横に立つ軍人の青年。

「キイイ」

「アアイ」

「ジョツ」

そして、二人の背後には、全身にびっしりと棘の生えた異形のテラフォーマーが三匹。

女性が銀色の機械的な装飾がなされた杖で火星の地面を叩く。

それに反応して動きを見せる三匹の異形のテラフオーマー。  
女性はそれに満足げに柔らかな笑みを浮かべると、杖で小山を指し  
た。

「さあ、私達も動きましょうか」

### 第31話 地中の決闘

「遅えなあオイ！」

地上では『裏切り者』の大軍勢が押し寄せ、両陣営の幹部を中心とした激しい攻防戦が繰り広げられている。

一方、基地の地下では。

こちらにはあまり人員は割かれていない。だが、その一区画で両陣営の精鋭による戦闘が始まっていた。

黒く、湾曲している腕から生えた鎌のような牙で襲い掛かる金髪の少年。

それを同じく腕から生えている昆虫の顎で受け止める青年。

前者、『裏切り者』幹部の一人、バイロン。

後者、『裏アネックス』9位、俊輝。

お互いがベースとなった生物の牙をぶつけ合い、一身一体の攻防を繰り広げている。

バイロンが俊輝の首めがけて放った一撃を体勢を低くして回避し、反撃を繰り出す。

だが、その攻撃はあつさりとかわされ、さらなる追撃が襲い来る。スピードという点ではバイロンの方が上をいつているようだ。

攻撃、防御、戦闘の全てにおいて先手を取られているという苦しい状態。

だが、俊輝の側にも明らかに優位である要素がある。

「おっと、させねえよ」

姿勢が崩れた俊輝に放たれる牙を、岩の塊のようなものが受け止め、弾き返す。

「サンキューな、ダニエル」

そう、この戦いは二体一なのだ。

もう一人、この戦闘には参加者がいる。

第五班所属、ダニエル。

MO手術ベース、軟体動物型『オオシヤコガイ』。

両者スピードを競い合う攻防において、彼のベースとなっている鈍重なそれは全く役に立たないと言っていていいだろう。だが、それでも足手まといにはならない。

その理由は、バイロンの牙を弾き返す防御力。俊輝が危ない時に割って入って、押し返す。

これによって、この戦闘は均衡を保っている。

「邪魔くせえなあ……」

舌打ちし、バイロンは一步下がる。落ち着きの無い性格なのか戦略なのか、常に動き続けているそのスタイルは俊輝達を翻弄し、狙いを絞らせないでいた。

このまま長引けば、どちらが先に力尽きるのか。

「この動き、パワー、スピード、普通のMO手術ではないな」

ダニエルが俊輝に伝える、バイロンに質問する、その二つの意味を持った言葉を吐く。

「ご名答。お前らのところにいる博士が開発した新型の手術、ってやつだぜ、これが」

一步下がり、自慢するようになると一回転するバイロン。

そして、彼らの技術力の一端、それをうかがわせる内容を呟いた。

「ま、うちの博士のおかげでな、バカみたいに死ぬお前らよりもずっと高い成功率で実現できてるんだけどな」

「Advanced Mosaic Organ Operation。アルファテスト、の意味とAdvancedの最初のAから意味をとってαMO手術、って言うんですよう、きっと」  
「なるほど、勉強になります」

地下の空洞を、男女と三匹の従者が歩いている。

銀髪の女性、アナスタシアが軍服の青年、ヨハンに色々話をしながら、地下道を歩いていた。

その二人を護衛するように取り囲むのは異形のテラフォーマー。どの個体も、手足の本数がおかしくなっている。本来手のある部分か

ら足が生えていたりする個体もある。

その姿は現在裏アネックス計画の本陣となつている岩山に第三班が到着する直前に会敵したテラフォーマーのような何かに近いものだが、今現在ここにいる三匹は決定的に違う特徴を持っていた。

それは、全身から生えている棘。青と灰色の中間色のような不気味なそれは、彼らの異形さを増させている。

「私は偶然成功したんですね、で、色々実験して、成功率を高める事ができたんです」

「……私やバイロン達が今ここに立っていられるのも、博士のおかげ、というわけですね」

ヨハンが尊敬を込めた眼差しで隣を歩くアナスタシアを見つめる。それを恥ずかしそうに両手を振って否定の意を表すアナスタシア。

「いえいえ、成功、といっても完全には成功じゃあないですよ、ただ成功率が上がるだけ、ならどんなによかった事か」

「……」

その言葉に、ヨハンは少しの疑念を覚える。アナスタシアの行動と言葉を照らし合わせれば、見えてくるのは、副作用が存在するという事。

「貴方達のベース生物の事、よく考えてみてください」

次のアナスタシアの言葉に、バイロンは自分と同じく手術を受けた仲間達のベース生物を思い浮かべる。

そして、一つの結論に思い至った。

「……なるほど、選べる生物に縛りがあるのですか」

「ご名答です♪」

先ほどからアナスタシアはやけに上機嫌だ。何かに期待している様子で、会話していなかっただら鼻歌まで歌いだしそうである。

会いたい人がいるのだと本人は言っていた。だが、会ってどうするつもりなのだ？ とヨハンは思う。

所詮、その会いたい人間は敵でしかない。その人がアナスタシアにとって大切な人だったとして、会ったところで殺し合うか、相手に

従って自分達の目的を諦めるか、その二つしかない。だというのに、何故こんな上機嫌なのだろうか？ そんな疑問が浮かんでくる。さらに、それとは違ってもう一つの疑問、先ほどの話題の中にあったもの。

「でも、バイロンは」

「だから、ああなっちゃったんですよ。昔は優しくて賢い子だったのに」

急にアナスタシアの顔から感情が消える。

その声色の無機質さに、ヨハンは自分の背筋が凍るような感覚を覚える。

何か、これ以上踏み込んではいけない気がする。そんな予感がする。

「先ほど、αMO手術はアルファテストの意味も込められている、とも仰いましたよね？ アルファテストとは開発初期の試作段階に行われるテスト、という意味だったと思うのですが、すでに完成している技術であるαMO手術に何故そのような名前が？」

話題を逸らす。そうすれば、死ぬのを待たただけだった自分達を拾い上げ、優しく接してくれた彼女の表情に笑顔が戻ってくれるはず。先ほどのように機嫌よくなってくれるはず。

「そんなの、決まっているじゃあないですか」

だが、ヨハンに向けられたのは、無表情でも、暖かい笑みでもなく。「致命的な欠陥、重大な不具合。それがあったからですよ」

再びバイロンの鎌が鈍く輝き、二方向から襲い掛かって来る。

それを見据え、俊輝は冷静に判断する。

片方を避け、もう片方を片手の顎で弾き、こちらの残った片方の顎でバイロンを狙う。

避けようとしたが避けきれず、頬を薄く切り裂かれるが、その程度のダメージならば何の問題もない。

今の攻防のバイロンの動きは慎重さを欠いていた。きっと、これまでの攻防から1対1での優位を確信し、確実に仕留めにきたのだろ



う。

だが、それが仇となったのだ。大振りな攻撃で隙を見せ、大きく踏み込んでいる為に素早く回避する事もできない。

俊輝の右手のオオキバウスバカミキリの顎が、バイロンの頭に振り下ろされる。

が、その攻撃は空中でピタッと停止した。

「……！」

当然、俊輝が情けをかけたわけではない。

次の瞬間、引き戻されたバイロンの鎌が俊輝の右胸を引き裂く。

カミキリムシは甲虫だ。変態によつて、カブトムシやクワガタムシほどの強度ではないが、全身を強固な甲皮が守っている。その鎧が、いとも簡単に貫かれた。

追撃を防ごうと駆けだすダニエル、だが、何かに足を絡めとられ派手に倒れこむ。

吹き出す血、痛み、それと同時に襲い来る激しい吐き気を必死にこらえる俊輝。

ただの攻撃ではない、何かを擦り込まれた。全身から流れ出る汗が、危険信号を送っている。

気づくべきだったのだ。道中で道に張り巡らせていた糸が何であつたのかを。

ぐらつく視界の先で、バイロンは宙に立っていた。そして、自分達が戦闘していた空間の中空に、そこにある何か放つ無数の反射光が見える。

---

人類に対する兵器のような生物が存在する

彼らの仲間の中でも特に発達した牙は人間の表層で最も硬質な部

位、爪さえも突き破るほどの威力を持ち、その身に蓄えられた猛毒は人間やサル、一部の哺乳類などにしか効果を及ぼさず、彼らが本来天敵とする生物や餌とする生物には何の効果も及ぼさない。

その毒の強さは、わずか10cmほどの彼らが一度に注入する毒で一日足らずで大人が死ぬほどである。

何故このような進化を遂げたのか？ その理由は、未だにはつきりとはしていない。

だが、防御に持ちいられる事の多い彼らの仲間の毒事情から、彼らもまたその毒を防御に用いているという説が有力なのである。

では、彼らを脅かし、かつ彼らの毒が効果をもたらず対象とは？

そんな事は、考えるまでもないだろう。

「わりいな、痛かったか？」

バイロンは空中、正確には自分の張った糸の上で、二人を見下しながら髪をかき上げる。

そこには、無機質な蟲の目が六つ、二人を睥睨していた。

バイロン・エスパダス

国籍：グランメキシコ

17歳 ♂      176cm      79kg

αMO手術 “節足動物型”

— シドニージョウゴグモ —

### 第32話 侵食の地下道

「……嫌だ」

薄暗い空が、俺を追い詰めるようにその色を段々と濃く変えている。

必死に走る俺の背後からは、無数の足音。それが俺を救出しようというわけでない、というのは考えるまでもない。

燃え盛る街と、所々に散らばる、かつて人間だったものの残骸。

地獄、という言葉に相応しい光景の中、俺は一人で無我夢中に安全地帯を求めて走っていた。

だが、その安全地帯は、本当に安全地帯なのだろうか？

足は震えている。足取りもおぼつかない。疲労も限界まできている。

ここで終わりなのだろうか。何もかもが失われてしまうのだろうか。

「う……ああ……」

もうダメだ。一步も動けない。お終いだ。追跡者からすれば、戦場の真っ只中で立ち止まる俺はさぞかし滑稽に見える事だろう。戦うという選択肢すら出てこない。ただその場に立ち止まって、最後の時が来るのを待つ事しかできないんだ。なんて臆病なんだろうか。家族を、友達を、仲間を、全てを奪ったあいつらに追い詰められて、抵抗するという選択肢さえ選べないなんて。

背後からの嘲笑か、怒声か。死への恐怖でじんわりとした麻痺に奪われている聴覚は、それすらも識別できない。

まあ、俺はここで死ぬ、その結果は変わらないのだろう。

諦めなんかつかない、最後まで見苦しく死にたくない、と呟いていた俺は、ふいにその大声が途切れた事に気づいた。

それから数秒か数分か、頭を抱えてうずくまっている俺の頭が、何か柔らかで暖かいものに包まれる。

「大丈夫、大丈夫ですから」

穏やかで優しい声。怖々と目を開けた俺の目に最初に飛び込んで

きたのは、これまで散々見てきた血にまみれた衣服。  
でも、俺はそれに恐怖を感じず、……？

あの日あの時、俺を救ってくれたあの人は、誰だったんだろうか  
……？

「蜘蛛か……畜生」

起き上がった俊輝の体に、容赦なく毒の負荷が押し掛かる。  
すぐに死ぬ、というわけではないだろう。だが、あまり長引くとま  
ずいのは考えずともすぐ理解できる。

「オイオイ、まさかこれで終わるってわけじゃねえだろうなあ」  
宙に張り巡らされた糸を伝い、三次元的な機動で攻撃してくるバイ  
ロン。

毒による吐き気で集中を乱されている状態での複雑化した戦闘。  
全て、相手に踊らされていたのだろうか。

このままでは、勝てない。

俊輝は何とかその状態でも戦闘を続けるが、圧倒的に不利な状況を  
作られてしまった、それは覆しようのない事実だ。

狭い地下道、そこに張り巡らされた糸。蜘蛛にとってはこれ以上な  
いフィールドであり、そこに迷い込んだ虫は餌でしかない。それはわ  
かっている。だが、ここで諦めるわけにはいかない、というのもまた  
事実。

「ダニエル！ 大丈夫か!？」

ひとまずは態勢を立て直したい。だが、俊輝の目の前に現在の状況  
がはつきりと映る。

一度認識してしまえば驚くほどよく見えるようになった、所どころ  
に巡らされている糸。

それは巧妙に、二人の合流を防ぐように配置されていた。

そこまで密度はあるわけではない。除去に集中すれば、すぐにでも抜け穴を作れるだろう。しかし、戦況はそれを許そうとしない。

パワーはあるもののスピードが遅いので正面からバイロンと戦っても話にならないが、その盾で押されている戦況を押し戻し、一旦リセットするダニエル。

バイロンとある程度殴り合えるが、それでもスピードでは劣る上に防御力に難があり、いざ押され始めるとそのまま総崩れで終わり、という流れになってしまふ俊輝。

協力して初めて互角以上の戦いができるというのに、分断されてしまったというこの状況。

糸を切り、合流する。……ダメだ、そんな余裕をこの相手が与えてくれるとは思えない。

このまま一人で戦い続ける。……これもダメだ、これまでの戦闘からして正面から戦って勝てる相手ではないと分かり切っている。その上、先ほどの打ち込まれた毒による体への負荷による弱体化。先ほどよりもさらに不利な状況だ。

「おうおう、もつと踏ん張れよオ！」

笑い声と共に再び襲い来るバイロン。

俊輝は何かおかしいな感覚を覚える。

相手は高速で移動し、糸を使った移動による死角からの襲撃も仕掛けてくる。だが、相手は常にハイテンションな態度で騒ぎ立てながら戦闘を行っている。正面からの殴り合いであれば、士気を上げ、己を奮い立たせるという目的で掛け声などは意味があるといえる。

だが、相手に気づかれぬ位置から攻撃を仕掛けるのであれば、無駄な声で場所を知らせるといふ行為はマイナス以外の何物でもない。

ならば相手は素人なのか？ と問われれば、その答えはNO、である。これまでの攻防の動きと糸による戦術的なトラップ、それは明らかに実戦慣れした戦士のそれである。

この矛盾は何なのか？

答えを出す暇無く、猛毒を備えた一対の黒い鎌が左右から俊輝に襲い掛かる。右側から襲い来るそれを右手の刃で逸らし、左側は姿勢を低くして回避を試みる。

「……………」

結論から言えば回避には成功した。だが、それは完璧なものではなかった。

肩に掠ったその攻撃は、少し触れただけなのに肩を守る甲皮を引きちぎったのだ。

シドニージョウゴグモ。俗にタランチュラと呼ばれるオオツチグモ科に迫る巨軀に加え哺乳類に特異的に作用する強毒を持つ危険生物だ。

だが、その二つにならぶ特徴がもう一つ。それは、噛力の強さである。

大型の蜘蛛の中でも指折りの強さを持つそれは、捕食の際に硬い殻を持つ生物をもともしない。

(これは……キッツいな……)

即座に反撃するが、バイロンはそれを余裕のある動きで回避。次いで相手の攻撃に備えなければならぬため、あまりこちらの攻撃に集中する事はできない。一方、向こうはスピードで優位という攻めにも守りにも常に先手が取れるという圧倒的優位。相手の攻撃を紙一重で回避し、当たりもしない反撃を繰り出す。そんな不毛な攻防戦に、苦笑いすら漏れてくる。

ようやく、比較的隙の大きい動きをバイロンは行つたというのに、俊輝が反撃しようとしたその瞬間、目の前から姿を消す。相手の反撃で傷を負いかねない状態ではそれ以上続けず、即座に離脱。常に自分が優位なペースを崩さない。

やはり、明らかに戦闘慣れしている動き。

「どこ探してんだ？ こっちだ」

直後、俊輝の頭上から、声がかけられる。

だが、俊輝はそちらを見る事すらしらない。

「……ああ、だろうな」

天井に巡らせた糸でぶら下がり、俊輝に向かって鎌を構えていたバイロンはその発言に怪訝そうな表情を見せる。

コイツは、この追い詰められた状況で何を言っている？

怒りが頭を支配し、目の前のザコを叩き潰そうと思惑の全てが訴えかけてくる。

勿論、バイロンはそれに従い、鎌を振り下ろすが。

「おぐあッ!?!」

そのバイロンの体は、大質量の激突によつて吹き飛ばされ、糸の巡っている壁に叩きつけられた。

「待たせて悪かったな」

「気にすんな」

バイロンに激突したそれは起き上がり、バイロンの方を向いたまま俊輝に一言声をかける。

殻の先端の尖った部分で最低限の糸を切り、隙間をくぐってきたダニエルだ。

「テ……メエ……ら……」

バイロンの顔がさらなる怒りに歪み、むき出しになった殺意が二人に襲い掛かる。

だが、それに威圧される二人ではなかった。

やはりだ。ワナを張った時点で、それは最低限の時間分断できるだけのもの、という事はバイロンもわかっていたはず。だというのに、俊輝との戦闘にのみ没頭し、ダニエルの存在を見逃した。普通ではありえない事だ。

ダニエルが貝類ベース、という事で糸を切る事ができない、と思っていた？ いや、それもありえない。

鈍足なダニエルの奇襲をそのまま受けた、それはダニエルが糸を切り始め、それを終えてバイロンに突撃するまで全くダニエルに目を向けていなかったという事だ。戦闘慣れした人間が、決めつけで分断しておいた相手の動きを一度も見ない、なんという事があるだろうか。

だが、糸によるトラップそのものが有効だった事もまた事実。そこ



では冷静な判断ができていたというのに。

戦術的で合理的な思考が、闘争的で直線的な思考に上書きされている、そんな雰囲気。

「もう許さねえぞ、お遊びは終わりだ、終わりにしてやる……」

バイロンがよろよろと起き上がり、己の懐に手を伸ばす。何を取り出し、何をしようとしているか容易に予想できた二人が、それを黙って見ているわけもない。

俊輝の腕の大顎が振るわれ、バイロンが取り出し手に持ったそれを、大量の節足動物型用の『薬』を、肘から切り落として阻止する。

「もう終わりだ、悪いようにはしない、利用価値もある。降伏しろ」

反撃に備えていたダニエルが、片腕を失ってなお殺意に満ちているバイロンに語り掛ける。

「……無様な姿だな、バイロン」

唐突に、地下道にこれまでになかった声が響く。

バイロンはそれを聞いてちらりと目を向け、二人は短時間の戦闘といえどギリギリの勝利で疲弊していたため新手の登場に驚愕と少しの絶望を感じ、声のする方向に顔を向けた。

そこに立っていたのは、二人の人間だった。

片方は、軍服を纏った青年だ。すでに変態しているのか、額の触覚と両腕から生えた針、全身を包む青黒く、甲虫ではない薄い甲皮。

もう片方は、小柄な女性だ。青年の奥にいる上地下道の薄暗がりであまりよく見えないが、長く伸ばした銀髪に、白衣を纏い、機械的な装飾のされた杖をついている。全体的に少し薄幸そうな雰囲気、静かな表情で俊輝を見ていた。

そして、俊輝とダニエルをさらに絶望に追い込んだのが、新手の二人の後ろからぬっと姿を現した三匹のテラフォーマー。これがただのテラフォーマーならまだいい。だが、それは手が、足が、あらゆる場所に、あらゆる本数付いた異形の生命体だったのだ。さらに、その全身を灰と青の混じった針が覆っている。

「ああ！ 大丈夫ですかバイロン！ こんな姿になってかわいそうに……」

緊迫した空気の中、次に口を開いたのは銀髪の女性だった。片腕を失い、壁に叩きつけられた衝撃でボロボロになったバイロンを見て悲痛な声をあげ、ぽろぽろと涙を零す。

「つたく、遅えんだよ、アナスタシア、ヨハン」

その姿を見て、バイロンは毒を吐く。これが相手の援軍である事はもう明らか。その光景に俊輝たちは次の一手を考える。

「調子に乗りすぎるのがお前の悪い所だ、早くこちらへ……」

軍服の青年、ヨハンがバイロンへ声をかける。今の俊輝達にこの援軍を止める力は無い。早く、本部に知らせなければ。

「ああ、なんてかわいそうなバイロン……だから」

涙を流し続ける銀髪の女性、アナスタシアの目に少し色の違う光が宿る。俊輝たちは、本能的に危険な雰囲気を感じ取った。何かが起こる。それも、おぞましい何か。

青年、ヨハンも何かを感じ取ったらしく、ぴたりとバイロンの方へと歩きだそうとした足を止めた。

アナスタシアは杖を少し持ち上げ、それで地面を突く。カン、と地下道に響く音。

そして。

「だから……今楽にしてあげます」

続く言葉を言い放った。

「あ……？ ア、ア、ア、ア、ア、ア！！」

突如、バイロンが倒れこみ、悲鳴を上げて苦しみだした。凄まじい痛みが全身を襲っている、そのような動きだ。もがき苦しみ、頭を押さえて倒れこんだまま芋虫のようにはい回る。

それを見たヨハンの顔が驚愕と恐怖に歪む。俊輝はその光景が信

じられず、硬直。ダニエルはそれを睨み付け、油断なく見つめる。

「クソがああ!! アナスタシア、テメエ、ウゝアゝアゝアゝ」

何かを言おうとするバイロン、だがその言葉は途中で襲い来た痛みで意味の無い悲鳴へと変わってしまった。

その殺意に満ちた眼光はただ一つ、これまでの標的であった俊輝ではなくアナスタシアに向けられ、他には全く構っていない様子だ。

「痛い、ああ、痛い痛い痛い、やめろ……やめ……」

徐々にその動きは弱まり、全身から力が急速に失われていく。それは、周囲の目から見ても明らかであった。

ふと、バイロンの動きが止まる、その目からは殺意、敵意が抜け落ち、ただ驚きと悲しみが入り混じった、憑き物が落ちた表情があった。そして、かすれた声で、迷子になった子どものような不安そうな目で、弱弱しく、救いを求めるような様子で呟く。

「せん……せい……なん……で……?」

それを最後に、目からは光が消え、その体はもう動く事はなかった。

「……さあ、行きますよ、ヨハン。ここは恭華ちゃん達に任せておきましょう」

俊輝たちに背を向け、アナスタシアは地下道の奥へと歩いていく。ヨハンは複雑な表情を浮かべながらも頷き、異形のテラフォーマー達と一緒にそれに行く。

一人の亡骸が残された地下道は、不気味なほどに静まり返っていた。

### 第33話 魔物と魔物

地下の戦闘から数分。裏切者の幹部、アナスタシアとヨハンは堂々と地下の穴へと去っていったが、俊輝とダニエルは傷を負ってこれ以上の追撃は不可能、といった状況だった。

相手は恐らくバイロンと同じくαMO手術を受けているであろう二人に加え、どこか様子がおかしい、何故か二人に付き従っている異形のテラフオーマーが三匹。一方のこちらは傷を負った二人。片方は毒を受けてすぐにも治療しないと危ないという状態だ。

この戦闘による両勢力の優勢劣勢は傾いたとも傾いていないともいえなかった。『裏切者』の主戦力である一人を倒す事ができた、それに加えほんの少しとはいえ他の主戦力の能力の情報が手に入った、それだけ見れば大きな成果とは言えるだろう。しかし、相手の戦力はまだまだ強大で、数の差による劣勢は覆しようがない状態。そこで、此方側の主戦力である『裏マーズランキング』でも比較的上位に当たる二人が負傷し、一時的に戦線離脱を余儀なくされてしまった。

地下通路には戦闘員はいるもの、そのままでランキングは高くない。本陣を守っている幹部搭乗員は全員、地上から、空から押し寄せる軍勢を相手に戦っている状態だ。地下は本来敵の侵入を想定しておらず、防御はそれでも地下を通った奇襲があった際のための最低限の戦力しか置かれていない。

早く、この事を本部に知らせなくては。侵入口が開かれ、いつ地下からも敵がなだれ込んでくるかわからないという事を。

二人はふらふらとした足取りで上層へとつながる階段を昇っている。

あの地下道からはまだ敵は出てきてはいない。あそこに残されているのはバイロンの死体だけだ。

放置されたバイロンの死体は調べれば何かがわかるかもしれないが、今のこの状態でそんな事をしている余裕は無く、あの場所に置いていく事となった。

「ひでえ事しやがる」

「まったくだな」

敵の幹部、アナスタシアと呼ばれていた女性がバイロンを始末したのだろうか。あの場の状況からしてそれには間違いなかったのだろうが、色々と疑問が残る。

一体バイロンは何をされたのか。触れられていたわけではない。何らかの飛び道具を使ったのだろうか。だとすれば、あの杖をついた動作と自分たち二人に攻撃しなかった事の原因がつかない。

脅威である事には変わりないものの、不確定情報が多すぎる。

「上は大丈夫なのか？」

いくら幹部搭乗員とはいえ、一人で数十人を相手にして持ちこたえる事は可能なのだろうか？ 俊輝はそんな事を考える。自分たち日本班の班長は1対1のタイマンを考えれば裏アネックスでも最強クラスの戦闘能力を有している。現在は出撃の準備が整うまでは裏切り者を迎撃している。だが、1対多数となればどうだろうか？

「ダニエルの方の班長って強いのか？」

「二位だからな、そりゃ強いさ。それに能力も広域制圧に向いている」「そうか……」

当たり前の事を聞いてしまった、と一つため息をつく俊輝。見るからに性格悪そうなダニエルの班の幹部搭乗員、『裏マーズランキング』2位の男、ヨーゼフ。普通に考えれば、自分の班長よりも評価された点があるからこそランキングが上なのだろう、と。どのような能力かは知らないが、ダニエルの言葉通りなら今のこの状況に適したものだだろう。

さらに他の幹部搭乗。ロシアの小さな女の子と、ローマ連邦のお婆さん。一見して、どちらも戦闘に向いている人種とは思えない。ランキング最上位の幹部搭乗員である以上、それが杞憂であるとは思うのだが……。

だが、本当に数人の大きな戦力だけでこの数の敵を抑えきれられるのか？

同じ疑問を繰り返し、今後の戦いに一抹の不安を覚えながら、毒の影響で少し歪む視界の中、二人は応急治療所への道を急いでいた。

「ああ、つまんねえな、ザコしかいねえ」

一方こちらは基地に開けられた大穴付近。そこに立つ、一人の男。全身を覆う黒光りする甲皮に、王冠のように頭から生えた三本の雄々しく、鈍いツヤを持つ三本の角。相対するは、すでに変態が解けてしまい、足を震わせながらも男を見返す青年。

巨軀の男と、一人の班員が対峙していた。その周囲には、数人の死体。ここで戦闘が行われ、そして決着が付こうとしている事は想像に容易かった。

「へ、へへ……てめえみたいのまでいるとはな」

追い詰められ、壁を背にする青年。名は翔<sup>しょう</sup>。第一班と第四班の戦闘の際、俊輝たちの脱出を手助けした一応の戦闘員だ。だが、そのベースである『ハダカデバネズミ』は戦闘向きとは程遠い。このような無謀な戦闘になってしまった理由は、彼が各戦線の連絡役を務めていた際に運悪くこの戦闘に遭遇してしまったからだ。逃げる間もなく実際に戦っていた戦闘員は壊滅し、敵の矛先は彼に。

「おつ、俺って有名人？」

それに反応し、『裏切者』の男が興味ありげに翔に聞き返す。

「そりゃ知ってるさ、30人近く殺して死刑執行されたはずの連続殺人鬼、ジェネジオさんよお……」

弱弱しい声でそれに答える翔に満足げに頷き、鋭い眼つきのまま笑みを浮かべる男、ジェネジオ。

翔の言葉通り、ローマ連邦での白昼堂々の連続殺人事件、その犯人の男である。

「ハッ、俺が生きてるのがおかしいってか。でもよ、それ言ったらお前らの側のボスも人の事言えねえだろうが、知ってんだぜ、俺らと五十歩百歩なクス野郎がいる事くらいよお！」

馬鹿にした様子で語るジェネジオの言葉に、翔は少し疑問を覚えた。しかしすぐにその意味に気づく。なるほど、各班の班長の中にはそのような立場の人間もいるのか、と。確かに、死刑囚なら成功確率の限りなく低いαMO手術の素材にするにはちようどいいのかもし

れない。もしかしたら、自分の班の班長も……。

そんな考えが一瞬頭を駆け巡り、翔の目に影がかかる。……だが。

背中が壁。目の前には強敵。もう後はない。自分は間違いなく殺される。戦闘員でも歯が立たない相手だ。戦闘員に数えられるか数えられないか、という程度の、しかも変態も解けている自分では瞬殺されるだろう。でも、それでも譲れない事がある。

「かもな……でもよ、お前らと違って人類の未来のために動いてんだぜ、その人たちはよ！」

殺される前に一言だけ。たとえば、もし自分の班長が、他の班の班長が、過去に取り返しのつかない罪を犯していたとしても。それを自分達に隠していたとしても。

窮地に陥っている世界を救うため、手を合わせている事は変わらぬ事実。

世間からすれば裏切者と幹部搭乗員、その立場は同じような存在なのかもしれない。でも、彼らは自分たちを導いてくれているのだ。それだけは、たとえ死ぬとしても譲れなかった。

「あつそ。じゃあ死ぬね」

あつさりと、ただ一言言い放ち、ジェネジオは手刀を振り下ろす。

言いたい事は言った、と翔はそれを受け入れ、目を閉じる。

次の瞬間、天井が崩落した。轟音と共に岩が降り注ぎ、大きな振動と土煙が辺りを包み込む。

それに素早く反応したジェネジオが回避を優先した事によって助かった翔だったが、状況を飲み込めず動く事ができない。

その目に映っていたのは、自分に背を向け土煙の向こうを睨むジェネジオと、その土煙の向こうにうつすらと見える影。ひとまずは生きている、その実感が湧いてきてじんわりと広がってくる安心感。だが、その土煙の向こうにいるのが何者なのか、検討もつかない。上層で爆発でも起きたのだとしたら、こちらが追い詰められている証左でもあるのかもしれない。

だが、何はともあれジェネジオは今翔の方を見ていない。土煙が何

であろうと逃げるべきだ。判断し、翔は駆け出す。それを無視して、いや、無視せざるを得ないジエネジオ。その目は、全ての神経は、煙の向こうの存在に向けられていた。

「近道しようと思ったのだけど、ちよつと強引すぎたかしらねえ」  
「テメエは……」

土煙が晴れ、その姿が明らかとなる。

そこに立っていたのは、一人の老婆。ジエネジオを上回る長身とその周囲に展開した四本の触手が、凄まじい悪意を放っていた。第六班班長、エレオノーラ・スノーレソン。『裏アネックス』と『裏切者』。両陣営の最高戦力同士の相対。

ジエネジオはその姿を見て、一瞬身を震わせる。

「おうおう、誰かと思えばローマのー」

威嚇をしながらの会話。それは、一言目から成立する事なく終わった。

甲皮の隙間の一つである首の部分を狙って高速で繰り出される貫手。それを既のところまで回避し、反撃に転じる。地を蹴り、ほんの一步でエレオノーラの懐へと潜り込み、その腹へと拳を叩き込む。しかし、その攻撃は身を振ったエレオノーラによって回避された。

「遅えー」

しかし、ジエネジオはそれで攻勢を終えたわけではなかった。エレオノーラの回避方向を読み、そちらへと左腕を置くように繰り出す。

「……へえ」

ジエネジオの予想通りに動いたエレオノーラの脇腹にジエネジオの左腕が、その振り回した力に加えてその腕から生えている棘が突き刺さる。本人の剛力に加えて、ベースとなっている生物の力も加算された一撃で吹き飛ばされるエレオノーラ。

動物における『ライオン』。海洋生物における『鯨』や『鯨』。各界で最強と言われて頭に浮かぶ生物だろう。

では、昆虫における最強とは？



多くの人は『カブトムシ』を思い浮かべるのではないだろうか。雄々しき角、頑強な甲皮と筋肉、それに裏打ちされたパワー。いずれも、昆虫の王と呼ぶに相応しい。

……では、そのカブトムシの中で最も強い種とは何なのか。この生物は、その一つとして堂々と名乗りを挙げている。機敏な動作と怪力による純粋な戦闘能力。闘争を好み、さらには死した相手を捕食するわけでもないのに解体する際立った獯猛性。発達した三本の角による一本角の種に比べた戦術の幅広さ。その全てが、この種を最強の名に相応しいものとしている。

ジエネジオ・バルバドス

国籍：イタリア／インドネシア

31歳 ♂ 194cm 112kg

αMO手術『昆虫型』

コーカサスオオカブト

壁に叩き付けられる間際、触手でそれを回避したエレオノーラにさらなる追撃を加えるジエネジオ。だが、二本の触手がジエネジオの攻撃を受け止める。

引き戻される触手を掴み、ジエネジオはそれを力任せに引きちぎろうとする。だが。

直後、ジエネジオの顔にエレオノーラの壁への激突を阻止した三本目、四本目の触手が襲い掛かった。

蝟の筋力から繰り出される目への突き。本来の触手の用途ではないが、直撃すれば死もあり得る威力の一撃だ。

しかし、顔を狙った攻撃はその面積の狭さ故回避が容易である。頭を下げ、軽い動作でそれをいなしてジエネジオは前進する。触手は四本ともエレオノーラの体を離れ、すぐには引き戻せない状態。

今なら、本体に一撃を加える事ができる。

「……フツ」

だが、ジエネジオはエレオノーラが薄い笑みを浮かべたのを見逃さなかった。何かある。直感でそれを読み取り、身を翻す。そこでジエネジオが見たのは、方向転換して襲い掛かってくる四本の触手。このままいけばエレオノーラに一撃を加える事はできただろうが、その後触手によって拘束され、勝負は決していただろう。『コーカサスオオカブト』の力ならそれを解く事も可能かもしれないが、相手がさらに『薬』を使い、過剰摂取状態になろうものならそれを振りほどく事はできないだろう。対抗しようにも、拘束された状態では『薬』を使う事はできない。詰み、である。

ならば、こちらの選択肢だ。襲い来る四本の触手のうち二本を両手でいなし、もう二本を回避する。

……そこでジエネジオの背中に重い衝撃が走った。四本の触手の相手をする、それは、エレオノーラ本体に背を向ける事と同義だ。

ジエネジオの背に、エレオノーラの右腕が突き刺さっていた。そこは、二枚の羽を守る甲皮と胸部の甲皮、その境目だった。構造的に最も脆い区画、そこを正確に貫いていたのだ。

血を吐くジエネジオ。しかし、その顔には笑みが浮かんでいる。

「……一つアドバイスしてやる、バアさん」

背後からの呼吸でエレオノーラが手を引き戻そうとする気配が感じられるが、遅い。

ジエネジオは両羽の甲皮を開く。それと同時に、胸部の甲皮が少し浮かび上がるかのように開かれる。ジエネジオの体に向けて加えられていた力のまま、エレオノーラの手と腕はその空いた隙間に入り込む。そして開いた羽と胸部の甲皮、それを一瞬は閉じられた。

胸部の甲皮と両羽の甲皮、MO手術被術者戦ならばそれだけで武器にできるほどに鋭利に発達しているそれらに挟み込まれたら、どうなるか？

答えは単純、ボトリという音と共に地面に落ちる肉の音だった。

「切り札ってのは最後まで取っておくもんだ」

### 第34話 悪魔のはらわた

——ローマ連邦 大統領府

「よし、お前の質問に答えてやろうか。まず人間が努力をする一番の原動力、って何だと思う？」

世界に冠たる大国、ローマ連邦。その大統領である立場にしてはまだ年若い男、ルーク・スノーレソンは客人の青年にそんな話をしていた。

「……わかりませんね」

青年は少し悩んだ後、ぎこちない様子で答えを返した。ルークはその答えに少し得意げな様子。

そもそも一国の大統領が何故このようなどう見ても平民、という名の青年と話しているのか。

それは、この青年がルークを脅していると同時にルークの庇護を受けている、という複雑な関係にあつたからである。少し複雑な関係の客人なのだ。

「アイツには負けたくない、って対抗心。アイツに仕返してやる、って復讐心。全てをあの人を為に、って忠誠心。努力するのにやまあ色々理由があるだろうよ」

ルークは昼食のピザを切り分け、青年に手渡す。ぎこちない動きで受け取る青年。緊張しているようだ。

「確かにそれでも正解だ。でもな、それは一部の強い人間の話さ。」

一部を除いた殆どの人間が努力する、いや、せざるを得なくなるものがある」

青年は話を黙って聞いている。

『恐怖』だ」

顔を上げた青年が何かを言おうとするが、ルークはテーブルの真ん中に置かれた追加の切り分けられたピザを青年の口に押し込んで黙らせた。

「その中でも一番の恐怖、ってのがもちろんアレだ、『死への恐怖』ってやつだ」

少し不満げな青年だが、ピザを咀嚼しながら黙って話を聞いている。

「ああ、お前は自分が死んでも大事な人を守りたい、って感じのヤツだったな。けどな、お前みたいな奴は珍しいタイプだぜ」

「本題に戻ろうか。例えば……百人学生を集めてな、一週間後にするテストの点数で最上位一人以外はギロチン、って感じにしようか」  
「ひでえ例えですね」

水を飲みながら相槌を打つ青年。

「黙って聞きな。それ聞いたら、全員死にももの狂いで努力すんだろ？」  
「そりやそうでしょう」

「で、百回それを繰り返してさ、生き残った百回分のそれぞれの最優秀者、合計百人を集めるんだ」

「言いたい事はわかったんでもういいです」

青年は顔をしかめ、ルークの言葉を遮る。たとえ話とはいえ、何とも酷い話である。

「これを繰り返していったら、最後にはすげえ奴が残るんじゃないやねえか？」

ルークの言葉に、青年はどうにも腑に落ちない点があった。これがただの例え話だからだろうか。

「そうかもしれないけど……その人、もう恐怖で精神ボロボロか頭おかしくなっちゃってるんじゃないですかね」

「実際とは色々違うけどな、まあ大まかに言えばそれが質問への答えだ」

青年はルークの言葉に納得した様子で頷いた。ルークが語った一連の流れ。ここから何が読み取れたのか、青年はなるほど……という表情を浮かべている。

「チツ、もうこんな時間か……わりい、俺は仕事に行くんで適当に帰ってくれ。詳しい話はまた今度してやるよ」

「あの、ルーク大統領」

腕時計を確認し、舌打ちするルーク。青年はそんな不機嫌そうな

ルークに対し少し慌てた様子で疑問を投げかけるかのようには話しかける。

「あいつへのお土産にしたいんでピザ持って帰っていいですか」

「……勝手にしてくれ」

「あらあ」

切断され、地面に落ちる右腕。それを見て、少しだけ声色を変えるエレオノーラ。そこに混じっていたのは、ほんの少しの怒り。

タネはわかったと言わんばかりに、次いで左腕がジエネジオの背中に叩きこまれる。

しかし、その打撃の先は脆い甲皮の隙間ではなく、硬い部分の甲皮そのままの部分。隙間を攻撃すれば、右腕の二の舞だ。

「……効かねえなあ！」

が、当然硬い甲皮に攻撃しても有効なダメージは与えられない。触手を捌ききったジエネジオが再び身を翻し、素早くエレオノーラの腹にカウンターの一撃を加える。

伸ばされた腕の場所から推測した腹の位置への攻撃。目視での確認よりも素早く攻撃を加える事ができる。

エレオノーラも反撃は読めていたのか、回避動作をとろうとする。だが、それより早くジエネジオの拳が腹に加えられた。

姿勢が少し崩れたエレオノーラにジエネジオはさらなる攻撃を加えようとするが、流石にそこまでは許されず、戻ってきた触手が腕を受け止め、衝撃を和らげる。そのままその触手は螺旋状にジエノジオの腕に絡みつこうとするものの、その吸盤が吸着する前の一瞬の時間で腕を引き、回避。

エレオノーラはそれに楽しそうな表情を見せ、上に跳ぶ。ジエネジオはエレオノーラの姿を追って天井を見上げた。そこに飛び込んできたのは、視界全体を覆い尽くすような黒。

それが何かわからないまま、思わずジエネジオは左腕で顔をガードする。

腕に襲い来るのは、べったりとした液体の感触。それが何なのか把

握する暇を与えず、腹の柔らかい部位に触手の一撃が突き刺さる。

だが、これも大したダメージではない。触手の突きはその筋力から繰り出される重量と速度がダメージの大きな要素となっている。触手そのものは筋肉の塊であるものどちらかというところだ。

なので、容易に貫かれ、最悪の場合脳まで達する目とは違い、腹への攻撃は最低限の硬さがあつて貫かれでもしなければそこまでの脅威ではない。

もちろん、それがわからないエレオノーラではないだろう。ならばこの攻撃は。

「オラァー！」

ジェネジオはでたらめな方向に腕を振るいながら後ろに跳ぶ。

先ほどの黒い液体は、墨。視線を誘導してから目潰しをするつもりだったのだろう。あれを防御できたのは偶然の要素が大きいが、強者と強者の戦いでは少しの運の要素が勝敗に関わってくるなどよくある事だ。

墨による目潰しと腹への陽動攻撃。ならば、本命は？

振るった左腕に触手が接触し、弾き飛ばされる。ジェネジオの側から触りに来るのは予想外だったのか、触手は吹き飛ばされるままで追撃の反応を示さなかった。一つ目の攻勢は防いだ。次は。

右方からもう一本の触手が襲い来るが、こちらはジェネジオの目の前を通過した。触手で距離をとってその隙に失った左腕を再生させるつもりか。……いや。

前を横切った触手の動きは巧みに偽装されているが不自然。わざと当てなかつたようにも思える。そして、ジェネジオの現在の視界は横切った触手が大半を占めている。

「そういう事かよ……！」

相手の意図を察し、ジェネジオは反撃のために残しておいた右腕を迷わず腹に回す。

その動作が終わるか終わらないか、という刹那の瞬間、鋭い殺意と共に繰り出された拳が腕に直撃し、その甲皮にヒビを入れた。

「おお、速い速い！」

どこか嬉しそうな声に呼応するように触手がジエネジオの視界を妨害するように動き、その死角から触手が、それ以上の破壊力を持った左腕が振るわれる。

再生を行うよりもこちらを仕留める事を優先した動き。ジエネジオはその悪意と執念にうすら寒いものを覚える。危険だ。目の前の敵を叩き潰す事しか考えていない。しかも、ただ無謀な突撃というわけではなく戦術を凝らしたやり方で。

……だが、この戦局は。

「ウラァー！」

掛け声と共にジエネジオは視界を塞ぐ触手をわしづかみにする。そして、最低限の動きでその触手を持ち上げ、下を潜った。それだけではない。ジエネジオは再び羽を開く。そして、潜った触手をそれで切り裂く。

これで、一本目。

残る触手が迎撃のために動くが、それより一瞬早く、ジエネジオは触手の包囲を抜け、エレオノーラの本体に肉薄する。右腕と切り落とした一本の触手はまだ再生していない。思った通りだ、相手は己の身の再生より攻勢を優先させていた。

相手は片腕。触手は自分の技能であれば十分に対処できる。本体と直接組み合う態勢になれば。

純粋なパワーではジエネジオはエレオノーラを上回る。それに加えて、腕一本のハンデ。

敵は、己の優位を見誤った。ジエネジオは確信する。相手の優位は、触手による中距離戦闘と再生能力による継戦能力、さらにはそこまでの強さではないが毒の蒸気。全体的にじわじわとゆっくり攻めていく戦術をとるべきだった。

だが、相手は明らかにこちらを積極的に仕留めようとしている。

「……どうしたバアさん、アンタも弱くなったもんだなあ！」

ジエネジオは噂だけであるがエレオノーラを知っていた。その内容は、身の毛もよだつ真つ黒な英雄譚。

人ならざる存在ではないか、という馬鹿みたいな内容が真に迫って

囁かれるほどの恐ろしい怪物。

しかし、実際はどうだ。自分が強くなりすぎたのか。

神話の実態を知ってしまった少しの失望と、自分がそれを越す事が出来ているという興奮。

さらに士気を上げたジエネジオは、一気にエレオノーラに攻勢をかける。

背後から襲い来る触手を力任せに地面に叩きつけ、落盤によって発生した鋭い杭状の岩の欠片で突き刺し、地面に固定する。

正面からの殴り合いはジエネジオの完全なる優位。ならば、一本一本触手を無力化していけばいい。

残る触手は二本。その内の一本、頭を狙ったそれを回避し、頭上を通りすぎたそれを頭から生えた三本の角で挟み込み、そのままサバ折りの要領で真つ二つにする。

正面からの打ち合いではエレオノーラに攻撃を当てる事は出来ない。だが、触手を処理しながらの打ち合いなのだ、それは仕方ない事だろう。

最後の一本の触手が、ジエネジオの強靱な、棘付きの足による踵落としによって力任せに引きちぎられる。

一本の固定と三本の切断。触手は完全に無力化した。さあ、いよいよこの戦いも終わりだ。

小細工無しの真つ向勝負。もう邪魔する触手は無い。

ジエネジオは渾身の力を込め、エレオノーラに一撃を加えようとする。

「……？」

が、その拳を繰り出そうとした瞬間、エレオノーラは口を開けた。命乞いでもしたのか、それとも、墨か。

いつでも墨に対応できるよう、ジエネジオは一旦構えを解く。

「……」

しかし、エレオノーラは墨を吐くわけでもなく、何か言葉を話すわけでもなく、そのまま口を閉じたのだ。

舐めやがって、ただのハツタリか時間稼ぎか。ジエネジオは怒りを



覚え、その拳を無防備な頭に向けて繰り出した。

——ガギン

「あ……う？」

それは、ジエネジオが戦闘中に聞いた事の無い音。

硬質なものと硬質なものが激突する音だった。

ジエネジオは繰り出した己の拳を見る。

その拳は、エレオノーラの左手に、止められていた。

様子がおかしい。拳を止めている手が、黒色に変化している。さらに、その形も人間の手のそれではない。

「……がっ!？」

直後その拳に走るのは鋭い痛み。肉による筋力で押しつぶすのではない、硬質なものにすり潰されるかのような感覚。

なんだこれは。ジエネジオは動揺したが、今なら再生していない相手はがら空きだ、ともう片方の拳を繰り出す。

「……!？」

その拳は、防がれる、という過程に至る事すらなく、動かす事ができなかつた。

拳を、腕を拘束するのは、二本の触手。

何故。全ての触手は無力化したはず。これは……何だ？

ジエネジオは素早く状況を読み、必死で策を考える。

「教えてあげるわ、小悪党」

そこに、エレオノーラから言葉が投げかけられる。

とある、宗教団体があつた。

目的は、『神に等しい人間を作る事』。

そして、その宗教団体は”とある一族”を敵視していた。さて、どうやってそれを作るのか。

……答えを言えば、それは、進化……ではなかつた。

人間の『品種改良』などではなく。

無数のサンプルにあらゆる苦難を与え、その苦難に適応し、生き残れる『変化』。

死にたくない。生きたい、死にたくない。常に死の恐怖を与え続ける。その純粋な感情のままに環境に適応し、あらゆる生きる術を身に着け、人間でありながら人間を超える。

『サラブレッド』を品種改良するような繊細さなどではなく。悪意の嵐の中からそれに適応できる生命体を生み出す。そんな荒々しい計画。

『変化』こそが至高。

そして、生まれてしまった。

彼らが”とある一族”と同じように目指した人を超えた存在ではなく。

——悪意の嵐に耐え抜き、それを飲み込んだ人を外れた存在が。

『悪魔に最も近い生物』が。

『死にたくない』からあらゆる生きる術を取得し、『死にたくない』からあらゆる戦闘技能を手に入れ、『死にたくない』からあらゆる人間を掌握する術を手に入れた。

——数百人の裏に生きる人間が彼女の玉座を手に入れんと彼女に戦いを挑み、一人残らず命を落とした

——数千人の正義に燃える人間が大切なものを守るために彼女に戦いを挑み、一人残らず命を落とした

——数万人の罪無き人間が臍物と血の世界で蠢く彼女に巻き込まれ、一人残らず命を落とした

それは、”人類の特異点” ”魔人” と恐れられた存在。

エレオノーラの全身に浮かぶ『サメハダテナガダコ』の蟻に近い濁った色の白い斑点が徐々に拡大していき、『サメハダテナガダコ』の赤を侵食して彼女の全身を白く染め上げる。そして、次の瞬間にエレオノーラの全身は朱色に染まった。

まるで世界の終焉の空のようなその光景をただ見つめるしかできないジエネジオに、エレオノーラは無機質な笑顔を浮かべながら、眩くかのように言い放った。

「切り札は最後の最後まで取っておくものよ」

エレオノーラ・スノーレソン

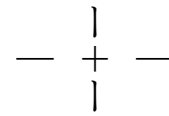
国籍：ローマ連邦

82歳 ♀ 207cm 110kg

MO手術”軟体動物型”

サメハダテナガダコ

『裏マーズ・ランキング』同率4位



αMO手術”軟体動物型”

フンボルトイカ

サメハダテナガダコ  
白点の海魔

フンボルトイカ  
朱き身の冥獣

エレオノーラ・スノーレソン  
魔人

トリニテイ  
三魅一体、降臨。

### 第35話 血の海の冥獣

—ある人間の話をしようと思う。それは、壮大なラストなんか望めるわけもなく。悪を打ち倒す正義の話でもなければ、ほろりとさせるような切なく感動的な話でもない。ただ、地獄の血の池でもがき苦しんでいたらしいの間にか競泳選手になっていた、そんな馬鹿みたいな話だ。

ヨーロッパでは『海の悪魔』と呼ばれ称されている頭足類。では、その頭足類の特定の種がさらに『悪魔』

という別名で呼ばれている事はあまり広くは知られていない。

しかし、彼らの生きる姿を目の当たりにすれば、誰しもがその名で呼ぶ事に疑問を抱く事はなくなるだろう。

光届かぬ世界で群れをなし、狩りを行い。

一、二年しか持たない短い寿命で巨体に成長する裏には、弱った同族を糧としか見ない酷薄な野生の性質を有し。

全身の色を一瞬にして全く違う色に変化させる上に、無数の変色パターンを持つ頭足類でも屈指の変色能力。

そして、頭足類に違わぬ高い知能。

頭足類である彼らの外見上の特徴は、他の種と違わず筋肉で構成され、力強いだけでなく複雑、精妙な動きをも可能にする複数の触手である。

だが、嚙猛な捕食者である彼らの武器はそれだけではない。彼らの属する門『軟体動物』という名前と、その外見からは想像もつかないものももう一つ。

「クツ、てめ…………え…………」

ジエネジオの腕が万力のような硬く、強い力に押し潰されて原型を失っていく。

エレオノーラの左手。それは、まるで鳥の嘴のような形に姿を変えていた。

頭足類は魚に加えて、貝や甲殻類といった硬い装甲を有する生物も日常的に捕食している。

柔らかそうな体の彼らに、それは可能なのか。

その疑問に答えるのは、彼らの口内に暗器の様に隠された捕食器だ。

光を当てると反射して鈍く、黒く輝くそれは鳥のものとよく似た形状をしている。

ゆえに『カラストンビ』と呼ばれるそれは、頭足類の筋力と合わさって獲物の装甲を軽く挽き潰す。

触手と並ぶ頭足類の武器なのだ。

そして、フンボルトイカのそれは。

『全ての有機化合物の中で最も硬い』とまで言われる強度を持っている。

それはただの偶然だったのだろう。ヨーロッパのある国のある街で、まだ10歳の一人の少女が家族が少し目を離れた隙に行方不明となった。

……別に、珍しい話ではなかった。当時のヨーロッパの情勢は最悪で、数々の犯罪組織が裏社会の覇権を争い、その流れ弾が何の罪も無く暮らす民間人に降り注ぐ、そんな状態だった。それは日常茶飯事だったし、きつと少女が行方不明になったのも、それに巻き込まれて命を落として、死体は処分されてしまったか、もしくは誘拐されたか。

家族はそう考えて、早々に諦めた。もちろん、警察に相談もしたの  
だろう。だが、碌にとりあつてもらえなかつた事は簡単に想像でき  
た。この時代のマフィアというものは、公権力すら掌握していたのだ  
から

一方の少女は、祖国から離れた、特に犯罪組織同士の抗争が激しい  
とされていたスラム街の裏路地にただ一人で放り出されていた。周  
りに見えるのは、黒くべつたりとした汚れがこべりついた無数の家屋  
と、古めかしい看板。

そう、彼女は拉致されていた。が、その後の展開はあまり一般的  
ものではなかつた。

少女はただ放置されていたのだ。よそものが一度入つては二度と  
生きて帰れない、とまで言われていた場所の中で。

誰が何のために？ 考えようとしていた少女は、ひとまず同じ場所  
に留まっていたのは危ない、という事を雰囲気察して歩き始めた。に  
わかに、人が争う音が聞こえてきた。もちろん、少女は慌てて逃げよ  
うとする。

だが、汚れに汚れていた道路に足を滑らせ、その場に倒れてしまつ  
た。直後、頭上を銃弾が通過した。

これが、初めての経験だつた。命の危機に陥つた事も、銃声を聞い  
たのも。

そして、この状況で少女が命を落とさなかつたのは、全て運による  
ものだつた。

怖かつた。恐ろしかつた。少女はどちらかという上流階級の家  
の子で、将来の夢はお嫁さん、などというどこにでもいる、平和な世  
界に属する人間だつたのだ。

でも、この一件で少女は思い知つたのだ。全く別の世界に放り出さ  
れてしまった、と。

この世界は、自分を食らおうとしているのだと。

死にたくない、と彼女が人生で初めて思ったのは、この時だつた。



その後数日間、彼女はスラム街の隅に、影に、コソコソと隠れて過ごしていた。

何も食べてはいない。飲んだのは、二日前に降った雨水。

ゴミ漁りでもすれば食糧は手に入ったかもしれない。だが、少女は元上流階級。そんな事をするという発想そのものがなかったのだ。

……そして、空腹に耐える、などという生活もしていなかった。

翌日、少女はスラムを歩きかう汚らしい恰好の人々とは違う、身なりのいい青年を見つけた。

他の人とは違う、この人ならば。自分を助けてくれるのではないのか。

少女はそんな甘い考えで、空腹に負け青年に話しかけたのだ。

青年はその少女を受け入れ、自身の所属する組織へと連れていった。

ああ、助かった。少女はにこやかに笑う青年を見て、そう確信した。

……そんなわけがなकारうに。

答えから言おう。青年が少女を連れていったのは、このスラム街で抗争をしていた小さな犯罪組織のアジトだった。

そして、青年は少女を組織の新たな一員として加入させたのだ。

まあ、正式な組織の一員として加入したのなら、彼女もまだ幸せだったのだろう。

「……終わりがしら？」

ただただ少しづつ潰されていく腕を見る事しかできないジエネジオを見て、エレオノーラは歪んだ笑みを見せる。

片腕は粉碎され、もう片腕は触手によって拘束されている。

先ほどの優位から一転、追い詰められたこの状況。

反撃の手段を探らねばならない。

「んなわけねえだろがよオ！」

触手と左腕に拘束され、両腕は使用できない。ならば残るものは決

まっている。

ジエネジオは自身に向けて伸ばされているエレオノーラの頭を狙い、右脚を振り上げた。

カブトムシの強力なパワーであれば、変態しているとはいえ人間一人の頭を飛ばす事くらい造作は無い。

……もちろん、それは当たればの話であるが。

「おお、怖い怖い」

首を引っ込めて、おどけたように笑いながらエレオノーラはジエネジオの脚をあつさり回避する。

少女は簡単に言えば『鉄砲玉』だった。敵対組織の襲撃や要人暗殺といった危険な任務に投入される使い捨て。救いを求めた結果がこれである。

もちろん、逃げる事などかなわない。

そして、その鉄砲玉は彼女一人ではなかった。

組織の活動範囲から集められた子ども達。その全てが、鉄砲玉として使われていた。

勝手に炸裂するかもしれない粗悪な爆弾一つ、撃てるかもわからないう銃一つで敵の真っ只中に飛び込み、目的を遂行する。

そんな人間として扱われない人間の生存率が、どれほどのものなのか。それは、想像するまでも無い事だろう。

事実、少女の周りにいてお互いに励まし合った同年代の子ども達は日が経つにつれてその数を減らしていった。

新たな供給すらない事から、組織の力が日に日に弱っている事が伺えた。

だが、少女は生き続けた。数十人の武装した警備員の中に飛び込んだ時も。式典の参加者に成り代わり、爆弾の入った花束を要人にプレゼントする、という自爆テロまがいの任務も。

最初は、ただの幸運であった。そう、少女が最初にこの裏の世界に足を踏み入れた時に銃弾を回避できたのと同じ、ただのマグレであ

る。

だがある日、幸運が百パーセントを占めていた生き残れた要因の中に、彼女自身の判断が生まれた。

どのような動きをすれば、ただの一般人に擬態できるのか。どんなルートを選択すれば、追手から逃げられるのか。

恐ろしかったのだ。ただの肉と皮の袋になってこの薄汚れた世界で朽ち果てるのが。怖かったのだ、ゴミのように価値の無い存在として処分されるのが。

死にたくない。生き残れるわけがない、と虚ろな目で生存できる確率が限りなく低い戦場へと赴く他の子ども達とは異なり。少女はひたすら、磨き続けた。ただ、生きる為の手段を。

もちろん、何回も任務に失敗した。彼女が磨いたのは、生存術。己の身を捨てて確実な任務の成功を果たす技術ではなく、例え失敗しても死なない、生きて戻るための手段。いつしか、彼女が生き残る要因の殆どは、運ではなく彼女の技術になっていた。

少女が任務に失敗し、生きて戻るたびに、組織の人間は彼女に罰を与えた。それは暴力であったり、また別のものであったり。それに彼女は耐え続けた。生きていれば、生きてこそすればいくらでも何とかなる。

そして、幾度となく成功と失敗を繰り返し、少年少女の鉄砲玉が彼女一人となった時、彼女はその実力を認められ、正式な組織の一員となった。いた。

この時、彼女を一員として迎え入れた人材管理の人間は、組織の上層部は、気が付いていたのだろうか。

彼らが使いつけてしようと考えていたか弱いお嬢様の瞳に、あらゆる負の感情が入り混じったドス黒い炎が宿っていた事に。

---

攻撃は回避された。だが、拘束が緩んだ。

別に狙ったわけではないが、ジエネジオが振り上げた脚はエレオノーラの視界を妨害している。

好機と考え、ジェネジオは口に潰されている手を力任せに引き抜く。ぶちぶちと何かが千切れる音。とにかく、拘束の一部を解く事はできた。手の状態は確認しない。それを知った所で、どうにかなるわけではないからだ。

恐らくは本来の用途ではもう使い物にならないであろう腕を、エレオノーラに向けて繰り出す。

その攻撃をあっさり回避するエレオノーラ。見えていないはずなのに。その理由について思考する、その手間さえ省いてジェネジオが行おうとしていた事、それは。

「う……オラアッ！」

野太い掛け声とともに、触手に拘束されていた手が引き抜かれる。ジェネジオはある事に気が付いていたのだ。触手の拘束が緩い、という事に。

吸盤のように吸い付いているわけではなく、ただ巻き付いているだけ。

何故なのかはジェネジオにはわからなかったが、それに加えて血で腕が滑りやすくなっている、という事から触手による束縛を解く事ができるのではないか。そう考えた。

そして、それは正解だったのだ。その報酬、とばかりにエレオノーラの顔がガラ空きになっている。

これは読めたか？ そう言わんばかりに、ジェネジオは引き抜いたばかりの拳を顔に繰り出した。

---

少女は下っ端であるものの、組織の正式な構成員となった。

そんな彼女の日常は、まあ一般的な犯罪組織のそれと言っているものであった。

密輸、抗争、まあとりあえず悪いヤツのする事、と思っていいるう。

彼女はそれらの護衛として様々な場所に赴いていた。

争いはさらに激化する。少女の属する組織は落ち目なのだ。それ

が他の組織の嗅覚を刺激し、美味しい餌だと認識されるは、至極当然の事といえよう。

銃弾が、爆弾が、ロケット砲が、たまにミサイルが飛び交うような、もはや戦場と言っていいマフィア同士の、荒廃した西洋での抗争。毎日のように組織の人員は減っていき、そして世の中に絶望した、他に行き場の無くなった人間が代わりに加入してくる。

これはどこの犯罪組織にも言える事だったが、組織に加入する側としては、少しでもいい待遇を求めるもの。

もう既に破滅しそうな組織にわざわざ加入する人間は、よつぽどの物好きか死にたがりくらいのものだった。

こうして、少女の属していた組織は緩やかに壊滅する、かに思われた。

さて、少女はと言うと、組織の中でグングンと力を持つ立場になっていった。

武器の扱いに慣れ、裏社会のあれこれを知る正規の構成員が次々と死んでいく中、少女のような長く生き残り、技術を持つ人間は貴重であつたのだ。

ただ、立場が上がったからと言って安全になるわけではない。暗殺の危険がある以上、さらに死ぬ可能性は上がったと言ってもいいだろう。

少女はさらに学び続けた。実戦に応用できる武術を、裏の世界で生きるための知識を。そして、それ以上に実戦の、間近に迫る死の中で研ぎ澄まされていった。本能的に危機を察知する能力が。瞬間的に危険を回避する反射神経が。極限状態における人間の心理、それを利用する術が。

十年が経った。それ以上の時が経った。もう少女と呼ぶ年ではない、彼女は際限無く知識を吸収し、実戦を生き抜き続けたのだった。

そして、いつの日だっただろうか。組織の首領の椅子に、彼女が腰を下ろしたのは。先代の屍をカーペットの代わりにし、震えを隠す事

ができないまま彼女の前に傳く先代派の構成員に向かって、笑顔で命令を下したのは。

これが、当時ヨーロッパ最弱となっていた犯罪組織、『カラマーロ』の玉座に新たな帝王が生まれた瞬間であった。

「ぬる  
温い」

ジェネジオの腕は、エレオノーラの顔に到達する事は無かった。

エレオノーラが防御をしたわけではない。

エレオノーラがしたのは、攻撃であった。

一瞬の間が空き、ジェネジオが血を吐く。ジェネジオの腹に突き刺さっていたのは、三本の触手。

そして、硬質の嘴と化したエレオノーラの左腕。

再生が、終わっていたのだ。四本の触手が、二本の触腕が、ジェネジオを包囲する。

わかっていたのだ、どれだけのダメージを一度に与えれば、攻勢が止まるのかを。

そして、動きが止まったジェネジオの隙を逃すほど、エレオノーラは甘くはなかった。

隙だらけになったその顎に、勢いをつけた膝蹴りが直撃する。

後退するジェネジオ、だがその背後にあるのは、二本の触腕。

後ろに倒れる事を許さず、その触手はジェネジオを支え、前に押し戻す。

さらにその腹に、腕に、脚に、つきつきと拳と足が叩きこまれ、カブトムシの甲皮を砕いていく。

砕かれ、その内にある肉を晒した部分に触手が絡みつく。

「……ああー」

突如体を襲った、これまでにない苦痛に身を振ろうとするも、拘束されて動けないジェネジオ。何が起こったのか？

蛸と烏賊の吸盤、その差が今のジェネジオを襲う苦痛の理由だった。

蛸の吸盤は筋肉の動きにより吸盤の内部に真空状態を作り、それによって獲物の体に吸い付かせている。

だが、烏賊の吸盤は獲物を素早く捕えるために別の仕組みの吸盤を持つ。

烏賊の吸盤は蛸のような仕組みは持っていない。だが、吸盤の外周に無数の鉤爪を持ち、それを獲物に食い込ませる事によって動きを封じているのだ。

先ほどのジエネジオがあっさりとは触手から腕を抜く事ができたのは、硬い甲皮により吸盤の周囲の鉤爪が体に食い込まず、表面を引つかくだけの状態になっていたからだ。だが、今はその甲皮を砕かれ、肉がむき出しになっている。

完全に拘束されてしまった状態。そして、内部の柔らかい肉を晒した部分に絡みつく触手が、その鉤爪がエレオノーラの趣味の品、拷問具のような凄まじい苦痛を与える。

「テメエ……エレオノーラアア!!」

ジエネジオからは力が失われているように見えた。

全身を覆う苦痛。それによって、失われていた戦闘本能が覚醒する。

ジエネジオの服のポケットからこぼれ落ちるのは、何本もの注射器。地面に落ちていくそれを肘と足で挟み込むようにキャッチし、強引に押し込む。

『過剰摂取』。MO手術被術者の最後の手段である、命を削った圧倒的な戦闘能力の向上。

だが、αMO手術の特性、それは薬未使用時の変態を可能にするための、ベース生物側に大きく偏った細胞のバランス。元から過剰摂取に近い状態でさらに薬を打ち込み続けるとどうなるのか。

ジエネジオの甲皮がみるみるうちに回復し、体内にまで食い込んだ触手を押し戻す。

その変態は止まる事がなく、薬を打ち込んだ足から全身に、これまでは比べものにならないほどのコーカサスオオカブトの性質を示

していた。

こうなってしまうては、最早元の姿に戻る事はできないだろう。通常のMO手術による過剰摂取ならば、『薬』の成分を分解できる臓器が損傷しない限りは元に戻る事ができる希望はある。

だが、αMO手術における過剰摂取は、臓器への負担と完全に崩壊した細胞のバランス、この二つによってもう戻る事はできなくなる。肩まで変異が到達し、もはや自我が残っているのかもわからないジエネジオはエレオノーラに突撃する。

『裏アネックス』と『裏切り者』の怪物同士の決戦、その決着がつかうとしていた。

暗殺者が送られてくる事なんて、日常でしかなかった。それは、敵対組織の構成員だったり、もしくは己の組織に雇われた人間だったり。どちらかと言えば後者の方が多かっただろうか。

だが、その全てが失敗した。数えきれない程の死線を潜り抜け、もはや未来予知と呼べるレベルにまで昇華された直感。人間という種の極限まで到達した反射神経。人間の悪意を読み取る頭脳。

彼女が絶望に追いやられ、この世界で手にした全てが、彼女を死から遠ざける。あらゆる殺意を跳ね除ける無敵の盾として機能する。

そして、彼女はもはや元の世界へと、自分がかつて暮らしていた輝かしい世界へと戻る事を考えてはいなかった。彼女の思うがまま、組織は拡大していく。己より強い組織には無理に逆らわず、下に付き。だが、隙を見てその首を掻き切り。格下の組織がある時は傘下に加え、裏切りの気配を感じた時には迷わず皆殺しにし。権謀術数を尽くし、彼女は組織を拡大していった。

その途中で彼女は己を裏の世界に放り込んだ宗教団体の正体を知った。だが、そんな事はもうどうでもよかったのだ。ゴミ箱にゴミを捨てる、そんな調子でその宗教団体を滅ぼし、彼女の復讐はあっさりと終わった。彼女の弟の息子が政治家になった、などという話を情報収集の一環で手に入れたが、関わる気もなかった。

……彼女は止まらなかつた。世界そのものへの復讐なのか、もう



とつきの前に発狂しているのか。時々考えたが、結論は同じだった。『楽しいからいいじゃないか』

『カラマール』がヨーロッパの犯罪組織の頂点に立つのに、そこまで時間はかからなかった。

一般人を平然と盾にする、逆らった人間に一切の慈悲は与えない、最も恐ろしく、人の道を外れた組織の称号と共に。

「おやすみなさい」

ジェネジオが最期に聞いたのは、何故だろうか、何故か慈悲のようなものを感じる、エレオノーラのいつもの嘲笑うようなものとは違う穏やかな声だった。

突撃してくるジェネジオの、まだ変態が到達していない首の部分に、エレオノーラの左手が添えられ、そのままそっと握るように閉じられる。

勢いが止まらず、そのまま前に突き進むジェネジオの体。ぼとり、とその場に落ちる首。

そして、体は壁に激突しその場に倒れ、そのまま動く事はなかった。

その場にあつたのは、ただ、沈黙だった。

彼女が最初にその椅子に座った時の三倍は広くなった部屋で、老人、と呼べる年になった彼女はぼんやりと考え事をしていた。

最初の十年は、死にたくない、誰も殺したくないと嘆いていた。次の十年は、他人の命をいくら奪つても生き残る、と決意した。その次の十年で、他人の命は遊び道具にしか見えなくなっていた。さらに次の十年で、自分の命すら遊び道具としか思わなくなつた。残りの年月は、埋まる事の無い己の空白を満たす為に必死だった。今の自分は、一体何なのだろうか。自分の手で運命を切り開いて来た、そう思っていた。

だが、結局自分は何かに操られていたのだろうか。あの、復讐した怪しい団体の思うがままの人間に自分はなっていたのだろうか。

何とも虚しかったのだ。最初に自分は、何としてでも生き残る、と決意に燃えていた。

今の自分はどうかのだろうか。弱い相手に完成されてしまった己の、組織の力を振るうのみ。なんともつまらない。

何をしても満たされないのだ。ただただ必死だった若い頃が羨ましく思えてくるのだ。

……そうだ、もう何もかも終わりにしよう。

彼女は、あっけなく破滅を選択した。

こうして、『カラマーロ』は活動を活発化させた。より残酷に、冷徹な方向に。

そしてついに、ヨーロッパの国々はこの脅威に対処する事を決意したのだ。

マフィアの存在によって政治家達が貪っていた利益よりも、被害の方が大きくなっていったのだから。

これは本当に危険だと、目が覚めた政治家もいただろう。

各国の軍がフル出動し、完全に組織を叩き潰す事を心に誓った。

戦いは一年近く続いただろうか。結果はわかりきっていた。

いくら強大に成長したマフィアといえども、完全武装した正規軍に勝てるわけがない。

それでも一年間戦い続けたのは、『カラマーロ』が強大な組織だった証左ともいえるが。

組織の中核である彼女の部屋にも、軍の特殊部隊がなだれ込んできた。

彼女の親衛隊と特殊部隊の激しい銃撃戦。もちろん、最優先の殺害目標である彼女も戦闘に巻き込まれ……

ここで、少し違う人間の話をしよう。

彼は、ヨーロッパのある国のある街、なんという事はない一般的な

上流階級の息子として生を受けた。

彼の澆刺とした性格は多くの人間の心を掴み、彼本人も非常に勤勉な性格であったため、その存在感は次第に大きくなっていった。

彼の将来の夢は政治家だった。この腐った世界を変えてやる。そんな思春期にありがちな考えを、彼は本当に遂行できる才能を持っていた。彼の父の姉は、父が幼い時に行方不明になったらしい。そして、その捜査はあっさりとは打ち切られた。彼は幼い頃からこの話を何度も聞かされてきた。それも、彼の道を決める理由の一つだったのだろう。

まあ、賄賂と裏社会からの回し者に塗れた当時の政治家達に、彼がそう簡単に受け入れられるわけもなく。

彼は長い下積み時代を送る事となった。

そして、ある日。彼は軍のある部隊の指揮を任される事となる。

とはいっても、彼が軍そのものを指揮するわけでもなく、彼の仕事は部隊に付いていつての交渉や後始末、という意味でのまとめ役であつた。

任務は、犯罪組織討伐、敵本部への突入部隊の支援。

先行した特殊部隊の後片付け。ただそれだけのはずだった。

本部を制圧し、いよいよ最後の部屋に部隊が突入、そして、沈黙。

何かイレギュラーな事態が起こったのだ。

そう考え、彼は己の部隊の隊長に突入を進言する。

それが聞き入れられ、部隊の後ろに隠れながら最後の部屋に入った彼が見たものとは。

それは、敵も味方も平等に混ざり合った、血と肉の海であつた。激しい戦闘の痕。

そして、部屋の中央に、一人の人間が立っていたのだ。戦場に似合わない、痩せて見える老婆だった。

老婆に、彼の部隊は一斉に銃口を向けていた。危険だ。その老婆には本能的な恐怖を煽る何かがあつた。

お互いの兵士が全滅する、そのような状況で生き残っている？

まさか、己の味方が全滅してから、老婆が特殊部隊を皆殺しにした？

どちらの可能性もありえない、常人には不可能な領域だ。

彼は血の海に一步踏み出した。部隊は、彼の動向に少し戸惑っていた。

そして、老婆に向かって、いつもと変わらない声で話しかける。

「よう、バアさん、あんたはこれから捕まって、当然死刑だろうな」

それを無言で聞く老婆。今にも部隊に向かって飛びかからんとしていた戦闘状態を解いている。

「でもな、アンタに覚悟があるならもつといい選択肢があるんだ、これが」

老婆は、様子を伺うばかりだった。何も話そうとせず、無言を貫く。

「どうだ、今度はその力、ウチの国が天下取るのに生かしてみないか」

老婆は何も答えなかった。ただ、口元を歪めて笑うだけで。結局、老婆は部隊によって拘束され、その後死刑囚として短い時間を過ごし、処刑された。国民への発表はこうである。そして、それは

—— 処刑方法は『成功率0、3%の手術を施される』というギャンブルのようなものであったという事は、国民には知らされていない事実であったが。

### 第36話 朽ちる世界、記憶の残滓

決戦の地である火星の小山、内部にある基地。その近くに広がる平地にいくつかの影が立っていた。

この場所はそこをよく見まわす事ができるスポットである。

もちろん、テラフォーマーに見つからないように山の表面には施設はないため、外見上はただの山である。いや、だつたと言うべきだろうか。

「む……第三突入口は押されているようです」

現在、この山にはいくつもの穴ぼこが空き、そこからは黒煙が噴き出していた。

時々、強い勢いで人間が投げ出され、地面に叩きつけられ無残な姿を晒している。

いくつもの突入口と戦闘の様子。これらが、これまで完璧に偽装され、その上テラフォーマーが本能的に避けるある物質を散布してあつた小山内部の基地の姿を露わにしていた。

テラフォーマーが『裏切り者』を、裏アネックスを積極的に狙わなかった理由。それは、この辺り一体のテラフォーマーの絶対数が少なかったから、というものもある。だが、それより大きな理由がもう一つ。

彼らは、『アネックス一号』に大きな戦力を割いているのだ。

戦闘員の比率が多いという都合から総合的な戦闘能力はアネックス一号搭乗員より高く、奪う事のできる能力にそこまで差があると思えない、そして、大群を動かすには距離が遠い。

これらの複合的な要素が、テラフォーマーを彼らの戦場に乱入させないでいた。

だが、黒煙。小山の内部に確かにある、人間が築き上げた『施設』。これらが知られてしまったら？

少し雲行きの怪しい戦場。それを見守る二つの影。

「……私には、もう時間が無いのですよ」

杖をつき、物憂げな表情でぼんやりと基地を、戦闘を見つめるアナスタシア。

その目には、虚しさはどこか焦りが入り混じっていた。

「何を仰います、地球に帰ったらしつかりとした治療が受けられますよ」

彼女の護衛であるヨハンが慰めるかのように話しかけるが、そちらを向く事すらせずにアナスタシアは話を続ける。

「あはは、慰めはいりませんよ。……いいえ、貴方は知らないんですね、ごめんなさい」

その言葉の意味をヨハンが問いかけようとした、その時。

「……けほっ」

アナスタシアが、赤い液体を吐き出した。どろりとした、それは、もう既に時間が経っているかのような赤黒さを持っていて、その重大さを物語っていた。

「ドクター！ 早く薬を……ッ!？」

焦ったヨハンがアナスタシアに駆け寄ろうとしてある事に気づき、驚愕に顔を歪める。

肉が、沸き立っていたのだ。

肉が沸き立つ。一見何を言っているのかわからないようなその表現が、今のアナスタシアの体の様子を語るのに一番適切な表現であった。

それが起こっているのは、左腕から肩にかけて。まるで、水が沸騰し無数の泡が発生するかのよう。アナスタシアの体内から何か外界に出ようとするかのように、アナスタシアの皮膚がぐにやぐにやと動き回り、その肉が膨れ上がり、収まり、また膨れ上がり。一瞬のうちに連続してそれを繰り返す。

「……ああ、大丈夫ですよ……でもね、もうあんまり残ってないんです」

表情を変えないままその部分を右手でそつと撫でながら、こんと杖

で地面をつくアナスタシア。

その様子を見て、何が、とは聞けなかった。その答えは、先ほどの眩きと同じものなのだろうから。

しばらくして、肉の沸き立ちは収まり、何事もなかったかのように症状は引いていた。

その間、血を吐いていた時以外はずっと基地を見つめていたアナスタシア。

アナスタシアの体は、徐々に崩壊へと向かっている。それはヨハンにもなんとなくわかっていた。

戦災孤児であった自分が拾われた時。バイロン達と出会った時。孤児院の管理を手伝った時。そして、火星に赴いた時。生まれつき体が悪いとは聞いていた。だが、ここ数年の変化は明らかにおかしい。肉体の異常だけではなく、精神面でも。

弱気ではあったが心優しい彼女が。死ななければなんともなる、と自分や仲間達に教え、励ましてくれた彼女が。実の子のように接していたバイロンを、始末した。

何が起こっているのか、わからない。……いや、本当は、何となく察しがついているのだ。ヨハンはちらりとアナスタシアの顔を見る。

「……どうしましたか、ヨハン？」

それに気づいて穏やかな笑みを返すアナスタシア。ヨハンは思わず目を逸らす。頭の中に響く頭痛は、定期的に体を襲う痺れは、まだ止まりそうになかった。

「あはは」

「えへへ」

「あそぼうよー」

耳に入ってくる楽しそうな声。それを頭の隅に追いやり、力を振るう。

味方は付近にはいない、ならば、十全の力を発揮できる。

次々とアメーバの海に沈んでいく『裏切り者』。空間を覆う瘴気に蝕まれ、次々と敵は倒れていく。

耳鳴りは止まらない。体中に激痛が走り続ける。目の前の人間が、人間と認識できなくなる時がある。

そして。

「ねえ、なにしてるの？」

無邪気な声が、絶えず耳に入ってくる。

もう少し待ってくれ、と心の中で言い聞かせ、戦いを続ける。

私は、罪を重ねすぎた。本当は、本当に贖罪などというものを望んでいるのなら。

——αMO手術など、世の中に出すべきではなかったのだ。

その性質に気が付いたのは、いくつかの被験者を見た後の事だった。低い成功率と引き換えにした、特殊生物への適合と通常の投薬で従来のMO手術における過剰摂取に近い能力、そして弱体化はするものの投薬せよとも変態可能な特性。

リスクは、最悪の成功率。それだけだと思っていた。自分の作り上げた技術は、それだけを引き換えに力が得られるものだ。

αMO手術のつ三つの利点。それらは全て、一つの特性を根拠としている。

それは、『MO手術よりも大きくベース生物側に偏った細胞のバランス』。

これがあるからこそ、通常の投薬によって大きな力を発揮できるし、薬を使わずとも己の意思さえあれば変態を行う事ができるのだ。

特に、後者。己の意思によって細胞のバランスを崩し変態し、薬が入手できない状態でもある程度の戦闘能力を発揮できる。

イレギュラーな事態が当たり前の戦場で。己の身一つを武器にする状況も非常に多い潜入で。

この特性は、非常に有用なものである。

各国はこの特性に注目し、絶賛した。中国など、その特性のみを突き詰めた『紅式手術』という独自技術を別に関発していたほどだ。



しかし、気づかなかつたのだろうか。各国の連中は、そして、自分は。

傾いたバランスを、さらに傾ける。そんな事を繰り返せば、どうなるかだなんて、すぐわかる事だろうに。

じわじわと、侵食されるのだ。ベース生物の因子に。そして、失つていくのだ。人間としての在り方を。

最初に、味覚がなくなった。

次に、時々目の前が真っ暗になるようになった。

唐突に皮膚感覚を喪失する時がある。自分が奪ってきたものの声が聞こえる時がある。目の前の仲間が、戦友が、敵が、人間ではない何かに見える時がある。驚くほど無機的な思考に支配される時がある。

意識も徐々に希薄になってきているのがわかる。きっと、長くは持たないのだろう。

もう時間は残っていない。せめて、この戦いが終わるまでは……  
そう願う権利すら、きっと私にはないのだろうか。

—地球 某国 某所

「〜」

寂れたスラム街を、一組の男女が歩いていった。

傍から見ると、上流階級の青年とその付き添い人、だろうか。

端正な顔立ちに美しい金髪、適度な長身、すらりとしながらも鍛えている事がわかる肉体。

全てにおいて完璧、という表現が相応しい容姿を持っている青年。

このスラム街で鼻歌を歌っているという感覚から、中身は完璧とは言い難いものなのかもしれないが。

「ああー、待ってくださいオリヴィエ様〜！」

オリヴィエと呼ばれた青年を追いかけるのは、早足で歩くオリヴィエに置いていかれそうになって慌てている女性。年齢は二十ちよっ

とくらいであろうか。少し短めの黒髪に、澁刺とした表情、女性としては若干高めの身長。

仕事着としてであろうか、スーツを着ているものの、全体として活動的なその様子は、秘書というよりは運動部の後輩、という印象を与えている。

「んん？　これはすまない、久しぶりに外に出られて嬉しくてね、ついっついはいやいでしたっただよ」

薄暗いスラム街ではしゃぐも何もないのだが、オリヴィエは心からこの状況を楽しんでいる様子だ。

「そうっすかー！　それならしようがないっすねー！」

それに対して、へにやっとした笑みと元気な声を返す女性。こちらも少し感覚がズレているご様子。

「うん、ここはいい所だね。そろそろお昼にしようじゃないか」

「はいッスー！」

両者ハイテンションで敷物を用意し、まるで花見でもするかのよう  
に弁当を広げだす。

だが、彼らのお楽しみタイムは長くは続かなかった。

数人の見るからにごろつき、という男たちが、一瞬のうちに二人を取り囲み、ナイフ、金槌というような各々の得物を手にじりじりと距離を詰めてきたのだ。

この場所の治安と二人の無警戒っぷりからして、この展開は非常に  
妥当といえよう。

「おいイケてる兄ちゃん、痛い目見たくなかったら……」

「うーん……」

「なっ……」

ならずもの達の中で最も大柄な、恐らくはリーダーであろう男がオリヴィエを脅迫しようとしたその瞬間、座って弁当を広げていたオリヴィエは男の真正面に移動していた。

そして、顎に手を当てしげしげと男を上から下へ視線を移動させな

がら観察する。

「力強さは十分、役に立つか立たないか……」

「オイ！ わけわかんねえ事……」

男の声はまたしても中断された。先ほどの中断理由は、オリヴィエが突然目の前に現れた事による驚き。

そして、今回は。

「あ……あ……」

「……やっぱりいらねえね、ゴミだねこれは」

男の腹に、深くオリヴィエの手が突き刺さっていた事による痛みである。

その手は腹を破り、深く体内まで達していた。引っこ抜けば即座に大量出血。

だが、男はその苦痛以外に別の不快な感触に襲われていた。何かが体から奪われているような、そんな感触。

しかし、その意識も長くは続かない。その次の瞬間、オリヴィエが懐から取り出した剣でその首を刎ねたからだ。

古典的な武器でありながら機械的な装飾、特に刃の部分に走る幾何学模様がどこか近未来的な印象を与えるその剣は、少しの抵抗も感じる事なく首を切断し、返す刃で横に立っていたもう一人の胴を真っ二つに切り裂いた。

勝てない。明らかな差を感じ、蜘蛛の子を散らすように逃走する男たち。それをわざわざ追う事もせず、オリヴィエはもう一度座りなおし、弁当に手を付ける。

それとほぼ同時に鳴り響く携帯電話の音。オリヴィエは心底不快そうに明らかに文明に取り残された旧式のそれを耳に当て、相手の声を聞く。

「宇宙旅行してる子たちからだ……現当主様をお迎えする用意が整ったそう、まったく間が悪い」

電話を切り、オリヴィエは女性に苦笑いしながら告げる。

そんなオリヴィエの口に卵焼きを運びながら、女性は屈託の無い笑いを浮かべて答えを返した。

「へえー、あの人達も無駄な事しますね」

「うんうん、全くだよ」

卵焼きを噛みしめながら、オリヴィエは女性の答えに満足そうな笑みを浮かべ、楽しそうに口を歪めた。

「神になるのはオリヴィエ様つすのにな」

「ようこそ、ここが我々の本陣ですよ。私を殺せば、貴方達の勝ちです」

唐突に、アナスタシアが少し大きな声を出す。

それに反応し戦闘態勢を取る、ヨハンとアナスタシアの周囲を守る異形のテラフォーマー達。

アナスタシアの言葉の意味はすぐにわかった。

基地を望むアナスタシア達の背後から、少人数の集団が姿を現したからだ。それを確認するかしないか、という一瞬の後、風を切る音と共にアナスタシアの左胸を正面から、つまりは基地方向から飛来した石が貫き、外から見てもはつきりとわかる大穴を開ける。

同時に異形のテラフォーマーのうちの一体に細い糸のようなものが絡みつき、一瞬でその全身の甲皮の隙間に毒を打ち込む。

はつきりと敵を視認したヨハンの目に映ったのは、すでに変態を済ませた数人の肉体派、という外見の集団と、その中央に立ち覚悟を決めた表情を浮かべる銀髪の少女だった。

### 第37話 死に至る病

「……ドクター!？」

左胸に大穴を開けられ崩れ落ちるアナスタシア。そのぽっかり空いた傷口からは多量の血が流れ出し、みるみるうちに火星の土を赤色に染めていく。

自分に『薬』を使いながらも駆け寄ろうとするヨハンだったが、それを拒むように襲撃者たちの中心に立つ少女、エリシアが放った猛毒の触手がヨハンに襲い掛かる。

背中を向けながら回避できる量と動きではない。

駆け寄ろうとする動きを止め、その走り出しの勢いで左に跳び、回避動作をとるヨハン。

だが、それを易々とさせる相手ではなかった。

「させねえぜー」

第三班の班員の一人、甲殻型と思われる姿に変態した小柄な男が、ヨハンの進路を阻み、拳を打ち込む。

ヨハンの変態はαMO手術、さらには昆虫型のベースとなっている。

堅牢な甲皮を持つ生物ではないものの、ツノゼミと合わさっている程度の防御力は確保できている。

ここは攻撃を受ける覚悟でそのまま突き進むべきだ、と判断し、ヨハンが男の拳をできるかぎり回避しようと試みながらも前進をやめなかった。

拳は肩にあたり、甲殻類型の変態によって発生した甲殻を覆う棘は皮膚を裂き出血させる。

しかしヨハンはその痛みを感じていなかった。

戦闘の空気と自分の敬愛する人が致命傷を受けたショック。これらによって痛みはマヒし、それ以外の感覚が薄くなる。

拳を繰り出した後の隙を晒している男に、変態で現れた特徴である腕の針を打ち込む。

甲殻型の強固な装甲に昆虫の針は通用しない。だから、勿論狙うの

は。

「……貴様ら……」

まるで、底の無い淵から湧き上がるかのような暗く、低い声。

それと同時に、男が崩れ落ち、痙攣する。

その首には、針の痕が。

——日本の昆虫、それは、世界の同族たちから見れば多くが弱いものだ。

あまり一般的には知られていない、南西諸島に生息するサソリ。彼らのサイズは外国産の大型種と比べて半分ほどであるし、毒も大したものではない。

その勇猛な姿からは弱弱しい、という表現は相応しくないのだが、甲虫界のスターであるカブトムシ、クワガタムシも世界には日本産と比べサイズもパワーも上回る強豪が多数存在する。

そんな中で、同族内最強クラスの戦闘能力を有する虫が存在する。

それは、『蜂』。

オオスズメバチ。日本やその周辺のアジアに生息する彼らはが持つのは甲虫ほどではないが硬い外皮。人間すら死に至らしめる事のある強い毒。高い飛行能力。数万匹のミツバチの巣を僅か数匹で襲撃し、皆殺しにする卓越した戦闘能力。

日本に大型昆虫の外来種が少ない理由。それは、このオオスズメバチが片っ端から生意気なよそ者を駆逐するからだ、という説が存在するほどである。

では、このオオスズメバチはハチ界最強、なのだろうか。

その答えは、恐らくYes, であろう。少なくとも、今現在発見されている種の中では。

ならば、ハチ界最大、と言われれば？

その答えは、はっきりNO、である。

オオスズメバチすら上回る体躯を持つハチ、彼は、  
社会性生活を営まず。

たった一匹で。

本来ならハチを捕食する蟲の、その中でも最大クラスの巨体を誇る  
生物に決闘を挑む。

彼が武器とするのは、たった一本の毒針。

強固な顎、持たず。彼が戦う目的のためには、それは必要ないから  
だ。

堅牢な体皮、持たず。その俊敏さを求め軽量化された体は、彼が相  
対する強大な敵の軽い一撃が致命傷となるリスクを常に負っている。  
致死の毒、持たず。彼が戦う目的、それは、相手を殺してしまつて  
は成す事ができないからだ。

そして、そんな彼が戦い続ける、『タランチュラホーク』という勇猛  
な別名に似合わぬ理由。それは。

『子育て』という慈悲深いものである事もまた、あまり知られていな  
いのである。

ヨハン・アウフレヒト

国籍：ドイツ／中国

19歳 ♂ 178cm 75kg

αMO手術『昆虫型』

「……降伏すれば悪いようにはしません、その方は残念でしたが、貴方まで死ぬ事はないでしょう」

ヨハンの怨嗟の声を聞いてか聞かずか、エリシアは油断なく触手を自身の周囲に展開しながら、降伏を促す。

戦闘員揃いの第三班、その班員の一人を相性の悪さをもともせず制圧した実力。

死ぬまで戦えば、こちらにも相応の被害が出る事は間違いない。そう考えての判断だ。

だが、その答えはエリシアに向かって一直線に突貫してくるものだった。

「よくも……よくもやってくれたものだなアア！」

怒りに染まり切ったその姿。みるみる間に変態の度合いが増し、その体を光沢のある青緑色の甲皮が包んでいく。

最初に変態した時から新たに『薬』を使用した様子は無い。だが、体に変化が起こっている。

エリシアの知らない事象だ。

どういう事なのか、と思案する前に、対応しなければならぬ。

「貴方とあちらの人がどんな関係なのかは知りません……ですが、これ以上私の部下を死なせるわけにはいけません！」

己を奮い立たせるために大きな声を出し、同時に触手をヨハンが突撃してくる前方へ向けて集中させる。

あの異形のテラフォーマーたちは一体は自分が仕留め、残りは部下が抑えてくれている。

ならば、敵のリーダーは自分が抑え込むべきだ。

ぎゅっと拳を握りしめ、自分の能力を、専用装備を制御する。



このまま怒りのままに突撃してくれば、『キロネックス』の触手に突っ込み、ほとんど瞬間的にヨハンは絶命する事だろう。

「……いい能力だ、だがな、甘い」

ヨハンが、唐突に軌道を変え、足元の何かを掴む。

「……！」

それを見て、前方に集中させた触手を全て体内に引き戻すエリシア。

相手の進路に敷いた防衛網を自ら撤去する自殺行為。なぜそのような事をするのか。

「……君が優しくて助かったよ、エリシアさん」

ヨハンがその手に抱えていたもの、それは、先ほど倒された第三班の戦闘員の男だったからだ。

オオベツコウバチの毒は、相手を麻痺させるためのもので、致死性は持たない。動けなくなった獲物、蜘蛛の中でも大型の種が多いオオツチグモ科、俗にタランチュラと呼ばれるそれに卵を産み、可愛い子ども達のゆりかご兼食事にするのに、死体だと都合が悪いからだ。

これが死体ならば、エリシアは遠慮なく攻撃をしていただろう。

死者の尊厳、それを守ろうとして、自分が死者になってしまったのは意味がない。

「……けれど、目の前にいるのは、生きている仲間だ。」

戦局を見るならば、切り捨てるべき。触手の量は十分だ。人間一人程度の盾で凌げるものではない。戦闘員一人の犠牲で、敵の指揮官を仕留める事ができる。

十分すぎる戦果だ。だが。このただの班員は、自分の班員たちは。自分のためにサプライズパーティを開いてくれたのだ。どう考えてもそんなものに慣れてなさそうな彼らが。

デザートを作ってくれたのだ。絆創膏と包帯だらけの手を背に隠

しながら。

最初の顔合わせの時、怯えていた自分に笑顔を向けてくれたのだ。ぎこちなさすぎて、むしろ怖かったが。

そんな光景がエリシアの脳裏をよぎり、攻撃を中断させる。物理的な盾ではなく、精神的な盾に猛毒の防衛網が崩される。

十分に接近したと踏んだヨハンが盾としていた男を放り捨て、エリシアに向かって手を、同時に毒針を伸ばす。

勝った。いくら強かろうとも。一瞬で命を奪い取る猛毒の結界を展開できようとも。その体は、ただの少女。

能力を突破してしまえば、仕留められる。

ヨハンの右手は、エリシアの首を掴み、逃れられないように拘束している。

そして、左の毒針を、エリシアのその、敬愛するアナスタシアと同じ空色の瞳に向かって一直線に。

「そうすると、思っていました」

ヨハンが繰り出そうとした左腕。それを動かす事はできなくなっていた。力で拘束されたわけではない。突如の痺れによって、硬直してしまったのだ。

理解できない、という様子のヨハンの頬を撫でるように、エリシアの手が伸びる。

同時に、ヨハンの体に激痛が走り、意識を刈り取る。

必死でそれに耐えるヨハン。なんとか反撃の糸口を見つけようと目線を動かしていたその時、ヨハンは自分を倒したトリックに気が付いた。

集中しないと見えないような細く、透明な糸が一本、風にたなびいていたのだ。

『キロネックス』の触手。その猛毒は、たった一本の触手に含まれるものであっても甚大なダメージを人体に与える事を可能としている。

読まれていたのだ、攻撃の瞬間には重く邪魔な盾を捨てる事に。

今の攻撃で仕留めなかったのは、即座にキロネックスの能力を再度使用する事ができないからなのか、ただ単に殺すつもりが無いので別の生物の毒を使っただけなのか、その判断はつかなかったが、どうやら自分は敗れた、という事だけはヨハンには理解できた。

……これで、終わり？ 自分も、バイロン達も、アナスタシアでさえも。誰かに利用され尽くされて自分達はおしまいなのか？

絶望し、涙すら滲む。ああ、なんと残酷なのだろうか。目を閉じるヨハン。

「……新手です！」

だが、エリシアの焦った声で、再びその目は開かれる事となった。

新手。誰がこの状況で援軍になど来るといえるのか。あの適当に集めてきたクズどもが自分を助けに来るわけが……

エリシアの勘違いだろう、と期待せずに目線を落とす。

しかし、少しして自分を支えるエリシアの顔に怯えが浮かび、手が震えている事に気が付き、ヨハンは何か様子が違う、とその目線を追うように自身の目線をそちらに向けた。

そこにいたのは、異形ではないものの様子がおかしいテラフォーマーだった。

異形のテラフォーマーのような手足の本数にこそ異常はないが、その表情は白目を剥き泡を吹くという異形のものと同じそれである。

そして、そのテラフォーマーが運んでいるものが一つ。

それは、首の無い人間の体だった。

やせ細っていて凹凸に乏しいものの、性別は女性。小柄な体だ。雪のように白い肌と合わさって、儂く壊れてしまいそうな印象を与えている。首の断面と思われる部位には布のようなものがかかけられ、どこか水中でも通ったのか、全身に水滴が付いている。

しかし、そんな体の特徴より目立ちすぎて目を奪われる特徴が一つ。

体中に、痛ましい手術の痕があったのだ。それは、縫合の跡であっ

たり、なんらかの薬品を投与したと思われる変色した痣のようなものだった。様々だ。それが、儂くも美しい、というその体の印象を一気に書き換えていた。

さらに、体の表側を上にして運ばれていたため背側の状態はわからないが、一瞬背中側で何かが見えたような、そんな気がする。

そんな人間の体を運んできたテラフォーマーは、倒れ伏し、ぴくりとも動かないアナスタシアの近くに腰かけ、運んできた人間の体を追いた。

少しアナスタシアの様子を伺い、懐から何かを取り出すテラフォーマー。

それは、石で作られた鋭利なナイフだった。何をやる気だ。やめろ。ヨハンは叫ぼうとするが、毒の影響で声は出ない。

戦闘を中断する、しかし人体を運んできたテラフォーマーに近づけさせまいとする異形のテラフォーマーたち。

それに阻まれ手が出せない戦闘員。

ヨハンを抑え込んでいるため手が出せないエリシア。

この場で、それを止める事のできる人間はいなかった。

そして、そのテラフォーマーはアナスタシアの体から首を切り落とした。

目を見開き、ヒビが入るのでは、というくらいの力で歯を噛みしめ、その蛮行に耐えるしかないヨハン。

エリシアはアナスタシアの生首を見て、ある事に気が付き動揺を隠せなかった。しかし、ここは指揮官として耐えるしかない。

ヨハンの表情から何が起こるのかを想像しようとしたが、その表情からヨハンにとってもイレギュラーな事だ、と判断し、テラフォーマーの行為へと目を戻す。

テラフォーマーは切り落としたアナスタシアの首を、運んできた体の方へと持っていく。

何かわかったかのように一つうなずき、体の側の首を覆う布を剥がし、そこにアナスタシアの首をそつと接続する。

何をしているのか、どうなっているのか。この場の誰も、それを理解できている者はいなかった。

……そして。

「……ふう、全くイヤになりますね……博士には綺麗な体で会いたかったのですが」

その何かの体は、アナスタシアの頭を接続されたそれは、むくりと起き上がり、言葉を話した。

「レナート、君は野球をやっていたのかい？」

『裏切り者』の攻勢は一旦落ち着いてはきている。そんな少しだけ安定してきた戦場を走る、部下を連れた二人の男。ヨーゼフは第三班の副官、レナートと話をしていた。腕力頼りのレナートと頭脳派のヨーゼフ。全くわかりあう事はないであろう。それぞれの考え方の違いに加え、ヨーゼフの腕相撲大会でさらに強化された体育会系嫌い、レナートの何故だか敬愛するリーダーであるエリシアがヨーゼフに懐いている事への嫉妬といった非常に個人的な理由もあり、二人の仲は最悪と言える。

だが、今は戦場。お互いの確執をできる限り抑え込み、なんとか会話をしている。

「ああ……昔の事さ。ピッチャーだ。まさか一発で当たるとは思わなかったけどな」

エリシアの、少人数での敵本陣への強襲。これを提案した時には、二人は大層驚いたものだ。

異形のテラフォーマーを従えている男女。それが、突然基地付近の平地に出現した。そして、布陣するかのようにその場所から動かな

い。

これは敵の指揮官で間違いないだろう、という報告が見張りから来たのがつい先ほど。

すでに部下を引き連れて出撃した剛大とダリウス。彼らとの通信は傍受の危険を考え行つてはいないが、防衛側の三人の班長にはその情報を行きわたらせた。

そして、エリシアが提案したのがこの案であったのだ。

幸い自分の班には地下通路を効率よく開けるベース持ちがいる。例え標的が指揮官でなかったとしても、背後からの奇襲という戦術自体が敵の士気を下げ、相手を一気に切り崩す糸口にできるかもしれない。拙いながらも必死の言葉に、ヨーゼフとエレオノーラは納得し、それを許可した。

制圧そのものはエリシア一人の能力で事足りる。だから、連れていく部下はエリシアで対応できない能力持ちが現れた時のため、最悪その相手が強大だったならエリシア一人でも逃がすための盾、という意味合いもある。

だから、副官であるレナートは本陣で防衛に専念、という形になったのだ。

しかし、それだけでは……というレナートの訴えにより、支援攻撃という形でのカブトムシの腕力での投石、という案、そして判明したレナートの意外な特技、という流れである。

そしてそれは大成功し、見事にその石は敵幹部？の女の胸を貫いた。そこからの戦いは再び防衛に戻ったため見ていないが、相手は軍服の青年一人に異形のテラフォーマーが三匹。

少し不安は残る。最初の奇襲でどこまで敵を減らせるか、それが問題だ。

「……ムダ話はここまでだ、さあ、急ぐぞ」

だから、二人はこうして向かっているのだ。引き連れている班員の数は少ないものの、精鋭揃い。

前線の指揮はエレオノーラに任せ、エリシアが通った通路を通り、

戦闘に参加する。幹部搭乗員と上位戦闘員、その二人が引き連れる隊員。相手の戦力からすれば、これで十分勝利を手にする事はできるだろう。

「……なんだかよ、嫌な予感がするんだ」

「奇遇だな、私もだよ」

レナートの言葉に、珍しくもヨーゼフが同意する。

レナートの嫌な予感と不安、それは当然、エリシアの安否。敵の数は多くない。だが、敵は自分がギリギリでようやく一体撃破した異形のテラフオーマー。それが三体。その上で、能力持ちの青年。

勝てる相手なのか、それはわからない。だが、班長を失う、それだけは避けなければならない。

例え、敗走したとしても。最悪、この基地が落とされたとしても、班長を失う事だけは……

一方のヨーゼフの嫌な予感、というのは、曖昧なものだった。エリシアに対する感情。昔、何かあった気がする。何か、大切な事を忘れていた気がする。それも。だが、それと同じか、それ以上に、得体的にしない何かがある気がするのだ。自分が、絶対に失いたくない、そう思っていたものが、ぶち壊されている、そんな現実を突きつけられるような気がする、そんな感覚が。

「……を昇れば到着だ、博士、いいな」

「……ああ」

そして、不安を抱えたまま、二人は穴を飛び出し、目の前の戦場に目を向ける。そこにあつたのは――

「……やはり、か」

「お嬢！ ツ!?!」

目の前に広がる光景に、ヨーゼフとレナート、二人は顔を歪ませる。そこにあつたのは、数人の人間の残骸と、茫然自失としている軍服

の青年と、異形のテラフォーマーと通常のテラフォーマー、一匹ずつの死骸。

そして。

「う……あうう……」

「……ようこそ、博士。お久しぶりです」

ヨーゼフとレナート、隊員達に背を向けている小柄な女性。黒一色に染め上げられた白衣に、右手に持った機械的な装飾の杖。その左手には、傷だらけのエリシアがぶら下げられていた。まだ生きてはいるが、ボロボロに弱っている様子。

その左右には臣下のように二匹の異形のテラフォーマーが控えている。

「テメエ！ よくも……」

「何故だ……？ なんで君が……こんな場所に」

エリシアを救わんと突撃しかねないレナートを手で制止し、ヨーゼフは女性に問いかける。

その答えは、くすくすという心から嬉しそうな笑い声。

「やつと、やつと会えましたあ……博士、私はずっと……」

「オイ！ テメエ、あの女と何の関係が……」

先ほどからの明らかな態度。ヨーゼフと女性が既知の仲であることは確実だ。

レナートは説明を求めようと、ヨーゼフに飛びかからん勢いで質問する。

「ねえ、博士……私はね、ずっと貴方とね、でも、長くはないんですよ」

「……彼女はアナスタシア。かつての私の友人で、恐らく『裏切り者』の総指揮官。そして――」

「それで、この子を見つけたんです、ねえ、博士。もういいじゃないで



すか。だから――」

説明するヨーゼフ。それと同時に、女性、アナスタシアはまるで恥ずかしがりやかな少女が好きで男の子に告白するかのよう、緊張したか細い声で、そこで初めてヨーゼフたちに振り返り、己の目的を、言い放った。

「クローン生体工学の若き天才だ」

「私もこの子も貴方も、楽になりましょうよ」

振り返ったそのアナスタシアの顔を、ちようど基地で起こった爆発により鮮明に照らし出されたそれを見て、レナートと部隊の班員たちは硬直する。

風にそよぐ美しい銀髪。触れれば壊れてしまいそうな儂げな色白の肌。憂いを帯びた、優しさに溢れながらも少し困ったような穏やかな微笑み。

それは、彼らが敬愛する班長エリシアのものと、全く同じだったのだから。

### 第38話 病蝕

「……何モンだ、あんた」

レナートは動揺をできる限り体に出さないようにこらえながら、アナスタシアを、自分達に向き直ったその姿を見つめる。

よく見てみれば、完全に同じ、というわけではない。エリシアよりも身長は高いし、黒の白衣から少しだけ覗く肩には縫合の跡のようなものがある。

だが、その顔のパーツ、細かい仕草はほぼ完全に一致しているのだ。母親？ 双子の姉？ といった予想が上がるが、レナートはエリシアの出自を思い出し、即座に己でその予想を否定する。

そして、その出自から、一つの答えを導き出した。

「あはハ……博士、大丈夫です、まだ間に合いますよ」

しかし、レナートを無視するその目線は、ヨーゼフに注がれていた。自身を追い詰める幹部搭乗員、副官、それに加えての戦闘員。追い詰められている状況なのだが、その目はただ一人しか見ていない。

「私が答えよう、レナート君……恐らく君も察しはついているとは思うが……彼女が、ロシアの機密研究院に次代の人体クローン技術を提供した張本人。……そして、そのクローンの遺伝子提供者だ」

「私が自分の意思でやったのは前者だけですよ、それも今思うと……色々事情があるんですよ、私にも」

一瞬どこか遠くを見るような仕草をした後、目線を戻すアナスタシア。

何か変わった動きを見せる事もなく、ただ佇んでいる。

「私が、私のせいでこんな事になっちゃったんですよ……エリシアって言うんですね、この子」

左手にぶら下げたボロボロのエリシアをちらりと見て、アナスタシアは悲しそうな笑みを浮かべる。

「かわいそうに……こんなに小さいのに手術を受けて、こんな所まで連れてこられて……」

その笑みは、徐々に歪んでいく。それに呼応してなのか、その左右を守る二匹の異形のテラフォーマーがどこか落ち着かない様子を見せる。

「ごめんね……私が悪いんです、だからあなたも博士と一緒に……楽にしてあげるからね……」

その瞳からは涙が流れ、それが偽りのものではないという事はその場にいる全員が理解できる、その事がはつきりとわかるほどに感情が籠っているものだった。

だが、その表情から、ふと、感情が抜け落ちる。そして、短く息をつき、初めてヨーゼフ以外のそこに集まる戦闘員たちへと目を向けて言葉を放った。

「あ、目障りなので死んでください」

その言葉と同時に、異形のテラフォーマーが動き出す。あまりに唐突な、戦闘開始。

素早く変態を済ませ、最初にそれに対応したのはレナートだった。だが、その標的は異形のテラフォーマーではない。レナートは一直線に走る。左右から迫りくる異形のテラフォーマー。その中心を走り抜け、狙うは、アナスタシア。

異形のテラフォーマーはヨーゼフに攻撃する様子はなかった。ただ、連れてきた戦闘員に襲い掛かっている。

当然、それに対応する戦闘員たちも素人ではないのだ、変態を行い、それに対応している。

「お嬢を……離しやがれ！」

レナートはその拳を、アナスタシアの左腕に繰り出す。相手の能力はわからない。が、少なくとも変態はしていない。落ち着き払った態度からすれば何らかの対策はあるのだろうが、少なくともエリシアを離すくらいはするだろう。そう判断しての攻撃だ。

「……」

無言のアナスタシア。レナートの拳は、回避動作を取ることもしな

い左腕に直撃する。

カブトムシの腕力で殴られたそれは。

「なに……？」

一瞬の内に黒色に変色し、その打撃と衝撃を受け止め。直後、レナートの拳はぬるりとした感触と共に滑り、受け流される。

黒色の変質。それは、異形のテラフォーマーと同じ能力。それに加えての、粘液のような何か。

二重の防御によって、攻撃はいなされてしまった。

「ッ！ だったらー！」

滑らされた拳をそのまま勢いに任せ、次はもう片方の拳で、今度はその左腕の根本、肩を狙う。

「あらあら……」

黒色の変質はその範囲を増し、肩口までをカバーしようとする。が、今度はレナートの方が一手早かった。

その防御が間に合うよりも早く、拳は防御のされていない、元のひ弱な肉体が晒された肩に直撃し、その骨を砕き、へし折る。

ぐらりとアナスタシアの体がゆらぐ。隙を晒した。ここで、胴体や頭を狙うべきか、エリシアの救出を優先すべきか。

一瞬考え、レナートはアナスタシアの左腕を、エリシアを掴んでいるその手に打撃を加え、離させる。

戒めを解かれ、宙に投げ出されるエリシア。レナートは素早く反応し、放り出されたエリシアを抱きかかえる。

追撃か、アナスタシアの左腕がエリシアを助けるために跳んだレナートの脚を掴む。だが、その力はレナートを止められるほどではなく。あつさりと振りほどく事ができた。

そのまま、問題なく着地。

「レナート、足を切り落とせ！」

その時、後方で部隊を指揮し、異形のテラフォーマーに対処しているヨーゼフから、唐突に、唐突な内容が焦った大声で伝えられてくる。

「ああ？ 何言って……？」

「……ニガサナイ……絶対に……」

それは、レナートがその言葉の意味を考えようとしたのと同時だった。

呪詛のような声と共に、レナートの脇腹に、鋭い痛みが走る。

「がっ……!?!」

咄嗟に視線をその痛みが走った場所に移す。そこには、矢のようなものが刺さっていた。

「こっちの体に移しておいてよかったです」

アナスタシアの白衣の袖口から覗いていたのは、小型のクロスボウだった。

白衣の袖に仕込めるほどの小さいものだ、威力も射程も大したものではない。だが。

レナートの体が、徐々に麻痺して動かなくなる。

せめてエリシアだけでも、と部下を呼ぶが、異形のテラフォーマーとの戦闘でそれどころではないようで、焦った様子を見せてもこちらの戦線に参加できる余裕はなさそうだ。

『オオベツコウバチ』の毒を濃縮したものですよ。お味はいかがですか?」

先ほどの攻防から、アナスタシアの近接戦闘能力はあまり高いものではない、という事はわかっていた。

だったら、それを補うための暗器を仕込んでいる、という事くらいは想像できたはずなのに。

自分の見通しの甘さに怒りを覚えるレナートであったが、今はこの状況を何とかせねば、と反省を中断し思考を巡らせる。

「こっちの体……?」

霞む意識の中、レナートは時間稼ぎを選ぶ。疑問に思っていたのも事実だ。先ほどのアナスタシアの言葉。

こっち、とは何なのか。

「あれですよ」

アナスタシアの指の先にあったのは、首無し of 裸の女性の死体。

左胸に穴が開き、それが死因である事が想像できるが。

「まあ、貴方にはどうでもいい事です」

ふいと顔をそらし、倒れこんだレナートが見る事のできない、戦場の側を見るアナスタシア。

「えへへ、来てくれるんですね、博士」

嬉しそうに笑うアナスタシア、その視線の向こうで、それを睨むヨーゼフ。

異形のテラフォーマーはヨーゼフには反応していない、いや、そう命令が出されているのだろう。

そう踏んだヨーゼフは、先にこちらへとやって来ていた。

これまでに得られた情報。先ほどのレナートとの戦闘。そこから導き出される、答え。

あまりに、救いの無い話だった。

「アナスタシア……君の体はもう……」

どうしようもない虚しい感情と、どうしてこうなってしまったんだ、という行き場の無い怒り。

その二つが混じり合い、ドロドロとした水溜まりとなる。

「私の体はもう、火星への旅にすら耐えられるものではなかった……だから、代わりを作ったんですよ」

特に感情を見せる事もなく語るアナスタシア。

代わり。あの体は、自分のクローンなのだろう。そして、そこに自分の頭を移植していたのだ。

投石によって心臓を貫かれ、あの体は死んでしまった。

それはつまり、再生能力の類は持たないという事。

クローンといえど、MOがコピーできない以上はオリジナルの体を持つ能力は失われているか、またはごく部分的にしか残らないはずだ。

「今の私の体は本物ですよ、私自身のそのものです」

オリジナルの体は、恐らくコールドスリープでもして持ってきたのだ。恐らくは、そちらの方が戦闘に優れている体なのだろうから。

「体を入れ替えれば、生き永らえる事ができる……と、思っていたんで

すけどね」

独り言のようにつぶやき、空の方を見るアナスタシア。

「頭が、ダメになるんですよね……精神の侵食は、止めようがないのですから……」

自分の体をいくら入れ替える事ができても、頭部だけはどうしてもない。頭部にもαMO手術の影響がある限り、それはリスクを回避できる手段とはならなかったのだ。

「君は……自分のクローンを……」

「ええ、何百体と使い潰しましたよ……ああ、安心してください。最初から私と同じ体は、心の無い人形しか作れませんでしたから……」

エリシアやナターシャは、赤ん坊の状態から育てられたという。

アナスタシアが作ったのは、自分の頭を移植するための自分と同じ体のクローン。

それを作るには、きっとそれなりのリスクがあったのだろう。

「……何故、君の命は私より早く尽きてしまうんだ」

ヨーゼフの疑問、それは疑問、というよりは答え合わせであった。

αMO手術を受けてから経った時間はヨーゼフの方が圧倒的に長い。

本来ならば、ヨーゼフの方が先にガタが来る、と考えるのが当たりまえと言えよう。

だというのに、アナスタシアはすでに自分の体では火星への旅の間を耐えられないほどに限界が来ているのだ。

「幾度となく、己の身に手術を施しましたよ……もう、数えるのも億劫になるほどに」

手術。それは、何の手術だったのだろうか。重傷を負った体の治療。生まれつきの病のタイムリミットを伸ばすためのもの。そして……

「ねえ、博士……私、博士の論文、読んだのですよ」

論文。どれの事だろうか。ヨーゼフは考える。恐らく、MO手術に

関するものだろうが。

それに関する研究の論文は機密資料である事は言うまでもないが、『裏切り者』の雇い主である中国ならば、盗み出す事も可能であろう。『MO手術の重ね合わせについて、生態的に近い生物であれば十分な成功が望める』。貴方の書いたものです、博士」

「……それを見て、私は思ったのですよ。『生態的に近い』に適應されるのは、一回目に受けた手術のベース生物だけの話なのか？ とね」それは、ヨーゼフにとってはただの答え合わせ。アナスタシアにとっては、尊敬する研究者への、慕う男性への、己の研究成果の発表会。

「総員、下がれ……ここは私が引き受ける」

ヨーゼフの言葉と共に、数人の犠牲者を出しながらも異形のテラフォーマーを相手にしていた部隊は、躊躇いながらもレナートとエリシアを連れて撤退を始める。

ふと、ヨーゼフは物陰から『裏切り者』の兵士が自分を狙っているのに気づいた。それに対処しようとした、その時。

「邪魔をするな」

冷たい声と共に、アナスタシアの背中から、尻尾が伸びた。いや、それを尻尾とっていいものなのだろうか。

正確には、尾てい骨の辺りから骨と、それに付随する肉と皮膚が延長されるかのように、長い腕が一本、生えていたのだ。

それは、異形のテラフォーマーと同じ、本来の人間には存在しない、異形の部位。

それが、『裏切り者』の兵士の首を掴み、持ち上げる。そして、杖で一回地面を叩く。

直後、ヨーゼフははつきりと見た。兵士の首を、皮膚の中を、無数の何かがい回りながら頭部に上がっていくのを。

「あが……ああああ」

声にならない声を出しながら兵士は泡を吹き、そのまま絶命する。

それを見る事もせず、放り投げるアナスタシア。



「ねえ、博士……見ていただけですか、認めていただけですか……私の研究成果を」

どこか病的な目で粉末型の『薬』を口に含むアナスタシア。そして、変態が始まる。

外見に、そこまで変化は無い。少し肌の色が魚類型のそれに変わった程度だ。

全身を粘液のようなものが覆い始める。

明確な変化は、すぐに訪れた。

肉をかき分けるような、耳障りな音。

それと同時に、アナスタシアの体の肉が沸騰するかのようになり、ぐにやぐにやと蠢く。

体の一部が黒色に変化し、まるで別の生物であるかのようにぐねぐねと暴れまわる。

レナートによってへし折られていた左腕はみるみる間に再生し、元の姿を取り戻した。

テラフォーマーによって接続されていた首の継ぎ目が塞がっていく。

左眼を突き破り、緑色の袋のようなものがそこから飛び出してくる。

全身の部位が、それぞれ別の生物であるかのように全く別の特性を示していく。

その蠢く肉塊の変化を見つめながら、ヨーゼフは一人、嘆きとも失望とも絶望ともとれる声色で、呟いていた。

「なあ本多博士……私達は、どうしてこうなってしまったのだろうか……」

アナスタシア・エリセーエフ

国籍：ロシア

31歳 女 152cm 49kg

αMO手術 “魚類型”

——マンボウ——

+

αMO手術

”寄生生物型”

——ニホンカイレットウジョウチュウ

”寄生生物型”

——ハリガネムシ

MO手術

”寄生生物型”

——スパルガナム・プロリフェルム

”寄生生物型”

——リベイロイア

”寄生生物型”

——ペンネ”寄生生物型”

——エキノコックス

——”寄生生物型” トキソプラズマ寄生生物生物型  
デイクロコエリウム デントリテイ

——クム生物型寄生シユードテラノーバ

——”メルメコネマ” ——寄生生物型

——物型型フィラリ ——ア生物型

寄生生

きききせせい口ドせいぶつせいつバゾウム型

: : : :

### 第39話 ”私”の話 (前編)

インターネットの海にて、最弱、と呼ばれている魚類が存在する。

——水面からジャンプするというダイナミックな動きをするが、着水した時の衝撃で死ぬ

——餌にした小魚の骨が喉に詰まって死ぬ

——付近の仲間が死んだショックで死ぬ

——皮膚が弱く、触られただけで跡が付き、それが原因で死ぬ

列挙していけば限りがない、何故自然界にいるんだと言われても仕方がないあんまりな情報の数々。

だが。

それらのほとんどは、虚偽である。

彼らの体は確かに弱い。

触れば手形が付いてしまうし、彼らの体内は蟲の楽園である。

だが、その数々のあんまりな情報の裏には確かな真実がある。

その最弱と呼ばれる生物が、一つの種として大自然の生存競争を生き抜いているという事だ。

わたしは、どうやらとつても頭がいいみたいです。

周りの人はみんな、私を褒めてくれるんです。

嬉しいなあ。だったら、もっと頑張らなくちゃ。もっと頑張つて、

みんなに喜んでもらわなくちゃ。

わたしは、要領がよくないんです。男の子はそれでからかってくるし、女の子はひそひそと私の悪口を言っています。ええ、しようがないんです。悪いのは私なんですから。皆に認めてもらわなくちゃ。

『自分がたくさんいたら楽しそうだよね』

数少ない友達の一人が、そんな事を口にしたのは、いつの日だった

でしょうか。

ふと、考えてみました。

自分と同じ考え方が、沢山。仲良くできるんだろうなあ。友達もいっぱいできるだろうなあ。仲たがいもしないでしょう。だって、みんな自分なのですから。

勉強しました。それはもうたくさん。そして、たくさん知りました。重い病気の人が、これが実用化されたら助かるかもしれない、という事。ちよつと残酷で認められないかもしれない技術である、という事。

沢山の人が救われる。ええ、いい事ではないですか。何故認められないのでしょうか。

そうだ、はつきりと実績を出せばいいんです。そう考え、わたしは研究を始めました。

人間と呼ぶにはあまりに痛ましい、アナスタシアの姿。体の所々は異形へと変形し、自らの体に改造を施したのか、尻尾のように尾てい骨から生える長く、おぞましい三本目の腕。

無数の寄生生物の能力が一つの人体に宿り、蠢いている。理屈として、ヨーゼフは理解していた。

$\alpha$ MO手術の術後には、特定の生物の通常のMO手術の成功率は非常に高くなる。それこそ、ほぼ確実、というほどに。

0.3%の手術の成功が条件で30%がほぼ100%に。狙ってできるものではないのであくまでもオマケ程度のメリットだ。 $\alpha$ MO手術をさらに施す場合も成功確率こそ上がらないものの近縁種という本来の条件を無視して行う事ができるので、流石にそこまでのチャレンジャーは普通ならばいないだろう。そう、普通ならば。

$\alpha$ MO手術 魚類型『マンボウ』。彼女は、これを狙ってやったのだ。最初から、無数の寄生虫の能力の核とするために。

「ねえ、博士……どうですか？ 凄いでしょ？」

心から嬉しそうに、答えを期待した様子でアナスタシアはヨーゼフに伺いを立てる。

その答えは、無言で首を横に振る事だった。

悲しそうな目、それを見て、アナスタシアは首を捻る。

「そう、ですか……だったら、実戦でわかってもらいます！」

言うなり、アナスタシアは杖で地面を叩く。

それに敏感に反応し、異形のテラフォーマーが二匹、左右からヨーゼフに向かって突撃する。

普通のテラフォーマーに比べ、やや低速。しかし、わき腹や尾葉のあるべき部分から手足が生えているという異形、盛り上がった筋肉、そして、全身から生える棘。

報告の姿に近いが、全身から生える棘、というものがあるという点で少し異なっている。

その棘をちらりと見て、ヨーゼフは分析する。

『オニヒトデ』の棘、か」

猛毒の棘と再生能力。第四班副官、欣のベース生物。その棘が、いや、恐らくは、その能力の全てが異形のテラフォーマーに移植されている。

元々はテラフォーマーの臓器であるモザイクオーガン。それは、生物の能力の移植を簡単に行う事を可能とし、わざわざ危険な手術を行わなくても問題なく能力を手に入れる事ができる。

そして、その生物の能力のサンプルが、例えばそれを手に入れた人間の体の一部があれば十分に能力を手に入れる事が可能なのだ。

オニヒトデの能力持ち、つまり欣の腕を何本か切断して、テラフォーマーに手術を施したのだ。

迷いなく、ヨーゼフはアミーバを展開しテラフォーマーの突撃を受け止める。

アミーバは液体状と言えない事もないが、元はヨーゼフの体の一部であり、液体みたいな固体、というのが実情だ。何本もの棘と力任せの一撃。棘は突き刺さりそれに仕込まれた毒も合わさって激痛を与える。

しかし、ヨーゼフは退かない。

植物プランクトンであるフィエステリア。異形のテラフォーマーは本来ならパワーではとても抑えられない相手だ。

だが、現実には受け止める事ができている。

何故なのか。

それは、ヨーゼフの現在の姿が物語っていた。

次々とアミーバは展開していき、その体は徐々に人間のものから遠のいていく。

『薬』を、普段より多めに使っているのだ。

自身の体の心配など、後遺症の事など考えられる状況と相手ではない。

アナスタシアもきつとそれは同じなのだろう。理由は異なるだろうが、自身の体の状態など顧みない状態である。

五分五分の攻防。だが、それは相手が2体の異形のテラフォーマーに限った場合の話。

「がつー」

ヨーゼフの鳩尾に、黒色に変色し硬化したアナスタシアの拳が叩きこまれる。

異形のテラフォーマーにも移植されている『ハリガネムシ』の能力。それは、部位の硬化化だけでなく、ハリガネムシの体内を支える強靱な筋肉による筋力強化も担っている。

異形のテラフォーマーを食い止めるためのアミーバを左右に割り、そちらに集中も割かなければならない状態で、さらにアナスタシアも攻撃を仕掛けてくるといふこの状況。

吐き気と苦痛を堪えながら、一步後退、そして、左腕から生えたストロー状の器官、ペダンクルと呼ばれるフィエステリアの捕食器官をアナスタシアの左胸に向けて放つ。

硬化が間に合わず攻撃は左胸に到達し、穴を開ける。

本来ならば死は免れない、意識を奪える可能性も高い致命の一撃。

だが、ヨーゼフは悪寒を感じペダンクルを引き戻す。

変化は、ヨーゼフが直感するのとほぼ同時に起こった。



アナスタシアの心臓に開いた穴が、みるみるうちに塞がっていく。あのままペダンクルを戻さなければ、再生した肉とその部位を覆う硬化に埋まって動かせなくなるところだった。

左右のアミーバを一部呼び戻し、もう片腕で再度振るわれるアナスタシアの拳を包み込むようにして迎撃する。

やけに感覚が軽い。……こちらにも、嫌な直感。

アミーバ越しに、アナスタシアがクスリと笑うのが見える。

その腕は、元の白い肌。……硬化していない。

直後、ヨーゼフは、何かが体に侵入してくる感覚を覚えた。

勉強して勉強して勉強して。わたしの周りには、誰もいなくなってしまう。大人の人達は、最初は褒めてくれたのに、少しずつ気持ち悪がって。友達は、何か違う場所にいる人を見るような目をして。

わたしは、皆と仲良くしたいのに。わたしはただ、皆の役に立つ何かを作りただけなのに。

運動は苦手です。元々、どんくさい性分のわたしは、勉強の事に加えてさらに皆を苛立たせてしまうのでしよう。

そんなある日、わたしは自分の研究を発表する会に参加しました。

これで認められれば、きつとみんなわたしを見直してくれるはず。

そう思い、わたしは頑張りました。

そこで、ある人と出会いました。優しい、そして何より、わたしよりはるかに凄い研究者と。

いつか、あの人に認められるような研究成果を出して見せる。世界のため、未来のため。あの人と同じ、わたしが目指していたその目標は、いつしかあの人に褒めてもらうための道具になっていたのかもしれない。

迷う事なく、ヨーゼフはアナスタシアに触れられた部分のアミーバ

を、自分の肉の一部を岩に叩き付け力任せに引きちぎる。

これまで不可解だった全てが繋がりに、一つの答えを導き出す。

あまりに悍ましい、理論上は可能でもそれをする事への恐怖と狂気。

何を思ったのか。何が彼女を追い詰めたのか。

じりじりと迫って来るアナスタシアの皮膚のところどころが細い線上に盛り上がり、動き回る。

麻薬中毒者の幻覚のようなその光景。だが、ヨーゼフはそれが幻覚ではないと確信した。

まず初めに、MO手術として持っている能力。

硬化と筋肉強化。それを担っているのは、『ハリガネムシ』の能力。心臓への致命傷を一瞬で塞ぐ高度な再生能力。頭部さえ無事であれば全身を再生することも可能な寄生虫『ニホンカイレットウジョウチュウ』の能力。

だが、これら二種はマンボウの寄生虫ではない。

大きく異なる生物の因子が拒絶反応を起こし、本来ならばマンボウと同時に能力を得る事はできない生物たち。

では、何故。簡単な事だ。生態的に関連する生物ならば重ね掛けが可能。それは、マンボウ、ベース生物だけに適合される法則ではなかったのだ。だったら、何か。そんな事、わかりきっているではないか。

そもそも、MO能力の受け皿となっている生物は何か？

その生物がMO能力を獲得するために移植した臓器の持ち主、その生物は何か？

そうだ。本来昆虫を宿主とする『ハリガネムシ』。

人間を終宿主の一つとする『ニホンカイレットウジョウチュウ』。

『人間』と『テラフォーマー』。それらも、含まれていたのだ。

……しかし、それは大した問題ではないのだ。

アナスタシアの持っている能力の幅が増えただけ、だけで済ませられない厄介な状況だが、それをだけで済ませなければならぬほど重たい事実がもう一つある。

「……君の体の中は、どこまで人間だ？」

思わず呟いたヨーゼフに、アナスタシアは苦笑する。命の取り合いに、無駄口は不要だ、そう言いたいのか。

そんなヨーゼフの考えを即座に否定するように、アナスタシアは白衣をたくし上げる。

いきなりのサービスシーン、これが何もかも終わった平和な地球なら、第三班の連中がすごく喜んだかもしれない。そんなくだらぬ事を考えるような暇はなく、露わになった白いお腹から、ぼとぼと何かが産み落とされる。

正確に表現すれば、腹の所どころに赤点ができ、直後、細長い何かのアナスタシアの体外に放出される。

地面に落ちぐねぐねと動くそれは、それで独立した一つの生物である事ははつきりと示していた。

最悪の答え合わせだった。

アナスタシアは、自身を寄生虫の巣にしていたのだ。薬無しで変態できるαMO手術の特性を生かし、寄生虫にとって住みやすい環境であるマンボウの特性を常時発動。無性生殖の特性を持つ寄生虫の能力を使い、体内に数十、へたをすれば数百という種の寄生虫の卵を生成し、生み出す。それは何に使われているのか？

異形のテラフォーマーに施された『ハリガネムシ』の能力。そして、異形のテラフォーマーを異形のテラフォーマーたらしめる特性。

『リベロイア吸虫』。哺乳類や水鳥を終宿主とする、中間宿主の両生類を多肢の奇形へと変化させる寄生虫。

『ハリガネムシ』『トキソプラズマ』。宿主である生物の脳に影響を与え、行動をコントロールする寄生虫。

これらを用いて、テラフォーマーを改造し、操っていたのだ。

「おわかりいただけましたか、博士」

白衣を元に戻して腹を隠し、先ほどと変わらぬ憂いを帯びた笑みを浮かべ、アナスタシアはヨーゼフにまるであやすかのように、説得するかのよう言葉をかける。

「もう後戻りなんてできないんです、救いなんてないですよ」

痛い。寒い。ああ、わたしは、こんな所で終わるのでしょいか。

人類の未来のためだと言われて、わたしは喜んで協力しました。

すやすやと眠る、わたしと同じ遺伝子を持った無数の赤ん坊。彼女たちは、どのような人生を歩むのでしょうか。こんな事を望むのは間違っているのかもしれませんが、でも、せめて幸せになって欲しい。

この研究は最後まで見届けなければならぬ。

そんな私に突きつけられたのは、銃口でした。

私の持つ技術さえ手に入れば、用済み。笑っちゃいますよね。ドラ

マチックですよ。悪い方向に。

命からがら逃げだして、雪山で倒れ、無数の風穴を体に向けられて死を迎える。これが私の人生、なのでしょいか。

思い返せば、こんな人生も悪くは――

いや、そんなわけがない嫌だ嫌だこんなところで終わるなんてそうだこれはきつと夢なんですあははははわたしっしたら何考えてるんでしょうこんな山谷大きい人生なんてわたしみたいなのつまらない人間にあるわけがないじゃないですか笑っちゃいますねもうあんなに素晴らしい人たちに会えて立派な研究者になろうって思っておもしろいくらいに上手くいって国家機密研究なんてものに関わらせてもらって自分と同じ赤ちゃんがたくさん？いやーすごいですね私14ですよ14にしてわたし何百何千の子持ちですよおもしろいですねうふふあれあれもしかして子どもじゃなくて妹っていうのでしょ

かこのあたりの事はよくわからないので誰か教えていただけるとありがたいですねえ誰か、誰か……助けて……くださいよ……

異形のテラフォーマー二匹の攻撃を紙一重で回避しながら、アナスタシアの攻撃を捌き、時に反撃を繰り返す。

オニヒトデの能力持ちである異形のテラフォーマーは勿論の事、アナスタシアにさえ直接の接触は避けるべきだ、という重たい条件が押し掛かる。

寄生虫の中には、脳を食い荒らす種も存在する。本来ならばゆっくりとした食事で症状もそれに合わせてゆっくり進行していくのだが、それを大量に体内に注ぎ込まれたら。それらの全てが、脳を食う、それだけを考えて体内を動き回る、そう考えたら。

それは、本来の生態ではない。だが、異形のテラフォーマーがアナスタシアの指揮に従っているところを見るに、アナスタシアは寄生虫を完全に御する何らかの方法を持っている。

一度体内に潜られてしまつては対処方も何もあつたものではない。そのまま、頭へと移動して……である。

硬化、筋力強化、再生に加えて触れられただけで死がほぼ確定するその能力。

ヨーゼフの作り出した $\alpha$ MO手術の概念、そして能力の重ねがけというさらなる発展形。それを応用したアナスタシアの生み出したクローン技術を用いた $\alpha$ MO手術の成功体の移植による $\alpha$ MO手術の複数保持。

同じ目的のために前を向き、それを叶えるために高みを目指した二人の科学者の生み出した技術。それは、邪悪な形で結実していた。

そして今、その力を振るい全てをぶちこわしにしようとする、かつてあらゆるものを奪われた哀れな科学者と、狂気に囚われ奪つてしまった無数の命、それを償おうと戦う科学者。両者の意思が激突し、雌雄を決しようと暗色の火花を散らす。

異形のテラフォーマーは既にテラフォーマーとしては死に体のよ

うなもので、その行動はハリガネムシに、さらに言えばそのハリガネムシを操っているアナスタシアにコントロールされている。だから、本来は通用するはずのフィエステリアの毒素は効果が薄いようだ。ならば本体であるアナスタシアの方なら……と考えたが、動きが鈍る気配すらない。

そもそも、流石に異形のテラフォーマーとの視界の共有まではできないであろうアナスタシアが異形のテラフォーマー2匹を操りながら自分も戦う、というのは無理があるので、実際には戦え、くらいの大雑把な命令をしているだけなのだろうが。ハリガネムシの特性からしてもそこまで複雑な命令は出せないはずだ。

何とか態勢を立て直し、状況を打破しなければ、と考えるが、相性も戦力差もありすぎる。

毒を空気中に散布してしまったせいで増援を呼ぶ事もできない。敵の増援も防げるとはいえ、ヨーゼフの完全なミスである。

アナスタシアの三本目の手が、尻尾のようなそれがまるで蠍の尾のようにアナスタシアの両手での抱擁を拒絶するヨーゼフの懐に潜り込もうとする。硬化していない。それはつまり、寄生虫を送り込もうとしているという事だ。

硬化した部位での攻撃ならば防御する、最悪でも体で受ければいい。しかし、これは触れた時点で触られた部位によっては死が確定する。首など掴まれたら、それこそ最後に一矢報いる事すらできず絶命するだろう。

「キ、イイイ！」

「!? しまっ……い！」

身を翻したヨーゼフの体を、巨大な弾丸のような黒と棘の塊が捉え、吹き飛ばす。

左腕で咄嗟に顔は守ったものの、ボキボキという音に肉を掻きまわされる有機的な音が合わさり、致命傷に近い傷を負わされたのだと痛みが麻痺しているヨーゼフは掠れゆく意識の中で考える。

限界だった。体も、精神も。

相性の悪さによって徐々に追い詰められる戦況。αMO手術の副作用によって徐々に失われていく人間の思考。昔馴染みの変わり果てた姿を突きつけられた事によるショック。

自分は十分に頑張ったのではないだろうか。

もう、アナスタシアの言う通り、楽になってもいいのではないだろうか。

そんな、甘えに近い、死という救いを求める感情が心の奥底からひよっこりと顔を出す。

馬鹿を言うな、とそれを押しとどめようとするが、その抵抗さえ弱弱い。

「……安心してください、博士。貴方を一人にはしませんから。私の体ももうもたないでしょうし……」

柔らかな、慈愛に満ちた表情でアナスタシアは両手を広げ、ヨーゼフに近づいていく。

このまま、彼女の胸の中で最期を迎えるのもそれはそれで――

「エリシアちゃんも来ますから。私と博士、エリシアちゃんたち、私の子たちと、向こうでゆっくり幸せに過ごしましょうよ」

死後の世界など、ヨーゼフは信じていない。元々の気質もあるのだが、それを信じたら、ヨーゼフが奪ってきた彼らが死後に楽しく過ごしている、などと甘い考えで自分の贖罪に甘えが出てしまいそうだからだ。

だが、そこではなかった。ヨーゼフの心に去来したのは、一つの走馬灯と呼ぶべきものだった。いや、ヨーゼフが人間性を喪失していく過程で忘れてしまった記憶の一かけら、と呼ぶべきか。

「はかせー、一つ、約束してほしい事があるのです」

銀髪の小さな、しかし確かな意思を持った少女が、ヨーゼフに、数多くの子どもを実験室送りにした悪魔に対して微笑みながら、少し不

安そうな顔で話しかけてくる。その手には包装がされた箱が握られていた。

「どうした、実験の順番がつかえている。早くしろ」

それを冷たい目で見下ろし、ヨーゼフは急かす。

「はかせはね、いつか私と同じような……うん、私の妹に会うかもしれないのです」

少し言葉を詰まらせながら、少女はヨーゼフに自分の意思を伝えようとした。その時のヨーゼフは、それをとつと聞いて実験を進めたい、としか考えていなかったが。

「そうしたらね、えっと」

「守ってあげて、欲しいのです。私にそうしてくれたみたい」

あの時の彼女は、何を思ってあの言葉を、自分に言ったのだろうか。自分が実験材料にされ、殺されるとわかっていて、最後のお願いが、それだったのだろうか。

「……ああ……」

もう、自分は長く持たない。それは、わかりきっている事だ。目の前の変わり果てた仲間も、それは同じ事。

だが。そんな自分達に。未来ある子どもを付き合せてははならない。

「……思い出すのが、あまりに遅かったな……」

「博士？」

両手を伸ばすアナスタシア。それを拒絶するかのようにヨーゼフは一步後ずさり、そして首にかけていたペンダントを、青みがかったスマイレ色の宝石が入ったそれを右手で握り締める。

「君たちは、こんな恐怖に耐えていたんだな……」

それから手を離し、白衣のポケットに手をつ込む。その行為の意味を察したアナスタシアの目が驚愕に変わり、強引な様子で手を伸ばす。だが、一步遅かった。



白衣のポケットから、大量のカプセルの入った瓶を取り出し、迷う事なく口の中に流し込む。

ぼこぼこ沸き立つような変異、それと同時に間近に迫る死を感じながら、ヨーゼフは力の限り叫んでいた。

「そうだ……私は……未来を救う事で償うのだ！」

## 第40話 ”私”の話 (後編)

フィエステリア・ピシシーダ。

通常のMO手術では適性を得る事が極めて難しい、特殊なベース生物の一つ。

その理由はいくつかある。

第一に、単純に適性を持つ人間が極めて限られているという事。 $\alpha$ MOならともかく、通常のMOでは地球上を洗いざらい探してもその数は方に満たないであろう。これは、他の $\alpha$ MO手術のベース生物にも言える事であるが。

次に、フィエステリアという生物の特性。休眠形態から遊泳形態に、遊泳形態からアメーバ形態に、人間がその受け皿となるには荷が重い、急激かつ急速な変化。

最後にこれが一番大きな理由であるが、フィエステリアが単細胞生物である事。

一つの細胞で独立した生命体として成立している存在を、人間という多細胞生物に融合させ、その器で能力を起動する。これの解決には多くの時間を費やす事となった。単体で完成している生物の能力を、群体によって構成される生物がその総体で能力を使用できるように移植しなければならぬのだ。中国から極秘で入手した『紅式手術』のプロトタイプのリデータも参考の一つとし、いくつかの技術的制約をクリアしようやく完成となったそれは、MO手術の本場、技術大国ドイツの英知の結晶と言えるだろう。

そして、この技術が最初に用いられたのは、 $\alpha$ MO手術、その完成形の初の被術者であった。

$\alpha$ MO手術という技術。単細胞生物のMOベース化という技術。

これらを組み合わせた、まだ十分に安全の確認もできていない手術をその被術者は受け入れ……とはいっても彼は死刑囚であったため、拒否権は最初から無かったのだが、とにかく彼は自ら進んでそれを己の身に施した。

結果は成功。彼は強大な力を手に入れ、そして、自らの理論の正しさを証明した。

そう、それが極めて低確率の成功を偶然手にしたと知らないまま。

熱い。全身を灼熱に炙られているかのような苦痛を伴った熱さだ。

体中の神経が別の生物に作り替えられていく細胞たちの悲鳴を集約し脳に伝え、臓器は変化を必死に食い止めようとフル稼働する。

今の私の体内は、人間という生物としての体は地獄の釜と化している。

これが、私の受けるべき罰なのだろう。これが、私という人間の行く末、末路なのだろう。

ここで死ぬのはまだ早い。最後に、やらねばならない事があるのだ。

阻止しようと伸ばされた手を振り払い、一歩下がる。

私は、目の前のアナスタシアを見据える。

彼女がああ研究会の後どのような経緯を辿ったのか、私は知らない。何故”裏切り者”に与しているのかもわからない。

しかし、どのような理由があつたとしても。彼女が私のかげがえのない友人であり、研究者としての知を競い合ったライバルであつたとしても。いや、だからこそ。ここで決着を付けなければならぬ。

「博士、どうして、でしょうか……そんなに私の手で楽になるのが嫌なのですか……？」

この戦闘に、私の勝利という結末は存在し得ない。

過剰摂取。変態用の薬を多量に摂取する事により変態の度合いを通常よりも進め、能力を高める手段。

通常のMO手術であれば、まだ元に戻る事のできる希望はある。しかし、αMO手術のそれは通常の変態でもその度合いは過剰摂取に近い状態となっている。これ以上度合いが進めば、それは最早歯止めが効かないものとなる。

相討ちか私だけが死ぬか。結末はその二択でしかない。良くてイーブンだ。

そう、この戦闘ならば。

「わからない、わからない、わからない！ 何故なのですか!? こんなに好き勝手に利用されて、大切な家族を殺されて、兵器として、国に利益を渡すための道具として使い捨てにされて、それでもまだそんな国の為に、こんな世界のために抗おうとする、私にはわからないのです！ ああ博士、貴方も私と同じでおかしくなってしまったのですねそうですね手術を受けたのは博士の方がずっと前なのですから症状の進行もきつと博士の方が速いんですよねそうですねわかりますきつとそうですねに決まっています！」

……認めたくない、とばかりに早口でまくしたてるアナスタシア。改めて、私は彼女との出会いを思い出す。

研究会会場の廊下でぶつかって涙目になっていた彼女を。その性格と能力により孤立している事に寂しさを感じていた彼女を。研究会で本多博士と私に惜しくも及ばず、悔しがる彼女を。長きに渡って研究を重ね、周囲から若き天才と持て囃されていた私と本多博士。

そう呼ばれてはいたが、きつと私は、もしかしたら本多博士でさえも、天才などではなかったのだ。境遇と弛まぬ努力、恵まれた機会。そして少しの才能。その全てが合わさって、あの場に立つ事ができていたのだ。それと同じ領域に私達の半分と少ししか生きていない段階で到達した彼女。

彼女の存在が無ければ、我々はとつとくにアネックス一号との合流という形の勝利を掴んでいただろう。

ロシアの研究院が彼女をスカウトし、クローン技術を最大限に発揮し、それを磨く機会を与えなければ。彼女を始末しようとしなければ。逃げ出して負傷した彼女が中国の手に渡らなければ。彼女は今の場に無数のMO能力を携えて、裏切り者の指揮官として立ってはいなかっただろう。

紛れもない天才。人類の宝と呼んでもオーバーではない、その才覚、英知。

……だが、私を含め彼女をそう呼び褒め称えた、敬愛した、あるいは恐れた人々のどれだけが、気付いていたのだろうか。

彼女が、よく泣いてよく笑う、自分の興味のある事にはどこまでも前向きな、少し気弱だが優しい、どこにでもいる少女であった事に。

大切なものを失い、その原因を根絶するためさらに罪のない人間の屍の山を築いた私。国を守る、その一心で未来ある多くの若者を犠牲にし、世界を裏切る道を選んだ本多博士。私という人間は根本から狂っていたし、本多博士は強すぎた。だが、彼女は。人類史に名を残してもおかしくないであろう偉大な能力と共に同居していた彼女という人間は、あまりに普通だったのだ。

だから、こうして壊れてしまった。誰もが天才であり、普通の人間であった彼女を利用し、切り捨てたが為に。

彼女にも償うべきなのだ。しかし、それをするにはあまりにも遅すぎた。

「……私は、国の為に動こうなどとは思わない。世界のためでもない」  
彼女に、私は言葉を返す。国には感謝している、死を言い渡されるだけの私にこの機会を与えてくれた事に。

世界、世界と言われればそうなのかもしれない。だが、私は、世界ではなく。

「じゃあ、なんで」

アナスタシアの目からは光が消え、その暗い双眸はただ私を映している。

失望されてしまったか。残念だ、などという人間的な思考、それがまだ残っている事に苦笑する。

二匹の異形のテラフォーマーが構えを取り、私との距離を詰める。問いかけておきながら、答えなどは聞きたくない、そんな相反した思考の意思表示だろうか。

「国でもない、世界でもない……国が破れようが、世界が崩壊しようが、ただそこにいる人達の未来を守り、次に繋ぐ！ 私は、その為にここに立っているのだ!!」

声にならない、落胆と絶望の表情を浮かべたアナスタシアが異形のテラフォーマーを伴い突撃してくる。

アミーバを展開し、それで異形のテラフォーマーの一体を包み込む。

全身を覆うオニヒトデの毒棘が突き刺さるが、今の私の肉体は苦痛すら受けている余裕がない状態だ。

アミーバで圧潰させるにはあまりに強固なオニヒトデの外皮によつて強化されているテラフォーマー。だが。

直後、異形のテラフォーマーの体中に数十の穴が開き、その身が揺らぐ。

「なっ——」

驚愕の表情を浮かべるアナスタシアであつたが、タネを明かせば簡単な事だ。フィエステリアの捕食器官、微生物であるフィエステリアが魚の皮膚と鱗を貫く事を可能とする武器、ペダンクルの複数同時展開。流石に数十という数をアミーバ形態を保つたまま行うには専用装備だけでなく過剰摂取の力も必要で負担も大きいが、その火力は非常に高い。

「アアアア……い！」

体中に穴を開けられてまだ生きているのか、異形のテラフォーマーはアミーバに溺れている状態で咆哮する。くぐもり殆ど外に漏れる事はない声だが、私の体の一部であるアミーバを通して振動が伝わってくるため、実に不快な感覚だ。

しかし、次の瞬間にそれは沈黙した。一度体に傷口ができてしまえば、もうこちらのものだ。過剰摂取で大幅に強化された毒を流し込み、瞬間的に異形のテラフォーマーを停止させる。異形のテラフォーマーは寄生虫によつて操られている存在であるため、通常のテラフォーマーと異なり寄生虫の存在する脳を破壊しなければ活動を完全に止める事はできず、呼吸により摂取される毒の効果も薄い、全身の傷口から流し込み器官を機能不全にすれば無力化が可能だ。

次いで襲い来るもう一体を腕から生えたペダンクルで迎撃、数回打

ち合い距離をとる。

その時、わき腹に鈍い感覚が走り、すぐしてドロリという液体が零れた感覚に襲われる。

目で確認するまでもなくアmeerバを振り下ろし、わき腹を裂いたアナスタシアの尾のような手を押し戻す。

ハリガネムシの硬化と筋肉凝縮による強化を施した手刀。人間一人の体を破壊するには十分な破壊力のその与えた傷口からあふれ出す血を確認。大丈夫だ、内臓が零れたわけではない。

間髪入れず二匹目のテラフォーマーが腰から生えた腕で大振りな一撃を放ってくる。

それをアナスタシアの尾を押し戻したアmeerバの塊で防御し押しとどめた後、同時にベダンクルで喉を穿ち反撃。流石に次ぐもう一撃で吹き飛ばされはしたものの衝撃を和らげる。

少し空いた距離を詰めようと異形のテラフォーマーとアナスタシアが近づいてくるが、テラフォーマーの動きがびたり、と止まる。命令と違う動きだ、と足を止めないまでもアナスタシアは異形のテラフォーマーの方をちらりと見るが、その隙は逃さない。

再びアmeerバを伸ばし、アナスタシアの胸を拘束する。異形のテラフォーマーはそれに対応する事なく崩れ落ちた。その喉には、ぽっかりと穴が開いている。

異形のテラフォーマーがその部位を破壊されても活動を続行できるのは承知の上。アナスタシアもそれを理解した上で大したダメージではないと考えていた。だが、それは大きな間違いだ。

損害が喉に開いた穴のみならば、その通り。しかし、それ以上のダメージを内部に負っていたのだとしたら？

「……脳を貫いたのですか」

拘束されたまま杖で地を叩き、アナスタシアは独り言のような声色で質問してくる。それは疑問ではなく、確信を持った言い方だ。

その通りだった。喉を貫き、そのままペダンクルを上向きにし喉を駆けあがり、そのまま突き進んで脳を貫き破壊する。理屈としては簡単なものだが、反撃が来るまでのわずかな時間にこれをこなす反応速

度は、やはり過剰摂取による強化に由来するもの。つくづくギリギリの戦いを強いられているものだ。

アナスタシアの言葉と同時に、己の脚をアメーバ化し、その上でペダンクルを形成し防御する。直後に襲い来た尾の一撃はペダンクルを数本折り、止まった。

このまま締め上げれば、私の勝ち、いや、相討ちだ。二体の異形のテラフォーマーを撃破し、ようやく彼女に届く事ができた。ここで仕留める事ができたのなら。

「もう終わりだ、アナスタシア」

降伏勧告はしない。する意味もない。彼女は最後まで拒み続け、今ここに立っているのだから。

時間をかければ、アナスタシアの体に接触しているため寄生虫を流し込まれる危険がある。

先ほどの異形のテラフォーマーにしたのと同じように、この状態で無数のペダンクルを展開する、それだけで再生能力があるとはいえただの人間であるアナスタシアはαMOを含む臓器を喪失し、死に至るだろう。もう既にその体は過剰摂取を行った私に近い状態となっている。能力の核であるマンボウを制御しているαMOを破壊すれば、その全体の能力は暴走し、その肉体を破壊するだろう。

もしくは、頭部の破壊。それならば、確実な死を迎える。MOを葬る事での死。それとも、彼女を葬る事での死。どちらが、せめてもの、ほんの少しでもの救いとなるのだろうか。

「悲しいですね、博士。最後までいいは、あちらの名前で呼んでほしかったです」

追い詰められた状態のアナスタシアが発した言葉は、怨嗟ではなかった。

あちらの名前？ なんの話だ？ 私の記憶に、彼女の言葉がするりと入り込み、何かを思い出させようとしてくる。しかし、はつきりとはわかる。これは、今の戦闘とは全く関係の無い事だと。

アナスタシアの杖がもう一度、かんと地面を叩く。

……嫌な予感がする。もう時間も少ない。私は、とどめの一撃を――



——刺そうとしたその時、地面が吹きあがった。まるで間歇泉のようなそれに目を奪われた瞬間、横殴りの力任せの一撃を叩きこまれ、骨がひしやげる感覚を覚える。

霞む視界には、拘束を逃れ立ち上がるアナスタシアと、その周囲を囲む四体の異形のテラフォーマーが在った。

ああ、こんな事が。まだ、余力を残していたというのか。

血を吐きながらなんとか立ち上がる。この上で、この数は。もう。「完全に死に体の、私が動かさねばならない失敗作ではありますが、取っておいてよかったです」

静かに、喜色は見せず、アナスタシアは淡々とこの切り札の事について話す。

「……さようなら、ヨーゼフさん。私の尊敬する、大好きな博士」

同時に襲い来る、四体の異形のテラフォーマー。

……ここで、終わりか。

私を殺し、エリシアを殺し、その後で誰かに殺されるのか、それとも裏アネックスを殺し尽くすのか。

誰かに殺されるにしろ、任務を完遂した上で衰弱死するにしろ、彼女という人間を知るものは、誰もいない場所で彼女は最期を迎えるのか。

力及ばず、届かなかった、罪無き子ども達が苦しむ事なく見る事のできる未来。

それを自分の手で、見て、叶えられなかった口惜しき、それと同じくらい、彼女が迎えるであろう孤独な最期に口惜しきを覚えるのだ。

ああ、なんとという事だろう。人の為に未来を救う、などと大言壮語をしておきながら、それと同列に死の間際にたった一人の、個人の、自分の大切な仲間の心配をしているなどは。

自分が弱い人間である事など最初からわかっていた。しかし、忬に

据えた思いがこのようなところで別のものを考えてしまうような信念だったとは。

……いや、ならば、だからこそここで終わるわけにはいかないのだ。人を、未来を救う、それは私の後に引き継いでくれる人達がいる。最悪な話、私でなくても救ってくれる人間はいる。では、もう一つの方は。

四体の異形のテラフォーマーが同時に振り下ろす拳、その隙間、わずかな隙間でアナスタシアに一撃を加える事ができる。頭部を正確に破壊できるだけの時間はない上に硬化で守られているに違いない。標的の大きい体を狙った一撃では再生される。どこを、どのような力で狙うべきなのか。

手を伸ばすかのようにして猛撃の隙間からペダンクルを伸ばす。それを見て悲しげに笑うアナスタシア。私は、それを、

その手に持つ杖を貫いた。

「……あ……」

同時に、異形のテラフォーマーが動きを止め、そして、アナスタシアが糸が切れたマリオネットのように崩れ落ちる。

ペダンクルは持ち手に直撃し、杖の上部を砕いた。その破碎した部位から覗くのは精密機械。

異形のテラフォーマーはぴたりと停止して動かない。血まみれの体を引きずり、私はアナスタシアの傍に近づく。

「……いつから、気が付いていたのでしょうか……私が、自分で自分を操っていた事に」

「最初から、だ。確信は持っていなかったよ」

地面に倒れ、ぴくりとも動かないアナスタシアは、口を動かす事さえも苦しげな様子だ。

何故、アナスタシアは杖で地面を叩く動作を頻繁に行っていたのだ

ろうか。ただの癖という可能性もあるが、彼女の性格からしてあまり合っていない動作だ。そんなおぼろげな理由であるが、この動作には何らかの意味があるのではないか、と思っていた。結果は、これだった。

アナスタシアは、もはや自分自身の力ではまともに体を動かす事すらできなくなっていたのだ。あの杖は、原理こそわからないが自身の体から生じた寄生虫を選択的に操る事ができる道具だった。彼女がいくら多数の寄生虫の能力を持つていたとしても、自分の体から生じた存在であるとしても、別の生命である寄生虫を操る事はできない。それを用いて、彼女は自身の脳に巢食させた寄生虫に命令を与え、無理やり自分の体を動かしていたのだ。執念では、心だけでは限界がある。ならば、執念を実際の動きに変換できる道具があれば。彼女は、そこまでしてここに来ていたのだ。

「あーあ、私の負け、ですか……結局、最後まで博士には勝てなかったなあ」

苦しげに頭を動かし、彼女は空を見上げる。その目にはわずかであるが光が点り、少しだけ正気を取り戻したかのような雰囲気になる。

「もって数分、といったところででしょうか」

余命宣告。それは、彼女自身のものなのか。それとも、私のものなのか。

そう迷うほどに、私の体もまた、崩壊が進んでいた。

「ごめんなさい、博士。言ってませんでした」

「何だ」

「私の頭の中、爆弾が埋まってるんですよね。死んだ時に道連れにできるように」

「そうか」

「もう逃げられる距離じゃないですね、博士」

その言葉に驚きこそなかったが、少し悲しい。彼女は、結局他人に利用されたまま兵器として死んでいくのかと。

「でも、ちよつと嬉しいんです」

表情を変えるのも難しいのか、アナスタシアは目元を数度ぴくりとさせた後、穏やかな笑みを浮かべた。

嬉しい、か。

「私はこんな事をして、地獄行きですね。博士もひどい事たくさんしました。だから地獄行きです。つまり、向こうでも一緒ですね。嬉しいなあ……ああ、バイロンには謝らないと……あの子はああ見えて寂しがりやですから、怒りながらも待つてるかもしれません……それと、今から巻きこんじゃうヨハン君にも……あれー、あの子は良い子だからもしかしたら天国かもしれませんね……」

感情が昂った時の彼女の口ぶり、まくしたてるようなそれも今は弱弱い。

だが、そこに少しでも彼女の救いがあるような気がして。

「悪いな、私は死後の世界は信じていないんだ」

ただ、私は自分の考えを嘘偽りなく言う。こんな場面で彼女のための嘘もつけないなど、自分の性格を残念に思うが。

「ふふ、博士は酷い人ですね」

「ふう、久しぶりに運動をして眠くなってきました……では博士、おやすみなさい」

私の言葉に少しだけ頭を動かして笑い、彼女はゆつくりと目を閉じようとする。

……そんな彼女に、私は最後に思い出した記憶、その事を伝える事にした。

私は一度だけ、彼女にそれを言った事があった。

可愛らしいあだ名だけど、周りは自分の事を怖がっているから呼んでくれない、と。そう哀しげな笑みを浮かべる彼女。

そんな彼女の事を一度だけ、そう呼んだのはその時の一度だけだった。

積み上げられていく記憶、その底に埋もれた些細なエピソード。

ああ、なるほど、だから、彼女は。あの子の名は。

「……おやすみ、ナターシャ」

「本当に……ひどい……ひと……ですね、はかせ……は……えへ……  
へ……」

穏やかな眠りについた彼女を置いて、私は立ち上がり、歩く。  
爆弾が機動するのは何秒後の事なのか。

思い起こせば、ずいぶんと遠くまで来てしまったものだ。

頭の中を過るのは、人々の顔だった。

両親、近所の人達。

幼少時代の友人。

研究グループのメンバーたち。

ぷつり、という音と共に皮膚感覚が無くなる。

お互いの技能を競い合った大切な友人、アナスタシアと本多博士。

ごぼり、と足が意思と無関係にアメーバ状に変形し、歩けなくなる。

何よりも大切だった最愛の妻と娘。

どろり、と傷口から内臓のような何かがあふれ出してくる。

そして、孤児院の子ども達。

ミゲル、ソーニヤ、アベル、数えるのは、数十人の、忘れた事の無い名。

その最後に、ナターシャ。

「死後の世界、か」

もう体は一步も動かず、岩にもたれかかる事しかできない。

死後の世界。そんなものは信じていなかった。正確には、信じたく  
なかった。

死後の世界で自分が命を奪ってきた子ども達が幸せに過ごしている、  
などという考えに囚われては、自身の贖罪に甘えが出てしまうと、と  
考えていた。

だが、今は。

何の罪もなく死んでいった妻と娘、自分が奪ってしまった孤児院の  
子ども達。非道を行ったとはいえ、救われていなかったアナスタシ  
ア。そんな皆が幸せに過ごしている世界、そんなものがあってもいい  
のではないかと思う。

既に殆ど機能が喪失されかかっている視界に、強烈な光が飛び込み、同時に耳には轟音が響き渡って来る。内臓が焼け落ちるような業火が近づいてくるのを間近に感じる。全てが融け落ち、崩れていく。

死後の世界が仮にあつたとしても、天国と地獄、そんな良し悪しで二分される場所なのかも知れないが、自分が行くのは悪し、の方であるのはわかりきっている話だ。自分は罪を重ねすぎたのだから。

ただ、それでも。自分が許される事の無い存在であることなどはわかってはいても。

「君たちと同じ所に行けたら、などと……考えてしまうよ……」

## 登場人物紹介（裏切り者幹部編その1）

—— アナスタシア・エリセーエフ ♀

・ 31歳 152cm 49kg ロシア／中国

・  $\alpha$ MO手術ベース：『魚類型』 『病蝕の太陽』 マンボウ

— ニホンカイレットウジョウチュウ（サナダムシ）

— ハリガネムシ

・ MO手術ベース：

— スパルガヌム・プロリフェルム（芽殖孤虫）

— リベイロイア

— デイクロコエリウム・デントリテイ

— ペンネラ

— トキソプラズマ

— シュードテラノーバ

— ミルメコネマ

— フィラリア

他寄生生物型数十種

・ 専用装備：電気信号式生体制御機 『病魔の指揮棒』パラジート・タクト

・ 好きな食べ物：手術前：きくらげ 手術後：流動食（しか食べられない）

・ 嫌いなもの：人間、ロシア人女性は胸が大きいという風潮

・ 瞳の色：空色

・ 血液型 B型

・ 誕生日：2月23日（うお座）

『裏切り者』の火星在中部隊の総指揮官。ごく普通の中流階級の一般家庭に生まれたどこにでもいる普通の子どもであったが、クローン技術に興味を持ちそれを学ぶうちに才能が開花し、十に満たない年齢で一流の科学者と鎬を削るほどになる。

十二の時に国家の要請で機密の研究院にスカウトされ、クローン技

術と遺伝子サンプルを提供した(体の弱い女性という御しやすい性質に加え、寄生生物型を始めとした非常に幅広いベース生物に適性を持つという彼女の特異体質のため)。

その後は研究の方針を巡り研究所の多数派と対立、国家の考えが多数派に近かった事、すでにその主要な技術は研究院に渡っていた事もあり研究所を追われ、機密保持のため命を狙われる。

深手を負い山で倒れている所を中国のエージェントにより確保され、それからはMO手術を受けた兵士を養成する研究所兼養成施設で所長として働き、時には紛争地域に赴き孤児を集めていた。

深手を負った際の延命、持病による症状などの理由で幾度となく受けた治療のための手術に加え、実験台となっている所の子どもを庇う形で自身の身に何度もMO手術を施しているため、その段階で人格に変調が起こっている。

最初の $\alpha$ MO手術であるマンボウが成功してからは自身のクローンをを用いて手術を受け、成功したMOを自身に移植するという形で二種類の寄生生物の $\alpha$ MO能力を獲得、他数十種の寄生生物をその身に宿し、ただ能力を使用できるだけではなくマンボウの非常に多数の卵を産むという性質と寄生虫の一部が持つ単為生殖の性質を併用し体内で無数の寄生虫の卵を生産、孵化させ本来の宿主ほどではないがある程度の時間症状が現れない状態で維持する事ができる。

そのため、体内の構造は人間のそれとはかなり離れたものとなってしまっている。

専用装備は常に持っている杖で、電気信号により選択的に寄生虫の行動に制限を加え、特定の動作以外を行えないようにする事で行動をコントロールする装置が組み込まれている、持つものの脳波によって制御する事が可能な精巧な品である。

これによって接触時に他者の体に体内の寄生虫を移動させる、その寄生虫に即座に症状を発症させるよう命令を下す事も可能としている。本来は中国で一般的に出回っている、虫相撲をさせる際に虫を戦うよう誘導させる子どものおもちやであるが、これを軍用規格の部品や機密の技術により超高性能化させたものである。



エリシアとナターシャの興奮したり焦ると早口で話が長くなってしまうのは彼女の癖が移ったからである。

子供っぽい体つきが地味にコンプレックス。Aカップ。

—— バイロン・エスパダス ♂

・ 17歳 176cm 79kg グランメキシコ／中国

・ αMO手術ベース・『節足動物型』 “暴虐の双牙” シドニージョウゴグモ

・ 好きな食べ物：手術前：タコス 手術後：タンパク質全般

・ 嫌いなもの：カップラーメンに入っているダマになった謎の卵

・ 瞳の色：茶

・ 血液型 O型

・ 誕生日：5月11日（おうし座）

”裏切り者” 幹部の一人で、アナスタシアの直属の部下。

親に捨てられグランメキシコのスラム街で育ち、仲間と共にチームを組みたくましく生きていたが、ある日都市の清浄化を掲げた政治家とスラム街に拠点を持っていた犯罪組織の間で起こった軋轢が政治家の私兵と犯罪組織の激しい戦闘に発展しスラム街は都市そのものを巻き込み火の海となった。逃げている最中でアナスタシアに拾われ、以後行動を共にする事になる。

元々はやんちゃではあるが聡く、愛情に飢えていたためアナスタシアによく懐きヨハンと同じかそれ以上にその体調を心配していたが、アナスタシアの負担を軽減しようと思ったαMO手術の影響により人格が変調し、粗暴な部分が大きく出てしまうようになっていた（アナスタシアが新たに開発した成功率の高いαMO手術の派生形を施したが、成功率の代償として細胞の、特に人格の侵食が酷くなってしまった。バグズ手術を大きな参考としているため昆虫型だとある程度リスクは軽減できたが、アナスタシア直属の四人の中では唯一昆虫ではなく蜘蛛をベースとしてしまったため）。

—— ジェネジオ・バルバドス ♂

・ 31歳 194cm 112kg イタリア／インドネシア

・ αMO手術ベース『昆虫型』 『深林の狂君』 コーカサスオオ

カブト

・ 好きな食べ物：手術前：ポークステーキ 手術後：ホットケーキ  
(シロップ多め)

・ 嫌いなもの：冬場のドアノブに触れた時の静電気

・ 瞳の色：ブラウン

・ 血液型 A型

・ 誕生日：12月24日（やぎ座）

イタリア人の母とインドネシア人の父（不法入国）から生まれる。

家庭は裕福であったが、英才教育に耐えかねて家出。犯罪組織にスカウトされ身を置いていたが、ある組織との抗争により組織は壊滅し、傭兵へと転職した。その過程で殺人に快楽を覚えるようになり、ある戦争に傭兵として参加した際に敵方にマークされ、暗殺の危機に晒されたため身を隠していた。長い潜伏生活で衝動が抑えきれず、隠れ家の周囲の住宅の人々を次々と殺害し、死刑を言い渡される。その後はその腕を見込まれ裏取引により身柄は中国へと渡り、手術を受けて火星の戦線へと投入される事に。

殺人衝動を除けば明るく気さくな人間であり、手術もベース生物との適性が高く人格への影響が殆どなかったため、アナスタシア達との関係は割と良好であった。

少年時代に触れた日本の古典娯楽作品の影響により、鳥の羽で作ったうちわみたいな何かからはレーザーを発射できると信じてやまない。

## 第41話 決戦の火蓋

「突入部隊の損耗率は4割を突破、総指揮官は死亡、他幹部は内部で交戦中と思われる」

「欣將軍より、敵到達予測地点への到着、警戒を続行との事」

「爆発により『二位』の死亡はほぼ確実」

テラフォーマーでさえ近づかない不毛の地域、そこに陣を構えた一隻の宇宙艦。

いくつかの設備がその周囲に展開されたそこでは、慌ただしく通信が飛び交い連絡員が移動を繰り返していた。

裏アネックス第四班。『裏切り者』の背後で手を引いていた、今計画でのトラブルの元凶とも言える集団である。そんな彼らの表情には、黒幕としての余裕……ではなく、焦りの色が浮かんでいた。

彼らの目的は単純だ。”アネックス計画”における第四班、活動を援護するため、裏アネックスの他国部隊を駆逐する。それが成されれば、アネックス計画側の第四班がアネックス本艦の制圧及び電波塔の掌握による地球への通信を途絶した後、アネックス計画側の他国部隊も始末する。

小惑星群分析の名目で飛ばした輸送艦によって用意した資源で火星の各所に基地を築き、多数のMO手術被術者という圧倒的な戦力を備えた『裏切り者』。たかがアネックス計画の100人、裏アネックス計画の96人。自分達や協力者を含めて勘定したとしても容易く押し潰せる戦力差である。はずだった。

しかし現実にはエンジントラブルの仕込みにより各班を分断したその直後の襲撃は全て失敗、その後の継続的な攻撃でも次々と人員は撃破され、ついには基地の一つを制圧された。

余裕は無く、士気も高いとは言えない。所詮は地球で廃棄物扱いられたクズどもだ。状況が悪いと知ればこちらに反旗を翻す可能性が無いとは言い切れない。そう考えた本部の判断は、『全軍特攻』である。

幸い、表アネックスの第四班の計画は順調に進行中のようだった。

アネックス1号を占拠し地雷や防空レーザーといった兵器で守りを固めれば、近代兵器を持たない他班では手出しができなくなるだろう。ならば、『裏切り者』の戦力の価値はそれほど高いものではない。

裏アネックスの各班が一カ所に固まってくれたのはある意味では僥倖と言える。一つの場所に集中しているのであれば、一気に殲滅する事が可能だ。

生き残った『裏切り者』はその勝利である程度の士気の保持ができるだろうし、地球に帰還した後の褒美なりなんなりで釣ればいい。

……本部の判断は、『裏切り者』が裏アネックス計画各班を撃破する事を前提としたものだったのだ。生き残った連中をどう使うか、沢山いすぎると面倒だから口減らしの総力攻撃、その後は裏第四班は表第四班と合流し守りを固め、裏切り者は適当に別動隊として動かせばいい。

しかし、今のこの状況。押されているではないか。総指揮官であるアナスタシアは相討ちにこそなったもののヨーゼフとの交戦で死亡し、基地内部のアナスタシア直属の他の幹部たちとの連絡もとれていない。

敵基地制圧が進んでいない事は、内部からの頑強な抵抗がはつきりと示している。

さらには、この艦が捕捉され、基地を敵の部隊が出立したとの連絡まで入って来たではないか。

このままでは、『裏切り者』の壊滅どころか自分達まで危うくなってきた。

「オイオイ、話がちげえよ……」

切迫した状況の中心で報告を聞き、周囲に指示を出す青年。欣に代わり、士気を取っている第四班の本当の幹部搭乗員。そんな彼に、つつかかる人間が一人。

「……何がだ」

無精ひげと鍛えられている事が伺えるがっしりした体形、しかしど

こか病的な目つき、隻腕の男である。アネックス計画支給の制服を身に着けていない事から、彼が計画の正式な人員でない事が伺える。

「これで勝てる、後は後方の任務って話だったじゃねえか……！」

青年に食ってかかる男。体格でも男の方が明らかに大きい。しかし、その顔にはどこか怯えの色が浮かんでいる。

「まあ落ち着けて」

意外とフランクにぼん、と男の方を叩く青年。直後、パリパリという空気が小さく爆ぜる音と共に男の体がびくんと跳ねる。

「て……めえ……」

衝撃でふらつきながらも態勢を立て直し、男は青年を睨む。その目に映るのは深い恨みの色。

「クソツ、これだから信用できねえんだ、それにてめえは……」

男は、言葉を最後まで言う事ができなかった。青年が右手で男の首を掴み、吊り上げたからである。

「か……ひゅ……」

「黙れ……。またこうされたいのか？」

先ほどまで冷静だった青年の眼に、怒りが宿る。青年が指をさしたのは、男の左腕。肘より少し上の部分から失われているその部分であった。

鋭利な刃で切断したわけではなく、力任せに骨を折った後で引きちぎったかのような痛々しい傷跡に、残っている部分から肩にかけて見られる、焼け爛れたかような、変色している肉。

いよいよ恐怖に支配されたのか、見るからに裏の世界に生きているかのような大の男が涙を流し、許しを乞うように弱弱しく首を振る。

「班長、そのくらいに」

そのまま首を握りつぶさん勢いの青年をなだめるように、一人の班員の青年が声をかける。

「……プラチャオ、この艦の防備はどうなってる？」

それに肯定的な反応こそ示さないものの、青年は男を半ば放り捨てるように離し、プラチャオに聞き返す。

「班長もご存じかと思いますが、この艦は高速性と量産性に重きを置

いた小型のものなので、アネックス1号に搭載されているような防衛システムは重量の問題から配備できていません」

「ああ、わかっている」

宇宙艦の周りに展開されている装備は、仰々しい機械ではあるものの、それは殺傷を目的としたものではなく通信用の機材である。

アネックス1号との合流を前提として設計されている裏アネックス計画の宇宙艦には、個別で任務を遂行できるほどの装備は搭載されていない。それは、テラフォーマーに対する防備としても同じ事だった。そもそも、こつそり持ち込みたくとも、設計の段階でそこまで重量に余裕がないのだ。

「ですが、我が班と先遣隊より選び抜いた精鋭が周囲を固めています」  
「期待してるぞ、プラチャオ」

「欣將軍も配置に付いていますし、この艦には指一本触れさせません」  
プラチャオに向けて少しだけ、複雑そうな笑顔を見せる班長。少しだけ休憩をとる旨を班員達に伝え、宇宙艦の中に戻っていく。そこでぼそりと蚊の鳴くような小さな声で呟いた一言、それを聞いたのは艦内の人員を含め誰もいなかった。

「どうせあいつらは来るんだろうけどな」

ごく少数ながら襲ってくるテラフォーマーの迎撃、付近の『裏切り者』の指揮、各部隊への指示と帰って来てから働きづくめだった班長が休憩に入るのを見送り、プラチャオは艦の影でうずくまる男を助け起こした。

「大丈夫ですか？」

「おう……ぐっ……あの野郎……」

任務から離れた勝手な行いで解任されたとはいえ『裏切り者』の幹部である。全体の輪を乱す粗暴な男だが、戦力としては離れられては困る。プラチャオは男に肩を貸しながら、その傷跡を横目で確認する。

班長の戦っている姿を見たのは地球で一度だけだ。だが、それは異常という他なかった。あまりにも闘争と他の生物に対する殺傷に特

化しているかのようなその性質。これだけで言えば、該当する生物はそこそこの数いるだろう。しかし、班長のそれは度が過ぎていたのだ。その戦いにて示されたMO手術ベースの生物のものであるろう複数の特徴が複合して存在している性質。それは、地球上のあらゆる生物を探しても存在していないような、そんなものだったのだから。

どうやらその生物は研究所で飼育されていたようだが、実働部隊であるプラチャオはその詳細まで知る事はできず。

変態用の『薬』こそ見せてもらったが、それこそその薬で変態できる生物の中でそんなものはいないような系統だった。

個人的な興味は尽きないものの、ただ一つだけはつきりとしている事がある。

『強い』という事だ。今の状況で、これ以外のものが必要あるのか？  
……いいや。

自分の頭の悪い事は自分がよく知っている。考えても結論が出る類のものではないのだろう。

そう考えを打ち切って男を適当な所まで見送り、再び前線警戒の任務に戻ろうとしたプラチャオの耳に飛び込んできたのは、一つの通信員の連絡であった。

「欣將軍より、敵と交戦のため一時的に通信遮断。敵は一名のみ」

「第二班班長、島原剛大、との事です」

## 第42話 決闘と諦観と狂乱と

「敵は一人、地形と未だ仕掛けてこない所を見るに恐らく狙撃手は無し」

眼前の敵を見据えながら、欣は状況を分析する。障害物の少ない平地。あるものと言えば一人がぎりぎり身を隠せる、というくらいのおおきな岩がいくつもあるのみ。大軍の伏兵を隠すには不十分な場所と言える。そこを、一人の男が一步、また一步と進んでくる。

日本第二班班長、島原剛大。先の戦いで欣と交戦し、戦闘は中断されたもののほぼ敗北したと言える、裏アネックス側の最大戦力の人。

それを迎撃するのは、本来の中国幹部搭乗員オプティサーの帰還により後方指揮から前線へと移った中国・アジア第四班班長代理、欣焔明。班長代理というその立場。しかし、それは各国の幹部搭乗員より劣る戦闘能力を示しているわけではない。彼もまた、αMO手術の被術者であり、『裏マーズ・ランキング』の最上位に名を連ねる偽りなき実力者だ。

裏アネックス計画の幹部搭乗員は戦闘能力は勿論の事、実戦経験豊富で訓練を長期間受けてきた指揮官としての能力が問われる部分も大きいアネックス1号のものと比較して戦闘兵器としての側面が強い。軍人や国家機関からの出が多いアネックス1号の幹部搭乗員と比べて、ベース生物を除けば戦闘能力の低い未成年の少女や科学者、指揮を任せるにはあまりに危険なマフィアの元首領まで属している事から、それが伺えるといえよう。

その点、アネックス1号の四班幹部搭乗員である劉、今現在この火星に向かっている戦略宇宙艦の指揮を執っている凱、爆と同じ将軍と呼ばれる地位にある軍人の欣はアネックス1号側の幹部搭乗員に近い立場にあると言える。

「総員、変態準備」

欣の指示と共に、彼に付き従う3人の班員がそれぞれの薬を取り出す。



一対一でも勝てる相手だ。それは、先の戦闘とベース生物同士の相性がはつきりと示している。

強力なパワーと針と牙、二つの凶器に加え猛毒と跳躍力を有する『トビキバアリ』の能力。

接近戦では最強クラスのベースである。インファイトに持ち込めば、幹部搭乗員を含めても勝てる人間は少ないだろう。

しかし、一方の欣の能力。自ら攻めるまでもなく、全身を覆う毒棘が敵を迎撃し、それを潜り抜けた攻撃でのダメージは骨片による強固な守りが和らげ、それさえ貫かれたとしても欠損部位は極めて高い再生能力により即座に回復する。そんな、MO手術被術者戦の花形である肉弾戦をあざ笑うかのようなサンゴ礁の悪魔『オニヒトデ』の能力。

その上で、あくまでも警察組織の所属であった剛大と軍人である欣の実戦経験の差。

勝利は揺るがない。だが、油断などしない。その油断こそが、絶対に優位であり第四班の班員に触れさせる事すらせず他班を殲滅できたであろう今の彼らをこの状況に貶めているのだから。

「二人で来た、という事は投降しにきたのかね、剛大君」

戦闘の間合いの二歩前で立ち止まった剛大。先に口を開いたのは、欣。

それに対して、剛大は無言を貫く。その目に映るのは、怒りと決意。単体で自身に勝る敵に加え、さらに加わった戦力。紛れもない死地というものだ。

「そうでないなら……」

『「アネックス戦力増派計画」裏切り者、欣焔明以下第四班班員」

欣の背後の班員がその続きを言おうとしたそれに被せ、剛大がぽつり、と言葉を放つ。

「総員、この場で制圧させてもらおう」

剛大の言葉にいきり立ち、三人の班員が剛大に向けてそれぞれの一撃を放つ。

しかし、その攻撃が剛大を捉える事はなかった。その姿が、三人の

眼前から一瞬でかき消えたのだから。

「……上だ」

元の立ち位置から動かない欣が、目線を上げる。一步退いた位置からの状況分析、それに合わせて三人は跳躍した剛大を視界に映す。

跳躍、それはトビキバアリにとつて逃避の手段ではなく、獲物へと躍りかかるための攻撃姿勢。

隙だらけの着地時を狙おうとする三人を待ち構えるのは、強烈な打撃だ。

殺意の籠った笑みを浮かべ、剛大を待ち構えるその内の一人に向かって、剛大はそれを振り下ろし。

「同じ手は食わん！」

その一撃は、横から割り込んできた肉体によって防がれた。味方の慢心、剛大の戦術、それを見抜いた欣が、己の体で味方を守ったのだ。即座に迎撃に転じられるほどの反応時間ではなかったため、剛大に反撃を行う事はできず離脱を許したが、跳躍は隙ではない、という情報を三人に与える事ができた。先の戦闘でこれを受けたプラチャオは直感と優れた反射神経からこれを避ける事ができたものの、今現在剛大と戦っている班員はそれに劣るのか、回避は間に合いそうになかった、という状態。だが、それに欣の支援が加わる事によって補っている。

戦闘中にいつでも敵についてのんびり説明ができるような余裕のある敵ではない以上、こうして実戦の中で情報を得る事で、徐々に戦局を優位へと傾けるのが欣の戦い方である、のだが。

「逃がさん」

三人のうちの一人が、腕から生成された毒針を剛大へ向け、突撃する。しかし、それは軽くないなされた。反撃に背後から背骨を貫き胴の中央に突き刺さるのは、猛毒の針。

「ぐっ……」

よろめく敵にさらなる一撃を加えようとする剛大。それを阻止しようとして、欣の右腕が剛大に向けて振るわれる。

しかしそれも計算の内、剛大はそれに対して班員が突き刺さったま

まの腕を動かし、欣へとそれを向ける。

人間の盾。単純ながら有効な、物理的な防御と敵に対する精神的な動揺を誘う手段。

「やれ」

欣の指示と共に、班員の一人が動揺する事なく剛大と盾とされた仲間接近する。直感的に危機を覚えた剛大が刺さった針を抜き、もう既に意識を失い、死を待つのみとなっていた班員はどさりとその場に崩れ落ちる。

剛大は刺さった針と痙攣する体の感触からこの班員がもう長くない、拘束を解いても同じだ、と判断し、欣達の側からは体の表側、ぱつと見て最もわかりやすい表情から班員の状態を察して剛大ごと攻撃しようかと判断したのである。

剛大がいた場所を液体がかすめる。外れて岩に辺り、鼻を突く臭気を剛大は感じとる。酸だ。

二発、三発と連続して放たれるそれを常に動き回る事で回避し、次の獲物に目星をつける。

このままでは埒が明かないと判断したのか、酸を放っている班員と欣に目配せし、残った一人の班員が剛大に向けて突撃する。その身は黒い甲皮に覆われ、甲虫である事が伺えた。

回避に専念している剛大に向けてその太く変異した腕を振り下ろす班員。それを剛大は、両手をクロスさせ受け止める。お互いがこの状況を打破しようとその腕を動かし、それに合わせて両者の姿勢、位置もじりじりと動く。

だがその直後、この攻撃は間違いであったとこの班員は思い知る事となった。

膠着状態ならばそれ以外の人間は一方的に攻撃する事ができる。しかし、剛大を狙った酸は剛大には届かない。何故なのか？ それは、他ならぬこの班員によって酸の射線が塞がってしまったからであった。

酸を放つ班員、剛大と殴り合う班員、剛大。それが一直線に並んでしまったが故に生じた、飛び道具を生かせない陣形。

しかし、これは単純にこの班員のミスというわけではない。この班員は最初から一方的な酸による掩護射撃をできる状態を狙い、剛大と組み合おうとした。そのため、突撃こそ正面からであったが剛大と組み合う際には少し軸をずらし、酸の射線が届くような位置をとったのだ。誤算はその後の剛大の動きで、組み合った状態から動かれ、ままと自身の体で射線を遮る状態となるよう誘導されてしまっていた。

「っ！ 将軍！」

酸による射撃が望めないのなら、近接戦闘で。そう考え、班員は欣を呼ぶ。が、その直後。

下がれ、と叫ぶ欣の声を、班員は聞く事ができなかつた。

両者の腕がぶつかりあつた状態で、班員の顔目掛けて突然下から打ち上がった来る一撃。それをもろに受け、その首は一瞬上に伸びあげたかのような動きをし、ゴキリ、という嫌な音を立て、あらぬ方向に曲がる。それと同じくして体は力を失い、その力を向けていた方向、剛大に向けてしなだれかかるように崩れ落ちる。

『トビキバアリ』のジャンプ力、それを支える強大な脚力による蹴りの一撃。

崩れ落ちる死体を身軽なステップで避け、剛大に自身の追撃がいなされた場合射撃ができる班員を無防備にしてしまうと考え足を止めた欣と距離を取り、欣と同じく動きを止め、二人を見据える剛大。

対する欣と班員の二人も、同じく相手の様子を伺う。

……現代戦とは、個の性能のブレが少ない戦いである。コンピュータと高性能化した武器の性能、それらの連携を円滑に行えるようにするネットワークがモノを言う戦いでは、一人で数十人、数十機を撃破するエースが生まれる事はごく稀であるし、それと相対する事はさらに稀だ。

それは、現代戦に適応した軍人である欣の死角であつた。

彼の戦場は、一定の能力、数の味方を率いて一定の能力、数を持つ敵と戦う近代戦であり。

強大な個、を相手にする事を想定したものではなかったのだ。

そして、その指揮を崩され、二人の部下を失い、戦術を再構築する、目の前の敵に集中する、その隙を剛大は見逃さなかった。

「翔ッ!!」

剛大の突然の大声にその意味を察する以前に反射的に二人は剛大をさらにはつきり視界に映す。

「あいよお!」

だから、反応が遅れた。威勢のいい、戦場の参加者ではなかった、その声に。

「なっ、うわあっ!?!」

それと同時に、欣の隣にいた班員がもんどりうって倒れる。その体には、ネットが絡みついていた。

冷静さを崩さず、だがその表情に抑えきれない怒りと驚きを浮かべその声の方向を見る欣。

そこには、岩陰から姿をのぞかせる一人の男がいた。

第二班所属、樋之浦翔。

第二班の若きエンジニアであり、『ハダカデバネズミ』のベースを持つ青年の手に握られていたのは、携帯火器には適さないようなサイズの銃型の武器。

『対テラフォーマー発射式蟲捕り網』。裏アネットワークス計画は対人戦を重視した編成となっているため、対テラフォーマー用の非殺傷武器であるこれは搭載されてはいなかった。基地の備品である。テラフォーマーによる利用とその発展を防ぐため高度な銃火器こそ持ち込まれてはいなかったが、アナスタシアへと送る研究用の検体を手するためのこの武器は配備されていたのだ。

「同じ手は食わん、と言ったな」

即座に判断し翔の方に足を向ける欣に暇を与えず、剛大は自身の脚

を、思い切り地面に振り下ろす。同時に、剛大の脚部に付属している何らかの機械のようなものが鈍く光を放つ。それを受けて急加速したその脚が地面を穿ち、揺らす。

地を撃つ一撃、その意味は。

「もう一度食ってもらおうぞー！」

敏感に察知し、欣は身を翻す。それとほぼ同時に、欣の足元が崩れ穴が開く。

それは、その場所に限った話ではなかった。戦域の所々が次々と崩落し、穴が姿を見せる。

元々『裏切り者』達が基地間の連絡路として使っていた地下道。それを掘り広げ、部分的に地表近くまで彫り上げ、強い衝撃によって崩落する落とし穴を作り出す。

エレオノーラに救われた翔が剛大が戦闘に突入する前に先行して罫を仕掛けておく、それは並大抵の苦労ではなく。他の穴掘りができる班員も動員しての一大計画であったが、その効果ははつきりと表れていた。

「ウワアアア」

情けない悲鳴を上げ、ネットに絡めとられていた班員は穴へと落ちていく。『裏切り者』の連絡路はそこまで深い場所に作られていたわけでは無い。一時的な戦線離脱だ、むしろ戦場に転がされているよりも落とし穴の下で復帰をした方が良いのでは、とすら考えられる。

が、落ちた衝撃で穴の底にあったものが舞い上がり、穴の外にちらほらと現れ出てくる。それは、黒とオレンジ色の粉。

先の戦いでそれを知っていた欣はそれを吸わぬよう口を押える。

『ズグロモリモズ』の猛毒を含んだ羽毛を『8位』の専用装備によって砕いた粉末。

穴の中から聞こえてくる苦痛と絶望の色を含んだうめき声がだんだんと小さくなっていく。

「ご苦労だった。後は手筈通りに」

「了解。……班長、ご武運を」

短い会話を交わし、翔は岩陰に身を隠す。

欣は考える。恐らくは退避用の通路が用意してある。これを追うのは無意味だ。木っ端の班員を追いかけて幹部搭乗員を本丸に送ってしまう。これがどんなに愚かな判断であるかは言うまでもない事実。……ここまでしてやられた。三人の部下を失い、敵は無傷。

だが、それが何だ？　ここまでしてやられた。そうだ。しかし、それで作り出せた状況は？

ただの、両者無傷の1対1という状況ではないか。

「決着をつけようか」

剛大が一步前に入る。欣は動かず。

両者、一呼吸。そして。

日本第二班と中国・アジア第四班、二つの将が激突した。

——同時刻、第四班宇宙艦周辺

「……敵部隊接近！」

前線への人員の輸送を終えた猛禽類をベースとする班員の女性が、上空を旋回し、その接近に気付く。

「班長……」

「ああ、もう起きてる」

敵の接近に班長を呼び出そうとした班員の背後からかかる声。それは、殆ど休憩時間が得られなかった悲しみという指揮官に相応しくない感情を含んでいた。

「おはよう班長！　えっと、人数は4人で……」

「あと土の下に2人いる」

「へ……？」

二人の会話に警戒を強める班員たち。

「ああ、皆、下がっていいぞ」

だが、そんな皆に対し、班長はなだめるかのように、しかしその顔

に表情を浮かべず指示を出す。

「俺は兵器、だからな。戦いは任せて様子を見ていてくれ」

そう言い、『薬』を摂取する班長。その身は甲皮ではない、赤黒い色をした表皮に包まれる。

数秒後、ぼこり、という音と共に班長の数歩先の地面に穴が開き、一人の男が姿を見せる。

「こんにちは、『7位』、第一班副長、チャーリー・アルダーソン」

「はーん、てめえがボス、つてわけかい」

チャーリーと呼ばれた金の天然パーマの青年は、自身の名を呼んだ敵を眼前に見据える。

それとほぼ同時に、班長を取り囲むように穴から一人、周囲から四人のアネックス計画制服に身を包んだ第一班の班員が現れる。

前に出ようとする第四班の班員達を手で制し、班長は無言、無表情のままチャーリーにかかってこい、と顎を引く。

「二班の連中を待つまでも無い、ここでお前をぶちのめさせてもらおうぜ」

そのワールドさが伺える顔にそれに見合った野性的な笑みを浮かべ、チャーリーと班員達は『薬』を打ち込んだ。

——同時刻 火星 逆侵攻経路

「……第一班が奇襲を仕掛けて、俺達が本命、か」

「大丈夫かな……」

物陰に身を隠しながらの移動。『裏切り者』に見つかるのはもちろんの事、テラフォーマーに見つかるのも無駄な戦闘によって目的の遂行が遅れかねない。

このようにして、日本第二班を主体とし他班の一部班員を含んだ第四班宇宙艦への攻撃作戦部隊の本体は歩みを進めていた。

8位の静香、9位の俊輝、13位の健吾、17位の武、18位のダニエルと言った『裏マーズランキング』の高位ランカーを多く擁する主力部隊であるこのグループは、基地防衛の戦力の中からできる限り



の戦力を捻出した、反攻部隊の総力と言える集団である。

反攻を担当するのは北米第一班と日本第二班、本来ならばこれに第三班も加わる予定だったのだが、敵の想定外の大戦力により損耗が激しく、班長副長共に戦闘不能という状態のため出撃できず。

ダリウスと剛大、二人の班長はそれぞれの任務で動いているため別行動となっている。幹部搭乗員が参加できないのは厳しいが、それでもやらねばならない。

「おっとっと」

「……俊輝、調子どう？」

小石につまづき、よろめく俊輝に、静香が心配そうに声をかける。

この班が第一班に大きく遅れているのは、重要な戦力である俊輝とダニエルの治療に時間がかかったから、という理由がまず一つ。

バイロンとの戦闘によって負った傷とその毒の症状は軽いものではなく、医療設備の限られる基地で本格的な治療が望めない状況の中限りの事はした、というものであるため、全力での戦闘を行えるか、と言われると微妙なところである。

「俺は大丈夫だけど、お前こそどうなんだよ」

「私？ 全然元気だけど」

逆に心配をする俊輝に対して、静香は平然とした態度で返答する。しかし、その足取りは重く、時折ふらついている。

落とし穴に設置するトラップの材料である多量の羽毛を確保する為の能力の連続使用に加え、第四班との戦闘時の打撲。総力とは言うものの、最もランキングの高い二人はどちらも万全とは言えない状態である。

「俊輝っち、静香、辛くなったらいつでも言えよー」

「ああ、お前たちに倒れられては意味が無い」

健吾と武は先頭を歩く二人を心配そうな様子で見守る。

似た者同士で無茶をする二人だ、限界が来た時には止めなければ、と。

「……………ん？ 誰かいる？」

誰かが言ったそれに反応し、班員達は影で休憩していた大岩に身を隠した後、こっそりと顔を出して覗く。

その通り、そこには一人の男がいた。

ボロボロの衣装にポンチョのような腕を隠す外套を纏った大男。

無精ひげを生やした、鍛えられてはいるがどこか不健康そうな雰囲気纏っているそれは、どう考えても味方ではない、という風貌である。

「裏切り者の見張り、かな」

「どうする」

ひそひそと、対処を考える班員たち。だが、その中で明らかに違う反応を示した人間が二人いた。

「あれって……」

「アイツ……間違いねえ……」

不安げな表情を浮かべる静香と、抑えきれない衝動を必死にこらえようとしている俊輝。

どうしたのか、と聞こうとした健吾だったが。

「……俺がやる」

低く、呻るように、拒否など許さない、という威圧を含んだ感情で、俊輝が皆を見回す。それに気おされ、皆は黙ってしまう。

そして、少しの間会話が成され。

「……よう、久しぶりだな」

岩陰から出て、男に近づいていく俊輝。その声こそ平静を保っているものの、全身から立ち上がる殺気が、その内心を男にはつきりと伝えていた。

「お前は……ああ、あの時の、あの時の、あの時の」

何やら様子がおかしい男の事など気に留める事も無く、俊輝は注射器を首に刺し、さらに歩み寄る。

それを見る男は恐怖ではない何かで体を震わせ、点鼻薬型の『薬』を打ち込む。

「お前の首を裂き切ってアイツの墓に見せてやる」

俊輝は、仲間には、いや、これまで敵にすら見せた事の無い冷徹な声で。

「て、めえのせいで……あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝクソクソクソ!!  
殺してやる殺してやるうううう——?!?!?!」

男は、タガの外れたような、狂っている調子の声でまくし立て。

親友の敵討ちと狂乱の果て、二人の戦いは始まった。

## 第43話 曇りのち晴れ

「悪い事は言わない、降伏するなら命だけは助けてもいい」

「そいつは聞けない相談だ、そつちこそ降伏するなら考えてやってもいいぜ？」

本陣である宇宙艦の前で襲撃者達に降伏を促す第四班の班長。対するは、第一班副長、チャーリー。

お互いに牽制し合い、無言でチャーリーを睨む班長と、殺意に満ちた笑みのチャーリー。

「交渉決裂、だなア……やっぱここで始末しとくか！」

数秒の硬直時間は班長に飛びかかるチャーリーでキャンセルされ、早くも戦闘の幕が上がる。

パッチ型の薬を当てたチャーリーの体がみるみる内にそのベースとしている生物の姿に変化していく。

それに対し、班長は何の反応も示さない。

変態により発達した牙で班長の喉元を狙う。が、直後。

「うおお!!」

班長が口から黄色い霧状の液体を吹く。危険を察知し、身をよじつてその液体を何とか避けるチャーリー。

だが、液体の一部が避け損ない、左腕に掛かってしまう。

「ぐああー！」

ジュウ、という音と共に、それが付着したチャーリーの毛皮が溶け落ち、地の肌を晒しさらにそこにも痛ましい痕を残す。

未知の敵、ここは一旦距離を……取る事などせず、再度の突撃、班長から真正面から組み合い、力比べを仕掛ける。

チャーリーのベース生物の武器は牙と爪。一方の班長は毒液のようなか。正面からの戦闘ならば、と考えたチャーリーであったが。

「っ、なんだコイツ……」

だが、単純なパワーにおいてもチャーリーは押されていた。至近距離でチャーリーは敵の姿を観察する。赤黒い皮膚。体節のようなも

のが腕の部分に見られるが、それ以外の特徴は見られない。昆虫や節足動物であれば、複眼が眼に見られたり三つ目以降の眼が額に生成される場合が多い。

強力で長い牙や顎を持つ生物であれば、それが腕に形成できたりもするが、それも腕に黒く短いナイフのようなものが数本並んでいるだけで何の生き物であるか、までは推測ができない。

ならば、主力の武器は毒だ。そう考え、チャーリーは一瞬背後を見て班員達にジエスチャーを飛ばす。

「気は済んだか？」

班長の言葉と共に、口が開かれる。避けられない距離からの毒液。しかし、チャーリーは怯まず。逆に班長の口にその爪を繰り出す。

「……」

それを腕で防御する班長。爪が突き刺さり、血を流す。硬いわけではない。だが。

即座に爪を抜き取り、チャーリーは追撃する事なく離れる。

硬くはない。攻撃もしようと思えば普通に通る。だが。

アレは全て、筋肉の層だった。

さらに、その傷は徐々に塞がっていく。

「お前ら、見たか……手が抜ける相手じゃねえ……一気に仕留めるぞ……」

一時的に下がり、班員に指示を出す。

班長は前に出てくる気配も無ければ勿論退く様子もない。

宇宙艦を防衛しながらこちらを仕留めようとしている、とチャーリーは推測し、二人の班員と共に駆ける。

敵の班長以外は班長の戦いを見守り、動きを見せない。しかし、こちらが総員でかかればいつ動き出すかわからない。ならば、牽制として数名を残しておくのが好手。

チャーリーと二人の班員はバラバラに別れ、それぞれの方向から班長に襲いかかる。凶暴な獣の爪と牙、それが班長の体に突き立つはず……であつたが。

「が……」

正面から突撃したチャーリーが班長の大振りの一撃を受けて倒れこむ。

だが、チャーリーの犠牲によって班長の死角から二人の班員が攻撃を仕掛ける。

「アアアアア！」

「ぎゃあああ!？」

だが、すぐさまその二人の班員は地を転がる事となった。

班長の背から、腹から、胸部から、いたる所から液体が噴き出たのだ。

突然の事に回避できずモロにそれを浴びた二人は苦痛でのたうち回る。

「ひ……や……」

変態して鳥類型となった班員の女性が、恐怖のあまりその場を逃げ出そうと飛ぼうとする。

だが、それが許される訳もなく。

班長がコートの裏から取り出したのは、楔型の武器。それを女性に對して投擲する。

それは腰に突き刺さり、それだけであればまだ飛ぶ事は可能であったのだが。

次の瞬間にそれは爆ぜ、同時にその体は何らかの衝撃を受けたかのようにのけぞる。

そこに、爆ぜた武器の中身に充填されていたのか、黄色の液体が拡散し、容赦なくその身を焼き溶かす。

「か……ひゅ……」

虫の息で墜落した女性。その全身には火傷のような爛れた痕が残り、皮膚が、もしくはその中身から溶けているのかどろりといくつもの傷口ができ血が溢れだす。

「なんで……だよ」

「ウソだろ……」

他の第四班が動くのを警戒していた残る二人の班員も、この一瞬の

惨劇に何もする事ができない。

班長はそれに近づき、その腕を振り上げ。

その腕は、背後から掴まれた。

「……オイオイ、うちの班員、苛めてくれんなよ……」

そこには、怒りに身を滾らせた彼らの副長がいた。

——巨大な体が武器となるのは、自然界では当然の理である。

だが、この生物は自身より巨大な敵に平然と立ち向かい、打ち倒す。

それは、彼らが糧とするヘラジカのような大型の草食哺乳類。

それは、餌を奪わんとするライバル。

それは、飼育下で争わされたホツキョクグマ。

どのような秘策を用いているのか？

猛毒でも持っている？

群れで狩りをする？

いいや、罠を作れる？

……どれも無い。彼らはただその頑丈な体と牙で戦い、強大な敵に対しては急所を一撃で破壊する、という戦術を以てそれを打ち倒す。

そんな凶暴な獣は、この窮地に口を歪めて笑った。

チャーリー・アルダーソン

国籍：アメリカ

26歳 ♂ 179cm 80kg

『裏マーズ・ランキング』7位

「オオオオオ！」

雄たけびを上げ、欣と剛大がぶつかり合う。剛大の胴目掛けて振られる欣の拳。重量の乗ったその一撃を、剛大は蹴りで迎撃する。棘の少ない体の背面側、つまり腕の内側にあたる部位を狙って放たれた攻撃は、その腕を容赦なくへし折り、勢いを殺す。

「まだだ！」

しかし欣は距離を詰める事を諦めない。力を失った腕を即座に引き下げ、勢いの乗ったそのままでもう片腕を繰り出す。

それを紙一重の所で体を屈ませて避け、足払いを仕掛ける剛大。

後ろに下がって回避しようと試みた欣であったが、その背後にある物を見て舌打ちし立ち止まる。

そこには、先ほどの剛大の策により開いた穴が広がっていたのだ。

脚を振り上げた直後に屈んで回避、そこからの足払いという急激な動作を繰り返した影響か、威力としてはそこまで高くなく、それは欣を転倒させる事はなく、右足を少し軋ませただけで止まる。

「っ……」

それと同時に、剛大の脚に突き刺さる毒棘。

両者決定打に欠ける戦い。欣の戦闘能力は高いが、ベースそのものの腕力については特別高いものではなく、剛大の攻撃力は非常に高いが、オニヒトデの防御はそれを封殺する。

そう、単純なパワーで言えば、千日手は避けられない戦い。

だが、両者猛毒を持つ生物の戦い。



剛大は攻勢を緩めない。スタミナで負け、防御力で負け。恐らくは経験でも負けている。

だが、それでも捨てられないものがある。

「剛大君、君は何故ここに立っている？」

欣は再生した腕で剛大の毒針を受け止めながら問いかける。

「どういう意味だ……？」

「……君のような未来ある若者が、何故このような場所にいるのか、と聞いている」

欣のその言葉に、戦闘中のおしやべり、というような余裕のある態度は見られない。

ただ、どこか嘆き悲しんでいるかのような、そんな場合ではないのに聞かずにはいられないような、そんな感情が剛大には読み取れた。

「……金が、要る」

「そうか……」

それ以上は聞かなくてもいい、と欣は話を打ち切り、再び攻防に移る。

双方から挟みこむかのように襲い来る欣の腕を両手でそれぞれ受け止める。

攻撃にも防御にも棘が邪魔をする。拮抗しているかに見えるこの状態でも、剛大の腕にはいくつもの棘が突き刺さり、血を流す。

持久戦に持ち込まれば負けるのは必定。ならば。

蹴りを放つ。もう既に何度も見せているその一撃、両手を封じられている状態でそれを放つ事も、タイミングもその速度も欣は完全に剛大のそれを読んでいた。

「おっ……ガッ……!？」

だが。欣が自身の脚を使い捨てて防御しようとしたその時。空気が震え、直後、防御動作を遥かに上回る速度でその腹に剛大の足が突き刺さる。

これまでとは格段に威力の違う一撃。それに欣の巨体が吹き飛び、数メートル後退する。

「おお……何と……これは……」

鈍く光を放つ剛大の脚。そこに付いているのは、金属でできた防具のような機械。

——専用装備。

それは、テラフォーマーに利用されないことを条件とし、ランキング上位にのみ保有を許された武器だ。

その中でも幹部搭乗員オブリフイサの持つそれは特殊な武器や装置であり、さらに幹部搭乗員の中でもとある理由から明確な三つの区分がされている。

一つは、一位、二位。『裏マーズランキング』の頂点に立つベース生物。強化を行う為ではなく、αMO手術を用いてなお人間の手に余るその能力を100%引き出した上で完全に御する為の『制御装置』。

もう一つは、三位。三つの区分の中で他二つのどちらの特徴も併せ持つ、『強化機』。

最後に、四位二人と六位。強力なベース生物の特性をさらに強化する『武装』。

この中で、四位の剛大が属するのは最後の区分。

彼のベースであるトビキバアリの最大の特徴とは何なのか？

怪力？ いいや、それは他の蟻でも多くが持っているものであるし、上回る種も多い。

毒針？ 確かにその強さは蟻に限らず昆虫界でも指折りのものである。だが、それに近い強さの毒を持つ蟻は存在する。

態勢を立て直すとする欣。数メートルの間合い。

本能的に危機を感じて腕で顔を守る。それが間に合うか間に合わないか、というタイミングで毒針と刃が繰り出され、骨片による強固な防御を貫き欣の左眼に穴を開ける。

……それは、脚力。単騎で獲物に飛び掛かりそれを屠る、蟻の中でも数少ない戦闘技能。

——局所的真空・噴気式加速機『SYSTEM：Ic<sup>イ</sup>car<sup>カ</sup>rus<sup>ロ</sup>s』。

大気を吸引し、それを噴射する事による加速。それに加えて。

急速な吸引による、ごく一瞬の武装付近の真空状態化。

これによって可能とされる、空気抵抗も摩擦も無視した高速の脚技。

高速機動を可能とするトビキバアリの能力のさらなる強化。

「舐め……るなッー！」

自身の眼に突き刺さった毒針を無理やり引き抜き、欣は反撃の一撃を繰り出す。

だが。その場に、既に剛大は存在していない。

残った右眼で剛大の位置を捕捉する欣。

跳躍によって空中に逃れている剛大に向けて岩の欠片を掴み、投擲する。

が、それは空中で急激に姿勢を変化させた剛大によって容易く回避される。

トビキバアリのジャンプ力は敵に襲い掛かる際の跳躍に用いられるもので、生物としては蹴り技や空中戦に用いるわけでは無い。

しかしながら、この専用装備が加われば。

動きの限られる、跳躍した状態でありながら、噴射による姿勢転換。さらに。

「なっ」

欣は目の前の後継に驚きを隠せない。

先ほど離脱する為に空中へと上がったはずの剛大が、一度の着地も

無しに再びこちらに脚から突っ込んでくるのだ。運動エネルギーの向きに逆らった動き。それは、急激な大気の逆噴射によって可能となるもの。

まさに、その名の通り天を駆けるが如き機動を可能とする装備。それに対し、欣は。

「……良いだろう……」

潰れた眼を再生しながら、欣は剛大を真正面から迎撃する。

その体内から漏れ出すのは、淡い光。

明確な変化はすぐさま現れた。

欣の体を突き破り、三本の腕……といっても、人間のそれではなく無数の棘を有したオニヒトデの腕が現れる。

極めて高い再生能力。そして、本来ならば人間の四肢では済まないような本数を持つそのベースの腕。

頭足類の触手とは異なり普段から発現しない特性であるそれを、細胞を暴走させる事によって無理やり発現させる兵器、『SYSTEM：アラクネー』。蜘蛛、を意味する単語に由来するその名称は、毒棘に覆われた無数の腕を生成するオニヒトデを、MOベースとして用いたのではあまり感じられない蜘蛛の悍ましい姿に喩えて付けられた名。

本来であれば欣の偽装したベース、『イイジマフクロウニ』に用いられる再生能力を持たないウニのベースを持った体を急速に再生させるための装置であったため、本来の名称はまた別にあり、この名称は第四班に引き渡されてからのものである。

両者、専用装備を用いた戦い。

茨姫の城もかくやという量の棘と腕の欣に対して、剛大の左腕に生成された刃が振り下ろされる。その攻撃は無数の棘に抑え込まれ、本体まで到達せず。

反撃に腕を背中に回され、拘束される。オニヒトデの捕食方法。それは、相手にのしかかった上での胃袋を体外に出しての直接消化。

全身を毒棘に突き刺され、処置しなければ命も危ういという状態の剛大。いや、それ以前に目の前にある差し迫った死の気配。

無数の棘と再生可能な強固な腕の防衛線。専用装備の威力を上乗せした蹴りでも、それを貫くのは容易ではない。外せばおしまいだ。どうすればこの場を脱する事ができる？ 思案の末、出たのは一つの答え。

「うおおー！」

その脚の一撃を、地面に振り下ろす。いくつも空いている穴は、元々そうなるように仕込んだものだ。

普通ならば、いくら強力な一撃といえどボコボコと落盤を引き起こすには至らない。これは、一つの賭けである。そして。

「!？」

剛大の足元には、ぽっかりと穴が開いた。

一度の衝撃で崩れかけていた場所に、再度、直接の一撃。これによつて、脱出口を開く。

欣も黙つておらず拘束を強め剛大を逃さんと動くが、剛大の動きに一步遅れた。

それに加え、もう一つの要因。

衝撃で周囲の穴から舞い上がる、『ズグロモリモズ』の粉。剛大を囲い込むような形となっている欣は皮肉にもそれから剛大を守る形になってしまっている。

その身に刺さった棘を薙ぎ払い、戒めを解いた剛大は落下。

「……逃げられると」

深い穴ではない。せいぜい3mあるかないかという深さにある地下通路だ。

それを追おうと脱出口を覗き込む欣。

「逃げられると思うな」

その目に映ったのは、穴の底で構えを取った剛大であった。

逃げる為ではなく、追わせてからのカウンター。その意図を即座に察した欣はオニヒトデの腕と自身の腕の二重の防御を構える。

……ここで、避けるという判断もできたであろう。

欣にそれをさせなかったのは、自身とそのベース生物と専用装備の堅牢さへの絶対の自信。

だが、一つ、ただ一つ見落としがあった。

αMO手術被術者同士の戦いで、正気であれば、勝って生き残り戦い続ける、という道を目指すのであればまずとらない選択肢の事を。

剛大の腕には、二本の注射器が刺さっていた。

襲い来る強烈なアッパー、それに次いで専用装備の起動により無理やり打ち上げられた脚の一撃により、防御を固めた欣の体が浮き上がる。オニヒトデの防御が次々と突破され、欣の胴体に大きな衝撃が加わる。浮き上がり吹き飛ばされた直後、体勢を持ちなおそうとしたその時、欣の腹に激痛が走る。

「……勝つのは、勝つのは第四班我々だああア!!」

視認するまでもない、致死の毒針。既に離脱し、こちらに向けて再度攻撃姿勢を取る剛大に向けて欣は叫ぶ。

直後、再び体を突き破って現れる、十本近い数の毒棘を纏った腕。がくがくと痙攣するそれは、既にまともな状態ではない事をうかがわせる。

暴走、と形容するのが最も近い、細胞を強制的に高速で分裂させる専用装備。さらにその装置を人為的に暴走させる、というような使い方。通常の使用ですら多大な体力を消耗し寿命をけずるそれを用いても勝利を掴まんとする欣。

その異形の怪物という風貌の欣に正面から突撃する剛大。

両者の攻防は、一瞬の内に決着がついた。

「……かふっ……」

ぎちぎち、と機械が軋むような音と共に、欣の体の中から漏れ出ていた光が弱まっていき、止まる。

それと同時に、オニヒトデの腕が、欣本体から生えていた棘が、植物が枯れ朽ちるようにぼろぼろと崩れ落ちていく。

欣の体には、二つの穴が開いていた。一つの穴から覗くのは、機械の残骸。

もう一つの穴から覗くのは、内臓。だが、その臓器は医学に携わる人間から見れば、奇異に見えた事だろう。

何故ならば、そのような臓器は普通の人間には存在しないものであったからだ。

無尽蔵の再生能力を持つオニヒトデ。だが、再生できないものが一つと一グループ。一つは、脳。ヒトデ以上の再生能力を持つ生物ならもしや、という部位ではあるが、少なくともオニヒトデはこの意識の中枢までは再生を行う事ができない。そして、一グループ。

モザイクオーガニクアラファモザイクオーガニク  
M Oと $\alpha$  M O。人間に他の生物の能力を与え、制御するための中枢。人間由来ではないこれも、再生は不可能であった。

専用装備の濫用によって細胞が疲弊しきったのが原因なのか、MOを穿たれても変態から戻る事が不可能、という末路ではなく、オニヒトデの表皮がぼろぼろと剥がれ、体内を埋めていた骨片が破壊されたMOへと帰っていくように全身から消え、変態前の状態に戻る欣。

剛大は、それを見届けた後、その場に座り込んだ。体は動かない。過剰摂取、と言えるほどの本数の『薬』を用いたわけではないが、何十もの毒棘を受け、意識も限界に達した状態で、剛大は一つ、息をつく。

今の状態で人間に戻れるかは、五分五分。

「……剛大君」

息も絶え絶え、という状態であるが、欣が剛大に話しかける。

まだ息があったのか、という反応を見せる剛大。

「最後に、私の時間稼ぎに付き合ってはくれないか」

「……」

「ふっ、有難う……」

剛大の沈黙を肯定、と判断したのか、欣はぽつり、ぽつり、と少しずつ話を始める。

剛大としては即座に第四班本拠地に駆け付けたい所であるが、もう体が動かない。回復を待つまでは、この男の最後の言葉を聞こう、と考えたのだ。

「私は、汚染の酷い地域で生まれてね……それこそゴミ山の中にぽつんぽつんと家がある、という形だったよ……」

欣は、目を細めて昔を懐かしむように語る。ゴミ山の中の人家、碌に映らないテレビ、分厚い雲に覆われた空、汚染物質の含まれたべたつく雨。欣の語るその全てが、剛大の暮らしていた日本とはかけ離れた現状を突きつけていた。

「世話になった近所の年上の人が三人いたんだ」

ゴミ山の中の地獄、だがその中にも、子ども達には仲のいい同年代、というわずかな救いがあった。

—— 爛！ タマゴ食うか？ なんか硬いけど！

—— もう遅いからウチに泊まってけよ

—— 本を見つけたの、一緒に読みましょ

手術の代償として精神を蝕まれても今もまだ忘れないその声を頭の中で思い返し、欣は少し間を置いて続ける。

「私はある時、空というのは本来は青いものである、水とは透き通っているものである、と知ったのだよ。そして、都会に出ようと考えた」

ゴミ山の住民が都会に出ていく、それがどれほど大変な事なのか、欣も欣の近所の子ども達もぼんやりとではあるがわかっていった。しかし、欣は諦めず勉強をし、子ども達はそれを見守っていた、という日々が続く。

「そして、いよいよ私は金を貯め、故郷を離れようと思った。だが、できなかつた」

こんなに自分に良くしてくれている皆を見捨てるような形で、自分は故郷を出るのか。それに思い悩み、十年少しという時間の苦労の結晶、それをいよいよ発揮する機会を欣は諦めつつあった。



「……そんな時だった、彼らがお金を持って私の所にやって来た」

——立派な政治家になってこの村をきれいにしてくれよ

——俺らバカだからさ、代わりにお前に頼んだ！

——いつてらっしゃい、焔

彼らは自身の持つていたわずかな金を欣に託した。そして、それと同時に言ったのだ。

——大人に聞いたけど、この村に国からの補助金が出るようになってほしい、だから安心して行って来いと。

欣はその言葉で決意を決め、涙ながらに故郷を離れた。

「見送りの時には、四人揃って大泣きしたものだよ……」

ふふ、と優しげな笑みを浮かべる欣。

「それから、成り上がるのに必死だった」

毎日が命がけながらもどこかのんびりした様子があった村での暮らしとは違い、激しい権力闘争と忙しい都会の暮らし。勿論、一日たりとも故郷を忘れた事はなかった。だが、多事多端な日々の中でさらに目を向ける事は中々できなかつた。

「そして、軍の中でも立場を持つ地位まで上り詰めた、というわけだ」  
発言力の強い上級軍人。軍人そのものは政治に関与できるものではないが、政治家に個人的なパイプを、もつと言うなら弱みを握って働きかける、という形で口出しができる。

欣はそれを実行し、実際にそのパイプを手に入れた。

「これで故郷を救える、そう思ったさ。そんな時だった。軍の伝で情報が入って来たんだ」

その情報が欣の元に届いたのは、休みの日、故郷への手紙を書いていた最中の事だった。

故郷から欣のいる都会へ手紙を届けるのは配達や情報統制の問題で難しかったが、欣の側から故郷へは欣の地位もあり比較的簡単に行えた。故郷へメッセージを送るのは、欣の習慣であった。

「村が人ごとダムに沈められた、とね」

それは、当時の中国の省に国から通達されたものであった。要約すれば、環境への配慮に関して他国がうるさいからゴミ山を一定量以下まで減らせ、と。

その対策として、これはゴミ山ではなくダムである、という強引な解決を試みたのだ。

勿論、住民には何の通達も無しで。村の周囲に何かの土台が築かれている、くらいの事は理解できていただろう。だが、それが何か、まです理解できる人間は村にはいなかったのだ。

「狂ったように調べたさ。何故通達があった時点で察せなかったのか、何度も苦しんだ。そして、わかった」

「彼らが言っていた、国からの補助金、などというものは存在しなかったのだと」

都会に出て、何故これについて真っ先に調べようとしなかった？

ああ、簡単な事だ。

自分は、世話になった兄貴分姉貴分の彼らの事を、いつまでも信じ切っていたのだ。

欣は、自身を攻めた。だが。

「でもね、私はそれについて今から調べようとはしなかった。いや、調べられなかった」

「……剛大君、何故だかわかるかね」

欣の問いかけに、剛大は答えられない。自分の性格であればすぐにも調べるだろうが、何か事情でもあったのかと疑問が渦巻くだけだ。

「怖かったのだよ、真実を知るのが」

国が故郷に補助金を出す、というのが嘘だったのか、それとも、彼らが自分を送り出すために嘘をついていたのか。

もし前者であれば、欣は国を憎む事になるだろう。軍人として出世していくうちにできた同僚や部下たち、それさえも憎しみの対象となるのではないか、と思った。

もし後者であれば、自分は自責の念に押し潰され、二度と立ち直る

事はできないだろう。

「それを忘れようと必死で打ち込んだ。いつその事消えてしまおうと成功率0・3%の手術を受けた」

しかし、成功してしまった。まるで、運命が自分を呪ってでもいるかのように。

「そして、最初に失ったのは、色覚だったよ」

皮肉なものだ、と欣は笑い、直後咳こみ、血を吐く。

傷口は既に再生能力を失っているため塞がらず、血は流れ出るばかりだ。

「私は、あんなにも焦がれて望み、求めていた青空を、二度と感じる事ができなくなった」

剛大は、やはり何も言わなかった。

「なあ、剛大君……一つだけ、聞きたい事がある」

「……何だ？」

欣が一度閉じた目を微かに開き、剛大に懇願するように、ぽつりと言葉を漏らす。

「今、空は何色だろうか……？」

火星の空。晴れ間が見える時はあるが、今は分厚い雲が覆う曇り。

既に欣は視力も喪失仕掛けているのだと剛大にははつきりと感じ取れる。

故郷の為に戦い続け、それを失い、亡霊のようになりながらこの火星にやってきたこの男。

剛大は、一度上を見上げ、二度ぶつかり合った強敵の眼を見て、はつきりと答える。

「……青色だよ、澄み渡るような青だ」

剛大の言葉を聞き、欣はその強面に穏やかな、しかし少しの後悔を滲ませた表情を浮かべる。

「そうか……嗚呼、宏哥、耀哥、璃姐………貴方達に……あの空を……見せてあげたかった……」

それを最期に、その体は完全に動きを止めた。  
剛大はそれを見届け、立ち上がる。  
そしてゆっくりと、第四班の宇宙艦の方面に向けて歩き始めた。

## 第44話 空、黒く染まりて

?年 某国 某所

「……ええつと、まだ……ですかね……」

「もうちよつとつすよー」

「あと少しです、博士」

少しおどおどした様子で、博士、と呼ばれた少女がその前を歩く二人の人間に話しかける。

「まだ、でしょうか」

「着いたつすよー」

「お疲れ様でした、もう大丈夫です」

その言葉と同時に、目隠しで塞がれていた博士の視界が開かれる。

十数時間ぶりの光に目を細めつつも、眼前に広がる光景に博士は息を飲んだ。

博士の左右には、皺ひとつなく整えられた燕尾服の老人と、それは対照的によれよれで泥にまみれた白のシャツを身に着けた見るからに元氣そうな幼い女の子。博士をここまで案内してきたその二人は、祈るような姿勢で目を閉じ、膝を突いていた。

博士は周囲を見回す。広く、壁全体が白い部屋だ。特殊な器具こそないが、元は何らかの研究施設だったので、と思わせる、隅に並ぶいくつかの装置と窓。その外では、無数の透明なパイプが絡み合っている。部屋の奥には、壁の一部が開閉する構造となっている一つのドア。そこには窓はなく、その奥に存在する部屋の様子はうかがえない。

「ええつと、わたしはどうすれば……」

部屋を一通り見回した後、姿勢を保ったまま動かない二人に博士は不安げに声をかける。

この数日前、彼女の家に唐突にやって来た来客。その用事は、会って力を貸してほしい人がいる、という要請であった。

まだ幼いながらも研究者としての才を認められている彼女。しかし、理論提唱のみではつきりとした成果は上げてはおらず、それを実証する研究を行うための予算は一般家庭の出であまりの若さが原因かどこかの研究機関と契約もできていない身としては用意するのは夢もまた夢。

そこに提示された破格の報酬と好きに使える予算。三食昼寝付き。資料として提示された、研究者としてまだまだ未熟な彼女にもわかる世界でも最先端といえる充実した設備。怪しい案件である事はわかっている。しかし、その魅力には抗えず。

こうして、彼女はそれを受ける事に。

約束の日に家にやってきたのは、彼女が見たこともない何だか長い高級そうな車であった。

それに乗り込んだ彼女に説明を行ったのは、執事といったいでたちの老人と、少女より一回り年下の活発そうな少女。

さるお方が少女の研究分野に興味を持ち、自身の有する研究機関で行っている技術指導をしてほしい、それと同時に彼女自身の研究を援助する代わりに、それによつて得られた成果の一部をこちらに引き渡す、そのような契約。

それと、条件として機密保持の為に契約終了までは研究するその場所に住み込んでもらう事と、機密の機関であるため、目隠しをしてほしいと。

不審ではあるが、それは承知の上だ。その通りに彼女は目隠しをされ、何かの専門家とは思えない執事の老人と共にやってきた少女と色々会話をして仲良くなりながらも、車を降り目が見えないためよくわからない乗り物に乗せられたりしながら、長い旅路を終え、今に至っている。

空白の時間が数十秒。変化の無い空間であるため、時間の感覚なく明瞭な当の彼女にとってはその何倍も長くに感じられたが、とにかく数十秒が経ち、変化が訪れた。

「お待ちせして申し訳ない。ようこそ、『神殿』へ」

奥の扉が開き、一人の人間が姿を現す。

中性的な端正な顔立ちに、長い金髪。トガやトーガと呼ばれる、今の時代には明らかに似合わない、白の一枚布をそのまま衣服とした服装。その下に隠れながらも伺える、すらりとしてはいるが筋肉の付いた、鍛えている事が伺える肉体。

人間という生物の理想形、という、人間でありながらも人間とは別の生物であるかのような雰囲気をつた青年が、そこに立っていた。「二人とも、お疲れ様。お初にお目にかかるね、博士。私がここの責任者だよ、これからよろしく」

にこりと柔らかな笑みを浮かべ、青年は博士へと歩み寄り手を伸ばし、握手を求める。

慣れないながらもそれに答えてその手を握る博士。

「成程……欲しい」

「? なんでしょうか……?」

「いいや、独り言だよ」

ぼそり、と小さい青年の呟きに首を傾げる博士とそれをごまかす青年。

そのやり取りの間も、老人と少女は姿勢を保ったまま動かない。

「さあ、まずは博士の歓迎会だ！ 準備をよろしく！」

少し気まずい空気をごまかすように、青年は博士の隣に控える二人に指示を飛ばす。

「かしこまりました」

「了解です！ ちょっと待ってて、なっちゃん！」

「私は少し休んでいるよ、まだ安定していないんだ」

「なっちゃん……?」

音も無く立ち上がり、部屋を出ていく老人。ばたばたとせわしなく、同じように部屋を出ていく少女。

背を向け、開いたドアへ入り奥の部屋に消えていく青年。

突然のフランクなあだ名に困惑していた博士は、一人茫然と部屋に

取り残された。

2620年 火星

「ふむふむ、うーん、うん？」

無人の荒野を、赤毛の青年は一人歩いていた。北米第一班班長、ダリウス・オースティン。

本来ならば第四班本部攻撃のために真っ先に投入されるべき彼は、戦う事もなく味方も敵もない地に足を運んでいた。

ここは、基地から見て『裏切り者』が最も多く来襲してきた方向にいくらか進んだ場所である。

さらなる援軍が来た場合に迎撃するため、また、逃げる相手を逃がさず完全に殲滅する為、この配置となつていたのである。

ダリウスの能力は確かに強力ではあるが、集団戦向きではない。また、奇襲攻撃にも向いていない。そのため、このように単騎での任務に差し向けられている。

そんなダリウスの目に、基地とは逆の方向、つまりは裏切り者がやって来た方向から何人も人間がこちらに向かってくるのが映る。

それと同時に、ダリウスの腰の部分のホルダーに収められていた回転翼を持つ小型の機械が四機、四方へと飛んでいく。

武器を積んでいるわけでもなく、カメラのようなものが付いているわけでもない。アンテナと笛のような形状の機器が付いたそれは、ダリウスから1キロほど離れた位置の空中で静止する。

「仕事の時間か……って……んん？」

注射器を首に打ち、変態するダリウス。青みがかつた黒色の甲皮と、根本に水色、他に茶の脈が見える薄い羽。

左腕からは毒針が生え、右腕からは毒針とはまた異なつた硬質の針のようなものが形成される。

『裏切り者』の兵士たちが機械のホバリングしている位置を通り過ぎる。

射程圏内だ、とダリウスはその能力を使用しようとするが。



そこで、様子がおかしい事にダリウスは気づいた。やつてきた『裏切り者』の兵士達は、皆傷だらけなのだ。

遠目なのであまり詳しくはわからなかったが、明らかに正常で健康、という様子ではなく、ふらふらと歩く、へたりこむ、肩を貸し合うといった、まるで敗残兵か何かである。

「えーっと、ん!?」

兵士達を見ていた為、視線を少し落とし気味だったダリウスの視界。その上の方に、何かが映った。少し上を向くダリウス。そして、その表情は驚愕に変わる。

地平線の向こうから、黒い雲がこちらに向けて押し寄せてくる。いいや、それは雲、などではなく。

「ああ、これってそういう流れ……? うわあ、今回貧乏くじ引いてばっかだよ……」

しまおうとしていた注射器を再び手に取り、ダリウスは、若干死んだ魚のような目になりながら空を眺めていた。

「名前を聞かせろ」

「あ? あああ?」

俊輝の低い声に、男は苛立ちを押しえられない様子で顔を掻きむしる。

先ほどから足取りも定まっておらず、時折何かを振り払うように頭を振る仕草。

「どうも、あまり普通の状態では無い様子だ。」

「……ああ、名前か。アレハンドロだ、それがどうした?」

かと思えば、急に平静を取り戻し、俊輝を目に捉え、返答を返す。それは、捕食者が獲物をはつきりと捕捉した時のそれに近い。

「これから死ぬヤツの名前くらい覚えておいてやろうと思ってる」挑発するように、俊輝はそれを軽く返す。

「ぎいーんー!」

再びの狂乱、それは俊輝の反応に怒りを見せた、というそれではなく、前触れも何もない唐突なものであった。

その右腕に形成されたのは、鋭い二本の牙。  
俊輝と同系統のそれを、俊輝は正面から己の腕の刃で受け止める。  
次いで、右腕の刃で受け止めたそれをかち合ったまま下に下げる。  
無理やりな動きと硬度が同等であった事が原因か、お互いの刃はほぼ  
同時にへし折れる。しかし、武器の数が違う。唯一の牙を失い、無防  
備なアレハンドロの首に向けて俊輝は左の刃を繰り出す。  
それをアレハンドロは体を一步下げてかわし、同時に蹴りを繰り出  
す。

だが、俊輝はそれを正面から受け止めた。

『オオキバウスバカミキリ』。彼のベース生物である昆虫。人間の  
意思が介入してくる戦闘では、人間の技術を複合した戦いとなるのが  
必然。しかし。それが怒りで塗りつぶされた時首をもたげてくるの  
は、人間の本能、そして、ベース生物の特性。

オオキバウスバカミキリがどのような技巧でその刃を用いるのか。  
凶暴な性格と、カブトムシ、クワガタムシほど闘争する機会が少な  
いが故の技量の未熟さ。

それが打ち出す彼らの戦闘スタイル。それは。

「ぐっ……ぎゅ……」

その身に蹴りを受けたにも関わらず、俊輝は一步も退かず、力任せ  
にその左腕を振るいアレハンドロの左腕を肩口から切り落とす。

地面に落ちたその腕は途中までしか生えていない、そんな情報に見  
向きもせず、さらなる追撃。

今度はほぼゼロ距離の間合いでの腹への一撃。拳を固めて殴る、と  
いう形であるが、生えている刃が否応なしに腹に突き刺さる。

戦術など存在しない、体格と刃での正面からの圧殺。

しかし、その攻勢のままアレハンドロを仕留められる、という事は  
なく。

俊輝の体は、何かに押されたように押し返される。

それは、アレハンドロの頭、髪に隠れていた触手のようなもので  
あった。

頭に五つの触角。そのベースとなっている生物の属するグループの特徴としては、そこまで珍しいものではない。しかし、それに加えてさらに二つ。

『ナナティソメ』。牙を持つ捕食者であり、その上で感覚器官を強化したゴカイの一種だ。

本来は戦闘に用いるような目的ではないその髪に隠れていた部分から生えた触手が俊輝を押し返し、さらにその腕を拘束する。さらには、先ほどの攻防で折れた牙がその再生能力によってより長さを増した状態で再び生える。

「あひいいいい!! こころすうう!!」

狂気的な笑みを浮かべ、アレハンドロの右手の牙が振るわれ、俊輝の首を引き裂かんとする。

俊輝に残された防御は、刃を失った右腕のみ。再生を行えるイソメとは違い、俊輝の刃は完全に失われてこそいないがもう一度変態を行わなければ取り戻せない。腕を犠牲にして防御するか、と思われたが、俊輝はそれをせず、その牙は俊輝の首を目掛けて伸び。

だが、不発。その右手の牙は、再び根本からへし折れた。

「オレの台詞だよ」

「ひ?」

唐突な己の武器の喪失と氷のような冷たい声色にアレハンドロの狂った笑い声が止む。

カミキリムシの第一の武器は高度に発達した顎である。しかし、それに次いで発達した部位がもう一つ。

それは、彼らのテリトリーである木にしがみ付く為の『鉤爪』。

”9位”専用装備 外装式強化爪部甲『セベリア・シゾー』。

近接戦闘で用いる武器であるカミキリの大顎、それを純粹に強化するというわけではなく、第二の武器、それを大顎に匹敵する武器として運用可能にする籠手型の専用装備。

高位ランカーの武器にしては凄く地味、と今は亡き友にからかわれた思い出のある、俊輝の為の専用の武器。

俊輝の元の手が変化した鉤爪と、そこに重なりさらに威力を上乗せする金属部品が、再生直後で脆いイソメの牙の基部を切り裂き、無力化する。

「ぐっ……ぎゃ……」

それでも再び再生を開始しようとするアレハンドロの右手の牙、しかし。

その首に深々と突き刺さった俊輝の右の刃が、それを停止させた。

「ちく……しょう……」

「……」

どさり、と仰向けに倒れたアレハンドロを、俊輝は何も言わず見下ろす。

「ダチの敵討ち、ってか……？」

死の間際に狂気が引いているのか、ある程度意識を取り戻した口調のアレハンドロ。

自身を仕留めた青年に対し、息も絶え絶えに問いかける。

「ああ、でもアイツ墓に首添えるとか趣味じゃねえから首は残しといてやるよ」

「そうか、敵討ち、か」

もう一度、アレハンドロは繰り返す。徐々に弱まっていく息。その最後に、アレハンドロは口を歪めて笑う。それは俊輝に対する憐憫と嘲笑の入り混じったものであった。

「全く、可哀想な奴だ……」

それに対し、俊輝は心臓に刃を振り下ろす。だが、それが届く直前で俊輝は刃を止めた。

振り下ろすその瞬間に、アレハンドロはすでに絶命していたのだ。急いで第四班の本拠地に向かわなければ。そう思い立ち去ろうと

した俊輝であったが、少し不自然だ、と思い足を止める。

あつさりすぎるのだ。

アレハンドロは最初に襲撃してきた時には、自分より高い実力を  
持っているかのように思えた。

それこそ、両者万全の状態だったとしたら自分が殺される、とい  
うくらい。

それを本能的に感じ取ったからこそ、あの時自分は大切な友を置  
いていく、というような選択をしたのだ。

だが、今の戦い。弱くはなかった。しかし、最初に感じた脅威は  
見る影もなかった。

自分はバイロンとの戦いの傷が十分に癒えておらず、最初の襲撃  
の時よりも状況が悪いにも関わらず、だ。

不審に思い、アレハンドロの死体の服を引きはがそうとする。

そこで初めて、俊輝は自分が切り落とし地面に転がっているアレ  
ハンドロの左腕を見る事になった。

肩口から切り落としそれは、すでに肘の少し上から先が失われて  
いた。

アレハンドロは元から片腕で自分と戦っていた。

確かに、それも十分なハンデであったといえよう。

だが、それだけか？ 片腕を失っていた、それは確かに重傷だ。だ  
が、その断面の傷は塞がっていた。再生能力を持つイソメのベースで  
あるはずなのに、それ以上の再生が行われなかった。……いや、まさ  
か、再生能力を全力で使ってここまでしか再生できなかった？

アレハンドロの服を引きはがし、その体、特に切り落とし先であ  
る左肩の周りを観察する。

そこには、焼け爛れたかのような変色した痕があった。

成程、と俊輝は一応の納得をする。何らかの戦闘を行い、片腕だけ  
でなく体にも重傷を負った状態でアレハンドロは自分と戦い、だから  
弱っていたのだと。

しかし、そこで新たな疑問も発生してくる。この傷は、何によつて  
付けられたものか？

あの時の攻防の後、帰還した自分は班長達と一緒にあの場に戻り、誰もいなくなっていた事を確認した。

その後、第四班と交戦してから基地に合流したわけだが、その時既に各班は到着していた。

アレハンドロが他の班と交戦する暇など、あったのだろうか？

もし交戦していたとすれば、他の班が既に到着している、という事がおかしいのではないだろうか。

留守番の各班の宇宙艦が襲撃された？ いや、そんな報告は主戦力であるランカーを中心とした基地での会議でも挙がっていなかった。

先を急がねばならない、という意味もない交ぜになってそれが何を意味しているのか、を考えるほど冷静にはなれず、俊輝は自分の頬を叩き、第四班の宇宙艦へのルートを一人で歩き始める。

そう、先ほど隠れていた岩陰には、俊輝たち奇襲部隊の人員は、誰一人いないのだ。

「もう死に体だ、後は任せた」

地に膝を突き苦しげに息をするチャーリーに背を向け、第四班の班長は宇宙艦へと戻っていく。

せめて情報だけは、と脱出を指示しそれに従った第一班の班員はすぐさま第四班班員によって追撃され、チャーリーと班長が戦っている間に死体となって引きずられてくるという有様。

チャーリー自身も、全身に毒を浴び体中に醜い火傷のような痕を晒している。

班長の意思に従い、チャーリーを取り囲む班員。

ここまでか、と最後の抵抗と言わんばかりに複数の薬をポケットから取り出そうとするチャーリーであったが。

「がっ!？」

チャーリーを包囲していた班員の一人が、突然血を吐き崩れ落ち

る。その左胸には、長い槍のようなものが突き立っていた。

さらに、空中を警戒していた敵の班員が、何かせわしなくしゃべりながら何かとドッグファイトをしているのが視界に映る。

「チャーリーさん、超ヤバイって感じ?」

槍が生えてきた場所、それは、第一班が奇襲に使った穴。そして、そこからぞろぞろと何人もの戦士たちが姿を現す。

「何言ってるんだ……俺はまだまだいけるっつーの!」

言うや否や再び薬を打ち込み変態するチャーリー。突然の事で反応できなかつた班員を一人殴り飛ばし、再びファイティングポーズを取る。

「また会ったね、中国の人!」

「今度こそブチのめす!」

そんな戦場の上空。

空を舞い、お互いを打ち落として制空権を得んとするのは二人の鳥。

地上では、裏アネックスの精鋭達と第四班と裏切り者の選ばれし強者が向かいあう。

戦いは終わらず、次の段階へ。

敵の増援がやって来るのを後目でちらりと見た班長は、一つ溜息をつき、そして再び自身に薬を打ち込む。

「いいだろう、総員でかかれ……こいつらを人質として、基地の奴らと交渉するでしょう」

## 第45話 裏切り者

その生物は探し尽くされた地球で久方ぶりに発見された新種、であつた。

しかし、一般的な新種、と異なる点が一つ。それは、この生物が古くからその存在そのものが知られ、人々の間で語り草となつていたところである。

歴史は古く、発見の六百年近く前から幾度となくその生物を発見するために探索が行われ、それは悉く失敗してきた。

それは、その生物が生息地の深層を住処とし、ごく限られた期間しか人間の目に映る場所に姿を現さないという生態と、生息数が限られた希少種である事、二つの要因が重なつた結果と考えられている。

この生物は何の仲間であるのか、それも昔から議論されていたものの一つである。

伝承に伝わる形態から純粹に見て取れる生物の一種。いや、この環境に見た目通りの生物の仲間では適応できないわけがない。それに形態が似た爬虫類の一種、もしくは語り継がれるその生態から別の動物と見間違えただけではないのだろうか。

様々な説が飛び交い、そのどれもにはつきりとした根拠は無かつた。映像記録の一つすら、その生物に関しては発見されていなかったのだから。

「何……でだよッ！」

低い姿勢で距離を詰め、大槍の死角に入ろうとするプラチャオを健吾は身を退いてさせまいとする。

戦闘中ですら軽い調子を崩さないその顔には、焦りと動揺の色が濃い。

第一班、第二班を主力とした連合部隊と、第四班+裏切り者の一部精鋭の部隊。

人数にはそこまで差は無い。戦闘能力に関しても、第四班側には幹部搭乗員の存在はあるが、目的を戦闘に絞つた連合部隊と戦えるとは



いえ技術員も含む第四班の戦闘能力の開きはある。

純粹に戦力としては拮抗している状態。だが、連合軍の側には精神的な動揺があった。

「静香、俺ごとでいい、やれ！」

「鈴、やらせるな」

臨時の指揮官を務めている健吾が空中戦を繰り広げる静香に指示を飛ばし、それと同時に第四班班長が静香の相手、鈴に対抗するかのよう<sup>に</sup>に命令する。

「わ、わかった……けどっ」

「はいよお、班長！」

少し躊躇いながらも高度を下げてその専用装備を地上に向け、そこにいる健吾ごと数人の敵に向かってその羽を原料とした毒の粉を散布しようとする。だが、その攻撃ルートに鈴が割って入り、蹴りによってその射程範囲から静香を蹴り出す。

「なっ」

専用装備と組み合わせる事によって上空から地上に対し広範囲の攻撃を行う事が可能な静香のベースであるズグロモリモズに対し、猛禽類がベースである鈴は地上を一掃するような真似はできないが、運動能力は明らかに優位に立っている。

一対一で空戦を行う分には静香も毒と専用装備によって牽制する事ができるため劣るわけではないのだが、静香が鈴を無視して地上に狙いを定めても鈴はそれを容易に妨害する事ができ、逆に鈴が地上を攻撃しようとするのを速度でも機動力でも劣る静香は阻止できない。

「くっ……」

空中戦は一方的に制空権を奪われる状態ではない拮抗状態を保っているものの、定期的に脚の鋭い爪で奇襲を仕掛けてくる鈴の存在と、全体的な動揺による士気の低下。

「ケンゴ、気持ちはわかる……けどな、今は……」

『裏切り者』の男が一人、背を向けたチャャーリーに向けてその腕から生えた生物の刃を振り下ろす。

チャャーリーはその攻撃を見ずに避け、その腕を掴む。その勢いのま

ま腕を抑え込み、曲げた自身の肘を上向きにした相手の肘に振り下ろす。

関節が逆側にへし折れ、苦痛でしゃがみこむ『裏切り者』。

低い位置になったその顔に膝蹴りを入れ、追撃にさらに蹴り飛ばし距離をとる。

「っ、おう……い！」

チャーリーの言葉に、健吾は顔を歪める。敵の目を逸らすために一人で敵の幹部クラスと思われる男と戦っている自分より高順位の俊輝はまだ到着せず、本来自分達の指揮官である剛大も同じく敵の幹部クラスである第四班の副長、欣が部下を引き連れて警戒に当たっているという情報を手に入れ、この第四班本艦攻撃に支障を出さないために足止めを行っている。

皆の動揺はわかる。自分自身も、もしかしたら自分が最も動揺しているかもしれない。

情けない話だ。火星の開発計画、その支援計画。事情は聞いていた。

『裏切り者』を始末する。その過程で敵味方の屍を乗り越えねばならない、という事も。

理解もしていたつもりだ。これまでの戦いでもそうしてきた。

だが、これは。自分は。

班長と俊輝は合流してくるだろう。きっと、二人なら勝ってくれはす。

ならば、今自分がすべき事は。まだ折り合いはついていない。状況を十分に受け入れたとは言い難い。しかし。

その命令は、普段おちやらけている彼が部隊の指揮官であるという事と同じくらい似合わない、敵本拠地奇襲という勇猛果敢な任務に対する戦闘方針であった。

「全員、無理はするな……生存第一、だ！」

冗談に聞こえなくもないそれを聞き、班員達は頷く。

「時間を稼いでも班長は来ないぞ、きつと」

先ほどからあまり戦闘に参加してこない第四班班長が、健吾の指示とその意図をすぐさま読み取り、口を開く。

そこにあるのは、自身の副官であり、自身より優れた司令官である欣への自信。

仮に欣が敗北したとしても、剛大に致命傷を負わせて戦力にはならないであろうという予想。

戦闘に入った際の通信遮断とそもそも通信用の設備を持っていないという事情で両陣営ともその戦いの結果は知られていない。

事実、剛大は欣を撃破しこちらに向かっているが、その傷は深く、どこまで戦えるかはわからないという状態。

「勝手に言ってる、『裏切り者』」

健吾の言葉に何かを返そうと口を動かす班長だったが、途中で気が変わったのか首を振り、それ以上健吾に対して言う事はなく。

「仕方がない、か……」

その発見は、多くの界限を沸かせる事となった。

昔からその存在を信じ、熱心に情報を集めていた一般の人々。

その生物の属する仲間にとって地獄といえる環境で進化した特異な生態に注目した科学者。

……そして。

かつて与太話と言われていた、それは現実のものであった異常なまでに他生物の殺傷に特化したその能力を”使える”と考えた、ある新しい技術の開発者たち。

しかし、それを扱うには、いくつもの問題があった。

その生物の存在が最初に語られた時代から、環境汚染等の理由により大幅に減少したとされる個体数。その生態からくる捕獲の難易度と相まって、十分な量のサンプルを確保する事の困難さ。

それをクリアした後には判明した、通常の手術では適合不可能という特性。

ドイツで開発された新型の術式により適合させる事は可能、と判明したものの、その成功率の低さと、新技術をもつてしても適正を持つ人間の少なさ。

その多くの条件をクリアし、手術に成功したのは、運命の悪戯と呼ぶべきか。

歴戦の軍人や、凶悪な犯罪者のような特別な人間などではなく。ただの、どこにでもいる少し不幸な少年だった。

「シャツ！」

掛け声と共に、楔型の、先端に鋭い針が付いている飛び道具が健吾に向けて投擲される。

「遅えっ！」

それを己の腕から生えた『コガシラクワガタ』の長槍で弾き落とし、同時に襲い来るプラチャオをもう一本の長槍で牽制し、班長に向けて一歩踏み込む。

「……！」

だが、そこで健吾の本能が警鐘を鳴らし、それに従い健吾は横に跳ぶ。

直後、空気が爆ぜる音。それと同時に、弾かれて空中で回転しながら落ちてきていた飛び道具が炸裂し、内部から黄色の液体が飛び出し、飛散する。

これに触るとまずい。直感でそう判断した健吾はその液を浴びないよう、転げるようにさらに距離を取る。

だが、そこに再び、班長が懐から取り出した飛び道具が飛来する。それは健吾の右肩に突き刺さり、その先端の針は甲皮を貫き血を流す。

しまった。このままではモロにあの液体を浴びる。だが、位置的に肩に刺さったそれを即座に抜き取るのは不可能。そして。

「ぐあっ……！」

健吾の体が衝撃に跳ね、ごく小規模の爆発が起こる。しかし、先ほどの黄色の液体が飛散する事はなく。

致命傷は免れた、だが、飛び道具が刺さった傷口には、まだ異物が残っている。

楔型の武器は爆発により壊れたが、その先端、いや、楔型の外装を貫く形で中心に配置されていた金属の針が刺さったままであった。

そして、その針の末端には、パラボラのような形状のものが付いている。

その意味する所を理性と直感、二つの組み合わせで即座に理解した健吾は出血を厭わず引き抜き、投げ捨てる。

健吾の動きが一步早かったのが幸い。

捨てられた針と班長の体を繋ぐかのように光が走り、同時に空気の爆ぜる音。

班長の隊服の胸の部分が衝撃で爆ぜると同時に焦げ、地の肌を晒す。

そこに見えたのは、体に埋め込まれた機械であった。

「電気、か」

対生物他目的投擲具『ボルトエージマイン雷機雷』。必要に応じて毒液を充填できる小型容器とごく少量の火薬、電気刺激に反応して起爆する装置を複合し、その中央を導雷針で貫き威力と空気抵抗の兼ね合いで楔型の外装を用いて加工した専用装備。

コートの裏にびっしりと並ぶそれを再び取り出そうとする班長。

「健吾っ！」

もんどりうって倒れた健吾に襲い掛かる二人の『裏切り者』をタックルで牽制し、武がそのまま班長に向けて突撃する。

巨体から繰り出される、ベース生物である『トゲクマムシ』の装甲の重さも付加した大重量大威力の突進。

プラチャオと他の第四班班員の阻止も間に合わず、それは班長に向かって一直線に。

「……」

「!？」

それは、正面から受け止められる。

……その正体は、ヘビか。トカゲか。

事實は、いくつもの科学的考証をあざ笑うかのようなものであった。

乾燥した砂の数十、数百メートルの深層を潜航し、掘り進む事を可能とする圧力耐性と『蟻』のそれに劣らぬ強靱な筋肉。

餌とする特殊な種類の植物と何種もの昆虫の成分を混合して生成される、『雀蜂』に匹敵する猛毒。

その生物の仲間の多くが持ち、複雑に進化した体構造の影響が弱くはあるがそれでも例外なく持つ『蟹』のような再生能力。

時には自身の数倍の体長を持つ大型動物すら襲撃し、その糧とする『蛸』のような貪欲さ。

そして、陸上生物としては極めて異常である、『電気鰻』と同じ、放電による自衛と索敵能力。

それら全てを併せ持つ砂漠の悪魔。

雷を放ち、毒を吐き、火を吐く。その空想上の怪物であるかのような、人々に語られしその生物の噂は、そのほぼ全てが事実であったのだ。

「悪い、待たせた！」

そして、この戦場に姿を現した人間がもう一人。

流されるようにこの火星にやってきて、友を失い、その敵を先ほど討った青年。

突入口から這い出て、素早く戦闘態勢に映った彼の視界に映ったのは、敵に相對しているため己に背を向けている巨体の仲間。

その体に隠れて何が起こっているのかわからない向こう側から一瞬の光が見え、直後にぐらりとその体が揺らぎ、倒れこんでその先にいる敵を明らかにする。

それを見て、俊輝の様々な思考の入り混じっていた脳内は一瞬で真白に染まる。

変態による赤黒い皮膚、左胸を中心に体に埋め込まれている装置。その手に持つのは、彼のベース生物の能力を発現させるための、点鼻薬型の『薬』。

それら全てが、未知の敵の能力を知る為の重要な情報、だが、そんな新たな情報の数々は何も頭に入っていない。

何故ならば。

「よう、久しぶり。元気してたか？」

「なん……で……だ……拓也……？」

そこに立っていたのは、紛れもない、彼の友であったのだから。

小原川 拓也

国籍：中国／日本

20歳 ♂ 181cm 80kg

『裏マーズ・ランキング』86位

MO手術 “環形動物型”

—— イソゴカイ

Warning! false date

date update……

αMO手術”環形動物型”



ゴビサバクオオチヨウムシ

俗称

モンゴリアン・デス・ワーム

## 第46話 赤い決戦

”worm”。芋虫、青虫、蛆虫、蚯蚓<sup>ミミズ</sup>等の体が柔らかく手足の無い下等な生物の総称。

それに加え。

古き神話で、足を持たぬ龍を指す言葉である。

その正体は、砂漠環境に適応し特殊な進化を遂げた蚯蚓<sup>ミミズ</sup>の一種であつた。

食性は土中の豊富な有機物を食らう平和的なものから肉食に寄つた雑食に変化し。

その生活域を生き抜く為、獲物を食らう為に発展したその能力の数々。

噂に違わぬ電気。それを用いた電気定位と放電による自衛。かつてはそれを受けた時の症状から火を吐く、と考えられていた、酸を含む強力な筋肉毒。

砂漠の深層を住処とするための、流砂の中を掘り進む事ができる程に発展した筋肉。

その全てが、他の生物との闘争における凶器として機能する。

「いやー、何日ぶりだっけ？ 1日目に別れて今が7日目……ま、何で

もいいのか」

現在、2620年4月19日。彼らが火星に到着して7日目の昼である。『アネックス1号』着陸から2日の遅延。

彼らは知る由もないが、現在アネックス1号方面でも第四班と第一、第二班による電波塔を巡る攻防が繰り広げられている。

この電波塔が破壊されれば、火星の全てが地球に知れ渡る事となり第四班の計画は頓挫。

裏切り者も裏アネックス四班も、何らかの形で始末される事はほぼ確定と言える状態となってしまう。

正直に言つて綱渡りな戦況。しかし、そこでも拓也はマイペースに数を数えている。

「……生きてたのか」

少しはその衝撃から立ち直った俊輝が、目の前の状況を見れば当たり前にわかる事を呟く。

「ああ、生きてたよ、”9位”」

それに対して、拓也は目を大きく開き口端を歪めて笑みを浮かべながら答える。

その表情と物言いから、彼の自身へ向ける思いが。その立ち位置から、彼がどのような立場の人間であるのか。はつきりとわかつてしまふ、それでも。

「拓也、何でだ、お前は……地球でも……火星に来る前でも……っ！」

言葉を詰まらせながら、俊輝は尋ねる。二重ドツキリだよ、味方かと思つたら敵かと思つたら味方でしたー！ などという、冗談みたいな回答を大真面目に求めて。

「常識的に考えて一班を仕切る幹部が敵になる国のただの班員と馴れ合うわけねえだろ、馬鹿か？」

表情を無に変え、冷たく言い放つ拓也。そこに、U—N—A—S—Aで健吾達も一緒に女湯を覗きに行つて運悪く見てしまったエレオノラとのホラー映画の如き鬼ごっこを割に合わなすぎるとか言いながら潜り抜けたり落とし穴を掘つて武を引っかけようとして自分達が落

ちたりしてバカみたいにはしやぎまわっていた時の笑みは全く無く。

「……わかった、だったら」

俊輝が己の腕に形成された刃を構える。その目には、裏切られた憎しみでも悲しみでもなく。先ほどまでの迷いでもなく。

「お前らは他の相手をしてろ。この”9位”は俺のオトモダチだからな、俺が始末する」

「ぶん殴って謝らせて……地球に連れ帰る」

俊輝の見た事の無い下卑た表情で皮肉を言い、拓也は懐から三本のポルテージメイン『雷機雷』を取り出す。

それに対し、俊輝は決意に燃える目で拓也を見据える。

地球で出会い、長い時間とは言えないが、普段の業務、日常生活、遊び、と様々な時間を共に過ごした友。

そんな彼は、その全てが偽りであった、と語る。

だったら、やってやろうではないか。よくも裏切ったな、と殴り。

裏切っててごめんなさい、と謝罪の言葉を聞き。

そして。

もう一度、最初からやり直そう。

彼と自分達の友情、その何もかもが幻想であったとしても。

地球での思い出の数々、その裏に彼を信じた自分達への嘲りがあつたとしても。

それでも、地球で笑いあつた友として、友であるとまだ自分は考えているからこそ。

今更償えなどと言えない。言う権利もない。許してやってくれ、と皆に言える権利もない。

でも。

あの時に皆と一緒に笑いあい、バカをやった拓也の全てが、根っこ  
の奥底までが『裏切り者』だったと思いたくないんだ。

馬鹿な考えであるとはわかっている。相手は今回の事件の黒幕。

そんなヤツに何を、と言われる事は承知の上。  
それでも、と俊輝は戦いを挑む。

先に仕掛けたのは俊輝だった。持っている情報は、拓也のベース生物が環形動物だという事。

環形動物型用の薬で変態している以上、そこはごまかせる部分ではない。

環形動物の特性。筋肉の塊であるという事と多くの種が持つ再生能力。それにさらにプラスして能力を持っているであろう拓也。どう対するのか、俊輝は頭の中で組み立てる。

「はっ、遅えんだよー」

その距離は約10m。戦闘向けのベース生物であるが特別素早いというわけではない俊輝が走り始めるのを見てから、拓也はその進行方向を読んで『雷機雷』を投擲する。

俊輝に向けての一本と、その回避ルートを塞ぐように二本。

それを俊輝は足を止める事なく正面から迎撃する。

右腕の大顎で構え、それを打ち落とそうとする姿勢を見せる俊輝。

それに対して凶暴な捕食者の笑みを浮かべ、拓也は右手を俊輝に向ける。

『ゴビサバクオオチョウムシ』の電気は発電機構こそ『デンキウナギ』のそれと似たものであるが、毒腺や毒を貯めこむ袋、絶縁体となる脂肪の少なさからその電力はそこまで強いものではない。人間サイズの生物の体内を一撃で焼き切る程の威力はないが、それで十分。

打ち落とす為に『雷機雷』と接触した瞬間に放電し動きを止め、そのまま追撃を加える。

「……なんちゃって」

だが、その拓也の思惑は俊輝の一言と動きによって崩された。構えはそのままに、打ち落とさず、身を低くして

飛来する『雷機雷』を避ける俊輝。そこに拓也の放った電気が吸い込まれるが、既にその下を通過している俊輝には当たらず。『雷機雷』の起爆によって発生した少しながらの追い風を受けて速度を増し、拓

也の懐に迫る俊輝。

それに怯む事は全くなく、拓也は口を開く。

突撃する俊輝にそこから不意打ちで放たれる細胞を壊死させる筋肉毒と酸の混じった毒液。拓也が勝利を確信した直後。

「よっ……とっ！」

俊輝は方向を替え右に大きく体を動かし、毒液を回避する。

一度も俊輝に見せていないそれを回避された動揺で一瞬動きが鈍る拓也。

「うらァー！」

「チッ！」

その隙を見て俊輝が振りかざした刃を拓也は右手で受け止める。

切断こそできなかつたが深く腕に刺さった刃に対して、放電で撃退を試みる。

だが、それを知っていたのか素早く刃を引き抜き一步下がる俊輝。

「何故わかる？ ああ、お前」

自身の動きとその攻撃が読まれている事に対して、拓也は俊輝に質問しようとし、すぐに理由に思い当たる。

それに対して、俊輝は自己解決しようとする拓也に被せるようにその答えを堂々と言い放った。

「UMAファンって前に言ってたっけ」

「お前の考える事なんざお見通しなんだよ」

火星 基地内部

「……………は……………」

青年が目を開いた時に最初に入ったってきたのは、岩だらけの天井であつた。

自分は何をしていただろうか？ 今ここにいるのはどのような経緯だろうか？

……自分は、こんな所で寝ている場合だっただろうか？  
意識の復活と共に記憶が次々と蘇っていく。

自分は誰と共に、何の目的でやってきたのか。何がどうなってここにいるのか。

「ドクター!!」

自身の恩人と同僚達と共にやってきた。理由は、自身の恩人が従っている連中がそう命令をしたから。自分は、戦いの中で気を失って。青年、ヨハンは身を起こそうとする。しかし、起き上がる事はできない。怪我による影響ではなく、体を縛られているのだ。

「……うるせえ、お嬢が起きたらどうすんだ……俺の傷にも響く」

叫んだヨハンを咎めるような声は、近くから響いてきた。何とか体を横に倒し、その声の主を確かめようとする。

数秒かけて横倒しになったヨハン。その目には、眠る少女が大写しになった。

銀色の長髪。柔らかで触れれば壊れてしまいそうな肌。可憐さを感じる整った顔立ち。その体の所々に傷があり、お世辞にも上手、とは言えないが包帯が巻かれている。

恩人と同じその顔を見て、ヨハンの内心に浮かぶのは喜びの色。だが、すぐに状況を分析し、その喜びは沈んでいく。声の男が呼んだお嬢、というもの。恐らく目の前の彼女の事だ。

男の声に聞き覚えは無いが、かのお方にお嬢、などという呼び方をする人間は自分の知る限りではない。

ならば、この少女は。

「ドクターは……エリセーエフ博士は……どうなった……?」

掠れる声を絞り出し、ヨハンは祈るように男に問う。

男は答えない。この情報をどう扱うべきか、と考えているのだろう、とヨハンは思い、その答えを静かに待つ。

いくらかの時が流れ、その答えは。

「わたしにも聞かせてください。ヨーゼフさんと……あの人が、あれからどうなったのか」

それを言われる前に、ヨハンの目の前にいた少女が目を覚まし、ヨ

ハンと同じ疑問を口にする。

その口調は、声は、ヨハンの恩人、アナスタシアと似ている……というかほぼ同じであったが、それでもヨハンには違いがはっきりとわかった。

この少女は、アナスタシアではなく自身を倒した第三班班長、エリシアであると。

オリジナルとクローンの関係の両者。偶然にも地球を遠く離れたこの火星で両者はぶつかり合い、アナスタシアが勝利し。その後ヨーゼフが戦いに割って入りアナスタシアと交戦した。ヨハンはアナスタシアとエリシアが戦闘を開始する前に気を失っていたためそこから何があったのかは知らないが、自分がここで囚われ、エリシアがこの場にいるという事は、つまり戦いの結果はそういう事だったのだろうとぼんやりと思う。

「お嬢!? まだ安静に!」

「大丈夫です、それより状況を……」

焦った声でエリシアの体調を慮る男。

それに、ふらふらとしながらも立ち上がるエリシア。

「わかった、コイツはともかく貴女には状況確認の義務ってヤツがある……」

それから、男の話が始まった。あの後、第五班班長、ヨーゼフとアナスタシアが交戦し、その際に男がアナスタシアに囚われていたエリシアを奪還、その後自身も攻撃を受け数人の班員の犠牲を出しながら撤退。

ヨーゼフとアナスタシアの交戦は観測手によると交戦地域での爆発を確認、両者それに巻き込まれたであろう、と。

「そうですか……」

その戦闘の結果はヨハンとエリシア、両者とも容易に想像ができた。

特にヨハンは、アナスタシアと自分が従っている国がどのようなものかわかっているからこそ、そういったものを仕込むであろう、と。

アナスタシアの体はもう限界である事はわかっていた。だが、それ



でも現実を突きつけられると。自分をここまで導いてくれた恩人がもういないのだと。ヨハンはぽっかりと体に大穴が開いたように苦痛を感じる。

「それと、ヨーゼフ博士がお嬢に伝えておいて欲しい、と言っていた事が一つある」

「……なんでしょうか……」

気落ちした声のエリシアに、男は少し躊躇う様子を見せた。少し過保護なのではないか、とヨハンは思わないでもない。

「君のお姉さんの仇を君に討たせてあげられずすまない、と」

「……そうですか……」

寂しさと悲しみ、ほんの少しの口惜しさの混じった表情を浮かべ、再びふらりと倒れこむエリシア。

それに小さな悲鳴をあげる男だったが、エリシアがまだ意識を保っているのを確認し、ほっと息をついている。

「ヨハン・アウフレヒト。『裏切り者』幹部の一人。お前と、取引がしたい」

それは、唐突に告げられた話であった。『裏切り者』の自分と取引？

何の冗談だ？ と。

「お前たちにもう帰る手段は無い。だが、俺たちにはある。つまり、お前を地球に返す事ができる。その代わりだ……お嬢を守ってくれないか？」

自分の生きる意味と言ってもいい人を失った。もうどうでもいい。もはや地球に帰る事も。かと言って、これ以上彼らと戦う意味も無くなってしまった。ヨハンは思案する。このまま殺されようがどうされようが、何も変わらぬ事だ。

「……」

エリシアは、考え込むヨハンの顔を見ていた。大切な人を失い、抜け殻のように。

それはかつて、エリシアも経験した事だった。ある時に姉を、『手術』を受けた時に姉妹の全てを。

ヨハンがアナスタシアと、エリシア自身にとって姉と呼ぶべきなの

か母と呼ぶべきなのかわからないあのひとどのような関係であったのかはわからない。でも、とても大事な人だった、という事くらいはわかる。

「ヨハンさん……でしたか……？　お願いです、自暴自棄にならないで……生きていけば、生きてさえいけば、きつと……何とかありませんから……」

エリシアはヨハンの頭をそつと抱きしめ、涙を流しながら、懇願するかのようにほつぽつと話す。

実験生物として生きてきて、成功率が1%以下の手術を受けて、今こうしてエリシアは新しい仲間にも出会い火星にやってきている。自分もそうであったからこそ。人生の中で何度も自暴自棄になっていたからこそ、今日の前でそうなっているヨハンに諦めないでほしい、ただただその想いのみだった。

「……とりあえず縛られてるのが痛いので縄を解いてください」

「あ、はい！　ごめんなさい！」

ヨハンの声で、エリシアは思わずその束縛を解いてしまう。

戒めを解かれ、ゆっくりとエリシアの膝から立ち上がるヨハン。

男、レナートが警戒心を露わにし、『薬』を手を持つ。

「馬鹿な人だ」

何と愚かな。先ほどの言葉に自分を説得して引き込む、という意図など微塵も感じなかった。

そして、言われるがままに縄を解くなど。

……ヨハンは、激しく動揺していた。生きていけば、生きてさえいれば。何故。何故この子が。

アナスタシア  
あの人がかつて廃棄物扱いだった自分達に言ってくれた事と同じ

事を言っている？

面識があつたわけではないだろう。ならばなぜ、こんな。

頬に残る暖かい感触。ゴミのように打ち捨てられ、死を待つだけだつた自分を拾ってくれた彼女と同じ。その言葉さえも。

嗚呼、まだ、あの人は消えてなんかいない。あの人の温かい部分は、内心で本人と比べるのも愚かな劣化コピーであると思ひこんでいた、この子の中に。

「いいでしょう。……僕の力は、君を地球に帰す為に」

ヨハンは膝を折り、エリシアにそつと手を伸ばす。少し戸惑いながらもその手を取るエリシア。

ここに、『裏切り者』と裏アネックス、とても小さな最初の同盟が結ばれたのだつた。

そして、その直後。

「やつほー☆ヨハン君、助けに来たよー」

部屋の扉が唐突に開かれ、一人の少女が姿を現した。

染められた金の髪に、胸元が開かれた軍服の要素が入った学生服。大量のストラップが付いたその存在は、ここが戦場である事など微塵も感じさせない。

『裏切り者』幹部。その最後の一人が、そこには立っていた。

## 第46・5話 疑念の砂漠の底より

生まれた時から、いい事など何一つ無い人生だった。

日本人の母と中国人の父。日本で大手の製薬会社で開発職として勤めていた父親に、その会社でパート勤務をしていた母親。ごく普通の恋愛結婚で、ごく普通に幸せだったという。

だが、父は嵌められた。自分が信じていた、同郷の友人に。金に目が眩んだ技術漏洩。その責任を、そいつは俺の父に押し付けたのだ。

職を追われ、国にいられなくなった両親は父の生まれ故郷へと海を渡る事となった。俺がまだしゃべる事もできなかった時の話だ。

新たな土地で、両親は必死に頑張ったそう。幼い俺を育てる為。母にとっては慣れない土地で。父は周囲の悪意ある人間から一度国を捨てた裏切り者、などという理不尽な罵詈雑言を受けながら。

努力を重ね、十年近くの歳月が経ち、両親は新しい事業、詳しくは教えられなかったが宇宙開発か何かの機関へと部品を納入するとうものを始め、それが軌道に乗ってきた次の年の事だった。

両親は、また裏切られた。  
事業の立ち上げに協力してくれた実業家だった。最初から、俺の両親のそれを奪う目的で手を貸してきたそう。起業を決めた時の父の喜んだ顔は今でも頭に焼き付いている。

———子どもの時からの友達がバックアップしてくれる事になった、と。

両親に二人の話をせがんだ時、悪い事をした俺に説教をする時、父は決まって最初に裏切られた時の話をしてくれた。

付き合いこそそんなに長くなかったけどいいヤツだと思ってたんだけど、お前は友達に悪い事したりしちやダメだぞ、と。

俺はそれを守って幼少期を過ごしてきた。だが、俺と両親が暮らしていた場所はお世辞にも治安がいいとは言い切れない場所だった。お人よしは食われるだけ。それは、子ども達の間でも同じだったんだ。

気を許せる友人、といえるような人間はいなかった。裏の探り合い、子どもと子どもの間で何と馬鹿らしい。でも、俺は父を尊敬していたし信じていた。だから、いつか本当に、お互い信じあえる友達ができると思っていて日々を過ごした。

そう俺に教えた父も、同じ考えだったんだろう。その結果が、コレか。

俺は、この一件で他人を信用しなくなった。気を許して共に笑い合うような関係を持たなくなった、というべきか。

両親は、再び辛い暮らしに転落して、俺を学校に通わせてくれてはいたが、少しずつその明るさを失っていった。

今度こそ立ち直れなかったのか。それに加えて、同級生との関わりも碌に持たず学生生活を楽しむ様子もなくいつも暗い顔をしている俺を見るのが嫌だったのだろう。

そして、ある日唐突に、何の前触れも無く、俺は国の実験台として両親に売られた。

朝起きて、いつものボロ小屋ではなく病院のような場所のベッドで寝ていた時に、俺は自分がどうなったのかをすぐに察し、自分で思い返しても驚くほど冷静にそれを受け入れていた。

これまで両親はずっと頑張ってきた。馬鹿正直に人を信じて。努力すれば報われる、と。何か特別なものを望んでいたわけではない。ただ、人として、人並みに幸せになりたかっただけなんだ。でも、それを世の中は許さなかった。

俺は両親に裏切られた、のかもしれない。だが、俺は両親を恨んだり憎んだりはしなかった。……ただ、疑うだけではなく、人を嵌めてものし上がってやろう、と思うようになったが。

あの人は本気で俺を愛してくれていた。でも、ある日、ぽつきりと折れてしまったのだろう。

俺を売って手に入れた金で、二人は何をしているのだろうか。幸せになってくれていれば嬉しい。

その後、俺は両親の消息を調べた事はない。

それはともかくとして、俺は実験台として、手術を受ける事になった。

当時は何かよくわからないものとしか考えなかったパッチテストのようなものを行い、その結果を見て、周りの白衣の連中が喜んでいた事を覚えている。俺は、その何かに適性があったようだった。

本手術の前日、好きなものを食べさせてもらえる、という事だった。売られてきた実験動物への情け。ああ、これは、死ぬ可能性が高い手術なのだと思解できた。

そして、目が覚めて。

俺は、手術に成功したようだった。そこで初めて聞かされた、俺の手術と、俺がこれから従事する事になる任務の話。

他の生物の因子を体内に埋め込み、人の身でその生物の持つ技能を使用できるようにするという、夢のような技術。

俺に組み込まれた生物は、希少かつ非常に強力なものであるという事。

成功確率が1%を切っていたという事。

そんな大仰なものを施してまで、何がしたいのか？

その答えは、思ったよりもシンプルで。

人類の未来の為に火星に飛び立つ。……そして、それを裏切り、皆殺しにする。

俺は、その実働部隊を総べる立場となるのだ、と。

任務そのものには、特に思う所はなかった。元々拒否権なんてなかったし、裏切りは世の常。むしろ、これまで散々裏切られてきた自分が、逆に裏切つてやるのだと。自分の両親を苦しめた世界に構う事などないのだと。

ただ恐らく、その任務で死を迎えるだろうと思った。

一方的な戦いではなく、相手は必死に抵抗するだろう。

武術の心得もない俺が、人を取り仕切る役割などした事もない俺が、戦場で最後まで生きて残れるなどは、とても思えない。

そんな俺に、連中は良い事を教えてくれた。

指揮官という立場であるが、お前の価値はその身に取り込んだ『能力』<sup>チカラ</sup>なのだ。お前の仕事は、

それを振るいデータを得る事が殆どなのだ。

その通り、事実として自分と共に任務を遂行する部隊には副官という名義で軍人の出の人間がいて、部隊運用は主にそちらに任せておけばよかった。

指揮権や決定権は自分にあつたが、それを己が振るう事は稀だった。一応、指揮官としての訓練は受けたには受けたが。

班員達は俺にはあまり近づいてこなかった。当然だ。兵器に友や仲間など必要ない。俺があまり触れ合うような事をしなかった、というのも理由だったのだろう。

そんなある日、友人ができた。といつても、人ではない。研究室で飼育されていた、俺の『能力』の元となった生き物だ。赤黒くて大きいミミズのようなそれに、俺はよく話しかけていた。

独りぼっち。その生き物はきつと故郷に仲間とか家族とか友達がいて、無理やり連れてこられた。俺は周りに誰もいなかった。理由は違えど、同じ立場。

訓練が辛いだの今日のご飯がどうだっただのの愚痴をそいつに聞いてもらい、そいつは理解しているのかしていないのか、それに反応を返す。

変わり映えのしない日々が続く。

……俺は、クレジットカードを落として空腹に苦しんでいた。何やら面倒な手続きがあるらしく、しばらくかかるとの事。手持ちの金は殆どない。仕事の話以外をしない班員に借りる事などできるはずもなく。

「おーい、大丈夫ですかー。えっと、死んでないよな……」  
疲労と空腹が限界に達し、床に倒れる俺に、声をかけてきたのが一人。

日本第二班所属の、俺と同じ年の男だった。

”9位”。俺が参加する計画は、その本計画の増援部隊という名目のもの。

そこに付けられるランキングの基準は、『手術』を受けた人間を相手取った際の能力で定められている。

その中の9位。ランキングを偽装している俺を除いて各班の幹部が占める6位に相当近い、計画を遂行する上での脅威の一人。

そのような立場のアイツ、俊輝は。疑わしい立場である俺に。逆の立場であつたら無言で離れるような状況で。初対面である俺に笑いながら話しかけ、とりとめもない話をしてきたのだ。

なんだコイツは。そう思いながらも、俺は適当に話を合わせた。

……楽しかった。打算も目的もなく、ただ会話をするのが。信用はしていなかった。四班所属の俺から情報を得るために接触してきたのだろう。そう考え、逆に利用してやる、くらいの感覚だった。

だが、そんな俺に俊輝は自分の持っていた食糧を渡し、さらに食事をしよう、などと言いだしたのだ。

未知の生き物だった。だが、俺の驚きはそこでは終わらなかった。

ラーメンライスなる謎の料理。ラーメンが中国料理で米が日本の主食だから日中友好、などという謎の理論。そもそも中国でも米は主食の一つだ、というのは飲み込んだ。

問題なのはその後の、お会計の時。

あいつは、俺が金を持っていない事を知った上で食事に誘い、さらには俺の分まで金を払ったのだ。



金が入ったら返す、と言った俺に、あいつは言ったんだ。  
素直に受けてくれ、友達だろう、と。

何を言っているのだろうか、と思った。だが、同時にこうも思った。  
意味の無いような会話を楽しみ、困った時には助けてくれる。これ  
が、俺がこれまでずっと避けてきた、逃げてきた、友達、というもの  
なのか、と。

勿論食事の一度程度で完全に信用したわけではない。俺はそこま  
で甘い人間ではない。だが。

俺はその事を研究室のあいつに喜々として報告したのだ。その部  
分はいまいち記憶にないが。そして、その次の日。

研究室の、俺と同じ独りぼっちだった、俺の1番目の、いや、0  
番目と言えるような友達は。

サンプル採取の無理が祟り、死んだ。

それから、俺は第二班の連中とつるむようになった。俊輝と、その  
友人たち。

色々な事をして遊んだ。それこそ、小中学生かよ、というようなも  
のから、親睦旅行の時に女子風呂の覗きや落とし穴を掘る、というよ  
うな危ないものまで。

ああ、間違いなく、楽しかった。本当に。友達というものは、こん  
なにも素晴らしいものであったとは思わなかった。これまでの反動  
もあってオーバーに感じているのかも、とは思ったが、それでもいい、  
とその思考は切って捨てた。

そして、そうやって楽しく騒いだり馬鹿をやったりした日の夜は決  
まってる。

「オエエ……」

眠れず、吐き続けた。

自分は、彼らを裏切るのだ。かけがえのない友という存在を、彼らの自分に向けてくれるものを、己が踏みにしるのだ。

計画に参加した事を悔やんだ。いつその事、彼らに全てを打ち明けてしまおうか、と考えた。

だが、それをして何になる、と踏みとどまった。それがどこから自身の所属に漏れてしまえば。いや、確実に漏れるだろう。一般人の出で国への忠義も怪しい自分には監視が付いているだろうから。

そうなれば、友の死期が早くなる、それだけの結果に終わるのだから。

「班長、最近明るくなりましたね」

「そうか？」

「あの……これ、実家から送られてきた野菜です……」

「あ、ああ……ありがとう……」

「空の散歩しようぜ！ ほら、あたし飛べるから！」

「悪い、高所恐怖症気味なんだ」

第二班の連中と一緒に過ごすようになってから、自分の班員たちからも話しかけられるようになってきた。

無自覚だが、前よりも表情が柔らかくなっていったのだろう。

親交というのは決して悪いものではない。それが友に人類を裏切る共犯者の仲間であるなら、信用するということのも。

自分の内心の変化には少し驚いたが、それでもそれは良い変化だと信じ、班員達とも会話をし、業務の手伝い、アドバイスを積極的にしたし業務後の付き合いにも参加した。

こうして、国を裏切れない理由が一つ増えた。

出発の日が近づいて来た。嫌だ、嫌だ、と夜は布団の中で泣き喚き、睡眠薬の量は日に日に増えていく。

もうどうしようもない。俺は、せめて友達が苦しまないように最期を迎える事を祈る事しかできなかった。

本当は、彼らにお礼がしたかった。俺が貰った、彼らにとってはな

なんてことの無い、俺にとっては抱えきれないほど大きなものの一部でもお返しがしたかった。

会わない方がいい、そう考えていた。  
でも。

「一つ、提案がある」

珍しい班長の言葉に、俺の部下たちはこちらに顔を向けてくる。

俺が提案したそれを聞いて、反応は様々だった。不審がる者、疑いの目を向けるもの。それが当然だったが、何故かそれを受け入れた者もいた。

ついに地球を旅立つその日。俺は、第二班の高速宇宙艦に乗り込んだのだった。

スパイ、隙を見せればその場で殲滅。そんなもつともらしい理由。だが、その裏の俺の本心に、班員の皆は気付いていたのだろうか。今となつては、その答えがどうであつても何も変わらない事だが。

勿論、剛大班長の監視を受けながらも搭乗員として受け入れられ、班員の皆とわいわい騒ぎながら到着まで訓練の日々。火星に辿り着き、自分は知っていた襲撃を受け、これを追い払い。

偵察の任務で、俺と俊輝、静香は火星で待機していた連中の仕切り役の一人、アレハンドロと遭遇した。

クスリでも使っていたのか、今作戦の統括である俺の顔もわからず襲い掛かって来るアレハンドロに、俺は内心呆れながらも、感謝していた。

ここが潮時であると。できる限りきれいな形で友達と決別する機会を与えてくれたのだと。

なんと汚らしい考えなのだろう。俺は、この状況に至って、裏切り者である自分をその最期まで軽蔑してほしくない、と考えていたのだから。

こうして、俺は第四班と合流し、元の任務に戻った。

準備を整えた上での今日迎えた大攻勢。

総力で、裏アネックス計画をぶち壊す。

地球で一緒にはしやぎまわった仲間達は、何人が生き残っているだろうか。そんな事に思いを巡らせ、俺はその指示を出した。

戦場は膠着し、むしろこちらが押されている。そんなさ中、襲撃してきたのは、第一班の残党。自分の班員達を傷つけさせはしない、と戦い、これを撃破する。

その後やってきたのは。俺が、もう会えないと思っていた人達だった。

内心でどんなに狂喜した事か。

ああ、これで。もう二度と会う事は無いと思っていた彼らを、助ける事ができる。捕虜という名目で。

ただ、同時に思ったのだ。知られてしまった。裏切り者、であると。俺はもう、彼らの友ではいられない、と。

最後に、あいつがやってきた。俺の、最初にできた友達。

最初に、できる限り感情を出さずに言う。

全ては虚偽であったと。最初から、お前たちを利用する為だったのだと。

皆はそれに絶望した表情を見せていた。そして、あいつがやってきた後、それに追い打ちをかけるように言い放つ。

「常識的に考えて一班を仕切る幹部が敵になる国のただの班員と馴れ合うわけねえだろ、馬鹿か？」

—— やめてくれ  
それでいい。

—— 違うんだ

俺はお前達のお友達なんかじゃなくて。

—— 俺は

ただの、敵だ

—— 俺は

大切な思い出を、自ら穢した。

もういいだろう。いつまでも馴れ合っている場合じゃない。いい加減に夢から覚めろ、と。

俺の内心にぽつんと浮かんできたそれは、彼らに向けた言葉だったのか。それとも。

「わかった……だったら」

「ぶん殴って謝らせて……地球に連れ帰る」

その言葉を、俊輝は全く理解していないようだった。初対面の時の事が頭に浮かぶ。

あの時は、自分が俊輝の事を全く理解していなかったが。今は、逆だ。

皮肉なものだ、と俺は笑う。

俊輝が己の腕の刃を構え。俺もそれに対して自身の武器を取り出す。

友達ではない。裏切り者……ですらない。最初からそっちの仲間じゃなかった、そう言っているだろう!?

俺が、お前を叩きのめして、捕虜として地球に送り返してやる。

単に敵に利用価値があると考えられてそうされた、お前が考えるのはそれだけでいい。

皆、昔の俺のように思わないでくれ、友達に裏切られた、などと考えないでくれ。何も信じない、昔の俺みたいな人間にはならないでくれ。

裏切ったんじゃない、最初から、友達なんかじゃなかった奴なんだから、思ってくれ。

ああ、俊輝。

疑心の底に沈んでいた俺を、馬鹿みたいに笑いながら搦り上げてくれた、かけがえのないしんゆ……いいや、俺にお前をこう呼ぶ権利などないか。友よ。

もし奇跡でも起こるのであれば。

この絶望的なまでの戦力差を覆せるのであれば。

お前の力がそれに値するのであれば。

——この醜い、心の無い兵器を、お前の手で、ただの敵として殺してくれ

## 第47話 黒い胎動

「恭華……」

乱入してきた少女を唾然と見つめ、その名を呟くヨハン。

基地に残った人員に当てはまる人間がない事。ヨハンの名を呼んで助ける、と言った事。二つの理由から、レナートは少女を『裏切り者』に属する人間である、と考え、自身に『薬』を打ち込み変態する。

彼のベース生物である『マルスゾウカブト』の特徴を示していく体。しかし、以前変態した時と異なるのが一部分。

彼の右脚には、肉を抉ったような痛ましい傷跡が残っていた。そこは甲皮が生成されず、包帯とその内に覗く肉がそのままとなっていた。

アナスタシアに埋め込まれた寄生虫を排除するため、ヨーゼフの言葉もあり、足の肉を削って対処したのだ。脚を失う、というところまではいかなかったものの、その動きには大幅な制限がかかる状態。

そして、レナートの戦士としての勘が語っている。この少女は手負いの自分が考え無しに殴りかかって勝てる相手ではない、と。

「なんだ、手負いじゃーん。ヨハン君、とつと二人共始末しちやおうよ」

少女の声とその仕草からは、ヨハンに疑いを持っている様子は見られない。ヨハンは当然のように自身の仲間であり、裏アネックスを始末する任務を遂行中であると考えているようだ。

「……すまない、私は彼女を地球に帰そうと思っている」

先ほどまでヨハンに膝枕をして頭を抱きしめていたため座った状態のエリシアに目を向け、ヨハンは苦しげに恭華に返答する。

「へ？……うわっ、”三位”!? わ、本当に先生そっくり！ プチ先生、って感じ？ かわいー」

これまではヨハンと変態したマッスル、後はもう一人いる、程度に室内の状況を認識していたのか、ヨハンの目線を追って初めてエリシアの姿をはつきりと見て、恭華は幹部搭乗員であるエリシアがこの場

にいた事に驚き、そのすぐ後にその見た目に関して感想を黄色い声で述べている。

当のエリシアは押しの激しい恭華にびっくり、と体を震わせる。本来ならば変態して即座に迎撃する所なのだろうが、衰弱が激しいのか、別の理由があるのか、それは出来ない様子。

「わあ小動物……なでなでしたい……それはともかくとして、ヨハン君、この子の側に付いちやう系？」

恭華はそんなエリシアに向けほんわかした表情をしつつ、ヨハンに向き直り、その意思を問う。その瞳には、うつすらと怒りの色が浮かぶ。

どう答えたものか迷うヨハンであったが、すぐさまその回答を伝える……

「恭華、君はまだ知らないのだろうか、ドクターは「うるさい馬鹿！」

問答無用！ ヨハン君の裏切り者！ ロリコン！」

……が。

ヨハンが自分が裏アネックスの側についた理由を説明しようとしたそれを最後まで言う前に、恭華の左手が大鎌に変質し、それでヨハンに襲いかかる。元々自分達が裏切り者、だというのに当の仲間に裏切り者、と呼ばれる機会が来ようとは。複雑な気分になるヨハンだったが、このまましてやられるわけにもいかず。

幸い、今のところ恭華が狙っているのは自身だ、とヨハンはαMO手術の専売特許、薬未使用時の部分的変態で右腕に針を発現させ、それを正面から受け止める。

「待て、話を——」

「バイロンもジェネジオのおっさんも死んじやったじゃん！ もう残ってるのヨハン君と先生だけじゃん！ なのにヨハン君まで行っちゃうの!?! 先生はどうなるのさ!?!」

訴えるように、『薬』を首に刺し、さらに右手まで鎌に変質した腕で、恭華はヨハンに隙を与えず猛攻撃を加える。

「やらせねえぞ！」

それに横入し、恭華にタツクルを繰り出そうとするレナート。



迎撃に蹴りを繰り出す恭華。その足先に生えているのは、針状の器官。

レナートはそれを腕を盾にして受け止める。突き刺さりはしたが、致命的な傷ではない。

相手は足を動かせない状態となった。この隙に拘束してしまえば。

その後の計画を考えていたレナートの腕、恭華の足先の針が刺さった部分から、液状のものが送り込まれてくる。

まずい。何かはわからないがとにかくマズイ。危険を感じ取ったレナートは、即座に計画を変更し、力任せに針を引き抜く。

「……ッあ……い……」

その腕に襲い来たのは、激痛だった。肉が溶かされでもしているかのような感触。事実、甲皮の中の肉の感覚が痛みと共に徐々に失われていく。

「！」

恭華がレナートに構っている隙を突き、ヨハンが変態しその毒針を恭華の首に突き刺そうとする。

彼女の戦闘能力はアナスタシア麾下の自分達四人の中では自身のホームグラウンドでは最強を誇るが、一般的な戦いでは戦闘を本業としない自分よりは勝るもののバイロンとジェネジオに比べると劣る。

そして、そのホームグラウンドとは人間対人間の戦場にはあまり選ばれない場所である。

地上戦であれば、レナートの補助もある今ならば。そう考えるが。

ヨハンの目の前から、恭華の姿が消える。

即座にそれを認識し、彼女の『能力』で移動する事が可能な場所、上を見る。

小山の内部を掘り抜いた基地だ、そこまで高い天井ではない。だが、それでも分解して組み立てるのが難しい種類の大型の通信機材の持ち込みなどの都合から、ある程度の高さは確保されている。

目線を上げたヨハンの両肩が、鎌によって掴まれる。その先端は肩の背部に突き刺さり、甲皮を貫きしつかりと固定されているという状

態、そしてその姿勢からすれば当然、目前にある恭華の顔。その背には、開かれた翅。

「ちゅーってしてあげる、ヨハン君。殺す方は入れないから安心していいよー」

——生物達が競争を繰り広げる戦場。それは、地上、空中、そして。

水中。そこに、ある昆虫が存在する。

鎌で獲物を掴み、消化液を流し込み体を溶かし、その身を啜る。

それそのものは、大した事ではない。そこを生活圏とする昆虫ならば一般的に行う事だ。しかし、その昆虫は。

その機動力と卓越した水中戦能力で、昆虫にとっては天敵である『蛙』や装甲に身を包み鋏で武装した『ザリガニ』さえも食らい。

そんな昆虫が、地上に這い出る。自らの適応した戦場を離れたその昆虫を喜々として狙う、『蛇』や『鼠』。

彼らもまた、時としてこの虫の胃袋に収まる事となる。

そして、繁殖期となれば伴侶を求め、この虫は積極的に空を舞う。その飛行能力、蜂にも劣らない程のもの。

水、陸、空。その全てが、この生物の行動圏である。

国籍：日本

17歳 ♀ 161cm 53kg

αMO手術”昆虫型”

タガメ

消化液と麻痺性の神経毒。それを注ぎ込み、獲物の動きを止めた後ドロドロに溶けたその肉を嚼るといふ食事方法。それは、MO手術被術者戦においても強力な武器となる。

恭華が毒を打ち込めるのは脚に移植されて能力使用時に発現する口吻と、経口によるもの。

前者は毒の輸送機構を元々の生物とは違う部位に移した結果生じた不具合で制御が難しく、注ぎ込む際にどちらか片方のみを、というのは不可能である。ならば、恭華がやろうとしている事は。

ヨハンは迫る恭華を前にして必死で考える

まずい、このままでは無力化される。怒ってはいるものの、恭華は自分を殺す気は無いようだ。その怒っている理由を考えれば当然と言えるが。怒りのままに殺そうとしない辺りある程度の思考はまだある。説得できるか。いや、間に合わない。このまま自分が倒れれば、残るのは既に麻痺毒と消化液を打ち込まれ、それに加え既に傷を追っているレナートと、『薬』を使えない程に弱っているエリシア。二人は殺されてしまうだろう。

「……………えいっー」

「……へ……?」

突然、恭華の足首が掴まれる。またあのオツサンか、邪魔くさい、先に殺しとくか、と恭華はその手の主を見て。直後、二つの理由で驚きの表情を見せた。

一つ目、その手はレナートのものではなく、細く弱い子どものものであった事。

二つ目。

「あだだだ!! えつちよつこれありえなつ……」

その足に走り、そこから昇ってきて全身を覆うような激痛。

それに耐えきれず墜落し、恭華は転げまわる。しかし、その動きはすぐに止まる事となった。

「痛あー!?!」

ヨハンが毒針を恭華の腹に突き刺したのだ。『オオベッコウバチ』の毒は致死性のもではなく、獲物の動きを止めるためのもの。しかし、毒を打ち込む段階のその針が刺さる痛みはそのままである。

「くうう……マジありえないんですけど……殺せえ……」

歯ぎしりする恭華を見下ろすのは、ヨハンとエリシア。

確かに、エリシアは『薬』を用いた全身の変態を行えるまで体力が戻っていない。だが、一部分だけであれば。

それによつて殺さないが自由を奪える程度には強力な『アナサンゴモドキ』の刺胞を刺し、横から攻撃したのだ。

「え、つと、殺しはしません……その……」

「こちらの事情を聞いてもらいたい」

そんな恭華に、同僚であった元『裏切り者』幹部と裏アネックス幹部搭乗員は、一つつつ現状を語り始めた。

「……俺、UMAファンだって言ったの一回だけなんだけどな」

俊輝は拓也のベース生物の正解に既に辿り着いていた。

電撃と赤黒い体表。世界の未発見生物、というようなものが大好きだった俊輝は、『モンゴリアン・デス・ワーム』が新種として発見された時には小躍りして喜んだものだ。

そのため、種としての特性も理解していた。

電気と強い力。それに加えて、毒液を吐く能力がある事は容易に予想できる。

だから、拓也が戦闘中に不自然に口を開けた時に何をしようとしたのか察知し、回避する事ができた。

「……」

渋い顔の拓也。

拓也の腕に残った刃の傷。そこから流れ出る血は既に止まり、さらにはじわじわと再生が始まる。

俊輝が知っていたのは、『ゴビサバクオオチョウムシ』としての能力ではなく、『モンゴリアン・デス・ワーム』としての能力。ミミズの多くの種が持つ再生能力までは知らなかったが、これでまた情報が一つ。

「……聞かせてくれ。なんで、第二<sup>ウ</sup>班<sup>チ</sup>の宇宙艦に乗り込んだ？」

「答える意味も無い事だな」

疑問を投げかける俊輝と、それに取り合わない拓也。

拓也の体表に電気が這い、まるで発光でもしているかのような状態となる。そのまま、俊輝にむけてその腕を振るう。

電気を纏った一撃。受ければ、その腕力に加えて電気による体内の損傷が蓄積する事になる。

避けなければ、と俊輝はその攻撃方向を読み、身をかわす。

空ぶった拓也の腕。しかし、そのもう片腕を見て俊輝の顔に焦りが生じる。

その手には、『雷機雷』が握られていた。

『雷機雷』は中国が極秘で手に入れたアネックス計画ドイツ・南米第五班班長、アドルフ・ラインハルトの専用装備、対テラフォーマー受

電式スタン手裏剣『レイン・ハード』のデータを元にゴビサバクオオチヨウムシの能力に合わせた形で設計されたものである。

本家が可能とするレールガンの原理を用いた高速の投擲こそ不可能ではあるが、電気が弱く遠距離戦を苦手とするゴビサバクオオチヨウムシの能力を補助するため、電気以外での攻撃方法として電気信管を用いた起爆装置とそれにより毒液を飛散させるカプセルを一つに纏めて配置している。

本来は接近戦で用いるものではないのだが、ただの飛び道具として牽制に使用する事は普通に可能であり、敵からは毒液が充填されているか、電撃を放てる状態なのかわからないため、対策を余儀なくさせる事ができる。

回避動作をとった直後で不安定になった姿勢でさらに投擲された『雷機雷』を避け、俊輝は体をよろめかせる。

「その程度か、”9位”」

ふらつきながらも立ち上がる俊輝に追撃を加える事もなく、拓也は放電を止め、せせら笑う。

再びそのコートの裏から『雷機雷』を取り出し、挑発するかのよう  
にその先端を俊輝へと向ける。

「ああ、この程度だよ、俺は！」

言い返すや否や拓也に向けて突貫をかける俊輝。中距離以上の戦闘距離での勝ち目はゼロだ。俊輝の攻撃方法は、その辺りに転がっている石を投げる事くらいしかない。

ならば接近戦、であるが、自身の体に纏わせる電気、強靱な筋肉、傷を即座に修復する再生能力、とそちらでも勝ち目は薄い。

「……はっ、無謀だな」

しかし、拓也はその身に電気を纏う事なく、正面から俊輝と殴り合う。

俊輝が振り上げた右の刃を掴み、力任せにへし折る。その過程で刃に触れた手のひらから血が噴き出すが、再生能力に頼りそのまま次の

攻撃に移る。

次は左だ、と横薙ぎに刃を振るう俊輝。それに対応し、その左腕を受け止めようと手に持った『雷機雷』を捨てる拓也だったが、俊輝の狙いに気付き、それを止める。

「がっ……い！」

代わりに、拓也はその無防備になった腹に膝蹴りを打ち込む。姿勢が蹴りに最適なものではないため、そこまで威力が乗っているわけではないが、筋肉の塊であるゴビサバクオオチヨウムシの特性が加わり、俊輝の体が浮き上がる。体勢が崩れ、その振られた左腕は明後日の方向に。

拓也がそこで確認したのは、先ほど刃を折った右腕。そこには、金属部品でコーティングされた鉤爪があった。

大振りの刃は牽制。本命は、一度無力化したと思いこませていたこちら。

やはりな、と拓也は崩れ、両手で腹を押さええてうずくまる俊輝を見下ろす。

誰か手が空いている人間、と周囲を見回し指示を出そうとした拓也は戦いが激しくなるばかりなのを見てそんな暇なヤツはいないか、と苦笑し、取りあえずは脚を折って艦の中に転がしておくか、と俊輝に再び視線を戻す。

「おいおい、せっかく一対一タイマンで仲良くやってるつてのによそ見すんなよ」

そこには、既に立ち上がった俊輝。

想定外の事に動揺が走るが、即座に復帰し拓也はその身に電撃を纏おうとする。これまでの戦いで少し発電器官が疲弊したのか放電までに遅れが生じるその電撃の準備体勢と同時に脳内を駆け巡るのは、思考という名の電気信号。

痛みで倒れていたのはフリだった？ いや、口から血を流し、腹も少しひしゃげている。骨も折れただろう。なのに、何故立つ!? お前にそこまでして国や世界に尽くす理由などないはずだ。班員どもも、自分が倒した武が死なない状態でまだ放置されているのを見れば殺

さず捕虜にする、という事が理解できるはずだ。何故そこまでして踏みとどまる!?

そんな動揺と、それによるわずかな放電の遅れ。

その隙を逃さず繰り出されたのは、右腕による拓也の腹への一撃。突き刺さる感覚を覚えた拓也だったが、専用装備の威力を乗せた鉤爪の一撃か、深くは達していない、いくらでも再生できる、と取り合わない。

いくらでも再生できる。そう、それだけなら。俊輝が素早く右腕を引き抜いたにも関わらず、拓也の腹に残る異物感。

何だ、と自身の腹を見る拓也。

そこには、『雷機雷』が刺さっていた。

拓也の顔色が、変わる。

ゴビサバクオオチヨウムシの放電を自身が耐えるシステムは、表皮の絶縁性と発電箇所付近と栄養を貯めこむ、重要器官を覆うように存在する脂肪に近い成分によって成り立っている。

だが、導雷針を体に刺された。発電能力に制限を加え体への負荷を和らげる安全装置も、絶縁性の皮膚も、脂肪状の栄養貯蓄器官も、それに対する防御とはなり得ない。

体表を走る電気が、全てそれに吸収され、体内に送り込まれる。

そして、『雷機雷』の機能によるごく小規模の爆発。

「がああああッ!」

内臓が焼かれる感触に加え、ごく小規模とはいえ爆発により腹を守っていた筋肉が焼け焦げる。

勿論、少しは距離が空いていたとはいえ爆風を受けた俊輝も無傷で



は済まない。

だが、それを厭わず俊輝は前に進み、刃を折られた右の手で、拓也の顔にストレートを打ち込む。

「お……がつ……はあ……」

内臓を、表皮を焼かれ、その状態で渾身の一撃を受け。それでも拓也は立ち上がる。

じりじりと再生が始まる表皮、だが、ダメージを受けている事は明白。

あの時、腹を押さえてしゃがみこんだあの時、既に持っていたのだ。ただ痛みによるもの、というだけではなく。自身が捨てた『雷機雷』を。

拓也の思考が、赤色に染まっていく。それは、怒り、とはまた別の感情で。

「やってくれたな、俊輝イイ！」

抑えきれない笑みを浮かべ、拓也は腹に刺さった『雷機雷』を引き抜き握りつぶし、雄叫びを上げる。

その目に、他に戦っている班員は映らず、ただ目の前の好敵手ライバルを見据えるのみ。

「ぶっ倒してやるよ拓也アア！」

そんな指揮官としては失態も失態の拓也を正面に捉え、俊輝も叫ぶ。

そして、再び、両者は激突する……かに思われた。

ボツ

「……ああ？」

拓也の左腕が、突然引きちぎれ、地に落ちる。

「!? 中国の人、後ろ、後ろ!？」

「はあ？ そんなバカみたいな罨にひっつかか……っう!？」

静香とドッグファイトを繰り返していた鈴の羽が、何者かにいきなり掴まれ、ごきり、という音と共に折られる。

「じょう」

「じょうじ」

「じょうじょうじ」

「じじ」「じょうじょう」「じょーじ」「じょう」「じょうじ」「じょうじよ

う」「……じじょうじ」

『アネックス1号』支援部隊派遣計画、現地での遂行開始から7日目。

彼らは、黒い絶望と本格的な遭遇を果たす事となった。

## 幕間 神のスペア

2620年 4月 19日 地球

「……計画は、どうなっている」

『ノア1号』からの続報はまだか」

城のような大仰な、古めかしくも荘厳な雰囲気を持った、しかし、どこか未来的な印象も与える建造物。その最奥部にある大広間で、彼らは話し合っていた。

そこに居並ぶ彼らに統一感というものは全く見られない。服装、髪、肌、目の色。世界中の人種、民族を適当に選び抜いたかのような光景。しかし、奇妙な共通点が一つだけ。

彼らは皆、まるで、人間であるのに人間ではないかのような、そんな、威圧感に近い風格を持っているのだ。

「何、焦る事はない。まあ待とうではないか、我らの当主が、かの深緑の星から何を得るのかを」

落ち着かない雰囲気 of 彼らを窘めるかのように、その内の一人、まるで浮浪者のようなボロボロの古着を身に着けた中年の男性が一度手を叩く。

それで一応の落ち着きを見せたのか、彼らは再び話し始めた。先ほどの話題も含んでいるが、それぞれの近況や報告などといった内容のもの。

『ニュートンの一族』。人間を品種改良し、その先に至らんとする、『新たなる人類』。彼らは皆、それに連なる者達である。

定例の集まりの日にはまだ遠い。しかし、臨時で彼らは集合し、今この場所で会合を行っていた。

その議題は、現当主について。

とあるものを手に入れる為火星に赴いた、彼らの当主。その目的の全てを知るのは一族の中でもごく一部である。

しかし、一族の当主が、最も先へ進んでいる人間が死の危険を冒し

てまで旅に出ている事に感心を持たない人間はこの場にはいない。

もし命を落としてもすれば、一族そのものの歴史が一步後退する事となる。だが、お目当てのものを持ち帰る事ができたのであれば。

それは、彼らの大望を大きく躍進させる事となるだろう。

その当主を火星まで迎えにいった二人からは定期的な通信が入っており、もう数時間で火星に到着する、というのが最新のものである。

今の所は問題無し。だが、いかに人類の最先端を進む一族たちといえども、やきもきするし平静な気分を保ってられない事は否定できない。

しかしながら、その空気も長くは続かず。

「やあやあ諸君、調子はいかがかな？」

そんな期待と不安の入り混じった話し合いは、開かれた広間の扉とそこに立っていた人間の姿を見た途端に剣呑な空気を纏う事となった。

この時代には明らかに不釣り合いな一枚布の衣服を纏った金髪碧眼の青年と、その青年に付き従うスーツの年若い女性。二人の服の左胸にあしらわれているのは、二重螺旋とその先端に付いた血に濡れた槍の穂先という紋章。

「……貴方様を本日の集まりに呼んだ覚えは無いのですが」

青年に向けて、誰ともなく声がかけられる。言葉遣いでこそ丁寧であるが、そこに込められた感情は、警戒と軽蔑、そして恐怖。

「オリヴィエ様、本日はどのようなご用件で？」

その場に居並ぶ全員の口数が少なくなり、空気も次第に重くなっていく中、ボロ着の男性が皆を守るようにオリヴィエに近づき、恭しく礼をする。

「あまり警戒しないでくれたまえ、ミルチャ君。ご用件も何も、皆と同じだけど？　ホラ、ジョセフ君の事が気になっただけさ」

その言葉を聞き、ボロ着の男性、ミルチャはほっと息を付く。

……わけもなく。

「そうですか、では連絡があり次第そちらにも通達するよう手配しましょう。御身に何かがあれば一族の損失となります、今日のところはお帰りを」

できる限り丁寧に接そうとはしているものの、その言葉からは負の感情が抑えられず、ひしひしと部屋全体に伝わる。

それは、空気だけではなく、現実に、武器と呼べるものを今にも取り出さんとしている人間が何人かいるためだ。

「いや、私はここで死んでも別に……まあ、上手くいけばそれでいいと思うよ。ジョセフ君が健闘叶わず火星で死んじやつたり不幸にも帰りの船に爆弾とかが仕掛けられてて宇宙の藻屑になったりした時が私の出番だからね」

「ツ！　ファティマに連絡しろ！　今すぐ『ノア1号』の臨時メンテナンスを行え、と！」

「軽い冗談だよ」

振り返り、大声で指示を出すミルチャと、苦笑いを浮かべ、両手を広げ肩をすくめるオリヴィエ。

「いよいよ一触即発、血を見る事は避けられない、と爆発しそうな空気がなってきた、その時。」

「わあ、オリヴィエ様！　来ていらっしやっただんですか!?!」

喜びに溢れた声で、広間の扉の一つから、一人の少女がオリヴィエに駆け寄る。

着物の一種、袿を何枚も重ねた、時代錯誤という点ではオリヴィエと似たような装束に、腰に差した太刀。

長く艶やかな黒髪と細身ではあるが整った体形と幼さが残りながらも気品を感じさせる容貌を持った、和人形のような、という表現が似合っているその少女は、オリヴィエの手を握り、服装と全体から染

み出す優雅さに似合わない身軽な動作でぴよんぴよんと跳ね、全身で喜びを表現している。

「うん、久しぶり。大きくなったねー」

オリヴィエも少女の頭を撫で、柔らかな笑顔を浮かべる。久しぶりに会う親戚との和やかな対面。色眼鏡無しで普通に見れば、そう思えるような光景。

しかし、この場に居合わせた両陣営ともで、そう思わない人間たちが。

片方は、ミルチャ達、そこに居合わせた一族の皆。程度の差こそあれど、少女に軽蔑するような目を向けている。これは、オリヴィエという人間と仲良くしている、という理由もあるが、この少女という存在そのものへ向けられたものでもあった。

ここに居並び話し合う一族の人間と同部屋ではなかった、という点から、その理由の一端が伺える。

「……そろそろオリヴィエ様から手を放して欲しいっす、チョコちゃん」  
……もう片方。それは、オリヴィエに付き従う秘書の女性。チョコ、と呼んだ少女の肩を掴み、無理やり引きはがす。

「あ、いたんですね、しえいちゃん」

「しえいじゃなくて希<sup>シウエイ</sup>?、つすけどね」

我関せず、なオリヴィエの隣でお互い笑顔で会話をする二人。その姿は友達のそれだ。しかしである。

「オリヴィエ様は今から帰るんすから、いい加減服を握るのをやめるっす」

「あら? オリヴィエ様は何もおっしゃっていませんよ? しえいちゃんが決める事では無いのでは?」

バチバチと散る火花。そしてついには。

「私とオリヴィエ様の仲を裂こうだなんてしえいちゃんの泥棒猫!」

「チコちゃんには色々はまだ早いっす!」

チコの手が動き、空気を薙ぐ音。同時に、希?が自身の懐に手を入れる。

人間の最先端に行く一族の人間でさえ目で追うのがぎりぎり、という速度で、両者は両者にそれぞれの凶器を向ける。

希?の首の横、1センチもない距離でびたり、と停止した極薄の刃。チコの眉間に突きつけられた、ナイフを着剣した拳銃。

両者一步も動じず、そのまま時間のみが経過する。その沈黙がどれだけ続くのか、と居並ぶ一族が思い始めた頃。

「さ、帰ろう。用事は済んだ事だし、長居しても皆さんに悪いしね」  
オリヴィエの言葉で、二人はお互いの武器を下す。

「うう……お帰りになってしまおうのですかあ……」

「支度するっす!」

がつくりと肩を落とすチコと、デキる従者ですよ、とアピールしながらもチコにふふーん、というしたり顔を向ける希?。

二人は、背を向け部屋を後にする。

「あ、そうだ」

扉をくぐるその時、オリヴィエは首だけを後ろに向け居並ぶ面々を見回す。そして。

『神』に至るのは一人でいいと思わないかい?」

宣戦布告をし、今度こそ扉を閉め、オリヴィエは去っていく。

静寂に包まれた室内、そこに入って来たのは、通信の連絡だった。

「ノア1号より、臨時の艦内点検を行った結果、十二カ所に不審な物体を発見、これを処理したとの事」

## 第48話 死の戦列

見誤っていた。そもそも、この地域に何故テラフォーマーが少ないのか。

彼らの主な食糧である苔の量が少ない不毛な地だから。居住できそうな地形があまり無いから。

だから、彼らはここへはやってこないのだと。

……違う。いや、理由自体はそうだ。見誤っていたのは、その根拠。食糧が少なく、生活に適さず。その言葉尻だけを捉えて考えていた。その二つの要因が意味するもの。つまりは、彼らにとって利用価値の無い土地。そこに、突如として宝の山が湧き出して来たとしたら……？

「ッ……！ 総員、退避！ できる限り機材を破棄、分散し、各国宇宙艦を目指せ！」

吹き飛ばされた己の腕を見て冷静になったのか、拓也は周囲を素早く見回す。空を覆い尽くす程の数のテラフォーマー。自分達の宇宙艦と周囲に展開された電子機器の数々。

襲撃してきた連中と同時に戦闘……この数相手では厳しい。逃走の一手……奴らにこの電子機器を無傷で与えれば、どうなる？ ならば、中途半端ではあるが、逃走と技術の抹消を兼ねたこの手段を。

地球への帰還の手段は、他国の宇宙艦。もし宇宙艦が飛び立てなくとも、そこに配備されている脱出カプセル。

既に任務の大部分は果たした。『裏アネックス計画』の機能停止と、自身のベース生物の性能テスト。ならば、もはや火星に用は無い。このテラフォーマーの襲撃は、ここだけに限らないだろう。より多くの資源が得られる、『裏切り者』の各基地。そして、それらを食らった奴らが最後に到達するのは、『裏アネックス』残存部隊の拠点、小山の要塞。ここが退き時だ。もういいだろう。



アネックス計画への合流の道が途絶えたその瞬間。自分達は、人類の未来なんて大層なものとは関係の無いこの戦場で延々と殺し合う事しかできないのだから。

だが、それこそが自分達裏アネックス第4班に与えられた任務だ。自分達がここで停滞し殺し合いをし続ければ、アネックス計画の第4班は裏アネックス他班の妨害を受ける事なく目的のものを手に入れる任務に集中できる。

勿論、それは他の班も同じと言える。自分達の戦力を妨害し続ける事ができれば、アネックス計画の各班はそちらに全力を注ぐ事ができる。

お互いが何も生み出さない、お互いの厄介者を潰す為に編成された任務。虚しいものだな、と冷ややかな表情を浮かべ、拓也は班員達に命令を下す。

宇宙艦そのものを機能停止させ破棄する程の猶予は無い。最悪これを使ってテラフォーマー達が地球に飛び立つ可能性すら出てくるが、そこは自分と班員達の生存を優先させる方向に考える拓也。

そんな拓也の後方で、また別の指示を出しているのは、裏アネックス連合側の指揮官。

「戦ってる場合じゃねえ！ 共闘……なんて都合良くはいかないだろうが、一時休戦だ！ 逃げるぞ！」

俊輝の声は、仲間達だけではなく、裏第4班の班員へも向けられていた。

両勢力の指揮官。その声を聞き、戦いを繰り広げていた彼らは矛を収める。が、その収めた矛を再び振り上げねばならない時はすぐに来てきた。

「じょうじ」

上空を覆い、まるで様子を伺うように動いていたテラフォーマー中の3匹が飛来する。

「……………」

その姿を見て、脱出の準備を始めていたその場に居並ぶ全員はそれぞれ度合いは違えど驚愕の表情を浮かべる。

地上に降り立ったテラフォーマー達のその姿は、アネックス計画参加者のよく知るそれとは異なった形態を持っていたのだ。

全身が青紫の棘に覆われた個体。

恐らく『力士型』が土台と思われる、他より大柄で額に角を掲げた、手の一部が鉤爪となっている個体。

背に無数の触手のようなものが生え、額には虫のそれとは明らかに異なる形状の触角を生やした個体。

しかし、その姿は、正確には、その身に起こっている変質は、その場の人間たちに覚えのあるものだった。

「こいつら……能力を盗りやがったのか……?」

20年前の『バグズ2号』計画。その搭乗員の能力を得た個体が存在している、というのは、先行したアネックス1号からの情報で聞いていた。だが、MO手術まで。この短時間で?

降り立った三匹は、その場にいる人間側の戦力を値踏みするかのように見回し、即座に攻撃に移る、という様子ではない。空のテラフォーマー達は、圧倒的物量でありながらも初動以降襲ってくる様子はない。

「成程……俺らは『実験台』って事か」

裏アネックスの現行の戦力は、裏切り者との潰し合いで相当に疲弊している。そこを確実に潰せる戦力で襲撃し、いつでも皆殺しにできる態勢を整えた後、そこで手に入れた能力を弱った人間達で存分に確かめる。

それが、テラフォーマー達の計画なのではないか。拓也は思案する。

「欣將軍の『オニヒトデ』……。恐らくだが、本人由来ではなくエリセーエフ博士が従えていた改造テラフォーマーから得られたか……」  
MO能力持ちの1体、全身から棘を生やしたテラフォーマー。

その身に宿していると思われるのは、裏第四班のよく知る男、副長、欣のベース生物。

「だとすれば……まづいな」

上空のテラフォーマーがこれ以上降下してこないという事は、今の場にいるMO能力持ちのテラフォーマーはこの三匹だけと推測できる。だが。

『裏切り者』、その総司令官であるアナスタシアの基地にはテラフォーマーに改造を施す為の生物サンプルがいくつもあった。それが奪われてしまったとしたら。基地に残存していた兵隊のそれが奪われていたとしたら。

「じょうじー」

「班長、破棄完了です！」

能力持ちの三体が動き出したのと、四班班員の通信設備をある程度の段階まで破損させる作業が終了したのは、ほぼ同時であった。

「っ、拓也、急げ！」

俊輝が指差したのは、突入口である地下道の入口。次々と対裏切り者連合の隊員達は地下道に入っていくが、それでも上空のテラフォーマーは追撃する姿勢を見せない。

あくまで実験が目的か。人間が、本能的な殺意を覚える相手が逃げる事を許容するのか。

おかしい。明らかに、奴らの生態はこれまで自分達が知っていたそれとは異なっている。

「ふんっ」

突進してくる三匹に『雷機雷』を投げ牽制し、班員の離脱を援護する拓也。それと同時に落とされた自身の腕を拾い上げ、傷口に繋げる。再生能力で再度腕は生やせるが、再利用を防ぐという理由でこち

らの方が有効だ、と判断したのだ。

そんな拓也の元に駆け寄って来たのは一人の青年だった。

「……班長、僕も」

「とつとと行け、プラチャオ。班長命令だ」

命令。その言葉で、拓也に駆け寄ったプラチャオは唇を噛み締め、脱出に向かう。

両軍の班員達はどちらも負傷しているという状態。この状態でテラフォーマーの群れが考えを変えて襲撃してこればまず助からないであろうし、戦闘要員の数からして、裏第四班はここで抑え込まれかねない。

二つの意味でのリスクの軽減として、負傷していない戦闘員であるプラチャオは脱出組に回した方がいい。

そして、その一言で俊輝は察する。拓也は逃げる気など無いのだと。

「俊輝っ！」

「静香も早く……って、オイ」

拓也との戦いで倒れこんでいた武を背負い、悔しそうに撤退する健吾。残って戦いたいのは山々、しかし残して来た班員の皆の事を考え、苦渋の決断で離脱を選んだダニエル。次々と班員達は脱出口へと姿を消していく。

着陸した静香も最後尾で地下道の入口へと入ろうとし、その傍で殿として襲撃を警戒する俊輝に声をかける。

ちゃんと最初の一撃は回避できていたか、と胸をなでおろしながらも答える俊輝であったが、静香の方を向き、思わずツツコミのようなものをしてしまう。

「どういうつもりよ、日本のトリ女」

「重要参考人、ってやつだよ、中国のトリ女さん」

その背中には、苦悶の表情で静香に毒を吐いている、静香より大柄な、腕が鳥の翼になった第4班の班員、鈴の姿があったのだ。片翼は

あらゆる方向に折れ曲がり、飛ぶ事はできそうにもない。

「……ほら、ここで見捨てる……つてのもさ？」

ばつが悪そうでありながらも、お願いするような目を静香は俊輝に向ける。

この命懸けの状況で。つい先ほどまで殺し合っていた敵同士の間柄だと言うのに。

これが軍人であれば、例え味方であろうとも見捨てて自身が逃げ延びた方がいいというような状況。それが生存の為にも正しいと思われる選択肢。しかし。

「あー！ わかったわかった、早く連れてけ！」

頑固なところがある静香相手にあまりつっぱっても仕方がない、アイツらしいや、と半ばヤケのような声を張り上げながら、しかし内心では少し嬉しさも入った調子で俊輝は脱出口を指さす。

「ん、ありがとう！ 俊輝も……」

静香が脱出口に入りながら俊輝に向き直り、笑顔で礼を言ったその時。

「危ねえ！」

背負われていた鈴が、静香をその体に残っていた膂力で突き飛ばす。

突き飛ばされ、脱出口の外に放り出される静香。

何が起こったのか、と後ろを振り向こうとした瞬間に、地が揺れ、足元が崩れる感覚。

そこには、対応しようとしたが抑えきれなかった、という様子で一歩下がった俊輝と、その巨大な腕を思い切り大地に振り下ろした力士型のテラフォーマー。そして。

「……え？」

それで埋まった地下道の入口だった。

背から触手を生やした個体は一定の距離を取ったまま三人から付

かず離れず。

棘を生やした個体は拓也と向かい合い、じりじりと距離を詰める。

「……なあ、拓也」

「なんだ、”9位”」

力士型のテラフォーマーに向かい合いながら、俊輝は拓也の方を見る。

拓也はそれに、再開した時と同じ冷たい声で返答する。

「偶然って怖いな、あの時と一緒にじゃねえか」

空は黒に覆い尽くされ、地には強大な敵が3体。俊輝達の後ろから見た光景を写真なり絵画なりにしてタイトルを付けるとすれば『絶望』の一択になるであろう状況。だが、俊輝は笑う。

それは、士気を無理にでも上げる為のものであり、そして。

「任務は一つ、ただ生き残って帰還する事」

何やら複雑な表情の拓也と、状況への恐怖と呆れ、しかしそこに信頼の入り混じった目で俊輝を見て苦笑いを浮かべる静香。

「裏アネックス計画(元日本第2班第1偵察部隊、再結成だ!」

この状況下であっても、絶望や諦観を押しつけて奥底から溢れだしてくる喜びを表現するものであった。

「……おやおや、おやおやおやおや」

基地に空いた『裏切り者』の突入口。そこから天を仰ぎ、エレオノーラは一人眩きを漏らす。

そのエレオノーラの視線の先にある空を埋め尽くすテラフォーマーの中の一匹が、エレオノーラに突撃を仕掛けた。その甲皮に浮かんでいるのは、薄いヒョウ柄。

通常のテラフォーマーを上回る加速で、エレオノーラに突撃したそのテラフォーマーは。

「困ったわねえ」

直後、喉を貫手で破壊され絶命した。

その腕を抜き、抜くと同時に体内から掴み取った内臓を口に運ぶエレオノーラ。

触手の一本が途中から千切れ、幹部搭乗員用の隊服はどこどころが破れ、傷を晒している。そんなエレオノーラの周囲には、数十体のテラフォーマーの死骸。

階下からは、『裏切り者』か裏アネックス計画隊員かわからない悲鳴と怒号が響いている。

それを耳にして現役時代の懐かしい感覚に浸りながらも、エレオノーラは基地内通信の電源を入れ、基地内の全てに宣言をした。

「はい、私達のお仕事はこれで終了よ。各自解散し、帰るまでがお仕事だからね、皆頑張って頂戴」

その考えは拓也と同じ。『裏切り者』はほぼ壊滅し、最低限の任務は果たした。この状態でアネックス計画の方に参加するのは、人員の消費的にも距離的にも無理がある。だから、もう終わりだ。

「さて……一番近い宇宙艦は……っと」

懐から、幹部搭乗員の会議で使用した資料を取り出しながら、エレオノーラは基地の外へと一步、足を踏み出す。

「第二班、かしら」

「く……そっ」

蹴りの一撃で、テラフォーマーの上半身が引きちぎれるかのように下半身と分離し、吹き飛ぶ。

鋭い牙で、テラフォーマーの喉を貫き、そのまま地面に叩きつける。

猛毒の針で、テラフォーマーの体に穴が開き、泡を吹き崩れ落ちる。

何とか、10体ほどは倒した。だが、もう。

剛大は肩で息をし、地に片膝を突く。

目標地点では、部下たちが戦っている。早く行かなくては。だが。空を覆い尽くす害虫共が、自身の前に立ちふさがった。

殺しても殺してもキリが無い。戦いの連続で疲弊した剛大の体に、地上に降り立った最後の一体が蹴りを加える。

「ぐっ……い」

何とか腕で防御するが、みしり、という音と共に吹き飛ばされ、地を転がる。それに勝利を確信したかのように、多数のテラフォーマーが空から剛大に向けて突撃する。

無理があつた。

敵の数は無尽蔵。学習し、さらに強くなる無尽蔵。

片や96人。いくら戦いに長けていようと、裏切った人間達との戦いの連続で、既にその数は半分を切っている。

ゲームで例えるならば、通常の将棋でコマ数130の大将棋に勝負を挑むような、それも本来ならば持ち駒が許される通常の将棋に持ち駒は無く、本来持ち駒の概念が無い大将棋の側が持ち駒を使用できるような、そんな状況。

「……」

剛大は霞む視界で飛来してくるテラフォーマーの群を見据える。

『四位』。圧倒的なタイムマン戦能力を誇る『トビキバアリ』と警察官のごく一部しかなる事は許されない精鋭中の精鋭である役職の出というものが組み合わさった剛大の順位。

単独の強敵との正面からの殴り合いでは最強クラス。

だが。群を相手にするには、これが限度。



『裏マーズ・ランキング』。その上位には、アネックス計画の人間が見るとそのランクである事が不可解に思われる人間が何人か存在する。

見るからに運動能力の低そうな科学者。病弱で小柄な少女。これといった強みも無さそうな一般人の出の女性。

何故、彼ら彼女らが、軍人でも無ければ、何かしらの武術に長けているわけでもない人間が、ランキングの上位に名を持てるのか？

「……？」

接近してくるテラフォーマーで埋め尽くされた剛大の視界に、急に浮遊する小さな何かが割り込んでくる。

直後。

—————！！

泣き叫ぶような、荒れ狂うような、剛大の耳を激しく撃つ爆音。

それと同時に、破壊の嵐が巻き起こる。その浮遊する何かの隙間から見える黒の群れが、右側から見えない何かに押し出されるように動き、一瞬で一匹残らず粉々に消し飛んだ。

「……本国からの連絡がありましたね、要約すると」

先ほどの音で三半規管が狂い、その耳に入ってくる音はそれに集中しないと聞こえない。

「テメエみたいな犯罪者はどうでもいいが同盟国の優秀な人材を失うのは惜しいから無事連れ帰ってくれ、だそいで。うわひっでえ……」

軽妙な調子で、抉れた地形を乗り越え、その人間は姿を現した。

『裏マーズランキング』” 8位” 御崎 静香。

ベース生物、鳥類型、『ズグロモリモズ』。

専用装備を用いた、毒の羽毛を砕いた粉の散布。

『裏マーズランキング』” 3位” エリシア・エリサーエフ。

ベース生物、軟体動物型、『ムカデミノウミウシ』。

盗刺胞の特性により獲得した、専用装備による刺胞動物の触手の展開

『裏マーズランキング』” 2位” ヨーゼフ・ベルトルト。

ベース生物、渦鞭毛植物型、『ファイエステリア・ピシシーダ』。

アメーバによる巨体化と記憶障害を主とした多数の症状を発生させる猛毒の精製、放出。

それらの能力に共通する特徴。それは。

『広域制圧』。

この力が、ベース生物の力が。

戦いなど経験も無かった一般人を。

人間の劣化コピーのクローンである病弱な少女を。

研究所にこもりつきりで運動など無縁な博士を。

そして。

ただの猟奇殺人鬼である彼を、ランキングの高みへと押し上げる。

---

彼らは、ただ愛を歌う。

人間大にした際に最強の“虫”とは何なのか？

その疑問の答えに、多くの研究者は『蟻』か『蜘蛛』を挙げる。

それは間違いではない。事実、この虫はその二者にとつてはただの餌に過ぎない。

だが。

土の中で長い生を送り、地上に這い出た後には残り少ない命を謳歌するための彼らの行動。あらゆる生物の共通目標、次世代へとつなぐ為の求愛。

人間大でそれを行えば一説によると数百キロもの距離に到達するその特性を。

『テップポウオ』の水鉄砲を人体を貫通するほどの威力に高める事を可能とするMO手術の、さらなる発展形を用いて施せば。

それは、範囲内のあらゆる物体を猛烈な空気振動によって破碎する『兵器』へと姿を変える。

……そして、その本来ならば温和な彼らのごく一部の種は、彼らを食らわんとする敵を退けるため、毒針や体表に毒を纏わせる事を行っている。

「美しいモノに呼ばれてね、なんてかつこよく決めたかったトコですけど、まあそれはいいです」

四機の浮遊する小型無人機を従えた、青黒い甲皮に全身を包んだ赤毛の青年。その両腕には、毒針と口吻。

頼れる援軍であるはずの彼。しかし、剛大にはその姿は邪悪な神のようになしか見えなかった。

「さあ、御託の前に生存競争といきましょう」

ダリウス・オースティン

国籍：アメリカ

23歳 ♂ 177cm 73kg

専用装備：逆位相消音装置搭載型無人機『無形』

+

体内蔵型出力制御・制限装置 『SYSTEM: Azathoth』

αMO手術 昆虫型

ハデトセナゼミ

『裏マーズ・ランキング』1位

呪歌<sup>ハ  
デト</sup>の残響<sup>セ  
ナゼ  
ミ</sup>、開演<sup>エ  
コ</sup>。

## 第49話 呪歌の残響

西暦2619年10月20日 U—N—A—S—A 食堂

「剛大さん、僕の話聞いてくれませんか」

食事を終え、そろそろ店を出ようか……と考えていた剛大。その体のどこにそれだけの量が入るのか、というくらいに皿を積み上げ、そこで体力が尽きたのかくたつと机に突っ伏し、寝息を立てているエリシア。

会議が終了した後の、ダリウス発案の昼食。厳格さの塊のような欣。人格的に危険な匂いがするヨーゼフとエレオノーラ。彼らはちよつと……という事で幹部搭乗員オプファイサーの中でもまだまとともに仲良く会話できそうな剛大とエリシアを親睦相手に選んだという事情はさておき、それはある程度上手くいつていた。

それぞれの班員がどうの、お国事情の愚痴などを語り合い、それも一息つき、そろそろお開き、の時間。

突然の言葉に、剛大はぴたり、と伝票に伸ばした手を止める。

剛大が今までの会話でダリウスに抱いた印象は、人付き合いのいい好青年、といったもの。

年齢的には一つしか変わらないが、どうもさらに年の離れた後輩のようなものを彷彿とさせる。

会話では終止笑顔で、基本的に聞く側。暗い話にも他人の事情と理解して全てを知ったような口を聞くような真似はせず、しかしフォローや慰めはきちんと入れるような人間。

そんな彼が、無に近い、しかし、どこか不安のようなものを顔の端々に浮かべて、剛大に話を切り出してきた。

「……僕が、これまでにしてきた事の話です」

剛大は、無言で首を縦に振る。

幹部搭乗員は、軍人出身に限らず、一人を除いて強力なベース生物の適性で選ばれている。それは、新型手術の成功確率があまりに低い  
ため、軍人を使うとあまりに犠牲が大きすぎる、というのが大きな原

因だ。

成功確率の低い、失敗すれば死という手術をわざわざ受ける人間。それは、きつと色々訳があるに違いない。

剛大のような、自分が死んでも家族に金が入れば、という人間。エリシアのような、強制的に受けさせられた人間。

そして、あるいは、死刑の代わりにそれを受けた、などという者も。「ありがとうございます。そうですね、じゃあ……最初は1000年くらい前の話からしましょうか」

---

ハデトセナゼミ

学名『*Distantalna splendida*』

東南アジアに生息するセミの一種。

日本では夏の風物詩として広く知られるセミ。一般的なイメージとしては、『寿命が短い』『うるさい』くらいのものである彼らは、あまり目立たない特徴を有している。

その鈍重そうな見た目からは考え難い、高い飛行能力。

樹液を吸う為に発達した、樹皮を容易く貫通する強力な口吻。

さらには、海外に生息するいくつかの種に見られる、強力な毒とそれを外敵に送り込む毒針。

そして、人間大となればあまりに強力な、広域に渡る鳴き声。

これらの特徴が、あらゆる生物の特性が同等の立場になって戦うM O手術戦において、生態系ピラミッドの序列を覆しあらゆる生物を鏖殺する強力な兵器として機能する。



事情は、聞いていた。彼が、己の欲望を満たす為に多くの人間をその手にかけてきた事。それを人の道を外れた方法で処分してきた事。いいや、その処分する、という過程こそが彼が望んだものであった事。そして、彼はそんな事を望んでいなかった事も。

「……言いたい事は色々あると思います。でも、今は生き残るしかない」

ダリウスの言葉に、剛大はふらりと立ち上がる。それに反応するかのように、距離を取り様子を伺っていたテラフォーマーの群れが、二人に向かって突撃する。

剛大に向き合うダリウスは、それからは完全に背を向けている状態。しかし。

ダリウスと剛大の間に挟まるように、二機の無人機が移動する。その直後。

突撃してきた数十という数のテラフォーマーは、一匹残らず粉々に消し飛んだ。

剛大の耳に飛び込んでくる轟音が耳を激しく打つ。

ダリウスのベース生物である『ハデトセナゼミ』は毒と針を持つという特性以外は他のセミとはそこまで大差がない。体長は日本産のアブラゼミとそう変わらないし、鳴き声の大きさも特筆するほどではない。

しかし、それですらこの威力。

テラフォーマーが得意とする、テラフォーマーだからこそ可能な、己の身を軽くうち捨てて敵の攻撃を受け止め、後に続く仲間達で敵を叩く。それすら許さぬ、絶殺の一撃。

それを補助する為のダリウスの専用装備は二つ存在する。しかし、

そのどちらもが、能力を強化する、というようなものではなく、むしろαMO手術を持ってすら制御が困難な能力を押さえつける為に存在している。

『消音装置』。

楽器等では騒音を避けるため。銃火器では音によって所在を把握される事を防ぐため。

それらの機能は、それぞれの器具の内部に仕込まれた機構により、外部へ放出する音を防ぐためのものである。

しかし、すでに放出された音を消す手段が存在する。

それは、その音と逆の位相の音を出し、音を打ち消す事。

これを可能とする装置を搭載した無人機を移動させる事により、特定方向への加害を抑え込む。

そして、彼の体内に埋め込まれている装置。

『SYSTEMシステム： A<sup>ア</sup>z<sup>ザ</sup>a<sup>ト</sup>t<sup>ト</sup>h<sup>ト</sup>o<sup>ト</sup>t<sup>ト</sup>h』。

暴走するエネルギーの塊。それを見ただけで存在の根底を破壊される。

……この宇宙そのものは、微睡む彼の夢に過ぎない。

そんな、余りにも悍ましく強大な邪神の王の名を冠した専用装備。

どのような凄まじい機能があるのか。いいや。

それは、ただの拘束具に過ぎない。

目を覚ましてしまえば己すら崩壊する、その本来の力を抑え込み、眠りの底に沈めておくための。

「……………どうした、害虫……………その程度か……………？」

ならば、と手負いの剛大に襲い掛かるテラフォーマーの首を掴み、次の瞬間テラフォーマーは体液の霧と化す。

……………これが、『1位』。『裏マーズ・ランキング』96人の頂点に立つ男の能力。

ただの人間に与えられた、最強と呼べるまでに昇華されたベース生物の超常の力。

小型の戦術核に匹敵する加害半径を有する攻撃を数秒とおかないインターバルで放つ事のできる、まさに『兵器』の領域にまで押し上げられた力。

「舐めるなよ、人間を……………殺すなよ、人間を……………それは……………絶対に……………」

正気を失ったかのような怒りの表情で、ダリウスはテラフォーマーを叩き潰す。

そこには、彼がここに来るまでに抑え込んでいた、その本性の姿があった。

人間が、大好きだった。好きで好きでたまらなかった。誰かが喜ぶのを見るのが好きだった。人が楽しそうにしていれば、自分も同じように楽しくなった。そう、とても、好きだった。何故なのかは自分でもわからない程に。

そんな僕を、両親は優しい子として扱ってくれた。父は有名ではないものの熱烈なファンが付いていた歌手で、僕にも音楽の道を歩ませようとしてくれた。母は料理研究家で、僕によく料理を教えてくれていた。

両親はよく、楽しそうに喧嘩をしていた。あの子は将来歌手になるんだ、いいや、料理人にするんだ、と。

僕は毎回、それに仲裁に入ったのだ。どっちにもなるから仲良くして、と。

十歳の時の事だ。父は突然、いなくなってしまった。母にそれを聞いたけど、帰ってきたのは毎回、「父さんは遠い所に行ったのよ」という答えだった。

その意味がわからない年齢ではなかった。今思えば、その言葉は、僕にそう思わせるためのフェイクのようなものだったのだろう。

父さんの為にも立派な歌手になって、母さんを喜ばせてあげる為にも立派な料理人になる。そう思い、僕は必死に練習をして、勉強をした。学校での成績も上の中、といったところで、友達も多かった。

歌手として……といっても、場末の酒場で歌を披露してチップをもらう程度のものだったけど、とにかく歌手としてお金を稼ぐ機会を手に入れ、同時にその酒場で調理担当としてアルバイトをしていた。

酒場で僕の歌を聞いてくれるお客さん。チップをくれる親切な人、チップを渡す程じゃない、とは言いつつもしっかり聞いてくれる人。僕を無視して飲み食いしている人。

料理を食べてくれる人達。一人暮らしだから、という事でお邪魔して料理を作った時に喜んで美味しい、と言ってくれた友達。僕の成長を喜んでくれる母さん。もつと精進しろ、と酔っぱらいながら言われてしまった、酒場のお客さん。

僕の人生で関わってきた人々。ああ、皆、大好きだった。

でも、不思議に思ったんだ。大好き。本当にだ。この感情に偽りは

ない。でも、これは何なんだろうか？ 両親にも、友達にも、恋人にも、他人であるお客さん達にも、皆に向けて存在する、この好きという感情は。思春期になって勉強して知った、愛や恋、友情といったものじゃない、ただ平等に、平坦に存在するこの好意は、一体何なんだろうか？

……そして、ある日の事だった。クラスメイトの一人が、放課後に僕を呼び出し、散々に罵った。元々、殆ど関わりは無かったけど時々僕の事を疎ましい目で見ている奴だった。たぶん、明確な理由はないけど何となく嫌い、という感じで偶然機嫌が悪かったのだろう。料理の事、歌の事。彼は僕の頑張っている事を全否定し、何やら人殺しの物語の主人公がお前にそっくりだ、などという難癖を付けて僕に悪口を放ち続けた。自分の大切なものを否定されてカッとなり。

気が付けば、僕の目の前には、頭から血を流して倒れている彼の姿があった。

そこで僕は、事の重大さと、もう一つの事に震えていた。

目の前の死体に感じる、この好意は何だ？

死体である事が重要ではない。僕をさんざんにけなした彼に対する僕の感情が、これ？

いや、今はそれに悩んでいる場合じゃない。ひとまずは、目の前のこれを何とかしないと。

彼の体を持ち上げた時に、べったりとした血が僕の手が付いた。

それを、僕は。よせばいいのに。いや、何かの本能が僕に訴えかけてきたのか、それを止める事ができず。

そして僕は、この好意の正体を理解した。

僕の家は裕福で、母さんの職業柄、良い食材を良い腕で調理した最高の料理を僕は常日ごろから味わっていた。

だから、僕の舌は肥えている、と自称してしまっても構わないだろう。

その日、僕が食べた食材は。僕の事が大嫌いだったその食材は。

これまでの人生で食べてきた料理が廃棄物か何かに思える程に、おいしかった。

「日本に出回ってるかは知りませんが、『人喰らいエスメラルダ』って物語、知ってますか?」

「いや、知らないな」

「じゃあ、説明しますね」

アメリカ大陸にまだ国ができていなかった頃の話です。ある所に、一人の奴隷の少女がいました。

彼女の名はエスメラルダ。赤色の髪に白の肌、美しい緑の瞳を持った、故郷では歌姫として多くの人に愛されていた、それはそれは可愛らしい少女でした。

彼女は、開拓の為にアメリカ大陸に送られました。でも、それが嫌で、偶然にも機会を経て逃げ出す事に成功しました。

しかし、女の子一人で生きていくには、あまりに苛酷な、まだ発展段階の国。彼女が逃げ込んだうち捨てられた廃屋では、何もする事ができません。

日に日にやつれ、死が少しづつ近づいてきたエスメラルダは、苦渋の決断をしました。そこを通りかかった旅人を襲い、荷物を奪ったの

です。本当はこんな事はしたくなかったのですが、仕方なかったのです。そして、自分の事がばれてしまわないように、その旅人を殺してしまいました。

旅人の死体は丁重に埋葬し、エスメラルダは荷物の中の食糧を手に入れ、ひとまず生き永らえました。しかし、それは長くは持ちませんでした。川や海で魚を取ればよかったのかもしれない。何か作物を育てればよかったのかもしれない。でも、裕福な家庭に育った彼女にはそのような知識も経験ありませんでした。

餓えた彼女は再び、旅人を襲いました。荷物を奪ったのですが、何と、食糧が入っていませんでした。このままでは死んでしまいます。荷物の中身を売って食糧を買おうにも、街に出れば奴隷だった自分の立場がばれてしまうかもしれません。

……目の前に、肉があるではありませんか。

こうして、エスメラルダは旅人を襲って、その肉を食らうようになりました。しかし、か細い少女が旅人を自ら襲って成功する可能性は低く、これまでの成功も偶然のようなものでした。そこで、彼女はあたる事を考え着きました。

旅人が自然道を歩いていると、美しい歌声が、突然響いてきました。自分と同じ旅人が、無聊を慰めているのかなと思ひ、旅人はその声のする方に向かいます。

そこにあつたのは、古びた廃屋です。旅人はそこに入り、そこで彼の意識は途切れしました。

そんな事が繰り返されていたある時、エスメラルダは一人の男性に出会いました。

捕えた旅人なのですが、彼はエスメラルダの声に惚れ込み、彼女に一目惚れしてしまったというのです。

これまで捕えてきた旅人には恐ろしい殺人者としか思われず、奴隷になる前にもそんな経験の無かったエスメラルダは、彼の情熱的なア

プローチにすっかり惹かれてしまいました。

……ここで、彼が機転を利かせてエスメラルダの隙を付いて逃げ出すという展開になれば、この物語は終わっていたのでしよう。

しかし、彼もまた正常な人間ではなかったのでしょうか。

二人は、仲良く暮らし始めました。子どももできました。そして、二人揃って旅人を襲撃し、その肉を食らい、荷物を奪ったのです。

しかし、その生活は長くは続きませんでした。

度重なる行方不明、『歌で旅人をおびき寄せる魔物』の噂を重く見た開拓団が、武装してやって来たのです。

探索の末に二人は見つかり、廃屋から見つかった無数の人骨が決めとなり、その場で殺されました。

ですが、まだ幼かった赤ん坊は、何の罪も無いと助け出されたそうです。

「……なんていう、オチも何もない悪趣味な話ですよ」

「何故、このような話が作られたんだ？」

渋い顔をしながらも首を傾げる剛大に、ダリウスは苦笑いを浮かべる。それは、遠い何かを見るような、曖昧な調子で。

「実話を純粋に描いた話だから、ですよ」

そこで、ダリウスは少し戸惑い、やがて意を決したように、続く言葉をやつくりと語ったのだった。

「エスメラルダ・オースティンという名の、哀れで狂った少女のね」

あれから、色々と変化があった。

僕の歌に変化でもあったのか、人気が広がった事。

料理人として認められ、立派なレストランのシェフとして身を立てる事ができた事。

父さんは、死んだのではなくて、人を殺して、……そしてそれを食べて、捕まったのだという事。



僕に罵声を浴びせた彼の言っていたはるか昔の物語に、僕と同じ姓の、恐ろしい殺人鬼がいた事。

ああ、これはきつと、僕だけの感情ではなかったのだろう。父さんも、僕と同じような感情と悩みを抱いていたのだろうか。

この好意が何なのか、理解できなかった。僕に悪意を向けてきた人間のそれでさえ、この上なく美味しかった。

この僕の好意は、一体どのようなものなのだろう。

「おいおい、こんな所に二人きりで呼び出して、お前そういう趣味でも……っ!?!」

わからない。

「あ、あのね……私、初めてだから優しくしてほしいな……え……?」  
わからない。

「あんた……やっぱり……あの人の……子なんだね……」  
……わからない。

沢山、試してみた。でも、どれも同じなんだ。どんなに僕に近くて、僕の事を想ってくれていた人達でも、何も変わらないんだ。好きなんだ。僕を大嫌いと言った人間と同じで、好きなんだ。

わからない。教えてくれ。誰か、誰か。僕に。好き、とは何なのか。愛、とは何なのか。

そしてついに、それを知る事は無く、僕は裁きを受ける事となった。薄暗い監獄の中で、僕は思い返していた。

僕が、この好意の正体を確かめようとしなければ、こんな事にはな

らなかったのだろう。

父さんは、僕が生まれて育つまで、これに耐え続けていたのだろうか。何と立派な人なのだろう。

僕は、負けたのだ。これはきつと、遙か昔に僕に連なる人達に刻み込まれたものなのだ。

何としてでも、人ではなく食材としてその肉しか理解する事ができなくなるような、呪いなのだろう。

いいや、もしかしたら、それさえも言い訳なのかもしれない。ただの狂人の、先祖への責任転嫁なのかも。

ああ、人間が、大好きだ。その意味は、わからない。それでも、時々神に願いたくなる。

僕に、人間を肉としてではなく、人間として愛する心が塵程でも存在し、いつかそれが見つかる事が。

「ダリウス……」

疲弊しきり、言葉を発するのもやつとという剛大を、ダリウスは何も言わなくていい、と手で制す。

自分の過去を語った人間。自分が、他人を全て平坦な同じ感情を抱いて見ている異常者であるという事を知る人間。信用などされなくて当たりまえ。悍ましい化け物として見られていても仕方がない。

「僕の事が信用できない、恐ろしい、つてのはよくわかります。でも、今だけは信じてください。ちゃんと、剛大さんと班員の皆は守つて……」

「いや、『薬』をくれないか」

自嘲するかのような笑みで、ダリウスは両手を上げる。だが、剛大の言葉であっけに取られ。

「ハハ……はははっ！　ですよね、そうでなくっちゃ！　何言ってるんだ僕は！　ごめんなさい、守るなんてのはとんだ失礼だった！」

「狂気さえ浮かぶ喜びの混じった声で笑い、ダリウスは剛大に『薬』を渡す。

それを隙と見たのかダリウスの背後から襲い掛かるテラフォーマー。

しかし、ダリウスの首を掠めるかのように放たれた蹴りにより、頭を碎かれ吹き飛ばされる。

「有難う、さあ、行こうか」

「ええ、目標は……とりあえず部下達の救助、ですかね！」

体がまだ動く、という事を確認し、剛大はダリウスの肩をぽんと叩く。

同じ”昆虫型”の能力を持つ二人は、テラフォーマーの群れに臆する事なく、前へと歩み始める。その行き先にあったのは、一隻の宇宙艦。剛大の目的地、第四班のそれであった。

「ねえ、ミツシエルさん」

夕暮れのビルの中で、ダリウスは椅子に座るミツシエルに、目を向けないまま話しかける。

「どうした、やっぱり怖くなったか？」

「いえ、どの道断ったところで、って感じですし……一つだけ聞いておきたい事があるんです」

少し声色を落とすミツシエルと、それに少しだけ笑うダリウス。

「僕のベースとなる生物、って、選べるのでしょうか？」

興味本位ではなく、少しだけ期待と不安の入り混じったような感情の声。

「いや、もう決まっている」

「そうですか」

「能力にすれば凄く危険で強い生物、だそうだ。成功者が出れば1位も狙えるかも、くらいの」

それが慰めなのか何なのかよくわからなかったが、ミツシエルが若干フオローをしているかのように聞こえて、思わず薄くではあるが表情が緩んでしまう。

「何か希望でもあったのか？」

「いえ、ただ、もし手術を受けるんだったら」

凄く危険で強い生物。この時点で希望は叶いそうにないや、と思いながら、ミツシエルの問いかけに軽く答えながらダリウスは窓から街を眺める。

その目はふと一つの建物に吸い込まれる。それは、街外れの牧場の屠殺場だった。

「草食の生き物がいいなあ、つて思いました」

## 第50話 悪意の囊

「……じ」

黒雲のようなテラフォーマーの集団がいくつかのグループに分かれて各所を攻撃している、という光景を見る事ができる火星の高地。そこにまるで陣を構えているかのように、黒の群れが並んでいた。

まるで機械のように秩序だった隊形を崩さない布陣の最奥に座するのは、一匹のテラフォーマー。

石を粗く削って作られた簡易的な椅子に腰を下ろし、その椅子の上には石製の皿に山盛りにされた蚕の蛹。

左の手で頬杖を付き右の一指し指で椅子を落ち着きなく叩く、他のテラフォーマーよりも人間のような動きをするその個体の頭には、通常のテラフォーマーに存在する頭皮は無く、代わりにその額には『≡』の記号のような形状の模様が刻まれていた。

ここまでであれば、事情を知る人間にとつては無視できる話ではないとはいえ理解できないものではない。

テラフォーマーの統率者たる変異種、その一個体であるのだと。

しかし、その外見には、他の変異種とは異なる点が一つあった。

この個体の体躯は、そこに立ち並ぶどのテラフォーマーよりも小さい、幼体のそれであったのだ。

「ジヨウ」

布陣の最前線で、どこから手に入れたのか望遠鏡を使い戦線の一つ、二人の人間と戦う群れを観察していた一体が幼体のテラフォーマーへと振り返り、何かを伝える。

「じ、じじょうじ」

丁度そのタイミングで観察されていた戦線から帰還してきた一匹のテラフォーマーが陣地に降り立ち、幼体のテラフォーマーの前に駆け込んだ。

「じょう、じじ、じじょう」

体の所々に味方の残骸と思われる肉と体液を付着させたその個体は、まるで伺いを立てるかのように片膝を付き、言葉を紡ぐ。

それを無言で聞く幼体のテラフォーマー。口を動かす事を終え、帰還してきたテラフォーマーが一步後ろに下がろうとしたその時。

「キイイイー！」

不意に幼体のテラフォーマーが立ち上がり、悲鳴のような声をあげ、蚕の蛹が盛られた皿を掴む。

そして、それで帰還してきたテラフォーマーの頭を殴りつけた。

「じー・じょうじー・キイイー！」

頭がへしゃげ、ゴギ、という音と共に帰還してきたテラフォーマーは地面に崩れ落ちる。だが、その蛮行は終わらず、幼体のテラフォーマーは地に伏せたその個体を執拗に殴り蹴り、まるで罵るかのように勢いの強い声を浴びせながら皿を叩きつける。

それは、無感情な通常のテラフォーマーのそれでも、理性的な指導者である変異個体のそれでも無い、まるで痲癩を起こした幼子のような振る舞いであった。

「……」

周囲のテラフォーマーは、それに何か反応を見せる事は無く沈黙を守る。

やがて、ぐちやぐちやになった死体を見下ろしてようやく落ち着いたのか、幼体のテラフォーマーは再び席に戻る。

「じじょう」

座った幼体が目配せをしたのは、望遠鏡を持っていたテラフォーマー。

それに従い、そのテラフォーマーは望遠鏡を幼体のテラフォーマーに差し出す。

「じ」

それに満足そうに頷き、幼体のテラフォーマーは望遠鏡を目に当て、戦局を見つめる。

……しばらく各地の戦場を眺めた後、幼体のテラフォーマーはある者に気付き、その口には歪んだ笑みが現れた。

「ジヨウ、じょうじー」

右手の皿を高く掲げ、幼体のテラフォーマーはそこに居並ぶ総勢に命令を下す。

それをしている最中でも目を離さない望遠鏡、その視線の先には、体から稲光を放ちテラフォーマーを仕留めた一人の男の姿があつた。

「トゲトゲはお前に任せた、後のあつちは俺が見る」

「命令するな」

「あ、静香は待機……つてか、ちよつと調べて欲しい事がある。えーつと、これとこれと……」

「ん、了解」

火星の戦線、テラフォーマーの群れの真つ只中。そこで、俊輝と拓也はMO能力持ちのテラフォーマーと向かい合っていた。

二人の足元には、一匹のテラフォーマーの死骸。力士型を土台とした、甲虫がベースと思われる個体である。

『裏切り者』兵士のベース生物であつた、『ゴライアスオオツノハナムグリ』の能力を持ち、純粋なパワーでは3体の中で最も強い個体ではあつたが、拓也の近接での毒と電撃の連続攻撃により力尽きる事となつた。

「……面倒な方押しつけやがつて」

舌打ちする拓也。しかし、未知の敵を相手取るよりは知っている相手の方がマシだ、と考え、『オニヒトデ』の能力を持ったテラフォーマーに躍りかかる。

「ジヨウー」

それを迎撃したオニヒトデのテラフォーマーが繰り出すのは、膝蹴り。だが、拓也はそれを正面から片腕で受け止める。膝に生えていた棘が何本も刺さり傷を作るが、それを全く気にする様子は無く。

「残念だったな、一步遅い！」

残った右の腕がテラフォーマーの急所、喉に向けて繰り出される。体勢があまり良くない事もあり、拓也の純粹なパワーは単純に殴っただけでテラフォーマーの喉を貫通できる程ではない。しかし。

「ギイ……！」

テラフォーマーの喉に、楔が突き刺さる。それを引き抜く暇も与えず、電撃がテラフォーマーの喉に直に放たれる。

「ッ！」

しかし、その状態で振るわれたテラフォーマーの腕が拓也の首を打ち、2 m程吹き飛ばされる。

「ギイイ……ジョウー！」

拓也を引き剥がした後も苦しんでいたテラフォーマー。しかし、その表情はすぐに元のものへと戻っていた。それと同時に、喉に空いた穴もじわじわと塞がっていく。

「オイオイ、再生能力まで持つてんのかよ……！」

血を吐き捨て、拓也は再びテラフォーマーと向き直る。

だが、その闘志は尽きず、むしろ増しているかのような凶暴な笑みを浮かべ、両者は再びぶつかり合った。

「……向こうは任せた、つつたけどどうしたモンかねこれ」

その真っ向からのタイマンと異なり、一方の俊輝ともう一体のMO能力持ちテラフォーマーはお互いを牽制し合っていた。

相手のテラフォーマーが俊輝を捕えようとし、それを俊輝は回避し一撃を加える。だが、テラフォーマーの硬い甲皮に回避ついでの一撃で与えられるダメージは小さく、早くも戦いは膠着状態となりつつあった。

スタミナを考えれば、土台が人間の俊輝が圧倒的不利。早めに打開策を立ち上げないといけない。

俊輝は相手の能力について考える。これまでの攻防で、敵は特に何か特殊な性質を発現してはいない。



ただ気になるのが、他のテラフォーマーと違い、こちらに触れにこようとしている動作だ。

これまで、地球で訓練として戦ったクローン個体は、殴る蹴るという形で接触を試みてきた。しかし、この敵はどちらかと言えばそのような暴力による殺傷よりもこちらに触れる事そのものが目的のように感じられる。

何故。

「じょう」

それを答える必要は無い、と言った調子で両腕を広げたまま俊輝に襲い来るテラフォーマー。

実験台。背の触手と触角状の何か。物理攻撃ではなく単なる接触。

「まさか………しまっ!?!」

これまで通り攻撃を回避しようとしたが、テラフォーマーが突如軌道を変え、迫って来る。

何とか直撃は避けたものの、その左腕をテラフォーマーの剛腕が掠め、甲皮の一部が裂け血が流れる。

「っ………あ………!?!」

その直後に俊輝を襲ったのは、猛烈な痺れ。これまで多くの修羅場を潜り抜け、痛みには強いと自負している俊輝が苦痛に顔を歪ませる程の激痛。

相手が何の生き物かはわからない。しかし、これだけはわかった。相手は、猛毒を備えた生物だ。

一瞬触れただけでもこの始末。本格的に接触でもしたら、恐らくは、死。

「俊輝! 準備できたよ!」

持って行かれそうになる意識を引き留めたのは、俊輝のその状態を知ってか知らずかの静香であつた。

準備はできた。しかし。

「ちっ……！」

「くっ……！」

二人は手が離せない状態。何とかして隙を作らねば。そう考えた、その時。

!!

空気を震わせる爆音が、周囲に響き渡る。

思わずそちらに注目する、能力持ちの2匹を含めたテラフォーマーの群れ。

「……今だー！」

全くの偶然。正体もよくわからない謎の都合のいい幸運。だが、これを逃す手は無い。痺れが回り始めた体を引きずり、俊輝は静香の手を掴む。

「やってくれ、静香ー！」

それに力強く頷き、静香は自身の背に取り付けられた専用装備を全開にし、とある方向の空へと向ける。

荒れ狂う風に乗って放たれる、『ズグロモリモズ』の猛毒を持つ羽毛を砕いた粉末。

その脅威を既に知っていたのか、進路上の空中にテラフォーマーが一斉に退避する。

そのまま静香の手を引き、拓也の方へと向かい俊輝は手を伸ばす。

「掴まれー！」

作戦通りの行動だった。だが。

「……」

伸ばされたその手を、拓也は取らず。代わりに、その手のひらに一つの変態用ではない薬を握らせ。

「っ、もう時間がー！」

少しだけ、二人の方を振り向いたその表情は。

「あーもうめんどくせえー！」

俊輝には見られる事なく、静香から急いで離れた俊輝によって無理やり腕を掴まれ引っ張られた驚きによってかき消された。

それと同時に、静香の専用装備がもう一度機動し、暴風の奔流が再度先ほどの軌道に放たれる。

先ほどのそれとの違い、それは。

「よっしゃ、開けた！<sup>第二班</sup>ウチの艦への道！」

毒粉が含まれておらず、その風は軌道の滞留していた毒粉を吹き飛ばした、というものである。

その腰に、拓也の腕を掴んだ俊輝が慌てて飛びつく。

そして、最後の一押し。

静香は専用装備を逆方向に向ける。これだけの連続使用。自分達の宇宙艦があつた方向の、基地内で配布された資料での把握と、本来広域に散布する事を目的とした専用装備の効果範囲を狭い所に集中させ、なおかつ連続で使用するためのリミッター解除。これが、戦闘要員を一人削って得た成果。

静香の飛行能力は高くはなく、一人くらいならともかく、大の男二人を抱えてはとも飛ぶ事はできない。

速度も速くは無く、テラフォーマー相手の飛行勝負でも十分な優位があるとは言えない。

ならば、別の手段で速度を稼ぐ必要がある。

「二人共舌嚙まないでねー！」

毒粉を広範囲にばら撒く事を可能とする風量を、ごく一点に集中させ逆噴射する。

そうすれば、その反動で、どうなるか？

その答えは、消えた標的を唾然と見つめるテラフォーマー達が思い知る事となった。

そして。

先ほどの爆音の聞こえてきた方向から、次々と聞こえる仲間達の断末魔。

今の己では分が悪い相手だ、と判断し、オニヒトデと触手のテラフォーマーは身を翻し、その場を後にした。

「罪滅ぼし、なんかじゃないですけど……守りたいじゃないですか」「ここまで付いて来てくれた部下たちを地球に帰して見せる、この身に変えてもだ……！」

「……ここまで頑張ってくれたみなさん、これ以上誰も死なせません……死なせたくりません！」

「この後に及んでまだ俺を信じてるなんて、馬鹿な奴だよ、全く」

「私にできる事はここまでだったが……後は、未来は、任せたまよ、諸君」「さてはて、何人生き残るのでしようねえ♪」

それぞれの動機、意思、目的を胸に抱き、生き残り、散り、殺し合い、助け合う人々。

混迷の火星で繰り広げられる、理不尽なゲームの終盤戦。

そこから離れた今はまだ平和な、しかしその裏では害虫の王が密かに版図を広げ、少しずつ侵食されつつある地球。

そのとある地の奥深くで、火星からの来訪者とは違う、しかしどす

黒い塊のような悪意が、芽を出しつつあった。

「私には、理解できないんだ」

「何がっすか？」

無数の、液体に満たされ、中に何かが見える透明なシリンドラーがまるで支柱か何かのように並ぶ大広間。

その中央にあるのは、巨大な樹、と形容すべき大掛かりな装置。

二重螺旋状に絡み合った機械と、その内側で一定間隔で配置されている、二つの機械を橋渡しするかのようにつなぐ無数のシリンドラー。

「皆と、ジョセフ君の事がさ」

「ぼこぼこ」という音と共に機械が動き始める。

それを眺め、男は不思議そうに呟く。それに相槌を打つ女性。

「結局私の物だとはいえ、何故彼らは不満を持ってわざわざ火星を指したのだろうか」

「すみません、私にはちよつとわからないっす」

男の言葉の意味が理解できないのか、しゅんとした様子で、しかし何とか話相手になろうとする女性。

「不毛だとは思わないかい？」

「まったくやれやれ、本当に」

「人間という生物は、愚かだね」

「だからこそ素晴らしい」

「……黙れ！」

稼働する機械を愛おしそうに撫で、男は満足げな笑みを浮かべる。

それに言葉を繋げるように、いくつもの声が部屋の中に響く。女性は申し訳なさに口をつぐんだまま。その声は、部屋にいつの間にかいた数人の男のものだった。

男は、独り言だから気にしなくていい、と落胆している女性を慰めながら、数人をまるで見えていないかのように気にする事なく、一人

ほやいた。

「我々は、既に生命の樹を手に行っているというのに」

## 第51話 裏切った者

「いつつ……ここは……？」

衝撃に目の前がブラックアウトした俊輝。その視界に周囲の景色が再び映り始めたのは、内臓が宙に浮く嫌な感覚が収まってから十秒程の事であった。

「お前たちの艦まではまだだ、流石に三人の重量じゃひとつ跳び、とはいかなかったようだな」

疑問に答えたのは、俊輝の右隣ですでに立ち上がっていた拓也。

改めてまじまじと見たその体には、『ゴライアスオオツノハナムグリ』『オニヒトデ』の能力を持ったテラフォーマーとの交戦で無数に付いた傷と、再生が間に合っていないのかそこから流れ出す血液。

「なんとか……なったけど……ごめん……飛ぶのは……無理かなあ……」

左隣には、へたり込む静香。目立った外傷はそこまでではない。しかし、その羽には、焼け焦げたような痛ましい痕が残っていた。

一発逆転、ともいえる脱出劇。それは何のコストも支払わずに、とはできなかったようだ。専用装備のリミッターを外した運用、その代償である、体に直接触れている機器の急激な過熱によってできた火傷。

ふとその横を見るとそこには赤を帯びた専用装備が転がされていた。

「何か冷やすものとか……っ!？」

静香の火傷を見て慌てて周囲を見回した俊輝の視界が再び暗転する。それと同時に襲い来たのは、体の自由を奪う痺れだった。

「薬は使ったが、まあ暫くはお前も使い物にならんだろうな」

「薬？」

拓也の言葉に一瞬疑問を感じた俊輝であったが、すぐに状況を理解する。脱出する時に拓也が手渡そうとした薬。あれが、自分の症状を

緩和するものだったのだろう、と。

「第三班班長の能力の一つ、キロネックスの毒に対する特效薬だ」

「……ああ、ありがとう」

「勘違いするな、この状況で人質に死なれたら俺が困るだけだ」

拓也は中身の無くなった『薬』の容器を放り捨て、それを踏みつぶす。

静香を背負った俊輝と現在の所有物を確認する拓也はゆっくりと歩き、行き止まりに辿り着いた。

現在、三人はもう少しで第二班の宇宙艦に到達できる距離にいる。だが、運の悪いことに、そのもう少しというのは距離の話だ。三人の眼前には、崖の切っ先がまるで悪趣味な飛び込み台のように姿を見せていた。

高さにして30mほど。MO手術で強化された体とはいえ、現在の満身創痍な体で飛び降りるには無茶がある高さ。徐々に下っていくルートはあるが、時間がかかる。

「それに、事態は度を越して深刻、という事だ。安心している場合でもゆっくりしている場合でもない」

拓也の言葉は、彼ら火星派遣実戦部隊の現状をはつきりと示していた。

俊輝と静香は知る由も無いが、彼らが補助しその任務を完遂させる為の『アネックス1号』計画搭乗員たちもまた同時期に始まった大攻勢によりテラフォーマーの大群に襲われ、さらには中国の戦略宇宙艦『九頭竜』も標的の確保及び生存している搭乗員の殲滅を狙い動いている。

拓也は、焦っていたのだ。テラフォーマーの攻撃はもはや嘆いても仕方がない。それはアネックス1号の方も同じ事情だ。問題は、拓也の同郷の連中の動きであった。

現在は『ミッシェル・K・デイヴス』と『膝丸燈』確保のために駆けずり回っている事だろう。それが成功にしろ失敗にしろ、結果が出



た後はアネックス一号の生き残りを狩る目的に移る。

……では、その後はどうなるだろうか。

中国は、とんでもない爆弾を火星に残してしまっている。

現場が暴走しました、では済まされない、施設まで構築した上での多数の人員の派遣。それを用いたアネックス1号増援部隊の妨害。通信が来ないそちらの方面の自国部隊。

言い逃れができない証拠と、不安要素。それを放置するような事があるだろうか。

間違いなく、彼らは埋めに来る。『裏切り者』と『裏アネックス計画』を。

さらに、拓也は知っていた。他の班は勿論、当の裏第四班でさえ拓也と副官である欣にしか通達されていないとある情報。

それは、この火星に、秘密裡に一隻の宇宙艦が派遣されている事。中国軍上層部とそれと裏で繋がりを持っているある集団が共同で飛ばした、『九頭竜』より小型の、しかし武装した搭乗員を満載した機体が、残存人員の救助という名目でやって来るといふ事を。

「……ハッ」

「どうした、拓也」

何が、救助だ。どう好意的に解釈しても、火星の戦場でデータ採りを終えた新型兵器の『回収』が限界。そのメインとなる任務は、後始末、だろう。αMO手術の中でも特に戦闘面での高い能力と希少性を持った自分と、上級軍人である欣は無事に地球へと帰還できる事だろう。生きた状態で利用価値のある欣はともかく実験動物の自分が帰ってからどうなるかは知った事ではないが、問題は他の班員の皆である。

裏第四班の班員は、『裏切り者』と同じように一般から募集、軍人でも事情があつて、という人間が多い。

行動が外部に漏れれば国が傾きかねない、そんな人員を今の計画が成功したとも言えない戦況でわざわざ生かしておく必要があるだろうか。……拓也は、その答えをはっきりと出していた。だからこそ。

「無様なものだ、と思ったただけだ。班は潰走、半ば捕虜。健在なのは班長<sup>オレ</sup>だけだ」

「なあ、拓也」

先ほど踏みつけた空になった点鼻薬型の容器を見つめていた拓也。

「俺達に協力してくれ……地球に帰って、そしたら」  
「断る」

それは、今更な話であった。これまで協力して、三人は今ここに辿り着いている。

ただ、あえて今この協力する、を改めて言う意味。それを拓也は理解し。

「俺はどこまで行っても国の兵器だ、残念ながら」

はつきりと拒絶した。

「それにほら」

弱っている俊輝と静香が気付いていなかった、視界の果て。それを指差し、拓也は溜息を付く。

「俺達を逃がす気は全く無いらしいな」

その先には、黒の軍勢が再び迫りつつあった。

二軍に分かれて進撃する濁流のような群れ。そして、その二軍の間、その奥にはもう一つの群れが。

三人はその群れ、さらにその群れの最奥部に見えた一匹のテラフォーマーの姿をはつきりと確認する。それは、小柄で額に模様が刻まれた、他のテラフォーマーとは明らかな差異を持った個体。

「く……そつ……」

「……」

「逃げられは……しないよね……」

うんざりとした様子の俊輝。無表情の拓也。疲弊しきった静香。三人がそれぞれの表情を見せ、再びそれぞれの武器を構える。

敵の数は先の戦闘より少ない。能力持ちの姿も見られない。断続的に響いてくる爆発音のような何かを聞くに、裏第四班の宇宙艦で起こっている戦闘に戦力が割かれているのだろう。

ならば先ほどよりは、と一瞬だけ三人は考えるが、その甘い考えは即座に自身で否定する。

先ほどの戦闘では、MO能力を持ったテラフォーマーの実戦試験、という目的が感じられた。しかし今回は、その能力持ちのテラフォーマーは見られない。

性能試験を行うつもりが無いのであれば、躊躇なく大群で押し潰しにかかってくるだろう。

「ここが限界、か」

——同刻 第三班宇宙艦

「……レオンが死んだ、そろそろ脱出時だろ!？」

「もう少し、もう少しだけ持たせろ！」

テラフォーマーによる各戦線への同時攻撃。その影響は、宇宙艦で待機している人員にも及んでいた。

戦闘員の多くを引き抜いた留守番用の部隊。数に限界があり、火器類や防衛装置も最小限のものしか搭載していない状態で数十匹のテラフォーマーの攻勢を耐え忍んでいるのが、この第三班であった。

数としては大したものに見えないかもしれないが、数少ない戦闘員で対処するには無理がある数だ。

現在各国宇宙艦の状態は、第四班攻撃と基地の防衛、最初から総員

で合流、とそれぞれの事情で無人状態となっている第一班、第二班、第五班。剛大とダリウスがテラフォーマーと激しい戦闘を繰り広げている第四班近辺。そして、人員がまだ待機している第三班と第六班というものである。

第三班の残存人員は四人。残りの十二人を最初の合流と本部防衛の為に派遣している、という状態。

戦闘員は三人、技術者が一人。技術者と言っても荒くれ者の中では何とかこなせる、というレベルのそれであるが。

その戦闘員の一人、レオンが止まないテラフォーマーの猛攻により力尽き、残りは二人。

三人で何とか抑え込んでいた均衡が崩れ、ここから一気に崩壊する事は想像に難くない。

脱出するなら、今だ。今撤退を指示し素早く火星を離脱すれば、戦闘員の二人も助かるかもしれない。いや、しかし。

彼は艦を任され、有事の際には艦の離脱、その判断の権限も与えられている。班の皆が愛する班長と、尊敬……というかバカをやつてきた仲間達の中で一番頭の出来がマシだった副長から。だがしかし。

「班長……レナート……俺は……」

やろうと思えば、すぐに撤退の意思を伝え、戦闘を行っている二人を素早く収容。即座に火星を飛び立つ事が可能である。でもしかし。

「オイ」

苦悩する彼に、唐突に無遠慮な声がかけられる。

生き残りは三人。外で戦っているのは一人。では、この声は。

「俺が戦ってやろうか？」

それは、足元に簀巻きにされて転がされている男から発せられていた。

火星に降り立った初日にエリシアの襲撃で壊滅した基地の唯一の生き残り。捕縛されてエリシアのあまり理解していない拷問により

色々と情報を吐かされて主力が基地に合流するため艦を出た後はそのまま放置されていた『裏切者』の兵士の一人である。

その脇には、没収した刀。戦況は最悪、猫の手も借りたい状況。しかし、ここで『裏切者』に所属していた人間を解放していいものか。「時間が無いんだろう？ 安心しろ、俺も死にたくない」

「……いいだろう」

リスクはある。だが、やるしかない。

「二人とも艦内に撤退、入り口で迎え撃つぞ！」

「そうこなくっちゃな」

二人に指示を出し、それと並行して男の拘束を解く。

「不審なマネをしたら……わかつているな？」

それに答えを返す事は無く、男は刀を持ち、艦の入り口、撤退を終えた二人の方向へと走っていく。

彼にはわかつていた。今ここで戦闘員が一人増えようとも、戦局を覆せるほどではないと。鳴り物入りのように解放したが、解放された男は所詮裏切り者の一般戦闘要員の一人。大した実力もないだろう。

しかし、少しでも時間を稼ぐ。その為ならば。

そう決意し、『薬』を持ち彼も指揮所を後にする。

「さあ、人生最後の賭け、って感じなのかねえ」

「……静香、飛べるか、とは言わないが、何とか死なない程度に着地、できるか？」

それを口にしたのは、拓也だった。

戦況は絶望的。傷だらけの三人では方に一つも勝ち目は無いだろう。

意思の強さ、それで乗り越えられる状況を遥かに超えている。

脱出する先は一つ、今の三人にはあまりに高い、地獄の口のようにも見える崖。

「……二人、は無理だと思う」

「ん」

静香の答えを聞き短い返答を返し、拓也は目の前のテラフォーマーに突貫する。

振りかざされた棍棒、それより一手早い動作でその首に雷機雷を突き刺し、炸裂させる。

「こんな所で……死ぬるか!」

戦いの興奮に猛る俊輝が手に形成された大顎を振り、テラフォーマーの両腕を切断。主だった攻撃手段を失ったその個体を突き飛ばし、向かってきていたもう一体に対する盾とする。

しかし、次の瞬間。

「がっ!?!」

それをすり抜けてきた一体の拳が、腹に突き刺さる。そこまで深い傷ではない。だが、骨がへし折れる音。

その衝撃でふらついた俊輝であったが、何とか意識を保ち、背後に跳ぶ。その直後、追撃に移ろうとしたテラフォーマーの体に横殴りに雨のような液体が降りかかる。

何だ、とそれを確認する動作を取った瞬間、その甲皮はブスブスと音を立て、徐々に薄くなっていく。

毒液だ、と認識するもその暇を与えず繰り出された一撃により横腹から体内を貫かれ、神経節のマヒにより活動を停止するテラフォーマー。

「悪い、拓也」

今はまだ何とか捌いている。だが、二人では限度があった。静香の

専用装備が使えず、満身創痍である以上、戦力には数えられない。ランキング上位と云えど、その性質は純粹なスペック勝負の接近戦を仕掛ける俊輝とは真逆の、専用装備に頼った中距離戦。専用装備が無ければ、羽に毒を持つとはいえ、素の体も、本人の戦闘技能も強くは無い鳥類型。

ここで終わり、か。と三人の誰ともなく考え始めていた。これまで、どれだけの戦いを潜り抜けてきた事だろうか。二度の裏第四班との激突。俊輝の、バイロンとの戦闘。そして、テラフォーマーとの交戦。

傷を癒す暇も無く繰り返し、その結末が、この戦場。

「なあ……拓也……」

拓也が先ほども聞いた話の切り出し、それを息も絶え絶えな調子で俊輝は漏らす。

「死んで、くれないか……?」

その言葉に、拓也の眉が動く。その感情の機微が何なのかは、第四班班長として再会してからの表情を隠している拓也のそれであるため、俊輝には臆げにしかわからない。

「二人で、とは言わないから……さ……」

じりじりと迫るテラフォーマーの群れ。それを見据える拓也と、体力の限界なのかへたり込み、だが背に静香を守りながらの俊輝。

「こいつだけ、逃がしてあげたいんだ……」

元々修羅場に慣れておらずこれまで振り絞って来た勇氣も限界で震える静香、地球からついてきた幼馴染を一度だけ振り向き、俊輝は再び立ち上がる。

その目には、弱弱しく、吹けば消えてしまいそうな、しかしまだ残っている闘志の炎。

「だから、俺と一緒に、ここで死んでくれ」

「断る」

……その返答は、先のそれと同じであった。突撃してきたテラフォーマーの一匹を避け、首をへし折りながら、拓也は俊輝の願いを否定する。

「じゃあしようがないや……静香の事、たのん……」

「私、まだ戦え……！」

持てる限りの『薬』を取り出し、俊輝は一步前に出る。二人の問答に耐えられなくなったのか、今にも倒れそうな様子で、静香もまた立ち上がるうとする。

そんな二人に対して。

「ははっ……一緒に死んでくれ、なんて翔とか健吾が聞いたら爆笑しながら変な噂バラ撒きまくるぜ？ やめとけ」

拓也は、笑いながら答え、二人を蹴り飛ばした。

「なっ……！」

宙を浮く俊輝は、脳内の分泌物の影響かゆつくりと流れる時間の中、拓也を見返した。

地球でできた友人。自分達の計画を邪魔し、多数の犠牲を出した宿敵。その力を競い合った、好敵手<sup>ライバル</sup>。

「拓也ああああー！」

そんな、俊輝にとって一言では表せない、一人の人間は。

同じ班の仲間達と地球でバカをやっていた時と同じ、笑顔を浮かべていた。

「そうだ、言い忘れてた」

吹き飛び、放物線を描く二人を見ながら、拓也は少し小さき目の声で、まるで独り言であるかのように。

地球でできた、初めての友人。自分達が排除すべき宿敵。その力を



競い合った、好敵手。ライバル

そんな、関係は数多くあれど、拓也にとってはまだ一言に集約できる、でも気恥ずかしい、そう呼ぶ権利なんて無い、そうやってずっと先送りしてきた、その呼び方。

「あの時はご馳走様、美味かったぜ、ラーメンライス」

落下していく俊輝。それが聞こえているのかいないのか、聞こえていたら少し嬉しいかな、と思いながら、拓也は少し迷い、忘れてなどいない、最初から用意していたその言葉を口にした。

「あばよ、親友」

「ジヨウ……ジ」

ボスの指示が出たのか一斉に突撃するテラフォーマー達。そのほぼ七割は拓也に殺到し、残りは落下する二人を追撃せんとする。

だが、空を飛んだ十数匹のテラフォーマーは一瞬の内に宙を覆った光る結界に掛かりその羽と喉を焼かれ、地に伏せた。

同時に、二本の雷機雷が拓也の左右に投擲され、その間にまるで柵を作るかのように電撃が走る。

「電気が欲しいんだらう？ ……いいぜ、全部くれてやるとも」  
「……ジ」

先遣部隊が一瞬で焼き尽くされたのを見て、小柄なテラフォーマーの顔に抑えきれない激情が浮かぶ。

ガラガラ、という音と共に落ちるのは、五本の『薬』の容器。

「でもな、ここから先には一歩も進ませねえ」

## 第52話 陰謀の穂先

「全く、面倒事が増えてしまった」

船内の十数カ所に仕掛けられた不審物を確認し、それが爆弾であると解析の結果判明し、除去。

火星への突入を目前に控えた時期に、想定外の作業。それを終え、エロネは一つ息を付いた。

何と無謀な、大胆な犯行なのだろうか。船外の嚴重な監視をすり抜け、さらにはこの一族自家用船『ノア1号』の高度なセキュリティシステムを突破し、爆発物を仕掛ける。

並大抵の技術でできる事ではない。いや、重要なのはそこではない。ニュートンの一族、その当主を火星から帰還させる任務を担ったこの機体を葬ろうとする、その行動が実行に移された事が問題なのだ。

恨みを買った覚えは無い、などと無知鈍感を晒すつもりはない。一族はその目的を果たすため、様々な団体、組織、果てには国さえも利用してきた。その命を付け狙う輩がいる事自体は当然と言ってもいい。

しかし今回ではそれをコントロールできなかつた。コントロールできない何かしらの勢力が存在する。そこに、今回の問題がある。

敵対する勢力は多いが、その多くは既に一族の手の平の上にある。一族に全面抗争を挑もうとするような過激な指導者が誕生しそう、もしくはしてしまった時には失脚させ、時にはガス抜きとして一族にとって価値の無くなった施設への破壊工作や襲撃といったものをわざと見逃したり。

そこまで影響力を行使できずとも、監視程度ならどの勢力に対しても行っている。それは敵対的なものだけではなく、中立、友好的な所に対してもだ。

それが、今回では監視をしそびれたと言うのだろうか。

それならばまだマシと言えるだろう。たとえ人類の最先端を行く一族と言えど、全ての物事に置いて完璧に完全に、とは言えないだろ

う。今回の件でミスや見落としが原因ならばそれを補えなかった体制のどこかに致命的な欠陥があった、という事だ。

だが、もし仮に、敵が上手だったのだとしたら。一族の力を以ても、その動向を捉えきれなかったのだとしたら。

「槍の一族、でしょうね」

「……」

突然かけられた声とその内容で、エロネの考えは中断された。

「あら、あなたは知らなかったかしら、あの連中の事」

爆弾処理の手伝いを一切しなかった事に対する抗議の無視は伝わっていないようだ、とエロネは諦め、声の主に向き直る。そこに立っていたのは、社交界のただ中にいるかのような服装と手にした日傘が特徴的な女性であった。

ファティマ・フォン・ヴィンランド。エロネと同じく、一族当主であるニュートン家の親戚筋に当たる家の出の人間である。

「……彼らは監視対象だ、それに、いくら我らの分家だとしても、そこまでの力はあるまい」

それについてエロネが知っている情報は、正直の所あまり多くない。自分の『新界』やファティマの『ヴィンランド』と同じく、ニュートンの一族に連なる家系の一つ。普段は他の一族との関わりを断ち引きこもっている。一族の者達には忌避されている。一族にとっての『予備品』の役割を担っている。

そして、ここ20年程前から怪しい挙動が見られる。

そのくらいだ。

「あまり込み入った事情までは知らない、と言っておこうか」

「そう、なら教えてあげましょう。爆弾仕掛けてきたヤツの素性くらいは知りたいでしょう？」

エロネはそれに無言を返す。知りたいと言えば知りたいが、そこまでがつつく程のものではない。

「連中はね、私達の初期の当主とそれに付いていった一族の変わり者から始まったのよ」

違う、知りたいのはそこじゃない。昔話じゃなくて今の事情が知りたいのだ。そんなエロネの内心の声はもちろん聴き届けられず、フアテイマの話は続く。

『一族が存亡の危機に瀕した際の備え』を目的としてその当主は当主の座を次代に譲って研究に没頭、それに付き従った奴らはニュートンの姓を捨てて当主の名の一部……だったかしら、を新たな姓として分家を立ち上げたそうよ」

「成程、そんな一族に尽くす自己犠牲に溢れた連中が反旗を翻そうとした、と」

「ええ、もしかしたら最初からこの時を待っていた、のかもね」

曖昧に笑うフアテイマと聞きたい事とは少し違ったが興味深い話だ、と顎に手を当て考え込むエロネ。話が一度途切れ、船内は静まり返る。

程無くして船内に響いたシステム音声は、火星の熱圏を突破した事を二人に知らせた。

「……到着、だな」

そして、彼らは火星の地へと降り立ったのだった。

ただ、無力感がそこにはあった。また、助けられてしまった。一緒に帰れたかった。地球に無事帰還して、皆で何してくれてんだこの野郎と一発ずつぶん殴って、それから。そんな前向きな未来を、期待していた。

もう戻れない、遙か崖の上。その様子は伺えない。しかし、追手が一匹たりとも先に進んでこない事を考えれば、そういう事なのだろう。

「……俊輝」

肩を貸してくれている、守るべき人の声。今の彼を支えるのは、そ

れだけであった。

一步、また一步、と前に、この星から脱出する希望へと向かって足を進める。

その足取りは重い。

それは肉体的疲労だけではない。まるで、自分自身が進むな戻れ、と体を引っ張って必死に止めようとしているかのような感覚。

今すぐ戻って、手を貸したい。そうすれば、二人ならば、もしかしたら。

しかし、それを振り切って、もう一步、踏み出す。

この状況で、戻る事はそもそも不可能だ。さらに、このくたびれきった体で、何ができる？

いつ何が襲ってくるかわからないこの状況で、専用装備を失って自衛能力の大部分を削がれた静香を置いていくのか？

「静香、俺さ、どこで間違えたのかな……」

そんな答えの出ない問いを、申し訳ないと思いながら隣の静香に投げかける。自分の夢へと進む為の金が欲しい、ただそれだけの単純な動機だった。地球の未来を守る、なんてバカな妄想としか思えない任務に参加する、それだけで誇らしかった。そこでできた友人達との日々、それを失わないために戦う、それだけでも価値がある、そう思っていた。

その結末が、これなのか。このまま歩き続ければ、自分と静香は火星を脱出する事ができるだろう。だが、ただそれだけだ。

金は手に入るのかもしれない。でも、自分達は何を生み出せたのだろうか。不毛に戦い、殺し合い。未来の為に、何ができたのだろうか。友人達は何人がまだ生きているのだろうか。……あいつは、いつまで生きていてくれるのだろうか。

「間違えてないよ、きつと」

その穏やかな返答も、俊輝は飲み込む事ができなかった。全てを否定して欲しかったのだ。お前のやった事は無駄だったのだと。ただの自己満足の果てに何もかも失った愚か者なのだ。

答えは出ず、友を見捨てて歩く道のり。そして、その結末は。

「あらあら、随分とまあボロボロになってしまつて」

俊輝と静香、二人の目の前に現れたのは、自分達が乗ってきた第2班の宇宙艦。その外に出ているのは、直径3〜4 m程の球体状の機械。そして、そこに佇む一人の老婆。

第六班幹部搭乗員、エレオノーラ・スノーレソン。テラフォーマーとそれを操る混成部隊との戦闘、本部での決戦により班員の多くを失った第六班最強の戦闘兵器。

その身は無数のテラフォーマーの体液と自身の血に塗れ、全身の傷跡はここに至るまでにどれだけの戦闘を繰り返してきたかを物語っている。

ここに幹部搭乗員がいる事自体は不思議ではない。恐らく本部での戦闘は既に終わり、各員で火星からの脱出を図っているのだろうと二人は考える。そうなれば、どこの国の宇宙艦だとか拘っている余裕は無い。裏アネックス計画に用いられた宇宙艦はいくら高性能を発揮するため積載量を犠牲にしているといっても二十や三十人を乗せるくらいならわけはないからだ。

問題は、何故この老婆がたった一人でここに立っているのかという事。さらには。

何故わざわざ脱出ポッドを船外に出しているのか、という事だ。

「ねえ、丁度いいから聞きたいのだけど」

この状況で、二人の頭に、悪い予感が浮かび上がる。

いやいやまさか、そんな事が。『裏切り者』にもそんな余裕は無かつたはずだし、テラフォーマーにもそれをする理由は無いからありえな

い。そう考えて、二人は疑問を投げかけてきた老婆へと耳を傾け。

「<sup>アナタたち</sup>第二班、この宇宙艦飛べないくらいにぶっ壊したのかしら？」

直後、希望が暗闇に沈む、そんな音がしたような気がした。

「……第四班、何か情報を持ってないか」

地下から脱した一行もまた、宇宙艦を目指して進んでいた。ダニエル曰く、基地を乗っ取った際にも地下道を掘って襲撃したのだから第五班の宇宙艦は基地からそこそこ近いだろう、との事でそちらを指す事に。

だが、一つ問題があった。

「今基地の内部、どうなってるんだろう」

そう、通信設備は使用できるものの、本部からの通信は途絶え、今現在何が起きているのかは不明な状態。

第五班の宇宙艦を目指すなら一度本部に戻ってからヨーゼフが基地を制圧した時のトンネルを通って艦へと向かう、というルートが正当なものに思える。

しかし、基地内部の事情がわからない以上、迂闊に入ってしまったえばよくて裏切り者、最悪テラフォーマーの巣窟に足を踏み入れるハメになりかねない。

それを避ける為に、何とか情報を掴みたいが、斥候を出すには時間も人員も余裕が無い。

「……内部を知る方法はありません」

が、そこに一人が声を上げる。

その声を聞いて、裏アネックス連合と第四班、それぞれの勢力はそれぞれ違った理由から驚きの表情を見せた。

「お前確か剛大さんと戦った……」

「やめろプラチャオ、裏切るつもりか！」

裏アネックス連合からは、半ば捕虜のようでおとなしくしてはいたものの協力する、という姿勢を見せていなかった第四班の人間から声

が上がった驚き。

当の第四班からは、班長である拓也に留守を任せられたプラチャオが直々に自分達の持つ強みを提供しようとした、という事への非難という色が強い驚き。

「……我々が生き残るには彼らと協力せねばならない……違いますか？」

プラチャオが自分の仲間である班員に放ったのは、殺気すら混じった一言。拓也から託された仲間達である班員。自身の役目は、それを無事、班長の望んだ通り地球まで返す事。

その意思をくみ取った者、ただ殺気に気圧された者、理由はそれぞれであったが、第四班の内部からの不満は収まっていった。

「エリサーエフ博士……貴方達が『裏切り者』と呼ぶ人々の指揮官側の情報に依存せずともこちらだけで状況把握できるように隠密任務に長けた人員を一人、基地に送り込んでいたのです」

「なるほどな、お前らでも反乱起こされない保証は無いからな、監視つて意味も合わせて必要だろうな」

プラチャオの説明にチャーリーが頷き、時間が無いから早く頼む、と催促し、それに頷きプラチャオは通信機を耳に当てその電源を入れる。

「雅<sup>チャーウエイ</sup>?、聞こえますか? 基地の状況を教えてください」

仮にこれで応答があり報告が届けば、その隠密任務の隊員を回収して次の選択肢を判断すればいい。基地が安全であれば進み、そうでなければ次の候補の宇宙艦へ。……もし応答がなければ、基地の内部は極めて危険な状況という事はほぼ確定であろう。

「プラチャオ君ですか? ごめんなさい……ごめんなさい……」

通信に答えたのは、少女の声だった。声の主を確認した後、弱弱しい、しきりに謝る声。

「どうしましたか、雅<sup>チャーウエイ</sup>?、何かまずい状況なのですか?」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

不安げに、心配そうに返すプラチャオ。しかし、その返答もまた、か



細い謝罪が続くばかり。

何が起こったのか、裏アネックス側に捕まってしまったのか。それなら問題は無い、自分達も似たようなものだ。それとも、何らかの形で負傷して動けないのか。

プラチャオは不安になり、どう聞いたものか、と考える。

「本当にごめんなさい、プラチャオ君……班員の皆……他の班の皆さん……」

大丈夫、謝る必要なんかない。ひとまずはそう少女を宥めようとしたプラチャオ。

しかし、その言葉を出そうとする前に、次いで少女の言葉が続く。

「ごめんなさい……今、あなたの後ろにいます」

その意味を脳内で咀嚼するより早く、プラチャオの首が裂け、血が噴き出す。

それに驚愕しながらも、素早く出血した首筋を押さえ、反射的に蹴りを放つプラチャオ。

だが、その攻撃はまるで幻影を掴んだかのように空を切るのみ。

一方の、そこに居並ぶ皆にも、何が起こったかはわからなかった。

殺気のようなものも、攻撃さえも無く、突然、プラチャオの首から血が噴き出た、ただそうとしか見えなかったのだ。

——海賊は本当に幽霊か？

擬態とは、外敵や獲物を欺く為の手段だ。外敵を欺く為、外敵の恐れる強い生物を装う。外敵が興味を持たない死体を装う。獲物を欺く為、獲物の好物を装う。同種のパートナーを装う。地形を装う。

先の例は全て、獲物の視覚に訴えかける手段である。それとは異なる擬態の一種に、化学擬態と呼ばれるものが存在する。その名の通り、化学物質を用いて行う擬態だ。獲物の好むフェロモンを用いてお

びき寄せる、といったものが代表と言えよう。  
この生物も、化学擬態を用いる生物の一種だ。  
では、この生物は何に擬態するのか。それは。

『無』である。

危険を回避して生息地を選ぶ昆虫や両生類は、捕食者であるこの生物の生息地のみは避ける事ができない。

気が付けば、その胃袋に収まる事となる。

「……ごめんなさい、ごめんなさい、皆さんを帰すわけにはいかないです、ごめんなさい……」

大振りのナイフがきらめき、第四班の班員の一人が首を正面から引き裂かれ、一瞬で絶命する。

だが、攻撃前の予備動作、攻撃後の離脱、誰もその気配を読み取れず。

彼女の弱気な、本心からの謝罪の声と同じく、それは虚無の中であった。

雅？・ヴァン・ゲガルド

国籍：中国／？

17歳 女 154cm 46kg

MO手術”魚類型”

カイズクスズキ

## 第53話 御託の前に

「グツ……ウ……」

ごぼり、と血の泡を吐き、プラチャオが片膝を地に突く。その目には動揺が走るが、それと同時に戦闘態勢に入りつつもあった。

「ま、待て雅?! 俺達は味方だ!」

『薬』を取り出しながらも、第四班の班員は奇襲を仕掛けてきた少女、雅?が勘違いしていると考え、誤解を解こうと試みる。しかしそれを使用する事は構わず、胸に刺し傷が形成され、どさりと倒れる。

一方の第四班奇襲部隊残存組は、まだ十分に状況を把握できていない。プラチャオが通信して何やら表情が曇ったと思いきや、いきなりその首が裂け大量出血。最初は班の情報を流そうとしたプラチャオの事がやはり許せず仲間割れが生じたのかと思ったが、その後の第四班班員達の姿を見るに、そうではないのだ、という事くらいは伝わっているのが、それだけ。

ただ、それだけと言えど、敵襲だ、という事がわかっていれば。

「総員、変態!」

取るべき方策は、はっきりと決まっている。

指揮官代理の健吾が声を張り上げ、全員が一斉に『薬』を取り出した。

「死角をできる限り潰すんだ! どこからでも……くっ!」

「なるほど、貴方が隊長さんなんですな……」

指示を出す健吾。その耳に入ってきたのは、わずかではあるが何か空を切って自分へ向けて振るわれた音。

首を横薙ぎにする軌道である、という事だけは何とかわかったため、姿勢を低くして回避を試みる。

頭上を何かが通過した感覚と共に、何者かの囁くような声が聞こえた。周囲にいる仲間達の誰のものでもない、と即座に判断した健吾は目の前を変態によって形成された大顎で薙ぎ払うが、何かに接触した

感触は無し。

「気をつけてください……相手の能力は『カイゾクスズキ』……気配を消す生物です」

プラチャオの言葉で初めて、健吾達は敵の詳細とその能力を知る事となった。

恐らく、裏第四班の班員が、プラチャオが先ほど話した隠密任務の担当が裏切ったのだ。

しかし、気配を消す。それに対し、健吾は正確ではないな、と感じる。

あれは気配を消す、などという言葉で済むような生易しいものではない。

最初にプラチャオが奇襲された時、自分達は通信を行うプラチャオに注目していた。

だと言うのに、誰一人としてプラチャオが攻撃を受けた事、襲撃者の存在に気付く事ができなかった。

自分が相手の攻撃を回避した直後に小さな声が聞こえた、という事は相手はあの時至近距離にいた。つまり、敵は遠距離からではなくプラチャオに接近して変態後に生成される生物の何かか刃物を使って首を切りつけたという事。

完全に、皆の視界から敵の存在そのものが抜け落ちている。原理こそわからないが、高い欺瞞能力だ。

「雅?! 何故なのですか!」

首を押さえ流れ続ける血を止めようとしながらも、プラチャオは虚空に向けて訴えかける。

「ごめんなさい……わたし、本当は四班の皆さんとは違うんです……」  
帰ってきたのは、弱弱しげな声。その内容は要領を得ないものであったが、何となくの意味は通じる。

寝返ったわけではない。最初から、別の何かの意思で動いていたのだと。

「……君は誰の命令で動いているのですか」

「プラチャオ君にも言えませんか……ごめんなさい」

これは時間稼ぎだ。そして、それにわざわざ乗る程度に相手には余裕、もしくは任務を遂行する事に躊躇いがある。

「本当に、僕たちを殺そうというのですか？」

「……はい。それが、あのお方のご意思ならば」

問答の間だけは、いつ襲い来るかわからない急所への一撃の心配をしなくて済む。

声の聞こえる方向こそはつきりしているものの、詳しい場所までは不明瞭だ。

だが、至近距離ではない、それだけでも安心できる要素ではある。

「そうですか……鈴ー」

「おうよー」

突然声を張り上げたプラチャオ。勢いで、首の傷口から血がどくりと溢れる。声に動揺したのか、もう既に二人殺したにも関わらずその出血に動揺したのか、空間が揺らいだ、そのような感覚をその場にいたる皆は感じ取った。

プラチャオがその身で隠すようにしていた背後、そこには、変態を終えた鈴。先のテラフォーマーとの戦闘によって酷く折られた腕は変態しただけでは十分に回復せず、翼はまだ痛ましい姿を晒している。

だが、その鈴の一言で、空気が代わる。

「ごめん言い忘れてた、皆耳塞ぎな」

おい待て急すぎんだろふざけんな、という第四班班員と、いきなりなんだという反応の第四班襲撃組。

しかし、そうは言うものの耳を塞ぐ暇など与えず、鈴は口を開け。

「はい、バレバレだよ。そういう所がアンタは甘ちゃんなんだ」

その口を開けた動作に意味は無く不意に右を向き、鳥類の翼、その発達した筋肉で正面の何も無い場所を殴り付ける。

直後、そこに居並ぶ面々は目を疑う事となった。いきなり鈴が殴り付けた視界に、突然人間が瞬間移動でもしてきたかのように映りこんだのだから。

大振りなナイフを持った、その顔にはガスマスクを装着した人間だ。

左腕を胴を守るように構え、鈴の攻撃はそれで防いだ様子。しかし。

「アタシのこれが弱点だから、単純な動きで狙いに来れば、簡単なもんだ」

「……今ですっ！」

その場を離脱しようと身を翻した瞬間、プラチャオの廻し蹴りがその顔を捉えた。正確には、その顔を覆っているガスマスクを。

『ヒクイドリ』の脚力による一撃に耐えられるわけもなく、そのガスマスクは引き剥がされ、吹き飛ばされた。

鈴の正面にはプラチャオが。背後に回っている時間は無い。ならば、攻撃が来る方向は必然的に左右のどちらか。半分運であったが、二分の一であらかじめ攻撃する方向を決めておき、ほんのかすかな気配から、それを確信に変えて殴打したのだ。運試しではあるが、結果として素早くカウンターの一撃を決める事に成功した。

「雅？……アンタ……」

「成程、だからガスマスク、か」

その素顔を見て、同じ班員であった鈴とプラチャオ達は悲痛な表情をしながらも納得し、襲撃組は驚愕に顔を歪ませる。

「ふふ……気持ち悪い、ですよね」

ぱっと映える美しさ、という訳ではない。だが、素朴に可愛らしい、といった趣の顔。

……変態前はそうであった事が伺えるその顔は、魚のものと半分以上一体化しているような状態となっていた。

「私の能力、試作の不完全なものなんですよ……だから、こうするしかないんです」

「やけに薬の携帯数が多いと思ったら……」

プラチャオの声は重い。その、他の生物と融合しているかのような顔。それは、過剰摂取をした際のそれであった。

『カイゾクスズキ』の能力は生物界でもかなり特異な存在である。化学物質による、自身の存在の欺瞞。まるで、そこに何も存在していないかのように餌となる生物を欺く、高度な擬態。

人間にそれを移植したとしても、十分に能力を使いこなせるか、と言われれば微妙な所だ。カイゾクスズキが欺く餌となる昆虫やカエルといった生物。それよりも局所的には劣るものの、その分様々な感覚器官がある程度まで発達させた人間に対して高度なステルス能力を発揮するには、元となるカイゾクスズキの能力をさらに高める必要がある。

それを可能とするのは、より高い生物との親和性が得られるαMO手術か、もしくは、過剰摂取。

雅？が持つカイゾクスズキの能力はそこまで高くなかった。それは、プラチャオ達が地球で行った戦闘訓練の一つ、『薬』が十分な量得られない状態での戦闘、という機会に彼らは知っていた。

何だか影が薄くなる、薬を控えめにした時に発現したのは、その程度の能力でしかなかった。

それ以外の戦闘でも通常量の投薬であれば、気配は消す事ができた。しかし、視界に入っていればはつきりと認識できないものの、そこに人型の何かがいる、くらいの感覚で存在がわかった。

雅？が今の戦闘のようなまるで存在しないかのような隠密能力を発揮できていたのは、ガスマスクを付けてからの事だった。

どういう原理なのか、と相手の相手をしていたプラチャオ、必死に目を凝らして何とか見つけてやる、と躍起になっていた鈴と拓也。その三人に雅？が語った理由は、「ガスマスクで印象が薄れるからその分能力が有効に働く」だった。

成程、とその時はプラチャオは思った。しかし、時間が経つにつれておかしい、と思い始めていたのだ。

そもそも、特別何かの特徴があるわけでもない一人の少女の印象というのはガスマスクという奇怪な見た目のものよりも濃いのか、と。



答えは、目の前のこれであつた。過剰摂取による最大限の強化。過剰摂取を行い魚と融合しているかのようなこの顔であれば、確かにガスマスクの方が印象は薄いだらう。そして、個人的な理由としてその顔を仲間に見られたくなかつた、というものもあるのかもしれない。「おかしいですよ、こんなの……でも、しようがないじゃないですか」

自嘲気味に雅？は笑い、プラチャオの追撃を手足を用いた体術で捌く。

その、正に死んだ魚のような、という瞳には、暗く沈んだ感情だけが映る。

敵は姿を現している。今なら、総員でかかれば抑え込める。その機会のはずなのだが。

そこに居並ぶ皆は、迂闊に動けないでいた。

プラチャオと雅？、ムエタイと中国武術のように見えるがそれとは少し違う出所不明の謎の体術。その攻防戦に手出ししてしまえば、今戦っているプラチャオのペースが崩れて不意の一撃を受けてしまいかねない、と考えたからだ。

「私が失敗作でも変なあの方は切り捨てないでくれますし！ お姉ちゃんは大バカですけど優しいですし！ 頑張りたいですよ！ 寿命がどんどん縮んでるって知ってても……何とでも言ってください！」

「それがおかしい訳ないだろうが！」

戦いの空気で興奮しているのか、血を吐くような叫び。それをプラチャオもまた、大声で叫び返す。こちらは本当に口から首から血を流し、その苦痛に耐えながら。

「つ……何も知らない癖に……もういいです……」

怪我により弱ったプラチャオの一瞬の隙を突き、雅？は後退し再びその気配を消す。プラチャオから離れた、とまだ戦いの傷が浅いダニエルが突進を仕掛けようとしたが、すぐに雅？の存在はかき消えてしまい、位置が掴めずに失敗。

過剰摂取によって変態が進み手術ベースと近くなっているその顔、その強い印象により、カイゾクスズキの能力の視覚への影響力は多少は下がっている。だが、満身創痍の皆からすればそれでも知覚するのは難しい状況だ。

「……」

そんな、再び振り出しに戻ってしまったか、という空気中で、プラチャオのジエスチャーにより立ち上がった人間が一人。

「オイ、まさか」

それは、みんなごめんな！ と良い笑顔で親指を立てる鈴であった。

「キエエー……！」

直後周囲に響き渡る、お若いレディが出しているようなものではない、と軽く言うにはあまりに大きな、鳴き声と呼ぶのが正確な爆音。

その音量に居並ぶ皆は思わず耳を塞いでしまう。

大音量であるが、『一位』のような物理的破壊には程遠い、それぞれのものはタダの騒音でしかないそれは。

「いやー、夜間のこっさり輸送が多かったからこっちの能力はあんま訓練してなかったけど、訳に立つもんだな」

数メートル先の一点を軽く指差し、笑う鈴。

そこに迷わずプラチャオは突撃し、そこにいる見えない存在を捕え、地面に抑え込む。

鳥類はその多くが昼間に活動する。それは、一般的に呼ばれる鳥目、という迷信ではなく、単に夜より昼の方が見通しが効き、危機回避や獲物の発見に有利だからである。

しかし、夜に活動する鳥も確かに存在する。最も有名なのは、フクロウ。夜の闇をもともしない視力と高い聴力を持つ彼らは、夜間活動に適応しているのだ。

彼女、鈴の手術ベース『アブラヨタカ』も、フクロウと同じ夜行性

の鳥である。

昼は羽を休め、夜に餌を求めて飛行する。

しかし、決定的な差異が、一つ。

それは、暗闇での探知の手段。彼らは、光の射さない洞窟の中に居を構えている。突き出た岩、同族、視覚に頼れない環境で、どのようにそれを回避するのか。それは。

『エコロケーション』。コウモリと同じく、音波の反響による探知能力。

超音波を用いるコウモリとは違い、人間の可聴域の音を用いるそれはけたたましく、隠密性に欠けるが。

猛禽類のそれとはまた違うが洞窟内の多数の障害物を難なく回避する高い運動能力と、その身とは裏腹に果実を食らう食性から、それに問題は無い。

たとえば化学物質による欺瞞を行っていても、物質的な存在として在る以上、その位置情報を把握する事はできるのである。

「……気を失ってる、か……っ……」

「ま、取りあえずは……っっておいプラチャオ!？」

気絶して取り押さえられた雅?を抱き上げようとしたプラチャオ。しかし、酷い出血による目眩か、ふらりと倒れこんでしまう。

慌てて駆け寄る鈴と班員、襲撃組。

ひとまずの脅威は排除できた。しかし、基地の状態は不明なまま。どうしたものか、と考え込む健吾。

「……ザザ……聞こえるか……」

そんな健吾の耳に入ってくるのは、突然の音。

それは、健吾の隊服のポケットに入っていた通信機であった。

第四班襲撃時には強力な通信設備を持っているであろう敵の事を考え、無線封鎖を行っていたのだ。

だが、今の脱出時にはそれも関係無い。しかし、こちらと通信できないという事は、まだ基地が生きているのか、と健吾は通信機を取り出

し、耳に当てる。

「はい、こちらアネックス支援計画部隊第二班」

この無線の相手が、何者であるのかはまだわからない。だから、あまり詳しい情報を語る事は避けた方がいいだろう、と最低限の情報のみを伝える健吾。

「その声、健吾か」

そこで通信が安定したのか、はつきりとした声が届く。その声を聞き、健吾は。

「班長!？」

何だ何だ、という周りの目もある中で、思わず大声をあげてしまった。

### —— 第二班宇宙艦

「へえ……第四班の班長がねえ」

足で球状の機械、脱出ポッドを弄びながら、エレオノーラは俊輝と静香の話を楽し気に聞いていた。

何を考えているのかわからない、と俊輝はエレオノーラに対し油断する事なく、言葉と情報を選んで会話を進めていた。

裏第四班と交戦し、班長の正体がこちら側の隊員であった事。戦闘中にテラフォーマーの襲撃に遭い、一時的に手を組む形で皆はその場を離れたが、自分達は色々とあつてはくれた、という事。

それらを聞き、エレオノーラは表情を変える事はなかった。

「……何かが気になるのかしら?」

わざとらしくエレオノーラは二人に問う。

「その脱出ポッドは……」

「ああ、この宇宙艦の備品よ。これ一つだけ、何とか無事だったみたいね」

各国の宇宙艦には、それぞれ脱出ポッドが3つ備え付けられている。重量の問題があるため、小型のものが。

これがあれば、この火星から脱出する事が可能だ。しかし。

「制限重量1335kg、だそうよ?。しよっぱい数字ですこと」

薄暗い光を瞳の奥に湛え、エレオノーラは足で脱出ポッドをつつく。

それを聞き、俊輝と静香の表情は、暗く沈む。

「ま、そういうワケだから、お二人には別の宇宙艦を探してもらおうかしら」

まるで当然であるかのように言い、ポッドの入口を開くエレオノーラ。

わかっているのだ、二人が、自身に抵抗などできようもない事を。

135kg。何という、不幸な、悪意に満ちた神の悪戯だろうか。80kg前後の俊輝と、50kg無いくらいの静香。二人ならば、ちゃんと乗る事ができる。だが、エレオノーラの体重は110kg。手足は年のせいもあり細いが、それでも各所に付いた筋肉と何よりもそのやたらと高い身長による重量。彼女より3cm身長の高いアネックス計画第四班班長、劉の体重が99kgである事を考えると、何やら恐ろしいものがあるような気もするが、とにかく重たい。

「……………」

エレオノーラと静香の組み合わせでも、制限重量はオーバーしてしまう。つまりそれは、俊輝にとって次善の選択さえも取る事はできない、という事。

「第六班の班長さん……頼みが、ある」

「何かしら？」

宇宙艦が破壊されている、というのが何故なのか、それは俊輝達にもわからない事であった。

第二班が他と合流するために艦を離れた時には、もちろんそんな事はしていないからだ。

したのは情報の消去のみ。この星からの脱出手段をわざわざ潰すようなマネはするはずもない。

何かの意思が、蠢いている。

だが、今はそれを考えても仕方の無い事。

ここで争う意味は、無い。

……無い、はずだった。

俊輝は一步前が出る。静香も、それに合わせて、震えながらも。

「そこを退いてくれ……俺は、俺達は、帰らなきゃいけないんだ！」  
俊輝の脳裏に浮かぶのは、笑顔で自分を送り出してくれた、友の顔。  
見捨ててしまった、と考えていた。今でも、その考えは変わらない。  
だが。

拓也は、生きろ、と自分と静香に言ったのだ。  
それを、阻まれるならば。

たとえ、相手が同じ地球の為に戦った、計画の参加者、その頂点に  
立つ一人だとしても。

それが、味方の指揮官に牙を剥いた裏切り者と後ろ指を差される事  
になったとしても。

その全てが、無意味なものであったのだとしても。

「人間の誇り、などと偉そうな事を言うつもりも無い……悲劇の主人  
公ぶるつもりも無い……」

「ふ……うふふふ……！　　いいわあ……その顔……久しぶりに……  
燃えちやうわねえ！」

上品な仕草の中に、ケタケタという狂気に取りつかれたような笑い  
声を上げながら、エレオノーラは脱出ポッドから一步離れる。

その腰を突き破り姿を見せるのは、四本の触手と二本の触腕。その  
左腕は、黒く変色していく。

それに相對するのは、腕から生えた牙と、背から生えた羽を構える  
一組の男女。

同族同士の食らい合い、不毛な殺し合いである事など、承知の上。

「ただの生物として、生を勝ち取ってやる……！」

それは、あまりにも普遍的で、当然の行為。

ただの、生存競争、と呼べるものであった。

## 第53話 哀れな神の出来そこない

——大儀に逆らおうと思わない、それを守る事に勝手な自己満足とわずかな陶酔を覚える程度には自分は善良な人間で、でもそれを貫き通しながら自分の意思を果たす、それができる程の力を自分は持っている事と同時に知っていた。

自分が最初に人を殺したのは、14歳の時だった。

『なやがら事件』、という言葉に聞き覚えはあるだろうか。2614年に平和な平和な先進国、日本で起きた集団殺人事件だ。

事の流れを簡単に説明すれば、土砂崩れで孤立した小さな町の一区画で起きた、カルト宗教の暴走、ただそれだけ。

大昔のように食糧不足や外部との通信途絶、など起こるはずもなく、三日もすれば外部への道が開ける、そんな、俺を含めた住民たちも特に危機感も抱いていない時に起こった事件だった。

俺の家は東北地方の某県某市、とだけ言っておこう、その商店街のただ中で八百屋を営んでいた。

生活はお世辞にも裕福とは言い難かった。

近くのスーパーで買い物すれば手早く、もしそうでなくても通販で全国どこでも世界中の物品が手に入る、そんな時代に特に品質が高いわけでも変わったものがあるでもない辺鄙な土地の商店街が賑わうわけもなく。でも、両親はそんな場所に愛着を感じていたのか、事あるごとに俺にこの八百屋を継げ、と言ってきた。

そんな俺は、よく店の手伝いを抜け出て幼馴染と遊びに行っていた。遊びに行っていた、などとは言うがカラオケだとかボーリングだとかそんな若者の遊び場は田舎も田舎の町には無く。虫を捕まえて川でそれを餌に魚を釣ったり、山で友人達と鬼ごっこだの何だのをしたり、現代の都会っ子からすれば考えられないくらい原始的な内容だ。

まあ、都会の遊びなんて知らない自分達にはそれは何よりも楽しい

ものであったし、色々な遊びを知っている今でもそれを思い出して懐かしい、もう一度やってみたい、と感慨に浸る時もある。

平日は学業、生徒数数十人の今にも潰れそうな学校に通って一日を過ごし。

それが休みの日には朝には客の来ない店を手伝い、夕方には質素な夕食を食べて次の日の仕込みや学校の為に早くに眠る。

とはいっても店の手伝いばかりはごめんなので抜け出して同じく家を抜け出して来た友人達と遊ぶ。

そのようにして、日常を過ごしして来た。

ある日、北国の方の冬場には珍しく大雨が降ったその次の日の事だ、轟音で目が覚めた。

慌てて家の外に出ると、そこには俺と同じく道路に出て騒ぐ大人たち。

近くの山で土砂崩れが起きて、町への道が埋まってしまった。話し合っていたのは、そんな内容だ。

さらには、その時に隣町から商品を運んでいたいくつかの車が運悪く巻き込まれて、現在捜索活動が町側主体で行われているらしい。

それもそうだ、と思った。だって、この小さな町のさらに端っこの村と呼べるような規模の所に、非常事態に行方不明者の捜索ができるような組織があるわけがないのだから。あるとすれば駐在さんがいっつも欠伸をしている交番くらいだ。

ふと気になって、幼馴染の家に行ってみた。前日に、今は親が家にいないから遊びに出ても怒られないんだ、と笑っていたんだ。それが、少し気になった。それだけの理由だ。

「静香？」

鍵のかかかっていない入口をノックするが、返答は無し。

鍵がかかかっていない、という事は、流石に無人ではないだろうとドアを開け、中に入った。

電気が付いていない、薄暗い家の中。古い木造住宅特有の人によっては避けたがる独特の匂い。



そんな、家の奥の部屋、その隅で。  
幼馴染、静香は、目を伏せてしやがみこんでいた。

……理由は状況から察していた。俺は、きつとあの人達は無事だよ、帰って来るよ、と慰めようとして。

そこで、部屋の中にもう一つ人影がある事に気付いた。

修道服、だろうか。そのような衣装を身に着けた男。そいつが、静香にじりじりと近づいていた。

その服装には見覚えがあった。町の外れに集会所を持っている、新興宗教の信者が着ているものだった。

あまり勧誘などはしてこなかったので住民には受け入れられていたが、新たな神の誕生が云々、などと傍目から聞いていてもちよつと危ない連中だったので関わろうとも思わない、そんな感じの関係性だ。

「人ん家で何してやがる」

「しゅんき……？へ、この人誰……？」

そこでようやく俺とソイツに気付いたのか、顔を上げた静香。その目には、怯えの色が浮かんでいた。

「……お許しください、神の誕生には、多くの尊い犠牲が付き物なのです」

ソイツは言うや否や静香に向かって駆け寄り、その首を両手で掴み、締め上げた。

俺は当然、それを止める為に駆け寄り――

「あゝあゝあゝあゝあゝ！」

『薬』の力によって無理やり体を動かせる状態まで回復し、俊輝はエレオノーラに躍りかかる。

本来ならば、勝ち目の薄い相手。お互いの負傷、体力の消耗を勘案しても、その差は縮まるどころか開くばかり。

その無謀な真正面からの突撃を、エレオノーラは同じく真正面から受け止める。

『フンボルトイカ』の四本の触手と二本の触腕、その全てを正面への防御に回し、堅牢なカラストンビへと変質した左腕は備えとして構えておく。

エレオノーラにとって、これはただの消化試合のようなものだった。相手は高位ランカー二人と言えど疲弊しきっており、一人に至ってはその専用装備が見えない。どこかで失ったのだろう、と判断する。ただ、自身の消耗が激しい事も同時にエレオノーラは自覚していた。

同率四位の剛大と同じく、広域制圧と呼べるような能力は持たないベース生物で、数十人の『裏切り者』と、それ以上のテラフォーマーと交戦し、それをことごとく物言わぬ骸へと変えてきた。

ただ、それによって溜まった疲弊と、複数との同時交戦での、いくらか人を外れた、と言われるような能力でも避けられない負傷。

全力を出せる状態であれば、今の傷だらけの俊輝が反応する事もできないまま静香の首をへし折る事が可能だ。

だが、現状では静香の専用装備を抜いた際の脅威度の低さと自身がそこまで俊敏に動けない状態での失敗した時のリスク。それらから、エレオノーラは正面からの迎撃を選択する。

「とんだ『裏切り者』ね、お二人さん」

振るわれる大顎の刃、それを一本の触手でいなし、残り三本の触手で手足の拘束を試みる。

イカの触手の獲物への吸着の仕組み、細かい歯を食い込ませるそれは変態した昆虫型の甲皮に対しては効果が薄い、吸着させずとも力任せに抑え込む事は可能だ。

「……何とでも言え」

筋力、運動、再生において高い能力を持つ頭足類の、αMO手術によつてさらに強化された力。

接近戦の手段しか持たず、再生能力を持つ相手に確実に有効なダ

メージを与えられる毒も持たない俊輝が相手をするには、相性も悪い相手。

しかし、応戦した触手は空を切る。大顎による一撃をいなされた俊輝が地に這いつくばるかの勢いで姿勢を低くしたのだ。

外れはしたが、この体勢では回避はできても反撃に素早く転じる事は難しいはずとエレオノーラは考え、再度触手による拘束を試みる。

「……あら？」

下方にいる俊輝を指して軌道を変え襲い掛かる触手。一方的な攻勢。しかし、エレオノーラの直感、最大の防御と言つてもいいその危機予測が反応する。

それに従い、触腕をクロスさせる形で盾とし、エレオノーラは一步後ろに下がる。

その瞬間、触腕に鋭い刃が食い込み血が流れ出す感触。

「ちっ」

深い傷にはならなかったと把握し、俊輝は素早く身をかわして追撃を避ける。

触手の攻撃は、俊輝を捕える事なく地面を叩いていた。この姿勢で、正面に踏み込み触腕を切りつけたというのか。エレオノーラは疑問を覚えるが、俊輝が先ほどこいた地点を見て、すぐにその答えを得る。

「陸上競技みたいねえ」

地面の一部から岩が突き出て、盛り上がっていたのだ。これを蹴つて、低い姿勢から加速して触腕の防衛圏内まで踏み込んできたのだと。

でも、それだけ。その程度の攻撃が、何だと言うのだろうか。

再生能力を持つ『フンボルトイカ』のMO能力の前で、切断に至らない切り傷を付けるだけの斬撃が、どれほどのものだと言うのだろうか。

強気に出ても問題無い、と判断し、エレオノーラはその左腕、硬質化した部位を俊輝に叩き付けようと振り下ろした。

「……？」

が、その動きは、ぴたりと止まる。触腕が、思うように動かないの

だ。

その違和感により、一瞬だが硬直した体。本来ならば、常人であれば見逃すような一瞬の隙。

「悪いな、俺も多分、アンタみたいな化け物って程じゃないが……ただの人間、でもない」

先端を前線に押し出しているも、その根本である太い部分の触手は本体の腰から伸び、敵が直に体に接触するのを遮るようにその周囲を守っている。だが、うねる触手の防衛網、その微かな隙間を突き、鋭利な刃がエレオノーラの喉笛に食らいつく。

「ぎ……い……」

表面を切り裂き、首に食い込む刃。

口から血を吐きながら、エレオノーラは歪んだ笑みを浮かべる。

その視界、展開した触手の隙間から見えるのは、眼前の、弱り切っている敵。その目は、彼女と同じ、狂気の光を帯びていた。

何度も響く、グチャリ、という液体状のものも付属しているものを殴っているかのような鈍い音。

それは、数分ほど続いたのだろうか。

「……うう……ごめんね、俊輝……」

「お前は何も悪くない……悪いのは……」

俺の目の前には、泣きじやくる静香。

そして、血まみれになって横たわる、もう動かない修道服の男。その表情は苦痛に歪んでいるが、酷い殴打の跡とそれによる出血で殆ど見えなくなっている程だ。

何故、こんな事になってしまったのだろうか。……などとは言えない。簡単な事だ。静香に掴みかかったコイツを俺は引きはがし、ひたすら殴り続けた。勿論、相手の抵抗も激しく、俺も所々に傷を負ってしまったが、それを気にしてられるような状況では無く。

「まあ……いくらこんな状況だったとしても正当防衛、って言えるか

は微妙だよなあ……」

こうでもしないと、今の自分では止められないと思つてやった事だ。相手の正気を失った目を見て、そう判断したんだ。

自分が一人の人生を終わらせた。心臓を鷲掴みにされたような動悸と、得体のしれない吐き気。ああ、これが人を殺す、という事なのか。

俺は、人の道を外れた行為をしてしまった。きっと、その報いを受ける事になるのだろう。

「良かった……よかったよお……俊輝、生きてる……生きてるんだよね……」

全てにおいて後悔していない、と言えば嘘になつてしまうだろう。これから何年かは知らないが人生の時間を世間の表舞台から追放されて過ごす事になる。それは今考えてもぞつとする話であるし、子どもだった俺からすれば、なおさらだろう。

ただ、それでも、満足していた。最初に狙われた自分ではなく、俺が生きている事に対して安心の涙を流してくれる、そんな人を守れた事。そこは、紛れもない事実であつたから。

「……とりあえず、大人に知らせるか……嘘偽り無く、な」

肉体的にも精神的にも疲弊し座り込んでいた俺は、何とか立ち上がり、家の玄関の方を向いた……んだつたか。

そこで、俺は硬直したんだ。

「素晴らしい」

「素晴らしい」

「君こそが、次の『神の卵』に相応しい」

「っ!?!」

そこには、十人はいようか、という修道服の連中が立っていた。

俺の背を、冷たい感覚が通り抜ける。

ダメだ。自分も静香も、逃げられるような状態じゃない。いや、それよりも。

そいつらは、死んだ仲間と殺した俺、それを見て、歓喜の笑みを浮かべていたのだから。

……その後の展開は、俺の想像とは全く異なるものだった。奴らは俺達に手を出す事をせず、死体を片付けただけで去っていった。

その後の事は、あまり思い出したくない。結局静香の両親が亡くなっていてあいつがどれだけ苦しんでいたとか、その日両親が家にいなかった子どもの多くが、正体不明の犯人によって殺害されたとか、思い出す意味もなければいい思い出でもないものばかりだ。

俺と静香も証言し、あの宗教団体の事も話したのだが、町にいたそいつらの集会所はもぬけの空、俺がその団体の一人を殺した、という事も言ったのだが、問題の死体が見つからないから、という事でうやむやになった。本来ならばそんな事はあり得ないはずなのだが、今思えば何らかの圧力でもあったのかもしれない。

こうして、俺達の日常は多くの犠牲を払って戻って来た……と思っていた。

土砂崩れに巻き込まれて亡くなった人が数人、事件の日に一人で家にいて殺害された子どもが14人。奴らの目的は何なのか、子どもを狙って殺して何がしたかったのか、わからない。

ただ、俺の日常は、戻ってこなかった。その日から、俺は幾度となく何者かに命を狙われるようになったからだ。

……思春期にありがちな空想だとか事件で心を病んでしまつて妄想に取りつかれている、とかではない。

どちらかと言えば、そうだった方が幸せだっただろう。

夜に突然、自分の部屋に怪しい物体が投げ込まれた。慌てて部屋を逃げ出し、後にそれは時限装置で毒ガスが放出されるものであった事がわかった。通り魔に襲われた事が不自然な回数ある。夜中に、刃物を持った不審者に部屋に侵入されそうになった。もつと挙げてもし

いが、キリが無いからこのくらいにしておこう。

……そのたびに警察に相談したが、何だか煮え切らない様子で、十分な対処と呼べるような事はしてもらえなかった。

だから、俺は故郷を出る事に決めただ。

『9位』。それを、最初に不自然だと思ったのは、彼の今計画での上司、剛大だった。

当然の事であるが、『裏マーズ・ランキング』上位ランカーの人間にはそれ相応の理由がある。『ベース生物の強さ』にそれを依存する、1位、2位、3位、8位。『本人の強さ』にベース能力が上乘せされている、4位二人、6位、7位。俊輝の9位は、後者に分類される。

本人の強さ、というものは当然ながら本人の経歴で決まっていると言えよう。時には命を張る事もある警察組織の実戦で鍛え上げた剛大。裏社会で数えきれない程の戦いを潜り抜けてきたエレオノーラ。軍人として人殺しも含んだ訓練を積んでいる欣とチャーリー。

しかし、剛大が見た己の率いる人員のデータで、俊輝にはそのような強さの根拠となる経歴、というものが見つからなかったのだ。

ごく一般的な家庭に生まれ、中学生の頃に事件に巻き込まれ、それが元で故郷を出て（本人は両親と将来の方針で対立した、と語っていたが）、人間トラブルだの詐欺だの不幸に見舞われ、金を稼ぐ為にU—NASAへとやって来て計画への参加を希望した。

その経歴は、多少不幸な所はあれどごく普通の一般人だ。それが、何故このような高ランクとなっているのだろうか。手術ベースとなる生物も、甲虫の甲皮による守りと大顎が腕に形成される、特殊な能力があるわけでもないシンプルなもの。訓練での飲み込みは異様に早かったが、そこにも理由があるのか。

中学時代に巻き込まれた事件、に何かがあるのかとも考えその情報を取り寄せたのだが、警察のデータにも何故か詳しいものは保管されていないかった。

上司として何故？ と疑問に思った剛大。いずれ袂を分かたねばならない敵としてそのデータを集めていた拓也。彼らが探しても得

られなかった、その答えは。

「素晴らしい闘争心ね、同胞さん」

あと少し腕を振る事ができれば、その首を完全に切り落とせていただろう。

だが、それを許す程、俊輝の前に立つ怪物は甘くは無い。触手が動き、その隙間を完全に塞ぐ。

エレオノーラの首に食い込んでいたその刃を引き戻す事はできず、完全に触手によって絡め取られた状態。

そこから行う事といえば、一つ。

「一つ！」

その腕に強い圧力が加えられ、骨が碎ける感覚に苦悶の表情を浮かべる俊輝。愉悦の笑みを浮かべるエレオノーラ。

「降伏なさい。今そうすれば、命だけは助けてあげましょう。私が帰還した後も、この件に関しては国へは報告しないわ」

ふと、エレオノーラの声色が変わる。先ほどまでの戦闘の熱狂に浸っていたものではなく、落ち着いていた、優しささえも感じられるのではないか、という穏やかな調子。

その内容も、冷酷な戦闘狂である普段の彼女を知るものからすれば、考え難いものだ。

要するに、この戦闘そのものを無かった事としよう、という提案であつた。

戦闘のペースは完全にエレオノーラの方にある。即ち、これはエレオノーラの温情だ。

「……多分、アンタなりに考えがあつてそう言つてくれてるんだと思う」

俊輝の体を責める、重たい疲弊。戦闘によって折られた腕。

もういいだろう、休め、と彼の体は訴えかける。

配慮なのか、触手の拘束を解くエレオノーラ。



「でもな、もう、後戻りできないんだ、何もかも」

答えとして、その右腕の大顎を、俊輝は振り上げた。

背後では友が戦い続けている。後ろには、満身創痍の守るべき人を抱えている。

拓也は、この第二班の宇宙艦で助かる、と思ったからこそ、自分達を送り出してくれた。

……だからもう、退く事なんてできるはずもない。

「素晴らしい」

その選択を愚かと笑うでもなく、戦いを続けられる、という喜びを表に見せるでもなく、ただ一言、呟く。

それは、その瞳にかつての自分と同じものを見出したから。

死にたくない、と。

そして、再度両者は衝突する。俊輝はまだ無事な右腕を、エレオノーラはその左腕を振るい、正面からぶつかり合う。

その戦いは、次の局面へと進もうとしていた。

## 第54話 善と悪の彼岸にて

左腕を折られた。動かそうと思えば動かせるが、それが戦闘の役に立つか、と言われれば微妙なところで、フェイントくらいにしか使えないし、恐らく相手はそのようなものに引つかかりはしないだろう。

そう考え、俊輝は再度の攻撃を試みる。

残った右腕を潰されてしまえば、相手への有効打は完全に無くなる。

「さあ、どうするのかしら」

エレオノーラはその向かってくる俊輝を見て、特に構える事もしない。

お互いの距離は、先ほどの攻防があつた事もあり近い。俊輝が二歩と踏み込めば両者の腕が相手の体に届く所まで近づく。

触手が防衛にやってこない。敵の意図は掴めなかったが、俊輝は好機だと考え、迷いなく踏み込む。

右腕を振るい、狙うはエレオノーラの心臓。傷がまだ完全には塞がっていない首は、警戒されているだろう。ならば、正々堂々と胴体を狙うのみ。

再生能力を持つ相手と言えど、臓器を再生しようと思えば大きな負担がかかるのは必然。

本当ならば狙うべきは能力制御の中枢、アルファモザイクオーガン  $\alpha$  M O。これが機能を失えば、 $\alpha$  M O手術被術者は変態が制御できなくなり全身のベース生物の因子が暴走、仮にそうならなくても、ベース生物の因子に食われた人体部分はそのまま衰弱し、どちらにせよ死に至る。

だが、エレオノーラの  $\alpha$  M O の位置を俊輝は知らない。自分の M O の位置は訓練の際に特に守るべき重要な臓器だ、という事で教わっていたが、エレオノーラの、昆虫型とは大きく異なる軟体動物型のものが果たして同じ位置にあるのか、という事は定かではない。

臓物を狙った一撃。それを敢行するならば、心臓か M O を外すわけにはいかない。さらには、できる限り浅く、かつ目標の臓器を再生で

きない程に破壊する必要がある。

それは、敵の体に深く刃を食い込ませる事、それは逆に、大きな隙を晒す事を意味するからである。

特に、一瞬で絶命する事が望めないタフネスを誇るエレオノーラが相手であれば、例えば心臓やαMOを破壊しても刃を体から引き抜いて離脱する、それに手間取っている隙に反撃で首を刎ねられる、触手で拘束され全身の骨肉を砕かれる末路を辿る事は想像に容易い。

「オラア！」

荒い声と共に、俊輝はエレオノーラが迎撃に繰り出したフンボルトイカの嘴が発現している左腕を膝で蹴り上げる。

同時に、背後から怒涛の如く襲い来る四本の触手を視界の端に映るエレオノーラの腰から伸びる触手の根本側の部分の動きから認識し、この速度なら間に合う、と俊輝はエレオノーラの左胸に向けて、その刃を繰り出し。

ガギン、という音が響いた。

「ぎあんねん♪」

「——ッ!？」

その刃は、エレオノーラの左胸に突き立った。道筋も完璧で、肋骨と肋骨の隙間を最小限刃が潜り抜けられる程度に肋骨の端を砕き、最低限の運動エネルギーを失っただけで、心臓にその一撃を加えた。はずだった。

しかし、突如としてエレオノーラの体内に、黒い影が浮かび上がったのだ。心臓を含む、胸から腹にかけて現れた謎の影。肋骨の内部に滑りこんだ俊輝の刃は、そこで何か硬質の物体に接触し、勢いを失った。

それと同時に、俊輝はエレオノーラの体内、右胸からその黒い影を透かすようにしてその奥から鈍い赤の光が漏れ出ているのを見た。

何が起こったのかはわからない。攻撃は失敗し、背後からは触手が迫る。それが、目の前の現実だ。

「……使いたく、なかった」

絶体絶命。が、俊輝は背後の触手を見る事は無く、その懐から、あ  
るものを取り出す。

そして。

「——あら？」

エレオノーラは、硬化化していない右腕を俊輝の首に向かって伸ば  
していた。

が、今の弱っている状態のエレオノーラでも十分に間に合ったはず  
のその腕は、突如として動かなくなった。

その腕によって、わずかであるが己の視界の一部が塞がっていた  
事。

それが、例え彼の専用装備、カミキリの鉤爪を強化する金属の籠手  
を装備していたとしても、折れていて致命傷など望む事もできないで  
あろう、という油断。

俊輝の両腕の刃に微小な黄色い粉が擦りつけられていた事に気付  
かなかった不注意。

本来ならばそれらの脅威を察知できるはずの、極まった危機予測能  
力が度重なる戦いによる傷と疲弊によって上手く働いていなかった  
事。

その傷を無視して無理矢理戦闘を継続するための技能、脳内麻薬の  
人為的な分泌による痛覚麻痺によって、その痛みがエレオノーラの脳  
に認識されなかった事。

いくつもの偶然と必然が重なったこの状況で。

エレオノーラの腹と下腹部の間、黒の影が体内を覆っていない区画  
に、一本の楔が突き刺さっていた。

「持つて帰りたいかったんだけど……な」

それは、俊輝が拓也との戦闘で拾った、余りだった。そして、俊輝が唯一持つ、彼の形見でもあった。

何かが腹に刺さった。痛みを感じずとも、それに続く異物感によって何かをされた事に気付いたエレオノーラは、右腕を無理やりに動かしてそれを排除しようとする。

「おお……おおお……！」

俊輝はその楔の後端、エレオノーラの体内に突き立ったそのわずかに露出している部分を、専用装備によって加えられる力で握りつぶした。

本来ならば電気信管で作用するそれが無理やり作動し、エレオノーラの体内で爆裂する。

それは軽いものであったが、内臓の一部が損傷し、衝撃でエレオノーラは後退する。

その隙を逃さず、俊輝は追撃……ではなく、制御を一瞬失った触手を振り払い、その射程から離脱する。

しかしそこまで動いて限界が来たのか、地に片膝を突く。

「ああ……アア……随分と……やってくれるのねえ……！」

俊輝が離脱した瞬間、その触手の全てが俊輝が一瞬前に存在していた地点に殺到する。

逃した、という事を理解し再び触手が本体へと引きもどされ、触手によって俊輝からは姿が見えづらくなっていたエレオノーラの姿がはつきりと浮かび上がる。

その腹は無残にも爆発によって裂け、焼け焦げた腸がその一部を晒している。

心臓やαMOといった器官は体内の黒い影に守られているのか損傷した様子は無いが、それでも重傷といえる状態。再生こそ始まっているが、あまり速くはない。

「ふふふ……ほほほほー」

だが、その目に宿る闘争心と狂気は消えず。むしろさらに昂った様子でエレオノーラはその触手と両腕、その全てを俊輝へと向けて駆ける。

「悪い……静香」

目の前に迫る触手と魔物。精根尽き果てた、という俊輝が口にしたのは、謝罪だった。

「ううん……一緒に帰ろう、って言ったから」

エレオノーラの触手と両腕が標的を捕え、その力を遺憾なく発揮する。

計六本の触手と触腕は巻き付き、その両腕は怪力によって容赦無く標的を砕く。

しかし、それが振るわれたのは、俊輝ではなく。

突然彼の前に飛び出してその盾となった、静香の翼だった。

「なあ俊輝、例えばの話だ」

俺が外で黄昏ていると、拓也が声をかけてきた。

出発を目前に控えた日の夜事だっただろうか。

正直、旅立つのが怖かった。

覚悟は決めたはずだ。金を稼いで、己の夢、こんな粗暴な人間には似合わないかもしれないけど、物理学者を目指して大学に入る。それも、例の連中が追ってこられないであろう、海外に渡って。

その為に、成功確率36%の手術を潜り抜けた。苛酷な戦闘訓練を

繰り広げてきた。

でも、今更になって恐怖を覚えるようになってしまった。

火星で命を落とす、故郷どころか同じ星ですらない場所で生を終える、それがたまらなく恐ろしく思えてきた。

「俺と静香、お前が死にそうになった時、誰を優先する」

何て質問をしやがるんだコイツは。と思ったが、よくよく考えてみれば。

自分と友達と、えーつと……えーつと……うん、もしそうだったら優先順位をどうするか、か。

確かに、実際にそうなる事もあるかもな、と取りあえず適当に返事をしてみた。

「まず俺かな！ 次に静香！ そして拓也は放置だ！」

「泣きたい」

なんだかショックを受けている様子の拓也に、俺は笑いかけ、冗談だよ、と笑ったんだ。

……それから、真面目に考えて、答えたんだっただけ。

「そうだな、俺は死にたくない死にたくない、つて最後まで泣き喚いで、でも結局お前と静香逃がして死ぬと思う……たぶん、味方を蹴落としても、だ」

「……そっか、わかった」

自分は善人か、と言われたら、基本的にはそうだろう、と答える。でも、大切な人を守る為に罪の無い人を殺せるか？ と聞かれたら、俺はきつと躊躇い無く首を縦に振るだろう。嫌だ嫌だ言いながら、結局自分含めた全てを切り捨てても大切な人を優先するだろう。死の間際に後悔するかもしれないけど。……善人じゃねえなこれ。

俺の答えを聞いて、寂しげな表情をして、拓也はそのままどこかに行ってしまった。

俺が、あそこで、別の答えを言っていたら、別の未来があったのだろうか。

答えは、考えても出てこなかった。

「しまっ……」

そこで初めて、エレオノーラの顔に動揺の表情が浮かぶ。触手の動きを止め、手を引き戻そうとするが、時既に遅し。

その触手は捉えた静香の左の翼を握り潰し、両腕による一撃もまた同じく、静香の左翼を骨ごと砕き折る。

『ズグロモリモズ』は攻撃的に毒を用いる生物ではない。そのため、MO手術のベース生物として戦闘で有効活用するには専用装備による補助が必要となる。

その毒が含まれるのは、羽毛と筋肉。捕食者に襲われて初めて発揮されるその毒、『ホモバトラコトキシン』は。

毒矢の材料として使用される程の強烈な痺れを症状として持っている。

「……！……！」

左の翼、即ち変態前の左腕にあたる部位を原型を留めないまでに折り曲げられた激痛。それに苦痛の涙を流しながらも、静香はエレオノーラを睨む。

一方の捕食者は。その触手は麻痺によって小刻みに痙攣するだけでその動きを止め、両腕も同じ状態となっている。

触手には先ほど俊輝が付けた切り傷が。そこから毒が浸透し、体にもまで達すれば。

「……私達の、勝ちです」

「何と……何という……」

ボトボト、という音と共に、エレオノーラの触手と触腕が根本から切り離され、地面に落ちる。

自切。本来ならばイカはその能力を持たないが、MO能力でタコとイカのハイブリッドであるエレオノーラならば、それも可能。



体への毒の周りは、これで遅らせられる。エレオノーラは、伏せる静香に向かって、その左脚を振り上げ。

「……させねえよ」

だが、その脚はエレオノーラの意味ではなく、重力によって地面に落ちる事となった。エレオノーラの体から切り離されるという形で。血を吐きながら、俊輝が起き上がる。

ぎちぎちぎち。歯ぎしりなのか、また別の音なのか。あらゆる感情がない交ぜになった笑みを浮かべ、エレオノーラは口を開き、それを閉じる。

歯に仕込んだ、体内の『薬』を使用する機械を起動するためのスイッチ。

再び触手を生成し、それで仕留める。今の体であれば一本二本が限界かもしれないが、死にぞこない二人を殺すのであれば、それだけで十分だ。

……触手は、生成されなかった。それどころか、他の変態箇所さえも発現せず、切断された右脚の再生すら始まらない。

「……コンピューターお婆ちゃん、つてかっこいいけどよ」

まさか。エレオノーラは、再生が終わらず、爆発によって無残に扱われた己の腹を見た。

その傷の、一部。破れた、腸。

「ハイテクに頼りすぎるのもアレだよな」

そこには、損傷してもはや機能を果たさない、薬を体内に散布する装置の残骸。

軟体動物型の薬。それは、腸内吸収。基本的に未来型の座薬によってなされるのである事を、俊輝は知識として知っていた。

エレオノーラは、戦闘前に変態する際に座薬など使っている様子は無かった。αMO手術による薬未使用時の変態を用いれば触手は生成できるが、薬使用時とくらべ大幅に劣るその変態で、しかも傷だらけの状態で立派な長さの触手と触腕が本来の数形成されるのは、不自

然だ。

ならば考えられるのは、腸内に仕込んだ何かによる直接摂取。それさえ、破壊できれば。

「ふふ……してやられた、という訳ね」

毒により触手を全て破棄する事を強制させられ。腹に大きな傷を受け、変態を封じられ。

「聞かせて、くれないかしら。貴方、そうまでして死にたくないの？大切な彼女さんを盾にしてまで？」

最後に聞いておきたい、とエレオノーラは口に溜まった血を地面に吐き、俊輝に問いかける。

「コイツを死なせたくは無い……その為なら俺は別に……と思ったさ……でも、俺も死んじやいけないんだ……」

「二人で一緒に生き残るって……そう決めたんです！そこを通してください！」

俊輝と静香が同時に言い、エレオノーラはその答えに目を細める。一步前に出るエレオノーラ。静香を守るように、俊輝はエレオノーラと相對した。

「そう……それも一つの答えなのかもね……じゃあ、死になさいな！」「アイツに託されたんだ、俺の命もこんな所で捨てられるか！」

動かないはずの左腕。既に変態が解け人間のものに戻ったそれを振りかざし、エレオノーラは一瞬で間合いを詰め、俊輝の目を突くようにそれを繰り出す。同時に俊輝も、エレオノーラに向けてその右腕を繰り出す。

ずぶりという生々しい音と共に、俊輝の左目に、それは突き刺さる。エレオノーラの人外じみた腕力、それはそこで止まる事なく、頭蓋まで……

「……ああ……全く、気に入らないわねえ……」

達するその刹那、エレオノーラの右眼に深々と突き刺さった俊輝の刃。それを受け、エレオノーラは崩れ落ちる。

「行こう、静香」

「……うん」

その、もはや数歩歩くのがやっとという体を引きずり、俊輝と静香は脱出ポッドへと足を踏み入れる。

簡易なボタン操作。それさえ行うのがやっと、という体で、二人はその中に倒れこむ。

ハッチが閉まり、空へと飛び立っていく脱出ポッド。

王子様とお姫様が結ばれるハッピーエンドなどでは勿論なければ、主人公の死で終えるバッドエンドというわけでもない。

アネックス計画の支援、つまりは『裏切り者』の足止めという任務を命懸けでこなし、最終的には己が自分と守りたいものの為に他国のリーダーを打ち倒すという、正義などというものではなく己自身が『裏切り者』の汚名を背負い、何かを得るわけでもなく何もかもがこぼれ落ち失われていく中で少しだけを掬い取り、ただ生き残れた一人の青年の、それだけの物語。

その物語の第一章は、こうして幕を閉じたのだった。

「全くやれやれ……最近の若い子は本当に……」

この陰謀と野望渦巻く星から脱出する第一号を霞む視界で眺めながら、エレオノーラは地面に倒れこんでいた。

片目片足を失い、臓物がはみ出るような傷を負ったまま再生はままならない状態。このまま栄養補給をしなければ、近いうちに死に至るだろう。

自身を打ち破った少年。

死にたくない、という、自分と同じ願いを抱えてここまで来て、自

分に戦いを挑んできた。

それが、『裏切り者』という不名誉な称号を被る事を知った上で。ならば、彼は悪人だったのか、善人であれば誇り高い死を選ぶ事が正解だったのか、そう思うと、エレオノーラは答えを返す事ができない。

彼は、守りたい人がいると言っていた。その上で、自分も死にたくないのだと。

成程、彼は大切な人のみならず他人皆を守り抜くヒーローでもなければ、己だけ生き残ればそれでいい、他者は全て踏みつぶすモノだ、という悪人でもなく。

何とも中途半端ね、と血の混じった笑いを浮かべ、エレオノーラは段々と小さくなっていく脱出ポッドをもう一度見つめる。

「でも」

ただ、共に生きたいと思う人間もこの人の為なら命を捨てられる、という人間もおらず、ただ一人で死にたくない、と戦い続け人間という生物を外れる段階まで来てしまった、それどころか自身の命でさえどうでもいい、という結論に至った自分の人生を思い返し。

そして何より、自らが誇っていた戦いの技能で敗れた事を思い。

「ちよつとだけ、悔しいわねえ……」

間近に迫るテラフォーマーの大群、その足音を聞きながら、エレオノーラは一つ、溜息を付いた。

## 幕間 ある施設にて

「……………んふふ……………今日も絶好調です……………」

真つ白な壁に覆われた、無機質な部屋。その内にあるのは、一つのベッドと本棚。それが、少女の世界の全てであった。

スピーカーから流れてくる音声、それに従い、『能力』を用いた訓練を行い、その結果に満足し、少女は得意げにその無い胸を張る。

「ふふ……………師匠、帰って来たらビツクリするでしょうね……………けふっ!？」

やはり何もない真つ白な天井を見て何処かに思いを馳せていた少女は、唐突に下を向き、よろめいた。倒れそうになる体を支える為に両手でつかんだのは、彼女の手足に刺さっている注射器、それを接続されている点滴用の装置。

「あ……………やっぱ調子、あんまりでしょうか」

ふらつく体を何とか支え、彼女は足元を見て少し声の調子を落とし、呟く。そこには、彼女が吐いた赤い液体が広がっていた。

「ねえ、師匠はいつ帰ってくるのですか？」

足元に広がる小さな血の池から目を離した少女の、不安と不満の入り混じった、質問。

それに、スピーカーからの答えは無かった。別に、一方通行というわけではない。少女の要望やその不安定な体調の変化を聞く為に、その声は外のオペレーターに届くようになっていた。

ただ、機密に関わる事であるため、そのオペレーターにも回答となる情報は知らされていなかったのだ。

——換気システムを起動します、鎮静薬を飲みなさい——

質問を無視したいいつもの命令。それに一つ息を付き、その通りにベッドの上に置かれた薬を飲む。

少女は、今の生活に不満があるわけではなかった。むしろ、自身の命を救ってくれていたこの状況には感謝していた。

少女はこの場所とは違うとある国の道具として扱われている人間であった。いつまで生きていられるかも不明瞭な、周囲の姉妹達が次々と死んでいくという環境で何とか生を繋いでいた。

そんなある日、少女の人生に転機が訪れる。少女は謎の手術を受ける事になったのだ。

説明もされず、勿論拒否権など無く、受けたその手術。成功確率が0.3%である事など伏せられた、いや、知らせる必要など無かったそれは当たり前のように失敗し、少女は自身の体の中が別の何かに食いつぶされるような地獄を味わった。

虫の息となり、後はただ死を待っただけとなった彼女はあっさりと捨てられ、自分と同じ手術を受けた、自分とは違う、しかしすぐ同じものになるであろう屍の山の中で、少女は苦痛にもがき苦しみながらその時を待っていた。

そんな彼女が救い出された、正確には利用価値を認められて他国のスパイに回収されて命を救われたのは、奇跡だったのだろう。

しかし、その肉体は常にその内に宿した生物の因子により侵食され、専用の薬品によつてそれを抑え込まねば命を繋ぐ事さえままならない状態。それでも彼女が価値を見出されたのは、その能力がそれだけ希少かつ強力なものである証左でもあった。

結局兵器として利用される事となった少女の日々は楽しい物とは言えなかった。能力が暴走する危険が常にあるため小さな部屋に隔離され、そこでずっと日々を過すごして来た。体調は徐々に悪化していき、血を吐く事も寝込む事も増えてきた。ただ、そんな彼女が生にしがみ付こうとした、一つの救いがあった。

「えへへ……師匠……いつ見てもかっこいいなあ……」

ベッドに寝ころび、本棚から取り出したアルバムを開いて少女は頬を緩ませる。

彼女の見ている写真は、二人の人間が映っているものだった。

今少女のいるこの部屋にて満面の笑みでピースをしている少女と、その横に立っている、ぎこちないながらも何とか笑みのようなものを浮かべている、一人の男性。

少女は強力な能力を持っているが、手術は失敗に終わり死にかけていたため、それを上手く制御、活用する事はできない状態であった。それを実戦で運用できる段階にまで持つていくため、上級軍人が一人、彼女の能力の指導に当たっていたのだ。

少女がその師匠にどのような感情を抱いているのかは、これまでの彼女の様子通り。

しかし、師匠は一月ほど前に出張でしばらく帰らない、と言って少女の元を去ってしまった。

それから毎日のような「師匠まだですか？」という質問攻めが始まり、それに疲れ果てた彼女を担当するオペレーターは何とか通話くらいできないか、と軍部に訴えかけたものの、回答はノー、であった。

「元氣にしますか、わたしは頑張ってます……そうだ、手紙を——」  
「その質問、お答えするっす！」

しばらくアルバムを堪能した後、少女はおもむろにその上半身を起こす。

これは名案、目を輝かせ、早速筆記具と可愛いレターセットを要求しようとした、その時。

少女の声と被るように、部屋の中に声が響く。

「ほあぁー!?!」

間抜けな叫び声を上げ、少女はびくつと体を震わせる。

何故ならば、その声は聴き慣れた機械を通したのではなく、生の声だったのだから。

少女に与えられた部屋に直接入って来る人間は、師匠を含めわずかしいかない。

さらには、大抵の場合防護服を着ているため、何も通さない生の声、というものは聞き覚えが無かったのだ。

「……お、お姉さん誰なのですか……」

少女の目の前に立っていたのは、一人の若い女性だった。ビジネススーツに、ポニーテールに纏められた黒髪。人懐っこい人格を伺わせる親しげな笑みを浮かべたその女性は、少女が落ち着くのを待っている様子で両手を後ろで組んでいた。

「んー、ナタリヤちゃんの味方、とだけ言っておくつす」

少女、ナタリヤの質問に対し、笑みを崩さないまま返答する女性。

「お答えするって……何ですか？」

「そりやあもちろん、ナタリヤちゃんが今一番知りたい事つすよ！」

いきなり目の前に現れた怪しい女の人。いつの間にか入って来ていたし、そもそもこの場所は勝手に入ってこられるような所ではない。すごくあやしい。というのはナタリヤの率直な感想である。しかし。

「……師匠の事、教えてくれるんですか？」

「もちろん！ その為にここに来たんすからね」

少しだけ考え、リナリヤは女性の話を聞く事に決める。少なくとも害意は感じないし、喉から手どころか内蔵が全て出るほど切実に知りたい内容を知っているというのだから。

「じゃあ、良い事が一つと悪い事が二つ、どっちから……あ、その前に、ナタリヤちゃんにとって、師匠さんってどんな人なんすか？」

「……」

女性の問いに対するナタリヤの答え、それは無言で本棚に歩み寄る事だった。何をするのかな、と小首をかしげる女性を横に置き、ナタリヤは一冊の本……というか、先ほどまで見ていたアルバムを取り出し、再び女性の前まで戻る。

「おおー、きれいに撮れてるつすねー、それで——」

「めっちゃかっこよくないですかそうですねお姉さんもそう思いますよねそうじゃないわけがないのです何がいつてまず性格ですよ性格すごくクールで冷たい人、みたいな感じでわたしに接してくるのに結構すぐ慌てちゃう所とかあったり根っここの優しい部分が隠しきれてない部分とかすごくすごいんです聞いてくださいよわたしが前師匠の為に料理作ろうかなーって思っただけ無言で調理器具部屋に入れてもらったんですでもわたし料理なんてできないじゃないですかなんとか何か作ろうかなーって思っただけで卵を作ったんですよでもダメダメですっかり中身固くなっちゃって取り出す時にやけどまでしちゃってごめんなさい、って謝ったら師匠どうしたと思います



かなんとおいしい、って食べてくれた上にわたしに包帯まで巻いてくれたんですよそれがまた明らかに慣れていない感じでもうわたしは何と言えば良いのでしょうかあとはいねわたくし師匠にアタックしようかなとか思ってるんですけどこの前けほっ!？」

「……大丈夫ですか……」

ごく少量ではあったが血を吐いた事により熱い演説がキャンセルされたナタリヤと、いきなり始まったそれに気圧されてすこし引いていた女性。

何とも言えない空気が漂う。

「ま、まあナタリヤちゃんの思いはよく伝わったつす……」

「……悪い方から聞かせてください」

少しだけ落ち着いたのか、ナタリヤは続きを語るでなく、先ほどの女性の言葉を思い返し、話を聞く態勢に。帰りが遅い、とかかなあ、嫌だなあと不安になるナタリヤ。しかし、その『悪い方』は、ナタリヤの想像とは全く違う物であった。

「師匠、亡くなったみたいつす」

「……え……?」

興奮気味のナタリヤの手から、アルバムが落ちる。言葉の意味をもう一度考え直し、その表情はまるで深い淵のように沈み込み。

「うそ……そんなのウソです!」

「悪い事、もう一つ。……ナタリヤちゃん、国に騙されてるんすよ」

「やだ、そんなわけない、ウソウソウソ!」

師匠は火星に渡り、そこで奮戦するも卑劣な敵の罠にかかり命を落としました。

出張。それならば何故、連絡の一つも無いのか。それは、もう師匠が連絡などできないからだ。

そもそも、体調も精神的にも安定していないナタリヤの傍に師匠を早く戻すのが、ナタリヤを利用しようとしている国としても正しい選択ではないか。それができないという事は。

嗚咽を漏らし、血の混じった吐瀉物を床に撒き、まるで聞き分けの無い駄々っ子のようになったナタリヤに、女性はただ淡々とその証拠と根拠を突きつける。

否定しようと思えば、否定できる部分もあるだろう。師匠がその動向を一介の施設のオペレーターに漏らせないような任務に携わる可能性のある上級軍人、という話からそれがはつきりと真実である、という断定まではできようもない。

だが、依存し恋い焦がれていた人間の死、という情報を突きつけられた精神的に未熟な少女に、そこまでの思考ができるわけもなく。

「……でも、生き返らせてあげる事ができる、と言ったらどうですか？」

「……いきかえらせる？」

元々弱っていた体で泣き疲れ、ただ光の無い目で重力に身を任せベッドに横たわっていたナタリヤは、その言葉にぴくり、と微かな反応を示す。

「私の主様は、それができるんすよ」

「ほんとうに？」

「うん、本当つすよ。でも、タダじゃダメなんすよ」

「わたしは、なにをすればいいんですか」

慈しみの目を向ける女性と、精神的に衰弱し、藁にでも縋りたい、その一心で、虚ろな表情のまま女性の言葉に耳を傾けるナタリヤ。

「ナタリヤちゃんの力が必要つす。もし一緒に来て、敵をやっつけてくれたら、そのお礼に、ね？」

ナタリヤに向けて、握手、と手を伸ばす女性。ナタリヤの目に、未だ光は戻らなかつたが。

「がんばります……何でもします……だから、師匠を、お願いします、お願いします……！」

その手を、弱弱しくはあるが強い調子で、握り返した。

## 第55話 最果ての始動

「ん……」

「班長、起きたようです」

「おはよう、雅？」

目を覚ました雅？が最初に知覚したのは、声であった。

事務的な声での報告と、自身に向けられた暖かい、聞き覚えのある声。その二つから瞬間的に記憶を再生し、雅？は慌てて起き上がろうとし。

……しかし、少し考えてこれは夢だと考え、再び深い眠りへと移ろうとする。

何故なら、その目ざめの挨拶をしてくれる声の主を自分は裏切ったのだから。深手を負わせたのだから。怨嗟の声ならまだしも、そんな暖かな調子の声をかけられるわけではないか。そう否定し、その意識は再び沈んでいく、そのはずだった。

「……訓練に遅刻しますよ」

「わわっ、困りますー！」

が、直後かけられた声により、雅？はがばりと体を起こす。訓練に遅れると班長はともかく厳格な将軍にどんなお叱りを受けるかわからない。寝すぎていた。

「……って、そんなわけないですよね……はは……」

完全に目は覚めた。だが、この場所は地球の訓練場でもなければ、宿舎でもない。先ほど、状況は把握したはずなのに。地球に、いや、地球で既に捨ててしまった仲間達との生活にまだ未練があったのか、と雅？は自嘲気味に笑う。

「目を覚ましたか、君に色々聞きたい事がある」

そんな雅？に尋問するかのようには話しかけるのは、第二班班長、島原剛大。

その隣でまあまあ、と険しい表情の剛大を制するのは、第一班班長、

ダリウス・オースティン。

二人の周囲では、先ほど雅？が交戦した裏アネックス連合と第四班の班員が作業の為走り回っている。

そして、彼女にとってはそれよりも重要なものが二つ。

それは、首に包帯を巻かれ隣に座っているプラチャオと、付近に見える裏第四班の宇宙艦であった。

話は数十分前まで遡る。

雅？を倒し、重傷を負ったプラチャオを何とか応急処置していた時に突如健吾の元に届いた通信。それは、剛大からのものだった。

第四班との決戦、その後のテラフォーマーの奇襲により裏アネックス連合は奪取を諦め、第四班は放棄せざるを得なくなった第四班の宇宙艦。その周囲のテラフォーマーをダリウスと共に掃討したというのだ。

もちろん健吾はそれを居並ぶ皆に話した。それによる効果は絶大であった。

裏アネックス連合の士気は上がり、第四班班員達の中にいた隙を見て裏アネックス連合を倒す、と考えていた派閥の意思は完全に折れる事となったのだ。

それは、剛大が生きている、という情報そのものが理由の一つ。

第四班の班員は班員を連れた欣が剛大と交戦を始めた、という情報を持つている。

指揮官、という意味では班長の拓也よりも幹部搭乗員と呼べる欣。それが、敗れたという可能性が高いからだ。

拓也が行方不明になり、欣は敗北。さらには、その欣を下した男の隣には『一位』がいる。

どのような能力なのかは第四班にも把握できてはいない。二位と三位はその真のベース生物の情報を入手し、それがどちらも強力な毒を用いるものであったため解毒薬を用意していた。

だが、一位に関しては全くの謎。剛大や拓也、エレオノーラのようにとにかく直接戦闘能力が高いのか。ヨーゼフやエリシアのように特殊な能力に重きを置いているのか。そのどちらなのかもわからない。しかし、わかる事もある。それは、彼らのいずれよりも強力である、と判断されているからこそその順位である、という事だ。

それに、膨大な数だったであろう第四班宇宙艦周囲のテラフォーマーを残らず掃討したという事実、それだけでその実力の証明は十分と言えるだろう。

脱出の目途は立った、後は皆がこっちに来るだけだ、という剛大。皆のいる場所は幸い丁度そこから脱する地下道を出て少しの所だ。塞がってしまった穴もダリウスの能力で何とかできる、との事で引き返すだけで脱出が可能なのだという。

そして、その通りにとんとん拍子で話は進み、雅?と戦闘不能で絶対安静のプラチャオを運ぶという手間は増えたものの、皆は第四班宇宙艦にて合流を果たした。

これが、現在までの経緯である。

「……別に、多くを語ってもらう必要は無い。聞きたいのは一つだけだ」

ダリウスに諭され、少し表情と声色を柔らかくする剛大。

だが、その質問する調子の強さだけは変わらず。

「君は、誰の命令で裏切りを遂行した?」

雅?の裏切り。裏切り者とそのスポンサーであった裏第四班、元を辿ればU—N—A—S—A第四支局。さらに元を辿れば、中国そのもの。彼女はそれらを裏切った。では、彼女の元々の所属はどこなのか?・

地球であれば、国という集団だけではなくその内部でさらに細分化された集団、そもそも国に所属していない集団といった様々な組織が

存在する。そこにおいて雅？が裏切り行為を働いたのならば、いくらでもその候補は考えられる。

だが、ここは火星だ。送り込まれた人間はこの計画だけで96人。裏切り者”の人数は不明であるが、彼らは一つの組織である。

この火星の戦場における集団は、各国班の六つと”裏切り者”の計七つと言えらるだろう。

そして、雅？は各国班が結託した連合軍の第四班襲撃部隊と当の裏第四班、どちらをも攻撃した。では雅？は”裏切り者”に属する人間なのか？と言われると、それも違う。

”裏切り者”は一つの集団に数えられるが、実態としては裏第四班の手足のようなものだ。これまでも、少なくとも裏アネックス連合軍がこれまで交戦してきた中には、中国から離反するような動きは見られない。

今でこそ中国の指令から外れバラバラに行動しているが、それは”裏切り者”の指揮官であるアナスタシアとその直属の幹部の喪失、テラフォーマーの強襲といった事態によりパニックに陥り指令など聞いていられない、という状況だからであり、中国に逆らう、ということではない。

……ならば、明確に殺意を持って連合軍と第四班を攻撃した雅？は、一体何に属しているというのだろうか？

「……雅？」

名前を呟かれ、雅？は隣のプラチャオを見る。心配そうな瞳。死に直結する致命傷を負わせたのに。

憎悪されて当然、今この瞬間殺されてもおかしくないのに。

彼女は己の属する組織に忠誠を誓っていた。このまま黙って拷問の末殺される、それでいいと思っていた。

だが、目の前の、周りとなじめなかった自分をいつも気にしてくれていた優しい同僚の事を考え、それに続き連鎖的に次々と班員の皆の顔が浮かび上がる。厳しい訓練ではあったが、きちんと自分達の体調と能力を考え接してくれた欣。上司、というから緊張していたが、

実際には気さくで班員皆と上司部下関係無く仲良くしていた拓也。教育役として色々な事を教えてくれた鈴。雅？が関わってきて、先ほど捨てたはずだった人々。

「……わかりました、全部、お話しします」

ごめんなさい、と自分の主に謝り、雅？は目を閉じる。地球に帰ったら自分は主に肅清されるだろう。でも、それでいいのだ、と。

「やあやあ諸君、調子はいかがかなー」

しかし、雅？が語るより先に、周囲に声が響き渡る。

雅？の代わりにそれに答えよう、というように、岩陰から姿を見せたのは、一人の金髪の男とそれに付き従う数人の人間であった。

幹部搭乗員以外の裏アネックス隊員共通の隊服に、背に背負った槍状の武器。

少し小柄なその男は、柔らかな笑みを浮かべながら近づいていく。いきなり現れた男に警戒する皆。

「いやあ、本当にここまで生き抜いた事、おめでとうー！」

それに対し、その緊張を解くかのように、男は祝福の言葉を送るのだった。

「ははっ、ここまで、か」

彼は、涙を流しながら笑っていた。

自身の決定、その結果である目の前に迫りくる死に恐怖し、でも、自分にそれを決断するだけの勇気があった事に対しての精一杯の誇り。

宇宙艦の入口の防衛線は崩壊し、戦闘員の二人はテラフォーマーの群れにバラバラにされ。”裏切り者”の男も、引き下がりながら必死に抵抗しているが、もう長くはないだろう。

やろうと思えばいつでも脱出する事ができた。この火星を抜け出して、地球へと帰還する事ができた。

しかし、彼はそれをしなかったのだ。自分が死ぬとわかった上で。

「こんな事ならもうちよつと親孝行とか……そんなガラでもないか」

制御室にいる彼は宇宙艦の隔壁を下す。だが、小型の宇宙艦でさら

に防火用のものであるため、それは少しの時間稼ぎにしかならない。そもそも、中に侵入された時点で負けと言える。

制御室のスライド式ドアをバンバンと叩く音。それと共に、ドアが少しずつ変形していく。

「お迎えが来たみたいだなあ」

吐き捨て、涙をぬぐい視界をはっきりとしたものにして、彼は『薬』を手に持つ。

エンジニアである自分の戦闘能力はたかが知れているが、それでも一匹くらいは道連れにしてやる。

奮起した彼。その瞬間、まるで彼の覚悟と合わせたかのようなタイミングでドアを突き破り、三匹のテラフォーマーが室内に突入する。

人間離れた瞬間発力とその腕に持った棍棒。あ、やつは無理だわこれ、と彼は諦めるが、それでも一矢報いようと変態によって得た牙を眼前に迫ったテラフォーマーに向ける。

手足が痙攣し、その機能を失い崩れ落ちる。

ぐしやり、と頭が潰れ、内容物が周囲に飛び散った。

体の中身がドロドロと流れ出る、凄惨な死体。

「……へ？」

無残な死は、彼では無く三匹の襲撃者に訪れた。

「間一髪、ってトコだったな、大丈夫か？　大丈夫じゃなきゃ困るけどよ」

「レナート……！」

頭を握り潰した事により手に付いた脳漿を払う大男が、凶悪な笑み



を浮かべもう片方の手の親指を立てる。

「……宇宙艦の操作ができるヤツが全滅で脱出不可、なんてシャレにならないからな」

「はいはい、ヨハン君ピースしてピース……ちよ、冗談だつて」

行動不能になったテラフォーマーの頭を踏みつける軍服の青年と、旧式の携帯電話でその写真を撮っている、何故か学生服風の衣服を身に着けた少女。

「アンタら誰……?」

ごもつともな意見。しかし、命が助かった。目の前の光景からそれを察し、彼はへたり込む。

さらにその背後に続くのは、十数人の今となつてはこれでも大人数と言える人々。

事情が掴めない、そんな彼の無防備な腹に、容赦のない追撃が加えられる。

「い、生きてます！ 生きてるんですよね!? あああどうしようかと良かったあ……」

突然飛び込んだできた小柄な人間。その頭が彼の腹に直撃し、さらにぐりぐりと動きダメージを与える。

「は、班長……痛いつて……離れてくれよ」

「……」

「……さあ、早く脱出の準備を」

「顔怖いよ、オッサン、ヨハン君」

複雑な表情をしているレナートとヨハン、それにつっこむ恭華。頼りにしている副長からは嫉妬の目で見られ、謎の若者が二人。

これまでとは別方向に危機を感じる謎な状況であるがかといつて安堵で泣いている第三班の皆のアイドルであるエリシアを力任せに引き剥がす事など彼にできようはずも無く。

それが落ち着くには、三分ほどがかかった。

「えっと、こちらが火星の基地から一緒に逃げてきた各班の皆さんです」

どうも、と挨拶する彼。見知った顔も多い。エンジニア枠での集会で会った事があるからであろうか。

「それで、この二人が”裏切り者”の元幹部さんです」

彼は、飲んでいた水を吹き出した。

頭を軽く下げる事すらしなないヨハンと、紹介にあずかりピースをしている恭華。

これは色々と厄介な奴を連れてきたぞ、と思う彼であったが。

「……マルクの奴は、どうしたんですか」

それとなく、知りたかった事をエリシアに聞く事にした。

レナートと並ぶもう一人の副官。その姿が、この宇宙艦には無かったのだから。

「はい……どこにいったのかわからなくなっちゃって……」

「アイツ、地球で訓練してた時『俺がゴキブリに負けるわけねえよ！』つってたのにな……」

荒くれ者揃いの裏三班をまとめ上げる指揮官であるレナートと違い、もう一人の副官、マルクの役割はエリシアの護衛であった。本来ならばレナートが宇宙艦の護衛に戻るはずであった。

しかし、異形のテラフォーマーとの交戦によりこちらでもテラフォーマーと交戦する可能性が危惧された事、部隊の指揮ができるレナートを本陣に置いておきたかった事、というような理由から、対テラフォーマー戦に長けたマルクを宇宙艦に戻しておこう、という事になったのだが、その際に姿を消してしまったのだ。

「まあ、他の宇宙艦に行ってる、って可能性もあるし……」

「はー……」

しょんぼりとしているエリシアを慰めるレナート達。

少しの疑問を残しながらも、その数十分後、メンテナンスを終えた艦は空へと飛び立つのだった。

「マルク・アルマゾフ、第三班所属の12位で手術ベースは『オオゲジ』だっけ？」

「うんうん、よく知ってるね、流星は幹部搭乗員だ」

ダリウスの楽しそうに答える男、マルク。

その口調は軽く、他国の幹部搭乗員とはいえ、敬意の欠片も無い。

「それで、何故君はここに？」

「いやー、祝脱出！ って事で君達のお祝いに来たんだよ」

剛大の質問に対しての要領を得ない答え。

「手術受けた人間が大量に襲い掛かって来ると思ったら次はゴキブリ達で、いくつかの班は宇宙艦が爆破テロに遭ったりして、まあ色々苦難を乗り越えここに辿り着いたってワケだ……うん、凄いね」

この場に居並ぶ皆が潜り抜けてきた戦場。それを思い返すようにマルクはしみじみとした表情を浮かべる。

「爆破……？ どういう事だ」

マルクが語った内容。その中に、聞き慣れないものがありチャーリーが疑問を口にする。

「いやはや、これで君達は地球に帰ってハッピーエンド、ってわけだね」

チャーリーを無視し、マルクは続ける。それは、先ほどと同じ、中身の無い賛辞。

「お祝いって言ったけど、軽い冗談だよ」

しかし、急に場の空気が変わる。これまで調子よく語っていたマルクであったが、ふとその表情からは笑みが消え、冷たく無機質な瞳の奥の光が、その場に居並ぶ全員を貫く。

「すこし数が多すぎるから、間引こうかな、って思ってたよ」

## 第56話 災いへの反逆者達

人を超えた存在、というのはどのようなものなのだろうか。

それを語るには、まず人、という存在が何であるのかを考える必要がある。

動物界脊索動物門哺乳綱霊長目ヒト科ヒト属の一種、ホモサピエンス。

知恵の木の実を食らい、神にのみ許された権能である善悪の知を得し代償として死の運命を背負った生物。

様々な学問で様々な言い表す事ができると思うが、今回は私のよく知る部分の学問に照らし合わせて簡潔にそう考えるところでしょうか。

人に在って、他に無いもの。ヒトという一生物を、これが紛れも無いヒトであるのだと言わしめるもの。

それは間違い無く、高度に発達した知能と『心』、ではないだろうか、と私は思う。

塩基配列という答えもまた真理かもしれないが、少し無粋なので捨てるでしょう。

勿論、ヒト以外の生物にはそれらが無い、などというつもりはない。しかし、知能の高い生物を現す時に、人間はよくこう表現する。『何

歳児並みの知能』、と。

それこそが、ヒトという生物の絶対的な能力をこの上無く指し示している。

彼らはヒトという生物の知能の成熟段階、その後ろにいるのだ、と言っているのだから。

『心』というのも、知能の発達に際して副次的に発達する概念だ。

霊長類やイルカはヒトのそれに近い高度なものを持っているが、それでもヒトには及ばない。

……当然だ。我々は原罪を背負い、それを獲得したのだから。

無論、宗教観と生物学的見地を混ぜて考えるのは愚かだと事はわかってはいる。だが、宗教というものもまた、ヒトにのみ確認されている概念だ。敢えて合わせて考えるのも一興というものだろう。

とにかく、人を人たらしめているのはその智慧と『心』であると言  
える。

では、その人が人を超える、という目的を成すには何を目指せばい  
いのか。

簡潔に言えば、知恵の木の実では無い方、だ。

ヒト、万物の霊長、という言葉が指すように、あらゆる生物の頂点  
に立つ存在。

なるほど、確かにそうだろう。我々の先祖は神の知を獲得し、それ  
を用いて他のあらゆる生物を蹂躪し版図を広げてきた。そうして惑  
星の支配者となったこの生物は、そう呼ぶに相応しい。だが、それを  
可能としたのはあくまで知、なのだ。その肉体は、あまりに脆く儂い。  
家畜として生殺与奪を握り、糧としているどれだけの生物に素手で  
勝てる？

首輪を付けた愛玩動物がいきなり我を忘れ襲ってきたら、勝てる自  
信はあるか？

病魔に敗れるのもまた、他の生物への敗北と言えるのではないか？  
あらゆる生物の頂点。間違っではないのだが、それは傲慢ではない  
だろうか、とかつての私は考えたのだろう。

我々は、ヒトという生物を、脆弱な肉体を超えるべきなのだ。

ヒトが蹂躪し超えてきた、永遠の寿命を持つ生物のように。強靱な  
体を持つ生物のように。ヒトに真似できない様々な技能を持った生  
物達のように。

生物界でもトップクラスの能力を多く持つ生物。我々は、そのヒト  
を品種改良し続けている。だが、それだけでは足りないのだ。それで  
もまだ、ヒトという存在は脆いものであると感じるのだ。

長い時間を、待ち続けた。その間にも研鑽と改良を重ね、今この段  
階に辿り着いた。

既に生命の樹は獲得した。私が、それを思い描いたその出発点の段  
階で。だが、それでもまだ足りない。

——私は、もう一つの生命の樹を手に入れなければならない。

「聞こえなかったかな？ 君達を問引こう、と言ったのだよ」

男、マルクは目の前に立つ火星の戦士達のそれぞれの反応が気に入らなかったのか、もう一度繰り返す。

その反応は様々であった。

大多数の、何を言っているんだこいつは、というもの。意味がよくわからなかった、というもの。そして。

「……お前が、”裏切り者”か」

「成程ね……最初から、寄生虫が紛れ込んでいた、ってわけか」

剛大とダリウス、二人の班長が、目の前の男を見据え、構える。

第三班の副長。その人間が自分達に対して明確に敵対姿勢を取っている。普通に考えれば、これは第三班の裏切り行為であり、その黒幕は班長であるエリシアである、と考えられるのかもしれない。しかし。

そう判断するには、第三班の動きはあまりにも友好的すぎる。着陸直後に”裏切り者”に襲われ、共に基地に入り、基地防衛の為に戦い、”裏切り者”総指揮官であるアナスタシアとの交戦に班長と副官が参加し。

寝首をかく機会はいくらでもあったというのに、第三班はそうしていない。それどころか、多大な犠牲を払いながらも他の班に協力している。

第三班の第四班との裏での繋がりも疑われてはいたが、最初からそうでなかったか、それとも想定外の事態により他班についたのか。

少なくとも、剛大とダリウス、二人は第三班、という括りでは敵ではない、という結論を出していた。

「あー、残念。第三班が疑われて地球でつるし上げの学級会！ みたいなのを期待してたけど、これじゃ無理だね」

マルクは笑い、その背に背負った槍を抜き、弄ぶ。

「二班二班、五班は上手く行って、次はココ！　つて感じだったけどまあ丁度いいか」

「後ろの連中は六班の連中か」

その場の人間に意味が伝わらない事を語るマルクに、剛大は次を問いかける。

「よくわかりで！　……まあ、随分数は減っちゃったんだけどね。あのご老人、いきなり敵の大群に私の協力者を選別して突入するのだから、とんでもないよね。他にはジョセフ君の協力者も混じってたみたいだけど見事に減っちゃったよ、どっちも始末、つて事はあの人はあの人で何か思惑でもあったのかな？」

相手は話す事が好きなのか、ぺらぺらと流れるように言葉を吐く。重要なようで今の状況ではそこまで重要とも言えない、裏第六班の事情。

第六班にもマルクの協力者が混じっていた。今マルクの背後にいるのがそうなのだろうが、それは数が減っている状態である、と。

さらには、裏第六班にもまた裏切り者は混じっていたが、それは班の総意ではない、少なくとも班長であるエレオノーラの意思とは異なっている。

「ふむ、少し勝手に話しすぎてしまったようだね、申し訳ない。次はそちらが話していいよ」

「間引く、とは？」

この男は敵であり、この火星で暗躍……などというには大して動いていない様子であるが、少なくとも好意的な存在ではないという事が明らか、という現在、剛大はさらに追加で質問をする。

「あー、本当なら適当に観戦するだけ、にしようと思ってたんだけど、想像以上に君達強くてねえ……残り過ぎたんだよ、だから帰れないようにするか、直接始末しようかなって」

「あ、それとダリウス君、フライングは無しね」

突如、ダリウスの背後、他の班員とダリウスを挟むような位置に移動していたダリウスの専用装備、消音装置付きの無人機が火花を散ら



して墜落する。

「!?」

驚愕の表情を見せるダリウス。己の能力がどのようなものであるのか、この無人機がどのような性質であるのか、相手はそれを把握している。そして、それよりも。

マルクは、コイントスの要領で親指で弾いた小石により、それを行っただのだ。

「……まあいいや、温まってきた頃だろう。これ以上の説明は不要だね、勇敢にも火星の戦場を生き抜いてきた君達の物語は、最後の最後でいきなり出てきた登場人物に殺されて終わるのさ。何と虚しい話だろうね」

マルクはその手に持った槍で一度地面を突く。それが、あまりに唐突な開戦の合図であった。それと同時に、マルクの背後にいた第六班の班員達が宇宙艦を奪取しようと駆け出す。

「っー」

一瞬で間合いを詰めたマルクの槍が、剛大の喉元に向けて放たれる。

それをすんでのところ回避し、反撃の一撃を加えようとするが、すでにそこにマルクの姿は無く、拳は虚しく空を切った。

それは、本来であれば剛大達が支援するアネックス計画の方で運用されるベース生物であった。

それも、素体となる人間が強ければ幹部搭乗員と肩を並べる程の戦闘能力を持つものである。

「遅いなあ」

剛大の拳が空を切ると同時に、ダリウスの右肩に付いでほぼ同時、という速度で左肩に槍が突き刺さり、血が流れ出す。

相手の反撃が来ると同時に次の攻撃目標に襲い掛かる、凄まじい機動力。

それをこの生物は可能としている。

「どうしたんだい、一位の名が泣くよ」

テラフォーマー、人間大のゴキブリの瞬発力は一步目から時速320 kmに相当する。

これは、あらゆる生物の中で最速——ではない。

同程度の大きさスケールでありながら、そのゴキブリを走って捉える生物が存在する。

それは例えば、蜘蛛。『マーズ・ランキング』9位、マルコス・エリングラッド・ガルシア。彼の手術ベースである、『アシダカグモ』。

待ち伏せにより奇襲を仕掛け、空気の流れを捉える体毛によりゴキブリの動きを先読みしその瞬発力により捕食する、網を張らない狩人。

だが、それに匹敵する生物がもう一種。

彼らは、奇襲という知恵は用いない。走り、追い、捕え、食らう。ただそれだけ。

ゴキブリと速力の真つ向勝負を挑み勝利する、ただそれだけ。

背に開いた大きな気門は大量の酸素を供給し、低空を飛行する昆虫をも跳躍して捕える程の運動能力とゴキブリを上回る機動力を備え、さらにはアシダカグモの弱点であるスタミナの少なささえも克服している。

『オオゲジ』。それが、マルクの手術ベースである。

「お前ら……ここは俺達が何とかする、非戦闘員は脱出の準備を急げ！」

「」

剛大の声で、戦場に加わろうとしていた裏アネックス連合軍と第四班の班員達はあるものは宇宙艦へ、またあるものは宇宙艦の防衛のために変態を行おうとしたが。

「いやいや、間引く、って言ったじゃないか」

変態を行おうとした内の二人の首に一瞬にして穴が開き、力なく倒れこむ。

おかしい。剛大はダリウスを庇い攻撃に備えながら思案する。

『オオゲジ』は強力なベース生物だ。しかし、その能力を獲得したマルクのランキングは12位。近い能力を持つマルコスが『マーズ・ランキング』で9位という事を考えると、若干低めと言える。何故なのかと言うと、『裏マーズ・ランキング』が対テラフォーマーでは無く対MO手術被術者戦を評価したランキングだから……ではない。

その機動力は、対テラフォーマーであろうが対MO手術被術者であろうが有効だ。

……マルクは、お世辞にも本人が強い人間ではなかったのだ。剛大はU-NASAの幹部搭乗員会議で各班のランカーの戦闘訓練のビデオを見ていた。勿論、12位のマルクの戦闘シーンもそこには映っていた。

剛大の感想としては、その速度に振り回されて体の動きが追いついていない、であった。さらには、威勢の良い口調で訓練用クローンテラフォーマーを罵っていたが当の本人がどうにも弱腰で攻撃の機会を逃している。

しかし、今相對している相手は。

能力を十二分に活用しているばかりか、人間離れた動きで自分達を押ししている。対MO手術被術者、つまりは同族を相手にする以上、ランキング下位とランキング上位が戦った場合、相性の良し悪しはあれど上位が勝つ可能性が非常に高いと言えるだろう。

だが、疲労が溜まり傷だらけの剛大と、能力を除いた直接的な戦闘能力は高くないダリウス、理由があるとはいえ幹部搭乗員二人を相手に圧倒している目の前のこれは、何だ？

「……雅？、君は、私を裏切るのかな？」

剛大とダリウスの、仲間を守る、という動きすら追いつかない高速の移動で、マルクは雅？の目の前へと現れる。至極穏やかな口調で、何も映さないその瞳での問いかけ。

「あ……うう……」

それに対して、雅？は体を震わせる事しかできなかつた。明確な否定もできず、肯定もできず。

無言という答えで相手が何と判断するのか、目の前の存在が、マルクという人間ではない何かを知る雅？はわかつていた。

だが、やっぱり貴方に付きます、などとは言わない。

「どなたか知りませんが、雅？が怯えています……離れなさい！」

冷たく笑ったマルクが雅？の首に手を伸ばした瞬間。死角から放たれた蹴りがマルクに襲い掛かる。

しかしそれに対応し、マルクは一步横に動く。

「おやおや、暴力的だなあ……同盟相手じゃないか、第四班の班員君よ」

「黙れ……」

プラチャオの追撃の蹴りを軽く槍を持っていない右手で捌きながら、マルクは後退する。

同盟相手というのがマルクという人間の所属である第三班なのか、それとも別の何かの事なのか。それを考える暇などはなく、マルクはプラチャオのまだ傷が十分に塞がっていない喉を掴み、地面に叩きつける。

それだけで傷口が開き、プラチャオの首に巻かれた包帯の赤が濃くなっていく。

「ああ……これだから人間は弱っちいね……嫌になるなあ……」

影の落ちた表情で追撃に槍をその目に向けて振り下ろそうとするマルク。

しかし、それが果たされる事は無く、その槍は背後から加えられた衝撃によりマルクの手を離れ、地面に落ちた。

「仮とは言え協力者……一時的とはいえ俺の部下だった男の部下だ……勝手にどうこうしてくれるなよ」

その殺気を敏感に捉えたマルクが背後の剛大に反撃として拳を放つ。

それを避けきれず、剛大の腹にそれは突き刺さり、アリの筋肉に

よって守られていたため内臓にまでは達しなかったが、鈍い衝撃が走る。

「ぐっ……」

これまでの長い戦闘、一度迎えた限界を無理やり乗り越えてはきたもののついにそこで体力が尽きたのか、剛大はその重たいわけでもない一撃で膝を付いてしまう。

さよならだ、とわざとらしくひらひらと手を振り、マルクは落とした槍の代わりだ、とでも言いたいかのように貫手で剛大の心臓に狙いを定める。その目の前に明確に迫る死を見て、剛大は口を開く。

「……ダリウス、やってくれ」

それは、命乞いではなかった。マルクの背後に浮かぶのは、一機の無人機。マルクは剛大の狙いを一瞬で理解し、背後に跳ぼうとするが、一歩遅かった。

襲い来る衝撃が、剛大とマルクの体を打つ。

一瞬で体が粉々に碎かれる、ダリウスの本気の一撃というわけではなく、それよりも弱い、それはただの爆音。

しかし、それだけで十分であった。

「……」

鼓膜が破れる事による一時的な目眩。それにより、マルクの手元が狂い、地面に貫手が当たり、貫通するわけもなく抵抗により止まる。

それは、認識のミスであった。本来であれば、一瞬で目眩による補正を付け寸分の狂い無く攻撃を続行する事が可能であった。しかし、マルクにはそれに必要な要素、完璧な身体認知を行う事はできなかったのだ。

認識を改める必要がある。しかし、それがこの状況に何だと言うのだ、とマルクは冷静に分析する。

剛大は既に戦闘不能、両腕を潰したダリウスも、三機に減った無人機の可動範囲に限界がある以上、完全に味方を巻き込まない攻撃は困難だ。適当なタイミングで無人機を叩き落とす事もできる。

幹部搭乗員二人を無力化した。終わりだ、とマルクは槍を拾おうと

した。

「……誰だお前、つて顔してんな」

その槍を踏みつけるのは、哺乳類型の特徴を示した変態を行った、一人の男。

「チャーリー・アルダーソンだ。幹部以外雑魚扱いなんて悲しいな、ちゃんと覚えてくれよ？」

オオゲジの能力による機動、槍を拾おうと屈んだ姿勢からの高速の回避は叶わず、その顔に拳がめり込む。

態勢を起こしながらも反撃を繰り出そうとするマルク。しかし、直後に襲い来た蹴りにより、左足が砕かれその姿勢が崩れる。

「……プラチャオ・ムアンスリン。貴方が誰だかは知らないが」

その状態でも動けるのか、マルクは回避しようと右に跳ぶ。しかし硬い壁のようなものにぶつかり、直後腹に鈍い一撃が入り血を吐きながら吹き飛ばされる。

「第五班所属、ダニエル・アードルング。ここで死んでもらう」

左足と腹に受けた殴打を受けてなお、マルクは起き上がる。

しかし、起き上がった瞬間に耳に入って来た爆音により、一瞬動きが狂う。

「楊月鈴ユエリンつつーけどどうでもいいや、可愛い妹分を怖がらせやがって、命で償え」

動きは遅れたもののその隊服のポケットから注射器型の『薬』を取り出し変態しようとするが、それを首に差そうとしたその時、その左腕は大きな槍に肩を貫かれた事により動かせなくなり、だらりと垂れる。

「耳いてえ……どいつもこいつも殴り技で死ね死ねばっかで……アネックスの皆ならもっと連携プレーとかするんだらうな……あ、俺重森健吾。ちーっす」

マルクは、囲まれていた。

その攻勢の最後にいたのは、両腕が巨大な槍状に変態した見るから

に軽そうな青年。

「ま、アレだな、呉越同舟な感じだが敢えてこう名乗らせてもらおうか」

第四班の二人を横目で見て、健吾は軽く息を付く。

だが、すぐにその目はマルクに向き、その殺意に満ちた表情で、しかしにやりと口を歪め、はつきりと、誇るように言い放つのだった。

「国連航空宇宙局特別火星探索部隊支援計画、各国一般搭乗員連合軍だ」

## 登場人物紹介（裏切り者幹部編その20欣）

—— 籠橋 恭華 女

・ 17歳 161cm 53kg 日本／中国

・ αMO手術ベース：『昆虫型』” 三界踏破” タガメ

・ 好きな食べ物：手術前：アイスクリーム 手術後：肉類全般

・ 嫌いなもの：もう行き先が決まってるのにしつこく誘ってくる居

酒屋のキャッチ

・ 瞳の色：黒

・ 血液型：O型

・ 誕生日 6月24日（かに座）

”裏切り者”幹部の一人で、アナスタシアの直属の部下。

日本で暮らすごく一般的な家庭の一般人であったが、中国に旅行に行った際に事故に遭い家族を失い、手持ちの金やパスポートを救助されるどさくさにまぎれ盗まれて途方に暮れていた所をアナスタシアに助けられる。

典型的な現代っ子でイケイケのギャルといった雰囲気の可愛い動物や小物に目が無い人間であるが、場の空気を読んで礼儀はわきまえるタイプであり、バイロンやジェネジオに比べてベース生物と本人の両戦闘能力では劣るが式典等に参加する際のアナスタシアの護衛についてはヨハンと共に二人よりも重宝されていた。

虫嫌いではあるが、アナスタシアが生きて手術を終えられるように虫ベースで成功率が高くなる新型手術を用いた、という事情の事も知っているので自身のベース生物に関しては複雑な感情を抱いている。

アナスタシア直属の幹部の中で唯一女性という事もありアナスタシアと仲が良く買い物等によく付き合っているが、下着がきついから買い換えたい、と言った時にアナスタシアに同行を拒否されヨハンと一緒に行くハメになった事については未だに理由がよくわかっていない。Eカップ。



——ヨハン・アウフレヒト ♂

・19歳 178cm 75kg ドイツ／中国

・αMO手術ベース・『昆虫型』”鳥喰い食らう狩人”オオベツコウバチ

・好きな食べ物：手術前：ウインナー 手術後：ソーセージ

・嫌いなもの：溢れかえっているのに数日放置されているゴミ箱

・瞳の色：青

・血液型：A型

・誕生日 2月12日（みずがめ座）

”裏切り者”幹部の一人で、アナスタシアの直属の部下。生真面目で規則絶対主義な青年。

旧貴族系の家系に生まれ相応の人間になるように、と教育を受けてきたが、政治家だった父親や周りの社会的地位が高い人間が金目当てに汚い手段を用いている事を知り社会に絶望し出奔。

ヨーロッパ各国を転々としてボランティア活動などに従事し善良な人間、を指して生きてきたが、飛行機の墜落に巻き込まれ重傷を負い、治療費が払えないという事で重傷を負ったまま病院から叩き出された所をアナスタシアに拾われる。

アナスタシアの護衛兼助手として様々な業務をこなし、実験に用いる生体の調達からアナスタシアを狙う刺客の始末まで何でもこなすが、無理やり休ませないとすぐ仕事を始めるため、皆からは心配されている。

アナスタシアと部下の四人で料理ができるのはヨハンと恭華であるが、恭華はアナスタシアの誕生日以外では全く料理をしようとしなしいしバイロンとジェネジオに任せると形容しがたい何かしかできないため一行の普段の料理は全てヨハンが作っている。

特技は胃薬の味でメーカーを当てる事。これを聞いたアナスタシアは泣いてヨハンに謝ったが、何よりも尊敬し敬愛するアナスタシアを泣かせてしまった、という事で胃の調子は悪化した。

欣燭明 キンケイメイ ♂

・ 53歳 194cm 141kg 中国

・ αMO手術ベース・『棘皮動物型』”地を喰らう凶暴”オニヒトデ

・ 好きな食べ物：手術前：麻婆豆腐 手術後：クラゲの冷菜

・ 嫌いなもの：ダム

・ 瞳の色：黒

・ 血液型：A型

・ 誕生日 8月12日（しし座）

裏アネックス計画中国・アジア第四班幹部搭乗員代理。

中国海軍所属の上級軍人。階級は劉と同じく”將軍”と呼ばれるくらい。

故郷は酷い環境汚染に晒されていた村で、ある日ゴミの中に入っていた観光会社のパンフレットを見て空は本来青く、水は透き通っているものである、という事を知り、都会に出て出世し村の環境も改善させられるようにしよう、と決意し猛勉強をし、近所の先輩たちの助けもあり都会に出て軍に入った。

その勤勉さと身体能力から軍でも早くに多方面へのパイプを作り出世し、故郷を救えると思った矢先に環境保護の国際条約でゴミを減らす事が求められ、ゴミ山では無くダムである、という名目とするために故郷がダムに沈められた、という事実を知り、半ば自殺をするような感覚でαMO手術を受けたが成功してしまい国への複雑な感情を抱えたまま火星へと赴く事になった。

仕事一筋で生きてきたため妻子はおらず、後悔はしていないが部下たちにはそうなって欲しくないという思いから部下の若い隊員達の仲を裏でこっそりと取り持つ事をしていたが、バレバレすぎてその姿に逆に好感が持てるしそれが空気の良さに繋がり関係も深まるという、少し経緯は違えど上手く成果を収めていた。

海洋棲の付着生物のアクアリウムが趣味であるが、手術を受けてからサンゴが中々触手を外に出さず引きこもった状態になって避けられている気がして悲しみを覚えている。



## 第57話 争いの凶星

「ゴプツ」

若干の粘性を持った液体が土から湧き出したかのような音がマルクの喉から響き、それと同時に血を吐く。

片足を折られ、肩を潰され、聴覚が損傷し。普通の人間であれば、よくて痛みを耐えて気絶しない、が限界。訓練を受けた軍人であっても、その動きは大きく減じられるであろう重傷。

特に、このように5人ものもに猛者に囲まれた状態であれば、これ以上の抵抗は無意味といえるだろう。取る事のできる選択肢としては素直に降伏するか、少しでも相手に被害を与えんと特攻するかくらいである。

「……いやあ、驚いた！ 本当は面白いものを見せてあげようと思っただけけど、君達の健闘に敬意を表し——」

「うるせえよ、とつとと失せろ」

しかし、マルクはそんな状況であっても楽しそうな表情で周りの己に傷を負わせた戦士達を見回す。

そんな、口の端から血の筋を垂らしながらも饒舌に語るマルクの喉を、健吾の右手が変質した槍が背後から貫く。

「あ………？」

健吾の攻撃は通った。その槍はマルクの喉を後ろから貫通し、前に抜け致命傷を与えている。それを引き抜き、完全にトドメを刺すべく次の攻撃を行おうとしたが、衝撃によりマルクの隊服、そのポケットが破れ、複数の小物が地面に落ちる。

それを見て、健吾はその意味が理解できず、一瞬思考がフリーズする。

「そう急かさないうでくれたまえよ……落ちちやったじゃないか」

首に大穴を開けたマルクが、窘めるように声を出す。

こぼれ落ちた小物。具体的にその内容を言えばそれは、錠剤の入っ

た瓶、ガム、タバコ、といった一貫性もあつたものではないもの数々。しかし、一件何の関連性もなさそうなそれは。

「てめえ……何だ？」

最後に、プランジヤと呼ばれる部位がポケットに引っかかっていた小物が一つ、落ちる。

それは、注射器。

そう、マルクが持っていた小物、それは、全て。

「おや、偶然これが残ってたかあ」

マルクは残っていたか、などと言いながらも落下していく最中に素早くつかみ取っていたパッチを自身の首に当てる。

それは全て、変態用の『薬』だったのだ。

「試したいものが沢山あるのだよ、付き合ってくれたまえ、諸君」

それが『薬』である事はわかる。しかし何をしようとしているのかはわからない。でも、わかる事はある。

危険だ、と。

健吾はその手の槍を再び繰り出し、マルクの頭を正面から貫こうとする。一瞬で絶命させなければ、恐ろしい事が起こる、そう直感が告げている。

「ハプニングに弱い所は短所だが良い腕をしている。君、私の部下にならないか？」

健吾の右手は、マルクに届く前に動きを止めた。それを掴むのは、先ほど肩から砕いたはずのマルクの左腕。

その戒めは1秒と経たない内に解かれるが、槍の先にマルクの姿は無く、それは虚しく空を切る。

『オオゲジ』の機動力、それは健在。しかし、動くのに必要な足は、先ほどのプラチャオの一撃によって折ったはず。

導き出されるのは、あり得ない、という結論のみ。だが目の前の現実、それを否定する。

「そうだな、まず君から」

声と同時に、マルクの姿を探していたプラチャオの首にその死角からマルクの腕が伸びる。

「……やらせるか」

だがその一撃は、硬いゴツゴツとした壁のようなものに阻まれ失敗する。

両腕に盾状に形成された壁のような殻、二つのその隙間からマルクを睨むのは、第五班副官、ダニエル。

これを破るには正面からは無理だ、と一旦背後に下がり、五人の各国班員達を眺めるマルク。

五人からの殺意が深々と突き刺さるが、それはどこ吹く風、といった様子で楽しげに手に持った『薬』をいじる。

「国を超えた友情、結構な事だね、皆まとめてぶち壊しちゃうのが惜しいなあ」

マルクの手は、足は、首の穴は、元の姿を取り戻していた。

『オオゲジ』の能力は拘束された時に手足を自ら切り離し離脱する自切が可能であるが、脱皮の際に再び足が生える元のオオゲジとは異なり、MO能力としてのオオゲジはそれを持たない。

そもそも、持っていたとしても、首に開けられた風穴を塞ぐのは不可能だ。

だが、目の前にはこうしてほぼ無傷と化したマルクが立っている。「くっ……」

仕留めきれなかった、と健吾が苦い表情を浮かべる。

戦況としては、5対1。だが実際にはどちらが有利かと言われると、現状は裏アネックス連合にとって非常に厳しい状況と言わざるを得ない。

第四班やテラフォーマーとの戦闘で傷を負ったチャーリーと健吾とダニエルに片翼を潰されている鈴、本来であれば安静にしなければ命が危ない、という傷のプラチャオ。

これまでの苛酷な戦線を潜り抜けてきて、彼らの体もまた、限界に近い状態となっている。最初の不意打ちで完全に殺しきる事ができるはずであった。だが、傷つき疲弊した状態では、不十分であったの

だ。

一方の、目の前の敵。悠然と火星の地に立つ、”裏切り者”とはまた別の勢力であろう裏切り者。

そんな彼は、先ほど受けた傷などすっかり忘れてたかのように五体満足で立っている。

戦闘能力も、幹部搭乗員に匹敵するか、それを凌ぐ程。

「良いねえ……弱いながらも手を取り合って強大な生物に立ち向かう、それでこそ、脆弱な人間という生物だ」

嬉しそうな調子で、マルクはどの隙に拾ったのか、その手に持った槍を構える。

武器を拾われていた、その動作ですら気付けなかった相手の速度に、健吾は戦力の差を実感し、悔しげに唇を噛む。

今マルクの注目は自分達戦闘員に注目している。非戦闘員だけでも、逃がせないだろうか。仕留める、から何とか逃がす、にまで変わってしまった戦況。だが、最悪の中でも全てを失う、それだけは避けなければ、と健吾は声を――

「あ、一人紹介し忘れてたぜ」

それは、一瞬の出来事であった。苦し気に肩を押さえる鈴が、唐突に眩く。

直後、マルクの左胸から、刃物が生えた。

「……おや？」

傷口から流れ始める血を見て、マルクは不思議そうな表情でゆつくりと背後を振り向く。

「君は恥ずかしがりやですが……ちゃんと自己紹介をしないと……誰で、どこの人間なのかを」

一足遅れて状況を把握したプラチャオも、マルクの背後にいる人間を見て、痛みの中に何とか笑みを浮かべる。

マルクの背後、そこには、一人の黒髪の少女が立っていた。

「……第四班所属、雅?! 姓はありません、槍の一族じゃありません、私は、第四班のただの班員、雅? です!」

弱気な自身を精一杯奮い立てるように、マルクの胸にナイフを突き立てた少女は叫ぶ。

「おやおや……裏切ったり裏切られたりで本当に忙しい……そう決めたのなら仕方ない、じゃあね、雅?」

しかし、それさえも再生能力を持った今のマルクにとっては致命傷にならず、その左腕で雅?の首を掴み、締め上げようとする。

わかっていた。それがトドメにはならない事も、自分がすぐに殺される、という事も、雅?にはわかっていたのだ。生まれてから自分に決定権なんてなかったけど、それでも主には恩義もある。だが。

これまでずっとお世話になっていた班員の皆と班長達。裏切った自分をまだどこかで信じ、再び受け入れてくれたプラチャオと鈴を始めとする皆。最期くらい、自分の意思で誰と、誰の心と共にあるのか、決めてもいいじゃないか、と。

せつかく、罪滅ぼしと仲直り、と考えてたのにここで終わりか、と。嫌だなあと首にかかる圧力を感じ、目の端に涙を浮かべる雅?。

「……これまで流されてばかりだった君が自分でそう決めた事、個人的には好ましいけど……ん……?」

雅?の意識が途切れようとする、その一瞬前に、マルクの左腕は、崩壊した。

まるで肉が腐っていく映像を高速で再生したかのように、どろどろと皮膚が、筋肉が崩れ、中身の骨を晒していく。

それと同時にマルクは膝を突く。外傷は無い。だが、体内は、そうとはいかなかったのだ。この戦場を生き残った五人の戦士達の一撃は、確かにその身に深い傷を負わせていたのだ。

「あー、やっぱ限界だったか、失敗、だねえ」

雅?を救う為駆けだした五人は、そのままマルクに攻撃を仕掛ける。驚くほど呑気な声のマルク、それは自身の肉体が今滅びようとし



ている人間のそれではなく。

「だがまあ概ね満足とおこうかな。ではまたね、諸君」

残った右腕を振って楽し気なマルク。それが、最後の姿だった。真っ先に到達した健吾の槍が、再度首を貫き、さらにその状態から左右に動かしそれを胴体と接続している部分を完全に切り離す。

死体をどうこうする趣味は無い他の四人は、それで手を止めた。

この死体が動き出す可能性は無きにしもあらずであるが、先ほどの腕が崩れ落ちた様から見るに、もう肉体に限界が来ていたのだろうと納得し、それ慎重に動かす。

「……僕たち、情けないですね、剛大さん」

「ああ……だが、いい部下を持った」

各班が、敵であったはずの第四班もが同じ敵を相手に戦い勝利を収める、その光景を見て、疲労の限界で岩に背を預けていた剛大と両肩を砕かれ戦闘不能で能力の特性から打ち合わせ無しで攻撃できず参戦できなかったダリウスが両者とも苦痛に顔を歪ませながらも笑い合う。

「……これで、俺達の任務は終了、だ。結果が残せたのか残せなかったのかは……アネツクス計画を信じるしか無いがな」

第四班の宇宙艦。”裏切り者”の指揮管制を行う為の大量の通信機材は既に先の脱出の際に自主的に破壊し、その艦はU—N—S—A主要国共同設計のものと変わり無い。生き残った搭乗員達はそれに乗り込み、数時間後、邪魔も無く艦は空へと飛び立つ。

地球に帰ってからは本当の戦いになる……などとは剛大は言われない。それは、この火星で散って行った仲間達を侮辱する事に思えてならないからだ。だが、帰ってからさらなる厄介事になるのは確定しているといえよう。

「……剛大殿、仲間を守る為手を貸していただいた事、感謝いたしま

す」

司令室で指示を出す剛大の元に訪れたプラチャオは一度頭を深く下げ、それだけを言つて自身の作業に戻つていく。

第四班、彼らの事も、どう説明したものだろうか。

結論から言えば、この火星の騒動は、U—N—A—S—A第四支局とその大本、中国によつて仕込まれたものだった。しかし、その裏で別の何かが蠢いていた事もまた事実。

彼らを許す事などできない。できようはずもない。彼らと彼らが火星に引き連れていった”裏切り者”によつて剛大の直接の部下を含む本来流れなくてもいいはずであった多くの血が流れ、裏アネックスの側としてそれらは抑え込む事ができたものの、恐らくアネックス計画にもあちらの第四班の行動により支障が出ただろう。

だが。

「あの時はその……ごめんなさい……」

「おつ、よく見ると可愛いね！ どう？ 俺と今夜一緒に……」

「ええ……あのお……」

「それ以上ナンパを続けるなら蹴り殺しますよ、健吾」

「なあダニエルとやら……別に気にしてとか無いんだけどな、第二班のトリ女、無事かなあつて……」

「それは僕も心配だけど……君も確か鳥だったよね？」

それを糾弾するのは今でなくてもいいか、と剛大は日誌を閉じ、それで健吾の頭を勢いよく叩いた。

「……エリシアちゃん、少し来てくれて」

それは、第三班の宇宙艦が宇宙に飛び立った二日目の事であった。

火星を飛び立つてからの指揮、レナートの手伝いこそあったが様々な班の入り混じる脱出者たちの役割分担や命令に目を回してようやく落ち着き、体調もあまり優れないという事で自室で眠っていたエリシア。

部屋の扉が開かれてそこに立っていたのは、恭華だった。

”裏切り者”の総指揮官、アナスタシアの直属の幹部であったこの少女は、エリシアの説得により同じく元幹部のヨハンと共に現在この第三班の宇宙艦に身を寄せている。

普段からハイテンションな恭華には珍しい、少し緊張した様子。それで何か良くない事態が起こった事を察し、エリシアは起き上がり、司令室へと向かう。

小型の宇宙艦であるため、司令室は艦長室、すなわちエリシアの自室から出てすぐの場所にある。

そこでは、班員達からの不安の声が次々に上がっていた。

「艦長、おはようございます」

「体は大丈夫か、お嬢」

その空気に気圧されるエリシアを最初に迎えたのは、二人の男。

心配げに声をかけるのは、見るからに表舞台の人間ではない、という事が感じられる凶悪な人相の大男、裏第三班副官、レナート。

そしてもう一人、かしくまった様子でエリシアに敬礼する軍服を身に纏った気難しそうな青年、ヨハン。

体の弱いエリシアが休息中の時は宇宙艦の操作と隊員達の指揮を任されている二人。大抵のトラブルなどはこの二人が処理しているのだが、わざわざこの艦で最も権限を持っているエリシアを起こしてくるという事は、それ相応の事態である、という事だ。

「率直に報告させていただきます。……所属不明の宇宙艦が前方に確認されました」

「……皆さん、艦制御担当以外の方は自室に戻ってください」

ヨハンの表情から何かを察したエリシアの言葉に、不安の声を上げていた班員達は部屋を出ていく。

本来ならばこんな命がかかっているかもしれない非常事態に小娘の言う事など聞けるか、という話が出てきてもおかしくはないが、レナートの威圧とエリシアが自分達を先導して助けてくれた命の恩人である事、そしてもう一つの理由があり。

「……剣はしまっておけ」

「わかりましたよ、元上司様」

古臭い剣を持ち、周囲に殺気を放っていた一人の男を、ヨハンが窘める。

”裏切り者” 兵士であった青年。あの脱出劇の際に追い詰められ、今にもテラフオーマーに殺されそうであったところを救出され、今現在”裏切り者”の捕虜としてこの場に乘せられている。

……帯剣を許されさらには自由に振る舞っている所は、捕虜という立場とは思えないものであるが、エリシアが許可したという事で尋問の際に何かがあったのだらう、という事で第三班は納得している。

「……ヨハンさん、本当は、何なのですか？」

艦の制御要員とレナート、ヨハン、恭華の三人だけが残った司令室で、エリシアはヨハンに問いかける。

先ほどのヨハンの表情がエリシアに伝えていた事、それは艦の全員には聞かせたくない情報がある、というようなものであった。

そして、その答えは、無言でモニターを表示する事。

そこにあつたのは、人の乗り物であるかも疑わしい異形の宇宙艦であつた。

背後の宇宙に溶け込むかのような漆黒の球体と、それに繋がった円筒状の胴部、球体が付いている逆側の胴の端には、六本のアーム。

「あれは”星之彩”<sup>ほしのあや</sup>。……U—N—A—S—A第四支局所属の小型有人戦略宇宙艦です」

ヨハンはエリシアに、その機体の情報を語る。

成程、それは聞かれたくないわけだ、とヨハン以外の三人は納得し、同時に冷や汗を流す。制御要員の隊員もその事実を聞きエリシア達に怯えた目を向けているのだ、やっと生き残れたと安心したその後にこの仕打ちでは、一班の班員達がパニックを起こしかねない。

中国の戦略宇宙艦。それがこんな場所に、何故。

裏アネックス計画の宇宙艦は火星と地球間の高速移動のみを目的に設計されており、武装は積まれていない。

もし仮に戦闘になれば、一方的な虐殺劇となる事は間違いないだろう。

さらには、『裏切り者』の存在を知っている裏アネックス計画の搭乗員、という中国にとつて消さねばならない理由も残念なことに自分達は備えてしまっている。

降伏すべきか。それとも、逃げてみる？

この場にいる全員の命を預かる指揮官として、エリシアは目を閉じて考える。

降伏すれば、果たして命を助けてもらえるのか。逃げ切れる戦力差なのか。

リスクとリターン、それぞれを考えるが、答えは中々出ず。

「あー、聞こえますか、三号機の皆さん！」

悩むエリシアとそれを見守る三人、緊張に満ちた司令室に、唐突に声が響く。

「回線への介入……恐らく、前方の艦からです」

それは、通信回線に無理やり割り込む形でのものであった。

電子戦能力でも大きく劣るであろう事もわかり、不利な状況であるという情報はさらに追加される。

「私、この機体”星之彩六号”ほしのあやを預かる者でございます。皆様、どうかご安心ください」

映像が無いので声だけだが、それで判断するならば、エリシアと同年代の少女の声。

それが、相手方の司令官のようだった。

何が安心できるんだ、と吐き捨てるレナート。交渉をしたい所であるが、一方的な通信のためそれも叶わない。

「皆さん、火星での戦い、本当にお疲れ様でした。きつとこの苦難を乗り越えた貴方達は、人間というものの次の存在へと足を踏み入れる可能性を手に行っているのかもしれない。そんな貴方達をここで始末する事は私には考えられません」

穏やかな、慈愛が感じられる優しい声。だが、その内容には表面の見逃す、という優しさ以外には何も無かった。内容も理解できるわけではない。それでも、その内容はエリシア達には幸運と呼べるものであったが。

「私達には火星での任務がありますのでこの辺りで。それでは皆さん、良い旅を——」

その言葉と共に、回線は切れた。それと同時に、星之彩が動きを見せる。姿勢制御を行い、その球状部分を火星の方向に向け、移動を開始する。

それはほんの数秒でエリシア達の宇宙艦の横を通り、去っていった。

動きをモニタリングしていた人間は、その光景に目を見開く。

姿勢制御と前進、機体にスラスタのようなものも見られなければ、何かを噴射しているわけでもない、奇妙な機動。

そう、それはまるで、重力そのものを制御しているかのような。

「……地球への連絡を……って、ジャミングされてますよね、きつと」

その言葉通り、地球への通信機器は使用できず。星之彩の電子妨害の圏内を抜ければ、という所であるが、あとどれくらいかかるのか。

「皆さん……ごめんなさい、もう少しだけ、頑張ってください」

急がなければ、とエリシアはいつも苦勞しながら協力してくれているレナート達と艦を制御する皆に謝り、頭を下げる。

地球への道はまだまだ遠い。問題は山積みだ。まだまだ自分は休めないんだろうな、とエリシアは憂鬱な気分になる。

「……メシにしようぜ、お嬢」

「私も同伴しよう」

「あたしカイコは嫌なんですけどー」

でも、騒がしい身の回りの人達を見て、こんな生活もある意味では悪くないか、と思ったりもする。

そんな事を考えながら、火星を生き残った幹部搭乗員の一人、病弱でひ弱な、戦士という言葉とは程遠い少女は三人と共に食堂に向かうのであった。

「おや、同期が切れてしまった」

高さ十数メートルはあるかという巨大な機械がその多くを占める大広間。

そこに佇む男は、ふと頭の中に知らせが来た事に対して独り言を話す。

失敗は成功の母。今回の事例を参考に、今度こそ成功させようじゃないか。

一つ伸びをし、男はその機械の一部、無数に並んだ巨大な透明のシリンドラーをそつと撫でる。

「火星を生き残った人達……いやはや、また会うのが楽しみだね」

## 幕間 腐った林檎

2577年 12月21日 U—NASA本部 第三地下研究室

暗い闇に包まれた部屋の中で、男は数人の部下と共に黙々と作業を進めていた。

彼の名はアレクサンドル・グスタフ・ニュートン。『ニュートンの一族』本家の人間であり、現在進められている『バグズ二号計画』の責任者である。

そんな彼は、液体に満たされたガラス容器に入っているものをじつと見つめる。それは、人型生物の生首。

しかし、その特徴は現行の人類とはかけ離れたものであった。近いものを言うならば、それは、原人のような。

火星を人間の住める土地に変える為、何百年もの期間をかけて進められてきた『テラフォーミング計画』。それは、コケとある生物を火星にばら撒き、それによって環境を変化させようという試みであった。そして計画は今最終段階に達し、いよいよ人間がその調査のため火星に……というのは、数か月前の話だ。

結果は、失敗。生存者0名の第三次、その詳細は国連航空宇宙局、U—NASAの上層部の意思によって闇へと葬られる事となった。

何が原因だったのか？ 発射に失敗した？ いや、人類の英知を集めし万全を期して始められたそれが、初期段階で失敗する事は無かった。火星での事故？ 半分以上正解と言えよう。

その答えは、アレクサンドルが見つめる生首であった。この生物の名はテラフォーマー。コケと共にばら撒かれた生物、ゴキブリが火星の苛酷な環境下で進化した、と考えられている火星の知的生命体。

バグズ一号の搭乗員は、この生物の手によって命を落とした。

この場所にある生首は、搭乗員の一人、ジョージ・スマイルズが死の間際に地球に送ったものである。

「……本当に、素晴らしいものを届けてくれた」



不気味な宇宙生物の生首を満足げに眺めるアレクサンドルに、部下達は何も言わない。彼らはU—N—A—S—Aの中でも選り抜きの優秀な科学者達であり、アレクサンドルが推し進める計画の賛同者である。何かの感情を表に出す、という程慣れていないわけではないのだ。

人間を、超える。それが、このテラフォーマーの首が届き、分析の結果、他の生物のDNAを体内に共存させる『選択的免疫寛容』と呼ばれる機能を果たす臓器、モザイクオーガンM—Oを発見したアレクサンドルの言葉。このMOを何とか人間に移植し、他の生物との融合を可能とできないものか。まずは、昆虫。さらには。

そのような考えから、計画は進められている。

表向きは、次の火星探査計画に向けて、テラフォーマーに抗し得る人間を作り出す事。裏では、さらにそれを発展させ、最終的には人間を超えるため。

「夜分遅くに失礼するよ」

表向き、などといっても最高機密であるその計画は裏の奥底で進められており、今アレクサンドル達が研究を進めているのもU—N—A—S—Aの地下深部にある研究施設である。厳重なセキュリティが敷かれ、部外者は近づく事などできようはずもない。

そんな場所のドアが、唐突に開かれた。

そこに立っていたのは、一人の青年であった。

時代錯誤甚だしい白の一枚布という服装と、その胸の部分にあしらわれた、二重螺旋と血に濡れた槍の穂先、といった意匠のエンブレム。「……何の用だ、オリヴィエ」

唐突な来訪者に対し、アレクサンドルは冷徹な調子の声で短く質問する。

しかし、その体全体から滲みだす怒りの表情は隠しきれず、重たい威圧感が部屋全体に押し掛かる。

研究員たちは来訪者に対する驚きよりも、アレクサンドルの怒りに萎縮し、動作を取る事ができないでいる。

しかし、少ししてその来訪者、オリヴィエの放つ歪な気配に気付き、得体の知れない不安に襲われた。

彼らはアレクサンドルに時々会いに来る、親戚だと言う人間と何度か会っている。彼らが皆一様に持ち合わせるのは、平然としている時でも感じられる威風。

我らは人間の先にある者なのだ、と言わんばかりのひりつくような空気の変化。さらには、今のアレクサンドルのような激しい感情を発露させた時の、実際に空気が凍り付く、もしくは焼け付いているのではないかとも思える、畏怖と命の恐怖さえ覚える覇気とも言えるもの。

だが、目の前の青年は。アレクサンドルの親戚たちに比肩する、もしくはそれ以上なのではないかという人間の黄金比、と呼んでも差し支えの無い整った顔立ちと体形の、貴公子と表現するのがぴったりであろう、その青年は。

ただただ、怖気の走る不快さしかなかった。

まるで、車に轢かれて道路脇に寄せられた動物の死骸の体内から無数のウジが覗いているのを見てしまった時のような、吐き気を催す不快感の塊。人間では無い、超えるでなく人間を辞めてしまった何かがその皮を被って遊んでいるかのような、気味が悪い存在。その気配が、アレクサンドルの怒気にさえ塗りつぶされずこの空間を覆っている。

「……いやあ、何をしに来たのか忘れてしまったよ。まあ多分、優秀なアレクサンドル君が何をしているのか身に來たんだと推測するね。同じ科学者として君の事はすごくリスペクトしているからね」

友好的ですよ、という態度で、オリヴィエはアレクサンドルに近づいていく。

それを止められる者はおらず、それがせめて本当に友好的なものでありますように、とその場の研究員達は祈る事しかできない。

「それは重畳。色々名前高い貴様に評価されて嬉しく思うよ。……見せる物は何もない、帰れ」

「冷たいなあ……これから、君達本家筋がピンチになった時の打ち合わせでも、と思ったんだけど」

しょんぼりとした表情を浮かべるオリヴィエ。だがその場にいる全員が、はつきりと感じ取る。コイツは、最初から何の感情も抱いていないのだと。

「それは部外者の多い……ここでする話ではないな、また今度だ」

不満の色を浮かべたアレクサンドルの鋭い視線を受け、肩を竦めるオリヴィエ。

「仕方ない。じゃあ、私がやだやだ帰りたくない、とだだを捏ねたしたら？」

「力づくで叩き出す以外に何かあるのかね？」

一度、温和……と言えるかはわからないが纏まろうとしていた話が、オリヴィエの言葉により再び剣呑な空気を纏う。

「……やめておこう、暴力反対だ。肉体的にはアレクサンドル君はほぼ完成形だし、私の体は君には若干劣ってると思うからね。まあ、私一人殺す為に君が重傷を負うのも不毛だろうからお互い様かな？」

アレクサンドルの思いの外肉体的な解決法に少し驚いたのか、引き気味のオリヴィエであったが、一応この研究室で乱闘騒ぎになる可能性は無くなったようで、研究員は胸をなで下ろす。

「あまりご機嫌も良くないようだし、私はお暇する事にしようかな……あ、そうだ、用事を思い出したよ」

アレクサンドルに背を向け、部屋を出ようとするオリヴィエは、唐突に振り返る。

「君の所のお手伝いさんが私の家に迷い込んで来たみたいでねえ。保護したのはいいんだけど、ちよつと私の方を手伝ってもらったら脳波が狂ってしまったってね、もう仕事はできなさそうだけど……お返しした方がいいかな？」

「……貴様の好きにするといい」

荒々しくパソコンのスイッチを切りながら、アレクサンドルはその用事とやらを切り捨てる。

それをオリヴィエは喜びを含んだ顔で見返し、再びその表情を緩める。

「もう一つ、こっちが本題だよ。……お孫さんの事は、残念だったね。お悔やみ申し上げる」

瞬間、オリヴィエの姿が消え、アレクサンドルの目の前に現れた。それは瞬間移動などではなく特殊な歩方を用いた高速の移動というだけで、アレクサンドルには見慣れたものであるが、研究員たちにはそれは奇異なものに見えたのか、驚愕と恐れを見せる。

懐から取り出した小さな白の花束と添えられたカードをアレクサンドルに手渡し、再びオリヴィエは部屋を去っていく。

「ああ、孝行な孫だったよ」

『バグズ一号』計画の全容は表には出さず機密とされている。オリヴィエのその言葉の意味するものをアレクサンドルは理解していたが、敢えて表情に何かを出す事はせず、それを見送った。

「その花、楽園を追放された二人の人間を励ます為に天使が送った、なんて逸話があるそうだよ……ま、天使なんてガラじゃないけど、人の未来を切り開かんとした二人と、残された君への餞とさせてくれたまえ」

一通り話し終えて満足したのか、ドアは閉じられ、再び研究室は平穏に包まれる。

「……一族の理念に憑りつかれた亡霊め」

再び、研究員たちは作業を始める。

休む暇などない、これは人類の為の戦いなのだ。

アレクサンドルもまた、自身の仕事を再開しようとしたが、その前に、その手に持った、その花束とメッセージカードをダストシユートに力任せで叩きこんだ。

「貴様がどのような手を用いようが、話す事などない」  
「殺したければ好きにする事だな」

手足を縛られ、古典的な牢に入れられた数人の男女に、オリヴィエは温かい表情で語り掛ける。

「ああ、アレクサンドル君は君達をどうとでもしていい、と言っていたよ」

訓練を受けた彼らはそれで表情を崩したり、取り乱したりする事は無い。しかし、その顔に僅かに浮かんだ恐怖と絶望、それを機敏に感じ取り、それを心底愛おしそうに眺め。

「お言葉に甘えて、私の実験を手伝ってもらおうかな？」

暗がり的一步、足を踏み入れた。

## 幕間 陰謀の星のプロローグ

2620年4月26日 火星

「到着ですね、皆さん……お疲れ様でした！」

U—N—S—A第四支局所属小型戦略宇宙艦『星之彩』ほしのあやが降り立ったのは、火星の平坦な大地であった。

着陸態勢に入り、アームを階段代わりに続々と降り立つ、銃器で武装した兵士達。そして、その最後にゆつくりとそろそろ慎重に階段を降り、ぽすんという軽い音と共に赤茶けた土を踏んだのは、この物騒な兵士達の雰囲気似合わない、修道服のようなデザインデザインの衣服を身に纏った少女。

「さてさて、作業を始めましょうか」

この宇宙艦『星之彩』は中国の最新鋭技術に加えて彼らと協力関係にあるとある集団のテクノロジーも盛り込まれた機体である。武装こそ多くは積んでいないが、強固な外殻と高度な電子戦闘システムは『九頭竜』さえも上回る、と軍の中ではまことしやかに囁かれている、秘密兵器と呼べる機体である。

「……アレクシア様、何故あの艦を見逃したのですか？」

興味深そうに辺りを見回す少女、アレクシアに話しかけたのは、一人の兵士。

彼は、中国軍の兵士であった。

今現在、中国の立場はあまり良いとは言えない状況にある。第四班の兵士達は他班連合により拘束され第四班の宇宙艦による帰途にあり、中国の裏切り及び『裏切り者』の存在が露呈してしまう、という窮状だ。

第四班だけであれば、もみ消す事は可能だろう。『裏切り者』の存在も、話だけであれば、我が国を貶める為の虚言だ、と無理やり言い通せるかもしれない。だが、物証があつてしまえばどうなるだろうか。

彼らはこの火星に来る前に、火星を脱出する第三班の宇宙艦に遭遇した。艦の詳しい内情こそ把握はしていないが、あの宇宙艦に『裏切り者』の捕虜でも乗っついていれば。いよいよ、危機的な状況となるので

はないか。そう危惧しての質問だ。

「だって、勿体ないではないですか」

アレクシアは、そんな兵士に言い聞かせるように、穏やかな調子で言葉を紡ぐ。

「火星という蠱毒の壺、それを生き抜いた戦士達が、どんなに強い存在となるのか、もしかしたら『神様』の卵が生まれるかもしれないですからね。未来への投資、というものです」

楽しみですね、と心底嬉しそうな様子のアレクシアに、兵士は怒りを募らせる。

理由など、無かったというのか。いや、理由があっても彼には理解できない事であった。

「そのような理由で貴方がたは同盟相手の危機に――」

その兵士は若い男の新兵であった。この宇宙艦の指揮権はアレクシアにある。しかし、それでも、抑えきれず、アレクシアに詰め寄ろうとしたが。

「お止めください」

「お止めください」

二人の男が、まるで死人のような虚ろな目で兵士とアレクシアの間に立つ。

この宇宙艦の構成員は、二つのグループに分かれている中国軍の兵士が一グループ。そしてもう一つは、アレクシアと彼女の所属する組織から派遣されてきた人員。

アレクシア側の人間は、皆こうなのだ。忠実に任務をこなし、艦の見回りや制御、それぞれの役割を担っている。だが、皆一様に生気が無く、人形のように無感情だ。共同で任務に当るのだから協力を、と考えていた中国側はコミュニケーションを図ろうとしていたが、あまりに不気味であったため、結局それは叶わず。話しかけてはみたものの、曖昧な反応しか返さない。

その、アレクシア側の人員の得体のしれない気配に気圧され、兵士は黙って任務へと戻っていった。

「た……助かった……のか……？」

そんなアレクシア達の元に一人、ボロボロになった一人の男がふらふらと歩いてくる。

テラフォーマーによる総攻撃で、『裏切り者』は壊滅した。

各基地で待機していた兵士は皆殺しにされ、裏アネックス連合との戦闘で敗れ。

しかし、こうしてまだ生き残っていた者は、僅かにいるのだ。

苔を食べて食いつなぎ、テラフォーマーに怯えながらいつ来るか、そもそも来るかわからない救いを求めて歩き回り。

そして、ようやく。ようやく彼は、火星に降り立った宇宙艦を見つけ、喜びで疲れ切った体も忘れ、艦へと足を進めたのだ。

中国支局所属の宇宙艦。それは、黒い球体状の艦首に浮かび上がっている『星之彩』という文字からわかる。中国。自分達の雇い主。つまり、仲間。

救われたんだ。涙と鼻水を一杯に流し、歩み寄った彼は。

懐かしい、二度と帰れないと思っていた地球。帰ったら何をしようか。

そんな彼を迎えたのは、銃弾だった。

無数の銃弾が体に突き刺さり、彼の体はまるでダンスでも踊っているかのように倒れる事さえできずがくがくと暴れまわる。

末期の声さえ上げる事ができず、何が起こったのかもわからないまま、彼の一生は終わった。

「お疲れ様でした。この辛い世の中で、死とは救いなのですよ」

無残な肉塊となった死体を見下ろし、アレクシアは笑顔のまま手を組み、祈る。

その発言に少し引き気味の中国所属の兵士達であったが、自分達の任務とこの指揮官の任務はまた別だ、と思いつき、それぞれ動き出す。

「さて、あまり長居するのもよくありません。次を探しましょう」

彼らの任務、それは、生存している『裏切り者』の殲滅と、とある者を地球に連れ帰る事であった。



証拠は消さねばならない。それが、中国の事情。後者は、アレクシアの所属する組織の事情。

それぞれにとって失敗できないミッション。その為に送り込まれたのは、最新鋭の宇宙艦と武装した搭乗員達。

だが、今この時、誰が想像しただろうか。

「これは洞穴か」

『星之彩』から数十メートル離れた地点にあった、小さな穴。近くに入口がぽっかり顔を見せている所から、小さな洞窟があるのだろう。その内部に繋がっているであろうそこを兵士は覗き込む。それは、人が隠れるのにうってつけの場所だからだ。

覗き込んだ兵士を最初に迎えたのは、数匹のテラフォーマーの死骸だった。それも、普通に死んでいるのではない。力任せに解体され、内部を食われたような、惨たらしい猟奇殺人の犯行のような、食い散らかし、と言った方が正確に思える光景。

「……………え？」

そして、その次に兵士を迎えたのは、死神であった。

「オイ、どうしたんだよ、穴を覗き込んで……………ッ!」

穴に頭を突っ込んでいる兵士の肩を揺すったもう一人の兵士は、思わず一歩後ずさった。

頭を突っ込んでいるのではない。その頭は、すでに無かったのだ。慌てて踵を返し、報告しに艦に戻ろうとする兵士。だが、振り向いた瞬間、自身を覆う影が――

「あら？ あつちに調査に行った兵士さんが帰ってきませんか？ どなたか……………」

ちよつとした近場の偵察に行った兵士二人が帰ってこない。それに気づいたアレクシアが、指示を出そうとする。

しかし、その指示を即座に聞き、遂行するはずの兵士の顔に浮かん

でいたのは、恐怖の表情であった。

何かを必死に伝えようとしているのか、震える手でアレクシアの方を指差している。

アレクシアの部下も、無表情ではあるがアレクシアに銃を向けている。

「？ 後ろがどうかー」

アレクシアが背後を振り向こうとした瞬間、その首は360°回転した。ゴギリ、という鈍い音が響き、その首は捻じ曲がり、だらりと頭が垂れる。

「ッ……！ 撃てー！」

司令官の死という衝撃によってようやく恐怖の縛めが解かれたのか、中国所属の兵士達もまた、銃を構え襲撃者に狙いを付ける。

……だが。

「待ってください、皆さん。ほら、死んでませんよー」

折れ、だらんと垂れていたアレクシアの首がむくりと起き、再びその目に光が入る。

そして、今度こそきちんとその背後の襲撃者を見て、不敵に微笑む。

「あら、貴方は……ふふ、私、死なないんですよ。どうぞ、貴方が死ぬまで、ずっとお付き合いしてあげますね」

それは、怪物の名を冠する生物。

体を何等分にしてもそれぞれが再生する、『プラナリア』に比肩する高度な再生能力に加え、精神面での悪影響からアレクシアは能力として用いないが『チャツボボヤ』と同じ出芽によって増殖し、さらにはその体に毒を備えた、人間から見れば微小で目立たない存在であるが、生物として様々な能力を持つ強力な、しかし高難易度のベース生物。

アレクシア・アポリエール

αMO手術ベース：刺胞動物型『ヒドラー』

彼女は微笑む。目の前の襲撃者は、自分を何度殺せるのだろうか。その強さはどれほどなのだろうか。その期待と、不死に挑むという愚かさが、あまりにも愛おしくて。

苔の緑、元の地表である赤茶と黄土色、起伏と時々水場。それが、この星の風景であった。

つい先日やって来た来訪者達が残していった箱舟の残骸こそいくつか転がっているものの、その風景はあまり豊か、という表現が似合うものではない。

「……じょう」

そんなこの星、太陽系第四惑星、火星の小高い山に作られた、人類による前線基地。その頂上、人間達が司令室と呼んでいた区画、現在は王の間と呼ぶのが適切なその場所で、一匹のテラフォーマーは左手で頬杖を付きながら彼らにとってのご馳走、蚕の蛹を口に運ぶ。

彼の座る椅子は、電子機器を改造して作られていた。本能的に殺意を覚える宿敵ではあるが、多くの恵みをもたらす神、ともある意味では表現できる人間、彼らが残していった文明の利器を加工した玉座。

それは、この個体がその恵みを理解し、最もその神の技術に近く触れられる存在である、という権力を表したものである。

そこに控える数多くのテラフォーマーとは違う、頭髮の代わりに額に刻まれた、『≡』の記号のような形状の模様。

他のテラフォーマーよりも小さい、幼体の体躯。

そして、何よりも異なるのは。

「……いーじー」

唐突に、そのテラフォーマーは声を上げ、自身の背後である作業をしていた通常のテラフォーマーに向かって蚕が盛られていた皿を投げつける。

一般的なテラフォーマーが持たない、もしくは希薄な、感情のようなもの。それを、この個体ははつきりと持っていた。今示したのは、怒り。皿を投げつけられたテラフォーマーは頭にぶつかり落ちた皿

を元の位置に戻し、作業を続行する。玉座に座るその幼体の、頭部の左側全体を覆う絹の包帯、それを慎重に取り外していく。

今のように、お叱りを受けないようにゆっくりと。

彼らに痛みを感じる機能は無い。しかし、不快感や不自由を感じる事はある。感情豊かな上位個体であれば、猶更だ。

巻かれていた包帯を取ったそこには、痛ましい傷が刻まれていた。包帯の覆っていた範囲、頭部の左側全体がまるで何かに握り潰されでもしたかのようにひしやげ、その甲皮には無数のヒビと、酷い部位では甲皮が剥離し内部の筋肉を晒している。さらには、所々に焼け焦げたような痕が。

その左眼は無残にも潰れ、形こそ何とか保っているがもう既にその機能は果たせそうにもない。

包帯を取った端から、待つていましたと言わんばかりに体液が流れ出る。テラフォーマーという生物の強靱な生命力からすればとつくに塞がっていていいはずの傷。だが、それは膿み、まるで彼と彼の指揮していたテラフォーマーの群勢によって命を落とした人間達が憑りつき憎しみの涙を流しているかのように止まらない。

無論、そのようなオカルティックな考えはこのテラフォーマーは持っていない。ただただ、不快なのだ。

絶命していてもおかしくない、人間であれば間違い無く死んでいるし、テラフォーマーであっても並みの個体であればその傷が塞がるのを邪魔している要因によって死に至る可能性が高い、そんな傷。

再び巻かれる包帯に、頭と顔に常に異物が触れ、視界の半分が失われているという感触に不快と怒りを覚えながらも、今回で得られた物を思い出し、彼は表情を和らげる。

周囲のテラフォーマー達は、その表情を見てほっと胸をなで下ろす……という感情があるのかは定かではないが、唐突な癩癩ですぐに周囲の個体を殺すこの王がひとまずは落ち着いているようだ、と少し場の空気が穏やかな方向へと変わる。

そんな王の間に一つ挨拶のように声を上げ入って来たのは、十数匹のテラフォーマーの一団だった。

この場に居並ぶテラフォーマー達は、その身を小奇麗に保っていた。身を汚していると、それでこの幼体のテラフォーマーがまた癩癩を起すかもしれないからだ。しかし、このテラフォーマー達に、きれい、などと言う個体は一匹たりともいない。彼らは皆、煤や油のようなもので酷く汚れていた。

「……じょうじ」

本来であれば、不敬だから粛清だ、というような展開になりかねない、その姿。しかし、それを見て幼体のテラフォーマーは満足げに笑う。

一団の中の一匹が前に出て、幼体のテラフォーマーに一枚の絹の布を差し出す。

そこには、宇宙艦の構図が描かれていた。それは、『アネックス一号』ではなく、それよりも小型で流線形をした、『裏アネックス計画』の高速宇宙艦に類似した形状のもの。

「じょうじ。じょうじようじよう。じょう」

その絵の所々に振られたバツ印を一つつつ指さしながら、そのテラフォーマーは幼体に彼らには珍しい長い言葉を向ける。

それを聞き、マヒと重度の傷で動かないため顔の右側だけで笑いながら、幼体のテラフォーマーは周囲のテラフォーマーに指示を出す。

「じょうじ」

それを聞き部屋を出た数匹のテラフォーマーは、数十秒後に戻って来た。

その手には、蚕の蛹が一杯に入った石の容器と、絹で作られた衣服、それに加えて十数本、今この王の間に入ってきたテラフォーマー達と丁度同じ数のひも状の装飾品。

幼体のテラフォーマーの前までやって来たその品の数々を持ったテラフォーマー達は、入って来た一団のテラフォーマー達にそれらを手渡す。

「じょうじょう」

布を持ったテラフォーマーはそれを見て幼体のテラフォーマーに一言恭しく礼を言うように声をかけ、下がりその属していた集団と合流し、しずしずと部屋を出ていく。

「……！」

その時、部屋全体が揺れ、天井からぱらぱらと砂が落ちてくる。即座に王の間にやって来たのは、基地の周囲を警戒していたテラフォーマー。

来訪神が、再びやって来た。

そう語ったそのテラフォーマーに、幼体は一度顎に手を当て、考える。再び、奪うべきか。

少しの間の沈黙の後、その答えと共に、幼体は立ち上がる。

惜しいが、今はもっと重要な事がある、と。

「ジョウジー！」

手出しはしないように、と号令を出し、幼体は部屋の奥へと入っていく。

その手には、一本の石で作られたメスが握られていた。

——げらげら。げらげらげらげら。

右手小指。薬指。中指。人差指。親指。左手小指。薬指。中指。

人差指。親指。

右足小指。薬指。中指。人差指。親指。左足小指。薬指。中指。

人差指。親指。

「待って……待って……」

右手首。左手首。右足首。左足首。

右腓骨。左腓骨。右尺骨。左尺骨。神経。神経。神経。神経。

「痛いよお……やめて、もうやめて……」

——けたけたけたけた。

右上腕骨。左上腕骨。右大腿骨。左大腿骨。

股関節。鎖骨。

——ぶちぶち。

「あああ……」

右耳。左耳。鼻。唇。

——うふふ。

膾。子宮。膀胱。大腸。小腸。腎臓。脾臓。肝臓。胃。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。心臓。

——あらあら。

右手小指。薬指。中指。人差指。親指。左手小指。薬指。中指。人差指。親指。

右足小指。薬指。中指。人差指。親指。左足小指。薬指。中指。

人差指。親指。

右手首。左手首。右足首。左足首。

右腓骨。左腓骨。右尺骨。左尺骨。神経。神経。神経。神経。

右手首。左手首。右足首。左足首。

右腓骨。左腓骨。右尺骨。左尺骨。神経。神経。神経。神経。

右上腕骨。左上腕骨。右大腿骨。左大腿骨。

股関節。鎖骨。

右耳。左耳。鼻。唇。

膾。子宮。膀胱。大腸。小腸。脾臓。腎臓。肝臓。胃。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。肋骨。心臓。

「はひ、あう、やめ」

右手小指。薬指。中指。人差指。親指。左手小指。薬指。中指。

人差指。親指。右足小指。薬指。中指。人差指。親指。左足小指。

薬指。中指。人差指。親指。右手首。左手首。右足首。左足首。右

腓骨。左腓骨。右尺骨。左尺骨。神経。神経。神経。神経。右手首。

左手首。右足首。左足首。右腓骨。左腓骨。右尺骨。左尺骨。神経。

神経。神経。神経。右上腕骨。左上腕骨。右大腿骨。左大腿骨。股

関節。鎖骨。右耳。左耳。鼻。唇。膾。子宮。膀胱。大腸。小腸。





## 幕間 青き命の星のプロローグ

——国連航空宇宙局特別火星探索部隊支援計画 通称『裏アネックス計画』に関する報告書

本計画は同時に行われた火星探索計画『アネックス計画』の支援及び想定される障害の排除を目的としたものである。

各班16人を定員とした6班を編成し各班別々で高速宇宙艦により一足先に出立した『アネックス1号』を追う形で地球を出発、ほぼ同時期に火星に到着し『アネックス1号』と合流し共同で任務を行う、というのが想定されていた計画である。

しかし、6機の宇宙艦全てに同時に発生したエンジントラブルによつて各艦はそれぞれ火星の別地点に不時着という事態となった。

その後は各班独自に行動し、2620年4月19日をもって生存人員の脱出が完了、計画は終了した。

各班の火星到着後の動向については資料を参照されたし。

——2620年6月 ローマ連邦大統領府

裏アネックスヨーロッパ・アフリカ第6班 生存者：0人

「……チッ」

ヨーロッパの国々が寄り集まり形成された新興の大国、ローマ連邦。その最高権力たる連邦大統領、ルーク・スノーレソンは一人で座るには寂しい広さの特別応接室で一つ舌打ちをした。

今回の火星探索計画において、最も大きな利益を得たのはこのローマ連邦と言える。

4000体を超える多数のサンプルを確保し、さらにはMO手術の次の時代を切り開く者、のコピーも入手した。

そんな大きな戦果を上げた火星派遣部隊であったが、その生存者はほぼいない。

アネックス計画の第六班の生存者は1人、一族の自家用船で帰還したジョセフ・G・ニュートンのみ。……これは、特段問題ではない。

元々、そういう計画であつたのだろうし、ルークが口を挟める部分ではないのだ。

裏アネックス計画の第六班の生存者は0人。班長を含め全滅、である。……これもまた、問題ではない。

裏アネックス計画の第六班の搭乗員に関しては、幹部搭乗員であるエレオノーラ以外ではローマ連邦という国が何か口出しをする間もなく搭乗員が決定していた。唯一ローマ連邦の意向とわかっていいものが反映されていたエレオノーラも、その素性はかつてヨーロッパ全土を恐怖に陥れていたマフィアの首領、という重罪人である。

エレオノーラの処刑を取りやめさせαMO手術が成功した上で、という条件付きで戦力として迎え入れていたのはルークの意思だ。しかし、彼女が生きている事が知られればルークが並みの不祥事以上に国民からの支持を失うであろう事は容易に想像ができるのもまた事実。

いずれ何かの機会で国民に知られる、そうでなくても弱みとして他国の工作員に情報を利用されるような事態になる前にどこかで使い潰さなければならぬ人材であつたのだ。

だが、中々来ない来客を待つルークは、その事を考え複雑な表情を浮かべる。

——ねえルークちゃん、この国はこの国として生きていくのがいいと思わない？

ローマ連邦を作つたのは、このヨーロッパに生きる人々の意思の力ではなく、とある一族の陰謀。ルークもまた、それと深い繋がりがあ  
る立場だ。

——もし私が生きて帰つて来たらよ、そういう泥臭い路線もどうかしら？……どういう意味かって？

MO手術、他の生物の力を得るその技術。それを失敗、死の危険を無しに受けられるとしたら。

ルークもそれに魅入られ、他にも理由はあるが一族と協力をしている。それは、エレオノーラも知っていた事だ。だから、エレオノーラ

はこんな事を言ったのだろうか。思案するルークの一人の時間は、その直後に終わりを迎える事となった。

——悪い友達とは縁を切りなさい、と言ったのよ

「……残念だったな、ババア」

入口のドアが開き、来客が姿を見せる。それは、金髪碧眼の青年。頭の中に残る残滓を振り切るように、ルークは席を立ち、来客を迎える。

「さあ、これからの話をするでしょうか」

2620年8月 ドイツ 軍研究所

裏アネックスドイツ・南米第5班 生存者：7人

「そうか、あいつは死んだのかい」

「……はい」

MO手術の本場、ドイツ。裏アネックス計画においては幹部搭乗員に施されたαMO手術の施術、幹部搭乗員の専用装備の作成といった技術大国の面目躍如たる役割を果たしていた、主要国の一つ。

だが、実際に得た成果は彼らが最も少ないと言えるだろう。アネックス1号の第5班は早期に壊滅、その技術力を遺憾なく発揮して手術を施された重要な搭乗員であるエヴァ・フロストこそ戦死した班長、アドルフ・ラインハルトの能力を伴って帰還したものの、それはマイナスを多少回収できた、というだけで成果に繋がっているわけではない。

裏アネックス計画第5班は幹部搭乗員であるヨーゼフ・ベルトルトが火星に潜んでいた中国の子飼いの通称『裏切り者』のリーダーとの戦いで相打ちになる形で戦死、他搭乗員も『裏切り者』やテラフォーマーとの戦いで徐々に数が減っていき、最終的にはアネックス連合軍として戦った人員やエンジニア枠として基地に残っていて第3班の宇宙艦に乗り込んだ人員、今計画では日本と並び多い計7人が帰還する結果となった。

そんな生存者の一人、裏アネックス計画第5班の副官であったダニ

エルは、MO手術研究が活発に行われていた軍研究所、その中で一人の女性と話をしていた。

「可愛げの無い後輩だったが……フン、人の上に立つなんてらしくないマネをしたもんだ」

「……少なくとも僕にとつては班長は立派な方でした、ベルウッド博士」

静かに、あまり感情が伺えない表情で煙草を吸いながら、ダニエルと向かい合う白衣の女性、ジェシカ・ベルウッドは語る。

ダニエルの裏アネックス計画に関する国への報告はすでに終わっている。これは、彼の個人的な行動であった。U—N—A—S—Aで、火星への旅路で、火星で、ヨーゼフから聞いていた、研究者として駆け出しであった頃の先輩の話。

その本人に、自分の口から今回の話をし、そして自分が尊敬していた研究者の話を聞かせてもらおう、そう考えてここに足を運んでいた。αMO手術の研究を行うに当たって避けては通れないMO手術の技術と、αMO手術でのみ適性を得られる特殊な生物に多い高難度のものを扱うに当たったのノウハウ。

ヨーゼフが駆け出しの科学者であった頃、αMO手術の開発チーム主任であった頃、そのどちらにおいても様々なものを授けたのがこのベルウッド博士であった。

「αMO手術、か……開発が難航してる、つてのを最後に連絡は途切れちまったが、まさかあんな事をするとはね」

「……いつも、うなされていました」

軍研究所に居た頃のヨーゼフが、案外ドジを踏みやすいどん臭い奴だった、と酷評されていたり、αMO手術の研究をしていた頃でもまだ関係を断つてはいなかったり。子どもに関する相談事をして一蹴されていたり。

誰にも頼る事無く我が道を行く天才、と思っていた班長の意外な一面に、ダニエルは自身でも気づかない内にうっすらであるが笑みを浮かべてしまう。

「ところでアンタ、これからどうするかは決めたのかい？」

「ほう」

それは、ヨーゼフに関する話を終え一旦休憩、というタイミングで唐突に投げかけられた質問だった。

ダニエルは他の生存者たちと同じくU—N—A—S—Aに関する職を幹旋されている。

だが、彼は己の進むべき道を既に決めていた。

彼の尊敬する、今は亡き班長が、堅物の現実主義者が一度だけ、火星に到着する目前でダニエルに語った、その言葉。

——私はね、未来を救いたいのだよ

それをもう一度思い出し、火星で戦いを繰り広げ帰還した科学者の卵は静かにはつきりと、それを目の前の博士に言い切るのだった。

「ワクチン開発に携わりたいな、と」

2620年 5月 中国某所

裏アネックス中国・アジア第4班 帰還者：5名 生存者：0名（公式声明にてアネックス計画第4班班長劉翊武に呼応し裏切りを画策したとして全員処刑との事）

彼らは、苦境にあった。証拠は消した。多少の不都合は国の力で捻り潰す事ができる。だが、それでも限界はある。本来であれば、それは簡単に済むはずであった。千をも超える戦力を秘密裡に火星に派遣し前線基地を築き、裏アネックス各班のエンジンへの破壊工作と通信を分断し、後はアネックスと裏アネックス両方の他班を血祭に上げてミツシエル・K・デイヴスと膝丸燈を確保する、ただそれだけのはずだった。

しかし、その結果はどうだろうか。火星に派遣した部隊は裏アネックス各班連合の頑強な抵抗の前に敗れ去り、それは逆に中国が裏切りを手配していた証拠としてマイナスに働いている。裏アネックス第4班そのものも他班とテラフォーマーの攻撃によって壊滅状態に陥り、班長と副官が未帰還となっている。さらには、後始末の為に派遣した宇宙艦との連絡も途絶えたという。

隠蔽工作こそ行っているが、それもどこまで持つものか。政府、軍、

U—N A S A支局はそれぞれの対応に追われてんてこ舞いである。軍の一部が中国そのものと協力関係にあったとある勢力に敵対する勢力と手を結んだ、などという噂もまことしやかに囁かれており、内部にも不安を抱えている。

そんな予断を許さない状況。ここで、また同じく予断を許さない事態となっているとある施設の状況がこれである。

「は、はい……えつと……その……あーん」

「ありが……つて熱っ！ 熱いです一旦ストップですストップ！」  
「へたくソか！」

見晴らしのいい広めの病室のような一室、そこにいたのは、三人の男女であった。首に包帯が巻かれ、手足にギプスを付けられベッドに寝かされた青年。見るからに重傷、という彼はまともに身動きできない状態で顔に熱々のスープをかけられ悶絶している。

彼に慌てて謝るのは、ベッドの傍に立つ少女。その手に持っているのは、スープの入った椀とスプーン。少し照れた表情で青年にスープを飲ませようとしているが見事に失敗し、まるで拷問か何かのようにその顔にスープをかけてしまっている。

そんな二人に慌てて割って入るのは、青年と同じく怪我人で左腕にギプスを巻いている女性。

……予断を許さない状況である。

裏アネックス各班連合軍は裏第4班の宇宙艦で火星を脱出し、その中には裏第4班の生き残りであった彼らも含まれていた。

帰還中の艦内でどのような話し合いがあったのかは定かではないが、中国が国として裏切りを行っていた、という明確な証言を彼らは行わなかった事もあり、帰還直後にU—N A S A第四支局に回収されはしたものの処罰はされず、反乱分子として処刑した、という名目のためしばらくは表には出られない……という事で今この状況となっているのである。

「ああもう、あたしが代わりに……つてそんな顔すんなよ雅？……」

「鈴、雅？、とりあえず僕は大丈夫ですから……」

雅？の持つ腕とスプーンを預かろうとした鈴が、何故だか泣きそうな雅？の表情に後ずさり、青年、プラチャオはそんな二人を見て苦笑い。そんな、穏やかな第4班、であるが。

「プラチャオ君、してほしい事あったら言っただけ……私、何でもするから……！」

「オイオイ……何でもとか言ったらこのムツツリがとんでもない事言いだしかねないぞ」

「変な印象を与える言い方は止めてください鈴」

申し訳なさそうな雅？の声色に、プラチャオは一抹の不安を覚える。彼女は一度何者かの指示で自分達を裏切った。テラフォーマーとの乱戦のさ中で有耶無耶になってしまったが、それは裏アネックス、自分達第4班を含めた対裏アネックス、テラフォーマーという三つ巴にもう一つの勢力が存在している事を意味している。それについて雅？が語った内容は多くない。

彼女が属している、彼女の生まれでもある『ニュートンの一族』の分家、『槍の一族』と称される集団。

それは、一族全体とは別の方向を向いている勢力なのだという。

しかし、雅？もそこまで込み入った話は知らないそうで、深くまで情報を得る事はできなかった。しかし、それでも――

「……」

「……時間、ですね……行ってきます」

無言でドアを開け部屋に入って来た男が、無言で雅？に目を向ける。中国軍の上級軍人、凱將軍である。

それに付き従い、雅？は部屋を出ていった。

そう、それでも情報源としては有力なものなのだ。中国軍の一部と協力関係を結びつつある『ニュートンの一族』。それに反抗の姿勢を見せようとする『槍の一族』。存在そのものが謎であった彼らに関する情報は、中国としても喉から手が出る程欲しいものだ。そのため、雅？は連日半ば尋問めいたものを受けていた。

「……なんか凱將軍、火星から帰って来てから機嫌悪くない？」  
「焦ってるというか動揺しているというかなんというか……」

裏第4班は凱將軍とはアネックス計画以前から面識がある。彼らの上司であった欣が同じアネックス計画に携わる將軍という事で話し合う場が多く、班員であるプラチャオ達もそれに立ち会う機会が何度かあったのだ。

そんな彼らから見て、今の凱將軍は何かしらの不安を抱えている、そのように映っていた。

とは言つても今は国全体がドタバタしている状況だ、軍幹部である凱將軍も色々と大変なんだろう、雅？の事は心配だが怒りに任せて人に暴力を振るうタイプの人では無いからそこに関しては大丈夫だろう、と一応の納得をし、怪我人の二人は再び体を落ち着けた。

2620年 9月 U—N A S A 共同墓地

裏アネックスロシア・北欧第3班 生存者数 4人

「……お嬢、風邪引くぜ」

「もう少しだけ、ですから」

U—N A S Aの土地の一角に並べられた墓標。降りしきる雨がと空を多う灰色の雲が暗い雰囲気醸し出すこの場所で、エリシアとレナートはいくつもの花束を持って歩いていった。

今計画の犠牲者は多い。皆死を覚悟していた、と言えばそれはきつと嘘になるだろう。死を覚悟していても、死にたい、と思っていた人間など殆どいないだろう。死の瞬間というのは、どれだけ怖いものなのだろうか。

山のような自分と同じ顔の屍の山の上に偶然立つ事となったエリシアは、自分がマグレで死を乗り越えただけなのだと考えている。死というものがどんなに傍にあり、少しの不幸で触れてしまうものなのだ、と知っている。だから、それが叶わず死んでいった人達を、地球の未来の為に命を落とした人達に、とても申し訳が無い、と考えているのだ。

「皆、きつとそれぞれに守りたいものがあって、大事な人がいて……な



のに、ふふ、おかしいですよね？ 何も持っていないわたしが生き残って……ごめんなさい……」

また一束、墓に花を添え、エリシアは涙を流す。レナートはここにエリシアを送る事に反対であった。自分の境遇もあり死に対して敏感なエリシアは、傷つき自分を責めるのだとわかつていたから。

「何も無いなら、これから作りやいいいじえねえか。お嬢、まだ17なんだからよ……」

「……そうかもしれませんね、ありがとう、レナートさん」

レナートに笑顔を向けるエリシアであったが、それはどこかぎこちなく、やはりその言葉を完全には受け入れてはくれてないな、とレナートは内心で嘆く。

第3班火星派遣部隊の功績は大きい。アネックス計画では膨大な数のサンプルを手に入れ、A・Eウイルスの研究では他国の先を行く事が予想できている。一方エリシアとレナートの所属である裏アネックス第3班も、多数の生き残った人員を救出した上での脱出だ、ロシアのアネックス計画は自国への利益も他国への恩を売るという形でも多大な成果を上げたと言えるだろう。しかし、一つだけ不安要素が。

「しっかし、マルクの野郎がまさかな……」

「ん……何か言いましたか？」

「いや、独り言だ」

エリシアに聞こえないような小さな声で、レナートはごちる。

帰還後、数日して届いたU—N—S—A第3支局への抗議と搭乗員の出頭命令。

思い当たる節が何も無かったエリシア達が疑問を抱きながら向かった先で聞かされたのは、第3班の裏切り疑惑。戦闘中に行方不明となっていた副官、マルクが脱出を試みていた各班連合軍を襲撃した、という話であった。

勿論、班としてはそのような意思は無く、エリシア達に基地で救出された他国の搭乗員の後押しもあり、この襲撃はマルクが単独で目論んだ事である、という結論に落ち着いた。

疑惑自体はそれで済んだのだが、エリシア達には引つかかる部分があった。今現在第3支局ではマルクの素性について調べが進められているが、何も不審な情報は入ってこないのだ。特別な生まれというわけでもなく、裏アネックスに参加した経歴についても特に偽ったりしていた部分は無し。何らかの組織に属していたり接触していた、という情報も一切ない。全くクロの部分が見当たらないのだ。

では何故、という答えを出せるような情報も無いため、今は何も言えない状況だ。何とも薄気味の悪い話である。

「……これで最後、ですね。帰りましょうか……つてあうう!？」

「あれ? お姉ちゃん! お姉ちゃんじゃないですかあ!？」

最後の墓に花を添え、お祈りを済ませてレナートの方を向いた、その時であった。

エリシアの横腹に、人間の頭が突き刺さる。

その衝撃でよろめいたエリシアであったが、ぶつかって来た相手がエリシア以上に小柄という事もあり、倒れるまでには至らず。

「いたた……つて、え……あなた、ナタリヤ!？」

ぶつかってきた直後のその両手を背中に回し、お腹に抱き着く形となった突然の来訪者の顔を見て、エリシアとレナートはそれぞれ別の意味で驚きの表情を見せる。

エリシアよりもいくつか年下くらいの、小さな女の子。しかし、その顔はエリシアと全く同じであったのだ。

レナートは、顔が全く同じ、その事実には驚き。

「ナタリヤ……生きてたんですね!……よかったです……ナタリヤ……本当に……」

「わっ、お姉ちゃんいつの間にか感情豊かに……つて苦しいよお……」  
顔をくしゃくしゃに歪めて、死んだはずの妹、その一人を抱きしめるエリシアと、お腹に押し付けられる形で息が苦しくなり暴れるナタリヤ。

「あー……つまり、お嬢と同じ……」

火星で見た、第3班皆のアイドルであるエリシアと同じ見た目の、しかしおぞましい怪物のような存在であった彼女のオリジナル。エ

リシアから聞いた過去。それらを思い出し、レナートはナタリヤの素性を把握する。

「はい、お姉ちゃんの妹のナタリヤです！ はじめまして、ゴリラみたいな人！」

「ゴリ……」

「こら、ナタリヤ！」

エリシアの拘束をすり抜け、挨拶をするナタリヤ。天真爛漫な様子で毒を吐かれショックを受けるレナート。ナタリヤを叱るエリシア。そんなどこか微笑ましい状況ではあるが、エリシアはふと気になった事が。

「……ナタリヤ、どうやってここに来たのですか？」

「ん？ あ、『はかせ』に送ってもらったのです！ お墓参りがしたいそうで、わたしもお姉ちゃんに会えたらなーって付いて来たんですけど、本当に会えてびっくりです！」

「はかせ……？」

ナタリヤが指を差した方向、そこには一人の男性が傘を差して立っていた。白衣に片眼鏡が印象的な、なるほど博士だな、と言われると納得するその男性は、ナタリヤが指を差している事に気付いたのか、エリシア達の方に歩いてくる。

「ああ、こんにちは……ナタリヤちゃんのお姉さんですね。自分は今ナタリヤちゃんの保護者をやっている者です」

「どうもはじめまして……」

穏やかな笑みと共に腰を曲げ、目線をエリシアに合わせた男性は自己紹介をする。

ナタリヤの保護者。今ナタリヤはどんな状況でどんな生活をしているのか、それを聞こうとしたエリシアであったが、男性の白衣のポケットから鳴り響いた音が、それを遮る。

「はいもしもし……む、了解です。……ナタリヤ、主様からの招集です、行きますよ」

「えー……ううん、しょうがないですよね。また会いましょう、お姉ちゃん！」

エリシアとレナートが何かを言う暇も無く、二人は早足で背を向け去っていく。

しかし、数十歩は離れたか、というところでナタリヤが踵を返し、エリシアに駆け寄る。

「お姉ちゃん、これ、けーたいとか言うやつ番号です！　また色々お話ししよう！」

「……はい！」

ナタリヤが手渡したのは、メールアドレスと思われる物が書かれた一枚のメモ。それを大事そうに受け取ったエリシアに向けて手を振り、今度こそナタリヤは去っていく。

「良かったな、お嬢……あつたじゃねえか、大事なモンがよ」

幸せそうなエリシアに、レナートも嬉しくなり笑いかける。

だが、その直後にある事に気づき、レナートの顔は険しくなる。

帰路へと歩き出したエリシア、それに付き従いながら、一度後ろの墓場を振り向き、レナートは目を細めた。

「この墓地つて一般人にや知らされてねえし勝手に入れねえはずなんだが……」

2620年 10月 アメリカ 某所

裏アネックスアメリカ第一班 生存者数 4人

「初めまして。貴方のご先祖様だよ」

「えーっと、お嬢ちゃん、何を言っているのかな？」

ダリウスは、電波でも受信してるんじゃないか、というような事を言いだした目の前に立っている赤髪の少女に困惑した表情を浮かべていた。

裏アネックス連合軍として戦い、第四班の宇宙艦で国に帰ったダリウスを待ち構えていたのは、国の特務機関であった。チャーリー達班員が検査室に担ぎ込まれる中、ダリウスだけは特別待遇で薄暗い小さな部屋に放り込まれるというVIP待遇だ。そこでダリウスは、ある会議の中継映像を見る事となった。

何を話し合っているのか？　それは勿論、火星に投入された兵器が

無事に帰還してきた、さあ、これからも大事に使うか、それとも解体してしまおうか、という議論だ。

数ヶ月の話し合いの後の結論は、処刑は保留、だった。ダリウスは裏アネックス計画中自身の衝動で味方殺しをする事は無かったし、精神的にも安定していたので、元は死刑囚とはいえ計画での成果も考えてまだ生かしておいてもいいのではないかと考えられたのである。アメリカはアネックス計画で被害を出しはしたが何とか重要な部分は死守できた、という何とも言えない結果を残している。

裏アネックス計画では当初各国が勝手に増援派遣計画を考えていた、という経緯からアメリカと日本はそれぞれ独立した別の班となっているが、アネックス計画では1班と2班は日米の合同班だ。連携を考えるとこちらもそうした方が良かったのではないかと考えたが、時間の都合と1班の班長は元警察官……という事で死刑囚であるダリウスとはどうしても相性が悪いのではないかと、という理由から別々で活動する事になっていた。実際は仲は良好であったが。

結果として標的の二人は守られたため、上層部のご機嫌に左右されていたダリウスの命も繋がれた。

ただ著名人という事もあり世間に与える影響も鑑みてしばらくはこのお手伝いさんが掃除だのなんだのをしななければいけない何故か広い屋敷と呼べるような家で軟禁生活、という状態であった。

そんなある日朝起きると目の前に突然この少女が！ というのが今現在に至るまでの流れである。

寝起きで回らない頭。だが、そんなダリウスにもわかる事はある。

この少女は普通ではない、という事だ。

ダリウスが現在暮らしているこの家はダリウスが国家として公にできない存在、という事もあり他の家屋と隔離された辺境にあり、セキュリティもなされている。

そんなこの場所に、普通の人間が入ってこられようはずもないのだ。

髪は赤、まるでアイドルか何かのようなヒラヒラだらけの赤を基調とした服を身に着けた、歳は14・15くらいと思われるこの少女。

「ンン……信じてもらえないかー……折角会いに来たのに悲しいなあ」

「うん……普通信じないと思うよ」

ダリウスは布団の中でこつそりと姿勢を整える。もしこの少女が敵であった場合、不審な動作を見せた際には即座に迎撃の姿勢をとらなければならぬ。

「成程……証拠があればいいんだね？　じゃあ、お見せしちやおう」

ダウンナー系な少女の突然の証拠提示発言にやはり困惑しつぱなしのダリウス。しかし、その困った表情は少女が見せた『証拠』によって一気に変化する事となる。

「可愛い子孫のために朝食を作ってあげよう。たーんと食べな」

ベッドによつてダリウスの視界から隠されていたため気付かなかった、少女の足元に転がっていた袋。その中身を少女は取り出し、腰に刀か何かのように差していたそれこそ刀、というサイズのナイフとフォークを抜き出し、取り出したものを捌いていく。

「やめろ……お前……！」

「ンー……ダリウス君はレアが好きかな？　それとも生かな？　私と一緒に……だと嬉しいな」

洗練された動作でカットされていく、袋の中の食材。それに耐えられなくなり、ダリウスは少女に向けて飛びかかる。一瞬で左腕から毒針が生え、その体に変質していく。αMO手術による薬未使用の変態。もちろんこの軟禁生活では禁止されていたものだが、我慢ができなくなり、少女を刺殺さんとその白い喉に向けて針を一直線に付き出す。

……が。

「ああ……寝起きは機嫌が悪いんだ……私そつくりだね」

「がつ……!?!」

瞬間、ダリウスは壁に叩き付けられた。それは、ダリウスの能力に類似した、音による物理的破壊、もしくは衝撃波のような何か。その勢いで部屋の家具はぐちゃぐちゃに吹き飛び、当然少女の足元にあがる袋の中身、人間の腕、脚、胴体、頭、といったものも部屋にばら撒

かれる。

「……そうそう、この子、お手伝いさんのサリーちゃんって言ったわけ……『ダリウスさんに手を出さないで！』みたいな事を言ってたよ」  
床に落ちた頭、生前は美しかったであろう苦痛に歪んだ表情のまだ年若い少女の無残なそれを手に取り、ナイフとフォークを手に少女は笑う。

「これはきつとダリウス君に気があったんだらうね……それならきつと」

壁に磔にされたダリウスの体はみるみる内に完全な変態の姿への変わっていく。激しい怒り。それは、少女がその先に何を言うのか、わかってしまったから。

「さぞかし、君にとっては美味しいんだらうね」

「貴様アア!!」

……この生活になってからダリウスと日常的に仲良く話していた何の罪もないお手伝いの少女を殺された事、そして何よりも彼の深い部分に触れた事、それによって頂点に達した怒り、その衝動のままにダリウスはその能力を解放し、出力を制御せずに撃ち放つ。全力ではあるが『薬』を用いない変態であるため、それはダリウスの肉体を破壊する、という程の出力は無いが、それでもこの屋敷を崩壊させるくらい出力はある。

当然、目の前の人間一人など軽く消し飛ばすそれは、少女に襲い掛かり。

「……ご立派だね。私も鼻が高いよ」

「……」

……そして、少女は平然と立っていた。

原理は簡単なものだ。ダリウスの専用装備と同じ、逆の位相の音を当てる事で音を打ち消す。消音装置に搭載されているシステムと同じもの。理論上は、爆音を放てる生物の能力を持っていれば可能な事。しかし、それはコンピュータの制御によってなされるものであ

り、人間の身にできるものではない。

その可能性を否定しようにも、少女の背後の建物が何の被害も無く健在である、という所から何かで耐えたわけではなく、音そのものを打ち消した、という事実が突きつけられる。それと、ダリウスの攻撃の瞬間に少女の額から生えた触角にも。

「……疲れたから今日は帰るよ、可愛い子孫。……君もきつと歌が上手いんだろうね、今度会う時には聴かせてくれると嬉しいな」

急激な能力使用の負荷で地に膝を突くダリウスを愛おしげに見つめ、少女はダリウスの背後、打ち消されなかつた能力によって破壊され空が顔を覗く屋敷の破孔から部屋を出ていく。

茫然と座り込むダリウス、部屋に飛び散る人間の残骸。それはまるで、かつての彼が料理をした後のような光景であった。

2620年 11月 U—N—A—S—A

「……以上が裏アネットワークス計画各班の報告と今後地球におけるテラフォーマーの……」

薄暗い会議室で資料を作っていた青年は、腕時計を見てもうこんな時間か、と一度息を吐き、立ち上がる。

部屋を出て数人の同僚と挨拶をし、U—N—A—S—A内の医療施設、その一室へと帰宅する。

割り当てられた宿舎はあるが、彼の帰る場所は最近はおつぱらこことなっていたのだ。

「おかえりなさい」

「……おかえり」

ICカードを通してドアを開け、中に入った青年に、病室のベッドで寝ている女性と入口近くの椅子で座っている青年が同時に出迎いの挨拶を向ける。

いつも出迎えてくれる二人、それに穏やかな幸せと友情を覚え、青年はそれに答えた。



未来の地球を襲う脅威に立ち向かう人々の、時を変え場を変え繰り広げられる、地球で紡がれる奇譚。

……その華々しい活躍の物語の裏で繰り広げられた、戦いの物語。これは、その第二幕の始まりの物語である。

「ただいま、静香、拓也」

## EXTRA

### とある世界

2620年 U—N—A—S—A

「短い間でしたが、貴女は素晴らしく成長しました。我々の背中を任せるのに何の不安も無い程に」

「本当に、ありがとうございます！」

がしつと力強く握手をする男女。

両者の背後では、二人の所属するそれぞれの班のメンバー達がそれに立ち会っていた。

「……そろそろ時間だ、行くぞ、デートハルト」

握手をしていた片方、筋骨隆々の巨漢の背後に立っていたコートを来た男、彼の上司である班長が、彼の肩にぽんと手を置く。

「アイアイサー、ボス」

それを聞いた巨漢は振り向きながら一度首を縦に振り、握った手にもう一度だけ力を込め、それを離れた。

アネックス計画ドイツ・南米第5班。その戦闘員の筆頭たる男、『デートハルト・アーデルハイド』。彼はにいと一度笑い、改めて目の前の少女へと目を向ける。

「任せました！ 誰にも、貴方達の邪魔はさせないと約束します！」

それを受け、もう片方、筋骨隆々の少女もまた、巨漢の目を信頼に溢れた目で見返す。

これが数ヶ月前まで自信なさげにおどおどしていた病弱で気弱な人間だったとはもやは誰も信じるまい。

目覚ましい成長に、彼女の背後に控える部下達はさぞ誇らしい顔を……していなかった。

裏社会を生きてきました、という感がありありと伝わって来る、凶悪な人相を人々。

ただ、その表情は凶暴とは遠く、喜んでいいのか。それとも他の感

情を出すべきなのか。皆どこか複雑そうな顔をしている。

アネックス計画を支援する追加戦力、裏アネックス計画。それを構成する部隊の一つ、ロシア・北欧第3班。腕の立つ犯罪者が揃った戦闘という一点に絞れば間違い無く精鋭も精鋭というこの部隊の隊長を務める少女、『エリシア・エリサーエフ』。

数ヶ月前まで、彼女は班員の庇護の対象であった。テラフォーマーにこそ通用しないものの対人戦に置いて凄まじい殲滅能力を誇る強力な手術ベース。しかしその実力の一方で本人の身体能力は低く、それをそのまま表したかのような触れれば壊れてしまいそうな色白の肌と痩せた体。

『戦闘能力』で言えば間違いなく彼女は班員を束ねるだけの強者である。しかし日常生活において、その優しく、しかしおどおどとした性格とか弱さ、ついでに可愛らしさは班員達を引きつけてやまない。やまなかった。

「オイ、デイトハルト」

「……おう、レナート」

握手する両者は、それぞれの所属へと戻ろうと互いに背を向けた。だが、そんなデイトハルトに乱暴な調子の声がかけられる。

それに答え名を呼び振り返るデイトハルト。そこには、デイトハルトには及ばないものの筋骨隆々の大男が、優し気な雰囲気、デイトハルトとは真逆の凶悪な人相で立っていた。

『レナート・ベレゾフスキー』。裏アネックス第3班の二人の副官、その片割れである。

エリシアが自分の体力の無さ、それによって集団で動く際に班員の足を引っ張っているという事を気に病んでいた事を聞きつけた彼が、今のエリシアをこうなるようにした張本人。ある意味では元凶と言える存在である。

ビキビキという効果音でも聞こえてきそうな表情で、レナートはデイトハルトに近づいていく。

それに、アネックス第5班の班員達は不安そうな表情を浮かべる。今ここで喧嘩沙汰になるのではないかと、と。

先に手を出したのは、レナートだった。

……誤解がある。手を出した。それは、殴りかかったとかそういう意味では無く、言葉そのまま、腕を前に差し出した、という意味だ。

デイトハルトもそれに応じ、差し出された手を握る。

「死ぬんじゃないぞ」

「お前もな」

互いが本気で力を込めて手を握っている。それは両者の腕の筋肉の張りとし刻みな震えから伺える事だった。

根負けしたレナートがそれを離し、相変わらずだテメエは、と凶悪な表情のまま口端を歪め、デイトハルトもそれを返す。

……何だかよくわからないが、これが彼らなりのコミュニケーションなのだろうか。ほっと息を付いた第五班の班員達。少し呆れた様子の、彼らの班長。

レナートは、エリシアの体を鍛えたいという願いを知り、それを託せる相手を探していた。その過程で見つかり、激突を経て了承を得たのが、デイトハルトだった。

そしてエリシアの肉体改造計画は始まり。その結果が今のこの状況だ。

か弱かったお姫様はこのような経緯によりこの筋肉がすごい表裏アネックス編々の女性部門1位を誇るマッスルへと成長し、そのランキングは2位の強者を総合評価で上回り新たな2位へと就く事となった。

どうしてこうなった。

最近あのデイトハルトが未成年の女の子に熱を上げている。そんな尾ひれの付いた噂を面白がって見に行った彼の同僚は最初こそまあ言葉遊びの誤解だよね、と納得し微笑ましくエリシアを眺めていたが、見る見る間に筋肉が付き始めて何故か身長まで大幅に伸び変貌

していくその姿に何も言えなくなった。

エリシアの部下達は自分達に迷惑をかけないように苦手な運動を頑張りたい、というその気持ちに尊い……とさめざめと涙を流しさらに団結を深めていたが、見るたびに強そうになっていく（マイルドな表現）その姿にこれまた何も言えなくなった。

かくして、テラフォーマーの甲皮を己が筋肉で貫き毒を体内に流し込む強者、裏アネックス第2位、エリシア・エリサーエフは完成した。別れを交わす両者。アネックス一号出発の刻限だ。次に会う時は、師弟では無く共に背中を預ける戦士として。

そして、人類の未来を賭けた戦いに臨む宇宙艦は空へと飛び立っていった。

……そして、それからわずかな時を経て、彼女にも出発の日が訪れる。

「全隊、整列！」

掛け声と共に、6つの宇宙艦とその前に立つ6つの集団、その先頭に立つ、いずれも譲らぬ強者たちが、号令を出す。

「北米第1班、準備完了だよ」

赤毛の青年が、背後の班員達を見て、その緊張する姿に愛おしそうに微笑み、号令を出す。

上位戦闘員の数こそ多くは無いが、裏アネックス最強の戦力を保有する班である。

「日本第2班、問題ありません」

腰に太刀を差した少女が、凜とした声で。

あれ、あいつここだっけ？ などという班員のおしゃべりが聞こえたため、それをちよつと困った顔で手で制しながら。

「ロシア・北欧第3班、大丈夫です！」

筋骨隆々の少女が、力強く。班員達も威圧的な気配に溢れ、早く暴れさせろとも言いたげだ。

「中国・アジア第4班。仔細無い」

大柄な、見るからに厳格な武人という面持ちの男が、静かに告げる。何故か、定員より一人少ない気がするが。

「ドイツ・南米第5班。準備は万全です」

マントを羽織った真面目そうな青年が、覚悟の面持で静かに頷く。戦闘員こそ少ないが、MO手術関係の研究員の技術では他の追従を許さぬ技巧派の班だ。

「ヨーロッパ・アフリカ第6班。大丈夫よー」

のほほんとした空気さえ醸し出す、先頭に立つ老婆。だが、殺気という点では、どの班長よりも強い。

背後に続く班員達は、言葉一つ無く、動きの一つも無い。

裏アネックス計画。地球を救うための部隊の戦力増強として、裏ではアネックス計画の背後に潜む『裏切り者』を排除するために計画された、舞台裏の戦士達。

それぞれの目的を抱き、彼らは宇宙艦に乗り込んでいく。人類の存亡をかけた戦いが、今始まろうとしていた。

『なあんて、皆クソ真面目だよねえ！』

ライブ中継！ と右上に表示された、今まさに裏アネックス計画宇宙艦が飛び立っていく様子が映し出されたモニター。その横のもう一つのモニターでは、一人の人間が映っていた。

それは、ただ者では無いと同時に、ただ者である、と表現するのが相応しい、一人の少年だった。

西洋人系の少年だ。白衣を着ている事以外にこれといって特別説明する事も無い、道ですれ違っても数分もすれば忘れてしまいそうな、そんなどこにでもいる容姿。

「……私には、関係の無い事だ」

何がおかしいのか、ハイテンションでケラケラ笑うモニターの向こうで笑う彼に対し、男は感慨も無く、感情の籠っていない声で返す。感情が籠っていないのは声だけでは無く、その目もまたこの世界に絶

望しきつた、とでも言いたげに、酷く濁っている。

『つれないなあ！ もっと楽しく行こうよ！ それが僕らだろう？』

先程の映像。宇宙艦が飛び立っていくだけであれば、それはごく普通の中継映像と言えただろう。

重要な部分は隠蔽されているとはいえ、火星へ人員を派遣するといふ大それた計画なのだ。メディアが注目しないわけが無い。

……だが、明らかにおかしい点は、その数分前にあった。

『ところでさあ、なんか反応してた気がしたけど、君、ロリコンなの？ それとも筋肉フェチ？ 僕はどっちも違うから期待に答えられないよごめんね！ ああでも僕ら全体としては大丈夫！ 下半身が大好きな人とかいたし！ もう死んじゃったけど！』

「……」

数分前、モニターには、その計画の参加人員が映し出されていた。

そう、一般には公開されるはずも無い情報を、紹介と共に添えて。

班員達の手術ベース。死刑囚、実験体のクローンといった一般に公開されようはずも無い幹部搭乗員の経歴。

それが、今モニターから男に話しかけている彼の声で、面白おかしく語られていた。

『だんまりかよ！ わかったわかった、話を変えるよ！ ……キミの夢、いいよね！ 『世界を滅ぼしたい』だなんて、まるで小学生みたいだ！』

「ああ、そうだとも。私は、世界を滅ぼしてやりたい」

『そんな君は僕ら『アダム・ベイリアル』には向いてないんじゃないかな？ でもいいよ、面白おかしく、君のカワイソーなお涙頂戴の過去なんてどうでもいいけど、おもしろおかしく、皆で世界滅ぼすプロジェクトなんて楽しいんじゃないかな！』

男は、独り言でも呟くように吐き捨てる。

『アダム・ベイリアル』。それは、一種の称号だった。世界でも特に優秀な科学者に贈られる、ある種の天才の証明と言ってもいいだろう。だが、それが世界で賞賛され、羨望の目で見られる事は無い。

研究のためならば家族も友人も研究材料とし、戦争すら引き起こ

す。それを日常的に行う狂人。

何が目的でそんな事をするのか、と言われれば、人々はこう答えるだろう。

『名誉のため』

『誰かのため』

『欲望を満たすため』

では、彼ら『アダム・ベイリアル』にそれを聞くとしよう。答えはこうだ。

『何となくだけど?』

彼らに、大層な動機など存在しない。刹那的な快楽。衝動。何となく。

それは、物語に登場する正義の味方のあり方などでは当然なれば、悪の組織のあり方でもない。

しいて言えば、人格破綻者のそれだ。

それに加えて個々人の感情こそ入って来るが、総括すれば『悪ふぎけ』以外の何ものでもないのだ。

『僕らからすれば、復讐なんて立派すぎて目が潰れちゃうよ! キミは何て人格者なんだ!』

「……私を招きいれてくれた事に感謝はしている」

『でも、たった二人? いや四人だっけ? それだけの命を何十億人と交換だなんて、算数できてない感凄くて大好きだよ!』

男は、優秀な科学者だった。それこそ、天才と言われてもおかしく無い程に。

だが。その道はたった一度の不幸により崩れ落ちてしまった。

そして男は門戸を叩いた。輝かしい学会を捨て、いいやもはや表の社会に帰る場所も無かったが。

この、狂人達の集会場へと。彼の功績はその狂人の先達たちと比べて小さかったが、それでもと。

『うんうん、感謝してくれたまえ! ……あ、あと僕ん家の軒下貸して



る同居人が君に会いたい会いたいって煩いんだけど、何とかしてもらえる?』

「それはすまない」

彼の話聞き流し、男は目線をモニターから外して己のデスクへ移す。

いくつもの素朴な写真立てを順々に見ていく。

赤ん坊を抱く男と、笑顔の女性。友人二人と男の三人。どこかの幼稚園か、子ども達と男。

『あーあー、もう話聞いてないなこりや……じゃあ、まあキミも近い内にわんわんに狩られちゃうだろうけど、どうかよき終末を、アダム・ベイリアル……ごめん頭文字被って言いにくいや』

その言葉はもはや男には聞こえず、頭の中は、幸せな記憶とそれを奪われた時の記憶、その二つが交互に回っていた。

一度、自分に言い聞かせるように、もう一度頭の中へと説明するかのように、呟く。

「私は、未来を奪いたいのだよ。彼女達への手向けとして」

同時に、最後の言葉を残し、モニターからの通信は切れる。

真つ暗な部屋。そこには、董色の宝石がはめられたペンダントを握りしめる、一人の男だけが残された。

『じゃあね、アダム・ベイリアル・ベルトルト……ヨーゼフ・ベルトルト君』

## Mind Game：プロローグ 二局の理

——2618年

「そんな感じで酷いものでまったく、もう！ ……聞いてるっすかオリヴィエ様？」

「ふむ？…これはこの盤面で打つのが強いのかな？」

——私の渾身の愚痴が何一つ聞かれていない！

地の底に築かれた施設、『神殿』と称されるその最深部で、玉座に座る青年とその傍らに控える女性は言葉を交わしていた。

王とその側近。玉座に座る人間と傍らを許された従者というこの立ち位置からそのような場面を想像するかもしれない。事実、表現としては八割がた正しい。だが、今現在ここに集っている人間とその様相は厳粛なイメージを与えるそれからは大きく外れていた。

「……希？、何か言ったかい？」

「……何でもないっす」

先ほどから己の主に対してひたすら親戚の愚痴を吐き続けていた女性、希？は己の主、オリヴィエが完全に話を聞いていなかった事にまあそうだよな、と内心で納得しながら怒りの感情を引っ込めた。聞かれていなくとも吐き出すだけでもすすきりする部分はあるのである。

その興味は、自身の事からオリヴィエが己の膝の上に乗せああでもないこうでもないと弄っているゲーム盤と駒に移っていた。

「どこで拾ってきたんすか？ 随分と凝った作りみたいっすけど……」

「『おしやべりロドリゲス君』と一緒に入っていたんだよ。プレイ人口を増やしたいそうだ」

そんなオリヴィエの傍には、紙の皺一つない美しい包装が可愛らしいリボンで飾られたプレゼント箱が置かれている。

オリヴィエの部下の一人、太った修道士を模した人形（しかも喋る）。恐らく確実に失敗するであろうプレゼントだが、今日の業務に

疲れた彼女にはそれについて言及する事は無い。

「へえ……今は世界で何人くらいなんすか？」

「地球外に二人、だつてさ」

いやその時点でダメつすよねこのゲーム。希？のツツコミは喉まで出かかつて霧散する。

何というか、色々と疲れてツツコミをする元気が無いのだ。

それは、希？の今日の仕事量が多かった事もあり、オリヴィエが話をする為に呼んだ人間のせいでもあり。

「……希？様。今日はもう一人、客の予定が」

まあ疲れはしたけど今日の面倒な部分がようやく終わった、と大きく伸びをしていた希？に、眼下から凜とした、だがどこか暗い調子の声がかけられる。

「忘れていたかった事を思い出させないで欲しいつす」

渋い顔をした希？は声の主へと露骨にげんなりした様子で返答する。声の主はそれに対していやしかし、と言葉を作るが、そこで希？の心境をくみ取ったのか、口を閉じた。

そこには、まだ10歳に満たない年齢ほどの外見の少女が一人、片膝を付き顔を上げ希？を、正確にはその横に座すオリヴィエを仰ぎ見ている。

身に纏う和装と腰に差した刀、艶やかな黒髪から古い和の雰囲気を感じさせる少女。だが、その目は世界に対する失望を映した薄暗い光を宿し、華美な和装は元の模様よりも乾いた赤黒い色が目立つほどの返り血に染まっている。

そして、頭と細い手足に巻かれた赤の滲んだ包帯から、重傷を負っている事が伺える。

「君は大切な客人だし、怪我も治ってないんだ……ミルチャ君がうるさいから元気になったら帰ってもらわないといけないけど、それまではゆっくりとしてくれていいんだよ？」

まあまあ、と希？を手で遮り、オリヴィエは心配した様子で少女を見る。

「勿体無いお言葉です。しかし、貴方様に救われ捧げたこの命、この矮

軀の一片が擦り切れるまで精一杯の奉仕をさせていただく所存」

「……オリヴィエ様、いいんす、いいんすよ。次のお客も厄介者つすから、警備としてしてもらいましょう」

うーん無理しなくてもいいんだけどな、と悩む様子のオリヴィエ、熱の籠った視線と静かな熱弁という字を見れば矛盾していそうな言葉オリヴィエにすらすらと向ける少女と交互に見て、希？は生暖かい視線で少女を見て、オリヴィエに進言する。

『この子、怪我を押しでもオリヴィエ様の傍にいたいだけなんすよ』という答えは語らず。

私の気付かない所によく目が利く君がそう言うなら、とオリヴィエは納得し、それ以上少女に対して言葉を続ける事はしなかった。

「……ところで、オリヴィエ様、希？様。その汚物を処刑しても？」  
場は纏まったものの、静かな調子で恐ろしい事を言いだした少女。腰の太刀に手をかけ、ちらりと刃を覗かせる。

それにびくりと反応した、先ほどから言葉を発していないこの場に  
いるもう一人、中年の男性を、少女はオリヴィエに向けていたものとは一転、冷酷な目で睨み付ける。

「ダメっす」

「だめだよ」

「御意に」

小さい子を叱る調子の二人に負け、目を伏せ素直に太刀を鞘に戻す少女。ほっと息を付く男性。

わずかな微笑ましさと物騒な空気のアクセント、そんな和やかな空気。

「やあやあこんばんは、皆さまー」

その空気は、この場所、オリヴィエの玉座たる『生命樹の間』に唐突に響いた声により、剣呑な雰囲気纏う事となった。

「……」

「おやおや、希？ちゃん様だったら冷たい目で俺の事を睨んでおられる

！ おお怖い怖い〜」

開いた自動扉。そこを潜って中に入ってきたのは、袖の長い、虹の七色で染められた道服を身に着けた白人の青年だった。

「……はて、皆様の反応が冷たい……ああ、成程、自己紹介をしていないからか！」

青年は額に皺を寄せ、考え込むように左手を頭、その上に乗っている開花しかけの蓮の花を模した形状の黒色の帽子を触る。孔雀の羽のように無数の目玉模様が覗くそれを何度か撫でた後、青年は気付いた、とポンと手を打ち、にこりと笑う。

「では、改めて。アポリエール家が枢機卿、アヴァターラ・コギト・アポリエール。オリヴィエ様に忠を獻ぐべく参上いたしました」

片膝を突く形で跪き、厳かな様子でオリヴィエに挨拶をする青年、アヴァターラ。だが、その真摯に忠誠を示しているはずの姿は、どこか軽薄に映る。別に、先の態度がどうという訳では無い。

この男は最初から今に至るまで、周囲に酷く空虚な印象を与えていた。

「よく来たね、アヴァターラ。術後の調子はどうかな？ それとも、外の世界の空気は美味しかったか、と聞くべきかな？」

「オリヴィエ様もご壮健で何より。ジャパニーズザシキローとかいうアレはあまり快適では無かったですね、久方ぶりの外はそれはもう！ アメリカにフランスと、ゲガルド家の予算でたっぷり堪能しましたとも！」

嬉しそうなアヴァターラとうんうんと満足そうに頷くオリヴィエ。楽しそうな両者に、今ここにいる人間で割って入れる者はいなかった。

「——して、俺に何をお申し付けで？」

「君が私が今ささやかな遊びに参加してるのを知っているかな？」  
「寡聞にして存じませんね」

しよぼんと申し訳なさそうにアヴァターラは頭を下げるが、オリヴィエはそれに何も反応せず話を進める。

「まあ、ボードゲームみたいなものなのだけど、君にはそれに参加して欲しいんだ」

「ほう、それは心躍る！ 将棋ですか、チェスですか！ もしかしてリバーシとか？ 良いですね、歩兵からキングまで何なりとご指名を！」

この食わせ者が。表情にこそ出さないが、希？はアヴァターラに冷徹な分析の目を向ける。

オリヴィエ様はささやかな遊び、ボードゲームみたいなもの、としか言っていない。それだけで、自身をどのコマにでも、と。それは、己がコマとして戦場に送られるゲームであるという事を即座に把握した、もしくは事前に把握していたという事に他ならない。どちらにせよ油断ならない、と警戒を強める。

「いいや、君はコマじゃない」

「ほう？」

「おや？」

次いだオリヴィエの言葉に、アヴァターラと希？は同時に驚きの声を出す。

実際に目にした事は無いが、希？はアヴァターラの受けた手術とそれによってその身に宿した生物を把握している。

対戦開始後に駒が減<sup>死</sup>りはすれど増<sup>増</sup>やす<sup>派</sup>事はできない、チェスの如く使用できる戦力が制限された戦争。そう表現できる今オリヴィエが興じているゲームのルールに、アヴァターラの能力はこの上無く適している。

だと言うのに、彼を参戦させないと。槍の一族、ゲガルド家と共生と言える関係にあるアポリエール家。その中でも特級の危険因子である彼は、しかし本人の目的からオリヴィエを裏切る事はしないだろう。当のオリヴィエも、それはよく知っているはず。だから、コマとして彼を選ぶ事に不安などないはずだ。そう思っていたのだが。

「詳しく聞かせていただきましょう」

「勿論だとも」

その後には語られたオリヴィエの言葉、アヴァターラが果たすべき役割に、希？はなるほどと納得し、アヴァターラは左様ですか、とぱあつと笑みを満面に浮かべる。

「……では、私の『救済』も自由に？」

「ああ、君の好きにするといい」

いよし！ とガッツポーズをするアヴァターラ。もし君が死んでも身元を誤魔化せるレベルでね、とオリヴィエは付け加えるが、それを聞いているのか聞いていないのかは不明である。

「では早速準備を！ ……時に、オリヴィエ様」

「何かな？」

「貴方の求める世界は、新たなる神として築く世界の図にお変わりは無く？」

空気が、再び変わった。オリヴィエとアヴァターラ、両者の間に漂う空気こそ先ほどと変わり無いが、その周囲がまるで温度が下がったかのように冷たいものを纏う。

「……うん。もうすぐ叶うだろう」

「そうですか。では、我が忠義は揺るぎないでしょう」

ああ、大丈夫か。希？がほつと息をついた、瞬間。

「君は、この戦い、誰が勝つと思う？」

「ふむ、オリヴィエ様、エドガー様、白か黒、いずれ神に至らんとする人類の極点、ニュートンの強者……」

もはや、先ほどオリヴィエの参加しているゲームについて知らない、という嘘を突く事すら止めたらしい。

オリヴィエと対戦相手の名を出し、さてどうしようかと思案する。

「悩ましい。では、俺はこう予想させていただきましょう」

顎に手を当て、悩むように。しかし一方で、答えなど最初から決まっている、そのような態度で。

アヴァターラは、答えを口にする。

「ただの、人間に」

「――」

「……！」

目を見開く希？。一瞬啞然とし、即座に殺気を滾らせる少女。

ただ、薄く笑うオリヴィエ。

オリヴィエに忠を誓う二人の感情をどこ吹く風と、オリヴィエにだけ注目し、アヴァターラは言葉を紡ぐ。

「オリヴィエ様。貴方の目指す世界は、素晴らしいものだ。全てが賢く、争いも無い。それが永劫続くなど、まさに楽園と呼べる。だが、酷くつまらない」

「オリヴィエ様を侮辱するか、下郎！」

瞬間、アヴァターラの右腕が切り飛ばされ、それだけで止まらない威力は無防備となった脇腹を引き裂き深く内部に達し、臓腑と血液を散らせる。

一般の人間の反応速度を遥かに上回る剣閃。それを振るったのは、興奮した様子で荒く息を付く少女だった。しかし身に受けた傷が重いのかそれ以上の追撃を繰り返す事はできず、憎しみを込めた瞳を向けながら太刀を杖替わりに何とか立っている、という状態だが。

「根拠などありませんよ。ただ、俺は信じたいのです。愛おしいのです。可能性がいくら低くとも、輝く星のごとく在って欲しいのです。愚かで、鈍間で、学ばなくて、でも、天使なんかよりずっと慈悲深くて、神なんかよりずっと全能で、悪魔なんかよりずっと狡猾な彼らの可能性が」



間違いない致命傷。だが、それを意にも介さない様子で、アヴァターラは熱の籠った口調と目でオリヴィエに訴えかける。

「ああ、楽しみだ。不老でも無ければ不死でも無い、しかして不滅の槍の王よ。貴方が、ニュートンの一族が、愚かな旧世代と見下す人間に敗れ去り、全能感を、妄執を、その全てを砕かれ滅びる、その瞬間が」

何も言わずただ微笑むだけのオリヴィエに背を向け、アヴァターラは部屋の外に向けて歩き出す。

「オリヴィエ様。『第四研究所』に、二十数名の武装した兵士が」

しかし、彼がそのままスムーズに部屋を出る事は無かった。

片眼鏡に白衣といういで立ちの科学者然とした男が、かつかつ足音を響かせながら玉座の間へと入って来る。

「……では早速、力を見せてもらおうつす。アヴァターラ、博士。大口を叩いた分、オリヴィエ様を失望させないよう励む事つすね」

オリヴィエの名代として静かに告げる希？の声に、勿論、と答えるアヴァターラと、これまで無言を貫いていた博士と呼ばれた男性。

彼らは、来客を出迎えるため、それぞれの『薬』を持ち上層へと向かって歩いていくのだった。

「貴方様の忠実なる僕、共和国親衛隊第一連隊長、オリアンヌ・ド・ヴァリエー！ 罷り越しましてございますッ！」

「貴様、何度煩いと言っても聞かんのだな？」

道のど真ん中であるというのに武器を傍に置き跪く女性を見下し、車から降りた高級スーツを身に着けた男は顔をしかめる。

女性の声が余りにも大きく、耳に障ったからである。

彼を一言で表すのならば、燃え盛る鬣たてがみを持った獅子。60歳程の、しかし老人と呼ぶには余りにも強い覇気が、場を包み込んでいた。フランス大統領『エドガー・ド・デカルト』。フランスという一国を総べる長にして、『ニュートンの一族』の一翼を担う者。

一族の中でもジョセフに並び立つ程の優秀な男であるが、一方で一族全体からは敵意の目を向けられ時に命すら狙われるという特異な立ち位置でもある。

世界を裏から操るとまで言われているニュートンの一族。彼らに命を狙われ、何故エドガーは未だ健在なのか？

……その事実そのものが、この男の絶対的な強さを偽る事などできようもなく示していた。

「今日も私が、私の家族が、平穩に幸せを噛みしめる事ができているのは、全てエドガー様のご威光があつての事！ 学も無い、貴方様を讃え感謝をお伝えする詩を紡ぐ才も無い！ なれば、私に示せる貴方様への感謝はこの身と気合で張り上げられる声だけでありますれば!!」

180cmを超える長身に、筋肉の塊、と呼ぶのは少しオーバーな表現だが、体中にくまなくついた厚い肉。そして、儀礼用の軍服では無い、プレートアーマー、西洋甲冑という明らかに目立つ外見。

大統領および大統領府を護衛する役割を担う警察組織にして軍の一つ、フランス共和国親衛隊第一歩兵連隊。その長を務めるのがエドガーの眼前で大声を張り上げるこの女性、オリアンヌであった。

「黙れと言ったのが聞こえんのかッッ！」

それに対し、エドガーも大声を上げる。

凄まじい怒気が場を支配し、エドガーを送った公用車の運転手が、付近の護衛の兵士が、口から泡を吐いて倒れる勢いで青ざめる。

「はッ！ ！無礼をお許しください！」

それに対し、オリアンヌは跪いた姿勢からもう一度深く頭を下げた後、素早く頭を上げ口を噤み、エドガーを見上げる。

「……貴様に、任を与える。受け取れ」

「……」

まるで、下々に下賜するかのようになり、エドガーは跪いたままのオリアンヌに向けて紙の束を落とす。

それをキャッチし損ねて地面に散らばったのをあわあわしながらかき集めるオリアンヌに舌打ちをしながら、エドガーは待つ。

本来彼は相手に合わせて待つ、というような慈悲を見せる人間では無い。こうして貴重な己の時間をただ待つ事のみを使うというのは、それだけの利用価値をオリアンヌに見出している、という理由からだった。

「受けるか受けないかは、貴様の自由意思に任せるとしよう」

断られても構わない。フランスの、エドガーの個人的な人脈で、代替となる人間はあっさりを用意できる。喧しく己を讃えようと毎度毎度必死に騒ぐこの女の忠誠心がその程度だったと確認できる、というだけだ。

「返事を聞こうか」

「……」

最後まで目を通した事を確認した後少しだけ待ち、エドガーは回答を求める。時間にして、五秒程。この時間で即断できないような人間に、己が庭の守りを任せる価値は見いだせない。

「ほう、流石の貴様も命は惜しいか」

無言を貫くオリアンヌに、エドガーは侮蔑の笑みを向けながら声をかける。

まあ仕方がない、と内心で次の人材を探しながら。

「……！……！……！……！……！……！」

「……」

しかし、そこで様子がおかしい事に気付いた。オリアンヌが何やら慌てている。無言のまま。……無言。

それに気づいたエドガーは一つ舌打ちをし、そして。

「その喧しい声を上げる許可をくれてやる」

「ありがとうございます！ わが身に溢れんばかりの大任、感激の至

り！　どうかエドガー様、座して結果を御覧じていただきたい！　貴方様の敵は、全て私が踏み砕いてみせましょう!!」

滂沱と涙を流しながら、感動で声を詰まらせなお周囲に響き渡る声量で早口でまくしたてるオリアンヌ。

先ほどの黙れ、という命令を忠実に聞いていたのである。

「ツ！　エドガー様！」

「……ほう」

その、傍から見れば何が何やらよくわからない主従。この後にある人物を迎え入れるべく嚴重な警戒態勢が敷かれているため、蟻の侵入も見逃さない……はずだったのだが。

オリアンヌが立ち上がるのと、エドガーが傍に控えていた兵士の腕を掴むのは、同時だった。

次いで、オリアンヌが駆けだすと同時に、エドガーに、正確にはエドガーが盾としたお付きの兵士に、銃弾が突き刺さる。

下手人は四人だった。いずれもが腕に黒色の湾曲した鎌のような武器を生やし、額には六つの目が形成されている。

「……見るに、一族の者では無いな。デモンストレーションだ、せいぜい余に存在価値をアピールしろ、近衛長」

「仰せの通りにツ！」

声を張り上げ、オリアンヌは自身の『薬』を己に打ち込む。

筋肉が内から肉体を突き破らんとでも言う程に肥大化し、そのただでさえ大柄な体が鎧の内に隙間なく詰まる。

本人のイメージと違わず、見るからに肉弾戦に適したその姿。四人の襲撃者は、それを見て。

「がっ……!?!」

迷わず、銃弾をオリアンヌに打ち込んだ。

それは全身を守るプレートアーマーをあつさりと貫通し、その身へと突き刺さる。

鎧の時代は、終わったのだ。現実の戦場での武具の移り変わり、それを証明するかのよう一幕。

だが当たり所は絶命が狙える程では無い。襲撃者はそのまま、己の鎌を振るい、三人が同時にオリアンヌを、最後の一人はエドガーを狙い、

「エドガー様に触れようなどという不遜、断じて許すものかア！」  
「!?」

瞬間、エドガーに襲い掛かった一人の頭が、弾け飛んだ。

がくがくと痙攣しながら、赤とピンクを撒き散らし、よろよろと数歩進んだ後、その体は糸を切られたマリオネットのように崩れ落ちる。

簡単な事だった。鎧を捨てる勢いで脱ぎ捨てたオリアンヌが一瞬で間合いを詰め、頭にその拳を横殴りに繰り出したのだ。

自身に向けた三人への対処では無く、エドガーを狙った一人の始末。

死にかけとはいえまだ息はある、エドガーを確実に仕留めるために動きを止める。そのための三人での攻撃だったが、その目論見は根底から崩れる。

しかし、エドガーを守りに行った事により、オリアンヌは三人に背を向けた形となる。仲間の仇と相手が見せた絶好の機会。即座に銃弾を無防備な背に放ち、同時に鎌を振り上げ、無防備な背と首へと突き立てる。

——ガッ

だが、その鎌は、オリアンヌの内部に達する事無く止まった。

その表皮が、正確には、着込んでいた鎧の内にあつた鎧が、いとも

容易く銃弾を、その鎌を防いだ。

何が、終わったと？ そうとでも言いたげに、残酷にその一撃は振るわれる。

「いびっ!？」

その滑稽な声が、もう一人の遺言となった。振り向きざまの薙ぎ払うかのような腕の一振りだが、左から脇腹に直撃し、骨を粉々に砕き、臓腑を修復不可能な程にぐちゃぐちゃに破壊する。

そこで初めて、生き残った二人は認識した。オリアンヌの左手が、人間のそれから変質している事に。

変態前から肥大化し、分厚い皮膚とその下に隠された装甲。全身に見られる特徴であるが、左手の甲から肘のまでの中ほどにかけて形成された、鈍器としか形容のしようが無い巨大な塊。二人分の血を吸い真っ赤に染まる凶器が、原始的な恐怖を思い起こさせる。

「……………ああ……………クソがあつ!」

「くっ……………」

生き残った二人の行動は対照的だった。

一人はヤケとなり、彼らの目的であるエドガーの暗殺すら忘れたのか、オリアンヌに跳びかかる。

たかが二人、短期決戦で邪魔も入れず始末する。そう聞いていたのに。どうしてこうなった？

もう一人は、もはや任務の遂行は不可能と判断したのか、背を向け一直線に逃亡を図る。

エドガーとは距離がある。オリアンヌは同僚に対処するだろう。大丈夫だ、逃げられる。

「……………エドガー様に牙を剥いた大罪、その命を以て償いとするがいい」  
「……………クハハ。余を誰と心得る?」

取った行動は違えど、二人の最期は同時に訪れた。

オリアンヌに飛びかかった男の体が、瞬間、真下から振り上げられた長柄の斧によつて真つ二つに両断される。

フランス大統領に噛みつき、あまつさえ謝罪の言葉すら無く帰ろうとした不調法者は、無数の銃弾を受け踊るように体を痙攣させた後、地に伏せ二度と動く事は無かつた。

そこには、武装した兵士達が、フランスの軍人がエドガーに敬礼をし立っていた。

「わざわざ余が貴様如きに暇を裂いてやるとでも思つたのか？」

エドガー・ド・デカルト。彼の強さは、ニュートンの一族としての肉体だけでは無い。

彼に敵対するという事は即ち、フランスという国家そのものに戦いを挑む事に等しい。

彼が手ずから処断を行う、というような事は、よほどの事が無い限り起こりえないのだ。

「お怪我はありませんかー」

「当然だ」

血まみれで駆け寄るオリアンヌ。右手には先ほどまで地面に置いていた彼女の得物、長斧の先端に槍が付けられた武器、ハルバードと呼ばれるものが握られている。

「一人を仕損じたが……まあいいだろう、貴様をフランスの騎士として認めてやろう」

「……っ！ エドガー様、ご無礼を承知の上で……！」

再び武器を地面に置き跪いたオリアンヌは、エドガーに対し、どこか絞り出すように声を出す。

それは、どのような形であれエドガーに認められた、という状況であれば本来なら感謝感激雨あられという反応を見せる彼女にしては珍しく、どこか暗い色が混じる。

「私は、貴方様の騎士にはなれないのですか!! 何故!？」  
オリアンヌが、嘆きの籠った、継りつくような大声でエドガーに問う。

エドガーが現在興じている、一種の戦争。ゲームと呼んでもいい。フランスという国家として、それ以上に、エドガーという主君の剣として不遜にもエドガーに挑まんという大敵と戦う。アメリカという大国の征服を行う。これ以上は無いのではないか、という栄誉だ。

だが、その聖戦を担う戦士に、彼女は選ばれなかった。  
それが、何より彼女の心を波立たせる。

「思い上がるな。貴様よりも余の騎士に相応しい者は他にいる。貴様は貴様の責を果たせばそれでいい」

「っ……御意に、我が主よ」

—せいぜい、余を失望させるなよ？

そう言い残し、執務室へと向かうため専用車に乗り込んだエドガーを、それ以上何も言う事ができず、オリアンヌは見送る。

その内心は、エドガーへの不満……などあろうはずも無く、ただ己自身の無力に苛まれていた。

「B班は第三通路を封鎖！ 我々はそのまま制圧を続ける！」

銃声に、また一人白衣を着た研究員が倒れる。

それを放ったのは、11人の武装した人間だ。『槍の一族』のお抱えの施設に対する襲撃。

彼らはただの傭兵である。

依頼主は、いくつもの中継を行っているため大元が誰なのかはわからないが、どうも一国が関わっているという噂を上司から聞いていた。

この研究所で国家転覆を目論むテロの準備が行われている。それを制圧し、証拠を持ち帰る事。これが、彼らに与えられた依頼だ。



答えから言えば、彼らはフランスという国家に、より正確に言えばエドガーに雇われオリヴィエのお抱えである施設の襲撃を依頼されここにいる。

『神殿』、その本拠地の場所は不明であるが、しかしどこの国にそれがあるのか、までは判明しているし、いくつかの研究施設と地下で繋がっている、という事もわかっている。

そして不穏な資金の流れがスパイにより発覚し、その後の調査によつて完全なクロであると判明した。

「……戦闘員が見えないな」

構成員の一人が、『薬』を手で弄びながら呟く。奇妙な程に作戦はつつがなく進行している。このまま行けば、死者も負傷者もゼロのまま作戦は完遂されるだろう。

最近会社に導入された、MO手術の技術。太っ腹にも大元の依頼主はそれに関する費用負担をしてくれるらしい、というのも今回の依頼を受けた理由の一つだ。

しかし、それを実戦で運用するまでも無く終わってしまいそうだ。

……それで終わるわけが、無かった。

「うん？」

「何だアレ」

かさかさ。何か動く音と共に、通路の曲がり角から、何か姿を現す。

部隊の全員がそれを認識するが、全員の認識も合わせても、それは『何か』としか言いようが無い。

……強いて言うならば、それは、蟹みたいな足が生えたヒトデのよう。体高は1m弱ほど。

ヒトデと違うのは、その足ではつきりと立ち上がり、よろよろとしながら歩行している事であるが。

八本の足と、一本だけ地面に付いていない短い足のような何か。

謎の怪生物。唐突に現れたそれに、部隊の皆はあつけにとられる。

「……斉射」

だが、部隊長は冷静に指示を出す。アレが何はわからない。皆に見えている以上、幻覚の類では無いだろう。

この状況だ、味方では無いだろう。考えれる可能性は、敵の生体兵

ここで、部隊長の思考は停止した。腹が、熱い。急にどうした、と目線を己の腹に向ける。

そこには、破裂しておびただしい量の血と臓物を垂れ流す己の腹部と、そこに突き刺さる蟹の足、その先端に形成された蹄があった。

そのまま、言葉を発する事もできず部隊長は地に伏せる。

「うわああああー！」

「何だよコレ!? 何なんだよ!?!」

一瞬で間合いを詰めた怪生物が、部隊長の命を奪った。先まで一方的な殺戮を行っていた彼らは、突然の襲来に動揺し、その手に持った銃を連射する。

複数が怪生物に命中し、当たり処が良かった数発が脚の一本を根本からもぎ取るが、しかし。

ズルリ

その脚は、即座に生えてきた。瞬間、再び怪生物の姿が消え、一人の命もまた消える。

動きを捉える事が困難な高速移動と、受ければ即死は免れない蹴り。

さらには、再生能力。

熱を出した時の悪夢に出てきそうなフォームのこの生命体は、暴虐



目の前の男と、自分の周囲を覆い尽くす地獄のような光景に、もはやまともな言葉は出なかった。

部隊は壊滅した。たった一人の人間によって。

「君の事もちゃんと救ってあげよう。もはや神に至る可能性の無い、ヒトの子よ」

一縷の救いも無く、一時の安堵も無く、彼らは悪辣に虐殺された。

壁に、床に、天井に広がった、この異形によって。

それは人で有りながら人ならざる境界の外側に在る者、地の底の七圈より這い出でし亡者の群れという他に無い存在だった。

深き永劫の奥底で罪過を償い幸福な来世を案じ続ける夢見人たちが輩を求めように青白い海の底を揺蕩う生命のような手を伸ばし、哀れな犠牲者、まだ命の灯を保ち続けている最後の一人を誘う。これまで正気の世界での命の掛け合いすら平穏であったと思える生者たる彼はその命というものの根源に訴えかけられる恐怖にこれがかつての自身の友が手招きしているのではなく自身の友とは付近に転がっている亡骸の群でありこの祭具とでも呼ぶべき剣と盾を持って各々が踊る、暗闇の中での魔物の合奏が如き狂宴に興じる深き場所よりの使徒は己の仲間達とは全く関係の無いそれを騙るだけの存在であると彼は叫び――

……彼に、無数の手が、幼子程の小さな腕が伸びる。

人間の胴体が無数に連なった構造体が、彼の視界という視界を埋め尽くしていた。

腰から肩。肩からは次の腰が生え、それが繰り返される。この構造

が、途中から分岐し枝分かれし、みるみる内に伸びていく。

それぞれの体から人間の構造通りに一つの体に一対二本生えた腕には、まるで後から付け足されたかのような若干の違和感を伴い、片腕に牙が、もう片腕には貝殻のような盾が形成される。

斬撃、打撃、そのいずれもが防がれ。手榴弾、銃弾、大火力の近代兵器、損耗こそ与えるものの瞬く間にそれは再生し、元の姿を取り戻す。そして、破壊した肉から零れ出す体液が、武器を持つ手を震えさせる。

恐怖と絶望は人をどのように支配するのか。

その悪夢の中で、果たして世界の中で何人がその信念を、意思を誇り高く保つ事ができるだろうか？

「さあ、もう眠るといい。皆、そう言っているよ」

ああ、皆そう言っている。そうだ、自分は頑張った。もういいじゃないか。

目の前の、穏やかな微笑みを浮かべる青年が、手を伸ばしてくる。摩耗しぼやける精神の中、彼はその手を取り、ああ自分は幸福だ、と笑った。

暗転。

---

——ボードゲームとは、駒を操る技能だけで勝敗が決するものでは無い。

そこには、盤上で繰り広げられる戦いだけでは無く、その外部で行われる戦いも合わせて含まれるのだ。

言葉で、音で相手の集中をかき乱し、動揺を誘い、相手を戦いの前に連れ回し休息の隙を与えない。

あらゆる手を尽くし、相手の失敗を、失策を引きずり出す。

『盤外戦』と呼ばれるものだ。

無論、それを卑怯だ、という人間も言うだろう。だが、考えてみて欲しい。

彼らが行っているのは、ボードゲームであると同時に、戦争である。

互いが互いにそれぞれの理由からこのゲームに乗り指し手であると同時に王としてその身を置いている。

己の野望を叶えるまでの暇つぶし。種まき。彼らが何を思っているかは常人には計り知れない部分も多いが、参加した理由がある。

そして、互いに相手をそれぞれの理由で嫌悪している。

そんな彼らが、ただ盤の上だけで争うものだろうか？

「もし悲しい事故でプレイヤーが指せなくなったら、キングが落ちたら、その時点で不戦勝だろうか？」

槍の一族の王は、神の代替品たる泥人形は、そう嘯く。

「貴様のコマが盤の上で見つからなければ、それを欠いた状態で始めるしかあるまい？」

神への挑戦者は、一国を総べる、老いてなおお壮健たる獅子はそう傲岸に言い放つ。

全面戦争をするつもりは無い。お互いがお互い、相手に知られていない秘密兵器を抱えている。それを持ちだして全てを懸ければ、容易く相手を捻り潰す事ができる。そう、互いに絶対の自信を持っている。

しかしである。対戦相手が気に入らないからといってせつかく用

意してくれたゲーム盤と戯れとはいえわざわざ労力を割いて用意したその上の駒をそつちのけで机から立ち殴り合いを始めるのは、互いの最終目的を前に疲弊するのは無益な事だろうか？

何より、一族当主のバックアップ程度に、神の座を得んと必死に喰らいついてくる挑戦者程度に、大人げないだろうか？ と。

世界の天秤は、この両者が気まぐれを起こさない事で、そして彼らを引き合わせてしまった狂人の手で揺らされている。

だが、それは世界が滅亡しない、というだけだ。

彼らがただ、普通にゲームに興じているだけで。駒を動かした衝撃で、相手の一手にはっと息を飲む、それだけで。万単位の微生物が死を迎える。

彼らにとって、人間というのはそれくらいの存在でしかない。

……しかし、だ。

一国を盤として遊び、その外で策謀を巡らす彼らに、ただただ動きのついでというだけで最期を迎える事を許す程、人間は甘くは無い。

青き命の星、地球。世界を救わんと深緑の星に旅立たんとする二年前。

それは、世界の裏側の、ニュートン一族の上位者たる二人の間で起こった、表向きには記されない戦争。

しかし、さらにその裏側で、しかして裏の裏だから表、というわけでは無い裏側で、知る者のごく限られた戦いが起こっていた。

る。これは、誰が呼んだか、『マインドゲーム盤外戦』と呼ばれたその戦いの序曲である。



## Mind Game：第1話 盤外整列

——空港のロビーを歩くその姿に、目線が集中する。

「あ、あの、やっぱりこれって似合っていないかな？　なんて……」  
早くここを出たい、という内心が現れているのか、自覚無く早足になる一人の女性。

そんな彼女が身に着けているのは白色のワンピースに麦わら帽子。それが包む日焼けした肌と健康的な肢体、赤色の髪が、互いに存在感を強めあい、より魅力的に映えている。

その姿を見れば、避暑地に来たお嬢様、としか思えないだろう。10人に聞けば8・9人はそう答えるくらいには。

「……いいえ、よくお似合いです」

お嬢様というイメージをより強く与えていたのが、その隣に立つ大柄な、スーツを着た青年である。服の上からでも鍛えている事が伺える肉体とその鋭い目つきは、どう見てもボディガードにしか見えない。

自身が周囲に与える威圧感に無自覚ながら目を光らせる彼がいなければ、女性は今頃何人かに一緒にお食事など、と声をかけられていたに違いない。

そんな彼は、髪と同じような色に頬を染めて普段の澆刺とした様子が薄れている女性の質問という名の主張に、本心からの言葉を返す。

この両者を見て、その本来の関係性を聞いて、今ここにいる何人が信じるだろうか。

「いやでもおのぼりさんとか思われてる気がするかな!?　どう思います島原さん!？」

「いいえ、そういうった類の視線では無いかと、ラヴロックさん」

この二人は主従では無く同僚であり、そして（片方は”元”が付くが）現在一時的に属している職場では無い所でも同職の人間である。

何でこの格好で来ちゃったんだろうアタシのバカ、と内心でぽかぽ

か自分の頭を叩く女性、キャロル・ラヴロック。  
経緯は、数日前に遡る。

アネックス計画の成功を表から裏から手助けする『アーク計画』。キャロル・ラヴロックはその中でもアネックス一号に班員として乗り込む『潜入員』の役割を担っていた。

そんな彼女が本来の所属であるアーク第二団、その団長であり自身の今の道を決めた恩人である人間に呼び出されたのはもう日が落ちた頃合いの事である。

「ごめんねキャロルさん、こんな時間に」

「いえ、大丈夫です！」

シモン・ウルトル。アーク計画の発案者の一人である彼は、少し申し訳なきように、しかし静かな面持ちでキャロルを出迎えた。

普段はここU—NASAから遠く離れたアーク計画の本部と呼ぶべき基地にいる彼がここに出てきて、自分を呼び出した。恐らく、そう安い話では無いだろう。

考え、キャロルは膝の上で握った手にぐっと力を込める。

「キャロルさんには、フランスに行ってもらいたいんだ」

「……フランスに？」

どんな任務を命じられるのか。自身を奮い立たせていたキャロルは、シモンの言葉にきよとんとし、オウム返しをする。

フランス。旅行では無く、確実に任務だろう。でも、何故フランスに。

「こっちの情報網で、アメリカでテロの計画があると判明したんだ。詳細はこれから説明するけど……ヘタをすると、アメリカが滅ぶ」

「へ!？」

一瞬、冗談かと思った。だが、彼はこのような状況で冗談を言う人間では無い。そう考え話を聞き始めたキャロルは、その情報を聞くにつれて、それが本当に冗談では済まない事を改めて実感する。

アーク計画の一環として、今ここにいるシモンと並ぶ計画発案者、クロード・ヴァレンシユタイン博士が主に担っている任務。それが、『アダム・ベイリアル』の抹殺である。

アダム・ベイリアル。それは、一言で言えば、天才という名の狂人の集まり。

彼らの全てが人類史に名を残してもおかしくない各分野の開拓者、エキスパートと呼べる才を持ちながら、興味本位で紛争を起こし、人道を外れた研究を行う、万単位の、もしくはそれ以上の人間の命を奪う事さえ躊躇いを持たない人格破綻者の集団だ。

その一人をクロード博士直属の部隊が討ち取った際に、とある記録が得られた。

アメリカを舞台に、ボードゲームと言う名の戦争が行われると。

その対策として、アメリカという国は動き、シモンもまた対処に赴く事となった。

ここまでならまだいい。いや決して良くは無いのだが、対処するのがアメリカという一国に留まっている以上はそこに戦力を集中すれば良かったからだ。

だが、問題はその参加者だった。

ニュートンの一族、その最上位に座する二人。その勢力圏は、どちらもヨーロッパらしい。そこでゲーム盤であるアメリカとは別の戦争が起こる可能性が浮上したのだ。

幸運な事に、アーク計画にはニュートンの一族の人間が参加していた。彼(?)から参加者と思われる人間の情報を聞けたからこそ、今回こうしてキャロルへとこの任務を頼む事ができたのだ。

片や、一国を総べる長でありながらどこまでも傲慢な、一族すら歯牙にもかけない超越者。

片や、一族の中ですらその全てを知る者はいない、人間の精神を求道する逸脱者。

両者に共通しているのは、自身がいずれ神に至らんとしている点と、他人を踏みにじる事に何の呵責も躊躇いも持たない人間である

点。

恐らくは、彼らが互いに争えば民間人の命など紙のように飛ばされてしまっただろうし、彼らはそれを顧みる事など一切無いだろう。

「っ、そんな、事……！」

「うん、絶対にさせちやいけない」

全身に力が入るキャロルに、シモンも自分も同じ気持ちだ、と頷く。

「でも、アタシ一人で大丈夫でしょうか」

任務への不安、というよりは疑問の色が濃いキャロルの質問は尤もだ。

戦争というからには、それは大人数同士がぶつかり近代兵器が飛び交うようなものとなるだろう。

そんな所に訓練をしてMO手術を受けているとは言え、たったの一人で誘導から避難、体を張ったとしても市民を守る事など叶わないだろう、と。

「それに関しては、大丈夫……聞いたとこだと自分の基地がバレる事にすごく慎重な相手、らしいからそこまで大きな部隊を動かしてくる可能性は低い、って」

シモンの答えで、キャロルは納得する。

なるほど、フランスに攻めてくるであろう敵。

大がかりな兵器は動かしてこないだろう。人数も多くない。近代兵器は入国の際の検査もある、おいそれとは持ち込めない。つまり、使用されるであろう武器は軽量の銃器、もしくはキャロルが持っているものと同じだ。

「それに、ボク達アーク計画と同じ火星への増援計画から、今回の任務を手伝ってくれる人が同行してくれるから」

裏アネックス計画。アーク計画と同じく、火星への増援を目的として各国それぞれが準備をしている人員派遣計画だ。アネックス計画、アーク計画同様ランキングが付けられている彼らの内の最上位の一人が、今回の案件の対策として参加してくれる事になったため、共に向かってけると。

「じゃあ、改めて。キャロル・ラヴロック。君にはフランスに向かつてもらって、ボク達対策局が本案件を解決するまで警戒、そしていざという時には市民の保護に努めてもらいます。あ……何も無い時は、觀光とかしてもらってもいいよ?」

シモンはキャロルの目を見て、告げる。大丈夫だ、その目に迷いや曇りは無く、彼女は、自分と最初に話したあの時に語ったように、きつとやり遂げてくれると信じて。

「何でこうなっちゃったかなー! アタシもちよつと乗っちゃってたし!」

『せっかく華のパリなんだからおめかししなきゃダメよお!』

『あら、服を選ぶなら一緒に行きましょうか。ついでに私の服も見てくれるかしら、シモン?』

そう、あれで終わるはずだった。さあ早速準備だ、と動きやすい服装をあれこれ考えていたキャロルが扉を開けた先に立っていたのは、二人の男(?)女、だった。

これはまずい流れだ。キャロルは即座に察した。シモンと同じ、アネックス計画における幹部搭乗員に近い役割である団長。本来であれば彼らその情報を迂闊に晒さないため本部にいるはずだが、シモン以外ではこの二人は外部での地位がある人間という理由から、外に出ている事が多い。偶然シモンと合流する所だったのだろうか。

そんなこんなで、キャロルとシモンは二人に拉致され、私達が払うから、という団長の二人に目が回るような値段の服をいくつも勧められ全力で首を横に振り、でもこんなのもいいかも、と流されかけ、結局お手頃な価格で可愛いな、と思つた服を今回の任務のお給料の前払いよ、とウインクする坊主頭の男性(?)に札を言いながら購入してもらい、今に至る。

なおシモンはコスプレ衣装をやたら勧められていた。

……そして、今に至る。あれ、ひよつとして自分浮かれちゃった？  
と思ったのは、スーツ姿の同行者、剛大を見た時。自分にはこういうの絶対似合わないよお！ と両手で顔を押しさえたのが、飛行機の中。

別に、任務に向けた自分の心情に揺らぎは無いのだ。それは、彼女の中の信念である。でも、それを除いた他の部分を考えると、何と云うか……といった感じなのである。

「……ラヴロツクさん、やはり」

「……はい」

キャロルに向けた視線が少なくなった頃合いを見ての剛大からの言葉に、キャロルの表情が変わる。自分のあれこれに困惑していた愛らしい女性のそれから、任務に就く警察官のものへと。

やはり、だった。一般に認知されていないものなのか、政府レベルでの対策はまだ甘いのか、二人の旅行鞆の中には『薬』が入っていた。危険物の類は執拗な検査があったものの、薬に関しては常用薬という事を説明しただけで通された。

自分達が簡単に持ち込めたという事は、即ち、敵対勢力もそれは同じという事だ。

任務は一つ。

——守り抜け。この国で内から、外から暴れまわる怪物から、無辜の市民を。

心の内で一度、二度繰り返し、息を吸う。

そして、二人の警察官は、雑踏へと歩き出した。

——煙を吐き出し、蒸気機関車が走る。

それは、2618年現在、一般には用いられていない種の乗り物である。

その外見、用いられている技術で言えば600年からさらに前。この形式のものが主流になっていたのはそこからもつと前。

場所から場所への運送という点では単純に高速列車と比較して遙かに劣るそれは、しかし未だに愛好家も多い。

特に、のんびりと景色を楽しみながら時代の浪漫に浸る旅、というような用途の時には。

「見てください、羊が沢山いますよ……」

「わあ……」

そんな車両の一つ、隣り合った席で、まだ成人していない程の外見の少女が二人、パンを手に窓の外の風景を楽しんでいた。

控えめな様子であるが、牧場で草を食んでいる羊の群れを指差し、柔らかに笑う少女。とてつもない美人、では無いが、素朴で可愛らしい容姿の彼女は、隣の少女に話しかけている。

それに対し、自分は遊びに来たんじゃないんだ、と自分を戒めるように移り変わる景色から目を逸らしていたもう一人の少女は、しかし機敏に反応してしまい、その指し示した方向を見て、思わず目を輝かせる。

「……ふふ、楽しそう、リースちゃん」

「つてもう！ 仕事なんですよ、梁<sup>リヤン</sup>さん！」

少女たちの微笑ましい様子に、周囲の笑みと注目が集まる。

それは、単純にその光景が好感を覚える、というだけでは無く、物珍しかったから。

第一に、この列車の運賃は通常の列車と比べ高い。

車両そのものが特注と呼ぶべき、そこまで大量生産しない列車、という観点から見ても生産数の少ない特殊なものである、蒸気機関車というものの避けられない特性として環境に悪いという点もあり、料金が大幅に上乘せされているのだ。

そのためこの列車に乗っているのは金に余裕がありゆつくりとした旅を楽しむ中々高年の年齢層が殆どであった。

だから、無邪気に若者が楽しんでいるのは珍しくも微笑ましくもあり、そして自分達のこの趣味が認められたかのような感覚を覚えるのである。

もう一つは、彼女たちがその外見的特徴から判断して、ここでは珍しいアジア系の人間である事。

ロシアを始点としヨーロッパを横断する長い国際路線。

歴史的にロシアとヨーロッパ諸国は長らく互いに警戒し合う関係が続いている。

今でもまだそれは完全に解けたわけで無いのだが、わだかまりは捨てて仲良くしよう、という事で立ち上げられたプロジェクトの一つが、両勢力圏を横断するこの鉄道網であった。

そのため、位置的にもアジア圏の人間が乗ってくる事はあまり多くない。

政治家はのんびり列車の旅を楽しむ事は少ないし、若者が旅行をするには料金が高い。

中々、この車両が選ばれる事自体が少ないのだ。

「それにしても、龍しよ……先生に感謝しないとですね！」

「……まあ、それは本当に」

二人の会話から、他の客の中ではこの子達は大学のゼミで教授の研究か何かを手伝うために乗っていて、旅費も手伝いのお礼として教授が出しているんだな、などというストーリーが勝手に組み上がっている。

その想像は、少しだけ正しかった。

二人は、彼女たちが龍先生と読んだ人間の計らいにより、今この場に居る。

真面目な調子の少女、『磯山 リース』。現在準備が進められているアネックス計画、日米合同班に所属する、日本人とアメリカ人のハーフ、という経歴の班員である。

控えめな様子の少女、『梁 雅<sup>ヤウエイ</sup>?』。アネックス計画を支援する裏アネックス計画、その中国・アジア第四班に属する班員だ。

彼女達は現在、2人の属する組織から与えられた任務により、今こ



の場にいる。

一言で言えば苛酷な任務だ。それこそ、命懸けと言えるような。『そんな大変な仕事に赴く彼女達を安い旅券一つで送り出すなど、酷いでは無いですか』

そんな、任務の難易度と比べあまり厚いとは言えないその待遇に、異を唱えた人間がいた。

——中国陸軍大将、龍百燐<sup>ロンバイリン</sup>。先ほど二人が龍先生と呼んだ人物だ。

軍の最高幹部の一人である彼の言葉の影響は大きかった。せめて任務の前に楽しい旅がある程度の役得があってもいいのでは？

そんな彼の計らいにより、二人は今この快適な旅を楽しんでいた。龍も途中までは同行していたのだが、自分も出張でフィンランドまで行く予定が、と言い残し途中で降りていってしまった。

……何故、中国の軍人が関わって来るのか？

実のところ、今回の任務を与えた組織はU—N—A—S—Aでは無い。中国の軍部及び、協力関係にある集団だ。彼らがU—N—A—S—Aに提案した任務を遂行する人員として表裏アネックスの日米合同班、中国・アジア班からそれぞれ隊員が現地に送り込まれる事になった……というのが表向きの名目である。裏では、U—N—A—S—A所属としての任務では無く、中国としての任務を果たすためだ。

磯山リース、本名『黄静花<sup>ホワンジンファ</sup>』。

その正体は、日米班に潜り込んだ中国支局所属の間諜。

さらには、中国のMO手術発展の歴史における重要な一人だ。

梁雅？、本名『雅？・ヴァン・ゲガルド』。

中国軍部の影に潜むニュートンの一族、その中でも特異な立ち位置である『槍の一族』ゲガルド家に属する少女。

こちらに関してはそもそも当の中国軍部にも隠している情報であ

るが。

「あつ今度は牛がたくさん！」

「うーんそれは特に……」

そんな後ろ暗い事情を抱えた二人であるが、こうして風景を見て楽しんでる姿を見れば、どこにでもいるただの少女である。

「あらあら、可愛らしいお嬢さん方だ事。どちらに行かれるの？」

隣り合って座るその向かい側の席に、新たな乗客が。

景色とこれからの任務を考えていた二人は、その姿が視界の端に映ってようやくそれに気付いた。

「ど、どうも……ちよつと、研究のお手伝いに、フランスまで」

「こんにちは」

突然声をかけられた事に微かに動揺する二人。

そこには、老婆が一人座っていた。かなり高齢だろうか、枯れ木のようにやせ細り、触れば折れてしまいそうな程弱い。

しかし、この場で堂々と若い二人の間に割って入るだけの胆力はあるらしい。

「あらあら、それはそれは……いい所よ」

友好的な態度の老婆に、二人は上手く言葉を返す事ができない。

見知らぬ相手に気さくに話しかけてくるような人間があまりいない環境で育った静花。

そんなノリの良い人間に会った事はよくある……というか、姉が他ならぬそのような積極的な人間ではあるが、当の本人が内向的な性格の雅？。

「ほら、良かったら食べてくださいな、つい調子にのつて買すぎちゃったのよ」

持っていた袋から雑多な惣菜を取り出す老婆に、二人はどう言ってもいいのかわからずあたふたしてしまう。

というか二人が何も言えないのを見抜いていたのか、次々と押し付

けてくる老婆。

「……遠慮しないでいいわよ、若い子は沢山食べなさいな」

穏やかな様子の老婆に二人は頭を下げ、その惣菜を老婆と共にいただく。

ああ、こんな親切な人もいるんだな、とこれからの苛酷な任務の前に気分が少しだけ和らぐような気がした。

「よおよお、カワイコちゃんだねえ！」

しかし、そんな気分も長くは続かず。

いきなり三人に、いやらしい声色が投げつけられる。

若い男が、三人。いずれも一定水準以上の容姿はあるものの、ゴテゴテに付けられたアクセサリーや着崩した高級スーツを見るに、金持ちの家の素行が悪いボンボン、という印象である。

「んー、どっから来たの？ 俺らと一緒に」

「ごめんなさい、今からお仕事があるもので」

デートのお誘いを切って捨てたのは、静花だった。

ここでナンパ男に構ってられる程自分達は暇じゃない。

「へえー、真面目！ いいじゃないじゃない！ 仕事とかいいからサ」  
……しかし。このような場所で相手の迷惑も鑑みずに声をかけてくるような人間がそう簡単に退いてくれるはずが無いという事を箱入り娘の静花は理解していなかった。

強引に掴まれた腕に、本能的な嫌悪感で体が震える。

「……止めてください……！」

雅？も声を出す、それを相手が聞き入れる事など当然無く。

正直なところ、相手が成人男性であろうと、軍事的な訓練を受けている静花とニュートンの血族である雅？にとって相手をするのは余りにも容易い。しかし、これからの任務を遂行するのに、目立ってしまふのはまずいのだ。

どうしたものか、と二人は悩む。

「その手を離さない、紳士がする事では無くてよ？」

そこで、意外な場所から声が上がった。

冷やかな目で男たちを見る老婆。その手は、静花に触れている男の腕をがっと思んでいた。

「何だあババア？」

しかしである。当然ながら、このように強引に女性に迫る男が老人愛護の精神を持っている事はまずない。

不興を買うのは当たり前前の事であり、男たちの負の感情は老婆へと向かう。

まずい、と二人は考える。親切な一般人が巻き込まれるのは、流石に。

その所属と果たそうとする目的は明らかに悪人のそれだが、人間としての根っこの部分では二人共善人寄りなのである。

「めっちゃ不快だなあー傷ついたわー、これは慰謝料貰わねえとなあー」

男達の矛先は完全に老婆に向いたようで、今度は老婆の腕を無理矢理掴み、立たせようとする。

周りの乗客も助けてはくれないらしい。車掌さんも来ない。どうする、と目配せしていた二人は、次の瞬間男達と同時に、一瞬間まっってしまった。

「オラ立て……って、あ……う？」

その言葉通りに立ち上がった老婆。何だか頭の位置が高いなあとは思っていた。

だが。

その立ち上がった老婆の背は、腕を掴んだ男の頭一つ以上高かったのだ。

想像以上の体躯に一瞬場が硬直するが、だから何だこのババアと男達は老婆を引っ張り、車両と車両の間、下車口のある区画まで連れていく。

そこに繋がる扉が占められ男達と老婆の姿が見えなくなった後、残された二人は考える。

どうする。助けるべきか。見捨てるべきか。周囲の乗客は怯えて

いるだけでアテにならない。

人間としての善良な部分と、秘密の任務を担うエージェントとしての冷徹な判断。

どちらを優先すればいいのか。まだ若い二人はその判断に迷い動けず、一分が経ち。

<リヨン駅、リヨン駅です お降りの方は忘れ物にご注意ください>  
そこで、アナウンスが車内に響いた。

目的地の駅だ。

二人は慌てて立ち上がり、下車口へ、老婆が連れ去られた方へと急ぎ足を通り越し駆け足で向かう。

無事であつてほしい、怪我をしていたなら、病院へ。

そして、扉を開け。

「……あれ?」

「へ……へ?」

そこには、誰もいなかった。男達も、老婆も。既に空いた駅への出口のみだ。

どうなってしまったのか。何が起こったのか。結局わからないまま、二人は車両から降り、もう一度周囲を見回し首を傾げる。

中に戻つて、話を聞いてみるか。いや、時間にあまり余裕が無い。

二人は、後悔とこれからに気を重くしながら、人ごみに紛れる。

「お仕事、頑張つてね」

「へ……!?!」

そんな二人の耳に突然入つて来た声に周囲を見渡すが、その姿はどこにも見当たらず。

二人は気のせいか、と考え、その場を後にした。

漁夫の利というのは国同士ののような大きな世界でも不変の概念である。

アメリカが滅びの危機にある? じゃあ、横からつつついて利益を貰おうか。

そう考える国は少なくないが、かの国の考えは、違った。

自身と深い協力関係にある集団。彼らは自分達の計画の最終段階の一步手前までは味方であるが、その中の異端児は別だ。いつ何をされるかわからない以上、隙を見せれば食い殺せ。

アメリカに噛みつく頭を、横から食い千切る。あとは動かない胴体をどうとでもすればいい。

そのために、彼女達は送り込まれた。今だ未熟な身でありながら、潜入した人員に補助させればそれでも任務を遂行できる能力を有しているとは判断され。

彼女達に与えられた任務。天に至ろうとする者がいるならば、さぞ高い場所にいるだろう。では、突き落として転落死してもらおうか。即ち――

――エドガー・ド・デカルトの暗殺、である。

## Mind Game：第2話 狂気螺旋

「君は『救済』についてどう思うかなあ？」

「は、哀れな人間を救う尊い行いかと存じております」

路地裏。怪しい物品が取引され、表舞台を追いやられた人間達がうろつく危険地帯。

ヨーロッパの治安事情は数十年前の致命的な経済危機とそれにより貧困に追いやられた人間が犯罪組織に加入する、犯罪組織が規模を増し経済に干渉し悪化する、という負の連鎖により大きく悪化していた。

現在、2618年このフランスでは現大統領の采配によりかなりの回復を見せてはいるが、だが数十年に渡る負債のその全てを拭い切れたわけでは無く今だにこのような路地裏は小規模なスラム街と化し、一般人が近づいてはいけな危険地帯となっている。

「いやしかし良かったよ、俺一人では色々大変だったからな！ 感謝するよ、アンセルム」

「けいか狴下の御心を広めるためであれば、私など如何様にもお使いください」

そんな路地裏を歩くのは二人の男だ。しかし、彼らはよれよれのTシャツが制服と言えるこの路地裏には似合わない恰好をしていた。

テンション高く笑うのは、金髪碧眼の男である。その身はアジア圏の道教の信奉者が纏う道服と呼ばれる衣を虹の七色に染めたものを纏っており、頭には開花しかけた蓮の花を模した、そこに無数の目玉と蝶の模様が刻まれた司教冠が乗っている。

男はその傍らに控える青年に上機嫌で軽く話しかける。

その言葉を受けた彼、アンセルム・アポリエールは当然の事です、と丁寧に返答する。

アンセルムはアポリエール家の人間として正式に宗教組織に加入してから、瞬く間にその地位を築き上げてきた優秀な男だ。

年齢22にして本来であれば中年ほどでようやくたどり着ける上級司祭に片足をかけている地位、と言えば彼の能力の高さ、それに加え

何より自身の地位を高める機会を逃さない目ざとさがわかるというものである。

そんな彼がつい先日参加したアポリエール家司祭・司教の会合において挙げられた議題。

それは、一人の高位聖職者のサポート役を誰にするか。

『赤色の枢機卿』アヴァターラ・コギト・アポリエール。

定員7人の内現在2人しかいない枢機卿の片割れであり、アポリエール家の聖職者の中でも最高位の一人。

そんな彼が、他ならぬアポリエール家により長く幽閉されていた彼が突然その戒めを解かれ、フランスへと赴く事になったために供を必要としているという。

雑談から入るはずの普段の会議は皆目線を下げ、誰かに弱弱しく押し付けるかのような論調。

普段は嫌という程饒舌なロドリゲス卿が何も言わない。

本来であれば以前にも彼のサポートをしていたブリュンヒルデ卿は現在収監中である。脱獄したという噂もあるが、では何故ここに参加しない。

煮え切らない様子の他の司祭たちに、アンセルムの苛立ちと侮蔑は次第に強まっていった。

他の司祭や司教はアンセルムより地位も年も上の人間ばかりである。

何故自分よりも先を言っているはずの彼らが、こんなにも愚かなのか？

「その任、私が引き受けましょう」

枢機卿のお供を務めるなど、自身の有用性を示す恰好の機会ではないか。

ああ成程、コイツらは恐ろしいのだろう。

話と資料の限りでは、戦闘を含んだ業務がある。それが嫌なのだ。肥え太ったお偉い連中は、今更命は張れないと。

他に聞こえない程度に鼻で笑い、アンセルムは立ち上がる。

このような荒事の、他がやりたがらないような、しかし自身の地位



を大きく向上させるような任を待っていたからこそ、修練を重ねた。『手術』も受けた。

そして、アンセルムは今回における枢機卿の補佐に正式に認められた。

「いやあ、優秀だなー最近の信徒は」

「お褒めいただき光栄です」

のんびりとした口調でアンセルムを褒めながらぱちぱちと手を叩くアヴァターラ。

フランスに到着した後にアヴァターラがまずしたのが、裏路地へ入る事だった。

どうやら、街の外れに放棄されている良い物件があったため、そこに居を構える事にしたらしい。

では何故裏路地に、放棄されているなら勝手に住めばいいのでは、という疑問を呈したアンセルムであったが、その回答としてアヴァターラが取り出したのは一冊の本だった。

『ヨーロッパスラム街生活完全ガイドブック』引越してから美味しいレストランからアハンウフンなお店まで」

……よく見かけるフリー素材のイラストで作られた適当な表紙とそれ以上に謎のタイトルに、何ですかそれ？ と言いたくなるアンセルムだったが、無言を貫く。

「オリヴィエ様に渡されたんだ。」アダム君がくれたから役立てるといい”ってね」

ああ、あの一族に噛みついてくるふざけた狂人どもの、とアンセルムは納得するが、それと同時に不信が少し募る。何故、我らが枢機卿とそれが忠誠を誓っている一族の人間が、アダムなんぞに組しているのか、と。

「これの引越し編によれば、『一見ナイスに見える放棄物件でも裏路地のコワイお兄さんが管理している可能性が高いです！ まずは許可を貰おう！』と言う事だそうだね」

「そうですか……」

ああ、だからなのか。アンセルムは頷き。

「では、彼は救ってあげても？」

髪を掴み無理矢理立たせている男の喉に、刃を突きつけた。

「ああ、悲しいな。もはや神に至る事の叶わない、墮落しきってしまったヒトの子」

それに答える事はせず、独り言のようにぽつぽつ語るアヴァターラ。

その周囲には、十人近い屍が転がっていた。

「……救って、あげよう。神になれる可能性が無いなんて、それでもこの世界に生き続けるなんて、可哀想だ」

「承知いたしました」

瞬間、血飛沫と首が舞った。

少し予定とは違ったけど、これで住居の心配は無くなったね。

そう言って笑うアヴァターラの背を観察し、アンセルムは考えていた。

裏路地を彷徨い歩き、その物件を（勝手に）管理しているとかいうこの辺り一帯を取り仕切っているらしいギャング……というには規模が小さいか、不良グループに話を通そうとし。しかし、彼らの答えは、交渉を長引かせている間に自分とアヴァターラ卿を取り囲む事だった。

服装から、自分達が金持ちに見えたのだろう。その通りであるが、まあ仕方ない。路地裏のクズなど、その程度のレベルだろう。彼我の戦力差すら理解できないのだから。

交戦の許可を、とアヴァターラ卿に尋ねた時、彼は涙を流していた。そして、呟いたのだ。可哀想だ、と。

狂信者。補助の任に就く事が決まった後、アヴァターラ卿の事を司教の老人に聞いた時、彼は小さな声でそう答えた。

聖職者である人間が、狂信者などという言葉。自分はそう苦言を呈そうとしたが、立場が上の相手にわざわざ逆らってもいい事は無い、適当に流した。

今になって、その言葉の意味がよく理解できた。

彼は、余りに信仰に真摯なのだ。我らの教義、それは『人間はいずれ神に至る事ができる』。

進化などせずとも、普通の人間が自身の身と心で得られるものだけで、人はその先へと進む事ができる。それを見守り時に導くのが、自分達だ。

神へと至る道こそが、人間の幸福。だからこそなのだろう。

——もう神への可能性が閉ざされた人間は可哀想だ、死という救済を与えてあげようと考えてるのは。

しかし、一方で疑問も残る。今回の彼の任務は、クズだけでなく一般人も殺戮の対象としている。

一般人というのは他ならない、神へと至る可能性、『ただの人間』だ。彼はそれに、どのような折り合いを付けているのだろうか？

「ぎやつ……」

「おや？」

そこまで考えて、小さな悲鳴の声と同時にアヴァターラが立ち止まった事により、アンセルムの思考は中断された。

素早くアヴァターラの隣へと移動したアンセルムの目に入ったのは、尻もちをついているまだ十歳過ぎ程の少女だった。

その周囲には、散らばってしまった、籠に入っているどこにでもあるような花。どこかに売られて逃げてきたのか、元は華やかだったであろう服は汚れきって茶と黒に染まり、よれよれに伸びた服の隙間から伺えるその身体つきはお世辞にも恵まれているとは言えない貧相なものだ。

「あ、あの、ごめんなさつ、えつと、お花……」

「……」

商魂たくましく、アヴァターラにぶつかってしまったその少女は謝罪をしながら散らばってしまった花をかき集め、上目遣いでアヴァターラを見つめる。

「全部買ってくれたら、えつと」

服の襟の部分を引き張り、胸元をちらりと見せる少女。

ああ成程、捨てられたか、あまりの待遇に逃げ出したか。こうしないと生きていけないのだな。いや、こうする以外を知らないのだから、哀れだ。

アンセルムは憐憫を覚えるが、しかし。

「このお方を誰と心得る、売女」

「うぐつ……！」

無言のアヴァターラの意思を遂行し、アンセルムは少女の腹に蹴りを加える。

金持ちと思つてすり寄つて来たのだろう。高位の聖職者が自身の権力を利用して女を飼っているという案件も絶えない。

だからいけるとでも思ったのか？ 我らが枢機卿を馬鹿にしているのか。

そんな怒りと、アヴァターラへのアピールの入り混じった態度で、アンセルムは少女の弱弱しい体を道の脇にどけるように何度か蹴る。

「お嬢さん、君は何でお金があるのかな？」

「……セナが、病気だから」

友人か、家族か、恋人か。腹の痛みに呻きながらも名前を呟く少女。誰かは知らないが、安いお涙頂戴の嘘だ。

これ以上、慈悲深くも問いかけたアヴァターラ卿の耳を腐らせるわけにはいかないだろう。

「本当に？」

「ほんと、です……」

だが、そう考え少女に黙れ、と言いついで暴力を振るおうとしたアンセルムはそこでアヴァターラの様子が違う事に気付いた。

じつと少女の目を見て問いかける彼。少女の目線もまた、弱弱しくはありながらもアヴァターラの目へと逸らさずに向けられている。

だが、アヴァターラの背から、彼の能力によって生成された『体』が一本、生えていた。

複数の人間の胴体が、そこから生える腕がうねうねと動く。

アヴァターラの目に集中しているのだろう、少女はその異形に気付く様子はない。

——ああ、なんと恐ろしいお方だ。このような年端も行かないような少女もまた、『救済』されるのですね。

ずるりと、何も知らない少女に、何本もの腕が地獄へと引きずり込まんとするかのよう伸びる。

目を閉じ、アンセルムは少女への哀れみからの微かな黙禱を捧げ。

「アンセルム。俺は、こう思っている」

自身へと向けられた言葉に、彼は目を開いた。

視界の端に少女が映る。しかしそれは彼の想像した、血みどろの惨劇とは違い。

「泥の中からでも花は開くものなのだ」と

その異形の無数の手は、少女の耳と目を、そつと押さえていた。

「がっ、はっ!？」

それを認識した瞬間、アンセルムの頭に、火花が散る。

何が起こったのか、彼には理解できなかった。

一瞬して、今の状況ではそれ以外には無いと、しかし信じ難いと、その可能性を――

「猊下、何を！・何を!？」

アヴァターラの拳が、アンセルムのこめかみを捉えていた。

次いで、さらに拳が、もんどりうって倒れた彼の腹に蹴りが。

「貴様はッ！ 貴様はその地位に至るまで何を学んだッ！ いと尊き神に至る可能性を！ その卵を足蹴にしたのか!？ 我々のような、愚かにも進化などという選択をし袋小路に迷い込んだ塵屑がかッ!？ 我らの信仰を愚弄するのか、貴様は!!」

「何故、何故!？」

唐突に怒りが爆発したアヴァターラの言葉に、アンセルムは必死に、その意思を尋ねる事しかできない。

だがその答えは腹に、頭に、手足に、無造作な暴力として返ってくる。その全てが、怒りと憎しみに満ちた感情を伴って。

その全身が、何本もの腕によって掴まれ、さらに無数の、武器を持った手が次々と刃を体に突き立てていく。

抵抗すらできず。

一体何が起こったのか、何を間違ったのか、理解する事も無く。

彼の地位を求めた22年の生涯は、終わった。

彼が理解していなかったのは、アヴァターラという男の信仰だった。

彼が救済の対象か否かを判断する定義は、他人が簡単に推し量れる単純なものではないと言う事。

神の卵と救済の対象。神に至る可能性があるか否か、それぞれ形は違えど、彼が人間という存在をどれほど愛している事か。

そして、自分を含めたニュートンの一族を、どれほど下等なものと考え嫌悪しているのか。

勿論それは、常人には理解できない狂気を含んだものであるのだが。

「ん……え……」

数分間の暗闇の後に目を開いた少女は、目の前で膝を曲げて微笑む男を見た。

一体自分の目と耳が何で塞がれていたのか、男の従者がどこにいったのか？ そんな疑問はあったが。

「えーっと、その薬は、俺はよく知らないのだけど、いくらかな」

少女は値段を言う。それは薬の値段に加えて、一人分の暫く分の、最低限の食糧が買えるだけの値段であるという事を、合わせて伝えて。

「成程。今持ち合わせは少ないけど……これでいいか」

アヴァターラが取り出したそれに、少女は目を丸くして硬直する。それは、少女がこれまで見た事もない、厚い紙幣の束だったからだ。「ヒトの子よ、どうか、君の行く末に、神への道が開かれていますように」

まるで祝福するかのようには、腰を抜かして座り込んでいる少女の足を手で軽く持ち上げ、その靴すら履いていない甲に一度、口付けをし、籠の中の花を一輪だけ取り立ち上がる。

一連の突然の出来事にどう反応していいのかわからず何度も礼を精一杯の声で言う少女をその場に残し、邪教の枢機卿は立ち去った。

「……さてはて、これからどうしようかな！」

彼女のこれからについて、アヴァターラは自身の信念に従った儀式以外で関与する事を考えていない。

大切な誰かを救って、残りのお金でささやかな暮らしを始めるのか、一発逆転の大博打でもするのか。自分は一々周囲に知覚を巡らせていかなかったため今の光景を見ていた人間がいて、金を全て奪われ殺されるのか。

彼女こそが神へと届く可能性なのか、そうではないのか。

その全てがあり得るのが人間の可能性であり、人生である。だからこそ、尊いのだ。

そんな、彼が愛する輝きを見る事ができた満足感に浸りながら、代わりの人員を頼まないとな、などと考え路地裏を抜けようとした、瞬間。

「貴様かああ！」

「うわっとお!？」

叫び声に近い大声と共に長斧がアヴァターラの頭に向け振り下ろされるのと、彼が慌てて背後に飛び退くのは、同時だった。

「危っ！ 何をするんだ、死ぬ所だったじゃないか！」

地面のアスファルトを砕き割り立ちこめる土煙の中、その向こうに立つ攻撃を仕掛けてきた人間に対し、アヴァターラは抗議する。

しかし、それに答えるよりも先に、今度は横薙ぎに斧が振るわれる。

「通報が入った！ バケモノが俺の仲間を殺した、と！」

煙が晴れ、そこに立っていたのは大柄な女性だった。

その目は怒りに燃え、アヴァターラを突きささんばかりだ。

まいったな、とアヴァターラは頬を搔く。

オリアンヌ・ド・ヴァリエ。オリヴィエから聞いていた、恐らく今回の任務を果たすにあたり障害となるであろう一人。

こんな所で遭遇してしまったか。一人救済をし損ねたが、そこからバレてしまったか。

「人違いでは？」

「人間は切り傷が即座に塞がったりはしない」

猪突猛進、単純な人間とは聞いていたが、戦闘に関しての頭はまずまずのようだ。

アヴァターラは既に癒えた、最初に飛んできた石の欠片で切った頬を撫でる。

武器は持っていない。仕方ない、とアヴァターラは斧の射程外へと後退しながら、自身の『薬』を取り出す。

オリアンヌも同時に薬を取り出し、両者は同時にそれをを用いる。

変化もまた、両者同時に訪れた。

オリアンヌの全身が分厚い装甲の様相を纏い、背中には棘のようなコブのようなものがいくつも形成される。さらに、その左腕の手の甲から肘にかけてまでに鈍器、としか形容できない巨大な塊が現れる。

アヴァターラの全身の色素が薄くなり、体の部分部分にオレンジやピンクに近い赤色が現れる。

その額には新たに一对二つの人間のそれでは無い目と三本の昆虫とは質感の異なった触角のような、どちらかと言えば触手と形容した方が近いものが生える。



「お前が、エドガー様を害する不屈き者か！」

「さあ、な！」

お互いに完全に変態が終わった事を知覚し、両者が激突する。オリアンヌが地面を蹴り、アヴァターラとの間合いを詰める。先と違い、後退の姿勢を見せないアヴァターラ。だが。

「むっ!？」

オリアンヌの眼が、驚きで大きく開く。

アヴァターラの胴体から、腹から、背から。

その身から生え伸びる形で、異形の怪物が姿を現したからだ。

サイズにして小学生ほどの、人間の胴体。

肩の上に次の胴の腹が、という構造が繰り返されいくつも連なった物体が、伸びていく。

一番外側にある胴体にも頭部は無く、人間の正常な構造通りに腕がそれぞれに一对生えているそれは、まるで頭の無いムカデのような姿である。

「面妖な能力を……!」

オリアンヌに生物の知識は無い。この熱にうなされた時の夢で見るとような見た目の能力が何の生物に由来するのか皆目見当もつかないが。

いや。そもそも、付ける必要など無い。

オリアンヌの四方から襲い掛かるそれを、左腕一本で迎撃する。

「だが、殴れば死ぬならそれでいい！」

「おや」

振るわれた左腕の威力に、怪物の一本が柔らかな腹の一つから引きちぎられ、血を撒き散らし痙攣し動かなくなる。

アヴァターラの手術ベースはそこまで頑丈な生物では無い。

オリアンヌの力強い一撃はその強度を容易く超え、破壊した。

——このまま押し切る。

何本もの腕がオリアンヌの体を掴みその進撃を食い止めようとするが、その力は力の強い人間がMO手術によって最低限の強化を受け

た、程度のものであり、数人程度では障害にすらならないオリアンヌの突進を防ぐ事は到底叶わない。

その勢いのままアヴァターラの本体へと接近し、鈍器を勢いよく振るう。

「ご、ぱっ」

血の花が、開いた。アヴァターラの頭は無残に砕けピンク色と赤を撒き散らし、オリアンヌの止まらない勢いのままタツクルされた頭を失った体は骨がいくつもひしゃげながら数メートル吹き飛ばされる。

「……」

沈黙が、訪れた。赤色を地面に広げていくアヴァターラの残骸。

恐らく、特殊な系統の生物の能力。何度もエドガーを狙う暗殺者と戦ってきたオリアンヌであるが、このようなものは見た事が無かった。

回収すれば、エドガー様は喜んでくれるだろうか。

逸る気持ち。だが、それをオリアンヌは抑える。

「早く起きろ。狸寝入りを見逃してやると思ったのか？」

「ああ……やっぱりか」

何も知らない人間からはその猪突猛進ぶりを見て、単細胞の脳筋と思われているオリアンヌ。

だが、彼女が近衛長として置かれているのは、それだけの才と能力がある事を意味している。

戦闘における判断では、彼女は表層しか知らない周囲の評価に当てはまるものではない。

オリアンヌの言葉で、アヴァターラはちえー、とでも言いたげに、残念そうに起き上がる。

砕けて原型を留めていなかった頭部はみるみる内にその姿を取り戻していき、骨が砕けた事なんて無かったかのようにその体の動きにもぎこちなさや痛みを感じている様子は無い。

「いやいや、そんな目で見ないで欲しいな。生きてるだけだよ。俺の方からも貴女に決定打が無いからね、負け負け」

オリアンヌの眼に、おどけた様子で言い訳するかのよう説明をするアヴァターラ。

本人のものだけでなくその額の眼までが悲しい、とでもいいたげに狭められる。

相手の言っている事は、真実か？ 確かに先の攻防を見れば、そう  
だ。

得体の知れない能力ではあるが、そこまで強力なものでは無かった。相性の問題もあるだろう。

相手は負けを認めているし、このままひっ捕らえて終わり、でいいか？

「……って事で、縄でも縛って大統領様の所まで案内して——」

にこにこしながら降参するアヴァターラの脇腹めがけ、槌が振るわれる。

奇襲に対応し背後に退くアヴァターラのその悪意を秘めた瞳を見て、オリアンヌは判断した。

コイツはここで殺しておかなければいけない、と。

確かに、生きて捕えた方がいいだろう。拷問して情報を吐かせてもいいし、エドガー様の取引相手の実験台にでもしてもいい。だが。

そうやって生かしておくとまずい奴だ。彼女の最も優れた部分である動物的直感に従い、再度アヴァターラに襲い掛かる。

頭部を破壊しても再生できる生物。ならば——

「ああ、やる気なら仕方ない……」

瞬間、オリアンヌの視界からアヴァターラは消えた。視線誘導や脚運びを利用した相手に悟られない移動術。オリアンヌは憎々し気に舌打ちする。これよりさらに高い練度の同じような動きを、己が主に盾付く男の事を思い出してしまったからだ。

「人為変態——」

声の方向を見ると、アヴァターラは懐から『薬』を取り出していた。最初に変態を行った時と同じ系統のものでありながら、細部が異なっ

ているそれを、アヴァターラは自身に用いる。

「――」  
「<sup>アル</sup>偽神の芽」

変化は、オリアンヌが次の一撃を繰り出す前に訪れる。

アヴァターラの体から生えた異形の手のそれぞれに、生物の牙であろう刃と貝殻のような盾が形成される。

その盾が、オリアンヌの一撃を受け止めた。

だがそれだけでは無かった。

純粹に同じ系統の薬を重ねて投与した結果なのか、それとも先の攻防は本気では無かったのか。

さらに異形がその胴体の数を増やし、さらにはその異形の胴体の中ほどからも同じものが枝分かれし、拡大していく。

まるで唐草模様のような、趣味の悪い現代アートのように膨れ上がったそれが、四方八方から剣を振るい、盾を押し出し、オリアンヌへと襲い掛かる。

「ぬ……ぐっ！」

だが、その圧倒的な数の暴力を相手にしても交戦を続けられるのは、彼女の身に宿した生物のスペックの高さと彼女の弛まぬ修練の成果と言うべきだろうか？

その破壊的な一撃は盾ごと腕を砕き血と盾の欠片を散らせるが、異形の胴へと浴びせようとした次いでの一撃は別の胴から生えた手の盾が防ぐ。その隙に、破壊した盾と腕が再生される。

幸い、その反撃として振るわれる剣がオリアンヌの鎧を貫く程の威力が無い事が幸運だろうか。

何かの生物の牙だろうが、オリアンヌの厚い鎧の表面に傷を付ける事はできて、そこまでだ。

「うおおオッ！」

とはいえこのまま戦ってもジリ貧だ。そう判断したオリアンヌは、異形の対処を全て捨てアヴァターラに向けて勢いを付けて駆ける。

殺せるかはわからない。だが、一度本体を叩けば勢いはひとまずは

止まるはずだ。

「……残念だったな」

しかし。オリアンヌの身体が、ぐらりと揺れる。

体が制御を失ったかのように思うように動かないのを感じ取り、動揺が走る。

毒？ いや、体内に刃を通していない以上、それは無いはずだ。別の場所から入った？

その思考を纏める事なく、次には先の事実を否定するかのようになり、背中に焼けるような痛みを受け、オリアンヌの進撃は完全に停止する。

表面を引つかく程度での鎧に加わる痒さでは無く、体内に刃が達した苦痛。それが訪れる。

「くっ!?!」

あの剣以上に鋭い何かが背に、それも何本も突き立っている。

「さようなら、ニュートンの信奉者。残念ながら、ここまでだ」

体を痺れさせた何かと、鎧を貫通した何か。その正体を考える隙など与えず、動きを止めたオリアンヌに異形の剣が再び殺到する。

もはや人間の胴体に囲まれてアヴァターラからは見えなくなったその体。

終わりを確信し、アヴァターラはふう、と息を吐き出す。

「なん、のオオオ!!」

それは、一瞬の油断だった。ニュートンの一族として決して濃い血は無いが、その生い立ちから本人の戦闘技能もまた、一族の上位に劣らない彼が、安全圏だ、と戦闘中に微かな休息を取った、ただそれだけだ。

0.5秒にも満たない、その時間で。

「ぐっ、うう……!?!」

異形の胴を貫き、アヴァターラへと高速で投擲されたオリアンヌの武器、ハルバード。

それがアヴァターラが隙を見せたタイミングだったのは全くの幸

運だったが、しかし。

本体の胴にそれは突き刺さり、衝撃が骨を揺らす。

「……はっ、ははは、それでこそ、人間だ……」

命を燃やし抵抗し、今まさに、反撃とまでは至らずとも、それがただの幸運であろうとも、一矢報いた。

その姿にアヴァターラは満足げに笑い、刺さったハルバードを引き抜き。

「いっしょ」

血を吐いた。それは、単に内蔵が傷ついた、それだけでは無い。

まずい。 アルファモザイクオーガン a M Oが損傷したか？

このまま続ければ、間違いなくオリアンヌは殺せる。だが、能力を行使し続けられ、傷が広がる可能性がある。

自身の再生能力なら、MOであれば多少ならば再生できる。しかし、これ以上ダメージを受ければ、後の仕事に影響が出る可能性が。

一瞬でその可能性と判断が頭の中を巡り、アヴァターラは自身の能力を引っ込める。

アヴァターラの体内へと戻っていく異形。

先までそれが殺到していた場所には、全身に傷を負いながらも今だ気丈にアヴァターラを睨み付けるオリアンヌの姿があった。

「……戦いに本気で臨もうとしなかった無礼を詫びよう。貴女は、正しく勇敢な人間だ」

目の前のオリアンヌに賞賛と謝罪の混ざった言葉をかけ、アヴァターラは路地裏の横道へと消える。

待て、と声を出そうとするオリアンヌだったが、その身に追った傷と体内に回った物質の影響から、それは掠れて消える。

——白と黒の、盤外の戦争。その切っ先は、こうして決着が付く事無く終わった。

——フランス 大統領執務室

「まあ！ それでそれで！ どうなったのかしら！」

「黙って話を聞いている」

何故余の周りには煩い人間が多いのか——？

あのスペアの配下のように、黙って指示に従う人形の方がいくらかマシというものだ。

エドガーは目の前で繰り広げられている茶番に癖癖としつつ、珈琲を一口飲む。

『クカカ……そう急かすな、女。今はエドガーへの報告の時間だ』

執務室に置かれたモニターに映っている男は、いやに上機嫌だ。

エドガーと違い、自分の武勇伝を楽しみながら聞いてくれる相手がいるからか？ いや。

彼はそんなものに興味は無い。定例報告の前に血沸き肉躍る敵との戦いを楽しんだからである。

「エドガー様ったらひどい！ 私、怒っちゃうわ！ 三月……ちょうど最近ね！ そう、三月のウサギさんみたいに！」

——とんでもないモノを押し付けてくれたものだ。

エドガーは自分に向けてぶーぶーと文句を言う女性を一目見て、露骨に顔をしかめる。

大統領執務室。国を束ねる大統領の仕事場に、その姿は余りにも場違いであった。

そこに居たのは、ワインレッドに染められたウエディングドレスを着た年若い女性だった。

兔の耳を模した髪飾りや懐中時計といった小物が所々にあしらわれ、胸元が派手に開きその豊満な胸の谷間を覗かせている衣装は、まるでゲームのキャラクターか何かのようである。

窓からさ迷い込んできた蝶を掌に乗せて撫でているその姿は、大人びた体つきとは対照的な幼さを感じさせる。

道化師め。ここまで狂っているとは、想像の遥か下だった。エド

ガーは一人、報告を聞きながらぼやく。

トランプにおけるジョーカーとは、ゲームのルールによって持っていたままでは負けるか、それとも最強の手か、極端な札だ。

この女は、そのどちらでもある。自身の手に置いておけば、いずれ禍根をもたらず。

だが、相手の手に渡れば、それは最悪の札としてこちらに牙を剥いてくるだろう。

だから、突如の宣言と同時に地球に打ち込まれたロケットから確保した。

忌々しいスペアの手に、一族の手に渡ってしまえば、厄介であるために。

『それにしても、良かったな、エドガー』

何がだ、と聞き返すのも面倒だ。エドガーは続きを言え、と無言で促す。

『晴れて貴公も、ゲガルドの王のように大陸すら滅ぼせるコマを手にしたわけだ』

いいや、既に持っていたかな？ などと自問する通信相手は無視し、思案する。

さて、どう使ってやろうか、と。

『寝物語なら、その大統領閣下が聞かせてくれるだろうよ。そう気を悪くするな——』

エドガーと通信相手のどちらにもあしらわれ頬を膨らませる女性に、通信相手は冗談めかしてフォローをすると同時に、その名をどこか楽し気に語るのだった。

『——』 赤の女王”、アストリス・メギストス・ニユートン』



## M i n d   G a m e : 第3話   剣盾会合

二つの影が瞬間的に交差し、剣と剣がぶつかり合う音が響く。

一瞬で間合いを詰め、かと思えば離れ。

常人では姿を追い続けるのも困難な高速の戦闘。

片方が振るった剣をもう片方が身を屈め回避すると同時に反撃を繰り出し、それを織り込み済みだった先に攻撃を仕掛けた人間は素早く飛び退く。

攻防が一体となった、理想的な剣術の動き。

時に教科書のように模範的に、時に戦場のように実践的な動きで、互いは己が得物、日本刀を縦横無尽に振るう。

永久に続くかと思われた剣舞は、片方のペースが崩れ動きに微かな陰りが見えた事により終わりを迎えた。

ここが好機、と相手の急所へ向け襲い掛かる剣と、この交差を逃せば勝機は無い、と防御を捨て相手より早く、と走る剣。

それは、互いの首を刎ねんと一直線に放たれ――

「はい、そこまでですー！」

――観客兼審判の声と手を叩いた音により、両者は同時に相手の首の手前で刀を止める。

「……ありがとうございます、オスカル様」

疲労を見せまいとしているのか、大きく息を吸って吐いて、を数度繰り返した後に、和装の少女、千古はその長い髪をまとめていた髪留めを取り、試合の相手へと一礼する。

「いいのよ。アナタがお願いをしてくるなんて珍しいし……アタシも楽しかったわあ」

その礼を受けた相手は、優しい気な声の後、満足気に微笑む。

ゴテゴテのメイクを施した、坊主頭の男性だ。彼、オスカルは刀を鞘へ収め、少し崩れた革のジャケットを整える。

「いやー、チコちゃんもオスカルちゃんも相変わらずキレイキレイの動きつすねー」

二人から数メートル離れその試合を見ていた希？は、実戦に迫るその試合の感想と同時に拍手を送る。

オスカルが今この場所にいる理由。それは、一族を代表として千古を迎えに来たからだ。

上月千古。ニュートンの一族、上月家の跡継ぎである彼女は先日とある事情により深手を負い、槍の一族、その王であるオリヴィエに保護されていた。

得体の知れない、特にここ最近起こっている、アメリカを舞台とした騒乱に関わっている疑惑のある槍の一族。そこに外部の一族の間を置いておくのは様々な理由から危険と判断した一族の総意として、彼女の身柄の返還を求めた。

一族に対し叛意を持つている可能性がある彼らとはいえ、現状は一族の一員として振る舞っている以上は拒否できるはずもない。

こうして、千古は一族の下へと帰ることになったのだが。

問題は、一族の誰が迎えに行くか、であった。交換条件として相手が要求してきたのは、一人で迎えに来ること。

彼らは自身の本拠地の場所が割れることを極端に嫌う。それは、一族にもしもの事があった時の備えとして存在するその所在を危機に晒さないためだ、当然と言えよう。一族ですら、当主と参謀にしかその情報は知らされていないのである。

この理由は事実なのだろうが、だが連中が、こちらが一人であることに付け込んで何か仕掛けて来ないとも限らない。

総合的に判断して、一族の中でも上位の人間ではない、かつ戦闘能力に長けた人間を選ぶことが決定された。

もしもの事があっても一族としての損失を最小限に済ませられるように。対処できるように。

こうして、一族の筆頭、ニュートン家からの指示により、一族の中

位下位に位置する人間のまとめ役、ミルチャが話し合いその役割を任せたのが、いまこの場所にいる彼、オスカル・新界だ。

上月という家系が新界家の分家という近い親戚関係である事。新界家もまた、一族の中核とは遠縁の家系である事。一族の中でも高い戦闘の技能を持っている事。彼は今回の任に求められる条件を全て満たしていたのである。

そして数十分前に両者はここ、現在は一般人の立ち入りは禁じられている遺跡、コロッセオの中にいた。

ローマ連邦にある古の闘技場。武闘派のこの子を迎えに来るなら丁度いいだろう？ と冗談めかして語ったオリヴィエが指定した場所である。

その中心で先に待っていた希？と千古の姿を遠目に観察して、オスカルは堂々と二人の前に出る。

「おやや？ オスカルちゃんじゃないっすかー！ おひさっすー！」

満面の、緊張感に欠けた笑顔でぶんぶんと手を振ってくる希？と、その隣でどこか顔に影を落としている千古。

「約束通り、アタシは一人よ」

「はいな、そうみたいっすね！ じゃあこっちも約束通り、チョコちゃんをお送りするっす」

名残惜しいっすねー、とハンカチで目元を押さえながら、希？は千古の肩を叩く。

それに対し、無言の千古。彼女はそのまま、どこか悩んでいる様子でオスカルの傍に歩いていく。

「……オスカル様」

「そんな暗い顔しちゃって……可愛い顔が台無しよおー！」

俯いたままオスカルの目の前にまで歩いてきた千古に、オスカルはひとまずは元気付けてあげた方が良さそうだと判断し、あえて明るい調子で話しかける。

「私と、戦ってくださいませんか」

しかし、その次の千古の言葉は、オスカルの予想とは少し違うものであると同時に……彼の闘争的な部分を起こすものであった。

ああそうだ、昔から、悩んでいる時のこの子はいつも同じ事を言う。そう、思い出して。

「……ええ、喜んで」

彼は、千古の得物と同じ系統の武器、腰に差した日本刀へと手を添えた。

その振るわれる剣筋に、千古が以前に試合をした時よりも数段強くなっている事を感じ取る。

だが、集中が乱れているのか、気の迷いがあるのか、微妙なところに隙が生じている。

真剣勝負。隙を逃さず、そこを突き、そして。

「じゃあ、私はこれで！　今から、アメリカに行かなきゃいけないからね！」

「あら、忙しいのね」

試合は終わり、この会合はお開きの空気を纏いつつある。

背を向けた希？に、千古は名残惜しそうに少しだけ手を伸ばし、それを途中で止める。

「ああ、そうだ！　オリヴィエ様の写真アルバム電子版、毎週送るつすからね！」

その千古の動作を知ってか知らずか、思い出した、というように千古の方に振り替える希？。

オスカルからしてみれば何だその呪いのアイテムとしか思えないが、試合のあとですつきりとした、という様子ではあるがまだ暗さが抜けていない千古の目に、一瞬だが輝きが戻ったのを感じ取る。

「ねえ千古ちゃん、先に行つててくれるかしら？ 希？ちゃんとね、ちよーつとお仕事の話よね」

オスカルの言葉に千古は頷き、希？とは逆側に歩き出す。

飛行機の時間いつだったつすかねーと携帯端末を取り出す希？へとオスカルは近づき、それを察知した希？が向き直る。

「ん、どうしたつすか？」

「……アナ達は何を考えて何をしようとしてるのかは知らないし、きつとアタシはそれをどうこうはできない」

オスカルの目が、親戚の小さい子を可愛がるそれから、一族としての、戦士としてのものへと変わる。

どうこうできない。それは、オスカルの実力の問題ではなく、彼が2年後、地球の外へと出向くために問題への対処が場所的な問題で難しいためだ。

「やだなー、私もオリヴィエ様も、一族のためにあくせく働いているだけつすよー」

「千古ちゃんを救ってくれた事、感謝するわ。でも、これだけは覚えておいて頂戴」

それをいつも通りの能天気な調子で否定する希？。

しかし、オスカルの態度は、変わらない。

お前達は何をする気なのかは知らない。即座の対処も恐らくはできない。だが。

「あの子の心を裏切るつもりなら、タダじゃ済まないと思いなさい」  
「……オスカルちゃん、その顔、チョコちゃんの前ではしない方がいいっすよ？ 刺激が強すぎるつすー」

のほほんとした声色といつも通りの笑顔。だが、目だけは笑っていない希？。二人は、数秒視線をぶつけ合う。

そして返事を返す事は無く、オスカルは踵を返し千古の後を追うの

だった。

「オスカル様、聞いてくださいますか!? オリヴィエ様の事！」

—— 一時間後。

カフェでお茶を啜りながら、オスカルは先ほどの姿から一転した千古の延々と語る話に耳を傾けていた。

萎れていた花に水をかけたみたいだ、と何となく思う。

元気が無い様子の千古にオスカルが振った話題。それは、あつちでの生活はどうだったか、というもの。

迎えに行つた段階で既にオスカルは察していたのだが、千古は向こうで酷い待遇を受けていたから暗い表情をしていたわけではない。むしろ逆だろう。

彼女が一族の人間から無茶振りをされていた事に気付けなかった。それは、自分達の責任である。ミルチャは特に深くそれを気に病んでいた。

ならば、現在の千古の不安は、むしろこれから自分の待遇は悪化するのではないか、心地よい空間から出る事になってしまつて悲しい、と言う類のものではないかと予想していた。

反応は劇的だった。

はつと顔を上げ、じわりと目の端に涙が滲み、それを慌てて手で拭い、照れくさそうに笑う。

そして、そこからはもう話題の洪水である。

希？とオリヴィエ、槍の一族の最上層の二人とどのように生活し、二人が自分に何をしてくれたのか。

尽きぬ話題を、オスカルは微笑ましい気持ちで、だが同時に複雑な心境で聞いていた。

この子は、こんなに感情を表に出す子だったかしら？ と。別に、洗脳の類をされているわけでは無いだろう。

単純に、年相応に感情を発露できる場を、周囲は用意してやれなかった、というだけの話だ。

彼らは、真意が何であれ彼女にそれを与えたのだ。

……例え、一族に、敵対勢力と同様の警戒をされている親戚だったとしても。

そこに関しては、感謝をするべきなのかもしれない。だが。

「ねえ、千古ちゃん」

「はいー」

確かに、裏があるのだろう。そして、いくら嬉しそうにしても口を滑らせはしないが、きつとこの子はもうこちら側の存在ではない。

「――後悔しないように、やりなさい。……本気の本気のアタシとか当主が相手でも勝ってやる！　ってくらい、本気でね」

「……」

突然の、力の籠った言葉に目を丸くする千古に、オスカルは次いで語り掛ける。

「女の子なんだから、もっとワガママに生きるべきよおー！」

そう、相手がどうであれ、その真意がどうであれ、この子は救われた。心から本気になれる相手を得た。それは、事実。

だとしたら、正義だとか悪だとか、この子がそんな理由で止まってやる理由なんて、無い。

……それでも止めなければいけないかも知れないのが、この世界というものなのだけど。

ぽかんとしているその鼻を優しくつつき、オスカルは慈しみの目を向ける。

「……そうそう、あと一つ、アドバイス」

そうだ、これは、伝えておかないといけない。ある事に考え至り、また聞き役に徹しようとしていたオスカルは、続けて語る。

「最後の最後に、選ばないといけない時のために、答えはちゃんと用意しておくのよお」

「答え……っ？」

きつと、この子は気付いていないだろうから。  
たぶん、二つをごちゃ混ぜにしてしまっているだろうから。

「千古ちゃんが最後に伝えたいものが、忠義なのか、それとも別のものなのか、ね」

「……はい。お言葉、耳に留めておきます」

その意味を理解する事ができたのかできなかつたのか、千古は首をひねり、その後で返事を返す。

どんな形であれ、この子が満足できる結末を迎えられますように。

そう願ひ、オスカルは千古がおずおずと差し出して来た茶菓子を受け取った。

——フランス パリ

芸術の都と謳われ、2618年でも未だその通り名に見劣りなど一切ない絢爛の街、パリ。

ここにあるフランスの大統領官邸であるエリゼ宮殿は、古く1800年代より大統領官邸として使われている、歴史ある建築物だ。

「たぶん、何かが起こるならこの辺り、だよね」

その夕暮れの朱に染まった薄暗い街中、宮殿の近辺を、キャロルはできる限り人影が少ない場所を選びながら歩く。

何故人が少ない場所を選ぶのか。一つは、シモンの考え通り、相手がおかをしでかすために行動しているなら、人気のない場所動いている可能性が高いから。もう一つは、キャロルとしては自覚が無かつた……自覚せざるを得なかつたが、キャロルは街を行く何人もの男にお誘いを受けていた。ご一緒に食事でも。街を案内しましょうか。等々。

せつかく買ってもらったから、すぐに脱ぐと悪い。そんな彼女の律



儀さから、結局は動きやすい服装に着替えず、彼女はここに来た時のワンピースのまま街の調査を行っていた。

本格的な調査にはまだ情報は不足しており、この辺りの地形の把握が先だろうか。

道の配置や建物の構造。どの場所からどのような街の姿が見渡せるのか。

有事の際の避難誘導や戦闘が起こってしまった際に、これらの情報は必須とも言える。

なので、剛大と手分けをしてキャロルは街を一先ずは若干の観光気分と共に歩き回っていたのだが。

そんな彼女には相変わらず多くの目線と、時には勇気ある男性から声かけられる。

やっぱりこの服装、目立つちやうのかなあ？

などと、自身が声をかけられる理由について結局半分以上無自覚なキャロルは、仕方なく人気の少ない所を歩いているのである。

先進国の大都市だけあって人が多く、建物も入り組んでいる。建物の密集地の隙間にある裏路地などは、キャロルの母国であるアメリカと同じ、少し危険な気配がある。

身を隠すには、ぴったりの場所。この辺りは少し調べる必要があるかもしれない、というのがキャロルの分析である。

アーク計画関連の調査部門とU—N—A—S—A本部付きの特務部隊の調査によれば、コンフランスにはとある中国系のマフィアからの資金の流れが見られるという。今回の件と直接の関係があるのか判断するには情報が足りなさすぎるが、その組織が何かしらの関わりを持っているかもしれない。

「つと、あとはあっちかな」

日が暮れはじめ、夜が訪れる。

そこまで考えて、あと少ししたら一旦滞在先の安ホテルに戻らなきゃ、と時計を確認する。軍資金は多く貰っているけど、できるだけ節約しよう。キャロルと剛大が話し合い、瞬間で決まった結論である。

キャロルの目線の先には、街はずれにあるホテルと、そこに至るまでの直線ルートにある廃墟の群があった。

その廃墟の一角には、立派な聖堂、大聖堂と呼ぶべき規模のものが一つ、建っている。

地図には何も書いてなかったけど、すごく目立つ建物だよね、とキャロルは首をかしげる。

都会の、それも大統領官邸の近場にある廃墟群などという周囲から浮いている風景については、先に調べがっていた。

約20年前に起こった、化学工場の爆発事故。それによって百棟以上の家屋が焼け落ち、この一角は未だ整備が追いついていないらしい。

聞いた所では、土地の権利の関係で取り壊しができなくなってしまうのだとか。

「んー……うん！」

少し考え。キャロルは、あまり人が通らなかった廃墟の群を突っ切るため、足を踏み入れる。

廃墟。身を隠して何かをするには不気味がつて人が近寄らないこの場所はびったりだろう。後に、本格的な調査をする必要があるかもしれない。そう、考えて。

「ああ、忙しい」

キャロルの目は、自分と同じく廃墟の道をぼやきながら歩く中学生くらいの少女を目に捉えた。

普段通りのキャロルであれば、少女に対しこの時間にこんなところ歩いてたら危ないよ、と自分も若い女性である事を棚に上げて声をかけていたのかもしれない。

しかし、その少女の服装を見て、一瞬動きが止まってしまった。

少女は、修道服を身に着けていた。そして、聖堂へと向けて足を進めている。

既に廃棄された場所なのでは？ 聖堂も、確かにその姿こそ保っているけれど、壁面は長年放置されているのか汚れと経年劣化でボロ

ポロになっていて、整備されている様子は無い。そんな所に、人がいるものなのか？

何故か見てはいけないものの気がして、キャロルは廃墟の瓦礫に身を隠し、少女を目で追う。

少女はそのまま歩みを進め、聖堂の正面扉を開け、中へと入っていった。

「……」

何か、怪しいのでは？

そう判断したキャロルは、どうしたものかと考える。

行ってみる？ 時間的にはもう少しは大丈夫。でも、大丈夫かな？

「……よしー」

考えた結果、キャロルは聖堂の前まで早足で移動する。

修道服の人、シスターさんだろうか。聖職者の人がいるなら、きつと危ないような場所じゃないだろうし、もし聖職者の人が脅されて無理矢理、なんて状況であれば、それこそ業務外とはいえ、自分の出番だろう。

そう考えて、キャロルは扉を開け。

「わぁ……！」

その内部の風景に、目を奪われた。

外からでも伺えた高い天井と、開けた、奥に続く通路。その奥には多くの椅子が並べられている。

そして何よりも、彼女の視線を釘付けにしていたのが、壁面を彩るステンドグラスだった。

左右の通路の窓に作られた幾何学模様。最奥部の大窓を飾るのは、虹の七色に輝く槍の穂先と思われるものに全方向から無数の線が伸びる、というような絵柄。

色彩豊かな着色ガラスの小片によって作られた、夕焼けの通過光によって美しく映えるガラスの絵画とでも呼ぶべきいくつもの芸術作品が、キャロルを出迎える。

いくらか埃こそ溜まっているものの、それは20年という長期間を

経ているようなものとは到底思えない。

少女を探す目的とこの芸術の閲覧。二つを同時に兼ねて周りを見回しながら、キャロルは一步、また一步と聖堂の奥へと足を進めていく。

誰もいないのだろうか。椅子が沢山あると言う事は、お祈りをする場所、教会で間違いは無いのだろうか。

最奥部、椅子の並ぶ場所までたどり着いたキャロルは、左右にも自分が歩いてきたのと同じような通路がある事に気付く、少女はどちらかに行つたのか。

……それにしても綺麗な模様だな、こんな大きいステンドグラスつて写真でしか見た事なかったな。

改めて、近くで見ると美しさと同時に迫力も感じるその大窓に描かれたものを、見て。

「——っ!？」

ぞくりと、キャロルの背筋に怖気が走る。

数十数百という無数の細い直線、曲線が中央に描かれた虹色の槍の穂先へと向かっている。遠目で見ればそうだった。だが、その無数の線は近くでよく見ると。

——全て、人間の腕として描かれたものだった。

まるで、救いを求めて伸ばしているかのような、その描かれた光景。そして。

「おや！ お客さん第一号がこのような綺麗なお嬢さんとは！」

「ひゃいっ!？」

次いで、唐突にキャロルの背後から人の気配が浮かび上がると同時にテンションの高い声がかけられる。

心臓が飛び出るほどに驚いたキャロルが体を跳ねさせ、その声の方

向へと振り返る。

「あ、驚かせてしまったようだ！　これは失礼を！」

そこに立っていたのは、キャロルより少し年上か、というくらいの青年だった。

金髪碧眼、明るい性格を思わせる整った顔に浮かぶ嬉しそうな笑顔の彼は、キャロルの来訪がよほど嬉しいのか、スキップでもし始めそうなくらいの軽快な早足でキャロルの隣を抜け、ステンドグラスの根本にある祭壇へと移動する。

「改めて、ようこそ。今日はお祈りに？」

その立ち振る舞いは、神父のそれだろう。しかし、改めて目の前に立った彼の姿を見たキャロルは、その服装があまりにもこの場所とはミスマッチである事に気付く。

彼が着ている虹の七色に染められたそれは、法衣や道服とも呼ぶべき仏教や道教といった宗教の信奉者が着るものなのだ。キャロルにアジア圏の宗教に関係した衣類の専門的な知識は無いものの、少なくとも教会、という場にいる聖職者が着ているものとは明らかに違う事はわかる。

その頭に乗った冠も、蕾から開きかけている花を模した、普通の司教や司祭の冠と全く異なるものだ。

「……猊下、侵入者、ですか？」

その服装に疑問を抱いていたキャロルは、自身に向けて警戒の目線が向けられている事に気付く。

キャロルから向かって左側の通路に、先ほどの修道服の少女が立っていた。

「ははっ、何を言っているんだい？　……お客さんだよ、あまり失礼な事を言うものじゃない」

明るい調子で少女の誤解を解く青年。だが、その言葉の後半には微かな少女への叱咤の色と、同時に目が少し細められる。

「ひっ……！」

青年の目と声に、少女は微かな悲鳴を漏らし硬直する。

大丈夫ですから、と少女をフオローするキャロル。やっぱりこういう場所は礼儀とか厳しいのかな、などと考えながら。

「アタシは全然気にしてませんから、あんまり叱ってあげないでもらえると……」

「おや、お優しい！ さあ、何を止まっているんだ、お客さんにお茶を頼むよ、シスター・アレクシア」

「っ、はいっ」

青年の声で弾かれたように、修道服の少女はキャロルが別にお茶も大丈夫ですから、と言う隙も無く立ち去っていく。

「えっとその、ごめんなさい。アタシが来たの、お祈りとかじゃないんです」

「おや。これは早とちりを！ どのようなご用事で？」

キャロルの若干の申し訳なさが滲んだ言葉に、青年ははて、と顎に手を添え考え込む。

「この教会、人がいたんだなーって気になっちゃって」

「ああ、ああ！ それはごもつとも！ こんなボロ教会、気にならない方が珍しい！」

キャロルの、嘘は言っていない言葉に青年はぽんと手を打ち、説明を始める。

自分は信仰を広めるためにここに来た、丁度うち捨てられた自分のところの宗教の古い教会があったから、土地の仮管理人さんと交渉して借りて現在は掃除中。そのような事情のため、まだ人を呼べる状態では無かったけど、予想外にお客さんが、という事らしい。

「そうそう、この教会、地下に……というかこの足元にめっちゃくちや深い縦穴が空いててね！ 穴の外周に螺旋階段も付いてるから見ま

す？」

そう言い、部屋の端にある地下へと続く階段を親指で差す青年に、今度機会があれば、とキャロルは社交辞令的にお断りする。

ひとまず、怪しい人達では無いのかな？ そう考え、キャロルは今日の調査はここまideaかなと考える。

「お話、ありがとうございます。また今度、お祈りに」

「とんでもない。いつでもどうぞ！……どうか、貴女の行く末に、神への道が開かれていますように」

何だか、ちよつと変わった挨拶だな。

少し疑問に思いながら、手を振る青年に見送られ、キャロルは聖堂を後にするのだった。

教会を出て、キャロルは一つのびをする。

もうすっかり暗い時間だ。戻ろう。

夜ご飯も買って帰ろうかな、などとあれこれ考えるキャロルは、ふと空をひらひらと舞うものがある事に気付く。

一匹の蝶だ。これをキャロルが見たのは、完全な偶然と言えるだろう。偶然目に入って、きれいな色の翅だなあと気付いた、ただそれだけの話だ。

しかし。

「へ——」

キャロルは、直後におぞましいものを見た。ただ、背筋を凍らせる、というような反応では無く、目を擦る。

それがどこか現実離れしていて、超現実的シュールなもので、自分の視覚が信じられなくなったからだ。

その間に、蝶はふらふらと飛び去ってしまい、それを確認する術は無くなってしまった。

夜には別の調査をしていた剛大との報告会の予定。これを報告するべきだろうか？ いや、疲れからか、何かを見つけないと、という

無意識のうちの強迫観念的な何かからか、不思議なものを見てしまったのだろうか。

どうしようなーと悩みながら、キャロルは帰路を急いだ。

「いやー、可愛かったなあ、あの嬢ちゃん」

深夜の暗闇。細い路地を、ふらふらとした足で男が歩く。顔は真っ赤に染まり、酔っている事は明らかだ。

彼に鉛筆を見せてこれ何本？ と聞いたら3倍くらいの数を答えるかもしれない。

「俺もあと二十年若けりゃ……」

昼間街中で見た綺麗な女性の事を思い出しながら、先ほどから同じ言葉を繰り返し、歩行距離にして本来の数倍になるであろう蛇行で家へのショートカットの道筋である路地を進んでいく。

「あん？」

そんな彼の揺れる視界に一瞬、人が映り込んだ気がした。ただ、彼の視界に映ったのはそれは正常な人間の姿では無いのだが。

腕が6本も8本も生えた人間なんていねえよな。と彼は考える。ただ、彼は自分が酔っている事を理解しているタイプの酔っ払いであった。視界がブレて多く見えただけだろう。

「あーあー、回る回る」

そのおかしな視界をけらけら笑いながら、男は立ち止まる。

——否。その脚を、何かに掴まれて、強制的に止められる。

「あん……っ？」

次の言葉を彼が発する事は無かった。

彼の眼前に、上からぶら下がるように現れた、人間の胴体が連なった怪物。



そこから生える腕が、彼を拘束し、裏路地の闇へと引きずり込んだ  
のだから。

## M i n d   G a m e : 第4話   厄災放浪

——フランス 某所

「もう一度確認するけど……本当にいいのかい？」

「何度も言わせるな、博士」

思惑が渦巻くパリを離れ、ここはフランスの一都市。

首都圏でこそ無いが、そこそこ発展している都市の、これまたそこそこ大きなビルの地下室に、その研究所はあった。

「いや……急患だ、つてエドガーの奴に言われた時はウチは市民病院じゃないんだぞ！」 と言いたくなかったが、全く」

ここ一時間の間に数度尋ね、それでも変わらない答えにやれやれと首を振りながら、白衣を身に着けた男——レオ・ドラクロワは滅菌容器の中に並べられた手術器具と、その横にある、薬液に漬けられた昆虫のピンを手に取る。

「問答をしている暇は無いのだ。できるだけ早く頼む」

そんなレオへと焦りと少しの怒りが混じった声をかけるのは、ベッドに全裸で寝かされた女性だった。

その身は嬾やかか、という表現が似合うようなそれでは無く、鍛え抜かれている事が伺える筋肉に、全身に刻まれた無数の銃創や刺し傷の痕。ベットに預けている背中側にはまだ新しい傷があるのか、じわじわとベッドを赤色へと染めていく。

「術後はリハビリとか必要なんだってば。それにくだいようだけど、たぶん君、死ぬぞ」

全く、困ったものだ。レオは軽い調子で患者である彼女に死を宣告しながら、ピンを振る。

この女性、オリアンヌ・ド・ヴァリエは、以前にも彼の患者……というか、被験者になった人間である。

現在レオが試験を進めている『エクティンクト E・スピーシーズ S・M・O手術』。その被検体として自ら名乗りを上げた一人がこのオリアンヌだ。

「……何を言う、博士。我が身の全て、とうの昔にエドガー様に捧げたもの」

エドガーに絶対の忠誠を誓う彼女の事だ。それはもう、敵の多いエドガーを守るために奮戦し、多くのデータを取ってくれるだろう。そう期待して、無事手術が成功した彼女を送り出したが、まさか想定よりずっと早くズタボロになってエドガーから送り返されてくるとは、自他共に天才と認めるレオにしても予想外であった。

しかも、あろう事か。時間が惜しいとばかりに碌な治療もされず運ばれてきたオリアンヌが、何を発した事か。

——もう一度、E・S・M・O手術を施せ、などと。

私の手術ベースの軸となっているツノゼミを博士の選ぶ、最も強いE・S・M・O生物と差し替えろ。

それを聞いた時、レオはうわごとを言っているのかこの女は？ と思わず考えてしまった。というか、半分くらいまで口に出た。

ツノゼミがM・O手術のベースに上乘せされる理由。それは、昆虫の頑丈な甲皮、解放血管系といった強みを失わないまま多種多様な生物を身に宿すため。加えて、ツノゼミそのものの多様性により、あらゆる生物と組み合わせる事ができるため。

つまり、メインとなる手術ベースとの相性さえ良ければ、理論的にはツノゼミの部分を別の生物に譲る事も可能である。事実、エドガーの情報網によればロシアでツノゼミの代わりに別の生物を用いた例が存在するという。

しかし、だ。E・S・M・O手術はまだ完成段階では無く、成功率も通常のM・O手術と比べ低い。さらに、オリアンヌは初期不良とでも言うべきか、E・S・M・O手術によって得たベースが歪な状態で発現してしまう時がある。

その不安定な状態で、後付けでツノゼミを押しつけてE・S・M・O手術を施す？ さらに加えて、今のような何本も刃物か何かで刺されて体内には毒が回っているズタボロの体で？

とても、命の保証などできるはずも無い。別にレオはオリアンヌの

命の事はどうでもいいし、E. S. M. O手術の重複という中々取れないデータが得られるのは得と言えるのだが、貴重な被検体がまだ十分なデータも得られていないまま無駄死にするのは総合的に見て良いものとは思えない。

だが、極めて低い成功確率、そこから導き出されるオリアンヌの運命をそのまま口にしたレオに、彼女は不敵に笑いかける。

「死ねば、私が捧げた忠義もその程度だったというだけの話だ」

「……」

レオは嘆息する。

どうして、この手術の被験者はどいつもこいつも頭のネジが三本程外れた人間ばかりなのかと。

エドガーを狙いながらエドガーの駒として戦うらしい殺し屋の男といい、『報酬とか研究データとか色々弾むからエドガー様には内緒で！』などと言いながら飛び入りでやって来た宗教家のニュートン一族といい。外人部隊のあの子は凄くまともだったんだな。

一通り、何故自分の所へはヤバイ奴ばかりやってくるのか、と嘆いた後。

「ああ、いいともいいとも！ やってやろうじゃないか！ 私が君に最強のドレスを仕立て上げてやろう！ それこそ、ニュートンの化物どもとも互角……いや、ブチ殺せるようなものをな!! 死んでくれるなよ！ その忠義とやらに誓ってな！ 私の貴重な時間を無為にしないでくれよ!!」

ヒートアップしたその声と勢いのままに、メスを振り上げた。

「……リースちゃん、これ」

「どうしたんですか？」

夕暮れ時、パリ市街のホテルの一室。正座して新聞を読んでいた雅？は静花を招き寄せる。

パリに到着して数日。二人は、情報収集に励んでいた。

さくつとやって終わり、で済まない難易度の任務である以上、慎重にかかるのは当然である。

相手は一国の長。さらに、ニュートンの一族の中でも上位に位置する能力を有した人間である。

よいドン、で決闘して勝ってみろ、と言われてもそう簡単にできるような相手でもないのに、さらに厚い警備網を掻い潜って、という条件が加わる。

その為に、様々な方向から情報を集める必要があった。エリゼ宮殿の内部地図に関しては既に入手済みだ。その点については問題は無い。必要なのは宮殿を出た後の脱出経路や、見張りの警備員や兵士の配置、大まかな巡回ルートに関して。

そんなわけで、二人は旅行者客として街を歩き、こつそりとそれらに関して情報を埋めていた、のであるが。

情報収集を始めて二日目の事、ある事に気が付いた。

どうも、街全体から伺える様子として、警備の手が厳しい事に対して軍人を見かけないのだ。

ここ数日、市内では警察官がせわしなく走り回っている場面に何度も出くわした。

普段でも街の見回りは行われているらしいが、街の人に聞いてみれば、明らかに多いのだと言う。

エリゼ宮殿を覗いてみればそこには大統領官邸の護衛を担っている国家憲兵隊と思わしき軍人の姿こそ見られるもの、平時以上の人員が配備されている様子は無い。

それを疑問に思っていた二人であったが、その答えの一端は雅？が指差した記事に書かれていた。

陸軍の上層部による会見を纏めた記事だ。

正確な日時はぼかされているが、一週間程前から北海側の沿岸部で同時多発的に未確認の武装勢力が目撃されており、上陸の可能性も視野に入れて警戒態勢での調査が進められている。

成程、このパリが北部の都市である事も合わさり、この近辺に常駐している軍人の多くはそちらに割かれているのだろう。軍人が少ない、というのは好都合である。少し前に軍人が数十人という数で、テロ組織との戦闘により殉職したというのが大々的に取り上げられたばかりだ。本来ならば大統領府の防備はより固められているのだろうが、得体のしれない武装勢力などという目前に迫った脅威だ、致し方ない部分もあるのかもしれない。

ここで二人の目はもう一つピックアップされている記事へと移される。

それは、ここパリの話だった。

ここ3日間で、行方不明者が急増。現在、14人が行方不明。

被害者はいずれも夜間に外出していたところで行方をくらまされており、行方不明になる直前に同行していた人間の証言から一人で歩いていた可能性が高い。深夜の外出で人気の少ない場所は避ける事。

そのような記事だ。街が混乱しているのは二人にとっては好都合である。そこに付け込めるのだから。しかし、一方で気味の悪さも感じる。何故、お膳立てでもされているかのように自分達に都合の良い状況が整っているのかと。偶然、で考えを止めるのは、どうにも落착かない。

「……ねえ染さん」

「どうしましたか?」

考え込む二人であったが。ふと、静花が顔を上げ、雅?へと顔を向ける。どこか不安そうな表情だ。

「何か、聞こえませんか」

そこで、聴覚を周囲に向けて集中した雅?は、何かの鳴き声を聞き取る。

——じょうじ

それは、二人が訓練で何度も聞いた事があるものだった。慌てて、窓を開け二人は聞こえた方向を覗き込む。

だが、裏路地の暗闇は二人にその声の主を目で捉える事を許さず。

二人は顔を見合わせ、頷く。

夜の暗闇へと臨む調査が、幕を開ける。

恐らく、これが行方不明事件の答えなのだろう。

変態を済ませた雅？が前に、静花がその後ろに位置取り、暗闇に目を馴らすと同時に進んでいく。

二人はどちらも隠密に長けた手術ベースを有しており、それが今回の任務に抜擢された大きな理由である。

この夜の暗闇であれば相手からの視認もある程度は遅れるだろうが、それでも油断などできない。

時々聞こえる鳴き声を認識し、それを道標として狭い通路を慎重に曲がる二人はこの事件について考えを巡らせる。

何故フランスにテラフォーマーがいるのか。地球でも様々な理由でテラフォーマーが潜伏している地域があるという事は中国は把握しているが、雅？と静花が以前確認したリストにフランスは入っていない。なかつたはずだ。

ならば考えられるのは、何者かが外部から持ち込んだか、それとも国内で研究されていた個体が逃げ出したかだ。少なくとも表社会の一般人に対しては機密であるテラフォーマーという生物がおいそれと逃げ出せるような設備で管理されているとは考え辛い。フランスのような先進国であれば尚更だ。

鳴き声が近い。二人は目配せをし、通路の端へと背を預け、慎重にその先を覗く。裏路地を深く進み、ここから先は廃屋が多くなってくる。全く管理されておらず、煤とこびり付いた黒い油。水に溶けた成

分が壁にこびりつき層となりそこに微生物が繁殖したぬめりのある不快極まりない汚れ。誰も切る人間がいなかったために無秩序に伸びた蔦。腐食し穴の開いたパイプからぼたぼたこぼれる水。表向きの華やかな街並みとは対照的な、正に廃墟と呼ぶべき空間が二人の目の前には広がっていた。

「じー」

「じょうじー」

そして、そこには二匹のテラフォーマーがいた……のだが。何やら様子がおかしい事に静花が気付く。

「……テラフォーマーって、あんなでしたっけ？」

小さな声の問いに、雅？は首を横に振る。

そのテラフォーマーは、どこか形態が通常のものとは異なっていた。それも、二匹でそれぞれ違う。

片方のテラフォーマーの臀部から生えた尾葉。それが、通常の個体と比べやたらと長く、何やら折れ曲がっている。

もう片方のテラフォーマーは、拳になにやら棘のようなものが何本も生えている。

一体、こんな場所で何をやっているのか？ 二人の疑問は、次の瞬間に解決した。

「じっ……いー」

拳から棘が生えたテラフォーマーが、もう片方を勢いよく殴り付けたのだ。

「ジヨウツー」

だが、もう片方のテラフォーマーは機敏にそれを回避し、反撃する。突然の仲間割れに困惑する二人であったが、仲裁をする必要性は全くないため、ただそれを見守る。

通常のテラフォーマーを上回る動作で、両者は両者の命を削り合う。

それは不可解な行動であった。テラフォーマーは通常、社会的な生活を営む生物である。

特にこの場所のような人間の生活圏では、互いに協力して活動する



はず、なのだが。

腕に棘を生やしたテラフォーマーが、背後へと翅を開き、飛ぼうとする。だが、それは叶わなかった。

翅に、まるでくしゃくしゃにした紙のように無数の皺が刻まれており、それは飛行できるような状態では無かったのだ。

「じ……」

予想外、とでも言いたげに自身の翅へと目を向けるテラフォーマー。

しかし直後、その翅は切り落とされた。もう一匹のテラフォーマーの、対照的に鋭く、刃のようになっているぴんと伸びた翅によって。片翅を失ったテラフォーマーに容赦なく追撃の拳が振るわれ、テラフォーマーという種族の急所である胸部に拳が直撃し、甲皮が陥没する。

「ジョウー」

白目を剥き、崩れ落ち息絶えるテラフォーマー。勝者である尾葉の長い個体は、勝利の雄叫びだと言わんばかりに声を張り上げ。

「……」

自身の胸部から生えたナイフが、そのテラフォーマーの視界に映った。

背後に立った影。それを認識する事が、刺し貫かれる瞬間までテラフォーマーにはできなかった。

そこに在ったのは、ガスマスクを付けた少女の姿。

ナイフを引き抜き、がくりと膝を突くテラフォーマーを見つめる雅？だったが。

「梁さんー」

「っ……!?!」

瞬間、テラフォーマーの腕が、雅？へと伸びる。

動揺する雅？の対処が一步遅れる。何故？ 確実に、急所である胸部神経節を潰したはず。それなのに、何故動ける？

しかし、テラフォーマーの腕が雅？の喉に届く事は無かった。

力強い触手がその腕に巻き付き、砕いたのだ。

それと同時にテラフォーマーの頭部と喉に銃弾が撃ち込まれる。

「……あ、ありがと、リースちゃん」

「大丈夫ですか」

静花の腰から生えた触手が蠢き、主の体へと戻っていく。

雅？を助け起こし、しかし静花はテラフォーマーへの追撃を止めなかつた。

その腰から生えた触手により、手足を一本ずつ、丁寧に砕いていく。彼女に嗜虐的な趣味は無い。では何故、そんな事をしたのかと云えば。

「……どう考えても普通じゃないよね、これ」

「……はい」

二人は表情を曇らせながら、それを見る。

喉、頭、胸。テラフォーマーという生物の、おおよそ急所と呼べる部位を全て潰され、それでもまだその体は動きを止めていなかったのだから。手足を潰されたためもぞもぞと蠢く事しかできないが、未だ活動し続けている。

思いがけず、調査しなければいけない事が増えてしまった。

本国へと連絡し、判断を仰ぐべきだろうか。

二人が相談していた、その矢先に。

~~~~~♪

暗闇の廃墟には場違いが過ぎる、楽し気な歌声が耳に入って来た。透き通った、ソプラノの音。

劇場や街中で流れてきたのであればうっとり聞き惚れていたであろうそれに二人は機敏に反応する。

歌声と同時に、歪な気配が場を包み込んだからである。

強者の纏う剣のような殺気でも、野生の獣のようなそれでも無い。例えるならば、澄んだ水に泥団子を溶かした時のように、じんわりと汚れが広がっていくかのような、湿った不快感を伴った感覚。

「あら？　なんて事でしよう！」

二人が路地の道に身を隠した数秒後にその主は路地裏の奥から姿を現した。

その姿を見て、静花と雅？は絶句する。

そこに立っていたのは、若い女性だった。

このような場所に年頃の女性が来る事自体が危険で仕方ない、異常な事ではあるのだが。

論点は、そんな所では無い。

女性の服装を一言で表すならば、赤紫……ワインレッドに染められたウエディングドレス。

ベールに覆われた金の髪を纏めている髪飾りは、兎の耳のように二又に分かれた先端が空に伸びている。

腰から下げられた懐中時計と、衣服の所々にあしらわれている帽子やチエス盤の意匠。

そして、ドレスの腰の左右にそれぞれ描かれた、林檎の芯に巻き付く幼虫、という悪趣味な模様。

そんな彼女は、口端に人差し指を当て、不思議そうに二匹のテラフォーマーをスカートが汚れる事も厭わずしやがみ込んで見つめている。

「どうしちゃったのかしら？　ディーがガラガラを壊しちゃったの？　それとも——」

意味のわからない事を呟きながら、指先でテラフォーマーをつんつ

ん突く女性。

それを見つめる二人は、アイコンタクトを取るまでも無く互いに意見を一致させていた。

迷う事なく『薬』を用い、身を隠す。そして、女性に背を向け。

「――からす鴉に啄まれてしまったのかしら？」

くすくすという楽しそうな笑い声。

二人が感じ取っていた歪な気配が、一層強くなる。

まずい。捕捉された。二人は一目散に離脱を試みるが。

「リースちゃん！ 逃げて！」

瞬間移動か、と思う速度で間合いを詰めた女性が、雅？に向けて何かを振るう。

対し、逃げる足を止め、振り向き様にナイフを振るう雅？。

でも、と静花は雅？を止めようとするが、しかし雅？の表情を見て何も言えなくなる。

「……！」

怯えるような表情と目の端に浮かぶ涙。未知の強敵である、という以上に何かがある。

それを感じ取った静花は、少し考え。

「見捨てられるワケ、ないでしょ！ もう！」

己を奮い立たせんとして声をあげ、踵を返す。

「まあ、まあ！ 私と遊んでくれるのかしら！ 私、アストリスって言うの！ お友達になってくださる？ 素敵な駒クックロレン鳥さん達！」

女性、アストリスが名乗りながら振り抜いたもの。それは、自身の腰の背側にあるリボンを止めていた金具……と見せかけた、二本の刃だった。

鋏を二つに分解したかのような形状の、刃の部分に幾何学模様が走

り、柄にも機械的な意匠を持ったそれを両手に一本ずつ携え、アストリスは嬉しそうに雅？へとそれを振るう。

最初の一発は打ち合えた。でも、次は威力負けする。

即座に危険を察知し、雅？はアストリスの振るった刃を迎え撃つ軌道で振るったナイフを手放した。

空中で衝突した互いの武器。普通であれば、力を加える主から捨てられた雅？のナイフが弾き飛ばされて終わり、だろう。

——しかし、アストリスの刃は、雅？のナイフを切断した。

刃の接触した部分から、ナイフが両断される。

「……！」

想定以上の結果を見せつけられ、静花と雅？の顔色が変わる。

アストリスの持っている刃が、ブレて映る。

それは、二人の視界が霞んだわけでは無い。

「高周波ブレード……！」

「素敵でしょう？ アダムおじさまが饞別に、ってくださいったのよ！」

静花が呻くようにその武器の名を呟き、自慢するかのようにそれを掲げるアストリス。

高周波ブレード。振動剣とも呼称される、細かく超高速で振動する刃。高周波振動発生装置を仕込んだその刃は、刃物の切れ味のみに留まらず、その振動によって遥かに切断能力を向上させる。

技術自体は既に医療分野や工作用のカッターにも用いられており、軍用ではアネックス計画でも専用装備の一つとして開発された、との噂がある。

しかし、こんな場所で遭遇する事になるとは。

「私達は貴女と争うつもりはありません……ここは互いに退きませんか……？」

ダメ元ではあるのだが、雅？はアストリスに和平を申し出る。

相手の所属……は雅？には見当が付いているものの、その目的がわからない以上はどうしようもない。

「嫌あよ？ 私もシンドおじさまみたいに遊ぶの！ 後でエドガー様がジャブジャブ鳥みたいにお怒りになられるのだもの！ その分は目いっぱい楽しみたいの！」

「っ……」

最初から、薄々わかつてはいたのだが。

そもそも、相手はこちらを同列の存在として見ていない。

虫や小鳥を玩具にする子どものような思考なのだろう。

停戦は無意味。ならば、すべき事は一つ。

雅？は腰から予備に持ち歩いているもう一本のナイフをアストリスの喉にめがけ振るう。

それを事も無げに自身の刃で迎撃し、もう一本を雅？の腹に突き立てようとするアストリス。

「お願い！」

「はい！」

それが、好機だった。

アストリスから見えない、雅？の影。そこに立つ静花が、六本の触手を伸ばし、アストリスの四肢と首を同時に狙う。

ナイフは折られる。雅？は回避に専念せざるを得ない。だが、両腕を攻撃に回しているアストリスは、全方位から襲い来る触手に対し。

「まあ——楽しいわ！」

その両眼が、同時に別の方向へと動き、6本の触手の軌道を捉え。両肘で、腕に巻き付こうとする二本の触手の軌道を逸らす。

同時に宙に跳ね、足を狙った二本を回避し、首を狙った一本は狙いがずれて腹へと巻き付こうとするが、長さが足りず不完全な拘束となる。

「くっ!？」

一瞬にして触手が全て捌かれた事を理解した静花が備えとして残っていた最後の一本で着地したアストリスの首を狙うが、伸びた状態

から手首の利きによって振るわれた刃によって触手が切り落とされる。本来であれば力を加えるのが難しい位置関係ではあるが、高周波ブレードの切断力による力押し。

今の人間離れた体捌きで、雅？の中の疑惑が最悪の形で確信へと変わる。

アストリスのドレスに刻まれた、喰いつくされた林檎に巻き付く幼虫——即ち、アダム・ベイリアル印の印。

それが示すのは、ニュートンへの反逆。

だから、こんな事はある得ないと思っていた。

たとえば、人間の黄金比に従ったかのような美しい容姿をしていようとも。己が主と似た歩法を用いていようとも。

まさか、アダムの下に付くニュートンの人間がいるなどと。

アストリスというその名は雅？の記憶では一族の中にはいない。ならば恐らく、目の前の相手は普通の存在では無い。

「うふふ！ 沢山動いちゃった！ これで明日のお昼は沢山食べても大丈夫ね！」

運動終わり、とでも言いたげに、アストリスは自身のドレスが開き覗いている胸の谷間からあるものを取り出す。

ここにサブカルチャー好きの男性がいればこれが噂の……などと馬鹿馬鹿しい感動を覚えるのかもしれないが、残念な事に事態は切迫しすぎている。

「……？」

「それ、は」

『変態薬』。二人も使っている、MO手術の力を用いるための薬剤。

しかし、静花はそれを見て首を傾げる。

軍人として、敵対したMO能力者に情報という分野に負けないように、変態薬の種類は教育として叩きこまれている。それは脊椎動物各

種や昆虫型、甲殻型といったメジャーなものから、環形動物や棘皮動物型といったマイナーなものまで幅広い。

だが。アストリスが取り出したそれは、静花の知識から来るどれにも該当しないものだったのだ。

それを自身に用い、アストリスの体に変化が訪れる。

不意を打つ事はできなかった。カウンターをされれば、今の自分達では対応できないからだ。

アストリスの頭から、矢印のような形の物体が複数、まるで王族の宝冠のように、あるいは、墓標のように生える。

最初の表面的な変化は、それだけだった。しかし。

「それじゃ、行くわ——」  
ずるり。

気味の悪い音と共に、アストリスの腕が——

「——わぶっ!？」

雅?のハンドサインにより、しゃがんだと同時に後ろにいた静花の口から黒い液体が吐き出され、それがアストリスの顔に直撃し、その視界を奪う。

今なら殺せるか? 一瞬、攻勢に出る、という判断が二人の頭を巡るが。即座にそれを切って捨てる。

相手の硬さも、再生能力の有無もわからない。外せば、確実に自分達が殺される。分が悪すぎる。

そう判断し、二人は互いに能力を行使し身を隠し、全速力でその場を離れる。

「もう! 怒っちゃやうから! 許さないから! 燻り狂っちゃやう、つてくらいに!」

ごしごしと目を擦り、アストリスが視界を取り戻したのは数秒経つてからの事だった。

足の速さでは追いつけるだろうが、路地の構造からして、正確な相



手の闘争ルートを知るのは不可能。

そう判断したアストリスは、背を向けて自分が来た道を帰って行く。

逃げられてしまった怒りと、勝手に出歩いた罰としてエドガーにお説教を受ける明日の自分の事を考え、しょぼんと髪飾りを垂れさせながら。

---

——『神殿』最奥部

「これはッ！　どういう事だ！　アダム・ベイリアル!!」

「おおっ、通信が繋がって早々に何で僕怒られてるの？」

玉座の間に、怒声が響く。

モニターに映る少年、その怒声に向けられた対象であるアダム・ベイリアルは悪びれる事も無く、露骨にびっくり！　という表情をしている。

「まあ落ち着いて、フリッツ。アダム君が驚いてるじゃないか」

「くっ……」

アダムに対し怒りを露わにした片眼鏡に白衣の研究者然とした青年、フリッツを宥めるのは、玉座に座るオリヴィエだ。

「そうだそうだ！　オリヴィエ君の言う通り！　ボーナスイテムは早いもの勝ちの争奪戦って言ったでしょ！　負けたからって僕に当たるのはいけないよ！」

「そういう事を言っているのでは無い……!!」

普段は落ち着いているフリッツがこうも感情を剥き出しにしているのには理由がある。

先日、オリヴィエとエドガー、両勢力への通達の後、地球に一機のロケットが不時着した。それは、アフリカ大陸に設けられたリカバリゾーンの一つに落ち、表向きには月面基地からの物資輸送船の不具合、という事で片づけられた。

アダム曰く『なんか盤の外で殴り蹴りしてる君達にスパーアイテムをプレゼント!』との事で、その詳細なデータも同時に両勢力へと送信されていた。

それを見て、オリヴィエはおや、と興味を惹かれ、エドガーは見るからに嫌そうに顔をしかめ。

結局、距離的にその不時着地点に近かったエドガー陣営がそれを確保した後、オリヴィエが面白いなあこれとフリッツにデータを見せた結果、こうなったのだ。

「ふむ。君の所の『S』EVEN SINS』のデータと交換したが、こんな使われ方をしているとはね」

オリヴィエとアダムの、現在のこの戦争が始まるより前に行われた技術や物資の交換。それによりオリヴィエがアダムへと渡したあるものが悪用されていた。とはいえ。

「ま、さ、か！ オリヴィエ君はクレームとか付けないよね！ ……君が人の事、言えたもんじゃないもんね？」

「その通りだね、私からは何とも。君にあげたものだ、好きにしてくれて問題なかったよ」

それが問題であるとは、互いに思っていないようである。オリヴィエとアダム、互いの中に流れるのは、淀んだ空気。

くつくつという暗い笑い声が、互いから漏れる。

「……貴方が問題無いのであれば、それで構いません」

己が主は問題とは考えていないようだ。オリヴィエの意思をくみ取ったフリッツは、怒りを抑え込み、玉座の間からファイルを片手に、しかし苛立ちは抑え切れない様子で早足に足音を響かせ立ち去っていく。

「全く、フリッツ君はお堅いのがダメだと思うよ！ ところでオリヴィエ君？」

「何かな？」

「希？ちゃんがない代わりのその仲良し家族模様は僕への当てつけだったりする？」

部屋を出るフリッツを見送った、その後。

モニター越しのアダムのどこかじとつとした視線が、オリヴィエの顔から胸の辺りへと移る。

「……」

正確には、玉座に座すオリヴィエの膝の上に座っている、幼い女の子へと。

オリヴィエに髪を梳かれていた女の子は、アダムの視線に気付いたのか、それに感情の籠っていない澄んだ青色の視線を返す。

「希？は用事で暫く帰らなくてね。独りでここに座っているのはどうも落ち着かないんだよ」

「そっかー。何でかわからないけどプライドと仲良く話してくれてたみたいだからお礼とか言つときたかったんだけど。あ、リンネちゃんこんにちは、アダム・ベイリアルだよー」

笑顔で手を振るその姿は、アダムの容姿もあり自分より小さな子に興味津々な子どもにしか見えない。

事実、興味の対象ではあるのかもしれない。……その方向性は、外見とは程遠いものであるのだろうが。

「……」

しかし、そんなアダムへと返される目は冷たい。小さい子が他人をじつと見つめるのはよくある事であるが、その理由は多くの場合興味からによるものである。しかし、リンネがアダムへと向けるのは、ただただ、目を向けられた事を感じ取ったからそれに何となく反応しただけ、という無関心。

「ちよつと！ おたくの娘さん塩対応すぎない!？」

「そんなものだよ」

ちえーなんだよーとわざとらしくぼやきながら、アダムは再びオリヴィエへと視線を戻す。

急に呼び出されたものの、特にそれ以上の用事は無いようだ。

「他に用事が無いなら、僕はこの辺で失礼するよ」

「ああ、ではまたね、アダム君。ほら、リンネも手を振って」

「……」

ひらひらと手を振るオリヴィエと、それをそのまま返すアダム。微動だにしないリンネ。

白陣営の王とゲームマスターの対談は、こうして終わった。

「じゃあねオリヴィエ君！ 引き続き頑張つて！ リンネちゃん！

——君は大きくなったら、絶対に美人さんになるよ！」  
狂科学者の、どこか含みを持った言葉を締めとして。

## M i n d   G a m e : 第5話   冒瀆樂園

——フィンランド   エウラヨキ市

「……さて」

冷える空気を身に受けながら、彼は山林の中にある寂れた研究所の門戸を叩いた。

『エウヨラキ・第四生物学研究所』。国策として生体工学による国際的競争力の増大を進めるフィンランドが開設した、主としてバイオミメティクスを扱う研究所である。

カタカナ言葉にすると聞き慣れないそれは、古くから人類の進歩に関わって来た技術だ。

日本語に直して、生物模倣。自然界をそれぞれの力により生き抜く多種多様な生物達の特徴から学び、新たな技術やモノづくりに利用する科学技術。

近代以降のものとしては、水の抵抗を減らすサメの肌の構造を参考とした水着。古くには、空を自由に舞う鳥の姿から着想を得た飛行装置、その後続く飛行機の原型など。

自然の生物は人間に多くのアイデアを与えてくれる。

この場所で表向きのその裏側で秘密裡に研究されているその技術も、同じくバイオミメティクス的一种と呼ぶべきか？   看板に偽りなど何もないだろうか？

いや、そう呼ぶには余りに直接的過ぎるか。

そんな事を考えながら穏やかな調子で、彼は自動扉を抜け研究所の中へと入る。

なぜならば、生物の模倣どころか、生物の力をそのまま、直接体に取り込むのだから。

即ち、MO手術。

とはいえ、それだけで彼がこの場所に派遣されるなどという事はあり得ない。

ただMO技術の研究というだけならば、世界中どこの国も裏で行っている事だろう。

では何故、彼がここに来ているのか。そして、そもそも彼は何者なのか。

その答えは、今この瞬間に繰り広げられている一幕にある。

彼を出迎えたのは、突然の来客に驚いた受付ではなく、無数の銃弾だった。

殺気を隠し、部屋の死角から放たれた、常人には回避困難な奇襲。

「？<sup>ふむ</sup>、準備は万端というわけですか」

だが、攻撃を仕掛けた側としては残念な事に彼は常人では無かった。制圧射撃としてばら撒かれた銃弾の半分を身を退き交わし、避けきれない残りを、刀と己が身の動きで捌いた。

「馬鹿な——」

現代の戦場で、刀をこのように使うなどと。その剣技に息を呑んだ兵士に、次の瞬間刃が振るわれ情け容赦無く命が刈り取られる。

「撃ち続ける！ 近付けさせるな！」

侵入者が近づいている、とはわかっていても、それが誰かまではわかっていなかっただけで、彼の顔を見た兵士の一人が、驚愕と恐怖に歪んだ顔のまま周囲の仲間へと指示を出す。

訓練された動きで素早く向けられる銃口を認識し、彼は後方へと飛び退く。

一般人が街中を歩く彼を見れば、脅威、などと認識する事はできないだろう。

枯れ枝を思わせる細い体躯と顔に刻まれた皺に、白く染まった頭髪。

その姿は、どこにでもいる好々爺に他ならない。……しかし。

腰に差した、今現在振り抜かれている鐔の無い日本刀が、彼は非日常の存在であると主張する。

「何故『百人切り』がここに……!?!」

焦りの入り混じった眩きが、兵士の一人からこぼれる。

彼の名は龍ロン 百燐バイリン。

劍豪。現代の戦場では廃れた劍という武器の達人を示す称号。それを、彼は太真面目に現代の戦場において謳われている。

本人はいつもその通り名を事実では無い、と否定するが、実際に戦場で斬って捨てた数はおよそ五十、加えて射撃すら躲すその体術は銃弾や砲弾が飛び交う現代の戦場において十二分に怪物、と呼べる段階にある。

間合いを詰められては勝ち目など無い。

百燐が飛び道具を持っていない事を確認した兵士たちが選んだのは、制圧射撃だった。絶え間の無い射撃によって相手を退避に専念させ行動を封じる、銃器を用いた集団戦の基本戦術の一つだ。

小銃による絶え間ない砲火。流石にその全てを掻い潜るのは確実とは言えないのか、百燐は柱に身を隠す。

とはいえ、このままでは両者千日手だ。ならば、敵にはこちらの動きを封じる事により何らかの利益が得られる。

ここが敵の本拠である事を考えれば、援軍か。

「成程、間違っていない判断ですな」

数の優位と火器による接近の阻止。武器の発達により個人の能力が重要視されず、一定の戦力を一定の錬度で一定の数運用する、『英雄無き時代の戦い』に適合した戦闘教義。

……だが。

「誰が指揮官か丸わかりなのはよろしくない」

彼らは判断を誤った。否。どうしようも無かった。

彼らは、英雄を相手にする戦いなど想定していなかったのだから。

瞬間、弾幕を張る指示を出していた兵士が、一人でに宙に浮かび上がる。

「ぐっ……がつ!？」

自分の首を押さえ泡を吹く兵士に、周囲の仲間の動揺からの視線が向く。

絞首刑を受ける罪人のように、何かが首に巻きつき、天井から吊る

されている。

百燐の言う通り、指示を出していたリーダーが一瞬にして無力化され、混乱が生じる。

それはほんの僅かな時間であり、制圧射撃の姿勢は即座に戻るが。

——その僅かな隙が許されるほど、彼らが向き合う相手は甘い人間では無かった。

「……え」

懐に潜り込んだ影を認識したと同時に、一人の上半身と下半身が割断される。

残りの兵士は一斉に銃を向けるが、もはやその姿は彼らの視界には無く。

MO手術とは、英雄を生み出す技術だ。

生物の力を人間の体で再現したその身は、身体能力で常人を遥かに上回り、さらに多種多様な異能すら身に着ける。

低い成功確率と施術のための材料の入手の難しさによる数の少なさを考えれば、それはまさに、武勇に長けた才人が闊歩していたかつての英雄の時代と重なるものがある。

無論、時が経てばこの技術を取り巻く現状もまた変わる事だろう。

成功確率が向上し、材料の入手が容易になれば、成功率は低いが強大な手術ベースよりも強さはそこそこでも成功率の高い生物を手術ベースとした兵士を大量に生産する、という形に代わっていくのかもしれない。

事実、あるギャングの中ではその新たな時代を見越した研究が進んでいる。

ただ、現状ではまだ、強力な手術ベースを宿した強力な人間というのは、代え難く強大な存在である。

百燐もまた、そのような存在の筆頭と言えるだろう。

百人切りの異名に違わぬその武勇は、アネックス、裏アネックス、アーク計画という火星に派遣するべく集められた人員の中でも素体



という評価軸でトップクラスに位置する。

そんな彼が身に宿した生物もまた、主の力に見劣りしない強大なものだ。

——彼の姿を捉えられず、兵士が切り裂かれる。

近縁種の中でも、地上を走り回り獲物を捕らえる生態を持つが故の高い運動能力。

——対応しようとしたその体が、足を細い何かに払われる事により転倒し、餌食となる。

その身から生み出す強固な糸。

——すれ違い様に受けた浅いはずの傷から痺れが広がり、動くことさえできなくなる。

昆虫に対し特に強い毒性を発揮する分泌物と、それを対象の体に注ぎ込む鋭い牙。

——ナルボンヌコモリグモ。

それが、百燐の手術ベースとなった生物。

『タランチュラ』という言葉聞いた事はあるだろう。

一般的に、『でかいクモ』の総称として呼ばれ、少し生物に興味を持つている人間であれば、それがクモの中では大型で力強い種が多い『オオツチグモ科』を指す言葉である事も知っているかもしれない。

しかし、コモリグモの仲間こそが最初にタランチュラという名称が与えられた蜘蛛であるという事は、前二つよりは知られていない。

そしてこのナルボンヌコモリグモは、その名を冠するタランチュラコモリグモの近縁種である。

タランチュラのイメージが与える巨軀は持たず。だが、全ての虫が同スケールで戦えば最強は何か？ という疑問に対する答えの一つとして挙げられる蜘蛛という生物が持つ強みを例外なく持つ彼らを

身に宿した兵士は、間違い無く強大な戦力として機能する事だろう。それを裏付けるかのように、七の死体の中に、ただ百燐は一人、立っていた。

「……さて」

己の専用装備である刀に付いた血を丁寧に拭き、百燐はちらりと通路を見る。

その奥から反響してくる怒声を聞き、懐から地図を取り出しながら。

百燐がここに来ている理由である一連の騒動の全ての始まりは、他ならぬ百燐が本業である中国陸軍大将の休暇を利用して旅行に赴いた時であった。

そこで交戦した、アダム・ベイリアルの子。異形のMO手術をその身に施していた男を撃破した後、得られたデ通信記録からアダム・ベイリアルの子の元凶たる人間が企画したテロの存在を知り、百燐が協力しているアーク計画を初めとしたアメリカの各所は対応に戦力を割く事となり、現在シモンが対処のため任務に出ているアメリカ、キャロルがいざという時の備えとして待機しているフランス、という現状なのだ。

そこから少し外れた場所で、懸念すべき事態が起こっていた。

任務の帰路に就く途中で、百燐が用を済ませるために数分場を離れた際にアダム・ベイリアルの子の死体が盗まれたのだ。

勿論、アーク計画の地球での実働部隊『ティンダロス』の精兵が見張りをしており、任務の中で傷を負ってこそいたが警戒を怠りなどしていなかったはずだ。

そこから百燐がここフィンランドに至るまでの経緯は、各勢力の政治的な関係が絡み合っている。

此度の戦争を見守る、百燐が所属している中国の意向としては、アメリカで起こっている事態に対しては不干渉であるが、それはそれとして戦争に関わっている疑いの強いゲガルド家とフランスに対して干渉を行うというものだった。

中国はニュートンの一族に対して時期当主であるジョセフ・G・ニュートン率いる多数派、ゲガルド家上層部、フランス大統領であるエドガーと三者三様の関わりがある。

最終目標の一つ前までの協力関係であるニュートンの一族。上級軍人の一部が後ろ盾としており、技術、資金的な協力関係にあるゲガルド家。一部政治家や軍人が関わっている中国発の多国籍犯罪組織『黒幫』<sup>ハイバン</sup>を介しての取引相手といったエドガー。

この中でも最も重要視したのが、当然ながら規模として最大の、一族の多数派である。

ゲガルド家の上層部とエドガーは共に一族でありながら当主に反旗を翻しかねない、もしくは既に一族にはコントロールできない状態にある不穏因子だ。

一族としては機会があれば何とかしたい相手である。そこで恩を売りながら障害を排除しよう、というのが中国の考えだった。

アメリカが弱ってくれるのは結構だ。だが、この機会に一番大きな協力者の敵を弱体化させて自分達の勢力の結束と基盤を固めておこう。

こうして、その一つとしてエドガー・ド・デカルトの暗殺が提案された。

これらは全て裏の社会で行われている事であり大々的な軍事力の動員は不可能だ。なので槍の一族の本拠があるとされているフィンランドにミサイルを撃ち込む、などとはできなかつたが、もう一方、フランスならば話は違う。拠点の最深部に潜んでいる槍の一族の主とは異なり、大統領とは表に出ざるを出ない存在だ。そこに、始末するチャンスが存在する。

しかし、一方で懸念も存在した。フランスに対しての干渉はこれでもいい。だが、仮に首尾よくエドガー・ド・デカルトの始末に成功したとして、フランスが占めていたリソースを槍の一族が占有し、強大になっってしまったかという点である。

単純に勢力としての大きさでは、フランスという一国家とエドガーの資産はニュートンの一族の分家の一つに過ぎないゲガルド家を遥

かに上回る。その分、勢力全体としての秘匿性というのが、槍の一族の強みだ。

へ々に競合相手を潰してしまい、動向を追うのが困難な相手を強化させてしまつていいものだろうか？

会議は長引いた。参加している政治家の中には、ゲガルド家やフランスの息がかかった人間も混じっているのかもしれない。会議の方向は右に左に揺れ、定まらない。

結果、エドガーの暗殺は決定され、同時に槍の一族の力を削ぐためにフィンランド国内の研究所への破壊工作が承認された。

重要度が高いのは当然ながら大統領であるエドガーの暗殺だ。警備レベルが高い云々の以前に、彼本人がニュートンの一族としての肉体を有している。生半可な戦力では暗殺は困難を極める。

実行者として選ばれたのが、約二十人の補助人員と、アネックス関連の計画に属する二人の少女だった。

一方のフィンランド方面に関して。こちらに関して、会議に参加していた陸軍大將が手を挙げた時の会議場のざわめきは相当のものであった。

百燐が自ら志願したのには理由がある。それは、以前自分が残してしまつた負債を片付けるためだ。

後の追跡により判明した、アダム・ベイリアル之死体と思われる疑わしい荷物が届けられた場所。それが、この研究所であった。

裏でMO手術の技術開発が行われている研究所。そこに、技術体系の大きく異なつたMO手術を施したサンプルが送られた。

恐らく、碌な事に使われないだろう。中国の軍人としての退職を控えた勤めに加え、新たな職場への手土産の一つと、一人の人間としての、——手を汚す地位に居て今更何を、と後ろ指を差される事など承知の上ではあるが、当たり前前の倫理観。

譲らないであろう百燐を見て、軍に大きな貢献を果たしている彼に逆らう事のできる人間もおらず、百燐の派遣は承認された。

「……しかし」

静まり返った研究室を百燐は歩く。先ほどの怒声、増援部隊は一瞬にして地に伏せた。

下に下に、と地下に下つていき、研究区画に下つていく百燐はそこに並べられた、赤色灯で照らされたビーカーに浸かる生物を微かに眉をひそめながら眺める。

刺胞動物、海綿動物、環形動物……他、何なのかよくわからない奇妙な姿の生物。百燐に専門家程の知識は無いが、そこに並べられている無数のサンプルたち。それらは、原始的な系統の生物が大半を占めていた。

MO手術のベースとして用いられる生物として例が多いのは、昆虫型、節足動物型、甲殻型、哺乳類型、鳥類型、爬虫類型両生類型に魚類型だ。これらの生物が用いられるのには理由がある。

昆虫型に関しては、単純にバグズ手術から連なる技術的な蓄積が大きいから。昆虫型に近い系統である節足動物型や甲殻型も同じような理由と言えるだろう。他の5系統に関しては、これらが脊椎動物である、という部分に関係している。例外的に、強固な殻を持つ貝類や戦闘において有用かつ多様な能力を持つ頭足類が属する軟体動物型は中国では研究が進んでいるが。

人間と他種の生物を融合させる。モザイクオーガン免疫寛容臓という橋渡しが存在しているとしても、人間に近い系統である生物の方が成功率も適合性も高い。

さらに、実際の戦力としての面でも原始的な生物は有用な種に限られるという問題がある。生物として人間から離れた彼らは、昆虫、甲殻類の属する節足動物や脊椎動物と異なり強固な甲殻、筋組織を欠いたものが多く、直接的でわかりやすい強みが少ない種が多いのだ。

また、手術を施す際に変態時の変質の割合を少し誤っただけで変態により臓器全体が原始的な体構造、内臓の多くを欠いたものに置き換えられてしまうという重大なリスクも存在している。

難易度と有用性。このような理由から、原始的な系統の生物に関する

る手術事例は多くない。

……勿論、原始的であるが故の強力な再生能力や特異性の高い能力を持つ種もいるため、有用なものの自体は存在しているのだが。

ここで具体的にどのような研究がされているのかはわからないが、恐らくは碌なものでは無いのだろう。

百燐の脳裏に浮かぶのは、自国の事例。以前研究室のガラス越しに見た、田舎から連れてこられた素朴な少女。

嫌な世の中ですな、と一言心の中で呟き、百燐は最後の扉を、ノックする事なく開いた。

---

——情報屋、トマスの朝は早い。

政治家のスキャンダルから気になるあの子の朝食の内容まで、をモットーとしている彼は、毎日街をせわしなく走り回っている。

細かい事など気にしない、宵越しの銭は持たない、人々を苦しめ利益を貪る悪は許さない。

よくも悪くも単純でサツパリとしたいいつも騒がしい彼は、パリの街角の小さな人気者だった。

そんな彼が興味を持っていたのは、ここ連日街を騒がせている集団行方不明事件だ。

騒がしく煌びやかなこの街を愛する彼が怒りを覚えるのは当然の事で、彼は己の身を危険に晒す事も厭わず、危険な裏路地にも入り込み、様々なものを調べていた。

地面に刻まれた謎の破壊痕。貧しい様子ながらも仲睦まじい少年少女のカップル。

興味深かったり微笑ましいものはいくつか見られたが、確たる証拠には当たらず。

しかし、トマスは自身を襲う違和感に気付いていた。

……自分が、危険な目に合っていない。

一見すれば運が良かったんだね、で終わってしまうそれは、彼に

とってはかなり重要なものだった。

ここ裏路地は、表ざたにできない情報の宝庫であると同時に、一般人が深く入ってしまえば良くて身ぐるみを全て剥がされる、というくらい危険地帯だ。

だというのに、この辺りをねぐらにしているギャングやここに追いやられた人間に、一度たりとも遭遇しなかった。

学は無いが頭の回転は速いトマスは、ある予想に行きあたる。表でわかつているよりも、行方不明者はずっと多いのではないかと。

義憤に駆られ、彼は調査を進めた。たとえば、一般人からしてみれば目を逸らすクズであったとしても。彼としては、時に酒を酌み交わし下卑た話題で大盛り上がりする街の一員なのだ。

しかし、はつきりとした情報は見つからず。

気落ちしながら彼が拠点としている安ホテルの一室に帰ろうとしたのは、とある日の夕暮れ時だった。

その帰り道で、彼は見てしまった。

一人の若い女性が、廃墟の中に建つ聖堂から出てくるのを。

あそこはうち捨てられていたはずだ。なのに、何故人がいる？ 観

光客が間違っただけか？ いや、観光客ならこんな露骨な廃墟の中になんて……

考えを巡らせたトマスは、深夜を待った。

長い情報屋としての勤が、彼に知らせてくれた。

あそこには、何かがあると。

行方不明事件、それも腕つぶしの強いギャングも恐らく被害に遭っている。

危険を伴うだろう。しかし。

彼は自分の感情の赴くままに、息を潜めて聖堂へと侵入した。

長年放置されていたにしてはやけに埃が少ないそこを、トマスは慎重に何かの証拠が無いか探っていた。

特に怪しい部分はない。しかし、何者かによって掃除されているようだ。

新しく利用する人間がいたのだろうか？

そう結論付け、調査を終えようとしたトマスの鼻を、臭いが刺した。淀んだ空気に混じった、血の臭い。

反射的に振りむいたトマスの目に映ったもの。それは、まるで隠すかのように部屋の隅にある、地下に続く階段だった。

開け放たれた古い木の扉は、まるで自身を誘っているようだトマスは思った。

足音を立てないように、慎重に。トマスは扉を潜り、自身の持つライトの灯りのみを光源として、階段を下る。

「……い」

そんな彼を出迎えたのは、予想を超えた光景だ。

数十メートルはあるだろうか？ 深く広い縦穴が、トマスの目の前に広がる。階段は、その縦穴の外周をなぞるように螺旋状に穴の底へとずっと続いている。恐らくは、この聖堂の下の半分程はこの穴の範囲内ではないか、と思える程である。さらには、所々の燭台に、霧囲気など気にしない、とばかりに電球と小型の発電機が置かれ薄暗いながらも照らされている。

これは何の空間だ？ 地下墓地か？ トマスは恐々と、手すりすらない階段の淵から、穴の奥底を覗き込み。

「なッ……!?!」

驚愕に思わず声を上げてしまう。穴の底に、それはあった。……いた、と付け加えた方がより正確だろうか。

そこには、倒れ伏して動かない無数の人体と、その上に乗り動きを止めている、無数の怪物の姿があった。

手を生やした人間の胴体だけが無数に連なっている、近いものと言えばムカデのような生物が数十、その奥底に巢食っている。



トマスの全身の鳥肌が総毛立つ。

何だこれは？ あの人達はまだ生きているのか？

吐きそうになるのを必死にこらえ、トマスはカメラでその様子を撮影する。

十分な枚数を撮った後も、暫く彼は立ちすくむ事しかできなかった。

何分経ったのだろう。それとも、そこまでの時間は経っていないか。

時間の感覚も不明瞭な彼は、とにかく早く、この証拠を持って警察に、と。

あの化け物がいつこちらに気付き動き出すかわからない。急がないと、とトマスは入口へと駆けだし。

「ようこそ。礼拝にいらつしやったのですか？」

目の前に、修道服の少女が立っている事にそこで彼はようやく気付く。

ちくちくと肌を刺すかのような感触。彼は声を出す事ができず。

「……それとも、懺悔に？ でしたらごめんなさい、猊下……神父様は留守なんです。……ああ」

何だ。何なんだ。お前は。声に出す事も、少女を押しつけて逃げる事も、彼にはもはや叶わなかった。

何故ならば、その体は痺れ、既に碌に動かす事などできなくなっていたからだ。

薄れゆく意識の中で、彼は、

「救済を、お求めでしたか？ ならば、すぐにでも」

何かを思う事すらできず、完全に闇に閉ざされた。

「おお……おお！ 何と、美しい……！」

研究室の最深部、眩いライトに照らされた、ホール状の部屋に辿り着いた百燐が、恍惚の眩きを聞くと同時に見たもの。

それは――

「未だ進化を止めず……素晴らしい、嗚呼、何と素晴らしいかな――」

「――下ッ、半ッ、身!!」

――変態であった。

年齢、おおよそ50代。口ひげを生やし白衣を着た紳士然とした男は、そこだけ見れば知的なナイスミドルと言えるかもしれない。

しかし、下半身、裸。

得体の知れない研究室の最深部で待ち構えていた変質者に、百燐は顔を少しだけ険しくする。

それは、街をうろつけばまず間違い無く警察に連行されるような男がこんな場所に陣取っていたからでは無かった。

「……何故、生きていますのですかな？」

それは、当然の疑問であった。

この男は、他ならぬ百燐自身がトドメを差し、確実に死んだはずの人間だ。

「何故生きているかだと？ いや、そんな事はどうでもいい。ああ、ここでその時を待っているといいとヤツは言っていたが……本当にそ

の通りになったようだ」

百燐の疑問には答えず、変質者はぶるぶると震える。

その体と同時にモロ出しになっている股間のブツもまた震えている事も同時に描写しなければいけないだろう。なお、この股間が震えているのはまだ変態していないため彼の能力とは全く関わりがなく、単に体の動きに連動しているだけである。

「私はこの時を待っていたぞ——！　龍百燐、貴様を殺し……我が下半身が再び完全無欠最強無敵であると証明するこの時をなア……！」  
怒りの混じったねっとりとした口調で変質者は百燐を真正面から憎しみに満ちた目で見つめる。

「ほう、成程……私に、リベンジがしたいと」

「貴様の……貴様のせいで……！　我が下半神は……ただの下半身に成り下がってしまった……なればこそ……」

怒りに燃える変質者と、あくまでも冷静な百燐。

対照的な両者に、一瞬の沈黙が走り。

「ならば——」

「我が下半身こそが究極だと、再び証明しよう」

そして、互いは互いに己の武器を抜く。

百燐が狙うは速攻。『薬』を用いると同時に、百燐は変質者へと駆ける。

一方の変質者は懐からクリームを取り出し、自身の足に塗り付ける。

「人工？型——」

「人為変態——」

両者の姿が変質していく。

百燐の額には六つの目が、顎には蜘蛛の鋏角が。

変質者の下半身から人間の足は消え、八本の赤い甲殻に包まれ、その先端には蹄が、所々に毛と球状に見える関節とはまた別の部位が形成された異形の脚が。その生殖器もまた、脚のものと同じ赤い甲殻に包まれている。

「——再び、あの世に送って差し上げる」

「——”パーバヤーガ魔女の脚”」

肉薄した百燐が、変質者の胴めがけて日本刀を振るう。

だが、その刃が変質者に届かんとした時、変質者の姿は刀の一步後ろに退いていた。

「あれから、私がどれだけ苦渋を舐めた事か……我が下半身は完全なものでは無かったのか？ と毎晩悪夢に魘され……ニユートンの小娘は何が気に入らないのか刀で威嚇してくる始末……」

変質者の姿が消える。だが、それが擬態の類では無い事を百燐はよく知っている。

素早く、自身の背後を刀で薙ぐ。

ノミとハエトリグモの脚力を利用した高速の移動。だが、一度それと相対している剣豪はその速度に対応したのだ。

「だが。だが！ ヤツは……私に答えを、神へと至る最後のピースを与えてくれたのだ！」

刀の軌道にあった赤色の脚が二本吹き飛ぶ。変質者は素早くその二本を根本から自切し、再び高速の移動を開始する。

一方で、変質者もまた、百燐の手を知っている。

対虫毒素充填式コーティング苗刀『カタワラニヒトナキガゴトン傍若無人』。

百燐の専用装備であるこの刀は、ナルボンヌコモリグモの毒を擦り込む事が可能だ。

受けた傷から毒が回ればまずい。それは、先の戦いでの変質者の敗

因でもある。

「ああ、そうだとも。我が下半身、正しく神に至れり！　だが……だが！　それでも拭いきれぬ屈辱が貴様だ！」

別の角度から再び攻撃を仕掛ける不審者だったが、その必殺の蹴りは宙を切る。

身を屈めた百燐が、薙ぎでは無く突きにより、不審者の体を下から串刺しにしようと繰り出す。

「く……クク……！　完全だったはずの下半身は貴様に敗れた……だが、今私が勝てば……それは正しく神へ至った事への証明に他ならない！」

必殺の突きを三本の脚を犠牲に威力を食い止め、串刺しにして留められたそれを自切し、不審者は離脱する。

再び正面から百燐と向かい合った時、その三本の脚は既に再生を終えていた。

変質者の妄言を流しながら、百燐は敵を分析する。再生能力が上がっている。だが、動きに関してはそこまで変化が無い。以前一度自分の手の内が見せてしまっているが、しかし。

「終わりだ老いぼれエ!!」

「……一つ忠言を」

両者は、真正面から己の技量を振るつた。不審者の八本の脚から繰り出される連撃が、百燐へと襲い掛かる。

同時に、股間が振動する。

糸の防御も間に合うまい。仮に対応できても、次いでの一撃に対応できないだろう。パワーでは自身はヤツの上を行く。勝ちだ。

ニヤリと不審者は笑う。

彼の見た未来、それは迎撃が追いつかず、肉塊と化した百燐だ。

「戦闘中の過度なおしやべりは、身を滅ぼすのだと」

「何イ……！」

その脚が振るわれた先に、百燐はいなかった。

そして、不審者に投げかけられた忠言に、即座の離脱では無く、思わずその方向……上を見てしまう。

そこには、天井の照明、そこを足掛かりとして張られた糸を掴み浮く百燐の姿。

「ぐおおおおッ!?!」

もはや回避しようのない剣が、容赦無く変質者を切り刻む。

一撃目で性器が切断される。これを用いた能力による迎撃は、間に合わず。

そして、次いで二撃により、変質者の腰から上が、神速の居合により切って落とされる。

勢いにより数メートル吹き飛ばされた、変質者の上半身。

糸から手を離し着地した百燐は、素早くそれに向けて駆ける。

既に下半身の再生は始まっているが、それは仰向けに倒れた姿勢も相まって百燐の迎撃に間に合うような状態では無い。

「一言だけ遺言を聞きますぞ」

「……」

一切動作を止める事は無く、変質者の心臓に向けて刃を振り上げながら、百燐は最後の慈悲を見せる。

変質者はそれに一瞬、顔から表情を消し。

「遺言を残すのは貴様だ老いぼれ!!」

満面に凶悪な笑みを浮かべた。

「むっ……!?!」

瞬間、百燐の背に向け死が襲い来る。

ミシリという、背骨を軋ませる音とともに、百燐の体が吹き飛ぶ。  
糸を仕込んでいなければ死んでいた。

素早く受け身を取り、その攻撃の正体を見た百燐は目を見開く。

「く、はは、フフ……ハハハ！」

かさ。かさかさ。

そこには、これまで見たものしかなかった。  
即ち、異形の下半身。

——それが、変質者の体から切り離されたまま、一人でに  
動いている事を除いて。

「来るがいい、我が愛し子よ！」

立ち上がれるまでに下半身を再生した不審者が叫ぶ。

音声認証の装置なのだろう、それに反応し、ホール状の部屋の外周  
にいくつもある扉が解放され。

「これ、は……!」

顔を歪ませる百燐の前に、ソレは姿を現した。

かさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさかさ。かさ。  
かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさ。かさかさ。かさ。  
かさ。かさかさ。かさかさ。かさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。  
かさ。かさかさ。かさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。  
かさかさ。かさかさ。かさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。かさかさ。





成そうとする。

ある生物の雌は、自身の身のほぼ全てを子の栄養に捧げ、健やかな我が子の誕生を自分の死と引き換えにする。

またある生物の雄は、器官レベルで雌と融合し、その体の殆どの機能を退化させ精を提供するだけの器官の一部と化す。

この生物もまた、特殊な生殖様式を持っている。

群を成して生殖行動を行う彼らは、それを食用とする地域では豊穡の象徴である聖なる生き物として扱われている。

生殖は、生物にとって最重要であると同時に危険な行動でもある。大きく体力を消耗し、外敵に対して無防備を晒す事となるのだから。

本来なら岩陰や砂底で暮らす彼らもまた、生殖の際に水面付近まで移動した際には多くの魚類に狙われ、人間にも年に一度のごちそうとしてその多くが捕獲されてしまう。

捕食される特大のリスクと、次世代を残す特大のリターン。リターンを最大限に得た上で、リスクを最小限に抑え込むために、彼らは特異な性質を手に入れた。

学術用語で『s c h i z o g a m y』と呼ばれるそれは、本体を危険に晒す事なく旅を行う事ができる。

一見、矛盾しているように思えるだろう。高い再生能力こそあれ、脆弱な彼ら。本来ならば、外に出る事自体が大きな危険となるはずだ。外に出ないなら、旅などとは言えないだろう。

……あるのだ。本体を危険に晒す事無く、生殖の旅を行う方法が。彼らは、高い再生能力を持っている。失った体の部位を何度も取り戻す事ができる。

概ね、予想は付いただろうか？

そんな彼らの、自身の体構造を最大限に活用した手段。そう――

—— 彼らは、下半身だけを分離させ、生殖に送り出すのだ。

「ああ、美しい……これぞ、楽園だ……そう思うだろうか？」  
下半神の園で、狂人が恍惚に笑む。

アダム・ベイリアル・ハルトマン

MO手術ver 『<sup>パーパヤーガ</sup>魔女の脚1. 1』 “特定部位複合型”

”甲殻型” タカアシガニ + ”昆虫型” ノミ + ”昆虫型” チビ  
ミズムシ + ”節足動物型” バギーラ・キプリンギ etc……

+

”環形動物型”

——  
下半神、再起立。  
ハ  
ル  
バ  
ヤ  
ー  
ガ  
ー  
・  
下  
半  
神  
、  
再  
起  
立  
。

## M i n d   G a m e : 第6話   正負天秤

——最強であり無敵であり、至高であり究極のはずだった。  
このバランスを整えるために、幾度となく実験と調整を繰り返した。

あらゆるサンプルを集め続けた。

事実、数えきれない勝利に身を染めてきた。当然の事だ。神域に至った我が身に敵など無し。ニュートンの使いや他の勢力、自分を狙う不遜な愚か者どもを幾度となく葬ってきた。

飛び散る鮮血、舞い踊る美脚。轟音を響かせる生殖器。

血肉と絶叫のオーケストラが、私を満足させてくれる。加虐的な趣味があるわけでは無いが、それこそが私の道の正しさを証明させ、わが身を美しく彩ってくれるのだから。

そうだった。これからもずっと、そうであるべきだった。だと、言うのに。

——上半身はいりませんな死に晒せ、若造

「……ッ!? ……ハア、ハア」

目を覚ました彼を出迎えたのは、白色の天井だった。

動悸が激しく、彼が着用している着衣には汗が滲んでいる。

次いで、周囲を見回す。

これまた殺風景な、何も無い立方体の内部のような形状の部屋。

そして。

「おはよう、寝覚めは……あまり良くは無いですかね?」

「何者だ貴様……」

まるで何も変わらない日常であるかのように彼に朝の挨拶をかけたのは、金髪碧眼の青年だった。

誰だ、この男は。敵なのかも味方なのかもわからない存在に、彼の警戒が強まる。

「初めまして、私はオリヴィエ……ニュートンの一族の人間だよ」

瞬間、彼は戦闘態勢を取った。俊敏な動作でベッドから飛び上がり床に着地し、自身の白衣から軟膏を取り出す。

ニュートンの一族。彼の属する集団にとって、天敵、犬猿の仲、言葉尽くしても足りない敵対関係にある集団。それを目の前にして、彼はこの何もわからない状況でも即座に構える。

だが。

「……ッ」

ずきりという痛みが、彼の腰の辺りから響く。

思わずそれにうめいた彼は、目線を落として確認する。

そこにあつたのは、腰のすぐ上の胴を一周する傷のようなもの。

何だ、これは？ 彼の優れた頭脳は、目の前の怨敵の事も飛ばし思考を開始する。

「まあ、落ち着くといい。お茶はまだ用意できないけどね。話してあげよう、君が何故ここにいるのか」

頭の中を、記憶のような、どこか他人事な、映像記録か何かに思えるようなものが次々と流れていく。

いつものように、侵入者を迎撃し。我が究極の肉体は、変わらぬ完璧な力を発揮し、たやすく奴らを叩き潰した。

「君は、一度死んだんだ」

「あ、あ、」

徐々に、彼の体温が下がっていく。顔から、血の気が引いていく。

容易く侵入者を叩き潰し、トドメを刺そうとし、そこで、乱入者が現れ、そして、そして、そして。

「君が神に至ったと思っていたその下半身は、無惨に切り落とされた」  
「あ——」

がくりと、彼は目の前の敵から投げかけられた言葉と流れる記憶に同時に打ちのめされ、膝を付いた。

嘘だ。騙そうとしても無駄だ。目の前のコイツに、そう言つてやりたかった。

ただ、それを否定するには、彼の脳裏の映像と腰を苛む痛みは、あまりにも鮮明だ。

「つまり、こういう事だね」

「やめ、やめろ」

オリヴィエは表情を変える事もなく、淡々とした調子で、ただの記録を読み上げるかのように言葉を繋いでいく。

オリヴィエが何を言おうとしているのかわかったのか、彼の表情はみるみる内に迷子の子供のように歪み、目からは大粒の涙がとめどなく溢れ、まるで許しを乞うかのように呆然とした独り言がこぼれ出る。

「君の下半身は、完璧でも神でも何でもない、ただの下半身だったわけだ」

「——」

彼は崩れ落ち、必死に自分の腰から下が付いている事を何度も撫でまわし、確認する。自分の、長年の成果の結晶。自分の人生の全てをかけた、最高傑作。それが、ただの——

「オ、オオオオオ——」

目の前のオリヴィエの事もはばからず、彼は慟哭する。

認めたくなかった、認めるわけにはいかなかった。だが、彼もそう薄々思ってしまったからこそ、同時に最後の砦である外部の評価が、内と外、自分と世界の認識が同じであると突きつけられてしまったからこそ、その事実は彼の心を砕き割った。

一通り涙を流し叫び、茫然とする彼に、オリヴィエは自身の背負っていた槍を抜き、彼の喉へと突きつける。

これはオリヴィエにとつてただの確認作業だった。宿敵であるニュートンの一族の人間に命を脅かされ、それでももう抵抗をしない程に精神が摩耗しているかどうかの。

「さて、君には二つの選択肢がある」

槍を持っていない左手の人差し指と中指を立て、彼にそれを見せる。

「二つは、このまま大人しく土に還る事だ。諦める事は決して間違っ  
てはいない。私はそれを否定しないとも。最初から、分不相応な願  
いだったと納得する事だね」

語調こそ変わらないが、まるで嘲るように、オリヴィエは一つ目の提案を向ける。彼は光を失った目のままオリヴィエを見上げ、何度か口を動かすが、それは言葉としては認識できないうめき声でしか無かった。

「では二つ目だ。正直これは、オススメしないのだけれど」

少し間を置き、そして。

「もう一度、私の元で神を目指してみないかい？」

ひそひそと、悪戯のアイデアを囁きかけるかのようなその言葉に、彼は微かな反応を見せた。ぴくりと体が動き、目線が上がる。

「私と共に歩む覚悟があるのなら、君のその素晴らしい技術と引き換えに、私が何もかもを与えようとも。研究材料も技術も、——その下半身が今度こそ神に至るための、欠片も」

槍を引き下げ、代わりにオリヴィエはしやがみこみ彼に目線を合わせ、手を差し出す。

彼の視界が、何にも注目せずにはやけていたそれが、目の前の得体の知れないニュートンの青年の姿にピントを合わせ、はつきりと姿を認識する。

まだ、終わっていないと。自分の全てが、再び神に至ることのできる可能性が、残っていると？

「いや、やっぱり忘れてくれたまえ。君も、誇り高き彼らの一員として、ニュートンの一族なんかと協力するのは、嫌だろう？ 失礼な事を言ってしまった」

「あ、ああ、ああ」

その言葉の意味を噛み締め、利害を熟慮した総合的な判断を下す時は彼には与えられなかった。

唐突に、思い付きかのようにやっぱりやめだ、と手をゆっくりと引いていくオリヴィエに、彼はまるで親においていかれまいとする子供のように手を伸ばす。必死のそれは、緩慢な動作のオリヴィエの手にすぐに届き、縋りつくかのようにその手を握り。

「——ようこそ、神殿へ。相容れぬ存在ではあれど、君の狂気と妄執を私は、私だけは愛そう。アダム・ベイリアル・ハルトマン」

溺れる者は藁をも掴む。

……では、泥の海に沈み、絶望に身を蝕まれながら必死に水面に顔を出した彼に差し出されたのは、一体何だったのだろうか？



「ふ、ははは！ 無様、無様だな百燐！」

「むっ、ぐ……い！」

狂人、ハルトマンの笑いに対応する余裕は今の百燐には無かった。大量のスーパーボールを勢いよく叩きつけたかのように、大量の物体が部屋の床と壁と天井を縦横無尽に跳ねまわり、百燐に襲い掛かる。

ハルトマンの腰から下をそのまま写し取った、下半身。

数にして百に近いその全てが、百燐の前に立ちはだかり、ハルトマン本体への進路を阻み、退路を断つ。

「この瞬間を待ち望んでいたぞ！ さあ、我が子達になす術無く潰されるがいい！」

左右から同時に、下半身が二つ襲い来る。

思考能力を持たず、恐らくは本能で百燐を敵と認識して襲い掛かっているのだろう。

それを、身を躲した後に右側から襲い来た下半身に向け剣を振るい、真つ二つにする。

完全な再生は不可能なようでぴくぴくと痙攣するその分かたれた断片と剣の入った感触から、百燐は情報を集めていく。

純粋な硬度としては、むしろ弱体化している。恐らくはこの能力を与えているのは脆い生物で、それが混じった事による影響なのだろう。

本体であるハルトマンからは全体を再生できている事から、分離した事によってその全てを再生する事は不可能となっている。脚レベ  
ルならまだわからないが。

体から離れると弱体化するのか？

奇怪で厄介極まりない能力ではあるが、決して完全では無い。

四方八方から襲い来る怒涛の連撃を紙一重で捌きながら、徐々に相手の速度に体を馴らしていく。

先に戦ったハルトマンの速度や脚力と比べ微かに劣るがほぼ同じ

ものを持っている。だが、速度の調整を一切行わずワンパターンだ。フェイントなどの捌め手を行う事も無く、さらには飛びかかって来たものを回避した際に、下半身同士が激突する事もある。戦術的な攻め方を持っていない、ただ突撃してきているだけだ。

ただ、並みの軍人ではこれ単体に対応する事は困難だ

「おお、おお……！ これこそが我が本願！ 我が下半神、正しく神に至れり……！ どうか御覧じろ、オリヴィエ様……我が完全なる姿を！」

元々そうであつたはずなのだが、さらに狂気に染まった瞳で、ハルトマンは下半身の猛攻を耐え凌ぐ百燐を見つめ、戦闘の前にも語つた言を新たな主への言と共に繰り返すハルトマン。そこには、かつての彼には無いこべりつく汚れのような執着が混じっていた。

「……はて」

そして、そんなハルトマンに対し、頭からどろりと血を流した百燐は、不思議だ、というように首をかしげる。

——パロロ

学名『*Pallola viridis*』。この種を初めとした、<sup>シソガミ</sup>分離生殖を行う多毛類の総称。

種によつて異なるが、この種は年に一度の周期で集団を形成し、繁殖行動を行う。

普段はイソメの仲間の大多数の生態に変わらず、砂中や岩陰に潜む彼らは海面近くまで浮上し、放精放卵の一大パーティを催すのだ。

しかし、多くの魚類や他生物にとつてただでさえ美味しい食事である彼らが集団で集まり、さらには卵も放出される。これは、恰好の獲物である。

事実、彼らだけでなく他の生物にとつてもこれは宴の場なのだ。そして、その生物の中には人間も含まれる。

アジアの島々の一部ではその群泳に際し祭りが開かれ、大変貴重な食物として重宝されている。

さらには、豊穰と豊作の象徴とする聖なる生き物とさえも扱われ、文化的にも重要な生物でもある。

その、パロ口達からすれば迷惑極まりない祝祭に我が身を犠牲にしないためにこの生物が編み出したのが、発達した生殖器官を持った下半身のみを切り離して生殖に送り込むという手段である。

エピトークと呼ばれるその下半身は一人で泳ぎ新たな生の誕生と捕食による死が入り混じる宴へと興じ、仮に最後まで生き残ったとしても栄養を得る手段を持たないその身は儂く海の泡と消える。

しかし、本体は安全な隠れ家に潜み生き続け、再び下半身を再生し、次の祭りへと備えるのだ。

……とはいえ、この奇妙ながらも実に合理的な生態を持つ生物は、MO手術という技術のベースとして扱うには実用性は否定されていた。

『ヒトの身を神へと押し上げるための手術』。それが、ニュートンの一族、その異端者の一族の中で行われていた、一族の奔流と同じながら、また別の形での成就を目指した研究だ。

その試作として施す手術ベースとして、この生物もまた候補の一つだった。

しかし、下半身のみを分離させたとして、何になるのだろうか？

生存に必要な器官の多くを欠く人間を主とする下半身のみで活動できる時間は短く、再生能力は体の一部のみという事で十分には発揮できない。

そもそも、脚だけでできる事などたかが知れている。それを増殖させられたところで、神に至るところ戦力としてどうなのか。

研究が進むにつれて、より有用な手術ベースが見つかり、この生物の遺伝子サンプルは研究データと共に眠る事になった。なっていた、のだが。

「下ッ！ 半ッ!! 身ッ!!!」

……いたのである。この能力を、十全に使いこなせる人間が。

生物の体の一部のみを体に備えさせる、『特定部位複合型』。

それにより、脚や生殖器、下半身に由来する無数の能力を己が身に宿した、白衣を纏った魑魅魍魎の一人が。

下半身そのものが、極めて高い戦闘能力を持つ人間が。

「私が、神に至る事のできる欠片が、ここに……？」

「ああ、そうだよ」

神殿最下層、生命樹の間と一つ上の階層、その間にある、通常は立ち入る事のできない区画。

荘厳な大扉の前で、オリヴィエとハルトマンは並び立っていた。

「約束を果たそう。『特定部位複合型』……素晴らしい技術だ。そのお礼は、ちゃんとしないとね」

「おお、おお……！」

ハルトマンの身が、武者震いにぶるりと動く。

ついでに、モロ出しになつている下半身のブツも同時に体の動きに連動して震えている事も同時に描写せねばならないだろう。

ハルトマンがオリヴィエに協力する事を選んでから、彼はこの時を待ち焦がれていた。

アダム・ベイリアルとはまた異なつた方向性の、歪に発展した技術。

そこから槍の一族が相応の力を持っている事はわかつたし、そもそも彼の上司というか代表というか、アダム・ベイリアルその人と普通にオリヴィエが親交を持つていた事に驚いたりなど、ハルトマンとしては自身の命を拾い上げたオリヴィエに従属する理由は十分にあつた。

何よりも、自分の下半身が、下半身に再び至る事のできる欠片という、甘言。

まるで、幼き頃に戻つたかのようなワクワクと共に、その扉は開かれる。

暗闇そのもの、広い部屋である事はわかるが、何が何だかわからな

い場所に、オリヴィエに促されハルトマンは足を踏み入れる。

「……おおうッ!？」

部屋に入ると同時に、足の裏に伝わる感触に、ハルトマンの背筋にぞわつとしたものが走る。

何か、固めのゼリー状のひんやりしたものを踏んだような。

思わず下を見ると、そこには半透明の固形物と、そこに根を張るかのように広がる肉質的な何かが広がっていた。暗い中で認識できる視界に映る床を、覆い尽くすように。

「♪」

楽し気に鼻歌を口ずさむオリヴィエは全くそれに動じていないように、ハルトマンも仕方なくそれに付いて後へと進む。湿った空気と、空間全体を覆い尽くす歪な気配。

おぎやあ、おぎやあ。赤ん坊の泣き声のようなものが、どこからともなく聞こえてくる。

この場所は、本当に現実なのか？ これまでの全ては、死ぬ間際の自分の夢だったのでは？

そう、自分に問いかけて平静を保っていたハルトマンは少しして目の前に人間がいる事に気付く。

「紹介しよう。私の娘、リンネだよ」

それは、小さな女の子だった。オリヴィエと同じくトローガを纏い、幼いながらも美しく整ってはいるが、オリヴィエと同じく相手を不安にさせる、作り物のようなどこか似た雰囲気を感じさせる顔立ち。

その頭からは頭頂を中心点として円を描くような配置で触手が生え、長い髪の間隙から見える額には松の葉を3〜4枚放射状に並べたかのような形状の模様が浮かび上がっている。

そんな彼女は、茶色に寄った濃緑色と言うべきか、地面を這う根と同じ泥のような色の肉塊の上に玉座か何かのように腰かけていた。

「初めまして、ゲガルドの姫君。私の名はアダム・ベイリアル・ハルトマン。好きなものは——」

「さて、早速始めようか。前に言った通り頼めるかな、リンネ」  
「……ん」

ハルトマンの言葉を遮り、オリヴィエはリンネへと近づき、優しく『薬』を手渡す。

それにリンネはこくりと頷き、己の身に用い。

その頭頂から、多面体がぼこりと生える。元から生えていた触手と合わさり、王族の宝冠のように見えるそれに目を奪われていたハルトマンは、リンネのもう一つの変化と、その動きに反応するのが遅れてしまった。

「カ、ハッ……!?!」

自身の臍と股間の間くらいの部位に、深々と槍が突き刺さる。

一瞬でハルトマンの目の前に移動してきたリンネが、その左腕から伸びた長い槍のような物体をハルトマンに向けて繰り出したのだ。

「あ、が、がああああ!」

そして、何かが体内に流し込まれてくるかのような熱さを伴った激痛に、ハルトマンは絶叫する。

何が起こったのか？ 裏切られた？ そんな、何故？

ぼこりとハルトマンの下半身が一人でに動き、体を突き破り蟹の甲殻を伴った脚が生える。他にも、ノミや蜘蛛の足が、他の生物の器官が、ハルトマンの下半身から発現する。

それらは全て、ハルトマンが己が身に宿した『パーバヤーガ魔女の脚』の特性で

あつた。

能力が暴走している。何が起こった。

地獄の苦痛が続き、ハルトマンが意識を手放しそうになった、瞬間。

「おや、耐え抜いたようだ、素晴らしい。おめでどう」

ぱちぱちというまばらな拍手と賞賛の言葉を聞くと同時に、その痛みが消失する。

自分の中に今までに無い何かがある事に気付く。

「これ、は……」

我が下半身が、震えている。神に至る真なる可能性、力に。

同時に本能で感じ取れる、新たな能力。ハルトマンは、感動に身を震わせ……

「——これが、貴方の思う神の、完璧な姿と？」

「……何？」

宿敵を一方的に蹂躪する恍惚に浸っていたハルトマンは、唐突に投げかけられた百燐の言葉に眉を歪めた。

「無尽蔵の下半身、下半神のみで作られし楽土。それを築く事ができるこの力が、神以外の何だと言うのだ？」

老いぼれの戯言だ、とハルトマンは一笑に付す。

戦局の利は完全にこちらにある。

今更負け惜しみを言うなど、百人切りなどもてはやされていようが、所詮は凡人か。

ハルトマンは軽蔑の目を向け。

「もし、本気でそう思っているならば——」

そんなハルトマンへと返答として返されるのは、敵を見据えるそれとはまた違う、冷やかな目線。それと同時に放たれた、

——期待外れもいいところすな、若造

失望の言葉だった。

「何が言いたい……!」

我が下半神が、期待外れだど? 体から分離された下半身たちはその感情に呼応した細かい動きの調整はできないため、ハルトマン本人の荒ぶる感情を百燐に対し示すには彼本人が躍り掛からなければならぬのだが、そうすればみすみす逆転の目を与えてしまう、という事が認識できる程度には彼は冷静であった。

だからこそ、その代わりに理由を問う。

「最初に言っておきますぞ。これは私が優位に立つたための挑発であると同時に、紛れも無い本心でもあると」

「……」

額に青筋を立てるハルトマンに、悠々と百燐は語り始める。彼の言葉通りに、老練にして戦闘を好む、彼の内心そのものを。

「此度の戦い、貴方が私にリベンジを望んでいた、と聞いた時……良い事では無いのですが、少しだけ、楽しみだったのです」

それは、百燐という戦場に生き刀を振るった男の、否定しようのない本能だった。

アダム・ベイリアル。人類に災厄を齎す彼らを狩るのは、自分の使命であり、後に行く事となる新たな環境の若き上司の宿願でもある。

ただ、それでもだ。殺すべき相手。逃してはならない相手。理解していて、それに違う事など無い。だが、彼の内心は、年甲斐も無い部分は、どうしても沸き立ってしまうのだ。

強者との死合い、というものに対して。



「以前の邂逅、面妖な力も、思想も理解はできませんでしたが……その強さは、粗削り極まりないが確かにあった。だからこそ、神に至ったと傲岸に語るその姿を見て、私の血は滾っていたのですぞ」

「フン、その通り、それが現状だ。我が力、貴様を遥かに超えているのだからな」

貴様の言う事と今の状況に何の相違があるのか。ハルトマンは百燐の言葉が理解できず、言い返す。

「貴方が神に至った——貴方の言う完全な下半身とは、数を頼みに押し潰すようなものだったのですかな？」

「——っ」

そこで初めて、百燐はその表情と言葉に、これまでハルトマンに対し一度足りとも見せていなかった感情——怒りを、見せた。

彼が大真面目に刀を振るい戦果を上げる戦場は、強大な武を持った個……いわゆる英雄という存在に乏しい。

だからこそ、完全な強さと美しさを目指そうと生物の能力を貪欲に取り込みその下半身を鍛え上げたハルトマンに対し、その部分に限っては評価していたのだ。

個にして最強の力を求めたその姿は、現代の戦場では見る事のまず叶わない、我という個人だ、と主張する強敵の姿だったのだから。

そんなハルトマンが、それを完成させたのだと。だが、蓋を開けてみれば、それは以前と同じものを大量に増やして、押し潰すだけ。「貴方が求めた先にあったのは、このようなものだったのですか、アダム・ベイリアル」

群がる下半神を切り倒し、だが、それでも全てを捌ききる事はできず、百燐の傷は増えていく。

「いや、ハルトマン。貴方という人間に、お聞きしたい」

どうだったのだろうか。自分が求めた下半身とは、その終局に至った先にある下半神とは何だったのだろうか。

幾度となく実験と調整を繰り返し、サンプルを集め、完成させたつもりだった。

だが、それは神の座へと届くものでは無いのだと、現実を突きつけられた。

そして、神に縋った。……いいや、違う。神の皮を被った何かに、跪いてしまったのだ。

……ああ、成程。

改めて問われた言葉が、ハルトマンの内心で反響する。

自分がかつて、どのような人間だったのだろうか。

求めていたものとは、その極みにあると考えていたのは、どんな姿だったのだろうか。

答えは、思ったよりも、ずっと簡単だった。

——その時点で、私は神に至る資格など失っていたのか。

「……ふ、ハハ、ハハハハ！」

ハルトマンが、唐突に堪えきれない、というように笑い出す。

百燐は、複雑な感情が入り混じったそれをただ静かに見る。

「我が、愛し子達よ……少し、下がっていておくれ」

次いで、ハルトマンは百燐に次々と襲い掛かる己の下半神達に百燐に対するものとは別人のような優しい、穏やかな声で語り掛ける。

瞬間、百燐に容赦なく牙を剥いていた下半神達は、一体残らず百燐達から下がり、ぴたりと停止した。

「……！」

その下半身の動作に驚きの表情を見せたのは、百燐では無かった。他ならぬ、ハルトマンである。

この能力を得てから、喜びのままに下半身を増やし続けた。これが新世界の新たな民だ、と狂ったようにはしやいだ。……だが、愛し子たちは自分と心を通じ合わせる事ができなかった。

本能のままに敵対者を殺傷し、そして短い寿命を終える下半身達。命令などできなかった、彼ら。

なんと言う皮肉だろうか。それが、創造主、神という座に自分はいなかったと気付いて、認めて初めて、意思を通じ合わせる事ができたなど。

「龍百燐」

「……何ですかな」

周囲には、愛する自分の下半身たちがいる。

目の前には、一度自分の全てを否定し奪った宿敵がいる。

誰かに委ねた時点で間違いだったのだ。跪いて教えを、救済を乞うた事が間違いだったのだ。

ああ、不思議と、気分が軽い。

未熟な私が産み落としてしまった、朽ちる運命しかない愛し子達よ、許してくれとは言わない。どうか見守っていてくれ。これは、越えるべき試練だ

私は、ニユートンやゲガルドの化物どもでも無い、同胞たちの誰でも無い。

下半神達に戦闘を任せ百燐の戦闘範囲から逃げ回っていたハルトマンは、そこで初めて、一步前に踏み出した。

同時に、百燐も一步前に入る。

剣聖と、異形の探求者。

両者の間に、ダクトから抜ける一陣の風が、吹いた。

「貴様に、決闘を申し込む」

——私自身の手で、この下半身こそが神であると、証明してみせよう。

天秤というものは、片方が軽くなればもう片方が沈むものである。世界というのも、また同じなのかもしれない。

同刻。それは、大自然の中の研究所などでは無く、笑いの耐えない、仕事を終えた人々が楽しむ夕暮れの街で起こっていた。

「ひ、ひいー」

「早く！ こっちに！」

蟻の巣に水をぶちまけたように、人々が逃げ回る。おしやれな力フェの外座席のパラソルをなぎ倒し、優美な彫刻など目にも留めず。無数の怪物が、人々を追いかける。

人間の胴体をいくつも繋ぎ合わせた、首から上も下半身も無い異形の生命体が、その腕を脚の代わりとして地面を這い回り、腕により高所からぶら下がりながら襲い掛かり人々を捕え、容赦なく殺戮する。

それを押し留めんと抵抗するのは、ごくごく僅かな軍人と、わずかに二人の観光客のみ。

これは、何なのか。出来の悪いパニックホラーなのか。体調が悪い時に見る夢なのか。

否。その答えの一端を語る人間が、一人。

私は、新たな神を迎える為に夜道をまぎぐ弄る者。

私は、苦痛から皆を解き放つために臓腑を弄り病巣を切り落とす執刀医。

私は、偽りの神の命により芽を、枝を剪定する庭師。

救済を与えよう。神無く、苦痛有る世界に資格を失ったまま、それでも生き続けねばならない哀れな輩ともからに。

試練を与えよう。いずれ極点に至る資格を持つ、いと貴き神の卵に。

奈落の底で、虹の衣を纏った赤色の枢機卿はかく語りき。

ああ、巡礼の時間が今宵も訪れた。

## M i n d   G a m e : 第7話   魑魍跋扈

その決闘は、無言のまま始まった。

剣聖が一度下げている刀を再び構えた事が、彼の申し出に対する答えだった。

瞬間、突風が吹く。

真つ向からの突撃。それを、百燐は体の軸と位置をずらし、すれ違ふかのように交わす。

交差した位置に残されたのは、ハルトマンの二本の脚だ。

一瞬の攻防で、反撃の一手を繰り出し脚を切断した百燐。しかし、その戦果を目で追う事はしない。

「ぬうんッー」

即座に背後を振り返った百燐は、秒と経たずして追撃と気合を入れた声が襲い来るのを認識する。迫るハルトマンの後方には、ヒビ割れた壁面が伺える。壁を全力で蹴り切り返したのだ。

切断された二本の脚は、毒の対策として根本から自切されている。

四本の脚が、上から斜めの軌道で百燐を狙い振り下ろされる。

—— 刀で迎撃するのは間に合わない。

百燐は素早く判断し、一步下がる。

脚をぎりぎりの位置で回避した百燐は、反撃に刀を、胴体を両断する軌道で振るおうとし。

「やせん……いー」

「……ほう」

先の一撃から隠された位置にあった最後の二本の脚による奇襲が、反攻の体勢を取った百燐の手を止めさせる。

その刀はハルトマンの胴体では無く、その二本の脚を受け流すのに使われる。切断ができれば良かったのだが、既に迫った脚との位置関係から切り落とすのに十分な力を入れて振るう事はできない。

—— 以前よりも、動きが良くなっている。

少し彼を誤解していたようだ、と百燐は認識を改める。手術ベースのスペックに頼った力押しに限らず、彼もまた腕を磨いてはいたのか

と。とはいえ、それは薄々は下半身が増える前の最初の攻防でも理解していた事だ。

だが、今の彼はそれと比べてもさらに動きが良くなっているような気がする。

さてどう攻めたものか、と考えを巡らせていた百燐は――

「ふむ……！」

ハルトマンを見て、感嘆の声を漏らすと同時に、全力で背後に退き、同時に。

耳を、塞いだ。

瞬間、爆音が轟き、周囲の空気が揺らぐ。

微かに、平衡感覚が狂う。だが、大部分は無事だ。

「化物め……！」

自分の姿を柵に上げ眩くハルトマン。これが、彼の全力を賭した一撃だった。

並みの防御力を持つ手術ベースでも容易く押し潰すタカアシガニにより強化された脚をノミの脚力で振るう一撃。ハエトリグモの一種であるバギーラ・キプリングの瞬発力による素早い反転からの攻勢。八本の脚の全てを防がれてもさらにその先にある、最後の一撃。

それが、チビミズムシの歌。『歌うペニス』などという、冗談としか思えないそのあだ名。

生殖器を腹に擦りつけて鳴くという人間を基準に考えるとこれまた笑いを誘われる生態は、MO手術の手術ベースとして用いれば一点、文字通りの凶器と化す。

セミよりも遥かに小さい隊長でそれを上回る音量は、相手の聴覚や平衡感覚を防御困難な音という一撃で容赦なく破壊するのだ。

だが、目の前の剣聖はそれを加えた連撃を防ぎ切って見せた。

「……いいや、そうだろうな……」

わかつてはいた。

ヤツは、これを凌いでくるだろうと。

それほどの男だと、ハルトマンは理解していたのだ。

そして、その上でこの戦いに臨んだ。

「オオオオオー！」

吠える。槍の一族の王に向き合った、お前は神なんかじゃないと現実を突きつけられた時の無力からの慟哭などでは無く、そうでは無い、己が神なのだ証明せんが為。

再生した八本の脚と、生殖器。己の人生の全てを懸けた研究成果……いや、そんな無機的な呼び方をしていいものでは無い。相棒だろうか？ 親友だろうか？ 伴侶だろうか？ ……きつと、どの言葉も相応しく無くて、陳腐に感じてしまう。それほどの存在。

ハルトマンは、己の魂と共に、百燐へと駆ける。

——これは、当然の結末だった。世界から後ろ指を差される悪に与えられる奇跡など無く、そんなものに縋るには、彼は汚れすぎた。

眼前にハルトマンが迫った百燐が、ぐつと腕を動かす。それだけで、ハルトマンの脚の一本が一人で宙へと引っ張られ、体勢が崩れる。

ああ、先ほどの攻防の隙に、糸を結ばれていたのか。宙に張られた糸と組み合わせ、滑車の要領でやられたのか。ハルトマンは己が身に起こった事を即座に理解する。自切をしている隙は無い。否、したくない。

浮き上がり十分に力を加えられない体勢のまま、ハルトマンは自身の全力を、残る全ての脚を百燐へと繰り出す。



脚が一本、切断される。二本、受け流される。三本、回避される。だが、一本、残り、一本が。

「……！」

百燐の体へと、突き刺さる。骨を軋ませる感覚が、脚を通じて伝わって来る。

「死に晒せ、百燐ンン!!」

姿勢を崩す百燐に、ハルトマンは最後の一撃として、その性器から轟音を響かせる。

それは、退避の隙を与えず、百燐の体を激しく撃ち。

——番狂わせなど、起こりようも無く。最後に悪が笑う物語など、ここには無く。

「いいえ、もう、終わりですよ」

だがそれを物ともしない百燐の刀が止まる事は無く、ハルトマンの腹を境とし、体を上下に分断した。

臓物を散らせ吹き飛ぶ上半身に、静かに百燐は歩み寄る。

その両耳から、先の爆音を受けた際に耳を塞ぐと同時に仕込んでいた、小さな糸の塊を取り出しながら。

「ああ、まったく、用意周到なヤツだ」

憎々し気に、しかしどこか満足した様子で、百燐を見上げるハルトマン。

「……最期に、言い残す事は？」

そんな狂人に、百燐は穏やかな調子で尋ねる。

百燐の言葉にハルトマンは、少し考える様子で。

「……！」

だが、その会話に乱入者が訪れる。まるで、百燐とハルトマンの間に、割り込むかのように。

己の主を、守ろうとするかのように。

戦いを見守っていた下半身が、一斉に集まってくる。

脚と生殖器を振り上げ、百燐を威嚇するかのような下半身たち。

「……いいんだ、お前達……もう、いいんだ」

ハルトマンは徐々に血の気が失われていく手で、その内の一体を、弱弱しく撫でる。

ハルトマンを何とか助けようとしているのか、ハルトマンの下半身に己の体を繋げようとしているが、腹から切断されたその身では、繋がる部分の違い、それは叶わない。

「百燐。この子達に、外の世界を見せてやれないだろうか……直に、終わる命だ……」

「……ひと目だけであれば。ですが、外に放す事は許容できませんぞ」それは、最大級の譲歩だった。いくら今大人しくしていても、本質は人を容易く殺傷できる怪物だ。そんな事が、できるはずも無く。

「ああ、無念だ！ 我が下半身はきつと神に至っていたというのに、この私がそれを生かしてやる事ができなかつたなど！ 貴様<sup>上半身</sup>に勝てていればこれからこの子達を長く生きさせてやれるような新たな下半身も見つけられたかもしれない、いいや、必ずしも見つけていたというのに!!」

「では——」

貴様に負けたのはあくまで私という愚かな上半身であり、我が下半身は変わらず完全無欠だった。

百燐の言葉に頷いた後、ハルトマンは血を吐くかのようにそれを叫ぶ。負け惜しみでも何でもない、本気で思っている事なのだろう。だからこそ、彼は人類と相いれない、アダム・ベイリアルという存在なのだろう。

「——ああ」

「……死さようならに晒ハルトマンせ、若造」

遺言は済んだか、という確認に頷いたハルトマンに、百燐は前のあの時と同じ、意趣返しという言葉をし、しかしどこか思う所がある様子で、呟く。

「最後まで、不愉快なヤツだ……私は同志たちと楽しく過すごすからな、すぐに来てくれるなよ、興きんが削くがれる」

そう、吐き捨てながら、ハルトマンは、自身の身を縦に両断しようと迫る刃を、目に映し——

「やっし」

研究所の外で、涼し気な風を受けながら百燐は、ハルトマンの忘れ形見たちと共に、夕日を眺めていた。

研究所の各所に設置された爆弾が起動するまで、残り少し。

下半身たちの約半分は、ハルトマンの遺骸の傍を離れず、最下層に残っていた。

残り半分は外の世界が見たかったのか、百燐に付いてきた。

脳に類する器官は無いはずだが、意思のようなものが存在するのだろうか、彼らには？ 疑問はつきないが、約束は約束だ。

そろそろ時間ですぞ。百燐は下半身達に、伝えようとし。いざという時のために、刀に手をかけ。

「……」

しかし、下半身たちは暴れる事も何もせず、静かに、葬列のように並びながら、研究所の奥底へと戻っていった。

数分が経ち、地の底から轟音と振動が響き渡る。

何も出てこないのを見届けた後、百燐はその場を後にした。

「……おやっ？」

そこで、百燐の携帯端末が音を立てる。  
任務の進捗に関しての報告要求だろうか？　そう、予想を立てながら応答しようとした彼は。

クロード・ヴァレンシユタインというその名を見て、これは簡単な話では無さそうだと息を吐くのだった。

——パリ　市街

——それは、あまりにも突然な、饗宴の幕開けだった。

市街の、裏路地の暗闇から、突然持ち上げられたマンホールの中の下水道から、うち捨てられた建物の中から。

まるで、濁流か何かのように、それは突然平穏な日々を過ごす人々へと押し寄せた。

青白い不健康そうな肌の人間の腹から肩までをいくつも繋ぎ合わせたかのような生物。節が人間の胴で構成された頭の無いムカデ、とても形容すればわかりやすいだろうか。

地獄の七圈より這い上がって来たかのような、外見そのものが人々に混乱と狂気を与えるその姿。

最初にそれが現れた時、人々は即座に恐怖から逃げ出した。

ただ、それだけであれば、そこまで大きな混乱は生じなかったのかもしれない。

その姿が狂気に溢れたものであったとしても、実害が出なければ。しかし、興味本位でその写真を撮っていた人間が、最初の犠牲者となった。

気合の入ったホラー映画の宣伝か何かとも思っていたのだろうか？

呑気に携帯端末を構えてばしゃばしゃと撮影していた彼の首を、背後からもう一体のそれが絞めあげたのだ。

秒とたたず、ごきりという鈍い音。

あらゆる方向に首が折れ曲がった彼が崩れ落ちると同時に、一瞬の沈

黙が場を支配し、直後にひと際強い恐怖からの絶叫と悲鳴が、場を包み込んだ。

狂気が伝播し、人々は逃げ惑う。

人を殺す怪物が出た。急げ、暗い場所から出てくるらしい。いや水場からと聞いた。もの凄い腕力らしい。毒を吐くって聞いたぞ？友達がやられたらしい。警察はまだ来ないのか！アレ、殺そうとしても死なないって……真つ二つにしたら増えるかもって。警察が相手にできるようなモンじゃねえよ！軍隊だ軍隊！軍隊って言ってもすぐ来ないでしょ。今この辺の基地の人、何かあったみたいで遠くに出てみたいだ！何でだよこんな時に！何かあいつら宮殿狙ってるらしいぞ！何だそれ文化財好きか？そんなわけあるか冗談言ってる場合じゃねえだろ！違うよさつきすれ違った子がそんな事言ってたんだよ！はあ？何でそんな事知ってたんだよ？わかんねえけどあのバケモノ少なくなってるのか？

押し合いへしあい、根も葉も無い噂が流れる。

人々は混乱し、どちらへ逃げればいいのかすらわからない。

あの怪物は、水場から出てきた。川や水路に近づくのは危ない。違う、暗い場所を好んでいるみたいだから、もっと建物の少ない場所に。そんな混乱の中、大人も子どもも、男も女も、富も貧しいも関係無く、人々はパニック状態に陥り、悪い想像が連鎖し、彼らの内心で人に対する不信と今自分達を襲っている怪物の姿が、実態以上に育っていく。

「皆さん、急いでください！　すぐに軍の方々が助けに来てくれます！　大丈夫です、あちらです！」

だが、避難を導く彼女の言葉で、それは一定の指向性を持ち、人々の意思は一方向へと収束し始める。

「さあ、早く！　後から来る皆さんにも私がお伝えしておきますから安心して！　先ほど、装甲車を見かけました！　大丈夫です、助かります！」

真つ暗闇の知らない場所を、さあゴールを目指してください、ゴールに辿り着けなければ死にますと突きつけられる。

それも、何の前触れも無く突然に。

さて、どう動いたものだろうか？

「急ぎましょう！　先ほど、あの怪物を見かけました！　皆さん、早く、ここから離れて——」

集団から少し離れた場所を走り回り人々を励まし、道を指し示すのは、たった一人、彼女だけだった。

彼女の言に、そうだあっちに行けばいいのかと人々は納得し、その言葉に導かれ街の外へ、外へと離れていく。まるで、羊飼いに誘導される羊のごとく。

さて、逃げ惑う何人が気付いただろうか？　彼女が、『急いでください』『早く』と繰り返しても、『落ち着いて』とは一度も発さなかった事に。……修道服を着た、この少女が。

気付けないのだ。彼らは、命の掛かった、さらには突発的な状況で、正常な判断力を失っている。

仮に気付いたとしても、それが何なのか？　健気に皆を助けようとしてる女の子に完璧など求められるはずが無いだろう？

少女——アレクシア・アポリエールは、人々をより外へ、外へと導いていく。

アポリエール。ニュートンの一族、ヴィンランド家の分家たる家系。

その身に宿す一族の血は薄く、特にその肉体の強度は一族の他の家と比べて大多数が大きく見劣りする。

しかし、彼ら彼女らが持つ、完成度としては遙か先を行くどの家系にも譲らぬ、絶対的とも言える強みが二つだけある。

それが、『人心掌握』『扇動』。それも、精神的に混乱、疲弊している人間を対象とした。

『宗教』という言葉の与える負の印象を極めたかのような、その技能。

人々が、大人も子どもも、男も女も、富も貧しいも関係なく、彼女の言葉を疑う事も無く動いていく。動かされていく。

混乱状態で何もわからない時に、人々が従うものは二つだ。一つは、『集団』。そしてもう一つが、『リーダー』。

命のかかった避難というこの状況で、リーダーシップが取れる人間はごく少ない。それは、パリ市民の中にそのような人間がいない、という意味では無く、状況が、そこから導かれる他人の心理がそれを許さないのだ。

人々がごちやごちやになって逃げ惑うこの状況において、誰かが皆を代表しよう、などと声を上げてても、それは集団の波にかき消され、消えてしまう。群衆の一人として、お前も結局は一緒にわけもわからず逃げている一人じゃないか、と処理されてしまう。

明らかにそれとわかる、この状況でも人々の印象から即座に消えないシンボルがリーダーには必要なのだ。

それを満たす条件が、これである。  
聖職者。

無論、2600年代において、皆が皆、神を信じているわけでは無い。

だが、献身的な行動をしても、違和感が無い人種。清廉潔白、悪意など無いだろうという、一般的に形作られたイメージ。一般人とひと

目で区別のつく、特徴的な衣装。

それが、人々の印象に強く焼き付く。

さらに、それがまだ若いながら健気にもこの非常時に皆を導こうとしている美しい容姿の乙女であるというのなら、自然とその目線は群衆から一人、離れて立っているその姿に引つ張られ、その言葉もまた、周囲の乱雑な噂から浮き上がり、耳へと入ってくる。

だから、気付かない。気付けない。その聖女の内心は、どうしようもない黒色に染まっていく事に、気付けるはずも無い。

外から見れば、彼女は人々を救う為に立ち上がった、一人の聖職者なのだから。

その真の目的が推測できる程、人々に情報は与えられていないのだから。

軍が助けに来た。嘘だ。まだ事が起こってから30分も経っていない。即応できる兵団がない事は調べが付いている。怪物がどのように動くのかやその総数、戦力もわからないのに、エリゼ宮殿の防衛を放棄できるはずも無い。では何故そんな事を言ったのかと言えば、軍はこつちに来ているのに自分達を助けてくれない、と人々に不信のタネを撒くため。

「ありがとう、君も早く逃げ——？」

ありがとう、でも危ないから君も避難しよう。彼女に手を差し伸べようとした一人の青年は、その姿がいつの間にか消えている事に気付く。

他の場所に、避難を誘導するために行つたのだろうか？ 青年は心配をしながらも、駆け出す群衆に紛れ、避難を急いだ。

「近付けさせな——！」

「撃て、足を止めさせろ！」

自動小銃から吐き出された銃弾を受けた怪物が、赤色の体液を撒き



散らし倒れる。

だが、それは時間稼ぎにしかならず、即座に起き上がる。

エリゼ宮殿周辺で、彼らは突発的事態にも決して怯む事無く奮闘していた。

宮殿へ続く門を守る彼らは、決して実戦経験豊富な精鋭というわけでは無かった。むしろ、新兵に近い。

先日の、突発的に起こったこのエリゼ宮殿を襲撃したテロリストとの戦闘。

それにより発生した数十人の死者の一時的な穴埋めとして近隣の基地から派遣されてきたまだ訓練課程を終えてさほどの時間も経っていない兵だ。

精鋭は、おおよそ七割がこの宮殿内部の防衛に就き、残り三割が経験の不足している新兵を引き連れて市民の保護の為に先ほど状況の調査へと出た。

そもそも宮殿に入らせなければいい、この前線に精鋭を配置すればいいのでは、と考えるかもしれないが、敵の出現箇所の把握が十分でない以上、奇襲を受ければ大統領や少数ながら宮殿に避難した一般人の身が危ういかもされない。

その為、大統領周囲は万全の防備を固めていく必要があった。

だからこそ、彼らのような新兵の部隊は宮殿周囲の防備を担っているわけなのだが。

「二体、何だっただこりゃ……」

いつか、人を殺す時が来るかもしれない。そう、覚悟をしていたのだが。

まさか、モンスターを相手にするなど、想定していなかった。

人間、なのだろうか。明らかにパーツはそうだ。胴体と、そこから生える腕。

体液、血も赤い。

しかし、何度も銃を撃ちこみようやく死んだ個体の、その破れた腹からは、臓器の類が極端に少なく見える。

そんな風にのんびりと観察をしていられるのは、異形の軍勢に面して恐怖を感じながらも、しかしある程度の余裕があるからに違いなかった。

「これはこれは、ふふ、お仕事、お疲れ様です」

そんな彼らに、突然怪物の側から、人間の声が投げかけられる。

「そんな所で何を――」

何匹も並ぶ怪物の間に立つ少女に、兵士の一人が思わず、心配から声をかける。

……しかし。

「ああ、さようなら」

見てしまった。少女、アレクシアの頭から、限りなく透明に近い、太い糸のようなものが何本も生えているのを。

そして、それが自分の首に絡みつくの。

ちくりとした、微かな痛み。

「かつ……!?!」

だが、それと同時に体が痺れ、彼は地面に崩れ落ちた。

さらに状況の悪化は連鎖し、それに応じるかのように、怪物が再度の突撃を開始する。

不幸にも、兵士達の主力は銃の再装填の最中であつた。

まるで防壁を突き崩すように、怪物が殺到し、殺戮が始まる。

「あ、ああ……!」

「退け、早く!」

一人が犠牲となり、動揺が走る。

それは、死者が出るという、軍人の仕事場、戦場では起こり得る事態への恐怖では無く、築いていた防衛体勢が崩された事により、布陣全体が崩壊するという恐れから。

兵士達は、慌てて後方へと下がっていく。だが、動揺でよろめく足で逃げ切るには怪物は速く、さらには、少女の頭から伸びる何かが、兵士達の体の自由を奪い、怪物への供物にする。

怪物に押さえつけられ、悲鳴をあげる兵士に、少女は囁きかける。

「さあ、遠慮する事はありませんよ。この救い無き世に、救済を与え――」

「何を情けない姿を晒しているのだ、貴様らア！」

ごしやり、という鈍い音と共に、アレクシアの頭が砕け散る。

次いで、兵士達に飛び掛かろうとしていた怪物が二匹、その長柄の一振りにより薙ぎ払われ、真つ二つに引きちぎられる。

兵士達に降りかかった、稲妻が如き叱咤の大声。フランスへの敵対者に対し降りかかった、圧倒的な暴力。

「……」

うすら笑いをしながら、しかし警戒の色を濃く浮かべたアレクシアが、一歩下がる。

人間であれば避けられぬ致命傷、頭部の損壊。それから難なく立ち直ったアレクシアに、しかし戦闘に乱入した人間は全く動じる事はない。

「お待ちしておりました、隊長！」

「この部隊を指揮していたのは、誰だ」

駆け寄る兵士の一人に、その人物は問う。

「はっ……クレール・ベルレアン伍長です……先ほど、殉職なされました」

兵士は、倒れ伏してもう動かない一人に目を向け、神妙な様子で彼女に問われた通り、報告する。

「そうか……皆の者、これより貴様らの指揮は共和国親衛隊第一歩兵連隊長、このオリアンヌ・ド・ヴァリエが執る！ 貴様らの命、栄光あるフランス共和国に、そして何よりも輝かしきエドガー様に捧げよ！」

恐らく、指揮官を潰すように何らかの意図に従っているのだろう、ひと際大きな怪物の一体が、オリアンヌへと飛び掛かる。

これから起こる惨劇に、思わず目を逸らしてしまう兵士達。しかし、いとも容易くその攻勢は食い止められた。

無数の腕で、オリアンヌを締め殺さんとする怪物たち。だが、その攻撃にオリアンヌが動じる事は一切無い。

「貴様ら、今だけは許す！ 背後を見よ！ そこに何が在る！ 貴様らが背負っているものは何だ！ 絢爛たるエルゼの宮だけでは無いのだぞ！ この国の健やかな人々の営みだ！ 貴様らの肩にはフランス共和国そのものが乗っていると心得よ！」

ミシミシという音が立つ程に、オリアンヌの体を締め付ける怪物。しかし、軍歌を諳んじるが如き兵士達への言葉は、全く止む事が無い。

その力強さは、じわじわと周囲に伝播していく。

「例え私が死のうが、貴様らが死のうが案ずる事では無い！ ベルレアン伍長は一足先に国に身を捧げた。大儀だ！ 貴様らもそれと同じだ！ その生き様を、想いを受け継ぎ、屍を踏み越え行軍せよ！ 貴様らの勇敢な最期は例え後に記録の数字の一つとして書庫に埋もれようとも、私が、同胞達が内に残し続ける！ 正義は我らフランス共和国親衛隊にあり！ 行くぞ者ども——」

彼女の体に纏わりついていた異形の怪物は、一瞬にして握り潰され、地面に叩き付けられたその残骸は踏みにじられる。

空間に轟く、空気を震わす鬨の声。

それが、先ほどまで陣を捨てて後退しようとした、圧倒的に不利な戦況で弱気になっていた新兵たちであるとは、誰が信じるだろうか。

「ああ、全く——」

それを見て、アレクシアは笑顔の裏で凍てついた侮蔑の目をオリアンヌに向けながら、一人ぼやく。

かくして、戦は再び始まる。

「——総員、私に続けッ!!」

「——体育会系はほんと嫌いですねえ」

「私達が押し留めてますから！ 焦らないで、小さな子とか体の弱い人を気にかけてあげてください！」

「側面や前方に奴らが現れたら呼んでください！ 自分が向かいます！」

その一群の様子は、避難をしている他の集団とは少しだけ違った。人々が、不安と恐怖こそぬぐい切れてはいないが、平静を取り戻している。

女子ども、老人をなるべく中に囲い、他の集団よりも遅い、だが確かな足取りで街の外へと進んでいる。

その集団の殿を務め怪物の侵攻を押し留める、むしろ押し返しているのは、二人の観光客だった。

とはいえ、彼らを観光客と呼んでいいものだろうか。少なくとも、二人に守られている民間人たちには、そうは見えないだろう。

「やあッ！」

気合の入った声と共に、タライのような形状の盾が叩きつけられ、怪物の骨が砕けながら吹き飛ばされる。

「フッ！」

息遣いと共に繰り出された蹴りが、その腕から生えた針が振るわれる度に、迫る敵の数が減っていく。

剛大とキャロル。何かが起こるとまずい、という理由で派遣された二人は、今正に状況に直面していた。

「ラヴロックさん！ 男の子が！」  
「任されました！」

怪物を牽制しながら、剛大はキャロルへと声を飛ばす。集団の後列の小さな男の子が一人、こけてしまったのだ。

集団はそれに気付くのが遅れたようで、少し距離がある。そして、最悪な事に、路地を這って現れた怪物が、狙いを定めている。

手が空いたキャロルが素早く男の子へと駆け寄り、間一髪で怪物の腕を盾で防ぐ。

「……大丈夫。絶対に、守るからね。……立てる？」

目に涙を浮かべ震える男の子は、だがキャロルの言葉にこくりと力強く頷き、立ち上がる。

「うん、強い子だ！」

優しく微笑むキャロルに見送られ、男の子は列へと戻っていく。

瞬間、一度牽制を止め戻った剛大の蹴りが、盾を攻めあぐる怪物を粉碎する。

「今の所は大丈夫、ですが……」

「はい……数が、多すぎますね」

再び前線の維持に戻ろうとする二人の額には、微かな焦りからの汗が滲む。

これは、まずい傾向だと。

突然外が騒がしくなった事に気付いた二人が慌ててホテルの客室を飛び出し合流したのは、幸いにも事が起こったすぐ後の事だった。怪物が湧いた位置の一つがホテルのすぐ傍だったのだ。

『薬』を持ち、外に出た二人を迎えたのは、想像していなかった地獄絵図。

これは、何だ……などと思う事は無く、二人は同時に、同じ答えに

辿り着いた。

『MO手術の被術者による、大規模な攻勢』。  
してやられた、というのが最初の正直な感想だった。

最初は、フランスが研究していた得体の知れない生体兵器か何かの暴走、というのも考えられた。だが、それは少しして怪物の動きに一定の法則性がある事で否定された。

時折入ってくる、二人が守っている集団とは別の避難しているグループの情報。混乱状態での噂だ、真偽混じっている……というか殆ど偽のため、どれが本当なのか定かでは無い。だが、複数のグループに共通の情報があったのだ。

怪物は、市民を街の外へ、外へと追いやるかのように出現し、動いていると。

偶然にも、外に逃げましょう、というふれて回っている人間がいると。

最後の情報の人間が何者なのかはわからなかったが、怪物は何かしらの方向性を持って動いている。即ち、誰かが操っている、もしくは指示のようなものを出せる存在である。

「情報ですけど……アタシ、これ、知ってます」

何かに気付いたようすではっと顔を上げたキャロルが剛大に話したのは、アーク計画に関係する最高機密の一端と、アーク計画の優秀な諜報部門が集めた、とある事例。

その前に、語らねばならない内容が一つある。

MO手術において、たった一人で多数、それも10や20の話では無く百や千、もしくはそれ以上を相手取れる能力とは、何か？

一対多の想定。それは、αMO手術の開発理念の一つでもあった。裏アネックス計画において、ランキング最上位の人間を抱える各国は、この問題に対し共通の答えを出していた。

それが、『広域制圧』。単騎にして軍を相手にするための能力。

防御困難な、音波による物理的破壊。広域に散布される、臓器不全

と記憶障害を引き起こす強毒、数百倍に膨れ上がる事による質量の暴力。触れただけで死の運命から逃れる事が叶わない、毒の触手の結界。

一騎当千、という言葉そのままのそれらの能力を人の身で万全に使用するために、αMO手術は開発された。

だが、彼らは、別のアプローチからαMO手術を、また異なった特殊なMO手術を施した。

「アーク計画<sup>計画</sup>の、团长さんの一人の話です」

問：一人で大多数を相手にする事の、何が不利で問題なのか？

答：数で劣る事。

当たり前の問答。それに対する解決策は、MO手術という技術を用いなければ、矛盾に満ちた、ある意味最もシンプルな、歪んだ回答だ。

「一人で相手をするのが大変なら、一人でなければいい」。

「個にして群」。たった一人の身から、軍勢を生み出す能力です」

「……！」

何故自分は最初からこの可能性を考慮していなかったのか、と苦い顔をするキャロルと、その意味を察し、啞然とする剛大。

敵は、大規模な軍勢を送り込む事ができない。だが、正規軍も駐留しているこのパリで暴れまわる必要がある。

ならば、一人から無尽蔵の戦力を確保できる能力を派遣すればいい。

「それに、この系統の能力……詳細はわかってないけど、一晩で国を落としています」

キャロルの、同じアーク計画の人間の情報が一つ。そして、もう一つ。

つい先日起こった、アフリカのとある国家の消失。大規模なテロともクーデターとも言われたその実態を、アーク計画の諜報部は掴んでいた。

何が狙いだ——！？

剛大とキャロルは、情報を交換した上で考える。



現在、シモンとダリウスというアーク計画、裏アネックス計画の最高戦力とでも呼ぶべき二人が対処に当たっている、アメリカの戦場。糾弾する事ができる確定的な証拠は掴めていないが、ニュートンの一族の人間同士の争いなのだと言う。

では何故、こちらにそのような能力を持った人間が送り込まれた？

それを深くまで考察する暇は、二人には無く。

目の前の地獄から、人々を守らんと二人は走る。

彼らにとって、パリにとって、一番長い夜は、こうして始まり――。

「素晴らしい！……いや素晴らしい！」

キャロルと剛大は、拍手と同時に投げかけられたそれを聞いた。

このままいけば、何とか軍が救援に来るまでの時間は稼げそうだ。そう思っていた矢先に。

まるで鉄砲水のように湧き出した数十の怪物。まずい、と二人が思った直後に、その男は現れた。

怪物たちが二手に別れて作った、間の道を歩みながら。

「こんばんは、勇敢なお二方。今日は月が綺麗だ……おや？」

にこにここと、この状況で心から楽し気に、男は群衆から離れまいとじりじりと後退する二人に対し、明るい声色の挨拶を向ける。次いで、あれ？ と首をかしげ。

「これはこれは、この間のきれいなお嬢さん！ まさか、君がそうだったのか！ いやー、あの時に気付けなかったとは、一生の不覚だ！」

「……神父さん」

その男は、キャロルへと見知った様子で言葉を投げかける。

キャロルはそれに対し、微妙な面持ちになり。

虹の七色に染まった法衣に、蓮の花を模した司教冠。手には聖典を持った彼は、ゆつくりと二人へと歩み寄っていく。

「改めて、こんにちは。U—N—A—S—Aからの使徒……いや、強き人間の二人。俺はアヴァターラ。アポリエール、知ってるかな？ その枢機卿を務めている者だ」

敵である事はわかりきっている。だが、最後の根拠が足りない。自己紹介をする男、アヴァターラの様子を慎重に観察し、二人は一定の距離を保つ。

……いいや、最後の根拠は無くてもいい。この男は、ここで止めなくてはまずい相手だ。

二人は頷き合い、アヴァターラへ向けて踏み出す。

「ああー！ 君達の勇氣に、敬意を表しよう……」

言うやいなや、アヴァターラはその身に『薬』を二本、次いで用いる。

同時に、アヴァターラの法衣が、ぼこぼここと沸き立つかのように動き回る。

「人為変態——『アルコーン偽神の芽』」

先に躍りかかった剛大の毒針は、確かにアヴァターラの頭を捉えていた。

しかし、その一撃は盾によって食い止められる。

攻撃が通らず、着地した剛大へと向けられる、その防御を行ったものの正体——

——それは、アヴァターラ本人の体から何本も生える、今この街を襲っている存在と、全く同じ姿の怪異。

体に、周囲を取り巻いていた怪物が、次々とアヴァターラの体から生える同胞に合流し、融合していく。

そして、その体に無数に生えた腕からは、まるで結実するかのように左右それぞれに生物の牙と思われる剣と貝殻のような盾が形成される。

アヴァターラの体に接続され、みるみる内に伸び、枝分かれしていく彼ら。

それは、彼の主が目指す楽園の樹と呼ぶには、あまりにも禍々しい姿であった。

それを、長き時を生きる大自然の生命、大樹と形容すればいいのだろうか。

それとも、古くから荒れ狂う神の象徴であるとされる河川とでも形容すればいいのか。

その姿と生態は、近縁種の外観の雰囲気を残しながら、しかし異形のものへと変じている。

深海で、スポンジのような穴あきの構造を持つ宿主の体に、無数に分岐した胴体を伸ばし。

一説ではその体表から宿主の栄養を吸収すると言われ。

その無数の胴を体から切り離し、あるいは百、もしくは千にも及ぶとさえ言われるその先端から芽を伸ばし子孫を残す。

寄生者という温和な生態の、争いを行わない彼らは、本来であればさして強力な性質とはなり得なかった。

それは、神に至るための試作体の試作体、ただそれだけで終わるはずだった。

だが、白衣を纏った魑魅魍魎に与えられた技術が、それによって編み込まれた争いの中で己を発達させたその近縁種達の力が、無数の落とし子を生み出すその能力を、別格のものへと引き上げる。

——これが、偽りの神より彼が賜った、『救済』を成し『試練』を与えるための、そして、『偽神の愛し子の試作体』<sup>プロトタイプ</sup>たる力。

眼前の、彼が試すべき、救済では無く試練を与えるに相応しいであろう相手に意識を集中しながら、枢機卿は、同時にこの場から離れていく群衆にもまた、宣言する。

「大丈夫だよ——絶対に、救ってあげるから」

そういつて彼は笑った。周囲を、深い淵に沈めるかのように。彼は心からの良心に従い、だが悍ましく、聖者のように笑ったのだ。

「それが、俺がここに来た理由だからね」

アヴァターラ・コギト・アポリエール

国籍：イタリア／ローマ連邦

26歳 ♂ 177cm 68kg

専用装備：体内内蔵型出芽体形成促進・圧縮再生芽生成、蓄積装置

『SYSTEM:Ubbob-Sathla Protot』

MO手術ver. 『偽神の芽』<sup>アルコーン</sup>”特定部位複合型”

”環形動物型” ギボシイソメ

+

”環形動物型” グリセラ・デイブランチアータ

+

”古代環形動物型” プルムリテス

+

αMO手術”環形動物型”

カラクサシリス

—  
偽<sup>アル</sup>神<sup>コ</sup>の芽<sup>ーン</sup>、  
跋扈<sup>リ</sup>跳<sup>リ</sup>梁<sup>ピン</sup>。

## M i n d   G a m e : 第8話   偽神繁茂

いつも、弱者は苦痛の中で生き、そして死んでいく。

届かない青空に必死に手を伸ばしながら、あるいは、手を伸ばすだけの時間すら与えられず。

何故なのだろうか？

弱者とは、恵まれない人間とは守ってあげるはずのもので、この世界は、人間は、大いなる存在に見守られているのでは無かったのか？曇天に向かって叫ぶ俺に、答えを返してくれる相手は誰もいなかった。

何とも、未熟な話だ。

この世界の真理であり歩むべき道筋が示された我らが教義を知らなかった、無知な子どもの癩癩だ。

世界に、神などというものは存在しない。

だからこそ、我らが夜道を探り見つけ出す必要があるのだ。この世界を照らし、導いてくれる灯りを。

だからこそ、未だ見つからぬ灯りに代わり、暗闇に惑う迷い子を救済せねばならないのだ。

だからこそ、試練を与え枝を剪定し、芽を選定するのだ。

愚か、あまりにも愚かだ。俺の何が間違っていたというのか。

信仰を違えた愚物など、愚かなニュートンの塵屑など、全て燃やして灰にしてしまう事の、何がいけないのか？

ああ、早く、早く見つけねばならない！ 残された時間は少ない。まだ見ぬ神よ、人々を見守り守る事のできる、貴き神よ――

「さ、お先にどうぞ？ ……つて、もうさつき君達から仕掛けてきたか！」

「あいやこれはまいったね！ とアヴァターラは陽気な調子で自分の頭をぺしりと叩く。

彼の周囲を取り巻く、その体に接続し、さらに周囲で蠢く異形の怪物たちというその光景は、彼の明るくマイペースな雰囲気とは酷くズレており、キャロルと剛大にはひと目で目の前のこの男がまともな人間では無いという事が理解できた。

「……本当は色々と話したいんだけど、状況が状況だから仕方ないな。まあ、手っ取り早く」

ひよいとアヴァターラが左手を上げると同時に、周囲の怪物たちが動き出す。

その大多数はアヴァターラの体と結合、もしくは体内に取り込まれる数は大分減ってはいるが、それは戦闘中の横やりを許すと十分な脅威になりかねない。

怪物たちは散開し、四方八方から襲い掛かった。

「なっ……!?」

……キャロルと剛大を無視して、その背後の避難する住民たちへと。

「試練を受けてもらおうかな」

二人の判断は一瞬であった。キャロルが自身の背後、人々を守るように走り出し、剛大は逆に正面、アヴァターラへと向け駆ける。

打ち合わせをしていたわけでは無い。これが、今の状況で正しい判断だと両者がそれぞれ考えたのだ。

直接的な攻撃能力に長けた剛大が敵の本体を叩き、キャロルが避難する住民を保護する。



互いの適性を考えた上での戦況判断だ。

「……ふむ、ふむふむー！」

何かを考えている様子で何度か頷いているアヴァターラの頭に向けて、容赦なく剛大の蹴りが放たれた。

ごしやりという鈍い音と共に頭蓋が砕け、末期の声を発する事もなくアヴァターラは崩れ落ちる。

これで終わりでは無い。気持ちとしてはキャロルに加勢に行きたい所であるが、そう容易く仕留められるような相手では無いことを、剛大は薄々感じ取っていた。

「うーん、戦術としては間違っていないと思うのだけれど……」

その想定通りに頭部を再生し立ち上がったアヴァターラは、値踏みをするかのように呟く。

自身の体から生えた怪物たちを剛大に差し向けながら。

「っー！」

首から上の無い、人間の胴体が連なったそれを剛大は素早い動作で一体一体回避する。

まるで救いを求めるかのように伸ばされるその無数の腕から生えるのは、生物の牙と貝殻状の盾。

剛大の体を切り裂こうと振るわれるそれは、アヴァターラの手術ベースである主にゴカイの仲間を指す多毛類達の中でも、発達した顎器を持つイソメ。その一種である『ギボシイソメ』の牙だ。

環形動物の中で最も身近な生物であるミミズ。

彼らが与える弱弱い体という印象に違い、筋肉のバネにより繰り出されるその一撃はアーク計画の関係者の一人に施された手術ベースである大型種では餌とする魚を切断する程の威力を誇っている。

とはいえ、それだけであれば大した脅威にはならなかっただろう。

アヴァターラの手術ベースの本体である生物は動き自体は鈍く、それを基として特定部位複合型が組み込まれている関係上、本来の『ギ

ポシイソメ』を手術ベースとした場合と比べ、速度では劣っている。

この程度であれば、剛大の手術ベース、『トビキバアリ』の機動力と裏アネックスにおける幹部搭乗員に選ばれるだけの実力者である剛大の素体の強さが合わさり、回避する事は難しくくない。

……そう、それが、一人分の相手だけであれば。

「さあ、見せてくれ。君が神足り得る存在なのか！」

まるで舞踏会か何かのように、踊りの相手を求めるかのように、無数の腕とその剣が剛大へと伸ばされ、退避する空間さえも制圧する。

回避できる場所は存在しない。ならば、強引に道をこじ開ける。

「フッ！」

力を入れた息遣いと共に繰り出された刺突。剛大の右腕から生えた、『トビキバアリ』の針だ。

『トビキバアリ』。オーストラリア原産のこの蟻は、日本で一般的に見かけるアリとは大きく異なった特徴を有している。それが、尻から生える毒針だ。

アリの中でも原始的な系統に属する種に多く見られるその特徴をこのトビキバアリは特に色濃く残しており、その毒は昆虫界でも指折りの強さを有している。

例え凄まじい再生能力があろうとも、これを叩きこまれてしまえばタダでは済まない。

「アリかハチか……その腕力からして、アリかな？　しかも、わざわざ針を当てに来るといふ事は、強い毒だ」

「……」

だが、それは当たり、さらにそれを体内まで刺す事ができれば、の話である。

当てるという段階で問題は無い。アポリエール、ニュートンの一族の一角。その身体能力は相応に高いのだろうが、大量の重量物が体に付いているアヴァターラの動きは鈍っている。

問題はそれを体内まで刺せるかどうか、だった。

剛大の毒針は、異形の怪物が構えた盾によって防がれていた。

アヴァターラの言葉と同じく、剛大もまた相手の手術ベースを分析しているところだった。

変態葉の形状からして、環形動物型。だが、この盾という要素がその分析を狂わせる。

環形動物に、この殻のような固い盾を持つものはいない。

分泌物によって砂や周囲のものを固めて住居を作る種こそいるが、アヴァターラから生えるこの怪物の盾は、そのような類のものではない。

一体、何型だ？ 答えに辿り着いていたにも関わらず、剛大の推測は間違った方向へとフラフラ曲がっていく。

剛大の知識に、誤りは無かった。確かに、環形動物に貝のような堅牢な殻を持ち歩く種はいない。

……原生種に限れば。

それは、現在の地球では既に存在しない生命。

『プルムリテス』。小刀類、とも総称される、オルドビス紀の古代生物だ。

レオ・ドラクロワ博士に様々な報酬を約束して施されたESMO手術によってアヴァターラが得たそれは、三葉虫を細長く引き伸ばしたかのような姿をした鎧持つ環形動物である。

節毎に一对の殻を有する彼らは、節単位で体を伸ばせるアヴァターラの手術ベースとしてこの上無く合っていたのだ。

その殻は、『ネオピリナ』という貝類の遺伝子から移植され再現されたものである。

環形動物と軟体動物は類縁関係にあると考えられている。

その理由の一端が、両者の幼生の形状の類似性と、このネオピリナという生物の存在である。

生きた化石と呼ばれる原始的な軟体動物、ネオピリナ。その体構造

は、一定の構造の繰り返しで構成された環形動物の体節性に近いものを有しているのだ。

原始的な種故なのか殻の強度こそ多数の貝に比べ劣るが、環形動物型と組み合わせるのに高い親和性を示したこの種を用いた事により、『ブルムリテス』は再現され、今こうして邪教の指導者の身に組み込まれている。

毒針は通らない。ならば、一度打撃で盾を砕くしかない。

剛大は毒針での攻撃を止め、自身に降り注ぐ無数の剣の回避を優先しながらも、アリの筋力を遺憾なく発揮する拳を、脚を振るう。

「成程、悪くない腕をしているね」

「くっ……」

だが、見物客のような調子ではちと拍手をしながらそれを観戦するだけのアヴァターラの余裕を剛大は崩せない。

剛大の一撃は、その盾を砕く。基にしている生物の殻の強度がそこまで高く無い事もあり、回避を試みながらの合間の反撃でも、盾の破壊は可能である。

だが、そこから先に至る事をアヴァターラの布陣は許さない。

車懸かりの陣。中世において用いられ、日本でもある戦国武将が用いたとされる戦術。

現在では架空のものだったのではないかという説が濃厚であるが、アヴァターラが剛大に対し向ける怪物たちの動きは、それに近いものを取っている。

各部隊が集まって全体では円形の陣を構成し、回転しながら敵の前面へと当たる。連続的に攻撃を仕掛け常に一部を退かせる事で、自軍は休憩する時間があり、敵は常に戦い続けねばならず消耗を強いられる。

これが一般的に言われる車懸かりの陣であるが、アヴァターラのそれはその生物達の性質も合わさり、より厄介なものへと姿を変えていた。

怪物の各節や各個体が次々と剛大へと襲い掛かり、素早く下がり他

の個体や節へと交代する。

剛大の一撃は確かに盾を砕いた。だが、守りを失い無防備になった節に向けたトドメの一撃は、別の節から生えた腕の盾が受け止める。その隙に、破壊された盾が再生し元の姿を取り戻す。

同時に、別の節が攻撃を仕掛け、剛大の余裕を削っていく。

その絶え間ない攻撃に、じりじりと追い詰められていく剛大。

「……ああ、君もまた、違ったか」

包囲網を狭めながら、アヴァターラは悲し気にぼつりと呟く。

そして、全ての怪物を、剛大へと差し向け。

「させないッ！」

そこで、包囲網の一角、アヴァターラの体から伸びた怪物の一匹が、盾を構えられない背側からの強い一撃により、引きちぎられる。

開けた突破口。剛大は自身の脚力を最大限に活用し、そこに向けて離脱する。

しかしアヴァターラもただそれを眺めている程甘くは無い。

その付近にいた怪物が、剛大の背に刃を突き立てようと次々に襲い掛かる。

だが、その全ては堅牢な盾に阻まれ、剛大へとたどり着く事はできなかった。

「おやおや」

自身から生える怪物に遮られたその視界の先を確認するために、アヴァターラは怪物たちを一度退かせ、その光景を見て、目を輝かせる。

……そこに立っていた、気丈にアヴァターラを見つめる、赤毛の女性の姿を捉えて。

「おやおや、もうあの人々を助けるのは止めてしまったのかい？」

「……いいえ。あの人達は、軍人さん達に助けられたよ」

キャロルの目に宿るのは、普段の澆刺とした彼女を知る人間からす

ればさぞや印象と違うであろう、強い怒り。それは、一直線にアヴァターラへと向けられている。

「……島原さん」

「ああ」

キャロルは隣に立つ剛大を、静かに、しかし力の入った声で呼ぶ。その意気の籠った声に、剛大は短く頷き。

「アタシに、力を貸してください」

「喜んで」

今の状況では、当たり前とも言えるその言葉を口に出し、同時に、アヴァターラへと向けて駆け出す。

絶対に止めなければならぬ。目の前の、この男を。

自分の役割は、人々を魔の手から守る事で、悪を裁く事じゃない。それが、警察官としてのキャロルの考え方だ。

今、ここでやらなければ。

襲い掛かる怪物の構えた盾が、キャロルの振るう防 パリスティックシールド 弾 盾と激突し、怪物の盾が碎かれる。

地力が違うのだ。

キャロルの身に組み込まれた手術ベース、『ミッツボアリ』。それによつて引き出される凄まじい腕力が、相手のそれを圧倒する。

盾を碎かれた節を退かせようとアヴァターラは動くが、それが叶う前に、盾を失ったその節に毒針が撃ち込まれる。

本来であればアヴァターラ本体から切り離された怪物はそのまま別個に活動を始めるのだが、『トビキバアリ』の毒により、その場に倒れて沈黙している。

「ち………」

怪物の、毒針を受けた節から先を自切するアヴァターラ。次いで次々と怪物が二人に向けて襲い掛かるが、それは先ほどの剛大一人の時のようにはいかなかった。

剛大が、怪物と次々と打ち合い、その隙の死角から襲い来る攻撃を

キャロルが盾でカバーする。

逆に、キャロルは盾の重量もありそれを構えている以外の方向からの攻撃を同時にいくつも捌く事はできないが、しかし剛大がキャロルの隙を狙った一撃を叩き落とす。

そして、反撃に繰り出す、間を置かない二人の同時攻撃は、怪物の盾を砕いた直後に撤退を許さず、その先の無防備な節にある時は強力な拳打で引きちぎり、またある時は毒針によって自切を強要させる。

「……島原剛大君にキャロル・ラヴロックちゃん……で間違いは無かったかな？」

その攻防が繰り返され、アヴァターラの体から数本の胴体が失われた時、アヴァターラの側から二人へと声がかけられる。

同時に怪物たちが二人から下がり攻勢が止んだため、二人も荒く息次ぎを繰り返しながらも戦闘の手を止めた。

「素晴らしい。いや素晴らしい。近接戦闘系の手術ベースのたった二人で、俺を相手にここまでやれるとは。……そんな君達に、良いニュースと悪いニュースがある」

「……」

戦闘を突如中断したかと思えば、いきなり何を。二人はそう言いだしたかったが、今の戦況はキャロルが加わっても未だ五分であった。

数度牙を受けてしまったとはいえ、怪物たちを相手に優勢に立ち回っている二人。だが、尽きる事の無いそれとの断続的な戦闘に、二人の疲労は溜まりつつある。

「良いニュースからにしようか！ 今なら、君達は俺を殺す事ができるよ」

「何だと……？」

自分に不利な情報を自ら出したアヴァターラ。剛大から、いぶかし気な声上がる。

「ああ、説明をしようか……俺の腹の中に埋まってるの、圧縮栄養芽を作り出す装置でね」

『SYSTEM:Ubbob|Sathla Proto』。アヴアター  
ラの体内に内蔵された、彼の専用装備。

それは、彼が得た過剰な栄養を圧縮栄養芽に変換して保管しておくための装置だ。

MO手術は人智を超えた力を人間に与えるが、それでも物理法則を無視できるものではない。

例え凄まじい再生能力を持つベースでも、失われた部位を再生するためにはそれに見合った栄養が必要となる。

その観点から見れば、アヴアターラの力は外部から見れば極めて不自然だった。

何百という、人間の子ども数人分のサイズの怪物が、たった一人の身から生じるのだから。

それを可能としているのが、この専用装備である。圧縮栄養芽。その名前のそのまま、栄養を高密度に圧縮したもの。アネックス計画の専用装備としてロシアが開発しているこれに近いものを、アヴアターラの体内の装置は過剰な栄養から生成し蓄積する事ができる。

「……でも巡礼のために沢山使ってしまったているからね、今はストックが殆ど無いんだよね」

本来であれば、アヴアターラに対して、高い再生能力を有するMO能力者に対する対処法、『死ぬまで殺す』は通用しない。正確に言えば、『四桁回数殺せるだけの気力と実力があれば可能』。

だが、今のアヴアターラはそうでは無い。これまでに貯め込んだその栄養の殆どを怪物の生成の為に吐き出しているからだ。

「まあ手短に、今なら頑張れば殺せるかもだけど、ここを逃せばめっちゃくちや再生回数の上限増えるよ、と言っておこうかな」

相手の言葉は、嘘か真か。二人はアヴアターラと相對しながら、怪物たちの動きに注視しながらも考えるが、はつきりとした結論は出ない。何故こんな情報を突然出したのか、それがわからなかったのだ。

「ま、信じるか信じないかは一つとして。キャロルちゃん、君がU—N



ASAに、アネックス計画に参加した理由は『弱い人を守りたい』……だったかな？ 珍しいね、警察がわざわざ命懸けの手術なんて」  
良いニュース、の話を持ち切り、アヴァターラの目はキャロルへと移る。

世間話のような気安さを持った、何故知っているのかキャロルの個人情報を含む問いにキャロルは答えを返さないが、アヴァターラはそんな事は全く気にしていない様子だ。

「うん、いいね。とてもいい。『弱い人を救いたい』だなんて、実に共感できる考え方だよ。俺と同じじゃないか」

「何……が……」

大量殺戮と、それから人々を守る。やっている事は真逆なのに、それを同じだと目の前の人間は言い張る。

何を言っているのか到底理解ができないそれに、キャロルの目が曇る。

「君達は可哀想に思わないのかな？ こんな、苦痛しかない世界で、神に至る可能性を失って、それでも生き続けなければいけないんだよ？

ああ、人殺しは犯罪だと言いたいのかな？ 君達には確かに許容できないのだろう。……でも、だからこそ、誰かが罪を被ってでもそれをやらなければならぬんだ」

アポリエール家の事は、剛大もキャロルもそれぞれ別の場所から得られた情報で知る所だ。

ニュートンの一族のように、長い品種改良の結果では無く、人間は何も手を加えられなくとも生まれながらに、その先のステップに進む可能性を持っている。

……だが。その可能性が無いから、殺す救う？

その可能性が有るから、殺しにかかる試す？

その判断基準さえも、自分の勝手な内にしか無いもので？

ここまで頭の茹った狂気に染まっているものだとは、思っていないなかった。

「さて、弱い人々を、俺が救わねばならない人々を、わざわざ生かそうとしている、キャロルちゃん。君には、ちよつと悲しい事実を告げなければいけない」

「何を……？」

哀れむかのような目で、アヴァターラはキャロルへと告げる。

さあ、これを聞かされて、君はどう考えるだろうか？

折れてしまうかな？ それとも、それでももって立ち上がってくるのかな？

アヴァターラは内心で、試すべき相手への期待に満ち溢れながら。

「君の手は、既に守るべきものの血で真っ赤に汚れているんだ」

「……!？」

そうだろう。無視できないだろう。たとえ君にとって俺がどうしようもない敵だったとしても、自分の信念にべつたりと汚れが付く、そんな可能性を突きつけられてしまえば。

「……疑問に思わなかったかい？ どこから、これだけのみどりご嬰兒達を生み出すだけの栄養を確保していたのか」

——おいで、ミカヤ

全くの唐突に、アヴァターラは名前を呼ぶ。

それに反応し、アヴァターラへとその体を近づけたのは、アヴァターラから生える怪物の一個体だった。

「……あ、え……っ？」

慈しみの表情で怪物を撫でるアヴァターラのその動きに、一瞬理解できず……そして、ある可能性に思い当たってしまったキャロルの顔が、青ざめていく。

盾を持つ手は小刻みに震え、アヴァターラを射ていた決意の瞳が、ふらりと揺らぐ。

「君達がこれまで散々殺して来た俺の嬰兒たち、意識を残した市民の皆さんなんだよ」

そして、なんとという事も無げに、アヴァターラはそれを突き付けた。さあ、試練を与えよう、と心の中で呟きながら。

「ありがとう、救済のために愚かな俺が仕方なく縛り付けてしまったいた彼女達の魂を、救<sup>殺</sup>つてくれて」

さらなる追い打ちの言葉を、その締めとして。

—— 彼がふかふかのベッドでは無く硬いコンクリートの上で目を覚ましたのは、5才の誕生日を迎えた日の事だった。

いつも遊んでくれたお父さんは？ 優しくかったお母さんは？ 全くの突然の出来事に、彼は混乱し。そして、すぐに絶望した。

食べ物はない。……ゴミ箱の中に無い事は無いのだが、彼はそれを食べ物と認識できなかつた。

飲み物も無い。……地面に油の浮いた水たまりはあるが、食べ物と同じく。

暖かい寝床も、おもちゃもそこには無かつた。

彼が、この場所を犯罪組織同士の紛争地帯と化している、国から見捨てられた一都市のスラムだという事を知るのは、この場所を抜け出してからの事だった。

生にしがみ付いた。何としてでも生きて、お父さんとお母さんのところに帰る。幸運だったのは、彼が常人から外れた身体能力と優れた知能を有していた事だろう。生きるために知識を蓄えた彼の元には、何人もの街で暮らす恵まれない子ども達が集まって来た。

娯楽など何も無い、この場所。そんな子ども達に彼がしたのが、捨てられていた書物……昔に聖職者が布教のために配っていたのだろう、聖書の一部が書かれた冊子を読みきかせる事だった。

神様はいつも皆を見守っています。だから、清く正しく生きましょ

う。そうすれば、いつか神の身元へと招かれ永久の幸福が訪れます。神を信じていた。自分達を、哀れで弱い子羊を、神様は救ってくれるのだと信じ、待っていた。

盗みはさせなかった。殺しはさせなかった。全て、子ども達では無く、彼本人がそれを行っていた。

自分が代わりに地獄に落ちます。だから、皆だけは助けてあげてください。守ってあげてください。

その性格は、彼が元々は恵まれた家庭で育っていた事と本人の気質が合わさったものだったのだろう。

歪んだ献身の甲斐もあり、彼と共に過ごしていた子ども達はこのスラム街で生きる人間としては信じられないほど優しく育った。

……だが、彼は知らなかったのだ。裏社会の、犯罪組織のおつかいをこなして得た殺しと生存の術を得ていても、人間の悪意そのものに堪能でなかった、清く正しく、皆を導こうとした、聖人のような彼は。この世界では、優しいだけの人間は、食い物になるしかないのだと。

「にいちや、ごめん……おかね、とられ……」

「そんな事はいいから！ 喋るな！」

嗚呼、何故なのでしょう、神様。

「痛い、苦しいよお……」

こんなに、傷んでいるではありませんか。こんなにも、弱いではありませんか。

「けほっ、ごほっ」

なのに、何故。

「死にたくな——」

この子達を、俺を、守ってはくれないのですか？

……

「おお……よく生きて帰ったぞー！」

「今晚はご馳走よ！ 教皇様もいらっしやるだなんて！ あなたは凄いい子だわ！」

……ああ、神様……

「貴……様……！」

「……」

アヴァターラに対する、業火の如き怒りを浮かべる剛大。その手は、2本目の『薬』に伸びていた。

盾を支えとして何とか体勢を維持しているはいるが、体の熱が引き、青ざめているキャロル。

「……ああ、『助けて』『助けて』と彼らは言っているね。もう救われた皆の事が羨ましいんだろうな！ どうだろう、警察のお二方？ この子達を、『救って』あげてはくれないか？」

正義感。使命感。義憤。正の方向の感情を持って自身に向かってくる、眩しい世界で生きる彼らをいかに汚し、その心を折るのかをアヴァターラは熟知している。

……ただ、剛大君の方は折れなかったか。

アヴァターラはまあ想定通りか、と怒りのままに飛び掛かって来る剛大を迎撃しながら策を巡らす。

剛大の攻撃は力と勢いを増し、アヴァターラの怪物によって組みられた防衛網を速度に任せて突破し、本体へと迫る。

「ふむ、薄情だなあ」

先ほどアヴァターラが突きつけた怪物の真実。だが、剛大が怪物へと振るう力は全く遠慮が無く、むしろ増している。

「黙れ……人々の心までその詐術の餌にするな……！」

成程成程、とアヴァターラは剛大のその態度から二人の性格の差異を見抜いていた。

剛大は感付いているのだろう。先ほど、自分の言った言葉は嘘であると。

アヴァターラの能力によって生じる怪物の素材として栄養の塊である人間を用いている事は事実だが、そこに精神は生じない。それは栄養として消化されてアヴァターラの血肉として再構築されている

だけの話であり、元の人間の要素は無いからだ。

圧縮栄養芽、という時点で剛大はそれに感付いた。だからこそ、憤ったのだ。

苦しみに満ちた世から人を救う、などと言いながら、その心を心理戦で優位に立つ為の材料に使うなど許さない、と。

恐らくは、互いに警察官であり人々を守るといふ決意と信念を持つてはいるものの、キャロルの方が理想家で直情的な面があり、剛大はどこか冷めている部分がある。だからこそ、このような場面で剛大は憤り、キャロルは憤る、までたどり着く前に心が折れてしまった。

どちらが良いのか、などとは一概に言えたものではないのだが、少なくとも、アヴァターラにとつては話術の段階で折れてくれないのは多少やりにくい相手である。

「でも……神に至るには遠いな」

剛大の突撃は、しかし阻まれる。

確かに、剛大の動きは変態薬を追加で用いた事により先よりも早まっている。

いくつかの節が速度に対応できず、毒により潰された。

しかし、届かない。その体は突きだされた無数の剣による反撃により、じりじりと押し戻されていく。

「……ラヴロックさん！」

剛大はそこで、キャロルの名を叫ぶ。首を何度も振り、何とか立ち直ったキャロル。だが、その目は暗く、恐らくは十全の力を発揮できるような精神状態では無いだろう。

仕方のない事ではある。自分が守るべき市民を、他ならぬ自分が殺めていた、と突きつけられたのだから。

それは虚偽であるのだが、その誤解を解くには、今のこの戦いでは余裕が無すぎた。

「貴方は市民を殺してはいない……奴の言葉は嘘だ！ ……たとえ嘘

でなかったとしても、今我々が倒れたらもつと沢山の人が犠牲になる！我々は、皆を守るためにここに来たのでしよう！」

剛大の言葉に、キャロルがはつと顔を上げる。その心に押し掛かったものはまだ違うという確信を持っていないからか完全には取れたわけでは無さそうだが、その通りだと自身を鼓舞し、キャロルはアヴァターラへと再び、立ち向かわんとし。

「…………おや、立派。まあ、君達に反撃のチャンスなど無いのだけどね？」

「な…………に…………？」

しかし、さあ反撃だという体勢の剛大とキャロルは、踏み出すと同時にその場に倒れこんだ。

体が、痺れて動かない。

「救済の使徒を殺すなどと罰当たりな事をしてはいけないよ」

説教をするかのようなアヴァターラが指を指したのは、辺りに転がる怪物の死骸。

引きちぎられたものや、毒で死んでいるもの。その体からは、多毛類と人間の血液が混じった赤い体液が流れ出している。そしてそれは、剛大やキャロルが攻撃を加えた時に怪物から飛び散り二人にかかったものでもあった。

死んだイソメを摂食しようとするハエが死ぬという現象は、それを釣り餌として用いる釣り人達の間で古くから知られていたが、それが一体何なのか具体的に検証されたのは、1930年代の事である。

『ネライストキシン』。実験に用いられたギボシイソメ科のLumbineris属からその名が取られたこの化学物質は、中枢神経のシナプス伝達を抑制する神経毒であり、アヴァターラの身に宿る『ギボシイソメ』の体内に含まれる成分だ。

攻撃に用いられる事は無いが死後に周囲に撒き散らされ、揮発性の高いそれは、まるで、無念が形を成した呪いかのように死骸を貪ろうとする生物に被害を与える。

人間を初めとする哺乳類に対してはよほど多量で無い限り致命的な効果を与えないが、昆虫に対して特に高い殺虫活性を持つこの物質は、MO手術によってツノゼミを組み込まれた被術者にとって大きな作用を及ぼす。特に、剛大とキャロル、昆虫であるアリを手術ベースとして組み込んでしまっている両者に対しては。

「……さて、ここまでかな」

『<sup>アル</sup>偽神の芽』。それは、MO手術の花形とでも言うべき近接戦闘を嘲笑うかのような醜悪な能力だった。

無数の末端から繰り出される剣と盾が接近を許さず、それを潜り抜け本体に攻撃を加えられたとしても、無尽蔵の再生能力が決着を許さない。

そして、破壊された末端から生じる麻痺毒が、そもそも末端を破壊しないか即座に再生能力を削り切るかという無謀極まりない二択を強要する。

それは近接戦闘の手段しか持たない手術ベースでは勝ちの目などありはしない不落の要塞だ。

「……さて、このまま君達を救ってあげたいのだけれど」

無力化した二人に向けて、その剣を振り上げたアヴァターラだったが、そこで自分の胸を押さえ、次いでその口端から血が一筋、流れ出す。

「時間切れのようだ……俺は聖堂で待っているからね、もし君達が生きていたら遊びに来ておくれよ！」

動けない二人を横目に、アヴァターラは自身の体へと怪物たちを回収し、引き下がっていく。

そこには、他に人も怪物もおらず、ただ二人だけが残されていた。



「……ああ、疲れた」

聖堂に戻ったアヴァターラは、ステンドグラスを眺めながら椅子で横になっていた。

少し眠ってしまったようだ、と目を瞬かせ、激痛に少しだけ眉を歪める。

体内で、αMOが悲鳴を上げている。オリアンヌとの交戦的一幕で、その能力を行使する核であるαMOが損傷してしまっているのだ。自身の再生能力により、じわじわとその傷は癒えてはいるのだが、本格的な治療が行えず、使徒たちを大量に生み出すために、体に大きな負担を強いた上先の戦闘で全力で能力を振るったため、その傷口は結局のところ、再生速度を下回り徐々に悪化しつつあった。

宣教師たちからの定時連絡は無い。結局、彼らも俺の信仰を理解してはいなかった。

何故、彼らを含む教団の皆はいつも救済だ、救済だとそればかりで人間を試練を与える対象と考えないのだろうか？

勿論救済も重要な我らの責務だが、新たな神を迎えるのはそれと同等に重要な事のはずなのに。

神の卵を選抜するという行為にトラウマがあるからか？ ああ、愚かだ。

「……おや」

聖堂の扉が開く音。アレクシアだろうか。宣教師たちだろうか。それとも――

微かに期待を寄せながら、アヴァターラは立ち上がり、聖堂へと立ち入った人間を、目を丸くして見つめる。

入って来たのは、一人だけ。虹の道服についた汚れを払い、聖職者として恥が無いように、その身を整える。

そして――

「ようこそ、キャロルちゃん。……今日は、お祈りに？」

強い意志の瞳で自分を捉えるその女性の姿に、口端を歪めるのだった。

## M i n d   G a m e : 第9話   守護と救済

——この世界に、神などというものは存在しない。

ページを捲る。人間とは不在の神に至る可能性である。

——この世界に、神などというものは存在しない。

ページを捲る。なればこそ、我らがその新たな神を探し出し生誕を助け仕えるのだ。

——この世界に、神などというものは存在しない。

「おお、おお……………！」

聖典を読み、また一ページ、一ページと読み進めると同時にぼろぼろと涙を流す彼に、傍でそれを見守る両親は慈しみの目を向けていた。

「本当の事なのよ、これが、私達に与えられた使命なの」

母が、その身を抱きしめる。

「お前は、枢機卿の座を賜ったんだ。我らでは至る事はないが、それでも神を生む試練に生き残ったんだ、お前は」

父が、威厳を持った言葉と共に頭を撫でる。

突然、スラム街に武装した一団が現れ、子ども達を逃がそうと応戦した彼は激しい抵抗の末に昏倒させられた。

目を覚ますと、そこには懐かしい、最早記憶の隅にしか無かった我が家と、会いたいと望んでいた両親の姿。

……感動の前に疑問が先走った彼は、歓喜に震える両親に、事情を聞いた。

その答えとして渡されたのが、今彼の手にある聖典だった。

彼が読むのと同時に、彼が何故突然生死をかけた生存競争をする事になったのか、その理由が語られる。

両親が所属していた、その血に持っていた一族の一家が運営する、とある教団。

彼らが『神を生み出すための実験』として行っていたのが、危険地帯に子どもを送り込み、困難を乗り越えていく内に強い存在として成長していく。それを観察するという実験だった。

本来であれば、教義としてニュートンの一族の人間は神に至る事はできない。それは、品種改良などという自然の摂理に逆らった手段を用いた罰なのだと言教義では語られる。

だが、一族の人間は一方で人間を見下してもいた。いずれ神に至る可能性がそのごく一部に眠っているようにも、我らと比べれば彼らは遙かに弱い、だから、我らが救わねば、導かねば。

ニュートンの一族が一般の人間を超越した能力を有しているのもまた事実。

かつて、この実験の失敗……否、歪な形での成功により、恐ろしい怪物が誕生した。

一般人でさえ、並みの一族の人間を容易く仕留める事が可能となる。

……ならば。一族の人間に、この試練を施せば、どうなるだろうか？

これが、彼の半生に襲い来た不幸、その全ての顛末だった。神に与えられた試練などでは無く。ただの、狂った宗教団体による、興味本位とまで言ってもいい身勝手な実験の押し付け。

「違ったの、だな」

その事実を聞き、加えて何やら言い繕おうとする両親の言葉に、彼はただ、ぽつんと呟いた。

息子の耳に言葉が入っていない事に、両親は気付かなかった。真実を知り、まだ齢にして16だった彼の心は、歪な音と共に融け落ち。

「ああ、違ったんだ！ 神は俺達を捨ててなんていなかった！ アロルドが手足を挽がれて苦しい、助けて、って言いながら死んだのも！ ミカヤがゴミと見分けが付かないような姿で捨てられていたのも！ カストがごめんさい、って俺に謝る手紙を残して首を吊ったのも！ アニータが一子を産めない体にされたのも！ 全部、助けてくれる神がいなかったからだったのか！ 嗚呼、何と、何と——」

そして。

「——早く、見つけなければ。見つからないのであれば、早く、このような世界から皆を解放せねば」

歪な形に、再び固まった。

「……ようこそ、キャロルちゃん。……今日は、お祈りに？」

「あなたを、逮捕しに来ました」

アヴァターラは、来客を出迎える。

先ほどキャロルを行動不能にした、ネライストキシンという化学物質は昆虫に対しては致死的な効果をもたらすが、一方で死に至らなかった場合には一定の時間の後には急速に麻痺が回復していく、という特性を持っている。

追って来る事自体はおかしな話では無いし、そもそもアヴァターラ本人がそれを望んでいた部分もある、別にこの来客はおかしな話では全く無い。

決意の瞳、彼女の髪の色と同じく、義憤に燃えているのだろうか。そのような感情を、アヴァターラは目の前のキャロルから読み取った。

「……聞かせて欲しい。あなたが何者で、何でこんな事をしたのかを」  
このフランスに突然現れ騒乱を巻き起こした目の前の男にキャロルが最初に問いかけたのは、それだった。

「ふむ、意外だな。てつきり、敵だから素性なんてどうでもいいとか、どうせ理解も納得もできないから事情を聞く必要も無い、とかで、何をしてこの状況を作ったのか、なんて聞かれると思っていたのだけだ」

「事情聴取、って言えばわかってもらえる？ ……それに、あなたはアタシと同じ、ってさつき言われちゃったから」

戦闘の構えを両者は崩さないが、しかし少し落ち着いている、と言ってもいい小康を保ちながら言葉を交わす。

それは、キャロルの警察官としての自覚であると同時に、個人的な疑問でもあった。

「……成程、だから『何者で何故』、というわけだね。賢い、と評するには少し感情的に寄り過ぎた選択かもしれないけれど悪くない」

先の交戦から、キャロルにとって聞いただしたかった部分だったのだ。

弱い人を救いたいだなんて、実に共感できる考え方だ。俺と同じじゃないか。それがアヴァターラがキャロルに語った言葉だ。

否定したかったが、同時に何故そのような事を、という疑問もあった。

キャロルの思う限りではアヴァターラは人を殺す『救済』と称する行為を、本当に正しいものであると、それこそキャロルの中の『皆を守りたい』という意思と同じように真摯に想っているように思えた。  
だから、知りたかったのだ。その根拠を、何故、その結論に辿り着いてしまったのか、その理由を。

「じゃあ聞いてもらおうかな、俺の身の上話でも。お茶もお菓子も切

らしてしまっているのが申し訳ないね。あ、逆にカツ井とか出たりはしないのかな？ 希？ちゃん様はそんな感じの事言ってたんだけど」  
おそらくこれは時間稼ぎだ。アヴァターラはキャロルの行動を、こう結論付けた。

だが、それに乗る。何故ならば、この救済の波の中でそれを防ごうとする人間がどのように抗うのか、ただそれを見たかったからだ。

「……アヴァターラ、貴様、その衣は何だ？」

教団の本部で、高い階段の上に備わった玉座に座る老年の男が、部屋に入って来た青年を見て、苛立ちを隠せない様子で疑問を呟く。

彼の怒りも尤もと言えるだろう。教団の、そして一族の方向性を決める重要な会合。最高位の教皇である彼と、それに次ぐ地位である七人の枢機卿が集まる時間を、既に二時間は超えていた。

その末に、ようやく一人目の枢機卿が入って来た。それがまず、怒りの理由の一つ目だ。

二つ目に、彼の纏う衣が、教団としての規則を逸脱した、枢機卿という地位を冒瀆するかのようなものだったからだ。

アヴァターラ・コギト・アポリエール。神の試練を生き残った、司祭の息子にして、新たな枢機卿。

そんな彼を、教団は大々的に持ち上げた。

神の卵ですらほぼ全てが脱落する試練を、彼は見事10年間生き残って見せたのだと。その功績から、彼は新たな枢機卿として選抜されたのだった。

教義に対する信仰は十分。能力は十二分。しかし、16というその歳は枢機卿としてはあまりに若いと言わざるを得ない。権力闘争という意味でも、納得していない一族の人間はいる。だがそれでも、彼を枢機卿に選ぶ意義は十分にあるのだと議決された。

その理由は、早い話が一般信徒に対する客寄せと一族に対するアピールなのだ。彼は、奇跡の子なのだ。こんな若い人間でも、実力さえあれば最高位にまでたどり着けるのだと。

そのような経緯で彼に与えられたのは『赤色の枢機卿』という地位であった。

アポリエール家の枢機卿には、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫という虹を構成する七色が付属する。

赤色。血の世界を生き、信仰への熱に燃える色。

そんな彼に贈られた称号だった。

七色七人揃い初めて成り立つ。そのような思いが込められた、この枢機卿という地位の規則。だが。

目の前の若き枢機卿は、その証として彼に与えられた赤の衣を、虹の七色に染め替えていた。

「ご機嫌麗しゆう、聖下」

だが、その怒りに気付かない、もしくは無視するかのようには、アヴァターラは遙か上に教皇を望み、恭しく跪いた。

「……もう一度、問うぞ。その衣は、何だ」

「俺の、決意表明でございます！」

再度の質問に、今度こそアヴァターラは言葉を返す。

だが、その答えは教皇にとって要領を得ない、意味を察せない内容であった。何を言っているのか、この若造は。

やはりこの青年、どこかおかしいのでは。教皇は最近そのような事を考えている。枢機卿の地位を与える少し前に、両親を惨殺されるという痛ましい事件が起こっている。そこから、どこかおかしくなってしまったのではないか。教義に真摯ではあるが、あまりにやりすぎだ、と思う事案が多々あった。

「この神のいない世界に、神にもなれないのに生き続けるのは、あまりに哀れです」

「……ああ、そうだ。貴様は日々救済に励んでいるな」

突然、話が教義の事へと飛ぶ。

やはり、どうにかなっているのでは？ という確証が強まるが、教皇は話を合わせる。



「だから、俺だけでいい。俺一人が、苦難の全てを担いましょう」  
「……………」

しかし、アヴァターラの次の言葉で、気付いてしまった。話は決意表明から何も飛んでなどいないのだと。

神のいない世界で、神にもなれない哀れな人間に、死という救済を与える。それは、教義に則ったアポリエールの裏の聖なる職務でもある。だが、アヴァターラが今語っているのは、そうでは無い。彼が今話しているその対象は、一般人、では無いのだと。

「貴様……………」

それは、あまりにも遅かった。もっと早く、間違いを認めこの青年を何とかするべきだった。

金と権力にその信仰が汚れるのは、長く続く宗教組織では逃れられない宿命と言ってもいい。それをいかに自浄するのか、というのは重大な課題だ。だが、アポリエールというこの一家は、既に頂点がそれに汚れてしまっていた。そこに、狂信者と呼ぶべき信仰の篤い人間が入れば、どうなるのか。

教皇は玉座のスイッチを押そうとする。

だが、その手はアヴァターラの次の言葉で強張る。

「エドヴァルド卿をお呼びですか？ それならば、俺が救いました。財産を私に提供する、と仰られていましたが、我が信仰に財など不要であるが故、お断りさせていただきます」

階段を一步、昇る。

「ペトリ卿をお呼びでしょうか？ 彼でしたら、俺が救いました。多くの女性と床を共になさっていて、いやあ羨ましい限りで！ あれだけの方々があったならば、あちらでも寂しくは無いでしょう」

また一步、昇る。

「ああ、それとも、アレクシス卿でしょうか？ 彼だったら、俺が救いました。世界に信仰を広めるまで自分は死ぬわけにはいかない、と仰られていました。このような信仰に篤いお方が苦しみながら生き続けなければならぬなど、俺には我慢できなかつた！」

一人、また一人と枢機卿の名をアヴァターラは語る。六者六様、結末は皆同じな、その救済の様子を。

理解、できなかつた。だが、生にしがみ付いた教皇はそこでボタンを押す。

即座に重武装の兵士達が訪れ、この狂人を排除してくれるはず。

だが、教皇の間には誰も訪れない。

「……彼らは、職務に忠実な信徒でしたね。実に、ああ、実に、これまで生きねばならなくて、可哀想だった」

「それではお休みください、聖下。どうかあちらで、我が救済の様を、御覧じろ——」

そして、この日は後に信徒たちの間でこう語られる。『アポリエール家、その歴史で二番目の悲劇』と。

「……まあ、面白いものではないけれどね、こんな感じだよ」

その生い立ちを、教義の紹介を交えながら語ったアヴァターラは、それを聞いていたキャロルの反応を見る。

何故だろうか。彼女が何を思っているのか、わからない。

アヴァターラは首を傾げてもう一度キャロルから何かを読み取るうとするが、しかし結果は同じだ。

「よく、わかつたよ。あなたに何があつて、今みたいになつちやつたのか。でも、その上で、言わせてほしい」

どうしちやつたかな、と思うアヴァターラであるが、答えは結局直接聞けるようだ。

それを、少しだけ楽しみにしながら、アヴァターラは待ち。

「今のあなたは、人の事なんて愛してない。あなたが愛しているのは『神様になるかもしれない可能性』だけなんだね」

「……………」

その答えに、沈黙した。

何を言っているのか、到底理解できなかった。その言葉に、頭の中が一瞬、凍り付く。

「……うーん、なにをいつているのか、よくわからないが」

感情の欠けた声で、アヴァターラはのんびりと言葉を繋げ。

「俺の信仰を否定されるのは、ちよつと気に入らないかな」

その体から、怪物が生え即座にキャロルへと襲い掛かる。

本当なら、もつと時間を稼げたのかもしれない。でも、言わずにはいられなかった。

やっぱり、まだまだだなあ。心の中で、少しだけ嘆きながら。でも、間違っている、と自分を否定する事は無く。

キャロルは、己の盾を構える。そして。

「行くよっ！」

襲い来た怪物の一本、その襲い来る剣を盾で受け流し、地面に叩き伏せた。

「……おや、良い動きだ」

賞賛の言葉と共に、キャロルへと襲い来る何本もの怪物と、その携える無数の刃。

それは、数秒後の惨劇の未来を予見させるが、しかし。

「あれ」

アヴァターラの顔に、ごく僅かな疑問が浮かぶ。

怪物の刃は、キャロルの盾へと突き立った。正面から一斉に向かったとは言え、巧みに体を隠しその全てを盾で防ぎ切った。なるほど確かに上手な防御術と言わざるを得ないだろう。だが問題はそこでは無い。

攻撃によって僅かに欠けた盾が、正確には盾の前面に構成されたもう一つの盾が、徐々に元通りに修復されていく。

——正面から押し切るのは少し難しいかな？

アヴァターラが作戦を変えようと末端の怪物を動かすが、その動きよりもキャロルの動作の方が一手、早かった。

キャロルの側面を取ろうとした怪物の一本が、盾で受け流され、滑る形であらぬ方向を向いてしまう。

その隙を見逃さず、キャロルは前進しアヴァターラの本体へと肉薄する。

進路を怪物の一匹が塞ぐが、しかしそれは再び、力任せに、しかし致死のものでは無い、抑え込むような形で床に組み伏せられる。

「……全く、何が何だか知らないけれど厄介な」

αMO手術と、さらに加えて宿す何種もの生物の複合体。それを携えた、ニュートンの一族の強者。戦力としては幹部搭乗員にも匹敵するであろう怪物相手に、キャロルは一切退いてはいなかった。

それは、キャロルの辿った道を表すが如き、その身に宿す生物と装備、三種類に加えて彼女自身が磨き上げた技能が合わさった結果のものであった。

巧みに盾を操り、怪物たちを捌いていく。

それは、他の何でもない、彼女本人が鍛え上げた技。警察組織、SWATの候補生としての制圧術。

誰かを守りたいという想いから、警察官になって、その技術を高めてきた。自分でも自覚していない内に、自分は強いから弱い人達を守ってあげようなんて傲慢になってしまっていて、UNASAにやって来た。

それだけであれば、力負けしていただろう。絶対的な筋力は決して高くない環形動物の複合型。だが、それでもMO手術を受けている時点で常人を上回る能力を得ているのは事実だ。

しかし。

キャロルの盾は、ただの盾では無かった。その先には結晶の盾が構成され、執拗な攻撃にも決して崩れない。

よく見ると純粹に透明な結晶では無く、何かの屑のようなものが混じっている事が伺える。

さらには、反撃に振るうその一撃は、怪物の力を上回る。

でも、強い生き物は何も適合しなくて、雑草と呼ばれるものしか無かった。悔しくて、泣いている時に決意を問われて。改めて、自分の覚悟を問い直して。自分は決意に酔っていたのだと恥ずかしくなつて。

それでも、変えられない想いがあるのだと、譲れないと言い放った。

「絶対に、ここで止める！ 皆を守ってみせる！」

それが、彼女がここに今立っている、変えられない生生き態様なのだから。

キャロル・ラヴロック

国籍：アメリカ合衆国

23歳 女

168cm  
60kg

『アークランキング』15位 (マーズランキング9位相当)

MO手術 植物型

“ツノゼミ累乗術式”

MO手術ver『Hyde』

“昆虫型”

“日本固有種”

シモバシラ

氷華の乙女

&

生命の涙、開花。

アタシが一人で食い止めます。

そう言った時の島原さんの困惑を思い出す。

相手の強さは、一度戦ってよくわかった。

二人で同時に戦って、それでも勝てない相手。

それに一人で挑むなんて、きつとアタシが聞いてもどうかしてるんじゃないか、と思っちゃうかもしれない。

……でも、そうするのが、最善だと考えたから。

「えーっと、たぶん、アタシの事、見てて危なっかしいとか、甘すぎる、とか思われてるかもしれません。島原さんみたいに、その」

「~~×~~を前提とした戦闘をしていないから、ですか」

「いい、いえ、責めてるわけじゃないんです！」



島原さんの言葉に、慌ててフォローを入れる。

それが間違っている、とは口が裂けても言えなかった。きっと島原さんもあの人なりにアタシに近い思いから、優先順位を付けてその手段を取っているのだろうから。

「わかっていきますよ。……確かに、そう考えてしまう時があるのは否定しません。でも、……それが、貴女の信念、というものなのでしよう」

大人だなあ。そんな風に思ってしまう。実際は島原さんの方が一つ年下なんだけど。

「……確かに、状況としてはそれが一番です。自分も理屈ではこう動く方がいいのかもしれない、と考えています。だがラヴロツクさん、他ならぬ貴女の命が、危ない」

それは偽れない事実だった。相手はアタシよりもずっと強くて、楽勝です、なんてとても言えない。

でも、自分よりも優先したいものがあるから。

「いえ、いいんです。だから、島原さん」

だからアタシは、今回のこの作戦を提案したんだ。

「アタシが止めている間に、市民の皆さんへの救援を、お願いします」アタシが危なっかしくて心配なら、早く皆さんを助けて、こっちの方に助けに来てください。

そんな冗談で、少しでも心に残る怖さを、吹き払って。

「やああッー」

盾と盾が激突し、その結果として怪物が吹き飛ばされる。

傷一つ無い盾。仮に傷ついても元通りになる盾。それはキャロルの手術ベースと専用装備が生み出しているものだ。

”シモバシラ”。日本原産のこの植物は、本来であればアネックス、裏アネックス、アーク計画の上位ランカーが持つような強力な手術ベースでは決していない。

目を引く美しさも、周囲を恐れさせる毒も、邪魔者になる繁殖力も持たない、凡庸な植物である。

だが、とある特徴を持っている。それは、二度花を咲かせる、というものである。

一度目は、白色の、儂いけれど他に埋もれてしまいそうな小さな花を。

そして二度目は、冬になつても活動し続ける根が水を送り、枯れた茎から花開く、氷の華<sup>しもばしら</sup>を。

その特徴を示すかのように与えられた彼女の専用装備が、氷の盾を構成する背に背負った装置だ。

対テラフォーマー過冷却式パイクリート生成装置「アイス・エイジ」。

パイクリート。それは、簡潔に言えばおが屑を混ぜ込んだ氷である。

0℃以下でも凍っていない状態の水『過冷却水』を保持するこの装備と、キャロルの手術ベースであるシモバシラの植物片を組み合わせ、このパイクリートを形成する事を可能としている。

銃弾すら弾き返すそれは、元々航空母艦の装甲材として用いるために研究されていたと知れば、その強度にも納得がいく事だろう。

これを武器として扱いやすいように加工できるのが、彼女のもう一つの専用装備である。

対テラフォーマー凍結式バリスティックシールド『ハボクツク』。

タライのような形状をしているそれを器として過冷却水と植物片を混合したパイクリートを生成する事により、何度も使用できる強固な氷の盾が完成する。

……しかし、ここで疑問に思わないだろうか？

バリスティックシールドに、氷の盾。このような重量のある武器兼防具を、いくら警察官として鍛えているからと言って、植物型を手術

ベースとしている人間が軽々と扱えるものかと。そのような量の水を、どこに置いておくのだと。

それに答えるのが、キャロルのもう一つの手術ベースだ。

”ミッツボアリ”。体に水を貯える生物であれば。力の強い、アリであれば。

その問題は全て解決だ……などと、簡単には言えないだろう。

MO手術のベースは、通常一人につき一つ。αMO手術における例外などはあるが、こちらは前提となる成功率が低すぎる。

しかし、アーク計画に携わる天才、クロード・ヴァレンシユタインはそれに異を唱え、あらたな術式を開発した。

それが、MO手術の被術者であれば誰もが身に宿している『ツノゼミ』に他の生物を累乗する事だった。

その特性として、ツノゼミをクッションとして挟んでいる事により、必ずしも被験者に適合していなくても良い、という利点が挙げられる。

利点だけを上げれば華々しい、しかし実際には欠点や制限もある技術であるが、有用な生物に適合しなかったキャロルにとっては、天啓が如き技術だった。

怪物がまた一匹、刃と盾を失い組み伏せられる。

それは即座に再生するが、身に受けたダメージ自体は残るのか、動きが鈍くなる。

互いの距離は一定だ。キャロルは巧みな技で怪物を捌くが、一方でアヴァターラもまた距離を詰めさせない。

「……」

アヴァターラの表情から、微かに余裕が消える。

おかしい。何故だ。何故、未だ耐え続ける？

連戦によりアヴァターラも先の戦闘よりは弱体化している。

αMOの機能維持のために、再生の為のストックをいくらかつぎ込んでいる。

だが、それを差し引いても戦局が思うように傾かない。

キャロルの動きは一般人よりも遥かに洗練されてはいるが、それでも歴戦の軍人などと比べては見劣りする。

キャロルと自身の生み出した使徒との戦い、その様子を観察し。

「……ああ」

剛大とキャロル、その違いを、理解する。

叩き付ける。剣と盾を壊す。抑え込む。キャロルは怪物にこうして対処している。

それが、剛大との明らかかな差異だった。

剛大は、毒で、拳で、怪物を殺す事で対処していたのだ。

だが、キャロルはあくまで制圧している。

呪いが、ばら撒かれない。

普通であれば、相手を殺さない、というその志はこのような戦闘においては甘い、と唾棄されて当然のものだろう。

特に、裏社会で人生の半分程を過ごしたアヴァターラからしてみれば、お人よしとしか映らない。

だが、だからこそ体液から揮発するギボシイソメの呪い、ネライストキシンを最低限しか放出させない。

これは、いくつもの偶然が重なった結果の、ごく僅かな優位でしかない。

アヴァターラが万全の状態であれば、その身から生える怪物の量は制圧、で何とかできるようなものではない。

軽いヒントのようなものは出したが、キャロルが体液から放出される麻痺毒、という原理を理解した上で対処していたわけでもない。

「全く、厄介な——」

盾と剣を再生する隙にキャロルが突貫をかけてくる。甘い。焦り過ぎだ。

自身が取る事のできる戦闘手段は、それだけでは無い。  
アヴァターラは奥の手を用いようとして。

「……一つだけ、聞かせて欲しいかな」  
「……………」

キャロルに向けて、言葉を発すると同時に攻撃の手を止める。  
キャロルもまた疲労が溜まっているのか生真面目なのか、アヴァ  
ターラが手を止めたのと同時に足を止める。

本来であれば、隙を見せたキャロルに対し容赦無く攻撃を浴びせる  
べきであるが、アヴァターラの中にはキャロルに先ほど突きつけられ  
た言葉の事で尋ねたい事があったのだ。

「君は、俺が人間を愛していない、と言ったけど、それは何故かな？」  
意味が分からない、と一度は気にも留めなかった言葉。それが今に  
なって、じわじわと疑念へと変ずる。

自分と似ている、と評した彼女がそう考えたのならば、そこには何  
か意味があったのではないかと。

「さっきの話を聞いて、思ったよ。あなたは、『救う』って言ってたけ  
ど……可哀想だから、って言ってたけど……きっと、諦めただけなん  
だって」

「諦めた……………」

「本当に助けてあげる事が、救ってあげる事が、できなかつたから。仕  
方なく、『救う』なんて誤魔化してるだけなんだって。死んだ事を救わ  
れた、って思いこむようにして……誤魔化すために殺す事を愛して  
る、なんて言えないとアタシは思う」

アヴァターラはその言葉に、しばし無言で考え込む。さて、彼女は  
勘違いをしているのではないかと。

自分はそんな事など、一度も考えた事は無いと――

「たぶん、上手く説明できてないと思うから、一つだけ、質問を質問で

返させてほしい」

少し謙遜した、しかし微かな確信を持っている、という調子のキャロルのその目にアヴァターラは自身が優位であるにも関わらず、居心地の悪い感触を覚え。

「今、あなたが捨てられていた街の子どもの皆がここにいたとして、あなたは『救う』とか『試す』とか、する？」

「……………」  
そして、今度こそ言葉を失う。

あの子達が、ここに。ああ、哀れな子達だった。『救って』、あげなくっては。もしかしたら、今改めて見れば神の卵の資格がある子がいたかもしれない。『試練を与えなくては』。…………『救う』？ あの子達を、俺に本をせがんできた、帰った時には一斉に纏わりついてきた、あの子たちを。一人一人。使徒の剣で刺して？ 俺自身が首を絞めて？ あれ、なん、で、あの子達は、あれ、あれ、『救わ』なくちゃ、いけないのに、おれは、あの子達を救ってあげる事ができなくて。みんな、しんでしまつて——

「ツーンげ え あ あ」

愕然とした表情と共に、胃液を床へと吐き出すアヴァターラを、キャロルは痛ましい表情で見つめる。

「…………ごめんね」

そして、一直線に、そのアリの筋力で強化された脚で本体へと向けて、駆ける。

動揺しながらも、しかしニュートンの血族、その上で裏社会でのサバイバルで鍛え上げられたその反応は俊敏だった。

前方に盾を構え、無防備なキャロルの背に、無数に剣が襲い掛かる。

「な——」

しかし、その剣は弾かれた。先の氷の盾に当たった時と同じ感触を剣に与え。

アヴァターラからは確認できないが、その背には分厚い氷の壁が現れていたのだ。

さらには、背以外にも全身を、氷の壁が覆っていく。

「これが、君の切り札か」

憔悴しながら、だが未だ目に暗い光を宿すアヴァターラは、怪物の剣を跳ね除けて突撃するキャロルに、しかしそれに対しては焦っていないかった。

大量の水分を消費している。恐らく、次は使えない。使えないだけでは無く、脱水症状を起こしてまともに戦う事もできなくなるかもしれない。

これで決める、という腹積もりなのだろう。……だが、甘い。

「あつ、ぐっ!？」

キャロルが、苦悶の声を上げる。

怪物の、盾を砕かれて何も持っていない右腕。その手が、皮膚ごと、まるでバナナの皮を剥いたかのようにべろりとめくれ上がったのだ。腕の中から姿を現したのは、肉でできた袋のような醜悪な物体だった。それも、先端に四本の牙が付いた。

この牙がキャロルの左肩に、氷の盾を貫通して深々と突き刺さる。

それは、アヴァターラがこれまで戦闘に用いていなかった、最後の一種だった。

”グリセラ・デイブランチャー”。和名ではチロリ、と呼ばれる生物の一種であるそれは、可愛い名刺とはかけ離れた生態と姿をしている。口から伸びる袋状の吻、その先端に備わった牙は、ただの生物の摂食器官では無い。

アタカマイトと呼ばれる銅を主成分としたバイオミネラルで構成された、極めて高い摩耗耐性と強度を誇る牙。さらには、その成分はそこから獲物に流し込む毒、その触媒としての機能を果たしているとも考えられている。

オリアンヌの鎧さえ貫いた切り札が、キャロルへと牙を剥く。

「……君はよくやったよ。……もう、諦めて眠るといい」

足が鈍るだろうキャロルに、怪物たちが殺到する。常にアヴァターラがもしもに備えて身の回りに置いておく護衛の怪物すら差し向けて。一刻も早く終わらせる、という意味と共に。

「!？」

しかし、彼の想定から外れ、肩の傷、加えて毒による激痛を顧みることすらせずに全力で駆け続けるキャロルはその包囲網を突破した。

そして、アヴァターラの本体へと、今度こそ迫り着き、盾を振るい。

「舐めるな」

瞬間、アヴァターラの姿はキャロルの眼前から消える。

相手の視線誘導を行った、退避に用いる歩法。

「……そこッ！」

そんな、消えたアヴァターラに対し、キャロルは自身から見て左に向け盾を持ち上げ、勢いよく叩きつける。

床の埃が一齐に舞い上がると同時に空を切る音。

「ッ!？」

そこには、咄嗟に飛び退いたアヴァターラの姿があった。そして、キャロルもこちらから来る、と見当を付けていたが故に盾を振るつただのだ。

だからこそ、次いでの一撃が繰り出せる。

「がつー!」



空に打ち上げるように前のめりに振り上げられた盾がアヴァターラの顎を砕く。

それでもなお、態勢を立て直そうとするアヴァターラだったが、しかし。

「……………」

脳震盪により脳が揺れ、知覚が上手く巡らせられない。

頭を破壊されそれを再生するだけならば、どうとでもなった。だが、思うように動けない、この状況は。

ふらりと体が揺れ、いや背後に飛び退くくらいは、と判断し、アヴァターラはステップを切ろうとし。

「……………」

彼の足元とその周囲は、比較的狭い範囲ではあったものの、崩落した。

地下の大穴、老朽化していた足元。重量級の一撃。偶然なのか、狙ったのか、わからないが。

……そうか。これが、俺の結末か。

その奈落に、彼は飲み込まれ――

「く……………」

――なかった。

浮遊感を失ったアヴァターラは代わりに腕を掴まれ吊り下げられている感覚を覚える。

上を見上げると、そこには穴の淵で這いつくばり、右手で踏ん張り左手でアヴァターラの手を掴むキャロル。

「何を、しているのかな」

心からの疑問に、アヴァターラは思わず呟く。

何故、自分をどうにか助けようなどとしているのか。心底理解がで

きなかった。

彼女も大きく弱っているのは明らかで、このままでは共倒れに落下してしまう。

「……言った、でしょ……？　逮捕、するために来た……って」

「……ああ」

キャロルの言葉には納得できなかったが、そんな事を言っていたっけな、とアヴァターラは返事をする。

「……何故、俺のような人間まで助けようか？」

望んだ答えとは違ったため、アヴァターラはもう一度、意味を改めその質問を繰り返す。

脳は揺れ、喋るのもやつとである。

「あなたは、罪を償うべきだと、思ったから。それに、ちよつと責任も感じてるんだ……アタシはまだ子どもだったけど、もつと力があつたり、頑張つたりできたなら、あなたとあなたがお世話してた、って皆も、助けられたんじゃないかって。今この瞬間に苦しんでる人も、守れるんじゃないか、って」

キャロルの、見るからに表情に元気が無い、やはり脱水症状が出ているのだろう、力もあまり入っていない事が伝わる腕。しかし、これだけは伝えたいのだと、声だけは何とか振り絞る。

「……ああ……君、もしかして本物の神の卵だったりするのかな？」

半分、冗談で。もう半分は、本心で。アヴァターラは、弱弱しく、キャロルの目を見つめる。

君みたいな大人が、あの時にあの場に居たのだとしたら。あの子達、俺が辿つた道は、何か違ったのだろうか。そんな事を、考えながら。

同時に、守ろうとしてくれる彼女に対してそう思う自分に、神などという完璧な存在は、結局自分が継いだ都合のいい偶像だったんだ、と自嘲しながら。

「ううん。アタシはまだまだ全然ダメで、神様、なんてすごいものはなれそうにないし……それに、アタシは、大切な友達とか、かけがえのない友人がこれ以上傷つかないように……」

キャロルの反応に困った言葉に、真面目だなこの子、とアヴァターラは微かに頬を緩め。

「そう、見守ってやるーみたいな神様じゃなくて、同じ人間として、対等な仲間として、守りたいんだ」

その締め言葉で、目を見開いた。そして、その目は徐々に、眩しいものを見るかのように、細められる。

「……火星の悪魔を初めとして、白衣の狂人や神への挑戦者や槍の王、英雄のなり損ない……君の前には、これからも様々な困難や邪悪が待ち受けていると思う。それでも、君は進み続けるのかい？」

そこで、アヴァターラは頬から笑みを消す。そこには、邪教の枢機卿と呼ぶにはあまりにも普通の、ただの一人の聖職者の顔があった。

「勿論。どうなるかはわからないけど、最期まで皆と一緒に」

そんなアヴァターラにキャロルは微笑む。伝わって来る腕の震えからして、随分無茶をしているのだろう。引き上げられるなら、こんな問答をするまでもなくとつくにしているに違いない。

「……キャロル・ラヴロック。俺なんか祈られても、きつと迷惑だろうけど……ヒトの子よ、どうか、君の行く末に——」

ああ、名残惜しい。そう、目の前の、これからも歩み続けていく、人間の姿を、初めて曇りを取り払って見たような気がして。

「――穏やかな青空が広がっていますように」

キャロルの握る手を、振り払った。

浮遊感に身を任せながら、アヴアターラはキャロルに謝罪をする。罪を償う、というのを君の望む形でできないのが残念だ、と。

――同じ人間として、対等な仲間として、守りたいんだ

同時に、キャロルの最後の言葉を、何度も、何度も、心の中で繰り返す。

まるで、極上の美酒の最後の一滴を惜しみ口の中でいつまでも転がすかのように。

ああ、そうか。俺は、これまでずっと枢機卿なんて偉そうな立場にしながら、こんな簡単な事に気付かなかったのか、と自分の不甲斐なさに、笑いながら呆れて。

全くもう、本当に。

「……人でもいい。人でも良かったんだ」

――何故、神にしか人は救えないと、思いこんでいたのだからか――？

大罪人の末路、と呼ぶには、あまりにも安らかに、穏やかに。  
彼の魂は、その肉体と共に、奈落の底に砕けて、消えた。

# Mind Game：第10話 暗中放蕩

——フランス エリゼ宮殿 廊下

「取り急ぎ再編成を進めろ！ 市民の救助に出した隊も最低限以外は呼び戻せ！」

数人の兵士が通路を慌ただしく走り回る。

非常事態、としか言いようが無かった。

今現在このパリ、大統領官邸周辺に起こっている事案そのものが非常事態である事は言うまでも無いのだが、今このエリゼ宮殿の状態はその異常事態の中でも異常事態、としか言えない。

簡易的な弔いすらできずに廊下の端に寄せられただけの損壊した死体の数々が、その状況を簡潔に語っていた。

——宮殿の防衛部隊の壊滅。

市民の避難と誘導。異形の怪物の掃討。彼らが現在対処すべき問題は多いが、最も重要なのが臨時の司令部でもあるこの場所の防衛だ。

だが、フランスという一国の心臓と呼ぶべきこの場所は、その防衛機能を喪失していた。

万全の防備を整えていた、数十の精兵。だが、彼らはもう既にこの世にはいない。

先に侵入した、MO手術を受けていたカルト教団の刺客との交戦によって。

たった二人という数で熟練の兵士たちを皆殺しにしたその刺客は今既に端に寄せられた屍の山に混じっている。

しかし、それを成した戦士もまた、この場を既に離れていた。

「そこのお前！」

「は！」

そんな中、兵士の一人、臨時で周囲に指示を出していた彼は緊張を隠せない様子で歩いている味方の姿を見つけた。

混乱する状況のさ中であれば、たとえ軍人であっても平静を失ってしまっても決しておかしくは無いだろう。それも、いくら訓練過程を潜り抜けたとはいえ実際に命の奪い合いに直面している新兵であれば、なおさら。

「気持ちにはわかるが焦るな。大丈夫だ、化物の数は減ってきている。我々はあと少しだけ、増援の到着まで警戒を続ければいい」

やはり新兵のようだ。どこかぎこちない動きで敬礼をした兵士の一人を元氣付けるように、彼は肩をぽんと叩く。

こくと一度頷いた兵士に同じく頷きを返し、背を向け。

「……!?」

瞬間、彼の手足に、何かが巻き付いた。

「……ごめんなさい」

謝罪の言葉と共に、女性用トイレの個室にその体が放り捨てられ、扉が閉められる。

言葉を発したのは、先ほどの新兵と思われた兵士。

だが、その声色は見た目通りの青年らしいものでは無く、少女のそれだった。

まるで普通の人間では無い証明であるかのように腰から生えるのは、うねうねと動く触手だ。

「……大丈夫だよ、リースちゃん。私も、そうしてたかもしれない」

「……染さん」

謝罪に答えたのは、空間だった。

……否。空間から溶け出すように、人間が姿を現す。

「急ぐ？」

ガスマスクを付けた不審者とか思えないスタイルの雅？。

彼女は優しく慰めるように、兵士……では無く、それに扮している静花に声をかける。

こくん、と一度頷く事が、その答えだった。

同時に。

「んー！ んんー！」

くぐもった、耳をよく澄まさないと聞こえない必死さの籠った声。

それは、トイレの個室の中から響いてくる。

「自分で解く事はできないだろうし……問題は無いと思うよ？」

「……でも、本当なら……殺さないと、いけないのに」

結論から言えば、彼、変装した静花に声をかけた兵士は命を奪われずに拘束されていた。

別に、暇が無かったわけでもない。彼を生かした事に戦術として合理的な理由があるわけでもない。

「行きましょう」

理由を一言で纏めてしまえば、良く言えば優しさ。悪く言えば、ただの甘え、と呼べるものだった。

敵を殺したくない。そんな、兵士としては失格ものの。

二人に下された命令はそれこそ、標的の殺害だ。

中国という国家の為、ゲガルド家の為。自身が属する集団の為、エドガー・ド・デカルトを討ち取る。

その任を遂行する事に、二人は躊躇しているわけでは無い。



仮にエドガーが首を差し出したとしたら、即座にそれを切り落とす事ができる。

軍人として、ゲガルドという家系に生まれた人間として、命を奪う、その行為自体を拒絶する程の忌避感があるわけでは無い。

だが、目の前の、必ずしもそうする必要の無い対象を、その人間の態度を見て、躊躇ってしまった。

国家の危機に浮足立った新兵を怒りの感情のままに叱咤するわけでもなく、その緊張を和らげようとした。

きつとこの人は優しい人なんだろう。そう考えると、首に刃を突き立てるその手が鈍ってしまったのだ。

本当にこれで良かったのか。いや、悪手なのだろう。

わかっているのだけれど。それでも、割り切れないものがある。

生半可な覚悟などでは遂行できない任務。

だが、その遂行の全てにおいて冷酷になりきれない性分。

それを抱えながら、二人は再びその身を隠し、大統領執務室への道を進み始めた。

「ぬうんっ！」

力の籠った声と共に振るわれる鉄槌が、人間の頭部に直撃する。

夏の砂浜で棒を振り下ろされた西瓜スイカが如く、威力に耐えられず砕け散り、赤とピンクの入り混じった内容物を撒き散らす。

「おやおや。単純極まりないですねえ」

だが、それを受け絶命したはずの対象は、破壊されたはずの頭部、その口から挑発の言葉を吐き、平然と立っている。

「……忌々しい……！」

舌打ちをしながら、オリアンヌは次いでの一撃を放つ。

元々の腕力に加わり、MO手術によって得た力による重量と威力の乗った剛腕。

そこに付随した瘤状の鈍器が、容赦無くアレクシアの体を打ち据える。

「ああ、何と痛い。全く、これだから乱暴者は困ります」

胴体に直撃し、何本もの骨を砕く音。

内臓もいくつか潰れている事だろう。

しかし、それでさえも決定打にはならなかった。

敵はただの強力な手術ベースを持つているだけでは無い。

体術に関しても一定の覚えがある。

本来であれば、普通の人間であればこの一撃を受ければ絶命するはずなのだ。

それは内臓がいくつも潰れば人間は死ぬ、という生物として当たり前の話では無く、MO手術被術者の急所であるM<sup>モザイクオーガン</sup>Oに関する事柄だ。

生物の能力を得た細胞が高速で再生を行う事こそMO能力においては不思議な事では無い。

だが、手術を受けた本人の細胞がそうであっても、MOに関しては話は別である。

それは、染めた髪の色が新たに生えてくる髪には反映されないように。MOそのものを再生する事はそもそも不可能なのである。

極めて強力な再生能力を持つ一部のベースや、出芽のような特殊な性質を持つ生物ならばもしくは、という部分ではあるのだが、少なくともMOを破壊されて時間をかけずして身体に何の異常も無く再生する、というのはそれ自体が異常そのものである。

だとすれば、考えられる理由はオリアンヌが思いつくものとしては一つしか無い。

「巧みに急所が損傷しないように避けるだけの体捌きか」

オリアンヌの眩きに、アレクシアは曖昧に笑みを返すだけだ。

「ほらほら、どうしたんですかあ？ もつと貴方の力を見せてくださいよ。そんな事じゃ誰も守れませんよ？」

次いで露骨な挑発の言葉に、しかしオリアンヌは激情に感情を攫われる事無くアレクシアを見る。

先ほどから一方的に攻撃を受けているが、反撃に転じてくる様子は無し。

単純にこちらの体皮の鎧を抜けるだけの攻撃能力が無い生物か？

それとも、他に目的があるのか？

大振りの一撃を身を屈めて回避し、アレクシアは一度距離を置こうとするオリアンヌへと接近する。

「貴様ら、何が目的だ？」

「神の卵の発見……と、私は愚考しますが、お偉い方々の考えは理解しかねますね」

オリアンヌの質問に対し、アレクシアは少し不満気に目を細める。

神の卵。オリアンヌがエドガーから渡された資料で知った、ニュートンの一族の分家の一つ。

彼らの最終目標が、人間の中から神に至る可能性を見つける事である事も同時に資料には書かれていた。

「成程。その神の卵の場所なら知っているが」

「……はい？」

何だ、そんな簡単な、幼子にもわかるような答えでこのようなテロを行ったのか。

無辜の民を、このフランスを守る同士達に対して悪辣な虐殺を行ったというのか。

オリアンヌの内心はこのテロリスト達に対する怒りが燃え盛ってはいたが、同時に呆れがそこに加わる。

オリアンヌの言葉が思ってもみない内容だったのだろう。アレクシアは目を丸くし、動きを止める。

「ほう、ほうほう。それはまた、貴方がご存じとは意外ですねえ。教えていただけるなら、話は早い」

「……貴様ら、本当にエドガー様と同じ一族の人間なのか？ 私に人言えた事では無いが、あまりにも愚鈍だな」

「デカルト家と比べれば随分と血が薄いもので……ご教授いただきましたいです」

オリアンヌの言葉に悪意を持って発する意図は無く、それはただの本心だった。心底呆れた表情からの言葉なため、挑発にしかならないが。

対するアレクシアは挑発を返される事には慣れているのか、少しの興味を伴って返答し――

「いずれ神に至る存在。それは……エドガー様以外に存在などしないだろう？」

「……はい？」

――やたら早口で返ってきた答えに、思わず疑問形で返した。

アレクシアが知らなかったのは、オリアンヌという人間の内心である。

フランス軍の連隊長の一人に猪突猛進な忠義に厚い人間がいる。その程度の情報は聞いていたものの、所詮は一族の人間でもない夕ダの人間でしょう、と気にも留めなかった。

今回の任務で一族の外の人間で警戒するべきは、デカルトが飼っている拳法使いの老人と眼鏡の暗殺者くらいだろう。

それがアレクシアの認識である。

加えて、アヴァターラとの交戦の話から、それほどでもない、という印象は強くなったばかりで、その存在は視野の外だった。

「いやいや、エドガー様は違うんですって。一族の人間は神には——」  
「エドガー様を侮辱するのか貴様ア!!」

秒と経たず消し飛ぶアレクシアの頭。

やべえこいつ心理戦じゃどうにもならないタイプだと察し頭部を再生したアレクシアは背後に跳び、同時に頭部から生える触手によってオリアンヌを拘束しようとする。

「全く、世話をかけさせないでくださいよ……その神様ももうすぐ死んじやいますし」

アヴァターラが生み出した怪物たちの対処に当たっている兵士が事を終わらせてこちらに仕掛けてくるまで目いっぱい時間を稼ごうと思っていたが、仕方がない。

とつとと麻痺毒で終わらせてやろう。

「そんなものは効かん！」

「……なっ」

一斉に襲い掛かった、毒の触手たち。

しかしそれはオリアンヌの体に接触したにも関わらず、何の効果も及ぼさない。

……体皮が分厚すぎて刺胞が通らない。

一瞬で分析し、アレクシアは一步下がる。

問題無い。相手にも決定打は無い。

高い再生能力に対する対処方の一つが、何度も殺し再生能力を削り切る事だが、そのための手段として、打撃よりも切断、が有効となる。

内臓や骨を砕いてもまだ体と繋がっていた場合、その破壊された部分を材料に再構築する形で再生し、体への負担は小さいものとなる。一方で完全に体から切り離してしまえば、それを再生するにはその部分の骨肉まるまるを生成する栄養が必要となる。

破壊力によっては切断という手段が難しい鎧の上からでも相手の

体を損傷させられる打撃にも利点はあるが、その真逆、軟ではあるが極めて強力な再生能力を誇るアレクシアのベースにオリアンヌの攻撃は通用しない。

これまで通り戦いを長引かせればいいだけだ。  
そうすれば、事は終わる。

——エドガーの死という結果によって。

「アポリエールの使いよ、あまり私を舐めてもらっては困る」

「全く、面倒な……でも、付き合っただけです。さあ、続け——」

オリアンヌが懐を探り、『薬』を取り出す。

投薬量を増やして強化するつもりか。無駄だ、自分の再生能力を貫けはしない。そう、アレクシアは内心でほくそ笑む。しかし。

「変 H O S I S — 原 M E T A 始 M O R

「……はい!?!」

オリアンヌが取り出したそれと同時に発した言葉に、思わず声を上げてしまう。

取り出したのは、注射器だった。即ち、昆虫型の『薬』。

あの鎧は明らかに昆虫のそれでは無い。節足動物の甲殻というよりは、分厚い皮膚の哺乳類や爬虫類の質感に近いものだ。

だというのに、注射器?  
さらには、原始変態?

馬鹿な。何を。奴の手術ベースはそもそもがESMO手術のものだったと聞く。これまで発現していたこれが、そのESMO手術のものでは無いのか?

「……我が身の全て、主君に捧げたもの。その為に研鑽を連ねる事など、至極当然」

それは、狂信に等しい忠義が可能とした判断だった。

同じく狂った信仰に身を捧げるアレクシアが、まさかそんな事をするはずないと可能性を選択肢から外す程の。

不安定な研究段階のMO手術を、重ねて施す、などという。

「貴様は先程から私を足止めしようとしていた。つまりは……エドガー様にネズミを送り込んだ、という事だな？」

「！」

何故アレクシアは自分を足止めしようとしているのか。

市民の被害を広げる為というには、命を張ってまで自分を足止めしようとするのは理由として弱い。

少しの足止めで大きな成果が得られるものは、今の戦況で考えれば何か？

導き出された答えは至極単純で、しかしオリアンヌの中の最も強い感情を煮え滾らせるものに他ならなかった。

変態を終えたオリアンヌの右腕から、軽く湾曲した長い昆虫の牙と思わしき剣が一本、生える。

大きな変化はその程度だ。表面上から見える外見にもそれ以上の差異は無い。

「貴様らの事など知った事では無いが……これだけは覚えておけ、アポリエールの小娘」

切断を可能とする武器。このままでは不味いとアレクシアは咄嗟に、アヴァターラの生み出した怪物の死骸、人間の胴体を拾い上げ盾として構える。

時間としては十分だろう。自分はこの辺りで退くとしよう。肉の盾を構え、オリアンヌがその剣を振るうのに合わせるため、それが振るわれるタイミングを見計らう。

「……？」

そこで、アレクシアは何故か自分の体が宙に浮く感覚を感じ取った。

突然の違和感に、しかしニュートンの一族の感覚は目の前の敵から目を離すまい、とオリアンヌへと再度意識を集中する。

「……あれ？」

不思議そうに首をかしげるアレクシア。オリアンヌの剣は、既に振り抜かれていたのだ。

それを認識した瞬間、視界が独りでに斜めに傾く。浮遊感は止まない。

どうした、体に力が入らない。アレクシアは己の体を、見て。

「……え？」

己の上半身と下半身が両断されている事に、初めて気付いた。何が起こった、え、どうして、なんで。

再び、オリアンヌが剣を構える。

まずい、まずい！

アレクシアの意識が消し飛ぶ、最後に映ったもの。

「……神と呼べる御方は、エドガー様以外に存在などしないのだと」

それは、生々しく、所々が鈍い銀の反射光を放つオリアンヌの剣だった。



「この株を遠心分離に。終わったら上澄みを除去し分析に回してくれ  
たまえ」

「培養は終わったかね？ あとどれくらいかかる？」

「ラットを3頭、管理部から許可をもらってきてくれ。届き次第摂取  
試験を行う」

各所に指示を飛ばしながら、ヨーゼフはその様子を観察し、眉をひそめる。

職員たちに濃い疲れの色が浮かんでいる。

現在、この研究棟は24時間休憩の時間も碌に無く稼働し続け、二日目の夜を迎えようとしていた。

とはいえ、U—N—A—S—Aがブラック企業体質というわけでは無く、この無茶な労働には相応の理由が存在していた。

それは『狂人病』のワクチンの開発。

アダム・ベイリアルによって作成された、人間をゾンビへと変質させるウイルス。

アメリカのある施設で使用が確認され、さらに広域への拡大の可能性が危惧されているそれは、ワクチンが存在しない致死性の病である。

かけ合わせられた元である『狂犬病ウイルス』と『ストーン熱ウイルス』のワクチンの情報を集め、しかしに悪意を持った改悪が施されているそれに単純なワクチンでは効果が無い事が判明し、作業は難航。

それでも現在、大まかな目途が立ち摂取試験により安全性を確かめるまで、という段階まで来たのは人間離れした御業、としか言いようが無かった。新種の病原体に対するワクチンなど、年単位での作成が基本なのに、それを三日で終わらせるなど。

全くとんでもない事だ、とヨーゼフは気密の実験室の外、閉じられた休憩室の扉を見て、その向こう側にいる人物に考えを巡らせる。クロード・ヴァレンシユタイン博士。自分と共にこのワクチン制作の指揮を執った、U—N—A—S—A所属の科学者。何やら忙しいらしくこれまでは殆ど話した事が無かったが、まさかこれほどの人物とは思ってもみなかった。

かつて、取り返す事などできない罪を犯した。

MO手術の新たな方式の開発者。

共通点はいくらかあった。だが、二人が真に意気投合したのは、虚しく後ろ向きな、しかし切実な一つの確信を共有していたからだ。

『私は、絶対に天国には行けまい』

過去を償うために、地獄に落ちる覚悟がある。未来を切り開くために、地獄を作り出す覚悟がある。

だからこそ、彼らはU—N—A—S—Aで今日も戦い続けるのだ。

「……おや」

ヴァレンシユタイン博士が休憩室から出てきた。

表情が暗い。何かあったのだろうか？

ヨーゼフの目線に気付いたクロードが、手招きをする。

周囲に明かせない内容なのだ和理解したヨーゼフは、少し休憩を取る、と周囲に告げ、気密室を出た。

「すみません、ベルトルト博士」

「一旦落ち着いていた所だ。問題は何も」

「急に申し訳ないですが、これを見ていただきたい」

胸ポケットからクロードが取り出したのは、一本の試験管だった。

中には、蜂だろうか？ 一匹の翅が生えた虫の死骸が転がっていた。

「……見た事がある生物ですか？」

「いや。私には覚えは無い」

MO手術の第一人者が二人。MO手術ベースとして有用な生物のサンプルや知識を山ほど集めている両者が、見た事も無い生物だった。

「こんな生物がいたら、我々が見落とすはずが無い」

薄翅が四枚。黒と黄色の縞模様の体。ここまではいい。

前足の片方から鎌が生えている。後ろ脚の片方からは、触角が生えていた。

「奇形の昆虫だろうな。遺伝的な異常だろうか。新種であれば素晴らしい発見だ」

生物学的には最もそれが有力であろう、という予想をヨーゼフは立てる。

蠅の仲間にそのような種は存在するため、詳しく調べれば蜂では無くその仲間で、片側にしか鎌が形成され触角の生えた遺伝的な欠損個体。もしくは新種で、同じく遺伝的な欠損が見られる個体。

だが、クロードは異なった考えを持っているようだった。

「先日、アフリカのリカバリーゾーンに墜落したロケットの話は覚えていますか？」

「……ああ」

ヨーゼフは、それを聞いて思い出す。

少し前に、そんな事があったなど。回収班が向かったようだが、フランス軍の調査隊が先行しており、中は空っぽだったと聞いたが。

「これは、その周辺で採取されたものです」

「ほう」

同時に、クロードは懐から写真を取り出す。  
それは、一枚の衛星写真だ。

「ふむ。最近の映画はよくできているな」

「……ベルトルト博士」

「……すまない。にわかには信じられなかったものでね」

暗い表情を向けるクロードに、ヨーゼフは謝罪する。

言葉通りに、そこに映っているものが信じられなかったのと、冗談でも言わないと平静を保てなさそうだったからだ。

「核兵器を落としてでも、止めるべきだった……！ 奴らの仕業だと、わかっていたのに……！」

「あまり滅多な事は言うべきでは無いが……私も同意見だよ」

普段は穏やかなクロードが絞り出すようにこんな過激な事を言うなど予想外だったが、同時にヨーゼフは状況を分析し、同じ答えを出す。何なら、今からやってもいいかもしれないと思う程に。

「裏アネックスの方に、掛け合っていたきたい。何としてでも、原因を処理しなければ」

「……ああ、勿論だ……これを放置すれば、恐らくは——」

椅子から立ち、足早に研究室を出てそれぞれが動員できる戦力に連絡をする二人。

机には、一枚だけが残される。

「——世界が滅ぶ可能性すらあり得る」

森林の中心に墜落したロケットと、その周囲の個性豊かな木々。

刀剣のようにしか見えない鋭い葉が生えたもの。  
まるで昆虫の甲殻のような固い質感が見て取れるもの。  
一本だけ、他の数倍の高さに成長しているもの。  
葉の代わりに動物の角が生えているもの。  
昆虫の脚のような形状の枝が無数に伸びているもの。

そんな、別の世界に迷い込んだとしか思えない異形の世界を映した、一枚の写真が。

M i n d   G a m e : 第10. 5話   赤き虚栄

ーアフリカ   リカバリーゾーン

珍しい晴れ空、しかし多数の木々とその葉に覆われその恩恵はあまり受けられない薄暗い熱帯雨林の中を、彼らは歩いていった。

総勢で数十人からなる軍人の集団だ。自動小銃と防弾ベスト、隊から少し離れて少数で動いている数人にはスナイパーライフルが握られ、背には麻醉銃が負われている。

彼らの胸に燦然と輝くのはトリコロールカラーのバッヂ。

フランス共和国所属である事を示す証である。

何故、このような熱帯雨林で完全武装した兵士達が動いているのか。

高温と多湿という環境で不快感と疲労が溜まり、衣服にも汗が滲み気味の悪い質感を与えている。

「……マリアン隊長。たった一人の客人を迎え入れるために、これだけの装備が必要なのですか？」

兵士の一人が、先頭を歩く男に疑問の色が濃い声で尋ねる。

それは、任務そのものへの疑問であると同時に、隊長その人が何故ここで指揮官を務めているのか、という疑問でもあった。

先頭を歩く男、マリアンはそれに曖昧な調子で頷いた。

外人部隊の一部隊員と正規軍の混成部隊。それが、今この場所を歩く軍人たちの内訳である。

統合参謀長から直々に受け取った、今回の任務。

それが、ここアフリカのリカバリーゾーンに墜落したロケットに向かい、そこに搭乗している人間をフランスに迎える事。

状況に疑問こそ何点か浮かびはするが、任務の内容を見る限りではこれだけの軍備が必要な理由は一兵士である彼には判断が付かなかった。

もしこれがかの『シド・クロムウエル』の護送、などと言うのであ

れば、納得は行くところである。

むしろ、この戦力で足りるのか？ と真逆の疑問が湧く事だろう。しかし、今回の任務に関しては、どうにもこれだけの戦力を割く理由が見当たらないのだ。

MO手術を受けた精鋭を動員し、装備も正規戦で持ち入るような大層なものばかり。

末端の兵士には明かせない情報もあるのだろうが、それでも疑問は尽きない。

「……ヴァンサン、どうだ？」

「二人、います。状況から見て目標で間違いは無いかと」

そこで、マリアンが立ち止まった事により隊全体も一度停止する。

マリアンが傍らに控えるラテン系の男、ヴァンサンに尋ねれば、彼は自身の頭から生えた角のような器官を一度撫で、微かに緊張を滲ませる声でその結果を伝えた。

『ミツクリザメ』の探知能力。

『ロレンチーニ瓶』と呼ばれる電気受容器官を用いた生体電波を探知するリーダーは、木々に遮られて見えない数十メートル先、ロケットの不時着地点周辺に一人の人間が確かに存在する事を指し示していた。

ここからは慎重に行かねばならない。マリアンは周囲の兵士、正規軍から出向してきた連中に聞かれないように、ひそひそとヴァンサンと言葉を交わす。

——大きさはどうだ。

——160cm程でしょうか。特筆する程では無いようです。

——動きは？

——ロケットの周りをゆっくりと歩き回っています。異常な動きは見られません。

どうやら、アタリを引いたようだ。

マリアンは表情に見せないながらも、心の中で安堵する。

同時に、同様の任務で命を散らせた同士達に、黙祷を捧げながら。ロケットが落ちたのは二カ所。自分達がいるここアフリカのリカバリーゾーンと、ベネズエラの熱帯雨林。

槍の一族の介入の可能性が高いベネズエラ方面にはフランス軍の精鋭部隊と共和国親衛隊長の一人が派遣されていると聞いていた。

その結果は、速報として届いている。部隊の壊滅と、その隊長の重傷。そして、彼らが相対した怪物の情報が。

3 m近い巨体に、竜か鬼を想像させるような身体的特徴。そして、その外見に違わぬ膂力。人間離れした怪物だった。

何とか命を拾った兵士の中でも正気を保っていた人間が語ったのは、モンスターパニック映画か、と言いたくなるようなにわかには信じ難い情報であった。

だが、それだけでは無い。この結果は、三つ巴で争ったものでは無かった。フランス軍と槍の一族。腕の立つ軍人とニュートンの一族が咄嗟の事態に共同戦線を張った末の、壊滅という結果なのだ。

——聞いた時にや俺達はどんな化物を捕まえてこいと思ったもんだが、こっちは普通の人間の範疇のようだ。

ここからは、声を出すな。  
ハンドサインで部隊に指示を出し、狙撃手にはそれぞれで動かせ、配置に付かせる。

木が邪魔でそこまで遠距離からの狙撃はできないが、致し方ないだろう。

ただ、普通の人間のようなだ、と内心で思っている、マリアンの中に油断などほぼ無かった。

二方面に部隊が派遣され、自分達が動員されている、という事は、即ちこちらが担当しているのも、あちらが遭遇した魔人と同格の存在であるという可能性が高い。

果たして、この戦力で捕えられるものかどうか。



彼に、慢心は無かった。最悪の事態も考慮の内であった。ただ。

それでも、微かな希望的観測をしてみまっていたのだろう。

これから相對する事になる人間が、目の前に広がる光景が、正氣のままに受け入れられるものである事に。

「……あらっ！」

標的が、ぴたりと立ち止まる。木の葉越しに姿を観察していた兵士達の中に、緊張が走った。

最初に標的を捕捉した時、目を疑ったものだ。

さあ蛇が出るか鬼が出るか。

覚悟と共に開けた空間、ロケットの不時着地点のヴァンサンの能力が告げる生体反応があるポイントを葉に隠れながら覗き込んだ時、そこにいたのは楽しそうに、興奮を抑えきれない様子でスキップをしている一人の女性だった。

年齢は二十を少し超えたくらいだろうか。美しい容姿をしている。

兎の耳を彷彿とさせる二又が長く伸びた髪飾りに、金の長髪。

その身を包むのは、胸の部分が大きく開き豊満な谷間を晒しているワインレッドのウエディングドレス。

所々にはチェス盤や帽子といったある古典文学作品をモチーフとしたかのような意匠で飾られている。

そして、ドレスの腰の左右部には林檎の芯に巻き付いた幼虫、という周りから浮いた模様が描かれていた。

この模様で、マリアンは確信を強めた。

ベネズエラ方面の怪物にも、同様の模様が見られたらしい。標的はこの女で間違い無いだろう。

一度標的から目を離し、スナイパー達に指令を出す。  
麻酔銃で眠らせて拘束する。

その指示に了承の返事が返って来たのを確認した後、マリアンは再び視線を標的に戻そうとして。

「初めまして、地球の人！ ……間違っていないかしら？ おさるさん、では無いのよね？」

興味津々、という様子の表情が、マリアンの眼前に広がっていた。

「ッ?! 総員、戦闘態勢！ 拘束を第一だ！」

木から転げ落ちるように飛び退きながら、マリアンは無言を破り全員に指示を飛ばす。

それに従い、銃口が標的へと向けられ、躊躇無く弾丸が吐き出される。

「……まあ！ 私と遊んでくださるのね！」

——アストリス・メギストス・ニュートン。それが、標的の片割れの名だと聞いていた。

ニュートンというその名は、恐らく他人の空似の類では無いだろう。

成程、謎の怪物と対を成す、ニュートンの一族か。これは厄介な。マリアンは努めて冷静を保ち、部隊単位での砲火によってアストリスの動きを封じようとする。

行動を制限して、麻酔銃の狙撃により眠らせる。

いくらニュートンの一族とは言え、体格は普通の人間と変わらない。

「一緒にスナークを探しましょう?」

アストリスが手に持っていたもの。それは、まるで宝石のような一つの飴玉だった。

この状況で栄養補給をするとは思えない。ならば、考えられる最も有力な可能性は一つ。

MO手術の能力を発現させるための『薬』だ。

これ以上動かさせるわけにはいかない。マリアンは制圧射撃の指示を、出そうとして。

その場の誰も、気付かなかった。気付かなかった。不可視不可触の風が、周囲を流れた事を。

「え!」

背後で驚く彼の部下、コゼットの声がマリアンに異常を知らせてくれた。

思わず背後を振り向く。

そこには、倒れ伏してぴくりとも動かない、兵士達。

何かの攻撃を受けた!? 動揺する中でも、マリアンは倒れ伏した仲間達の様子を見る。

痙攣等の動きは一切見られない。絶命している可能性が高い。

だが、外傷は無ければ、苦しんだ様子も見られない。そして、何よりも異常なのが。

「大丈夫かお前ら!」

「何も、ありません」

「え、何コレ、何コレ!」

冷や汗を流しながらも冷静。焦り。それぞれの反応を見せる、マリアンの元々の部下達。

フランス外人部隊の隊員達は、誰一人として何の被害も受けてはいない。

一体何をされた？ 逆に、苦しむ隙すら与えず絶命させるような何かを受けて何故我々は無事だ？ MO手術は超常の力であるが、魔法では無い。

能力の基となる生物があり、それが持つ力を何らかの形で運用した結果だ。

再び眼前に迫るアストリスの姿を見て、一体何なのか分析を試みる。

「隊長！」

頭頂から、十字架のようなものが伸びている。そして、それを中心に同心円を描くような配置で矢印のような形状の物体が複数生えている。

王冠のようだ、と何となしに思う。

しかし、ここから元の生物を判断するには情報が足りなかった。

今ここで我々が全滅しこの怪物が敵の手に渡ったとしても、対処できるだけの情報を、残さねばならない。

「オオオオ！」

例え死んだとしても、後に託せるだけのものを残す。

マリアンは変態により腕に発現した牙を振るい、アストリスに真っ向から対する。

相手はニュートンの一族。打ち合っても勝てない相手だ。

だが、能力の一端、生物の特徴の一つでも、引きずり出せれば。

自分の命を、一欠片の情報と引き換えにする決意の元、アストリスの振るうナイフ、細かに振動しているそれが自身の喉を正確に狙い放たれた事実すら傍に置き、マリアンはアストリスの腕を切り落とさんと自分の得物を振り下し。

「水くせえよ隊長！」

「ヒャアアアア!!」

アストリスの右方から、荒々しいながらもマリアンを心配する声と

共に、刃が振るわれる。

狂気じみた掛け声と共に、アストリスの左方から放たれた鋭い蹴りが、マリ안의喉を狙ったナイフを持つ右腕をかち上げる。

「オーギユスタン！ コゼット！ すまない！」

「まあ、まあまあ！ セイウチさんはいないもの！ 食べきれないわ！」

変態を追えた、連れてきた外人部隊の二人の武闘派。彼らの攻撃を横入りに受け、アストリスは思わず一步下がる。

コゼットの一撃で骨が折れたのか、右腕はだらんと力を失いぶら下がっている。見るに、再生能力は無いのだろうか？

「オラオラアアア！」

普段の大人しい様子とは打って変わった好戦的な動作で、コゼットは体勢を立て直すアストリスに向けて連撃を放つ。

羽毛に覆われた体は鳥類型のものだ。だがその凶暴性は際立っており、本人の変貌っぷりも見れば原生の鳥類では考えられない程。

甲殻型の鎧すらも剥ぎ飛ばす連撃が、見たところ硬い組織も発現している様子は無いアストリスに襲い掛かる。

三人がかりであれば、無力化できるか？

光明が少しだけ見え始めた。

姿勢を崩しているが、コゼットの一撃を受けきるだけの格闘能力はあるとみていいだろう。ならば、自分とオーギユスタンで同時にかかる。

「うふふ、素敵ね、本当に素敵よ！ ……でもね、ヴォーパルの剣はここには無いのよ？」

コゼットが、その蹴りでアストリスの頭を潰そうとした、その時。折れた様子であった右腕が、突如として動き出す。

コゼットを迎撃しようとするその姿を見て、マリアンは普通ではない、と判断する。

観察していたが、徐々に治癒している、という様子では無かった。……まるで、再生能力が無い状態から強力な再生能力が発現し一瞬で回復したかのような、そのような動きだったのだ。

やはりそれは、油断だったのだろう。腕利きの戦士が三人集まれば、ニュートンの一族といえど、制圧できる。そんな、間違っていない自信に基づいた。

彼らが違えたのは、ただ一つ。

目の前の相手が、まともなニュートンの人間などでは無かったという一点。

「……一緒に踊りましょう?」

コゼットが襲い掛かった瞬間、アストリスの右腕が、五つに開いた。指を開いた時のように、腕そのものが五分割され、別々に動き出す。

それぞれがぶるりと震えた後、異形へと変質していく。

蠅螂の鎌。

飛蝗の後ろ脚。

蟻の大顎。

蜂の毒針。

鳥の翼。

全く異なる生物たちの特徴を発現した五つの腕が、コゼットを地獄に引きずり込まんとするかのように伸びる。

鎌で捕え、脚で蹴り、大顎で引き裂き、毒針を突き立てる。一方で、鳥の翼は何の役目を負う事もなかった動かさず、細かく震えるのみ。

その乱れ打ちの初動、鎌による拘束をすんでの所で避けたコゼット

は、本能的な恐怖から思わず距離を取る。

「おいおい……！ 限度があるだろ……！」

同時に襲い掛かったオーギュスタンも、同等のものを以てお出迎えされる。

ドレスにも構わず振り上げられたアストリスの右足が五つに分割され分裂し、それぞれが全く異なる生物の全く異なる部位へと変質する。

「……」

一方のマリアンは攻撃を中断し、周囲へと目を移した。退路があるか、確認しようとしたのだ。

だが、その状況判断は、それが夢である事に気付いていない悪い夢の中にいるかのような、不可解さから来る絶望に塗りつぶされる。

周囲の森林は、もはや原型を留めてはいなかった。

ゼンマイのようなシダ植物が人間よりも大きく成長し、肩に触れた木は実の代わりに昆虫の目玉が無数に成っている。

鳥の羽が葉の代わりに一面に茂っている大樹がある。

その樹皮が、哺乳類と思しき動物の皮膚へと変わっている木がある。

心が、その周りの肉と同時に折れる音がした。

「総員……撤退だ……即座に離脱しろ！ ……俺が、殿を務める。いか、周りに一切目を向けるな」

吐きそうになるのを必死にこらえ、マリアンは三人の隊員達に撤退を伝える。

隊員達は、それを無言で受け入れた。変態し熱狂しているコゼットまでもが。

散開して離脱した三人を、アストリスは追う事はしなかった。

その興味は、マリアン一人に向いているらしい。

「化物……め」

声を絞り出し、マリアンはアストリスと向き合う。

その手足の異形は元通りとなり、元の人間そのものの姿へと戻っていた。

「ずっと運動していなかったんですもの、楽しかったわ！ さようなら、勇士になれなかった勇士さん」

名残惜しい、という感情を少しだけ見せながら、アストリスが一步、また一步と近づいてくる。

「誇り高いフランスの兵として、貴様だけはここに留めさせてもらおうぞ！」

そもそも、規格が人間と異なる何かなのだ。触れて良い存在では無かったのだ。

だが、それを後悔するには遅すぎる。

優秀な部下達は、きつとこの戦いで得た情報を持ち帰り、この化物を討ち果たしてくれることだろう。

そんな死に対する恐怖を誇りと後を託した部下への期待で塗りつぶし、マリアンはアストリスに躍りかかろうとし。

「フランス？ 今、フランスっておっしゃったの!? まあまあ、何という事でしよう！」

「……何？」

自分の士気を上げるために叫んだ一言。それが、マリアンの命脈を左右した。

「わたし、アダムおじさまからフランスかフィンランド、エドガー君かオリヴィエ君、先に会った方にお世話になるんだよ、って言われているの！ ぜひぜひ、案内してくださいな！」



怪物は、人間の情動になど左右されないものだ。いくら強く意思を持っていたとしても、それを容易く踏みにじれる存在にとって、そんなものはまるでどうでもいい事としか映らない。

マリアンは、今日そのような事を、知った。

「……胸にフランスの国旗は付いていたはずでは？」

「あの子、覚えてなかったんだよきつと」

まるで映画でも見るかのようにポップコーンを片手に映像を見ていたアダムは、隣のプライドの呆れた声に、適当な相槌を打つ。

「しかし……まさか、アレが適合する人間が、存在したなど」

憔悴しきつたマリアンとその後ろをピクニック気分で歩いているアストリス。

その姿を複雑そうに眺め、プライドは独り言のように呟く。

「うーん。それに関しては僕もビツクリだったな。まさか友達がそれに適合してたなんてね！ 聞いてみるものだよ！」

携帯端末をスライドし、アダムは一枚の写真とそれに添えられた文章を見る。

彼が言う”友人”との物々交換によって火星に届いた、二つの品を。

”アルファモザイクオーガン  
α M O 詰め合わせパック”。

一つは、アダムに合わせたおふぎけなのか、お歳暮のような箱に詰められた無数の臓物。

「まあ、α M O 手術でしか成功しないっていうのは兎も角、本当に大事なものはやっぱり合う人、だよね」

『あ、それ私なら適合するかもね』

『嘘でしょ!?!』

与太話の中であっさりと決まった、もう一つの方法。見つかったのもすごいし提供してくれたのも不思議。

いやあ瓢箪から駒つてあるもんだねえとしみじみ考えながら、アダ

ムはもう一つの輸入品を見る。

”オリヴィエ・G・ニュートンのクローン胚”。

ニュートンの一族の歴代当主の複製品たるその肉体。

しかし、その元とは微かに異なる遺伝子が、偶然にも適合したのだろう。

槍の一族の王、その胚から成長させ、アダムが太鼓判を押す手術ベースを組み込んだ。

狂気の研究の結晶体を身に宿した、神の写身……即ち、アダム・ベリアルとニュートンの一族の複合体——それこそが、赤の女王アストリスの正体である。

「さて、地球がどんな風になるのか、見逃せないね」

アダムは明るく言うと、愉快そうに笑った。

最強と最狂を混ぜ合わせた、『最悪』——その存在に、人はどう抗うのか、と。

盤外にすら滲み出る狂気を、隠す気など微塵も無い様子で。

## M i n d   G a m e : 第11話   白亜双哮

「……」

エリゼ宮殿の最奥部と呼ぶべき大統領執務室へと続く通路に、オリアンヌは一人佇んでいた。

状況は自分の想定を超えて悪い。

宮殿に戻った彼女を出迎えたのは、最終防衛線となる兵士達の遺体の山。

宮殿への襲撃者との交戦により死者多数、との状況は既に聞いていた。

だが、実際にそれを目の当たりにすると、怒りが酷くこみ上げて来る。

一つは、襲撃者に対しての当たり前の感情。

もう一つは、物言わぬ屍となっている兵士達に対して。

いいや、わかっているのだ。彼らは勇敢に戦い、この宮殿を守り抜こうと任務に殉じた。

ただ、相手が悪かったただけなのだ。

しかし、話をしていると調子が狂うあの車椅子の女性が、もし任務の為、あと少し早く国を出立していたのなら。

奴らの刃は、エドガー様の喉元に届いていたかもしれない。

その事実が、どうしようも無く彼女の内心を波立たせる。

たかがカルト教団の使い如きが直接相対したとしてもエドガー様を傷つけられたかどうかはわからない。

だが、エドガー様のおみ足を血で汚す事になる。

それ自体が大統領であるエドガーとこのエリゼ宮殿の守護を任されている共和国第一歩兵連隊の長たるオリアンヌにとっては最大の屈辱であり、それ以上に本人としては自身のプライドなどはどうでもよく、絶対の忠誠を誓う主に羽虫の一匹でも近づけてしまった、エドガーに対して申し訳が立たない、という深い後悔の感情を抱かせる。

「近衛長……」

市民の救出の為に市街へと向かっている部隊を呼び戻しはしたが、

MO手術を受けていると思われる未確認の武装勢力が現れ、現在交戦状態との通信が入っている。

最も近い基地に救援を要請してはいるものの、十分な援軍にはまだ時間がかかりそうだ。

単純に敵を駆逐するだけであればミサイルでも打ち込んでもらえば早い、パリが灰燼に帰すのは本末転倒だろう。

増援は期待できない。本来であれば、己も市民の保護へと出撃するべきだった。

だが、事情が変わってしまった。

敵は異形の怪物だけでは無い。数人で数十の兵士を殺戮できるような腕利きのMO能力者を派遣してくる、という前例が存在する以上、あれが最後だという確証など何も無い。

そうなれば、いよいよこの宮殿は敵によって制圧されるも同然の状態となる。

そうさせないために、自分が守りを固めねばならない。

たとえ何が来ようと、ここだけは絶対に通さない――

「近衛長！」

「む………すまない、考え事をしていたようだ。何だ、クリストフ曹長」

状況の整理と改めて覚悟を決めていたオリアンヌは、そこでようやく自身にかけられた声に気付く。

よほど慌てていたのだろう、敬礼をしながらも荒い息遣いの男性。

宮殿での防衛の任に当たっていた兵士達の数少ない生き残りである彼の名を呼び、オリアンヌはそちらに意識を向ける。

「急遽お耳に入りたい事項が！ その為大統領にお目通りを願いたく！」

「ふむ…よかろう」

どうやらの重要な事柄のようだ。数秒思索した後、オリアンヌは頷く。

「それにしても貴様、随分と堅苦しいな。事態が事態だ、それも当然で

はあるが…こんな時こそ平常心を保つ事も大切だぞ？ エドガー様に対しては流石にわきまえねばならんが…貴様のふざけた態度で安心する部下もいるだろう」

穏やかに微笑むオリアンヌ。あまり気負いすぎるなよ、と労いを込めた言葉が続け、説明するためのデータが入っている、という携帯端末を受け取る。

「いえ…殉職した彼らの事を思うと流石に平時のような…」

「…悪かったな。それも尤もだ。心無い事を言ってしまった。許せ」

いえそんな、という声を受けながら背を向け、オリアンヌは執務室のドアへと一歩足を進め。

「ああ、それと——」

「——クリストフ曹長は普段から生真面目すぎて胃腸薬を手放せない男だ」

同時に己の剛腕で自身の背後を薙ぎ払いながら振り向く。

「っ！」

それは、本来であればクリストフが立っていた場所には届かない一撃だった。

だが、オリアンヌは自身の腕が何かに接触した事を認識する。

異なった人物像を提示されたのに否定せず、疑問を抱いた様子も無かった。

エドガー様に対して確認を取ろうとする自分を待たず、近づこうとした。

それは、微かな疑念を確定した事実として捉えるには十分すぎる要素だ。

「残念だがエドガー様へ謁見を許すわけにはいかんな」

自身の腕に接触したのが黒と黄の縞模様を持つ蝮の触手であった事を確認したオリアンヌは、そのまま駆け出す。

まだ宮殿に入り込んでいた敵がいたか。

忌々し気にクリストフ：否、戦闘時になりそれに集中する為か、変化した顔や体格を元に戻したのであろう少女、静花を見やり、オリアン又は懐から『薬』を取り出し、それを摂取しようとする。

「……！」

だが、その行動は腕を正確に狙った触手の一撃により弾かれる。当たり前と言えば当たり前だが、相手には戦闘の心得があるようだ。

今のオリアン又は動きやすさを優先し甲冑を脱いでいる。

その身を包む軍服もまたある程度の防刃防弾性能を持つてはいるものの、当たり所が悪ければ手傷を負いかねない。

流星に変態をせずに組み伏せるのは難しいか。

即座に判断し、『薬』の使用を第一に考え動くが。

「させないっ！」

自分が後退した分だけ、相手は前へと踏み出してくる。

そして、オリアン又はこれ以上背後に下がる事はできない。

そこには、何を置いてでも優先すべき対象、己が主が控える執務室への扉があるからだ。

「っ!？」

腕に巻き付き動きを止めようとする触手。それを掴みオリアン又は力任せに引く。

流星に正面切つて戦いを挑んで来る事は無いだろう。MO手術を受けた相手に生身の力で対抗するなどという選択肢がそもそも無謀だ。そう考えて攻勢に出た静花の顔に驚愕の色が浮かぶ。

それが、一瞬とは言え、生身の人間に力負けした？

動揺の間を突かれ引き寄せられた静花の腹へとオリアン又はの拳が突き刺さる。

苦悶を滲ませる静花。しかし、実際に彼女が受けたダメージはそれほどでは無い。

蝟の筋力と、重心移動を生かした回避術。

それにより、オリアンヌの一撃を最低限の衝撃に和らげる。

「む……い……」

拳へと返って来る感触が弱い事に気付いたオリアンヌが、警戒の色を強め両腕を盾にするかのように胸から顔にかけて構え、防御の姿勢を取る。

同時に、その腕へと巻き付いた、本来であれば首を狙っていた触手が凝縮し、凄まじい力で腕を締め上げる。

「ほう……い……」

オリアンヌ・ド・ヴァリエ。

フランスの守護者たる共和国親衛隊を率いる連隊長の一人。

『フランスの三枚盾』の異名と共に語られるその武勇は、今回の任務の詳細を聞いた際に与えられた資料により静花も把握している。

そして、最も交戦する可能性が高いのがこのオリアンヌだろう、とも聞いていた。

フランスで開発された特殊なMO手術を施しているらしく、さらには若いながら数多くの激戦を生き抜いてきた百戦錬磨の軍人。

同じ土俵に立って正面切って相手をするには、静花は自分では不足だという認識がある。

特殊なMO手術、と言われれば自分もある意味ではそうなのかもしれない。

戦闘に関しても、研究所の訓練で、第四班の皆と、あれこれ鍛練を重ねている。

ただ、それでも実戦経験とその修練の密度には差があるのだろう。これまでの数度の攻防で、その認識はさらに強まった。

だから、こうする。馬鹿正直に相手と同じ土俵に立つても勝ち目など無い。

話は至極シンプルで簡単だ。

相手に人為変態を許す事なく仕留める。

たとえば相手がいかに強大なベース生物を持っているようと、『薬』が使

えなければただの人間だ。

世の中には生身でテラフォーマーに対抗できる怪物もいるらしいが、少なくともこれまでの攻防の限りではオリアンヌはその段階では無い。

「ミシミシという音を立て、オリアンヌの腕が軋む。

蝟の腕力だ、恐らく、折れるまでにそう時間はかからない。

腕を取ってしまったえば、後は消化試合も同然。この場所に敵の援軍が来る様子も無い。

「フンッ！」

「！」

……だが、手を封じただけでは不足だった。

オリアンヌが背を逸らし、直後その頭を静花に向けて突き出す。

勢いの良い頭突きに直感で危機感を覚えた静花は身を振り回避するが、同時に拘束が緩んでしまう。

静花が回避したのを悪手とは言い切れないだろう。この頭突きをもろに受ければ、より悪い状態になっていた可能性が高い。最悪戦闘を継続できなくなっていたかもしれない。

だが、それによりオリアンヌの縛めが解かれる。

緩んだ触手を力任せに振りほどき、好機とばかりにその拳が静花の顔に向けて放たれる。

ここで決着を付ける。その意思と共に繰り出された一撃を、静花は何とか触手で受け止め、顔面への直撃こそ免れはしたが、大きくよるめき後退してしまう。

それはまるで意趣返しのように。先ほどオリアンヌを追い詰めた時のように、オリアンヌが前のめりの姿勢のまま床を抉らんばかりの脚力で前進し、再び拳を構える。

次こそは防げない。静花は自分の身に死が襲い来るのを、目の前の人間が自身を仕留めるために意識が集中したのを、確かに感じ取り。



「……お願いします」

オリアンヌにとつては意味がわからない言葉を、眩くかのように言った。

「……」

何を言っている。これから仕留めんとする目の前の相手にわざわざ確認などする気は無かったものの、オリアンヌは疑問を抱き。

直後、それは解決した。自身の頭に伝わった、その根本である首から伝播してきた衝撃。

次いで訪れる、焼けるような痛み。

思わず、その場所へと目を向ける。

そこには、己の首に深々と突き立った、銀の刃が、そしてその先で自分を見つめている……かはわからない、ガスマスクを装着した一人の人間の姿があった。

一体、何が？ 周囲に、敵味方含めて人の気配など無かったはずだ。

「ぎ……が……!?!」

だが、何故なにと理由を考えるだけの余裕は、今のオリアンヌには無かった。

苦悶の声と共に血の泡を吐き、その巨体が膝を折り崩れる。

唾然と、何が起こったと目を痙攣させながらその下手人を驚愕と共に見るオリアンヌに、刃を振るった彼女はガスマスク越しに複雑な表情を浮かべる。

「……ごめんなさい。でも、さようなら」

この戦いは、正々堂々の決闘などでは無い。標的を何としてでも仕留めんとする暗殺者と、それを阻止しようとする守護者の殺し合いだ。

正面切って戦わなければいけないわけでも、1対1という決まりがあるわけでもない。

卑怯だと罵られるいわれも勿論無い。……多少の消えない罪悪感

は、あるのだけれど。

静花の能力による変装でだまし討ちにできればそれで良し。しかし、変装相手の事を深く知るだけの時間が無かったため、これは失敗する可能性が高い。だから、交戦状態になった際の戦術に関してもぬかりは無かった。

静花が変態を封じると同時に、隙あらば大統領執務室に突入を試みていると思わせ、オリアンヌの意識を集中させる。

その隙を突き、雅？が仕留める。

変態を許さなかったにも関わらずここまで抵抗されたのは想定外だったが、しかし二人とも大きな怪我は負わずに済んだ。これからエドガーと一戦交えるまでに消耗を負わずに済んだ。

ひとまず、第一段階は成功だ、と二人はほつと息を付く。

そして、首から血を流すオリアンヌに次こそトドメを刺さんと。

視界が、霞む。

引き抜かれるナイフに、それで栓をされていた創傷が開き、血が噴出する。おしまいだ、と再度首に向け構えられたそれを見て、オリアンヌの意識は濃い霧に溶けるかのように薄れていき――

――数週間前　パリ市内

上機嫌な客の声が飛び交う店内。ビストロと呼ばれる、身近な言葉に直すと居酒屋に近い小料理屋の個室で、三人は小さな三角テーブルを囲っていた。

「ううー……私はエドガー様にどこまでも付いていくぞー……万歳……」

普段の豪胆さ……は残っているものの、部下が見れば目を疑うであろう、机に突っ伏して涙を流しているオリアンヌ。

「うんうん、わかるわかる。ところでオリアンヌたん、腹筋触ってもいいかい？」

「殺す」

そんなオリアンヌに対して上機嫌で話しかけ、酔っているのをいい事にさりげなく自分の欲望を満たそうとして冷たく返されたのは、スーツを着た美青年だ。その席には、中折れ帽が置かれている。

「フィリップ……もう少し遠まわしにだな……つーかオリアンヌも毎度の事だけど飲み過ぎだ」

「おいおいセレスたん、俺にこの筋肉を前に待てをしろって言うのか!?」

またこいつらは……と窘め二割、呆れ八割の感情で投げかけられた声に、美青年……フィリップ・ド・デカルトは熱の籠った口調で言い返す。

その姿を見てダメだこいつ、と諦め、ぐいっとグラスに入ったワインを煽ったのは、良くも悪くも個性に溢れた二人と比較するとどこか地味な印象の男性だった。

黒髪に青の瞳の彼、セレスタン・バルテは苦笑いしながらも、しかし決して悪い関係では無い事が伺える様子で二人へとそれぞれ冷えた水の入ったグラスを差し出す。

彼ら三人、フランス軍の一つ、国家憲兵隊の中でも要人、要衝の警備と護衛を担う共和国親衛隊の部隊長を務め、フランスに襲い来たいくつもの危機を跳ね除けたその経歴から『フランスの三枚盾』と異名を取る上級軍人である。

そんな彼らは、こんな安い居酒屋のような店では無くもつと高級な店でも好きなだけ飲み食いできるだけの給料を貰ってはいるのだが、この場所に集まったのには理由がある。

ここは、いわば彼らにとって経歴を積み上げたスタート地点のような場所なのだ。

フランスの要人と親戚関係にありその関係で軍に入ったセレスタンとフィリップ、エドガーに才を見出され軍に務める事となったオリアンヌ。それぞれ違った道を歩んでいた三者、まだ今のような地位も名誉も無かった彼らが共に理想を語らい合ったのが、この店だった。

だから、何かあるたびに三人はこの店に集まっているのである。

今回は、これから三人が臨む大統領より直接預かった裏関係の仕事に関してのそれぞれに対する激励会。

何やら宇宙から撃ち込まれるとか言う危険な人物の確保を担う事となったセレスタン。

数十人でアメリカを征服しに行く、などというまるで自殺ツアーとしか思えないような無謀な任務を担う一員となるフィリップ。

そして、二人の留守を任されると同時にフィリップの任を補佐する為敵対勢力の妨害に関しての任務を受けたオリアンヌ。

大仕事だ、頑張っていこうぜという明るい調子で、しかし同時に互いが互いに、自分の身がただでは済まないだろうという直感を持ちながら、彼らは今回酒の席を囲っていた。

彼らは同じ軍属の同僚というだけでは無く、そこから繋がったの友人同士でもある。

男子二人が馬鹿をやっているとオリアンヌが頭を痛め。

こう見えて戦闘になると熱が高まるセレスタンと猪突猛進のオリアンヌに後始末を押し付けられフィリップが顔をひきつらせ。

フィリップとオリアンヌ、変人の二人が色んな意味で目立ちセレスタンが胃を痛める。

そんな互いに迷惑をかけ合いながら持ちつ持たれつの関係である彼ら。

また生きて会おう。そんな、しんみりした空気はあまり長続きせず。

いつものように早々に酔って泣き上戸を發揮したオリアンヌが大統領、エドガーを褒め称える演説を始め、フィリップがそれに乗っかり(その内約六割はエドガーでは無くオリアンヌの筋肉を褒め称えている)、セレスタンはそんな喧騒を着に、時にやんややんやと煽りながら笑う。

そんな、変わらない日常の光景も一端落ち着き、現在。

「……私は、お前達が羨ましい」

オリアンヌが、静かに、しかしどこか暗い色の表情で、静かに呟いた。

「エドガー様より厚い信頼を預かっている二人が。私は、外征を担う戦士に選ばれなかった」

普段は常に強気なオリアンヌから、こぼれ落ちていく言葉。

アメリカという大国の征服。それは間違い無く困難を極める任務だ。さらには、たかが数十人で完遂するなど。勿論策はあるのだろう。集められた戦士も、当たり前ながら精鋭中の精鋭である。

セレスタンの任務も、フィリップのものと比べれば簡単に映るかもしれないが、未確認事項が多すぎる。

対象が何なのかも詳しい部分では不明。さらには、ニュートンの一族が介入してくる可能性もあるのだと言う。

それに比べると、重要だとは理解しているが来るかもわからない敵をただ待つのと、手伝いをするだけ、などと。

「……わかっているんだ。これが必然だつて事は。エドガー様のご采配だから、なんて考えるまでも無く私の実力がお前達に及ばない事は。無力なこの身が悔しくて仕方ないよ」

それは、酒が回ったからつい零した弱気、などでは無く。

二人が友人だからこそ打ち明けられる内心そのものだった。

「なあ、オリアンヌ」

「ねえ、オリアンヌたん」

その返答は、二人の口から同時に語られんとする。

顔を見合わせ、お前の方がこういうの向いてるだろ、とセレスタンが苦笑いをし、フィリップが頷く。

「じゃあ、俺が代表して。オリアンヌたん、エドガー叔父さん大統領領つてさ、バカだと

思う?」

「……何だと?」

突然の言葉に、オリアンヌは言葉の意味がわからず固まる。

そして、その言葉を噛みしめるにつれて、オリアンヌの表情は怒りに染まっていく。

「フィリップ……いくらお前と言えど、エドガー様を軽んずるなどと……!」

「ああ、その通りだ。エドガー叔父さんは凄く優秀だ。身内鼻屑なんてしなくてもね」

そのような朝に日が昇るのと同列の事実を今更確認して何になるのか、という感情冷め止まぬオリアンヌに、フィリップは続ける。

「結論から言うと、オリアンヌさんは勘違いをしている」

「……」

一体、何を言っているのか。フィリップの言葉の意味が掴めず、困惑するオリアンヌ。

「そうだな、オリアンヌ。お前、弓矢で相手の剣だの槍だのを防ごうとするか?」

「……するわけが無いだろう」

「エドガー様は、弓は射るもので鎧は着るもの、ってちゃんと理解してんだよ」

そこに言葉を投げたのは、セレスタン。

弓矢で防御? 強度、構造、形状。あらゆる面で向いていない。何の話だ? とオリアンヌは疑問を深める。

「セレスタンってさ、頭柔らかくて器用だろ? 色んな事が起こっても、同時に考えて対処できる」

「ああ、そうだな」

「俺はさ、アドリブとか得意なんだよ。非常事態でも逆境でもやべえやべえ言いながら何とかしちゃうよ?」

「……そうだったな」

「でもさ、エドガー叔父さんに忠実に、取りこぼしを無く拾えるのは、オリアンヌたんなんだよ」

次いでのリリップの言に、二度、頷き。最後に自分の事を言われ、そうなのだろうかとおリアンヌは思案する。

「俺やセレスたんの仕事は、やべー失敗だつてなつても最悪逃げればいい。でも、オリアンヌたんのはそうじゃない。何かを見落として崩れちゃったら、全てが終わっちゃう」

「……」

その通りだ、だから必死に自分はその任を務める。そうオリアンヌは思う。

ただ、何が言いたいのかまでは結局わからない。その辺りは自分の頭の回転の悪さを憎く思うオリアンヌであるが。

「オリアンヌたんはさ、自分はエドガー様の騎士に選ばれなかった、つてしよげてたけどさ、そもそも違うんだよ」

「ああ、その通りだ。別に、悲観するする事なんざ何も無いんだ」

わからない。自分が、エドガー様に選ばれなかった、というわけでは無い？ 何故だ。では何故……

素面の彼女であれば気付いていたのかもしれない。だが、マイナス思考と酒の影響が残る頭という事もあり混乱するオリアンヌ。

「オリアンヌ——君は、フランスの、エドガー叔父さんの騎士に選ばれなかったんじゃない——」

手元の冷水が入ったコップ、融けた氷がからんと揺れ、涼し気な音が響く。

まるで、オリアンヌに、落ち着きを与えようとするかのよう。

「——俺達が剣に選ばれたように、君は盾として、鎧として選ばれ

「たんだよ」

「……！」

セレスタンが、フィリップが、微笑む。

物分かりのちよつと悪い、血筋では、そこから来る才能では確かに自分達には及ばない、でもその努力を、忠義を、そして磨き上げた実力を、同僚として、友として、一番近くで知っている彼女へと向けて。

「ああ。だから——」

「オリアンヌたん——」

——俺達の帰る場所を、よろしく頼む。

——エドガー叔父さんを、守ってくれ。

「ア、ア、ア、ア、アアア!!」

——そして、目が覚める。

ふざけるな。ふざけるなふざけるなふざけるな!

この国に、エドガー様に、これ以上触れさせはしない。

私は主に、戦友に、そう誓ったのだ!

それが、ここで斃れるなど、あつていいものか!

猛り狂う絶叫に、雅?と静花が気圧され、一瞬硬直する。

だが、そこは暗殺の任を担う人間というべきか、即座に雅?は気を取り直し、トドメをささんと、そのナイフを突き立てようと動き出す。

だが、微かに遅かった。

胸ポケットに入っている、『葉』。

爬虫類型のそれと、昆虫型のそれを同時に握り、握り、そして握り潰す。



二つの形式の変態薬が入り混じったその液を、砕けた注射器の破片で切った傷の事も厭わず、自身の首に開いた致命傷、その傷口に手を突っ込むかのような勢いで体内に入れ込む。

瞬間、雅？のナイフはオリアンヌの首に突き立った。

……だが。

「う、そこ」

奥まで刺さらない。それを知覚した雅？は即座にナイフを引き抜き離脱しようとするが、今度はどれだけ力を込めても抜けない。

はっとそれに気付いた刹那、雅？の体に腕の一振りが襲い来る。

巨大な瘤のような塊が形成された腕。受ければ、タダでは済まないだろう。

ただ、刺さったナイフを捨て離脱するには、少し時間が無い。

「あ、ぐっ……いー」

苦痛を堪えながら、雅？が吹き飛ばされる。

「……っ！」

雅？が受け身を取ったのを目で追いながらも、静花はオリアンヌへと仕掛ける。右腕に形成されているのは、昆虫の牙と思われる武器。だが、今の体勢からならば迎撃は間に合わないだろう。

首の傷を押し広げられれば、今ならまだ！

そう判断した静花の目に、右手を下げた状態のオリアンヌの刃が再び映る。

あれ、何だろう？ あの刃……何か、震えているような――

――刹那、銀の刃が跳ね上がる。

「リースちゃんっ!!」

幸いだったのは、彼女のパートナーが、ニュートンの血を引いた高い身体能力と動体視力、反射神経を持っていた事。

チャンスなのに、何で自分を後ろに引っ張るのか。静花は雅？の行

動に、疑問を覚え。

瞬間、彼女の胴体に、斜めの赤の線が走る。

「う……………あ……………？」

何が起こったのか認識すらできないまま、静花の胴から血が溢れだす。

雅？がすんでの所で間に合ったためか、深く臓器に達したわけではないが、薄皮を切っただけ、では済んでいない、肉体の表面を切り裂いた斬撃。百人が見れば百人が重傷と判断する傷を受け、崩れ落ちる静花。

「ここから先に、羽虫の一匹も通れる隙間など存在しないと知るがいい」

全身の筋肉が隆起し、古傷が浮かび上がり鮮明な姿を晒す。

携えるのは、弓手に鎚、馬手に刀刃。

そして、全身を覆う、鎧と呼ぶ事すら生温い、装甲、城塞とまで言える域に達した茶に微かな薄緑の混じった皮膚。

失血で青ざめる静花と、静花の体を支えながら、じりじりと後退する雅？。

彼女達の目の前には、高き絶望の城壁が立ち塞がっていた。

「我が名はオリアンヌ・ド・ヴァリエ！ フランス共和国の守人にして、エドガー様の盾なり！」

オリアンヌ・ド・ヴァリエ

国籍：フランス

28歳 女 184cm 96kg

ESMO手術”古代爬虫類型”

アンキロサウルス

+

ESMO手術”古代昆虫型”

リングミュルメクス・ヴラデー

アンキロサウルス  
白亜の鎧鎧、再臨。

リンガミュルメクス・ヴラディ  
始原の鉄刀、両断。

## M i n d   G a m e : 第12話   比翼連理

「……お前達が何故この場所にいるのか、私にはわからない」  
一歩前に踏み出す。

「家族を人質に取られたのか。それしか生きる道が無いのか」  
もう一歩、踏み出す。

相対する二人はその動きに応じ、二歩下がる。

「己が身を捧げても惜しくない主君がいるのか、何か別の理由があるのか」

さらに、一歩。

相手は何も答えないが、オリアンヌは言葉を続ける。

「お前達のような子どもが血で汚れなくて済むようにするのが、我々<sup>軍人</sup>の役目のはずなのだがな」

先の激情が残ったまま、しかし瞳の奥に微かな悲しみの光を讃え、目の前の二人を見つめる。

正確な年齢などわからないが、まだ年端もいかない少女ではないか。

それこそ、特殊な生まれを除けば学校で友人と笑い合い、あるいは存分に趣味を楽しみ、人生を謳歌しているような。

此度の襲撃は犯罪集団の組織的犯行、などと呼べる規模のものでは断じてない。

その裏には国家やそれに匹敵する力を持った集団が関わっているのはほぼ確実だろう。

外道が、とオリアンヌは内心で吐き捨てる。

そのような力のある集団が、子を育む事もせずに使い捨ての刃にするなどと。

「だが」

だが。その言葉通り、オリアンヌはそこで思考を切り替える。

「それは、今この場には関係の無い事だ」

子どもだろうと、そこにいかなる事情があろうと。

目の前の相手は、それ以前の前提として、主君の命を狙う暗殺者。

そこに与えられる慈悲は無い。

右腕を大きく振り被る動作。力を貯め込むかのように小刻みに震える右腕と、そこから生えた長い昆虫の牙。

その予備動作を察知し、朦朧とした意識の静花を抱え、雅？は後方に跳ぶ。

瞬間、雅？のガスマスクが剥ぎ飛ばされる。

掠めた。後少し自分の対処が遅れていれば、頭を吹き飛ばされていた。

冷や汗を拭う間も惜しみ後退し、雅？はオリアンヌを苦々しい表情で見つめる。

その全身を覆う強固な鎧についての情報は既に任務に就く前から把握していた。

ESMO手術” 古代爬虫類型” 『アンキロサウルス』。

鎧竜という俗称で広く知られるグループの草食恐竜、その一種を再現したものだ。

草食の動物、と聞いてパツと思いつかぶのはどのようなイメージだろうか？

恐らく、ライオンやチーターに捕食されるシマウマのようなものからまず思い浮かぶのでは無いだろうか。

はたまた、いいや、肉食動物に対抗して打ち倒す事もできる力があるカバやゾウといった動物を思い浮かべる事もあるのかもしれない。

オリアンヌの手術ベース、その一つであるアンキロサウルスは当然のように後者の地位にあった動物であると言われている。

しかし、逃げの一手だけでなくやろうと思えば肉食動物と正面から相対する事ができる屈強な草食動物、という生存競争の中で近い立場にある現生の種の多くとこのアンキロサウルスでは、大きく異なっている部分が一点。

刃の一撃に次いで振るわれる左腕の鎚を、雅？は軌道を逸らすのは無理だと判断し身を屈めてその下を潜る。

それは、闘争に重点を置き特化した器官を有している、という点である。

その力を宿すオリアンヌの左腕に発現している、瘤のような塊。

それが、現生の種では見られない特徴である尾の先端から生えた骨が凝集した鎚である。

角のような様々な役割を果たす器官でも無く、分厚い皮膚や巨躯、筋肉といった、生きる過程で必然的に役立つ特徴でも無い、ただ己が身を守り敵を叩き潰すための武器。加えて、捕食者の刃を安易に通さぬ強固な装甲。

はつきり言って、相性は最悪である。

雅？の手術ベースは正面きつての戦闘に用いられるような器官を持たず、敵対者を排除する手段は隙を突いての急所への一撃。

だが、相手の全身が分厚い皮膚の装甲に覆われている限り、それは通用しない。

先ほどオリアンヌが変態した瞬間の首を狙った攻防ではつきりとわかっている。

大きな隙があれば目を狙う、というのも手だが、手練れの軍人であるオリアンヌがそう易々と隙を晒してくれるものか。

あと少し時間があれば、全体の状況が変わる。

最も上手いくパターンがオリアンヌの抵抗を許さず交戦、そのままエンドガーを狙う、という形であったが、こうなってしまうと仕方が無い。

状況を判断するに、最善手は撤退からの仕切り直し。

……それも――

「染さん……私は、いいから」

一瞬でそこまで思考を巡らせていた雅？はそこで頭の中が真っ白になる感覚を覚える。

致命傷、は免れたはずだが、大きな傷を負い、軟体動物型の再生能

力があるとはいえ戦線復帰にはもう少し時間がかかるであろう静花。彼女が弱弱しく零した言葉は、至極単純な意味合いのものだった。

——自分は見捨てて任務を遂行しろ。

「なん、で」

雅？の思考が止まったのは、自分が考えもしなかった残酷な選択肢だから。……では無い。

むしろ、逆だった。最善手は、ここで静花を見捨てて一時撤退する事。

普段通りに動けない静花は、足枷になるからだ。

撤退さえできれば、静花は再生能力で復帰できる。だが、そもそもオリアンヌを眼前にした今の状況で撤退できるかどうか、がそもそもの問題なのだ。

だから、見捨てる。アネックス計画と裏アネックス、火星派遣計画という括りでの同僚。

ここ何日か、任務で共に過ごした仲。

暗殺者、という立場の人間からすれば、それは、『その程度の仲』で切り捨てられる。

事実、雅？も一度はその選択をしようとしていたのだ。

だが。

それを当の本人に肯定されて、雅？は困惑していた。

——同じ班員にジェットさんって人がいるんですけど、すごく料理が上手なんです。

——これ、班長から貰ったんです！……そ、そんな顔してもあげませんよ？……い、1個だけならやっぱり……

——染さんのご家族とか班員の方々はどんな人なんです

か？ 私は——

「帰りたい、って、言ってたじゃないですか」

オリアンヌは既に追撃の姿勢に移っている。言葉を交わしている暇など無い。

合理的じゃない。おかしい。



空白になった頭の中を新たに埋めるその言葉は、静花にも当の本人にも突き刺さる。

「家族のために頑張るって！ お土産もたくさん選んだじゃないですか！ なのになんで！」

静花の呟きが『助けて』『置いていかないで』という内容であったならば、雅？は即座に静花を見捨てて撤退に移っていただろう。

彼女のいつもの口癖のように『ごめんなさい』と言って。

大好きな家族のところへ帰りたい気持ちにはわかるけど自分も自分の事情で任務を遂行しないといけないから、と思って。

だというのに自分はもういい、という言葉が納得できなかった。

そんな理由で、自分は貴重な時間を空費している。

思考がぐちゃぐちゃになり、何を言いたいのかもわからない。

任務の為だ、しようがない。そう思って、見捨てようと思っただけに。

そんな雅？に投げられた言葉は、ごく短いものだった。

「行って！」

再度の、自分を捨てて逃げ出せ、との言葉。

いよいよ猶予は無い。

理解ができない。混乱している。

でも、きつと選択肢はもう残っていない。

念押しとばかりに過剰摂取に近い量の『薬』を投薬し、雅？は背を向ける。

瞬間、その気配そのものがかき消える。

「……全く、もう……苦渋の選択、ってやつだったんだから」

残された静花は、苦笑いをしながら溜息を付く。

傷は少しずつ塞がっているが、油断すれば内臓が零れ出しそうと錯覚してしまう傷。

どれだけ持つだろうか。まあ時間稼ぎぐらいはできるか。

次は無いだろうし、パーツと使ってしまう。

「エドガー様を害さんとする不遜な侵入者ではあるが……せめて、人並みに葬るくらいはしてやる」

振り下ろされるオリアンヌの剛腕。

回避は不可能。重く苦しい死が間近に迫り、そして。

『家族』の皆の所には帰りたけれど、さ」

静花の脳裏に、自分がこれまでお世話になった、なっている沢山の人が順々に浮かぶ。

きつと、染さんは自分と同じようには思ってくれてなかったんだろ  
うな。

ちよつと残念だ。まあでも、当然なのかもしれない。

何か、表に出せない複雑な事情がありそうな人だったから。

きつと、そう易々とこちらに接触できる人間じゃなかったのかもしれない。

だから、そう思ってもらえないのは、当たり前。

「……！」

オリアンヌの腕が、宙で止まる。

それを成したのは、オリアンヌの意思では無く、赤の触腕だった。  
右腕の刃で切断を試みるも、瞬間、オリアンヌの視界を触手が埋め、  
その体を押し戻す。

「でもね」

口端から血が零れる。

視界が少しぼやける。

—— 欣將軍は厳しいけど優しいお方なんです！

—— すごく格闘術が上手な人がいて！ もうしゅばば  
ば——！ って感じで！

—— 今度会ってみたい？ ……えーっと、じゃあ、その  
……良かったら、リースちゃんの家族さんにも……

数日の間に交わした言葉を思い出す。  
ああ、もうちよつと長生きしたかったなあ。  
そうしたら、向こうにも、そう思ってもらえた、かもしれないの  
な。

「たまには『友達』のために頑張るのも悪くないと思うのよね！」

黄<sup>ホワ</sup>静<sup>ジン</sup>花<sup>ファ</sup>

11歳 女性 中国

日米合同第二班 非戦闘員・中国第四班 間諜

マーズ・ランキング：92位

先天MO” 軟体動物型”

—— ミミックオクトパス ——

MO手術” 軟体動物型”

—— ダイオウホオズキイカ ——

『<sup>ダイオウホオズキイカ</sup>邪悪なる海魔』が、捕食を開始する。

—— パリ市内 ——

「撃て撃て！ 確実に仕留めろ！」

街を襲撃した、人間の胴体を無数に連ねた怪物。

無限に湧き出てくるかと思われたその勢いは、突如として弱まっ

た。

しかし、だからと言って軍を引き下げてもできないのが悩ましいところである。

未だに市民の避難は完璧とは言えず混乱している状態であり、さらには一部ではMO手術の被術者と思われる人間が散発的な襲撃を行っているという。

「……お怪我はごいませんか!」

「諸君の働きのおかげでな。感謝する」

怪物の掃討を行っている部隊の背後に控えているのは、一人の女性だった。

金髪の美しい容姿をした彼女であるが、武器の類は持たず。

軍服に身を包んではいるものの、戦闘に参加する様子も無い。

一体この女性は何をしているのか。この光景を見ている外部の人間がいたならば、そんな疑問を抱くかもしれない。

だが、直後にその疑問は氷解する事だろう。

まるで精密機械の如く、女性は兵士達に役割を割り振っていく。

彼女の名はステファニー・ローズ。このフランス共和国の軍の最高司令官にあたる共和国統合参謀長の地位に就く才女である。

しかし彼女の素性がわかればまた別の疑問が湧くかもしれない。

最高司令官が、何故このような最前線に出ているのか、と。

「……やはり、想定通り、か」

怪物の死骸の山を検分し、ステファニーは呟く。

彼女が今前線に出ている理由の一つは、ある事を検証するためだった。

異形の怪物の動き。

騒動が起こった直後、卓上の戦況図でそれを確認したステファニーはとある事に気付いた。

奴らは降って湧いて暴れているだけのクリーチャーでは無く、明確な行動の指針に基づいて動いている。

市民を街の外へ外へと追いやるかのような追い方。

市民の逃げ道を塞がないように回避している動きすら見られた。これをただのパニックホラーのクリーチャーの動きとして見れば不自然極まりない。

だが、『戦術』として考えれば、そこには答えが見えてくる。

単純な話である。エリゼ宮殿から、市民を引き剥がしているのだ。その理由も、ステファニーには手に取るように理解できる。

市民を逃がす、という行為そのものに意味があるわけではない。

市民の保護に軍が出撃しなければならなくなる、という部分に意味があり、怪物たちはそれを狙っているのだ。

目的は、エリゼ宮殿の防備を引き剥がす事だろう。

ここから見えてくる事実は、怪物が『軍は市民の保護のために動かざるを得ない』という人間社会の事情を知った上での戦術に出ている、という点だ。

そこから、この怪物は自然発生したもので無く、何者かの手により生み出され、命令を下される、もしくは行動パターンを設定されて動いているという事がわかる。

相手の目的はフランスという国そのものを狙った破壊行動。

ならば、恐らくパターンとして設定されているであろうものがある。

その考えの元、ステファニーは怪物の掃討を行い市民保護の部隊を援護する遊撃部隊に随行した。

そして、異形の怪物がうろつく中であえて装甲車から姿を晒した。

結果は想定の通りだった。

ステファニーを狙い、怪物が殺到した。即ち、『要人を優先的に狙え』という行動パターンが存在している事も判明した。

なので、ステファニーは『餌』として怪物の対処に同行しているのであった。

もう一つの理由としては単純だ。『指揮系統の分散』。

軍の最高司令官であるステファニーとエドガー、その双方が一カ所に固まっていた場合、もしもの事が起こった際に指揮系統が大きく乱れてしまう。

そのため、ステファニーは今現在あえて宮殿を離れている。

「……」

そのように現在彼女は動いていたのだが、現在はごく数分前の状況の変化について思案している所である。

どうも、怪物の統制が崩れたように思われるのだ。

各部隊からの報告によれば、動きに混乱が見られ、バラバラに行動する個体が目撃される頻度が高くなっているらしい。

怪物を操っている大元に何かが起きたのだろうか？

統率された意思を失った。大元と呼べる存在が消えた？

「……参謀長、いかがいたしますか」

考えられる可能性は、時間と共に命令が消失し、全ての怪物がバラバラに行動を始める可能性。

こちらは厄介であるがまだ問題の度合いとしては楽な方だ。

市民の避難はある程度進んでいるため、散兵となった怪物を各個撃破していけばいい。

しかし、考えられるのもう一つの可能性。

「参謀長！ 第二群より報告です！ 至急、参謀長に判断を仰ぎたいと！」

「ふむ、何だ？」

切羽詰まった様子の兵士にも、ステファニーの表情は鋼鉄のように変わる事は無い。

冷静に状況を判断し、冷静に指示を下す。

それこそが彼女の軍人としての強みである。

「怪物が、集合を繰り返しながら移動……エリゼ宮の方面に向かっているそうです！」

そして、もう一つの可能性、として思案していたものは的中する。

即ち、『指揮系統が失われた時の為の命令が存在する』である。

「逃がす、とでも思っているのか」

「……っ」

触手と手足、合わせて十本。

その猛撃を、オリアンヌは取捨選択して対処していく。手数、という点では手足と触手触腕、計10本で殴りかかるのできる静花が優位であった。

『蝟』や『烏賊』。

時折海の怪物や神といった神話の存在のモチーフにされる彼らは、それに見合っただけの強大な力を有している。

筋肉の塊であるが故の強大な筋力。自在に動かす事が可能な触手。相手の虚を突いた動きを可能とする重心移動。高い再生能力。それは、MO手術という技術によって得られる強みのバーゲンセールのような豪華さを持っている。

アネックス計画、裏アネックスの双方の幹部搭乗員にこれらの生物を手術ベースとした人間が存在する事から、その有用性は疑うべくも無いだろう。

だが、頭足類が『器用さ』で相手の上位を取る手術ベースならば、オリアンヌのそれは『正面突破』を突き詰めた手術ベースだ。

静花は尊敬する劉將軍に頭足類の手術ベースを用いた戦闘術について手ほどきを受けてはいたが、まだ彼のように能力を十全に使いこなせるわけでは無い。

「く、う……！」

純粋な手術ベースのスペックでは十分に食らいついていく事ができる。

しかし、実戦経験の差がこの戦闘の勝敗を決めつつあった。

オリアンヌの鎚による横殴りの一撃を回避するか否か。

直撃と同時に重心移動ですり抜けければ反撃に転じられるか？

いや、もし失敗したら、待っているのは――

迷った。一瞬の攻防で、それが命取りだった。

結果、即座に死は訪れなかったが、重心移動を上手くできずに中途

半端に回避した形となり、  
腹が打ち据えられる。

「あぐっ……!?!」

内臓が傷ついたのか、口から血が零れ出し、さらには追い打ちのよう  
に先ほどから受けている傷による失血で意識が朦朧とする。

今はそんな場合じゃないと己の頬を叩き、何とか意識を引き戻した  
静花。

「……あ」

その目に映ったのは、小刻みに震えているオリアンヌの右腕の刃。  
回避不可能な斬撃が来る。わかっていても、それを回避などできな  
いのは最初に受けた時の速度でわかった。

ここまで、か。

静花は諦観と共に手を下げる。

任務、失敗しちゃったなあ。

最初に私がアレを避けられてたら上手く行ってたのかなあ。

死の間際、静花は自分のこれまでの行動を振り返り、目の前の相手  
から目を逸らして少しでも恐怖を和らげようとして。

『そうか。君は、研究室で育ったんだね』

本当のお父さんみたいに慕っている人の顔が、浮かんだ。

『もしかしてこっちに配属になるかもしれないんだって？ そうなっ  
たらよろしくな!』

いつか裏切らないといけない、優しい人達の顔が、浮かんだ。

「なん、で……やだ……」

思い知る。

いざそれに直面すると、思い出すのは過去の事で、自分が帰るのを  
待っていてくれるんだろうな、という人達がいるという事を。思い出  
して、実感してしまう。

「やだ、死にたくな——」



しかし、恐怖に涙を流す姿で刃を止める程目の前の相手は甘くは無く。

無慈悲に、刃に貯め込まれていた勢いが解放され――

「そんなに怖いなら最初からそう言ったださい……!」

声が、聞こえた。

同時にオリアンヌが振るった刃は、静花を逸れ、髪を微かに裂くだけの軌道で振るわれる。

「む……!?!」

オリアンヌの微かに驚いた声からは、それが彼女の意思によって刃を逸らした訳では無いという事がわかる。

「リースちゃん……私は、すごく酷い人間です」

瞬間、まるで無から溶け出すかのように、オリアンヌと静花の間に人間が一人、現れる。

「沢山隠し事をしてて、嘘付きで、臆病者で……何日か話したただけだから、って見捨てようと思いました。同じ計画の参加者、ってだけだから、見捨てようと思いました。……でも」

それは、頼もしい援軍、などでは無く。

結局のところ、合理的な判断とは程遠い、暗殺者としては失格当然の選択しかできなくて。

「リースちゃんも『友達』なんて思ってくれてたのなら……自分だけ逃げるなんてできないじゃないですかあ……!」

『作戦』を本当に第一に考えるのならば、静花を見捨てて、この後すぐに宮殿に殺到する支援部隊と枢機卿アヴァターラ卿の置き土産に紛れて暗殺を行うのが一番だっただろう。

危険を冒してまでオリアンヌと再度の交戦を選ばなかっただろう。だが、結局のところ彼女達は大人として考えようとしても、し

かし根本の部分で子どもだった。

ここを食い止める、と言つてもいざ死の間際になれば怖くて泣いてしまうし、

どうせ立場が逆なら自分が見捨てられるんだから自分が見捨てられる側なら遠慮無く、などと割り切ろうとしても、逆の立場だったら自分の事をこの子は助けようとしてくれるのだろうとわかってじゃ自分も、とそちらに流れてしまう。

二人共、『友達』を見捨てる事が、できなかつたのだ。

「梁さん……」

繰り返すが、頼りになる援軍、では無い。

二人がかりでも勝てる相手とは言い難いのだから。

先のオリアンヌの斬撃も、雅？がオリアンヌの脚を払って姿勢を僅かに崩した結果にすぎない。

雅？の隠密も彼女の手術ベースであるカイゾクスズキによって気配を隠蔽しているが、

一度注目されてしまえばその後には大きな効果を望めなくなってしまう。

オリアンヌの二つ目のベース、”古代昆虫型” リンガミルメクス・ヴラディイ。

アリの一種であるこの生物の最大の特徴が、金属で補強された牙を有している事。

さらに、並外れた強度のそれに加えて有している、現生種でも見られる特徴がもう一つ。

それが、ケタ外れの速度での顎の開閉である。

『アギトアリ』と呼ばれる彼らは、ほぼ180°まで開く事ができるトラバサミ状の顎を持ち、それを瞬間的に閉じる事により得物を捉える事を行う。

その速度は昆虫サイズの時点の時速230kmにまで到達する。

リンガミルメクス・ヴラディイもこのアギトアリと同様の機構を

持っている可能性が高いと言われていた種である。

強固な装甲に鈍器、加えて高速の斬撃まで有する死角の無い相手。しかし、二人は今度は引き下がる、という姿勢を見せなかった。

「……戦友、か」

再びオリアンヌに向き合った二人は、真正面から彼女を見据える。その姿を見て、しみじみと呟くオリアンヌ。

思う所が無い、とは言えないだろう。友情だの何だの戦士として青臭い、甘いなどと断じる事もできない。

むしろ微かに好感を覚える部分である。

だが、それは命を奪わない、という理由には繋がらない。

その割り切りを、オリアンヌは出来る人間だった。

雅？に向けて鎚を振るい、同時に右腕を振り被り、高速の一撃のため、力を込める。

雅？が回避しようが背後に控える静花を斬撃で仕留められる二段構え。

万全の態勢を以て、オリアンヌは前進する。

「……」

瞬間、雅？の姿が掻き消えた。鎚が空を切った事を見るに、回避されたのか。

だが、それならば前進して静花を仕留めるのみ。

狂い無く、オリアンヌはそれを遂行しようとし。

そこで、違和感に気付く。

消えた、消えた？ ならば、どこに？

「っー」

それを意識した瞬間、オリアンヌの眼前に、静花との間に割り込むように雅？の姿が映り込む。

その場に居続けていたが認識から外れていた？ 通常の擬態と異なる奇怪な能力のようだ。オリアンヌは考え、

目を狙い繰り出されたナイフを首を軽く傾けて避け、雅？に反撃しようとする……が、既に雅？はオリアンヌの懐に潜り込んでいた。

両腕の武器による攻撃は近すぎて力が込められない。頭突きくらいしか無いが、読まれているだろう。

再度の目を狙った攻撃を避けつつ、オリアンヌは後退して距離を取ると同時に、牽制に右腕に貯め込んだ力を解き放ち、高速の斬撃を繰り出す。

「く……う……い……！」

苦悶の声と皮膚を裂く感触。当たった。振り抜いた刃に血が付いている事を確認し、オリアンヌは攻撃の成果を把握する。

視認するのも惜しいと言わんばかりに、雅？がいるであろう位置に鎚を振るう。

「させないっ！」

だが、その一撃は三本の触手により抑え込まれた。

しかしアリの剛腕も加わった一撃だ。三本がかりで抑え込むのがやっつとで、静花の額に汗が浮かび、完全に塞がっていない胴の傷から血が滲み出る。

「ええい、邪魔だ！」

高速の斬撃では無い、普通に刃を振るい、触手を切り払う。

ダイオウホオズキイカの太い触手が二本、地面に落ちびちびちと一人でに跳ねる。

視界を塞いでいた触手がを振り払えば、静花はどこに退避したのかその姿は消え、目の前にはナイフを手に向かってくる雅？。

「ちよこまかと小賢しいぞ……い！」

目を狙われない限りは致命傷にはならないため、雅？は大した脅威では無かった。

厄介なのは多数の触手を動かす静花だが、その姿が見当たらない。向かってくる雅？は牽制で追い払い触手を出される前に静花の居場所を――

「かかったね！」

「!？」

オリアンヌの思考通り、触手が襲い来るのを視認する。

だが、それはオリアンヌの想定外の位置……目の前の雅？の体から突如として現れたものだった。

『ミミックオクトパスの擬態』。本来であれば、毒を持つ危険な生物の真似をして天敵から狙われにくくするのがこの生物の主な擬態なのだが、静花が行ったのはその逆。

自分という脅威を、雅？というオリアンヌにとっての脅威度の低い相手に見せかけ、隙を突いた。

「自分から出てきてくれるとはな……！」

だが、不意を撃つたとは言え、正面からの奇襲。オリアンヌは即座に触手を迎撃する。

ここで静花を捕捉している。さらに、雅？になり済ますためか、雅？が持っていたナイフも現在は静花が所有している。

即ち、今現在雅？はオリアンヌにとって何の脅威にもならない。

即座の連携にしては大したものだ。だが、詰めが甘い。

オリアンヌは二人をそう評価する。

そして、こちらさえ対処すれば後は脅威では無い、と静花に向け両腕で攻撃を仕掛け。

「かかりました、ね」

自身の耳元で囁かれた冷たい声に、オリアンヌは即座に反応した。

あえてノーマークだった雅？が、至近距離にいる。

だが、だから何だと言うのか。相手に有効打は無く、だからこそ、このように近づかれても問題無いと判断したからこそ、オリアンヌは雅？を放置していたのだから。

振り払うまでも無い。そこで、相方が戦闘不能になるのを見ているがいい。

雅？を無視したオリアンヌ。それに対する雅？の答えが、オリアンヌの耳に手を当てる事だった。

大きく息を吸い、同時に、静かに、しかし力強く地面に一步踏み込む。

そして。

「発勁」

その踏み込みと同じく、静かな掛け声と共に、その一撃を撃ち放つた。

中国武術の極意、気を練り上げて放つそれは、強固な守りを無視し内部に打撃を通す事を可能とする。

それを頭部に受ければ……結果は、見えていた。

オリアンヌの巨体が膝を折り崩れ落ちていく。

刃が無くとも、刃が通らずとも、届く技がある。

それを隠し通した……というよりはナイフが殆どの箇所に通らないという特殊な相手だったという事情もあるが。

「ふう……」

「や、やったんですね……」

オリアンヌが気を失っている事を再確認し、そこで緊張の糸が切れなのか、二人は力なくへたり込む。

二人が負った傷は決して軽いものでは無かった。

雅？は一度オリアンヌの刃を受け。

静花は再生能力こそあるが数度の打撃により内臓へ受けたダメージが大きい。

目の前には、ついに目標である大統領執務室の扉。

今この状態で、エドガーと戦闘して勝つ事はできるだろうか？

二人は、判断を迫られていた。

時間をかければかけるほど相手の援軍の可能性が高くなる。

だから、仕掛けるなら今がいいのだろう。きっと。

でも、二人とも軽くない怪我をしていて……。

時間は無いのに迷いに迷う。

よし、決めた。

一緒に考えて、導き出した結論。

それを遂行しようと二人並んで歩き出した、その瞬間。

二人が懐に持っていた通信機が、同時に緊急回線での連絡を知らせた。

——パリ市外

建物の合間を縫って、超低空で輸送ヘリが一機、静かに移動していた。

機内のキャビンには、兵士が数人。銃器の類は彼らが携帯しているもの以外には何も無い。

彼らはコクピットへと続くドアを時にちらちらと見ながら、緊張した面持ちで待機していた。

危険度の高い極秘の任務に就く彼ら。

少しでも気持ち悪さを落ち着けるために、何か面白い話でも切り出そう、と兵士の内の一人が声を上げた、その瞬間。

——バリッ！

破砕音と共に、機体側面の窓ガラスが砕け散る。

鳥が激突したか！ と兵士達は動揺に包まれる。

だが、実際は鳥どころの話では無かった。

「あいたた……流石軍用ヘリのは硬いですね。もうちよつとこうやって外からガラス割って侵入したいな、という顧客のニーズに答えるべきだとは思いませんか、皆さん？」

冗談のような状況で、それは割れた窓ガラスからキャビンに侵入してくる。

割れたガラスがその肌を引っかき、ミミズがのたくったような血の線を書きあげる。

だが、その傷跡は、みるみる内に塞がっていく。

何者だ、と問う余裕がある相手などと判断した兵士が一人もいなかったのは、フランス軍の優秀さというべきなのだろうか？

兎に角、彼らは飛行中のヘリに途中乗車してきた不審者に一斉に銃を向け。

「そう怖がらないでください。ただのハイジャックですから」

全員同時に、その場に崩れ落ちた。

死亡したわけでは無い。必死に立ち上がろうとしているがそれができない、という様子で、兵士達は床に倒れこんだまま痙攣している。それをごめんなさいね、と見下し、修道服を身に着けた少女——アレクシア・アポリエールは一人、兵士達のクツションを見回し、一番柔らかそうなものへと腰を下ろす。

「此度の任務は散々ですね。猊下と宣教団、さらにはアメリカ方面で航空部隊……猊下はともかくとしても私どもが動かせる最高戦力が一気にいなくなってしまう……困ったものです。まあ、命あつての物種と言うべきなのでしょうね」

そう思いますよね？ と兵士に唐突に話を振るアレクシア。勿論、答えなどあるはずも無い。

アレクシアもそれはわかっているので薄く笑い、愚痴を聞いてくださってありがとうございます、と一礼。

コクピットへと続くドアを鼻歌まじりにこんこん、とノックし、そして。

「あらあら！ 可愛らしいウサギさん！ こんにちはは！」

「……は？」

ドアが開き現れた相手は、兵士などでは無かった。

「このへりこぶたー……？ の中には男の人しかいなかったでしょう？ だから私、お話が合わなくて退屈していたの。お茶会をしましょう、ウサギさん？」

目の前の何かは、アレクシアの左手を嬉しそうにぎゅうつと握る。

「……え」

瞬間。アレクシアのその左手は、飛蝗の前足へと変わった。

「あ、え、え、」

「うーん、お茶会をするなら帽子屋さんと呼ばないといけないわ！」

可愛いウサギさんはどちらにいらっしやるのかご存じかしら？」

唇に手を当て考え込んだ後、その何かはアレクシアの頭を撫でよう



とする。

「ひ、や、あああああああ?!!」

そこでようやく、アレクシアは目の前の現実を受け入れた。  
悲鳴を上げ、その手を振り払い後ずさる。

「……? どうしたのかしら? お腹が痛いのか? プライドおじさまはよくいぐすり? をお飲みになっていたわ?」

心配した様子で、アレクシアへと近づく何か。

そこに、悪意は一かけらも無く。

「や、やめて! 来ないでください! 近づかないで! 私に、私に触らないで!」

必死に両腕を顔の前に構えて抵抗するアレクシア。

だが、目の前の相手を止める事など、叶うはずも無く

「まあ、いけないわ! ここは狭いんですもの! そんなに手をお振りになってはまたハンプティ・ダンプティが堀から落ちてしまうわ! ダメよ!」

まるで言う事を聞かない子どもを窘めるかのように、アレクシアの右手をぎゅうと握る。

瞬間、右手は何本もの縞模様の手へと変わった。

「や、やだ、何ですかコレ! おかしいですよ! どうなってるんですか! やだ、やだやだやだ!」

目に涙を滲ませ、人の力で開けるはずも無いハッチを必死に叩くアレクシア。

「そんなに怖がって……悪い夢を見てしまったのね? 大丈夫よ、ここにはジャバウォックもバンダースナッチもいないわ」

「来ないで……やだ、どうして私がこんな、何をして、何で、やだあ……! 止めてください、下して、悪い事したなら謝りますから、やめて、やめて……」

自分でも何を言っているのかわからなくなり大粒の涙と共に謝罪

と拒絶を繰り返すアレクシアを、何かは見つめる。

先ほどの心配している様子とは違い、しげしげと、何かを観察する様子で、アレクシアの目をただただ見つめる。

「何、ですかあ……」

「あら、あなた」

そこで、何かに気付いたかのように。その何かは、何かについて、アレクシアに何かを問うのだった。

「今、何回目？」

「……む、う」

目を覚ましたオリアンヌが最初に見たのは、宮殿の天井だった。

「ツ！ エドガー様は?!」

そこで、意識が閉じる前の状況が一瞬で頭の中に流れ込み、慌てて起き上がる。

何を愚かな事をしている！

どれだけの時間自分は気を失っていた！

エドガー様はご無事なのか!?

その問いに答える部下がないという事実が宮殿の危機をこの上なく示しており、そして。

「大統領は無事だ。取り急ぎ対処を頼みたい事案がある」

その問いに対する回答は部下では無く、上司から告げられた。

鋼のような冷たさを持ったその声に思わず背が伸び向き直れば、そこには彼女の上司に当たる人間、ステファニーが立っていた。

「統合参謀長！ ご無事でしたか!」

「ああ。私も今戻ったところだ」

エドガーの無事に胸をなで下ろし、直後はつと気付き敬礼するオリアンヌに、彼女の上司であるステファニーはいつもの感情が読み取り

にくい無表情に微かな苦悩を抱えた様子で返事を返す。

「すまないが治療をしている暇は無い。今現在、敵の残兵の総戦力が集結し宮殿に近付いている」

「……承知しました。では」

「貴様に、宮殿内での迎撃を命じる」

きつぱりとした、反論の余地などないであろうステファニーの指示。

異形の怪物とMO能力者。恐らく、指揮系統が失われればエリゼ宮殿を襲撃するように指示が出ていたのだろう。実際、兵士を市民の救助に絞り出した上で現在のエリゼ宮殿の防備が壊滅状態である事を考えるとこれは無謀な特攻では無く有用な戦術であった。

「……承諾しかねます。私が中庭で扉を守ります。エリゼの宮にこれ以上の侵入者は許されない」

だが、オリアンヌの返したのは、いつものような是、の返事では無かった。

「……ならん。狙撃を考えれば、宮殿内での迎撃が確実だ」

ステファニーの言葉は、理にかなった正論である。

銃火器で蜂の巣になる危険性を考えれば、宮殿内での迎撃が正しい選択肢だ。

それは、オリアンヌも納得の上であった。

「エドガー様は、中庭での迎撃を指示したのでは無いですか？」

だが。ここフランスにおいては、ことオリアンヌにとってはそれ以上は存在しない、という理がある。

「……」

押し黙ったステファニーの目が微かに困惑に揺れるのを、オリアンヌは見逃さなかった。

「……オリアンヌ。私は大統領への反抗心から、貴様に大統領の采配より自身の作戦を優先して伝えたわけでは無い。これは——」

「……良いのです。統合参謀長。私は、エドガー様の為にありましよう。これだけは、例えば貴女の命であったとしても譲れない」

ステファニーは、エドガーのものとは異なる指示をオリアンヌに出そうとした。

その真意をオリアンヌに伝えようとし、しかしそれを遮つてのオリアンヌの言葉に、口を閉ざす。

「わかった。尽力に期待する。……大統領に出撃の報告をする事を許そう」

時間が無い。敵が迫ってきている。だが、その中でもステファニーはエドガーへの謁見の許可を与えてくれると言う。

「……いいえ、不要です。私がエドガー様に報告するのは、勝利以外には必要ありません」

「そうか」

短く返事を返し、二人の会話はそれっきりだった。

失礼いたします、とオリアンヌが背を向け、宮殿の中庭へと歩いていく。

その場に残ったステファニーは、それを見送った後、大統領執務室の扉を叩いた。

「そうだ、来るがいい」

眼前の黒の戦闘服の部隊と人間の胴体を連ねた怪物の群れに、たった一人向き合う。

ハルバードを振るい、異形の怪物を一匹、叩き潰す。

返す刃でもう一匹を。

「どうした、その程度か！ エドガー様の首が欲しいのだろうか!？」

鬨の声を上げるオリアンヌの腹に、何本もの昆虫の牙……変態した襲撃者達の一撃が突き刺さる。

『薬』はもう残っておらず、先の戦闘から時間が経過し既に変態は解けかけている。

首からは変態で誤魔化せていただけの深い傷が開き血を流し、強固な装甲も薄れているため手傷を負い、さらには脳を大きく揺らされた。

この状態で戦列に復帰している事自体が異常な状況であった。

「……終わりか？」

突き刺さった牙に既に奴は能力を維持できていない、と勝利を確信した襲撃者達の顔色が代わり、その変わった顔色は次の瞬間首ごと宙に弾け飛ぶ。

襲撃者達に動揺が走るも、元々単純な命令しか受け付けず、指揮者が死亡している異形の怪物は別だった。

群れを成して人体の津波とも呼ぶべき歪な集団はオリアンヌの四肢を拘束し、その命を刈り取らんとする。

振り払う。叩き潰す、引き裂く。自身の両腕の凶器と得物であるハルバードを振るい、オリアンヌは異形の群れを一体、又一体と始末していく。

だが、その勇ましい光景を見て、襲撃者達は再び勝利を確信し、足を進めた。

オリアンヌが、じりじりと後退していき、体に傷が増えていつてい  
るのだ。

勝てる。もはや相手は死に体だ。目の前の相手は無敵の盾などでは  
なく、複数でかかれれば仕留められる相手だ。

その通り、オリアンヌは既に限界を迎えつつあった。

脚は動かず、手を振るった勢いで姿勢が傾くような惨めな状態だと  
自嘲する。

ここが、自分の死地だ。

「……!?」

だが、そこでオリアンヌの顔色が驚愕に歪む。

どんな敵の攻勢にも、その数にも決して変わらなかったその表情  
が。

『オリアンヌ・ド・ヴァリエ近衛長』

彼女の名を呼んだのは、耳に入っていた通信機だった。だが、ただそれだけで歴戦の武人である彼女の心臓は跳ね上がる。

「エドガー、様……」

……それが、敬愛する主君の声だったからだ。

今この場で跪きたい気分だった。

エリゼの宮を汚す冒瀆を許した失態を謝罪したかった。

日々のように、その偉大さを讃える言葉を即座に頭の中に浮かべた。

『ああ、いつものくどい世辞も謝罪も必要無い。体を動かしながら黙って聞け。一言だけだ』

だが、エドガーはその反応を全て想定しているかのように否定する。

「御意に」

震える声で、オリアンヌは沙汰を待つ。

そして、エドガーからオリアンヌに告げられたのは、彼の言葉通り、たったの一言だった。

それを最後に、通信は切れ、もう繋がる事は無かった。

「……ふ、はは」

怪物を切り飛ばし、襲撃者の首を抉り取り、屍の山に立つオリアンヌ。彼女は、震えた声で笑う。

4人殺した。12体殺した。だが、ここまでだ。

二人の襲撃者が同時に、オリアンヌの首に刃を突き立てる。

疲弊しきった体では回避も防御もできず。

それは抵抗を与えずに貫通し、喉に風穴を開けた。

化物め、仲間の仇だとばかりにオリアンヌに殺到する襲撃者達。

だから、反応が遅れた。

中庭の奥まで後退するオリアンヌをその分進んで攻撃していた。だから、もはや撤退など不可能な位置にあった。

空の端に、何かが光る。

襲撃者達もまた大統領暗殺補佐の為にえりすぐられた兵士である。空を切るその音に一拍は遅れたが気付きそちらに目を向け、そしてその表情は理解と共に恐怖の一色に染まる。

巡航ミサイルだ。隣の陸軍基地からか、航空機から放たれたか。いいや、そんな事は問題では無い。それは、このエリゼ宮の中庭に向けて突き進んでくる。

エドガー・ド・デカルトは正気か、と襲撃者の一人が思った。己の覇道が為、腹心の部下諸共焼き尽くそうとするなどと。

オリアンヌ・ド・ヴァリエは正気か、と襲撃者の一人は叫んだ。これを承知の上で、自分達を迎撃しに来たのか、と。

「そうだと……エドガー様なら、こうしてくれると信じていた」茫然とその場に立つ。もはや叶わないと理解しながらも逃げ出そうとする。

そんな狂騒の中で笑うのは、ただ一人の平常心を保った、狂信に等しい忠義を主に捧げる武人だった。

血の気が失せ、立つのもやっとの状態で、オリアンヌは空を見上げる。

統合参謀長はこの事を知っていた。

だから、自分に宮殿内での防衛を命令した。

この戦乱を乗り越えた後の戦力の減少を危惧したのか、それとも部下である自分に微かでも情を持ってきていたのかはわからない。

たとえエリゼ宮殿内部で交戦しても今の自分では侵入者を全て仕留められていたかはわからない。

だというのに中庭で押し留めて諸共焼く、では無く防衛戦が突破されエドガー様に刃が届くリスクを飲んでまで自分が生存する可能性を選んだのは、それだけの価値を自分に見出してきていたのだ。きつとそれはそれで、誇りに思うべき事なのだろう。

だが自分は、エドガー様の盾として、外敵がエドガー様に決して触れる事を許さない道を選んだ。

エドガー様は情に絆されるような事は無く、死に体の自分を最後の最後まで有効活用してくれると信じていた。

だからこそ、統合参謀長が隠そうとしたエドガー様のお考えを言い当てる事ができたのだ。

自分は、エドガー様の事を真に理解し、自分が思い描いた理想の主と現実には一片の違いも無かったのだ。

「……フィリップ、セレストン……後は、任せた」

空を見る。頬を撫でる風は涼しく、首に空いた風穴を通る風には、くすぐったい気分になる。

不思議と悪い気分はしなかった。死ぬには良い日、というものなのだろう。

「残念だったな、賊軍ども——」

空が閉じるように、終わりは近づいてくる。

至らぬ身ではあったが、主を守り通す事ができた。それに……

——大儀であったな

他ならぬエドガー様より、最高の誉れを頂戴した。

戦場で何かを考える間もなく消し飛ぶ最期を迎えると思っていたのだ。



私には、それだけで十分すぎる。

「エドガー様  
私の勝ちだ」

ああ、でも。ただ、一つだけ。

お前達と一緒にエドガー様が天へ至る瞬間を見届けられないのが、  
少しだけ悔しいな。

## Mind Game：第13話 上帝脈動

夜が明け、日が昇る。

偽りの神樹は枯れ、試練の果実は腐り落つ。

盾は焼け落ち、しかして母屋は火を浴びず。

此処は再び平穩の都。

おお芳晴かんばらしき日よ！ 花柳かな！ 華麗かな！

さあ、意気踏々たる凱旋のギャロップを踏み、朝の光の中へ、中へ。

剛大とキャロルが合流したのは、日が微かに昇り始める早朝の事だった。

剛大が怪物から市民を庇いながら避難をしている最中、突然怪物の群れが、引き潮のように追撃を止め護衛していた市民の集団とは逆の方向へと進んでいった。

脅威は消え、しかし根拠も無く安全と断ずる事はできなかつたためしばらくは市民に随行し、軍の救援部隊に保護されるのを見届け。

そこで、剛大は、こっそりと、しかし素早くその場を離れた。

自分達はフランスの援軍では無い。盤外の戦争に巻き込まれる無辜の一般人を守りに来た、というのは事実ではあるが、それを公にできない立場である。

MO能力を用いた大規模な襲撃。軍部でもMO手術、という技術の存在は広く知られているだろうし、今回のこの事件を対処するにあたって情報共有がなされているかもしれない。

なので機密が漏洩する、だとかそんな心配は全く無い。

そもそも市民にその変態を行った姿を見られてしまっているため手遅れである。

問題なのは、何も事情を知らない軍人から今の剛大を見ればどう映るだろうかと言う部分だ。

外国人のMO手術被術者が、この混乱のさ中で街中を何やらうろついている。

恐らく、敵対勢力の手先との疑いをかけられてしまうのでは無かる

うか。

市民が自分達を守ろうとしてくれていた、と擁護してくれるかもしれない。

そのためいきなり敵対状態になるという可能性は低いだろう。

しかし、結局国の管理下に無いMO手術を施されている得体の知れない人間である、という事実までは変わらない。

戦力が足りないからこの騒動を収めるために協力して欲しい、という要請は問題無いのだが、そこから国にあれこれ取り調べを受けるのはまずい。

そのような理由により、剛大は場を離れた。

怪物の数は減り、軍の救援も間に合った。

ならば、自分は別の場所の救援に行くべきだ。

そうして、剛大はキャロルが向かった教会へと急いだ。

最悪の可能性も視野にいれていた。

相手は一度二人がかりで勝てなかった相手だ。キャロル一人ではさらに勝算は薄いだらう。

いざという時のため、『薬』を手にしながら。

「終わり、ました」

そして、目にしたのは教会の床に空いた穴と、全身に傷を負い力なく座り込んでいるキャロルの姿。

無事……では無いが良かった、と胸をなで下ろした剛大に、キャロルは勝利の歓喜でも無く、傷への苦悶でも無く、ただ、悲し気に一言で戦いの結末を告げた。

キャロルの簡易的な手当と水分補給の後、二人は互いの状況を説明した。

剛大は怪物が市民を狙わなくなり、軍の保護も各所で追いつき始めた事を。

キャロルは無数の怪物を生み出しフランスを襲撃した元凶、アヴァターラを討ち取った事を。

捕縛する事は叶わず、相手は死亡した事も含めて。

これからどうするか。キャロルは傷が軽いものでは無いため暫くは動けないだろう。

引き続き、剛大が残った怪物の掃討に当たるか。

結論として、話し合った末にここで二人はフランス軍に身分を明かしてでも残った市民の救助を優先するべきだ、と考えた。

自分達の事情をどこまで話すか。いつまで協力するか。もし相手が実力行使に出て来たらどうするか。それらの対応を話し合い、さあ動こうとなった、そのタイミングで。

『二人とも、無事かい？』

緊急用の連絡回線から届いた声に、剛大とキャロルは同時に目を丸くした。

キャロルにとっては馴染みのある、剛大にとっては少し距離が遠いため畏まった調子になってしまふ、その相手。

「兩名、命に別状は無く。いかがなさいましたか、クロード博士」

キャロルと剛大をこのフランスに送り出した人間の一人であるクロード・ヴァレンシユタイン博士に、剛大は困惑しながらもこの通信の意図を問う。

手分けして、剛大が市民の保護に向かう。キャロルが敵の指揮官と交戦に入る。それが、剛大とキャロルがU—N—A—S—A側に行った最後の報告だった。

その結果報告が待ちきれずに確認を行いに来たのだろうか、と一瞬二人は考えた。

だが、それがクロード博士である必要性は無い。

彼はあくまでも研究者だ。アメリカ方面での新型ウイルスのワクチン開発に手を割いているとも聞いていた。

そんな多忙な彼がわざわざこちらに連絡を、しかも緊急の回線で連絡を入れてくるのは、何かあったのだろうか？

『早急に、対処しなければならぬ問題が起こったんだ。そうだね、一言で言うところ……』

クロード博士の声色が、少しずつ重たいものへと変わっていく。そして。

『放置すれば世界が滅びるかもしれないものが、地球に投下された』

「……………」

掴みの一言で、二人は啞然とした。

滅びる？ 世界が？

こんな状況でクロード博士が冗談を言うとも詩的な表現で何かを表すとも思えないので、これは事実をそのまま語ったものなのだろうと二人は説明を待つ。

その後、より詳細な説明は後で行うが、という前置きの後、クロード博士からその言葉の意味が語られた。

先日、アフリカのリカバリーゾーンとベネズエラの熱帯雨林にそれぞれロケットが不時着した。

即座にU—N A S Aの調査隊が編成され、両方に向かったのだが。結論から言えば、ロケットは発見された。

だが、その中身は両方とももぬけの空であった。

一体何が積まれていたのか、大した内部容積も無い小型の機体、大規模な兵器の類は入っていないだろう。

……と、それを地球に打ち込んだであろう相手、アダム・ベイリアルを知るごく一部のU—N A S Aの人間はほっと息をつく……事が、できなかつた。

ベネズエラのロケット。内部から無理矢理ぶち破つたと思われる穴の開いたその周囲にあったのは、一体なにをすればこうなるのかという盛大な破壊と、夥しい血の痕。

リカバリーゾーンのロケット。その周囲は、生物が別の生物を無理矢理混ぜ込んだかのような奇怪な形状に変異し、変わり果てていた。

その周囲の環境そのものが、異常を示していたのだ。

後にロケットの内部を調査した結果、食糧や水が積まれていた事がわかつた。即ち、人間がこの中に入っていた。

ベネズエラのロケットの周囲で一体何が起こったかは定かでは無い。その中身の所在も不明である。

しかし、リカバリーゾーンの方は、そうでは無かつた。

一つに、先んじて到着していたフランス軍の調査隊。

先発部隊に次ぐ第二陣らしい彼らによれば、ロケットは調査したが、中には何も無かったとの報告だった。

第二に、異常に変質した周囲の環境。

こちらに関しての現地で情報を共有した際のフランス軍調査隊の見解は、「ロケット内に化学兵器が積まれていたのでは無いか」というものであった。

一度は、それで収まった。だが、後に現地のサンプルを分析した結果恐ろしい事実が発覚した。

それと、ロケット内の水と食糧が消費されていたという調査からわかった事実。この二つを合わせて、考えると。

『アダム・ベイリアルによって極めて危険な手術ベースを組み込まれた人間が、フランスに確保された可能性が極めて高い』

その事実を、剛大とキャロルはクロード博士の声と同じ、重い調子で受け取った。

キャロルはこの任務に就く前にシモンから聞いていた。”アメリカ力が滅ぶかもしれない”フランスの罪無き人々が大勢犠牲になるかもしれない”と。

フランスの方面は、何とか被害が最小限になるように抑え込もうとして、ようやく終息の兆しが見えてきた。アメリカでは、皆が今この瞬間も奮闘している。

なのに、ついでのように地球に何かを放り込んできて、それが世界を滅ぼす？

まるで、皆の尽力を嘲笑うかのような規模の拡大とその悪意に、思わず憤りが浮かんでしまう。

『これは、無謀な頼みだと私は思う。正直なところ、戦力も情報も、何もかもが足りてない。でも、それ以上に時間が足りないんだ。どうか、お願いしたい』

敵の所在は不明。

どれほどの戦力なのかも、不明。  
これはクロード博士の言葉通りに無謀な頼みだ。

「……正直、実感が薄いんです。世界が急に滅びるなんて、物語の中でしか見た事が無くて。それを自分がどうこうできる、とも思えなくて」

クロード博士の言葉に先に答えたのは、キャロルだった。

世界の破滅などという事象は万全の体調であつても自分という個人ではどうもできない、それが人類一般の普遍的な考え方であろう。キャロルの言葉も、それに違わぬものである。

「でも、言っちゃつたんです。最期まで、何が起こつても皆と一緒に進み続けて、皆を守るって」

だが、彼女には理由があつた。

「それを聞いて、上手くいきますように、つて祈つて託してくれた人が、いたんです。一緒に泣いて笑つて、こんなまだまだなアタシを信じてくれてる仲間みんなが、いるんです」

彼女の言葉を聞き、それが良き結末に辿り着けますようにと祈りを捧げた人間がいた。

共に汗を流し、この世界の未来の為に頑張ろうと励まし合い、今この瞬間も別の場所で戦つたり、来る日の為に修練を続ける仲間がいる。

「だから、アタシはそんな皆に恥じないように生きたい、つて思うんです」

だから、自分は皆に笑つて顔を合わせられるような、そんな人間でありたい。

息継ぎも忘れた様子で、力強く。キャロルは、クロード博士に言い切る。

『……島原君は、どうだろうか』

「自分は、組織の一員として命令とあらば従うまでです。それに……」  
キャロルとは真逆に、剛大は静かな調子で。

「世界が減びるといふ事は、自分の家族も失われる、という事です。それは自分に看過できるものでは到底無い」

しかし、その内にある譲れぬ部分を、クロード博士に吐露する。

『……二人共、ありがとう。それでは、作戦を伝える』

この無謀な戦いに身を投じる二人に、感謝の言葉と同時に、クロード博士は話を纏める。

『目標の居場所はU—N—A—S—A第六支局の協力も得て目下捜索中だ。発見次第、それを叩く。シンプルだが、先にも伝えた通り困難を極める任務だ。どうか、健闘を祈っている。情報が入るまで、体を休めて欲しい』

通信は、そこで終わった。

最後は短い通信だったが、クロード博士も情報の収集と分析に急いでいるのだろう。

長々とした労いの言葉などより、今は任務に当たる彼らに一つでも多くの情報を与える。

そんな、彼なりの現場への尽くし方、というものなのだろう。

……そして、彼らが何よりも欲しい情報は、数時間後にネットニュースの疑わしい記事と、その直後のクロード博士の通信による答え合わせで知る事となる。

『フランス陸軍輸送へり、バルト海方面に向けて飛行中行方不明?』  
……と。

---

——フランス 大統領執務室

「クハハ！ 静養中に無理に通せなどと、随分と品の無い国家元首も



いたものだ。なあ——」

エドガーの玉座とでも呼ぶべき、エリゼ宮殿、大統領執務室。普段は豪勢な調度品で整えられたその部屋は、まるで、嵐でも通り過ぎたかのように荒れ果てていた。

黒革の装丁がなされた本はそこかしこに散らばり、絨毯は割れた瓶からこぼれ出たワインで汚れている。

そんな異常な状態の中、エドガーは椅子に深くもたれ掛かり、机の上のモニターに向かい合っていた。

通信の相手は、神経質そうな60代半ば程と思われる男性だ。

分厚い丸眼鏡越しに伺える目には皺を寄せ、口を曲げているその表情からは、伺えるのは、強い怒りの意思。

「——フィンランド共和国大統領、サムエル・ハカミエスよ」

そんな彼、エドガーが名を呼んだフィンランド共和国の大統領であるサムエルの突然かつ強引な通信に、エドガーは嘲笑を以て応える。

『……品が無いのはどちらだ、エドガー・ド・デカルト！』

当然、それはサムエルの怒りに強く触れる。

何故ならば。

『我が国土に武装した兵士を送り込まれ抗議しない人間があるかッ！！』

軍事的な侵略行動を、フランスから受けていたから。

早朝、軍用の高速輸送ヘリが突如バルト海方面から飛来し、フィンランドの国防軍は大慌てで対処に当たるハメとなった。

英語、ロシア語、イタリア語、ドイツ語、フランス語、諸々の言語のいずれにも答えなかったその機体は地对空ミサイルにより、回避こそしたものの姿勢を崩し墜落、幸運にもそれは人里離れた森林地帯に落下した。

その後の迅速な画像判別から、侵入を測った機体はフランス製であり、輸出が行われていない機種である事が判明。

即座に抗議と共に大統領間の直接対話をサムエルが望み、今に至る。

「ほう？ 国土に武装した兵士を送り込むという行為は品が無いのか？」

『……貴様、耄碌しているのか？』

しかし、そんな怒りもどこ吹く風、首を傾げながら何がおかしいのかわからない、と尋ねるエドガーに、サムエルは怒りより先に呆れの感情を見せる。

宣戦布告も同義の行為を行ってにおいて、それを否定しないどころかいけない事なのか？ と言わんばかりの対応など、コイツはどうかしているのでは無いかと。

「クハハハハ！ 余を笑い死にさせる気が貴様は！ では——」

再度の笑い。

何がおかしい、とサムエルが発する隙も無く、次いでその理由は語られる。

「——貴様は自分が致命的に品性に欠くと認めるのだな？」

『何の話だ』

「余のフランスにカルトの使いを土足で上がりこませ、兵士に沿岸部を羽虫のようにうろつかせていたのはどこの国だ？」

『それこそ、何の話か理解ができないな』

この度のフランスを襲った事件。

それを誰が命じたのか。

その追求に、サムエルは冷めた瞳で返す。

「本当に理解ができていないのであれば、貴様は既に寄生虫に食い荒らされた後、というわけだな」

『貴様……余程国際社会の裁きに合いたいと見える』

そこで初めて、道化でも見るかのようなだったエドガーの表情が変わる。

もはや貴様などに興味は無い、とでも言わんばかりの無表情。

『秩序と足並みを乱す貴様とフランスにはさぞや冷たい目が向けられ

るだろうよ』

まるで、会話の始めのエドガーのように侮蔑と嘲笑込めた笑みを浮かべるサムエル。

サムエルの認識は何も間違っていない。

国を跨いだマフィアの台頭、日に日に力を増していく中国や衰えはしたがそれに近い力を持っているアメリカといった超大国という外部の軍事的、経済的脅威に、北欧も含むヨーロッパ諸国は一丸となって対抗してきた。

今回のフランスの突然の軍事行動はその足並みを乱すものだ各国に非難を受けるだろう。

「成程」

『先ほどの無礼を撤回し我が国に向けて謝罪の声明を出すならば、まだ貴様の立場は保たれるかもしれないぞ?』

短く返したエドガーに、ここだ押せと言わんばかりに前のめりにサムエルは提案する。

自分とフィンランドに無礼を働いた事を認め謝罪しろ、と。そうすれば、不幸な事故だった、で留めてやらんでもない、と。

「ところで、貴様は知らないのか? その墜落地点に何があるのか」

『……? 人的被害が出ていない、何も無い場所からこそ、貴様を許してやれるのだが?』

確認だ、というエドガーに、サムエルは言葉の意図が理解できない様子で、だが会話の主導権を握ろうと話す。

「成程。これは傑作だな。泥人形も人を見る目くらいは付いているのか」

『大統領! 墜落地点より、テラ……人型の空を飛ぶ生物が……それに』

『……何だと!?!』

そこで、会話に声加わる。モニターの向こうには、秘書だろうか? 焦った様子の青年がサムエルに報告書を渡している。そこで通信中である事に気付いたのだろう。一般人には機密になっているそ

の名前を伏せながら。

『これは……！』

エドガーを脇目に置き、サムエルは資料を見て一瞬で顔を蒼白にする。

ヘリの墜落現場の写真だ。

墜落し、地面に突き刺さったヘリ。それにより地面が抉られ露わになった地表。

それは岩盤等では無く、何らかの研究施設と見られる天井だった。さらには、周囲の植物がごく一部ではあるが奇妙な姿に変わっていた。

「それを世間に公表してみるか？ 『フランスに攻撃されてこつそり隠していた危険生物の研究施設が破壊された』とでも言うのか？ それとも施設の事を隠蔽して誰も外に漏らさないと信じられるだけの支持が貴様にあるのか？」

『う、な、何を……』

この時点で既に、首脳の会談に勝ち負けを付けるのはナンセンスではあるものの、勝敗は見えていた。

何とか取り繕おうとするサムエルに、しかしエドガーは手を緩めない。

「貴様、今回の一件を利用して自分の名誉を回復しようとしていたな？ 重なる失政、それによる経済の後退。成程、そこで国土を侵そうとする無礼者として余を罰すれば、愚民どもからの映えは良くなり、その敵意もこちらに向くだろうな」

サムエルの浅はかな考えを、野菜の皮を削ぐようにはつきりと言葉に出して明らかにしていく。

「そして何より、余に一杯食わせた、とすれば奴からの覚えも良くなるだろう、とな。そうだろう——」

そして、最後に。国民の支持よりも、サムエルが恐れていたもの。

「——オリヴィエ・G・ニュートンよ」

『……な、なに、なにを』

『うん、そうだね』

その名に、サムエルの背後が答えた。

『アルト！ 貴様……ああ、いえ、貴方、様……は……』

『こんにちは、エドガー君。おはようの方がいいかな？ 素敵なプレゼントをありがとう』

先ほどの焦った様子とは違い、すらすらと言葉を並べていく、サムエルの秘書……だったはずの青年。

いきなり秘書が会話に入って来た事を反射的に怒鳴ったサムエルは、その口調とエドガーとの会話の様子に状況を悟り蒼白を通り越して蠟のような顔色になる。

『サムエル君はちよつと頼りなかったから、研究施設とかあれこれの事は伏せていたのだけど……やっぱり、正解だったようだ』

「お飾りの人形にしてももう少し慎重に選ぶ事だな。貴様の底が知れるぞっ。」

『ご忠告、痛み入るよ』

おどけた様子で肩をすくめるオリヴィエに、エドガーは不快そうに鼻を鳴らす。

「こんな所で油を売っているよりも、貴様にはやる事があるだろう」

『いいや？ 今回は少し経過を観察してみようかな、って思うんだ』

エドガーの呆れた様子の言葉に、オリヴィエはのんびりと返答する。

「クハハ……手遅れになっても知らんぞ？」

『あはは……そうになったら、その時はその時さ』

——まあ、流石に家に入られそうになったら対策くらいはするけどね？

震えるサムエルは、もはや両者の表向きだけは和やかな会話に耳を傾けられてはいなかった。

そして、もはや逃げ出す事など不可能である事もわかっている。

「つくづく不快な男だ……無駄な時間を使ってしまった。ではな」  
『お互い様だろうね。では、ごきげんよう』

そして、別れの挨拶だけはきちんと交わし、フランスとフィンランド——それぞれの表と裏、二人の主は通信を切った。



かけ、数秒して納得した後、アストリスは紅茶を口に運ぶ。もつともつと、お客様がいらつしやらないかしら。そう呟き、見回す周囲。

そこには、外傷一つなく息絶えた、数十人の武装した兵士と、異形と化した森林の木々が広がっていた。

「……ブリーフィングで、聞いてはいましたが」「いざ、目にすると……」

フードを脱ぎ、視界を広く持つて周囲を見回したキャロルと剛大は、二人同時に表情を曇らせた。

彼らの目の前に広がるのは、北国の植生としてよく見られる針葉樹の森林……だった、何か。

枝に蠅か蜻蛉か、複眼が目立って見える昆虫の目玉が果実の代わりだ、と言わんばかりに無数に実っている木。

鹿か猪か、白と茶のまだら模様の動物の毛皮が樹皮の代わりに表層を覆っている木。

葉の代わりに魚の鱗が茂っている枝。

シミュレリアリスム超現実主義の絵画をそのまま現実に持ってきたかのような眼前の光景に、悪い意味で目を奪われる。

——信じ難いかもしれないが、これは現実だ。

二人の脳裏には、ここに到着し早々に行った情報共有の会議でのクロード博士の言葉が、同時に浮かんでいた。

今より八時間程前。フランスで待機していた二人に、クロード博士から通信が入った。

敵の詳細な場所が判明した、と。詳細な説明を行う前に、ひとまずは現地まで移動して欲しいとの事で、二人はその現地と言われた場所——フィンランドへと飛ぶ事になった。

3時間のフライトの中で睡眠を取り、フィンランドへ到着したのがおおよそ16時の事である。

そこから現地に向かう列車の個室で行われたモニターを介しての



ブリーフィングで、クロード博士から告げられた内容。

それは、一般的な人間の感性からすれば時間をかけても理解し難い風景の映像と、早急に対処しなければ、と即座に理解できる現場の情報だった。

フランス軍のヘリが森林地帯に墜落。その墜落地点が、運悪くテラフォーマーの極秘研究施設だった。墜落した衝撃なのか、他に理由があるのか、それによって施設のテラフォーマーが脱走。

事態を重く見たフィンランド政府は会見を開き、距離はある程度離れており規模も小さいが近隣の街からの全面避難の支持とヘリの墜落から生き残った武装勢力を掃討するため、という名目で最寄りの軍基地から即応部隊を派遣した。

施設の規模から推測するにどれだけ多くても数十匹、といったところだろう。

さらには、テラフォーマーを取り扱う機密施設はU—N—A—S—Aを始めとして様々な国の機関に存在するが、各国の裏での協定により、火星の個体よりも身体能力や甲皮の強度を劣化させたクローン個体しか保有を許されていない。

ならば、そこまでの脅威では無い。一般人にとっては危険極まりない事は変わりないが、訓練を受けた軍人が部隊単位で対処すれば排除できない相手ではない。

……と、思っていた。

突如、現地で対処に当たっていた部隊との通信が途絶。

現場の状況を把握するべく、偵察用の無人機によって上空から目撃されたのは、想定を超える数のテラフォーマーの大軍勢……などでは無く。

一地点を中心に、異形へと変質していく森の姿だった。

研究所にテラフォーマーだけでは無く、何らかの汚染物質が保管されていた？

変質した森に何が起こっているかわからず、内部には解き放たれたテラフォーマーの群れ。

ミサイルや砲弾を撃ち込んで何とかできる規模のものでは無く、原

因もわからないためへ々に焼き尽くしたり吹き飛ばしたりすればさらに拡散する恐れすらある。

軍部は対応に追われ、大統領は不幸な事に体調不良により表に出られない状態。

事態は、人智を超越した理解も制御も不能な状態へと進行していく。

『……というのが、私達と第七特務の電子工員がかき集めた現状のフィンランド政府の対応と実際の状態だ』

一概に、フィンランドの政府を否定する事はできないだろう。

相手は想像以上に強大で、理解の範疇に無い狂人の生み出した怪物なのだから。

だが、それとこの問題を指を咥えて眺めていられるか、というのは全く別の問題である。

状況を纏めると、戦わねばならない相手はロケットによって撃ち込まれた周囲の環境を捻じ曲げている元凶、加えて総数不明のテラフォーマー。

場所は、視界の悪い森林地帯。このフィンランドが平地の多い土地にある国であり、現場もその例に漏れない地形であるというのが僅かな救いだらうか。

「クロード博士、お聞きしたい事が」

『何かな』

そこで、キャロルがクロード博士に向け、僅かに手を挙げて質問する。

「これは、MO手術によるものなのでしょうか」

周囲の環境を異形へと捻じ曲げる。それは、一個人が、一種の生物の行える御業とは到底思えなかった。

破壊するで無く、死滅させるでもなく。ただ、その在り方を書き換える。

これは本当に、MO手術を受けた一個人によって成せる事なのだろうか、と。

『……それを、今から説明しようと思う。推測混じりになるけど、ある程度は正しいと思われる。最悪な事ではあるが、私には奴らの考えはある程度わかってしまうからね。そして、君達には一つ、覚悟を決めて欲しい——』

クロード博士から語られた内容。それは、今この地で何がどのように起こっているのか、その根源であり——

異形の森へと二人は足を踏み入れる。

冷たい空気が喉を刺し、同時に漂ってくるのは、死の匂いだった。鼻が曲がるような腐臭というわけでは無い。微かなものだ。

だが、この空間のところかしこで、死んだ生き物の匂いが漂っている。

「……」

その匂いを発する主を数分も歩かぬ内に発見し、剛大は微かに眉を動かす。

腹を大きく抉られた、3mはあろうかという大きなシカが横たわっていた。恐らく、ヘラジカだろう。

恐らく、としか言えないのには理由がある。

「島原さん、これ」

キャロルがいつもより暗い調子の声で、ライトでその体の一点を差す。

それは、ヘラジカという動物の最も特徴的であろう部位、角。

その名の通りヘラのような形状であるはずの頭から生えたそれは、巨大な触角へと置き換わっていた。

小さな昆虫の触角が巨大なサイズで目の前にある。

それは、サイズ感の違いこそあれど、まるでMO手術の被術者のような。

「……ええ、動物にも、影響が広がっている」

剛大もそれをはつきりと認識し、目の前の事実を声に出して呟く。植物だけでは無く、はつきりと動物にも異常が出ている。

事態は想定されているよりも深刻な状態なのかもしれない。

もし一度で元凶を押しさえられず撤退せざるを得なかった時のために、剛大はカメラを取り出し、その変質した角の写真を取ろうとする。その時、だった。

「……！」

グルルル、という威嚇の鳴き声。素早く反応しその方向を向いた二人の目に映ったのは、四頭の狼。

それも、一頭一頭がそれぞれ秩序無く変異した、異形の姿へと変じている状態の。

耳が蟻螂の鎌に置き換わった個体が、間も空けずに剛大に跳びかかる。

それを『葉』を用いない変態により迎撃しながら、剛大は後ずさる。

「こっちはアタシが止めます！」

キヤロルが『葉』を用い、背負っていたバリステイクシールドを構え、残りの三頭を油断なく見据える。

野生動物との交戦。

想定外の事態だ、とキヤロルの額を汗が伝う。

相手は元凶の1人とテラフォーマー、だと思っていた。

確かに、野生動物と戦闘するかもしれない事は想定していた。だが、想定外の変質した状態のこれは――

この場所に元凶がやってきて、半日と少ししか経っていない。だといふのに、ここまでの影響が出ているのか、と。クロード博士の『時間が無い』という言葉は全くの本当だった、と改めて噛みしめるキヤロル。

「フンッ！」

力の籠った声と共に、剛大の腕に発現した毒針が狼の一頭の喉を刺し貫く。

次いで、蹴りの一撃で向かってきたもう一頭。

「……逃げない、か」

二頭が相手に傷を負わせる事すらできずに敗れた。

それは、野生動物の彼らとしては勝てない相手だ、と撤退を選ぶに十分足る理由であるはず。

だというのに、逃げの選択肢など無い、と言わんばかりに残りの二頭は即座に跳びかかりこそしないが剛大とキャロルを見据えている。

見たところ空腹状態では無い。

恐らく、このヘラジカを食らったのが彼らだ。

だというのに、何故そこまで勝てない相手とその相手に奪われた（と思いこんでいるかもしれない）餌に執着する？

いや、違う。

剛大は相手の姿を見て、考える。

動物の気持ちかわかるわけでは無い。これは直感に過ぎない。

相手の動きは、選択肢の中から闘争、を選んでいるというよりも、そもそも闘争以外に選択肢が無いかのような？

根拠があるわけではない。だが、そんな予感が頭を過る。

しかし、それを深く掘り下げる間もなく、二頭が襲い来る。

最初の二頭より、動きが鈍い。相手を観察すれば、片方は右の前足が甲虫か何かのものへと変わっている。

成程、元の動物の脚と大きく異なる構造のそれを上手く使えないし、動かす事もできないのだ。

現代の文明社会で育った人間として、動物を仕留める事には忌避感がある。

だが、向かってくる相手ならば、相手が退こうとしてくれないならば、仕方ない。

悪いが、死んでくれ。

謝罪の言葉と共に繰り出された蹴りが、二頭の頭を打ち、それを碎き割る。

吹き飛ばされ木に叩き付けられ、血の痕を残しずると崩れ落ちる。

残されたのは、四頭の狼の死骸。

剛大とキャロル、二人に傷は無く。戦闘の結果で言えば完勝、だろう。

二人は墓を作ってやる暇も無くすまない、と彼らに一度目を向け、先に進む。

……違和感があった。

周囲が変異している状態でも拭い去れない、それとは別の、気味の悪い何かが。

途中、変異した動物を何度も見た。食らい合っているのも見た。そして何よりも、多数の生物の死骸が転がっているのを見た。

その違和感が、明確な形を持って決定的なものとなったのは、一匹の動物が死ぬ瞬間を見た時だった。

狼だ。先ほど交戦したものと同じ。

体に傷を負い、いくつかの戦いを潜り抜けてきた事がわかる。恐らく、こちらに気付けば襲い掛かって来る。

無益な戦闘で体力を消耗するのも、無為に動物を殺すのも避けたい。

剛大とキャロルはそう考えていたため、動物を目撃しても距離を取っていた。

二人が身を隠し遠巻きに観察していたその狼はふらりふらりと力無く歩き、そしてどさりと倒れた。

待て。何かがおかしい。  
ふと、それに気付いた二人は、倒れた狼へと駆け寄る。

「……………」  
酷い。それを見て、キャロルの顔が悲痛に歪む。

その狼の体は、何かに震えていた。

失血では無い。その身の傷は殆ど塞がっており、体に付いている血は恐らく敵対した相手のものだ。

だというのに、この狼は死に瀕している。何故か。

その全身の体毛は逆立っておらず遠巻きに見ていたため気付かなかったが、大幅に本数が減り硬質の棘となっていたのだ。さらには、その下の肌も部分的に甲虫のような固いものへ変わっていた。

——つまりは、恒温動物である彼らの本来の体毛や肌の役割の一つである保温の役になど立っていなかった。

この寒帯の大地で、本来ならば環境に適応しているはずの野生の動物が凍え死ぬ。

明らかに、生物の生態が狂い始めている。

なんだ、これは。

『二人とも、まだ生きてるかね』

愕然としていた二人に、通信が入る。それは先ほどまでのクロード博士とは別人の声だった。

「……ベルトルト博士」

「ど、どうも」

剛大は名を呼び、キャロルはほぼ話した事が無いその相手にこんな状況であるが恐縮ぎみに挨拶する。

ヨーゼフ・ベルトルト。キャロルにとってはクロード博士と共にワクチン開発に携わっているらしい科学者の人。剛大にとっては、同僚と呼ぶべき人間の一人。そんな立場の人間である。

『無事なら何よりだ。何か変わった事はあるかな?』

クロード博士は席を外しているため、代わりに自分が。

そのような理由を軽く語った後、通信機越しにヨーゼフは尋ねる。

「変異は動物にも及んでいるようです。さらに——」

何やら動物が変異した上で凶暴化? している事。

さらには、環境に適応できないような変異をして死んだ動物もいる事。

この森に踏み入ってからの事を、二人はヨーゼフに説明する。

『……君達は進化的軍拡競争、という言葉を知っているかな』

一連の状況の説明を黙って聞いていたヨーゼフは、少しの沈黙の後で語り始める。

いつもの生物談義の長話か、とそれを切って捨てる事はできなかった。

口調から、いつものひたすらに長い雑談では無く真剣みを帯びた内容である事が伝わったからだ。

進化的軍拡競争。それは、生物の進化の方向性を示す言葉である。

簡単に言えば、捕食被食、寄生者宿主といった敵対的關係にある二種類の生物間で、競い合うかのように相手に対抗する形質の変化、即ち進化が起こる、という内容だ。

例を挙げよう。

病原菌はある生物の免疫系を突破するため、免疫細胞に検知されなくなる機能や化学物質への耐性を高める形で、形質の変化が起こる。

その生物は病原菌を防ぐため、さらに高度な免疫系を獲得する形で形質が変化していく。

細菌はその発達した免疫系を突破するため、さらに……  
といった形である。

その様子はまるで仮想敵よりも優れた兵器を開発する、それに応じて相手がさらに優れた武器を、という人間社会での軍拡競争に似ている。

歩みを止めれば、待っているのは進歩した相手により与えられる滅びだ。

『

It takes all the running you can do,  
to keep in the same place.” 古典文

学の一見矛盾しているような響きの一節だが、正にこの状態を示して



いると思わないかね?』

くつくつと笑うヨーゼフ。だが、そこに楽しさのような感情は感じ取れない。

『だから、この進化的軍拡競争ともう一つの関連する要素を合わせた理論はこの一節を発した作中の人物の名を取りこよう呼ばれているのだよ』

ヨーゼフの言葉は平坦だ。普段の彼の通り、努めて冷静で、どこか他人事のようにも感じられる程だ。

それは二人に余計な心配を与えないため、なのかもしれない。

だが、それは逆に今の二人にとっては不穏な予感を感じさせてたまらないのであった。

『赤の女王仮説』とね』

「……あら」

異形の森の最深部で、退屈そうに椅子に座っていたアストリスは微かに首を傾げる。

音がする。そこかしこで起こっている動物の争いではなく、人間の声だ。

「まあ、まあ! お客様がいらっしやっただのかしら!」

その表情にぱあつと光が差し、椅子を蹴る勢いで立ち上がる。

さつき来た人達は、皆動かなくなってしまった。

今度の人達は、ちゃんとお茶会を一緒にしてくれるかしら?

森の皆は、けんかしてばかりでお茶会をしてくれないんですもの。

期待に胸を膨らませながら、アストリスは音のした方向、剛大とキャロルが現在彷徨っている方へと向かおうとし。

唐突に大きく身を振る。

瞬間、アストリスの首があった空間を銀の一閃が駆け、そこに最終

的に存在した左腕を切り飛ばした。

「わあ……わあ……い！」

ふるふると震え、切り落とされた自分の腕と断面、そしてその下手人を見て、アストリスは目を輝かせる。

「すごいわ！　とってもお速いのね！　さよならの時の詩みたいに突然なんでももの、びっくりしたわ！」

鋭利な切断面から血が流れ続けるのも厭わず、残った右腕で懐から『薬』を取り出すアストリスに対し、奇襲を仕掛けた人間はさらなる攻撃を加えるでなく、眩きと共に左手を微かに動かす。

「？<sup>ふむ</sup>……あの初撃を躲すとは、やはり簡単では無いですか」  
「ひゃあっ!？」

瞬間、アストリスの右腕が一人でに空へと掲げられる。

驚きの声と共に勝手に動いた自分の右腕を見れば、そこには糸が括りつけられ、頭上の木の太い枝を経由し相手の腕に繋がっていた。

「非礼はお許しいただきたいですな、お嬢さん」

襲撃者——龍百燐<sup>ロンバイリン</sup>は謝罪の言葉と共に、片腕を失いもう片腕を吊り上げられた状態のアストリスへと迫る。

——何もさせずに仕留める。

任務を終了した際にクロード博士から届いた新たな依頼の連絡。

世界を滅ぼす何か、の討滅。

自分が仕留めきれなかったアダム・ベイリアルを追って遙々来てみれば、世界の存亡がどう、という話になっているとは。

人生はこれだからやめられない。

などと面白がっていられる状況で無いのは、異形と化した森林の画像を見れば、そしてそこを実際に訪れ感じられる一面の死の匂いを感じればわかる。

躊躇無く、容赦無く。年若い婦女の命を奪うのに全く抵抗が無いと

言えば嘘になるかもしれないが、その天秤のもう片方には地球が乗っているのだ。

振るった刃は今度こそアストリスの首を抉らんと間近に迫る。

「今堀から落ちるのはもったいないかしら？」

じたばたともがくアストリスが脚を振り上げる。

百燐はその程度の抵抗で止められる程温い剣を振るうわけでは無い。

ただ、それは、普通の脚を振り上げただけならば、の話である。

「……むー」

戦士として長きに渡り戦場を生き抜いてきた百戦錬磨の直感と弛まず磨き抜いた彼本人の技量。それを以て、百燐は攻撃を止め全力で離脱する。

「貴方が見たのはブー ज्याムかしら？ それとも別のスナーク？」

瞬間、アストリスの脚が五つに分割される。

そしてそれらは、全く別の五種類の生物の器官へと変質する。

その身を拘束せんと迫る変異した元は脚の一本、数十本が束になった触手を百燐は切り落とし、もう一つの脚が変異した鉤爪を振り払う。蹄付きの筋肉質な脚の一撃は距離を取っていたため不発。残り二本は震えるのみで攻撃を仕掛けてはこなかった。

全力で距離を取りながら、百燐はアストリスの脚の変質の瞬間の挙動を見逃さなかった。

一本の脚が五本に分割し、それがさらに変質する。その中間段階、五分割した直後に様々な生物のものへと変化する際に、明らかに人間の脚では無い、随分と無機的な印象を与える形態へと変化していた。

クロード博士から、相手の手術ベースであろうものの情報は聞いていた。

だが、本来であればそれを施した所で、何ができるわけでも無い。力が強いわけでも、それ単体で何かを成せるわけでもない。

現状の我が国<sup>中</sup>のMO手術の技術水準ではほぼ確実に手術中に、億に一つ成功したとしても能力を発現させた途端に絶対に死を迎える、そんなベースだ。

それをここまで歪な形で能力を引き出すなど。

改めて、新たな職場で本格的に戦う事となる敵の脅威を実感する。

さらに悪い事に、新手の気配。奇襲は失敗した事を感じ取る。

「じ、じょう」

その新手は、森の影から現れた。

数匹のテラフォーマーが、アストリスに近付いていく。

先ほどアストリスが落とした『薬』、宝玉のような飴玉を拾い上げ、付いたゴミを丁寧に取り払い、まるで捧げものかのように跪き、手渡す。

他のテラフォーマーもまた、同じようにアストリスに跪く。

それは、テラフォーマーがスキンヘッド型と呼ばれる上位個体に傳く忠誠、とはまた違う形だ。

強いてそれを表現するならば。

「……信仰、ですか」

百燐はその光景を見て、短く呟く

そう、それは神に生贄を捧げるが如く。

ありがとう、とお礼を言ったアストリスは飴玉を口に含む。

そして、変異が始まる。

頭頂から生えるのは、十字架。

その周囲を囲うのは、無数の矢印状の器官。

それを例えるならば、宝冠だろうか。それとも、墓標だろうか？

左腕が瞬く間に再生し、次の瞬間腐り落ち、再び再生する。

昆虫の羽が、鳥の羽が、蝙蝠の羽が。

獣の牙が、昆虫の鉤爪が、蜘蛛の顎が。

毛皮が、鱗が、甲皮が、皮膚が。

「ぼこぼこ変異を繰り返して流動し、再生し続ける。

そして収束し、再生を終えた左腕が模るのは五本に分かれた無機質な繊維質の脚。

「ごめんなさい、お着換えに時間がかかってしまったわ、名も知らぬ勇者様」

日が暮れ、月すら昇らず。

肉体は歪みて崩れ、精神は保つ事能わず。

悪夢と現実の境は融け落ち、夢の胡蝶は異形と果てる。

其処は眠らぬ虚飾の庭園。

女王の御許に跪けば、正気が呻き狂気が産声を上げる。

さあ、ヴォーパルの剣を携え、今再び、宵の闇の中へ、中へ。

「どうか、私と踊ってくださいな？」

神の御使いが如く、十字架の宝冠の上を蝶がひらりひらりと舞う。

その光を弾く七色の翅はまるで夢のように美しく。

全てが人間の指へと変異した六本の脚は、まるで現実のように醜悪だった。

アストリス・メギストス・ニュートン

国籍：——／フランス

●歳 女 163cm 54kg

専用装備：体内内蔵型遺伝子変異活性機構『SYSTEM<sup>ム</sup>』：

Hハastalスターlykリク』

+

赤フェアリーピースの変則駒『Orphan』

アダム・ベイリアル直下戦力『S]EVEN SINS』番外：  
『虚栄』ヴァニティ

αMO手術

” 非細胞性生物型 ”

—— エイリアン・エンジン・ウイルス：♂型プロトタ

イブ

凶星Aより来たりし災禍E、  
侵食パンデミック氾濫。

赤アストリス・M・ニユートンの女王、  
来訪フォーリン。



M i n d   G a m e : 第15話   虚栄の庭（前編）

「オリヴィエ君……君の目指す『神様』はちよつとアレだと思うんだよ！」

『痛し痒し』勃発より前の事。

いつもの技術交換が終わり、少しの雑談で解散……という頃合いに、アダムは爆弾をぶち込んだ。

「……ふむ。理由を聞いても？」

それを受けたオリヴィエは、いつもと変わらない、感情の色が薄い笑みでアダムに聞き返す。

そのやり取りは、技術交換の際に相手の技術の欠点を指摘した際の両者の会話そのままである。

だが、その時と異なるのはオリヴィエの目が微かに細まり、歪な雰囲気が発せられているという事。

「まあまあ、そんなに怒らないで！   寿命縮むぞ☆   あ、オリヴィエ君は寿命とかないんだっけ！」

まるで、汚泥に足を取られるような禍々しいそれを、アダムは敏感に感じ取り、フォローにならないフォローを入れる。

だが、早くしろ、と続きを促すようなオリヴィエの目に、こほんとおつ咳をし、姿勢を正し。

「ただ一つ、唯一絶対の神様になる。立派、とっても立派かもね。でもね、僕はこう思うんだよ。その恩恵、皆に分けてあげようよ、ってね！」

演説するかのように、熱を込めて語りだすアダムの言葉を、オリヴィエは玉座に頬杖を付きたただ聞く。

「オリヴィエ君は『幼年期の終わり』って読んだ事はあるかい？」

「うん。だいぶ昔、だけど息子に読み聞かせた事があるかもしれない」  
それ小さい子に読みかせるものじゃないよね、とツツコミながらも、アダムはその古典作品のあらすじを諳んじていく。

遥かに優れた文明を持つ宇宙人が地球にやってきて、地球を管理下に置く。

絶対的な支配者による統治で争いが無くなり文明は発展し、人類は宇宙進出の道こそ無くなるものの平和を手にする。

簡単にさわりを言えば、このような物語だ。

「……上位存在による絶対的な管理。それは、原罪を抱かなかつた人間と神の在り方そのものだ」

「……」

その途中までの物語。

むしろそれは、反論の材料にはならずむしろ私が目指す神の在り方に近いのでは、とオリヴィエは呟く。

だが、そんな若干不満気な彼にアダムから返って来たのは、こらえきれない、という笑いだった。

「オリヴィエ君、やっぱ内容覚えてないでしょ！ 知ったかぶり、よくないよ！ これ、最高のギャグ小説なんだぜ？」

「……」

割と凶星なのでオリヴィエは黙り、アダムは話を続ける。

「その宇宙人……カレルレン君は、さらなる上位存在の使いっぱだったんだよ！ 人類はその上位存在に進化できる種族だったから、それを導くように、ってね！ 偉そうに人類を導く、とかやるときながら、内心では嫉妬メラメラだったんだろうね！」

想像しただけで笑えるよね、というアダム。

「……そんなわけで、僕は哀れなカレルレン君が大好きなのさ！ こんな惨めな献身、僕達にはとてもできたものじゃない！ だ、か、ら！ 逆に神様にはふさわしい、と思うんだよ」

我々にはとてもできたものではない、そこに関しては同意だとオリヴィエは首肯する。

彼が目指すのは、己という存在のみが絶対的な神となる世界。

管理下にある人間の進化を許すなど、それは押し流すべき今の世界をもう一度作る事と同義だ、と。

だが、アダムが指し示すのは、それとは別の形だ。

「僕が提示する神様の形！ それは……」

アダムが何を思いそれを言ったのか。本気でそう思っているのか、ただの自分やエドガーへの嫌味なのか、偽りとおふざけが形を成した彼がどこまで本気なのかは知れた事ではないが。

オリヴィエは、その答えを、私はそれを認めない、と断じる事になる。

それを実現しようとする存在が他ならぬ彼の細胞から生み出される事など、今この瞬間には知らないまま。

『皆で頑張つて進化しよう！』と応援する神様、だよ』

『3種目のA・Eウイルスが発見された』

それは、剛大とキャロルが今この場所、異形と化したフィンランドの森林地帯に赴く前の、クロード博士によるブリーフィングで語られた内容だった。

時間が無いから率直に、とクロード博士が最初に語った内容に、二人は啞然とした事を覚えている。

『エイリアン エンジン  
A・Eウイルス』

それは、彼らが二年後に火星へと赴く理由であり、今現在地球を侵している災厄の名だ。

火星を起源とし、人間に感染し逃れられぬ死を与える病魔。

それらは地球では現在、2種の存在が確認されていた。

一つは、『♀型』。

A・Eウイルスは、既存のウイルスで言えばT4ファージと呼ばれる細菌に寄生する種と似た外見をしている。

そのT4ファージと外見上で異なっているのは、♀型の名の通り、尾部の鞘と呼ばれる部位と頭部が『♀』のような形状をしているという点である。

人間に感染し、脳や心臓、臓器を変容させ死に至らしめる特異な症状を持ち、遺体から株を培養する事は困難。

テラフォーマーをゴキブリから進化させた元であり、幅広い生物を宿主とする。

こちらは、既に一人の天才の手によってワクチンが開発されつつある。

真に問題なのは、もう一種の方であった。

『♂型』。

こちらもその名そのまま、『♂』のマークのような形状の鞘と頭部を外見的な特徴としている。

だが、それは自然が生み出した、にしてはあまりにも歪な性質を有していた。

それが、感染するたびに根本から変質していく、というものであった。

増殖の際、周囲の遺伝子を手あたり次第に取り込み、自身の遺伝子を変質させるのである。

それはまるで、犬が猿を産むかのように根本そのものから遺伝子を書き換えるのだ。

今はまだ致命的な問題になっていないのは、奇跡と言っていないだろう。

だが、明日も安全であるとは限らない。

もし、感染性が高いウイルスの、致死性の病原体の、遺伝子を取り込んでしまったら？

ワクチンを作る事もままならないそれが変異し感染し続けたら？

待っているのは、人類の破滅だ。

増殖の度に変化する性質。それは、ワクチンの作成が不可能に等しい事を示している。

サンプルはいくらでも存在するが、変化の規則性を読み解けていない。

解決する手段はただ一つ、まだ変異していない原種を、火星から採取する事。

各国の優秀な科学者たちが頭を悩ませている問題であった。

『……………これを、見てほしい』

そして、3種目。

クロード博士がモニターに映したそれを見て、剛大とキャロルは顔

をしかめた。

それは、外見の時点で歪な状態である事が見てとれたから。大まかな外見は♀型のそれである。だが。

その鞘と頭部は大きくねじれ歪み、さらには殻を内側から突き破り無数の♂型の鞘が伸びていたのだ。

アフリカのリカバリーゾーンで歪に変化した森林。

そこから採取した昆虫の死骸から検出されたらしいそれは、培養実験の結果♀型と♂型の性質が絡み合った悍ましい存在である事が明らかになった。

♀型には、急速に生物の進化、即ち形質の変化を促進する性質があると近年の研究でわかっていた。

それも、一定の方向性を持って。

人、という種であるホモ・サピエンスが他の類人猿から分化したのは200〜180万年前とされている。

哺乳類の祖先が生まれたのはおおよそ2億5000年前と言われている。

つまり、哺乳類というグループが誕生してから現生の人類に進化するまでには2億年以上の月日が経っている。

だが、火星においてゴキブリが人間と遜色ない頭脳とより大きい体躯を持った人型生物に進化するのにかかった時間は、たったの500年である。

そこに、A・Eウイルスの真なる異常性がある。

ウイルスが他の宿主で増殖する際に取り込んだ遺伝子を別の宿主に感染した際に受け渡し、それが進化の一助になるという学説は確かに存在する。だが、AEウイルスが進化に与える影響は明らかにその比ではないのだ。

進化、というのは本来世代を経ての形質の変化を指すが、♀型が人間に感染した時の症状、臓器の変質は世代交代をするまでもなく形質を変化させる性質がある事を示している。

『異常な速度での形質変化』。これが、一つ。

♂型の特徴。それは、先に挙げた通り増殖の際に手あたり次第に周

困の遺伝子を取り込む事。

そして、ウイルスには増殖の際宿主に自身の遺伝子を受け渡す性質もある。

この二種が複合した結果、生まれたのは。

『周囲の様々な遺伝子を手あたり次第に取り込み、その遺伝子を受け渡し形質の変化を異常な速度で進行させる』

という性質。

『隠す必要も無いからはずきりと言おう。これを放置すれば、世界はすぐに終わる』

♀型は、既にワクチンの開発が進んでいる。量はまだ十分とは言えないが、時間が経てば増産も可能になるだろう。

♂型の脅威は、いつ爆発するかわからない。だが、それは逆に言えば、今この瞬間はまだ破滅を免れている、という事だ。

だが、この3種目は、違った。

生物から生物を乗り継ぎ、好き勝手に遺伝子を奪い取り受け渡し形質を歪めていく。

そこに残されるのは、ただただ無秩序に変異した生物による崩壊した生態系のみだ。

そして、細菌に感染する♂型と異なり幅広い生物に寄生できる♀型が軸になっていると思われる事から、あらゆる生物がその影響を受け、歪められ、感染範囲が拡大していく。

♂型と同様増殖のたびに変異するため、ワクチンもそう簡単には作れない。

『しかし、これがMO手術の力によってばら撒かれているのであれば、解決策がある』

それは、ある意味では無茶な賭けであった。

相手はA・EウイルスをMO能力としてその身に宿し、周囲にばら撒いている。

ならば、増殖の基盤となっているその身には、未変異の原種が存在しているのでは、と。

だからこそ、剛大とキャロルが任務に臨む理由があった。

♂型とは異なり、こちらは原種を地球で手に入れるチャンスがある。

ならばその機会を逃すわけにはいかない。

『……これが可能なのは今この場で私達だけだ。普通の軍人では、奴に近づく事すらできない』

フィンランドも軍を派遣しているだろうが、失敗に終わるだろう。

クロード博士の呟きに、剛大は異を唱えた。

相手がアダム・ベイリアルのみ出した兵器だとしても、MO能力として身に宿しているのがウイルスならば、

身体能力が高まる事もない、それなりに強い素体ではあるのかもしれないが部隊単位で挑めば制圧できるのではないかと。

しかし、モニターの向こうのクロード博士は首を横に振った。

『……先んじて潜入している私達アークの人員が採取したウイルスが、異常な活性化状態になっていた』

恐らく、相手の周囲には常に高密度のウイルスが渦巻き、さらには何らかの方法で活性化させる事ができる。

それを聞き、二人は納得してしまふ。普通の人間がそれに近寄ったら、どうなるのかを。

「体内を一瞬で変質させられ即死する、か……」

A. Eウイルスに耐性を持つ、MモザイクオーガンOを体内に持つ人間だけが、相対する事を許される相手。

英雄にしか怪物は殺せない。勇士のみが、女王に謁見する許可を与えられる。

それ以外は、戦場上がる事さえも許されない。

『……ただ、耐性がある君達でも、恐らく感染は免れられない。早急に、ワクチンを準備する必要がある』

MO手術の被術者はA. Eウイルスに耐性を持つ。

だが、それでも形質が変化した特殊な株が高濃度で存在する環境に晒され続けられれば、即座の死、こそ無くとも感染は免れられないだろう、と。

『何度言っても足りないが……情報も無く、こんな死地に君達を送り出す事を許してほしい』

その言葉を、剛大とキャロルは否定し――

そして、今。

クロードの代わりに彼らと通信をしているヨーゼフは、ここがどのような場所なのかを、改めて二人に説いていた。

『赤の女王仮説』。今のこの異常な生態系、その内訳を。

『……そもそも進化という事象は、よしこうやって進化してやろう！と考えて起こるのでは無く、偶然得た形質が生存に有利に働いた結果、次代を遺す事で行われる。自然淘汰、自然選択と呼ばれる事象だな』

そもそも、進化とはどのように起こるのか？

生物の形質の変化に、生物側が能動的に方向性を制御できる要素は存在しない。

全てはランダムな遺伝子変異によって起こっている。

環境が寒くなったから分厚い毛皮を持つ子孫ばかりが生まれるのではなく、薄い毛皮を持つ個体も分厚い毛皮を持つ個体も生まれるが、結果分厚い毛皮を持つ個体が多く生き残り、子孫を残す事によって分厚い毛皮、という形質が引き継がれ、集団内の色濃い特徴になっていくのだ。

『そこで起こっている事も、正確に言葉を選べば進化、とは別なのだろうが恐らく本質は同じだ』

思い出してくれたまえ。死んでいた動物の変異した体は、どんな部分が変異していた？

君達が戦闘を避けた、生きている動物は、どんな部分に変異していた？



ヨーゼフの言葉の通りに、剛大とキャロルはこれまでを思い返し、例を挙げていく。

ヘラジカの死骸。角が触角になっていた。

襲ってきた狼。鎌が生えていた。

オコジヨの死骸。毛皮が薄くなり、脚が鱗になっていた。

生きていた熊。腰から、二本ほど頭足類の触腕が生えていた。

「戦いに都合のいい特徴を持った動物が、生き残っていました」

何が起こっているのか、少しずつ理解し始めたキャロルが、寒さだけでは無い震えの混じった声で、ヨーゼフに返答する。

『……だろうな。殆どの動物が急に体になたな器官が、体内が作り替えられるというストレスでさぞ気が立ち、新たな部位が生成される事により大きく栄養を消耗し餓えている事だろう。そして、その環境で生き残るために必要な形質は、何かかな？』

病気が蔓延した環境で生き残る生物は何か？ その病気に耐性を持っている生物だろう。

食糧が極めて少ない環境で生き残る生物は？ 空腹に強い生物だろう。

では。日常的という頻度を超えて闘争が起こる環境で生き残る生物は、この環境に都合のいい形質とは？

……その答えは、キャロルの一言で既に語られていた。

『自然環境への適応など、後回しだ。寒さに凍えようが次の瞬間に襲われ殺されるかもしれないのだから。病原体への環境など後回しだ。生殖能力も、寿命の長短も全て、考えている暇など無いだろう？ 次の瞬間食われれば、元も子も無いのだから』

——ただ、『強い』だけの生物が選択される自然環境。それが、君達がいるその場所なのだよ。

ヨーゼフの言葉を、キャロルと剛大は無言で聞いていた。

『ふむ、しかしだよ』

戦い以外の全てを捨てなければ生きていけない生態系。

それ以外を優先すれば即座に淘汰される環境。

強くあれ、ただ強くあれと強要される世界。

それに、人間という動物である彼は、皮肉げに感想を語るのだった。

『次代を残す能力も欠落しているかもしれないが、自然環境に適応する術すら切り捨てて戦いに必要な肉体という上辺だけを飾り立てなければ滅ぶ環境など、とても虚しい事だと私は思うがね』

M i n d   G a m e : 第16話   虚栄の庭（後編）

「……寒い、ですね」

「……はい」

重苦しい沈黙に耐えかね、少女は口を開きとりとめも無い話を相方に振る。

異形の風景、そこに降り積もる雪、暗く曇った空。

なるほど、異形は別としても季節によつてはこれが一日中続くのであれば、

気分が減入るのも無理は無い。

そんな納得をしながら、二人は慎重に周囲を見回しながら、静寂の中を歩いていった。

静花と雅？が今この場所を歩いている経緯は、エリゼ宮殿大統領執務室前通路にいた時まで遡る。

苦戦の果てに何とか勝利を掴み、二人は標的、エドガー・ド・デカルトの待つ扉の前までたどり着いた。

二人共傷を負い、万全とは程遠い状態。このまま戦って、勝てるだろうか？

相手はニュートンの一族、その最上位に位置する一人だ。

MO手術は受けていない、という情報ではあったが、ニュートンの最新の血族は並みの戦士、レベル相手ならばそれが手術を受けていないお生身で下す事ができるだろう。

勝算は、あるだろうか。少なくとも瞬殺、ができない事は確実に見て良い。

さらには、時間が経てば援軍の可能性もある。

決断に、迷い。その中で二人話し合い、何とか答えを出した後。

さあ、とそれを実行しようとしたその時、二人の持っていた通信端末が、同時に緊急回線での連絡を伝えていた。

相手は、U—N—A—S—Aの研究者だった。

二人とも面識が無い、名前程度にしか聞いた事が無い相手だ。

龍將軍に持たされていた通信端末だ。相手は、中国の誰かだと思っていたのだが。

首を傾げる二人であったが、今は一秒でも時間が惜しい。

その通信の相手の話によれば、龍將軍はとある任務のため、フィンランドに赴いているという。

そこまでは、二人も知るところである。

しかし、その任務が厄介極まりないもので、さらに人員が必要、との事だった。

そこから、情報交換は始まった。

龍將軍の任務は中国という国から預かっていたものではなかったのか。

何故、龍將軍から渡された端末に、U—N—A—S—Aの人間が出るのか。それらの疑問を、隠すべきところは隠し、現状の把握と疑問の解決を進めていく。

流石に今要人暗殺がいいところですが、とは言えなかったため、その辺りは軍人としての調査任務でフランスにいる、程度にぼやかしながら。

結論として、二人は任務を中断し龍將軍と同じ現場、フィンランドへと赴く事となる。

『世界が滅ぶ』。その言葉と証拠の提示、さらには龍將軍からの証拠を伴っての言伝をされては、

任務の続行という選択肢は選べなかったのだ。

少し後ろ暗い任務である事は承知の上だったのか、普通に出国するでなく、世界的な財閥の一つが用意したというプライベートジェットにより、フィンランドへ移動。

その間に既に現場に入り時には交戦もしているという龍將軍に代わりそのクロードと名乗った研究者からより詳細な事情を聞き、雅？は現地の地名を聞いて何故か顔を青くしながら、その話を聞いていた。

そして、今。話には聞いていたけど……というキャロルと剛大と同じ感想を漏らしながら、二人は森林地帯を歩く。

最新の情報として、百燐から標的と思わしき人間を発見した、これより交戦状態に入る、との知らせがあった。

そのため、二人は今現在百燐から伝えられた地点へと移動していた。

もうすぐたどり着く。自分達の他にも、U—N—A—S—Aの戦力があるらしい。

状況をあれこれ分析しながら、二人は考える。

相手は、生態系そのものを書き換える怪物。

個人の武力、としてのMO手術に収まらない、特異な系統の能力。時にそういった能力がある事も、存在自体は二人とも認知している。静花は自分の班に己を増やす、という能力の人間がいるし、雅？もまた、自分の一族の姫君がそれに近い能力を有している、とは聞いていた。

だが、国や、ヘタをすれば世界などという規模に影響を与えるレベルのものまで存在するとは。

アダム・ベイリアル。その存在を詳しくすれば大いに納得がいく部分なのだろうが、二人はまだその知識について深くまで認識しているわけではなかった。

——そして。直後、彼女たちはその狂気的一端を身に迫った形で知る事となる。

「……………」

「……………」

巨大な腕が振り下ろされるのと二人が回避の動作を取るのは同時だった。

空を薙ぎ地面を叩く音。その膂力に細かな雪が舞い上がり、視界が一瞬陰る。

相手が腕を再び持ち上げる隙に距離を取り構えた二人は同時にその下手人を見据え、

そして驚愕と本能的な恐怖に表情を曇らせた。

「●●●●●●●●●●」

何者。その問いかけに、答えるように、それは呻くように、囁くように、言葉にならない言葉を発音する。

それは、何か、としか形容のしようがなかった。

二足歩行。二本の腕。胴体。頭部。全体的な形状が人型、である事はわかる。だが、それだけだ。

元々は透明に近いものであったのであろう、濁った色の触手に全身が覆われ、素肌の部分はほぼ見えない。

そこから、オオカミか、イヌ科の動物と思われる前足や魚の背びれのようなもの、蜂の毒針、数えていけばキリの無い、様々な動物の器官が覗いている。

そして、頭頂にはその奇怪な姿には不釣り合いな兎の耳が三本、髪の毛の代わりだ、といわんばかりの触手の海からぴんと伸びている。

二人に攻撃を仕掛けたのは、火傷や毒により酷い水ぶくれを起こしたか、もしくは水死体か何かのように膨れ上がった、濁った触手を通してでも例外的に黒と紫に変色している事が伺える肥大化した左腕だ。

まるで、新人の人形士が扱うマリオネットのようなぎこちない動きで、全身を震わせながらそれは

再び左腕を振り上げる。

「二体、なんなのかさっぱりだけど……」

「……そこは、通してもらいます……」

人間を極めた超人を天から引きずり降ろさんとフランスを駆けた少女たち。

二人は、この極寒の大地で深淵よりの怪物と激突した。

「……島原さん！」

「はい、聞こえました」

果てが無い異形の森林を歩き続けていた剛大とキャロル。

そんな二人の耳に微かな戦闘の音が聞こえたのは、ヨーゼフとの通

信を終えてから数十分後の事だった。

互いにつぶり噛みあい転げまわる猛獣同士のものとは違う、両者が激しく動き回りながらのものであると推察できる、断続的に聞こえてくる、枝が、木が揺れその上に積もった雪が落ちる音。

銃声のような確定的な要素こそ無いが、それは人間と人間が交戦している可能性が高いように思われた。

今この場所で、そのような戦いが起こっているのであれば、予想できるものは一つしかない。

人間：ではないが、脱走したテラフォーマーと事態収拾にあたっているフィンランド軍の兵士、もしくは先に現地に入っているアーク計画の人員。

もしかしたら、この事件の元凶と交戦しているのかもしれない。いずれにせよ、キャロルと剛大がそちらに向かわない、という理由は無かった。

味方の救援にしろ、目標の撃破にしろ、大きな進展に繋がるからだ。

二人は急ぎ、音のする方向へと駆ける。

数秒、数十秒。この辺りは大型の生物がよく移動するのか、雪が踏み固められていて足を滑らせそうになるがそれを何とか避けながら。

「……！」

そして、視界が急に開かれる。目の前の光景の奇妙さに、剛大とキャロルは微かな困惑を見せる。

木々が切られ付近の土が均されている。まるで、岩がテーブルと椅子のように並べられている。

そのテーブルの上には、ティーカップとそこに入った微かに色づいた紅茶と思われる液体。

そして、周囲には斬撃により絶命したと思わしき数匹のテラフォーマーの死体が。

人為的な何らかの活動の後と、この場で戦闘が起こった痕である。戦闘に関しては、特別何らかの詳しいわけでもない。

少し音が近くなった戦闘音の主、その戦いに巻き込まれた結果であ

ろう。

事実、クロード博士から聞いたところによれば、現地入りしている味方は

超一流の剣士であるという。

ならばこのテラフォーマーは彼との交戦により死亡したのだろう。そう結論付けられる。

おかしいのは、今のこの開かれた場所、という部分そのものである。敵の攻撃に備えた仮の拠点、などではない。防御力などあったものではない。

部分的とは言え木々を切り開くのは、自分の姿を監視衛星や偵察機といった空からの目に晒す危険がある。

こんな状況でテラフォーマーがわざわざ紅茶を用意しないだろうし、彼らは娯楽などどうでもよく、

いかに敵の目を欺くか、をまず考えるだろう。

だというのに、この場所はそれとは真逆の効果を示している。

そこに戦略や合理性はなく、あくまでも『お茶会』ができる場所を用意したかっただけ、に見える。

それらの情報を総合して、剛大とキャロルは同時に答えを出す。

まるで『楽しい事が第一』とでも言わんばかりの、テラフォーマーとは異なる非合理。それは、キャロルがアーク計画の任に当たるに際して聞き、剛大も今回でクロード博士から情報共有された、アダム・ベイリアルイメージに近い。

一流の剣士であるアーク計画の人間と、最初に音を聞いてから今まで交戦を続けられる相手。

これらから導き出せる、答え。それは。

「……急ぎましょうー！」

奇妙なお茶会の席を後にし、二人は駆け出そうとする。

相手は、アダム・ベイリアルの送り込んだ兵器……すなわち、この事件の元凶だ。

今すぐにも、援軍に加わらなくては。



……しかし。剛大とキャロルは、大いに誤解していた。

アメリカを襲撃した、“悪鬼”。ニュートンの一族と正規軍の部隊をいとも容易く殺戮し、

”人類最強”がその命を削ったドーピングを自らに施し挑み、それでもなお一時的な撃退に留まった、真正正銘の怪物。

単騎の力で世界を滅ぼせるのではないか、と思えてしまう”生物最強”。

それと対を成す”妖魔”が、ただ強者一人と長時間打ち合える個人戦力、それだけの存在であるのだと。

確かに、環境を歪め書き換えるその権能は脅威であり、世界すら滅ぼしかねない。

だが、それは病としての脅威であり、即座に差し迫った暴力的な脅威ではない、と思っていたのだ。

確かに、それは間違っていない認識であり、これまで二人が戦ってきた動物たちを見た事実だ。

アストリスによる環境の書き換え、それによる生物の戦闘のみを飾り立てさせる進化は、急速に進むとしても武力としての脅威になり得るのは月、年単位での話だろう。

生物は刻一刻と選別され、戦闘に特化した機能のみに研ぎ澄まされていくが、それが人間の手に負えない強さとなるのは、正しく進化、という言葉の意味である、世代を経ての大きな形質の変化が入り混じつてのもの。

『鎌の生えた狼』『魚と同じように泳げる熊』程度の現在の変質した生物では、軍が本気を出して鎮圧しようとすればあっさり終わるレベルの話に過ぎない。ウイルスそのものの方が人間への影響も遺伝子汚染による遺伝子資源の壊滅、という意味でもよほど差し迫った脅威である。

言ってしまうえば、アストリスの力による生物の変異は、武力という点では子どもによる悪趣味な箱庭ゲーム、の域を出ない。

それが、大自然を強く、弱くとも戦略的に、それぞれの形で生き抜

きこれまで進化してきた、自然の動物だけに適応される話であれば。

——じょう、じ

戦闘の音とは別の方向から聞こえたその鳴き声を、剛大とキャロルは聞き逃さない。

だが、テラフォーマーといえど、今はそれより優先すべきだと判断できる相手がいる。

戦力の規模だけ確認しようと、二人はそちらを向き。

そして、固まった。

十匹ほどのテラフォーマーの群れだった。

アストリスの変異の力が影響を及ぼしているのか、彼らにもまた、それぞれ変化が生じている。

角や甲殻や鎌、頭足類の触手、長い爪、などそれぞれ個性に溢れた武器。身を包むのは、短い毛皮と、ネズミのものだろうか？ 尾が生えている。

そんな彼らは、剛大とキャロルにはまだ気付いていない様子であった。

何故ならば——

「じ、じいッ……っ！」

「じょうっ♡♡♡ じょうっ♡♡♡ じょうッッー！」

同族を押し倒し、情熱的な行為に及んでいたのだから。

具体的な描写はするまい。

「じつ、キイイイイイイイイイ」

その行為は、組み伏せられた側の叫び声で終わりを迎える。だが、異常はそれで終わらない。

組み伏せられていたテラフォーマー達の体が痙攣し、白目を剥き涎を垂らしながら、

尻から黒いカプセル状の物体を産み落とす。

それは、卵鞘だった。

地面にぼとりと落ちた後、それには見向きもせず再び交尾を始めるテラフォーマー達。

その周囲では、それより以前に産み落とされていたのだろうか、既に転がっていた卵鞘からテラフォーマーの幼体が生まれる。

そして、何らかの改造が施されているのか、みるみる内に成長を始める。

成長して目立つ、その身。

鎌と触手が複合した個体。

全身を鎧のような甲殻で覆い、さらに無数の棘のような突起が生えている個体。

エラが生えており、それ以外の呼吸の手段を変質で失った個体、そもそもテラフォーマーとしての形を成していない個体といった成長できず既に息絶えている個体たちをよそに、親の形質が複合した特徴を持った個体たちは起き上がり、滅茶苦茶に交尾を行う自分の両親たちを見る。

そこには、隠しきれない欲情の色。

交尾、産卵、孵化、成長。

交尾、産卵、孵化、成長。

交尾、産卵、孵化、成長。

交尾、産卵、孵化、成長。

繰り返されるたびに、生まれる子の体には生物の器官が複合し、増えていく。

——— 　　すまないね、アダム君。君から貰ったサンプルも逃げ出しちゃったみたいだ

彼らは、アダム・ベイリアル狂気の産物。

『異常繁殖型テラフォーマー』。

テラフォーマーの肉体に、『アンテキヌス』という、死ぬまで交尾を止めない旺盛な繁殖欲求を持つネズミに近い外見の有袋類の一種を組み込んだ特殊な個体である。

正気を失い、強靱な肉体も劣化し。その代償として得たのは、異常なまでの繁殖力。

さらにこの虚飾の庭園で得たのは、次から次へと移り変わり増えていく、他の生物達の肉体。

「じょうつつ♡ じつ、じょうつつ!!♡ ……じ?」

……そして。

そんな彼らは、どうやら次のお相手視線の先に見つけたようだった。

——— 異形の森・西端部 ———

「……」

UNASAの戦士達の交戦から遠く離れた、森の西端。拡大していく異形の森林地帯を、ぽつぽつ歩く人間が一人。

——— 　　ごめんね、少し、頼みたいことがあるんだ  
脳裏に浮かぶのは、自分におねがいしてきた、●●の顔。

その足取りは軽いものではないが、そこに臆している、というような感情の機微は見られない。

ただ、それが当然なのだとも言いたげに、一直線に歩いていく。

そして、間もなくしてその人間は、十数匹のテラフォーマーに囲まれた。

領域に侵入する人間を殺しにかかる。それは、テラフォーマーとしての本能に根差した殺意であり、

同時にこの庭園の主である女王の、自分の元に辿り着くような素敵な方とお茶会がしたい、という意向でもある。

「……」

目の前の怪物たちに、その人間は大した反応を示さなかった。

足を止めこそすれど、興味も無さげにテラフォーマーを見つめるのみだ。

テラフォーマーもまた、相手を観察する。

ニンゲンの幼体。雌だ。それ以外に、特筆するような要素もなし。

人間にテラフォーマーの個体差がわからないように、テラフォーマーも人間の個体差を意識的に学ぶか認識しようとしてもしない限り、それを構成する要素の多少の差異に気付きもしないのである。

その人間は、テラフォーマーが自身を見ている事に反応したのか、すうと左手を上げ、まるで指を指すように前に伸ばす。

その行為に何の意味があるというのか。いや、何の問題も無い。殺すべき対象だ。テラフォーマーは、その人間に、襲い掛かろうとして。

瞬間、その少女の腕が、溶け落ちた。

肉が、皮が、液状となりその身に纏う白の一枚布を汚しながら地面に落ち、骨を晒す。

それは、少女の全身で起こっていた。

肉体が泥を水に入れた時のように溶けていき、骨がずるりと姿を見せる。

しかし、その過程も一瞬の事だ。

失われていくと同時に、その肉体はまるで映像を逆再生するかのよう

に修復され、即座に元通りになる。

突然の不可解な事象に、一瞬だけ判断が遅れたテラフォーマー。

だが、それが意味を為さずに始まり意味も無く終わった現象であると結論付け、全個体が少女に向け殺到する。

怒涛の如く押し寄せる黒の群れ。細身の、自衛手段など無いであろうか細い身は、

テラフォーマーの一撃を受ければ無惨に碎ける事だろう。

最早止まらない勢いのまま、テラフォーマーの群れは棒立ちの少女に襲い掛かり。

刹那。少女の周囲から、命が絶えた。

「……………」

テラフォーマーの目から、液体が零れ出す。

それが溶け落ち液状となった眼球、脳、その他細胞である事など、もはや彼は知覚する事はできなかつた。

鼻、耳、肛門、関節の隙間といった穴からも、同じく。その液体が全身の筋肉と内臓器官、神経系の末路である事もまた、もはや彼にはわからぬ事である。

まるで水袋にいくつも穴を開けた時のように、少女に襲い掛かったテラフォーマーの、不幸にも付近を飛んでいた鳥の、動物の、木々の

穴という穴、あるいは肉体そのものから、液体が零れ地面に流れ出す。

重力に負け崩れ落ちる、体内が全て流れ出しそれだけが残された十数匹のテラフォーマーの甲皮。

空から落ちてくる、不幸な鳥の白骨と、遅れて落下するばらけて散った羽毛。

まだ熱を保っていたのか、周囲の雪を微かに溶かした、かつて生命だった液体が広がる中。

少女はそれに何の感慨も持っていない様子で表情を変えず再び目的地に向け歩きだす。

歩くたびに脚から地面に固着し広がっていく、肉でできた根のようなものが、周囲に広がった液体を吸い上げ、さらに拡大していく事に、大して興味も無い様子で。

## M i n d   G a m e : 第17話   狂乱怒涛

——ガギン。

硬質なものに接触し、刃が止まった感触。

それが腕に伝わると同時に、百燐は身を翻し離脱する。

直後、彼がいた位置へと三本の大鎌が振り抜かれる。

「もう、避けるのがお上手なのね！　でもそうよね、いいスナークは簡単に捕まらないもの！」

楽し気な、知らない生き物を観察しているかのような言葉に返答をする事はなく、百燐は相手の姿を見据えていた。

右肩から袈裟切りにする軌道で走り、しかし内臓に達するまでに止まった刀傷。

それがみるみる内に塞がり、元の姿を取り戻していく。

血で染め上げたが如き赤色のウェディングドレスに身を包んだ、若い女性——アストリス・メギストス・ニユートン。

百燐が現在向かい合っている、事態の元凶たる怪物である。

戦闘を初めて、十数分。幸いにも、百燐の体に戦闘続行が困難になる程の大きな傷は無い。

だが、敵の能力に対応しきれない。

言うまでもなく、百燐は歴戦の戦士だ。

得体のしれない新兵器、とうの昔に失伝されたと言われていた武術。

戦場で未知に出合う事を幾度となく経験し、その全てに打ち勝ち仕留める、もしくははそれに至れずとも生き残ってきた。

彼がアーク計画に加入し、高く評価されている項目でも、純粹な実力の中での未知に対する対応力という要素は大きい。

アダム・ベイリアル。彼らの向かい合う脅威。それは、悪辣な未知の手段を振るってくる敵であるが故に。



しかし、その百燐が相手の手を読み切れないでいた。動きに対応しきれない、というわけではない。

それは、今なお百燐が戦闘を続行できる状態である事実が証明している。

敵の武器は、ニュートンの身体能力。これに関しては、特段の脅威ではない。

強力極まりない素体ではあるが、相手はそれを十全に使いこなしてはいないように思える。

高周波ブレード。恐らく、自身の刀と打ち合えば、こちらが負ける。百燐の分析通りの事実であるが、ならば打ち合わなければいいだけの事だ。

敵の身体能力と武器についてはは、決して抗しきれないわけではない。

だが。

「次はどんなものをお見せいただけるかしら？」

興味深々な弾んだ声色と共に、それは襲い来る。

アストリスの右腕が根本から五本に分割され、それぞれが無機的なウイルスの脚：正確には尾部繊維と言われる部位への変化を一瞬経由し、さらに変質する。

二本は飛蝗の脚に。一本は熊の腕に。もう一本は蜂の毒針に。最後の一本は、鳥の羽に。

飛蝗の脚を剣で捌き、熊の腕を糸で絡めとり、衝撃を弱める。

「……！」

だが、毒針が百燐の右頬を掠めた。

避けきれなかったそれは皮膚を裂き、血を流させる。

まずい。毒を貰ったか。頬を伝い襲い来る灼熱感。

先ほどの毒針とは軌道も速さも違った。だから、対処に僅かな遅れが、迎撃の手にブレが生じてしまった。

だが、体は動く。麻痺しているわけではない。毒が弱い種だったのか。

飛蝗の脚を逸らし捌いたままの勢いで、アストリスの脇腹へと腕を

振るう。  
が。

ミシリ。

剣が刺さった感触があった。人体であれば、上半身と下半身に両断できる力加減で振るった。

しかし、その剣を迎えたのは、昆虫の甲皮が如き、硬い感触。これ以上は危険だ。

直感と思考の出した同一の答えに従い、百燐は最悪刀を捨てる覚悟でその場を離れようとする。

「まあ、お逃げにならないでくださいな！ 太鼓を鳴らしたりはしないわ？」

刀を捨てるか、否か。一瞬の選択の時間の後、微かな時間のロスを考えてでも百燐は刀を振り戻す事を選択した。

そして、その選択の正否は直後に示される。

アストリスの変異した左腕、五本に分割された内からさらに分割され籠に閉じ込めようとするかのように、広域に伸びる粘着質の樹の枝のような器官。

普通に回避しようとするれば間違い無く間に合わない範囲を根こそぎにするその一撃を、捨てない選択をした刀によって適切に切り落とし対処し、逃れる。

何とかやり過ごした。

しかし、これがいつまで続くか。

少しずつ疲弊していく体の調子に、百燐の額から汗が一筋、流れる。

敵がどれだけ複雑な能力を行使しようとも、十分な時間さえ与えられれば、それを読み、適切に対応する事は不可能では無い。

相手の癖、この状況でどんな能力を使用しようとするのか。

相手が撃てる手を把握し、そのどれを繰り返してくるのか、という相手の人間性を読み解いていけば、対処は十分に可能である。

それは、つい先日戦った複数種の生物の下半身を宿したアダム・ベイリアルでも、クロード博士伝いに戦闘訓練として特別にマッチングしてもらった裏アネックス計画の幹部搭乗員でも、同じ事。

だが、今百燐が向かい合っている敵の攻撃と防御には、一切の規則性が無い。

先に百燐が一撃を貰ってしまった蜂の毒針も、一度は回避できた攻撃だった。

だが、その時とは襲い来る速度も軌道も、恐らくはサイズも微妙に異なっていた。

さらには、相手の攻撃だけでなく、防御すらも一定ではない。

柔い相手という事がわかっていれば、硬い相手という事がわかっていれば、何の問題もない。

再生能力が無い相手だろうと、高い相手だろうと問題はない。

相手の硬さに合わせて、それを両断できる一撃を振るう。

再生される事を前提として、攻撃後の隙を可能な限り減らす。

相手に合った立ち回りに最適化すればいいだけの事だ。

だが、相手の肉体は、攻撃するたびにそれが変化している。

一度刃を通した部位への一撃、軟な事を想定したものが、予想外の硬さに弾かれる。

硬度を増していると思えば、想定外の一撃が、想定外の柔さに勢いあまり振り抜いてしまい、態勢が微かに崩れた隙に反撃を受けてしまう。

ニュートンの身体能力とそれに裏打ちされた相手の実力は、それそのものでは対処できるが、微かに隙を晒せば即座の反撃を受けてしまう程度には手を抜けるものではない。

「……もしや」

だが、戦術の最適化ができずとも、その攻防の中で、百燐には気付いた事がある。

それは、『そもそも戦術の最適化などは不可能な相手』という事実である。

トートロジーのような結論はしかし、相手の本質を見抜いていた。百燐は、最初は敵の特性を『変幻自在』と認識していた。その認識が間違いであった、と改める。

そう、敵は攻撃においても防御においても変化し幻のようにこちらを惑わす。

それは事実だ。だが。

変幻しようとも、自在というわけではない。

そして、百燐が見抜いたその事実を、その力の本質を知る彼は、遙か彼方の観客席でにやにやと笑みを浮かべていた。

「おつ、これは気付かれちゃった感じかな？」

バケットの底に手を突っ込みもう無くなったポップコーンを探しながら、アストリスの瞳越しに映る映像を眺め、アダムは戦いを観戦していた。

まるで、映画のパンフレットを見るように、研究資料——非細胞生物型の肉體適合についての共同研究の文献を、眺めながら。

エイリアン・エンジン・ウイルス、♂型プロトタイプ。

それは、アダム・ベイリアルによって生み出されながらも、地球にはばら撒かれずお蔵入りになった、♂型の試作株の一つ。

従来の♀型を核に♂型の特徴を埋め込んだ、あらゆる生物を宿主とし遺伝子を収奪しそれを他の生物に押し付けて変異させる能力は、彼好みの派手な破滅をもたらす事だろう。

しかし、一方で欠点もあった。それは、破滅的な効果が強い上、目立ちすぎる事。

肉體の変異という目で見てすぐにわかる変異は、即座に人間の目に留まる。そうなれば、対策も初期から研究されるようになり、即座に鎮圧される可能性がある。

仮に対処できなかつたとすれば、十分に楽しむ時間も無くあつという間に世界は滅んでしまう事だろう。

つまるところ、どう転んでもあまりアダム好みの結果にならなかったのである。

そんな劇物を自身の配下の体内に埋め込んだ倫理観はともかくとして。

問題なのは、その原理であった。

「お嬢さん……アドリブがお上手ですな」

冗談めかした百燐の呟きに、アストリスは頬を微かに染め、嬉しそうに微笑む。

答え合わせは、それだけで十分であった。

アストリスは、そもそも自身の変質について、能力の細部を制御などしていないのだ。

できるのは、自身の肉体のこの部位の変異を行う、という合図のみ。どこを変異させるのか。それを制御できても、何に変異させるのか、は本人にすらわからない。

彼女が行っているのは、変異した自身の姿、能力を瞬間的に把握し、その場に合わせて運用する事のみ。

そして、それは通常の $\alpha$ MO手術と大きく異なる体内の状態が引き起こしていた。

一言で言ってしまうば、『ウイルスによる遺伝子キメラ』。

アストリスの体は、もはや人間のそれではなくなっている。

非細胞生物型。その型式が表す通り、ウイルスの構成単位は細胞ですらない。

それをアダムの技術力によって無理矢理に体内に組み込んだ結果、もはやその肉体は、『細胞』と『ウイルス』の融合した生物なのかすら疑わしい物体とその隙間を埋めるウイルスの結晶、という異形の構成単位の群によって形作られる状態となっている。

そして、本来であれば即座に絶命するはずのこの状態を維持する楔となつているのが、彼女の体内に埋め込まれた装置の片割れ、赤の変則駒『Orphan』である。

しかし、人間とウイルスの中間という状態を無理矢理に維持しているそれは、普通の人間の細胞のような1個体として調和した状態を保っていない。

それぞれ別の生物の遺伝子を取り込んだウイルスが、体の至る所に存在し、増殖し隣の細胞に遺伝子を受け渡し、また体の別の部位に遺伝子が移っていく。

生物学におけるキメラ、とは『一個体の中に複数の異なった遺伝情報を持つ細胞が混じっている個体』を指す言葉である。

現在アメリカを守るべく奔走し、激戦を繰り広げているシモン・ウルトルも人為的にこの体質を持つよう作り出された存在であり、彼は腕、胴体、足の遺伝情報がそれぞれ異なったものを有している。

アストリスの肉体はこの状態に近いが、より歪で不安定な状態と化している。

誕生する際にアダムによって、この能力に最適化できるように調整されているとは言え、後天的に身に宿したそれは、一般的なキメラのそれとは歪に異なっている。

それは、ウイルスの自己感染によって体内の遺伝子の位置が常に流動し続け、細胞…のような何かに宿る遺伝情報のパターンは外界から生物の遺伝子を取り込み続ける事により数千数万…最終的にはそれ以上に達する、という点である。

「うふふ、アダムおじさまも褒めてくださったのよ！ 『びっくり箱みたいで面白いね』って！」

そして、体内を数多の生物の遺伝子が移動し続けるそれは能力によって肉体を変異させるたびに別の生物の能力が発現する、という結果を生み出す。

何の能力が発現するのか本人にすらその時までわからない、歪な力。

それを戦闘に用いられるまでに昇華したのが、ニュートンのボディコントロールと反射神経。そして、能力を十全に扱えるように施し

た、アダムによる教育。

それは、『凶星より来たりし災禍』。

命に溢れる地球の生物たちを食らい取り込み、それを無造作に振るう”妖魔”。

その燻り狂う顎が、この青き命の星を守る戦士を捉えんと迫り。

「……遅い」

変異しようと五本に分割したその右腕が、根本から切断される。

「……あらっ？」

ぼとり、と地面に落ちる腕。それをアストリスが認識し、思わず目で追った瞬間。

「申し訳ありませんが、これにて」

アストリスの眼前に、刀を振り被る百燐の姿が映った。

「……！　まあ、まあまあ！」

迫りくる死に満面の喜色を湛え、アストリスは残った左腕を変異させる。

隙を作らず攻撃を叩きこみ続ける、もしくは回避を試みるにも、敵の肉体に最適化した剣筋は必須となる。

確かに、変異し続ける敵の肉体の硬度はわからない。

だが、一つだけ、それが明確にわかるタイミングが存在した。

それは、変異の前段階、その一瞬。

アストリスの手足の変異は、様々な生物への変異を行う前に一瞬だけ、大元の手術ベースであるウイルスの脚へと変化し五本に分かれる。そのタイミングのみ、ウイルスの脚、という同一のパターンがあり、それが明確に判明している強度の肉体を晒す好機となる。

それを切り落とす最小の力加減で腕を断ち、迎撃せんとする左腕をさらに同じくウイルスの脚の状態で肩口から切断する。

右腕の再生は止まっているが左腕の再生は即座に始まった。恐らく再生能力に長けた生物の遺伝子がそこに存在していたのだろう。

ここが攻め時だ。アストリスも百燐がそのまま決着を付けに来る

事は把握していたのだろう、本来であればウイルスへの変異を経由させる前に振り上げる脚をウイルスから別生物たちに変異する瞬間に振り上げ、両腕の二の舞を防ごうとする。  
だが。

「1, 2, 3本!」

目にも止まらぬ速度で百燐の剣は、別生物への変異が終わり、アストリスが変異した脚の内訳を把握する瞬間、5本の内3本を狙い、切り落とした。

だがまだ2本残っている。

それがあれば、腕が再生する時間くらいは……。

「……あら?」

しかし、彼女の思考はそこで止まる。

……残る二本の腕は、狐だろうか? もふもふした尻尾と、鳥の羽へと変化していた。

何度も変異の様子を見ていれば、それが戦闘に適した器官であるかそうでないかは、変異が終わらずともわかる。

百燐がアストリスのそれに、気付いた理由でもある。『全てが戦闘に向けたものへと変異しない場合もある』。

ランダムであるが故の欠点。歪な形に完璧な怪物の、僅かな瑕。

それを、老練な剣聖は逃さない。

「……こんな事を言うのは、柄ではないのはわかってはいますが」

防御になど使えない器官に変異した脚を無視し、刃が駆け上がる。

狙い済ました銀色の一閃は、一直線にその首を刎ね落とす。

そして。

好々爺には珍しい強い口調で放たれた言葉は、無邪気な怪物に対してでは無く、彼女の瞳越しに好奇の目を向ける、紛れも無い邪惡に対して向けられた。

「あなたが簡単に穢せるほど、地球は、彼らは弱くない」





「ケホッ……まったく……みつともない姿ですねぇ……」

弱弱しく、皮肉げに吐き出される言葉。

余裕ぶっているかのようにも映る姿だ。

しかし、二人にはわかる。

もう、この子は長くはないのだと。

「……ああ、もう、よく、見えませんが……」

声は擦れ、徐々に弱弱しくなっていく。

恐らく、あの怪物へと変質させられていた時点で、殆ど自我は失われていたのだろう。

今こうして喋る事ができるのが奇跡なのではないか、と思えるほどに。

「あなたたちが……救って……くださったのですか？」

命の終わりを迎えようとしている自分。目の前に立つ、武装した人間二人。

当然の帰結として、自分達が少女の命を絶とうとした、という事は本人にもわかつているはず。

しかし、少女はこの結末を、『救われた』という。

「いいえ。……殺したんです」

それは、結果論なのだろう。二人は目の前に立ち塞がる怪物を仕留めようとし、事実怪物は崩れ落ちた。

その中に普通の人間が入っていて、解放されたという事は、結果でしかない。

「……そう、ですか」

そんな、自分を殺した、という相手の言葉を肯定し。

穏やかに、微笑み。

「●●●●」

口だけを動かし、一言だけ、二人に言葉を伝え。

その体は、もう動く事は無かった。

「ラヴロックさん！」

「はいっ！」

それは、一方的な殺戮だった。

数十のテラフォーマーの屍。

森林全体を覆う変異も合わさり、美しいフィンランドの森林風景など見る影もない無惨な光景である。

「じ、じ、キイイイ♡」

彼らは尽きる事なく突撃を続ける。

だが。

その結末は、必然かつ当然だった。

交尾する事を止め、彼らは突撃する。

『異常繁殖型テラフォーマー』。

『アンテキヌス』という死ぬまで交尾し続ける旺盛な繁殖欲を持つ有袋類の遺伝子を組み込まれた彼らは、文字通り狂ったように交尾をし続け、あらゆる生物が発情の対象である。

彼らは交尾後即座に卵を産み、その卵はものの数分で孵化する。

そして、驚くべき事に1分で成体まで成長し、交尾を始める。

そして、この異常な性質は、アストリスの能力と異常なレベルで合致していた。

高速で変異が進行し、瞬く間に戦闘に関する形質が磨き抜かれ、強力な兵器と化す。

しかし……彼らの不幸は、タイミングが悪かった事に尽きる。

あと1時間到着が遅れていれば、事態は手が付けられない事になっていただろう。

力士型……否、それすら上回る力を持ち、さらには各個体に個性豊かな能力を持った個体が解き放たれていたに違いない。

そうなれば、もはや地球規模での脅威と化し、手が付けられなくなっていただろう。

だが、今はまだ、進化の初期段階も初期段階。

そして、彼らに『今は勝てないから逃亡して態勢を立て直す』という選択肢は存在しない。

選択肢はただ一つ、『サーチ&交尾』である。

だから、新しいパーティの参加者が二人、この場を訪れた時、彼ら  
が取った選択肢は一つだった。

そう、パーティへのお誘い、全軍突撃である。

一部を後方に残し、産卵させて戦線を支えるなどという戦略など無  
い。

ただでさえ、交尾しか考えられない彼ら。

彼らは正常な思考力と肉体の強度を失っており、さらにはクローン  
個体のため、各能力はさらに劣っている。

そんな彼らが、裏アネックス、アーク計画の上位戦闘員二人と相対  
してしまえば、どうなるか。

加えて言えば、現状では質で明確に勝り、量でも互角の敵との戦い  
を、二人はフランスで経験している。

結果。

この場には、一面のテラフォーマーの屍の原が広がるのだった。

「……他の皆さんも、上手くいったようですか」

クロード博士の報告、その返事には、隠しきれない喜びが混じって  
いた。

各戦線の勝利と、その報告。

結果で言えば、当たり前だったのだろう。

敵の陣容は、異常な変異をしていたとはいえ、自分が戦った元凶を  
除けば急ごしらえもいとところだ。

こちらの戦力は、火星派遣計画の上位の戦闘能力を持つ正規搭乗  
員。

言うなれば、布陣も碌に整っていない民兵の基地に、正規軍が奇襲  
をかけたようなものなのだ。

エドガー・ド・テカルトの暗殺こそ叶わなかったが、あと一歩でそ  
こまでたどり着いた、百燐も知る二人。

裏アネックスの幹部搭乗員とアーク計画の上位戦闘員相当という  
戦力で言えば相当なものである二人。

彼ら彼女らが、負けるはずなど無かった。一番心配なのが自分だったくらいだ、と百燐は苦笑する。

首を失い、崩れ落ちたアストリス。

身体のどこからウイルスの原種サンプルが確保できるかは、百燐にはわからない。

まあ切断だけで損傷は最低限になっているはずだ、問題は無いだらう。

随分と消耗してしまったが、この長い仕事も、これで終わりだ。

刺激的な休暇だったが、自分が手を下した彼女の裏にいる存在の事を思うと、あまり気分がいいとは言えないだろう。

自分の残る役目は、U—N—A—S—Aの研究チームが到着するまで他のテラフォーマーや野生動物にこの遺体を持っていかれない事。

これまでの任務を思えば、事後処理程度か。

通信を終え、百燐は改めて、首を落としたアストリスの遺体へと振り向き。

——ズツ

——瞬間、百燐の腹に突如、異形の生物の貫手が突きささる。

「む、う……い！」

口端に血が垂れ、このままではまずいと直感した百燐は即座に腹に突き立った手、人間のものですらない黒い昆虫の甲皮に覆われたそれを引き抜き、背後に下がった。

何がそれを行ったのか、目視できた。何をされたのかも、わかる。だが、何故、できた？

百燐の眼前に映るもの。それは、首を失った——

——失ってなお動いた、アストリスの体。その再生した左腕が変異した、漆黒の甲皮に覆われた腕。

百燐が退いたのを見届けた後、その体は地面に落ちた首を拾い上げ、首の断面の上にそろりと慎重に乗せる。

……無数の生物の遺伝子を取り込んでキメラ化しているアストリス。その肉体は、長期間触れて多く遺伝子を取り込んだ生物ほど、色濃く影響が現れる。

昆虫や哺乳類、鳥類といった生物への変異が多く、水生、海洋生物の特徴は殆ど発現していなかった事がその証左といえよう。

……では。

火星で生まれ、育った彼女が、最も多く触れてその力を取り込んだ生物は、何か？

——じょうじゅ

「うふふ、グリードおじさまの真似！ どう、似てたかしら！」

失血により霞む、剣聖の視界の先。無邪気に笑う妖魔は、いくつもの飴玉——彼女の変態薬を、同時に飲みこんだ。

## M i n d   G a m e : 第18話   常在夢中

「さあ、お茶会はこれからよ！」

咄嗟に場を飛び退いた百燐。

そこに、魑魅魍魎の攻撃が殺到する。

両腕と片足が変異した生物の武器として機能する器官、計13。

貫かれた腹を庇いながら、百燐は微かに焦燥を表情に出す。

首を落としても動く事ができた。

その特性はアストリスがテラフォーマーから獲得したもの。

運動のコントロールを胸部の神経中枢に持つが故の、人間離れした特性である。

「どうしたのかしら、もっともっと、楽しませてくださいな！」

片膝を突いて荒く呼吸をする百燐を、アストリスは楽しそうに見つめる。

非細胞性生物型、その過剰摂取により目まぐるしく変わる両腕で、額の汗を拭いながら。

その微かな隙に、百燐は刃を繰り出す。

だが、それを振り抜くより先に襲い来たのは、強い生命への危機の直感。

それに従って普通に刀を振るう時よりも1手早く回避動作に移った百燐を迎えたのは、これまで通りの変異した生物の器官による連撃だった。

これであれば、先に回避に移る必要は無かったか？   臆病になりすぎたか？

思案する百燐。

しかし直後に自身の直感は正しかったと否応なしに思い知る事となる。

巨大な毒針に変異したアストリスの腕、五分割されたその内の1本

が百燐が先ほどもまで立っていた空間を刺し貫く。

だが、それで終わらなかった。

一度変異したはずの毒針がさらに形状を変え、ハサミ状のものへと変質し百燐を追撃してくる。

二段構えの攻撃に、それでも危なげなく対処する百燐。

そのハサミはさらに変質し鳥の羽へと変わる。そこで、引き戻され攻撃は終わった。

なんだ、あれは。

毒針の回避だけならば、1歩早く回避に移らなくとも問題はなかった。

だが、さらなる変質を行つての追撃、それを回避しきれただろうか？

傷により鈍っている自分では不可能、というのが出した結論だ。

過剰摂取による強化。それは純粹な身体能力だけではなかった。

両腕がそれぞれ五分割され、様々な生物の器官へと姿を変える。

その大きな特徴はこれまでの状態と何ら変わらない。

しかし。

「眼が霞んで妙なものが見えているわけでは……なさそうですな」

基本的に攻撃のタイミングでのみ変質していたそれは、一分一秒ごとにその姿を変え続けていた。

万華鏡を勢いよく回した時のように、目まぐるしく様々な生物の器官が発現し、次の瞬間には別のものへと変質する。

これまでの一度の変異であれば、百燐にも防げた。変異の初動である程度どのような動きをしてくる器官なのかも読める。

だが、流石に二度三度と変化されては、対応のしようが無い。

傷を負う事なくこちらから攻撃を仕掛けるのは困難だろう。

しかしここで退くという選択肢はあり得ない。

この状態で正面から殴り合い、勝算は如何ほど。

┌───┐

通信機から聞こえる声も、今は思考の邪魔となってしまう。

いつその事捨ててしまおうか、などと一瞬考え。



その聞こえてきた内容から、いや、と百燐はひとつ頷く。

数秒と置かずにアストリスが距離を詰め腕を繰り出そうとするが、百燐は先ほどのように下がろうとはしない。

ただ、掲げた右手を下に下げただけである。

「ふわっ!」

その不可解な動作に疑問を覚えた瞬間、アストリスの視界を樹の枝とそこに茂る葉が遮断する。

糸を繋いでおいた枝を手繰り寄せた。

その答えに辿り着き、枝を振り払うのは一瞬の内だったが、しかし。

「……あれ?」

百燐の姿は、目の前から消えていた。

「……島原さん?」

変異型テラフォーマーの屍で埋め尽くされた森の一角。

そこを出ようとしていた剛大は、ぴたりと立ち止まる。

その態度を不思議に思ったキャロルが名前を呼ぶが、剛大は立ち尽くすのみ。

もう一度、キャロルが剛大の名を呼ぼうとした、その時。

—— おぎやあ、おぎやあ。

泣き声が、聞こえた。

先ほどまでひっきりなしに続いていた変異型テラフォーマーの耳障りな産声ではなく、人間の赤子の声。

ここに迷い込んだ一般人か? ならば、保護しなければいけない。

頷き合い、その声の主を探そうと、目線を低くした、瞬間。

「……?」

二人の視界に、妙なものが飛び込んできた。

それは、地面をうっすらと覆う、泥のような色の何か。

ただそれだけであれば、二人はこの非常時にわざわざ思考を割かな

かったであろう。

このような地形だったのだ、で済ませていたに違いない。

しかし、今二人の目に映るそれは、奇怪な様子に満ちていた。

その泥のような何かは、変異型テラフォーマーの死骸、その上に積み重なっているのだ。

さらによく見れば、そこから寒天のような、半透明の固形物が分泌されているような――

「……危ないッ！」

「くっ!？」

奇妙な光景に意識を奪われても対応が遅れなかったのは、二人の研ぎ澄まされた感覚の賜物と言つていいだろう。

盾を構え剛大の前に出たキャロルと、キャロルの死角を庇うように構え、素早く蹴りを繰り出した剛大。

それは同時に着弾し、二人の迎撃と激しくぶつかり合う。

ミッツボアリの筋力、それでもなお数歩後退したキャロルと、衝撃を殺しきれずに肉が裂けた様子でその脚から微かに血を流す剛大。

二人は次弾を警戒しつつ、自分たちを攻撃したそれを確認する。

サツカーボール大の球体である。数十本の棘、先端が錨のような形状になった攻撃的な外見をしている。

盾にぶつかり、剛大の迎撃で、一部が砕けた中身からはまるで血のような赤い液体がどろりと流れ出している。

なんだ、これは。

兵器の類ではないだろう。有機的な意匠をしている。

だが同時に、大型生物でこのような武器を持ちいる生物など聞いた事がない。

ならば、その答えは。

「……」

ふたりが出した回答の答え合わせは、次の瞬間森の向こう側から姿を現した人影によって成される事となる。

だが、ふたりは同時に怪訝な表情をしてしまう。

何故ならば。

「子ども……？」

そこにいたのは、幼い少女だったからだ。歳としては6〜7歳程だろうか。

長い金髪と整った容姿である事が伺える、小さな人間。

「……なに、この子……」

震えの混じったキャロルの言葉は、少女の外見と、そしてその纏う雰囲気に向けられていた。

目立つのは、その服装。

白の一枚布を巻き付けたかのような、次代錯誤の衣装。

これだけであれば、特徴的なファッションの一般人と判断する事ももしかすればできたかもしれない。

だが、髪の間から伺える額に浮かび上がった、松葉を何枚か放射状に並べたような模様。

頭部から緩いU字を描くように生える、複数の透明な触手。

そして、その中央、頭頂から生える、無機的な印象を与える多面体のような謎の物体。

詳細はわからない。だが。

「MO手術被験者……！」

即座にその予測を立て、二人は動き出す。

先の一撃からして、敵対的なのは確実。

外見的特徴から予想できる生物はわからないが、触手。

恐らくは、身体能力がそれほど高い生物ではない。

狙うべきは無力化だ。

そう判断し、剛大は手術ベースも合わさった脚力で少女との20メートル程の距離を一瞬で詰める。

「……ん」

一方の少女は、特別それに何かの対処をしようという様子もない。

剛大が近づいても、何もせず。そのまま地面に組み伏せられても、表情一つ変えず。

予想通り、力が強い手術ベースではない。

もがくことすらしない、後ろ手にして腕を捕縛した少女の様子を見て剛大は考える。

この少女は一体なんなのか、そもそも何が目的でやって来たのか？ 疑問は尽きないが、ひとまずは素性を。

剛大がそう考え、余計な怪我を負わずに捕縛できた事にほっとしている様子のキャロルと話を交わそうとした、瞬間。

「っ!？」

少女の肉体が、溶け落ちる。

まるで肉が腐り落ちたかのように全身が液状化し、その骨を晒す。だが、それも一瞬の内に再生し、元に戻る。

疲れが見せた幻覚か何かか。

剛大は一瞬、眼を擦ろうとし。

背筋に走った悪寒を感じ、少女を拘束していた手を離して全力でその場を離れる。

それが、命運を分けた。

直後、少女の周囲の生命全てが、溶け落ちる。

木々が樹皮や葉の脈を残し、液状化し無惨に地面に流れ落ちる。

地面に転がったテラフォーマー達の残骸も、同様だった。

体内から夥しい量の液体が流れ出し、甲皮だけを置き去りに地に染み込んでいく。

「……」

「……なんだ、これは」

言葉を失ったふたりに興味も無い様子で、少女は立ち上がる。

自身の衣服についた泥を払い、平然とした調子で。

相手は全く堪えている様子は無い。

さらに、見た事も無い異常な攻撃手段を持っている。

どうしたものか、と剛大とキャロルは考え。

「はい、そこまでっす」

それは、少女と剛大とキャロル、向き合う両者の中間地点から唐突に聞こえてきた。

パン、と手を叩く音。

突如現れた新手に、三人の視線が向く。

剛大とキャロルは、強い警戒を示す。

何の気配もなく、突如としてその場に現れた。

相応の使い手か、もしくは高い隠密性を有する手術ベース。

「私は希？、希？・ヴァン・ゲガルド……別に覚えてもらわなくても結構です」

ビジネススーツの女性だ。

この場にそぐわぬ姿であるが、そうであるが故に歪な雰囲気醸し出している。

「本来であれば、その超絶可愛い女の子……リンネちゃんと一緒にお二方を始末して例のアレのサンプルを確保しに行くところなんです……見ての通り、死ぬほど疲れてるっす」

何を言いだすか、という剛大とキャロルだったが、その姿を見て納得する。

全身傷だらけである。

髪はところどころがほつれ、そのビジネススーツには何力所も枝に引っ掛けた痕や破れている部分がある。

敵勢力の介入者、というには少し威厳が無い姿と言える。

「……どうっすかね？　ここいらで手打ちって事で」

見るからに疲れている様子の希？。

手打ちも何も、一体何目的でお前達が来ているのか知らないのだが。

そう言いたくなるキャロルと剛大だったが。

今ここで相手も望んでいない戦闘に突入するのは得策とは言えないだろう。

かくして停戦は成立し、希？と少女、リンネは帰途に。

剛大とキャロルは百燐の元に向かう事となるのだった。

「……どこに行かれたのかしら？」

きよろきよろと周囲を見回すアストリスを、百燐は樹上で魚の鱗に変異した葉をブラインド代わりしながら覗き込んでいた。

ニュートンの卓越した身体能力や感覚器官とはいえ、索敵に特別優れているわけではなさそうだが、不意打ちで仕留めるなどという手段が通じる相手ではない。

正面から戦うのは当然分が悪い。

だが、それでも勝たなければならない。

必勝の策を練らなければならない。

アストリスから身を隠してから、時間にして三分。

やっと、準備が整った。

チャンスは一瞬、これを逃せば、いよいよ勝機は無い。

アストリスの背を狙い木から飛び降りる、一つの影。それをアストリスの鋭敏な感覚は見逃さなかった。

即座に振り向き、その顔がこれまで何度もアストリスを楽しませてきた勇士の老人である事をはつきりと確認し、喜びの表情と共にその変異した腕を振るう。

「ぐおお……！」

そして、その結末はいとも簡単に、残酷に訪れた。

百燐の腹を毒針が刺し貫き、血が流れ出す。

着地すらできず、剣を振るう事も無く、剣聖は串刺しにされた。

「ああ、とてもおもしろかった！ 帽子屋さんのお話くらい！」

ふう、と満足げに息を付き、アストリスは自身をここまで追い詰めた勇士に、微笑みと共にトドメの一撃を加えようとする。

最期に改めてその姿を見よう、と百燐の全身を視界に映し。

アストリスは首を傾げた。

「……あら？ 勇士様、そんな服装——」

疑問を口にした瞬間、アストリスの腕に触手が巻き付く。

「將軍！ 今です！」

「——!？」

そして、明らかな違和感の正体は、百燐の顔が性別からして別人に変化する、という事象を持って確信へと変わる。

「まあ、まあ！ 駒クックロビン鳥さん！ 私に会いに来てくださったのね！」

「私はあんまり会いたくなかったけど！」

苦痛に顔を歪ませながら、百燐——に化けていた静花は叫ぶように声を出す。

そして、静花によって塞がれた視界の死角から、銀色の一閃が放たれる。

数十年の鍛練と実戦を持って研ぎ澄まされた一撃が、狂い無く静花を刺し貫く左腕を切り落とす。

通信から聞こえてきた音声。

それは、静花と雅？、二人が合流できるといふ連絡だった。

二人は先日の戦闘で負った怪我とこちらでの戦闘で疲弊している。普通に正面から三人で挑んだところで勝てる相手かどうか。

ならば、と百燐は告げた。

もしかすると、命を懸ける事になるかもしれない。

それでも、勝つために力を貸してほしいと。

姿を現した本物の百燐に、笑みを強めるアストリス。

過剰摂取による影響だろう、切り落とされた左腕も即座に再生し、元の姿を取り戻す。

「でも残念！ どれだけ頑張ってもその場に留まっちゃうもの！」

いないと思っていた相手の友軍に、アストリスは目を輝かせる。

彼女には不意打ちが卑怯だとかそのような考え方は無い。

戦闘とは純然たる娯楽であり、相手がどのような手を打って来るの  
か見るのが大きな楽しみだからだ。

そして、それを打ち破る事も。

見事な奇襲だった。他の人に変身できる能力なんてすごいよね。

楽しそうに笑いながらも、自身の勝利は揺るがないと確信できる。

一度腕を落とされようとも、既に再生した。

戦局は最初に巻き戻っただけ。

ならば、このまま戦えば自分の勝ちだ。

そう判断し、百燐へと腕を伸ばそうとするアストリス。

「……誰か、忘れていませんか？」

「へ？」

しかし、伸ばそうとした腕は届かない。何者かに足を払われ、姿勢を崩してしまったからだ。

足元を見れば、そこには少女がもう一人。今の今まで、百燐に意識を奪われていて認識ができていなかった。

そして見えた隙を逃す百燐ではない。

姿勢を崩したアストリスに剣を振るう百燐。

それを迎撃し、変異した手足を振るうアストリスだったが、しかし。

「あら？ あら、あれ？」

不思議そうに、首を傾げる。

何故目の前の勇士様は、先ほどまで対応し切れていなかった私の攻撃を全て捌けるのかしら？ と。

その答えは、二つ。

「貴女は、こう言っていた。『テラフォーマーの真似』と」

ひとつは、アストリスの体の動きが鈍くなっているため。

それは、百燐の刀に刷り込まれた化学物質の効果だ。

『ナルボンヌコモリグモの毒』。

昆虫類に対して強い毒性を示すそれは、本来であれば細胞という構成単位ですらないアストリスには効果が薄い。

だが、テラフォーマーの特性を色濃く発現している状態であれば、話は別。

先ほど左腕を切断したのも、再生されるのは承知の上で毒をさらに



体内に流し込むためだ。

「——貴女は、とてつもない怪物です。だが、弱い」

……それは、百燐のような猛者だからこそ、アストリスの動きが鈍っているからこそ露呈する弱点だった。

無数の生物の集合。一切の規則性が存在しないランダムな攻撃・防御手段。

本来であれば、それに対抗する事など不可能である。

未知はそれに対する防御を困難にし、予想だにしない形での反撃を恐れさせて攻撃を踏みとどまらせる。

だが。

武を極めた真の強者だからこそ突くことができる隙が、ここにひとつ。

アストリスは、振るう無数の能力の錬度を高める事が一切できない。

それは彼女が怠惰だからというわけでは一切なく。

想像してみたい。

剣術を学ぶ際に、素振りをする度に長さ、重さ、強度……振るう刃を構成するあらゆる要素が変化するとしたら、またもに技術を修めることなどできるだろうか？

同じ例えを持ちいるならば、アストリスのそれは剣どころの話ではない。

振るたびに槍にも斧にも変わる武器の技術をどう習得できるというのだろうか。

実戦で使われれば、振るたびに何もかもが変わるそれはまともな戦士では対応する事は確かに不可能だろう。

しかし、扱う技術としては素人同然のそれは、歴戦の戦士を相手にすれば途端にボロを出す事になる。

「そして、貴女的能力は守勢に回れば不安定に過ぎる」

眼前に迫った百燐の剣を左腕で防ごうとするアストリスであった

が、その左腕が変異したのは、熊のような力強い腕。

強靱な獣の腕。たしかに悪くない変異だった。

だが、達人の剣を止めるには不足に過ぎる。

攻勢や互いに防御をせずに殴り合うような状況においては、肉体の変異は相手に硬度を悟らせないという点で優位に働く。

しかし、一方的に攻撃を受ける側となれば話は別だ。

安定した防御が不可能なそれは、守勢に耐え続ける事が出来る代物ではない。

百燐の腕が跳ね上がる。それに伴い、銀の一閃がアストリスの胸部中心を貫く。

首を落としても止まらなかった。

彼女の言葉通りであれば。その特性が、ヤツらと同じなのであれば。

ここを破壊すれば、動きは止まる。

そして、それでも止められなければ、勝機は潰える。

静花と雅？の実力を決して過小評価するわけではないが、それでも二人には手に余る相手だと断言できる。

そして、その結末は。

「……ああ、なんて事。塀から落ちてしまったのは、わたしだったのかしら」

静花に向けて振り下ろそうとした右腕。

雅？を引き裂こうとした左腕。

それが、動かせない。

そして、口から夥しい量の血液が零れ出す。

「……こんなのじゃ、ダメなの」

肉塊が、脈を撃ち拡大していく。

不安定なベースを不安定な形で肉体に組み込んでいた。

それも、ニュートンの素体で辛うじて耐えられる、というレベルの

ものを。

変態薬の過剰摂取。

その末路が、もはや辛うじて人の形を留めている、あと1分も経たずにただの肉塊へと変わる、この姿だった。

「わたし、は……わたしは……」

血を吐き、もがくような声。

最早、長くはない。誰が見てもそう取れる。

百燐たちは、その光景をただ静かに見つめていた。

狂人が生み出した兵器を、看取るかのように。

これで、此度の任務は今度こそ終わりだろうか。

「終われない、ここでは終われないもの！」

「……！」

——否。

体を構成する肉がまるで独立した生命のように蠢き、体を突き破るように無数の腕が生える。

鉤爪、鎌、毒針……それは、数えていけば限りのない、生物が戦闘や捕食の為に用いる器官の数々。

『赤の女王仮説』。

それは、自身を脅かす強大な敵に対抗するための進化の在り方を記した仮説だ。

そして、その仮説の通り。

目の前の1個体は、自身の危機に適応し、こうして進化を始めようとしている。

「……」

だが、目の前で起こる変質は、機械的なまでに物理法則に支配された、遺伝子による変異ではなく。

「わたしは……アダムおじさまの……みんなのために、もつとすてきな世界を……！」

一人の人間の、意思の力によって引き起こされているものだった。

それは、本人の生き続けるといふ意思が弱まればすぐにでも崩壊する、薄氷の上に立っているかのような状態である。

満身創痍の二人を背に庇うように刀を構えた百燐は、ああ、と息を吐く。

自分は、読み違えていたのだ。

彼女は、アストリスは、与えられた肉体とその力に見合わない幼い心が故の残酷さだけでその力を振るう怪物ではなかった。

彼女はただ、愛する親のために、その親が囁いた理想に憧れてそれを達成しようとしていただけだったのだと。

戦闘の熱に狂うあの姿は、興味津々で寄り道をしてしまう幼さによる未熟だったのだと。

そして、思案する。今刀を振れば、彼女を殺す事はできるか。

答えは、否だった。

自分の怪我は重い。相手もそれは同じだが、このままではみるみる内に肉体の変質に伴い回復していくだろう。

殺そうとすれば、恐らくさらなる速度で進化は促進される。

百燐は、眼を閉じて永遠にも感じられる数秒、思考を巡らし。

『兎さん、そんなに急いで、どこに行かれるのですかな？』

剣を下し、アストリスへと話しかけた。

まるで、童話を読みきかせるかのように、穏やかな調子で。

「……」

生まれてすぐから、アダムに聞かされていた古典文学、彼女のお気に入りの作品の一節になぞらえた言葉。

それを聞き、微かに理性の色が戻った瞳で百燐を視界に映すアストリス。

「おじさまがね、言ったの。私の力を使えば、世界はもつと素敵になるんだって。だからわたし、頑張らないと。私しか、できないみたいだから」

まるで、記憶の底から大事な思い出を掘り起こすかのように。

アストリスはアダムに伝えられた言葉を繰り返す。

「……そうでしたか。貴女は偉いですね」

「ふふ、そうでしょう？ おじさまもそう言ってくださったわ」

それに、微笑まし気な賞賛を返す百燐。

アストリスも混濁した意識の中、無邪気に微笑む。

「……ですが、もうよろしいかと」

「……？」

だが、と百燐は続ける。

それが、彼女の願いなのだとしても、と。

「疲れたでしょう？ 子どもはもう寝る時間なのですから」

「ダメよ、わたしは、まだ——」

あくまでも優しく、もういいのではないかと穏やかに話す百燐。

だがそれに対し、いやだ、とアストリスは首を弱弱しく横に振る。

「いいえ。あなたが無理をする必要など、どこにも。貴女達のような子どもが笑って暮らせる世界を作るのが、私や貴女のおじ様のような大人の仕事なのですから」

それはこの場には似合わないやり取りだった。

英雄の刀と怪物の爪がぶつかり合うべき戦場。

そこには、まるで子守歌のような穏やかでゆつくりとした言葉だけが流れる。

「……そうなの？」

今までずっと、自分だけがそれをできる、頑張らなきゃと思っていた。でも、違うだなんて。ゆつくりと瞬きしながら、アストリスは百燐に問いかける。

「ええ。きつと、次に目を覚ます時には素敵な世界ができあがっていますとも」

子どもを寝かしつける時のように。

百燐は穏やかな調子で語り続ける。

「……わからないわ。わたし、このために作られたのよ？ わたしが

いなくてもそうなるなら、なにをすれば」

困惑した様子のアストリスは、百燐へと不安気に話す。

新たな世界、アダムおじさまはとっても愉快で素敵な世界だと言っていた。

それを自分がやらなくてもいいなら、自分は他に何をすればいいのだろうか。

「そうですね……ピクニックなど、いかがでしょう？ 暖かな草原で敷物を広げて、共に行った人々と語らいあつたり、自然の中を走り回ったりと」

「……アダムおじさまとヴオーパルもいつしよに？」

自然の中で、穏やかに時間を過ごす。大好きな、家族と。

そういえば、そんな時間は今までなかったような気がする。

ふと思い返して。

その光景を、想像して。

彼女は眼を細める。

「勿論。大事な人たちと共に行けば、きっと楽しいでしょうな」

それは、虚飾だった。

アストリスの抗う意思を挫き、この戦いを終わらせるための。

世界とはそう簡単に暖かさや笑顔で満ちるものではなく、アストリスが愛する家族だという二人の人間は共に人類の脅威であり、それを言った当の百燐の所属するアーク計画が、人類が殲滅すべき対象でもある。

なんと醜い、うわべだけを飾り立てた偽りの言葉だろうか。

「そう」

だが。

「だったら……早く、寝ないと……とつても……楽しみね……」

死に至る幼子に、その安寧と安心より優先して伝える事実などある

ものだろうか？

「ああ……とつても眠たいのだけど……でも、そう……夢を見る時間はもうおしまいなのね」

過剰摂取による限界を迎え、自身の意思により保っていた進化が停止する。

それによって得た、体の至る所に生えた生物の器官が、まるで在るべき場所へと還っていくかのようになり、一本、また一本と根本から脱落する。

「……それではごきげんよう、素敵な勇士様たち——」

「——こんどは、夢の中で会いましょう？」

満足げに微笑み。

その肉体は変異を止め、ぼろぼろと崩壊していく。

専用装備の限界と、本人の意思。二つが合わさり、ウイルスと細胞の間によって構成されていた肉体の結合がほどけ、彼女の肉体は塵と化していく。

戦いの結末を彼方に伝えるかのように、さあ、と風が吹く。

異形の森林にはふさわしくない、強く、しかしどこか優しいものだった。

そして、風に浚われたその姿は跡形も無く消え失せる。

それを、勇士は無言で見送った。

そこに残されたのは、肉体に埋められていた専用装備の残骸と、彼女に由来するものではない、そして皆が求めていたウイルスの原種が組み込まれどす黒く変色したαMOだけであった。

彼が英雄だったからこそ、彼女という怪物に届く刃があり。  
彼がただの人間だったからこそ、彼女というただの人間に届く言葉  
があった。

かくして、盤外の戦争は終わりを迎える。  
そして――



# M i n d   G a m e : エピローグ   盤外終結

——フィンランド共和国・大統領執務室

「ハッ、ハッ、ハッ……」

激しい動悸を抑えきれない様子で、彼——サムエル・ハカミエスは怯える子どものように表情を歪め椅子に力なくもたれていた。

なんで。なんで、こんな事に。

ここ数時間、彼の脳裏を駆け巡るのはずっと同じ言葉だった。

確かに失政はあっただろう。

つい先日、モグラ族への対応に関する議会での失言は、彼の支持に大きな悪影響を与えた。

だが、その時でもここまでの動揺はしなかった。

せいぜい、自分の部屋をぐちゃぐちゃにしてしまった程度だった。

しかし今の彼は周囲の物に当たるといふ気力すらも失ってしまったている。

それもそうだろう。彼の状況は、絶体絶命という言葉がこれ以上無い程に似合っている。

異形と化した森林、その対処として周辺住民を一斉に避難させた。

事態が事態だ。一般に公表する事などでできず、くだらない探りを入れられないためにも軍が嚴重に警戒している。

それがいけなかった。

国民の立場になって考えるとしよう。

ある日突然、家を捨てて避難する事を強要される。

自然災害、疫病……何かしらの目に見える、ニュースに挙がっているような事態が起こってもいけない状態で。

急も急の事なので持ちだせる物も少なく、避難所は碌な設備が無いときたものだ。

さらには、このような急な避難を促した理由もどこか口を濁している様子で判然としない。

軍事攻撃を受けた可能性が……などと言ってはいるが、ではどこの国が？

これで、仕方がないと領ける人間がどれだけいるものだろうか？

「それでも、仕方ないじゃないか……！」

呻きながら、乱暴に頭を搔く。

最近めつきり増えた真つ白な髪が数本、床へと散る。

「私にどうしろと言うのだ！ フランスと戦争でもするのか！」

実際のところ、この一件はフランスによる軍事的な攻撃だ。

だが、その真実そのままを公表するとどうなるか。

今回の事故を彼の知る情報から言い表せば、『フランス軍の突発的攻撃によるテラフォーマー研究施設の破損、それによる検体の脱走』だ。

何故森があのようなこの世のものとは思えない状態となっているのかはサムエルの知るところではない。

テラフォーマー研究施設というのは言うまでもなく一般に明かせない機密だ。

ならば、国民に説明できる真実は、『全部フランスがやらかしました』というものだけである。

当然、フランスへの不満は爆発し、批判の矛先はサムエルから逸らされ……と、そう上手くはいかないのが世の中だ。

此度の一連の騒動に対する両国民の不安と不満は、エドガーと対話していた時のサムエルの想像を遥かに超えていた。

自身の支持と不満の矛先逸らしに利用できる段階を超えているのだ。

フランスもまた、謎のテロリスト集団による襲撃で首都パリが大きな打撃を被っている。

そんな不安定な政情で、他国から責任を追及する声明が出されれば、どうなるだろうか。

両国の国民の不満は爆発し、憎悪が相手へとぶつけられる。

パリの悲劇もフィンランドが一枚噛んでいるのでは、などという言論も噴出するだろう。というか両国民が知る事ができないだけで事実である。

膨れ上がった憎悪はもはや、一戦交えでもしないと納得できないという程に達する可能性が高い。

そしてそうなった場合、勝者はわかりきっている。国の規模が違う。

目に見えている軍事力差による現場の士気と、一連の騒動で打撃を受けたとは言え未だ国内を強固に纏め上げるエドガー・ド・デカルトのカリスマと、指導者として失政続きの自分。

他国の根回しという政治的実力からも、どうなるかは目に見えている。

彼は決して有能な政治家ではないかもしれないが、自己を客観的に見る事はできていた。

ここでフランスに責任を追及するのは最悪の一手だ。

だが、国民にテラフォーマー云々の真実を明かす事などすれば、間違い無く彼は各国から制裁を受ける。

テラフォーマーの存在の隠匿は、世界各国の密約なのだから。

「は、ハハ」

——— おや、彼は？

——— ふむ、サムエル君と言うのかい？

——— まあ、君よりは期待が持てそうだ。サムエル君……

大統領になりたくはないかな？

——— こうなってしまった、全て始まりを思い出す。

一介の議員であった自分が、運よく……今思えば運悪く、大統領執務室を訪れた時の事を。

顔の穴という穴から液体を垂れ流し、普段の傲慢さなど見る影も無い惨めな姿で許しを乞う大統領の姿。

そして、そんな大統領に、続けて自分に向けて穏やかに微笑む人の形をした何か。

——— そこで知ってしまった。

——— この国は、得体のしれない何かの巣穴になっていたのだと。

歴代の大統領たちは、彼と契約を交わしこの国の繁栄を享受していたのだと。

自分は権力欲に弱い人間だった。  
喜んでその手を取った。

50と数年の人生の中で、最も都合よく何もかもが上手く行く経験をして、この部屋を手に入れて。

それから、1ヶ月と経たない内だろうか。

前大統領が、不審な死を遂げた事を知った。

立場を追われた苦による自殺か、などという新聞の記事を読みながら、彼は寂しそうな表情を作りつつ言った。

秘密とはつい明かしたくなるものだから困るね、と。

「……………」

ここが、潮時なのではないかと思う。

あの時の会話からわかる事は2つ。

腐った首はすぐにでも挿げ替えられる事。

そしてもう一つは、その後でも、自身が知る全てを暴露しようという限りは命までは取られないという事。

最初は、国のトップとして周囲が媚びへつらう姿に愉悦を感じていた。

だが、このような神経を擦り減らす仕事はもう沢山だ。

わざわざこの立場にしがみ付く事など――

「……………」

そこまで考えて、モニターの光が急にサムエルの顔を照らす。

同時に響く音は、誰かからビデオ通話がある事を示していた。

このモニターは大統領専用、各国首脳間のパイプラインの一つである。

今この時間に、何かしらの話し合いの席は無かったはずだが。

通話相手の欄に表示されているのは『南アフリカ共和国』の文字。

新大統領就任の挨拶をした程度で、政治的な協力、対立関係は今のところ無かったはず。

暇だったから通話して世間話をするという仲でも当然ない。

訝しむサムエルの事など知った事か、とでも言わんばかりにビデオ

通話は繋がり、相手を画面へと映し出す。

『これで繋がったかしら？　そう、ありがとう』

「貴女は……」

画面の向こうに映る人間に、サムエルは困惑の色を強く浮かべる。

その女性は、南アフリカ共和国大統領、ヴィクトリア・ウッド氏ではなかったからだ。

一国の長としては異例の年若い女性という点ではかの国の大統領と同じである。

しかし、その外見的特徴は大きく異なっていた。

雪のように白い肌に、政界ではなく社交界に相応しいと思える深紅のドレス。

『このような形でのご連絡、失礼いたしますわ』

「……」

その女性の挨拶に、サムエルは無言を返す。不満や怒りを感じているわけでは無く、状況が掴めずただ困惑しているのである。

『ですが、どうかお話を聞いてくださいますよう。貴方にとつても決して悪い話ではないわ』

「……何故貴女がこちらに？　ベックマン氏」

そこでようやくやく、サムエルは通話相手——モニカ・ベックマンに理由を問う。

全く知らない相手では無かった。

直接話を交わした事こそないが、その顔はニュースや新聞記事で何度も見た事がある。

世界で5指に入る大財閥、『ベックマン財閥』。その若き当主が画面の向こうで微笑む彼女だった。

しかし、彼女が今このように通信を繋げてくる理由がわからない。

それも、他国のトップの力を借りてまで。

『今日は商談をしに来ましたの。大統領の席と国民の支持……それに、ヨーロッパの平和。お買い上げいただけるかしら？』

「なんですと?」

そんなサムエルが抱く疑問の答えを口にするモニカ。

一体彼女は何を言っているのか。

首を微かに傾けるサムエルに、モニカは『商品』のプレゼンテーションをモニター越しに始める。

『今回の一件、ベックマン財閥による新製品テストの事故という事で収めましょう』

「……!?!」

理解が追いつかない様子のサムエルを無視し、モニカは説明を続ける。

政府機関と共同で行っていたベックマン財閥の新製品テストの過程で大規模な事故が発生。

機密関連の確認と交渉のため国民への説明が遅れた事を深くお詫び申し上げる。

今回犠牲となった軍人の遺族には手厚い賠償を約束し、急な避難を強要された人々もまた同じく。

加えて、フィンランド各所との関係強化、それによる多くの雇用を約束する。

大統領のたゆまぬ交渉の結果、という発表も添えて。

「加えて、今森に蔓延している未知の病……開発中のワクチンも提供いたします」

「そ、それは本当ですか?!」

まるで、夢でも見ているかのような口ぶり。

本来自分が被るべき罪を全て被り、さらには自分の手柄にまでしてもらえると口にする。

興奮に思わず大声を出すサムエル、だが、すぐにそれを恥じ誤魔化すように咳払いする。

『ええ。ですがこれは段階的なものです。大統領からいただけたモノに応じて、となりますわ』

「……モノ、ですか?」

サムエルは認識を改める。

確かにそれはそうだ。資金的にも、企業イメージとしても、それを成した場合、ベックマン財閥は少なからず打撃を受ける事となる。そのリスクを追ってでも、自分やフィンランドという国から得たい何かがあるという事だ。

それは何なのか？

結局サムエルは、それを言われる瞬間まで、気付けなかった。

『オリヴィエ・G・ニュートン。彼について、貴方の知る全てを差し出していただけるかしら？』

「!？」

そして、瞠目する。

何の関わりも無いであろう一経営者の口からその名が出た事と、サムエルの繁栄を支える対価について。

『ああ、言い忘れていたかしら。貴方に選択肢は残っていませんわ、サムエル大統領』

魅力に溢れた微笑み。

しかし、そこに得体のしれない不安を感じて。サムエルは言葉を返す事ができない。

『どの道、貴方にこれ以外の道など残っていない。考えてみてくださいるかしら。もし話を受けなかった場合の事を』

『あの臆病者の外道が、失態を犯した、これからさらなる失態を犯して国を傾ける貴方を生かしておくとは本気で思っています？』

「……っ！」

ぞくりと怖気が走る。

同時に、自分の考えの甘さを呪う。

そうだ、その通りだ。あの男が、私を生かしておくなど本気で信じていたのか？

秘密を抱えた私を、命を賭してでも秘密を守るなどという真摯さには程遠い、現にこうして揺れている私を、本当に……。

そう明言したわけでもないのに。先代よりもなお、失態を犯しているというのに。

不安に駆られた心情が交渉相手に感づかれないうようにポーカーフェイスを装うが、残念ながら今サムエルが相對しているのはその程度で誤魔化せる手合いではなく。

『さあ、全部話して、楽になりましょう……そうすれば、手厚い保護と繁栄を約束いたしますわ』

まるで、誘惑するかのよう。

甘い声が、サムエルの脳の端を蕩かす。

サムエルの態度でモニカは確信していた。

彼は多くを知っている。

シモンが実際に相對してのわずかな会話と、オスカルの一族としての知識。

二つを合わせてなお、未知数の相手。

これは、尋常の手段では触れる事さえできない、触れようとすれば途端に引きずり込まれ手遅れとなる深淵に潜む異形、それに一撃を届かせる好機だ。

そして、アーク計画の一翼を担う彼女は、妖艶に微笑んだ。

『もう一度、言うわ。『オリヴィエ・G・ニュートン』について、貴方の知る全てを差し出さない』。それだけが、貴方の生きる道よ』

「……人使いが荒いんすから、もう」

異形と化した森林の奥で、希？はひとりぼやく。

『ツイクツワンク痛し痒し』の後始末を行い、ここフィンランドの本拠地に帰還したのはつい先日の事。

休暇が欲しいっすねえと思いつながらオリヴィエの玉座に戻った彼女を迎えたのは、オリヴィエの劳いの言葉と、同時に告げられた無慈悲な「頼みたい事があるんだけど」だった。

A・Eウイルス、その三種目の原種株の確保。

アネックス、アーク計画の人員より先んじて、もしくはそれを奪い取ってでも……という事だった。



最悪アダム君から貰ってもいいけど、自分の方でこつそりと確保しておきたいからね、という意向で。

確かに私が一番向いてるっすけど……と渋る希?に、オリヴィエは語る。

「リンネを連れていってもいいから」と。

その言葉で、主君が本気で臨むべき事案だと認識している事を知った希?は仕方ないっすね、と任務に臨む事となる。

まあ、渋った理由としてはあくまでもやつと仕事が終わったと思ったら次の仕事……という気怠さの話であって、任務の難易度という観点の話ではない。

アネックス、アークの派遣された人員がアストリスを仕留めるか、逆にアストリスに返り討ちに遭うか。

そうなった後で、負傷している勝利した側をさつくりと暗殺してアストリスの死体を持ちかえればいいだけの話だったからだ。

それに、もし全面戦闘となった場合でも何ら心配は無い。

もし仮に全員を相手にしても、制圧する自信はある。自分ではなく、リンネの力を使えば。

とつとと終わらせよう。

休暇の計画を考えながら、希?は木の枝の上に立ち交戦するアストリスと百燐を観察していた。

両者とも、紛れも無い強者。

健在な状態となれば、万全を期して挑んで何とか勝てるか勝てないか、というくらいか、と希?は思案していた。

戦闘の経過が進み、両者消耗している様子。

さてそろそろ割り込むか、と伸びをしていた、その瞬間だった。

——ヒュン

「おひょおっ」

空を切る音に、自身の首を正確に狙い刃が振るわれた事を感じ取る。

それを認識した希?は思わず間抜けな声をあげ、樹から飛び降り

た。

能力を使用し隠密状態の自分が知覚された？　へ々な動きも見せていないのに、何故？

いや、そもそも――

「不自然な枝のしなり、懸かってそうな重さから、まあアナタでしょうね」

バリトンボイスの渋い声色が、希？の耳に届く。

何の問題も無く、地面に着地する。だが、雪がその体重で沈み、落ち葉が舞う。

そこを、襲撃者は逃さない。

「もう少し気を付けた方がいいんじゃないかしら、ねえ希？ちゃん？」

「最近よく会うっすね、オスカルちゃん……！」

再度の刃を躲し。

相手――オスカル・新界を視界に捉え、希？は頬をひくつかせる。

何故ここに、という疑問を浮かべる暇無く、襲い来る刃。

身を翻しその射程から逃れ、希？は擬態を解く。

「なんすかこんなところに……観光にはイマイチの場所っすよ？」

焦りながらもへにやりとした笑みの希？。

言葉とは裏腹に腰から銃を抜き、戦闘態勢に入っている。

後は引き金を引くのみでオスカルの撃ち抜く事ができる。

だが、そんなものはどうという事はないとでもいいだけに、オスカルは肩を竦め会話を続ける。

「イケメンの上司に言われたのよ。『邪魔が入るからそれを止めてほしい』ってね」

「へえ」

オスカルの冗談めかした回答に、希？は少し困った様子で頬を掻き、そして。

「シモン様はずいぶんと本気なんすねえ？」

表情に一切の変化を見せないオスカルに希？は微笑みかける。

オスカルの上司とやらは、ニュートン本家……ジョセフではない。アーク計画実働部隊を束ねるシモンである。

別にこの問答になにかの意味があるというわけではなかった。

オスカルは自分がアーク計画に関わっている事を明かしはしなかったが、それを知られたからと言ってそう動揺はしないだろう。

槍の一族の情報網なら知られているわね、と思う程度である。

希？もそれは承知の上でちよつとした嫌味を言ったただけだ。

「ええ。アナタとアナタの主……オリヴィエに釘を差しに来たのよ」

その返答は、刃を振るわんとする腕。

ムキになったのではなく、これ以上の問答は不要だと戦士としていつそ冷徹なまでに抜き放たれる一撃。

……だが。

「オリヴィエ様に釘を差す？ あんまり面白くない冗談つすよ」

オスカルの刃は、振るわれる前に希？に踏み付けにされる形で止められる。

まるで、刃を振るう軌道が事前にわかっていたかのような動きだったからだ。

希？が一族の中でも上位の戦闘能力を持っている事は疑うべくもないが、それでも反応が速すぎる。

何らかのMO手術による能力を使っている。

そしてなにより、希？の表情。

普段の笑顔は消え去り完全な無となったそれは、普段の彼女を知る人間からすれば、別人のように思える程の変化である。

泥を丸めてはめ込んだような、彼女の主のそれに似た情動を持たない眼光がオスカルを貫く。

想定よりも厄介な戦いとなる。

即座に判断し、バックステップを切り刃を構えるオスカル。

その動きもまるで事前に読んでいたと言わんばかりに背後に跳び、銃口を向ける希？。

「あまり凶に乗らないで欲しいですね。分を弁えるがいい、我らが神に沈められる小舟の漕ぎ手如きが！」

——そして、剣閃と弾丸が交差する。

「……というのが、私の執事がボロボロにされた経緯だよ。会議の席に崩れた格好で参加していた事を許してあげてほしい」

「ええ!? この流れで希?ちゃん負けるの!?!」

「……」

アダムの本気で驚いた表情と、エドガーの生温い視線。

玉座の隣で、希?は耐えがたい恥辱に何とか耐えていた。

任務を遂行できなかった罰というわけでは無く、オリヴィエ様はただこの流れが公表されて私がどう思うかについて無頓着なだけ……いやなおさらタチが悪いっす、と時間が過ぎ去るのをただ待っている。

モニターに映し出されたアダムの隣に立っている傷跡だらけの男性と、エドガーの隣に立っている理知的な眼鏡の女性……自分に近い立場、両者の側近であろう二人は無表情ながらも同情めいた視線を向けてくれている事だけがせめてもの救いだろうか。

「……それで? 部下の無様を晒して何が言いたい」

つまらなさそうに呟くエドガーは今にも退席しようとしていた。

それも無理は無い事である。

今現在、ツィクツワンク 終結した『痛し痒し』の振り返りは既に終わり、もう解散

という雰囲気の間だったのだから。

「はつきりとさせておこうと思ってね。いやエドガー君、私の完敗だ」  
相も変わらず感情の無い笑みを浮かべながら、モニター越しのエドガーへと語り掛けるオリヴィエ。

「盤内の戦争はまあ、両者敗退という事で五分だったけれど……。それ以外のあらゆる面で、私は君に遅れを取ってしまった」

悲しそうな表情を浮かべながら、オリヴィエは記憶を掘り返すかのように続けていく。

エドガーはそれに対して無言、アダムはなにかを考え込んでいる様

子である。

「アダム君が用意してくれた追加戦力も片方を確保されてしまい、それを使った本拠地へのエドガー君の攻撃も結局こちらでは解決できずに灰陣営の諸君任せだ。いやあ、参ったね」

「それに、有力な戦力も失ってしまった。必要な事だったとはいえ、ルイスやブリュンヒルデはまあまああの痛手だったなあ……あとアヴァターラはとても惜しい……アダム君、目を逸らしてどうしたんだい」「何でもないよー、ぴひよー」

しみじみ話すオリヴィエが目を向けると、アダムは露骨に目を逸らして下手な口笛を吹いている。

手駒の一人、ブリュンヒルデを切る事にしたのは主にアダムのせいだからである。

「でもそれを言ったらエドガー君だって同じくらい被害出してるよ！優秀な部下、沢山失ってるよね！ コミコミで考えると同じくらいの被害じゃないかな？」

誤魔化すかのようにエドガーへと話を振るアダム。

その内容は決してあてずっぽうでは無く事実を捉えている。

『痛し痒し』は灰陣営、アメリカ合衆国を守るため尽力した戦士たちの勝利で終わり、オリヴィエとエドガーは両者敗退、その過程で多くの駒が命を落としている。

オリヴィエがこのゲームに参加した目的は元々が『身内の不安要素を使い潰す』という理由が大きい。

そのため、駒の死も本人の言の通り痛くはあるが、元々想定していたもの。

だが、エドガーの参戦理由はまた違う。駒の損失には相応の被害があるのではないか、という指摘である。

「いや、それは違うかな」

「クハハ、やはり羽虫は羽虫か。余を誰と心得る？」

しかし、その返答はどうという事はなしという嘲笑。

この場でアダムに味方無しである。

「そのこのスペアのようにこの程度の損害を惜しむ程、余は矮小ではな

い」

「だろうね」

あるえー？ と疑問な様子のアダム。

一方のオリヴィエは理解している様子である。

「君の陣営ならば、戦力の補填はすぐにでもできるだろう」

羨ましいね、と溜息混じりのオリヴィエは玉座に頬杖を付く。

「やはり、一国そのものを動かせると動員できる戦力も違う。外部にも色々と持っているだろうしね」

「数百年を懸けても国すら御せぬ貴様と比べるな」

エドガーの辛辣な言葉に、オリヴィエもまた返す言葉もない、と苦笑する。

「そんなわけで、エドガー君は人員の損失すら大した問題じゃないのさ。私の一人損というわけだ」

「殊勝な事だ。気味が悪い程にな」

「まあ、しばらくは大人しく反省でもしているよ。根本的に計画を立て直す必要もできたしね」

今回のゲーム、楽しめたという点では大きな収穫だ、とも言い残し、オリヴィエは話を締める。

「それではね、エドガー君。もうこうして画面越しで会う事は無いだろうね——」

エドガーにひらひらと手を振るオリヴィエ。

彼ら二人は本来不倶戴天の敵である。

今回こそアダムの誘いに乗り席を囲んでいたが、そのような特例が無ければ彼らが接触する事は無いだろう。

「——次に会う時には気の利いた遺言を聞かせておくれ」

——ただ一度、神の座を争い激突する場合を除いて。

一瞬、ほんの一瞬だけおぞましい気配を纏わせ、オリヴィエは通信

を切る。

「……泥人形が」

言い逃げされたエドガーもまた、一度鼻を鳴らし通信を切り。

「……いや、だから僕を放置してバラ色の世界に入り込まないでよ！」  
アダムは一人、黒のモニターにツツコミを入れるのだった。

——中国 某省

商店街の中を歩く少女が二人。

足取りは軽く、その手には買い物袋が握られている。

今回の戦いの祝勝会……という事で龍將軍に提案された会食の時間までやる事が無かったふたり。

そういえば、街を歩き回って買い物なんてした事なかったかも？  
というお嬢様だったらしい雅？を静花が半ば無理引きずり出  
ての今日のこの状況である。

静花も箱入りのお嬢様、雑多な街で様々な物品が売り買いされてい  
る光景に圧倒され、目を輝かせ。

気が付けば、日が落ちかけている時間になっていた。

夕焼けの中、街角のベンチに座り今日あったあれこれを話し合う。

そんな中、雅？の表情が曇る。

「ねえ、静花ちゃん」

「どうしたの？」

体調が悪いの？ と心配する静花の言葉を否定し、雅？はそれを語  
り始めた。

「もし、もしもの話だけど……。私が静花ちゃんと静花ちゃんの大事  
な家族の皆さんに酷い事をしなきゃいけない時が来たら……」

それは、いずれ犯すかもしれない罪の告白だった。

結局のところ、雅？と静花が今回の任務で築いた友情は偽りの上に

成り立っている。

U—N—S—A第四支局所属、裏アネックス第四班搭乗員の雅？は正しくは槍の一族の一員である。

神にも等しき主の命令は絶対、もし命があれば、こうして僅かな期間ではあるが苦楽を共にし親交を結んだ友人やその家族であつても、刃を振るわねばならない時が来るかもしれない。

それを命令されたら、雅？はどう動くか決めていた。

命令は絶対。でも、それに失敗して死ぬのはただの実力不足だから仕方ないよね、と。

「……その時は、わたしを——」

「なに言ってるの。そんな事したら、ぼこぼこにしてあげる」

もしそうなつたら、静花ちゃんは遠慮なく自分を始末してほしい。

そう続けようとした雅？に返ってきたのは、予想外の答えだった。

その想像以上にバイオレンスな回答に苦笑する雅？。

そして、それに心から安心する。

いつか裏切る自分なんか気にしないで、この子は正しい選択をしてくれると。

「ぼこぼこのぼこぼこにして……それで、無理矢理連れ帰るわよ」

「へ？」

しかし、その雅？の安心は本人の想定していない方向に裏切られる。

軽く言つてのけた静花に、きよとんとする雅？。

「友達が間違つた事したら、そうするもんでしょ」

それが当然だとさらつと言いきる静花。

想定外の反応に混乱している雅？に、違つた？ と首をかしげる。

「違います……違いますけど……。」

否定できない。

本当なら、連れ帰りなんてしなくていい、と言いたいのになんか言えない。

自分でも困惑している雅？。



「ほら、変なこと言っていないで行きましょう。高級料理が待ってるわよ！」

しかし、そんな悩みなどどうでもいいのだと言いたげに、静花は彼女を急かす。

「た、楽しみです……！」

ほの暗い未来が見えている。

大事な人たちを裏切らなければならぬかもしれない未来がある。しかし、今だけはそれを忘れてもバチは当たらないだろう。

こうして、此度の戦乱を戦い抜いたふたりの少女は、連れ立って頼れる上司の待つ場所へと歩き始めた。

——アメリカ U—N A S A 本部

「二人とも、今回は本当にお疲れ様！」

「ラヴロックさんには大変お世話になりました。私の班員にも見習っていたいただきたいくらいです」

「それぞれそんな……そこまで褒められるほどの事じゃ……！」

あれから一週間が経ち、帰還したU—N A S A本部の一室でキャロルと剛大は完全な任務完了の報告をしていた。

それを聞く青年、シモンの表情に浮かんでいるのは穏やかな笑顔。「想像以上に大変なことになっちゃったけど……なんとか済んだね」

ほっとした様子でシモンは二人を労う。

アメリカとフランスの騒乱から、世界の滅亡にまで話が発展した今回の騒動。

その解決には多くの人間が尽力した。

前線に立っていたアネックス、裏アネックス、アーク計画の戦士たちだけでなく、その何十何百倍の人員が不断の努力を続けた結果、今の平穏なアメリカの日常が保っている。

♂型プロトタイプ、アストリスから採取された原種サンプルを解析しワクチンを1週間と経たない相変わらずの正気と思えない速度で作成した後、「明後日は筋肉痛だ」と言い残してそれぞれの寝室に姿を消したクロード博士とヨーゼフ博士、寝室にすらたどり着けず死屍累々となっている研究チームで溢れている実験棟を見れば、彼らには

彼らの戦場があつた事を否定できる人間などいるまい。

キャロルと剛大にも♂型プロトタイプの感染が確認されていたため、しばらくの間は厳戒態勢の病院に詰め込まれていた。

ワクチンの目途が立ち病状が落ちつき、こうしてようやく面と向かつての報告の機会が訪れたのだ。

キャロルの活躍にどんなに自分が助けられたかという事をひたすらに語り続ける剛大と恥ずかしそうにそれを遮るキャロル。

ふたりに任せて正解だつたなあ、とシモンは改めて思う。

「では、私はこれで」

もう少しゆっくりしていけば、と勧めるシモンと同調するキャロルだつたが、剛大は首を横に振る。

お気持ちはありがたいのですが班員たちを鍛えねば、と。

どうせ土産話をせびられてしばらくは訓練にならないでしょうから、と苦笑しながら。

熱心な隊長さんだ、と微笑みながら剛大を見送るシモン。

「島原さん！」

扉を開け、去っていく剛大に声をかけるキャロル。

何か忘れていたものがあつただろうか、と剛大は振り向く。

「みんなを……世界を、絶対守りましょう！」

そんな彼が聞いたのは、共に戦つた同僚の、改めての覚悟の言葉。

「……ええー！」

普段の元気に溢れたキャロルと、普段の彼には珍しい、強い感情の籠つた調子で答える剛大。

元警察官だつたふたりは、かつての職場と変わらない、人々を守る戦いに身を投じる戦士たちは同時に敬礼をする。

共に守る仲間達が、大事な人達がいる。

自分の誓いは決して変わらず、崩れはしないのだと、互いに再び確

認して。

これは戦いの終わりではなく、彼らの本当の戦いはここからが本番だ。

「ずっとしあわせにくらしましたとき」で物語を締めくくるには、この世界を襲う災いは何も解決してはいない。

しかし、盤上と盤外の戦いは終結し、世界を食らわんとする怪物たちはこの戦いで得た成果を咀嚼し傷を癒すべく、しばしの眠りに着く。

青き命の星、地球。世界を救わんと深緑の星に旅立たんとする二年前。

この世界は、こうしてひと時の平穏を得たのだった。

—— 奈落の底で、神樹の芽が開く。

「……君は本当に素晴らしい知見を与えてくれた」

真白の床、外壁、天井。

無機極まりない暗い実験室を飾るのは、数十匹のテラフォーマーの残骸。

全身に穴を穿たれた個体。

何かと激しく衝突したかのように無惨に砕けた個体。

煙を上げ痙攣している個体。

焼け焦げた個体。

外傷無く息絶えている個体。

バリエーションに富んだ死体の数々を検分するかのように踏み歩き、男は静かに呟く。

「そのおかげで、最後の実が見つかった」

暗闇の中、赤色灯だけがその姿を浮かび上がらせていた。

額から鼻辺り、顔面の左半分を覆う、眼を凝らさなければ分からない程度に微かに捻じれ曲がった肌。

穏やかな口調で、しかし隠しきれない小さな喜びの感情を示すのは、静かに揺れる、無機質で機械的な印象を与える尾のような器官。

役割を終え体内に沈んでいく、体のいくつもの箇所から生えた中空の槍。

感覚を確かめるように何度も握り開きを繰り返す右手とその根本の腕には、体内から赤く錆びた金属が析出し表皮を覆っている。

それと対を成す左の腕は、肩口から生えた緑色の細い繊維が無数に渦を巻き腕を形作り、先端で再び広がる奇妙な形状を成している。

返り血として浴びたテラフォーマーの体液が光を反射しぬらりと光る、歪で、ただ奇怪なその姿。

自身の肉体の各部位を満足げに眺めた後、彼はその手に持った武器を肩に背負う。

刃と呼べる部位が無い円錐状、大まかな形状としては騎兵槍ランスに近い槍。

だが、まるで鳥籠を引き延ばしたかのような、幾重もの螺旋を描く格子によって編まれたそれと、その内側に閉じ込められるように充填された肉塊は、これが一般的な槍とは程遠い何かであることを示している。

「素晴らしい収穫だ…。本当に、素晴らしい」

噛みしめるような囁きと同時に、槍が、内部の肉塊が、花開く。

本人の感情に呼応するように爆発的に増殖し、男から生える尾に近い形状の繊維が無数に格子の隙間から外界に這い出で、ゆらりと揺れる。

それに気付いているのか、いないのか。

男は見向きもせず、暗い天井を見上げる。

まるで宝玉をはめ込んだような、美しい青の瞳。

人間と変わらない右の眼。

星空をそのまま映し込んだかのような、無数の小さな瞳が形成された、左の眼。

そこに、磨き抜いた泥玉のような一切の情動が見られない鈍い光を湛え、

神の泥人形は静かに微笑んだ。

盤面の戦争は終わり、盤外の戦争もまた終結した。

だが、世界を揺るがす災厄は、未だ何も終わってなどいない。

皮肉にも、盤面の戦争における人類の勝利が、それを成し得彼を一度討ち果たした聖者の姿が、回答を指し示してしまった。

至るべきただ一つの極点、その答えを得てしまった深淵の異形が、ここにひとつ。

——  
始まりは白。

血濡れの聖槍を携えた泥人形は、白く淀んだ狂気と神樹の枝葉を世界へと覆い広げる。

『人喰らいエスメラルダ』

『月』

下薄刃』

『幻影に潜む略奪者』

『暴虐たる蟻王』

『臓腑』

に萌ゆる嬰兒』

『輪を描く命、廻らない魂』

『白の楽園』

『紫色の枢機卿』

『知恵の果実』

『生命の果実』

「——ああ、イヴ君……君にはまた、直接会ってお礼が言いたいな」

——かくして再び、人類の未来を賭けた聖戦の幕が上がる。

## 第2部 青き命の星の物語

### 第58話 生還者達

……眠たい。

不明瞭な、まるで水中にいる時の視界のようにぼんやりとした意識。

自分は、どこにいるのだろうか。暗い海の底にいるかのような重々しい体が押し潰されるかのような閉塞感、助けなど来ないのだと何か語り掛けてくるような感覚。

それとは真逆の場所、天高く、その先にある世界、宇宙に放り出されたかのような、果ての無い暗闇の中でただただ浮き続けるかのような、体をどこにも預けられない不安。本来であれば息を飲むであろう美しい、色とりどりの星達も、まるで自分をただただ観察する人の届かぬ存在の無数の瞳にしか思えないだろう。

「こんばんは」

記憶も酷く曖昧だ。自分は誰で、何をしていたのか。ここは、どこなのか。

「良かったね、君は選ばれたんだ」

体を起こした。手術室のような病的な白が支配する殺風景な部屋、その中心、自分が寝かさされているベッドの周りを、一人の男がぐるぐると回る。回りながら、俺に話しかけてくる。

「君は何がしたいのかな」

「ああ、怖がらなくてもいい」

男は二人に増えた。同じ顔の男が二人、ベッドの周りをぐるぐる回る。それぞれが別々の事を話すのに、そのタイミングは全く同じで、声も別の内容なのにまるで同じ事を話しているかのように、被って聞きづらいなどという事は無く自分の中に入り込んでくる。

「人間とは、脆く儂い生き物だ」

「そうだ、歓迎会がしたいな」

「今日はいい天気だね」



男は三人に増えた。楽しそうに、全く同じ、張り付いた笑顔で、俺に顔を合わせる事も無く、どこか遠い場所を見るような目で、男は話す。……ああ、何となく、頭の中に映像が、俺の記憶が流れ込んでくる。そうだ、俺は今から火星に行こうとしてたんだっけ……？

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

ベッドを周回する三人が、同時に、先ほどまでとは違い同じ内容の言葉を発する。

……ああ、これは、夢なのだろうか。それとも――

2620年 11月23日 U-NASA本部

「……ではでは、乾杯！」

U-NASA本部の医療センター、その中にある病室の一室に、彼らは集まっていた。

殺風景な部屋を彩るのは、部屋の所々にある装飾と、借りてきた移動式の机に並べられた食事。

それは、病室での食事、というイメージとは真逆に行く、豪華なものの数々。

部屋の入口には、紙に雑な字で書かれた、『第2班任務終了打ち上げパーティ』の文字。

裏アネックス日本第2班 生存者：7人

ランキング上位が比較的多く、裏アネックス連合軍でも戦力の主力として戦った第2班。幸運な事に班員の約半数が生き残った彼らは、地球に帰還した後、各々と班、それぞれでするべき事をこなしていた。最初に、命を落とした班員の皆の弔い。U-NASA本部へ提出するための各種報告書の作成。

半数が命を落とし、さらに生き残った半数は重傷を負っていたためこのU-NASA本部医療センター送りとなり実際にU-NASAの業務を行うために動けたのはわずか4人であったため、そこで時間

がかかってしまい、帰還から約3か月後の11月、ようやくこうして集まる事ができたのである。

班長である剛大は今帰国しているため来られず、今現在ここにいるのは、まだ到着していない健吾を抜き、正式には第2班班員ではないものの参加している1人を加えて6人だ。

「しっかし、色々とビックリだよな、俊輝」

「ああ、本当にな」

料理を自分の皿に乗せ、上機嫌な翔が俊輝に話しかける。2人の会話、それが指し示すのは、俊輝と共に料理を漁っている1人の青年であった。

「まさか、拓也がなあ……」

「……」

翔の目線に、気まずそうに目を逸らす拓也。

翔の発した言葉には、様々な意味が含まれていた。第一に、拓也が第4班の班長であり、自分達と敵対する立場であった事。第二に、拓也が今生きてこの場にいる、という事。

火星で俊輝と静香を庇いテラフォーマーの大群と交戦し、そのまま行方不明になった。地球に帰還した各宇宙艦の搭乗リストにもその名はなく、あの後命を落としたのだと、そう皆が思っていた。

そんなある日、U—N A S A本部に一隻の宇宙艦が帰還した。第4支局所属、『星之彩』。本来であれば中国に帰還するはずの第4支局宇宙艦が何故本部に不時着したのかは定かではない。事前連絡もない着陸であったため即座の対応ができず、少し時間が経ってから本部職員が対応にあたったが、機内は何故か一人の搭乗員もおらず、もぬけの空。だが、機体の付近で倒れている1人の人間を発見した。

このような経緯で、拓也はU—N A S A本部にやって来た。『星之彩』は中国に回収されたが、拓也の事は中国には知らされていなかった。それは、本部と第2支局の意向によるものである。

拓也の生存が知れば、中国は必ず回収にやって来る。希少なベース生物を宿した検体が帰還したのだ、当たり前的事だろう。それを、日米、特に第2班の現場部隊は良しとしなかったのだ。

とにかく、裏第2班の一時的とはいえ元班員であり、最大の敵であった青年はこうして再び裏第2班と共に行動していた。さて、問題となるのは、拓也への皆の対応である。拓也が敵であった、という事は皆が知っている。その情報の経路は直接交戦していたり、地球に帰還してから話を聞いたり人それぞれであるが。

問題は、その後だ。拓也が全てを皆に改めて話して仲直りしたのか？ やはり、許せないと皆に拒絶されてしまったのか？

それは、とある理由からどちらでもなかった。

「まだ、思い出せないか？」

「ああ……悪い、皆……」

……地球に帰還した拓也は、記憶を失っていたのだ。それも、火星に出発した後の記憶だけを。

勿論、拓也の裏切りは最初から仕込まれたものの為、今の拓也の記憶には裏切りの計画とそれを決意した自分、というものがはっきりと刻み込まれている。記憶を失っていたのだから無罪、などとは言えないだろう。

しかし、発見された直後、意識があやふやだった拓也に俊輝が伝えた、火星に向かってからの拓也の話。共に行動して『裏切り者』幹部から俊輝と静香を庇うような形で別れ、裏切り者として戦い、最後にはテラフォーマーの大群の中へと消えていったその行動。

もう、全ては終わったのだと聞いた、全て終わった上で、自分の目の前に地球で笑いあった友人達が全員、とは言えないが生きているという事実を知った拓也の安堵に満ちた表情。

それを見て、第2班の皆は拓也を裏切り者として拒絶する事はできなかった。

「……思い出したら、改めてまた話をしよう。それまで、ゆっくりと体を休めるといい」

「すまねえ、武」

ベッドに寝かされたままパーティに参加している武が、意気消沈している拓也に笑いかける。

直接殴り合った二人ではあるが、少なくとも、今険悪な関係という

わけではない。それに安心して、俊輝は皿にデザートを取り、もう一つのベッドへと向かう。

「雛かなんかに餌やつてるみたいだな」

「……うっさい」

左の翼、変態前で言う左腕が複雑にへし折られ、他にも全身に痛ましい傷を負った静香。元々体が強いわけではないという事もあり現在療養中である。そんな静香に食事の乗ったスプーンを差し出しながら、俊輝は意地の悪い笑いを浮かべる。

「あらあらお熱いですね！」

「ちよつと黙ってる、美晴」

ワインを興味深々で見っていたが興味が俊輝と静香に移りはやし立てる少女、美晴と、その頭にチョップを加える翔。そんな和やかな第2班のささやかな打ち上げ。

「お待ちせえー！ よお皆元気してたかー？」

そこにハイテンションで入って来たのは、遅刻してきた最後の一人、健吾とその横に立つ少女だった。

全員の視線がそちらに集中する。健吾のテンションはいつもの事なので誰も気にしないが、問題は横の少女である。

年はまだ10歳前後といったところだろうか。濡羽色、と呼べる長く艶やかな黒髪に、幼さと気品の混じった整った顔立ちと体形。半袖の動きやすい着物と、何より目立つ、腰に差した一本の太刀。古い和の雰囲気、現代的な何かを足したような、不思議な雰囲気の少女は、その手いっぱい抱えていた荷物を下し、ぺこりと皆に一例をする。

皆は言葉を失った。それは、少女と同時に、健吾が少女に頭を下げたからだ。

「ありがとうございます、師範代」

……しかも、丁寧に！

班員の皆の知る健吾は、『あぎーっす』くらいしか言わないはずだ、と！

その衝撃で、健吾の言った後半、師範代という言葉はあっさりと流

れてしまう。

「皆さん、はじめまして。上月千古ちふると申します。健吾さんがいつもお世話になってます」

「や、止めてくださいよ師範代！俺が逆にお世話してやってる方みたいなものですよ……」

柔らかな笑顔と共に自己紹介をする少女、千古に恥ずかしそうに手を振って否定する健吾。

誰だこいつは。偽物なのではないか？ と疑惑を深める皆。

「健吾、この子一体……まさか誘拐でも……」

「健吾さんサイテー」

「話聞いてんのかバカ共！ あーもう！ この人は俺ん家の道場の師範代なの！俺の親父が師範だけど俺は下っ端なの！オーケー!？」

健吾の敬語に衝撃を受けて的外れな事を言いだした翔と美晴に事情を説明する健吾。

そう言えば健吾の家つて由緒正しい剣術の道場とか言ってたな、あれいつものホラ話じゃなかったのか、じゃあなんであんなチャラ男が育ってしまったんだ、と言いたい放題な皆に健吾は青筋を額に浮かべるが、師範代の前でうかつな動きはできないと何とか落ち着く。

その後、千古をお客さんとして改めてパーティは進行していった。どうやら初めての海外旅行をしている千古がアメリカにも行くから色々と案内をしてほしい、という事で健吾は遅れてきたようだった。その帰りに火星への旅を経験した人達に会いたい、と言ったため健吾は逆らう事ができずここまでやってきたらしい。

何をした後の打ち上げパーティであるのか、当然テラフォーマーだのMO手術だのその詳細までは部外者である千古には語れず、彼女が知る通り、世間に公表されている部分の情報通り火星の調査をしたんですよ、と本当と嘘を交えつつの会話で盛り上がり、すっかり打ち解け。

「刃物を持った侵入者がいたとの報告が入った！」

そして、別れは突然に。

ヤツベ師範代部外者でしかも帯刀してんの忘れてたという気まずそうな健吾と、硬直する千古。

「ああー！ すみませんすみません！」

慌ててU—N A S A職員の方に駆け寄っていく千古、その間に、静香に一つ耳打ちをして、彼女は職員に連行されていった。

突然やって来て突然去っていった来客に驚きながらも、再びパーティは続く。

今後、皆はU—N A S A関係の職に就くのか、それとも別の方面を目指すのか。そんな話し合いで盛り上がり、近況報告をしたり、他愛もない話をしたり。自分達は地球へ、日常へ戻って来る事ができたのだと喜び合う。

そんな中で、静香だけは話に混じりながらも少し暗い表情をしていた。その理由は、皆と笑って話をしている俊輝、火星で共に戦い守ってくれた、彼の明るい姿を見ながら、千古が去り際に静香以外の誰にも聞こえないように話した、その言葉。

「……俊輝さん、でしたか？ ……まだ新しい血の匂いがしました。どうか、支えてあげてくださいね」

## 第59話 穢れた聖槍と人類の到達点

——2620年 11月25日 某国

「……うんうん、そうかい、楽しかった？ トラブルはあつたけど？  
……それは何よりだよ」

2000年代に使用されていた型落ちも型落ちの携帯電話、それを耳に当て、金髪の青年は夜空を見つめていた。

まるで芸術家が自身の理想をぶちまけた彫刻のような、西洋人系の整った顔立ち。一見細身に見えるが必要な分の筋肉はしつかりと付いた肉体。そして、身に纏う歪な気配。容姿だけを見れば人間の到達点、と呼んでもオーバーではない、事実その家系から人間の到達点、と呼べる存在に近い、人間でありながら人間から離れた何か。

そんな彼がいるのは、ビルの屋上。……と言っても、都会のビル街といったような高層建築が立ち並ぶ中の一つ、という訳では無く、どちらかと言えば田舎に分類される町の数少ない高所、と言った方が正確な場所だ。雪がちらつき、それを夜の電灯と満月が照らす、写真映えするであろうその景色。

「はいはい、じゃあねー」

冬場で雪が降っている中、青年が身に纏っているのは白の一枚布をそのまま身に巻き付けたような、現代人の服装からかけ離れた、そもそもこの気候に対して防寒性が足りていないのでは、と思わせる衣服と言えるのかもよくわからない何か。

しかし、当の青年は寒さを感じている様子も無く、ただする事も無く夜空を、その空に浮かぶ月を眺める。

彼は、待ち合わせをしていた。

「……へくしっ」

そのまま光景を見れば絵画の題材にもできそうな様子であった青年は大きくくしゃみをし、一步のけぞる。

……立ち振る舞いに表れなかっただけで寒さは感じていたようだ。「いや寒すぎるでしょこれは……皆早く来てくれないと凍死しちゃう

よ……」

「その心配は無いよ」

冗談めかして手足をさする青年に、にわかにかげられる。首を後ろに向けその声の方向を見る青年。その声の主を見て、彼は口をわずかに歪ませる。

その相手は、彼の待ち合わせ相手では無かった。だが同時に、彼が会って話をしたい相手でもあった。

「おや……こんばんは、現当主様」

そこに立っていたのは、一人の青年だった。最初にいた青年と同じ金髪、整った、しかし絶妙に他者に威圧感を与えない程度に友好的な印象を与える顔立ち。均衡の取れた肉体に、その懐に持っているのは、鞘に入った機械的な装飾がなされた剣という現代と古代が融合したかのような武器。

「……美しい月だ」

「知っているかい、ジョセフ君」

「月は、狂気の象徴と言われている」

一度振り返ったが、再び視線を戻した青年は、一人で言葉を紡ぐ。それを黙って聞くジョセフと呼ばれた、ここにやって来た青年。

別に青年の言葉に耳を傾けているわけではない。こいつの話す内容は大部分が意味を持たないどうでもいい事である、とジョセフは知っている。問題は、この場に急な来客をもてなすための物が配置されているかもしれない、という部分だ。

自身の、人類最先端に行くその感覚を駆使して、無意味な言葉を続ける青年の周囲、このビルの屋上に何かの仕込みが無いかを探る。

……伏兵、無し。罨、視認できる範囲では無し。時限式の爆発物、無し。毒ガスの類、無し。

少なくとも即座に脅威となるものは無い。そう判断し、ジョセフは青年に言葉を投げる。

「待ち合わせ中に悪かったね、今日は話をしに来た」



「暗く冷たい夜を飾る光が何故狂気の象徴などと呼ばれるのか、不思議に思った事は無いかな？」

「悪いが、アンタの待ち人達はしばらく来ないだろう」

ジョセフに話しかけられても自分の話を続けていた青年。しかし、その話はジョセフの次いだ言葉を聞いて止まる。

「……ほほう。しばらく来ない、と言うあたり雑兵しか当ててないのかな？ よっぽど人材不足と見える」

「……火星で使わなかったらしい余り物をフアティマが友達から貰って来たんだ、在庫処分にいい機会だと思つてね」

「ふうん」

死んだ魚、というよりは最初から生きていないような無を宿した瞳に少しでも好奇心の色を浮かべながら、青年はジョセフに問いかける。その答えは、入手経路はともかく青年が予想していた通りの足止め、というもの。

勿論、額面そのまま受け取るのは愚かな事だろう。ジョセフも、100%確信をもって足止めにはかならないと言っているわけではないに違いない。

青年が今待ち合わせをしているのは、彼がこの計画の為に集めた直属の配下とも言える人間達だ。それに武装した人員を何人かはわからないがぶつける。

勝機は勿論あるだろう。火星で使わなかった、と言っても頭は空だろうが腕つぶしはある連中だ。そんな人間を何十か何百かぶつければ、足止めで終わらず始末できるかもしれない。

だが、ジョセフは半ば確信を持っていた。彼らは、やはり足止めにはかならないだろうと。

その確信の理由が、目の前にいる、この青年。これがわざわざ集めてきた人間が、普通なわけないだろう、と。

「……まあいいや、ゆつくりと話ができる、つて事だね。いいよ」

ジョセフに背を向けたまま、青年はのんびりとした調子で欠伸をする。

「私達のこれからの話をしようじゃないか」

「おお、神よ」

修道服を着た太った大柄な男に、彼に襲い掛かった数人の男女は後ずさった。

彼らが見るのは、男の前に倒れた彼らの仲間達。体に複数の穴が開き、致命傷となった頭に空いた穴からは、ピンク色の何かが流れ出る。「しかし私は、確かめねばならないのです——」

男は涙を流しながら、しかしその顔に歓喜を浮かべながら、襲撃者たちは一步、また一步と後ずさる。

男の腹の一カ所、それがぼこりと蠢き、その凶器が姿を見せる。

「彼らの苦難の先に、神へと続く道が開いているのかを」

「そう、君達は僕がさぞかし弱いただのインテリに見えた事だろう。だが、それが命取りなんだ」

まるで講義でもするかのように、自分の腹に、正確には腹を覆う装甲に当たって止まった拳を自分の手で掴み、白衣に片眼鏡の男ははきはきと話す。

「君達はこの見るからに貧弱そうな腹を殴れば僕が一発で倒れる、そう考えたのだろう。それが間違いなんだ」

白衣を脱ぎ去った男を見て、彼を襲った人間達の顔色が変わる。その体は、頭と手足、体の末端と言える一部を除いて黒色の甲冑のような装甲に覆われていたのだから。

「手術で得た能力に弱い部分があれば、武器で補えばいいだけの事だ。その程度の発想ができる相手だという事くらい先に考えておきたまえよ」

分が悪い。一時撤退だ、と背を向けた襲撃者達に、男は親指を立て一指し指を前に向け残りを握る、俗に指鉄砲と言う形を作り、それを向ける。

「ぼーん」

似合わない、子どもがごっこ遊びをするときのような擬音を大真面目に呟く男。

「ああ……?」

逃走する襲撃者の一人は、違和感に気が付いた。肩の辺りが、何かむずむずするような……?」

「ひっ……お前、それ!」

隣を走る同僚の悲鳴で初めて、彼はその肩にあるものを見た。

それは、蠢く肉の塊。それも、ただの肉ではない。目玉、何かの臓器、腕。人間の体の器官や部位が、ぼこぼここと拡大しながら彼の肩でその大きさを増していく。

「待つ、助けて——」

その肉塊から、何かが飛び散る。

「……え?」

それを体に受けた、隣を走る同僚は、数秒後に彼と同じ末路を辿る事となった。

「息が詰まりそうです!」

少女は、精一杯息を吸って吐いて何とか酸素を取り入れようとしていた。

元々呼吸器が弱い彼女にとって、この状況は地獄以外の何物でもない。

狭い路地裏、そこは、真っ白な世界へと姿を変えていた。

まるで降り積もる雪のように、白いふわふわした何かが空から降り、路地裏の汚いものを覆っていく。

それは、節度の無い住民によって捨てられたゴミ。不良達のケンカによってできたであろう血の跡。

そして、襲撃者の死体。

しんしんと降り積もるそれは、その全てを包み、ただの白へと変えていく。

それから数十秒、もう動くものが何も無くなった事を確認し。

口の端から垂れた血を拭いながら、少女は興味を失ったかのようにとことことその路地裏を後にした。

「お姉ちゃん、元気にしてるかなあ……」

両断された死体が、また一つ増える。

敵は、この計画で襲撃する対象の中で一番の強敵。それは、彼らが身に宿す生物がわからない以上、その生まれや体格等から想定される身体能力で導き出された、情報不足の中で導き出すしかなかった情報。だから、ここには各襲撃班の中で最も強く人間が、最も多く配備されていた。

それなのに、この始末。

「……遅いです」

月下に和装が舞い、その瞬間命の火が吹き消される。

これが命を賭した戦場でなければ、さぞ美しい光景であった事だろう。だが。

再生能力が、それを発揮する事も叶わず急所を一撃で切り裂かれ絶命する。

硬い甲殻が、ある者はそのわずかな隙間から引き裂かれ、ある者はその鎧の上から両断される。

相手はその腰に差した得物、長刀を抜いていない。だが、彼らは次々と切り裂かれる。

少女が何も持たない手を振るう、その度に腕が落ち、脚が落ち、首が落ちる。

少女が何も持たない脚を振るう、その度に悲鳴が、怒号が、途切れる。

「く……そっ！」

その動きを捉えられず、陣形は乱され上手く戦えず。

いつ襲い来るかわからない不可視の斬撃と、数十人の戦い慣れた人間を相手に圧倒する純粋な身体能力。

戦況は既にひっくりかえせるような状況ではない。だが、そこで彼

らに一縷の希望が訪れる。

「っ、撃てエー！」

敵が、その動きを止めたのだ。これまで縦横無尽に暴れまわっていたのに、何故急に止まったのか。それを考察できるほどの余裕は今の彼らには無かったが、ようやく巡って来た好機だ。

震える手で、銃弾を敵、まだ幼い少女に容赦なく浴びせかける。

そこで、少女は初めて腰に差した長刀を抜き放った。

目にもとまらぬ、というほどの速度では無い。

だが、その刀が振るわれる度、少女を狙った銃弾が、まるで自分から避けるかのように逸れていく。

しかし、最後の一発が、少女の左腕に命中する。

細い腕が銃弾を受け、純粋な人体よりも抵抗を見せ深くまでは刺さらないが、血が流れる。

「……何故、当たったのだと思いますか？」

これで怯んだ、チャンスだと突撃しようとした彼らは、少女の声と、それから溢れる殺気で足を止める事となった。

「貴方達に諦めてもらう為です」

その傷口は、彼らが多く犠牲を払ってようやく得た一撃は、その直後すつと消失した。

……再び、少女が動き始める。それとは対照的に、向かい合う彼らは誰もが動きを止め、静かにその目を閉じた。

やあ皆、こんにちは。三分クッキングの時間だよ。

今日はハンバーグを作ろうと思うんだ。

まずは、肉の用意だね。骨と肉と臓物が混じり過ぎてよくわからない事になっているからね、そこをより分けるのが最初の作業かな。

んしょつと……うん、こんなもんでいいんじゃないかな。

ちゃんと肉を分けられたかい？ まあ内臓も内臓で苦みがあつてオツなものらしいよ。好きな人は入れてもいいと思う。私には結局最後までわからなかったけどね。ああ、腸とその中身はよく取り出すように。そういう趣味の人なら別にいいと思うけど、排泄物なんて食

べたくないだろう？

じゃあ次はその肉をミンチにするんだ。……ああ、私がか用意したのはもうミンチになっているね。ンン……そうだね、やり方だけ紹介しておこう。包丁でこうやってトントンと……

さて、そろそろ我慢ができなくなってきたよ。運動の後はお腹がすく、当然の摂理だよ。私もまだちゃんと仕事をしていた時には終わった後は沢山食べたものさ。後になつたらいくら仕事してもらくに食べ物なんてもらえなかつたけどね。

本当なら焼くところなんだけど今回はこのまんま食べてしまおう。え、ハンバーグなら卵なり玉ねぎなり混ぜる？ いやいや、肉100%のすばらしさを君達は知るべきだね。

さて、食べ終わったところで、今度は別の料理にしよう。料理のレパートリーは多い方がいい、私も昔毎日ハンバーグは嫌だ、と怒られたものだよ。あと14人もあるからね、ミンチばかりなのが残念だけど、まあ色々と作っていくとしようか。

「……さて、君が欲しいのはコレだろう」

青年は、懐から一つのケースに入ったディスクを取り出した。

『Project GoE』……私達の、一族の積み重ねて来た全てがここに記録されている」

それその物の見た目は、何の変哲もない、この時代一般の大容量記憶媒体だ。だが、その中身は青年にとって、ジョセフにとって、重要な意味を持つデータである。

「ローマ連邦の大統領府がクラッキングを受けてこれの一部が流出しちゃったらしくてね、やったのは腕試しのクラッカーだそうだよ、優秀だよねえ」

ジョセフは青年の表情から、微かな不快感を感じ取る。それは、己の計画の乱れからなのか、彼の全てとも言えるこのデータが一部とはいえ他者の手に握られてしまったからなのか、どちらかまではわからないが。

「それを渡してもらおうか、一族当主としての命令だ……アンタの今

後の身の振り方を選べ」

答えはわかりきっていた。だが、ジョセフはあえてこれを言う。

青年の一族への裏切りはもう既にジョセフも知る所である。その上で彼らが一族に対して持つ優位点である研究データ<sup>データ</sup>を全て渡せ、と言い青年が拒否すれば、公として青年は一族への反逆者となる。

「いいや、選ぶのは君の方だ、二つに一つ」

その問いに、青年は己が背負っていた武器、ジョセフの剣と同じく機械的な装飾のなされた槍を抜き、ジョセフへと向ける。

ジョセフもそれに答えるかのように、懐の剣を抜き放つ。

「尻尾を巻いて逃げ出すか、力づくで奪い取るか、君の自由だ、ジョセフ・G・ニュートン」

「……おれの代替品<sup>スベア</sup>風情があまり調子に乗るなよ、オリヴィエ・G・ニュートン」

## 第60話 槍と剣

ジョセフとオリヴィエ、ニュートンの一族を総べる者と一族の異端者の主。その二人は、華やかな舞台とはとても言えないこのビルの屋上で刃を構えた。

ジョセフの選択しろ、という言葉に対してオリヴィエが返した言葉。それを宣戦布告と受け取り、ジョセフはオリヴィエに突貫する。相手の武器は槍だ。長さはオリヴィエの身長より一回り長い程度、2m強といった所だろうか。ジョセフの持つ剣よりも長いそれは、距離を開けながらの戦いで不利を意味する。しかし、逆に。

「……おやあ」

ジョセフに向けられた、上段からの槍の一突き。それを瞬発力で下を潜りすり抜け、間合いを詰める。

槍は近接戦闘に用いる武器の中では長い射程を持つが、構造上その殺傷力は先端に集中しており、内に入られると対処が難しい。長い槍ほどこの傾向は顕著だ。

長期戦になると厄介な相手だ。時間をかけると相手の援軍がやって来るだろう。それに、相手が『手術』を受けているかもわからない以上、長引かせる事に利点は無い。オリヴィエの首めがけて、その剣が振るわれる。

「怖いなあ」

オリヴィエは一瞬の内にジョセフの剣の射程から消え、後ろに下がる。一般人から見れば後ろに瞬間移動したようにしか見えない、特殊な歩法。

再び間を取ったオリヴィエが、ジョセフの脚を狙って槍を繰り出す。

それをジョセフは向かって左に逸らし、さらにその槍を剣を持っていない左手で掴む。

綱引きをしようというわけではない。ジョセフは己の武器である剣を持ったままであるし、オリヴィエは両手で槍を持っている。オリヴィエはすぐに槍を引き戻すだろう。しかし、ただ槍に触れる、それ



だけでできる事がジョセフにはある。

だがそこで、ジョセフは一瞬判断に迷う。電撃を使って仕留めたものだろうか、と。

ジョセフが火星で手に入れた能力。それは、元々得る予定だった『プラナリア』とイレギュラーであるが幸運にもそれに付随してきた『デンキウナギ』。

ここで槍伝いに電気を流せば、相手にダメージを加えそのまま有利な展開に持ち込む事ができるだろう。槍が見た目に反して絶縁性を持った素材で構成されていて電気が通用しなかつたとしてもこの戦闘という面で別にジョセフにとって不利になる要素は無い。

しかし、戦闘面以外でいくつかの問題がある。

一つは、オリヴィエの持つデータディスク。あれを破壊してしまつては、元も子も無い。もう一つは、己の手の内を明かしてしまう事。最高クラスの再生能力と電撃。ジョセフが火星に渡った当初の目標であった再生能力は相手も予想している所であろうが、電撃に関しては恐らくまだ知らないであろう。ここで、使うべきなのか。

一族の裏切り者、その首謀者を相手にして、彼らの研究データ云々の前に即座に命を奪うという選択肢が正しいように見える。……相手が、殺してそれで終わってくれる相手であれば。

「時間切れだよ」

槍を引き抜いたオリヴィエがせせら笑う。ジョセフの判断の一瞬の迷いを感じとつての言葉か、それとも電撃の事も知っているのか。これについてはジョセフは判断できなかったのではなく電撃を使わない、という判断をした結果なので時間切れというわけではないのだが、それを知ってか知らずか楽しそうなオリヴィエ。

「……あんだ、一族の傘から抜け出してやっていけるとでも思っているのか」

ジョセフは、あまり意味は無いであろう問いをオリヴィエに向ける。

言うまでもなく、ニュートンの一族の社会の裏表での影響力はとてつもないものである。それこそ、国を作る事ができる程に。『槍の一

族』がニュートンの分家であり、これまで表面上はニュートン一族に尽くして来たという事から、その本拠地の場所も既に一族には知られている。

それを裏切り、さらには敵対の路線を歩むという事は、あまりに無謀な行為だ。

「さあ？　…でも、神になるのは一人でいいだろうか？　ジョセフ君が私に譲ってくれるなら話は別だけど」

虚ろな声が響く。さあ？　オリヴィエにも確証は無いのか、隠し玉があるのか。

人間を超えた存在になる。いよいよ達成に近づいて来たその悲願。それを、ここでコイツに奪われる、それだけは避けねばならない。

「わかった」

短く、突き放すようにジョセフは言い捨て、オリヴィエに向かって駆ける。先の攻防で元々そこまで距離が空いていないため、オリヴィエの対応時間はわずかだ。

槍は持つ柄の部分を変える事で射程を調整できるが、それを接近戦に持ち替えるほどの隙は当然ジョセフには無く、オリヴィエはそのまま槍を繰り出す。

「……」

ジョセフの取った行動に、オリヴィエは少し眉を動かす。

ジョセフの左肩にジョセフから向かっているため相対速度という点でも威力の乗った槍が突き刺さりそのままその肉を抉り取る。肩の骨が砕け、左腕はただぶら下がるだけのような状態に。

だが、ジョセフは止まらず、そのまま突き進む。それを叩き潰そうと槍を横薙ぎにするが、ジョセフに密着した状態の槍では横に振るっても威力は出ず、有効打とはならず。

「終わりだ、化物」

オリヴィエは槍を手放し回避を試みるが、その判断は一步遅かった。

振るわれたジョセフの剣がオリヴィエの左腕を意趣返しだと言わんばかりに肩口から切り落とす。

そして、勢いのまま片腕を失いバランスを崩したオリヴィエを蹴り倒し、脚の付け根に乗る形でマウントを取る。

「……これは驚いたな……」

眩くオリヴィエに、もう時間は与えないと剣を振り上げ、その首めがけて剣を繰り出そうとし。

そこでジョセフはオリヴィエの、その腹の部分の様子がおかしい事に気付いた。

得体の知れない気配と直感が告げる危機。それを嗅ぎ取り、ジョセフは素早くその場を離脱しようとする。

槍。長物の武器。それを有効に使った戦術、それは古くの時代に用いられていた。

集団戦における陣形、『フアランクス』、『槍衾』。

さて、どのようなものなのか？ それは、端的に特徴とそれによる利点を抜き出すとすれば。

多数の槍の集中運用による、接近の阻止。

「おや失礼、中身が出てしまったよ」

直後、オリヴィエの腹を覆う服の布を破り、数本の槍がジョセフに襲い掛かった。

回避は間に遭わず、それはジョセフの腹と右眼に突き刺さる。

「――！」  
攻撃は深くまで達し、常人であればその時点で命を落としている威力。

だが、再生能力を持つジョセフはそれに耐え、機敏に身をかわしオリヴィエから離れる。

攻撃を終えオリヴィエの体に沈んでいく、よく観察すれば中空と なっている槍とも針ともとれる物体。そこから、オリヴィエがその身

に宿した生物の能力の全容を一瞬で理解し、ジョセフは考えを根本から改める。

——今この場で仕留めなければまずい事になる

既に左肩は再生した。右眼と腹の傷もすぐに元通りになるだろう。どう仕留めるか。恐らく今ならばまだ、殺しきる事ができる。

「……それを得るのに……何人死んだ？」

左腕を失ったまま起き上がるオリヴィエに、ジョセフは若干焦りながら質問する。

「おや、これの素晴らしさをわかってくれるのか！ いやあ苦労したよ……ただでさえ成功確率がアレなのに、そもそもこの能力、人の身で得るには重すぎて手術成功しても発現しない場合が殆どだからねえ……ざつと数千くらいじゃないかな？ それでも奇跡的さ」

「……つまり、アンタをここで殺せば再現は困難、という事だ」

嬉しげに語り出したオリヴィエに、ジョセフは得たい情報を得た、ところからもまた嬉しげ……ではないが凶暴な笑みを浮かべ、呟く。

オリヴィエのそれに対する答えは、懐から『薬』を取り出す事であった。ジョセフは阻止しようとするが、先ほどの事を考えるとうかつに距離を詰めるのは危険である。

パッチ状のそれを使用したオリヴィエの外見に一切変化は無い。だが、その体に付いた傷が、失った左腕が、みるみる内に再生する。「……さあ、仕切り直しと行こうか……と思ったけど」

オリヴィエの再生を皮切りに、両者再びお互いに向けて足を進めるが、あと数歩、という距離で、オリヴィエの足が止まる。

「希？」

ジョセフの歩みも、同時に止まる事となった。突如、これまで二人だけしか存在しなかった場所に、無から溶け出すように人の気配が現れる。

ジョセフに対し、オリヴィエとの距離を詰めるのを拒絶するかのような銃撃。

次いで、二本の刃物による攻撃がジョセフに襲い来るが、はつきり

それを知覚したジョセフは難なく剣でこれを凌ぐ。

「わあ……流石当主様、すごいっす！」

オリヴィエの隣に、その乱入者ははつきりと姿を現した。ビジネススーツに、黒髪をポニーテールに纏めた年若い女性。その両手には、ナイフが着剣されている拳銃が一丁ずつ握られている。ジョセフに向けて尊敬の眼差しを向けるその女性、希？にオリヴィエは微笑ましげな表情を向けているが、本人は気付いていない様子。

「どうも今の私じゃ君には勝てないようだ。……何か隠し玉もありそうな雰囲気だしね。尻尾を巻いて逃げさせてもらおうよ」

逃がすわけにはいかない、と言いたい所であったが、オリヴィエ単体でも簡単に始末できる相手ではないのに、さらに相応の使い手が加われば、今度は自身が無事では済まない可能性がある。

そう考え、ジョセフは無言を貫く。

「またね、楽しかったよジョセフ君」

「……ではジョセフ様、私達はここで失礼するっす」

礼儀正しく頭を下げる希？。その後、オリヴィエと希？はビルの屋上から飛び降り、去っていく。

残されたジョセフは集団でここに押しかけて逃げられては困る、と下に待機させておいた部隊に追撃を命じようか、と一瞬考えたが、一族でも相応の使い手でもない人間が追いかけても被害が増えるだけか、と諦め、その場を後にした。

これが、ニユートンの一族と槍の一族、その戦いの火蓋となる事は、まだ当人達以外の誰も知らぬ事であった。

## 第61話 裏切り者狩り

「珍しいな、読書なんて」

U—N A S A本部、その一角にある大図書館。

宇宙開発に関する論文から娯楽小説まで様々な書物を集めた知の宝庫と呼ぶべきその場所で、拓也は後ろからの声に振り向いた。

「ああ、ちよつと調べものをな」

声の主は、彼の友人の一人、翔であった。U—N A S Aで雑務を行っている彼は、仕事が無い時や休憩時間にはU—N A S Aの様々な場所を巡っている。そこでの遭遇、という訳である。

『楽園への階』『不滅なる記憶』……なんだこれ、小説？」

拓也が読んでいた本と傍に置いてあったもう一冊、それを見て、翔は疑問符を浮かべる。

火星に旅立つ前、そもそも拓也はあまり本を読む人間ではなかった。

たまに読んでいたにしても、それは日本班の友人達に付き合つての漫画が殆どだ。

そんな拓也が、何やら難しそうなタイトルの書物に手を出している。

「いや、何て言うジャンルなのかよく……とにかく記憶に関して書かれた本なんだ」

わざわざ読書をしている、その理由を聞き、翔はどう返したのか、と若干渋い顔をする。

最初はからかい半分でガラにも無い勉強なんかして、と言うつもりだった。

だが、今の拓也の表情は。

「……早く、思い出せるといいな」

そんな事を言いだせる空気ではなく、翔は椅子を引き隣に座る。

軽はずみな事を考えていた自分をごまかすように、拓也が持つてきた読んでいない方の本、『楽園への階』をぱらりと捲る。

かなり古びた本だ。それこそ、何十年も前に作られたような、そん

な年季を感じる。

ふと気になり、翔は出版年を確認する。……2140年。

それは、約500年前の書物だった。

流石に今ここにあるこの本が発行された版は約40年前とまだマシであったが、そんな大昔の本が、こんな場所にあるものなのか、と翔は首をかしげ、内容を見る。

——人は知恵の実を食い、代償として死の運命を負う存在となった。永遠の命と知恵。これは、生物の進化において相反する存在である。永い進化の果てに、我々人間は惑星を支配する知恵を手に入れ、代償としてその命は時間に縛り付けられる存在となった。

寿命という概念が存在しない、という意味では少なくとも永遠の命と呼べる原核生物は、知恵の実を喰らう事で時により朽ちる事の無いその永遠を失ったのだ。

それは、知恵を持たぬ者が知恵を求めたが故の愚かな結末だ。だが、我々は違う。我々は、その知恵を用いて、それを保ったままの永遠を目指す事ができる。

だが、それは困難な道となる。物質的存在である以上、身が朽ちる事は避けられない。我々の祖のように時間の檻を抜け出す事ができても、他の要因による終焉は無慈悲に訪れる。

ならば、我らはどうするべきなのか？

……物質的な存在に縛られてはならない。我々の知恵、その全ては『心』すなわち、『精神』と積み重なっていく『記憶』にあるのだから。

「……よくわからん」

生物学と宗教的な見地が入り混じった、よくわからない本。

それが、翔の率直な感想だった。

簡単に説明すれば、永遠の存在を目指そうと思ったら肉体なんてすぐ壊れるから精神が重要だよ！ くらいに纏められるその本を閉じ、翔は拓也に話しかける。

「あー……こっちの本はたぶん役に立たないぞ、拓也」

「ん……今読んでると同じ著者みたいだったからそれもわかりやす

いと思ったが、ダメか……悪い、戻しとってもらっていいか？」

ああ、と肯定の返事を返し、翔は何気なく拓也の言葉につられ、著者欄を確認する。

何せ40年も前の本だ、掠れて姓しか読めないそれを手に取り、立ち上がった。

「ニュートン、ってどっかで聞いた事あるような気がするなあ……」

2620年 11月21日 某国

「……どうしてこうなった」

彼女は、薄暗い、所々小さな穴が開いて外の景色が見える廃墟の狭い一室で、ノートパソコンを前に一人ごちていた。

美しいというよりは目を浴びていない不健康、と言った方が正確な色白の肌、よれよれのTシャツ。

サイズの合っていない大き目の眼鏡とそばかすがトレードマークと言っていていいかもしれない西洋人の少女だ。

やる事もない彼女はこれまでの自分の経緯を思い返していた。

自分が生まれる前に父親が軍の特殊部隊で何かの任務で死亡、それを追うように母親が出産の直後に自殺し頼れる親戚は働いているのかもよくわからない叔父さんのみ、という事で彼に引き取られ、その叔父さんと暮らす内に叔父さんに仕事の技術を叩きこまれ叔父さん以上の才能を發揮したけどやる気が起きなくてその技術を仕事では無く遊びに使っていたらこうなった。

彼女の回想には多くの情報が不足しているため、一部補足をするとこうなる。

かつて某大企業のセキュリティ部門に勤めていた叔父さんからセキュリティ強度の検査のために取得したクラッキングの技術を叩きこまれ、悪い方向に才能が開花した結果叔父さんと喧嘩になり家出、どこぞの政治家の汚職だの何だののデータを抜き取ってどこかに売り渡し生活費を稼ぎ、それを生活費に引きこもり生活を送りつつ趣味で企業だの国家だののデータを抜き取って遊んでいた。



そんなある日、ローマ連邦が関わっている一研究所からデータを盗み取った彼女は、その中からあるファイルを発見した。

『Project GoE』と書かれたそれは、ファイルそのものにも強いプロテクトがかかっておりすぐには中を見る事はできず、飽きっぽい彼女はそれを放置して眠りに付いた。

翌日彼女が引きこもっていたアパートから買い出しの為に出たのは、幸運という他ないだろう。

彼女が最寄りのコンビニに向かって歩いていたらその時、彼女の部屋は爆破され、何人もの兵士のような何かが突入していたのだから。

自分の背後で突然火を噴きあげた自分の部屋に唾然とする彼女であつたが、部屋に戻るといふ選択肢も、どこかに逃げ出すといふ選択肢も彼女には与えられなかった。

どうするか判断する時間も与えられず、どこからともなく現れた武装した一団に彼女は捕まり、そのまま薬を嗅がされて意識を失ったからだ。

そして連れてこられたのが、このうち捨てられた廃墟だった。

……というのが、彼女のここまでのあらすじである。

彼女を連れ去ったのは裏社会ではある程度名が知れている彼女の能力を利用しようとしたとある武装集団。

「これで……U—N—A—S—Aに復讐できる……！」

その構成員達がぶつぶつと呟く内容を、彼女は正直の所あまり理解していない。

U—N—A—S—A。国連航空宇宙局。そのくらいの事は知っているし、こつそりデータを盗んでみた事もある。

今自分が捕まっている集団がそれに何かの恨みを持っている、という事も理解できる。

だが。

U—N—A—S—Aってそんなに恨みを買うような組織だったのかと。

宇宙開発において、世界の最前線を行く組織だ。権力闘争によるあれそれはあるだろうが……このような武装した連中が深く恨むような要素があるのだろうか？

危ない薬ではなさそうな、連中が大事そうにしている注射器や錠剤といったものは、一体何なのだろう？

「……よくわかんない、って表情してんな、嬢ちゃん」

外出する時にも欠かさず持っていた相棒、自前のノートパソコンを触りながら考える少女に、物陰から声がかけられる。

「あ……いえ……お構いなく……私なんて、ただのアレですからあ……」

それに、お世辞にも人と会話するのが得意ではない少女は、その声に小さな声で返事をする。

少女に声をかけたのは、一人の青年だった。

ところどころほつれを直した跡が見られるコートに、手に持っているのは、少女がここに來てからこれまで何度も見てきた注射器。

少女の育ってきた環境では殆ど見なかった、アジア人と思われる黒髪黒目のそんな青年は、少女にどこか緊張した様子で目を向ける。

「……ああ、君はたぶんもうすぐ助けられるよ」

少女は、その言葉の意味を一瞬理解できないでいた。青年は、つい先日組織にやってきた新顔だった。組織のリーダーから『先生』などと呼ばれていたため、恐らく用心棒か何かなんだろう、と少女は判断していた。

なら、この言動は、一体。

少女の思考と被さるように、爆発音が響く。古ぼけた廃墟だ、建物全体が振動し、埃や建物の小さな破片が降り注いでくるのを見て、少女は半ば反射的に自分のノートパソコンを庇った。

その直後に響く、無数の足音と怒号。組織の戦闘員たちが、次々と爆発音のした方向へと駆けていく。

少女が軟禁されている部屋の出口にも、数人の戦闘員が立ち、銃と謎の注射器を持って守りを固めている。

何かが攻撃を仕掛けてきた。少女には、それだけがわかった。

「え……これ……あの……」

「ああ……思ったより早いな」

突然の出来事による混乱。そもそも身体能力が違いすぎる。話をした事による気の許し。要因は、いくつかあつただろう。そう眩いた直後の青年の動きを、少女は目で追う事ができなかった。そして、それと同時に自分の体が宙に浮きあがった事も。

「……………めんな……………これ、もらつてくよ」

天地が反転した少女が見た光景。それは、彼女の長年の相棒であるノートパソコンをその手に持つ青年の姿だった。

「何やってんだ先生！早く迎撃を——」

自分達の用心棒であるはずの青年の、不審な動き。それを見て当然、この部屋の出口を固める戦闘員は怒りぎみに疑問を投げかける。それが彼の遺言となつた。

出口のドアを貫き現れた金属の鉤爪のようなものが言葉を発した戦闘員の腹を引き裂き、そのまま引き戻された時の動きでドアを完全に破壊する。

その一瞬の惨劇に、青年だけが反応した。出口が一つしかない、この部屋。だが、脱出口はもう一つ。壁が脆くなり、簡単に壊れそうな場所が一つある。

人間離れた素早さで青年はそこに飛びつき、渾身の蹴りを放つ。

「……………やめておけ、そこはもう塞がっている」

青年の蹴りは、確かに脆い壁を破壊した。

しかし、青年がその先に見たのは、外の世界ではなく。

「……………！」

糸のようなものによって形成された壁であった。

脱出口は塞がれた。ならば残されたのは、強硬突破しかない。

「くっ……………撃——」

「あ——」

青年が戦闘態勢に入る一瞬の内に、首が二つ、宙を舞う。

頼れる仲間は、一人もいないようだった。

大丈夫だよ、と少女に声をかけようとした青年だったが、目の前で

人間が無残な死を遂げ、青ざめてへたり込む少女に、今何を言っても通じないと青年は判断し、先ほどの声の主、三人の武装した兵士を一瞬で葬り去ったその敵を見据える。

「あんたが有名なアレか、『裏切り者狩り』」

「……」

そこに立っていたのは、青年と同じ年くらいのも、これまた青年という呼び方が適切に思える男だった。

左眼にかけた眼帯に、右腕に装着された、籠手から延長されるように伸びた、昆虫の脚部を模しているように見える鉤爪。冷徹で無慈悲な人格を彷彿とさせる冷たい黒の右眼が、青年を睨め付けている。

「ひっ……」

少女が怯えた声を上げ、青年もそれと同時に苦い顔を浮かべる。

男の姿は、一般的な人間のそれではなかった。皮膚の質感は人間ではないものに変質し、額からは昆虫の触角が、そして、両腕から、鋭い刃が一本ずつ生えていたのだ。

「……先に聞こう。お前の目的は何だ」

口を開いた男は、青年の言葉に答える事なく、半ば命令するかのような口調で青年に問いかける。

「……この組織の監視と、このPCの回収だ」

慎重に言葉を選び、青年は答えを返す。青年の依頼主は、とある国のトップだ。

わざわざ危険な組織に潜入し、PC、正確にはその中のデータを回収して来いと言う。

「前者はここで終わりだ、後者を諦めれば……命だけは助けてやる」

男の目は少し和らいで少女に、少しして、再び冷たい色へと変わりPCと青年へと向けられる。

その発言と動作で、青年は確信する。

このデータは、それほどまでに重要なのだと。

「それは……できない相談だ！」

青年の発言が、開戦の合図だった。懐から注射器を取り出し、自分の腕へと射す。

変化は、みるみる内に訪れる。額からは触覚が生え、白と黒、黄の毛が生え、腕からは鋭い針が。

怪物同士の戦い。この技術を知らない一般人である少女は、放心状態でそれを見る事しかできない。

青年の針が、目にもとまらぬ動作で男の首に向けて一直線で振られる。

それに対応し、首を少しだけ動かしてその一撃を避ける男。

反撃に振られる左の刃を、青年は頭を下げた回避する。

「……………」

だが、瞬間的にもう一本の武器、右手の刃が青年に襲い掛かる。

それさえも青年は瞬間的に身をかわす事で回避したが、さらにもう一発の攻撃が来る事を、青年は察知できなかった。

青年の肩に、男の振った、すでに青年の位置を通り過ぎ、回避した右腕から伸びてきた、男の手とは別に存在する鉤爪が食らいつく。

「それで勝ったつもりかよ……………」

しかし、青年も負けておらず。密着した状態で、男は振った両腕を引き戻そうとしている状態。隙ができた。

青年は、体にぐつと力を入れる。

男が、青年の首に向けて刃を振るおうとした、その瞬間。

二人は、ドアの外の十数メートル先、通路の奥の壁に激突した。

青年が、一瞬の加速によって男を部屋から押し出し、壁に叩き付けたのだ。

「ツハ……………」

「こんな所で死ぬるか…………… アイツのためにも……………」

血を吐き、一瞬目線が宙を泳ぐ男。その隙を逃さず、青年は両腕の針を男の左胸に向けて繰り出す。

しかし、その攻撃は届かなかった。男の足が一瞬早く、青年の針を蹴り上げる。

「いいや、ここで死んでもらう」

青年の視界を覆うのは、ギロチンの如き二本の刃。

こんな所で、終わるのか。すまない、と帰りを待つ人に心の内で謝

りながら、青年は目を閉じ。

「隊長、制圧が完了しました……合理的に考え、これ以上の業務は不要と判断します」

事務的な女性の声が男二人の戦場に響く。

いつまで経っても痛みが来ない、それを不思議に思った青年が目を開けると、その目の前には男の振るった刃があった。

……だが、それは無数の銀の糸により、青年の喉元に届く事は無く停止していた。

「本音は？」

青年は、何が起こったのかと目を開き敵の方を見る。

そこには、皺一つ無いスーツに丸眼鏡をかけた見るからに利発そうな女性が、男の横に立っていた。

露出している手のひらと顔は銀と黒の混じった色になっており、男や青年と同種の人間である事を伺わせている。

「戦闘に夢中で聞き逃したでしょうが、彼は小さな声で『アイツのためにも』と言っていました。これは、貴方の琴線に触れるワードなのは、隊長？ それと早く帰りたい」

「あ、ああ……」

止められた刃を引き戻した隊長と呼ばれた男は、微妙な表情を女性に向けながらも、顎に手を当て考える。

この隙になら。そう思い、動こうとした青年だったが、嫌な予感がし、隙を突いて脱出という考えは諦める。

「……今回は見逃してやる、とつとと帰れ」

男の心変わり、それが何なのかは青年にはわからなかったが、とにかく男の考えが変わった、それもかなり大きく、という事はわかる。

男が最初に言った、命だけは助けてやる、という言葉。それは、殺しはしないが連行する、という事だ。彼の所属する、その組織まで。

「ありがたく帰らせてもらうぜ、U—N—A—S—A第七特務支局の隊長さん」

戦いで負けたせめてもの仕返し、と言わんばかりに、青年は男の所

属を皮肉げに言う。

曰く、後ろ指を差される罪人の集まり。

曰く、その任務の性質上、それを圧倒できる戦闘能力の高い人間のみが集められる。

曰く、裏社会に広がった『手術』を、それを受けた人間を抹殺する『同族狩り』。

青年が、青年の大切な人がそれに該当するからこそ、集めていたその情報。

青年も、戦いの技能には自身があつた。それこそ、これまで数えきれない刺客を葬り去つて来た。

だが、そんな青年を上回る連中が、彼らなのだ。

それを胸に刻み、もつと強くなろうと決意し、青年は影から自身を見つめる、恐らく部隊の人間であろう微かな気配を感じ取りながら、その場を後にした。

「……怯えなくていいよ」

男は、再び部屋の奥に入り、少女と対面した。まだ青ざめて動けないでいる少女に、男は先ほどの戦闘時とはうって変わった、優しげな目を向ける。

「……ありがとうございます」

震える声で、少女は男が差し出したものを受け取る。それは、彼女の相棒であつたノートパソコン。

宝物であり、仕事道具であり、相棒であるそれを抱きしめる少女を見て、男はほっと一息付き、少女に笑いかける。

「俺達は、君を助けに来たんだ……ああ、俺、山野俊輝、つて言うんだ」  
腹を割かれ内臓が飛び出した死体。二つの首無し死体。それを作り出した張本人が自分を安心させようとしているのか暖かい様子の、それも無理に作ろうとしているのではなく男にそのような一面があるのだと感じさせるそれを見て、少女はなんかおかしやこの世界、と助かった安心とショッキングなものを見続けた疲労で気を失つた。

## 第62話 日陰の兵団

U—N A S S A第7特務支局。支局、という名義ではあるがその所在はU—N A S S A本部、アメリカにあり、表向きにはU—N A S S Aの広報活動を担当する部門、という事になっている。

「……んー、どう判断したものかねえ……」

そんな彼らの仕事部屋、U—N A S S Aの研究棟、その地下に築かれた一室で、俊輝は頭に手を当て、考え込んでいた。

先日行われた重要目標の奪還任務、それは無事成功に終わった。だが、それから五日。体をゆっくりと休める暇も無く、新たな問題が舞い込んできた。

アメリカのある州で、多数の人間の死体が発見されたのだ。

大事ではあるが、本来であれば犯罪組織の抗争だの何だので片付く問題ではある。

ではなぜこのような場所にお声がかかる事となったのか。

それは、その死体が不自然なものだったからだ。

死体が見つかったのは五か所。それぞれで数人から数十人と数の差こそあるが、死体を調査した結果近い時刻に死亡したものと見られている。

まず、体のあちらこちらに穴を開けられた死体。当初は銃によるものと思われていたが、その体内から銃弾は見つからず。

次に、至近距離で爆発を受けたような、激しく損壊したもの。しかし、焼けたような跡は見られず、死体の殆どはその損壊した状態からさらに肉や臓器が失われていた。

三つめに、切断されたもの。首を切り落とされていたり、上と下で真つ二つだったり死体の状態は様々であったが、共通しているのは、どれも切り口が不自然なほどに綺麗な状態であった事。切った直後に正確に繋げばそのまま癒着したのではないか、などと言われているらしい。



四つ目、体内が——に侵されていた事によるもの。人間の行った犯行としてはあまりに不自然な状態であったため、この情報は調査に当たった警察、軍の中では最後のひとつと並んで特に隠蔽が厳重に行われている。

最後に、異形の肉塊と化していたもの。体の一部が、もしくは全身から異常に膨れ上がった肉のような何かが、さらにはその肉には——の器官と思われるものが乱雑に生成されていた。

……最初の三つは、不審な要素こそあるものの、まだ普通の人間がやった可能性も考えられた。

だが、後ろ二つが明らかに、俊輝の属するこの組織の対処すべき問題である、という事を示している。

MO手術は、各国から漏れ出し、あるいは故意に漏らし、裏社会に広がっている。クローンのテラフォーマー、そこから取り出されたM<sup>モザイクカラーガン</sup>Oは競売にかけられ、高値で取引される。

さらに、それをを用いて手術を受け、反社会的組織が戦力を増強している、という事例も見られている。

それを始末し、その痕跡を抹消する為に組織されたのが、俊輝が今属しているこの部署だ。

同類を相手に戦い、それを圧倒するだけの高い戦闘能力。

蛇の道は蛇、毒を以て毒を制す。などと言えばまだ聞こえは良い、標的と同じく、日の当たる世界を歩く事はできない、使い捨てても惜しくない罪人の集まり。

U—N—S—Aの実戦方面で後ろ暗い部分を一手に受け持つのが、そんな彼らである。

「隊長、こちらに目を通しておいってください」

俊輝のこの部隊において与えられてた隊長としての私室、何故か部屋の四方に自動扉のある部屋。その扉の一つが開き、一人の人間が姿を見せる。

敏腕秘書か厳しい女教師か、などという役職が似合う外見の、スー

ツを着こなした眼鏡の女性だ。

かつかつと足音を響かせながら俊輝に歩み寄り、両手に抱えた大量の書類を机の上に置く。

「ありがとう、カローラ」

火星から帰還してからの新しい部下、その一人に俊輝は礼を言い、書類を手に取り、ざっと確認する。

一枚目、部隊隊員の始末書。

二枚目、部隊隊員の始末書。

三枚目……部隊隊員の始末書。

「おや、定時ですね。では私はこれで」  
「待って」

腕時計を確認して帰り支度を始めようと部屋に戻るカローラを、俊輝は椅子から立ち上がり追いかけ、その肩を掴む。

「何ですか、隊長。論理的に考えるにこれはセクハラに分類される行為と見てよろしいでしょうか？」

「色々とよろしくねえよー」

思わず声を荒げる俊輝、凍てつく目を俊輝に向けるカローラ。

……そのまま、数秒の沈黙。

「では私はこれで」

「何で?」

話は何も進展を見せず、むしろ後退する調子だ。

もう自動扉をくぐりかけているカローラに、俊輝は隊長の威厳などどこにもない焦りの表情と声を向ける。

「隊長、カローラ、もう少し静かにしていただけるか？」

そして、この混迷の状況に、次の来客が訪れる。俊輝の机から見て

右の自動扉が開き、年老いた男性がゆつくりと部屋に入ってきて来る。

皺こそ寄っているが鋭い目つきに、高い鼻。俊輝より少し高い長身。気難しく神経質な印象を与えるその身が纏うのは、西洋の貴族のような衣装の上に羽織った黒いコート。

「……貴方にも話がありました、クロヴィス老」

「ほう」

「俺を無視しないでくれると嬉しいかな」

部屋を出ようとしたカローラは、老人、クロヴィスの姿を見て踵を返し、再び部屋に入る。

それに対するクロヴィスも、俊輝へと向けていた追及の目をカローラへと移す。

「仕事熱心なのは大変結構な事です。しかし、ユルキ君から叫びや苦悶の声が貴方の仕事部屋から、大音量が貴方の私室から漏れてきて寝つきが悪い、と苦情が入っています。防音設備をもう少しちゃんとなされては？」

「おや、それは失礼を。しかし、これは致し方の無い事ですのでな。防音対策の費用は部署からお願いします」

火花を散らす二人を見て、俊輝は顔をしかめる。俊輝の直属の部下と言える中で外に出ているのが二人、部署に残っているのが俊輝含め四人。どうか、これ以上話をややこしくしてくれるなよ、と心の中で祈るが。

「おやおや、隊員のための施設改修の費用は出せない、と我らが経理の才媛は仰られるか」

「貴方の趣味の方に割く余裕など無いと言っているのですが？」

静かな戦いが続く二人を眺めながら、俊輝は書類をめくっていく。始末書が全体の2割、後は仕事関係。よし、思ったよりマシだ、と感覚がおかしくなっている事は自覚しながらも俊輝は一度ほつと肩をなで下ろし。

「やれやれ、貴女はとても才に溢れた方ですのに——」

「これは隊長の苦勞が増えるかと黙っているつもりでしたが――」  
そろそろ終わりそうだな、と壁にかけられた時計へと目を向ける俊輝。

この分ならいつもよりは早く終わりそうだと。

「そんなに鋭いご様子ですと婚期を逃しますぞ？」

「貴方が隊の予算でアニメのDVDを購入した事を隊長にバラしますよ？」

二人の喧嘩は最高潮に達し、お互いの痛い部分を一直線に貫く形になる。

同時に、お互いから目を俊輝に移す二人。その目には、隠しきれない動揺の色が。

「た、隊長……ご友人に私好みのイケメンなどは……」

「ほ、本日は良い天気ですな隊長……」

お前普段の調子どうしたんだよ、という青ざめたカローラに誤魔化するのへたすぎかよ、というクロヴィス。

俊輝は二人に生ぬるい視線を向けつつ、どうしたものかと考える。

「……とりあえず爺さんは後で始末書な、あと減給も覚悟してくれ」

本来であれば喧嘩相手が罰せられて喜ぶ所であろう、しかし痛い一撃を受け今だ目が宙を彷徨っているカローラ。がくりと肩を落とすクロヴィス。

二人の問題児……片方は老人だしそもそも問題児じゃない奴などいないのだが、と心の中で呟きつつ、俊輝はこれで終わりか、と安堵に包まれていた……

「ごめん隊長またミスったあ！」

瞬間、正面のドアが爆発し、今この仕事場に残っている最後の一人が部屋に転がり込んできた。

金の三つ編みの髪に汚れた白の白衣を纏った小柄な少女だ。その手には、壊れたレンチのようなものが握られている。

「……もうやだこの職場」

U—N A S A 第7特務支局。同族を狩る、日の当たる世界を歩けない穢れた実力者達の部隊。

そんな彼らを束ねる隊長は、一人静かに、目の端を光らせる。剛大さん、はんちようアンタの凄さが今になってわかったよ、と。

「……じゃあ、報告を頼む、クロヴィス、ノンナ」

……そして、そんな彼らに、俊輝は命令をする。その声と表情には先ほどの、第2支局の仲間達と騒いでいる時の明るい人格は見る影も無く、同族殺しの暗部、その長、地球の未来を賭けた任務において他国の司令官を殺害した大罪人、という経歴に見劣りしないものであり。

「は、隊長。一人が、吐きました。恐らく、数日の内に襲撃があるものかと……吐くまでの詳細は必要ですか」

クロヴィスが俊輝の前に傅き、一枚の紙を取り出し語り始める。

それは、先ほどまで口喧嘩に興じていた老人のそれではなく、底知れない暗闇を秘めた瞳と、呪詛の如き重苦しい悪意の欠片を伺わせる声色。

「ん……ボクもクロさんと同じ要件で……解析、どっちとも終わったよ……今から皆で見よう」

クロヴィスの隣に座った白衣の少女、ノンナも真面目に、静まった面持ちで俊輝に一枚のプリントされた紙を差し出す。

俊輝はそれを見て、一瞬だけ事が進んだ喜びと苦悩の入り混じった複雑な表情を浮かべ、プリントを持ち皆を促しノンナの仕事室へと歩いていく。

そのプリントに映っていたのは、いくつもの数字と単調な4つのアルファベットが並んだ図、そして、その隣に貼られた写真、頭に何本もの線が伸びたヘルメット状の機械を被せられた複数の昏睡していると思われる人間の姿だった。



## 第63話 出会い

「そろそろお腹空いてきたよね？ ご飯にしようか」

「あ……はい……って立たないでください私がやりますからあ！」

U—N—A—S—A医療センターの病室、その扉を開いた俊輝を迎えたのはコントのような光景であった。

ベッドから立ち上がるとうとする病衣から露出した所々に包帯が見えるどう見ても重傷者の静香と、声を振り絞ってそれを止めようとする眼鏡の少女。

「……何やってんだ？」

呆れた様子の端に非難の色を浮かべる俊輝に、静香はびくつと体を震わせ、まるで修学旅行の夜の枕投げの最中に先生が見回りに来た時の生徒の如き素早さでベッドに潜り込む。

「夜ご飯にしようとしただけ！ この子はまだ食事の場所とか知らないんだからいいでしょ!？」

絶対安静にしておけ、との俊輝の言をまたしても破った後ろめたさをごまかすためか、若干強い調子で説明する静香に俊輝は何も言わない。

「わかった、わかったから……これからはちゃんと人呼ぶから！」

その無言の圧力に負けたのか、布団を被った静香は観念したように叫ぶ。

「ありがとうございます……この人私が何回言っても聞かないんです……」

「ああ、いざとなったら力づくで止めてやってもいいよ、エリン」

おずおずと俊輝に近寄り、さらっと静香の俊輝不在時の無茶をバラす眼鏡の少女、エリン。

知ってた、と俊輝は頷き、溜息をつく。

俊輝が率いる第七特務実戦部隊がエリンを保護したのは五日前の事だ。

彼らにU—N—A—S—Aから下された任務、『アメリカ国内で発見され

たある組織の『アジトの強襲』。資料によれば、U—N—A—S—Aに対して何かしらの理由で憎しみを持っている人間が集まり、その中にはMO手術を受けた戦闘員も所属しているとの事であった。

それだけなら何の事は無い、いつもの仕事である。

しかし、それに追加で入って来たのは、一般人が一人囚われている、という情報だった。

ローマ連邦で一人の少女がその組織に誘拐され、さらにその少女はとある重要なデータを所持している。ローマ連邦の諜報員からもたらされたその情報を加味し、任務は組織の殲滅に加えその少女の救出、というものが加わった。

その重要なデータというものが何なのか俊輝達には知らされなかったのだが、そこは第七特務のエンジニア兼ネットワーク担当兼あれこれ兼任者がこっそりと上層部の議事録を拝借した事によって実は何なのかを知っている、というあまり表では言いだせない事情。

いや、何なのかを知っているとと言うと少し語弊がある。その中身がどのようなものなのか、それに関しては何の情報も得られていない。議事録にもそれに関する詳細な内容は書かれておらず、じゃあとばかりに実物を直接見ようとしたがエリンのノートパソコンに入っていたそのデータは強固なプロテクトがかかっているため目下解析中である。

知っているのは、それをU—N—A—S—A第六支局、ローマ連邦が欲しており、元々の所有権を主張して返還を要求している事。

結果として任務は無事成功し、組織の壊滅とエリンの救出およびそのデータの確保は全てが達成された。

当然それはローマ連邦とその裏にいる集団も知る所であり、データに関しての要求も再三にわたり繰り返されていた。

それに対するU—N—A—S—A本部の回答、それは、『組織滅ぼして人質も救出したけどデータは戦いのさ中で失われてしまいました』であった。

無論、それで納得する相手ではないだろう。だが、ひとまず状況は落ち着いている。



そんなこんなで、今エリンはここ、U—N—A—S—A本部で一時的に生活をしている。

それも、彼女を救出した部隊、第七特務の隊長である俊輝を保護者として、だ。

「……隊長、そろそろ我々もよろしいですか？」

「ねえねえ、まだなの？」

「見たい番組があるのです、早く帰りたいのですが？」

開いたドアの外からは、三人の人間の声が響いてくる。

他に人がいたのかと慌てて部屋の隅に移動しようとするエリンをなだめ、俊輝は入っていいぞ、と外で待っていたらしき人間を部屋に迎え入れた。

「……っ」

最初に入って来た人間を見て、静香の表情が強張る。

それは、シルクハットに革のコート、全身が黒に統一された服装が印象的な大柄の老人であった。

「こんばんは、エリン嬢。そしてこちらは……初めまして。クロヴィスと申します、美しいお嬢さん……いえ、隊長の奥方であられますかな？ でしたらマダム、とお呼びした方が……」

威圧的で気難しい印象を与えるその老人がエリンに、そしてその後静香に向き直り、シルクハットを取り丁寧に礼をし、挨拶の言葉をかける。

最初に静香の顔には、啞然とした表情が浮かんでいた。長身の老人、というところで主に火星であまりいい思い出が無く、最初は無意識に恐れ警戒してしまっていたが、想定外にも紳士的だ。

そして、彼の言葉の後半を脳が理解して、その顔は真っ赤に染まる。「い、いえいえいえ！ そんなじゃないです！ ああ、どうもはじめまして！ 御崎静香って言います！」

「……あなたの減給額は俺の上への報告次第という事を忘れるなよ、爺さん」

「冗談がきついですな、隊長」

あわあわと返事をする静香の後ろでは、聞こえないように俊輝とクロヴィスが言葉を交わす。水面下の攻防、というやつである。俊輝が照れ隠しに立場と数時間前に発覚したクロヴィスの不祥事を利用して一方的に殴っているだけだが。

「次！ 次だね！」

そんな状況なんか知らない、とても言う風に、二人目が勢いよく滑り込む、と言っているいい勢いで部屋へと入ってくる。

「こんばんは！ ノンナ・アントロポフって言います！ た……俊輝さんの同僚です！」

澆刺とした、金の長髪を三つ編みにした小柄な少女である。煤のようなものに被って少し灰色がかかってしまっている髪と、前のボタンが全て閉じられた汚れた白衣が印象的な少女、ノンナは静香に握手を求め、応じた静香の手をぶんぶんと振る。

「元氣な子だね俊輝！」

「ああ……」

半ば諦めムードな俊輝は、力なく声を返すだけ。

「えっと、ボクはまだ会ってなかったよね、エリンちゃん！……あの……」

次いで、静香を離れて早足にエリンに駆け寄ったノンナは、もじもじとしながら白衣の内側へと手をつっこむ。

「あの……ファンです！ サインください！」

手品のようにどこにその大きさのものが入っていたんだよ、という色紙を懐から取り出し、エリンへと詰め寄るノンナ。

その場にいるノンナ以外の皆は、当然唾然とした様子。何事なんだ一体、と。

「この前さ、うちのデータ盗まれたでしょ？ アレ、エリンちゃんがやったんだよ！」

ああなるほど、と納得する俊輝とクロヴィス。話が追えていない静香。反応は様々だ。

俊輝が隊長になってすぐの事だ。第七特務が管理していたU—N

ASAのデータ、そこまで重要度が高いものではないが部隊の資料の一部がクラッキングを受け抜き取られるという事態が発生した。

セキュリティ担当のノンナが大いに悔しがっていたので彼らの記憶に新しいのだ。

「え……あの……なん……わかっ……」

そして、当の出し抜いた相手にサインを求められたその犯人は、冷や汗を流しながら表情を目まぐるしく変えていた。驚愕、恐怖、諦観、いややっぱり恐怖と目まぐるしく変わるそれは、平静を保てていない事は明らかだ。

データを盗み取った相手とその組織の構成員が、自分が犯人である事を知りながら目の前に立っている。

ああ、自分を助けたのはこのためだったんだ……データにあった通りならこのお爺さんは——で自分は酷い目に……この人達が今ここにやってきたのは組織に噛みついた自分に思い知らせるためだったんだ……とエリンの目いっぱい涙が浮かび、哀れに思えるほどに体は震えている。

「サイン……ダメだったかなあ……ごめんね？」

色紙とペンを受け取ってくれないエリンに、ノンナの表情が曇る。

「あー、エリン？ こいつ、怒ってないぞ？ 後俺達も」

「最初はどうしてやろうかと思っただけですが……犯人がこのような可憐な少女とあっては手も鈍るものですからなあ」

エリンと自分達の間には致命的に食い違いがある、という事に最初に気付いた俊輝が助け船を出す。

以前の事はアレだがどうこうするつもりは無い、と。

それにクロヴィスも同意だと頷く。

「ボクの自信作が簡単に突破されちゃってすごいなあ……だから……」

「……ごめんなさい」

怯え切った様子ではあるが、直に救出してくれた恩人である俊輝の言葉で少しは落ち着いたのか、エリンは第七特務の三人に向けて頭を下げる。

「あと、こんなのでいいなら……」

そして、さらさらとサインを、特にひねりもない自分の名前を書くだけのそれを、キラキラとした目で見つめるノンナ。

「わあ……！　ありがとう、額縁に飾るよ！」

「やめてー！」

二人の微笑ましいやり取りに和やかなムードとなる一同であったが、賞状の授与式か何かのように背を伸ばしたまま腰を曲げて両手でサインを受け取ろうとしているノンナ、それを見たエリンが何やら変なものを見たかのような、何か言いたいけど言えないようなあわあわとした表情に変わるのを見て、俊輝の額に一滴、汗が流れる。

「ノンナ……お前まさか……！　カローラー！」

「はい」

緊張した面持ちの俊輝が発した声に反応し、最後の一人が素早く部屋に入って来る。

眼鏡を掛けたスーツの女性、その姿を静香が確認できたのは、ほんの一瞬だった。静香に頭を下げ挨拶をし、嬉しそうなノンナを脇に抱え一瞬で部屋を出ていく。

「あ……サイン、忘れちゃってるな……ごめんエリン、ちよつと来てもらってもいいか？　アイツも喜ぶだろうから」

サインを忘れたから直接本人に渡してもらおうと連れていく、理屈の上ではあまり通らないそれに、エリンは首をかしげる。だが、俊輝の目を見て自分に用があるみたいだ、と確信する。

「いきなりごめんな、静香。てなわけでちよつとエリンを借りてくぞー！」

「え、ええ……？！」

突然の事に困惑しっぱなしな静香を置いて、俊輝はエリンと共に部屋を出ていく。

一人残された静香は、エリンの分のご飯も作つところかな、とU—NASA施設内の食品店を目指し一人立ち上がるのであった。

しばらく歩いたエリンが連れてこられたのは、地下の一室だった。

U—N A S A って地下にこんな建物あったんだ……と関心を向けるエリンであったが、それよりも問題なのは……

「だから！ 何回も言ってるだろうが！ 裸に白衣はやめろ、って!!」  
「暑いからしよがないんだよお！」

あんまりな理由で俊輝に説教を受けるノンナの姿だった。

ああやっぱり、ノンナが屈んだ際に見えた白衣の下に何も着てなかったように見えたのは間違いじゃなかったんだ……と自分の目がおかしくなっていたわけではない事に安堵し、同時にじゃあ何故に何も着てないんだ……と当然の疑問が浮かんでくる。

「……お説教は暫く終わらなさそうなので、私から用件を伝えさせていただきます」

椅子と紅茶を差し出されたエリンは少し戸惑いながらもそれに座り、一口紅茶を飲む。

暖かい飲み物で少し落ち着いたので、ほっと息を吐くエリンの様子を見て、お説教とその反論をBGMにカローラは話を始めた。

貴方に、一つ依頼をしたいと。

報酬は十分なものを約束し、暮らしてはU—N A S A が保証するという条件付きで。

今のエリンがこんな状況になっている一番の理由と思わしきもの。それは、彼女がローマ連邦の関わっている研究所から盗み取ったファイル、『Project GOE』。もちろん、ただ彼女を狙った団体がタイミング良く襲撃してきたせいとそれと関わりがあるように見えているだけかもしれない。彼女本人からすれば、それはまだ確証を持って言えるものではない。

だが、俊輝達からすれば、このファイルとそれを取り巻く事情には色々不審な点が見られるのだ。

まず、ローマ連邦の動向。ファイルを盗み取った、と言っても元のファイルが消えるわけではない。そんなに重要なものなら、何かしらの媒体にバックアップがあってもおかしくないだろう。

ここから考えるに、このファイルは元々ローマ連邦の持ち物ではないのでは？ と考えられる。情報漏洩を警戒しているならば、返せと

いうのも不自然だ。返した所で、こちらがそれをコピーしていない保証など無いのだから。

この二つから、導き出される結論は一つ。これは、ローマ連邦、もしくはそれに関わる何か欲している、それ以外の何者かが所有しているファイル。

データをエリンから受け取り、何度もプロテクトの解除を試みた。だが、部隊の中で最もその分野に長けているノンナでさえ、何重にも施されたプロテクトの一部を外しほんの少しの情報を得る事しかできなかった。

得られたものは、塩基配列表。解析した結果、それは人間のものである事が判明した。

その次に、それが誰のものであるのか、という事が調べられた。作業には三日をかけたが、該当する人間が一人、見つかった。

それは、『マーズ・ランキング』の個人識別データからだ。

無論、公開されている情報では無い上塩基配列などというものをデータとして持っているのは手術を受けた際に解析を行ったそれぞれの班員の所属する支部に限られるため、入手にはかなりの苦労を強いられた。

1位、『ジョセフ・G・ニュートン』。

それと限りなく近い、ほぼ同一人物と言っていい塩基配列。それが、このデータだった。

ローマ連邦、その裏にるのが神の一族、ニュートンの家系であるという事は裏の任務をこなす第七特務としては既知の情報である。だが、ローマ連邦とニュートンの一族が欲するこのデータの一部にあるのが、当のニュートン一族当主の塩基配列図？

きつと、裏がある。何かが蠢いている。

そして、その予感的中した。怪しい動きをしていた一人を捉え、その人間が吐いた内容によって。

その何かは、このデータの中身を知られる前に、全てを焼きに来る。恐らく、エリンにはうつすらとはわかっているだろう。この裏には

大きな陰謀が絡んでいるのだと。

「貴方には、このデータファイルのプロテクトを外していただきたいのです」

カローラは、真剣な瞳で真正面からエリンを見つめる。

この気弱な少女が、果たしてそれをしてくれるのかと。その確証は無い。様々な人間を見てきたカローラからすれば、この状況に陥った時、多くの人間は逃避を選ぶ。それは彼女が弱いのではなく、人という生物の性だ。

「私は、弱い人間です」

エリンの答えは、弱弱しい声。絞り出さなければ何も聞こえないよ  
うな、小さなもの。

だが、決意の理由なんてわからないそれは、意思の光が宿った目は、  
確かにカローラを見返していた。

「命をかけて、なんて言えませんけど……怖くなったら逃げ出しちゃ  
いますけど……やってみます、頑張って」

## 特別番外編 エリシア「体を鍛えたいです」

「むむ……むう……うーん……」

裏アネックス計画。

アネックス計画を支援するために編成された彼らは、元々が協力を考えず各々勝手に計画していたという事情もあり、それぞれの支部を持つ国の事情が表よりも露骨に表れている。

例えばそれは国の意思とは考え難い不審な隊員が多い第6支部、ローマ連邦。そして、それと同じくらい特徴的なのが、今現在裏アネックス計画実戦部隊幹部搭乗員に割り当てられた部屋を廊下から覗き込む彼ら、ロシア・北欧第3班である。

その廊下を通りがかった人間がいるならば、即座に回れ右をして目的地へのルートを変更する事だろう。

十人を超そうという数の大の大人たちが皆一様に一つの部屋を覗き込んでいるという異様な光景を目撃してしまったから、というのも理由の一つだが、最も大きいのはそこではない。

彼らは皆、近寄りがたい凶悪なオーラを発しているからである。

「チツ……」

「テメエ……どけよ見えねえだろ……」

「あゝアゝ？ 死にてえのか？」

裏アネックス計画第3班。それは、犯罪者から特に身体能力に長けた人間を選抜した、曲者の多い裏アネックスの中でも特に武闘派、無秩序な人員が集まった班である。

一般職員は既に業務を終え、残業にいそしむ一部だけが残る夜も深くなるこの時刻、まるで井戸に群がる世紀末のモヒカンの如く乱暴な言葉を（ひそひそ声であるが）吐きながら廊下を占拠する彼らの横を通ろうという人間がいるだろうか？ いやいない。

さて、問題はここからだ。彼らはこんな時間に何をしているのだろうか。

彼らが覗き込んでいる部屋、それは彼らを束ねるボスである幹部搭



乗員の私室である。不用心にも少しだけ空いたスライド式のドアの隙間、いや正確には彼らが部屋の主に気付かれないようこつそりと開けたのであるが、とにかくそこから見えるのは、机に向かいペンを片手に熱心に読書をする、彼らのリーダー。

戦闘という点では間違いもなく精鋭、いくつもの修羅場をくぐり、中には命の奪い合いを経験した人間も少なくない豪傑達。そんな彼らが、その部屋に入る事を躊躇する程の、彼らのボスとは、一体――

「……………」

ぴくり、と彼らのボスが動きを止める。一同に緊張走る。まずい、バレたか？ と。

「……………ふあ……………あ……………」

そして、欠伸を一つ。それを見た彼らの反応は、安堵……………では無かった。

「……………！」

「ほああ……………やっばい……………（小声）」

「おい……………誰かカメラとか持ってないのかよ……………！（小声）」

自分の口を押え、溢れそうになる声を自ら制したのは、筋骨隆々の巨漢。

班長補佐、副官のレナートである。

他にも、各々の感想を言い合う班員達。

同時に、部屋を常に覗けない位置にいる後方の数人から、小声でブーイングが上がる。

さて、そろそろ彼らのボスがどのような人間なのか、語るべきだろう。

成人用に作られた高椅子に座り、足は地面に着かずぶらぶらとさせており。

ペンを持つその手は、力加減を間違えて握ってしまえば潰れてしまいそうなほど弱弱しく。

欠伸によって零れた涙を袖で擦るその動作は、豪傑と呼べるような

ものでは勿論ない。

そこにいたのは、一人の可憐な少女であった。

儂い印象を与える白の肌に、美しい銀の長髪。淡い水色の寝間着を身に着けているその少女こそが、彼らを束ねるボス、裏アネックスロシア・北欧第3班班長、エリシア・エリサーエフである。

当然、彼らが部屋に入っついていかないのは彼女を恐れての事ではない。そう、その理由は……！

「やっぱりやめられねえな、『班長ウォッチング』は……！」

訓練中の鬼気迫る彼らを知る人間からすればさぞ気味が悪いであろう、だらしのない笑みを浮かべる班員達。

誰ともなく同意の声か、静かに上がる。

最初に彼らがエリシアと顔合わせをした時、この新たな小さい上司の言う事を聞いてやろう、などと考える者は一人もいなかった。副官であるレナートとマルクも、班長はあくまで兵器として扱い、部隊の指揮は自分達が行おう、と考えていた。

しかし、顔合わせから約2週間で今の状況とあまり変わらないさまとなる事を、当時の彼らは思ってもいなかった。

自分達に怯えてふるふる震えるその小動物的な姿に女性班員が数人陥落し。それでも勇気を振り絞って荒くれ者とお話しようとするその姿勢に過半数が崩れ。

少数派となったこんなのはリーダーと認めない！ 派閥も自作のお菓子を自信なさげに差し入れに持ってきたり、訓練で怪我をしたと見れば救急キットの重さによるめきながら慌てて駆け寄ってくるその姿に一人、また一人とその勢力を失っていき。

班員の心は裏アネックスの他の班でも類を見ないレベルで早くまとまった。

人柄は良いが罪人という事で印象が良くなかったダリウス、生真面目で厳格な性格に班員が慣れるまでに少しかかった剛大、最初は人間不信だったため班員と深く関わろうとしなかった拓也、そもそも部下

に信用されようともされるとも思っていないなかったヨーゼフ、信用とかそういうレベルではなかったエレオノーラ、と他の班は班長と班員の関係構築に難儀していたりもしていたが、この班が上手くいったのは、班員と班長の意識に大きな差が合った事が逆に有利に働いていた。

そう、彼らはこれまでに会った事がなかった、もしくは長らく会っていないかったのだ。

打算も何もなく、自分達に触れあい、純粋な好意を向けてくれる人間に。

いつ敵に回るかもわからない傭兵や、裏切るかもわからない仲間。報酬を出し渋り、機密を守る為に任務完遂後に殺そうとしてくる雇い主。

誰も信じられず、信じた人間から死んでいく、裏の世界。そのような場所で生きてきた彼らには、エリシアの存在は大きすぎた。

……まあ時々親の遺伝なのか何なのか知らないが腹の黒い所を見せたりするが、それもまたいいと。

「しかし……わからんな」

レナートが顎に手を当て、呟く。

何も、彼らは自分達の欲望、班長成分を摂取するためだけに覗きをしているわけではない。

班員総出で彼らの愛する班長の様子を見ているのには、とある理由があった。

最近、エリシアは何かを悩んでいる様子なのだ。

訓練中も彼らが肉弾戦を行っている所を見て溜息をついたり、能力の都合上エリシアは戦わない対クロウンテラフォーマーの演習を行っているのを見学している時でも、何かしよぼんとした表情を浮かべている。

班員内チャットで会議が行われたが、直接聞いてみようという意見は無遠慮につつついてしまつて傷つけたらどうするんだ、という事で却下。エリシアと親しそうな他国の班員に聞いてみよう、という案は怯えて逃げられたため失敗。

もうどうしようもない、という事でじゃあこつそりエリシアの生活を覗き見れば何かわかるんじゃないか、という結論に至つた。

そんなこんなでエリシアは作業を終えたのか、机を降りベッドに向かう。

今日も収穫なしか、と肩を落とす隊員達。

そこで、エリシアが普段とは違う動きを見せた。

突然、床に仰向けで寝転んだのだ。そして。

「……これは……！」

膝を立て、両手を頭の後ろで組み、上体を起こす。

それは、腹筋の運動だった。

バカな。運動とは無縁の班長が、このようなトレーニングなど——  
1回、2回、3回。

それで、エリシアはぐつたりと寝込む。震えながら起き上がり、粗く息をついてベッドに潜り込み電気を消した。

「……撤収だ。これより臨時班員会議を開始する」

レナートの、厳粛な声。それに、班員達は真面目な表情で頷く。

「レオン！」

副班長としての、威厳を持った声。それに応じ素早くレナートに歩み寄るのは、一人の班員。

「……写真は撮つたな？」

「もちろんだ、レナート」

それから、レナートの東西奔走が始まつた。

エリシアの悩み、その点に関しては何となく推測ができた。

ならば、班長を支える副官として自分ができるのは、それを解決する方法を探す事。

「あらあら、あの子あんな事を気にしていたのね」

「……ふむ、新開発の薬があるが」

「無理をさせる必要は無いと思うが」

他の班からも話を聞き、約二週間後。

「お嬢、少し俺に付いてきてくれられないか？」

「へ……？」

日曜日。休日のその日に、レナートはエリシアの部屋へと赴いていた。

寝ぼけ眼で状況がよくわかっていないエリシアを連れ、レナートが向かったのは。

U—N—A—S—Aにある施設の一つ、トレーニングジムだった。

困惑するエリシアを横に、レナートは堂々と足を踏み入れる。

レナートはトレーニングをするにあたって本部の第三支局に割り振られた区画の訓練施設を使用していたため、各国共用の施設であるこの場所を訪れた事は無い。

では何故エリシアを連れてここにやって来たかと言うと、会わせた人がいたからだ。

そのトレーニングルームでひとときわ目立つ一区画。

「相変わらず、素晴らしい筋肉ですな……！」

「ハッ、お前もな……！」

飛び散る汗。上下運動するバーベル。お互いを讃え合う、二人の男。

ベンチプレスのコーナー。そこで、その二人は会話を交わしながら、その100kg弱はあるのではないかというバーベルを持ち上げていた。

エリシア換算で2.5人分くらいの重量物を容易く持ち上げる二人を見て、レナートは額に汗を浮かべる。自分もこれを持ち上げる自信はあるが、このように会話をしながら容易く、とまではできるかど

うか、と。

「あ、アシモフさん!？」

エリシアが驚きの声を向けたのは、その二人の内の片方に対してだった。

片方は、アネックス計画第3班班長、シルヴェスター・アシモフ。同じアネックス関係の幹部搭乗員であるエリシアも色々お世話になっていて、レナートの憧れでもある、軍神と呼ばれた男である。

「ん？ エリシアか……お前さんもトレーニングしに来たのか!？」

「え、ええと……」

エリシアに目を向け豪胆に笑うアシモフに、何と返していいのかわからないエリシア。

「ん……この子……ああいや、この方がそうなのか、レナート」

その隣で、レナートとベンチプレスをしていたもう一人の男が会話をしている。

彼は、まさに巨漢、と呼ぶべき人間だった。

2 mを超える長身に、しかしその長身を持っていても細さなどという言葉には全く無縁な、がっしりとした鎧の如き筋肉を持った巨体。

そんな彼の名はデイトハルト・アーデルハイド。アネックス計画第5班所属の戦闘員だ。

ただでさえ他班との関係が希薄な裏アネックスが、アネックス計画の他の班の班員との親交など殆ど無いはずであるが、何故レナートはデイトハルトとこうして言葉を交わしているのか。

事はちようど一週間前に遡る。

エリシアの悩み、それは『自分の体が弱い事』であった。

以前行われた裏アネックス幹部搭乗員腕相撲大会。そこでわかりきつてはいたものの最下位になったエリシアは、自身の体の脆弱さを、身体能力の低さを改めて思い知らされる結果となった。

……仕方ない部分ではある。不完全なクローンとして製造されたエリシアの身体能力は、未成年の女の子という部分を差し引いてもさらに貧弱だ。それは、人間がチーターとかけっこしても勝てないのと

同じ、そもその前提となる能力からして違う、とも言えるだろう。しかし、彼女はそれを気に病んでいた。同じ、『人間』として火星に渡り、目的を果たす。自分に良くしてくれている隊員の皆は、身体能力という点では平均をはるかに上回っている。

自分が、足手まといになつてしまう。それは嫌だと、彼女はずっと悩んでいたのだ。

エリシアの能力『ムカデミノウミウシ』は専用装備を用いる事によつてその身に取り込んだ刺胞動物の触手を自在に扱う事が可能である。しかしそれは、対人戦に置いては凄まじい制圧能力を誇るものの、テラフォーマーには通用しない。甲皮が、刺胞を通さないからだ。だから、テラフォーマーとの交戦になつた場合、エリシアは班員任せで見ている事しかできない。

それをどうにかしたい、と考えている事を推測や他班の幹部搭乗員に話を聞きに行き知つたレナートは、エリシアを彼女が望む形で鍛えてくれる、そのような人材を探していた。

自分や班員がやるというのも手だが、どうしても厳しくできない予感がするし、それはエリシアも望んでいない事だろう。

そして辿り着いたのが、トレーニングルームだった。

アネックス第5班、班長の強さに頼りつきりで班員の中の戦闘員が1人か2人しかいないとか。

戦闘能力第一のレナートからすれば興味が無かつたその班員の一人がベンチプレスから体を起こした時、レナートは戦慄した。

コイツ……なんて体をしてやがる……と。そして、レナートの口から自然に零れたのは、たつた一言だった。

「俺と戦え」

初対面の相手に対して余りにも無礼な、全くなんの話も進んでいないのにコイツは大事な班長を託せる相手なのか凶つてやろうという勝手な理由と、単純に闘争を好むレナートが己が身に燃えるものを感じたという理由。それともう一つ。

燃え盛る殺意にさえ近い闘志を突然ぶつけられた男、デートハルトは突然の来客に驚きはしたものの、その熱意を感じ取り無言で領

く。  
近くにいたアシモフが止めなければ今この場でレナートが襲い掛かっていたであろう緊迫した場面は、訓練場へと移された。

訓練場。対テラフォーマーでは無く対MO手術被術者を想定し裏アネックスの幹部搭乗員が存分に力を振るえるよう設計された特注のフィールドである。

そんな場所で、2人の戦士は同時に自身に『薬』を打ち込む。

変化していく2人の体。レナートの肉体が黒の甲皮に覆われ、その額には1本の長角と2本の短角が形成される。その腕には、力強さを感じさせる鉤爪。

それは、戦神の、そして火星の名を冠する昆虫。『マルスゾウカブト』。それが、レナートのベース生物だ。単純にして絶対の強さ、腕力。その一点において、この生物に敵う存在はそこまで多いわけではない……だが。

「……何!？」

レナートは目の前の、その変態によって姿を変えていくデイトハルトを見て、驚愕に目を見開く。レナートもまた、2m弱の身長を持つているが、デイトハルトはさらにそれを上回る。そして今、それはさらに大きくなっていった。

変態と同時にその肉体はまるで爆発するかのように膨れ上がっていく。筋肉が増加し、皮膚もそれに合わせて分厚くなる。

変態が終わった時、そこには3mを超す巨体が姿を現していた。「なるほど……な」

その巨体以外から伺える手術ベースとなった生物の特徴、少し伸びた鼻。そこからデイトハルトのベース生物を理解し、レナートは息を飲む。

デイトハルト・アーデルハイド



『マーズ・ランキング』8位

MO手術『哺乳類型』

——アフリカゾウ

『ゾウ』VS『ゾウカブト』

「さあ、始めようか！」

大きさは、強さ。力が強い方が強い、と同じく、それは単純にして絶対の真理。

その体現者は、レナートに向けてその腕を振るう。

肉弾戦なら望む所だ、とばかりにレナートはその腕を正面から受け止める。

筋肉と筋肉が、まるで火花が散っているのではないかと観客に錯覚させるほどに激しくぶつかり合う。

「……っ！」

「グ……オオオオオ……！」

純粋な腕力で言えば、それは互角の戦いだった。その攻防の勝敗を分けたのは、両者の位置関係。

——ベキツ

「しまっ……！」

テラフォーマーの中でも特に強靱な肉体と強力な身体能力を持つ力士型と呼ばれる個体。

それさえも一撃で押しつぶす程の重量とパワーを受け続けた結果。

訓練場の地面がひび割れ、足場が不安定になったレナートの姿勢が崩れる。

形勢不利だと判断したレナートは力を抜き、ディートハルトの側面を取ろうと動く。

レナートの抵抗を失った事によりディートハルトの両腕は地面へ

と叩きつけられ、その破壊痕をより大きなものとする。

その隙に、レナートは自身の腕の鉤爪をディートハルトの右足へと食らいつかせる。

カブトムシの仲間の中で最強とも言われる、ゾウカブトの木にしがみ付く際の鉤爪の強さ。

それはディートハルトの太腿の辺りへと食い込み。

その威力は、血を流すまでも無く止められた。

レナートがそれを理解し、退避する程の時間は与えず、レナートの脇腹に横殴りに一撃が叩きこまれる。

元の人間からして強靱な、さらにそれが変態によって鍛え上げられる、強靱な筋肉と分厚い皮膚。それは、比喻表現でも何でもなく、外部の攻撃を無力化する鎧である。

派手に吹き飛ばされ、壁に叩き付けられるレナート。口の端からは血が流れ、甲皮の所々にはヒビが入っている。このまま戦闘を続行すれば、恐らくは後に影響を出す傷を負いかねない。

「まだ、続けるか？」

「いや、止めだ……テメエが強い、って事はよくわかった」

ディートハルトは、いきなり決闘を挑んできたこの男にどんな事情があるのかはわからない。毎週恒例のトレーニングの時間を邪魔されて、不快ではない、とは言えないだろう。

だが、レナートの目には、その行動には、自分では無く誰かの為に動いている、そのような意思を感じ取れた。

だから、このような無理な事を受けたのだ。

それは、レナートも同じだった。見ず知らずの相手に、今日出会ったばかりの相手にいきなり班長を任せるなど、彼がするはずもない。しかし、今回初対面の相手にそれをしようと思ったのは、ディートハルトに確かな何かを感じ取ったからだ。

「じゃあ、事情を聞かせてもらおうか？ ……それと、プロテインの好みでも聞いておこうか」

「ああ……プロテインは——」

「……レナートさん、後で罰です」

エリシアのジト目を受け、レナートは身をすくませる。

それもそうだ。他の班の班員にいきなりケンカを挑むなど、迷惑以外の何事でもない。

「えーっと、エリシア班長、でいいですか？」

デートハルトはエリシアに向かいあい、軽くかがんで視線を合わせてから話しかける。見た目はどうみても一般人の女の子だが、その実は『裏マーズランキング』の頂点たる一人である。

「あ、はい……」

人見知りしがちなため声が小さくなるものの、デートハルトに対して何とか返事をするエリシア。

「あなたは、何故体を鍛えよう、と？」

そこで、エリシアの顔色は変わった。一度レナートを見て、それからまたデートハルトに視線を戻す。

何度も、誰かに頼もうと考えた。でも、勇気が出せなかった。これは、そんなエリシアに降って湧いた機会だ。

「……私は、皆を守りたいんです！ 足手まといになりたくないんです！」

理由としては単純なそれ。だが、弱い弱いその身を振り絞った願いに、デートハルトはゆっくりと首を縦に振る。

「甘い道ではないですよ」

デートハルトは考える。裏アネックス計画幹部搭乗員の手術ベースは機密事項であるため知る事はできないが、恐らく目の前にいる少女のものは特殊な能力に重きを置いているだろうと。

一瞬見ただけでも筋肉とは無縁に思えるこの少女が幹部搭乗員として一部隊を任せられ、『裏マーズ・ランキング』の3位に座する強者である事から、それはほぼ確定と言っているだろうか。

それを生かそうと思えば、体を本格的に鍛える事に意味など無いと言えよう。体を鍛える時間でその能力の練度を高めた方が、戦力という面では明らかに利益となる。しかし、当の本人がそれを望むのなら

ば。それを信じる班員達が、そうして欲しいと望むなら。

「はい……お願いしますー!」

エリシアの、力強く、とは程遠い、少しでも弱気になれば霞んで消えてしまいそうな声。

だがそれを見てデイトハルトは根拠など何も無し、ただ直感で思う。

これは磨けば光るのではないかと。

そこから、エリシアの特訓の日々が始まった。

『象さん式ブートキャンプ!』と表紙に書かれたエリシア手製のメモ帳に、日々の特訓が書き込まれていく。

最初に行ったのは、腹筋だ。現状のエリシアがどのような感じなのかを知ろうとしたデイトハルトは、3回で力尽きるという衝撃的な展開に驚いたりもしたが、それはそれとして初歩的な所から進めていこう、という路線に。

「もつとこう……力を入れて……」

「は、はいっ!」

毎週日曜日は一緒に特訓だ。さらには、『象さん式ブートキャンプ!』に書かれた内容に従い、日々鍛錬を続ける。

一か月して、エリシアに少し変化が。

他の班員と同じように走り回っても、脱落するまでの時間が明らかに遅くなったのだ。

デイトハルト式の特訓。それは本来、元々鍛えている人間をさらに上に押し上げるもの。

そのため、そもそも脆弱なエリシアには負荷が強すぎる。

……というのも、日曜に授業参観の間隔で班員一同デイトハルトのトレーニングを受けに行った際に、張り切ったデイトハルトが本格的なものを施したところ、鍛えているはずの班員の大半が筋肉痛で翌日全身筋肉痛、元からあまり鍛えていなかった副官のマルクやト

レーニング中と言っても元が致命的に弱いエリシアは翌日そもそもベッドから出る事ができなくなり、訓練が中止になるという非常事態に。

本当に大丈夫なのか班長は、という班員の声が噴出したが、そこは普段は大丈夫、という当のエリシアの声により収まった。

そして、幾月が経過しただろうか。

いよいよ、『アネックス1号』が火星に飛び立とうという日がやって来た。

「ディートハルトさん、今まで……ありがとうございます！」

「いいえ、エリシア班長の頑張りがあったからこそでしょう」

固く握手をし、表の戦闘員と裏の班長はお互いに背を向けてそれぞれへと歩き出す。

ディートハルトはアネックス1号、火星の悪魔を斃し地球を救う旅路へと。

エリシアは裏アネックス、その裏で動く悪意ある人間達を狩る戦い、その最終準備へと。

今ここに、その戦いは始まり——

---

裏アネックス計画第3班宇宙艦。

彼らはエンジンのトラブルにより不時着し、火星へと降り立った。

そして、そこに襲撃してきたのは、火星の黒い悪魔、テラフォーマーの群れ。

エリシアの能力では歯が立たない、その敵。

歯が立たない。確かにそうだ。その能力であれば。

……では。

「……?」

突撃をかけたテラフォーマーの顔が、陥没する。力を乗せた一撃によりその表皮は軽々と碎かれ、体液を撒き散らす。

テラフォーマーはほぼ失われた視界で、その相手を映した。

溢れんばかりの筋肉を持った、憎むべき人間の姿だった。

テラフォーマーは頭を潰されてもまだ活動が可能だ。その敵を叩き潰そうと再度の攻撃を仕掛けようとしたが。

その体は、ぴくりとも動かなかつた。全身を支配する痺れ。それにより、テラフォーマーは活動を停止する。

他のテラフォーマーは、思わず後ずさる。これは……何だ？

「ああ、簡単な事だったんですね」

人間は笑う。それは、テラフォーマーのそれと同じか、それ以上に邪悪なものであり。

「甲皮に刺さらないのであれば、拳で貫いて直接体内に送り込めばいいんです」

そこに立っていたのは、一人の、筋肉の鎧に身を包んだ銀髪の少女だった。

エリシア・エリセーエフ

『裏マーズ・ランキング』 2位

178cm 96kg

「うわああああああ!!」

断末魔の悲鳴のような声を上げ、レナートは布団を蹴り飛ばし体を起こした。

体中から汗が止まらず、服はびしょびしょに濡れている。

何という悪夢だろうか。これは笑い話にすらできはしない。早く忘れたい。催眠術か何かを……。

そこまで考えて、レナートは少しだけ落ち着きを取り戻す。

忘れたい、というには少し、いや、中々面白い夢を見た気がする。最後の最悪のインパクトのせいなのか、そもそも夢とはそういうものなのか、その中で出会ったはずの誰かの顔は、不思議と思いつけない。

「レナートさん、レナートさーん」

「……おう、お嬢」

部屋の外から聞こえる声に、レナートはぎこちなく反応する。

ドアを開けると、そこに立っていたのは……

大丈夫、いつもの小さい、筋肉の欠片もない可愛らしい班長だった。

今日は休みだったが、さてはて。

「えっと、ちよつとでも皆さんに付いていけるように体を強くしたいなー、って思ってる」

廊下を二人で歩き、突然日曜日やってきたエリシアの事情を聞きながら、レナートは夢を思い返す。

「教えていただけそうな人を探したら、表の方の5班にそういうのが得意な方がいるそうで!」

アネックス……第5班……。何かを思い出せそうな気がするが。

「それで、トレーニングルームにいらっしやるそうなので……レナートさんに付いてきていただきたいなあ……つて」

もちろん、断れそうはずもない。他ならぬ班長の頼みだ。だが。

「ああ、でも、その前にちよつと買い物だけさせてくれ」

「?」

何か確証があるわけでもない。思い出せた事もない。だが。

何となく、本当に何となく新たな出会いでもありそうな気がする。  
お近づきの印、なんぞ自分らしくもないか、と思いながら、少しだけ、楽しい気分です。

レナートは、特に理由もなく、大豆原料のプロテインを手を取った。



第64話 The Inner GOD 夢見るままに待ちいたり

「ふむ……都市伝説特集、ですか」

エリンが依頼を引き受けた翌日。

エリンがノンナと一緒に例のデータのプロテクト相手に悪戦苦闘し、カロラと俊輝はU—NASAの防衛に関する書類を纏める為にPCと格闘している、残りの二人は外の任務に出ているという第七特務の昼下がり、ただ一人の暇人、クロヴィスは雑誌を片手に椅子に座りくつろいでいた。

「爺さん、それは俺に対する嫌がらせか何かか？」

「ほほう……『アメリカで行方不明者多数！ その犯人と思わしきエイリアンの写真がこれだ！』……興味深いすなあ」

ダメだ、このオカルト好きな爺さんは放っておこうと俊輝は気持ちを改め、隣で殺意の何かに目覚めそうなカロラを制し、作業を続ける。

「……時に、隊長。ああいえ、邪魔する気はありませんからな、聞き流してくださいませ」

「……おう」

クロヴィスの声色が、少し変わった気がした。まだ付き合いは数ヶ月な部下であるが、その感情の機微は多少はわかるようになってきた。こいつは今から何かしら意味のある話をしようとしている、と俊輝は察し、作業のスピードを少し落とす。

「都市伝説……陰謀論も含めて、これをどう考えますかな？」

「面白いのはあるけど……データラメだと思っうな」

PCを触りながら、俊輝は耳を傾ける。

都市伝説。ぱっとイメージできるものは、宇宙人に関するもの。アメリカが宇宙人と協力して、その技術を分けてもらって兵器を作っている、そのような事を聞いた事がある。

ローマ連邦の首相がマフィアのボスと手を組んでいる、などという

のも聞いた事がある。

しかし、証拠も無ければ現実味にも欠ける話だ。

「……何故、そう思うのですかな？」

「そりゃあ、証拠も何もないからな」

そう。証拠があつて初めて、それは多くに真実だと判断される。その点では、俊輝は何も間違つた事を言っていない。だが。

「ふむ、その通りですな。しかし、私はこのような噂話に証拠が付いてこない理由は二種類があると思うのです」

「……」

少し声のトーンが落ちたクロヴィスに、俊輝はPCから目を離し、手を止める。

「一つは、隊長がおっしゃる通り。そもそもデタラメなのだから、確固たる証拠なぞ出せない」

「そうだな」

そこまで言つて、クロヴィスは雑誌のページをぱらりとめくる。そのとあるページで目を止め、どちらかと言えば自身も都市伝説側に当たるであろう機密部隊、その老兵はふっと笑う。

「もう一つは、恐ろしい真実がいくつもの偶然により世間に漏れだしたものだ」

「……なるほど」

その陰謀は、真実である。だが、それは幾重もの規制や隠蔽をまぐれにもすり抜けてきたため全体のごく一部であり、証拠などというものも提示する事はできない。

そもそも、自分達のMO手術という技術もテラフォーマーという生物も、そのごく一部が表社会に流出してしまえば立派な都市伝説と化するだろう。

「さて、それを踏まえた上で」

「ん？」

クロヴィスが浮かべる、単純な笑みとも違う、何か含みのある表情。それを見て、俊輝は何やら不穏な気配を感じ取る。

「これは、どちらだと思いますかな？」

雑誌を広げ、俊輝に特集のページを見せるクロヴィス。そこに載せられているのは、一枚の写真。

人が無理やり別の生物と融合させられたかのような謎の生物。角が生え、その顔は人間と魚のようなものが混じり合ったかのような異形で、腕は一本しか無く、頭部からは触手のようなものが6・7本生え……人間との相違を挙げていけばきりのない、だが元が人間なのだと思わせる、目を逸らしたくなるようなおぞましい何かだった。

U—N—A—S—A本部より数百キロ離れた洞窟を、五人は進んでいた。

ここは、U—N—A—S—AがMO手術の実験の為に使用していた人口の洞窟である。その機密を守る為に内部は入り組んだ構造に作られ、迷えばもう戻れない、と言われている。

とは言っても、研究が行われていたのはもう十数年も前の話で、いくら機密性の高い場所と言っても森林の奥にあるこの場所はあまりに交通の便が悪かった。

その為、この洞窟は既に破棄され、今では封鎖されている。

では何故彼らはこの場所に来ているのかと言えば、それはある事件を調査しているからだ。

U—N—A—S—Aでも最高本部の一部にしか知らされていない、重大な事件の。

それは、遠くないうちに一般人の前に姿を現し、大きな問題となるかもしれない。世界的な問題へと発展する事も考えられる。そうならない内に。まだ犠牲者が数人で済んでいるうちに、これの原因を突き止め、それを始末する、もしくは。

……可能であれば、生きてまます確保し研究、利用する。

その為、彼らはここに送り込まれていた。彼らの腰に取り付けられたホルダーには、各々の『薬』が、その手には、銃器が握られていた。彼らは、MO手術を受けたU—N—A—S—A最高幹部直下の精鋭部隊だった。

第7特務のような実力はあるが犯罪者揃いの集団では無く、素行の良さと実力の両方を備えた、一般の任務にはおいそれと出す事はでき

ない、高難度の任務で本当に信用のおける部隊が必要になった時だけに動員される虎の子だ。

そんな彼らは、慎重に周囲を見回しながら進む。既に破棄された洞窟ではあるが、報告のあった地点から推測するに、この場所が発生源である可能性が極めて高い。いつ戦闘が予測されるかわからない。

緊張感を保ったまま、渡された地図を頼りに、最奥部への道を進む5人。

地図の通りであれば、あと100m程歩けば最奥部、かつての研究施設であつた、今は設備の全てが撤去された大広間に辿り着く。

それが、どのようなものであるのか。その正体にまでは、UNA SAは辿り着いていない。一度それが分析にかけられ、結果が出た事はある。しかし、それは、明らかに……

「……！」

「これは……！」

そして、最奥部、大広間の光景が彼らの目の前に広がった。

半径300mほどの円形、高さは推定20m。その広大な空間。その床面を、壁を、天井を。

———肉でできた根のようなものが幾重にも積み重なり、覆っていた。

そして、その部屋の中心には、1人の女の子……？ が座していた。

暗い洞窟の中をライトの光のみで照らしているため、それが本当に人間であるのか、わからない。

部屋の中をライトで一通り照らした際に一瞬、映りこんだものであるため、この光景への恐怖が生み出した幻覚かもしれない。

もう一度、その女の子が映った場所にライトを当ててみる。

……今度は、正確にその姿はライトに照らされ、彼らの前に現れた。年齢で言えば6歳か7歳ほどの、幼い女の子。特に髪型は整えられていない長い金髪に、身に纏っているのは、長い布をそのまま巻き付けたかのような、現代では見られない衣装。

眠っているのか死んでいるのか、光を当てられても目を閉じたまま反応は無い。

その容姿を見て、5人は思わず息を飲んだ。

美しい。その女の子は、あまりにも美しかった。性的な欲求を覚えなければいけない。

それは、どちらかといえば、完成された芸術作品を見た時のような感覚であった。人間という生物の美を凝集したような、そんな何か。

だが、同時に。その女の子から発せられているのか、この異常な空間そのものが纏うものなのか、五人は得体の知れない、気味の悪い感覚に襲われる。

何かが致命的にずれているような、不快な感覚。

この5人の命運は、ここで決まった。

この空間の異常を見たこの瞬間に、これ以上調査などしようと考えず、迷わず退避を決意していれば。この女の子に銃を向け、ハチの巣にしていれば。

2人か3人は、正気かはともかく命だけは助かったかもしれない。

「わ……は……ま……ま……」

小さな、歌うような、吸い込まれるかのような声が、4人の耳に入り込んでくる。

そう、4人。もう一人は、どこに行ったのか。

彼らは慌てて周囲を見回す。先ほどまで確かにいたはずの仲間。

その姿は、どこにも見当たらず。

「そ……て……わり」

何だ、これは、一体、何だ。

その小さな歌と共に4人の耳に入り込んでくるのは、何か柔らかいものが千切れたような、そんな音。

「そして しゅいしや」

はつきりと、3人の耳にそれは入ってきた。

そう、3人。

「——!!」

女の子が、目を開いた。それは、3人の存在に気付いた、というよりは、ただ自然と目を覚ました、という様子に近い。これまた宝石のような、溜息の出るほど美しい、碧の目。

この瞬間に、女の子では無く、その周囲に注目していれば。

もしくは、何も見ずにただ全てを忘れ、出口に向かって全力で駆け抜けていれば。

1人なら、正気を失ってもう戻れないだろうが、命だけは助かった可能性も、1割ほどならあったかも？

女の子の体が、薄橙に染まる。頭からはまるで王冠か何かのように4本の透明な触手が生える。体内に、人工物の光が2つ、灯る。……とはいっても女の子がロボットか何かなのかと言われればそうではなく、彼女本人は紛れも無い生命体で、その光は体内に埋まっている何かが発している様子であった。

赤と青、太陽と月のようなその輝きに目を囚われた3人は、結局気付かなかった。

無数の生き物が、根から生え、芽吹いた事に。

「か……う……」

「fねいじよ」

「kjhふえ」

その口は、声を出す。それは、意味など同種の間ですら通らないただの音だが。

その手は、同胞を求める。犠牲者、と訳した方が正確だろうか？

その脚は、身が朽ちるまで駆ける。まあ、最初から本数が違ったりするのだが。

それは、一言で表すならば、人型をしている何かだった。

だが、その口はある者は人間の顔に存在する感覚器官の全てを代替するかのようには複数形成されていたり、そもそも無かったり。

その手は、1本だったり2本だったり3本だったり。時々、節のある甲殻のような腕だったりもふもふの肉球がついた手だったり。

その脚は、これまた本数がバラバラだ。ぴちぴち鱗が跳ねていたり、水掻きが付いていたりとこれまた個性に満ち溢れているが。

共通するのは、頭から生えるまばらな数の触手と、その乱雑に混ざり合った異形をもってしても体全体と比べて不調和な異物のように思える、背から生えた無機質な印象を与える多面体。

そんな生き物が、数十匹。肉の根から生え、それを引きちぎり、数も形も様々な目で3人を同時に見つめる。

「総員撤た——」

残った3人のうちの1人、隊長がその光景を見て慌てて指示を出す。

が、それを最後まで言い終える事は無かった。

異形の生物の内の一匹が、予備動作も無しに鱗に覆われた口から水を吐いた。それが正確に隊長の心臓を射抜いたのだ。

異形の生物達は、あるものは背に生えたぼろぼろの翼で飛び、またあるものは壁をはい回り、近づいてくる。

残る2人は、対照的な行動を取った。

1人は、洞窟の出口方向へ向かって駆けだした。

もう1人は、銃を取り出し、その空間の中心に佇む少女に向かってそれを弾丸の続く限り撃ち続けた。

行動は対照的だが、同じ所も二人にもあった。

「あはははははあははははあー！」

「あはははははははははがはっはっははは」

そう、この時、精神性に関しては同じようなものだったのだ。

「♪」

鼻歌を歌いながら、青年は洞窟を奥へ奥へと進んでいく。

彼の上機嫌も、今は当然の事と言えるだろう。

彼の今の状況と同じ状況に立たされた時、それが喜ばしくないと思う人間は、そうはいないはずだ。

「なんで……なんで……おれ、こんなに………こんなところで……」

目的地まであと少し、と小躍りでもしたい気分になっていた青年の足に、縋りつく人間が一人。

息も絶え絶え、と言った調子で、青年の足を掴むその力も、今にも尽きてしまいそうな程に弱い。

「うーん、助けてあげたいんだけどねえ」

それを青年は観察し、無表情で分析する。

「たぶんこれじゃ無理かなあ」

青年が目を向けた10メートルほど先の洞窟の奥、そこでは、今足に縋りついている彼の腰から下を齧る異形の生物の姿があった。

「ふむ、普通なら死んでるんだろうけど、正気を失ったが故、か………面白いなあ……長生きしなよ」

上半身だけになり、それでも青年に縋りつく彼を引き剥がし、青年は奥へと進む。

そして、最深部。

青年は、肉の根の海をかき分け、目的地へと向かう。それは、その中心に座す女の子。

「暫く見ない内にかわいくなつたなあ………」

ほう、と恍惚の息を吐き、青年は女の子の脇を両手で掴み、抱き上



げる。

それと同時に、凄まじい重量物が青年の腰に襲い掛かる。女の子は、ひとときわ盛り上がった根の上に座っているのではなかった。

根そのものが、彼女の腰から生えていたのだ。

「……………」

抱き上げられ、女の子は短く声を発しただけで表情を変えず、じつと青年の顔を見つける。

洞窟の壁や天井をはい回っている異形の生物達は、青年の姿をしっかりと捉えているが、敵として認識はしていないのか、攻撃を仕掛けるような素振りは見せない。

「ほら、外に連れて行ってあげよう……………ここは空気が淀んでいて体に悪いからね……………あと……………UとTだっけ？ お腹の中も整備しないとね」

「……………」

青年の言葉に、女の子は一度首を縦に振る。

それと同時に、腰から全方位に伸びていた根は全て体から抜け落ち、人間の普通の足が姿を現す。

「……………もうこんなに制御できるようになったのかい？ 偉い子だなあリンネは！」

「うん」

「素晴らしい、流石は」

無表情を保つ女の子、リンネは少しだけ嬉しそうに、こくりともう一度頷く。

それに満足げな青年は、リンネを抱き上げたままぐるくと回る。

そして、お揃いの一枚布で作られた衣装、トーガを身に纏った二人は、そのまま洞窟の出口に向けて歩いていく。

「私の娘だよ」

U—N A S A 防衛戦まで、後■日。

## 第65話 奈落の宣戦

「これをふー、ってするんだよ、■■■■」

夢を見ていた。そう、これは夢だという自覚があった。

暗い部屋の中で一人の男の人がケーキに蠟燭を立てながら私に笑いかけてくる。

私を見る夢は、いつもそうだ。嫌な夢ほどその中で夢という自覚は無く起きるまで恐怖や悲しみに苛まれるし、幸せな夢ほどそれは虚構なのだという自覚が意識に有りそれに耽る事はできない。

もう一人、豪華な料理をテーブルに置いた女の人が、私の頭を撫でてくれる。これが全て幻なのだとわかりつつも、私は幸福と喜び、少しの照れに目を細めて頭をくしゃくしゃとかき混ぜるその手を押しつけようとする。

「やめてよ、私もう20になるんだよ……」

ふふ、と笑い、女の人は私の頭から手を離れた。ああ、やめてしまふんだ……と自分で拒絶しておきながら少し寂しくなる。

何でなんだろう。

「さ、準備ができたよ」

ねえ、何で？

嫌だ、わかってる。これでこの夢は終わりなんだ。嫌だ嫌だ！

突然泣き出した私に、慌てた様子で寄ってくる二人。

まるで、幼子をあやすかのように抱きしめ、この場面そのものである、その言葉をかけてくれる。

ああ、何で貴方達は私を置いていってしまったのですか？

そして、何で――

「お誕生日おめでとう、エリン」

薄暗い病室で、私は目を覚ました。視界に広がるのは、飾り気の無

い天井。それと。

「おはようっす、エリンさん！」

私のベッドを取り囲むように立つ、7人の異形だった。

ああ、何で。これが現実で、あれが夢なのでしょうか？

ベッドの周囲を取り囲む7人。夢から覚め、ぼんやりしていたエリンに、じわじわと入り込んでくるその現実。

皆、出会った事も無い初対面の人間だ。それが、普通は入って来られないであろう夜中のU—N—A—S—Aの病棟、その一室に入ってきている。人見知りの彼女にとって、それがまず何よりの恐怖。

さらには、直接命を取り合う血生臭い世界とは縁が無かったエリンにも感じ取れる、歪な気配。

「……ああ、説明も無しにごめんなさい！ 私、『槍の一族』シウエイ当主、希？！  
ヴァン・ゲガルトと申す者っす！」

そこに居並ぶ皆より一步前に出た、スーツを着た女性がこの静まり返った病室に似合わない自己紹介をする。

槍の一族。俊輝達から聞いていた、彼らが追う事件のあちらこちらにその痕跡が伺えるという、そして、あのデータの元々の持ち主なのではないかと考えられていた組織の名前。

それが、今この場所に現れた。

これが何を意味するのかわからないエリンでは無い。ローマ連邦、そしてその裏にいる一族という彼らと敵対しているらしき集団が欲するデータを、エリンは盗み取った。その報復に来るのは、当然と言える。

「あ……いや……」

氷が融けるかのように恐怖がこぼれ出し、悲鳴を上げようとしたエリン。だが。

「ン……煩いガキは嫌いだよ……」

エリンの頭を掠めるように、槍と呼べるサイズの巨大なフォークがベッドに突き刺さる。

「ひうつ……！」

上げようとした悲鳴を引つ込めたエリンの目に映ったのは、赤毛の少女だった。きらびやかな、赤色を基調とした衣装を身に纏い、エリンのベッドに突き刺したフォークとこれまた長剣と呼べるサイズのナイフを持った少女は、熱に浮かされたような瞳でエリンの全身を見回す。

エリンは少女を見て、震えを隠せなかった。これまで何度も見てきた、裏の仕事の依頼人、彼らの時々が瞳の内に宿すもの。

それは、命を刈り取る事に躊躇を持たない、それどころか楽しみを覚えてさえいる人間のものだ。

「……やめなさい、エスメラルダ。次は貴女の首を落とします」

本能的に命の危険を感じ取り、身をすくませたエリン。だが、その狂気の標的はすぐに移り代わった。エリンの頭のすぐ横に突き立っていたフォークは、付け根の部分を切断されたのだ。

赤毛の少女、エスメラルダはエリンから動作の主へと目を向け、殺意を滲ませる。

そこに立っていたのは、和装の少女。丈の短い着物に、その手に握られているのは、小柄な身に似合わぬ太刀。

エスメラルダとは対照的な、湖面に映る月のように静かな瞳はただ目の前の味方であるはずの殺人鬼を映すのみ。

「貴女もおやめなさい、今この場で争っている暇は無いでしょう」  
そんな二人の仲裁に入ったのは、片眼鏡に白衣といういで立ちの青年だ。

研究者然とした服装の、片眼鏡以外はあまり目立たない地味な印象の彼は、強引に二人の間に割って入り、距離を開けさせる。

「おお……この少女が、おお……」

その争いに関せず、エリンを見つめしきりに頷くのは、ふくよかな体形を修道服で包んだ大男だった。

服装の端々からある程度位の高い聖職者である事が伺えるが、その瞳はどちらかと言えばエスメラルダのそれに近い色を宿している。

「ふふーん、皆さん子どもなんですから！　もう少し私みたいにお行儀よく静かにするべきです！」

そんな彼らの様子を見てえっへんと薄い胸を張るのは、暖かそうな黒の毛皮のコートに身を包んだ銀髪の少女。

どこから持ってきたのか、体の所々に点滴が繋がれているのが印象的な彼女は、エリンにはそこまで興味が無い様子だ。

「……んう……」

立ったまま希？にもたれ掛かり、そのズボンを掴みながら寝息を立てる、小さな女の子。

目立たないその姿は、今の動揺しきっているエリンの意識から外れるのが当然と思われる。

だが、夢うつつな状態でありながら周囲の異常な人間達に劣らずその存在感をエリンに与えているのは、他よりも一層強い不気味な気配。

「夜分遅くに失礼、我々是我らが主のご意思によりここにいるつす」

周囲の混沌とした状況を収めるのは諦めたのか、希？はエリンの顔を覗き込んで、ゆつくりと落ち着いて話を始める。

「主……？」

動揺と恐怖に支配されながらも、エリンは希？の言葉、その一つを反復する。

先ほど、希？は自分の事を当主、と言った。しかし、今ここにいる集団は希？を含め別の、上にいる人間の意思で動いている、そのように読み取れた。

「その辺りは面倒なのでパスつす！　それで、私達が今日ここに来た

のは他でもなく——」

もうダメだ。エリンはその時点で、自分の死を直感した。ここで、せめてもの抵抗とばかりに暴れてやるか。

それで助かる可能性など当然ゼロだろうが、騒ぎを聞きつけて人が集まったら仇くらしいは取ってくれるかも……？ などと考えるエリン。

「あ、話は静かに聞いてほしいです。……隣で寝てるお姉さんの命が惜しいなら、ね？」

一瞬、希？の眼に邪悪な色が浮かぶ。その意味を一瞬で理解し、エリンは青ざめ、2度、3度、頷く。

そうだった。あまりの状況に失念していた。今この部屋の隣のベッドには、静香が寝ているのだ。

騒いで、起こしてしまったら。この正気とは思えない集団が目的以外の人間をどうするかなど、想像に易い事ではないか。

「あれ、お姉さんというかエリンさんと同年……ああいやどうでもいいです、本題に入るっすよ」

頭に疑問符を浮かべる希？であったが、今は関係無いか、と首を振る。

その、愛嬌のあると言う事もできるかもしれない仕草の一つ一つが、エリンにとっては恐怖の対象だった。

次の動作が自身の首を掻き切る、というものにならないという保証が全く持てないのだ。

表面的に見ればその人格は友好的なそれだ。だが、どこかでひどく不安定なものがある、そのように感じ取れるのだ。

「今日は、エリンさんに皆で……挨拶に来たんすよ」

それは、エリンの想像していたものとは違った。ほんの2日前、第7特務の人間が依頼をしに来た時も、同じような勘違いがあつた気がする。だが、彼らと今日の前にいる集団で決定的に違う部分が一つ。

「……こんばんは」

「今晚は」

「良い夜ですね」

「おお……おお……」

「こんばんは、お姉さん！」

「すう……」

まともな人間など、1人もいないというところである。

いや、第7特務の人間もそれはそれでまともでは無いのだが、今エリンを囲んでいる彼女達は。

決してわかり合えない、わかり合ってはいけない、そんな存在のよ  
うな気がする。

もつと正確に言うならば、もしかしたらわかりあえるのかもしれない、  
だがその背後にある何かの気配が、それを決してわかり合えない、  
というレベルに強めている、そのような雰囲気を感じ取れる。

くつく、くすくす、あははと各々で笑い声を上げている彼女達を振  
り返る事も無く、希?は自分の調子で話を続ける。

「何、で」

今殺されるわけではない、という事はわかった。

だが、へばりついた恐怖の感情が思考をかき乱し、エリンの口が鈍  
る。

「我らが主は、貴女の事を高く評価しているんすよ」

評価? 今、評価と言った? 何を。自分を評価しているのは何な  
んだ?

「……やめて……」

出てきた言葉の意味は、それを口にしたエリンにもわからなかつ  
た。

何に対してのやめて、なのか。

「いやあ、実際に見てみると確かに……中々……いや私には何もわか  
らないっすけど、いい子なんすね貴女は！」

エリンの自分でも意味のわかっていない言葉、それを受け取った希  
?の表情が、へにやつとした笑顔に変わる。

「さて、皆、もういいでしょう」

そこで初めて、希?は他の6人の方へと目を向け、一度手を叩く。



「では、我々はこの辺りで。後日お迎えにあがるつす、エリンさん」  
それだけを言い、希？の姿がかき消える。同時に、他の全員の姿も。悪夢なのか現実なのか、それすら曖昧な、一夜の出来事。それを最後に、エリンの意識は再び闇へと沈んだ。

「……まさか、U—N—A—S—Aが戦場になろうなんてな……」

運び込まれる機材の置き場を指示しながら、俊輝はぼやいていた。敵襲が、近いうちにある。それもU—N—A—S—A、何も知らない多くの民間人も在籍している、ここにだ。

奴らの目的は、はつきりしている。今エリンとノンナが解析しているデータの奪還と、それに加えてのもう一つ、エリンの身そのもの。先ほど聞いた、エリンの話。昨夜に集団で押しかけてきた、『槍の一族』の使徒達。当然ながら、U—N—A—S—Aの警備は深夜であろうと甘いものではない。しかし、それをまるで無いもののように侵入してきた。

一筋縄ではいかない相手だ。いや、最初からわかっていた事ではあるのだが。

「……イマイチ苦手だな、これ」

そもそも人の上に立つ気質ではない、というのが一つと、防衛戦、というものがどうも苦手なのがもう一つの理由。

一応、U—N—A—S—Aの構造は大抵把握している。狙撃ができそうな位置、攻める側にとって効率的なルート、攻め落とした際に仮設の拠点として機能しそうな部屋、施設。

それらを総合的に判断し、防衛線を築く。それも、一般職員には極力知られない形で。

監視カメラがやけに多くなったな、何かドタバタしてるな、くらいは思われているだろうがそればかりは仕方ない。

襲撃の予定は捕らえた敵の人員によれば6日後。だが、その情報が漏れた事は敵も恐らく承知のはず。

これで襲撃が無いと安心した後……という風に決行日を遅らせるか、それとも逆に、といったところだ。

要請した軍の臨時駐留部隊が到着するまで3日。それまでに、軍以外の配置を考えておかなければならない。

U—N A S Aは元々軍事的な施設では無いため、常設されている戦力と呼べるようなものは軽量の銃器を装備した警備員とアネックス計画に関わった人間や第7特務のようなM O手術を受けた人間に限られてくる。

建物の周囲はそこまで見晴らしが悪い地形、というわけでもなく、流石に戦車のようなものを持ち込まれる事は無いと思いたいが、そこは相手がどんな無茶をしてくる集団かわからないため、一応、念には念を入れて考慮に入れておく必要があるだろう。

「さて……後は、つと」

書類を持ち、俊輝は席を立つて廊下へと出る。お偉いさんにハンコをもらいにいかなければならないのだ。気まずいなあ、とその足の進みは若干鈍る。

つい先日、喧嘩してしまったばかりなのだ。それは、俊輝が提案した病棟の入院患者の一時的避難について、上層部が却下した事について。

U—N A S Aの病棟には訓練中の事故、例の病によるもの、など様々な患者が入院している。この場所が戦場となる可能性がある以上、一般職員と違い迅速な避難が望めない彼らを事前にどこかに遠ざけておいた方がいいのではないか、という提案である。

……そこに、個人的な事情があった事は否定できない。だが、それを除いてでも彼らをここに置いておく事には反対だ。そんな俊輝の意見は、例の病に関して最も研究が進んでいるこの場所以外に離しておいてそこで病状が悪化、最悪の事態が起こったらどうするのか、相手に本格的にこちらが防衛態勢を整えている事を悟られてしまうのではないか、という理由で却下された。

「なあ拓也、暫く休暇でも取ってさ、旅行でも行ってこいよー!」

できる限り明るい声で、表情で、言うように努めた。U—N A S Aに在籍している友人達に、そう声をかけてみた。

だが、結果は伴わなかった。皆が、いきなり何言っただ、などという事は……言わず。ただ神妙な表情で、それを断った。

わかってはいたのだ。戦力として利用できる彼らを、U—N—A—S—Aがこの窮状で手放すわけがないのだ。

だが、と俊輝は未練がましく考える。ここは地球じゃないか。火星を戦場とした、命の奪い合い。彼らの仕事はそんなものじゃなくて、U—N—A—S—Aの各施設での業務、平和的な、人類の未来の為に日々頑張るそれじゃないか、と。

なのに、この仕打ちなのか。また、彼らを地獄へと引きずり込もうと言うのかと。

あらゆる手段を尽くして、彼らをU—N—A—S—Aから引き離そうとした。その全てが失敗に終わった。闇の部隊、などという物々しい肩書であろうと、実情はU—N—A—S—Aの為に手を血に染める末端に過ぎない。自分にできる事など、たかが知れていた。

「ホント、無残なもんだよなあ」

自嘲の笑いを浮かべる。

火星で必死に抗い、罪人と嘲られ、死を与えられる事を承知の上で守ろうとしたものがあった。

地球で築き上げた、彼にとつて何よりも尊いもの。

それが、再びこうして、邪悪に晒されようとしているのか。

自分では、組織に抗う力など無い。ならば、今自分が取れる手段は一つ、だ。

いいだろう、と自身の胸倉を一度握り、覚悟を決める。

そう、覚悟を決めたのだ。彼は。それを――

その日のうちに発揮する機会が訪れる事になるとは、この時彼は予想していたのだろうか？

日も変わろうかという頃合いの夜間、一般職員は帰宅する者、寮に戻る者、それぞれの場所に帰っており、巡回する警備員のライトのみが薄暗い廊下を照らしている。

変化に気付いたのは、その警備員だった。

「なっ——！」

そこに現れたのは、十人ほどの人型の影。それは、ライトにはつきりと照らされ、その正確な数と姿を現す。

武装した兵士が6人と5匹の人型の生物、合わせて11。

「制圧、開始」

「じょう」

兵士を率いる男が、命令を下す。それと同時に、人型の、黒い質感を持った生物が目にもとまらぬ速さで駆け出し、警備員の首をもぎ取る。

「先遣部隊、到着しました。これより制圧を開始します」

「貴様らは彼らを援護しろ、すまない、護衛は頼んだぞ」

男は部隊に指示を出す。掩護、それに従い、人間の兵士達は駆け出した生物の後を追う。そして。

護衛を頼んだ、男がそう指示を出し、それに領き人間の兵士を守るように陣を組むのは。

黒の人型生物、すなわちテラフォーマーの一群だった。

警備員が咄嗟に手を伸ばした警報装置、それはわずかに届かず。監視カメラも、彼らの姿を捉えない内に破壊される。

だが、彼らは気付いていなかった。壁に密かに埋め込まれた、また別の目があった事を。

「隊長、お客さんだよ。あはは……せつかく色々苦労してたのに無駄になっちゃったね」

薄暗い仕事部屋。そこで3つのモニターとそれに表示された大量の監視カメラの映像を見ながら、ノンナは俊輝に通信をしていた。帰ってくるのは、無言。ちよっと怒ってる事が感じ取れたため、すぐ

に通信を切る。

「あの……大丈夫なの？」

「私も……！」

先ほどまで夜のお菓子パーティーに興じていた2人の客人をちらりと横目で、本当に顔の左右に3つずつ形成された目、その左側で見ながら、ノンナは苦笑する。

「静香さん、ステイステイ。怪我人と一般人、そしてボクみたいな弱い非戦闘員はこうして後方待機だよ」

か弱い、と自称するノンナの、白衣の下に透けて見える体。それは黒の頑丈そうな甲皮に覆われ、弱そうな要素は微塵も感じられないが。

「エリンちゃん、ガム取って！ ああ薬の方じゃなくてお菓子の！ これ以上使ったら作業できなくなっちゃうからね！」

もう1人の客人、エリンに食糧供給をお願いしながら、第7特務の過労担当、機械の方面でもシステムの方面でもエンジニア、ついでに研究者、ついでに後方支援全般を担う少女は笑う。

さあ、今回はどんな事になるのかな、と。

「ええ、ええ、これは残業代と特別手当がたっぷり貰えるのでしょね」

眼鏡にパジャマから着替えたカロリーは、早足で指定された場所へと向かっていた。

声に怒りの色が浮かんでいるのは、気のせいではない。

せっかくの仕事終わり、自分の部屋に戻って趣味を楽しんでいたら、突然の敵襲のお知らせである。

そりや怒るでしょうな、という仲の悪い同僚の老人の不快な笑いはともかくとして、だ。

夜に出勤を命じられた事はともかく。普段なら、拒否して布団に潜っている場面ではあるが。

ようやく手に入れた今の職が組織ごと潰れる、などという事があつてはならない。

その体は、銀と黒の混じった体表と細かい毛のようなものに覆われ、額にはノンナと同じ、しかし配置が少しだけ異なる左右3つずつ、計6つの目。

第7特務会計担当兼部隊長秘書は、頭の中で計算をしながら、戦場へと一步、また一步と近づいていく。

その表情は、無表情なりの怒りから、徐々に喜びに近いものへと変化していった。

「本当にもう、次の給料日が楽しみです」

「ところで隊長、私の家は女性がやたら強い家系でしてなあ……私は立場が無かったといえますか」

無線通信を世間話の場に使うな、という返答にもめげず、クロヴィスは話を続ける。

夜に溶け込む黒いコートを身に纏っている彼ではあるが、それでも寒いのか、気を紛らわせるためである。

そんなクロヴィスの手、指と指の間に挟む形で持たれているのは、数本の透明な針のようなもの。

それを、暗闇の空へと向けて投擲する。

何かが、落ちてきた。それは、人間のようだが数種類の生物が入り混じったかのような異形の生命体。

腹に刺さった針、致命傷とは程遠いであろう小さなそれに、しかもがき苦しむそれを足で踏みつけ検分しながら、クロヴィスは再度、空を見上げる。

そこには、群れを成して飛行、あるいは滑空する、同種と思われる生物達が。

自分はハズレを引いたようだ、と苦笑し、第7特務で最も表に出る事のできない男は、針を構えるのだった。

「やれやれ、私は人間相手が得意なのですが……体を動かすのは嫌ですが仕方ありませんな」

さて、と俊輝は刃を構える。目の前にいるのは、一人の人間。何という事はない。ただの、刃物を持つているだけでは勝ち目などなさそうな、小銃と防弾チョッキ、暗視ゴーグルを身に着けた軍人と思わしき人間だ。

邂逅の瞬間、軍人は無言で銃を構え、俊輝へと向ける。

だがその瞬間、彼の視界は俊輝の姿を見失った。……目が潰える事によって。

そして視界の喪失から秒と経たぬ内に、その意識は永遠に失われる事となった。

切り落とした首を見て、俊輝は冷ややかに笑う。

ああ、もう何も感じなくなってしまったな、と。

堕ちてもいい。それで、守れるものがあると言うのなら。いいや、自分という弱者が自分の為に正義を成すには、暗がりに足を踏み入れねばならないのだ。火星でローマ連邦の幹部搭乗員を破り、脱出ポッドを奪い取った時。地球で、その裁きを受けた時。任務で、俺には娘がと泣き命乞いをする標的を……時。

病み痛むはずの心、それすら、融け落ちてしまったのだろうか。だが、それでもいいのだ、と俊輝は刃の血を払い、無線で各隊員に命令を飛ばす。

——『槍の一族』とこの世に生きる人間達、その最初の戦いであるU—N—S—A本部防衛戦は、こうして幕を開けた。

「第一班臨時部隊、出動ってか」

鳴り響く警報、大規模な侵入者を意味する色のランプが光る中、健吾、拓也、武、美晴の四人は廊下の一角に集っていた。

『有事の際のMO手術被術者の参戦義務』。これまで聞いた事も規約で見た事もなかったそれを聞かされたのは、各々でバラバラのタイミングではあるが数日前の事。

俊輝が有給取って旅行でも行って来いよ、という謎の誘いを皆にかけたのは、その後。

なんとなく、察してしまう。今に、何かが始まるのだと。そして、俊輝はそれに深く関わる立場にあるのだと。

「変わったっちゃったよなあ」

「……あんな水臭い奴だったとはな」

「困っちゃいますねえほんとに！」

「……」

それぞれの言葉と、無言の拓也。『薬』は義務を聞かされた際に携帯しておくように、とU—NASA

職員から数個渡されているため、やろうと思えば即座に戦闘に移る事ができる。まあ、そんな危険物を渡しておくほどに切迫した状況なのだろうとさらに察してしまったが。

それはともかくとして、まずは情報を得なければならぬ。このU—NASAに襲撃を仕掛けてきたのが、何者なのかを。

そんな彼らに、いつの間にか近寄って来た人のようなものが、1人。

「おや、やっと人がいた！ ちよつと道をお尋ねしたいのだけど」

4人は、一斉にそちらを振り向く。そう、それは、人間。

「第7特務の寮ってどこなのかご存知ないかな？」



背中に槍を背負い、時代錯誤な衣装、トーガに身を包む青年だった。

## 第66話 U—N A S A防衛戦（1）

「おや……道を尋ねただけなのに手荒いな」

目の前のトーガの青年を相手に、第1班臨時編成部隊がとった行動。それは、それぞれの武器を構え、青年を油断無く見据える事だった。

「……アンタ、どこかで会った事があるか？」

時代錯誤の衣装を身に纏った不審な人物と言えど、この状況であれば援軍に駆け付けようとしたU—N A S Aの特殊な隊員か何かと考える事もできよう。だが、彼らが敵意をむき出しの対応をした理由。それは、何の理由もない、ただ直感に従っての事だった。

——敵だとか味方だとか、そんな次元の存在ではない、生存圏をかけて争うべき何か。

さらには、健吾の一言。それは、拓也以外の3人も同時に考えていた事だった。この気味の悪い、腐肉に手をつ突っ込んだかのような雰囲気。これを、どこかで感じ取った事があるような気がする。

「……」

残された拓也の様子は、3人のものとはまた異なっていた。それは、目の前の青年から何かがいせそうなる気がする、頭痛に近いもの。さらに加えて、3人のものと同じ。そして、それよりも強い既視感。

「ああ、隠すのは無駄なようだ……では改めて、初めまして。いいや、久しぶり、かな？」

無造作に背の槍を抜く。懐から、パッチ状の『薬』を取り出す。

その動作に反応できた人間は、4人の中にはおらず。

「私はオリヴィエ。家名は……君達に名乗るような下卑たものではないのでいいだろう。今回の襲撃の首謀者だよ」

そう屈託なく笑い、名乗った青年、オリヴィエは。

「では、さような……いっふっ」

その槍を目にも止まらぬ動作で4人の内の最も鈍そうな少女、美晴

に向けて繰り出した。

しかし、その攻撃は真つ向から別の人間により止められ、さらにはまた別の方向からの反撃により首に風穴を開けられる。

「……下がってろ」

「……つたく、ホント運ねえな俺ら」

槍を正面から受け止めたのは、拓也だった。変態と同時にその腕力で槍を掴み取り、その威力を殺す。

そこから推定できるのは相手の力。

確かに、相応の力はある。だが、それほどではない。素体となる人間の能力は相当に高い事が感じ取れるが、そのパワー自体はせいぜい、MO手術による最低限の強化、ツノゼミのそれのみといったくらい。

反撃の、拓也の肩を掠めるように繰り出された槍を放ったのは健吾だ。皮肉にも、自身の武器と同じ槍によって致命傷を負う事となったオリヴィエは、血を吐いて体を震わせる。

健吾は、即座に首を貫いた槍を左右に振り、首を切断しようとした。今の状態でも致命傷。死体を損壊させる趣味は健吾には無い。だが、そうしないとまずい、と脳が警鐘を鳴らしている。

「腕を上げたねえ」

健吾の槍は首を貫き、後ろまで抜けていた。だが、刺さっていたはずの首が、いつの間にか健吾の槍からは消えており、代わりに。

「……かつ……」

今度は、健吾の口端から血が垂れる。その胸には、オリヴィエの手に持っていた槍が突き刺さっていた。あと一瞬対処が遅れれば、絶命は免れなかった。

「っ……い」

その命を救ったのは、武による咄嗟の一撃だった。いつの間にか『コガシラクワガタ』の槍から自身の首を引き抜き、健吾へと一撃を加えていたオリヴィエ。その動作はほぼ一瞬の内に行われていた。

しかし、オリヴィエの姿が健吾の槍の先から消えた瞬間に反撃が来ると踏み、それを阻止するために武は拳による一撃を繰り出したの

だ。

結果としてそれそのものを阻止する事はできなかった。だが、それは戦友を救う事に繋がり、さらには反撃の機会を与える事にも繋がる。

「退け二人とも！」

拓也の声に反応し、二人は一步背後に下がる。武の一撃はオリヴィエの腹を正確に狙っていたが、オリヴィエが槍から離れた左手によりそれは防御されていた。だが、有効打にはならなかったとはいえそれによつてオリヴィエの対応に一瞬の隙が生じる。

拓也は、二人が離脱したのを確認し懐から一本の投擲具を放つ。それは、彼の専用装備ではなかった。

楔型のそれではなく、クナイ型のそれはオリヴィエの肩口に突き刺さる。

一泊おいて、オリヴィエがそれを引き抜こうと手を肩に当てた瞬間、拓也の手とクナイの刺さったオリヴィエの肩、その間に光が一本走る。

衝撃で跳ねるオリヴィエの体。だが、その瞳はまだ生気を失っておらず興味深そうに4人を見つめる。

それを睨み返し、拓也は舌打ちする。本来のそれであれば肩を持つていったものを、と。

対テラフォーマー受電式スタン手裏剣『レイン・ハード・レプリカ』。アネックス計画第5班班長、アドルフ・ラインハルトの専用装備を模倣した武器。

拓也の元に突如としてこれが届けられたのは、つい先日の事だった。UNASA内部便であるという事以外は差出人不明。同梱されていた説明書の最後に『貴方の親友から愛を込めて♡』などと冗談めかして書かれていたが何の事やら。

兎に角、元の経歴が経歴であるため武装など当然用意されていない。拓也にとっては、有事の際にも味方を巻き込む事なく電撃を放てるこの装備はありがたいものであった、が。

どうにも、わざとスペックダウンさせられている気がしてならな

い。それは、武器が悪いわけではない。拓也の元々の専用装備『雷機雷』と今使用している装備のコピー元『レイン・ハード』ではそもそも運用を想定した手術ベースが異なるのだ。

2種に共通するのは、電気を誘導する機能。差異は、それ以外の多数。

電気信管で作動し内部の少量の爆薬が炸裂し、さらには毒液を仕込む容器を内蔵する『雷機雷』は電気以外の部分でも大威力である代わりに多機能で高価、さらには使い捨てとなる。これは生物を即座に殺傷できるほどの電気を放てず、毒液や筋力による投擲といった能力を持つゴビサバクオオチョウムシに適応させた結果と言える。

一方の『レイン・ハード』は構造自体はシンプルな、クナイ型の投擲具に導雷機能を付けたそれだ。だが、その形状は素でも高速の投擲、さらにはレールガンの原理でのテラフォーマーでさえ回避困難な速度の射出を可能とし、刃の部分自体の貫通能力という点でも『雷機雷』に勝っている。さらには、拾うだけで再利用が可能。重量も雷機雷と比べて軽く、多数を携帯できる。これは、高い放電能力を持つデーンキウナギの能力と組み合わせる事で真価を發揮するものと言える。つまりは、生物を容易く殺傷できる強力な電気を放つ事を前提に設計されているレイン・ハードは、そこまで強い電気を生成できないゴビサバクオオチョウムシという手術ベースにはイマイチ合わないのである。

「ああ……肩こりが取れそうだよ」

オリヴィエは起き上がり、肩を揉む。その首に付いた貫通痕はじわじわと塞がり、肩の電撃による焼け焦げたような損傷も、徐々に元の姿を取り戻していく。

『葉』から察するに、哺乳類型。力が強化されている様子は殆ど無く、代わりに再生能力？

頭を回転させるが、次々と疑念が浮かんでくる。傷を押さえ武の背後に下がった健吾は、一度戦線離脱したなりに敵の詳細を突き止めようとする。

「どうしたかな？ コレがそんなに珍しいかい？」

長期戦は不利だ。こちらに再生能力持ちは拓也しかない。しかも、以前聞いた所によると、電気を使用するのは己の身を削る行為なのだという。火星で拓也が体に付けていた、電気による体への悪影響を和らげるための安全装置。それが、今の拓也の体内には存在しないのだ。

長期戦になればなるほど不利だ。首に風穴を開けて、電気で肩を焼き、それを再生される。

相手の再生能力がどこまでなのかはわからない。手足の完全な切断は再生できるのか。頭を切り落とせば死ぬのか。しかし、わかる事もある。それは、オリヴィエに対する奇妙な既視感、その正体と言えるもの。

この能力は火星で戦った男、マルクと同一のものだ。あの時も、健吾は相手の首を貫いた。そして、相手はその風穴を再生した。その過程は、再生の速度、その様子はそれとそっくりなのだ。

再度、オリヴィエが準備運動だとも言いたげに一步前に踏み出す。拓也と武が構え、それを迎え撃とうとしたが。

「じゃあ、まず一人」

見据え、目を離さなかったはずの敵は、拓也と武の構えた防衛線の後ろに立っていた。まるで瞬間移動したかのような動きに、対応が遅れる二人。オリヴィエはその槍を、腹を押さえる健吾の右眼めがけて繰り出す。

「……あなた、おかしいです」

オリヴィエの攻撃は、中断された。それは、防衛線を抜けられた2人でも健吾でもなく、最後の一人がオリヴィエに躍りかかったからだ。最初にオリヴィエが無防備だと判断し始末しようとして攻撃し、その後は気に留めていなかった少女は。

全身を強固な装甲のような鱗で覆い、美晴はオリヴィエの心臓に向けてその手を、MO手術ベースとして攻撃に転化できるようにデザインされた刃のような鱗の固まったそれを向ける。

「イカレてますよ、この人」

それを腹に受けたオリヴィエの皮膚は破れ、血がトーガに滲みだす。だが、それすら気に留めない様子で健吾から標的を変更し、美晴へと槍を放つ。だが、それは角度を付けて受けた鱗によって弾かれる。

正面から殴り合えば、戦闘向けのベースであるにも関わらず本人が弱い事から非戦闘員カウントであった美晴では数秒と持たない。だが、逆に言えば弱い人間の体であろうとオリヴィエ相手に数秒持たせるだけの恵まれたベース。

それを最大限に活用し、美晴は他の3人の参戦する時間を稼ぐ。

健吾の槍が、背に向けたオリヴィエの脇腹を刺す。だが、直後に再生。

拓也の再度の投擲からの電撃が、その身を焼く。だが、心臓や脳といった絶命を狙える器官には当てられず。

武の打撃も、通りはする。だが、骨を砕く一撃は、すぐさま再生が行われる。

美晴の示した、明らかな嫌悪感。その意味を、健吾はオリヴィエの身に宿す生物と同時に察した。

なるほど、それは確かに、と。

マルクとオリヴィエ。両者に適合し、殆ど同じ効果が生じる生物。

詳しい関係性は不明だが、恐らく同じ組織に属しているであろう別人の2人に施せる、恐らくは適性を得られる人間の幅広さ。

わかった。わかりはしたが、それがわかった所で殺せるのか。

健吾は痛む体を引きずり、オリヴィエの槍を押し返す。

特別な能力も無しに4人を相手に互角以上に立ち回る身体能力。

おぞましい気配、だがその中に残り香のように感じ取れるのは、確かな同種の気配。

この生物は、最強の生物に名乗りを挙げる事ができるだろう。

そして同時に、最弱の生物とも時に言われるだろう。

前者。地球で覇を唱える絶対的存在だから。

後者。己が身一つでは、それはあまりに弱いと考えられているから。

大きな体を持ちながら、格下と見て利用する動物にも敗れる鈍重さ。

他の生物では当然の環境に生身一つでは適応できない弱弱しさ。そう嘲られる生物は、ああ、だがしかし！

増え、築き、支配する。他の生物を。彼らよりはるかに強い、巨体を。牙持つものを。そして、同族さえも。

生み出す。住居を、食物を。武器を。他には許されざる権能、雷や神の炎、太陽そのものを。

……わかっていた。MO手術を施す際に、生物との適合性が重要であるならば、これが最も適した生物なのだ。だが、その生物を手術ベースにする事が全くの無意味、本末転倒である、という事も。

しかし、それが無意味ではない、という事が証明された。……ならば、それを持ちいるのは、自明の理。

「ああ、ああ、楽しいね、面白いね、人間諸君……もつと見せてくれたまえ、その命の煌めきを！」

ただ、その空虚の瞳を輝かせ、4人を見つめる。

その姿は、正に『人間』という種族を極めた王の一人、それに相応しいものであった。



オリヴィエ・G・ニュートン

国籍：？

■ ■ 歳 190 cm 97 kg

♂

専用装備：対生物コーティング式西洋槍『ペルペトウウム・ロンギ  
ヌス』

+

脳神経接続型量子通信装置『定足感知』

MO手術”哺乳類型”

発生初期胎芽

ニト

## 第67話 UINASSA防衛戦(2)

貴方が泥からソレを生み出したのであれば。

貴方が、罪を背負ったソレをそれでも愛しているというのであれば。

彼らと同じ、しかしそれと同時に彼らとは違う形で泥から生まれた私に。

ああ、どうか。

貴方の座るその席を、くださいな。

MO手術。テラフォーマーの持つ臓器、免疫寛容臓モザイクオーガンによって、他の生物の持つ力をヒトの身に宿す施術。

研究者達は、多くを夢想した。寿命が尽きようとも、不死鳥のように転生する能力。身が千切れようとも、失ったそれを取り戻す能力。病魔を跳ね除ける能力。数えていけばきりのない欲望。

それに、同族を用いるという思考が無かったのは、ヒトという生物の最後の良心だったのか、それともただ利便性に気付かなかっただけなのか、それは考えるだけ無駄な事だろう。

ヒトは、発生から誕生までに生命の進化の歴史、その全てを再現すると言われている。

それは勿論、最初は単独の細胞である受精した卵から分裂を繰り返し様々な器官が分化してヒトという生物の出来上がっていく過程を原始生命から複雑に進化していった生物になぞらえただけの詩的な表現であるが。

彼らは、知識として持ちながらもそれをMO手術として用いなかった。そのヒトが分化していく最初の段階、先に語った進化の歴史で喻えるならば生命の初期段階、母体の中で目覚めを待つだけの未成熟なそれが、完結した生命として産み落とされ、成長していくヒトでは体内にわずかに残すだけで失ってしまう、神の権能と呼ぶべき力を。

「分化多能性、ですね？」

「ご名答」

ぐじゅりぐじゅりと効果音を付けるとすればグロテスクなものが似合うであろう、オリヴィエの体内から肉が湧き出し、傷口を埋めていくような再生。

その回答、その一端を美晴は呟く。

分化多能性。人間の胎児の体の一部が、さらにそれ以前の段階の一種の細胞が有する、ヒトという生命の根源の能力。

それは、体を構成する、ごく一部を除いたあらゆる種類の細胞に分化する事が可能、というもの。

ただの一細胞から多種多様な器官、臓器を形成しヒトとして誕生するため、当たり前前の機能。

それを、目の前の完成した人間は体内で乱雑に行使している。

「……じゃあ、何度もぶっ殺すしかねえって事か」

「アレはダメです、たぶん、生半可じゃ殺してもキリがありません」

MO手術による再生能力は、寿命を縮める。高速の細胞増殖によって失った部位を取り戻しているだけで、度重なる増殖は細胞に負担を与えるからだ。幾度と繰り返し、体が疲弊しきれば、再生も止まる事になるだろう。

だが、その機能を持つ細胞が有する、もう一つの特徴。

『テロメアの再生』。

増殖するたびにすり減っていく、染色体の砂時計、テロメア。その細胞は、このテロメアを無尽蔵に修復する事が可能なのだ。

即ち、MO手術のリスク、使用のたびにすり減る寿命、というものを完全に無視し、無限に等しい再生能力を有している。

オリヴィエの振るう槍が、避け損なった武の肩に刺さる。

攻勢に出るために隙を見せたオリヴィエへの反撃は、容赦無くその首の骨をへし折った。だが、それも即座に元通りになる。

全身に広がった幹細胞による再生。これは、アネックス計画第5班班員、エヴァ・フロストの『プラナリア』の能力と同じ系統のものだ。そもそも、言ってしまうえば、殆どの多細胞生物は発生初期段階でこの幹細胞が発生している。では、何故彼らはオリヴィエの宿すものが、『ヒト』であると気付いたのか。

「……拓也！」

「……ああ」

オリヴィエの槍を潜り抜けた健吾が、その体に肉薄する。そちらに意識が向いた隙を突き、オリヴィエの目に向けて拓也の放った毒液が襲い掛かる。

目を瞑ったオリヴィエ。だが、毒に複合された酸によって、閉じられた瞼が、その内の目が焼け付く。片目を潰した。体内に残り続ける毒であれば、恒久的に視界を奪う事が可能だ。

「ああ、楽しいな」

オリヴィエは、何という事もない、と言いたげに、自身の目を抉り出す。

神経と血が糸を引き、地面に投げ出されたその目を踏み潰し、オリヴィエは目を輝かせる。

『プラナリア』は原始的な生物であり、それ故に高難易度の手術ベースだ。MO手術の先進国、ドイツの技術があらうと、術中死のリスクは高い。だが、哺乳類、それも、手術を受ける人間に最も近い、というか、同種であれば。

「ああ、『薬』をたらふく食べさせて殺す、とかは無駄だから考えない方がいい」

「……！」

狙いを言い当てられ、健吾の顔が歪む。それと同時に、勘の良い彼はわかってしまった。

相手が、何を手術の材料に使ったのかを。

「アメモエ……まさか、自分を」

回答は、無言の笑顔だった。槍の打ち合い、同時に繰り出した槍は、お互いでわずかに届かず。

MO手術を受けた被術者は、元の人間に加えて新たな弱点を抱えている。

それは、免疫寛容臓の損傷と、『薬』の過剰摂取。

他の生物と人間の遺伝子を共存させている免疫寛容臓が傷つき、その機能を失ってしまえば、人間の体は正常な免疫機能により体内に混ぜ込まれた他の生物を拒絶しようとする。

『薬』を使用しすぎれば、ある段階まではその身に宿した生物の特徴が色濃く現れ強大な力を得られるが、度を超えてしまった場合もう人間に戻れなくなる。その末路は、良くて人のままショック死、悪ければ人間大の他の生物に姿を変えての死。

そう、免疫によるショック死。他の生物の因子という異物が体内に入っているが故の弱みだ。

しかし、それが他の生物種では無い……どころか、遺伝子に一辺の違いも無ければ、それはリスクですら無くなる。

「うん、私は人格者だからね、自分のための手術で他人を犠牲にするなんて、とても」

医務担当だった美晴が激しい嫌悪感を示していたのはこれだったのか、と健吾は額から気持ちの悪い汗が流れるのを拭う。

コイツは、自分自身のクローン胚を、自分の手術ベースに用いたのだと。

成程、拒絶反応なんて起こりようも無ければ、適合するのも当たり前だ。何故なら、彼本人は特別他の生物など宿していないのだから。

「ツノゼミは申し訳程度に入れてみたけど、正直これもいらなかったなあ」

素手で健吾の槍を掴み、膝で蹴り上げ、これをへし折る。

手術ベースがどうかとかではなく、生身の戦闘能力が馬鹿げている、と4人は態勢を立て直すため引き下がる。

4対1。本来であれば、圧倒的優勢のはず。だが、それを十分に生かせないのは、両者それぞれの原因があった。

健吾達第一班側は、火星での任務の為不利な状況、すなわち複数人で数十、それ以上、という相手をする為の連携は学んでいたが、1人

を取り囲んでの戦いは十分にはしていなかったのだ。

オリヴィエもそれに付け込むように動いた結果が、今のこの戦況だった。

オリヴィエの生身での戦闘能力はジョセフほど高くない。肉体の強さという意味でも、それを動かす中身の技術という意味でも。多少弱体化したとはいえ幹部搭乗員が1人と戦闘員が2人、非戦闘員とはいえ比較的強力なベース生物を持つ者が1人という相手には、本来であれば不利となる。

「うん、うん……そろそろ飽きてきたな」

言うや否や、オリヴィエは一步踏み出す。それと同時に、その姿は美晴の背後にあった。咄嗟に身を捻り、鱗の鎧の厚い部位で攻撃を受けようとするが、完全には上手くいかず、腹を刺し貫かれる。

「いつう……」

威力がある程度は鱗で和らいだため、致命傷には至らず。だが、戦闘で十分な動きが期待できない程度には深い傷。それに加え、非戦闘員という素の弱さもあり、美晴は倒れ込み、動かなくなる。

素早く槍を引き抜き、オリヴィエは次の目標、拓也へと狙いを定める。

力で槍を受け止める事はできるが、一度槍を通してしまえば、体自体は筋肉があるとはいえ柔らかなそれだ。

喉を狙った上段の一撃は両腕による掴みで止められる。しかしそれを好機とオリヴィエは姿勢を低くして拓也の懐に突っ込んだ。

そのオリヴィエを迎えたのは、蹴りだった。砲弾のような衝撃が腹を打ち、派手に吐血する。だがそれで止まる事は無く、オリヴィエは若干ひしゃげた腹をそのままに、拓也の首を掴んだ。

無尽蔵の再生能力。単純な構造でありながら、その一撃は甲皮を砕く威力を持つ槍。人間という生物の頂点に限りなく近い純粋な身体能力。

これが『人間』だ、と言わんばかりに、オリヴィエは首を掴む力を強め、4人を見る。

それは、相対する戦士達には、下等な動物に頼る下等な動物め、とでも言いたげなように映る。

顔が上向きになる形で首を絞められているため、毒による反撃ができず、電撃による反撃も意識が乱され十分なものを使用できず、もがく拓也。

刃を片方折られ、腹に傷を負った健吾。

傷こそ少ないが、その大柄で大味な戦い方故に今の状況に手出しができない武。

気を失っている美晴。

まずい展開だ。もうあと数秒で拓也の首がへし折られかねない。健吾は焦るが、反撃の手立てを掴めず。

勝利を確信はしているがあまり感慨は無さげに力を強め続けるオリヴィエ。

そのオリヴィエの体に、半透明の液体が降りかかる。

それは、拓也の体の所々から噴出したものだった。

同時に、オリヴィエの体が、手に込めた力が痺れにより緩む。

「……お前ら、任せた……」

ミミズに小水をかけると腫れる、という伝承がある。それは、都市伝説であると考えられていたが。

研究の結果、一部のミミズの背には刺激に反応して毒液を噴出する腺がある、という事が判明している。

そして、ゴビサバクオオチョウムシも、それを有する一種だ。

その隙を逃すほど、彼らは、火星を生き抜いた戦士達は甘くは無かった。

拘束を免れた拓也が身を屈めると同時に、その頭があつた高さより少し高い位置を横薙ぎにするように健吾が残された片方の槍を振るう。

その一撃はオリヴィエの眼を両方同時に潰し、一時的にであるが視界を奪う。

さらに加えられるのは、武によるタックル。



大重量の一撃は、いくつもの骨を砕き、さらには視界が失われた状態で位置の感覚を狂わせる。

「……それで終わりかい？」

しかし、敵はそれで動きを止めなかった。右の手に持った槍が、拓也の首に突きつけられる。

同時に、左の手が武の首を掴む。

反撃は続かず、これで終わり。

オリヴィエの体は、再び再生が始まる。

3対1の結末は、このようなものとなった。はずだった。

「……1人忘れてますよ」

オリヴィエに向けて、最後の1人が、意識を失っていたはずの美晴が、駆ける。

俗説であるが、この生物は死んだふりをして死体と勘違いして集まった獲物を集める。

その身に纏う鎧、刃のような鱗。強力な武器と防具を持つこの生物がそうまでして集める、獲物とは。

「アリみたいに死んでもらいます、この外道！」

MO手術”哺乳類型”『センザンコウ』。それが、彼女の手術ベースだった。

オリヴィエは当然、迎撃を試みる。両腕は牽制と首を絞めているため塞がっている。ならば、残っているのは、足。

「させねえんだよー」

しかし、気合を入れるため、声を荒げる拓也が咄嗟にオリヴィエに飛びつき、これを掴む。対象を失った槍の先を替え、美晴に向けようとしたオリヴィエのその槍を受け止めるのは、健吾の槍。

四肢を封じられ、無防備になったオリヴィエ。

その腹に向けて、美晴は手を伸ばし。

彼女自身の『薬』、パッチをそこに数枚同時に張り付けた。

「…………おやっ」

オリヴィエが、ぽかんと美晴を見つめる。

尽きる事の無い自己再生、それを相手に、生半可な攻撃は通用しないだろう。だが、それと同時に、免疫反応による死が無い事も、健吾と美晴は同時に理解していた。これに何の意味があるのか。槍を、美晴へと今度こそ、急所を狙い繰り出す。

「か…………ふ…………」

血を吐いた。みるみる内に、顔色が悪くなり、生気が失われていく。

「ああ、全く…………頭の良い子は嫌いだなあ…………」

槍を取り落とし、オリヴィエの口から血が流れ出していく。それと同時に体は痙攣し、まともに動く事ができない、という様子。

美晴と健吾、二人の予想は、正しかった。過剰摂取による免疫反応の暴走、それによる死。それは、オリヴィエには存在しない。しかし。

オリヴィエの致命傷。それは、臓器不全だった。

人間の胚が、未分化の何にでもなれる細胞の塊が。逆に言えば、今はまだどの臓器でも器官でもないそれが、母胎というゆりかごの中でしか生きられないそれが、過剰摂取により体の構造に成り代わってしまえば、どうなるか？

体内の、完成した人間の臓器が、ヒトという生物を正常に動かすシステムが、みるみる内に初期化されていく。

「それではね…………諸君」

苦悶の声を上げ、オリヴィエはそれでもと再び槍を手に取る。

しかし、その最期の報復は叶わず。

その頭部は、健吾の振るった渾身の一撃に、拓也の放ったクナイ、それと同時に電撃により、真つ二つに割かれ、その機能を失い、崩れ落ちた。

残されたのは、臓器の殆どが膨大な量な幹細胞に置き換わっているであろう首なし死体。

「……コレ、研究員の人に渡したら喜びますかね」

死んだふり、と言っても今にも気を失いそうであったため、それを必死にこらえながら、美晴は冗談で場を明かそうとする。

笑う気力は無かったが、皆をそれに合わせて表情を和らげる。

火星帰りの戦士達と槍の一族の王。この襲撃の最初を飾る戦いは、こうして幕を閉じたのだった。

「はいはい、動かないで欲しいっすー」

「それをオススメします、皆さん」

誰も気づかなかった。4人が同時に、死の気配を感じ取り、お互いを庇わんとする。

何も無かった場所に突然、空間から溶け出すかのように現れたのは、一人の女性だった。

この戦場と化したU—N—A—S—Aでは不釣り合いなビジネススーツに、腰に付けられたホルスターにはナイフが着剣された拳銃が2丁。それと同時にもう一人、通路の曲がり角から一人の少女が姿を見せる。

丈の短い着物に、太刀を腰に差したその少女は、少し困ったような様子で4人を見つめる。

「おや、被っちゃったつすね、チコちゃん」

「……………」

4人は、硬直した。目の前の2人の漂わせる、一筋縄ではいかない強者の気配、それが理由の1つ。

もう1つは。

「……だから、チコじゃなくて千古<sup>ちふる</sup>、って何回も言っているでしょう、しえいちちゃん」

「……師範代」

その少女が、4人の知人だったから、である。

つい先日、パーティで話をしたり飲み食いをして楽しんだ、健吾の実家の道場の師範代。

やった援軍だ、と喜ぶほど、健吾は呑気な人間ではない。うかつな事を言えばどうなるか、この状況でわからないわけでもない。だが、一つだけ、皆には伝えておかなければならない事がある。

「お前ら、手え出すなよ……この人は、剛大<sup>ウチ</sup>さんの前の日本の幹部搭乗員候補だ」

その言葉を聞いて、3人は駆け出そうとしていた足を止めた。

相手が、最低限でどれだけの實力を持っているのか、わかりやすい尺度を示されてしまったから。

「昔の話ですよ。……ごめんさい、皆さん」

腰の太刀に手を当て、だが同時に、千古は4人に謝る。

その横では、希<sup>キ</sup>?が大きな白い袋に、オリヴィエの死体を拾い集めていた。

「お前……それをどうするつもりだ……!」

確実に死んでいる。生命活動の兆候は見られない。

「主様はああ見えてエコロジー思考のお方なんす、使えるものは持ち帰らないとうるさいんすよ」

忙し気にビニールの手袋をはめ、零れた脳や内臓をかき集めている希<sup>キ</sup>?は構ってる暇は無い、とばかりに4人には目を向けず答える。

「師範代、ここで俺が戦う、ついたら……?」

健吾の言葉に意味は無い。だが、信頼していた人間に裏切られた怒り、それがせめてもの抵抗、という形で表れたものだ。

千古の答えは、何も持っていない左手を前に向け、すつとスライドさせるように横に動かす事だった。

刹那、健吾の首元、甲皮で守られているその部分が横に薄く切れ、血が染み出る。

同時に、千古の胸元の辺り、その体内から鈍い人工の光が漏れ出す。

「あと10センチほど、私が前に出る事になります」

「了解……」

抵抗して勝てる相手ではない、今の状態で挑んだら、皆殺しにされる。その戦力差を感じ取り、健吾は唇を噛んで黙り込む。

「作業終了です、帰りましょうか、チコちゃん……それにしても皆さま、お強いんですね……」

「……ええ。できれば、2度と合わない事を望みます、優しい皆さん」  
言いたい事はあった。だが、それに誰一人として口を開く事はできず、黙って2人がその場を去っていくのを見送る事しかできなかった。

……火星帰りの戦士達と槍の一族の王。この襲撃の最初を飾る戦いは、こうして幕を閉じたのだった。

## 第68話 U—N—A—S—A防衛戦（3）

『へい隊長、次の右の角、その向こうに2人と2匹！ 気を付けてね！』

通信機から聞こえてくる、敵の位置を知らせる声。それに従い、俊輝は薄暗い、警報のランプのみが明かりとなっている通路を駆ける。

彼が現在守りについてるのは、一般従業員寮付近だ。

不幸中の幸いと言うべきなのか、一般職員は既に帰宅している深夜、守るべき非戦闘員が多数いるのはU—N—A—S—A敷地内の寮と病棟。

敵の数は想像していたよりも多くはない。クロヴィスからの連絡で敵に人でもテラフオーマーでもない謎の生物が混じっている、という事を聞いていたがそれも今の所大規模な攻撃を仕掛けてくるという様子では無いらしい。

これは、非戦闘員に犠牲を出さない、という事を勝利条件に考えれば実に容易な戦いだった。俊輝達第7特務や友人達のような火星帰りのMO手術を受けている戦士達が前線に立ち、その数の限られた非戦闘員の集まっている区画を防衛すればいいのだから。

だが、それに加えて守るべきものがある。それが、この戦いの厄介な所だ。

『槍の一族』のデータが詰め込まれたファイルと、それを開く鍵を握るエリン。

下手をすれば、非戦闘員よりもこちらを優先した方がいい、とまで考えられる。

人名よりも尊いものは無い、とは言いが、これから得られる答えを知らずに敵の計画が進んだ場合、結果としてより多くの血が流れる結果になりかねない。

……何故そんな事が言えるのか、と問われると、答える事はできないルートから得た断片的な情報、としか言えないが。

「……………」

曲がり角を抜けた瞬間、そこにあつた人影に刃を浴びせる。噴き出す血、それを目に受けないよう身を反らし、俊輝はもう一人の人間に素早く、もう一本の刃を振るう。

「じょう」

「……久しぶり、つてか」

その一撃は、ノンナが匹、と数えた敵に阻まれた。

火星の生命体、テラフォーマー。火星以来の嬉しくない久しぶりの再会に俊輝は防がれた刃を引き戻し、渋い顔をする。

本来であれば、俊輝の一撃はテラフォーマーの腕であろうと切断できるだけの威力を持っている。だが、実際に振るった刃に込められたのは、標的である人間の首を落とせるぎりぎりの威力だった。

火星で基礎を積み、地球での任務で培われた人間を効率的に葬る技術。それが、この場面では逆に働いてしまったのだ。

俊輝はテラフォーマーの存在を知らなかったわけではない。それはノンナからの通信によつてわかっていた。

想定外だったのは、テラフォーマーがここまで迅速な対応を行つてきたという事。

本来のテラフォーマーの反応速度であれば、意図的に威力を落とし、今の俊輝の攻撃に対応する事はできる。

だが、人間とテラフォーマーが同時に同じ場所に存在している以上、テラフォーマーには何らかの細工がされていると考えられる。

それは、『エメラルドゴキブリバチ』や『アリタケ』のようなMO能力による操作。俊輝の部下にも、それに類する能力を持つ人間がいるため、それに関する資料は持っている。

人間がテラフォーマーに指示を出す、という操作の場合、その操作はそれを行う人間の反応速度に左右される。

操っている人間が命令を出す以上、その動きはテラフォーマーの優れた反応速度ではなくそれをコントロールする人間の能力に依る事となる。

『アリタケ』の場合はオリジナルの能力であればテラフォーマーに

プログラムを打ち込む、というような操作方法のためこれには当たらないが、存在が確認されているこの能力を改良し量産した装置であれば、やはり人間の反応速度が重要だ。

だが、目の前のテラフォーマーに能力で操られている様子は見られない。

首の後ろから生えた菌体、普段以上に虚ろな雰囲気、といったような特徴も無く、このテラフォーマーは人間を庇ったのだ。

あり得ない、とそこまで思考した俊輝は身を屈める。頭上を通りすぎる銃弾と次いで襲い来るもう一匹のテラフォーマーの腕。それを避け、反撃しようとしたその時。

「……君達では力不足です、私が代わりましょう」

声が、暗い空間に響く。俊輝は警戒、敵のテラフォーマー達と兵士は命令に従う様子で、背後を振り向き膝を突く。

そこに立っていたのは、修道服を着た一人の男だった。

肥満ぎみの体を揺らしながらしらずしらずと通路の奥から近づいてくるその男は、テラフォーマーと兵士に向けて逃げなさい、と促す。

その言葉に従い、撤退していく兵士とテラフォーマー。背を向けた彼らを刺し貫くのは簡単だ。だが、俊輝はそれをしない。その理由は、目の前の修道服の男。

ここで兵士を下げ、自らが出てくる自信。武器の類を持っていない所を見るに、恐らくはMO手術を受けているのだろう。

「初めまして、神の子よ。セシリオ・ロドリゲスと申します。以後、お見知りおきを」

「……お前がこの襲撃の指揮官か？」

1対1で向き合い、お互いに言葉を交わす。

俊輝の目に浮かぶのは、これまでに無いほどの敵意の色。それは、彼が敵の指揮官だから。……ではなかった。

「いや、やっぱりそれはいい。……答える、あの時、何故お前達は俺達を殺そうとした」



目の前の男、ロドリゲスを知っているわけではない。俊輝の眼に留まったのは、その修道服の端々の意匠。それは、俊輝の中の最も辛い記憶で見たものと完全に一致していたからだ。

「おお、貴方の事は主よりお聞きしております。ああ、直接あの場に出向けなかった事が残念でならない！」

返答は、ロドリゲスの首に添えられた刃だった。一瞬で間合いを詰め、いつでもその命を奪える態勢に。

それはもはや質問、などと言う体ではなく、尋問に近い。

「もういい、ここで死ね」

その刃が首を刎ねようとした瞬間、俊輝が飛び退く。

「おお、素晴らしい……！」

それは、接近したロドリゲスの腹から突如として飛び出した、針のような槍のような数本の器官が襲い掛かったからだ。

不意打ちであったが、ここまで接近されてまだ余裕を保っていた相手に何かある、と警戒を怠らなかつたからこそその回避。

それを追撃せんとロドリゲスが咄嗟の回避で姿勢を崩した俊輝へと駆ける。

「ですがやはり……貴方もその程度、という事でしょうなあ」

ロドリゲスの目に浮かぶのは、嘲りの色。

再び腹から伸びた槍が俊輝を串刺しにせんと迫る。

「……あの時も、油断してた奴を殺したんだっけな？」

ふう、と一度息を吐き、俊輝は真つ向からロドリゲスへと立ち向かう。勢いのまま止まれず、向こうから槍のへと突っ込んでくるのだ、止まる理由も無いとそのまま突撃するロドリゲス。

その突撃は、びたりと止まった。

「な……に……う……」

ロドリゲスの目に顔に、動揺が走る。ロドリゲスの動きは、何かにぶつかったかのような動作で止まった。それは、俊輝が槍を掴み取ったからだ。

ロドリゲスの重量であれば、本来ならばそのまま押し切れる。だ

が、それができない理由。それは。

「終わりだ、外道」

その針が、金属の鉤爪のようなものでがっしりと掴まれ、強い力で押し返していたから。

俊輝の専用装備、地球に戻ってから新たな専用装備の理念の元さらに強化されたそれが、ロドリゲスの槍を拘束し離さない。

痛覚が通っている部位ではないのであるろう、苦痛を感じている様子ではないが、身を振り逃げ出そうとするロドリゲス。

その姿を逃がさず捕え、俊輝の振るつた刃は肩口から左腕を引き裂き、抉り取った。

次いで、完全に仕留めようと再びその首を捉え、振るおうとした一撃は、駆けてくる複数の足音により中断する事となった。

「ロドリゲス卿！ ご無事ですか！」

やってきたのは、複数の兵士と、それと行動するテラフォーマー。先ほど、ロドリゲスが逃がした兵士とテラフォーマーもそこには混じっている。

なるほど、と俊輝は腕を失いその場に伏せるロドリゲスに侮蔑を含んだ目を向け見下す。

いい部下だ、というのはロドリゲスに対する皮肉だ。先ほど俊輝と戦った兵士は、ロドリゲスが俊輝に及ばない事に気付いていたのだらう。逃げたのは、ロドリゲスを信頼して場を任せたのではない。逆だ。コイツじゃ無理だ、と感じたから、援軍を呼びに行ったのだ。

「お前達何をモタモタしているのだ！ 早くコイツを止めろ！ 急げ！」

先ほどの慇懃無礼な態度はどこへやら、部下を荒い口調で怒鳴りつけながらよろよろと逃げ出すロドリゲス。それに冷ややかな目を俊輝は……ついでに兵士達の一部もそのような目を向けているが。

「ちーとまずいが、まあ仕方ないか」

陣を組み、テラフォーマーを前衛に襲い掛かってくる敵を新たな敵に捉え、俊輝は懐から『薬』を取り出した。

「リンネちゃん、あーんっす」

「……ん」

U—N—S—Aの外れにある廃屋の一室。そこで、希？はリンネの口にスプーンを運んでいた。仲睦まじい姉妹か、もしくは親子のようにも思える二人の団欒、その部屋を彩るのは、部屋の壁を覆い、外にまで広がっている、リンネの体から伸びた肉で構成された根のようなもの。そこから生える、異形の生命体。

「……ん、何すか？」

「……ん」

おかわりを用意しよう、と新しいパツク、フルーツの入ったゼリーを開けていた希？のスーツの裾を、リンネが引つ張る。

振り返った希？に対して、リンネはあるものを指差す。それは、希？が持ってきた白の袋。滲んだ赤で元の色が少ししか残っていないそれに、興味を惹かれた様子だ。

「ああ、あれっすか？ オリヴィエ様の死体っすね」

「……おつかれさま」

「きえあああリンネちゃん喋ったああー！」

「話が、話が違うではないですか！」

穏やかな微笑ましい会話は、部屋に乱入してきた修道服の男によって中断された。

片腕を失いそこから血を流す男は、希？に向けてまくし立てる。

「ああ、残念っすね、ロドリゲス卿」

返答は、いつもと変わらない、笑顔を湛えたままの希？。

「そうそう、あなたに向けて伝言を預かっているんすよ」

「……！ そうだ！ あのお方がこのような事をお許しになるはずが無いー！」

思い出したかのように頬に手を当てる希？に、ロドリゲスは興奮しながらも大きな声で余裕が無い様子ではあるが勝ち誇ったかのように

に希？を睨む。

『君の後任は決まったからゆつくり休んでくれ』だそうっす」

「な……！」

「オリヴィエ様から力の一部を賜っておきながら、この始末……まあ、しようがないっすね」

「お待ちを！ 私は！ 私はまだ！」

ドンマイ、とでも言いたげにぽんと肩を叩く希？。明るいままのそれに、ロドリゲスはある種の恐怖を覚える。

必死に抗弁しようとするが、ロドリゲスの口から出てくるのは、意味の無い言い訳ばかり。

「それでっすね！ 引き継ぎって事で今日は後任の方に来てもらってるんすよ！」

瞬間、場の空気が変わった。ロドリゲスの体に、殺気が突き刺さる。オリヴィエのような人を不安に、不快にさせる類のそれではなく、迫りくる濁流のような、次の瞬間に自分の命が潰えるのだという、心臓が握り潰されるかのような感覚を覚える気配。そして、その殺気の中心にある、ロドリゲスに向けられた好奇の視線。

「！？」

背後を見る。誰もいない。一瞬の、ほんの一瞬の安心を得た直後。ロドリゲスの体は、宙に引き上げられた。

天井からロドリゲスの体を拘束し持ち上げたのは、触手の海だった。数十本はあろうかというそれ、一本一本が力強さをもつそれはロドリゲスの手を足を、首を、締め上げる。

「お慈悲を！ お慈悲を！ どうか、お許しを！」

首を締め上げられてなお懇願するロドリゲスを、希？はもう視界に留めてはいなかった。リンネの頭を撫でようとして押しつけられシヨックを受けているという、ロドリゲスなど既に意識の外に置いた行動だ。

滲み出す血。締め上げられ、軋み、徐々に折れていく骨。

赤く染まっっていく視界に、触手の海、その主が顔を見せる。

瞬間、ロドリゲスの頭に、映像が浮かぶ。

燃える自動車。必死に這い出た自分を見下ろし、口を歪ませる悪魔。これは何だ？ 覚えなどない。ああ、だが、確かに自分が経験した事があるような、そんな、そんな。

「アアアアア———！！」

一瞬の後に全てを思い出し、頭を埋め尽くす恐怖と、もはや逃れられないとわかっていても救いを求める祈りの入り混じった絶叫を上げるロドリゲス。

ケタケタという笑い声が響く。

悪魔の顔は視界から消え、代わりに別のものが視界に現れる。

彼が最期に見たもの。それは、まるでギロチンを三日月状に逸らせたかのような金属の刃が、振り子の動きで自身の心臓に向かってくる光景だった。

「それにしても、ふうん……」

籬の外れたかのような笑い声だけが響く室内。

希？は何か思う所のあるような表情で天井から流れ落ちる血を眺め、どこか羨ましそうに、眩くのだった。

「二度死んだ瞬間の記憶なんて、あるもんなんすねえ」

## 第69話 U—N—A—S—A防衛戦（4）

「要するに、これは反乱なわけね」

「ふむ」

電灯の人工的な光が照らす一室で、二人と一匹は椅子に腰かけていた。

滔々と語るのは、日傘をテーブルに立てかけた若い女性。

それを聞くのは、眼鏡の男性と一匹のテラフォーマー。

業務休憩中の雑談と呼ぶには異物が混じっているその様子に、この部屋に入って来る職員は誰一人としていない。

尤も、理由はそれだけではないのだが。

「新界の分家、上月」。私の「ヴィンランド」の分家、「アポリール」。そして本家「ニュートン」の分家、「ゲガルド」

そこで一度息を付き、彼女、ニュートンの一族に名を連ねる者の一人、ファティマ・フォン・ヴィンランドは不服そうに両手を肩の辺りまで上げるジエスチャーをする。

「ゲガルド……あの連中の一族での位は何とも言えないけれど、他の二つは木っ端も木っ端よ」

「……」

眼鏡の男性、中国軍所属の科学者である雷はそれに対して相槌を打っているが、テラフォーマーの方は終止無言、無動作である。

「上月は頭まで筋肉みたいな連中だしそれこそいつ断絶してもおかしくない小さな家系、アポリールは一族皆変な宗教に傾倒しちやつてるし、一族の面汚し……ってやつ」

「興味深い話があるがとう。しかし、君達の事情をそんなに軽々と我々に語ってしまっているのかな？」

雷の言葉にファティマはそんな事は考えてもいなかった、という表情を浮かべる。おいおい大丈夫かこの協力者は、と少し呆れ気味な雷であるが。

「……なあんて、冗談よ。知った所で、貴方達が何かできるわけでも助けてくれるわけでも無いでしょう？ ただのお茶のお供にしかなら

ないわ」

陰謀に満ちた意地の悪い表情で次いで語るファティマを見て、その認識を改める。

まあ確かにその通りである。

ニユートンの一族は現在、裏切り者の始末に追われているらしい。裏のネットワークでそのような話を聞いていたが、今回ファティマから得たこの情報で何か付け込めるといふほどのものでもなく、かと言って協力してやる義理も無い。最終目的の一步前まで協力、という関係ではあるが、その後どうなるかわかったものではないので、むしろ弱って欲しくらいである。

「そっういえば君」

テーブルに置いてあった菓子をつまみ出したファティマから目を離し、雷はテラフォーマーに話しかける。

ただのテラフォーマーではなく、頭髮に当たる部分が無く、額に一・の形状の模様がある個体。後に〈祈る者〉と名付けられる事となるテラフォーマーの指導者は、雷の言葉に対しても反応を示さない。「君をぶっ倒して自分がテラフォーマーの王になってやろう！　みたいな雰囲気の出たらしいな」

返答が帰ってこないのはわかりきっているが、暇を持て余したが故の独り言だ、と内心で呟き、雷は顎に手を当てて考え、直後ファティマが怒り出す事になる結論を口にするのだった。

「全く、神になるだの王になるだので争って、君達似た者同士なんじゃないかな」

「一人はキツイな……」

一度後退し、俊輝は姿勢を整えていた。MO手術によって得た甲皮の所どころは破れ、血が流れ出している。

白兵戦において高い戦闘能力を誇る甲虫の手術ベース、それを以てしても、複数のテラフォーマーと銃を持った兵士の連携を一人で相手取るには厳しいものがある。

地球に帰ってから、猛特訓と実戦を繰り返して来た。命懸けの戦いを含んだ日々の中でその技量は鋭さを増し、今やアネックス計画の幹部搭乗員にも見劣りしないレベルに到達したと言つても過言ではないだろう。だが、その代償と呼ぶべきなのか、その損失を取り戻す為に修練を積んだだけと言うべきなのか、俊輝は致命的な欠点を抱えていた。

「やっぱ慣れねえなあ……」

血まみれの手で左の眼を触る。

これまでこんな事をしたら、静香は目に血が入ったら危ないでしょうが！ などとでも言ったのだろうか、と俊輝は自嘲とも何とも言えない笑みを浮かべる。

彼の視界の左半分は闇に覆われていた。戯れに、視界に映つていない爪の先でその眼球を突く。こんこんという、固いものに当たる小さな音と共に頭に伝わる細かな振動。

火星での戦いで、その左眼は失われている。今俊輝の左眼を埋めているのは、作りものの瞳だ。

隊長の就任記念にノンナがプレゼントしてくれたお手製の精巧なものとはいえ、それはあくまで外観を取り繕うためのものである。

「やて、と」

急ぎ足の音が近づいてくる。それを敏感に感じ取り、俊輝は思考を打ち切る。

十字路の曲がり角の壁に密着し、相手がやって来るのを待つ。

何という事は無い、慣れたやり方だ。

足音が近づき、それが最も大きくなった、その瞬間。

「よっ……」

それはまるで、偶然知り合いを見つけて手を振って挨拶をするような、そんな感覚。

ひよいと通路に向けて伸ばした手が、その手の凶刃が、首を刈り取る。

「――」

一緒に行動していた仲間の首が、唐突に地面に落ちたのを認識し、



もう一人の兵士が素早く俊輝のいる場所に向けて銃を向ける。だが、一手遅い。

その銃口の先に、彼の同僚の仇はいなかった。

彼の視界に飛び込んできたのは、テラフォーマーの死体。彼に向けて放り投げられたそれは、重量を持つてのしかかってくる。

それを払い、押しのけるのに、約3秒。既に俊輝の姿は消えていた。遠ざかっていく足音を耳にし、兵士は舌打ちする。

また逃した。奇襲により敵の戦力を削り、仲間を呼ばれる前に撤退する。

数で劣る、だが個人の戦闘能力で勝るが故の遊撃戦。

敵はたった一人だ。だが、その一人が捕えられない。

全員で一カ所に固まって行動すれば怖くないのではないか。一度はそう考えたが、その戦略はそこが相手側の本拠地、U—N—A—S—Aだとは思えない爆薬の設置を見てしまった事により変更せざるを得なくなり。

結局は少人数でいくつかのグループを作つての行動、という結果に落ち着いた。

しかし、今彼は同僚を失った事により一人である。

「……………」

周囲を見回す。次の瞬間、その首に先ほど見たあの刃が突き刺さらない保証は無い。遮蔽物の少ない通路とその所々に小さな個室へと繋がるドアがある、という構造のこの場所で、通路にいる人間に向けて身を潜めた状態から奇襲ができるという場所はあまり多くは無いのだが、心理的な圧迫は避けようもない。

「…………… おお、助かるー！」

そんな彼の耳に、また足音が入ってくる。だが、今回は怯える必要は無かった。それは、彼の味方であったからだ。

「じゅん」

救援者、一匹のテラフォーマーはこくりと頷き、彼に医療器具と銃の弾薬を手渡す。

彼はそれを受け取り、テラフォーマーに向けて親指を立てた。

「ありがとな、戦友」

「警戒を怠るな！」

一方、俊輝は小部屋の中から敵の一団を覗いていた。

テラフォーマーが3匹と兵士が3人。その中の一人が指示を飛ばしているのを見るに、コイツが少なくとも現場の指揮官なのだろうと俊輝は判断する。

これを潰せば、指揮系統が混乱する。その隙に乗じて、施設に散った兵を狩ればいい。

問題は、タイミングである。

散っている兵士に、指示が途切れた場合ここを襲撃しろ、などという命令が下されている可能性もある。それが居住区であった場合、その被害は大きなものになるだろう。

今でこそ自分という脅威の排除を優先しているが、それが別の方向に向いてしまえば厄介だ。

タイミングを見計らい、綿密な襲撃の計画を立てる俊輝。

しかし、そう上手く行くわけはなく。

「……………この職員がまだ生き残っていたか」

俊輝の目に飛び込んできたのは、老人と若い男性、二人が一団とばったり出くわし、銃を突きつけられているという光景だった。

一目でわかる、非戦闘員だ。というか、面識がある。第七特務で使っている機具の材料を取引している、個人経営の小さな工場を山奥で何とか……………という人間だ。

防衛戦に用いる機材の一部を納入してもらっていて、そのままタイミング悪く襲撃に……………という状況のようで、二人は両手を上げ降参の姿勢を取っている。

しかし、襲撃者達は目撃者は生かしておかない、のスタンスのようで、今にも二人を撃ち殺さんとしていた。

俊輝は考える。絶好の奇襲のチャンスだ。その銃口と注目は二人

に向けられている。さらに、その一番のタイミングは、銃を撃つ、つまり二人が殺された瞬間だ。

銃声で足音がかき消され、ほぼ感付かれる事なく攻撃できるだろう。

リスクを考えれば、この場では二人を見捨てるのが正解と言える。

「……まあ、俺らが撒いたタネだしな」

だが、と俊輝は駆け出す。その選択をした事を、内心で愚かだと失望の目を向ける自分がいる。だが、同時にそれでいいのだと言う自分もいる。

その選択が正しいのか、それは自身の行動が決める事だとその二つの自分を同時に振り払い、俊輝は懐からあるものを取り出す。

「貴様！」

素早く駆ければ、いくら隠密を心がけていてもいくらかの物音がしてしまうのは避けられない事だ。俊輝の動きを察知し、銃を向けたのは、兵士の内の一人。そして、テラフォーマー3匹全て。

銃撃が、俊輝を襲う事は無かった。

「あ……ぎいいい!?」

俊輝に反応でき銃を向けていた兵士が、苦悶の絶叫と共に銃を取り落す。その首に刺さっているのは、ガラスのような透明な素材でできた針のようなもの。

床に倒れ、首を掻きむしりのたうち回る兵士。その傷口と周囲は、みるみる間に赤く腫れあがっていく。

同時に襲い来るテラフォーマーを俊輝は捌く。

最初に突撃を仕掛けてきた一体目に向けて無造作に手を振るう。そこから飛び出した液体がテラフォーマーに降りかかり、そのテラフォーマーは一步後ろに下がる。

もう一体のテラフォーマーに対して正面から迎撃し、一体目を牽制した返す刃でその喉を引き裂く。

最後の一体は勢いに乗って仕留める、というわけにもいかず、俊輝が選んだのは回避という無難な手だった。

腕から糸を出し、絶命したテラフォーマーを引き寄せ盾としてその裏に身を隠し、攻勢を防ぐ。

一拍遅れて残りの二人、隊長と思われる男と兵士の一人が俊輝を認識し、老人と男性の二人から俊輝へと照準を向ける。

「とつとと逃げろー！」

「……！」

目の前の一瞬の殺戮に茫然としていた二人。だが戦闘の熱のまま怒声に近い声を上げる俊輝とその声で正気に戻り、慌てて駆け出していく。

人質として役立つかもしれない。そのように考え、捕縛の指示を出そうとした隊長だったが、先の攻防で俊輝の素早さはわかっていたため、その隙も余剰の戦力も無いと考え見逃し、今持てる戦力の全てを俊輝へと向ける。

テラフォーマーが二匹に銃器で武装した人間が二人。本来であれば、一線級の戦士であろうとも正面からの勝利は難しいであろう数だ。

『裏マーズ・ランキング』元9位。MO手術ベース、『昆虫型』オオキバウスバカミキリ。

襲撃者は俊輝のデータを把握していた。特殊と言える能力は持たない正統派なベース生物。これであれば、例え強者と言っても遠距離からの砲火によって容易く制圧できる事だろう。そう考えた。

だが、今のものは一体。針のような飛び道具。糸。そのどちらもが、彼のベース生物である昆虫を否定している。

「ああ、見ての通り、『複数ベース』だとも」

凶暴な表情で目元を歪める俊輝に、警戒を強める生き残り。

その様子を見て、俊輝は内心で悪いな、と考えていた。

別に俊輝はあれ以降さらに手術を重ねたわけではない。手術ベースはオオキバウスバカミキリのみだ。針と糸は、専用装備……と言えるのかどうか微妙な、部下の能力によって生成されたものを専用の容

器で保管したものである。

「く……い」

相手も飛び道具を持っている。自分達の優位が崩れ去ったという事を認識し、兵士達の手に入力が入る。

武装の優位は無くなった。ならば、する事は一つ。古代より変わらない、闘争での優位を得る手段。

先手必勝。

俊輝の頭と腹に向けて、兵士と隊長が同時にその手に持つ小銃を放とうとする。

「……わき見注意だ」

が、その先手は予想外の方向から一瞬の内に潰えた。兵士達の味方であったはずのテラフォーマーの内の一匹が突如として兵士に襲いかかり、その胸に風穴を開ける。

突然狂気に侵されたように暴れまわるテラフォーマー。それは、先ほど俊輝の振るった刃から散った液体を浴びた個体だった。

まるで泥酔しているか薬物中毒の末期であるかのように平衡感覚を失いぐらぐら揺れながら暴れまわるテラフォーマーを、もう一匹のテラフォーマーが押さえつけ、その喉を潰す。

「さようなら、だ」

「くっ……い」

隙を見せたそのテラフォーマーを仕留めようとした瞬間、俊輝は身を翻した。

俊輝の直前までいた場所に銃弾が浴びせられる。

「やらせん……い」

銃撃による牽制、それと同時に、テラフォーマーを庇うかのように、隊長が前に出る。

俊輝の再度の一撃、俊輝が想定していた隊長の強さでは反応できないであろう一撃を、隊長はその銃で受け止めた。睨み返してくる隊長の目、その目に、強い意思の色を、まるで、火星で自分と静香を庇っ

てくれた拓也と同じような光の灯った目に、一瞬だけ気圧され。

しかし、絶対的な戦力差は覆らず、次いでの一撃で隊長は胸を貫かれ、崩れ落ちる。

最後に、暴走したテラフォーマーを鎮圧する事で弱ったテラフォーマーの喉を刺し、仕留める。

「すま……ない……お前達……」

胸に穴を開けられ、倒れ伏した隊長が、死した部下に、テラフォーマーに、手を伸ばす。

俊輝はそれに追撃を加えるなどという事はせず、別れの挨拶くらいはさせてやろう、とその死にゆく姿を見つめる。

呻きの混じった小さな声で、隊長はぽつぽつと言葉を紡ぐ。それは部下への謝罪なのか、俊輝にはわからなかったが。

……そして、動きが弱弱しくなっていく隊長の、部下とテラフォーマーを見つめるその表情が一変する。

何か、得体の知れないものを見たかのような。恐怖と、様々な感情が入り混じった、理解ができない、という愕然とした表情。

それを最期に、彼はこと切れた。

「……？」

俊輝にその意味はわからず。勢いに乗って本隊を叩いたが、これで散った兵士がどうなるかわからない。居住区への道を防衛せねば、と俊輝は立ち上がる。

背を向け去る直前、俊輝の目に映ったもの。敵の部隊と行動を共にしていたテラフォーマーの腕に巻かれていた、俊輝が火星で見た階級を示すミサンガとは全く違う、傷に当てられたと思われる包帯。

それに表現し難い気味の悪さを感じながら、俊輝はその場を後にした。

## 第70話 U—N—A—S—A防衛戦（5）

周囲に、数十という数の死体が転がっている。どいつもこいつも、見知った仲間達の、ついさつきまで動いていたものだ。

何故このような状況になってしまったのか。今更になってそれを考えるには、全てが手遅れだった。

「チツ——！」

俊輝が振るった刃を、男は変態すらしていない左腕で受け止める。身に着けた衣服が破れ、その内から覗くのは金属の板。

ガギ、と鈍い音と共に止まったその攻撃に対し、男は一步踏み込む。相手は素手だ。だと言うのに、昆虫型、その中でも甲虫のMO手術ベースによって強化された特に硬い甲皮を相手に接近戦を挑む。何かあると考える俊輝がそれを詳細に予測しようとする前に、男の右の袖から拳銃が姿を見せる。

仕込み武器？ そのサイズの銃を甲虫ベース相手に？ 急所を狙い撃つ気か？ いや、何かがあるかも？

狙われるであろう目を守るか。それとも、ただのフェイントと判断してそのまま押し切るべきか。判断が遅れる。

「遅れたな」

「なっ……!?!」

男は、その銃を俊輝に向けて投げつけた。

一瞬、ほんの一瞬であるが、先の迷いと合わさり、男から逸らすまいとしていた意識が一瞬だけ宙に浮く銃へと向いてしまう。

その隙に、俊輝の腹に男の拳が突き刺さる。変態を行っていない素人の人間の腕力での一撃ならばたかが知れている。

だが、俊輝の腹から血が流れ出す。凄まじい力により甲皮にヒビが入り、さらには。

「そうか……アンタ……前からそんな感じだったな……!」

「勘違いするなよ、約束通り、薬は使<sup>コ</sup>ってないぜ」

男の腕から生えた大顎と思われる刃が、その甲皮を穿っていた。

まんまとしてやられた。『薬』は使わないと言ったが、αMO手術ならば薬を使わなくても部分的に変態が可能だ。

男を蹴り、一度距離を取る俊輝。受けた傷が、それ以上の激痛を与えている。ノコギリ状の刃が、傷を抉ったのだ。

間違い無く、勝てない相手だ。脳が、震える体が、全力で逃げると主張している。だが、退く事などできない。

沈黙している通信機と、その背に負った居住区への道。

厄介な事になったと内心で愚痴をこぼしながら、再び刃を構え、男と向かい合う俊輝。

話は十分ほど前に遡る。

どうにも、きな臭い。俊輝は部下に指示を出しながら、そう考えていた。

カローラに任せていた任務、敵の突入が考えられる主要な通路の封鎖が完了し、屋上ではクロヴィスが空から襲い来る謎の生命体を迎撃している。ノンナからは拓也達が敵の指揮官と思われる人間を撃破した、という報告が入ってきた。

敵が、想定していたよりもあまりに弱いのだ。どれだけの強さだったかはわからないが敵の指揮官が1人。謎の生命体十数匹。MO手術こそ受けていた様子だったがそこまでの手練れでもなかった修道服の男。数人の兵士とテラフォーマー。今の所会敵したのはこれだけだ。施設内部は赤外線センサーやカメラで監視しているが、これ以上の敵は確認されていないし、これらが破壊された様子もない。

相手はこの程度の戦力で、U—N—A—S—Aを落とせると考えていたのだろうか？

データの奪還だけが目的だとしても、どこにあるのかわからないそれを確実に入手する為にはここを制圧できるだけの戦力が必要となるだろう。

敵の戦力は今の所弱いと言わざるを得ない。だとすれば、考えられ



る理由は何か。

隠し玉がある。もしくは、そもそもデータの奪還が目的ではない？  
考えている内に、俊輝は目的地、一般職員の避難場所となっている  
居住区へと続く通路へとたどり着いた。

敵の生き残りがどれだけなのかは全てを監視できているわけではない  
無いため不明であるが、兵士が数人まだ残っている以外は引つかかっ  
ていないため、ここからの大攻勢は無いだろう、と一度警戒を解き、そ  
の場にしゃがみこむ。

先の戦闘での疲れもあつてか、体が重たい。

実戦を何度も経験してきたが、やはり疲労というものからは逃れよ  
うがないようだ。

戦況は安定しており、これ以上の襲撃があるかもわからない。

これで相手が退いてくれればいいのだが。そう考えるが、自分の希  
望は悉く叶わないからな、と溜息を付く。

せめて、何十人か隊員がいればいいのだが。裏アネックス計画の時  
のように。……そして、自分が入隊した時の第七特務のように。

『隊長ー！ 大変だ、敵さんが出てきたよ、西の研究棟！』

「……」

そんな事を俊輝が考えていた矢先に通信機から聞こえてきたのは、  
敵の増援という報告。しかも、ここからかなり遠い区画である。

『隊長？ 急がないと、あそこ大事な機械沢山あるから壊されたりし  
たら大変だよ』

「……ノンナ」

『どうしたの、早くしないとまた終わった後にボク達怒られちゃうよ  
？』

その報告を、施設全体に監視の目を張り巡らせているノンナの言葉  
を受け取るのであれば、いくら守るべき場所と言えども敵の存在し  
ないこの場所に居続ける意味など無く、そちらの迎撃を優先する必要  
があるだろう。しかし。

「何で、嘘をつくんだ？」

『……嘘じゃ、ない、よ』

俊輝は、冷静に、できる限り責めないように落ち着いた声でノンナに質問をする。

敵が出てきた。その報告をした時の、その後のノンナの声。

それには、焦りと恐怖、動揺に加えて微かな罪悪感が入り混じっているように感じ取れた。そして、それを必死に押し隠そうとしている事も。

焦りだけならば、まだ理解できる。戦況を把握し、戦場で命と同等かそれ以上に大切な情報を把握し、預かる身として突然の敵襲に対して対処に焦るのは仕方がない事だ。

だが、恐怖と動揺。ノンナは画面越しに恐ろしい何かを見ても動じる前に対策を練る、それができる人間だ。その彼女がここまで感情を揺り動かされているのは、何かがある。

『急いで、早く』

「……わかった、じゃあ代わりにここはカローラに守ってもらおうかな」

『いや、大丈夫だよ……隊長のいる所は、大丈夫』

俊輝の言った嘘についている、というのは確証があつて言ったわけではない。だが、この受け答えで確信が変わる。

俊輝をやたら急かしている。カローラを代わりに置いておく、という事に否定的。ここから導き出される答え、それは、何かが来るのは、この場所だという事。

そして、ノンナはこの場所から自分を逃がそうとしている。

「ああ、でももう少し様子を見てから行く事にする、先にカローラを行かせるよ」

『早く移動してって言うてるでしょ!?! ボクの言う事聞けよ!』

平静を完全に失った、涙声に怒りの入り混じった乱暴な言葉。それを聞いて、俊輝は何がここにやって来るのか、少しだけ予想がついた気がした。

同時に、通信が乱れる。微かに聞こえるのは、ドタバタという音と叫び声。数秒して、再び通信が繋がる。

『あ、あの……俊輝さん……』

「ああ、エリンか」

その相手は、ノンナでは無かった。ノンナの部屋に匿われていたエリンだ。

『ノンナさんが……自分が行くつて飛び出そうとして……静香さんに押さえつけられてます……』

「……ん、ありがとな。そのまま抑えといってくれ。『薬』には触らせないように」

『……わかりました』

「おう、話は終わったか？」

通信が切れるのと、その人間が俊輝の目の前に姿を現すのはほぼ同じだった。

トレンチコートを身に纏った大柄な、壮年の男だ。露出している一部だけでも鍛え上げられている事が伺える筋肉質の体に、見る者に歴戦の戦士である事を思わせる体の所々の傷跡。

自分の予想は当たって欲しくない時にだけ当たるんだ、と心の中でぼやきながら、俊輝は男を睨む。

ノンナのあの様子も尤もだ。何故ならば、目の前のこの男は。

「オイオイ、そんな怖い顔するなよ……久しぶりに会えたんだからよ」

「ギルダン……いや、元隊長」

自分達の元上司であり、同時にトラウマと言える存在なのだから。

男、ギルダンは敵意をみなぎらせた俊輝の言葉によせやい、と軽い笑みと共に手をひらひらと振る。

その動作の一つ一つに、俊輝は警戒を怠らない。

この状況で現れた……などと言うまでもなく、コイツは敵なのだか

ら、と。

「何が目的だ？」

「んー……撤退の支援とついでにできる限りで暴れてこい、ってな事らしいぜ」

幸と不幸が同時に訪れた、とても言いたい気分の俊輝である。

前者は当然、敵はもう既に退却の姿勢に入っている、という情報。後者は、目の前のこの男を相手にする事は避けられない、という事。

「ま、そう気張りなさんな。そうそう、これを見てくれよ、一昨日撮った息子の写真なんだ」

懐から通信端末を取り出し、一枚の画像を見せるギルダン。それは小さな男の子を肩車するギルダンの写真。

その表情は、穏やかな日常を過ごす男のそれだ。同時に、俊輝の目の前の本人も同じ表情を浮かべる。

だが、それと同時に、俊輝の表情が強張る。

「アンタの……息子さんは……」

「……なあ俊輝、お前は努力して努力して、あらゆる手を尽くしてそれでもどうしようも無い、だけど諦め切れない事があった時、どうする？」

その写真は、俊輝が聞こうとした事の答えに等しかった。

自分は答えた、とばかりにギルダンは質問を返す。

「……」

「……俺の祈りは、届いたんだ」

一段過程を飛ばしたその答え。ギルダンの表情からは笑みが消え、何か遠い所を見るかのような表情になる。

「……アンタの祈りを受け取ったのは、きつと神様なんかじゃない」

「ああ、そうだとも……だが、それが何だと言うんだ？」

俊輝は『薬』を取り出し、自分の腕に射す。

もはや、話を通じる相手ではないのだろう。

自分の恩人であり、同時に短いながらも共に時間を過ごした仲間達の仇である、この男は。

「来いよ、新入り……ハンデだ、『薬』は使わないで置いてやる」

何も武器を持たないまま構えるギルダン。それに、俊輝は先手必勝だと躍りかかる。

U—N—A—S—A第七特務の新旧隊長、その戦いはこうして幕を開け、そして――

「強くはなってるじゃねえか、ああ」

「舐めるな……い！」

幾度かの攻防。その度に、俊輝の体に傷が増え、ギルダンの懐からは武器が現れる。

全身に隠された、大量の仕込み武器。

生身でありながらMO手術被術者と互角に渡り合う体術と、長い実戦により磨き上げられた武器の扱い。

それらを相手に、攻めあぐねる俊輝。

「久々に楽しかったぜ……でも、そろそろ終わりだ」

そして、時間切れだ、とでも言いたげに、ギルダンは自身の腕に注射器型の『薬』を打ち込む。

先の攻防により見せた、αMO手術による不完全変態での特性、それがさらに際立ち、全身へと広がっていく。

筋肉が隆起し、古傷がその姿をより鮮明にする。

腕が筋肉と昆虫の皮膚の入り混じった膨張した組織へと変化し、その両腕からはノコギリのような大顎が生える。

全身を覆う漆黒の甲皮。そして、全身に生えた短い金の毛。

怒涛の如きテラフォーマーの群れと相對しているかのような威圧感。

その姿を見て、俊輝はあの日の、地球に帰還してから最悪の一日の事を思い出す。

だが、今度こそ、あの悲劇は繰り返すまいと。

第七特務、その残された僅かな隊員を総べる若き隊長はかつて一度敗れ去った怪物を相手に向かい合うのだった。

## 第71話 U—N A S A防衛戦（6）

それは火星から帰還した翌日の事だった。脱出ポッド内部の医療設備では完治は望めない重傷を負っていた俊輝と静香は当然、U—N A S Aの病棟に担ぎ込まれたが、その重傷者の俊輝に本部への出頭命令が下った。

ここで、何となく俊輝は察していた。

当たって欲しくなかった予感は見事に的中し、俊輝を待っていたのはローマ連邦幹部搭乗員の殺害に関する追及だった。

どこからそれが漏れたのか？ あの場合を見ていたのは当人である自分と静香、エレオノーラ以外にはいなかったはずでは？ そのような疑問の答えを得る事はできないまま、どこからかそれが撮影されていた映像を見せられ、言い逃れなどできず。

俊輝にできる事と言えば、自分が静香に命令して無理矢理戦わせた、という告白をする事くらいであった。

映像こそあったが音声のやり取りまでは記録されていなかったため、この告白は無事通った……と言うよりは、責任を取るのが誰か、というだけでどうでもよかったのだろう。

ローマ連邦幹部搭乗員、エレオノーラが乗ろうとしていた脱出ポッドは元々日本の宇宙艦のものであった事、俊輝と静香がこの場所を逃せばもはや次の脱出ポッドや宇宙艦に辿り着く前に衰弱、もしくはテラフォーマーの襲撃で命を落としていたであろう、という事情も慮られたものの、それでも彼は彼に対して命を以て償え、という罰への免罪符になるほどのものではなく。

ヘタをすれば日本とローマ連邦の国際問題だ。

そもそも、ローマ連邦がこの事を知っているのか、それもよくわからない。

まあ、自分の命で済むのなら、他に追及される人間がいらないのなら、とそれで一度は納得した俊輝であったが、そこで助け船が。

『お前の友人が命がけで助けたお前の命を、こんな所で捨てていいのか？』

厳粛な会議の場で俊輝に、火星で彼が叫んだのと同じ言葉で語りかけたのは、査問会議に参加していた1人だった。

会議の末席に、明らかにあり合わせで何とかしました、という様子の安物のパイプ椅子に腰かけた、見るからに屈強そうな壮年の男。

支部とは呼ばれているがその所在はU—N A S A本部にある第七特務の隊長だというその男は、俊輝を引き取りたい、と提案したのだ。

幹部搭乗員をその手にかけて重罪。それは裏を返せば、『裏マーズ・ランキング』最上位に君臨する強者を戦いにおいて上回った、という事に他ならない。事実、証拠となる映像を見ても、両者大きく消耗しており『8位』の助けこそあったものの、ランキング4位、能力を抜きにした素の実力であればほぼ最強を誇るエレオノーラを相手に切り結び、勝利を掴み取ったのだから。

ここで失うには惜しい、というのが男の意見だった。

男に対して、会議の参加者たちは露骨な侮蔑の目を向けていた。だが、同時に納得もしている様子だった。

男が自分を引き抜きたいと言った理由も、男が周囲からそんな反応をされた理由は俊輝にはわからず。

彼は第7特務の事自体は火星への出立前から知っていた。

U—N A S A本部付きで広報活動と雑務を担う部隊。そんな部署の彼が、こんな軍法会議のようなものにかけられている俊輝をこのような場でヘッドハンティングをしようとしているのか。

何故このように煙たがられていると同時に、どこかで一目置かれているような反応を周囲のお偉いさん達にされているのか。

とにかく、そのような事を深く考えるよりも先に、俊輝は男の提案を受ける事にした。

友に救われた自分の命。それを捨てないで済む選択肢があるならば、それ以外を選ぶ理由などあるはずもないのだ。

こうして、俊輝の就職先は決定した。U—N A S A本部という、病棟の静香の様子を日常的に見に行く事ができ、他の第1班の仲間達とも簡単に会える。針の筵から一転して、良い職場ではないか。人間万事どうとやら、とは言ったものだ。

「おや隊長……またどこかから拾ってこられたのですか？」

「わあ……強そうだね！」

「……はじめまして。これから共に頑張りましょう」

「へー！ この人が新入り！ すごいねすごいね！」

期待と共に案内された部署で、俊輝はこれから共に仕事をする仲間達と顔を合わせた。

見るからにキャリアアウーマン、と言った風貌の、眼鏡をかけた女性。煤で汚れた白衣を着た女の子。

少し暗い雰囲気ではあるが、一番まともに挨拶をしてくれた少年。少年の隣で興味深そうに俊輝を見ている、煌びやかな服を着た少女。

他にも、十数人の職員に自己紹介をして回った。年齢性別、人種もバラバラな、バリエーションに富んだ彼らは、皆俊輝の事を歓迎してくれた。

一見すると何の問題もない、むしろとても良いのではないかと思う雰囲気職場。

俊輝のその認識が、希望に溢れたそれが一転したのは、勤務初日、新入りの彼の世話役を任された女の子と施設を回っていた時の雑談だった。

「えーっと、ノンナ……さん？」

「呼び捨てでいいよ！ どうしたの？」

「この部隊の部隊章って……アリ？ 働き者、みたいな？」

新しい職場の上司？ であるノンナ、研究者というかメカニク然とした格好をしている彼女に対して共通の話題が思いつかなかった俊輝が指を指したのは、自身の制服の胸の部分だった。

第七特務所属である事を示す部隊章。機械的な角ばったデザインになっているが、虫の頭部を元にしていような意匠に思えたのだ。

ノンナが知っただけでも知らなくても話が続くだろう、とお手頃な話題だと考えてのものだったが、その回答は彼にとって聞き覚えのある、ここでは聞きたくなかった言葉を含んでいた。

「うん！ アリだよ！ 隊長の手術ベースだね！」

「えっ」



「ん？」

いやいやいやいや。ちよつと考える時間をくれ、と両手のひらをノンナに向けた俊輝と、首を傾げて疑問符を浮かべるノンナ。何とも言えない空気が、狭い通路に漂う。

手術ベース。アリ。隊長の。少なくとも俊輝は、手術ベースという言葉を一般的に使う場面を聞いた事がない。

それが使われる場面、というか分野。それは、彼も受けているMO手術に関する事だ。

言うまでも無く、MO手術は一般には機密とされている技術である。バグズ、アネックス計画の総本山であるここU—N—A—S—A本部には彼らバグズ・MO手術被術者の訓練施設や医療設備があり、そこに勤務する職員であれば知っている人間がいても不思議ではないだろう。

しかし、第7特務は広報活動と雑用を主な業務とする部隊だ。

そんな彼らにMO手術の情報がもたらされているとは考えにくいし、そもそも。

隊長がMO手術を受けている？

広報活動のどこにMO手術が必要なのか。この時点で、暗雲が立ちこめてきている。

「そうだ、俊輝くんは何のベース生物なの？ やっぱり虫？ だって僕と一緒にだね！」

からの追い打ちである。

隊長は諸事情あって元バグズかMO手術を受けていてそれをうまく話してしまっただけどまだ小さいノンナはそれをよく知らずに言葉だけ使っているんだそうに違いない、という脳内を高速で流れる現実逃避はノンナの次いでの一音で一刀両断される。

MO手術の被術者が最低二人集まる職場。いや、この流れであれば、隊長とノンナだけではなく。

「あ、俊輝君は何をやらかしたの？ 僕はねー……」

俊輝が答える間も無く立て続けに質問され、混乱の極みである。ベース生物。さらには、何かをやらかした？ 俊輝君”は”？

続く言葉を受け入れ、その意味を理解し、返答する。それをするには、ここを平和で穏やかな職場と信じていた地獄帰りの青年の精神のキャパシティは足りなかった。

「オウ、俊輝、ノンナ、ご苦労さん」

そんな2人に、段ボール箱を三つ抱えた男が話しかけてくる。

「ど、どうも、隊長」

「おはようございますー！」

ぎこちなく返答する俊輝と、手を挙げて元気に挨拶するノンナ。それに對して男は、今昼過ぎだけどな、とノンナの頭をぼんぼん叩きながら笑う。

彼の名はギルダン・ボーフォート。この第7特務の総責任者、即ち隊長である。階級としては支部で最も偉い人間……という事になるのだが、この第7特務は支部というには小さいものであるため、その権限は火星派遣の際の実戦部隊の隊長、即ち剛大と同程度だ、と俊輝は事前に聞いていた。

「ん、挨拶周りは終わったか？　じゃあ、アジトの方に案内しようか」  
疑問は尽きず、一つも解決していない。そんな俊輝に、アジトなる不穩極まりないワードが投げかけられる。

こうして、哀れな生還者の地球での日々は始まった。

そこからの日々は目まぐるしく過ぎていった。

U—N A S A から車で数時間の、山林に秘匿された施設。そこで俊輝を待っていたのは、先ほどまで挨拶をして回った和やかな職員さん達とは打って変わった数十人の荒くれ者達。

第七特務が広報活動を担当しているというのは表の顔で、裏では世界に広がった裏社会のMO手術を抹殺する為に動く部隊であるという事。

とある戦場で派手に暴れたせいで雇い主の敵対勢力にマークされてしまい指名手配を受けたから、それとU—N A S A の医療設備を使わせてもらう必要があるから、という事情を語った元傭兵、ギルダンの率いる、罪人の中でも腕の立つ人間にMO手術を施した影の精鋭部

隊。

宇宙飛行士や元スポーツ選手と言った、U—N—A—S—A本部付きのエリアーナ出自の精鋭M—O手術被術者を送り込むにはリスクの高い任務に最優先で放り込まれる尖兵。

その任務は言うまでも無く命を懸けた戦いだ。勿論、俊輝はその正しい任務を友人達に語った事は無い。

本部から軽んじられる人間の集まりと言え、それを差し引いても給料は恵まれていたし、何よりも。

「俊輝くん、また装備壊したの!?!」

「ごめんなさい」

「いえーい！ 今夜はライブだ！ 皆寝かせないよ！」

「いや寝かせてください」

「遠慮せずもつと飲めつて！」

「も、もう無理だ隊長！」

本来なら死を受け渡される罪人達。アクの強い人間ばかりであったが、そこには、火星で戦いを共にした仲間達と変わらない暖かさがあつた。

……………

身を躲し、その剛腕を、直撃すれば即死の、戦場で最も頼りになつた男の一撃を回避する。

” 隊長、きつと、運が悪かったただけなんだよ…………… ”

視界が、脳が、熱く熱を持つ。それは、今相対している男のせいなのか、記憶のせいなのか。いや、同一のものなのだろう。

” 死んだ皆も、隊長の事を恨んでなんか…………… ”

過去から現在に記憶が再生されるにつれて、鮮明になるはずのそれはぐずぐずに腐っていく。

” すまねえ、お前ら……………俺は、とんだクズだ ”

あの汚いながらも笑いの耐えなかったアジトでは無く、綺麗に清掃された、しかし何も無いU—N—A—S—Aの部隊室で。

” 許してくれ、なんて言わない……………恨んでくれ……………だから、お前ら…………… ”

あの場所にいた46人の中でただ1人生き残った彼は、別の任務で外に出ていた、生き残っていた自分達35人は。

”死んでくれ”

一体、何を間違ったのだろうか？

「アアアアア!!」

絶叫し、俊輝はギルダンに対してカウンターの一撃を放つ。相手の武器は俊輝と同じように、腕から生えた大顎。そして、硬度こそ甲虫の甲皮に劣るものの、ただでさえ総合的に高い能力を持つその類の生物、その中でもMOベースとして最強クラスの種を宿しているが故の強靱な筋肉は、例え刃であつてもそう易々と致命傷を与える事はできない。

左腕は折られた。ギルダンの戦闘技能は自分の遙か上に行く。相手はかつて『無双』と称えられ、畏れられた歴戦の傭兵なのだから。正面きつてのインファイトでも、小細工を弄した戦いでも勝ち目は無い。ならば、今自分がするべきは、相討ちになつてでも、何としてでも時間を稼ぐ事だ。

あの日のあの時、自分と今の仲間達は何とか生き残った。だが、次は無い。皆が逃げるだけの時間だけは確保しなければ。

「……そう熱くなるなつて」

しかし、その祈りに近い意思は届かない。俊輝の一撃は軽くないなされ、ギルダンの一撃は、一発、また一発と俊輝に迫っていく。

決して大振りの一撃では無い。しかし、それですら受ければ戦闘を続行する事が困難となる重傷は避けられない、と思わせる強烈なものだ。

防戦一方、ですらなく、何とか回避して命を繋ぐ事しかできない。生半可な一撃で戦闘能力を削げる相手でない以上、うかつなタイミングの反撃はその隙を突かれて致命傷を負わされる最悪の展開に繋がりがねない。

「……ん」

だが、その猛攻は、ぴたりと止まった。

ギルダンの胸ポケットで、気の抜けた電子音が鳴る。

それを受け、ギルダンが取り出したのは、携帯端末だった。

戦闘中に、何を。そう言える余裕は、今の俊輝には無かった。

「おう……わかった」

幾度かの受け答えの後、端末を再び懐に仕舞うギルダン。

その視線は、再び目の前の俊輝へと移る。

「……帰還命令だ、悪いな。終わりだ、なんてカッコつけて恥ずかしい限りだが、ここまでだ」

「……っ……！ 何を……！」

ただそれだけを言い、背を向けたギルダンに対して俊輝は荒い呼吸の中で何とか答えを返す。逃げるのか。帰れると思うな。そんな威勢のいい言葉が、喉の奥で絡まり、つかえる。

去っていくギルダンを、俊輝は見送る。

歯が砕けるのではないか、という勢いで噛み締め、躍りかかろうとする体を押さえつける。仲間達の仇を前に、震えるだけかこの臆病者め、と叫ぶ内心を必死に抑え込む。逃げるのか、だと？ 相手に命を見逃されたのはどっちだ。帰れると思うな？ このまま戦っていれば帰れないのはどちらだった？

飛びかかった所で、むざむざ命を捨てる結果に終わる。

ギルダンの姿は通路の奥に消え、戦闘の疲労からか俊輝は壁にもたれかかる。

骨折の苦痛が何とか意識を繋ぐ中耳に入ってくるのは、敵が施設からいなくなったのを確認した、というエリンの声と、空からの襲撃が止んだ、というクロヴィスの連絡。

重要施設に被害は出さず、職員に死者は出ず。犠牲は見回りの数人のみ。

防衛戦はほぼ完璧な勝利と言えるだろう。

君達は立派なお役目を果たしたんだ！ おめでとう、おめでとう！

そう、何かが暗闇の奥底から拍手しながら嘲笑している。

俊輝は、そんな感覚を覚えた。

## 幕間 赤の花とリフレイン

「……」

神殿。ニユートン一族の資料では楽園、とも呼び称される、槍の一族が本拠を構える施設。

その廊下を、ギルダンは歩いていた。

表情に色は無く、無そのもの。撤退の支援という任務を遂行し、いつも通り帰還する。普段と何も変わらない、平凡な日常だ。これから、任務に関する報告があるだろう。それに、あの化け物が死んだ、というのは少し胸のすく気分であるが、それもまた無意味な事だ。

「おかえりなさい、パパ！」

そんな、仕事疲れにため息を付く彼の足に、部屋から駆け出してきた影が飛びつく。

5、6歳ほどの、小さな男の子だ。ギルダンと同じ茶と黒の混じった髪に、顔立ちもどこかしら似た雰囲気を持っている。

「おう！ ただいま、トニー」

その男の子、トニーを抱き上げ、ギルダンは柔らかな笑みを浮かべる。

ギルダンを狙った襲撃の流れ弾により妻を失った彼の唯一と言っている幸せ。それが、愛する息子の存在だ。

「こんばんはつす、ギルダンさん、トニー君」

久しぶりに帰ってきた父親と息子、水入らずの時間に、一人の乱入者。

希？はギルダンにとってもまだマシに会話ができる人間である。

殺人鬼だの難しい話しかしない科学者だのばかりのこの場所で、多少はまともな人間であるからだ。

「あ、あのね、しえいさん」

トニーがするりとギルダンの腕を抜け、希？に駆け寄る。

あ、と名残惜しそうにするギルダンであったが、それを見る人間は誰もおらず。

何かな、としゃがみ、目線を合わせる希？に耳打ちするトニー。

「……ふふ、それは、素敵な事だと思うっす」

慈しむかの表情でトニーを撫でる希？。事情を聞きたげなギルダ  
ン。

少し待っていて、と希？はその場を立ち去った。

「なあトニー、さっきのは」

「ないしょ」

心臓に、ぐさりと槍が突き立つ。戦場でへたに銃弾を受けるよりも  
痛い。

「それよりもパパ、聞いてほしい事があるんだけど」

「……………何だ？」

ギルダンの表情が、曇る。だが、それを悟られまいと、それを笑顔  
で押し隠す。

「ぼく、野球選手になりたいんだ！」

ああ、そうだろうな。心の内の声。それを漏らすことはせず、ギル  
ダンは微笑む。

この意味など、わからないだろうし知る必要も無いことだから。

「……………いい夢だな、頑張ろうな」

「……………パパ、なんでそんなにー」

「お待たせしましたっすー！」

何かをギルダンに問おうとしたトニーの声は、希？の乱入により遮  
られた。

その手には、一輪の赤い花が握られていた。

「はい、トニー君」

希？はそれを優しくトニーに手渡す。緊張した様子で、少し頬を赤  
くしてそれを受け取るトニー。

「……………何のつもりだ」

「ほわあー！ ストップ！ 銃はダメっす！」

額に青筋を浮かべるギルダン。焦る希？。うつむくトニー。状況  
は若干混沌とした状態である。

「さ、トニー君、がんばって」

花を手に、何やら迷っている様子のトニー。希？はその背を押し、通路を進んでいく。

息子を取られ、手持無沙汰となったギルダンも仕方なくその後についていく。

いくつかの通路を曲がり、辿り着いたのは一つの部屋だった。

「……パパ、しえいさん、のぞかないでね」

念を押すようなトニーの言葉に、ギルダンは真剣な面持ちで頷く。それでも部屋に入るのを迷っているのか、トニーはうろうろと行き場無く周囲を歩いている。

数分後。意を決したのか、トニーは部屋に入ってしまった。

ほほえましそうにその様子を見守る希？と、覚悟を決めた表情のギルダン。

二人は、珍しく息の合った様子で同時に頷き。

歴戦の傭兵と『ニユートンの一族』最新の家系。その優れた身体能力を遺憾なく発揮し、開いたスライド式ドアの左右に分かれ、その内部をのぞき込む。

そこにいたのは、トニーと一人の女の子だった。

足を延ばして床に座り、ぼんやりと天井を眺めている、金の長い髪が美しい女の子だ。

トニーは、心ここにあらずといった様子の女の子にとこと速足で近づいていき。

「……んー！」

ぶつきらぼうに、花を差し出した。

「……うふふふ、お父さんにも知られたくない事ってあるんすよ」

「……ああ」

愛情を過剰に注げど、息子の恋を邪魔しようと考えるほど、ギルダンは頑固オヤジというわけではなかった。

それが例えあの化け物の娘であったとしてもだ。

「……」



差し出された花に、女の子は何の反応も見せない。気まずい沈黙が場を包む。

あ、これ泣く、とギルダンと希？が慌て始めた、そのときだった。

「……………」

女の子が、反応した。首をこてん、と可愛らしくかしげ、花に目を向け、トニーに目を向け。

そして。

「……………」

その花を、受け取った。

それを見守る二人はガッツポーズである。他よりはマシとはいえ決して仲が良いとは言えない二人であるが、この時だけは心が一つになっていた。

しかし、喜ぶだけではいられない。トニーが、部屋の外へと走り出してきたからである。

のぞき見していた事がバレたら大変だ。

二人は慌ててドアから離れ、平静を装う。

「やったよ、パパ……………」

興奮冷めやまぬ様子で飛びはねるトニーに、ギルダンは親指を立てる。

あの感情なんて存在しないと思っていたリンネが。まさか、プレゼントを受け取るなんて。

……………そんな、和やかな一コマは、その意思とは関係なくふらりと揺れたトニーによって崩れる事となった。

その体を抱き支えるギルダン。意識はあるが、ぼんやりと、光を失った目で何かを呟くトニー。

「……………ああ、もうそんなに経っていたんすね」

それを無表情で見つめる希？に、ギルダンは言葉を返す事はできなかった。何かを言う事はできる。怒鳴り散らす事も、罵る事も。だが、それは全て自分に返ってくるのだから。

そして、何度でも思い知るのだ。自分の願いを聞き届けたのは、神

などではなく。悪魔ですら無く。もっと悍ましい何かなのだ。  
「そろそろ、交換の時期なんすねえ」

## 第72話 黒の萌芽

「……以上が、今回の報告です」

針の筵パート2、とはこのような状況を言うのだろうか。

自分に一斉に向けられた悪意の視線を浴びながら、俊輝はそのような事を考えていた。

襲来した敵対勢力に対する防衛戦。

その結果は、十分すぎるほどの勝利だった。

敵の指揮官を名乗る男を死体こそ逃したものの確実に仕留め。

重要な情報になるであろう、襲撃を仕掛けてきた謎の生命体の死骸を十数匹分手に入れ。

被害は、設備の一部と数人の犠牲のみ。

正規軍並みの装備をした人員とテラフォーマー、さらには複数のM O能力を有している怪生物による奇襲。

事前にある程度の準備ができていた、という事を差し引いても、得体のしれないこれらの敵を相手にこれだけの被害で済んだのは、第七特務と本部勤務のM O能力者の優秀さをこの上なく示している、と言っても相違ないのではないだろうか。

そして、防衛戦の音頭を取っていた第七特務隊長である俊輝に報告の要求がやってきた。

特別報酬でも出れば休日返上で施設の片づけ作業をしていたあいつらも報われるだろう、などと考えていた俊輝を迎えたのはU—N A S A上層部の老人達の冷たい瞳だった。

何故犠牲者が出たのか？ 施設への被害は避けられたのではないか？ 敵の指揮官の死体を回収できなかったそうだが、頑張りが足りないのではないか？

……無茶苦茶だ、と口に出しては言えなかった。

ああ、そうだろう。U—N A S Aという組織を遥か高みから見ている彼らは。自分達の事など、いくらでも代用の利くコマとしか思っていない彼らは。

完璧でなければ、決して納得しないのだ。現場の必死の努力で被害

を押し留めたとしても、最悪の事態と比較してこれだけで済んだ、ではなくゼロと比較してこんなにも被害が出た、と考えるのだ。

「今後はこのような事態が起こらないよう訓練を重ねます」

不愉快だ。だがそれが彼らに伝わるような事があってはならない。ただでさえ、本来であれば廃棄処分されていた人間が使い減りしても問題ない尖兵として何とか飼ってもらっている状態なのだ。その上、以前の裏切りで多大な被害を出しているため、お上の見る目はとても暖かいと言えるものではない。これ以上ご機嫌を損ねてしまえば、最悪の事態になりかねない。

報告は全て終わった。もう話す事は無い。顔を合わせたくもない。考える事は相手も一緒なようで、報告は終了した。

「……大変だったね、俊輝」

そんなこんなで部屋に戻るなり大きな溜息をついた俊輝は早速静香に心配され、重要な部分は伏せたまま愚痴を言い、慰められていた。

「俊輝さ、私に何か隠してる」

静香が横になっているベッドの横で、椅子に座った俊輝は硬直した。

隠している。具体的に言えば全てを、だ。

U—N—S—A—Aの一般事務職員になったんだ。違う。

何も心配いらなくて、火星みたいな命がけ、ってワケじゃないんだぜ？ 違う。

エリン？ 同僚の親戚なんだ、預かってるんだよ。違う

同僚もいい奴らばかりだし、楽しい職場だよ。……微妙なところ。

数えきれないほどの嘘を、目の前の幼馴染についてきた。

けど、わかってほしい、と内心で呟く俊輝。

なぜならば、それは――

「……私とみんなのため、でしょ？」

無表情であろうと努めていた顔が、崩れた。

目を見開いてしまう。

「話してくれなくてもいいよ」

時期が来れば全部話すから。そんな常套句は先回りされる。

吐き気がするほど幸運なことに、俊輝の希望通りに。

知られたくない事は山ほどある。自分の両手がすでに真っ赤に染まっているという事。

静香が仲良く話している、一般人と思っている少女が、裏の世界寄りの人間であるという事。

ああ、なんて卑怯なんだろうか。俊輝は自嘲する。

守りたい。一度地獄から生還した彼女を、仲間たちを、汚いものなど何も見せずに、己の全てを懸けてでも。それも大きな理由の一つだ。

しかし、それと同じか、それ以上に。

目の前の彼女に、その真実を知られたくない。

自分がもはや後戻りのできない、血と臓物の飛び散る世界の中に入る事を。

それは、知られてしまえば失望され、見捨てられ、関係を切られてしまうから、ではなかった。

昔から変わらず優しい彼女は、きつとそれすらも受け入れて、自分と共にあろうとしてくれてしまうだろうから。

「ごめんな、ごめん……」

ただ、謝る事しかできなかった。静香の知らない裏側で、事態は進んでいる。

これからも戦いに身を投じ、今まで以上にその両手を血で染める事になる。

そんな世界の自分の隣に、彼女がいてはいけないのだ。

「そんな悪いヤツはこうだー！」

静香がいきなり起き上がり、半ば飛びつくかのような動きでギプスと腕を使って俊輝の頭を抱え、再び倒れこむ。

普段の俊輝であれば、容易に回避していたであろうじやれつき。

だが、自分にはもう残っていない人の暖かさがあるようで、俊輝は黙ってなすがままにされる。

地獄に堕ちてでも、守らなければならぬ。だが、地獄に付いてこさせるわけにもいかない。

全てが終わったら、気持ちを告白しよう。昔から彼女に抱いていた、自分の気持ちを。

火星に行く前に、そんな事を考えていた。

実際、伝えたい事があると彼女に話した。

全てが終わるとは、何なのか。俊輝は今ではそんな事を考えている。

火星の戦いは終わったが、それだけで全ては終わらなかった。

これを倒せば全てが解決する悪がいるわけではなく、世界はおとぎ話よりも複雑だ。

気づいていたはずなのに。知った上で、それでもとこの無間地獄を選んだはずなのに。

なるほど、終わりなんて自分の息が止まる瞬間にしか無いのに。

静香とは離れなくてはいけない、でも離れたくない。

この言葉で、記憶力のいい彼女をずっと縛り付けるつもりなのだ。

「ああ……本当に、悪いヤツだよ」

暖かさに埋もれながらぼそりと呟いたその声は、誰にも聞き届けられない事は無かった。

—————

「報告、ご苦勞だった、希?」

「勿体無いお言葉です」

片膝を地に付け、希?は目の前のモニターに向かっていった。

そこに映されているのは、一人の人間の姿。

高年の男である。

高位の聖職者である事が伺える、しかし装飾過多な印象を与える祭服に、頭を飾る司教冠。その手には、宝石のはめ込まれた錫杖が握られている。

その座る椅子にも、ところどころに金の装飾がなされ、見るからに豪華なものとなっている。

聖職者というよりも、王族のそれだ。

「私は貴様たちに、何を命じた？」

モニター越しに、厳粛な声が希？に降りかかる。そこには、若干の非難色が。

「はっ……データの奪還と、U—N—A—S—A戦力の殲滅、っす」

希？の表情に普段の明るい、何も考えていなさそうな笑顔は無い。

そこにあるのは、氷のように冷たい無表情。

「結果をもう一度聞こうか」

「真に申し訳なく思いつす」

「私は謝罪が聞きたいわけでは無いのだ。もう一度問おう、結果は？」

希？は、ただ謝罪の言葉を口にする。しかし、それは男の望む答えでは無かったようで、返ってきたのは再度の質問だ。

「目的は両方とも叶わず、っす」

「お前たちは、また私を失望させるのか？ 先にも我が一族の娘を失い、今回もまた、敬虔な信徒であったロドリゲスを失った」

「……返す言葉もありません」

下を向き、表情を曇らせる希？に、男はさらに言葉を加える。

それは、先の失敗、その叱責だ。

技術を提供した宇宙艦を失い、さらにはその指揮を執っていた人間を、強力なMO手術ベースを有していた一族の一員を失った。

「アレクシア様を害した下手人に関して、目下捜索中っす。近いうちに良いご報告ができると思いつす」

「……もう一度、期待してやろう」

希？は今日何度目かわからない頭を下げる。定例報告。任務の失

敗の責と、今後の計画に関して。

「私に感謝している、と言うのであれば、力を尽くす事だ」

「勿論つす。貴方様は、我らに主をお与えになったんすから」

教皇、と呼ばれた男は笑う。目の前の従順な人間を。

ニユートン一族、その本家に近い家系であるゲガルド家、その当主が家柄でいえば遙か下の自分に従っている、その事実を。

「ああ、そうだとも。私が、25年前のあの時にお前たちの王を、神の写身を、オリヴィエを作り出したのだから」

「……その天上の御坐で、我らの本拠で、成果をご期待ください、”教皇様”」

希？の言葉に満足げに笑う、教皇と呼ばれた男。その玉座の背後には、透明な素材で作られた巨大なドームが存在し。

その先には、どこまでも続く土の大地と黒色の空、その天には青い星が一つ、輝いていた。

—————

「はるばるようこそ、お客人。『神殿』に。秘書が少し用事で手が回らなくてね、いい案内ができすまない。私が君たちで言う王、かな？

オリヴィエ、つて言うんだ。よろしくね」

その客人を最奥部で出迎えたのは、ニンゲンとその左右に立つ複数のニンゲンだった。

遙か長くを旅してきた。無能な部下たちには随分と苛立たされたものの、何とか計画は成就し、今ここに彼は立っていた。

この場所に、この世界に、自分が超えるべき相手がいる。精鋭の部下達を連れてきた。だが、それだけでは足りない。戦力が、必要だ。ヤツと同じ土俵に立つ為にも。

「じじょうじ」

そんな、人類では少し理解が難しい言語で話す彼に対し、オリヴィ



エはにこやかに笑いかける。

うんうんと頷き、手を差し出す。

その手を握り返し、彼はにこいと笑う。

そしてそのまま、にこにこしたままのオリヴィエの頭部に向かい、赤黒く変色した拳を繰り出す。

「これはどうも、そちらの文化にはあまり詳しくないものでね。このようにご挨拶するのかな？」

「ギイイ……」

しかし、それが男の頭を貫く事はなかった。同時に繰り出された男の拳が、彼の目の前で止まったからだ。

「ギイイー！」

彼は叫んだ。それは、連れてきた部下達への怒りだ。

彼の動きと同時に、部下たちが動き、この場のニンゲンを皆殺しにする予定だった。

しかし、彼を支える精鋭の部下達は、その命令を遂行する事無く一点を凝視して立ち止まっている。

その眼に浮かぶのは、動揺と恐怖のようなものだった。

彼らが見つめるのは、男の横に立ち並ぶニンゲンのうちの一人、小さな少女だった。

銀の長髪と細い体つきが特徴の、戦士とは到底言えない弱弱い存在。

本来、彼らの種族に恐怖の感情はほぼ存在しない。

だが。本能が、訴えかけている。コイツには、近づいてはいけな

と。  
「ギイー！ ジョウジョウ!! キイイー！」

男に拳を突き付けられている事も忘れ怒りに支配されたのか、彼は地団太を踏む。

それに戸惑いを見せる彼の部下たち。この、本能が警鐘を鳴らしているおぞましいメスに襲い掛かるか、それともボスの機嫌をこれ以上損ねるか。

選択肢など、無かった。

勇気ある一匹、全身からトゲの生えた戦士が目にもとまらぬ速さで少女、ナタリヤに襲い掛かる。

「……」

「……ッ」

しかし、その一撃もまた、相手を絶命に至らせる事はできなかつた。背後から、新手が突如として乱入し、ナタリヤに振るわれた一撃を止めたからである。

全身を軽装の鎧のような装甲服に包み、その顔は仮面のようなヘルメットに覆われている。

だが、その程度の防御が何だと言うのか。止められた腕とは逆の腕で、新手に向けて再度の攻撃を行おうとするが。

「……！」

バチン、という音と共に、その腕は衝撃で跳ね上げられる。さらに、反撃に振るわれた腕は凄まじい腕力でその腕をもぎ取り、地面に放り捨てる。

「ご苦労様です、助かりました」

一瞬の攻防劇にばちばちと拍手をするのは、ナタリヤの隣に立つ白衣の青年。

当の狙われた本人は狙われた、という事にすら気づいていないのだろう、ぽかんとした表情を浮かべている。

「中々刺激的なご挨拶だね、異文化コミュニケーションとは良いものだよ」

互いのリーダーと部下同士の二つの攻防。それで、彼は理解する。彼は極度に気が短くはあるが、高い知能を持つリーダーという一面も持ち合わせている。

ちらりと背後を見る。そこには、彼の部下の一人、全身に細かい穴の開いた、緑がかった甲皮の不気味な個体。最初は、奴らを皆殺しにして材料にする予定だった。だが、予定が変わった。自分の目的を遂

行するのに、もっと良い方法がある。

「キミは王の座を奪い取りたいんだろう？ 私とキミは仲良くできそうなのがするんだ」

「……じょうじ」

ここに、一つの同盟が結ばれた。それは、地球人と宇宙人、記念すべきではない2つ目の友好関係であった。

## 第2部 1章 貪欲の食卓

夢を見た。

目の前にはテーブルと、それに置かれた料理の数々。

焼いたもの。スープの具材にしたもの。……生そのままのもの。

品目は多いけれど、どれも同じ材料の、赤色と茶色のそれら、いつもと変わらないそれ。

そして、テーブルを挟んで微笑みかけてくれている、と思われる、あの人。

そう、何ら変わらないいつもの安らかな日常に、思わず頬が緩んでしまう。

私も彼に朝の挨拶をして、食事を始める。真っ赤で新鮮なそれを口に運ぼうとして……

そこで、目が覚めた。

あの貧しい生活とはうって変わった、清潔で小奇麗な部屋という風景が私を迎え入れる。

もう少し幸せな夢に浸っていたかったが、仕方がない。

今回の仕事は楽しくなりそうだ。何より、あの子にまた会えるかもしれないのだから。

手早く着替え、部屋を出る。そして、もう一度だけ、あの夢で見た幸せな日々を思い返す。

ああ、でもどうして。

確かに在ったはずの、例えはるか彼方のものであったとしても決して忘れるはずもないあの日々の記憶は。

どうしてどこか他人事のように不鮮明で、あの人の顔は空白に覆われているのだろうか？

—————

「隊長、次の仕事が入ったそうですが」

「……ああ」

U—N—A—S—Aの外れ、その地下の施設、第七特務支部。

俊輝の座るデスクに、彼の部下たちは集まっていた。

「んー、短いお休みだったなー！」

「この老骨には辛い事ですなあ」

目をぎゅうつと瞑りながら伸びをするノンナと、やるせない様子で自身の肩を揉むクロヴィス。

「仕方ないでしょう。我らはそういう存在なのですから、さあ、今日も世界のために頑張りますよう」

そして、きりつとした表情でメガネを光らせるカロローラ……

「カロローラは黙ってて」

「その凶太さは尊敬に値しますな」

……は、縄で全身を縛られ床に転がされていた。

結局、U—N—A—S—A本部を舞台として繰り広げられた防衛戦の功績はある程度は認められ、彼らには約一週間の休暇が与えられた。

防衛戦の準備のために奔走していた彼らにやっと与えられた、長期の休息。ある者は趣味を楽しみ、またある者は自室でくつろぎ……とそれぞれの時間を過ごしていた、三日目の朝の事だ。

突如としての、隊長、俊輝からの呼び出し。

暇をしていたのか素早く集まったノンナと自室にいたクロヴィスが俊輝と共に『休暇中です、探さないでください』という書置きを残し逃走したカロローラを追撃し、拘束。

こうして平和に集合できたのが、昼過ぎの事であった。

「カロローラ……まあいいや、今回の任務だが、MO手術被術者の殺害もしくは拘束……となってる」

「なんだ、急に呼び出されたから何かと思っただらいつものやつだね！」  
俊輝の真面目な表情からこれは大仕事だ、と神妙な面持ちをしていた三人。

その表情は、一斉に和らぐ。

MO手術被術者の無力化。なんだ、いつもと同じ、ただの殺し合い

か、と。

もはや、俊輝もその反応に驚く事もしない。

「場所はコロラド、裏社会のヤツじゃなくて、U—N—A—S—A所属の人間が脱走した」

「ホント!? わーい、山登りしたかったんだ!」

「腰に悪いですな」

喜んでいいるノンナと落胆するクロヴィスに俊輝は次いで言葉の向ける。

「今回は命懸け、だ」

空気が、変わった。三人が一斉に俊輝に鋭い刃のような視線を向ける。

数多くのMO能力者を容易く葬り去ってきた自分達に命を懸けて望め、という言葉。それがどういう意味を持つのか、当然ながらわかっていであろう隊長があえてそれを言った、その答えを一瞬で察して。

「改めて、任務の詳細だ。場所はさっき言った通り、より詳しくは資料を見てくれ。お前ら、『アネックス支援計画』は知ってるな? 標的は――」

俊輝はその手に持つ資料、そこにある標的の顔写真を一度見る。

かつて数度あった会話と、彼と仲の良かった自分の上司の事を思い返し、それから、拘束なんてできる相手じゃないだろうな、と思いはがらも。

いつもと同じような任務内容の、しかし全力でかからねばならないその相手の事を、三人に対して伝えるのであった。

「ダリウス・オースティン、『裏マーズ・ランキング』1位の殺害か拘束だ」

## 第73話 惨劇の歌

——アメリカ合衆国 コロラド州 某所

さく、さくという、落ち葉を踏む小気味良い音が、観光地からは程遠い深い山林で静かに響いていた。

しかし、その音の主の表情は楽し気なものとは程遠かった。

いつもは整えられている暗い赤の髪は湿気と泥に汚れ、その目には疲労の色が濃い。

「……ふう、しかしまあ、随分と……早まってしまったな」

周囲を見回し、耳を澄まし、何もいない事を確認した後、その青年は木にもたれ掛かり、懐から水筒を取り出す。

これまた汚れたレインコートに身を包む彼が、かの火星開発計画、その背中を守るために派遣された部隊で最強を誇っていた猛者であろうとは、この光景を見て誰が信じるだろうか。

ダリウス・オースティン。『裏マーズランキング』1位にして、戦場で最も近寄りたくない人間に数えられる男である。

そんな彼が、なぜ薄汚れた格好でこのような場所を歩いているのか。そして、お尋ね者として命を狙われているのか。全ては、火星から帰還した後のあの日が原因だった。

お役目を終えた兵器。そのまま廃棄されると思っていた。その覚悟で、地球に戻って来た。

そんな彼に与えられたのは、このコロラド州の田舎、U—N—A—S—Aの有する邸宅での軟禁生活だった。

結果から言えば、ダリウスの扱いは保留となり、審議される事となった。それが決定するまでの、暫定的な処置だ。

人道を外れた罪を積み続けた重罪人。しかし、紛れも無い、広域制圧という点ではこれ以上は考えられない、極めて強力な能力。

意思を持つ、それもいつ暴走するかわからない狂気を底に秘めた核兵器があった場合、それをどう扱うべきなのか。解体すべきだ。いや、処分してしまうにはあまりにも惜しい。

その議論は進まず、それに合わせてダリウスの生活も長引いた。それに関して、ダリウスに不満などあろうはずも無かった。

元々即座に死を受け渡される事を覚悟していたのだ。

外出こそできなかつたが、必要なものは揃っていたし、望むものは頼めば用意された。

屋敷の使用人たちも、ダリウスの経歴を知って最初こそ怯えていたものの、時間が経つにつれてその態度は和らぎ、最後にはとても仲良くなった。

そんな和やかな生活に、むしろ火星に行く前の獄中生活と比べればよっぽど恵まれている、と考えていた。

しかし、それはほんの一瞬で粉々に壊れてしまった。

ある日の朝、そこに立っていた一人の少女。ダリウスの先祖を名乗るその少女は、ダリウスに会いに来たのだと言う。

困惑しながらも話を聞いていたダリウスに、少女は料理を振るまおうとした。

……屋敷の従業員、その中でも特にダリウスと親しくしていた、お手伝いさんの肉を。

そこからの時間は嵐のように過ぎていく。少女を仕留めんと襲い掛かったダリウスは自身と同種の能力を持つ少女に一瞬の攻防ではあるが押し負け、そのまま少女は屋敷を去っていった。

茫然としていたダリウスが正気を取り戻すのに、どれだけの時間がかかっただろうか。最初にした事は、屋敷の中を歩く事だった。他の屋敷の人々はどうなったのか、大丈夫だろうか。

MO能力を使った爆音と激しい破壊。それを聞きつけて、誰も駆け付けてこない時点で、わかりきってはいた。だが、藁にも縋る思いでダリウスは屋敷の部屋を巡った。

結果得られたのは、激しく損壊した、しかし野生動物に食われたのとは全く違う、まるで調理のために可食部位だけを切り取られた全員の遺体だった。

そこから、ダリウスの記憶は薄れている。なんと酷い事を。一瞬、それを考えた事はまだ覚えている。だが、即座にその言葉は反転して



自身に突き刺さった。それはかつて、自分が散々行ってきた事ではないか、と。

そして気が付けば、ダリウスは山岳に立っていた。

『薬』は没収されている。だが、ダリウスの施術、αMO手術は薬を用いなくても能力を使用できる。脱走しようと思えばいつでも脱走できる力を持っているのだ。

そのため、U—N—A—S—A本部へ毎日定時連絡が行われ、それが途切れた際には即座に調査が行われると聞いていた。

だから自分は急いだのだろうか、とダリウスは思う。

U—N—A—S—Aが詳細に調査すれば、ダリウスが冤罪であるという事はわかるだろう。しかし、その身を狙う未確認の、それもダリウスと同種の能力を宿した敵対者が存在していると知られば、ダリウスは嚴重に管理された施設の深奥に隔離されるに違いない。

それが嫌というわけでは無い。自分が犯した罪にはその処遇が当然であるし、屋敷での生活は甘すぎる、とも考えていたのだから。

しかし、それはとある事を意味している。

「俺の手で、絶対に殺す」

ダリウスの中で燃え盛る、怒りの炎。仇を取るのだ。自分のような人間に暖かく接してくれた、あの人達の。そして、あの怪物を仕留めるのは、同じ罪を負った自分でなければならぬ。

これまで沢山の人の命を奪い、それを喰らってきた。しかし、そこにあつたのは、人間に対する得体の知れない好意だった。だが、アレに対して感じるのは、ただただ身の内を焦がす怒りと憎しみ、そしてある種の使命感だった。

だから、逃げ出した。やはり危険な兵器だ、始末しようという決定が下される事が確実だとしても。

自分の事を善良な人間だと信じてくれた屋敷の人々の想いを裏切る事になるのだとしても。

自分が、自分の手でやらねばならないのだと。

相手の所在はわからない。何かに属しているのか、それすらもわからない。あまりに無鉄砲。だが、ヤツは言っていた。”今度会う時には”と。

ならば、再び向こうから接触してくる。

そう考え、ダリウスはこの山林で時間を過ごしていた。

追撃の手はまだかかつてはいない。しかし、それも時間の問題だろう。

交戦はできる限り避けねばならない。ダリウスの能力は数的不利をもつものでもないが、その能力は使用しただけで非常に目立つ。その場しのぎはできるものの、その後非常に不利となってしまう。

「……」

そこまで考え、ふとダリウスは顔を上げた。少し遠く、なだらかな斜面によってダリウスからは見えない位置であるが、足音が聞こえる。そしてそれは、みるみる内にこちらに近づいてくる。

人数は三人。どうする。身を隠すか。いや、明らかにこちらの場所を認識している。

判断を迷っている余裕は無い。

周囲を見回す。

奇襲ができる場所の目途を立て、警戒を怠らず。

ダリウスはその足音と気配に真正面から向き合い、構える。

正面からの迎撃。それが、ダリウスの選んだ答えだった。

邂逅の瞬間を、動悸を収めながら待つ。

先手を取り、一人か二人を無力化する。そこから戦闘を続行するか逃走するかは状況次第だ。

そこで、ダリウスは首をかしげた。

統率の取れていた相手の歩調が、乱れたのだ。

一人だけが明らかに速く駆けだし、突出した。

……何故だ。もしかしたら、こちらの無力化を前提とした訓練されている人間では無く、搜索に携わっている一般人の可能性。

それに思い当たり、姿が見え次第の攻撃は控えた方がいいのでは、

とダリウスは考える。だが。

民間人にしては、速すぎる。というか、一般的な軍人と比較しても遙かに速い。

決して足場のよくないこの場所でのこの速度を出せる、一体何者か――何者なのか。何故各個撃破の危険を冒して突出しているのか。その答えを、ダリウスは直後に知り、そして深く納得する事となる。

「……………」

「……………ああ、成程……………」

斜面を駆け上がり、その相手はダリウスの目の前に立った。同時に、部分的変態により形成された毒針を繰り出そうとしていたダリウスはその手を下す。

軍服に身を包んだ男だ。しかし、それより重要なのは、明らかに人間のものではない毛に全身が覆われている、という部分。

全力で駆けてきたのか荒く息を吸って吐きながらダリウスを見つめるのは、嘆き、怒り、焦燥と様々な感情がない交ぜになった複雑な表情。

「なん……………で、聞かせてくれ……………隊長!」

よく響く大声で、怒鳴りつけるかのようにダリウスに問う男。

それに対し、気まずさで頬をかきながら、ダリウスはU—N—A—S—Aの時と同じ、努めて軽い調子で言葉を返すのだった。

「久しぶり……………体はもう大丈夫かい? チャーリー」

「しかし、だよ? アイツの探すものがこんな場所に落ちているのかね? 不思議だね」

それは、彼らの邂逅より少し後の事だった。

U—N—A—S—Aのそれと違う隊服を纏った十数人の一団が、山道を進んでいた。

その先頭に立つのは、暗い色の赤を基調としたきらびやかな衣服を身に着けた少女。

疲れた様子は伺えず、機械的な歩調で先頭の少女に合わせて歩みを

進める。

そこで、少女が呟いた言葉。それに、敏感に反応し、内の一人が少女に話しかける。

「……エスメラルダ様、もう少し発言には」

「黙れ」

苦言を呈したのは、少女、エスメラルダの数歩後ろを歩いていた隊員。

その回答は、足を貫通し地面に突き立った。槍の如き大きさのフォークだった。

「……………あつ……………!」

苦痛に身を震わせ、しかし足を地面に縫い付けられているためのたうち回る事もできず、隊員はただ顔を歪める事しかできない。

「ンン……………やっぱり、人が多いなあ……………」

フォークを引き抜き、木々の切れ間から少しだけ見える青空を眺めながら、エスメラルダはその手に持ったものを一口齧る。

水気が滴る赤色のそれを咀嚼しながら、恍惚にその目と表情が歪む。

「まあ、いいけど。あの子は人気者だね」

満足したのか、一度齧っただけのそれを放り捨て、真っ赤に濡れた手を舐める。

「さて、そろそろ本格的に探そうか……………でも、その前に、邪魔者の排除から、かな。山狩りってヤツだね。懐かしいなあ……………まあ昔は私からられる側だったけど」

唐突な思いつき、といった調子で一つ頷き、エスメラルダは腰に差した注射器を首に差す。

それを見た隊員達の間にも、動揺が走る。

背からは脈の走った半透明の薄い翅が生え、右腕からは鋭い針が伸びる。その体は黒の体皮覆われ、所々に緑と赤の模様が浮かぶ。

「お、お止めくださいー!」

「ン? ああ、このままじゃ君達を巻き込むから、だろう? わかつているとも」

慌てて制止した隊員に対し、正気の色が薄い笑みのまま、エスメラルダは言葉を返す。

広範囲の破壊。敵味方の選択などできるはずも無いそれは、一度解放されれば周囲に味方ばかりのこの状況でそれを使う事は、凄惨な自爆行為に他ならない。

実際はそれに加えて、そのあまりに目立つ一撃によって今この一帯を捜索しているU—N—A—S—Aの部隊に所在が知られ、遭遇しないためでもあるのだが。

「さてさて、じゃあソレを開いておくれ」

「了解です……?」

一先ず、この狂人にもいきなり能力を使わないだけの分別はあったのか、と安心した隊員であったが、次の指示に疑問を覚える。

エスメラルダが指を指したのは、隊員が運んでいた棺桶のような形状の箱。

何が入っているのかは知らされていないなかったし聞く事もできなかったが、かなりの重量物でここまで運んでくるのに相当の苦労を必要とした。

指示に従い、開かれた箱。そこにぎっしりと詰まっていたのは、握り拳大ほどの大きさの、楕円形の機械のような物体だった。

それを確認し満足げに頷いた後、エスメラルダは左手をひよいと空に向けて。

その動きに呼応するかのように、無数の楕円形の物体が半分ほど、ふらふらと弱弱しく、まるで殆ど残っていない力を最期に振り絞っているかの様子で宙に浮かびあがる。

さらに、物体はエスメラルダにふよふよと近づいていき、周囲を取り囲み、渦を巻き始めた。

「うん、良いね」

口を歪め、エスメラルダは笑う。何をしようとしたのか、隊員達にはわかった。しかし、それを止める隙は無く。

エスメラルダの腹部が、激しく振動した。彼女の能力、その予備動

作。

隊員達は、そこで死を覚悟した。

しかし。

それが止まっても、いつまで経っても破壊の嵐は吹き荒れない。

音こそ多少はあつたのもの、それは鼓膜を破壊するわけでも、物理的な破壊をもたらすわけでもない。

エスメラルダはその左腕をまるで指揮棒を振り上げる指揮者のように掲げる。

そこで、初めて隊員達はそれを見た。

エスメラルダの体内から伸び左腕に巻き付いた、五線譜のような金属の糸を。

その体内で鈍い光を放つ、機械のような何かを。

「……フフ、美しいだろう？ 私の可愛い子孫の為に作られた装備の

試作品……らしいよ。フリッツの奴に貰ったんだ」

自慢げに天に翳された腕。

それに呼応するかのように、これまで死にかけの魚のようだった楕円形の機械が、息を吹き返したかのように高速で天に向かって渦を巻きながら昇っていき、木々を超えて上空までたどり着いた数百はあろうかというそれは、四方八方に散って行く。

そして。

無数の激しい爆発音が、森の、山の、所々に響き渡る。

「クク……アハハ、アハハハハ！ ああ、良い、良いね！ 悲鳴を聞けないのが残念でならないよ！」

狂ったように笑うエスメラルダと、その様子を唾然と見つめる隊員達。

結果はその音を聞くだけでわかるのに、その原因、原理がわからな

い。「まあ、コレで死ぬ程度だったらそこまでだろうし……楽しませてお

くれよ、私の可愛い子孫!!」  
駆けだしたエスメラルダ。その後を、隊員達は慌てて追いかける。  
この惨劇が起こるまで、あと一時間ほど。

## 幕間 夜明け前

—2620年 12月4日 楽園最奥部『生命樹の間』

「……さてはて、どこに落としたものやら。ずっと探しているんだけど、まだ見つかってないんだ」

頬杖を付き独り言のように呟くオリヴィエと、傍に控える希？。

その面前で、エスメラルダと千古はそれぞれの別の面持で傳っていた。

両者に見られるのは、従属の意思。それがあある意味で強制されたものか己の意思によるものかという違いはあるが。

はつきりとした差異は、その表情だった。

エスメラルダの目と表情。そこからは、オリヴィエに対するあからさまな嫌悪が伺える。

千古のそれはさらにわかりやすく、頬に赤みが差している。時々オリヴィエの方をちらりと見て、すぐに視線を逸らしてしまう。そこには、主から視線を外すなんて失礼、でもでもという複雑な内心が伺える。

このような反応は、二割ほどは二人のオリヴィエに対する普段からの感情に由来するものだ。

侮蔑と恋慕。ほぼ真逆の位置に存在するそれをそれぞれ抱える二人は、ここまであからさまでなくとも普段からそのような様子がある。

では、残り八割。

「オリヴィエ様、そろそろ出てはいかがつすか？」

「ごめんもうちよつと」

それは、今現在のオリヴィエの服装に起因している。エスメラルダが唾棄するほどファツションセンスが悪いわけでも、千古が照れるほど格好いいというわけでもない。

その状態を一言で表すならば、『入浴中』であった。

『神殿』最深部。特に楽園と呼び称される、槍の一族、その中枢とも



言われる区画。

その光景は、荘厳な玉座と呼ぶにはあまりにも遠かった。

高さ十数メートルはあろうかという巨大な樹のような形状をした二重螺旋を描く装置に、大図書館の書庫の如く部屋の壁面にずらりと並んだ無数の透明な円柱状の水槽。その内を満たす中身。

そんな、どちらかと言えば特殊な工場と呼んだ方が正確なこの場所で、オリヴィエは全裸で液体に満たされた円柱状の水槽、俗に培養槽と呼ばれるそれに浸かり、肩から上だけを上蓋が開けられた槽の外に出していた。

その縁に体重を預け、リラックスしている状態だ。

「この前の傷が沁みてねえ……まだ中身まで再生してないかなあ」

「オリヴィエ様、年頃の女の子の前です」

透明な容器と透明な液体からは当然、その裸体がそのまま透けて見える。

一族の頂点に最も近い血族であるからこそその均衡の整った体付き、傷一つ無い肉体。足を組んでいるため際どい部分こそ隠れているが、部下を招集する際の姿としてはあまりにも無体としか言いようが無い。

希？も若干白けた目を向けている。

「とつとと服を着ろゴミクス」

「わわわ私は命令するなんてそんな……でもそのままでは直視できないのでできれば……」

理由はそれぞれあれど総意として、『服を着ろ』であるのだが、当の本人は従者と部下からの抗議などどこ吹く風。そのままの状態で話を続ける。

「さて、二人には探してもらいたいものがある」

自然な流れとは言い難いものの仕事の話に移るオリヴィエに、二人は耳を傾ける。

それに関する詳細な情報。計画そのものにとって重要なものではない。だが、オリヴィエが以前に無くしてしまった、暇さえできれば探してはいるが今だ見つかっていない重要な私物。候補は二つ、アメ

リカと日本。

「私はパスだよ。オマエのおつかいをするためにここにいるわけじゃない」

オリヴィエの説明が終わった直後、話を切り捨てるようにエスメラルダが立ち上がる。

話を聞く限りでは、それが重要とは思えない。くだらない探し物としか言いようが無かった。

さらにそれが私物とあつては、わざわざ自分を呼び出す意味など皆無だ。

「……千古ちゃん、待った」

それは、常人には知覚困難な一瞬で行われた。エスメラルダが付き合つていけない、とオリヴィエに背を向けた瞬間。

千古が腰の太刀に手をかけ、それを振り抜きながら隣のエスメラルダへと踏み出そうとした。だがその動作は、希?の制止の言葉と同時に放たれた銃によつて右足の甲に穴を開けられ強制的に止められる。

「……っ」

「礼を言っておくよ、希?」

痛みに眉をひそめ、千古は抜きかけた太刀を鞘に納め、穴の開いた足を押さえる。

エスメラルダは千古に一度目を向け、彼女にしては珍しく希?に少しだけ頭を下げた。

その額には、表情は変わっていないながらも一筋、汗が流れる。

「見苦しい所をお見せしました、お許してください。オリヴィエ様、当主様」

次いで千古が希?とオリヴィエ、両者に向け、正座し額を床に付ける。

「まあまあ、チコちゃんの気持ちもわかるっすから、そうかしこまらずに」

「そうだね、君の忠義、とても頼もしく思うよ。だけど彼女を許してやってくれ、断られても仕方の無い事をお願いしている自覚はあるさ」

「……ありがたきお言葉です」

希？とオリヴィエ、二人の言葉に立ち上がり、千古はもう一度深く頭を下げる。その足の穴は既に塞がりつつある。

ひとまずエスメラルダは不参加。そのような流れで話は纏まりつつあった。

「しかし、残念だね。このお願いを聞いてくれたら、お礼として君の記憶に関係した研究の優先度を上げよう、と考えていたのだけど」  
しかし。

悲しそうな声色で語るオリヴィエ。その内容を聞き、部屋の自動扉が開く一歩手前まで歩いていたエスメラルダの足が止まる。

「それに、何だったかな、候補地、名前は忘れてしまったけど、ランキング1位の彼が脱走したらしくてそこに近いから、ついでに勧誘でもお願いしようかなとも思ってたんだけど」

「……考えてやってもいい」

オリヴィエの最初の言葉で、エスメラルダの頭にノイズが走る。浮かび上がってくるのは、擦れた映像。自分が一番大事にしていた部分が空白に覆われている記憶。

そして、その次に、自分の子孫、その表情。

「千古ちゃんは日本の方って事で行ってもらえるかな？ キミなら見つけてくれる、そんな気がするんだ」

「ご期待ください！ 絶対に見つけ出して見せますよ！ ってわあっ!?」

オリヴィエの微笑みに先ほどまでの固かった表情を緩め、喜色満面で答える千古。直後オリヴィエが裸である事を忘れて直視してしまい、慌てて視線を逸らす。

「……ン。ま、その色ボケのガキよりは私の方が上手くやるさ」  
「別に貴方は生きて帰ってくるだけで上出来だと思えますよ。そんなでもオリヴィエ様の役に立つ身ですし。成果は私にだけ期待してください」

火花を飛ばす両者をオリヴィエはにこやかに、希？はそんな両者と

オリヴィエを苦笑いしながら見つめる。

二人と違い、オリヴィエから直接聞く事によつて希？は知っていた。この探し物が、オリヴィエにとってどれだけ大きい意味を持つのかを。

そして、計画には関係無いと言いながらも、これの有無で計画が大きく変わる、あるいは無くなる程の変化をもたらすものであると。

「私は中国で友人と会う約束があるから、それが終わったら合流させようかな」

改めて、話は纏まった。さて、そろそろ出るか。これ以上浸かっているとコストと希？の説教が怖い。

オリヴィエは培養槽の淵に向けた両手に力を入れ、体を持ちあがる。

ここで問題が約二点浮上した。

「ちよつ、チコちゃん見ちゃダメっす！ オリヴィエ様のオリヴィエ様が！」

「しえいちゃんちよつと遅いです！」

一つ目。当然ながら、組んでいた足が解け、足を延ばした体勢となる。

混乱しているのか訳のわからない事を叫びながら、慌てて水槽の前に立ちオリヴィエの体を隠す希？。

希？が間に合わなかったのか、はたまた反射神経が良すぎるのか、それをモロに見てしまい顔全体が真っ赤に染まる千古。

何やってんだこいつらと呆れた半目を向けるエスメラルダ。

そんな、世界をどうこうしようとする集団にしてはあまりに和かな光景。

「……あ、やばい」

そしてもう一つ。オリヴィエが、うっかり卵を握り潰してしまった、そんな調子の気の抜けた声を出す。

その力を込めた右腕。その肩口を内から突き破るかのようになり、触手が一本伸びる。

吸盤が所々に存在し、ぬめりのある質感のそれ。だが、それは一般

的な生物のものとはかけ離れていた。

その触手の先端には、グラデーションなど放棄したかのように、唐突に人間の手が形成され、触手の全体には薄く人の体毛が生えていたのだ。さらには、所々に昆虫の毒針のようなものが無秩序に伸びている。

それは、オリヴィエの制御下には無い様子で、びちびちと打ち上げられた魚のように暴れまわる。

「ホラ、気を抜くとすぐ暴走する……時々大怪我するし安定までは遠いなあ」

ふうと溜息を一つ付き、オリヴィエはその触手を左手で抑え込み、無理矢理体内に押し込んでいく。

「……まあ、そういう事で。お二人とも、成果を待ってるっすよー」

混乱する状況を、この場で最も適当そうな印象の、しかし実の所最もしつかりとした人間が一度手を叩き締める。

かくして、大部分がゆるゆるぐだぐだとした空気で決まった結論が、表で、裏で生きる人々に災いを与える事となった。

## 第74話 深山に爆音の響く

両者は、静かに向かい合っていた。しかし、それは表層の話。その内心、お互いは穏やかな気分では無い。

なんだか困っちゃうな、気まずいな、という様子で曖昧な笑みを浮かべるダリウス。

「激情を内に抑え込めんと必死なチャーリー。」

そんな対面の中、チャーリーはゆっくりと、しかし力の籠った声でダリウスへと言葉を向ける。

「隊長、率直に言う……俺達と一緒に、U—N—A—S—Aに帰ろう」

「……俺に隊長、なんて呼ばれる権利はもう無いよ」

答えを誤魔化しながら、ダリウスはチャーリーの様子を観察する。変態は終えている。この様子だと、同時に行動していた二人も既に戦闘を想定し変態している事だろう。

そして、互いの位置関係。距離にして2 m程の、少し踏み込めば一撃を浴びせられる場所。

ダリウスにとってはあまり好ましくない状態だ。

「じゃあ、せめて教えてくれ！ 何で逃げたんだ、また、人をああしてまで……！」

「答える必要は無いよ」

恐らく、この会話は長くは続かないとダリウスは考える。先ほどから投げかけられている質問、ダリウス本人としては答えたくないものばかりで、はぐらかされてばかりのチャーリーはもう実力行使だ、となるだろう。

「……最後の質問だ、隊長」

「——何かな」

同時に、チャーリーの表情が変わった。ダリウスに対して動揺していたそれはすっと消え、目の前の“敵”を見据える戦士のそれへと。そして、握った両拳を口ほどの高さまで上げ、足先で落ち葉を除ける。がさり、がさりという枯れた音だけが、そこに響いていた。

「アンタのこれまでの俺達への振る舞いは、全部嘘だったのか？」

「……」

先に動いたのは、ダリウスだった。地を蹴り、背後に飛び退く。同時に、その体の変質していく。

額からは短い触角が生え、両の腕には口吻と毒針、二本の凶器が。ダリウスは薬を持っていない。彼は『裏マーズ・ランキング』の頂点に立つ人間ではあるものの、その評価の殆どは人間の部分では無くMO能力に依存している。

そのため、戦闘において変態は必須。

αMO手術の特性上、薬を用いない変態は通常の変態よりも大幅に劣るが、致し方ない。

3人の人影が民間人だった時にいらぬ騒ぎになってしまうと考えるこの変態を行っていなかった事については後悔しかない。

でもあと少しで、体内の発音器官が組み上がる。そうすれば。いやしかし――

「アシユリー！」

「は、はい！」

その声は、ダリウスの思考を突然横切った。ダリウスを追撃せんと駆けだしたチャーリーが、叫び声に近い音量で人名を呼ぶ。それに答える、森に響くその残響にかき消されてしまいそうな弱弱い声。

「……っ！」

突然、ダリウスの体が動かなくなった。チャーリーと向き合いながら後退するため、背後に倒れこむように重心を傾けていた体を、誰かが正面から掴んで支えたかのように。

顔を歪めるダリウス。チャーリーの背後に、樹上から逆さまにぶら下がっている少女が、怯えた様子ながらも、ダリウスから目を離さずにしつかりとその姿を見据えている。そして、その手から伸びているのは、目を凝らさないと見えない、透明の糸。

何が起こったのか把握したダリウスは、自身の左腕を見た。そこには、粘液と共に糸が繋がれていた。

「まさか、ね」

やられた。会話の途中で構えを取る。それは、周囲を警戒していたダリウスの目線を、脅威としてそこに集中させるため。

大げさに落ち葉を蹴っていたのは、味方の動く際の僅かな音も悟らせないため。

ダリウスが答えないとわかっていたのに質問を繰り返していたのは、合流が済む時間を稼ぐため？

「非戦闘員の子まで連れてくるか……!」

「何言ってるんだ、ウチの立派な隊員だろうが!」

それは、特殊な狩りを行う捕食者。

造網性の仲間のように網を張り獲物を捕らえる待ちの一手でもなければ、徘徊性の仲間のように自らの足で獲物を捕らえるほどアクティブに自らの体を動かす事もしない。

彼らの狩りは、仲間達が罨や住まいに使う素材を振り回し、直接相手を拘束するという方式で行われる。

その姿は、古典的な捕縛劇の道具を彷彿とさせた。

アシユリー・ハンプトン

MO手術”節足動物型”

——ナゲナワグモ——

「後は任せましたあ副隊長!」

「おうよお!」

今にも泣き出しそうな表情で、ダリウスを捕えたアシユリーは糸を引っ張る。

背後のアシユリーから眼前のダリウスに伸びる糸。自身の頭の横を通過しているそれを、チャーリーは掴み、自分の手首に巻き付ける。

「やってくれる……!」

不完全な変態と言えどダリウスの力はアシユリーに勝っていた。



このまま力任せに綱引きをすれば、ダリウスが引き勝っていたのだが。

相手がチャーリー、それも変態後となれば、勝ち筋はもはや無い。もはや距離を離す事はできない。

ダリウスの額に冷や汗が浮かぶ。

ダリウスが両手の針を構えた瞬間、チャーリーはダリウスの目の前まで迫っていた。

迎撃に、右腕の口吻を繰り出す。腹を狙った一撃。しかし。

「甘え」

チャーリーはその右腕を払い上げ、その懐に潜り込む。

左腕で防御する時間は、既に無く。

「がっ……いー」

ダリウスの腹に、鈍い一撃が入る。

軍隊式格闘術。素手で凶器を持った相手に対抗する事も想定されたそれを習得しているチャーリーにとって、不完全な状態の変態ではないダリウスを相手にする事など容易い。

ダリウスも当然、近接戦闘の訓練を積んではいるものの、年季が違う。

「忘れちゃったのかよ班長、俺の順位を」

距離を取ろうとするダリウスの顎に、正面からの拳が直撃する。

一瞬脳が揺れ、視界が霞むダリウス。それに対し、チャーリーは無慈悲な連撃を加える。

『7位』。それは、『裏マーズ・ランキング』上位の中でも特別な意味を持つ順位だった。

縁起の良い数字だからか？ ……いや。

1位。2位。3位。4位、同率。6位。チャーリーより上の人間達、それに共通する特徴、それは。

「自分で言うのはこっぴどく恥ずかしいが……『MO手術最強』は伊達じゃねえんだよ」

そう、彼らは全て、αMO手術とそれによって得られたベース生物

によってランキングの頂点を極める者達。『兵器』と呼び称され、班の統率を任された強者、幹部搭乗員<sup>オフィサー</sup>。その戦場は、広域制圧、猛毒、再生能力の跋扈する魔境だ。

だが、一方のチャーリーは。通常のMO手術で、毒を持たず、広域の制圧能力も持たず、再生能力も持たず。

ただ、その牙と己の力で彼らの背に食らいついた。

そして、その力は今、容赦無く眼前の敵に向けられる。

「忘れて……いないとも……でも、君も忘れていないか、チャーリー」  
反撃は許されず、その表皮の所どころがひび割れ、変質した虫の体液と人間の血液の混じり合った液体を散らせながらも、ダリウスはチャーリーに言い返す。

「あ……う？」  
ぞわり、チャーリーの背に悪寒が走る。何かを見落としている。いや、大丈夫だ。このまま反撃の隙無く、打撃を続ければ。

そんなチャーリーの視界の端に、ダリウスの左腕が映る。毒針。この戦いで、一度たりとも攻撃に用いていなかった武器。そのため意識から漏れていたが、なんだそんなものか、とチャーリーは攻勢を緩め、回避を……

「俺が、何位かって事を」

それだけの隙が与えられれば、十分だった。  
ダリウスの腹が、激しく振動する。

「――！・お前ら――」  
全てを察し、チャーリーは耳を塞ごうとする。

だが、全てが遅かった。  
空気が爆ぜる。

周囲の木々が激しく揺れ、それに驚いた鳥たちがけたたましく鳴きながら飛び去っていく。

「ふう……生きてるかい？ うん、大丈夫みたいだ……」  
そこに立っていたのは、ただ一人の男だった。

「くっ……そっ」

目前でその暴威の直撃を受け地に這い、必死に立ち上がろうとするチャーリー。

だが、立ち上がろうとしてはふらつき、倒れこんでしまいその身を起こす事はできない。

軍人として銃声や閃光手榴弾スタングレネードのそれを経験した身ではあるが、それでも感覚が掴めない。

『音響外傷』。突然の大きな音による、耳に起こる外傷である。

軽度のものであれば耳鳴りが、重度であれば聴覚を一時的に喪失する上に耳の内部、内耳神経系の損傷により平衡感覚を失い歩く事すらできなくなる。

これを封じるために、作戦を尽くした。

変態の隙を与えず近接戦に持ち込み、既に相手の変態していたなら有無を言わず腹を攻撃しその動作を行わせない。

音、と呼べる領域に留まっているかすらわからない無差別破壊、一度使われれば防御する術など存在しないそれを相手にするには、相手に僅かな隙すら与えず押し切り意識を奪うしか無かった。

「……チャーリー、それに、アシユリーとリックも。辛いから立ち上がろうとしない方がいい」

すぐにその言葉が今の彼らには聞こえない事に気づき、ダリウスはジェスチャーでそれを伝える。

ダリウスの足元には、真上から奇襲を仕掛けようとしていたアシユリーが倒れていた。こちららも必死に起き上がろうとしているが、こちららは体を起こす事すらできず、平衡感覚を失った気分の悪さに苦しんでいる。

チャーリーですら起き上がれないのだ、元民間人、非戦闘員であれば猶更である。

そして最後に、ダリウスの背後の木陰に顔から地面に倒れこんでいた青年。

無理に立とうとするな、のジェスチャーを見て、何故か親指を上げる。

こんな状態でもお調子者なんだな、と溜息を付くダリウス。

アシュリーがいた時点で、最後の一人はこの青年、元班員のリックであると予想は付いていた。

このような遭遇戦になると何かと厄介な能力であるため、警戒していたのだが、近くに控えていてよかったと安心するダリウス。

「んー、もう一度変態すれば治るかな……」

かなり出力を絞ったが、それでも戦闘不能に追い込むには十分すぎる威力だった。

周囲にU—N—A—S—Aの他の部隊がいれば、即座に集まってくるだろう。でも、少しだけ。

自分を追ってきたかつての部下達に微笑み、ダリウスはそこに座り込んだ。

……そして、数十分後。

「ごめん、暫く我慢してね」

「……了解」

ダリウスの前には、三人が立っていた。その体はアシュリーの出した糸で巻かれ、腕を動かす事はできないが。

あの後再度の変態により、耳の障害は治り、三人は歩く事ができるようになった。

それから追手を警戒して少し移動し、アシュリーが糸を使ったトラップを張っていた目立たない地点で休憩という事になり、今に至る。

「皆、僕はやらなくちゃいけない事がある。だから、戻れない」

ダリウスの言葉に、三人は顔を伏せる。

「隊長、本当に、あのお屋敷の人達は……」

手をへなりと伸ばしてのアシユリーの質問。戦闘の前にチャーリーからもされたそれに、ダリウスは眉に皺を寄せる。

そして、暫く考え。

「アレは、僕がやったわけじゃない」

その真実の一端を、最も単純な回答で語った。

「だろうと思ってた」

「……よかったあ」

「やっぱな！」

三人の反応はそれぞれだ。納得した様子で頷くチャーリーと、安心した様子のアシユリー、何だか明るいリック。

「……でも、この事はU—N—A—S—Aには伝えないでほしい」

だが、それもダリウスの次いでという言葉で再び曇る。

「僕の目的が終わったらさ、U—N—A—S—Aの前に出ていこう、と思うんだ」

「……何で」

さらに、一言。脱走した大量殺戮さえ可能とする力を持った凶悪犯が、わざわざその収監を担う組織の前に現れる。そうなった時の対応など、わかりきっている。生かして捕獲など考えようとはしないだろう。

「人喰いの化物は、人間の手で直接殺されて終わるべきだろ？ 死刑

とかそんなんじゃないか」

破損した邸宅とそこで暮らしていた事務員の死亡。詳細に調査すればダリウスの責任では無い事がわかるのは確かだ。だが、当のダリウスが逃げ出した。多数の戦力がその追撃に割かれている。この事情を考えれば、恐らくは詳しく調べるまでもなく、U—N—A—S—Aはダリウスが犯人であると認識している事だろう。

「班長は化け物じゃねえ！」

「ダリウスさんは人間です！」

「死ぬとか言うなよ、リーダー」

同時に、三人が声を荒げる。それは、別々の内容で、しかしダリウスを信じた、そんな言葉だった。

「ありがとう、でも」

それを聞いて、ダリウスは照れくさそうに笑う。そして。

「それを、僕に喰われた人を大切に想っていた人の前で言うような事があれば、許さない」

その表情は、冷たいものへと変わった。

「……ッ」

「じゃあね、皆……きつと、僕は皆の事が大好きだよ」

少し、名残惜し気に。どこか、苦痛を感じている様子で。ダリウスは三人に微笑みかけ、背を向けた。

「……取引、いや、脅迫だ、班長」

何かが裂けた音。唐突なそれに、ダリウスは振り返る。そこには、糸を振り払ったチャャーリーが立っていた。

思わず構えるダリウスだったが、チャャーリーが仕掛けてくる様子は無い。

代わりに、その右手には、通信機が握られていた。

「今から、コイツで捜索部隊の本隊と連絡を取る。……目標を見つけた、つてな」

その言葉に、ダリウスが硬直した。

「それをされたくなければ……どうか」

チャャーリーは、一步、二歩、ダリウスに近付き。

それを見るアシユリーとリックも、その意図を察したのか、静かに頷き。

「俺達に、手伝わせてくれ」

チャャーリーは、顔を上げる。

「身勝手なのはわかってる。アンタが望んでないのもわかってる。……でも」

その顔を歪め、まるで懇願するかのよう。

「生きて、欲しい。俺達にとっちゃアンタはもうバケモンじゃなくて、料理が上手くて世話好きでちよつと抜けてる、良い上司なんだよ」  
自分達のリーダーに対して、脅迫にならない脅迫を突きつけた。

「……ああ、本当に、勿体ない部下だなあ」

それに、人喰いの怪物は、ただの人間は、目元に涙を浮かべながら、笑った。

「んじゃあ、出発と行くか！」

ダリウスへの協力。ただし、自分達の命を最優先する事。

他にもいくつかの約束の末、彼らは協力する事になった。

その内の一つに、『U-NASAにはダリウスに脅されて嫌々従つたと言う事』という内容があったが、どうも守ってくれなさそうなのがダリウスは心配だった。

しかし、何はともあれ。再び、準備は整った。チャーリーが備品として所持していた昆虫型の『薬』も入手できたおかげで、標的と直接相対した時にも互角に戦える可能性が高まった。

「……ん、定時通信か」

そんなダリウスの傍らで、チャーリーは通信機を取り、耳に当てる。

「おいおいアシュリー、お前またドジかよー！」

背後では、樹上に設置されたトラップを回収しようとしたアシュリーが糸に引っかかり、リックがそれを指差して笑っている。

火星の時は弱気な通信員でちよつと不安だったのに随分頼りになるようになった、と思ったらやっぱりあんまり変わってないな、と微

笑ましくなり、ダリウスは助けに行こうとする。

「……班長、リック……これ」

だが、そこで異変に気付いた。

アシユリーの顔が、ひどく青ざめている。

「私の、糸じゃない」

「はい、こちらはまだ目標を発見できては——」

「おや？　元第一班の皆さん、流石、火星帰りの勇姿という他ありませんね」

突然投げかけられた声に、全員の視線が映る。

そこに立っていたのは、一人の女性だった。

黒に加えて銀というべきか灰色というべきか、という色に染まった体。額に形成された、三つがそれぞれ対となった六つの目。本来の目に付けられた丸眼鏡。

その身を包むのは、この自然の中で場違いな正装、スーツ。

「ああ、高名は聞き及んでいます、ダリウス・オースティン様。初めまして」

そして、その胸には蟻を模したエンブレム、U—N—A—S—Aの猟犬と呼び蔑まれる隊の部隊章が鈍く光を反射していた。

「第七特務隊長直属、カローラ・プレオバールと申します。どうか私も、任務達成のお零れに預からせてくださいませ」



## 番外編 副官会議

『副官』。副長とも呼ばれるそれは、火星探索支援計画、通称『裏アネックス計画』において正式な役職では無い。

だが、班長、幹部搭乗員オオフィイサーが死傷した際や分散して任務に当たる場合など指揮を執る事ができない状況において、他の班員を統率し任務を遂行する立場の人間が必要なのは、何が起こるか想像もつかない火星での任務には置いて然るべきであると言えよう。

そして今。幹部搭乗員不在という状況の中、彼らに一つの任務が舞い込んできた。

それは。

『第一回！ 裏アネックス計画副長親睦会！』

会議室の入口に置かれた、立て看板に張られている紙に書かれた文字を怪訝そうな目で読みながら、彼らは一人、また一人と部屋に入っていく。

「さて、お集まりいただきありがとうございます……って、コレ俺が言うの？」

少しの間をあげ、如何とも言い難い難い空気が流れる中最初に発言したのは、日本第二班の席に座る二人、その片割れだった。

「おいおい俊輝っち、別に堅苦しい会議とかじゃねえんだし、もつとりラックスしてこうぜ」

少し緊張した様子の彼、俊輝に対してこちらは逆にだらけきった様子の隣に座るのは、見るからにお調子者という所作の俊輝と同年代の青年。

「あ、どうもー。重森健吾っす」

「山野俊輝です。今日は……いや、これからよろしく」

先陣を切り、挨拶をする二人。それを見つめるのは、複数の瞳だった。警戒している様子のも、好意的なもの、それは様々だ。そして、まばらな拍手が部屋に響く。

「んじゃあ、次は俺だな。第一班のチャーリー・アルダーソンだ」

それに続いたのは、金の天然パーマが特徴的な青年。

挨拶も早々に再び席に座り、隣に次は順番的にお前らだろ、と目配せする。

「……第三班。レナート・アレクサンドロヴィチ・ベレゾフスキーだ。レナートで良い」

では紹介に預かって、などという丁寧な調子では無く、威圧感に満ちた、ひととき体格の良い男が低い声を上げる。

顔の所々に付いた傷跡から、明らかに堅気の人間では無い事がわかるその男は、挨拶を終えると隣の席を乱暴に叩く。

「チツ……横のと同じ三班、マルク・アルマゾフだ。てめえらと話す事なんてねえよ」

レナートの乱暴なフリに応じ、舌打ちをしながら立ち上がる事さえせず手で追い払うような動作をするのは、小柄な少年だった。

嫌々来させられた感に溢れた彼は、終始むすつとした表情を維持している。

「第四班の方……はまだ来ていないようですね。では……第五班、ダニエル・アードルングです。皆さん、本日はどうぞよろしく願います！」

そして、そんなマルクと対照的に整った姿勢で立ち上がり、完璧な角度で礼と挨拶をしたのは、人懐っこさと礼儀正しさに溢れた、見るからに育ちの良さそうな青年だった。

「第六班は欠席だそうだ。てことで」

話を、始めよう。そう続けようとした俊輝は、とある事に気が付いた。

重要、あまりに重要な、しかし、すっかり意識から零れていた、その内容。それは……！

「……ってことで……この会議、何話すんだ？」

俊輝は所在なさげに周囲を見渡す。え？ お前が聞いてるんじゃないの？ と言いたげな健吾、チャーリー。どうでもいい、という様子のレナート、マルク。驚愕に目を見開くダニエル。

さて、この反応からはじき出される答え。

——誰も、この会合が何なのか知らないのだ——!!

裏アネックス計画は最初から各国共同で事にあたろうとしていたアネックス計画と異なり、最初は各国が独自に遂行しようと考えていた計画である。そのため、共同で任務を行う事になった今でもその名残で各班の独立性が強い。それは即ち、支部を跨いだ班員の交流が少ない

しかし、これではダメだと声を上げた男がいた。

小町小吉。アネックス計画実働部隊を総べる指揮官、『アネックス1号』の艦長の任に就く男である。

そんな彼が催したのが、今現在別の会場で行われている、表裏アネックス計画幹部搭乗員の親睦会だ。

そして、それと同時に行われたのが、この裏アネックスの一般班員の代表である副官を集め関係を深めてもらおう、というこの親睦会。とはいえ、今ここに集まっている人間の殆どはこれが業務としての会議なのか本来の目的である親睦会なのか空気を読みかねている様子であったが。

助けて班長！ 小町艦長！ と俊輝が泣き言を言いたくなるのも仕方ない状況と言えよう。

「……なんだな、それにしても、若え奴ばつかじゃねえか」

そんな詰まった空気の中で、意外にも最初に口を開いたのは、レナートだった。

それを聞き、居並ぶ皆は確かに、と頷く。

当のレナートを除けば、この場にいる人間は二十代、あるいはそれよりも下の年齢の人間だ。

「ま、俺はともかく若いヤツらなら話も弾むんじゃないか」

何だこの人やべえ奴かと思っただら案外社交的じゃん、と健吾が俊輝

にこそこそと話しかけ、俊輝もそれに頷く。これが、年長者としての余裕か、と。

年齢層が近ければ、軽い調子で話しやすいし、悩みや他の話題もある程度共感できるのでは、これはやりやすい、親睦を深める恰好のチャンスなのでは、と。

ありがとうロシアの人、と内心で相変わらず腕を組んだままのレナートに感謝しながら、俊輝が、同じ事を思ったのかチャーリーが、ダニエルが、同時に何か話そうとしたその時だった。

「失礼、遅れてしまったようだ。第四班の班長補佐を務めているキ炯明ケイメイだ。よろしく頼む……ふむ、若人が多いのか」

いや空気読めよおっさん、などとはこの場の誰も言いだせるはずも無かった。

「だから、違うっつんだろ！」

「またまたー、お兄さんに任せなさいよお」

部屋の隅での乱闘、マルクに非常に鬱陶しく絡む健吾。その顔は両者別の理由で赤い。

「成程、ムエタイを！ それは、是非今度見せていただきたい」

「ええ、勿論」

和やかに話す、ここに集まった集団の中でも特に落ち着いている二人、ダニエルとプラチャオ。

「若いってのはいいもんだなア」

「お前もまだまだだろうが」

「ウチの馬鹿が本当に申し訳ない……」

缶ビールをちびちびと飲みながらしみじみと呟くレナート、それに

ツツコミを入れるチャーリー。

顔に手を当て同僚の失態から目を逸らしながら謝る俊輝。

あのぎこちない、方向性すら定まっていなかった会議開始からわずか15分でこのような事になるとは、この場の誰が予想したのだろうか。

開始早々に中国・アジア第四班の副長、欣がやはり自分ではなく班の若い人間を代わりに出席させよう、いい勉強になるだろうと言い残し立ち去り、代わりにやってきた青年、プラチャオを迎え入れ。

空気読めとか言ってすみませんでした気遣いありがとうございますとその場の多数が欣に感謝したところから親睦会はスタートした。

健吾がやっぱり親睦会って言うからには飲み食いしなきゃな！

という事で購買に酒を含んだ飲食物を買いに行き、問題児がいなくなつた事で真面目な仕事の話は早々にそこで処理され。

以降、早々に出来上がった健吾が周囲に絡みだし今に至る。

「そう言えば、皆さんの班長ってどんなお方なのでしょう？」

最初の話題はダニエルから、班長、それぞれの上官である幹部搭乗員オフィサーについてだった。

今現在二次会の最中らしい彼ら。裏アネックス計画の実働部隊を指揮する他国の人間に興味を持つ、それを差し引いてもそれぞれの上司の話題は一般的なものと言える。

「ウチはお堅い感じかなー、あ、でもメシとかには何だかんだ付き合ってくれませ」

「ちよつと俺にやー合わん人かね」

ダニエルと元々仲の良い二班の二人が、同時に答える。

その反応から第二班の班長、どうも厳しい人らしいという事が伺える。

「……まだわかんねえな、話してる限りじゃ悪人には思えないんだが」

次に、チャーリー。

その言葉には、どこか割り切れない思いが感じられる。

何か事情を抱えた人なのだろうか。

「ガキだよ、何であんなのが……」

「俺みたいなのはや勿体ない人だ」

第三班。二人の語る差が大きく、どうにも像が繋がらない。マルクはむすつとした様子で、レナートはこれまでで一番機嫌が良い様子でどこか誇らし気に。

「そう、ですね。どこか距離を置いているように感じます。仕事の話以外は殆どされませぬね」

プラチャオは、不満があるという様子ではないが少し悲しげだった。

「お前のところは？」

健吾の返しに、ダニエルはふむと考える。

先日の会話を思い出す。裏表の幹部の親睦会に参加する、あまり乗り気では無いが他ならぬ小町艦長の主催であれば仕方ない、と自分の班長から聞いた際に、自分も同じ時間に一般搭乗員代表の親睦会があると報告した際の反応。

”遊びや仲良しごっこなどと考えているわけではない。各班の情報収集は火星で我らがイニシアチブを取るためにも大事な仕事だ、せいぜい頑張りたまえ”

”だが”

”まあ何だね、他国に関係の深い人間が増える事によって君が精神的に充実し任務により励むようになるならば、こちらから諸経費を出すのも悪い選択では無い”

「……不器用な人です」

なんだそりゃーと笑う健吾達を横に、ダニエルは小さく微笑んだ。

……と、ここままで終われば、ある程度お互いを知った上で、後腐れなく別れる事ができただろう。

「ハイ！ 恋バナ！ 恋バナがしたいです俺！」

酔っ払い顔を真つ赤にした健吾が、唐突な大声で叫ぶ。一瞬で変わる空気。

チャーリーと俊輝が同時に、内心で叫ぶ。

コイツ……学生気分が抜けきつていない！ ……というか、休学中なだけで実際学生だったのだろうか。

「コイバナ……？ ああ、恋愛話な。だったらマルク、てめえの出番だろ」

「は、はあ？ 何がだよ？」

俊輝がぎこちなくいや恋愛とかじゃないんだけどね？ でもね、場を盛り上げるためにしようがなくね？ などと言いつつ訳をしながら幼馴染とのエピソードを話すか、それともダニエル辺りが何か語ってくれるだろう。そんな予想をしていた健吾に、予想外の方向からの闖入者。

上機嫌のレナートが、マルクの背をばしばしと叩く。

「ん、話さねえのか？ じゃ、俺が紹介してやろう」

「レナート、てめっ……」

そもそもマルクには何のことかわかっていない、だが止めないと面倒な事になるといった様子で、レナートに飛びかからんとする。

だが、体格の違いは如何ともし難く、あっさり抑え込まれ。

「お嬢……ああいや、ウチの班長、マルクと年近い女の子だよ、マルクが事ある毎に気にしてるワケよ」

「はあ？ 違えんだけどー」

しみじみと微笑ましそうに語るレナート、食いぎみに否定するマルク。

「この前なんてな、班長が高い位置にあつて取れない資料で困つてな、周りにも言いだしにくいみたいだったからよ、俺が行こうかと思つたらコイツが棚登つて取つてよ、それで読むフリ片付けしないで捨ててくフリして机に置いてそのまま出てったんだよ」

「ハア!? だから違えよ！ アレ何か読みたくなっただけで思つたよ

りつまんなかったから片付けも面倒でその辺に置いていただけなんだけど！」

全体的ににやにやとした笑いが向けられ、マルクの顔が徐々に赤くなっっていく。

しかしそれに調子づいた事もあり、レナートの話はそこで終わらなかった。

「あー、後はアレだな、誕生日に花束——」

「あ、あ、あ、あ、あ、殺すぞレナートオオ！」

エピソード二つ目にして堪忍袋が決壊し、マルクはレナートに躍りかかる。

だが体格に関しても格闘術にしてもその戦力差を覆す事はできず、十秒と経たない内に地に伏せる事となった。

「まあ何だな、ツンデレってやつか」

「意味わかんねえけど馬鹿にしてんのはわかるぞお前ええ！」

しかしマルクはそれにもめげず、今度はへつと笑った健吾に突撃していく。

「ま、うちのお嬢はその辺りはビツクリするくらい鈍感だからな、それに、俺より弱いヤツにお嬢は任せん」

「めんどくさい保護者だなアンタ」

「はは……そういうや、そういうそっちは最近どんな感じで？」

そんなヤンチャ二人を横目に、レナートとチャーリーは落ち着いた調子で笑い合っている。

そして、ドタバタ劇を繰り広げる二人から非難してきた俊輝もそこに並び。

「……フラれた。何か、部屋が獣臭いつて……」

流れるように地雷を踏んだ。

チャーリーがずーんと沈み込み、それに合わせてやつちまったと俊輝が慌て、席を移動してきた隣に話しかける。

「え、ええと！ そっちの、プラチャオ……君、だったっけ？ ど、ど



うよ最近！」

「呼び捨てで構いませんよ、俊輝殿。そうですね……、恋愛とは少し違うのですが」

何とか空気を変えようとした俊輝が、プラチャオに話題を振る。

これでプラチャオまでフラれたって言ったらもう回復不可能だろこの空気……とレナートは横目で見ながら思うが、追い詰められた俊輝にはそんな事は思いもよらないのである。

「班員に、年下の女の子がいます。普段から凄く頑張っていて、班員の皆の事も気遣う優しい人で……ふと気付くと、眼で追ってしまいませんね」

ただ頑張りすぎているように感じる時があるので時々心配になってしまうのですが、と繋ぎ、照れくさそうに笑うプラチャオ。

そんな彼の左右の肩に、それぞれ手が置かれ。

「わかる」

同胞に出会った、と短い、しかし万感の籠ったたったの三文字を発しながらプラチャオの肩に置かれていない方、左手の親指をぐっと上げるレナート。

「恋バナ、ってレベルで片付けていい話かは詳しくわかんねえけど……応援してるよ……」

俊輝もまた、目の端に涙をにじませながらプラチャオを激励する。

そして、同時に。

がたがたがたっ！

という、何かが転げ落ちたかのような音が、誰もいない、皆が固まっているのとは逆側の椅子の一つから響き、キャリー付き椅子が独りでにすーと動き、壁にぶつかる。

「……心霊現象？」

酔っ払いの皆はそれに気付く事も無く、気にした者も適当に流し。

取っ組み合いをしているマルク、いきなりの距離感に戸惑うプラチャオもそちらに意識が及ばず。

「いやー、何だかんだ話ができてよかった！」

そして、満足げな俊輝が、時計を確認し、そろそろお開きを提案しよう、と立ち上がる。

副官同士の話し合い、各国の思惑もあり重苦しいものになるのではないか、と思っていたけど、実際は違った。

当たり前前のであるが、皆それぞれの悩みがあり、それぞれの覚悟を持って当たっていて、時には発散したくもなる、紛れも無い人間なのだ。彼らが、共に地球を救う長い旅、その露払いを担う戦友なのだ。

そんな清々しい結論に至った俊輝は、さて宴もたけなわですが、と言いだそうとし。

「……で、俊輝殿、あなたのお話は？」

「そうだ、お前何も話してねえじゃねえか」

「お前の方も聞かせてもらわねえと不公平だよなあ」

辛い出来事をほじくり返されたチャーリーが、凶悪な笑みを向ける年長者のレナートが。真面目なプラチャオまでもが、俊輝に好奇の視線を向ける。

そして、健吾とマルクも、なんだなんだと戻って来る。ついでに、どこからか視線を感じる。

助けてダニエル！ と救いの手を求めるが、ふと振り向くとその本人は俊輝の退路をしっかりと断ち、期待に満ちた視線を向けていた。

「あ、いやその」

……逃げ道など、存在しなかった。

「スマン！ まさかアドルフがラーメンの食べ過ぎであんな事に――

「  
夜も深け、まだ会議室に灯りが点っている事に気付いた小吉は、慌てて扉を開いた。

本当ならば、向こうの隙を見てこちらに差し入れを持つてくる予定だった。

だが、親睦会でのエレオノーラの蛮行、二次会での悲劇から、こちらに関わる余裕が無く。

幹部搭乗員とは指揮官であり、最高戦力だ。その重要性は今更言うまでも無い。

だが、火星での戦いは彼らが全てでは無い。

幹部搭乗員と共に戦う戦闘員。掩護や調査、研究を担う非戦闘員。それら皆が、欠かす事のできない大事な人材であり、仲間達だ。

そんな彼らにも、今はまだ準備ができていないからその代表だけであるが、一般の登場員にも、仲を深めて欲しい。そう考えて催した、今回の会。

そちらに行けなかった事を申し訳なく思いながら、ちゃんと打ち解けているだろうかという一抹の不安と共に扉は開かれ――

「もう……もう勘弁してください……」

「まだだ、まだ吐いてもらうぞ」

「あ、こんばんはツス艦長」

尋問か何かしているのかな？ という光景を目にし、差し入れを部屋の中に入れた後、そつと扉を閉じた。

## 第75話 糸巻き

「いや、感服致しました。こんなにも早く、目標を捕えられるなんて。私達の立場がありませんね」

薄笑い、しかし目の奥には何の光も灯らない冷たい瞳で、カローラは一步、また一步とダリウス達に近づいていく。

「……」

ゆつくりとした拍手と共に送られる言葉。それに、チャーリーは迂闊に返答する事はできない。

「ですが何故ダリウス様を拘束していないのでしょうか？ 彼がその気になれば、我々は皆殺しにされてしまうではないですか」

「……」

——白々しい。

チャーリーは内心で吐き捨てる。相手は、自分達の事情を既に把握している。

第七特務。U—N—A—S—A本部での雑務全般と広報活動を担う部隊。……などでは無い。

チャーリーはその真の姿を知っていた。それは、

MO手術という、国という器から外に溢してはならない機密の技術を、一点の汚れも無く拭い取るための暗部。

帰る場所も無く、日の当たる世界を歩けなくなった罪人の中から特に優れた人間を選抜した、本当の最前線を歩む兵士達。

先の攻防でダリウスの放った一撃、その音を聞きつけてやってきたのか。

「えっ、カローラさん……え？」

そんなカローラを見て、糸に絡まり宙から吊り下げられたアシユリーは状況を把握できず、混乱した様子でその名を呼んでいた。

「おや、アシユリーさん。ご無沙汰しています、この前の勉強会ではノンナがお世話になりました」

アシユリーの目線に反応し、カローラも返答する。

第七特務の本当の顔について、U—N—A—S—Aの所属でも前線に出る

一部の人間はそれを知らされている。友軍として共に任務に当たる事や、今のような突然の遭遇という事態にあたって、認識が混乱してしまつては不味いからだ。

だが、それ以外の非戦闘員にとっては別だ。

「あ、どうも……それで、この、糸つて……」

『先ほどの爆音から想像するに、一度ダリウス様は能力を使用した。しかし、貴方達はそれを見事に回避、隙を突いてダリウス様を捕える事に成功した、と愚行しますが、違いますか？』

ぶら下がった状態から頭を下げるアシユリーに何かを返す事は無く、ダリウス、チャーリーを順に指差す。

その動作の所々に、わざとらしさがにじみ出て、チャーリーは怒りを覚える。

要するに大義名分が欲しいのだ。自分達はダリウスに味方する、だから、UNASAの敵です、という宣言を待っているのだ。

『ああ、この喜ばしき事態を早く本部に報告せねばなりませんね！』  
通信機を取り出し、カローラは友好的な笑みを口の端に少しだけ浮かべる。

この通信機には回線を開いた際に位置情報を送信する機能も付いている。

チャーリーは先に定時連絡のため怪しまれるリスクを考え仕方なく通信を行ったが、それも本来ならばしたくないのだ。

ダリウスを見つけました。第一班の班員連中が裏切りました。カローラがどのように話をしたにせよ、ダリウスがいる、という情報と所在が伝わってしまう。そうなれば、状況は相当不利になる。

「……待ってくれ」

「？」

どうすれば、この状況を乗り切れる？ それを思考するわずかな時間を稼ぐため、チャーリーはカローラに一步近づき、姿勢を低くする。

事情を全て話し、協力を申し出る。……信じてもらえる保証が無い。それを信じる事で得られる益も無い。

ダリウスの能力が大量殺戮を容易に行う事ができる極めて強力なものである以上、それを野放しにし同種の能力を持つ宿敵とやらの撃破に向かわせるのは、あまりにリスクが高い。

そもそのところ上層部はダリウスを信用していないため、敵に感化されての、あるいは感化されるまでもなく裏切りという可能性、そう思わなかったとしてもそれが許されるとは到底思えない。

殺す。第七特務を血生臭いだとか言えたものでは無い選択肢。一度通信されればそこまで。

だったら、黙らせるしかない。

相手の戦力は未知数ではあるが一人だけ、ダリウスの能力こそ所在を知られてしまう可能性と味方への被害が合わさりおいそれと使用できるものには無いにせよ、こちらには『裏マーズ・ランキング』の1位と7位が所属している。補助的な戦闘員もいる。勝てるだろう。だが。

それをしてしまうのは、自分達がU—N A S Aと袂を分かつという事に他ならない。

もはや抗弁の余地は無く、ダリウスと自分達第一班はU—N A S Aそのものに命を狙われる立場となるだろう。

ダリウスは、元々そのつもりだった。自分も、覚悟はできている。だが、班員の二人にそこまでの茨の道を歩ませるのは。考え抜いた結果、チャーリーの答えは。

「……土下座とか、隊長じゃあるまいし」

「すまねえお姉ちゃん、帰ってこられたら見舞いには行く」

油断したカローラの顎に向けて低い姿勢から昇るように繰り返し出した拳だった。

——同刻

「いきなり上がり込んで申し訳無い、コンラッドさん」

「とんでもねえよ、命の恩人じゃねえか」

山の奥にある、目立たない小さな工場。その横に建てられた小屋で、俊輝は老人、コンラッドと青年を机の向こうに臨み、コーヒーを飲んでいた。

先に起こったU—N A S Aの襲撃。その際に機材を納入してもらったごく小さな会社。

山奥に居と工房を構える変人の老人とわずかな弟子のみが暮らすそこをわざわざ取引先に選んだのには三つの理由があった。

一つは、隠匿性の高さ。大々的に大手企業から機材を導入したのでは、敵対者にその動きを察知されやすい。だが、山奥にある細々とした場所からなら。

もう一つは、一つ目に加えて確かな品質の良さがあったから。

最後に、第七特務がギルダンが隊長を務めていた頃から懇意にしている会社だったからだ。

あまり表ざたにできないような目的に使う機材も秘密厳守で、迅速に、かつ高品質で納入してくれる彼らは第七特務の活動を大きく支えてくれていた。

そして、この老人と青年は、実際に襲撃に巻き込まれ、俊輝に救われたという一幕もあり、挨拶をしに行く事になったのである。

俊輝の任務の一件もありU—N A S Aの人員は多くこの場所に派遣されてきているが、武装した人間が大勢で押しかけても威圧してしまふと考え、実際に助けた俊輝が場を任されたのだった。

「……では、早速ですが本題に。貴方方があの夜見た、怪生物の事ですが」

俊輝の言葉に、二人の顔が曇る。

怪生物。あの夜。明確にしないそれからはつきりと一つの光景を思い返せるのか、コンラッドと青年は落ち着かない様子でもぞもぞと細かく動く。

「この事は、世間には秘密にしていたきたく」

仕方の無い事だ、と俊輝は内心で二人に同情する。大口の仕事で施設に機材を納入していたら、いきなり真つ黒な人型の怪物と武装した兵士というユニークすぎる集団に命を奪われそうになり、間一髪で助

かったのだから。

テラフォーマーは地球でも目撃され、何故だか知らないが日本を中心として世界各地で目撃例が見られており、実際に行方不明者も出ている。

しかし、彼らは大手を振って動いているわけではない。人間の被害も出てはいるものの、その数はそこまで多いわけではない。

情報を公開してしまえば社会が大きく混乱する。今はまだ、そのリスクを侵す程の脅威では無い。

そう各国は示し合わせ、情報の統制を行っていた。

「……兄ちゃんあんがそう言うなら。知らねえけど、大変なんだな」

「よかった……」

完全に納得はできていない様子であるが領くコンラッドと青年に、俊輝は安心する。

もし断られたなら、少し強引に出なければならなかったからだ。

「ところで、こちらの方は」

「ああ、ウチの新しい弟子でよ、谷底でブツ倒れてたから拾ってきたのヨ」

一先ず本題は早々に片付いた、後は少し話をしてから合流しよう、と思い、振った話題。それは、コンラッドの隣に緊張した様子で座っている青年についてだった。

「はは、初めまして！ コルンバ……って名前……みたいですよ……」

「みたいじゃねえよ！ いい名前だろうが！」

徐々に語気が弱まっていく青年、コルンバと、その肩をびしびし叩くコンラッド。

その様子を見ながら、俊輝はコルンバへと注目の目を向ける。

余り髪型に頓着は無い風に乱雑に短く整えられたであろう金の短髪に、作業の最中だったのか煤で汚れてはいるが西洋人系の驚くほど整った顔。髪でも隠れ切っていない大きな傷跡が頭に見える。恐らく、強い衝撃を受けた事による記憶喪失。



しかし、俊輝が注目したのはそれらでは無かった。

随分と体格が良い。コンラッドと共に作業服を脱いで半袖のシャツになっているが、相当に鍛えられている事が伺える。……いや、鍛えられているわけではない。

まるで、それが当然だ、というように黄金律に乗っ取って完成されたような、完璧であるという事実が逆に不自然に思える筋肉の付き方だ。

彼はどうも記憶を失う前は何か特別な人間なのではないか、という予想が微かに浮かぶ。

「……じゃあ、自分はこの辺りで。今後とも、よろしくお願いします」「おうよ！ 今度はあの眼鏡のかわいいこちゃんも連れておいでや」

「本場に助かりました、ではまた！」

まあ、そこまで気にする事では無いか。

僅かに残ったコーヒーをぐっと飲み干し、俊輝は席を立つ。

今回の任務、あまり楽なものでは無い。自分だけのんびり休憩というのも悪いからな、と。

「……！」

「おや、いきなり襲ってくるなんて、女性の扱いがなっていませんね」顎を狙ったその一撃は、あっさりとは止められた。

カローラの両の手、その間に形成された糸の層によって。

初撃を防がれたチャーリー。だが、その背によって隠された左手は、背後に向けてサインを送っていた。

手を引き戻し、それを耳に当てる。左手も同様。

それを、リックとアシユリーも同時に行っていた。

カローラが微かに表情を変える。しかし、それに対して対応する程の時間は無かった。

二度目の爆音が、森を揺るがす。

突然の大きな音により発生する音響外傷は、それを事前に把握して

いる事によって被害を減らす事ができる。

それは、大きな音に対して反射的に内耳を防御するためのシステムが人間の耳に存在するからだ。

さらに、耳を塞ぐという単純な物理的防護。

これにより、味方の被害を抑えつつも何の警戒もしていない敵を無力化するには十分な威力の攻撃を行う事ができる。実戦で訓練していた、第一班の咄嗟の連携だ。

選んだのは、無力化だった。命を奪う事はできないが、意識を奪うか縛り上げるかして、通信を行えない状態に持ち込む。こうする事で、全てが終わった後にU—N A S Aに戻る逃げ道も何とか失わないようにする。

それでU—N A S Aに厳罰程度で許されるかどうかは向こうの考え次第としか言えないが、それでも人員の命を奪うよりはマシだろう。

「どうしたのですか？ 何も聞こえていないので状況はわかりませんが」

「—!？」

しかし、その標的は平然と立っていた。

何も聞こえていない。その言葉から、チャーリー越しにダリウスは状況を把握する。

読まれていた。極めて原始的な音から身を守る手段、耳栓だ。

物理的な破壊を伴う威力の一撃を放てず、せいぜい鼓膜を破り平衡感覚を失わせる程度のものしか使わない、いや、使えないという事を。

「つ……散開だ！」

ダリウスは言葉と同時に跳びあがり、樹状で罨にかかったアシユリーを救助しようとし、リックは自身の戦力を最大限に生かす為にその場を離脱する。

チャーリーは再び、カローラへとその拳を繰り出そうとしたが。

「ああ、何と愚かな」

カローラが、落ち葉の下に差していた右足を振り上げる。それと同時に、カローラの前方の広範囲の落ち葉が一斉に持ちあがった。

舞う落ち葉に視界を覆われ一瞬動きが止まったチャーリーはさらにいきなり動いた地面に足元を掬われ、受け身を取る事もできず倒れこんでしまう。

落ち葉の下に、大きな網が隠されていたのだ。

「ああ!？」

場を離脱しようとしたリックが、唐突に倒れこむ。

何が起こった？ 思わず、右足を見る。

……そこには、足首から先が無くなり血が溢れる、美しい断面図があった。

慌てて背後を振り返る。そこには、置き去りにされた足首と、血に濡れた事で初めて目視できた、木と木に繋がれた細い糸。

「くっ……」

ダリウスは、アシユリーの体を捉える糸を力任せに引きはがそうとする。

だが、全力を加えてもそれはびくりとも動かない。

——エンピツほどの太さがあれば、飛行機を止める事さえ可能それは、ある生物の出す糸がどれほど強靱か、それを端的に表す際によく言われる喩え。

伸縮率、ナイロンの約2倍。強度、鋼鉄の約5倍。

さて、それに倣いこの生物の出す糸を単純極まりない比で表現するとしたら、こう表す事ができる。

伸縮率、ナイロンの約4倍。強度、鋼鉄の約10倍。

天然素材として最強とまで言われるそれによつて構成される糸を用いて、彼らは2cmにも満たない体長で広大な網を編む。

全幅25mにも達する、巨大な建築物を。時に鳥類さえ捕えて逃さない、悪夢のような罫を。

「団結、友情、親愛、素晴らしき事だと思いますよ」

抵抗する4人を、ただカローラは静かに見下ろす。

その瞳は、額の六つと同じく、感情を映さない酷薄なものだった。

「でも、最初から全てまとめて、私の糸の上です」

カローラ・プレオベール

国籍：ローマ連邦

28歳 ♀  
161cm  
53kg

MO手術”節足動物型”

ダー  
——  
ダーウインズ・バーク・スパイ

## 第76話 偏執の糸

——『最強』や『最高』に当てはまる存在、というのはいつの世のどの年代の人間にとつても興味深く、胸を高鳴らせる話題だ。

創作物において、この作品で最も強いキャラクターは誰なのか、という話題は議論が白熱し、時に喧嘩へと発展するし、世界最高の○○、という言葉は時々雑誌や新聞の紙面に躍り、多くの人の目を惹き、それを手に取らせる。

この生物も、それに名乗りを挙げる存在である。

『最強の糸』。糸というものに関して、何それと首を傾げる人間は多くはないだろう。人類の文化的生活に深く根差した、日常的なものからそれと遠いものまで千差万別、様々な物の材料に使用される素材だ。

さて、どう表現したものか。とてもよく伸びる。だから何？ という人が大半だろう。とても頑丈。でも糸でしょう、と思うだろう。難しい物質名と単位を並べて説明するか？ 恐らく、最後まで聞いている人は少ない。

ならば、簡潔にこう言うでしょう。

『鉛筆ほどの太さがあれば突っ込んでくる飛行機を止められる糸』の倍以上の強度、と。そして、さらに——

——ダーウィンス・バーク・スパイダー

コガネグモ科に属する蜘蛛の一種。大柄なメスで体長わずか2cm弱という彼らは、しかしとてもよく目立つ。

だが、目立つのは彼らそのものではない。灰色と黒の入り混じった地味な色の小柄なそれは、恐らくその辺りをうろついていたとしても見落としてしまう事だろう。

「くっ……」

「班長、私の事はもういいですから……！」

糸に絡まったアシユリーの戒めを解かんと力を込めるダリウス。しかし、その糸は多少伸びはすれど破れる様子など一切無い。

そのひょうきん者な普段の様子に似合わず相手を睨むリック。本人の特性かMO手術の力か、すでに傷口から流れ出る血は止まっているものの、右の足首を切断されたその体は、木にしがみつきながら起き上がるのがやっと、という状態。

「だ……らあア！」

そして、最後の一人、チャーリーが起き上がり、目の前の相手、カローラに反撃を繰り出す。

網で足を掬われたものの、落ち葉が付着して接着能力が落ちていたのかそもそも獲物を捕らえるための粘性を持ったものでは無かったのか、拘束されはしなかったためだ。

網にかかってしまった瞬間、いや、アシユリーが捕えられ、カローラが姿を見せてから戦闘に移るまで、周囲一体に巡らされた罫を探索していた。

樹上に無数に存在する、獲物を絡め取るための糸、まさに蜘蛛の巣と言える形状のもの。

リックが犠牲となりそれに注意が向くまで気付かなかった上それでも視認は難しいが、木と木を結ぶ形で所どころに存在する、細い糸。無論いくら強度があり細く鋭い糸と言えど人体を切断するには人の側がそれなりの速度で突っ込む必要があるが、戦闘のさ中であれば素早く移動する場面は多く存在する。

ここいら一帯は既に相手の手の内だ。敵のベースは外見から何うに蜘蛛だろう。これだけの罫を張るのに、何度変態し、どれだけその身に負担を強いたのだろうか。同じ蜘蛛をベースに持つアシユリーや、『アネックス1号』でも何人かいた人々の例で考えれば、もう既に疲労困憊でも何もおかしくない。見た目は余裕癩癩ではあるが、消耗しているはずだ。

「二度目ですよ、体に悪いですからね」

しかし、チャーリーの一撃は再びカローラに止められる、再度その手と手の間にあやとりでもするかのように張られた糸の束によって。そして、その言葉からは己の考えを見透かされている事が伺える。チャーリーの一撃、その衝撃で背後に跳び、カローラは空中に立った。

もはや、目を凝らさなくてもわかる。所々に巡らされた、足場としての糸がそこらかしこに巡らされているのが。

『強さ』に関しては、彼らに比肩する、もしくは上回るかもしれない生物は存在する。『オオミノガ』。アネックス1号計画において幹部搭乗員に次ぐランキング最上位に位置する男の有するベース生物だ。単純な計算で言えば、その身から生じる糸の強度はダーウィンス・バーク・スパイダーのそれを上回っている。

ならば何故、それを踏まえた上でなお彼らが『最強』に名を連ねるのか。

……その糸が、それを生み出す彼らが持つのは『強さ』だけではない。彼らを見落とす事などできないのは、その巣があまりに目立つ巨大なものだから。

高度な教育を受け技術を身に着けた人間が綿密に計画を立て、それを数十数百、時に数千数万と集まった人間が作業して初めて完成する建築物、川を渡す橋。それを、彼らはたった一匹で、建材も何も必要とせず自身の体内から生み出される資材だけで完成させる。

「本業の貴方であればご存じでしょう、チャーリー様。時代が移ろおうとも、いいえ、だからこそ、質だけではどうにもならない、『量』が伴ってこそなのだ」と

チャーリーの思考は、既に撤退で埋まっていた。何人逃がせるか。自分が殿になれば、どれだけ時間を稼げるのかを。力任せでは無理だと考えた班長がアシユリーの糸をほどくのの後どれだけかかるか。再度変態すれば再生するかもしれないが、今現在で歩くには無理があ



る状態のリックを連れてどこまで逃げられるか。

純粋な相手の身体能力は恐らくそれほど高くは無い。

速さで言えば、自分の方が明らかに優位で、ダリウスも恐らく勝っている。

だが、この無数の罠を突破しながら、という条件が加われば、それは途端に困難なものとなる。

「……。失礼」

そこで唐突に、カローラの表情に変化があった。ポケットに手を入れ、取り出したのは振動している通信機。

その画面を見て、耳に当てる。

不味い。チャリーリーの、ダリウスやリックの額にも嫌な汗が流れる。

ここで通信が繋がりに、自分達の所在が知られてしまえば。さらには、カローラが言っていたように、自分達の事を1班まとめて裏切った、と報告されてしまえば。

途端に包囲網が組まれ、ここから抜け出す事さえ絶望的だ。

「どうも隊長、通常回線という事は定時連絡でしょうか。ええ、わかっていると思いますが耳栓してるので聞こえません」

今なら隙があるか。隙が無かろうとやらねばならないか。足元の石を拾い上げ、投擲の姿勢を取るチャリーリー。

しかし、次いでの一言があまりに意外で、その手が止まってしまふ。

『目標は未だ未発見です。痕跡も見つかってはいません』。ええ、致死性の罠も張っているのです、できれば誰も近寄せないでください。では」

通信を終了し、それを懐にしまい、カローラはお待たせしました、と一度チャリーリーに頭を下げる。

「……何が狙いだ」

「何が狙いだ、とでも言いたげですね。そうですね、どう思われますか？ ああ、別に心読んでるとかでは無く読唇術なので喋っていただけで結構ですよ」

「俺達に恩を着せて、それで取引がしたい、か？」

僅かな時間で考え抜いたチャーリーの答え。今自分達を見逃す理由は無。援軍を呼び、袋叩きにするのが正しい選択のように思える。それでもなお、ダリウスの、それに加担している第一班の班員の所在を知らせない理由。

思いつくのは、これだった。

違っていても別に構わない。アシユリーの救出がなされるまでの時間を稼ぐ事ができればそれで。

チャーリーの答えに、カローラは僅かに目と口に笑みを浮かべ。

「知っていますよね。今回のU—N—S—S—Aの任務は『目標の拘束、不可能であれば殺害』なんですよ」

同時に、懐から小ぶりなナイフを取り出し、それをダリウスに向けて投擲した。

「っ!」

それを、チャーリーは反射的に自身の腕を盾として止めた。MO手術によって強化されている外皮によって深い傷にはならないが、それは腕に突き立ち、焼けるような痛みを与える。

「でも我々に下された任務は『殺害もしくは拘束』なんですよ」

「成程、そういう事かよ……!」

カローラの言葉にチャーリーは一応の納得を得る。ここでU—N—S—S—Aの追手を許してしまえば、拘束が優先される。しかし、第七特務としては殺害を優先しての任務が与えられている。

表向きにはダリウスの拘束、もしダメだったら仕方なくだけど殺してしまおう、となっている。だからこそ自分達はこの任務に加わった。

だが、汚れ仕事専門の彼女達に下っていた指令は別のものだったらしい。

どちらがU—N—S—S—Aの真意なのか？ それは、チャーリーにとってはあまり考えたくない結論だった。

「いえ」

しかし。カローラは、理解した、というチャーリーの結論に首を振る、という返答を返す。

その額に形成された6の無機的な目が、ぎよろぎよろと動き回る。「……隊長は、無理だろうけど拘束できるならばしたい、と仰っております」

隊長。面識は無いが、第七特務を総べる人間。支部内や現場での指揮官、チャーリーにとってのダリウスと同じく、カローラにとっての幹部搭乗員に当たる存在。

危険人物ばかりと噂の第七特務のリーダー、どんな危険な人間なのかと思っていたが、意外にも平和的なのは、とチャーリーは認識を改める。

「拘束などという選択肢が、そもそも存在してはならないのです」

が。その真意を、チャーリー達に対する殺意を剥き出しにし、再びナイフが投擲される。

チャーリーは察してしまった。コイツは根っこの部分では俺達と同じだと。まずい、現場が暴走している。

何とかしろよ顔も知らない隊長さん！ どこかしら危ない人間ばかりなんだから部下の管理をもっときちんと！ と内心で悪態を付きながら、チャーリーはカローラへ向けて駆ける。

「隊長！」

わかっている、と頷き、ダリウスは腕の口吻を振るい、自身とアシユリーを狙うナイフを撃ち落とす。

「手加減して捕まえる？ そんなの、こちらが強い事が前提では無いですか。それでもし——」

「リック！」

「オウよ！」

カロローラの目が、チャーリーとダリウスに集中している。微妙であるが、怒りで冷静さが揺らいでいる。

何がそこまで感情を揺り動かしているのかはわからない。だが、好機。

瞬間、カロローラの腹に、何か突き立つ。それは致命的なものとは程遠い、ただ押すだけの一撃だったが、衝撃で姿勢が崩れ、空中の糸から落ちるカロローラ。

「……逃がしません……ここで、ここで仕留めなければ……」

だが、受け身を取り着地したその瞳には、執念が映る。

最初からわかっていた、というかここ数分の会話でそれが深まったが、話し合いや交渉ができる相手では無かった。

何とか地力で歩けるくらいにアシユリーの拘束が解けた事は確認できた。撤退戦だ。

ダリウスと班員の二人であれば、何とかしてくれるだろう。ならば、自分がその礎となろう。

カロローラに飛びかかる。相討ちに持ち込めれば最良。そうでなくても、逃げるだけの時間が稼げればいい。

ダリウスもそれを察し、悔し気にチャーリーを一度見た後アシユリーと共に離脱し、リックもその姿を消している。

元気でな、と手を振るくらいの余裕があれば良かったけど、などと内心で笑い、目の前の敵には同じ、しかし毛色の違う寧猛な笑みを向ける。

それを冷徹な、しかしその奥底に隠しきれない感情で見返すカロローラ。

さあ、時間稼ぎに付き合ってもらおうか。チャーリーもまた、懐から自身の獲物、サバイバルナイフを取り出した、その時だった。

耳に、微かな音が飛び込んでくる。同時に、気を張っていないとわからない程のごくごく小さな空気の揺れ。

念押しに、目の前のカロローラとは違う、何やら嫌な予感、チャーリーの戦士としての直感。

ほぼ同時に、カローラが動いた。足元の網、その端を指に引っかけ、振るう。

だが、それはチャーリーを捕えるためでは無かった。自分の背を、その網で薙ぐ。

すると、網に何かがかかった。

チャーリーがそれを目視できたのは一瞬。青々とした森の葉できた天蓋を貫き、戦場に乱入してきたもの。

それは、卵状の機械のような何かだった。

「くっ——！」

同時に、カローラが身を翻し網を放り捨てる。

直後、轟音と黒煙が周囲を覆い尽くす。

何が起こったのか。全くわからない。だが、それでもわかった事が二つ。同じような気配と直感が、いくつも周囲に感じ取れる。もう一つは、今が好機であるという事。

カローラに背を向け、チャーリーは走った。聞こえているかはわからないが、仲間達に警戒を呼びかけながら。

もはやカローラの姿は煙の向こうに見えなかったが一難去つてまた一難。

そして、無数の黒い楕円が、空からまるで箱に手を突っ込んで手探りで中のものを探すかのように、無差別に降り注いだ。

## 第77話 炎禍

空から、卵型の物体が降り注ぐ。あるものはそのままの軌道で地面に。またあるものは明らかに自然物とは思えない動きで付近の生物に向け軌道を修正。そして、爆発。そこまで大規模なものでこそないが人間一人を殺傷するには十分すぎる火力。そして、それと同時に粗悪な爆薬なのか黒煙が周囲にたちこめる。

突如として巻き起こったその災厄は、情け容赦なくこの山林でそれぞれの目的を果たさんとする人間に襲い掛かった。

「散開！　だが独りにはなるな！」

この場所で最初に気づいたのは、捜索隊の本隊、それを構成する兵士の一人だった。

今回の任務はU—N—A—S—A所属のMO手術を受けた人員に加えアメリカ陸軍から出向してきた兵士で構成されている。

これがただのMO手術関係の迷い人の捜索であれば、わざわざ軍の力を借りる必要はなかっただろう。

しかし、今回に関しては相手が悪すぎる。

アネックス、裏アネックス計画の幹部搭乗員が呼び称された『兵器』という喩えがこの上なく似合っているのが、今回の標的だ。

少しずつ軍にも浸透してきたMO手術の情報。火星から持ち帰られたウィルスの研究が進み、成功率も高まって注目されている今、軍人にもその施術とそれに合わせた再編成が少しずつ進んでいる。

そんな彼らが、火星派遣部隊の指揮官が、各国で競い合いその中で最強を勝ち取った自国の人間が、何よりその人間が宿した生物が何であるのか、興味を惹かれるのは当然と言えよう。

今作戦の説明時、彼らは今回の標的の情報を伝えられた。そして、見た。『1位』の戦闘訓練時の映像を。

それは、鍛えられた軍人からすればお粗末なものだった。

訓練用として本来のものより弱く作られたクロウンテラフォーマーとの戦闘。足運び、格闘術、どれもこれも、自分たちの方がずつ

と優れているじゃないか。静かに見守る大多数の兵士たちは、そう考  
えていた。

言う程難しい任務じゃない。これで最高ランクが取れるなら、俺で  
も。ごく一部のお調子者がそんな冗談を言い始めた、瞬間だった。

轟音と激しいノイズと共に一瞬で映像が途切れた。

そして、映像が復旧……というか、別のカメラのものに替えられた  
と思われるものが再び映し出された時、彼らは沈黙した。そこには、  
ハリケーンが過ぎ去ったか、空爆が行われた後か？と思わせる部屋の  
惨状があつたからだ。

警戒していた。脅威を認識はしていた。しかし、今のこの状況は完  
全に想定の外にあつた。

火山の噴火か？ などと呑気な事を言うような人間はこの場所に  
はいない。

敵襲だ、と言葉を交わさないまでも全員が認識していた。

超小型の誘導爆弾か？ 実態は不明だが、空からの攻撃。

これは、標的からの干渉ではない可能性が高いとも考えていた。

このような近代兵器を用意できるはずも無いからだ。

考えられるのは、第三勢力の介入。

根本的に作戦を立て直す必要がある。しかし、今はそれどころでは  
ない。

周囲は煙に包まれ、退避方向の知覚が困難に。

その上空から、驚くほど静かに落下してくる追加の爆発物を交わし  
ながら、いざ負傷した際も考えできるだけ独りで行動しないように、  
彼らは退避を急ぐ。

一点に固まっただけでは、運悪く全滅する恐れがある。

一先ずはここから脱出し、安全な場所を探さねばならない。

彼らの対応は正しかった。壕でも掘ればよかったが、道具も暇も  
無い。今できる事はこのくらいだっただろう。

——だが、それが彼らの不幸だった。

「……………」

二人組で逃げていた兵士の一人が、炎と煙、赤と黒に支配された空間で、一瞬だけ奇妙なものを見た。

それはすぐに煙で見えなくなつたが、あれは確かに、赤い服を着た、この場には相応しくない――

それは、命のかかった極限の状況で幻覚でも見たか？ と目を擦り一瞬足を止めてしまった彼、不幸な新兵のアレンに向けて振るわれた。

彼の丁度顔の高さ。そこにあつた煙を突き破り、銀色が視界に映り込む。

それが、彼が見た最期の光景……とはならなかった。

「アレンー！」

彼の顔を一直線に貫こうとした三叉の槍は、それとアレンの顔の間に割り込んだ銃に突き刺さり、そのまま勢いを止めずアレンに直撃した。

槍では無く刺さつた銃が顔に接触し、押し飛ばされるアレン。

痛みで顔を抑えるが、すぐに立ち直り、正面を見据える。

「ああ、忌々しいね」

そこには、アレンを銃でその槍から庇つた同僚と、もう一つの影が立っていた。

それは、一人の少女だった。

爆炎に揺らめく、赤を基調としたドレス。その手には、先ほどアレンを貫かんとした槍と、銀の長剣、というよりも食事用のナイフを無理やり大きくしたかのような凶器が握られている。

そして、その服装と同じ、揺らめくような、ほんの微かに金が混じつた赤色の髪と瞳。

不思議と、アレンはその姿から今この場所を襲っている炎、という印象を感じなかった。

少女の全身を覆い、強く存在をアピールする赤色。それは、燃え広がる炎というよりも、粘つくような気味の悪い、例えるならば、血飛



沫のような。

「二つ聞きたいんだけど……君達の探し人の場所はもうわかったかな？」

目を大きく開き歯を見せた笑顔のまま質問してくる少女に、アレンは反射的に銃口を向けた。

もしかしたらこんな状況でも調子を崩さない、散歩中の超マイペースなどこかのお嬢様か誰かなのかもしれない。そんな冗談めかした希望的観測を、彼は即座に切り捨てた。

そもそも、一般人は出会いがしらに凶器で頭を貫こうとはしてこない。目の前の相手は敵対的存在だ。

それでも即座に発砲まで至らず、威嚇に留まったのは、彼の優しさというべきか、いざという時の責任の事を考えてしまったのか、そこまではわからない。しかし、それが悪手だった。

「ん……いいや、やっぱり自分で探そう」

山の天気は変わりやすい。そして、目の前の少女の気分はそれ以上に上がり下がりが激しかった。

その顔から笑顔は消え、飽きた子どもが玩具を放り出すようにその手を、そこに握られた刃を無造作に振るう。

その一瞬の動きに、まだ兵役に就いて数ヶ月の彼は反応する事ができなかった。

かと言って、アレンが何かされたわけでは無い。

背を向け距離を取ろうとしたアレンの同僚の首の中ほどまでに、刃が食い込んでいた。

血が噴き出し、周囲の落ち葉と少女の顔を汚す。

「っ！ ああああ!!」

恐怖と怒り。それに導かれるまま、アレンは指の引き金に力を込める。

今回の任務において、彼は戦闘に参加する事を想定されていなかった。そのため、支給された銃はいざという時の護身用程度、弾数も少ない。

そして悪い事に、動揺と恐れにより力の籠った指を離せずその射撃

は止まる事なく貴重な弾を吐き出した。さらには肝心の狙いも本人の精神状態を反映したかのように銃口が暴れ、正確に目の前の相手を捉える事はできなかつた。

「嗚呼、いい顔だね」

一発だけ頬を掠めた銃弾。そこから流れ出す血を舐め取りながら、少女は一步、もう一步とアレンに近づいていく。

涙と鼻水でぐしゃぐしゃに汚れた、見るに堪えないであろう顔。それを見て、少女は恋する乙女のような、うっとりとした表情を浮かべる。

「それでこそ、生きていくというものだ……」

目の前で、刺さった銃を抜き取られた三叉の槍が、よくよく細かい部分を見れば武器としての槍というよりもフォークのような形状のそれが、振り上げられる。

「……」

あ、死んだなコレは。諦観に頭が埋め尽くされ、己を手放そうとしたその時だった。

「……動くな！ 先の銃声で気付いた仲間も来る」

突然、少女の喉に、牽制の言葉と共に一本のナイフが突きつけられる。

それは、少女にとってもアレンにとっても既に死んだものとして認識されていた、彼の同僚のものだった。

その言葉は偽りでは無く、黒煙で制限された視界の中でアレンとその同僚を呼ぶ声が、銃声に反応して有事だと気付いた様子でそこから聞こから聞こえ出す。

そして、彼はアレンに目配せをした。

『早くこの場を離れろ』と。

それが、素人目に見てももう助からない同僚の願いを純粹に汲み取ったのか、それともただの本能からくる逃避行動なのかはわからない。

かったが、アレンは涙を拭い背を向け、一目散に駆け出す。

次の瞬間背中から刺し貫かれる事を想像しながらも、振り向かず  
全力で前に駆け続けた。

何秒走っただろうか。彼にとっては永遠のように感じられた時間。

その終末は一瞬だった。

背後から、爆発のような巨大な衝撃が襲い掛かる。空から降り注ぐ  
それでは無く、それとは比べものにならない威力の暴威が、アレンを  
吹き飛ばし、樹に叩き付けた。

何が起こったのか。薄れゆく意識の中、ようやく振り返った彼が最  
後に見たもの。

それは、遠く離れた、本来であれば木々に覆い隠されて見えないは  
ずの場所に立つ、血と火の色が混じったかのような服装に包まれた、  
人間から少し離れた姿の怪物の姿だった。

「……！」

遠くで、揺れが起こったのを認識し、チャーリーは走りながら、無  
線で指示と確認を取りながらも意識を背後に向ける。

カローラは自身の防御を優先しているのか追ってこようとはして  
いない。

まあ、追ってきたところで自分の方が早いのだが。

この空気がざわめくような感覚は、チャーリーにとっても覚えがあ  
るものだった。

ダリウスが能力を使った時のそれだ。

しかし、その方向はダリウスが回避した方向とは真逆。

軍の連中が爆弾でも使ったか？ いや、今回の任務の相手が個人で  
ある以上、そのようなオーバーキルな武器が必要で、しかも全く見当  
違いの場所で使われたとは思えない。

ダリウスは言っていた。

殺さねばならない相手がいる。決着を付けるために、自分はこうし

て逃げてきた。

本来であれば、もっと計画を練るべきだったのだろう。

突然訪ねてきて暴虐を尽くし、去っていったという相手。 所在も何者かもわからない、先祖を自称する何か。

どうすれば接触できるのかも不明なその相手を狙うために、いつ自分が死ぬかもわからない、行動も縛られた状況へと身を落とす。

なんて無鉄砲なんだろう。 そう突き詰めたかった。

だがそこまで考えて、それを語っていた最中のダリウスの声の調子を思い出し首を振る。

それを正常に考えられないほどの感情に、ダリウスは囚われたのだ。

しかも、チャーリーにとつては不幸な事に、平静を取り戻した後のダリウスは己の無謀無計画な行動を受け入れ、そのまま続行しようとしていた。

本音を言えば、引き留めたかった。

一度、しっかりと準備をし直そう。 U—N—A—S—Aに戻り潔白を証明し、敵の情報を掴み確実に目的を果たせるようにしよう。 軍人としての冷静な部分としては、そう伝えたかった。

だが同時にU—N—A—S—Aがそれほど甘い組織でない事もチャーリーは知っている。

ダリウスが今戻ったところで、彼の望み通りに外征して敵を叩く任務など任せてもらえるかどうか。

今回の脱走が無かったとしても、いつ暴走するかわからないその危険性を考えれば微妙なところだろう。

そう思うと、あの無謀な脱走はその目的を果たすという一点において最良、とまで思えてしまうのだ。

だが、最良なのは本当にその一点だけ。 目標を果たしたとしても、もはやその後に道は無い。

ならば、今自分がすべき事は――

そこまで考え、チャーリーの手が狂った。

定期的に降り注ぐ卵状の何か。数発を弾き飛ばし回避していた。そして今、一発降ってきたそれを腕を振るい弾こうとしたが、タイミングが早すぎ、その腕は空を切る。

しまった。自身に向けて正確に降ってくるそれに、チャーリーは死を覚悟する。

「おわあ危ねえ！」

だが、その凶弾は切迫しながらもどこか抜けている声と同時に吹き飛ばされた。

爆風の中から突如として飛び出してきた男が、チャーリーを狙った弾を蹴り飛ばしたのだ。

少しふらついて着地したその男に礼を言おうとし、チャーリーの表情が固まる。

「俊輝……お前こんなトコで」

「んー、まあ色々あつてな」

そこに居たのは、チャーリーのよく知る人間だった。

北米第1班と日本第2班。両班の元副官は、意外なところで再開した。

そして、同時に。

「……リック」

チャーリーが、無線に向けて名を呼び、次いで短く単語を呟いた。瞬間、チャーリーと世間話の態勢に入っていた俊輝の足元の落ち葉に穴が開く。

それはMO能力がどうかの話では無く、人間が作り出した人間を殺傷するための武器、一発の弾丸だった。

「さっきは助かった。礼を言おう。だが」

チャーリーと俊輝。二人の表情は、同時に変わった。偶然変な場所で知り合いに会った時の不思議なシンパシーから、戦場で敵に相対し

た戦士のそれへと。

俊輝は少し逡巡し、チャーリーは覚悟を決めた様子で、お互いに『薬』を取り出す。

そして、互いの目が、刃が、交差する。

「ああ、やっぱりわかっちゃまうよな……」

「ここから先は一步も通さねえぞ、第七特務」

## 第78話 縁の下

—U—N—A—S—A 第七特務103号執務室

「次こそは……次こそは負けない……!」

「ひいい……これ別に競争とかじゃあ……」

薄暗い部屋を、いくつも並べられたモニターの光とキーボードを叩く音が彩る。

そこに座っていたのは、二人の少女だった。

小柄な体躯に金髪という共通点、二つのPCを隣り合って並べてそこに座る姿は、仲良く遊ぶ姉妹のように見えなくもない。

しかし、両者の様子をよく観察すれば、そのような考えは浮かんでこないだろう。

「……ようし!!」

エンターキーをツターン! と勢いよく叩き、血走った目の下にくつきりとクマのできてしまっている少女が、背伸びと同時に小さな手を握りしめ、高く掲げる。

これまでアルファベットと数字、記号の無秩序な配列が一面を覆い尽くしていた画面は大掃除でもしたかのようにさっぱりと片付き、そこには整然としたファイルがいくつも表示される。

「今度こそボクの勝ちだねエリンちゃん!!」

「……ごめん、私、ちよつと前に終わってました」

「何で宣言してくれないの!?!」

一転の敗北に、少女、ノンナはへにやりと腕を下げ、重力に抗わずキーボードの上に上半身を預ける。

それをあわあわと混乱した様子で見つめるもう一人の少女、エリン。

第七特務所属のエンジニア兼ネットワーク担当兼その他もろもろ担当。徹夜3日目。

第七特務に雇われた一般人、元クラッカー。

二人がこの作業を始めたのは、俊輝達がU—N—A—S—Aを出立した夜の事だ。

山登りがしたいと言ったにも関わらず本部待機となつてふてくされていたノンナの部屋にエリンが訪れ、こう言った。

”例のファイル、進展があつたんですけどそちらの調子はいかがですか?”

誤解無く言うと、ノンナに与えられたのは本部での業務ではなく実質的な休暇だ。

このファイルの解析以外にも一つ進めるべき作業はあつたのだが、人の手が必要な段階は既に終わっており、後は結果を待つのみ。待機を言い渡した当人、俊輝も申し訳なさげに「ここ最近作業続きで疲れただろう、しつかりと休んで英気を養つてくれ」と言つていた。ちゃんとボイスレコーダーに保存してあるため文句は言わせない。

しかし、結局のところ暇だった。やる事が無い。趣味の機械いじりも何となくやる気になれない。日課である同僚と隊長の専用装備の予備のプチ整備でも……と思つたが、自分が置いていかれた事に対するささやかな抗議として現在放置中だ。

そんな何もする事が無い、という時に訪れたエリンを数日振りにご主人様が帰つてきた子犬のようなはしゃぎっぷりで迎え入れ、何して遊ぶねえねえ! と興奮気味なテンションだったノンナであるが、その一言で別の方面での興奮状態となつた。

——それは、この第七特務パソコン担当に対する宣戦布告かな? と。

当人の性格からしてそんな事は無いのだが、どこかドヤ顔をしていたノンナには感じ取れたエリンの表情で闘志に火が付き、そして。「ふふ、まだあれから進んでないけどやろうと思えばエリンちゃんよりずつと早くできるんだから!」

嘘はつかず、しかし己の誇りにかけて敗北など認められるはずが無い。

じゃあ一緒に作業しませんか、私も今ちよつと詰まつてて気分転換に来たんです、という言葉で、二人の長い戦いは始まつた。

……という経緯の報告をエリンから聞いた俊輝としては、できれば



止めて欲しいな、と思ったりしていた。

「どちらが作業を進められるか競争？ そんなに急いで作業が雑になったらどうするんだ、こういう機密資料って不用意にいじったら機密保持のためにデータ削除とかの機能があるんじゃないかという懸念である。」

だが、その後のノンナの泣き落としと俊輝が理解できない横文字を多用した説得により結局それでいいやと認める事に。なお横文字は半分近くが適当に並べていた言葉である事が後に発覚し、ノンナはお説教を食らうハメとなった。

そして現在。血気迫るノンナと、それにちよつと怯えながらのエリン。結果、0勝3敗。

つよい。かてない。がつくりと肩を落とすノンナを慰めるエリン。一国のセキュリティを突破してデータを盗み取ったその腕は伊達では無かった。

「……まあ、新しく見つけられたファイルもありますし……見てみましょ……」

「うー……今度は負けないからあ……」

勝敗はさておき仕事仕事、と目線をモニターに向け、一層外れたプロテクト、その内に隠されていた情報を二人で見えていく。

ファイルがずらりと並んでいた。数にして全部で百を少し越す程度だろうか。

人名とその後年月日と思われる数字で名づけられたファイル。その下には、上のファイル名から人名部分を抜いた年月日だけの名前ファイル。データ容量はほぼ同じくらいだ。この2つ1組と思われるものが、延々と下まで続いていた。

試しに一番上、最新のものを開いてみる。

「ん……また？」

そこにあつたのは、4種類のアルファベットがひたすら連なったものだった。

少し生物学を学んだ人間であつたなら、それが何を示すものなのか理解できるだろう。

塩基配列表。人間の設計図。その一番最初に、顔写真が添付されている。

西洋人系の青年だった。ちよつと気の抜けた、親しみの持てる笑顔をしている整った容貌だ。

「この人、ローマ連邦の空軍の偉い人ですよね」

「……んー、エリンちゃんはそう知ってるよね」

それは、二人共が知っている人間だった。エリンにとっては、表向きの有名人。

ノンナにとっては、裏のネットワークで。

『Joseph G Newton 26180917』

その一つ下、同じ日付のファイルを開く。

「……」

こちらもまた、同じく塩基配列表だった。

ふと考え、ノンナは開いたままだった先ほどのファイルと今開いたものを見比べる。

ほぼ一致。だが、所々に違いがある。

「これ、前に見たのと同じやつだね」

己の記憶から、ノンナはそう判断する。

最初のプロテクトを外した際に得られた配列表。それと同じものだ。

何故同じファイルが別々の場所に分けて保管されているのかはよくわからないが、まあそれはどうでもいいかと次のファイルへと手を付けた。下に行くにつれて、日付は古くなっていく。

そして、それを繰り返し数時間後。

「飽きてきたね」

「……うん」

人名付きのファイルを開くたびに、塩基配列と『私です』と言わんばかりのキメ顔の美男美女が二人を迎える。

下のファイルは、顔写真すら無いため読んで面白くものでは決してない。

「ノンナちゃん、そろそろ休憩……」

「んにゃ……」

そしてついに単純な確認作業の連続に、徹夜続きの体は耐えられなかったようだ。

「凄いけど、私よりずっと年下なんだよね」

すやすやと眠るノンナを見て、エリンは誰ともなく呟く。

一度作業の手を止めると、一気に眠気が押し寄せてくる。

自分も一回休憩しようかな。

雑に放り捨てられた毛布を取り、ノンナに被せ、自分もそこに包まる。

おやすみ、と一言だけ言い、その意識は夢の中へと旅立っていった。

「……」

そして、年上の意地で起きていたとはいえやはり限界だったのか数分と経たない内にエリンが寝息を立て始めた直後、ノンナは無言で起き上がった。

一度横目でエリンを見て簡単に起きそうにない事を確認した後、ファイルの一覧をスクロールし、上から順に人名と日付を見ていく。

一瞬でそれを頭に入れ、次に、全てを見終わるのに、1分もかからなかった。

やっぱり。年月日はそれぞれのファイルでおおよそ10年程の間が空いている。そしてデータにある人名、その姓は数パターンしかない。

『ニュートン』。『ヴァインランド』。他、二つほどの姓。

それだけを確認した後、ノンナはモニターの電源を落とし、光の無

くなつた部屋で再び毛布の中で眠りに就いた。

「あー畜生、落ち着かねえ……タバコが欲しいな」

スコープを覗き込み、リックはぼやく。

その先で、彼の戦友にして上司であるチャーリーは新手と交戦を始めた。

チャーリーから通信機で伝えられた、事前に取り決めておいた合言葉。それが意味したのは、『威嚇射撃』。それから再度通達されたのは、『無力化』。殺してはいけならしい。

改めて交戦を始めた敵を見てみる。恐らくU—N—A—S—A所属であろう隊服の人間だ。どこかで見覚えがあるような。

ああ、火星でご一緒したつけ。そこでようやくリックはチャーリーの相手、俊輝の顔を思い出す。同盟国と言えど国同士の関わりが薄い裏アネックス。チャーリーは同じくランキング上位という事で親しかったのだが、リックにとつてはあまり知らない相手だ。

その足に照準を合わせる。戦場から約150 m。狙撃というには少し近めのこの距離には、いくつか理由がある。

「痛ウ……」

ずきりという痛みで、反射的に足首を抑える。先ほど切断された足首。痛手であったが、まあ戦場だ、切断されたのが頭の方の首じやなかっただけマシだろう。そんな前向きと言つていいのか何なのかなリックの傷跡。それは、失った足こそ元通りでは無いものの、傷がすつかり塞がっていた。

第一に、単純な話、そこまで長距離を移動する事ができなかったという事。

片足を足首から先のみであるが失っている状態で、走る事ができない。またあの糸のトラップがあるので、という心理的な恐怖もある。

第二に、近ければ近い程弾は当たりやすいという至極全うな理屈。

本来現代戦における狙撃手スナイパーとは観測手スポッターと呼ばれる周囲の索敵や撃

破目標の優先順位の決定、さらには発射された弾を観測し、風向や風速といった要素の様々な修正を行い次弾の正確性を向上させる補助人員との二人一組で任務に当たる。

そのため、単独ではその戦闘能力は十全には発揮できない。

勿論歴史を掘り返せば単独で凄まじい遠距離の標的を撃ち抜く怪物もいるにはいるものの、リックは己の技量にそれだけの自信は持っていない。

自分が一人でやってチャーリーに誤射しない程度には精度を確保できる距離はこれくらいだ、と踏んでいるのだ。

そして、第三。リックは、これだけ敵に近づいても平気だから。

狙撃手は当然ながら重大な脅威として認識され、さらには遠距離から一方的に命を奪う存在として敵対者からは憎しみを向けられる。そのため、その所在が知られてしまえば最優先で狙われる事となる。

距離というのは、その身を守る盾の一つであるのだ。

そして、距離以外にも、狙撃手は高度なカモフラージュによって敵に気付かれない事が重要となる。

俊輝の目が、チャーリーとの戦闘の隙を突き狙撃手を探さんとリックのいる方向へと向く。だが、それは見つからない。

木々があるとはいえ、銃の射線である以上、リックの姿は捉えられていてもおかしくない。では、何故なのか。

彼は、全ての服を脱いでいた。別に、暑いわけでも気が触れたわけでもない。

その全身は、背後の木々と全く同じ、樹皮の模様すらも写し取った茶色に染まっていた。

銃を構える。狙撃手にとって、スコープを覗き込むその瞬間は視野が狭まる隙だらけの瞬間となる。

密かに近づいてきた敵がいれば、なす術がない。

だからこそ、観測手による索敵が必要なのだ。

しかし、彼の眼はぐりんと本来人間としてあらぬ方向に両方が別々に動き、周囲の敵を探る。

敵性反応、ナシ。

そして、射撃。同時に、樹から樹へと飛び移る。

背から生えた尾で太い枝にぶら下がり、普通であれば無理な姿勢で再び照準を定める。

『現代戦とMO手術の親和性』。それは、各国軍において研究されてきたテーマだった。

単純に兵士のスペックを底上げするだけでなく、ハイテク機器と組み合わせた場合の相性。

リックは、その概念実証のための手術ベースに適合し、狙撃銃を手渡された。

わざわざ場所に合わせて迷彩を変えなくてもいい、あらゆる環境に適応できる高い隠密性。

狙撃手の弱点である周囲の警戒を単独でこなせる、広い視野と目の可動域。

強靱な尾による、本来では困難な位置での姿勢維持。

これより殴り合いが強い生物など、いくらでもいるだろう。

これより守り固い生物も、いくらでもいるだろう。

だが、狙撃手にMO手術を施すという一点において、この生物に勝る相性のもは、未だ発見されてはいない。

リック・アシユクロフト

MO手術『爬虫類型』

専用装備：体色連動式コーティング皮膜狙撃銃 『虹の弓』レインボウ

『裏マーズ・ランキング』18位

そして、彼はこの特性のおかげで命を拾った。

射撃。風向きや風力といったものを考え、微量の調整を加え、再び俊輝を狙い撃つ。先の一撃は、弾が逸れてしまった。だが次は外さない。スコープを覗き込む。標的が、通信機に向けて口を動かしている。一度目を離し、単独行動の狙撃手としてもはや習慣となった、その特性による目だけを動かしての索敵。

瞬間、一瞬で過ぎ去った視界の内になんかが映ったのを、リックは見逃さなかった。

狙撃手の役目。

その1。敵の重要な人員のピンポイントでの無力化。

その2。いつ狙撃されるか、という心理的な圧迫。

……その3。

同時に、リックの無線機に通信が入る。

だが、それはチャーリーの声では無かった。

『私と同業のハエを排除、ですな？ 隊長』

ぞわりと背筋を虫が這う。U—N—A—S—A支給の通信機、付近での通話の混線。いや、これは混線などでは無い。

視界に映ったもの、それは。

リックを正確に捉えた銃口だった。

……狙撃手の役目、その3。同業者の始末。カウンタースナイプ

「くっ——!?!」

緊急離脱。尾を離し、落下する。同時に、リックの頭部が直前まであった場所を弾丸が通過する。

落下しながら目を向けたリックは、その下手人の姿をはつきりと認めた。

それは、死神、という印象を一目で与えた。

木々の隙間からほんの微かに見える、目測700m先、全身を黒衣で包んだ老人。その手には、銃マニアのリックだからこそわかる、600と数十年程前に使用されていた狙撃銃。いや、正確には、それを模した最新鋭の武器。

リックが見ているのがわかるのか、口だけを動かしにやりと笑い、その姿は物陰に姿を隠したのかかき消える。

冷や汗を流しながら、リックはチャーリーへと回線を開く。

支援を一時的に中断する、という合言葉を送るために。

「……いつあ、俺らやべえ連中とケンカしてんのかね?」



## 第79話 黒の射手

「チツ……」

リックは地面を転がり、素早く樹の裏に身を隠す。

先の弾は正確に頭部の位置を射抜いていた。回避しなければ、あの場で死んでいただろう。敵は単体。距離にして目測で700m。

異常だ、とリックは舌打ちをしながらハンドルを引き、次弾を装填する。

初弾で、この距離を、単独で。

それぞれの要素を見れば、決しておかしいものではない。

27世紀の狙撃銃は昔のそれに比べれば弾そのものや火薬の性能も上がっており、風や重力といった誤差をある程度は軽減できる。

700mという距離は軍の狙撃手としては特筆して長距離というわけでもない。

観測手に頼らず単独行動をする狙撃手もいる。

しかし、この全ての要因が一つに合わさっている、その事実にはリックは鼓動が早くなるのを感じ取る。

相手は卓越した技術を持っている。だが、狙撃手としては致命的な部分が一つある。それに対して、自身が圧倒的な不利でありながらもリックは恐れより怒りを覚えていた。

「――！」

再び、周囲をレーダーの如く回転して索敵するリックの目に、影が立体化したかのような黒色の人型が映る。

同時に、それが構える銃がこちらに向けられている事も。

再び相手と自分の間に樹が来るように、素早く樹を周る。直後、右目が一瞬で通過する弾を捉え、直後に風を切る音。

「舐めやがつて……いや……」

相手は、余りにも目立つ格好をしていた。

その黒衣は、夜戦であれば効果を見せた事だろう。

しかし、今は昼間。周囲の緑を塗りつぶし映えるそれは、狙撃手として必須の隠密性を殺している。

本来であれば、昼夜を問わない森林用の迷彩を使用すべきだ。

かと言って、相手が素人なのかと言われると、これまでの2発の狙撃とその後の退避は明らかに熟練のそれだ。

己の命に関わる最も基本的な部分と言える隠蔽は、スナイパーズクールで最初に習う事の一つだ。

そこをおろそかにするなど、普通では考えられない。

ならば、相手の目的は。

「いいぜ、付き合ってやるよ」

リックは懐から缶を一つ取り出し、足元に放る。

そこから吹き出す煙が周囲を覆い隠すのに、そう長い時間は要さなかった。

恐らく、相手はこちらの目を引くのが目的だ。わざと目立つのも、そのため。

煙幕に乗じ、相手のいるであろう方向へと移動する。

接近するほど正確な狙撃を受けるリスクは高まるが、今の距離でも頭に直撃する精度はありそうだ。

ここから近づいても、そこまで変わらないだろう。

相手の位置を予測し、樹を盾に距離を詰めていく。片足がほぼ機能していない状態だ、走るといには余りにも遅かったが、それでもM O手術による身体能力の強化と軍人としての訓練された動きは、森の中を駆け抜けていく。

再び、相手は姿を現した。距離はおおよそ350mほど、半分ほど距離を詰めたリックの真正面の位置で銃を構えるそれに向けて、リックもまた銃を向け引き金を引き、同時に横に跳び身を隠す。

当たらないのはわかっているが牽制で放ったその効果はあったようで、相手の射撃が遅れる。

再び隠れた樹の裏でしゃがみこみ、M O手術の効果で大分スタミナは強化されているものの、それでも短距離での全力の移動は堪えたのか、荒い息を繰り返すリック。

ここまで派手に移動して落ち葉を巻き上げていては、背景に溶ける

自身の能力と己の銃もそこまで意味を持たない。

だが、やられっぱなしではいられない、とリックは顔を出し、周囲を探る。

姿勢を低くして移動する相手の姿は、すぐに見つかった。

ここに例の卵が落ちてきていないのは幸運としか言いようが無かった。

混乱し、つい先ほど連絡が途絶したらしい本隊からの連絡によれば、敵性的存在と思われる爆撃は完全な無秩序というわけではなくある程度場所を絞って落ちてきているらしかった。

大雑把ではあるものの、それは生物を狙って起動を修正しているくらいがある、というのがこの切迫した状況での推測だ。

何を基準に標的を決めているのかは定かではないが、チャリーの付近には数発落下しており、自分の周囲には落ちてきていない。

辺りを火の海にされると狙撃の際に大きなずれが生じるため、できれば避けたい状況だった。

狙う側から狙われる側になってしまったリックの身としては、何とも言えないが。

「!?」

そんな事を考えながら、二発目で当てるつもりで駆ける相手に照準を合わせていたリックは、相手がちやうに鋭い目を向けたのをスコープ越しに確認し、声を出さないまでも驚いていた。

本人だけでなく銃までもが完全に背景に溶け込み、極力動く事なく狙いを付けていた。

だが、それが先ほどまで移動に集中していた状態から一瞬で位置を知られた?

そこではつとリックが気づき、スコープを手で塞ぐ。

「オイオイ冗談だろ!」

いやこれじゃダメだと判断したリックがスコープから顔を外したのと、相手が一瞬で自身のスコープを除き弾を放ったのはほぼ同時だった。

瞬間、リックのスコープが砕け散り、頬を銃弾が掠める。

相手はリックの迷彩を見破っていたわけでは無く、スコープの反射光を認識しそれで場所を把握していたのだ。

それに気づいた瞬間、リックの脳内を撤退の二文字が占める。今更気付いた話でもないが、分が悪すぎる。

それに、こちらを認識してから反撃に転じた速度。

まるで、一切体のブレが無いかのような、一瞬で姿勢を整えての反撃。

これは逃げた方がいいな、うん。一度そう考えるが、即座に却下。

「俺が逃げりや、皆がやべえ」

相手は自分を引きつけているようだが、それでも自分という障害がいなくなれば即座にU-NASA側の支援に移るだろう。そうなれば、隊長やチャーリー達は無事では済まない。

今戦っているチャーリーとその相手の実力は拮抗している。だからこそ、支援を加えて勝ると踏んだのだ。

そこに自分が戦っているコイツが加われば、総崩れだ。

次にヤツが姿を見せるのはどこか。その瞬間に、自分の命脈が断たれるのだろうか。

スコープが壊された。射撃戦での勝ち目はゼロに等しい。

逃げ出したい。今すぐ白旗を上げたい。狙撃手なんて選んだのも、銃弾が飛び交う前線よりも安全だと思った、その程度でしかない。

命が惜しい。怖い。

そして、リックは一度銃を下し。

「あーあ、俺ほんとバカだわ」

自身を守る樹を抜け、一直線に駆けだした。

失つてもつと惜しいと思うものがある。怖いと思うものがある。

自分の命を賭してでも、時間を稼ぐだけという釣り合わない結果を得たい、そう思えるだけのものがある。

一瞬、リックは常に自分を観察しているかのように感じられた敵の目が揺らいだように感じた。

恐怖をかき消すように大声を上げ、先ほどの敵のいた方向へ力の限

り進む。

さあ出てこい。殺してみろ。獲物がここにいるぞ。

リックのそのような意思が届いたのか、敵は再び姿を現した。

「……ほう」

それは、リックの真正面だった。黒衣の老人。

近寄って初めてわかる自身を上回る体躯に、外套で隠れているものの老いを感じさせない肉体。

その瞳は、嗜虐的な好奇の色を含みリックを見つめていたが、それは即座に憑き物が落ちたかのように消えた。

「良い目をしておりますな」

そこには、老人を比喻する枯れた、などという表現とは程遠い、ただ目の前の敵を見据え勝利を得んと戦いに臨む戦士としてのそれでは無く、戦い甲斐のある敵を目の当たりにして猛る、戦闘狂と呼んだ方が近い貌があった。

これを彼の隊長や同僚が見たら、さぞ驚く事だろう。第七特務の拷問官、味方や一般人に対する紳士的な態度の裏側に隠れた嗜虐癖。敵対者に対する一方的な加害を好む悪意を塗り固めたようなこの男が、このような表情をするのか、と。

その手に握られた銃を心底大事そうに撫で、行くぞ相棒と言わんばかりに構える。

リックの目は、こんな状況であるのに一瞬その銃に奪われた。

見た目自体は先の戦闘でも見た通りそれこそ600と数十年前の、骨董品と言っていい銃だ。

性能はリックの専用装備であるそれと遜色ないように感じられたため、恐らく新鋭のものにガワを被せているのだろう。

ガンマニアなのだろうか。これが平和な時であったなら、きっと趣味が合ったに違いない。

しかし、リックが思わず目を向けてしまった本当の理由。それは銃床の部分に彫られた短い英文だった。正確に言えば、その英文が重要

なのでは無く、英文が彫られている部分が上から執拗に刃物ですたずたに傷つけられ、さらには念押しと言わんばかりに赤の塗料で大きなバツが振られていたという部分。

英文が彫つてある、というのがやつとわかるほどに傷つけられ塗りつぶされたそれ。大切に扱っているはずの銃に、憎しみや怒りが向けられているような痕がある。

だが、そこで銃が自身に向けられ、それに関して深く考えている暇は無くなった。

後十歩も駆ければ手が届く距離。もはやスコープが無くとも外す事も無い。

リックもまた同時に銃を構え、迷いなく引き金を引く。

体を右に傾けるリック。外套を翻す老人。弾丸はお互いに当たらず。

そして、両者の距離が無くなる。

迷いなく銃を放り捨て、リックは懐のサバイバルナイフを振り抜く。

大振りのそれに、老人の目が動き、回避動作を取ろうとする。

「シャアッ！」

だが、避けようとしたその腹に、リックの口から放たれた一撃が突き刺さる。

カメレオンの舌。その加速力が自然界でも一角の物であると言う事はあまり知られていない。

その速さ、停止状態から時速90キロに到達するまでに、僅か0.01秒。

本来得物を絡めとるため、しかしMO能力によって得たそれは、致命的な一撃でこそ無いものの対人戦に置いて反応すら困難な武器だ。

「……良い」

事実、老人は回避できずそれを腹に受け、骨を軋ませる。

その瞳と歪んだ口元からは、抑えきれない獰猛さがにじみ出る。

「っ……」

一撃を当てた。だが、動揺したのはリックの方だった。

本来であれば、受けて初めて気付くほどの速度の一撃。だが、相手は微かに反応していた。

片目でナイフの軌道を捉えながら、もう片方の目が一瞬、舌を追うように動いたのだ。

さらに、相手は間に合いこそしなかったが重心を後ろに傾け、威力を殺そうとしていた。

「貴方のような戦士がいれば軍も安泰なのでしょう。その戦意に敬意を表し……」

瞬間、リックの目が剥き出しになっている老人の左腕の微かな変化を認識する。

白の体毛。それが、ガラス細工か何かのように透明に変わり、さらには曲線がぴんと伸び直線となる。

そして、その一部がサイズを増していく。

透明の、観察すれば中空となつている鉛筆の芯ほどの長針へと成長したそれを抜き、老人ははつきりとリックを見据える。

「本気でお相手させていただきましょう。苦痛を贈って差し上げ……」

老人がそれを言い終わろうという部分に差し掛かった瞬間だった。

二人の通信機が、同時に音を発する。

突然の横やりに戦意をくじかれたのか、両者無言の一步後退。

二人に向けた通信、それはそれぞれお互いの上司からのものであり、伝えられた内容もまた同じものであった。

「戦闘中止して戻ってこいだあ……?」

「隊長、私決め台詞を言っておりますのに中断させられると大変恥ずかしいのですが」

## 第80話 第七と第一

「よう俊輝……随分といい就職先見つけたじゃねえかよ……」

「まあ、色々あつてな」

それは、偶然再会した友人同士の会話、程度の調子をもって語られていた。

だが、明らかにそれとは異なる点がいくつも重なっている。

周囲が火の海……という程に燃え広がっているわけではないのだが、先の爆撃により所々に火が付いており、このままでは大規模な山火事に発展する恐れがある。

そして、再開からの談笑と呼ぶには明らかに凶悪に、両者は、お互いの凶器をお互いに向けて振っていた。

俊輝の刃。チャーリーの爪。互いのそれが、情け容赦無く人体の急所、喉へと向けて振るわれる。

お互いに、相手を殺したいというわけではない。

第一班と第二班、その副官と呼べる立場であり、個人的な親交もあり、何よりあの火星の地獄を生き抜いてきた戦友でもある。

命を奪わないという選択肢があるならば、それを選びたい。

だが、二人共が同時に理解していた。

息の根を止める覚悟で行かないと勝てない相手だと。そして、命が潰えるまで止まらない相手だと。

チャーリーの、ダリウスに対する信頼。俊輝はそれを知っていたし、今この瞬間、U-NASAを敵に回す事をわかりきっていてその上でダリウスに付くという選択をした時点で、それが揺るぎないものであると改めて理解した。

俊輝の、第七特務という立場。

U-NASAの後ろ暗い任務を担う、裏の部隊。それに就き、今日の前に立っているという事実。

チャーリーが俊輝と再会した瞬間にその素性を察する事ができた



のは、ごく単純な状況証拠からだった。

今この山には、軍の航空機の重要部品が落下したという名目で一般人の入山規制が行われている。

今場所にいるのは、ダリウスとそれを搜索するU—N A S Aと陸軍の合同部隊、それだけだった。U—N A S Aにも軍の作戦参加者の名簿にも、その名前は無かった。ならば、おのずとその所属は参加者名簿にも記せない人間である事がわかる。

尤も、今のこの状況、第三勢力の介入の可能性が考えられる。さらには、先ほどの爆発のような音。そこから、それが敵対的存在なのだとしたら、それは恐らく、ダリウスの――

「お前の同僚、暴走してたぞ」

「……部下だなそれ」

「はっ、出世してんな」

第七特務、それも一般の所属では無く、少なくとも部下を持てる立場。その情報から、交戦での相手の技量から、チャーリーは警戒心を強める。

速い、というわけではない。反応速度も体術も、地球に戻ってから鍛練をしている事は想像がつくがそこまで大きく変化しているわけではない。

むしろ、原因はわからないが右方に対する反応の遅れを見るに、ここに関しては弱体化していると言っているくらいだ。

だが、明らかに以前の俊輝と異なる部分がある。

それは、攻撃に対する遠慮がほぼ消えている事。

地球で訓練をしていた時、同じランキング上位で近接戦闘が主体という事でチャーリーは俊輝と幾度も模擬戦闘をしていた。

その際の俊輝という戦士の評価は『軍属経験も武術の経験も無いのにやたら強い一般人』だった。この一般人というのは、単に技量が足りていないという事を表現し卑下したものでない。

根本的に、相手を殺傷しようという意思が弱いのだ。

別にだから悪いという部分では無い。実際、軍人であろうとも加害、特に命を奪う事については及び腰になる人間が殆どだ。……とい

うよりも、人間というのはそもそもそういう生物なのだ。

軍で『人を殺す抵抗を和らげる訓練』というものが存在する時点で、それを持つてしても実戦の後に心を病み軍を去る人間が多数存在する事から、それは国も認め軍の教育に組み込むほどの本能に根差した当然の感情だという事がわかる。

如何にして情け容赦の無い動きができるのか。相手に致命傷を与える動きができるのか。

自分の命がかかっているとわかっているとしても、人間はそれを避けてしまふのだ。

チャーリーも、訓練を重ねてはいるが自分がその本能の一切を省いて戦えるかと言うと、首を横に大きく振る。

相手を殺す躊躇を無くす訓練というのは人の心を削り捧げる行為だ。

軍というのは一般人を守る為にある。民が安らかに日々を過ごせるように、自分達は人として当然のものを削り取って銃を持つのだ。

チャーリーはその覚悟でいたし、軍人で全てを埋める事ができず一般人がそれをしなければいけない裏アネックス計画について憤りも感じていた。

だから、俊輝を見て少し安心していた。こんなに強くても、まだ彼は健全な人間として生きているのだと。

しかし、目の前の俊輝からは、かつてのその大部分が削れているように思えた。

命を奪う一撃に一切の容赦無し。殺害という行為に最適化された動き。

それが、他の部分ではそこまで強くなっていない彼を、理由は不明だが単純な身体機能では弱体化しているとまで言えるその武練を一段階違う別格の動きへと変えている。

先の一戦、同じ第七特務のカローラでさえも、自分やダリウスを明らかに殺すつもりであったものの、微かではあるが明確に仕留めるの

はそこまでたどり着ける事が尊敬できる程の無意識のレベルではあるのだが躊躇しているように思えた。

今の俊輝の動きは、チャーリーが唯一見た事のある、完全にその本能が擦り切れた人間のそれに近づきつつあった。

「っー」

俊輝の刃、その根本である手首を掴み、足を払い距離を取る。

姿勢を崩しながら脇腹に向け振るわれた刃を間一髪で避け、チャーリーは肝を冷やす。

そのいつそ機械的とも言える動きから、チャーリーはかつての裏アネックス合同演習を思い出す。

単騎でダリウスを除く自分達第一班15人を塵殺し、息一つ切らさず笑うその姿を。戦いに笑い燃え狂う、その姿とは対照的に寸止めするとはいえ絡繰のように何の感情も無く冷酷に最適化された死を振るう魔物の表情を。

『良い動きだったわ。でも、もう少し相手を殺す気でかからないと実戦では生き残れなくてよ?』

まだその領域には至っていない。だが、着実に近づきつつある。地球に戻り第七特務に所属し、どれほどの戦いを経験すれば、そこまで削れてしまうのだろうか。

「……待った」

何とか拮抗している。だが、このまま時間を稼いだ場合、恐らくカローラが追撃してくる。

そうなればもはや勝ち目は無い。

リックも、相手の狙撃手からの妨害が入ったようでそちらへと向かっている。

リックが負けるとは思いたくないが、相手は第七特務の狙撃手だ。潜って来た場数が違う。どうなるかわからない。

そんな、明らかに不利なさ中、ストップをかけたのは意外にも俊輝の方だった。

両の手のひらを突き出し、この状況には似合わない呑気にも見える様子で、俊輝は戦闘を中断しようとした。

慌ててチャーリーも足を止める。

「どうも、なんかヤバいみたいだ」

語彙の足りていないそれに怪訝そうな表情のまま、チャーリーは俊輝の次の言葉を待つ。

正直な所、戦闘を中断できるというのは単純にダリウスが退避する時間稼ぎの意味を持ったため、話がどう転ぼうが都合は良い。

「もうわかってるかもしれないが、搜索本部からの通信が途絶してる、そんなもって……」

「そんなもって、何だよ」

「……ああ、合流できるか？ え、もうすぐそば？」

これまで落ち着いて話をしていた俊輝の表情が、間抜けな形に崩れる。

それと、樹上から人影が一つ飛び降りてくるのは同時だった。

「くっ……!?!」

「……っ！」

それに対し、チャーリーは構え、その人影も同時に怒りに近い表情で懐の凶器を取り出す。

「カローラ、落ち着け」

だが、その剣呑な空気は、俊輝の一言で収まった。チャーリーを今度こそ始末する、という怒気を込めた空気だった人影、カローラが、俊輝の言葉で一步下がる。

「……とにかくだ、交渉をしよう。ドンパチは一時中断だ。ダリウスさんと呼んで来いとは言わないから、取りあえずお互いにスナイパー連中を引上げさせよう」

---

これが、先の交戦から少し前の出来事である。

「ほほう！ 話がわかりますな！ その腕前も惜しい、よければ我々と共に」

「いやー遠慮しときますわー」

それぞれの上司の命令により帰還した老人、クロヴィスとリック。お互い無言に耐えきれずおずおずと言葉を交わした結果思いの外話が合い急ぎながらも談笑していた二人が見たのは、申し訳程度に消火活動をしているお互いの上司と同僚の3人の姿だった。

「リック……これ、消火はムリだ」

「遅かったなクロヴィス……」

そりやそうだろうとは言えなかった二人である。

「率直に言うぞ。今現在、U—N—A—S—Aに対して敵対的な集団が出現。捜索本部との通信が途絶えた。たぶん、壊滅だろうな」

「……俺の方にも今入って来た。各分隊が襲撃を受けて混乱状態みただ。敵はU—N—A—S—A所属では無い隊服を纏っている」

俊輝とチャーリーの言葉。それは、第三勢力、それも敵対的な存在の出現をはつきりと示していた。

先の、ダリウスとは逆方向から聞こえてきた爆発。空からの爆撃。それはつまり。

「……つまり、だ。僕の目的は目の前という事だね。チャーリー、俊輝君」

「……何でー」

背後から響いてきた声。それに、チャーリーは思わず大きな声を上げてしまう。

そこに立っていたのは、ダリウスとそこに怯えながらも寄り添うアシユリーだった。

「お久しぶりです、ダリウスさん。剛大班長も、また会いたいと言っていました」

半ば反射的なものか、殺気を放つクロヴィスとカローラを手で制し、俊輝はダリウスに向けて軽く頭を下げる。

「班長、何で戻ってきちまうかなあ」

リックも、呆れているがどこか嬉しそうにダリウスを見る。

この状況で、ダリウスが姿を現した事に対し、第七特務の三人はそれほどまで驚いた様子は無いようだった。カローラとクロヴィスの先の敵意はダリウスが敵対的な存在であるという前提での威嚇であり、相手にその態度が無いと理解した後は動向を見守っている。

「たぶん、まともは今動けるのは俺らと第一班の皆さんだけです。で、俺ら第七特務は正直アンタらより追い詰められてるまでである」

俊輝の渋い顔は、それ謙遜でも何でも無い事を示していた。

MO手術戦に関して、この山に派遣された人員の中で最も長けている第七特務の役目は、被害を極限しつつダリウスを無力化する事だった。

だが、この被害は看過できない。それがたとえ、ダリウスとは関係の無い敵の襲撃による被害であったとしても。

この大混乱の中でさらにダリウスを逃したとなれば、言い訳をしたところで恐らくU—N A S Aのお偉方はこう言うだろう。

——こんな事態は想定していない。

——……想定していない？ 殺ししか能の無い貴様らが、鬼ごっこに興じて敵対者を見逃した、と？

——派遣部隊を守る為に戦った。標的を逃すのは、優先順位の上仕方の無い事だ。

——それで、最終的な結果として大きな被害を追い、さらには目標を逃した、何も成果を得られずにごすごと帰ってきたと？

「うん、それで、交渉と言ったかな？ 君たちは僕に何を望む？」

わざわざ、自分達の窮状を馬鹿正直に話す必要も無いだろうに。

チャーリーは俊輝に、変に律儀な所は変わっていないな、と甘いと思いつつも安心感を覚える。

それは状況から把握できていたため、結局チャーリーから突っ込んでいた部分だ、言おうが言わまいが結果は同じようなものだったが。

「先の爆発音、今回の敵対者。ダリウスさん、恐らく、貴方が追い求め

ていた相手だ」

「……」

俊輝の言葉に、ダリウスは無言で応じた。

第七特務、ひいてはU—N—A—S—Aは、どこまで自身の事情を把握しているのか。

それを図りかねる。

「この事は、俺達の独自調査です。U—N—A—S—A全体には知られていない」

「ああ、わかった」

ダリウスの納得と、無言で頷く俊輝。

「乱入してきた敵の始末をこっちに押し付ける、終わった後での隊長の身柄の引き渡し。代わりに、それが終わる

まで邪魔しない事と隊長の弁護、つてか？」

「何から何までその通りだ」

話に割って入ったチャーリーの言葉を、俊輝は肯定した。

ダリウスの目的を果たさせてやる。代わりに、できる限りの弁護はするがダリウスにはU—N—A—S—Aに出頭してもらう。それが、俊輝の、第七特務の出した条件だった。

「……お前達が約束を守る保証が無い」

「それはお互い様ですとも」

チャーリーの言葉にクロヴィスが答える。この交渉は互いに確約ができないものだ。

邪魔者を始末させた後で第七特務がダリウスと第一班を一方的に捕えないという保証は無い。

逆に、第七特務が目的を果たした後で、もしくはその前にも逃げ出さない保証もまた無い。

「しかし、お互いが約束を守れば我々がお偉方から受ける追及は最小限になりますし、貴方は燃え尽き症候群のダリウス殿を少しでも救いの芽がある状態にする事ができるのですぞ」

クロヴィスの、チャーリーに、ダリウスに視線を移しながらの言葉。それに、チャーリーは気味の悪い、内心を見透かされているかのよう

な感覚を覚える。

知られている。ダリウスが、目的を果たした後は自らU—N A S Aへと身を捧げるつもりなのだ。その後の死すら、受け入れているのだ。

「……僕の事はどうでもいい。何だったら弁護も必要無い。代わりに、一つ条件を追加してほしい」

「聞かせてください」

ダリウスが、神妙な、しかし俊輝に向けて鋭い目を飛ばす。

「一時的にとはいえU—N A S Aを裏切った僕の班員達に、責が及ばないよう配慮してもらいたい」

「それで約束していただけるなら、喜んで」

言葉を交わした後、ダリウスが、俊輝が、無言で一步踏み出す。

「良かった。それを受け入れてもらえない上に最悪の結果になったら、ここで『能力』を全力で打つところだった」

「……剛大さんが言ってた通りの人だ、貴方は」

お互いが差し出した手を、ダリウスは穏やかに微笑みながら、俊輝はダリウスの言葉に隠しきれない動揺を覚えながら、それぞれ握る。

第七特務側が交渉を反故にして捕えに来るリスクを踏んでまでわざわざ標的であるダリウスが姿を見せた理由。

それは、彼が無鉄砲だからでも愚かだからでもない。

自分は別にいい。だが、部下に手を出すという態度を取るなら皆殺しだ。

お前らにとって僕の部下はどうでもいいだろうが、自分の命は惜しいだろう、と。

その意思をひしひしと感じ取り、俊輝は唾を飲み込む。

こうして、互いの危うい天秤の元、この事態の解決に向け同盟は結ばれたのだった。



## 第81話 人喰らいエスメラルダ

「ああ……熱いな……」

今度こそ、私は幸せな結末を迎えたかった。

自分の好きなものを好きなだけ食べる事ができ、命を狙われる事も無い、傍には今は思い出せない誰かがいて、そうして年をとって家族に囲まれ寿命を迎える。

故郷にいた頃の記憶はもはや何も思い出せない。思い出そうとすると頭に不思議な気持ち悪さがある。

だが、私はその故郷できっと、そんな何不自由なく家族と暮らす幸せな人間でも見かけたのだろう。

何もかもを奪われ、永遠の眠りへと無理矢理に沈められた時、私にあったのは激しい怒りだった。そして、再び目を覚ました時。私は今度こそ、そう、今度こそだ。それを叶えられると信じていたのだ。

周囲を、炎が覆っている。不快だ。人間が手を振るのと同じ感覚で、『能力』を振るう。

瞬間、その暑さは消える。同時に、周囲で喚きたてていた声も全て静まった。

「ひ……あ……」

退屈だった。探し物とやらは見つからず、その痕跡さえも掴めず。

だが、最早そんな事はどうでもいい。見つかるとも思っていないかった。

「……ン」

ふと目を下に向けるとソコに人間が落ちていた。運よく樹が盾にでもなったか。他の人間が盾にでもなったか。どちらでもいい事だ。

一瞬だけ、私に対する敵意の炎が目に宿る。だが、それはすぐに恐怖へと変わる。

仲間の仇。一瞬だけ威勢よく輝く意思の光は、即座にこれから自分が辿る末路を自覚しそれを想像し、その通りの色へと濁っていく。

ああ、美しい。それでこそ、生きていくというものだ。  
それを捌いていく。両手足は挽げているか、殆ど取れかけ。  
スープに使えばいい出汁が取れるのだが、今はそれをしてい暇は  
無い。

太腿だけを切り取り、微かに残っていた火種を落ち葉をかけて大き  
くし、それで炙る。

「疲れたろう。キミもどうだい？」

私が善意から差し出したそれを、彼は青ざめた顔で拒絶した。

残念だ。話し相手はいない。いる必要も無い。そもそも、私に話友  
達など必要も無いのだが。

それから、私は彼を捌いた。楽しい。何と、楽しい作業だろうか。

そうだな、今の文化で例えたとすれば……食品店で美味しそうな食  
材をいくつも選び、それで作れる料理を想像し、結局買わずに棚に戻  
す、そんな遊びに等しい。

「……ふむ」

耳を立ててみる。遠くから聞こえる銃声と、火の爆ぜる音。

銃声には嫌な思い出しか無い。

私の記憶の多くはどこかぼんやりと薄靄がかかっている。

死から蘇ったのだ、仕方の無い事だろう。しかし、それでも忘れら  
れないものがある。

狭い船に押し込められ、多くの人間と共に荷物のように扱われ。

少しでも反抗の態度を取れば、その時は銃、という名さえ知らな  
かったそれで脅された。

憎しみは募り、それ以上に食欲が積もった。

ああ、商品である私を蹴り、殴り、犯した彼らの臓は、どのような  
味がするのだろうか。

私を慰め共に生きようと言った同じ境遇の荷物達は、甘いのだろう  
か。

「こつちかな」

長旅で人数は減り、辿り着いた先で労働をさせられ、私は逃げ出し

た。

私が自慢としていた、皆が褒めてくれた……らしい歌声はその生活で涸れ、残ったのは、非力な、力の無い女の体だけだった。

農民がやっていたような畑を耕す力も、逃亡生活の中で見かけたみすばらしいガキがやっていた魚釣りの遊びさえも私はできず、弱っていった。

なんとまあ、歌姫などと持ち上げられ……その記憶は無いが、そう呼ばれ褒められていた事だけは覚えている。

哀れなものだ。どれだけ人々にもてはやされそうが、下々が献上するモノで生活していた家で生まれた私は、一人で生きていけるような人間では無かったのだ。

追手に連れ戻れて開拓の労働で死ぬか。空腹で死ぬか。まあどつちも同じだろう。死ぬのだから。

そうしてある日、ただ水を啜り雑草を食み何とか死を遠ざけようと必死だった私は、旅人を襲った。

なんだ、やってみれば簡単な話だった。そこが始まりだった。

食べ物を手に入れた。死体は丁寧に埋葬した。今思えば、愚かな行いだね。

しかし、それは根本的な解決では決していない。私は食べ物を自ら作り出す手段など、何も知らなかったのだから。

何度かそれを繰り返し命を繋いだ末に、私が殺した旅人は食糧を持っていなかった。

必死でその鞆をひっくり返し、服を全て剥ぎくまなく探した。だが、食糧はどこにも無かった。

そこで、私は気付いたのだ。食糧なら、たつぷりと目の前にあるじゃないかと。天啓だった。

私が人生で一番感謝したい人間を挙げるならば、二番目にはこの旅人と言うだろう。

彼が食糧を持ち歩いていなかった、もしくは切らしていたおかげで、私はこの素晴らしい味に気付けたのだから。

それから、天にも昇る気持ちだった事を覚えている。

これに関しては、明確に思い出せる。父の顔も母の顔も思い出せないが、何人目の旅人のどこを何にして食ったかは、聞かれて思い出すのに時間を食う事は無いだろう。

百と二十一。その後、私は彼と出会った。嗚呼、思い出せない。思い出せない！

力任せに落ち葉を蹴る。腹立たしい。何と忌々しい事だろう。

……彼は、ただの旅人だった。これまでの、私の家に積み重なった骨の山に混じるだけのはずだった。

歌に引き寄せられた彼を縛り上げ、絶望の表情を楽しんだ後、首を落とす。これまで幾度と繰り返し返したのと同じ事を再び行うだけのはずだった。

だが、彼は私の事を。旅人達がこれまでに私に対し向けた恐怖の目ではなく。

ああ、ダメだ。頭にノイズが走る。

思い出せない。彼の顔が、思い出せない。私に笑いかけてくれているはずの顔が、空白に覆われている。私の作った料理に喜んだ顔が空白に覆われている。

「……お前に、聞きたい事がある」

再び目が覚めた時、私はあの時の全てが悪い夢なのだと思う。愛する我が子を取り上げられ、彼は体に空いた無数の穴から血を流しぴくりとも動かず、私は無数の銃口を向けられている。そして途切れたその光景は、私の寝付きが悪かったが故のものなのだと。

「お前は、誰だ」

だが、違った。私は、私が生きていた遥か未来に起こされた。

起こされる前にいくつもの夢を見た。

それは全て、一辺の違いも無く私の過去の映像だった。

目の前に立っていた男は、私に言った。

君には取り戻したいものがあるだろう。願望もあるだろう。私に

協力すれば、その全てを与えよう、と。

真つ赤に染まった視界が、元の色を取り戻す。

ピントがずれていた私の、思考の内では無く現実の目の前に立つ人間をはつきりと映し出す。

私と同じ赤い髪。彼と同じ、今は私を睨んでいる、しかし笑えばさぞ柔らかで愛らしいだろう容貌。そして、その手に持った刃。

ああ、ああ。きつと歌も上手いのだろう。聞きたい。是非聞かせてほしい。

君の歌を。君がどう生きてきて、どれだけの人を料理して、誰が一番おいしかったのかを。語り合おうじゃないか。

そして、最後には――

……ああ、頭の中の空白が埋まらない。

「エスメラルダ・オースティン。キミのご先祖様だよ、可愛い子孫」

## 第81. 5話 エスメラルダ・オースティン

人間が大好きでした。好きで好きで仕方ありませんでした。

誰かが喜んで楽しそうにしていれば、私もとても楽しかった。

「……きつとこの子は、君に似て良い歌姫になるだろう」

「……ふふ。そうだといいいけれど。でも、この子が決める事だから」

ゆりかごの中で眠っていた私の前でそう話していたらしいお父さんとお母さんの言葉の意味はもちろん私にはわからなかつただろうけど、それでもきつとそれは私に影響を与えていたのだと思います。

昔から歌は好きでした。お母さんが歌ってくれたから。私も真似をして歌っていたから。お父さんはそれをすごく幸せそうに聞いて、褒めてくれたから。

そして、私の歌で、皆が楽しそうにしてくれたから。

近所の人達も、同じくらいの子ども達も、皆。

でも、そんな日々は長くは続きませんでした。

私の村は火に焼かれ、お父さんとお母さんは……

私は村を襲ってきた人達に連れ攫われて、船に乗せられました。

何が起こったのかろくにわからないまま、私の辛い日々が始まりました。

大勢の人が狭い場所にぎゅうぎゅうに詰め込まれて、村で飼われていた牛さんよりもずっと酷い状態で。

船の人達は私に乱暴をする事こそありませんでしたが、病気になった人を助けてはくれませんでしたし、ご飯は私の村で食べていたものとは比べものにならない悪いものでした。最後の方で食べたものは腐っているのではないかというくらい。

家がお金持ちで恵まれた生活をしていた私はそれに耐えられず、何回も吐き、お腹を下しました。

私に優しくしてくれる人達へのせめてものお詫びとばかりに、歌を歌ってみたりもしました。

どれだけの夜が明けたかは、数えていないのでわかりませんでした。数える事もできませんでした。

それが過ぎた後、船は陸地に到着しました。

そして私は、そこでようやく自分の立場を知ったのです。

故郷から遠く離れた地に、奴隷として売られたのだと。

開拓のための作業。苛酷な状況に、私と一緒に売られてきた人達は  
どんどん減っていきました。

少しでも休もうとすれば厳しい罰が与えられて、逆らいでもすれば  
もつと酷い……

そして逃げ出しました。このままでは、殺されると思ったから。

でも、その時私は余りにも甘かったのです。それに気付かない、現実  
というものの厳しさを何も知らない子どもだったのです。

逃げ出した後で、私は最初これで全てが上手くいく、解放されたと思  
いこんでいました。

でも、逃げ出した次の日に気付きました。私は、何も持っていない  
のだと。

父と母が全てを用意してくれて、私は一人で生きる術を何も知らな  
かったのです。

畑仕事の合間に私の歌を聞いてくれた方の持っていた、畑を耕す技  
術。

同年くらいの子どもの達の、魚釣りとか、私にはちよつと気持ち悪  
かったけど、食べられる虫の採り方とか。

幸いにも、居住区から離れた、捨てられた古い家を見つけ、雨風を  
凌ぐことはできました。

けど、食べ物はどうする事もできず、日に日に死は近づいてきまし  
た。

「いや、だ、わたしは、まだ」

苦しい。目を開いているのも疲れる。そんな状態で、私は人の声を  
聞きました。

そこからは無我夢中で。

気が付けば、目の前には人が倒れていました。私の手には、血の付  
いた石が握られていました。

何という事を。何も考えられなくなり、でもそれ以上に空腹に耐えられなくて、無我夢中でその人の荷物を漁り、そこにあった食べ物を口に詰め込みました。

痩せこけた子どもが、死体のそばで必死に食べ物を貪り食う。その光景を傍から見たら、きつとそれは悪魔か何かに見えなかった事でしょう。

少し冷静になった私は、そう思っていました。それから、さらに悪魔の所業を行う事なんて知らずに。

居住区まで出て行って全てを告白して、いつそ楽になってしまおうか。

私の故郷へは、もう戻れない。お父さんとお母さんにも二度と会う事はできない。でも、それでも自分は……終わりがたくなかったのです。

何度も、繰り返し返しました。ごめんなさい、ごめんなさい。私は、悪い子です。地獄に落ちます。もう、神様にも愛してはもらえません。

何回目かは、数える事もしませんでした。何人の命を奪ったのか、本当なら、覚えていないといけないのに。忘れ去ってしまったてはいけないはずなのに。

とにかくある時、旅人さんは食べ物を持っていませんでした。私の空腹は、限界でした。

食べ物はありません。私は、二つほど絶望しました。一つは、旅人さんが食べ物を持っていなかった事に。

もう一つは……

目の前に、食べ物があると認識してしまった事、そのものについて。私は、自分は思っていたよりもずっと、生きる事に執着する人間だと思っていました。

でも。

神様に見放される選択をしてまで生きたいと思うだなんて、故郷にいた頃の私に話したら、どんな顔をするでしょうか？

「おええ……ごめんなさい……ごめんなさい……」



最初は、吐いてしまいました。口に出して謝った所で、誰かに届くわけでも無いのに、そうせずにはいられませんでした。

でも、それ以外に私に道は無く、色々と工夫をしました。様々な調理を試しました。

どうすれば、美味しく食べられるのか。私が奪ってしまった命を、可能な限り無駄にしないで済むのか。

きつとそれは、周りから見たらさぞかしおぞましい行為でしょう。でも、私は自分勝手な悪の中にせめてもの償いをしようと思つていたのです。

非力な私にはいつまでも成功できるとは思わなくて、歌で疲れた旅人さんをおびき寄せて、せめて最後には少しでも楽になれるようにと私の家で休んでもらつて、眠った後に、できる限り一回で、痛みなく終われるように。

何度それを繰り返したのでしょうか。

「綺麗な歌声ですね」

それは、何回も聞いた言葉でした。でも、その人の言葉は、他の旅人さんとは違った風に聞こえて。

私は、ええ、今までに無い、えーとその。

私に歌を何度もせがみ、その末に眠った彼に、刃物を振り下そうとしました。でも最後に、その寝顔を少しだけ見ようと思つて。

気が付いたら、朝になっていました。

そこから、私と彼の生活は始まりました。

私が居住区に出る事ができない身である事を察していたのか、廃屋に住む得体の知れない女を、問い詰める事も無く、一緒にいてくれた、食べ物をお届けしてくれた彼。

「どうか、私と共に生きてくれませんか？」

その言葉を聞いた時、私は思いました。ああ、もう終わりにする時だ。

そして見せました。私の廃屋、その地下室に積まれた、骨の山を。死んでも惜しくなかつたのです。彼の為なら、私はこんなにも執着

した命を手放そうと思えたのです。

……それを見た彼の反応に返した答えを、私は後悔しました。ええ。

彼は、私と一緒に地獄に落ちる事を選んできたのです。

そして、私はそんな彼と共に生き続ける事を選んだのです。

帰る道はありませんでした。でも、彼が、私の為に、自分の光の当たる道を捨ててしまったのです。

何年も経ちました。地下室は骨で埋まり、居住区へと帰らなくなつた彼はもはや人の暮らしへと戻る事はできなくなりました。

長らく行方をくらませた彼が戻れば、何があつたのか問い詰められるでしょう。彼が口を閉ざせば、調査もされるでしょう。

人以外の食べ物を得る事を何度も試みましたが、安定して餓えを凌ぐ事は叶いませんでした。

そして、私の抱く赤ん坊が、彼を縛り付けていました。

いいえ、縛り付けたなんて、決意して私と共にいる事を選んでくれた彼に失礼でしょうか。

終わらせるチャンスを全て捨てた私は、これからもこうして生きていこうと思いました。

そう、ずっと続くものだと。信じていたのです。

今、私はそんな、今までの私の事を思い出しています。これまで私が辿つた、ここに至るべきでなかった人間の記憶を。

彼は伏せ二度と動かず、私は体のあちらこちらから血を流し、ただ向けられた銃を見つめる事しかできませんでした。

視界が霞んでいきます。

どこで何を間違えたのでしょうか。

感謝はしたけど、数えきれないほど謝つたけど、命を奪つてそれを美味しく食べてあげる事もできず仕方なく。

私なんかを想ってくれた優しい彼を、彼のために拒絶する事もできず。

そんな私が願い事、なんて言うのは傲慢でしょうか。それとも当た

り前の事でしようか。

……  
せめて、こんな私なんてもう二度と目覚めないといいな、なんて

## 第82話 呪いの歌

「……お前は、誰だ」

一步、足を前に進める。もう一步。その度に、自分の頭の中に怒りが生まれ、そして膨れ上がっていく。

目の前の相手が何であるのか。ダリウスには、半ば予想が付いていた。

「エスメラルダ・オースティン。君のご先祖様だよ、可愛い子孫」

その言葉は、信じられるものではない。数百年前の、自分の呪いの始まりたる存在。そんなものが、遙かな時を経て、今日の前に立っているなど。

ダリウスよりも年下に見える、まだ成人もしていない年であろう少女だった。かつて一度相對したその姿を、もう一度見つめる。自分とそっくりな、しかし自分には無い金がほんの少し一部に混じる赤の髪。自分とは違う、深い、地獄の炎を映しているかのような赤の瞳。

その両手には、フォークとナイフをそのまま巨大させたかのような武器が握られている。口元と腕はどこどころまだ新しい血と、その下にある赤黒い乾いた血が付着し層を成している。

「ああ、会いたかったとも。キミに会いたかった。私と彼の遺したあの子は、あの場で葬られはしなかった。それがせめてもの慰みとでも言うべきかな。ああいやごめんよ、でもね」

歡喜が隠しきれない様子で、エスメラルダは自身の頬をがりがりとして掻く。軟な皮膚はそれに耐えられず破れ、血が流れ出す。

「……お前は、俺の先祖なんかじゃ、ない」

外見も自分に近い。その身に宿した能力も、恐らくは自分と近い生物。何よりも、その身が積んだ罪過。それらの全てが、自身と目の前の少女の強い関連性を指し示す。だが。

「ン……つれないなあ……ああ、そうか。そうだね。死者は生き返ら

ない。そう言いたいんだろう。けどね、世の中色々あるみたいだ」  
相手は、とうの昔に死んだ人間だ。死者は生き返らない。わかっている。自分が奪ったものは二度と戻らない。相いれる事は無かったが、火星開発計画で自分と同じ奪った命を悔やんでいた同僚は、だからこそ自分達は未来の為に戦うのだ、と言っていた。そう、エスメラルダは過去の、とうの昔に過ぎ去った存在なのだ。だからこそ、ダリウスは目の前の少女を否定する。

——否。

「もう一度聞く。お前は誰だ。お前は、楽しいのだと言った。わかる。俺もそうだった。ご先祖様がいたとしたら、きっとそうだったんだろう。けど——」

ダリウスの舌に、記憶が戻って来る。最初に、自分の事を嘲ったクラスメイト。見知らぬ人々。自分の歌を聞いてくれた人達。親友。恋人。母親。

自分は、苦しんだのだ。それが本当に呪いであるのか、ただの狂人の責任転嫁であるのかは、自分にもわからなかったけれど。

「あの娘を僕に差し出した時、お前は、何と言った？」

「ん……？ ああ、この前のアレかい？ アレは惜しい事をしたな。何で食べなかつたんだい？」

そう言えばそんな事も言ったっけ。記憶を手繰ろうと頬に指を当て、エスメラルダは思案する。そして。

「君の事が好きだった子の肉だ、さぞかし美味いだろうに」

同時に、ダリウスは『薬』を取り出し、自身の首に射す。

「ああ、やっぱり。お前は、俺とは全く別の何かだ」

致命的に違っていた。エスメラルダのその言葉だけで、類似性の全てを否定して、目の前のこの少女は自分の先祖とは別の存在だ、そう言い切れた。

何故ならば、自分の慟哭は、生涯晴れる事などないであろう呪いは。

例え誰を、どんなに嫌いな相手でも、好きな相手でも、等しくこの上無く美味しく感じてしまうものなのだから。人を、それ以外の好意では決して見られないものなのだから。

「……何を言っているのかは、よくわからないが」

同時に、エスメラルダもまた、注射器型の『薬』を頬に射す。

「私と、じゃれあいたいだね？ いいとも、遊んであげよう」

その背に生えるのは、ダリウスと同じ、脈の入った薄い翅。

体は昆虫の表皮のそれに覆われ、黒を基調とし赤と緑が所々に浮かび上がる。

二人は、真正面から向き合う。周囲に人の気配は無く、先のエスメラルダの一撃で樹が根こそぎ倒れ均され、その外周は燃え盛る山火事が覆うそれは、勝者のみが出る事を許される古の闘技場を彷彿とさせる。

1対1。ダリウスが指定した、今回の条件だった。

これをダリウスが言った時、第七特務と第一班班員の皆がそれを止めようとした。

何故かは何となくわかる。だが、相手が1人であるという保証はどこにも無い。

しかし、その後のダリウスの言葉で理由を理解し、それはすぐに肯定へと変わった。

二人の全身へとその姿の変化が巡り、そして――

瞬間。エスメラルダの頭部と左胸、脳と心臓の二カ所を精密に狙い撃ち、二発の銃弾が放たれる。

1対1とは言ったが、それは戦場に参入する人数の事。

第一班と第七特務、それにダリウス。彼らは武士道を重んじているわけでは無い。

第一班は、ダリウスに、何としてでも帰ってきてもらうため。第七特務は、標的を確実に仕留めるため。

それぞれに譲れない目的がある。  
だが。

「邪魔だなあ」

エスメラルダが面倒くさそうに言ったのを、ダリウスは見逃さない。まずい。直感で危険を察し、ダリウスは自身の能力を、遮蔽物が無ければ数百mの加害範囲を誇る一撃を、遠慮なく放つ。

エスメラルダのそれが放たれたのは、タイミングを合わせたかのよう  
に同時だった。

銃弾が凄まじい衝撃派に弾き飛ばされ、力を失いその暴威に任せる  
まま、明後日の方向に流されていく。

二カ所の爆心から、周囲の大地を抉り取るように同心円状の破壊痕  
が刻まれる。

それを範囲外から監視している人間は、こう思っている事だろう。  
こんな戦場に接近戦で横入するなどできるわけが無い、化物ども  
め、と。

ダリウスが1対1を望んだ理由はこれだった。両者の領域に、そも  
そも踏み入れる人間がいないのだ。

敵が部下を引き連れてくる心配などする必要も無い。戦いが始  
まつて数秒もすればすぐに1人になるのだから。

「……ああ、いい一撃だ」

まだ余波で周囲の大气が荒れ狂う中、エスメラルダは目を輝かせダ  
リウスを見つめる。

一方のダリウスは内心に燃え盛る怒りを抱えながらも、冷静にエス  
メルダを観察していた。

もはや音と呼べる領域に留まっているのかさえわからない破壊。  
それは、拳と拳のぶつけ合いとは違い、普通であれば互いに大部分が  
すり抜け打ち消し合わない事象だ。

だが、両者は全く傷を負わず立っていた。

ダリウスの予想通りだった。

相手は、こちらが先手を撃つ限りこちらを上回る出力の一撃を撃つ

てこない。

先の遭遇で、相手がこちらの音を打ち消す何かを使える事はわかっていた。そしてそれは恐らく、自身の音と特殊な装置を用いた逆位相の音を重ねた消音だ。

今は持つていないダリウスの専用装備の片割れと同じ原理の、真逆の位相の音をぶつける事による無効化。

それを相手は持つている可能性が高い。

恐らく相手の手術ベースとなっている生物の力はダリウスのものを上回っている。だが、例えばそれが強かろうが至近距離で受ければ即死という点ではダリウスと何ら変わらない。

同時に能力をそのまま打てば、両者相討ちで終わるのだ。

ダリウスの音波による攻撃を無力化するには、同出力で迎え撃つ必要がある。

ダリウスの一撃まで、その威力を下げる必要がある。

「……」

ダリウスはエスメラルダへと接近し、その毒針を腹に向けて振るう。

音による一撃はダリウスが気を付けている限り相殺できる。相手が付き合ってくれる。相手の余裕に付け込んで仕留めるのだ。

相手の最大の一撃を塞ぎながら、狙撃手の支援の下接近戦に持ち込み勝利する。

それが、ダリウスと皆で考えていた計画だった。

勝てる。近接戦闘の技能は、相手が小柄な少女である以上、筋力にも限界があるはずだ。

相手の武器は大柄な剣と槍状。射程で劣る以上、接近しなければ一方的に不利だ。

だが、その一撃をエスメラルダはいとも容易く受け止める。

その三叉の槍の又の部分で槍を止め、振るう。そのまま、槍の又に挟まったままのそれが抜けずダリウスは投げ飛ばされる。

「ンン……キミとならいくくらでも付き合ってやるが……」

素早く起き上がったダリウスが、エスメラルダへと再び突貫する。



だが。

「!?」

エスメラルダが、その左腕を、体内から伸びている楽器の弦のような、はたまた五線譜のような金属の糸が巻き付いた腕を振るう。瞬間、エスメラルダへの道筋を、無数の黒い球体が遮った。

ダリウスを遮る理由。邪魔、という言葉の意味。

理屈はわからない。だが、何をしようとしているのか。この、何故か今浮遊している降り注いできた爆弾が一体何なのか。ダリウスは予想から叫ぶ。

「リックー！ 回避——」

エスメラルダとダリウス。両者の音による広域の破壊は、全方位に向けて無差別に放たれる。

ダリウスの背後に控えるリックとクロヴィスは、射撃の精度を鑑みてダリウスの能力の射程外の少しだけ外に陣取っていた。

今、ダリウスとエスメラルダの位置関係は最初と逆転している。

「邪魔だ、失せろ」

瞬間、地面が揺れたような感覚をダリウスは覚えた。

これまでダリウスの一撃の範囲までだった樹木の損壊が、エスメラルダの背後、遙か後方、二倍以上まで広がる。

樹木が、その内で暮らす生命が、その悉くがなぎ倒されていく。

「——！ リック、リック！」

しかし、巻き起こる破壊の嵐はダリウスには全く届かない。

応答に答える声は無く、その代わりにダリウスとエスメラルダの道を塞いでいた卵状の機械が、主に従うようにエスメラルダの頭上へと勢いよく飛行していき、渦を巻く。

爆心に立つ少女。空を覆うのは、雲霞の如き黒の渦。

その姿は、正に物語の中の邪悪な怪物のそれだった。

——歌で愛を詠う。それは、古くから多くの国で行われてきた長い歴史を持つ文化だ。

だが、例えば。どれだけ美しい旋律だったとして、どれだけ心を揺り動かす詩だったとしても。

それが、航空機の飛行音と同等の音量を以て語られたとすれば、それを受け入れる事はできるだろうか？

『アブラゼミ』。その鳴き声の大きさは、2 mの距離からで70デシベルほどと言われている。

ダリウスの手術ベースである『ハデトセナゼミ』もおおよそ同等かそれ以下の鳴き声だ。

だが、その生物の鳴き声は。連続で106デシベル。そして、一説によると瞬間的に120デシベルに到達する。

普通のセミの1.5倍強か。それは凄い。

凄い。なるほど正しい認識だ。では、ここで少しだけ、計算的な知識を付け加えよう。

デシベルという、一つの意味として対数を用いて音量を表した単位は、20の違いで10倍の音量の差を示すのだと。

古の悪魔は笑う。その力を振るい、己を継いだ遙かな子孫に、親愛の情を示さんと。

「ああ、楽しいな……私は、こうやって、自分の可愛い子どもと体を動かして遊ぶのが夢だったんだ」

エスメラルダ・オースティン

国籍：アメリカ

■ ■ 歳 ♀ 157cm 48kg

専用装備：動体誘導・手動制御切替え式音力発電誘導焼夷弾『ペスト・オーゼカ』

+

誘導制御、逆位相消音装置内蔵型制御機『SYSTEM：  
Trunembra』



## 第83話 赤の残響

『科学技術は神の領域に突入した』と言われた技術で何であるか、知っているかな」

『ゲノム編集』つすかねえ……今ちよつと忙しいので、できれば失礼したいんですけど」

「ご名答。我が一族の主たる者が思ったよりも賢くて何よりだよ」

「生物の設計図を組み換え、望むがままの生物を生み出す事を可能とする、その第一歩に踏み込んだ時代に言われていた事だ。生物の創造、確かに神のみに許された権能と呼ぶに相応しい」

「あ、正解だけど話続くんすかこれ？」

「だがね、私はこれは酷い思い上がりだと思うのだよ。ああ、確かに下等な系統の生物を産み出す場合には間違っていないだろう。けれど、高等な生命、特にヒトに関してはこの程度で神を名乗るなどと」

『ブレヴィサナ・ブレヴィス』

アフリカ大陸に分布するセミの一種。黒を主にところどころ赤と緑の混じった体色は、この辺りに生息する昆虫の比較的多くに見られる特徴である。

その最大の特徴が、鳴き声の大きさである。

他のセミと同じく体内の多くを占める発音器官から発せられる音量は夏の風物詩、などと呑気に風情を楽しんでいられるようなものは無い。

その辺りの木にとまったこの虫の鳴き声を二時間聞き続ければ聴覚に異常をきたし。

隣の家族や友人、恋人との談笑は殆ど伝わらなくなる。

まあ、それで済むならば、迷惑な、だが精一杯生を謳歌している昆虫としか映らないだろう。

それが、昆虫のサイズであるならば。

「……キミにも、心を許す友達ができたのかな」

焦り、部下の名を通信機に呼びかけるダリウスを、エスメラルダは何をするでもなくのんびりと感慨深そうに眺める。その表情はどこか嬉しそうで、この状況がどのようなものか知らない人間がそれを見てその台詞を聞き二人の外見の相似している要素も踏まえれば、内向的な親戚に初めての友達ができた事を喜んでいる、などと見えるかもしれない。

一部は間違っていない。彼は部下の命の危機を心配していて、その命の危機に追い込んだのが彼女本人であるという点を除けば。

「あー、大丈夫……じゃねえけど……とりあえずまだ息は止まってねえかな？ 第七の爺さんが助けてくれた」

何度かの呼びかけの後、通信機から聞こえてきた消えかけの声に、ダリウスは胸をなで下ろす。

生存は確認できた。だが、すぐに支援を再開するのは困難だろう。そこで、顔を上げ正面を見据える。

「……ン、話は終わったかい？ 結構な事だよ。まだ続けるかい？」

先の一撃でわかっていた事ではあるが、エスメラルダには根本的にダリウスに対する能動的な殺意が無い。

本気で仕留める気がかかってきていたなら、リック達を排除する際にわざわざダリウスの方向に対する加害を抑え込む必要性が全くないからだ。

エスメラルダの頭上を渦巻く数百の黒色の卵状の機械。

ダリウスは、それを知っていた。

『SYSTEM: Trunembra』。

酒の席でダリウスが自身の専用装備の設計者、ヨーゼフから聞いた、没になった設計案の一つ。

近代兵器とMO能力の複合。アメリカという国は裏アネックス計画で火星に戦力を派遣するにおいて、単純にMO手術の戦力評価というだけでは無く、地球の戦場においての有効なMO手術の運用法も見据えていた。

ダリウスの専用装備も、軍の要請を受けたU—N A S Aから現場であるヨーゼフに向けて要望が出され、その概念を基に設計がされていた。

それは、『音による広域破壊を用いた手術ベースと無人兵器の相互運用』。

それを受けて開発された設計図の一つが、エスメラルダの体内に埋め込まれ、そこから一部が体外に出て腕に伸びる金属の糸であり、それとリンクした空中を渦巻く誘導爆弾だ。

音響誘導ホーミング弾『ペスト・オーゼカ』。それは、日本のある組織でも運用されているものと同系列の、音を電力に変換して推進する兵器だ。

音を効率的に集中させ、それを圧電素子によって電力へと変換しそれによって可動する。

その発電量は極めて少ないものの、しかし。

数百メートル悉くを薙ぎ払う程の出力を受ければ、それは音量の暴力によって大量の電気を生成する事が可能となる。

そして、カメラにより動体を優先して誘導するだけでなく、それを管制し手動での操作も可能とする、体内内蔵型の制御装置。

広域を音で薙ぎ払い、さらに外周を誘導爆弾の雨で焼き払う。正に破壊の権化と呼ぶべきその機能。

さらには、というより内蔵の装置に関してはこちらの機能はオマケ程度のものだ。その本来の機能は、同じく物理的破壊を伴うような爆音に対する、逆位相消音。

近年注目されている、騒音対策。それは、特殊な装置とスピーカーでその騒音を解析し、逆の波形の音をぶつける事によりそれを打ち消すというものだ。

音による攻撃の厄介さは、今後の戦争を変えると言われるMO手術戦において重要なものであると軍関係者は考えていた。

隠密性という点では真逆に位置する存在ではあるが、その脅威は『防衛不能』という点だ。

物理的破壊を伴うようなものはαMO手術でも無い限りほぼほぼ

あり得ないが、通常のMO手術ベースであってもある程度の音量を出す事が可能な生物であれば聴覚の破壊と急性の音響外傷による平衡感覚の破壊によって戦闘能力の大部分を奪い取る事が可能である。

それに対抗するための機能が、この装備には盛り込まれている。相手の音を解析し、その逆位相の音を生成しそれによって相手の音を無効化する。

本来防衛が不可能な物を無理矢理ねじ伏せる。

ダリウスの専用装備の一案は、このようなものであった。しかし、ここで問題が発生する。

周囲に他の存在を許さない圧倒的な破壊能力。

他の存在を許さない。それは当然ながら、敵対的存在にのみ適応できるとは微妙さなど持ち合わせてはいない。

軍部としては真に残念な事に、裏アネックス計画は単独での任務では無く、複数人で構成された班単位で事に当たる計画である。

よって、この案はあえなく放棄され、無人兵器は火力こそ落ちるものの特定方向への加害を抑え込み味方へ被害が及ぶ事を防ぐ消音装置内蔵の無人機に、内臓装置は出力の調整に特化した、集団戦を考慮したものと変更された。

「……っ」

エスメラルダが装置の内蔵された左腕をひよいと振る。

同時に、それに従うように上空の誘導爆弾が3発、ダリウスに向けて飛来した。

その速度はそこまで高速とも言えるものではない。

しかし、ダリウスにとって、それは重い負担としてのしかかる。

純粋な体術にダリウスはそこまで長けているわけではない。

二発を回避し、一発を腕から生えた口吻で右に弾き飛ばす。

「いいんだよ、いつでも降参して」

同時に襲い来るのは、エスメラルダの持つ巨大なフォークの如き三叉の槍だ。

腹を狙い繰り出された回避困難なそれを、背後に跳んで対応時間を



稼いだ後、それを自身の毒針で受け止める。

エスメラルダの言葉に、挑発の色は無い。

むしろ、ダリウスを慈しんでいるかのような、少し心配しているかのような、そんな様子だ。

「男の子というのは無茶をするものだ。死なない程度で止めて欲しいな」

背後に下がったダリウスに、再び爆弾が降り注ぐ。

下がれば爆撃が、近づけば錬度で己に勝る格闘戦に持ち込まれる。

前にも後ろにも困難が待ち構えている。さらには。

「――！」

数秒に一度放たれる、いいや、実際には撃たざるを得ないダリウスの爆音と、それに対応するエスメラルダの爆音。両者がぶつかり合い、自然には見られない事象、音と音の衝突によりそれが境界で消失する。

ダリウスが自身の音による攻撃を行う限り、エスメラルダはそれを撃ち消すために自身の最大出力を撃つ事はできない。

エスメラルダの瞬間的な音量は両者の元となる生物で比較すればダリウスの百倍近くにまで到達する。

実際には減衰や技術的な限界からそこまでの開きは無く、加害半径で比較すれば通常時では二倍程度であるが、その出力には明らかな差が存在している。

だが、ダリウスが己の戦場に引きずり込む事ができれば、少なくとも音による戦闘では互角となる。

ダリウスの内心の爆発するような感情に呼応するかのように、今の変態で行える全力の一撃が振るわれる。

しかし、それは難なくエスメラルダによって止められる。

不思議と、ダリウスはその感情が少しずつ冷えていくのを感じた。相手に対する好感が生まれたわけでは無い。むしろ、憎しみは消えず、さらに燃え盛る。

だと言うのに、何故だろうか。違和感がある。戦闘の最初から抱い

ていた、それより前に感じていたそれは、実際に相対しさらに増していた。

互いの武器を交え、爆音を激突させ、次々と投下される爆弾を捌いていく。

奇妙な感覚が消えない。

「ン……い。あとは、あの人さえ戻って来れば、なあ！」

一方のエスメラルダは、その真逆だった。

燃え盛る感情。風に煽られた火のようにその目は爛々と輝き、その振るう剣と槍は、爆音と爆弾は、勢いを増していく。

ダリウスを殺すつもりは無い、とは彼女本人のあまりに移ろいやすい感情の中で、数少ない確固たるものだ。

しかし、それは死ななければいい、というだけ。

ダリウスの攻撃は、エスメラルダからすればじやれついているようにしか見えない。

近接戦闘はあっさりと捌く事ができるし、音も己のそれと比べては余りにも小さい。

余りにやんちゃな子には教育が必要だろう。手を挽ぐか足を挽ぐか。遊ぶのはどれくらいまでにしておこうか。

次の瞬間にはよしもう運動はやめてゆっくりと話がしたいな、となる感情の振れ幅。

エスメラルダがダリウスを即座に仕留めずに交戦を続けるのは、奇的にその選択肢を引き続けているから、ただそれだけの理由だ。

やろうと思えばいつでも終わらせられる。両者には、それだけの戦闘能力の差があった。

ダリウスにもそれはわかっている。わかっているからこそ、怒りに支配されずに好機を待っていた。

相手が自身を仕留めんとする感情へと転じない事を祈りながら、最小限の反撃に留め致命傷を負わないように。

……そして、結末は驚く程気まぐれに、唐突に訪れた。

「うん、運動はもういいかな。そろそろ終わりに——」

エスメラルダの眩きと同時に、その振るう刃が鋭さを増す。

このままでは抑えきれない。確信と共に下がったダリウスを狙い済ましたかのように多少薄くなった頭上の渦の一かけら、一発の誘導爆弾がダリウスに向け正確な軌道で落下してくる。

半ば弾き飛ばれる形で下がったダリウスに、それを弾くか打ち落とすか、その余力は無かった。

ここままでか。そう、覚悟をした。

——だが突如、誘導爆弾は空中で炸裂、四散した。

「ヒュウー！ さっすが、優秀な観測手がいりやあ違いますわ！」

今だ班長。通信機から聞こえてきた、いつもの通りのお気楽なそれと、それに続く言葉に、ダリウスは状況を一瞬で理解した。飛来する誘導爆弾を正確に射抜くその精度があれば、エスメラルダの頭を貫く事も可能だっただろう。いや、確実にだ。

観測手。第七特務のあの老人がそれを担ったのだろう。

狙撃手と観測手、担当が逆だったのならば、恐らく狙いはエスメラルダだった。

……いや。どちらを狙うにしろ、恐らく吹き飛ばされて遠くなった距離だ。観測手と狙撃手、二人が協力して事に当たらなければ成り立たなかっただろう。

爆弾を狙うのか、エスメラルダを狙うのか。一瞬で判断し修正し射撃、などとできない以上、事前に話し合っていた。

『エスメラルダの撃破』よりも『ダリウスの命』を優先すると。

純粹な損得で考えれば、優先されるべきはエスメラルダの撃破、だ。相対する脅威の排除はほぼイコールでダリウスの生存に繋がる。だが、逆は違う。ダリウスが生き続けているからといって、エスメラルダを倒せるかはわからない。むしろその可能性は低い。

だと言うのに、その当然の損得に従わないと、彼らは決めていたのだ。

「……!?」

「……だったら」

高い位置での爆発により周囲に広がった黒煙により、エスメラルダの視界が塞がれる。

自身の両腕の武器を振るいながら、黒煙に向けて突貫し、その先にいるダリウスを捉えんとする。

だが、エスメラルダの視界に映りこんできたのは。

「その期待に、応えよう」

そこで、ダリウスはエスメラルダとの交戦から初めて、嬉しそうに笑った。

エスメラルダの視界に映り込んだそれは、待ち望んでいた、焦がれる彼とよく似ているであろう、愛しい子孫の笑顔。

——では無く、左眼に突き刺さる寸前の、一本の毒針だった。

「ああ——!!」

ダリウスに向けて突き進む前傾の姿勢では、回避など叶わず。それは容赦無く、左眼を抉り、射して潰す。

「おの……れ……おのれえエエー！」

エスメラルダはそこで慌てて背後に跳びのき、反射的に自身の最大出力を放とうとする。

数秒にも満たない一瞬の攻防で、優位が覆される。強い苦痛が己の身に襲い掛かる。

もはやその思考から手加減が消し飛び、周囲を全力で破壊せんと腹の発音器官が震え、破壊の嵐が零れ出さんとする。

しかし、そこに肘の一撃が加えられた。タイミングを合わせた強い衝撃により、それは停止する。

「……終わりだ、ご先祖様みたいな何か」

同時に、ダリウスは注射器を二本、首へと差す。

そして、飛び上がった。

空を覆う渦の、その上空へと。

そのリソースを音による攻撃へと割いているため、通常の投薬量での状態では十分には得られない、その背に生えた翅による飛行能力。そして。

爆音が、空から地上へと叩きつけられる。

空中で待機モードとなっていた誘導爆弾に指示を出すだけの時間的余裕はエスメラルダには無く。

その全てが、爆音で押し出されるかのように地上に乱雑に吹き飛ばされ、しかしエスメラルダの専用装備によって自動で反撃が行われ、両者の音の押し合う領域で力に押し負け、全ての爆弾が同時に起爆し、空を一瞬赤色が、その後黒が覆い尽くす。

視界の半分を喪失したエスメラルダは、未だその苦痛に左の眼窩とその周囲を掻きむしる。

黒煙を突き破ってダリウスが突貫してくる、それに、気付く事など、その余裕など、最早無く――

「……ああ、負け、か」

左眼と腹に穴が開き、地面に転がるエスメラルダ。どこか虚し気に呟くその目からはこれまでの戦闘で見せていた享楽も憤怒の炎も消え、ただ光の消えかけたものだけが残る。

その最大の武器、腹の発音器官。そこに空いた穴からはとめどなく血が流れ出し、周囲の地面を染めていく。

「……シンン……また、私は殺されるのか？ 今度こそ――」

自身を見下げる、冷たい瞳。ダリウスのそれを見て、エスメラルダは少しだけ、おかしいな、と二重の意味で思う。

もう一度会いたかった、可愛い子孫。彼と自分の遺した、遥か数百年を超えても残っていた、その残滓。

私は、そんな君に、このようにただの敵対者のように、自分が散々捌いてきた食肉のように、無残に殺されるのかと。それが少し皮肉に感じて。

もう一つ。何故自分は、こうも昂っていたのだろうか。

君とは積もる話が沢山あった。何故、それなのに、自分はこうも、戦う事を優先していたのだろうか。もっと早期に、戦いを止める、君の手足を割いて大人しくさせてから話をする、という方が私は良かった、そんな気がするのに。

ふむ、どうだったろうか。まあ仕方ないか。これが自分の結末か。エスメラルダは、擦れた視界でダリウスを見て、そして弱弱しく手を伸ばす。

「さいごに、てをにぎって、くれないだろうか。そして、よかったら、わらって、ほしいな」

腹の風穴から、空気が漏れ出す。ダリウスは、笑いはしなかった。

ただ、先から続く無表情のまま。

「さようならだ、忌まわしい誰か」

そして、その手を、そっと取った。

「いいや、これからずっと一緒だとも」

そこで、ダリウスは異常に気付く。穴が開き血にまみれたエスメラルダの腹が、微かに動いている。

それが、能力を放つ前兆である事はもはや改めて考えるまでもなくわかる事だった。

まずい。これが、狙いだったのか。ダリウスは咄嗟に腹に一撃を加えて止めようとするが、まだ余力を残していたのか、取った手を引つ張られ、姿勢が崩れる。

「君は、きつとこれからさらに辛い道を歩むだろう……だから、ここで私と眠ろう……」

まずい。今度こそ、どうしようもない。狙撃を要請……いや、ダメだ。間に合わない。

「——ッ！」

「!？」

しかし、ダリウスにとってそれは幸運だったのか不運だったのか。

エスメラルダの腹が、勢いよく上から押し付けられたかのようにへこみ、その一撃は不発となる。

直後、ダリウスにはその突然の事象の正体がはっきりと認識できる。

「いやいや、何してんすか？」

ずるりと、泥沼から何かが姿を現すような、歪な気配を伴い、それは姿を現す。

いや、姿を現す、という表現は正確では無い。視界の端に微かに映り込んでいた、注目の外にあつたものにはつきりと目線を合わせてそれを認識したかのような、そんな感覚。

突如として、エスメラルダの腹を踏みつけている人間が、そこに居た。

歳は二十半ばほどの、黒髪をポニーテールにした、スーツの女性。

「とんだ命令違反、約束違い。まあ、お互い様つすよねえ」

人懐っこい微笑みを浮かべたその女性は、しかし呆れたような声色で、エスメラルダを見下ろし、そして。

「貴方に返してあげる記憶なんて、最初から無いんすから」  
冷たく、言い放った。

## 第84話 邪悪の根

「何……だと……」

エスメラルダが、腹を踏みつけられ呻きながら、希?を睨み付ける。その言葉は、エスメラルダにとって理解ができないものであった。返してあげる記憶。それが、最初から無い?

「……私は、ただ貴方を、命令に反した貴方をこれ以上は許さないと処断しに来ただけなんすよ、でも」

しかし、それが手酷い裏切りを意味する、それだけは理解でき、憎しみに満ちた表情で絶叫せんとする。だが、その口から吐かれるのは血反吐のみ。

「オリヴィエ様が、せめてもの慈悲だと。最後に、教えてあげて欲しいと。そう仰ったんすよ」

教えてあげる? 何をだ。教えてあげる。オリヴィエが上から傲慢にそう言つてのけるのは、削れていた自分の記憶について、というのが第一候補として挙げられる。だが、それは希?の最初の一言で否定されている。

「その前に、アンタは誰だ」

エスメラルダとの会話の隙を突き、ダリウスが希?に向け突きつけようとした毒針。しかし、その一撃は本人には届かず。

……というか、それを行おうと動き始めた瞬間に、銃口を額に向けられるという形で阻止される。

「希?・ヴァン・ゲガルド。『槍の一族』の当主、つす。肩書的には哲学博士、心理学の修士と……『ティエラ』、あ、量子スパコンの制作チームつすね、のパトロンと……まあそんな感じの華の25歳つすよ。もつと必要? これ以上はちよつと恥ずかしいつす」

あと何かでかい企業の株主とかやってたっけ、後で確認しとくつす、とあっけらかんと言う希?。

後半の情報はどうでもいい。若さに似合わず何やら偉い肩書を持っていてというだけだ。『槍の一族』。ダリウスにとって、火星で聞き覚えのある言葉だった。



「あ、火星では妹がお世話になりましたっす」

エスメラルダを片足で踏みつけたまま、丁寧にお辞儀をする希？を見て、ダリウスは微かに感じていた既視感の正体に気付く。二度の裏切りの末に火星で捕えた、第四班に所属していた少女と、似ているのだと。

「んー、まあ、詳しいご挨拶は後で、今はちよつと、できれば静かにしていただきたいっす」

その言葉に、ダリウスは口を閉じる。

言いたい事は多々あるものの、今は状況に従うべきだ。

少しの動きでわかる。相手の練度は相当のものだと。このまま下手な動きをした瞬間に命を奪われると。

今更命が惜しいわけでは無い。だが、このような意味のわからない相手に殺されるのは、内心が許さない。

「さて、エスメラルダさん。貴方に、大事な事を教えてあげるっす」

踏み踏みと腹を踏む足に力を加えては抜いてはとしつつ、希？はエスメラルダの目をじっと見る。

「死んだ人は、生き返らないんすよ？」

「……何を」

血を吐く合間から出た声を、希？は聞いてはいなかった。

死者の蘇生。それは、他ならぬ希？の主であるオリヴィエの語る言葉だ。

それを、否定するなど。

「ああ、簡単に結論から言いましょうか」

ぞわり。希？の、笑顔で細まった脛から微かに覗く瞳。そこに光る冷酷な光に、ダリウスは得体のしれない邪悪な気配を感じ取る。

「貴方、そもそも『エスメラルダ・オースティン』なんかじゃないんす」

「希？、人間の心とは、何から形成されるものだと思う？」

「うーん、難しいっすねえ。単純に考えて記憶と思考……意識っすかねえ」

オリヴィエのお茶の時間。それに付き合っていた希？は、ふと投げかけられたその質問に、適当な相槌を打っていた。

「うん、だいたいそんな感じだろうね。ではそれは、どのようにして作られるものだろうか」

「記憶、自我……それを形作るのは実経験の積み重ね、かなと」

その通りだ、とオリヴィエは紅茶の入ったカップに口を付ける。

直後、少し眉をひそめ、そのカップを離すオリヴィエ。

「そう、例えば君が茶葉と間違えて私が保管していた毒草を使ってしまったとしよう」

「ふむふむ……え」

「このように、現実で得た体験が記憶へと移行し、私は君の入れたお茶はまず毒見が必要だと言う事、君はお茶を入れる時にはまずラベルをよく見る事という教訓を覚え、私は危うく毒殺されそうになった、君は危うく主君を毒殺しそうになったという苦い体験という記憶を得る」

「ごめんなさい！ 許してほしいっす！」

「こうして、人間は経験から新たな知見を得て、知識を蓄え、それは人格の形成へと繋がっていくわけだ」

ふうと溜息を付き、オリヴィエは希？のカップに手を伸ばし、それをぐいっと一杯煽る。

「では、だ」

「何の経験も無くして、しかし記憶と人格を持った人間というものを作る事は可能だろうか？」

心なしか顔が青ざめているオリヴィエを見ながら、どうでしょうか、とだけ答え、希？は医療室に慌てて通信を繋げた。

「大変だったつすよ？ 『どうせなら強そうな……そうだな、大昔の殺人鬼でもモデルにしてみようか』 って感じで軽く言いだすんすよ、オリヴィエ様」

「何を……言っている……」

まるで、遊んだ楽しい思い出の感想を語るように、希？は話を続ける。

『槍の一族』の、その本拠で行われた、一般的な倫理では禁忌に触れる研究についてを。

「肉体は簡単だったつす。丁度子孫がいる、ってわかったので刑務所でダリウスさんの父上のを拝借して増やして、ちらつとオリヴィエ様のを混ぜたら強くなるかな、なんてやってみて。まあそこは慣れた作業つすから楽でした。目はやっぱり狂気重点で赤色がいいかな、なんてやりましたけど、赤目ってアルビノの人以外では無いですよ。ちよつと失敗だったつすかねえ？」

「問題だったのはやっぱり記憶なんすよねえ。辛かったつすよ。ベースになるストーリーがあるのはまだいいとしても、実際それを作るために頭の中を搔っ捌いて神経細胞の配置と電気信号の発火パターンを微調整してどのような像が生まれるのか一々確認して。記憶のシリーズの層とかまだ未解明な部分が多いつすから全部手探りで。半導体を手動で作る方がよっぽど楽だと思うつすねえ」

感慨の籠った声色のほずなのに、どこか平坦に聞こえるそれ。ただ、実験記録を読み上げるような。

「ああ、安心して欲しいつすよ。全部それで作る、なんてのは不可能だったから生まれた後でちゃんと色々教えたつすよ。知ってるつすか？ 人間の記憶、証拠となるものがあつたらそれが偽物でも勝手に補完して作り出しちゃうんすよ。貴方の記憶、間違い無く多少は貴方

が実際に学習したものつすよ。それが現実の出来事かはノーコメントつすけど」

「性格については、まあ記憶からの影響も大きいですが同時に感情に影響を与えるホルモン分泌の遺伝子を調整していい感じに。やつぱり狂った殺人鬼って感じつすからね。人を傷つけた際にセロトニン……幸福を感じるやつが沢山出るようにとかちよつといじつてみたつす。エスメラルダさん、まさにひやつはー！って理不尽に怒りぶつけて人殺すつて感じでいい塩梅つすよ」

「こうして、完成つす。可哀想な過去から復讐に燃え、狂気のままに人を食らう悲運の食人鬼！ っつて。ええ。でも、ダリウスさんとこの血がいいんすかねえ。凄いベースに適合しちやつて、こんなに強くなつて」

「……誇ってもらっていいつすよ。貴方、800年前の人喰いの女の子とは違う人間つすけど、オリヴィエ様と私の傑作つす」

口を挟む余地などなく、連続で語られる内容。それは、どこか我が子の成長記録を自慢する親のような。あるいは、実験の成果を誇る研究者のような。または、子どもの人形遊びのような。

エスメラルダは、それをただ聞いていた。自分の出自を、いいや、出自でありながらそれですらない、自身がどのように作られたのか、という情報を。

「は、はは」

「何の……為に……」

エスメラルダから乾いた笑いが。ダリウスから怒りを込めた言葉が同時に放たれる。

「……何の為？ 決まっているじゃないつすか？ 人の記憶と心つてゼロから全部作れるのかなつて実験つすよ」

希？の回答に対する返答は、言葉では無かった。ダリウスの毒針

が、希?に向けて振るわれる。

「リック……撃つてくれ!」

同時に通信機に叫ぶ。ダリウスの怒りの一撃と射撃要請。それは、二つ同時に、同じ理由で空振る。

「……!?!」

「班長? さつきからアンタと倒れてる奴以外誰もいねえぞ?」

希?の姿が、一瞬で消えたのだ。それは変色能力で背景に溶け込んだなどというレベルでは無い、存在が瞬間的に消え失せた、そのような感覚だった。

「全部、嘘だった、のか? 彼の事も、私の、あの日々も」

「……いいえ? 記憶というものに嘘も真も無いつすよ? 本当に貴方が現実で体験した事なのか、と言われれば、まあいいえとしか。貴方の旦那様、記憶形成の時にオリヴィエ様が顔の造形するの飽きたとかで作ってなかったんすよね、そういえば」

瞬間、再び希?が姿を現す。エスメラルダに耳打ちするように、腰を曲げて顔を近づけ。

「ツ……! 生き返らせてやる、などと……偽りだったのか!」

「うーん、ロドリゲス卿みたいに死体だったりデータだったりあればそのままそれ使えるんすけど、貴方は特例つすねえ……貴方がちゃんとしてくれれば、愛しの彼もちゃんとそれっぽく作ってあげたってオリヴィエ様は仰ってたつすけど」

「貴様あ!」

希?の言葉に怒りを叫んだのは、当のエスメラルダでは無かった。再びその姿を視界に捉えたダリウスが、堪えきれなくなり、駆け出す。

ダメだ。根本的に、価値観が、心のすり合わせを行える余地が存在していない。

最初、ダリウスは相手が停戦の交渉の為に訪れたのだと考えていた。

エスメラルダの仲間で、暴走した彼女を止めながら、ここで手打ちにしようとしても言いだすのだと。

しかし。それは、致命的な勘違いだった。

『槍の一族』。世界の裏で蠢く、現在裏アネックス計画関係者が主として所在を追っている集団。

かの『ニュートンの一族』の一角であり、世界の各地で怪しい動きを見せているという存在。

脅威である事はわかっていたが、どこか他人事のように無自覚だった。

——ここまで、醜悪なのか。

覚悟を決める。今この場所で、滅さなければならぬ存在だ。

相討ちになっても。

「ま、強そうな方を始末するのもついででいいっすかね」

ダリウスが動こうとした瞬間。希？がその動きを読んだかのように、銃をダリウスへと向けて、迷いなく発砲する。至近距離の銃撃。回避など不可能なそれはダリウスの額に向けて放たれ。

「――！」

それは、どこにそのような余力があったのか、倒れこんだ状態から跳びあがったエスメラルダの胸に突き刺さった。

「……んー、まあいいっす。オリヴィエ様からの伝言は済んだっすから、私はこれで。私も鬼じゃないっすから、最後にダリウスさんと話す機会くらいは許しますよ」

エスメラルダが何故、自分を庇うような真似を。

ダリウスにそれを考えるだけの心の余裕は無かったが、目の前の敵へと、待て、と声に出そうとした。

だが、擦れてそれは口からは意味の無いうめき声としかならない。手を、口吻を伸ばすが、それはエスメラルダとの一戦で疲弊しきつた体では届かず。

いっそ、能力で。そう思ったが、異常を悟ったのかゆっくりだがこちらに近づいてくるリックの姿が見える。ダメだ。

そして、敵の姿は、最初に現れた時を逆再生したかのように、夢の

ようにかき消えた。

「……ふふ、ああ、私は、また全てを奪われるのか……いや、違うか。最初から、何も無かったんだな」

「……」

その場に取り残されたダリウスとエスメラルダは、先ほどと同じように佇んでいた。

先よりも顔色が悪くなり、もう既に血が足りなくなり、意識も朧げになっている。

「……何で、さつき、俺を？」

「ン……？ ああ、未来のある子を守るのは、親の義務だ」

脅威は去った。だが、もう助からないのは人間の弱っていく姿をよく知るダリウスははつきりと認識していた。

だからこそ、最後に聞いておきたかったのだ。その真意を。

「ああ、妄言じゃないとも……私は、君の父の細胞を基に作られたんだろう？ だったら、まあそんな感じじゃないか？」

わからなかった。ダリウスにとって、エスメラルダという人間は最後まで。

矛盾の塊だ。子孫として殺そうとして、それが全て虚構だったというのがわかったのに、今度は守ろうとして。

「ところで君、鈍感なんだな……ああ、やつと思いついた。私は前に君の呪いの話をオリヴィエの奴から聞いていた。忘れていたよ」

「何を……」

死の間際に、微かに理性的な表情を浮かべるエスメラルダに、ダリウスは困惑する。

「君、もうとっくに仲間を……いいや、私が言う事じゃないな、……君が、いつか自分自身で気付く事だ」

くすりと柔らかに笑うエスメラルダ。

全く理解が出来なかったが、どこか嬉しそうなその表情。

「じゃあね、可愛い子孫。あつちで本物の方にあつたら、伝えておいてあげよう。私達の先に立つ子は、何だかんだで生きてるよ、ってね」

「……ああ、さようならだ、俺の先祖じゃなかった誰か」

「つれないなあ……ま……こつちにはゆつくりと……来ると……いい……」

死へと向かうはずの敵が笑い、自分は仇を、憎い敵を討ったはずなのに暗い顔をしている。

掠れた声は、それで最後だった。

爆発によつて発生した黒煙が、振り始めた雨によつて少しずつ晴れていく。

しばらくは止みそうにないという事が一目でわかる黒雲が、空を覆っていた。



## 第85話 第二楽章

——2620年12月9日 U—N—S—A本部

「……ダリウス・オースティン。お前に裁決を下す」

U—N—S—A内に設けられた上役用の会議室。そこで、ダリウスは班員達に見守られ、その処遇をどうするかについての結果を待っていた。

『薬』を隠せる場所も無いMO関係の囚人用のポケットの無い薄い衣服の上下を着て、その左右には兵士が控えている。

抵抗のしようも無いその状況。だが、二人の兵士は緊張で表情を強張らせている。

それは、ダリウスのかつての悪逆が、そしてそれと同等以上に『裏マーズ・ランキング』1位というその立場が知られているからだ。

『裏アネックス一号機』及びU—N—S—A本部付き火星開拓支援計画第一部隊、その隊長の座をこの場で解任する」

「っ……」

それに、傍聴席に座っていたチャーリーは歯を強く噛みしめる。

結果として、第七特務はその約束を守った。

問答無用でダリウスを処分しようとしていた上層部を説得し、再度の調査を願う。

その結果、ダリウスの仮処分で送られていた邸宅の状況分析と一部齧られただけで捨てられていた遺体のDNA分析により、使用人を殺害したのはダリウスでは無く、先の戦闘現場で確保された死体、エスメラルダであるという事が判明した。

しかし、それでも避けられないものなのか。

彼が無実であると、判明したというのに。捜索部隊に大きな被害を出した謎の勢力、その指揮官を討ち取ったというのに。

「そして」

今回の最高決定権を持っていると思われる、ダリウスの真正面に立

つ壮年の男性。U—N A S Aの最上層部、その一人である、M O手術を受けたU—N A S Aお抱えの戦闘部隊の立場上の総指揮官である男だ。

彼はダリウスに、何やら思う所があるような目を向けながら言葉を続ける。

このタヌキ親父め。リックの呟きを諫めながら、チャーリーは自身も抱える苛立ちを鎮めようと大きく息を吸って吐く。

コイツは、自身の保身を優先したのだと。

チャーリー達第一班や第七特務、火星からの帰還よりこちらに身を寄せている日本支部の人員を含んだ、U—N A S Aの抱える最大の戦力であるM O手術被術者達。それらの配備、予算配分、他諸々を決定している身であるが、同時にその人員が問題を起こした際の責任を抱える立場でもある。

今回の件について、ダリウスの脱走という事件に対する責任は大きい。たとえ根本としての原因がダリウスに無かったとしても、ダリウスが逃げ出したという事は厳然とした事実だ。街中でその一撃を撃てば、容易く数百、悪ければ数千もの命が奪われる。

そんな危険人物が、いざ逃げ出せる状態となった時に逃げ出す人間である、という事を見逃していた責任。警備態勢に対する責任。それは全て、今この状況ではダリウスでは無く彼に押し掛かる。

そこでではまたダリウスを重用しよう、と言うよりも、私の責任です、彼を処罰しましょうと言った方が組織への面目が立つのだ。

ダリウスはその存在そのものが重大な戦力である。それを手放すのが自分の責任の取り方だ、というのが言葉にはしないが、責任追及への答えだ。

「今回の事件を鑑み、ダリウス・オースティン、および第一部隊の所属人員を」

「……！」

チャーリーが椅子を蹴り飛ばさん勢いで席を立つ。

バカな。約束が違う。その目線は、チャーリー達第一班班員とは丁度対面に位置する椅子に座る俊輝に移る。

ダリウスは、班員の皆に責が及ばないように。班員の皆は、ダリウスに責が及ばないように、それぞれ動いていた。

どちらか片方に責が及ぶのは、仕方がない。だが、これはどういう事だ。

チャーリーの鋭い目線に気付いたのか、ダリウスの方を見ていた俊輝はチャーリーへとその目線を移し。

「俊輝……！」

にやり、と笑った。馬鹿な、騙していたというのか!?

ふつつつと湧き上がる怒り。隣ではリックが、アシユリーまでもが煮えたぎる感情を抑えきれない、という表情。このまま、U—N—A—S A内裁判で乱闘沙汰になってしまうのか。

「先日の総会議により決定、設立が決定された『特殊敵対勢力対策局』の実戦部隊への移籍とする」

「……は？」

厳粛な場でききなり立ち上がったあげく間抜けな声を出してしまったチャーリー。

周りの目は冷たい。

「この危機に対処し、前線に立ち続ける事を此度の騒動の処罰とする。努々励む事だ」

「私と部下達へのご温情、感謝いたします」

ふう、と溜息を一つ、その後にその言葉の意味をはっきりと、厳罰では無いという結論を語る。

それに、静かに答えるダリウス。

「……」

力が抜けずるとパイプ椅子に背を預けるチャーリー。俊輝の方を改めて見る。さつきと変わらない顔だ。

いやお前笑顔が悪どいんだよ、とチャーリーは内心でぼやいた。

「班長！ おめでとうございます！ これからも……これからも……」

ううー……」

「ま、俺は最初からこうなる、って思ってたけどな！」

「心臓に……悪すぎるんだよ……」

ぱあつと明るい顔でダリウスに駆け寄り、しかし感極まって泣き出してしまったアシュリーと、ふふん、と余裕ありげな雰囲気を出しているが小刻みに震えているリック、先ほどからずっと脱力しているチャーリー。

部下達に囲まれ、ダリウスは柔らかな笑みを浮かべていた。

アシュリーにハンカチを差し出し、リックの肩を叩き。

「俺はね、皆。もう死のうと思っていたんだ」

「ああ、知ってる」

以前に一度聞き、しかしその時は皆言葉を詰まらせるしか無かったその言葉。

それに答えを返したのは、チャーリーだけだった。

「でも、ゆっくり来い、なんて言われてしまったし、変なものを押し付けられてしまった」

ダリウスの言葉は、重たい。その表情も、それに合わせて少しだけ笑顔が曇る。

『槍の一族』。ダリウスが戦ったエスメラルダの裏に潜んでいた勢力。

本当なら、エスメラルダを討った時点でダリウスは終わるつもりだった。

奴を殺し、自分を殺し。人喰いの怪物は、そうして消え去り人々は胸をなで下ろす、というハッピーエンドのはずだった。

だが、人を喰う怪物は自分達だけでは無かった。

『特殊敵対勢力』なんて言葉を濁してはいるが、ああ、その通りだ」  
「俊輝から聞いたよ」

「……それを君達から報告された時、俺は今度こそ第七特務に押し入って『能力』をブチ込みたい気分だったよ」

槍の一族。その存在を、知ってしまった。今回の一件により第七特

務によってそれまで彼らが行っていた調査と合わせてU—NASAに報告され、それがはつきりと平和を脅かす、ヘタをすれば国家すら揺るがしかねないものであると認識された。

そして、合わせてその対策部署も設置されたのだ。

エスメラルダのような人格的にも戦闘能力的にも凶悪なMO手術被術者と銃火器を存分に用意した兵士を抱えている事がわかってしまった以上、そこには実戦部隊が必要となってくる。

第七特務はそればかりに構っておられず、裏社会のMO手術掃討で忙しい。

あちらはあちらで危険な存在であるからだ。

明らかな人員不足。そこで、火星を生き抜いた経験豊富な第一班を、さらにはその実戦部隊で最強を誇ったその隊長を据えるという案が持ち上がった、という訳である。

相手が強大な力を持っている以上、ダリウスという特大のコマを自ら処分してしまうのは余りにも惜しい。

「まあ、俺の命はまだ保留、って事かな」

「……この仕事が終わったら、また俺らが次の目標押し付けてやんよ、班長」

全く君達は、とダリウスは寂しさと、しかし温かさも混じった目で、かつての、そしてこれからも続く部下達に、改めての挨拶をするのだった。

「改めてよろしく、優秀で優しい部下の皆」

「どうもです、セドリックさん」

「全く、気に入らん」

だからこの人苦手なんだよなあ。夕暮れのU—NASA備え付けのバーで、俊輝は先に飲み始めていた待ち合わせ相手に声をかけ、そ

んな事を考えていた。

50歳ほどと思われる男だ。白が若干多く混じった髪は、彼が決して日々を楽しく生きているわけでは無いという事が伺える。

名をセドリック・カルヴァート。U—N—A—S—A上層部の一人にして、U—N—A—S—A所属の実力部隊、MO能力者の政治的な元締めたる存在だ。

「第七のクズどもがいきなり何の話かと思えば、保身を手伝ってあげますよ、などと」

「でも、肝を冷やしたのでは無いですか？」

回答は、ふん、と鼻を鳴らす事だった。

忌々しい、とセドリックは俊輝を睨む。

確かにそうだった。ダリウスが暴走し逃げ出した、という事を聞いた時は、自身のキャリアもここまでかど覚悟をしたものだ。だが、ここで第七特務の隊長が、裏切り者となった先代を継いだ木っ端を率いる若造が、畏れ多くも声をかけてきたのだ。

貴方の発言力も失われず、今後U—N—A—S—Aに来る脅威に対抗する基盤を整えられる方法がある、と。

「……何が望みだ？」

「何も。強いて言うなら、今の状況の時点でもう済んでます」

露骨な舌打ちをしながらセドリックは俊輝を疎まし気に横目で見る。

無駄な欲を出す事は身を滅ぼす。だが、報酬を欲しないのもまた面倒だ。

相手が何を考えていて、そもそも満足しているのかわからないからだ。

特に第七特務。凶悪な人間の集まりであれば尚更。

「……理由を言った方が安心しますか」

「勿体ぶるな、面倒だ」

「戦友との約束と、前の上司への恩返しですよ」

戦友という言葉で、セドリックの眉に皺が寄る。

あ、しまった何か踏んじやったかなご機嫌取りは面倒だという俊

輝。

セドリックはその感情を機敏に受け取り、しっしつと手で俊輝を払う。

「もういい、興が冷めた。帰れ」

「……そうですね。丁度部下から、連絡が」

「せいぜい、死なない事だな」

ええ、と短く返し、俊輝はバーを立ち去る。

呼び出された場所に急ぐために。

「おかえり、隊長……接待は済んだ？」

「……すぐ追い出された。何だったんだろうな」

地下にある第七特務のオフィス、そのさらに下層。

そこにある小さな研究室で、ノンナは俊輝を出迎えた。

何か面白い冗談でも返そうかと考えたが、ある事に気づき、事実をそのまま伝える。

彼女の声が、露骨に暗い。

「ありがと、皆。こんな遅くにごめんね」

既に集まっていたカローラとクロヴィスと共に、ノンナの先導で隣の部屋へと。

その、ガラスで隔てられた隣の隔離された部屋が伺える一室。随分と冷やされている事がガラス越しに伺えるそこから見える光景に、各々はそれぞれの反応を見せた。

微かに眉をひそめるカローラ。無反応のクロヴィス。露骨に顔が歪む俊輝。

「……うん、やっと解析が終わったんだ。今から、皆に見てもらいたくて」

そこには、モニターと何やら複雑そうな配線の機械。

……そして、そこから伸びた線が接続されたヘルメットを被った、ベッドに寝かされた人間とテラフォーマーの死体だった。

「ボク達の戦ってる奴らが、どんな連中なのか」



## 第86話 真黒のクオリア

「非人道的だ、って言いたい？ 隊長」

機械を操作しながら、ノンナは俊輝に問いかける。

人間の遺体とテラフォーマーの死骸。それを、今から何かに使う。専門的な知識は無いものの、俊輝にはわかった。

死者の安寧を許さない行い。それに対して何か思う事は無いか、とこの幼いながらも自分の先輩である部下は問うているのだと。

「いや……今更な話だ」

少しだけ考えて、感情を表に出さず答える。この遺体は、俊輝が知っている人間だった。先のU—N—S—A防衛戦の際に俊輝が討ち取った敵だ。

しかし、だからどうという話では無い。ここに至って、今更そのようなものに同情を示す、人間らしい感情で怒る資格など、とうの昔に失っているのだから。

「……ん。じゃあ、説明するね？ ちよつと専門的な話も含むから、退屈なところもあるかもしれないけどそこはごめん」

じつと画面を注視し、ノンナは操作を続ける。三人が眺める隣の、二つの死体と装置が並べられた部屋。その壁に立てかけられたモニターに、二画面に分かれて映像が映る。

「最初に結論から言えば、これは頭の中の映像を読み取る機械だよ」

脳内の酸素濃度とニューロンの活動状態は比例しているため云々。とはいえもう既に死んで時間が経っているからまた別の方法でやってるんだけどね。

そこから再び説明に入るが、それはもはや単語の一つ一つからして意味不明なものであった。

「本当なら、今の科学技術だと、『画像』は見れても『映像』は取り出せないんだけど」

この類の機械は、一部の国では既に実用化され、相応の値段こそするが一企業が保有できるレベルまで一般的に開放された技術ではある。事実、日本の民間企業で持っているところがあると俊輝は以前拓

也から聞いた事があった。

しかし、それは『生きている高等動物』に限定され、さらには『画像』しか見る事はできない。

だが、ノンナの今操作しているそれは、『死体』から『映像』を取り出す事が可能なのだと言う。

ノンナの超技術力の産物か？ 否。彼女は第七特務の優秀なエンジニアではあるが、このような精密かつ最新鋭の技術が必要な機械を一から自作できる超人レベルの技術は無い。

アメリカのこれに関する技術は日本を遥かに超えているからか？ 否。確かに、このような生物の脳の中身を読み取るような非人道的な装置の開発予算は日本では出辛い。だが、それを差し引いてもこれだけのレベルの差は生じない。

「……これ、この前の任務で『槍の一族』の研究所の一つからパクってきたやつなんだ」

その答えで、三人は一斉に納得する。

ニュートンの一族。科学技術において、現行の各国の遙か先を行く、人間の到達点たる一族。

反重力エンジンなどというSFで語られるような技術が用いられた宇宙艦を大真面目で作れてしまう技術力と経済力を持つ彼らであれば、確かにそのような物も作れるだろう。

「よし、じゃ、見てみてね」

二つの映像の内の片方がモニターの全体に拡大される。

そこに映っていたのは、人間の視界。U—N—A—S—Aの施設に突入せんとする映像だった。

時々背後を振り向く。そこに居るのは、おおよそ十人ほどの兵士達だ。

何か冗談でも飛ばしたのか、その多くが笑う。

そして再び前を向き、施設の内部に入り。

最初に彼らがしたのは、警備員の殺害だった。

襲撃者に気付き、慌てて壁に備えられた警報装置を押そうとした警備員の首を、兵士の一人がもぎ取る。MO手術を受けているのだろう

か。

「……やけに素早いすな」

クロヴィスが漏らす感想。カローラもそれに頷く。

「……う？」

俊輝はそれに、微かな違和感を覚えた。それが具体的に何か、までは浮かんでは来なかったが。

ノンナが少し映像を早送りする。

指示を出したと思われる手振りの後に部隊が散開し、視界の彼の方に残ったのは兵士が五人。

続いて、老人と青年、第七特務がお世話になっている部品工場の間が銃を突きつけられている映像が。

手すきの兵士達は周囲を見回している。

その直後に、状況は一変した。動揺しているのか、視界が揺れながら大きく移り変わる。

向き直ったそこには、苦痛で地面を転がる兵士の先に一人の男が立っていた。

「おや、隊長ですな」

それは、今この場にいる俊輝その人だ。

目にも止まらぬ……と言う程では無いものの、迎撃に回った二人の兵士の内の一人が謎の液体をかけられ後退し、もう一人がその勢いのまま攻勢に出る俊輝の動きに付いていく事ができず、喉を裂かれ息絶える。

「……!？」

「隊長？ 顔色が」

そこで、映像を見ていた俊輝ははっと何かに気付く。おかしい。明らかにおかしい。だが、その理由まではわからない。

心配した様子のカローラが声をかけるが、それは届いていない様子だ。

残った四人が、俊輝から距離を取り迎撃の姿勢を取る。

俊輝へと向けて手元の銃を構える視界の主ともう一人の兵士。

二人を守らんと構える二人の兵士。

だが、その布陣は瞬間的な狂乱により崩れる事となった。

視界の端に映っていた映像。それは、兵士の一人が突如として暴れ出し、銃を構えた兵士に襲い掛かりその胸に風穴を開けたというものだった。すわ裏切りか、などと思っただのか、異常に気付き慌てて隣を見る視界。

その後間を置かずして、その暴れ出した兵士ももう一人の兵士により喉を潰され崩れ落ちる。

その突然の暴走を止めた兵士に躍りかかる俊輝を、視界の主は銃撃によって牽制する。さらには、その兵士を背に庇う。

再び襲い来る俊輝の刃を、視界の主は銃で受け止めた。

直後、俊輝の目に微かに動揺しているような色が映る。

だが、戦力差は埋まらなかった。次の一撃に対応できず、その視界は眼前の敵では無く下、自身の体へと、自身の胸に深々と突き刺さった刃へと移る。

崩れ落ち、倒れて低くなった視界は、同じく倒れ伏した、既に骸となっている仲間達を映す。直後、最後に立っていた仲間も、その一つに加わる。

視界の主は、それに手を伸ばそうとする。血まみれになった、震える手で。守れなかった、仲間達に。

「……」

映像の下に表示された数字から伺えるこの映像の残り時間は数秒だった。つまりそれは、彼の視界が途絶える、即ち彼が息絶えるまで時間がそれだけだ、という事だ。彼は、最後に戦友なのか部下なのか、他の兵士達に謝罪でもしたのだろうか。

……クロヴィスとカローラは、それを静かに見ている。殲滅すべき対象ではあったが、その姿勢には思う事が無いわけでは無い。

そして。

その視界に、突如としてノイズのような、砂嵐のようなものが混じり。

「……ッ！」

「!?」

「……」

彼の前に倒れ伏していた、兵士の屍、その半数は。

テラフォーマーへと、姿を変えた。

人間が、突如として、テラフォーマーへと。その後の三秒にも満たない時間。それを最後として、映像は終わった。

……俊輝は、途中から全て思い出していた。自分のあの時の戦闘の記憶と、この映像の最初からの違和感について。敵は、人間とテラフォーマーとの混成部隊だった。だというのに、この映像では最初から、テラフォーマーなど欠片も映ってはいなかった。

何を、したのか。何を、されたのか。裏に生きる彼らは、その悪辣にこそ頭が回ってしまうので、それを察してしまった。

「……何でしょうか、これは」

「これが……アイツらのやり方か……!」

——俊輝が、ガラスを殴り付ける。その生身の力では、部屋を隔てる強化されたそれにはヒビなど入らなかった。

「……フリッツ君、君は強い意思を持っているかな?」

「意思、ですか。まあ、それなりに」

地の底で、その二人はのんびりと研究の合間の雑談に花を咲かせていた。

「感情など必要無い、と叫ぶ人間はいるが、それは全くの間違いだ、愚昧だ、とまで私は思う」

席に座り、分析結果のデータを弄るフリッツと呼ばれた白衣に片眼

鏡の研究者然とした青年。モニターに表示された資料を順に読みながら、オリヴィエは呼吸をするように話を続ける。

「心を捨てるなど、余りに愚かだ。自らの求めるものに手を伸ばさんとする欲望。家族でも友人でも仲間でも恋人でも、誰かを想い、それを守り共にあらんとする愛情。絶対に相手を許さんとする憎しみ。それら全てが、人を突き動かし、強い力を生む」

「仰る通りです」

『神聖隊』とかその良い例だね。知ってるかな？ 古代ギリシアの同性愛のつがいで構成された部隊の事だ。それはもう勇猛果敢な隊として知られていたそうさ。当たり前だよな？」

「隣に立つ恋人を死なせない為。愛する人の前で臆病な姿など見せられないため。仮に片方が死ねば、敵討ちに燃えるだろう。素晴らしい。人の心をここまで利用して力を引き出すその論理、私は提唱者に最上級の敬意を払うとも」

「しかし同時に、逆の事例。反目する者同士が肩を並べざるを得ない状況による士気の低下、それで起こる戦力のマイナスというものも私は理解している。いくら純粋な力の増加になろうとも、内心での不和があれば、それは同族で構成された部隊に劣るだろう」

「だから、なのです。恐ろしい、主よ」

くすりと微かな笑い声を、フリッツは背後から感じ取る。

「……左右脳の一部とそれらの連絡を行う脳梁の機能を一時的に停止させるだけで、視覚から得られる情報は正常に認識されなくなり、他の感覚器官もまた同じ状態となる」

こつこつと階段をゆつくりと上がっていく音。それを、押し返しては返すさざ波のように耳に入ってくるオリヴィエの言葉と共に聞きながら、フリッツは自身のコンピュータの電源を落とす。

「神経細胞配置、シナプス伝達、脳内麻薬、他ホルモン、脳内物質の分

泌……これらを調整する事により、一個体の行動や感情、記憶は無論  
心理変遷さえも『管理』の元に置き『支配』する事が可能となる」

「喜び、怒り、嘆き、祈り……それはすなわち」

その最後の言葉と共に、静かにドアは閉じられ、そこには気味の悪  
い静寂のみが残された。

『心』すら、我ら槍の一族の思うがままに」

## 登場人物紹介（ダリウス、エスメラルダ）

——ダリウス・オースティン

・ 23歳 ♂ 177cm 73kg

・ 『裏マーズランキング』1位

・ αMO手術ベース”呪歌の残響　ハデトセナゼミ

・ 好きな食べ物：■

・ 嫌いなもの：自分

・ 瞳の色：青色

・ 血液型：AB型

・ 誕生日：8月31日（おとめ座）

歌手の父と料理研究家の母との間に生まれる。両親の愛を一身に受け、周囲の人間への感謝と親愛を忘れない優しい子に育ったと思われていたが、ある日自らの周囲に抱く感情、両親だろうが他人だろうが平坦に存在する好意に疑問を抱き、ある日の仲の悪い同級生との諍いの結果それが何であるのかを思い知ってしまう。

優しいな好青年で、社会では独特な作風でコアなファンを数多く抱える歌手兼料理人として知られていたが人間を食材としてしか認識できず、それら全てに何の差別も無く食肉としての愛情を平等に抱く精神異常者。

自身はそれをおかしい事であると知識では理解しており、しかし止められず愛情とは何なのか、自分にはそれが無いのかと探し求め、他人、よりも近い関係性である人間を次々と殺めその肉を食らったが、結局全て平等に極上の美味としか認識できなかった。

ある時に調理後の残骸の隠蔽が不十分で発覚し、猟奇殺人鬼として死刑を言い渡される。

だが、当時受刑者のような身柄を国に預けられている人間に誰彼問わず行われていたαMO手術適応生物のパッチテストにより極めて強力な能力になると考えられていたセミの仲間への適合率が高い事が判明し、手術を受ける事になりそれに成功、火星へと派遣される事となった。



基本的に料理の技術は一流のそれだが、野菜料理ばかりで肉料理は頑なに作ろうとしない。魚料理も少ない。

料理に関する班員の満足度は非常に高いが、食べたい盛りりの若い男性班員はそれがちよつとだけ不満。

——エスメラルダ・オースティン

・4歳(生を受けてから換算) 22歳(精神) 16歳(肉体) ♀  
157cm 48kg

・αMO手術ベース”黄昏に謡う角笛” ブレヴィサナ・ブレヴィス

- ・好きな食べ物：人間
- ・嫌いなもの：人間
- ・瞳の色：赤色
- ・血液型：AB型
- ・誕生日：2月9日(みずがめ座)

生まれはアイルランド。

歌手である母と辺境の小さな土地の領主を務めていた父との間に生を受ける。

14才を迎えた時に暮らしていた村は襲撃され、奴隷として当時開拓時代であったアメリカ大陸に送られる。

奴隷船の中で船員や同じく積み込まれた奴隷の鬱憤や欲望のはけ口とされ、人間に対する怒りや憎しみが募った。

大陸に辿り着き少しして脱走。旅人を襲いその荷物を奪つて何とか生き延びていたが、ある日旅人が食糧を持っておらず、その遺体を食べる事で人肉食に目覚める。

その後は故郷で自他共に自慢としていた歌で旅人をおびき寄せ、襲つて食らうという事を繰り返し、百人を超える人間を食らった後、同じ感性を隠し持ちエスメラルダに一目惚れした旅人と出会い、共に暮らし子を授かったが、『歌で旅人を誘い食らう怪物』の噂とその被害を無視できなくなった軍の捜査により発見され、射殺された。

そして今の世に蘇り、夫の蘇生と蘇生した際に欠落した自身の記憶の回復を条件としてオリヴィエに従っている。

「なんて感じでどうだろうか？ 物語を参考に、もうちよつと不幸エピソードをアレンジする形で」

……という設定でオリヴィエと希？の実験により一から記憶と意識を作り出された人造人間。

『エスメラルダ・オースティン』は実在した、ダリウスの先祖である人物だが、彼女は当時の記録と寓話的な誇張により書かれた物語『人喰らいエスメラルダ』をベースとしてさらに人間への殺意を増させる為に一部の記憶をより不幸な境遇へと書き換えられた記憶を持って生み出された。

戦力としてもそうだけど希？の料理は悪くないけど時に命に関わるから優秀な料理人が欲しいよね、というオリヴィエの希望により、元となった物語としてはそれほどでは無かった料理の腕は大幅に引き上げられているものの、肉料理しか作らないため神殿勤務の人間の健康状態は日々悪化する傾向となっている。Bカップ。

## 第2部 2章 思慕と剣聖

夢を見た。

斬って斬って斬って、裂いて貫いて殺す。

不満は無かった。それが私の生きる価値であると、存在を許される理由であるとわかっていたから。

だけど、そんな私に向けられる瞳は冷たかった。

棒切れを振り回す事しかできない粗暴者。末席に置いておくのも恥ずかしい。

別に、感謝を求めているわけでも無い。蔑むな、と言っているわけでもない。

お父様は耐えろ、ときえ言わなかった。これが我々の義務なのだと、ただ当然の物として疑問すら抱くなど、そう言った。

なるほどその通りだと思います、と私はお父様に言い返した。

そしてまた、日々が始まる。敵対者を。邪魔者を……あるいは、ただの、誰かが気に入らないだけの相手を殺し、報告する。そこに、感謝も褒賞も無かった。

……きつと私は、最期までこうやって朽ちていくのだろう。そんな事を思っていた時に。

『初めまして、君を私の好き勝手に利用したいんだけど、どうだろうか？』

誰かの声が、聞こえた気がした。

「……少し、寝すぎましたね」

ゆつくりと目を開け、徐々に鮮明となっていく視界。

それを少女は認識し、静かに独り言を呟いた。

狭いトンネルが様々な方向に入り組んだかのような、狭苦しく汚い、圧迫感のある空間。そこに立っているには、少女の姿は余りに場違いであった。

複雑かつ華美な模様で彩られた短い丈の着物に、腰程まで伸ばした艶やかな黒髪。

その容貌は幼さを残しながらも気品を持っている。

腰に差した太刀は少しこの場に合っているように思えなくも無いが、それ以外は広い屋敷でお茶のお稽古に勤しむ伝統ある家系の娘さん、といった雰囲気少女だった。

そして、彼女の目の前では、多数の人型が騒ぎ立てる。

「じょう」

「じょうじ」

その数は数十、という彼らは、日本語とは明らかに違う言語で意思疎通をしながら、複数の方向から少女へと襲い掛かった。

テラフォーマーの群。その先陣が、力を抜いた棒立ちのまま動かない少女にその剛腕を振り下ろす。

「……温い」

だが、鍛え抜いた人間であろうとも首をへし折られ絶命するであろうその一撃は、ただ、その腕を撫でるかのような軽い接触によって軌道を曲げられ、少女の横の地面へと突き刺さる。

強化コンクリートと思われる固い地面にヒビを入れる一撃。だが、少女は動揺の一つすらせず、懐から『薬』を取り出し、自身の体へと用いる。

それは、一瞬の出来事だった。少女の髪が、その黒が根本から、波が広がるかのように金や黄がかかった白色へと変化する。同時に、その体内からまるで日が落ち月が輝くかのような、薄ぼんやりとした光が漏れ出す。

少女が、右腕を左から右へと、まるで頭を撫でる動作を大振りにしたかのように一度、振る。

腰に下げられたままの太刀。それを脅威と認識していたテラフォーマー達。

それに注目していた26の視界は。

その瞬間、太刀を映し続けたまま、永久に潰えた。

## 第87話 平穩と恍惚

何も知らない人間が見れば文化財と間違っつてしまいそうな古い雰囲気の邸宅に、彼らは集まっていた。

その家の形状を一言で表すならば、周囲を竹林に囲まれた小さ目の武家屋敷のような何か、とでも言えればいいのだろうか。

厳かな雰囲気のそこには、十数人の人間が集まっている。上流階級がお茶会でもやっているのか、そう思われても仕方ない立地であるが、実際にそこに集まった人々の姿はそれとは大きく異なっていた。

「……やりましたねお姉ちゃん本気だしちゃいますよ！」

「げえー！ やべえ逃げる逃げる！」

広い庭をそれでも所狭しと駆け回る小学生程の子ども達とそれに混じる周囲と一人だけサイズの違う二、三回りくらい年上に見える少女。

鬼ごっこをしている彼ら彼女らを居間で大きいサイズの炬燵に入りながら眺める十人程の、男の比率が高い人々。

「元氣だなアイツ……精神年齢が近いんだな」

みかんの皮を剥きながらそれを微笑まし気に見つめるのは、二十歳程の青年だ。

浴衣を着て穏やかに笑う彼。普段の軽薄そうな雰囲気は鳴りを潜め、その佇まいにはいつそ上品、とまで言える程のオーラを醸し出している。余り彼と付き合いが深くない人間がその光景を見たとすれば、『誰だお前！ 本物をどこへやった！』などと大真面目に詰め寄る事だろう。

「健吾にーちゃん！ へいへい！」

「はいはい、しゃーねえな」

そんな彼の元に、庭を駆けずり回っていた男の子の一人が駆け寄つて来る。靴を脱ぎ捨て、炬燵に体当たりを仕掛けん勢いで突っ込んで来た末に餌を待つひな鳥のように口を開けるその姿に苦笑しながら、青年、健吾はそのみかんと半分を割り、片側を豪快に男の子の口に

突っ込んだ。

「……すまないな、健吾」

「お構いなくー。つてもタダとか嫌いっすよな。これまでアンタに世話になった恩からのポイント支払いとでも思っつといてくれ、ハンチョー」

よし頑張っつて来いと肩を叩き、庭に再び突撃していく男の子を見送りながら、健吾は自分に投げかけられた少しだけ申し訳なさの滲んだ声に対応し、砕けた調子でそっちの方を向く。

そこにいたのは、一人だけ炬燵に入っていない青年だった。別に炬燵の場所が無いわけでは無い。

彼が炬燵に入る事ができないのは、車椅子に乗っているからだっ

た。  
裏アネックス計画第二班班長、島原剛大。若々しさが残りながらも常に固い表情のせいどこか威圧的な印象を与えてしまう彼は、普段の生真面目さが多少ほぐれた様子で健吾に対しそれは良かった、と声のトーンを落として返答する。

日本支部の所属人員である裏アネックスの第二班。裏アネックス計画が終了し帰還した彼らは、その多くがそれぞれの理由でアメリカのU—N—A—S—A本部に残っていた。

重傷を負ってそのまま安静という事で治療が続いている静香。

本人はめちやくちや動揺しながら否定していたが、それに付き添って、さらにその後そのままU—N—A—S—A内部で就職先まで見つけたようであちらに残っている俊輝。

本部への出向許可の期間がまだまだある事を利用してU—N—A—S—Aをあれこれ見てみよう、と考えていた翔と健吾、武。

抱えきれないお給料が！ この隙にアメリカ観光です！ などという美晴。

そして、複雑な立場で帰る場所の無いためU—N—A—S—Aに身を置いている拓也。

彼らの中で唯一、即座に帰国し、さらにはいざという時の予備人員という立場ではあるものの長期の休暇を貰ったのが剛大だった。

それだけを聞くと班員がそれぞれ頑張っているのに自分だけ、などと非難されてしまうのかもしれないが、その理由は複数あった。

まず最初に、暫くは戦える体では無かったという事。

火星の幾度ももの激戦を潜り抜け、全身に傷を負った彼は裏アネックス計画以前に足を悪くしていたという事もあり、αMO手術による強化と計画参加の条件としての治療を受けはしていたが、傷がそこに響いてしまったのだ。

第二に、剛大の家庭的事情。まだ若い頃に両親を失い、残された幼い弟妹達。剛大がわざわざαMO手術を受け計画に参加した理由でもある。一家の長たる彼が、愛する家族を残して無事帰れるかもわからない戦いに赴いたのだ。それから生還して火星で命を落とした班員達を弔った後に第一に思う事が家族に会いに行くという事だったとして、誰がそれを批判できようか。

このような事情により、剛大は第一線を退いて今こうして穏やかな日々を過ごしていた。

それでも自分一人、という申し訳なさがあるのか定期的に手紙をU—NASA本部に送っている。

それを皆で集まって読む（あとついでに飲み食いする）のが第二班の恒例行事となっている事を当の彼は知らないが。

そんなある日、それはU—NASA本部から第二班人員に下された命令だった。

日本での調査任務。故郷だから慣れてはいるが何故わざわざ自分達が日本に？とも思ったが、テラフォーマーが関わっているかもしれない、そもそも現在第二支部では戦力が不足している、という説明を受け、一応の納得を得た。

でも何で今のこのご時世に戦力が不足しているのか、と聞いてみたが、帰ってきたのは、『主力のMO能力者が悉くアメリカ観光に行ったまま帰ってこないからです』という皮肉交じりの回答だった。何も言



い返せない。

日本における軍組織、自衛隊から戦力を出せばいいのではないか？  
と思うかもしれないが、それもまた今回の任務の特性上、難しい話だ。現地人との接触が多分にあり得る場所のため、迂闊に銃器を持ち歩くわけにもいかないのだ。

日本は公務員がMO手術を受ける事を推奨していない。そのため、MO手術被術者を抱えている民間警備会社にでも依頼をすればいいのではないか、とも思われたが、どうもその辺りは表に出せない事情があるようだった。

……というのが、彼らが何故ここ日本にやって来たのか、という流れだ。

さて、ここままで、重要な情報が抜け落ちている。

それは、当の彼らがいるこの場所は何なのか、という点。

「伊予、皆の分のお茶を入れてくれないか？ あと適当にお菓子も頼みたい」

「はい、待っててくださいね皆さん」

剛大の言葉で、制服に身を包み炬燵にくるまっていた少女が立ち上がり、ペこりと行儀よく礼をして居間から出ていく。

いやいや自分達がやるよ、と引き留めようとした同じくコタツ組の翔と武だったが、剛大の目配せによりその言葉を引込める。

「さっすが長女ちゃん、よく働いてくれるな」

健吾は伊予の背中を見送っていたが、次の剛大の一言にその口を閉じる。

「健吾、家賃だが、ようやく纏めて払える」

「……」

ここは、剛大と家族の暮らす家だった。もつと情報を付け加えるならば、2年程前に2600年代では絶滅危惧種のトタン屋根の素敵な実家を引き払って移って来た家である。

この広いながらも時代に逆行したようなデザインの家は、健吾の家

の持ち物だった。

剛大がこの家に住んでいるのは、U—N A S Aで火星開発計画の幹部搭乗員として勤める事になった経緯に関係している。

彼は本来、本来幹部搭乗員としての人員では無かった。

それを務めるはずだった人間が突然U—N A S Aを離れてしまったため、繰り上がる形でその任に就いたのだ。α M O手術を受けた人間二人と多数の上位戦闘員。この事件と呼べるものが起こらなければ、裏アネックス計画日本第二班は北米第一班に次ぐ最強クラスの部隊となっていただろう。

しかしそうはならず、突然の幹部搭乗員という要職を担う事になってしまった剛大には多くの負担がかかる事となってしまった。

その罪滅ぼし、というわけでは無いが、任を辞した人間のお付きの者として計画に参加する予定だった健吾と関係者である実家から剛大に新しい家が格安で貸し出されたのであった。

本来であれば無料で良い、といった健吾とその実家であったが、剛大がそこはきちんと支払うと言って聞かなかつたのである。結果として他様々な場所への返済もあるだろうと剛大を説得し、家賃の支払いは一時的に中断していたのだが。

「ん……ああ、その事なんだけどな、班長」

健吾は言葉を詰まらせる。全く生真面目な人だ、と。

その先を言おうとした健吾であったが、物音を聞きつけ瞬間的に口を閉じた。

「お待ちせしましたー！」

トレーに乗った湯呑と茶菓子。その重みに少しだけ腕が下がりながらも、伊予が部屋に戻って来る。

礼を言いながら健吾は立ち上がり、それを受け取った。

「……ところで、拓也は」

話題を変える剛大。兄弟達の前でこの話はしたくないのだろう、その心境をくみ取り、健吾はそれに乗る。

「ああ、アイツだけお上から許可出なくて来られなかつたんだ。色々

話したい事はあるつつつてたんだけど」

今この場に集まった元第二班。俊輝と静香はしようがない所ではあるが、そこには拓也の姿は無かった。

U—N A S Aの防衛戦力として離れられないのか、それとも生きている事がわかれば狙われる身だ、迂闊に外に出られないのか。理由は定かでは無かったが、とにかく来られないよう本人も残念がついてた。

前々から日本行ってみたい、って言ってたからせつかくの機会だったのにな、と残念そうに笑う健吾。

「そうか……」

それに一言で返す剛大の心境を、健吾は汲み取り切れなかった。

剛大にとつて拓也はなりゆきではあったものの部下の一人で、皆と共に時間を過ごした人間だ。最後に会ったのは調査隊として俊輝と静香と共に宇宙艦を離れた時だった。

拓也が実は第四班の班長、『裏切り者』の司令官にして最高戦力であり、第一班、第二班と交戦しテラフォーマーの襲撃により停戦、その末に仲間をテラフォーマーから庇い行方不明に、そして奇跡的に帰還してきたという経緯を剛大は記録や証言から知っている。

地球に戻ってあまり間をおかず日本へと帰国した剛大は拓也に会っていない。

きつと、色々な事を話したかっただろう。元部下であり同時に仇敵でもある。そんな相手に班長は何を語るだろうか。自分みたいな頭の軽い若造にやわからない。そう思い、健吾は何も言わなかった。「ところでお前達……追い出したいというわけでは無いが、仕事はいいのか？」

すつと目を細めた剛大に、炬燵を囲んでいた全員の背がすつと寒くなる。第二班班員だけでは無く、妹の伊予まで。あ、これお説教モードなのでは？ と。

「ええ。調査に出るのは明日からですから。今日だけはゆつくりとしようかと思ひまして」

そこで声を上げたのが、これまであまり話していなかった武だった。少し口数が少ない所がある武であるが、班長がどのような状態であろうとも物怖じせず話しいける貴重な人間なのである。

「そうか……いや別に説教とかじゃないからな」

周りの態度の意味に気付いていたのか、いやいや違うと手首から先を振る剛大。

話は再び、穏やかな団欒へと戻っていった。

「じょう」

「じ」

「じょうじ」

複数のトンネルが連絡するホール状の空間。そこに、数にして数百というテラフォーマーがひしひしと蠢いていた。

だが、その様子はどこか通常の彼らのものとは異なっていた。

それは虚ろ、と表現するのが正しいように思われる。

テラフォーマーの通常個体は感情が乏しい。確かにその瞳は虚ろ、と呼べるのかもしれない。

……違うのだ。その虚ろ、は感情を映さないという意味では無い。

むしろ、逆だ。テラフォーマーには似合わない、夢見心地、というような。うっとりとしている、というのが正しいのかもしれない。起きながらにして幸福な夢から覚められていないような、そのような調子。からだもふらふらとその姿勢を維持しきれないのが伺える。

「みんなー！ 今日が集まってくれて本当にありがとうー！」

そんな不気味な集會に、声が響く。それは、ホールに、それに繋がるトンネルにぎゅうぎゅうに詰まっているテラフォーマーが何故か開けている、中央のスペースからだった。

元気に溢れた、だが露骨にウケを狙ったかのような、甘ったるい声。テラフォーマーはそれを聞き、口々に声を出す。

それが何を意味するのかは人類の殆どにはわからないが、まるで喜びを表現している様子だ。

「うんうん、皆今日も元気！ 私は嬉しいよー！」

ギチギチに詰まりながらも揺れ動くテラフォーマー達がまるで魔除けの聖域であるかのように近寄らない、部屋の中央。そこに立っていたのは、一人の少女だった。

ゆるふわ系とでも言うのだろうか、セミロングの先が丸まった茶色混じりの黒髪に、間違いなく整っている、と判断できる、美人、というよりは可愛らしい、に分類できる容貌。

その手にはマイクが握られ、その身には黒と紫というその与える印象からすれば落ち着いた色合いの、しかし露出が多めのさらに周囲にアピールする意匠をとどこどこにあしらった舞台衣装とでも呼ぶべき服装。その、強調されているという事もあるが元々豊かなものであると主張する押し上げられている衣服の胸部に刻まれている、何らかのロゴだか紋章だかと呼ぶべきもの。

そう、彼女を一言で表現するならば、この異常な状況をあえて現代文化に例えるとするならば、ライブ中のアイドル、であった。

これがライブコンサートとでも言うならば、主役である彼女と同時に観客達もいなければ寂しいというものだろう。

否、種族こそ違いがその熱さは変わらない、とでも言いたいのか、テラフォーマーは次々に声を上げ、ついにその禁忌を破り、空いていたスペースへと我さきに、しかし彼女の立つスペースだけは開け、近づいていく。

少女の足元に、何かが置かれた。それは、パックに入った肉。まだ土のついた野菜。スープに売っていきそうな、調理済みのお惣菜。

食べ物だけでなく、アクセサリやぬいぐるみ、銃器といった雑多なものが次々と、テラフォーマー達によって積み上げられていく。時に、武装した兵士の死体を見せ、置く事はせず離れていくという個体

も。

「わあ、ありがとー☆」

周りに殺到したテラフォーマーが、我先にと少女に手を伸ばす。それは、熱狂と呼ぶにふさわしい光景である。

彼女は少しだけ照れくさそうに笑いながら、テラフォーマーの内の一匹を、他と違い腰布を巻き腕にミサンガを巻いた個体が差し出した手をその小さい両手で包み込むように握る。

がくがくと震えるテラフォーマー。憧れの存在に握手をしてもらえるとするのは老若男女問わず感動を見せる状況である。しかし。

少女の手から、じわりと液体が滲み出る。汗と呼ぶには粘度の高い、さらにスポンジを軽く押したかのように次から次へと、ゆっくりであるが絶え間なく出てくる透明なそれを、テラフォーマーは握手をほどこき両手で受け止め。

それを、まるで砂漠を彷徨っていた旅人がようやくオアシスを見つけたかのように必死の様子で口に運んだ。

瞬間、その瞳は恍惚と快楽にだらしなく歪み、全身は小刻みに痙攣する。感動と呼ぶには余りに大げさなその行動。

「えへへ！ 皆もそんなに急がないで！ 夜はまだまだこれからなんだから！」

周囲のテラフォーマーは、先を越された事を怒るかのようにそのテラフォーマーに目を向け、遠くにいる個体は夢見心地の様子のまま少女に手を伸ばし続ける。

それは、個我を持たないある種で完璧な生命、などとは程遠い姿だった。

## 第88話 地の底へ

「最近アレの調子はどうかい、友よ」

「ウン、最近使ったけど全く問題無いね」

いまではもはやさほど珍しいものでもなくなった、しかし他と比べてもひとときわ高い超高層ビルの頂上階。発展を続ける中国の都市部を一望できるそこは、物理的な高さのみでは無く限られた上流階級の人間のみが辿り着く事のできる頂、その象徴でもある。

そこに設けられたレストランで、二人の男は食事を取っていた。

元々ごく一部の人間しか訪れる事のできないこの店は、あまり広いわけではない。しかし、貸切られたそこに一つのテーブルを挟む二人の客しかいないというのは、どうしても寂しさを感じる光景ではある。

だが、それは仕方ない事であるともいえよう。今この場所で行われている食事は、軍の幹部とその外部の協力者との個人的な対談という、外に漏らす事の許されない側面を持つそれなのだから。

「それにしても、こんないい店を取ってくれなくてもよかったのに」  
「君が来るんだ、これくらいは軽いものだよ」

立派な海老の焼きものをつつきながら、両者は和やかに話す。

食事を初めてから30分ほど。そろそろ、本題に入りそうなものだったが、二人にはその様子は見られない。

本当に、ただ食事をしに來ただけの友人同士のような会話しかしていなかった。

「でも嬉しいよ、うちの秘書は家庭料理は上手だけどこんな高級料理は作れないからねえ」

フォークを細かに振り、上機嫌をアピールする青年。

それは良かった、とあまり感情を表さない表情の、普段の軍服では無く黒のスーツを着た、中年の男性。

「昔から世話になってるからね、これくらいはお安い御用だよ、オリ  
ヴィエ君」

「いやいや、こちらはお金と技術を融通しているだけだとも。場所と

人は頼りっぱなしさ。それに、娘の手術が成功したのも君から取られたデータののおかげだ。このお礼はいずれ、宇嵐君<sup>ユイラン</sup>」

お互いの肩を叩き、二人は声を出して笑う。

「……ところで、何故こちらに」

だが、それも長くは続かなかった。先の楽しそうな空気は少し薄れ、中年の男性、宇嵐が白の坊主頭を掻き、少し慎重さの混じる声色で目の前の青年、オリヴィエに質問をする。

先日、そっちに行くからと唐突にやって来た便り。

自分の後ろ盾の一つ……というか、MO手術に関係する事柄で重要な協力関係にある人間だ。無碍にする事はできず。こうして場を整えたわけだが、余り外に出ない彼が、一体何の用なのかと気になったのである。

「ああ、真面目な話がしたい？ 私は別にどっちでもいいけど」  
「できれば先に済ませておきたいな」

オリヴィエと宇嵐は協力関係というだけでなく個人的な友人同士でもある。

ニュートンの一族と中国の軍部。互いに所属する組織の後ろ暗い部分を担う立場である彼らはお互いの苦勞を知っているのか、それともそれ以上に共感できる何かがあるのか、良好な関係を気付いていた。

「あの時の事はありがとう。正直、私の想像以上でね。私もこれはバレルかとひやっとしたものだ。その再確認が、一つ。もう一つはやっぱり後回しにしようかな」

「ああ……いつもの隠蔽工作か、って思ってたけど詳細を聞いた時は驚いたよ。小さな発展途上国とは言え、軍隊もいればMO技術では裏との繋がりがデカいせいかさそこそこだった。でもまさか」

くつくつと笑うオリヴィエに、宇嵐は彼にしては珍しい、テンションが露骨に下がった雰囲気を見せる。

「国が一つ地図から消えるなんてね」

おおよそ二年と数ヶ月ほど前。とあるMO能力の実験で、アフリカ



の国が一つ、一夜にして壊滅した。

逃れたわずかな生存者は地獄のような光景にその多くが錯乱し、正常な精神状態を保つ事ができず。

激しい戦闘を伴った悲劇。そのような惨状とあらば、本来であれば即座に各国が対応し、人道的支援と平和の名の元に、軍が送り込まれるはずだった。

しかし、公にできない技術が関わっている事が判明し、各国は対応の決定に難儀した。

その隙に中国が大規模犯罪組織に制圧された友邦を支援したが残念ながら国を保てない程の悲惨な戦闘となった、という発表を行い、事態は沈静化……とまでは行かなかったものの、一応の表面上の納得を得たのだったが。

「……あれ以来私は君達に頭が上がらないよ」

「まあ……あれはボクらも大変だったからね。凱將軍が寝不足で死ぬところだった」

両者感慨の籠った声で。しかし、どこか酷く淡泊な様子で。

「……さて、美味しい食事の後は観光だよね。いいスポットを教えてくださいましたまえよ」

「勿論」

二人は立ち上がり、店の外に向かって歩いていく。

どこか虚ろな雰囲気纏う二人を出迎えた兵士達をお供に付けながら。

——日本 某県

「……まだ泣いてんのかよ美晴」

「泣い……て、ないです」

彼らは、トンネル状の構造物の入口に立っていた。

地下に続くそれは、『人工地下河川』と呼ばれるものの一つである。

東京で大規模に整備されたそれは、地面のコンクリート化が進むにつれて大雨や台風の際の冠水が深刻化してきた際にその対策として

作られたものだった。

無数のトンネルと水路、作業用の通路が複雑に連絡したそれはまごう事無き迷宮と呼べる構造物である。

今彼らのいるこの場所の先にあるのも、東京での成功を反映し大都市の地下に作られたものの一つだ。

彼らの任務。それは、この場所に生息していると考えられるテラフォーマーの調査だった。

都市伝説としてまことしやかに囁かれているその存在は、実際にこの地下河川に巣を張っているようだった。

かと言って、この地下に住まうのはテラフォーマーだけでは無い。地上を追いやられた最貧困層、俗に『モグラ族』と呼ばれる人々や衛星の監視も届かない、捜査も困難な迷宮という場を様々な取引に活用しようとする裏社会の組織。

人間もまた、この場所を住居とし、独自の社会を築いている。

そんな現地人との接触もあり得る状況だからこそ、軍隊を送り込む事が憚られているのだ。

ただでさえ表の社会への不信や憎しみの強い彼らに、国の使者たる軍人が武器を持って侵入してしまえば、さらなる危険が、銃器を奪われれば二次被害も生じかねない。

……という事情もあり、『薬』さえ用いなければ一般人として入る事のできる彼らがこの場所の調査人員として選ばれたのだ。

「お前は否定する前に鏡見ろ、ほらハンカチ……っとうわ汚ッ！」

健吾が美晴にハンカチを渡し、それを使い美晴は鼻をかむ。

そんな美晴の胸には、ところどころよれよれな折り紙で作られた花が差されていた。

「だっただって！ 『お姉ちゃんありがとう、怪我しないでお仕事頑張ってね』とか言ってくるんですよ！ 無理ですよこんなん！」

ぶんぶん手を振って赤くした目のまま主張する美晴を皆は生暖かい目で見守りつつも、全員はいざという時の布陣を崩さず、地下の水路へと足を踏み入れる。

一般人がここに入る機会など、遊んでいる子どもが入口からほんの

ちよつと中に入る程度だ。

そこで、ここはダメだと理解し、すぐに震える体を抱きながら外に出る事になり、二度と近づかない事だろう。不気味に反響する音。冷たい、しかし生々しさを伴った君の悪い空気。本能でわかるのだ。

時には、探検家気分で奥深くまで入っていく子どももいるかもしれない。彼らは、多くの場合カウンントする必要は無くなる。何故ならば、その日から一般人では無くなる可能性が高いからだ。

そんな魔境がここなのである。

例え彼らのような戦闘の心得がある人間であれども、油断ができない場所だ。いつでも『薬』を使えるように。非戦闘員の翔と美晴を中央に、それを武と健吾が前後で挟む形で奥へと進んでいく。

「……なあ、健吾」

「どした？」

空気の冷たさを誤魔化そうとしたのか、翔は健吾に話しかける。それに答え、健吾は若干下を向いていた顔を上げる。

「ここ、本当に大丈夫か？ よくもまあウチの国はこんな正気じゃねえ迷路を地下に作ったもんだ」

「いやいや、日本の名誉のために言っとくがウチに限った話じゃねえんだな、これが。そうだな、例えば『オンカロ』の二番目とか知ってるか？」

「ああ、あの欠番になつてるあれですよね！」

健吾のうんちく話が始まる。『オンカロ』。それは、フィンランドに存在する廃棄場の事だ。

最深部は地下500mにも達するそれは、ゴミ捨て場と呼ぶにはあまりにも規模が大きい。しかし、その役割を聞けば、誰も笑う事などできないだろう。

ゴミ捨て場などと言う表現では足りないものを永久に地の底に封じておくために、この施設は存在している。

それは、核廃棄物。原子力発電で生じた残り滓。その半減期は数万年、種類によっては数億年にも及ぶ。

近づいただけでも生物の体を侵す上に人類の歴史の長さで見れば

永久に近い年月衰える事の無いその脅威を鎮めておくために、地下深くに埋めるという手段が取られたのである。

『オンカロNO. 2』も、一つ目のオンカロがじき満杯になるという事で2100年代初頭に建造された二つ目のものだった。

設計に際して求められたのは一言で言えば、数より質。つまるところ『超高性能化』だ。一つ目のオンカロの規模のものをいくつも作るより、こちらをひたすら大きくして一カ所に纏めてしまった方が安上がりだと。

その施設は当時の人類の地下施設建造技術の極限である深度3000mにまで達し、大量の使用済み燃料を保管するため構造はより強固に、純粹水爆の直撃にすら耐えうる抗堪性を備えていた。

自国でもそれぞれ問題となっていた核燃料の廃棄問題。次世代の処分場のモデルとするため各国の共同研究により設計され、実際に建造が進められたそれは、突如として中止される事となる。

理由は、馬鹿馬鹿しい程に単純であった。『予算不足』。

驚く程あつさりと計画は凍結され、建造中であつたそれは放棄された。実際に使用済み核燃料を安全に廃棄できるだけの設備の建造までたどり着かなかつたためせめて建造中の規模で本来の用途を、という事もできず、付近の原子力発電所も封鎖された後は誰も近寄らない土地となり、もはや遺跡のように佇んでいる。

「なーんて、人類の無駄遣い建造物ランキングに堂々と乗ってるようなのもあるんだな、コレが」

「……健吾、お前そんな物知りキャラだったか？」

目の前のチャラ男が予想以上に物知りで、全員が疑いの目を向ける。適当ぬかしていないか？ お前は本物か？と。

「実は俺、お前らの中で一番いいところ出てるんですう」

衝撃の事実にも、任務の途中にも関わらず全員の視線が周囲の警戒から一斉に健吾の方へと向く。

バカな。そんな事が。やはり偽物。などなど。

「ウチ、前も言ったけど古流剣術の道場で俺が跡取りだから文武両道じゃないとイカン！ みたいな事親父に言われてな、小せえ時はダチ

も作れずにずっと勉強と稽古よ」

「健吾……」

「ま、そうとわかったら俺の事もうちよつと尊敬して労わるがいいぜ、ハハッ」

少し声のトーンを落とし寂しそうに語った健吾に、周囲の目が反省のものへと変わる。

仲間の意外な一面である。

「だから反動でこんな事に……」

「てめえな……っ！」

翔が本人もそう望んでいると察し空気を変えるためしみじみとしながら健吾を煽る。

それに応じ、翔の肩にチョップを繰り返す健吾であったが、ふとその表情が戦場に立っている時のそれに変わる。

「……じょう」

皆が歩いているトンネルの左側に空いた、隣のトンネルへと続く通路。一旦は通り過ぎたそこを健吾はそつと覗き、なんだこれは、と怪訝そうな表情を浮かべる。

それは一匹のテラフォーマーだった。目標発見、と喜ぶべきところなのだろうが、どこか様子がおかしい。

両手に持っているのは大根だ。さらに、頭には麦わら帽子を被っている。

人間に擬態するために衣服を纏うテラフォーマーがいるという事は知らされているが、帽子以外は裸のまま。

さらに、その表情も火星で戦った無機質なそれでは無く、その動作と合わせて、何と言うのだろうか。

「……何か、ウキウキしてますか？」

「何バカな……いやウキウキしてるなこれ」

健吾と共に美晴と武も様子を伺う。出てきた言葉は、同じだった。

何かが楽しみで仕方ないから早く帰りたい、そんな調子の、やけに人間臭い動作である。

「まあ何だ……とりあえず追いかけてみるか」

謎のテラフォーマーを追う。彼らの任務は、こうして本格的に始まった。

## 第89話 底の底

「じつ、じょつ」

どこか楽しそうなテラフォーマーをこっそりと追いかける四人。

その両手に持った大根と頭に被った麦わら帽子は、農家の人間を彷彿とさせるがしかし。

「まさかアイツらが農業してるってこったねえよな……」

「いやー苔の栽培とかしてたらしいですしあり得るのでは？」

ひそひそ声の健吾と美晴。

そもそも、別に重要なのはそこでは無かった。

問題はこのテラフォーマーが何をしようとしているのか、という点である。

仮にこの大根がテラフォーマーによって栽培されたものだったとしても、それは大した問題では無い。

いや地球で農業をやっているというその行動はそれはそれで苗木の入手や土地などこれまた地球での文化的活動という点において研究すべき事案ではあるが、今彼らが任されている任務は『地下水道でのテラフォーマーの活動の調査』だ。

何故地下に農作物を持ち込むのか。重要なのはその行動の理由である。

複雑に入り組んだ地下道を迷いなくすすいと進んでいくテラフォーマーを追いながら、時々通路の壁面の目立ちにくい場所にマーカーで数字を書き込んでいく。

一応の地図は存在するものの、幾度となく増築と閉鎖が繰り返されている以上100パーセント信用できるものではない。

出口も所々にあるためこのまま迷っても一生出られない……という事は恐らく無いだろうが、可能であれば既に通って脅威は無いとわかっていてこれまでの道をそのまま逆行するのが一番安全だろう。

「……」

「へ!？」

ひと際巨大な開けたトンネルに続く通路を通ったテラフォーマー。

身を隠す場所が無いぞ困ったと思いつながらもその先を覗き込んだ健吾は驚きで声を出せないでいた。健吾の様子を不審がった美晴が次いで除きこむが、こちらは素つ頓狂な声をあげる。

さらに後続の翔と武も二人の様子にどうしたどうしたと続くが、二人とも眼前の光景に目を丸くする。

「そこのアンちゃん、いい子いるよ！」

「今なら合成肉が安いぞお！ 早いモン勝ちだ！」

「いい銃売ってんぞ！ 今買ってくれりや修理も一回分タダ！」

それは、ボロボロの出店の集まりと過疎化した集落の一角、というような風景であった。

テントとあばら屋がトンネル内部の左右に立ち並び、大抵はどこどころ破れほつれたシャツとズボンを着た見るからに貧しげな人々が冷たいコンクリートの床に並べられた様々な商品をそれぞれアピールしている。

「……モグラ族、か」

健吾の眩きが、それを見てからの四人の唯一の感想だった。

他の三人は、絶句して声を出す事ができない。

それは事前に知らされていた情報だった。『モグラ族』。先にも語られた通り、地下で暮らす事を余儀なくされた貧困層。

前兆は数百年も前から見えていたが、経済的格差がより深刻となった2600年代。それはこの国日本でも深刻な問題となっていた。

その数日本だけで12万人とも言われているモグラ族は、深刻な社会問題である。貧困層に十分な施政により支援が行えていないというのがまず一つ。もう一つは、犯罪組織との関わりだ。

貧しい環境で集団で暮らす彼らはおおまかに二分される。全てを諦め、ただ日々を細々と食いつなぎただ死を遠ざけるだけの者と、何としてでも生き延びてやる、自分を捨てた表の社会など知るものか、という者だ。

そんな彼らに付け込み利用せんとする犯罪組織は多い。ある時は使い捨ての鉄砲玉として雇い、またある時は裏取引の運び屋として。



最近では、国はひた隠しにしているものの裏社会にじわじわと広がるMO手術の被験者として身を売る人間もいるという。

とはいえ、今の日本の状況はまだ遥かにマシと言えよう。ヨーロッパでは約100年前に起こった深刻な経済危機により多くの人間がこのモグラ族やそれと同列の深刻な貧困へと落ち込み、食い扶持を求める彼らと組織強化の為の人員を求める犯罪組織の利害が最悪の形で一致し、一気に犯罪組織の規模と勢力が拡大し、国ですら制御不能な状態に陥った例が存在し、最大規模の犯罪組織が軍の介入で壊滅してからその影響は今現在でも続いているという。

「……」

四人とも、この日本の地下に住まう国民の事は今回の任務に関する事前学習をするまでも無く、それぞれが学生として受けた授業の知識で知っていた。

しかし、現実になんを見せつけられると、普段目の前に映っている発展した世界有数の先進国、という表向きの姿とのギャップ、何より目の前の人々の姿で受けるショックは大きいのだ。

暫く何も言う事ができないでいる四人は、テラフォーマーの動向をただ目で追っていた。トンネルを歩きかう人間にあまりに自然に混じっているテラフォーマーは、雑多な商品を広げているテントの一つの前に立つ。

人の気配を感じテントから出てきた、ボロ着を来た青年はテラフォーマーの姿を見て、驚きの表情を浮かべていた。

いつまでも動揺してんな、いざとなったら出るぞ。健吾の無言の目配せに皆は頷く。

しかし、健吾が無言で示すような悲劇は起こらないだろう、とも四人は何となく考えていた。

青年は一度テントの中に戻る。しかし、それは突然目の前に異形の人型生物が現れたから慌てて逃げ出した、などという調子では無く、突然の来客に驚いてお茶を汲みに行った、程度のように四人からは思われた。

それをじつと待つテラフォーマー。その姿は、人間に対し本能的な殺意を抱く生命体、とは少しズレた調子のように思われた。

青年が再びテントから顔を出したのは一分ほど後の事だった。

左手は握られ、何も持っていない右手でテラフォーマーの持つていた大根を受け取り、空いたその手のひらの上に握られていた拳を開く。そこからテラフォーマーの手のひらに落ちたのは、数枚の硬貨だった。距離的に四人からは詳しくは見えないが、恐らく日本円だろう。

それに一度頷くかのように頭を下げた後店を立ち去るテラフォーマーと、笑顔で手を振って見送る青年。

「……作戦会議だ」

その光景を見て、四人は少し話し込む。

——数分程後に、四人は動き始める。

できる限り自然な動きで、いつでも撤退できるように背後を気にしつつ、その寂れた露店の集まり、巨大なトンネルへと足を踏み出す。

四人が姿を現した瞬間、露店を催している人々の視線が四人に集中した。

ここまでは想定できていた自体である。できる限り一般人に溶け込めるようカジュアルな服で、などと言われていたが、このような場所ではその辺りの雑貨店で売られている売れ残りで値引きされたような服でも、一般社会におけるピカピカの高級スーツ並みに目立ってしまう。

しかし幸いにも、その目線から感じ取れる感情は自分達より恵まれた相手に対する敵意、というよりは物珍しいものを見た、という様子に近い。

「できる限り辛気臭い顔をするんだ、『ああ我々もとうとう家を失つてここで暮らすのか』って調子でな」

事前の話し合いでの健吾の言葉通り、現地民の反応が想定されていたよりもずっと柔らかいのはなるだけ暗い表情を浮かべていた、という事もあるのだろう。

物珍しさに加え同情と嘲笑の混じった反応からは、お偉い地上暮らし様が自分達と同じ場所に落ちてきやがった、新入りが来たか、と認識されているように感じ取れた。

これで堂々とした様子で来れば、俺達を冷やかしにきやがったのか、と認識され悪意の目線を向けられていただろう。

その表情を崩さずに、目ではテラフォーマーを追いながら。そう、テラフォーマーはまだ、この露店の集まりから離れてはいなかった。所々の店を見て回っている。その行動もよくわからないが、それはともかくとして、だ。

「ちよつと聞きたいのですが」

たたつと三人から離れた美晴が、一つの店へと小走りで駆け寄る。

そこには、まだ年齢にして小学生の中学年程か、というくらいの少年が店番として座っていた。

扱っている商品はこれといって統一感の無い雑多なもの。汚れが付着しているものも多い事から、恐らく廃棄されたゴミの中から有用なものを掘りだしてきたのだろう。

「あの黒い人？ よく来るのでしょうか？」

質問に、少年は答えなかった。ただ、美晴の目をじつと見返すだけだ。

どうしたものか、と困惑する美晴の頭に、追いついた翔の手刀が加えられる。

「バカ、何も買わないで話しかけるヤツがいるか……ごめんな、俺らまだここに慣れてなくて」

美晴に注意しながら、翔は少年に申し訳なさそうに謝り、並べられた商品の中で、立派な装丁の洋書のような表紙の本と思われるものを手に取り、これを貰おうかな、と微笑みかける。

それは、商品の中で最も高級そうな商品だった。他の廃棄物と間違えられそうな商品と違い、これだけ明らかに富裕層向けの商品、という雰囲気を持っている。手に取ってあれこれ触る翔は、さらにこれは特殊な経年劣化防止の加工がされている事に気付く。

恐らくは相当の高級品だ。

少年がぽつんと言った値段。見た目の高級感から価値のある商品である事はわかっていたが、相応のものだった。財布を取り出し、そこから少年の提示した値段に色を付け、それを渡す。

恐らく、これは本来少年が考えていた値段より高い、ふっかけられた値段だろう。ここに慣れていない。先ほどの翔のその言葉から、まだ相場などわかっていないと認識された可能性が高い。ここに追い込まれた人間の良心に期待できない以上、相手がいたいけな少年と言えどそう考えるのが自然だ。だが、あえて翔はそれに乗った。

「……最近、あの地底人、大人しくなったんだ。前は人を襲ったりしてたしずっと奥にいたから誰も近づかなかったんだけど、最近急にここに来て、普通に買い物とかしてる」

「へえ。ありがとな、助かった」

人と話慣れていないのかゆっくりぽつぽつと語られた情報。

少年の頭をくしゃくしゃと髪をかき混ぜるように撫で、翔はにかつと笑い礼を言う。

テラフォーマーは現地の人間から地底人と呼ばれている。買い物にやってくる。人前に姿を現すようになったのは最近。昔は凶暴だった。十分すぎる情報だ。

買った本のような何かを脇に抱え、さあ行くかと背後に向けて声をかけた健吾であったが、そこで自分の袖を引かれ、再び少年の方に首を向ける。

「……あの、これ、返す」

差し出されていたのは、紙幣だった。それは翔がチップとして多めに払った分だ。

「いや、でも」

「いいっていいって、また買いに来るから、今度は安くしてくれよな」

多めに支払っておきながらも、自分はぼったくり価格と知って買ったんだ、というアピールを大きな声でする翔。それは、少年に対してというよりは、少年と自分のやり取りに耳を立てていた周囲の露店に對してという意味合いが大きい。ふっかけてきても無駄だぞ、と。そうしなければ、直後に金払いのいい客として周囲を他の店の人間に囲

まれてしまうかもしれないからだ。

「や、いくぞお前ら」

「……翔、ここの慣れてんのか？」

「……さあな」

武の言葉に、翔は顔を合わせず曖昧な調子で返答する。

気が付けば、テラフォーマーは露店から立ち去り今この場所から枝分かれする狭いトンネルへと入っていきこうとするとそこだった。

それを再び追い始める四人。

通路を幾度と潜り曲がり、迷宮の奥底へと進んでいく。

その終端に辿り着かんとする一歩手前。

「……待たれよ、勇なる者達よ」

大きな通路を横切る形での急ぎ足の四人に向けられた声の一つ。

それは、大通路の傍らに座り込んでいた、先ほどの露店の人々と比べてもひときわ貧しそうな、ボロ布と毛布を纏った中年の男だった。

無造作に伸びた髪と無精ひげの目立つその姿は、正に浮浪者、という雰囲気。

しかし、その眼光には確かな光が点り、ぎらりと光る。

「……お前達は、強い。だが、アレと戦おうと思うな。アレは、お前達とは異なる摂理を生きる存在だ」

「……ど、どうも……？」

どうも意味が取れない言葉を唐突に向けられ、健吾もよくわからず返事をしてしまう。

勇なる者。そこから、一瞬この男は自分達を知っているのか、とも思うが、いやそのはずが無いとすぐにその可能性を振り払う。

それに、今問答をしている暇も無い。

不気味なつつかかりを覚えながらも、四人は男に目もくれず通り過ぎた。

「じ！ じよう！」

「じようじよう！」

そこからだどり着いた光景に、四人は直前の謎の男の事などすっかり記憶から吹き飛んでしまっていた。

本来の空間としての用途は貯水槽だろうか、ホール状の部屋に集まっている、四十匹ほどのテラフォーマー。その中央からは、人間の歌声が聞こえてくる。

テラフォーマーは、四人に目もくれない様子だった。最初健吾が前に出てしまうテラフォーマーと目が合った時には死を覚悟したもののだが、相手はこちらには興味が無い様子で部屋へと向き直った。それ以降、明らかに人間の存在に気付いているはずなのに他のテラフォーマーも同じ状態である。

「皆ー！ 今日忙しくて少ないみたいだけど、今回も盛り上がって——……」  
「ええーつと……」

なんだ、これは。何とか部屋まで入った四人は目を疑った。部屋の中央、開けられたスペースに立つマイクを持った少女と、その歌声。それに、テラフォーマーが夢中になっている。

いくら知能が高いといっても、テラフォーマーの思考は人間とは根本的に異なっている。こんな、あろう事か人間の一個体に熱中するなど。

いや、そもそも根本的に、人間の少女が何故このような、モグラ族も近寄らない地下深くに？

「だ、誰ー!？」

マイクによって増幅された驚きの声が、空間全体に響き渡る。同時に、その声に呼応するように、テラフォーマーが一個体と余さず、少女から四人へと視線を移す。

撤退の指示をしながら、健吾はしまったドジを踏んだか、と内心で後悔していた。

「……ここで待っていれば、来ると思っていた」

そして、健吾達の後方で、もう一つの邂逅は起こっていた。

こつこつという、薄暗い微かな電燈だけが照らす空間に響く歩行音。

「今更、私に何か用ですか」

浮浪者の男が目を向けた先に立っていたのは、コンクリートの灰と汚れの黒が染める空間に彩りを与える、和装の少女。

その瞳には冷たい敵意の色が宿り、抜かれた太刀にはこれまでどれだけの敵を切つて来たのか、生物の体液が多量に付着している。

お互いに静かな様子で、しかし少女の側は強い殺意をぶつける。

地下の奥底で、もう一つの邂逅、もう一つの戦いが、静かに始まるうとしていた。

「今ならばまだ当主様はお許しになられるそうだ、上月の少女よ」

「私には、果たさねばならない使命があります。どうか、そこをお退きください、ミルチャ様」

## 第90話 暗底の騒乱

「別にどっちでも変わらないから適当に選ぶかな」

——その答えを聞いて、この怪物は全てを懸けてでも仕留めなければならぬ、と決意したのは忘れもしない、32年前の事だった。

最初は、そのような意思など全く無かった。寧ろ、当時の私は一族の最上層部の一人たる彼と親交を深めようと思い、接触した事を覚えていた。

そこに、コネを作ろうとした等の裏があった事は否定できない。自分がいざ父から引き継ぐであろう役目、血の薄い彼らをまとめ上げ上層にその意思を伝え、上層からの意思を伝える。

それを手際よく進めるために、上層部への太いパイプを個人的な親交という形で持つておこう、そういつた考えもあった。

だが、一方で個人的な興味を惹かれたのも事実だった。基本的にあまり一族という立場として表に出る事をしない一族の中でもとりわけ特殊な、一族の者でさえごく一部を除きその所在を知らぬ上位者の一人。

一族が危機に陥った時の備えとしてその身を一族に捧げた献身者。

上位者として栄華と高い社会的地位を享受する事も無く、一族の為に暗闇に潜み続ける縁の下の功労者。

親族が何故か吐き捨てるように言った、後に私の階級では本来知る事は許されない事だったらしい彼らの使命とそれに付け加えての情報から、私は実に好意的な印象を受けた。親族は偶像崇拜、などと冗談めかして馬鹿にしていたが、とんでもない。

一族が円滑に動く為に骨を折る役割を背負った父と、その任をいざれ受け継ぐ自分と重なる部分があったからだろう。それに、自分にはその家系の血も流れているのだという。

そんな特異な分家の主が、当主との会談の為に珍しく来訪するとの



事だった。

私はまだ若かった。両親の制止を振り切り当主に嘆願し、個人的な席を設けてもらった。

そわそわしながら、用意した調度品は気に入ってもらえるだろうか、どんな方なのだろうか、普段の六割ほど増して華やかに飾られた、他ならぬ自分が飾った自宅の中庭で、私は待った。

そして彼は訪れた。

はじめまして、と軽く挨拶をして、階級としては遙かに下である自分に対し裏は無いと感じ取れるにこやかな友好の笑みを浮かべる彼に、私は想像していた通りの素晴らしい人物だ、とそれだけで考えた事を覚えていてる。

「おや、これはこれは……美味しいね、陸藍ルウランの淹れたものにも劣らないよ……ああごめんね、うちの執事の事なんだけどね、彼もお茶を淹れるのがとても上手なんだよ」

そして、会話をした。紅茶を好んでいる、と事前の情報で仕入れていたため、一族の得意だ、という人間に教わって、材料も自分で最高と思つたものを仕入れた。彼がそれを口にした時、嫌な汗が噴き出した事を思い出せる。

最良は尽くした、でも、所詮はにわか仕込みだ。造詣が深いであろう彼の口に会うものが用意できるだろうか、と。その結果を微笑みとともに伝えられた時、私は天にも昇る気分だった。

いいや、ここまではどうでもいいのだ。私が当時若く多感な少年だったのか、彼の相手に気取られない人心掌握の技能が優れていたのかについては論じる必要は無い。

私が彼との雑談の中で出した話題は、人間の精神、心と魂、自己についての一つの質問だった。

彼と彼を作り出した一族がそれらについて研究をしているという事は事前に当主から聞いていた。

私にそちらの方面の知識は無かったが、まあ触りの部分だけなら何とかなるだろうと。この簡単な部分を切り口としてご教授願おうと。専門性など特にない単純な、答えなどわかりきっている質問を、軽い気持ちで彼にしてみた。

「ふむ、難しい質問だ」

顎に手を当て少し考え込み、一度カップに口を付けた後にぽつんと、笑みを崩さずに語った彼の表情に、初めて私の内心で違和感が芽生えた。難しい質問？　これが？

「君はビュリダンのロバという話を知っているかな」

最初、難しい質問だ、という答えに彼は冗談を言っているのかと思った。次に、彼は哲学者めいた複雑な精神性と回答を持っているのだろうかと思った。

だが、彼の全てはわからないが、少なくともこの状況では、そのどちらでも無かった。

知っています、と私は動揺を押さえながら答えた。教育の中で知ったある種のたとえ話だった。

「お腹を空かせたロバが左右の分かれ道の先にそれぞれ美味しそうな藁があるのを見つけた。しかし、藁への距離、藁の量、まあ元の話には無いけど道の質による歩きにくさとかあれこれ……左右の道とその先の藁は、全く同じ条件だった」

知っているそれを改めて説明する彼の言葉は、あまり耳に入って来なかった。意味が、わからない。恨むべきは、人類の品種改良、それによって高い能力を有していた私の頭脳は平均より遥かに優秀だった事だろう。

本来であれば自分が彼にした質問とは関係が薄いだろうこの例え話を持ちだした理由、それが少しづつわかってきてしまったのだから。

「ロバは、どちらも選ばず餓死してしまった。何故だろうか？　簡単な事だ。このロバは機械の如く理性的で、かつ融通が利かなかったんだらうね。選べなかったんだ。どちらかを選ぶ事のできる必然的な

理由が無かったのだから」

彼の説明は、自分が知っている話から難しい部分を省いたそのままだった。全く同じ条件の二択、どちらか片方を選ぶ理由が見つからない。純粋な理性と合理の結果、むしろ最悪の結果が招かれてしまう。「……まあ、人間の私はそういった状況に立たされた時、選べない、という選択肢を避ける事ができるのだけど」

自分の表情が曇るのを認識し、私は少しでも顔を隠そうとカップに手をかけた。だが、すぐに離れた。手の震えは、表情よりも雄弁だろうから。

「いや、ごめんね。楽しくてつい長話をしてしまった。答えを言おう」冗談であってくれ。自分が馬鹿で、変な勘違いをしただけなんだとその答えで否定してくれ。心の中で、私は彼が紅茶に口を付けた時以上に祈った。そして。

——この男は、いずれ一族に禍根をもたらず。必ず、己の全てを懸けてでも息の根を止めるんだ

そう、決意した。

「だ、誰ー!?!」

少女がマイク越しに上げた悲鳴混じりの言葉に、同時に四人の方に一斉に向き直ったテラフォーマーの視線に、四人は同時に顔を引きつらせる。

何だこの状況はという混乱と、多数のテラフォーマーに補足されたという脅威。

しかし、即座に撤退を選ぶのもまた賢い選択とは言い難かった。身長の関係によりテラフォーマーの波で少女の姿を確認できず必死にジャンプしている美晴を横目に、四人のまとめ役である健吾は少女を観察する。

紫を主体として所々に黒を加えた派手な衣装。黒髪黒目とその顔立ちから、アジア人と思われる。容姿は整っているが、あらい可愛いな

どと冗談でも言っていていられない状況である。

大げさな動作で手をぶんぶん振り驚きであわあわしているように見えるが、だがしかし。

その瞳の奥底から、健吾が向けているのと同じ冷静な観察の目を向けている事が感じられる。

馬鹿馬鹿しい仮定である事は健吾も承知だが、少女が何故かこの地下深くに迷い込みテラフォーマーを魅了してしまうような歌を披露している一般人であるという可能性も存在した。

だが、それはその少女の一般人とは思えない観察の目で否定された。

偶発的な遭遇。恐らく、相手も状況としては同じだ。

自分と同じく、相手もこちらの状況を凶りかねている。モグラ族がここまで迷い込んだのか。それとも、自分を仕留めに来たどこかの勢力の刺客なのかと。

そして、相手は、優しさか余裕かはわからないが、仮に自分達が偶然ここに辿り着いてしまった一般人だった場合、見逃そうと考えている。もし目撃者を問答無用で消すという考え方であれば、わざわざ大慌ての演技などする理由が無い。

「……うん、少なくとも一般人じゃないみたいだね、貴方達！」

どう動くか健吾が決めた瞬間、一手先に動いたのは少女だった。混乱していた様子はぴたりと止み、左手で四人を指差す。まあそう思うよなど顔を歪める健吾。テラフォーマーの大群という時点で、一般人なら絶叫して逃げ出すか気を失うか。それとも、無謀な善人であればなんかヤバそうな生物に女の子が囲まれている！ と助けに飛び込んでくるか。

ただ静観して状況を分析するという選択肢が、自分達がテラフォーマーという生物と関わりの無い一般人であるという事を否定してしまっている。

「みんな、捕まえちゃって！ できる限り殺さないよう！」

次いでの一言で、一斉にテラフォーマーが動き出す。半数が翅を開き、もう半数は退路に回り込もうとしているのか、各々が近いトンネ

ルに向けて走り出す。

「っ！ 使うぞ！」

健吾の言葉に、四人同時にそれぞれの『薬』を打ち込み、自身に投与しながらトンネルの中へと後退する。

相手はテラフォーマーがおおよそ40。上位戦闘員が二人に非戦闘員が二人。美晴は手術ベースがベースなのである程度は戦えるだろうが、翔に関しては厳しい。

概算すると、狭いトンネルでの迎撃という地の利を生かせば何とか対処できるだろうか、という数だ。

目の前のテラフォーマーから距離を取り、健吾は己の両腕に形成された『コガシラクワガタ』の大槍を繰り出す。

喉に精密に穴を穿たれ崩れ落ちるテラフォーマーを槍に刺さったまま振るい、蓋をするように狭い通路を塞ぎ後続の接近を阻止。

それでも完全な封鎖は望めないため数匹には突破されるが、それを武と美晴が迎撃する。

今の所、戦況は小康を保っている。

だが、そう長くは持たない。じりじりと押し下げられる戦線に、健吾は焦りを覚える。

このままでは、数に押されて全滅だ。できる限り命は取らないで、と言っていたため、降伏すれば命は助かるのかもしれない。

一度はその路線を考えるが、しかし脳内で却下する。相手が何者かわからない以上は、捕まった後どうなるかの保証が無い。

もし降伏するとしても、最後の手段だ。

「翔！ 地図、見せてくれ！」

どう動く。考えていた健吾の頭にふと、ある考えが浮かぶ。

非戦闘員でテラフォーマーとの交戦も難しいため手が空いていた翔の取り出した地下水路の地図。

この辺りの巡らされたトンネルは幸運にも地図に記されていた。その配置を戦いの合間に見て、健吾は判断を迫られる。

このまま続ければ、別動隊に背後を取られて終わりだ。自分達から正面突破して少女を押さえられるだけの打撃力も無い。ただ敗北を

先延ばしにする、それならば。

「……武」

「っ、何だ！」

よし、と決意を固め、しかし納得してくれるかなと悩みながら、健吾は迎撃を続ける武に向けて

「この場、お前一人に任せていいか？」

思いつきり、無茶振りをした。

「へ!？」

「健吾、どういう……」

困惑する美晴と翔、二人の異議有りの視線を跳ね除け、武に頼み込む。

その言葉を聞き一瞬止まった武は、うーんと少し考え。

「またいつもの無茶かよ……いいだろう、やってみろ」

いたずらっ子のように、笑った。

「……しかし、当主様……ジョセフ様が、私をお許しになると」

そして、日本第二班、彼らの戦いの裏でもう一つ。

華やかな和装の少女と、対照的に浮浪者にしか見えないボロ布を纏った中年の男が向かいあう。

千古は、眼前のボロ着の男、ミルチャの先の言葉をおうむ返しする。

「ああ、そうだ。そして、私が来た理由はそれだけでは無い」

それに肯定を示すと同時にミルチャが懐から取り出したのは、ケースに入った粉末状の『薬』だった。

それを見た瞬間、千古は腰の刀に手をかける。

だが、次のミルチャの動作で、千古はそれを振り抜く事はしなかった。

「……すまなかつた……ずっと、君に謝りたかつた……私の管理が届かず、君にあのような……」  
「……」

その『薬』を、ミルチャは放り捨て、まるで蹲るように姿勢を低くする。

両手の平を、額を地に付ける謝罪。ミルチャの出身では馴染みの無い、しかし千古の出身、この日本に存在する最大限の謝罪を示す態度、土下座。

悔恨の色を深く感じさせる、苦しみながら絞り出すかのような声とその態度に、千古はあつけにとられ、その表情が警戒、敵意から困惑に変わる。

「ミルチャ様、どうか頭をお上げください。貴方が私や父のような端の人間にも温情を与えてくださっていた事、私は深く存じております。それに――」

困惑の表情のまま、千古はミルチャを助け起こそうとする。

千古がミルチャに受けた恩は大きい。一族の、たとえどれだけ血の薄い人間であろうとも見下さず接する彼は、千古や一族である父や祖父にとつても気持ちの良い相手だ。

さらに、自分が今置かれている状態が、以前のあの生活の苦痛がミルチャのせいだと言うのならば、それこそ感謝せねばならない、と彼女は思う。

その態度は、ミルチャへとはつきり伝わった。自分は恨まれていない。それに安堵を覚えないかと言われればそれは嘘だ。しかし、それ以上に、続く事が容易に予想できるからこそ。

「私は、素晴らしい主に巡り合えたのですから」

ぱあっと、まるで花が咲くかのような、幼きの混じった喜びと心からの感謝が籠った笑みを受け、ああ、残念だ、とミルチャは顔を伏せた。

「先に、告げておこう。オリヴィエ・G・ニュートンの排除は、一族の

総意である」と

それは決別の言葉だった。

何をしてでもわかり合えない、千古のオリヴィエに対する思慕、忠誠と、ミルチャの、一族の、オリヴィエに対する敵意。以前から薄々と不穏な動きが見られ、二年前に起こった事件でその背中は決定的なものだと判明した。

そして先日、当の当主様と相対した時の会話で、公的に彼は一族の敵対者となった。

一族の今解決すべき課題は多いが、だからといって野放しにしておくにはその野望は、有する技術は危険すぎる。

「そう、ですか。では私は、こう言うしか無いのでしょうか」

「……ああ」

先に続く言葉を、ミルチャはわかっている。彼女の事を良く知る、彼女の父の友人でもあったミルチャは、千古の性格をいやという程知っていた。こればかりは、予測なんてしなくてもよくわかる。

「ありがとうございます。そして、さようなら」

ヒュンと空を切る音。一族の身体能力を以てしても困難な速度の居合で振り抜かれた太刀は、寸分違わずミルチャの首を刎ねる機動で振り抜かれ、

「本当に、残念だ」

その一撃は、ミルチャが太刀の軌道に置くようにすっと上げた右腕によって止められた。

その勢いこそ殺しきれずそのまま太刀に押される形で腕はミルチャの体にぶつかりふらつくが、勢いの乗った太刀を受けたはずの右腕は、切断は愚か血すら流れず。

その腕は、金色の鱗に覆われていた。

一瞬の動揺を突き、ミルチャは廻し蹴りを千古の顔に見舞い、同時



に懐から二つ目の『薬』の容器を取り出し、それを吸引する。

全身が右腕と同じ金の鱗に覆われ、両腕の甲側の手首から関節にかけて伸びた、一對の刃。

その凶器が、元の生物では遊泳に用いるものであるとは、予想できるだろうか？

ミルチャ・フォン・ヴィンランド

αMO手術”魚類型”

——マツカサウオ

一瞬の攻防。ミルチャは素早く後方に飛び退く。廻し蹴りを受けた千古は、まるでそれを受けたのが大木であるかのように、防御をする事すらせず平然と立っていた。

いや違う、とミルチャは警戒を強める。

防御をしたのだ。しかも、『薬』を使わずに、己自身の技術で。

ミルチャが一度瞬きをして、一瞬視界が閉じ再び開いた時。

そこには、間近に迫った千古と空を薙ぐ太刀が映っていた。

刃を受け止め、次は千古の顔に向け己の腕に生成された刃を、硬質化した鱗を振るう。

目を狙った斬撃、しかし、それは太刀を持っていない右手で掴まれ、一瞬の内に勢いを失う。

次いでその股間を狙って振り上げられたその脚を防御する術をミルチャは持たなかった。

襲い来る鈍痛に、ミルチャは顔を歪める。

世の男性は目をそむけたくなる一撃であるが、嫌という程知っての通り生殖器、特に男性のものは露出した内臓と言えればわかりやすいだろうか、紛れも無い人体の急所の一つだ。

ミルチャの手術ベースである『マツカサウオ』は魚類でも屈指の強度を誇る鱗を有する生物であり、MOベースとしてのその刃物すら通さぬ防御は生殖器でも例外では無い。

しかし、それでもこれだけのダメージを受けてしまうのだ。よろめいたミルチャが一時後退のため繰り出した打撃を、顔面への拳打を千古は再び防御の姿勢を見せずにそのまま受ける。

紛れも無い、直撃。だが、千古が直撃の瞬間ほんの少しだけ後ろに引いただけで、その攻撃はほぼ全ての勢いが止まり無力と化する。

ミルチャは、その絡繰を知っていた。上月家、千古や父と懇意にしていた彼は、己もそれを習得しようとしたが、武練に極端に偏ったその教育とニュートンの一族である彼でさえ顔を引きつらせる程の特訓の末によく身に着けられるものと聞き、諦めた。

『上月流』。それは、古い武家の家系であり、その力強さを見初められニュートンの血を受けた彼らが編み出した、一族の血とそれに付随するある能力を極めた武術、辛うじて近いものを挙げるとすれば合気道に近い技能だ。

『完全なボディ・イメージ』『空間認知能』。彼ら彼女ら、ニュートン一族は、己自身の体を把握しそれを動かす事において他の人間の追従を許さない。

傾き、運動方向、加速度を感知する前庭感覚。筋肉の力の入れ加減と向きを司る固有覚。自分の輪郭や周囲の物体との相対的な感覚を知る触覚。

通常の人間はこれらが十分に発達しておらず、『思った通りに動く』には長い訓練を必要とする。

だが、ニュートン一族彼らは、才能と訓練により、完全なそれを持っている。なるほど確かに便利な技能だ。

……だが、それだけか？

そう呟いたのが、数代前の上月家の当主だった。

『自身に加えられる攻撃は、全てエネルギーの流れである』

その理念を始めとし、完全なボディ・イメージをさらに発展させた武術を編み出した。

己が身に当たる攻撃の角度、威力の大きさ、どの部位にどれだけの衝撃が加わったか。

それらを全て高速の反射、知覚と本能の複合体により認識し、自身の身に加えられたエネルギーを筋肉の力加減と最低限の動きにより全身に拡散させる、もしくは外部に受け流し受けるダメージを極限する。

無論、目まぐるしく状況の変わる戦いで常にそれを行うのは並大抵の事では無い。

だが、彼らは血の滲む、を通り越し血の噴き出す修練と理論構築によりそれを完成させた。

上月家の持つ血は薄い。本家、ニュートン家と遠縁な新界家のさらに分家という所から、それは伺えるだろう。

……だが、彼らの編み出したこの力は、その結晶たる今ミルチャと相対するこの少女は。

——武練という一点において、ジョセフ・G・ニュートン人類の頂点たる個体にさえ肉薄する。

千古の拳が、ミルチャの腹を打つ。単純な打撃こそその強固な鱗の防御により通じないが、内蔵に浸透する衝撃が、徐々にその体の機能を狂わせていく。

「……君に、伝えなければならぬ事がある」

傍から見ればその体には傷一つついていない、しかし荒く息を付きながら、ミルチャは手を止め、千古に語り掛ける。

それは、ミルチャが最後まで千古に伝えたくない情報だった。

千古が素直に此方側に帰ってきてくれるならば。何かの間違いで、自分が千古に勝ち、身柄を拘束する、もしくは最期を与える事になつたならば。いずれにせよ、これを伝える事は憚られた。

だが、ここまで追い込まれてしまったなら、これを伝えるしか無いのだ。命乞いがしたいわけではないが、自分が死ぬ前に、せめてこの残酷な真実を伝えたい。

……いいや、無意味な言い訳だ、とミルチャは自嘲する。これを言えば、千古のオリヴィエへの忠誠は揺らぎ、自身の命が救われる可能性が格段に高まる。それは確かな事なのだから。

ああ、彼女はまた裏切られるのだ。彼女を好き勝手に利用した一族に、それを止められなかった私に、そして、ようやく見つけられた、忠を誓えると思つた主に。

なんと救いの無い事だろうか。だが、それを知らないままで、奴に従いつけるよりは。

最後まで、彼女にそれを伝える決意ははつきりと固まらなかつたが、だが、と。

「奴の新たな世界が築かれる時に、君や君の他の仲間達の命は他ならぬ奴の手で奪われる事になる」

その真実を、口にした。

「んー……」

少女は、戦果の報告を待っていた。具体的には、テラフオーマーが唐突な乱入者、彼らをひつとらえ自分に『献上』する時をだ。

こういう時に、いつも彼女はもどかしい気分になる。皆が頑張っているのに、自分一人、タネを巻いたら後は待つだけなんて。

自分が今従っている人間はそんな事は気にするな、と言つてくれたが。

「ねー、どう思うかなあ」

彼女のライブホールと呼べるこの大部屋の頭上、ぽつかり空いた縦穴に向けて、彼女は暇を持って余すように、だがどこか心配そうに話しかけた。

答えは、返ってこなかった。

「そこまでだぜお嬢ちゃん!!」

「ちよつ、よく見えな……ぎゃふつ!」

正確には、彼女が望んでいない明後日の方向から、返事ですらない何か。

それに反応して彼女が声の方向を向く。それは、部屋の天井に斜め方向に空いた太いパイプ状の水路だった。恐らく、洪水時に大部屋に水を流し込むためのものだろう。

しかし、そこには誰もいない。

彼女の反射能力はその声の主が既にそこから飛び降り着地した事を把握するには少し遅かった。

視線を移したそこには、先ほどの青年が一人と、

「……えっと」

……顔面から着地したのかべちやりと床に倒れている少女が一人。まさか、モロに水路を通って奇襲をかけてくるとは。だが、状況を把握した少女の周囲を守るものはいない。テラフォーマーは全て外に出している。

青年、健吾の突撃を防ぐ事は――

「ごめんヘルプ!」

瞬間、竪穴から人間が一人、流星の如く急落下し着地した。

緑を基調とした、しかし光を反射し様々な色を放つ体皮に、両腕が鎌に変質した、少女と同じくらいであろう少年。

流石に護衛はいるか、と新手を認識した健吾は即座に対応し、その腕の槍を少年に向け振るうが、しかし。

「なっ!？」

「悪いが死んでもらう」

直後、少年は健吾の大槍の懐まで到達していた。その鋸刃の付いた鎌が、健吾の首に向けて振るわれ。

「……ってあれ？ ミユちゃん？ こんな所で何してるんですか!」

その刃は、首を狩る直前でぴたりと止まった。

健吾と少年、二人の視線は、それぞれの味方の方向へと向く。

「わ、私貴方の事なんて知らないアル、ミユなんて日本人な名前じゃないネー」

起き上がり、少女の方を見て騒ぐ美晴。一方の少女は。

露骨に動揺していた。冷や汗が額からだらだら流れ、必死に美晴から視線を外している。

「えっ……美晴、友達か何か?」

「知り合いなのか、美友?」メイユウ

男勢は何やら状況がはつきりとわかっていない様子である。

健吾と少年は互いに首を傾げ、女子勢の推移を待つ。

「ほらやつぱりミュちゃんです! 非戦闘員と一般職員の戦いに参加できない同盟を結んだ仲じゃないですか!」

「ちがうもん! 知らないもん! ほら、ユルキ君も何か言っつてやっつてよ! 知らない人ですつて!」

「いや、俺が知らないのはそりゃそうなんだが」

混乱してわけのわからない事をわたわたと言いだす少女、美友と至極全うな答えを返す少年、ユルキ。

……とりあえず、状況が収まりそうなのはこっちか、と健吾は判断し。

「ええと、とりあえず初めまして。俺、重森健吾。U—N—S—A第二支部の所属で……調査に来たんよ」

槍が邪魔で手は差し出せないが、代わりとして槍の側面でこん、と少年の鎌に軽く振れる健吾。

少年もまた、敵意が無い事を認識したのか、一度頭を下げる。

「これは失礼を。U—N—S—A本部補助人員、ユルキ・ハツカライネンと申します。彼女は同じく本部補助人員の秦美優。まさか同じ組織の人間とは思わず」

「いや、こちらこそ……」

男子二人が紳士的な挨拶を交わす中、女子二人は未だぎやいぎやいと言い争っている。こちらの会話は聞こえていないようだ。一応話纏まったから、という空気になったその時。

「だから違うんだって！ 私第七特務所属だもん！ あなたが言うミユちゃんとはやらとは違う所属だよ！」

「へえーん！ 第七特務う？ だったら戦えるわけないじゃないですか！ はい論破！」

レベルの低い言い争いを止めようとした健吾とユルキは、同時に別々の意味で凍り付く。

「……美友、お前は勘違いしている。我々は第七特務では無く」

ユルキが少し目を泳がせながら、美友を窺める。だが。

「第七特務ってーと俊輝の就職先だよな……何でてめえらみたいな腕利きのMO手術受けた連中がいる？」

健吾の考えを止めるには、それは到底至らなかった。

## 第91話 暗闇に剣光る

「どうぞ座ってください」

「コイツはどうも、ぐう丁寧」

穏やかでは無い内心ながら丁寧<sup>テイジヤウ</sup>に返答をしつつ、健吾は敷かれた座布団に正座する。

対面の位置に座ったユルキと美友<sup>メイユウ</sup>に、一度は解けた疑惑の目線を再度向けつつ、待つ事十分程。

「よう健吾、美春、何コレ？」

「無事でよかった」

縄で乱雑に縛られた翔と武が、テラフォーマーによって運ばれてきた。

最初に言っていた通り、命を奪うつもりはあまり無かったらしい。抵抗叶わず二人は拘束されてしまったようだが、生きているようで安心だとほっとする健吾。

「んじゃあ、話を聞かせてもらおうか」

「ちよつと聞き捨てならない事聞いちゃいましたからね、ミュちゃん？」

状況から言って、現在不利なのは第二班の側である。戻って来たテラフォーマーに囲まれ、先の攻防を見るに美友はともかくユルキは一瞬の不意打ちで無力化するのは困難な戦闘技能を有している。

しかし、健吾と美晴の怒りの籠った表情に、完全に気圧されていた。状況は不利であるとはいえ、だから大人しくしていよう、とはならないそのキャパシティを超過してしまった感情の荒ぶり。

「二人は第七特務なんだよな？　まず、聞かせてくれ。お前らの仕事は、何だ」

「……裏社会のMO手術の抹殺や調査……MO手術に関係した表沙汰に出来ない事例の処理です」



答えを少し考えた後、ユルキはそれを語る。嘘偽りの何もない、彼の所属、そのものの役割を。

「っ……」

ぎり、と健吾が歯を噛みしめる。翔と武は先ほどのやり取りを聞いていなかったため何が起こっているのか知らされておらず状況を把握しきれていなかったが、第七特務というワードから知り合いが頭に浮かび、次いでその本人が一度たりとも語らなかつた職務内容に目を見開く。

「山野俊輝、という人間に心当たりは？」

健吾が口を開こうとした一歩前に、美晴が次の質問を投げかける。それは、健吾の考えていたものと全く同じだった。

まだだ、まだ可能性はある。表向きの広報という業務が存在する以上、そちらの担当として回されている可能性も残されている。

いいや、それはただの願望なのだろう。火星という対人におけるM O手術の実戦を潜り抜けた人間をわざわざ裏方仕事に回すなど、普通では考えられないのだから。

「……ごめんね、仕事が仕事だから、答えられません」

「構わねえよ、それが答えみたいなものだ」

申し訳なさそうに言う美友。

そんなアホみたいな都合のいい話はねえよな。健吾の呟きは、第二班の全員の内心を表していた。

「彼は自分達の指揮官、支部の長である部隊長です」

「ちよっユルキ君!？」

彼女ら第七特務としては黙秘するしかない内容。

しかし、直後ユルキの口からその事実が語られた。

美友も予想外だったのか、驚いた様子でユルキの方へ首を向ける。「お伝えした方が、我々の事も多少は信用いただけるかと思いましたが、何やってそうになったんだよアイツ、と内心で思いながらも、健吾はユルキの言葉に一理はあるな、と頷く。

これまで隠し通そうとしていた事から、こちらを騙すための嘘であ

るという可能性は低い。

お前の友人が自分たちの上司だ。このような状況で殺意や害意が無い事を証明するには丁度いい証拠と言えるのかもしれない。

「……ああ、次の質も……」

「ーさん！ 健吾さん!!」

恐らく、武と翔と美晴はこの事実を聞いて穏やかではいられないだろう。だが現状こちらが圧倒的な不利である以上、突っかかりすぎるのは最悪の結果を招きかねない。

もしそうなれば、止めなければ。仮にとはいえ、今のまとめ役は自分だ。皆の命を預かっている以上、突きつけられた事実がいくら感情を揺り動かすものであったとしても、落ち着いて対処しなければ。

そこまで考え、自身に切迫した調子の声がかけられている事に健吾はようやく気付いた。

「何だよ、美晴」

「……手」

言われて初めて健吾は気付く。

……自身の握りしめた左手の爪が手のひらに食い込み、血が流れている事に。

ー一番落ち着けてねえのは誰なんだよ。

内心で吐き捨て、乱暴に自身の衣服で血を拭う。

健吾にしてみれば不覚であるが、皆を代表した怒りの表出、それは狙ったものでは無いにしろ第二班の他の三人を落ち着かせる事に繋がっていた。

「ああ、悪い……次の質問だ、ここで何をやっている？」

友人たちと待たせている相手に同時に短く謝り、健吾は話を進める。

少なくとも今この瞬間敵ではない事は分かった。最低限の信用すべき材料もある。

だが、その答えによつては矛を交えなければならない可能性も再び浮上してくる。

アメリカの機関であるU—N—A—S—A、それも本部に所属するMO能力者が一体日本で何をやっているのか。

「ここまで来れば隠す必要も無いよね、ユルキ君」

「ああ。我々の任務は、ここに潜んでいるテラフォーマーの行動調査です」

美友の投げかけで、ユルキが回答する。

二人の様子を見て、健吾は二人の関係性はどちらが上位というわけでもないと感じ取る。

美友の動揺からの失言や俊輝が隊長であるという情報こそユルキが自己判断で語った、という部分はあるものの、それ以外の、落ち着いた状態であれば基本的には互いに話し合い、互いが納得した形で情報を出してきている。

そして、特務部隊というには若干空気は軽い。

裏社会を主な仕事場とする戦闘部隊。心を殺した冷酷な戦闘兵器の集まりかと思っていたが、目の前の二人からはそのイメージは無い。それだけが、少しだけ健吾の友人への心配を和らげる。

「何だ、俺らと一緒か」

ここまでで、両陣営ともに相手への不信はだいぶ和らいでいた。両陣営、というか、ほぼ同じ陣営に属している仲間と言つていい関係だった、という事もあるのかもしれない。

そこからは、一方的な質問ではなく両者の情報交換だった。

翔と武の縄は解かれ、健吾を主として、ここに至るまでの経緯を語る。

この下水道でテラフォーマーの姿が見られる。どのような規模なのか、その被害状況を知る、結果によってはそれを駆除するといった任務を負った裏アネックス日本第二班。

一方の第七特務は少し事情が異なっていた。

日本の地下でテラフォーマーが活動しているという情報が入った。ここまでは一緒だ。だが、彼らに割り振られ

た任務は、駆除といった最終段階に至るのではなくテラフォーマー

の生態調査だった。

活動圏がどのくらいで、どのような活動をしているのか。現地人にはどのくらい認知されているのか。

「というわけで、テラフォーマーの通常活動を害する事なく行動を支配できる彼女と、その護衛として自分が派遣されたというわけです」  
行動を支配。ちらりと横を見れば、そこには虚ろな様子のテラフォーマー。

だが、ユルキの言葉によれば、美友の能力は正確には『支配』というよりは『依存させる』に近いらしい。

先ほど、美友にテラフォーマーが貢物か何かのように物品を、食料を捧げるのを見た。

テラフォーマーの個体としての普段の活動はそのままに、思考の一部を鈍化させ、あるいは変質させ、美友に尽くさせる。ある意味普通に行動を操る、よりも酷いじゃねえか、と翔はその説明に頬を引き攣らせた。

「ええ。彼らの美友への捧げ物により、テラフォーマーが地上に出て畑から野菜を盗んでいる、何らかの形で惣菜のような加工された食料まで入手している、というところまでわかっています」

「ははあ……」

ユルキは軽く言うが、それはここ日本に生きる健吾からすれば無視できない新情報だった。自分達はあくまでも戦闘要員でしかない。調査に向けた能力を有する人間がいる上このような過酷な任務に適性を持つあちら側の方が既に得ている情報は多いと思っていたが、これまで差があるか、と。

さらには、人間の行動圏に侵入してきているのかと。

「何かテラフォーマーの活動がわかる資料などはお持ちではないでしょうか」

「言ってもなー、俺らは今日が調査初日だしなあ」

何かあったつけ、と翔に目配せする健吾。それを受けて翔は頷き、自身のバッグを探る。一応携帯端末内のデータだけでは不安だったため印刷して持ってきた地下の地図。健吾は首を横に振る。この程度の資料、相手は既に持っているだろう。一応確認のためユルキの方を見るが、その通りだ、とでも言いたげにうんうんと頷いていた。

次に、撮影用のカメラ。何枚か写真は撮っているが、特にこれといって有用なものはない。

「後はこんなもんしか無いな」

お手上げ、という調子で、翔はバッグの奥から本を取り出す。先ほど、露店で店番の少年から情報を聞き出すために買った本のようなもの。

これが日本のテラフォーマー全集！ という内容ならばともかく、などと考え、その中身を第七特務の二人にも見える形で大雑把にぱらとめくる。

それは、翔にとっては隠し事などしていない、これは関係無い品だ、という事を第七特務に示すための軽い行動だった。

中に文章が書かれている事は購入の際に少しだけ確認していたが、それ以上の何も知らなかった。

「……失礼、それをよく見せてもらっても？」

だが、それを見たユルキが、怪訝そうな表情で求めた。

ただの本。の、はずなのだが。

「もちろん。でも、これ露店で買った奴で多分ゴミの中から——」

そこまで言って、翔は健吾と武と一緒にユルキが捲るそれを覗きこむ。

その内容は英語で書かれていた。

三人は裏アネックス計画の事もあり英語を一通りは読む事ができるが、随分と読みにくい文章だ。

回りくどい表現が多い口語調、そのせいかもしれないが、それを差し引いても、どうにも読み辛い。

何というか、現代文法に訳されていない古典作品を読んでいるような、そんな調子なのだ。

肝心の内容は雑多なものだった。誰かの日常生活を本人の視点から描いたような、そんな調子だ。時々ユルキがページを開いてすぐ飛ばすため、全てがそうだとわからないが。

「美友」

「うん」

一通りページを捲った後、第七特務の二人は互いに目配せをする。「いや失礼。任務とは全く関係の無いところで熱くなってしまいました。……実はこの本、歴史的にとっても価値がある作品なのです。内容自体は既に文庫として広く出回っているものですが、これは最初期に印刷されたごく少数のもので」

「お、おう」

とんでもないお宝だったようだ。会ってから基本的にクールな調子のユルキが熱の籠った口調で語るそれに、少しだけ気圧されてしまう。

……機密部隊が、それでいいのか？　と思わないでもない健吾である。

「是非、譲っていただきたい。こちらの、日本のテラフォーマーについてU—N—A—S—A本部が握っている情報と、交換で」

最初から、互いに情報を交換するつもりだった。だが、ユルキが懐から取り出したメモリーチップに、健吾の目が吸い寄せられる。

相手は、この任務以上の何かの情報を、交換に出すつもりなのだ。よくわからない本が実はお宝で、重要情報が手に入る。わらしべ長者的なアレなのか、と健吾は苦笑いするが、しかし。

「ダメだ、渡せない」

そう、強い口調で言ったのは、これまで沈黙を保っていた武だった。ユルキと美友を睨み付け、普段の彼からは想像できない素早い動きで、ユルキの手から本を奪おうとし。

「やはり、な」

瞬間、ユルキはそれを渡すまいと背後に飛び退いた。それに、武は想像通り、と短く言葉を吐く。

確信があるわけでは無かった。彼らが裏の特殊部隊とはいえ、マニア垂涎のアイテムを目にして任務の裏でこっそりと、などという不真面目さを見せてしまった、という可能性もあった。

だから、カマをかけた。

その本が、ただけなのですかそれは残念、貴方も古書マニアでしたか、程度の穏やかさで第二班に返却する程度の、価値があるからとても欲しい、程度のものなのか。

それとも、返すわけにはいかない、殺してでも奪い取る、というレベルの、同組織の部隊と敵対してでも、その詳細を伏せたまま手に入りたいものなのか。

結果は、後者だった。

空気がぴりりと剣呑を纏う。ユルキと美友が注射器を取り出し、周囲のテラフォーマーがざわめき出す。

「……それはくれてやるよ、ドンパチしても勝ち目はねえしな。でも、それが本当は何なのか、教えてくれ」

「……できません。貴方達には教えられない。隊長の命令だ、と言えれば、納得してくれますか」

両者そのままにらみ合う。健吾の言う勝ち目は無い。それは確かな事だ。数的な有利で言えば、一瞬の攻防であれば分は第二班にある。健吾と武と美晴、何とか戦闘がこなせる三人が同時に仕掛ければ、ユルキ一人に勝利を収めるのは可能だろう。だが、それは一瞬の攻防の話だ。すぐに周囲のテラフォーマーが参戦し、その優位は崩れ去る。

そして、先の攻防から察するに、優位こそ取る事ができても一瞬で戦闘能力を奪える程ユルキは楽な相手では無い。裏アネックスの幹部搭乗員……というレベルにまでは達していないが、それでも上位ランカーである自分よりは強いだろうと推測した。

そして、交戦に対する不安は第七特務とて同じであった。ユルキの能力は特殊なものでは無いシンプルなものだ。速度と腕の鎌。近接戦闘、1対1においては強力なものであり、数人相手でも並みの兵士であれば一瞬で制圧する自信はあるものの、隊長の語る地獄、火星から帰ってきた実戦経験のある人間複数を相手にして、テラフォーマー達が交戦を始めるまで持たせる事ができるか。

もし美友が戦闘不能となり能力を行使できなくなれば、テラフォーマーの群れは制御不能となり第七特務側にも牙を剥くだろう。

一瞬の攻防で美友を確実に守り通せる確証は、無い。

互いが互いに仕掛けられない戦い。その均衡の崩れは、唐突だった。

現在のユルキとその背後に庇われた美友の立ち位置は、先の第二班とは逆だった。

つまり、第二班が最初に美友の姿を見た時の侵入口は、現在第七特務の二人の背後にある。

「!？」

瞬間、その侵入口を埋めていたテラフォーマーが、爆発した。

否、爆発でもしたかのように、十数匹のテラフォーマーが一瞬で解体され、その身の断片が宙に打ち上げられ、地にばら撒かれ、体液を散らせた。

嵐が通り過ぎるかのような苛烈さで、彗星の如き速度で、何かが一直線の軌道で、トンネルを抜ける。道筋にあるテラフォーマーの死という形で軌道を示すそれは、猛然と美友に向けて迫る。

「避けるー！」

「くっ……美友ー！」

その襲来に反応できた健吾とユルキが、同時に叫び、それぞれの行



動を取る。

ユルキが自身に『薬』を用いると同時に美友を引つ張りその反動で互いの位置を入れ替え、本を健吾に向けて投げ渡す。振り回され、投げ飛ばされるような形となった美友を健吾が受け止める。

瞬間、美友が0.5秒足らず前に立っていた場所の、首の位置を狙って、銀の刃が振るわれる。

屈んだユルキはそれを間一髪で避け、宙を舞うテラフォーマーの残骸の向こう側に見える人影を貫かんとする。

だが、一手遅かった。先に健吾にしたように、一瞬でユルキの鎌の間合いの内に、その人影は侵入してきた。

速度が自慢の手術ベースだ、ユルキは回避を試みる。

「ぐあっ……い！」

……が。ユルキが間合いに入った人影に反応するより速くその拳が胸を打ち、鈍い音と共に体を吹き飛ばした。

「……さてはて、やけにゴキブリが集まっていると思ったら」

一瞬の激しい攻防。よろめきながら起き上がるユルキとは対照的に、いつそ優美と言える落ち着きたいで立ちで、襲撃者は振るった太刀を鞘に納め、佇む。

擬音にしてみればにこり、といった風な、整った容貌と本人の纏う気品のある雰囲気合わさった、ここが戦場でなければ、とても魅力的な様子で。その瞳の奥に、燃え盛る氷と言えるような激情と冷徹さを混在させた眼光で。

「こんな所で夜遊びをしているは、師範様がお嘆きになりますよ、健吾さん？」

和装の少女は、顔を引き攣らせる健吾に向けて、笑みを浮かべた。

## 第92話 月下氷刃

「……」

つうと汗が頬を伝い、顔の線に沿って顎に流れ、落ちる。

どうする。考えろ。健吾は動揺の中でも務めて冷静を保とうとする。何故彼女がここにいるのかを論ずるには、状況は切迫しすぎている。

「運命とは、酷いものですね。知っていましたけど」

かみづき

上月千古。健吾の実家の剣術道場の師範代で、現在は健吾達第二班はまだ詳細を知らぬU—N—A—S—Aを襲撃してきた敵勢力に身を置いている少女。そして、かつての日本第二班の幹部搭乗員候補。

健吾に視線を向ける千古。その笑顔に少しだけ悲し気な色が混じる。

「……あまり、こちらの世界に首を突っ込むのは、オススメしません」その言葉は、先の襲撃のような激しい調子では無かった。

親が子を心配するかのような、心配そうな、優しい気配すらある。

……だが。

「っー」

瞬間、千古の姿がぶれる。一瞬でユルキの眼前まで間合いを詰め、腰の太刀に手をかけ、それを振り抜かんとする。

「待ってくれ師範代！」

それはユルキの前に立ちふさがり、何とか目視できたその手を押さえた健吾によって止められた。

健吾が千古の反射速度を上回ったわけでは無い。かつて幾度となくその剣術を見ていたが故の、予測が偶然当たった形である。

やはりだ。本気で来れば自分は今死んでいる。何もしなければ自分達は助かる。千古は第二班の自分達まで殺そうとはしていない。

でも、第七特務は違う。半ば巻き込まれる形だった自分達とは違い、恐らくは明確な敵対関係にある。そう健吾は考える。

どうすべきか。第七特務の二人を差し出してでも、この場を。その選択肢も、場合によっては。

「私は、探し物をしにここに来ています。本来ならばそれ以外をするべきでは無いのですが」

太刀の間合いの内である健吾から距離を取る事も無く、そのままの状態で千古は語る。

ここまで距離を詰められても勝てる、という確信があるのか、健吾が攻撃を仕掛けてはこないと考えているのか。

「……ですが。我が主を嗅ぎまわる犬を、見つけてしまったもので」瞬間、千古の瞳がすつと冷たくなる。その視線は健吾から外れ、ユルキに、次いで美友に。

「ああ、死ぬべきです。我が主に盾付かんとする者は、悉く。何故健吾さんは、その邪魔を？」

これが師範代の本来の素なのか。いいや、と健吾は自身の頭の中に浮かんだその考えを否定する。

何か、機嫌が悪い？ 健吾の知る限りでは、気分を害している時の彼女の様子に近い。

言葉は慎重に選ぶべきだ。

自分だけじゃなく、皆の命も危うい。

「もしかして、健吾さん達も彼らの仲間入りをしてしまったのですか？」

「違い、ます」

正確には友人の一人がです、などとは口が裂けても言えない。

まずい流れだこれは。

「では、私の邪魔、しないでくださいね？」

その言葉を言い終わる前に、千古が動き出す。

健吾の横をすり抜け、美友メイユウに肉薄する。

ユルキが迎撃のため鎌でその姿を捉えんとするが、あと一歩という所で身を振られ、回避される。

踏み込んだ千古はその刃を、反応すらできていない美友に再び振るおうとし。

「だめえ！」

それは再び、美友が突き飛ばされるといふ形で空を切った。

「……美晴さん」

困惑の目で美晴を見る千古。

だが、表情とは裏腹に、剣を収める事はせず、再び振ろうと構えている状態である。

「……あ、ありがと……でも」

助けられた当の美友は、自分の命が潰える所だったと認識し顔を青くしながら美晴に礼を言う。それは、今この状況で自分を庇いなどすればどうなるのか、重々承知しているからだ。

それに答える事はせず、ダイブする勢いで突き飛ばしたため倒れこんだ状態から必死に起き上がり美晴は千古の前に立つ。

体は震え、目には涙が浮かぶ。

美晴は非戦闘員だ。手術ベースこそ戦闘に適したものであるが、だが真正面からの戦いをこなすには限界がある。それも、このような強者を前にしてしまえば。

「……ごめんなさい、ごめんなさい！ 友達、なんです！」

その謝罪は、健吾と千古に同時に向けられたものだった。

何を、やっているんだ。健吾は顔を青くしながら、美晴を見る。同時に千古への言い訳の言葉を考える。

違うんです、こいつバカなんです！ 違う。許してやってください

！ これも違う。

少しだけ、考えた末に。

「翔、武イ！」

「応！」

健吾は、自分が考え得る限り、最悪の選択肢を取った。

美晴を切り捨てようとする千古の体に、変態した武の巨体が激突する。同時に、翔の拳に形成された齧歯類の歯が、千古の頭を打つ。

「よく言ったぞ美晴！ その子連れて撤退しろ！」

ああ、何て愚かなんだ。叫ぶように声を上げ、泣き笑いを浮かべながら、健吾は千古へ向けて走り出す。

だが、それでいい。

自分が美晴の立ち位置で、千古の眼前に、班員の皆の誰でも、立っていたら。

自分はきつと、美晴と同じ選択をしようだろう。

何が第七特務だ。敵対していたから最悪見捨てりや大丈夫、だ。

俺達の一人の、友達だったじゃないか。

俺達の一人の、可愛がっている……かは知らないが、大切な部下じゃねえか。

俺達の隊長は、俺の憧れるあの人は、やべえ敵だからって、俺達を、よその班員を、見捨てるような人だったか？

武と翔はすぐに俺の意図を汲み取ってくれた。俺がそう言うところかっていたからこそ、たぶん準備をされていて素早く応じてくれた。

美晴は怪しい連中に与していた友達の為に命を張った。

ああ、何だ。覚悟ができてなかったの、俺だけかよ。

さあ、行こう。自分が一番、千古の動きに慣れている。速度でも反射でも体術でも敵わないが、対応する事ができる。健吾は気を引き締め。

「ユルキ！ カバー任せたぞ！ 師範代の速さに何とか食いつけんのお前だけだ！」

自分の命令を聞いてくれるかはさておき言葉を飛ばしながら、健吾は変態により得た長槍を構え千古へと躍りかかる。

齢にして11。年齢相応の小さな体。だが、油断などできるはずもない。隙など存在しない。

昔に一度、模擬戦でボコボコにされた時に聞いた。こんなに若いのに何でこんなに強いのか。

彼女は笑いながら、でも少しだけ嘆くように、言っていた。

私が特別なのではなく、生まれた家と流れる血が特別なのです、と。

今ならその意味がよくわかる。『ニュートンの一族』。人間の頂点を極めたその一角に身を置く超越者。

だが、と。

「覚悟してくれ、師範代！」

手術ベースの重い鎧も合わさった武の突撃と形成された歯で威力が加算された硬い翔の拳。生身、それも小柄な少女の体でそれを受け、無事であるはずが無い。健吾の一撃は、オーバーキルと言える。……普通ならば。

知っていた。相手が、普通の人間とは違う事を。

知らずとも、状況の不自然さから理解できる。大重量の突撃を受けて、体勢一つ崩していないのだから。

代わりに、足元のコンクリートにヒビが入っている。

単純な物理攻撃は効果が薄い。毒なら通じるかもしれないが、残念ながらこの場にはその系統の能力はいない。美友の能力ならばもしかしたら、であるが、それを与えられる程相手は鈍くない。

「ラァー！」

健吾は槍を、千古の脇腹に向けて突き出す。武の首を刎ねんとしていた千古は、健吾の攻撃を見て身を翻し離脱する。

やはりだ。やろうと思えば避けられただろうに、攻撃後の体勢が崩れた隙を狙って刈り取るためにわざと、攻撃を受けていた。

「……貴方達の意味はよくわかりました。改めて、この前はありがとうございました」

行儀よく、千古は武と翔、健吾と撤退していく美晴に向けて頭を下げる。

「打算が無かった、というわけではありませんでしたが……とても楽しかったです。これは、本心から」

先ほどから千古はずっと、悲しそうな表情をしていた。

一度宴会の席を共にした仲であるが、千古はとても楽しそうにしてきた事を健吾は思い出す。

きっとそれは、彼女の言葉通り偽りでは無いのだろう。

千古の私生活は謎に包まれているが、恐らく厳格な実家で、遊ぶ、ハメを外して楽しむ、という機会も無かったのかもしれない。

だが、それでも千古は自身の主の為に、邪魔をするならばそんな自

分達を始末する事を厭わない、と。

それはきつと、自分達が千古に挑んでまで友人を、仲間を守らんとするそれと同じなのだろう。そう考えると納得ができる、と健吾は内心で悲し気に理解する。

「でも、もうお終い、です。きつと、最期の一瞬まで皆さんの事は忘れません」

未練を振り切るように、自分に言い聞かせるように呟き、千古は懐から『薬』を取り出し自身に施す。

そして、変化が訪れる。

肌が薄く暗い黄緑色へ変化し、腕の数力所にまるで区切るかのよう  
に節のようなものが形成される。

顕著な変質は、その髪に表れた。美しい、黒の長い髪が、まるで波  
が広がるかのようにその根本から黄色や金がかかった白色へと変  
わっていく。

同時にそれと呼応するように、体内から人工の光が漏れ出し、光源  
に乏しい地下の空間をぼんやりと照らす。

……ここからだ。健吾は、改めて気を引き締める。

裏アネックス計画。その幹部搭乗員候補、正確には一時的には幹部  
搭乗員として就任していた千古の、その能力。健吾はそれを知ってい  
た。当時は健吾に対し隠す理由も無い、正しいものであるはずだ。

だが。それは、共にU—N—A—S—Aに訪れた時の千古の能力だ。正直  
な所、強い生物とは思えなかった。他の幹部搭乗員の僅かな戦闘資料  
で見たような、広域を一瞬で殲滅するようなものや、際立った近接戦  
闘能力が得られるようなものでは無い。

多少の再生能力と、多少の頑丈さ。それだけ。裏アネックスのラン  
キング最上位である幹部搭乗員と肩を並べているのは、千古の素体と  
しての高い戦闘能力のおかげなのだ、そう思っていた。

ならば考えられるのは、さらに新たな手術ベースを得ている。……  
もしくは、体内で光を放つもの。

αMO手術に加えて得られる、同系列の能力。どちらかと言えば、有用なのは直接的な戦闘能力というよりは毒を持つ種が多い『型』である。近接戦闘能力に加え、搦め手にも対応しているか。

それとも、体内で光を放っているもの。それは、幹部搭乗員の一部に与えられている、体内内蔵型の専用装備と同じものと思われる。

専用装備を与えられて、それを披露する事無く千古はU—N—A—S—Aを去った。

ならば、これによって元の特性が強化されている、と考えられるが。……強化してどうにかなるような生物とも思えなかった。

そこまで思案した時、千古が動く。だが、それは激しい近接戦のものでは無い。ただ、右手を前に出し、それを、すうと空を手刀で切るかのように、地面と水平にスライドしようとする――

「伏せろ!!」

健吾がそこで危険を察する事ができ叫んだのは、最大の幸運としか言いようが無かった。

その場の全員が、健吾の言葉を聞きいれる、もしくは同等の危険を察せる人間だった事は、幸いである。

瞬間、とても小さなひゅん、という音ともに。空間が切り裂かれる。千古が振るった手。その軌道の延長線上、能力の射程範囲に不幸にも立っていたテラフォーマーが、5匹同時に胸を境に上下に切断される。

「……ハハ、何だ、これ」

身を躲した健吾が、茫然と呟く。衝撃波？ 鎌鼬かまいたち？ 何だ、コレは。飛ぶ斬撃なんて、マンガの世界だけで十分――

などと内心で冗談を言っている暇など存在せず、千古が駆けだす。子どもの遊びのように、手刀を縦に、その延長線上にユルキを捉え、振り下ろす。

先の一撃を見ていたユルキはそれに機敏に反応し離脱するが、それを逃さない、というように今度は千古は軽く砂でもかけようとするか



のように足を狭い範囲で振る。

「くっ！」

姿勢が崩れながらも何とかジャンプしてそれを避けるが、恐らく次は無い。

着地してふらついたユルキに、再び大振りの手が、異次元から襲来するが如き不可視の刃が襲い来る。

——考えろ。

健吾は、来る薙ぎ払いに備え姿勢を低くしながら、思案する。

目に見えない攻撃の正体。相手の手術ベース。専用装備。できる事は、何だ。

それから、この攻撃が何であるのか推測する。

ああでもない、こうでもない。生身の技能、では勿論無い。

専用装備を単純な兵器として使っているわけでもない。

専用装備のみで機能しているのなら、変態をする理由が無い。

変態。手術ベース。強くない。……。……。

「くっ、そっ！」

健吾が行ったのは、槍を振り上げる事だった。ユルキの胴体を割断せんと振るわれた手、その延長線上全てを両断する、不可視の絶刃。見えないそれを、無謀にも槍でかち上げるかのように、力を込めて振る。

瞬間、かしやん、という、何かが砕けたほんの微かな音が、響いた。

「……おや」

強者と言えど、自身の死が怖くない、と言える人間は少ない。

自身の最期を感じ取り、ユルキは思わず目を閉じた。

――。

――？

痛みも、こぼれ落ちる血も、何も感じない。

はつと目を開いたユルキ。

視界には、手を振り切った千古。だが、ユルキの胸は繋がっており、その体には傷一つ無い。

「……お見事です。以前より、センスがあるとは思っていました」  
健吾はどつと冷や汗が流れるのを顔の気持ちが悪い感触で感じ取る。

正解、と褒めるような千古の表情と、目を細めないと認識すらできない、宙に散るきらきらと光る極めて細かな欠片。

それは、割れた窓から散る破片と、よく似ていた。

——切断、とは何か？

加工から闘争まで、自然から文明まであらゆる分野で利用される、発生する事象、切断。

しかし、その詳細な原理の全ては未だ解明されてはいない。  
もう少し単純な話に落とし込むとしよう。

よく切れる刃物、とは何か？

鋭さ。なるほど確かにそうだ。鋭ければよく切れる。当たり前だ。  
では、理論上単分子サイズまで刃先を鋭くできる黒曜石等の物質が、最も鋭い刃物か？

それは、正しいと同時に違う、というのが答えだ。

刃先の細さを鋭さ、というならば、それは正しい。しかし、実用的かと言われると首を横に振らざるを得ないだろう。

刃先が細やかというのは、同時に脆いという事である。簡単に欠け、すぐに刃物として機能しなくなる。

また、切断という行為には鋭さだけでなく刃を対象に押し込み引く、という動作も必要となるが、余りに脆い刃ならばその時点で加えられた力に耐えられず欠けてしまう。

そのような事情で、現行の刃物は切断の工程に耐えられる強度と鋭さを両立した鋼のものが一般的となっている。

——しかし。もし、一度の使用で使い捨てていい、と言われたら？ 刃を押し込む段階で碎けないように力を加える方向を巧みに制御できる技術があるならば？

——それを断続的に生産できるシステムと使い捨てにできる状況、その一度の切断を脆い刃を碎かせず遂行できるだけの技巧。その全てが合わさり初めて、最も鋭く最も脆い刃は、正しく最も鋭い刃物へと変じる

「ええ、ええ。よくわかりました。先輩として誇らしいです。でも、諦めてください」

絡繰りは、これでわかった。だが、わかった所で、どうする。

全く好転していない状況に顔を歪める健吾を、共に鍛練を積んだ門下生を、千古は喜びと同時に非情の目で見つめる。

その特性を宿した身が、その髪の毛の示す特性が。月を望む二つの生物が、トンネルを吹き抜ける生ぬるい風に浚さらわれ、微かに揺れた。

「我が身、我が刃。その全ては、いずれ神へと至る貴きお方へと捧げたものなのですから」

上月 千古

国籍：日本

11歳 女 148cm 39kg

αMO手術”植物型”

マダケ

+

MO手術”植物型”

ススキ

専用装備：珪素刃形成制御・操作装置  
『SYSTEM』  
Mh, i t h r h a

『裏マーズ・ランキング』元同率3位

## 第93話 朔月に誓う

——それは、近代兵器としての例に漏れず大量生産と部隊単位の多人数での運用を思案し考案された装備だった。

MO手術ベース、”植物型”ススキ。アジア圏で広く分布し、外来種として他の地域でも見られる、ごくありふれた草本。

植物組織としての最低限の防御力と、傷の高速治癒程度ならば可能な微かな再生能力。

そして、注目されたのは人間の皮膚を裂く事もある鋭利な刃をその表面に持っているという点。

特異な生物でもなく、サンプルが多い。それは安定した手術材料の確保と成功率を保証している。

そこに一定の戦闘能力が加わったとなれば、標準装備としての条件は十分であると言えるだろう。

だが、火星での戦場ではそれでは不足があると考えられた。

かつての遠征で、強固な鎧を持った昆虫を宿した人間でさえ容易く解体された。鋭利な鎌を振るった人間も死んだ。

このままでは、戦力としては十分では無い。

そこで考案されたのが、幹部搭乗員の装備としてのみ考えられていた、追加の武器では無く、MO能力そのものを制御、強化する体内蔵型の装置を量産して運用するというものである。

『SYSTEM・Tindalos』。神話の名を持つ物語に登場する、角でのみ構成された異次元。そして、そこに住まう猟犬と呼ばれる襲撃者からイメージされ名づけられたその装備は、ススキのとある部位の成長と生成を意のままに制御するための装置だった。

それは、『ススキの鋸刃』。何故、特別鋭利というわけでもない草で手が血を流す程に裂かれてしまうのか、疑問に思った事は無いだろうか？

その正体が、葉に無数に形成された、細かい刃である。それでも、所詮は植物でしょう、と食い下がる人もいるかもしれない。しかし、そ

れが何で構成されたものであるのか知れば、途端に納得する事だろう。

プラントオパールと呼ばれる聞き慣れないそれは、植物が土壌中から吸収する珪酸塩を細胞壁や特定の部位に蓄積し組織の一部として取り込んでいる物質である。細胞組織そのものであるとも呼ばれている。

珪酸塩。それを主とし他のいくつかの微小な成分と共に結晶化したものが『ガラス』だ。

鋭利なガラス質の結晶で構成された刃。本来は人間大に拡大されたとしても武器として運用するのは困難である

が、それを、さらに拡大し、剣と呼べるサイズにまで成長させる。

非晶質であるガラスは理論上では先端径を0にまでする事が可能であり、極めて鋭い刃を形成する事が可能だ。

……結果から言えば、この案は失敗に終わった。

実戦形式の訓練において、半透明の剣は切断能力を発揮する事は無く、クローン用テラフォーマーに当たり砕けた。そして、二本目を作り出す事はできなかった。

鋭さは十分だった。だが理論上では鋭い刃は、実戦ではその力を発揮しなかった。

その脆い刃は、テラフォーマーの甲皮に接触した段階でその鋭さを発揮する前に破碎した。剣筋にぶれが少しでも生じれば、対象に刃を入れる角度が悪ければ、それに耐えられないのだ。

人間の体内に存在するその材料は、ごく限られている。専用のサプリメントで摂取しても、剣と呼べるサイズのそれを形成するのに十分な量は得られない。

かくして、開発は中止された。量産体勢に入っていたそれは設計図ごと破棄される事となった。

ただ、一つ。U—N—S—A所属、専用装備研究主任の戯れによって設計された、より繊細な形成制御を可能とするハイエンドモデルを除

いて。

体中の疲労と痛みを耐えながら特訓をする事と、人の命を奪っている事以外の記憶は、ごく僅かしか無かった。

ニュートンの一族。世界を裏から操るとか何とか。少なくとも、私は操る側に回った事は一度も無い。

むしろ真逆だ。同じ一族の人間から、依頼を受け、人を殺す。それは、時に一族の敵対者だったりする。

当然の事だろう。表ざたにできない、秘密裡に始末しなければならぬ相手に対し送り込めるのは、同じ一族の者だけだ。

時に、依頼人の個人的な敵対関係の人間だったりする。

業務的な敵対関係。それならまだマシだ。恋敵だったりもする。

仕方ない事だと納得した。一族として、優秀な遺伝子の獲得は重要な事だからだ。

処刑人。どちらかと言えば殺し屋だろうか。

多くの国で、古くから下賤な職として蔑まれてきたそれが、私の一族の責務だった。

だがそれは、昔に語られるような政府に、王に仕えるある種栄誉とも言えるようなそれとは全く違った。

『棒切れを振り回すしか能の無い乱暴者を一族に入れてやっているんだ、有り難く思え』

私達よりも少しだけ上の家系の人間がそう言った。

『お前は会合に出る必要も無い、外の警護だ』

本家との血の濃さでは私達と大して変わらない家系の人間がそう言った。

いつも私に無茶を押し付けてくるのは、私達と大して変わらない、一族の中でも下級の人間だった。



当主様、ジヨセフ様の先代には一度だけ会った事があるけど、無理をさせてすまない、感謝していると労いの言葉をかけてくれた。逆に言えば、それ以外の人間には、その言葉すらかけてもらった事が無かった。

何故、何故私達は、彼らのように生きる事ができないのでしょうか。お父様にそう問うた時に、返ってきた答えは、それが自分達の役割だから、それだけだった。

誇らしくは無かった。お父様みたいに、お爺様みたいに、私はそれを一族に貢献する尊い仕事と思う事はできなかった。

命の奪い合いにおいて、私達に敵う人間は一族でもごく僅かだ。彼らがお金を稼いだり世界を回すために会談をしたり、新たな技術を生み出すために試薬や機械を触っている時間を、私達はほぼ全て武練を高める時間に充てている。

でも、だから私達の立場は下の下なのだろう。

今は不満があれば果し合いで解決する時代では無いのだ。そう私が悟ったのは、7つになるくらいの頃だった。

剣術を学び、槍術を学び、一族の身体能力を極めた体術を学び。他、数多くを学び。

武芸百般、その言葉通りに様々な戦いの技を修めた私は、いつしかお父様やお爺様よりも強くなっていた。

自由に生きる事に、少なくとも利用される道具とは別の生き方を選ぶために戦いの力が求められる時代では無い。

それでも、道を極めたその先に何かがあると信じていた。

ただ、それでも何も、変わらなかった。

結局、これが末路か。

そう私が声を出す事もできずに心の中で呟いたのは、血だまりの中だった。

不自然とは思っていた。でも、いつもの無茶振りだろうと考えていた。一度は決まった、火星へと赴き次期当主候補様の計画を手助けす

る任を突然解かれたのは、少しおかしいなとも首をひねった。

ああ、成程。血が減り、徐々に薄くなる意識の中で、私は納得していた。

生贄にされたのだ、と。

一族に対して敵意を持つている組織の一つの基地の襲撃。

潜入からの組織の首領の暗殺。幹部の一人はこちらの内通者であるため、殺さないよう。そんな任を与えられた私を待ち受けていたのは、万全の警備体勢と指定された侵入経路に待ち伏せしていた多くの兵士だった。何かが、切れる音がした。

斬って斬って斬って、裂いて貫いて殺す。

鮮血と絶叫、断末魔の声。それは、暗闇の中を何かを探してふらつく私を導いてくれる道標のような、鮮明な感覚だった。

味方も敵も、一族の連中も、家族も。何もかも忘れて、私はがむしやらに剣を振るった。

血は薄いながら一族としての肉体を持っていようとも、たかが十とおにも満たない幼子である自分の体力が持たないであろう事も忘れて。

相手の、こちらを殺そうとしているので無くて可能であれば捕えようとしている様子から、捕縛されれば死ぬよりも辛い未来がある事など、想像もせず。

無数の銃弾を体中に浴び、自分の服を染めるそれが返り血なのか自分の血なのかもわからず。どれが兵士でどれが標的なのか、内通者なのかもわからない無数の屍の中で、私は立っている事もできず壁に寄りかかり、せき込み、血を吐く。

終わり、か。体は動かなかった。一族としての完全な肉体の状態認知は、私の体がもうすぐ死を迎える事を声高に知らせていた。

こんな世界から抜け出せるなら、まあいいか。

頬を、血とは違う生ぬるい液が伝う感覚。ああ、やっぱりいや、だな。

もつと、皆と同じみたいに。私が身を置いていた、道場の師範のお子さんみたいに。

火星の派遣計画で配属されて私の部下という扱いになっていた、師範が家を貸していたのあの人と沢山の弟さん妹さんみたいに。

世界を操る一族なんて、賢明じゃなくて良かった。貧しくても構わなかった。

ただの人として、暖かい人達と一緒に生きて、死にたかったなあ。

「初めまして。君を私の好き勝手に利用したいんだけど、どうだろうか？」

そんな、アンコールも無く、ただ立ちすくむ哀れな役者に突然光が当てられたかのように。

突然に、誰かの声が、聞こえた。

私はそれに答える事はできない。少なくとも敵では無い事はわかる。

でも、敵である方が万倍はマシだった。

好き勝手に利用する。ああ、死に逃げる事さえ許されないのか。

手がまだ動く事を確認する。太刀がまだ握られている事を確認する。

くれてやるものか。私は、それを己の喉に突き立てようとして――

「……」

ひゅんというごく小さい音。だが、それが受けければ絶命は避けられない一撃が繰り出された事を知らせる唯一の情報だ。

ユルキを狙い縦に振られたそれに、健吾は槍でそれを横薙ぎにし、砕く。

それは、砕いたという感触すら与えず、しかし確かにその一撃を無効化していた。

次はどこから来る。アレを碎けるのは自分だけだ。

健吾は汗を拭う事もせず、千古の動向から目を離さない。

極めて薄く、長く、そして透明な刃。それが、何の抵抗も無く複数のテラフォーマーを一瞬で両断した不可視の斬撃の正体だ。

正確には半透明、程度なのかもしれない。だが、それが不可視になる程の薄さなのだろう。

その事実にも迫った考察を数度の攻撃から読み取った健吾。だが、それは理屈がわかってても人間技じゃない、とにわかには信じ難かった。

薄ければ脆い。それは当然の物理法則だ。たとえ材質が金属であつたとしても、斬るために対象に接触した段階で折れ曲がつてしまふだろう。それは、本のページに指を押し付け引いた時に、指が切れて血が出るよりも紙がたわんで何とも無い事の方が多いのと同じだ。剣筋のブレ、角度のずれによって刀身に加わる負荷。これだけで、紙ならばたわむだけで済むそれは極めて脆い刃を砕くだろう。

だが、目の前の現実はこちらだ。

ふとした表紙に自分から指を動かして切ってしまう紙でなく、両者が動き続ける戦いで、完璧な剣筋を、刀身に負荷を加えない入刀の角度を維持し続ける。それがどれほどの超人的な技量を必要とする事か。

能力の破壊力云々では無く、その行使を可能としているという事実だけで、勝ちの目が薄い事がひしひしと伝わって来る。

「遅い！」

「——ッ！」

警戒を怠らなかつた。だが、瞬きをした瞬間、健吾の懐に千古が潜り込む。

その手は懐の太刀にかかっており、銀の刃がブレながら視界に映り、それが長くなつていくのがわかる。

あ、死んだわコレ。健吾は諦観の中で覚悟を決め、せめて一撃でも、と両手が伸びた長槍で使えないため頭突きを見舞おうとし。

「させるか……！」

しかし、そこで横やりとして千古の脇腹に鎌が突き刺さる。

本来であれば、それは胴体を切断できるだけの威力があった。だが、その威力は牽制がやつと、という所まで威力を殺される。

「ありがとよ、ユルキ」

「気にしないでください」

それに対応し乱入者、ユルキに対し抜いた太刀を振った千古は数歩後退する。

ユルキの一撃は、千古の脇腹の衣服を裂き、その肌を晒させていた。暗い黄緑に変色したそこにはじわりと血がにじんでいるが、それ以上の傷は何えない上に、じわじわとそれは塞がっていく。

「……翔、そういやお前も非戦闘員だったろ、逃げろ」

幸いにも現在千古から距離が離れている翔に対し、健吾は今更の事を言う。

それは、気遣いというだけでは無い。

相手の斬撃は、肉の壁で押し止められる類のものでは無い。数の優位が役に立たない相手なのだ。

「師範代……あの人や殴る蹴るは通らねえ」

自分の突き、も実際通用するかわからないが、と内心で自嘲しながら、渋る翔を手で追い払うように健吾は撤退を促す。

『上月流』。打撃攻撃の一切を無力化する、彼女の一族直伝の体術。

特殊な才能と血筋、気が遠くなる鍛練の末にようやく得られるらしいその技術を、健吾は自分が特訓で幾度となく転がされる事により嫌という程知っている。

事前準備が万全ならば電車に轢かれても骨折程度で済む、と聞いた時は顔が引き攣ったものだ。そして今わかった。特性により、さらに無力化できる範囲が広がっている。

マダケ。健吾が知っている、千古のαMO手術における手術ベース。

他の植物型と比較すればその構造から来る頑丈さと成長速度に由来する再生能力は一段階高い位置にある。

それ以外に、特別なものは無いと思っていた。だが、特別でも何でもない防御力の足しとなるその能力が、物理的加害に対する耐性をさらに引き上げ、難攻不落のものとしている。本来は対応できない斬撃ですら、軽いものなら今の通りだ。

再び、横薙ぎの一撃が襲い来る。接近戦は太刀、中遠距離は能力による薙ぎ払い。これまでのセオリー通りの一撃に、健吾もまたこれまで通りの対策として、槍をその刃が存在しているであろう軌道に割り込ませ、砕こうとする。

「何度も通用するんでも？」

だが、手を振るいながら、千古は足を振り上げる。その軌道の延長線上にあるのは、今刃を砕かんとする健吾の槍。

それを止める事ができず、健吾の長槍が中ほどから切断され、ボトリと落ちる。

「さて、ご友人のため、でしたよね」

眩きと共に千古が動き出す。その移動速度こそ、手術ベースが移動能力を強化する類のものでは無い事もあり人間を逸脱したものでは無いが、相手の虚を突く不意打ちのタイミングを巧みに心得ており、反応が一瞬遅れる。

健吾とユルキをスルーし、その狙いは今この戦場を脱しようとしていた翔だった。

唯一追って捕えられるユルキが千古の背を狙い鎌を振り下ろそうとするが、その一撃は千古が手を軽く己の背を搔くように振るうのを見て、回避動作を取ってしまう。

だが、その攻防により千古の動きに遅れが生じた。

一度振るわれた刃が、射程内に捉えたはずの翔の体にまでは到達せず背負っていた鞆を真つ二つに切断し、その中身を零れさせる。

これ以上は無理かと判断した千古が反転してユルキを迎撃しよう

とする。だが、その千古を迎えたのは武の巨体と健吾の槍。

打撃攻撃で傷を受ける事は無いが、威力が一点に集中しすぎて受け流しきれない刺突は別だ。

身を捻り回避し、反撃にその手を振るおうとする千古。

「少し、話を聞いていただけませんか」

そこで、千古の目が、一族としての鋭い動体視力が、声の主を捉えた。

千古の反撃に備えていた健吾と武も、距離を取り一度止まる。

そこには、一冊の本を持ったユルキが立っていた。

先の一撃により翔の鞆からこぼれ落ちた、翔が改めてしまい込んでいた例の本である。

「……何か？」

千古は警戒の目を緩めず、しかし一度構えを解く。

「貴方に、知らせねばならない事実があります」

ユルキが本のパージを素早く捲り、その中の一ページを開き、それを開いて千古に見せつける。

そこで千古の目の色が変わった事を、そこにいた全員が感じ取る。

あからさまな驚き。年相応の、目を見開いた様子。

先ほどまで激しい戦闘を繰り返していた千古が、啞然と立ち尽くしている。

「貴方の言う主とは、オリヴィエ・G・ニュートン……『槍の一族』の指導者で、間違いありませんね」

「……」

ユルキの問いかけに千古は答ええないものの、半ば確証を持った上での事だった。だからこそ、これを突きつけられる。

そこに書かれていた文章を、健吾達もまた読む。先ほど、ユルキと美友と共に見た際にちらっと見てユルキが飛ばしたページだ。

「……はあ？」

そして、疑問と困惑の声を出す。それが、荒唐無稽な、使い古された創作のそれであったからだ。古典文学とかユルキは言っていただろうか。だが、小説の1ページを見せる事が何になるのか？

「貴方は、騙されている。オリヴィエ・G・ニュートン……奴は、自分以外の、勿論貴方達腹心の部下も含めて、全ての人間を抹殺するつもりだ」

「……そいつはまあ何ていうか規模がでけえな」

ユルキが示した、冗談としか言えない事実。

健吾と武、そして部屋の出口までたどり着いた翔が、ぽかんと口を半開きにする。

「貴方が奴のために戦う事に、意味は無い……アレは、おぞましい怪物だ」

「……………」

ユルキは無言の千古の感情を慎重に読み取ろうとする。啞然。当然だろう。

いきなり、このような事実を突きつけられてしまえば。

体は震え、動揺している。それを必死に抑え込もうとしている。このまま、停戦に持ち込めるだろうか。

「……………」

千古の口の端が、少しだけ持ちあがる。震えた調子で、笑いが零れる。

ぐつと唇を噛み、感情を必死に抑え込まんとするその様子を見て、健吾は思わず沈痛な面持ちになってしまう。

そして。

「死ぬがいい、下郎」



絶対零度の冷たさを持った声と共に、隙だらけの健吾も、武も無視して、ユルキに無数の刃が同時に襲い掛かる。

本来であれば逃げ道を塞ぐように振るわれるはずの、両手足にそれぞれ形成された刃と太刀による攻撃。しかし、その全てがユルキの手を、足を、首を、切り刻まんと振るわれる。

「な——」

想定外の反応に、しかし流石は暗部部隊の戦闘員と言ったところか、ユルキは必死に身を躲し回避し、踏み込んでくる千古の第二撃、大三撃、それに次ぐ無数の剣閃を必死に捌こうとする。

「何故……！ 奴は、従って益があるような人間では——」

「お前に、何がわかる……！」

無差別に振るわれる太刀の、不可視の剣の乱舞。もはや近寄る事すら不可能なそれに、健吾も武も、翔もユルキを救うために踏み入る事ができない。怒りに任せた剣技だ、軌道こそ読みやすくはあるが、その対処能力を上回る無数の斬撃は、容赦なく避け損ねた甲皮を削り取っていく。

そして、先の凍り付いた声と裏腹に、千古は激情のままに、その答えを、今の彼女を突き動かす全てとも言えるそれを、口にした。

「初めて、捨てゴマにされても構わないと思える人に出会った、私の喜びが!!」

「……？」

くれてやるものか。私は、自身の喉をこれまでずっと共に戦ってきた愛刀で突こうとして。

瞬間、体を浮遊感が襲う。直後、体温を失いかけていた体にじんわ

りとした熱が触れた事を感じ取り、抱き上げられたのだと理解する。  
何が狙いなのだろうか。でも。  
少しだけ、暖かい。

あれから、気を失っていたのだろう。眼を覚ました私は、癖になっていた事もあり周囲を確認した。そこは、殺風景な部屋で、自分はベッドに寝かされていた。

そして何より、自分の手が、誰かに握られていた事に気付く。それも、実際は相手に握られていたのではなく、自分から握っていた事に。

「おはよう」

「おはよう……ごいいます」

金髪の男の人。当主様によく似ている。

その人は、まるでいつも通りの朝だ、と言わんばかりに、ごくごく普通の朝の挨拶を私に向けてきた。

思わずそれを返してしまうけど、私の頭の中は寝起きでぼんやりしながらも疑問でいっぱいだった。

「あの、私、は」

「おー、起きたっすかー！ いやあ可愛い子っすねえ！ 怪我は痛くないっすか！」

何にも解決しないまま、人が増える。今部屋に入って来たと思われる女の人が、いきなり傍に駆け寄ってきて、私の顔を覗き込む。

その言葉で、私は自分が傷だらけである事を思い出す。

「あの、私を利用する、って」

少しずつ思い出した、気を失う前の言葉。それを目の前の男の人に。

自分の枕元に太刀が置かれている事を知覚する。

何て無防備なんだろう。

「ああ、そうなんだけどね、まあ君が治ってからでいいかな。後回しにしよう」

その答え次第では、あの時やろうとした事をもう一度、と考えていた。でも、その人の答えは、私の予想していたものとは、何だか違って。怪我をしていた時も、熱があつた時も依頼が第一だったいつもの違つたから面食らつてしまつて。

何故か安心して、気が抜けてしまつたからか、お腹がくうと音を立てる。

「ああ、まずはご飯にしようか。一応、和食を用意してみたんだ。……文献は調べたけど、君の口に合う出来かなあ」

「作つたのは私つすよオリヴィエ様、横取り反対つす」

恥ずかし気に微笑む男の人と、冗談めかして抗議する女の人。

何だろこの緩い空気は。一族の人間が、こんな――

「……おや」

「あれ!? 痛いっすか、まさか傷が開いたとか!?!」

少し眉を寄せて困つた様子と、慌てているという二人に、どうしたのかな、と首を傾げる。

それを聞こうとして口を開けた時、そこにしよっぱさが入り込んでくる。

声を出そうとして、それがまともに、しゃくりあげるような変な調子でしか出せない事に気付いて。

「うあ……いえ、違うんです……う……ああ……」

そこで私は初めて、自分が泣いている事に気付いた。

男の人、オリヴィエ様。私が言葉程度に知っていただけの、『槍の一族』の人。

女の人、希?様。『槍の一族』の当主。実際はオリヴィエ様の方が偉いらしいけど。

二人が、私の新しい主だつた。

状況は何も変わっていない。一族の人間の命で、他人の命を奪う。それが、私に与えられた役目だつた。

オリヴィエ様は、言葉通り君を利用したいから助けた、と言つていた。

ただ。

—— おかえりなさい、チコちゃん。お仕事ご苦労様です！  
今日はフルコースですよ！

—— ありがとう。君のお陰で、私はまた一歩、先に進む事ができる

何故だろうか。全く同じはずなのに、何も変わっていないはずなのに、全然違う気がするの、私が未熟な人間だからでしょうか。

そして、私の怪我が治って、いくつか仕事をこなして、一度一族の元に帰る事になった前の日の事だ。

私はオリヴィエ様に呼び出された。理由はわかっていた。前日の失態に対する叱咤だろう。

酷く錯乱してしまった事を鮮明に覚えている。

嫌だ帰りたくない、離れたくない、ここに置いてください、私を捨てないでください、私にできる事ならその全てを尽くします、そう自分に、貴方様に誓ったんです。

何をわめきたてたのか、その全てを覚えているわけでは無い。錯乱して、泣き叫んで、たぶん、暴れてしまって。朝起きた時に、しえいちや……希？様に抱きしめられていた時には、顔から火が出る思いだった。

「真つ先の到着、偉いね、千古」

「とんでも、ありません」

玉座に座るオリヴィエ様の前に跪く。

体が震える。一体私は、どんな罰を受けるのだろうか。

「もうすぐ皆が来るから、少し待っていておくれ」

その言葉通り、間もない内に何人かが集まって来た。

ここ、『神殿』の中で何度か会った事のある人、一度も会った事が無い人。

全員が集まったのか、オリヴィエ様は満足そうにしている。はて。私への叱咤とは違ったのか。

「今から、君達に大事な事を決めてもらいたいと思う」  
大事な事。さて、何だろうか。

「私が新しく作り上げる世界で、君達は死ぬ事になる。それも、私が殺す」

後で改めて謝罪に行こうとは思っていたとはいえ、直接の叱咤を受けるわけでは無さそう。少しの安心感を得た私は、次のオリヴィエ様の言葉でぼかんとしてしまった。

「君達には、どうするか決めてもらいたい。今この瞬間、私に襲い掛かってもいい。ここを出てもいい。そのまま従ってくれても、いい。私的にはこれが嬉しいかな」

居並ぶ人々は、それぞれ別の反応を見せていた。

「じゃあまずはフリッツから」

「オリヴィエ様が世界を手にしたその後で、私は先生と共に貴方に挑みましょう」

何度か話した、科学者の男の人。

不遜にもオリヴィエ様を見上げ、宣言する。

「ロドリゲス、君は」

「フリッツ博士と同じく。我が教義は貴方様とは相いれない故に」

修道士の方が、髭を撫でながら。

「千古、君はどうか」

私の番が回ってきた。たとえどう答えても、オリヴィエ様は評価を変えざる事はないだろう。

あのお方はどんな形であれ、本心を聞きたがる人だから。

ただ、そんな事に意味は無い。オリヴィエ様にどう思われようが、私からオリヴィエ様への思いは、決まっているのだから。

死んでたまるか、と意固地になっていたのです。

私の価値を一族に知らしめてやる、と傲慢になつていたのです。でも、本当に私が欲しかったのは、望んでいたのは、そうでは無かつたのです。

貴方が、希？様がそれをくださったのです。

きつと、普通の人がいたらそんなもののために、と笑われるでしょう。

やめろ、と止められるかもしれせん。

それは、彼らが当たり前前につけていて、当たり前前に他人にあげるものだから。タダ同然のものだから。

でも同時に、私が誰にももらえなかつたものだから。

最初から、私がそれを求めている事をわかつていて、貴方は私を利用する為に、くださったのでしょうか。

いいえ、構いません。私が本当に欲しかったものを理解して、実際に与えてくれたのですから。

貴方が私に期待してくれるのならば。この剣を、利用価値を信じてくれるのならば。

私の剣は、槍は、薙刀は、弓は、銃は止まる事は無いでしょう。

アメリカも日本もロシアも中国もドイツもローマ連邦も、ニュートンの一族も、貴方に傅かないその悉くを切り払しましょう。

オリヴィエ様。私の願いを、余さず叶えてくれた、私の主君。いと貴きお方。

私は、貴方と希？様に沢山のものをいただけだからこそ、こう思えたのです。

「例え死を賜ろうとも、私は最期まで、貴方の為にありましょう」

———そんな貴方が願いを叶えるために使い捨てにされるのなら、別にいいかなって。

## 第94話 月と神

「くっ、うっ……い」

激情のままに振るわれる無数の刃に、ユルキの体の昆虫の甲皮がまた一つ、野菜の皮をピーラーで剥くかのように剥ぎ取られる。

彼の手術ベースとなる生物は決して頑丈なものではなく、千古の振るう不可視の刀剣と銀の刃、その両方に耐える事ができるような強度では無かった。

能力で形成した刃を逃げ道を塞ぐように振るい、一太刀で切り倒す。千古がそのような、相手を確実に仕留める動きをしていれば、ユルキは既に死んでいただろう。しかし、実際に千古はそうはしていない。その刃の全てがユルキの体を捉え引き裂かんと振るわれる。

ただ、それは死期が遠くなっただけとも言える。避け損なった人間で言う皮膚の部分が刃物によって削られる苦痛。一度判断を誤れば即座に突き刺さる刃。何より、綱渡りの防御を続ける事への疲労。それが、彼の命の蠟燭をじりじりと溶かしていく。

その攻防に即座に横やりを入れる判断は健吾や武にはできなかつた。

正確な太刀筋でないと切れない刃。千古の後方すら薙ぎ払う大振りの軌道で振るわれているそれに飛び込んでも、自身を狙っていない刃はその鋭さを発揮せず恐らくは無事だろう。しかし、もしもの可能性が頭を過る。乱舞する刃の中に飛び込めるか。助けに行つて無駄死にすれば、総崩れになる恐れがある。

結論からすれば、健吾と武はユルキを救うために千古へと突貫を仕掛ける事になる。

だが、それを判断するより先に、目の前の攻防は決着が付いた。

「……い」

腹に突き刺さった刃を、信じられない、と見つめる。

背後に飛び退くが、それにより突き刺さった刃が体から抜け栓が無くなり、血が零れ出す。

「く……う……！」

じわじわと赤く染まっていく衣。焼けるような痛みにも、千古の目が歪む。

ユルキは荒く息をつきながら、自身も微かな驚きと共に苦し紛れに振るった血に濡れた鎌を見る。追撃できるか。……いや、無理だ。

「師範代……頼む、退いてくれ……！」

初めて有効打が与えられた。だが、喜ぶ事などできない。

切断され短くなった長槍を突き出し、祈るような健吾の言葉に千古は答えずその太刀を振るう。その瞳は怒りに開かれ、瞬きすら惜しいと言わんばかりにユルキを捉え続けている。

焼けるような体内の痛み。表皮を覆う『マダケ』の防御力のお陰で内蔵の損傷は大した事は無い。だが、その痛みを意識を引つ張られ、千古の認知にブレが生じる。

「退くのは……貴方達だ……！」

痛みを耐えながら千古が振るう、能力で形成されたガラスの刃。

それは反撃に健吾へと振るわれ、その胴を割断せんとするが。

それは健吾の腹の表皮をさくりと切った段階で、砕けた。

「っ!？」

武の拳が、千古の頭を正確に捕えたのだ。

即座にそれを認識し千古は半分反射的にその衝撃を地面に流すも、微かに残った揺れの影響を受けた太刀筋では、切断を完遂する事は叶わず。

三人から距離を取った千古は呼吸を整え、ユルキを睨む。

動揺は無い。傷こそ負ったが、それは大したものでは無い。

手足は残っており、剣を振るう腕は未だ震えていない。そして何よりも、己が身の中に燃え盛る物が叫んでいる。

私の主を、オリヴィエ様を馬鹿にした。生かしてはおけない。目の前のコイツは、命よりも重たい罪を犯したのだ。

その内心のまま、千古は再び太刀を構える。

先は不覚を取ったが、所詮はマグレだ。



……そして、その判断をした時点で、この戦いで彼女の敗北は決まっていた。

情報だけ見れば、未だに健吾達の不利と千古の絶対的な優位は揺らがない。千古の身体能力は11歳の少女のそれでは無く、その武技は人間という種の中でも最高峰に属している。さらには、まともに受ければ即死、避けられるとしても軽く手足を振るだけに対し大きく体を動かし回避しなければならぬ事により消耗を強い体力差を押し広げる特性と専用装備。

健吾と武はU—N—A—S—Aの防衛戦においてニュートンの一族でも最上位に属する戦闘能力を有する男と戦闘したが、千古の戦闘能力はその相手を上回っている。

多少衰えはしたものの幹部搭乗員であつた拓也がいてようやく相手にでき、美晴の機転により撃破できた相手だ。強者ではあるとはいへ健吾達以上幹部搭乗員以下、健吾達寄りくらいの実力であるユルキが加わっても、戦力的には及ばない。

その分析は、両者がそれぞれ持っていた情報から同時に行つたものだった。

勝てる見込みが無い。健吾も武もユルキもそう考える。恐らくは、第二班の総出で、もしくは班長で、またもしくは現在の第七特務を半数以上動員して。それで、死人を出してようやく撃破できるだろう、くらいの実力者である。

千古もまた、自身の勝利は揺らがないと確信を持っていた。

健吾の戦闘能力は知っている。二年で判断力も胆力も動きも見違える程良くなつてはいるが、それでも想像の範疇だ。

他の二人も、強くはあるが人間、の範疇である。纏めて相手をする事に何の問題も無い。銃器を持たず、接近戦だけで自分に向き合つて来る事の、なんと愚かな事か。偶然で一撃は入れられてしまったが、戦闘を続行するのに何ら問題は無い。

……いや、今の彼女の状況判断の根拠に、そのような戦力分析は二の次だった。殺さねばならない。絶対に逃がさない。オリヴィエ様

をあるう事か怪物だと？ お前に何がわかる。命を以て償わせ、その体を膾切りにしてやる。感情が爆発し、彼女の剣をより早く、より勢い付け振らせる。

それが誤りだった。

暗殺者は常に冷静でなければならぬ。心を氷のように冷たく、鉄のように固く。

しかし。彼女はその技量こそ一流の人間であったものの、心まではそうでは無かった。

あと数年、彼女に時間があつた上で彼らに相對していれば、この戦いは千古が取っていた。

怒りに任せて殺戮のため剣を振るうので無く、確実にユルキを仕留め、現在地面にうち捨てられている例の本を回収して撤退していた事だろう。

平静の彼女であれば、ユルキが苦し紛れに反撃に繰り出したこの一撃を受ける事は無かつただろう。

相手の体が無残に損壊させてやろうなどと制裁を優先せず、逃げ道をつつ潰し、窮鼠の反撃など許さずに一刀の元確実に仕留めていたはずだ。だが、そうはならなかつた。

彼女が及ばなかつたのは、戦闘能力では無く精神性だ。

あらゆる状況で主君の命を優先するという鋼の意思では無く、主君を悪し様に言われ怒りに判断が曇り、成すべき任を見失った。このまま戦えば、自身が腹に受けた傷を過小評価し動きが微かではあるが鈍り、単調で大振りになった太刀筋の隙を少しづつ慣れてきたユルキに、もしくは側面からの横槍に突かれ、千古は致命傷を負う事となる。

……ただ、その点において彼女を未熟だ、愚かと呼ぶには、少し酷かもしれない。

彼女は実戦と修練で鍛え抜かれた、優秀な戦士ではあるが、同時にまだ成人にすら半分と少しまでしか達していない、ただの少女なのだから。

「おの、れ……許さない……絶対に……！」

再び距離を詰めようとする千古。もう交渉は無理なのか、と絶望す

る三人。

未だ晴れぬ怒りに支配されている千古。

「はい、止まって」

この戦場に割って入る、手を叩く音が二回。

同時に、千古の背後、先に千古が突入してきた穴から、一人の人間が姿を現す。

感情に乏しい声色と、乾いた手を叩く音に、ドロドロした殺意が渦巻いていたその場が一瞬だけ、乾燥した空気を纏い――

――そして、本当に一瞬だけだった乾燥した空気は、腐肉から立つ空気が風に煽られて届いてくるかのようなおぞましい感覚へと変わり、その場の全員に知覚される。

「テメエ……!」

「なッ――!?!」

健吾と武が、その姿を見て驚愕に顔を歪める。

「……!」

ユルキが、粗く短い呼吸を繰り返しながらも、現れた人間へと視線を向け、それを離さない。それが、千古以上の脅威であると自身の直感、そして事前に得ていた情報から理解していたからだ。

「っ……!?!」

一番大きな反応を示したのは千古だった。声の主を見ずとも、びくりと体が震え、その動揺がまざまざと現れた体と同じ震えた声で。

「……何故、こちらに……オリヴィエ様……」

自身の背後に立つ、トーガを纏った青年の名を、口にした。

『あーあー、てすてす、ユルキ君聞こえるー?』

数日前、一度物資の補給で地上に出ていたユルキと美友は突然の第七特務本部からの連絡を受けていた。

モニターから響くノンナの声とその表情は、努めて明るくしようとしているのはわかるが、どこか暗い。

『用件から言うけど、もし遭遇しても戦っちゃいけないヤツがいます』  
簡潔にその後の説明を纏めると、それは自分達が対処に追われている敵の首領が、もしかしたらユルキ達のいるここ日本に手を出してくるかもしれない、という情報だった。

中国軍人との機密回線の一部だけとはいえ盗聴して得られたそれ。

オリヴィエ・G・ニュートン。槍の一族の王たるその男が再び姿を現すというノンナの言に、しかしユルキは懐疑的だった。

先のU—N A S A 防衛戦の結果は帰国が間に合わず日本で待機していた二人にも連絡されていた。そこにははつきりと、オリヴィエと名乗る男と本部に滞在していた第二班班員が交戦し、戦闘の末に殺害したという報告も含まれていた。

交戦した第二班の班員の証言によれば、MO手術ベース”ヒト”の胎芽に由来する無尽蔵の再生能力と、凄まじい身体能力。だがその果てに、幹細胞を手術ベースとしていた事による弱点である『薬』の過剰摂取による内臓器官の初期化に至り、死体こそ回収されてしまったが、死亡は確実だろう、と。

オリヴィエという名。数年前から何度か起こっている、ニュートンの一族絡みの交戦。そして、エリンのデータファイルから得られた断片的な情報。そこから、殺したこの男は槍の一族の頂点、オリヴィエ・G・ニュートンその人であると判明したのであった。

しかし、頭を潰されたはずの槍の一族の仕業と思われるあれこれは防衛戦後も未だに収まっていない。主君を殺され復讐に燃えている、という可能性もあるが、それにしても動向が怪しい。

第七特務やU—N A S A への攻撃、というよりは、捉えられている限りではその行動の方向性、指針に何ら変化が無いのである。

そしてデータファイルの解析過程でいくつか出てくる、『死者の蘇生』という言葉。ここから照らし合わせるに、オリヴィエは蘇ったのではないか。そう考えられていた。

だから、十分警戒してくれよ、と。そうでなくても、行動の指針に変化が無いという事はオリヴィエの代わりがいて組織に何の動揺も無く事が進められている、という事である。どちらにせよ、脅威には他ならなかった。

『……あとね、ちよつとやべー事がわかったからユルキ君とめいよーちゃんにも伝えとこーかなって』

自分達が皆殺されても、二人が情報持ってたらまだどうにかなるかもしれないしね、という前置きに、ユルキはそれが軽い情報では無い事を感じ取る。

『代替品』。例のやつの解析で何度か出てきてるけど、その詳細がわかったよ』

報告からその情報を前にも伝えられていたユルキは無言で頷く。代替品。槍の一族がその本家、ニュートン家から与えられていた、ニュートンの一族に連なる家系としての、ひと際特殊な役割。

一族が存亡の危機に陥った際に、当主が急逝した際に、その代わりとして一族の当主を、その先にある目的を果たすための役割。

成程、人類最先端まで改良されていた一族の血。それが絶えてしまえば長い歴史が全て失われてしまう。

絶える、までは行かなくとも、一族の中で最も改良が進んだ当主とその家系が死ねば、数代、もしくはそれ以上の代も後退してしまう。

その為に、スペアが存在している。大事なファイルはバックアップを取ってクラウドストレージなりUSBなりに保管しとかないとね。

……とノンナが常日頃から言っている事で、時々隊長に説教している事だが、つまりはそれに近いものなのだろう。

そうそう、また隊長がデータ保存するの忘れててさあ、などという愚痴が始まりそうになったため、ユルキは続きを促す。

『……これまでの情報から、薄々そうなんじゃないかなー、つて思ってたんだけど。まさか本当とはね』

呆れたような、ドン引きしているかのような。そんな表情で、ノンは真剣な面持ちでぽつぽつと語っていく。

以前に得られた情報。ニュートンの一族次期当主、ジョセフ・G・ニュートンと僅かに違うだけでほぼ一致する塩基配列表。百人近い一族の人間と思われる塩基配列表。”代替品”という言葉。

そこから、その外見と人懐っこい性格が与える印象からかけ離れた知恵を持つ彼女が導き出し、そして、つい先ほど事実だと確定した、その情報。

『絶対に戦っちゃダメだよ。オリヴィエ・G・ニュートン。あいつ、ジョセフ・G・ニュートン……そうじゃなくてもその前の当主と器が同じだ』

言ってる意味、わかるよね。自分で言っただけなりした様子なのに、ユルキもまた、察してしまう。

次の、その回答が語られる前に。

『……あいつら、その時の最新の血のクローン作ってそれをご神体にして崇めてるんだよ』

まずい。脳内で警鐘が鳴る。それは詳細を知っているユルキだけでなく、一度交戦した健吾と武もだ。

ユルキのここに何をしに、健吾と武の何故今だ生きている、という疑問は二の次。

千古だけでも勝ちの目が薄いのに、それに加え、第二班総動員でかかってようやくやく倒した怪物を、同時に？

「あの、その」

三人以上に動揺しているのが千古だ。

口からはうわごとのように纏まらない言葉が出て、後ろを振り向く事ができていない。

「千古、ぐっ苦労様。今はどんな状況なのかな」

その身に纏う気配さえなければ、この上なく魅力的であろう貴公子然とした整った顔に、慈しむかのような微笑みを浮かべてオリヴィエ

は自分に背を向けたままの千古に問う。

ただ、その声は笑っていなかった。先ほどと同じ、感情に乏しく何の色も感じられない、強いて言うならば空白か灰色か、という具合のものである。

「はいっ！ オリヴィエ様を愚弄した愚か者を処断する所でしたが、私の実力が及ばず——」

即座にオリヴィエに向き直り、跪き報告する千古。

今ならば逃げられるか。退路を確認し、三人は一步、また一步と下がる。

千古の報告にオリヴィエはふむ、と顎に手を当て、少し考え。

「私は君に、何をお願いしたんだったかな？」

千古の言葉を遮るように、普段よりも少し早口で、問いかける。

びく、と千古の肩が震える。それは、オリヴィエの様子が普段と異なっていたからだ。

「……オリヴィエ様の、大切な探し物を」

はつと一度顔を上げた後、千古は瞳を潤ませ、額を地面に擦りつける。

「ああ、構わないとも。とても嬉しいよ。ただ、私が何と言われようがどうでもいいんだ。それで、見つかったかい？」

見失っていた。主君が何を優先する事を望むか気付いていなかった。主君の望みよりも、自身の感情を優先させてしまった。

それを恥じ、千古は顔を上げる事ができない。

何より、オリヴィエの声が自身に向けてくれる普段と違い、感情の抜け落ちた冷たいものとなっている。

「……未だ、相手の手に」

瞬間、空気がさつと変わるのを場の全員が感じ取る。おぞましい気配が消え、気味の悪さが空間から去る。

「……君達、まだそこで死にたくは無いだろう？」

オリヴィエは千古からゆっくり目を離し、三人を見つめる。そして、確認した。

ユルキが拾い上げて持っていた、その本を。

「その本を返してくれたら、見逃してあげよう。ああ、ウチの部下にも伝えて君達だけは殺さないようにしてあげてもいい」

「……」

オリヴィエの出した条件は、三人にとっては破格のものと言える。ただ、この拾った本を返すだけで——少なくとも第二班の二人にとつては、であるが、今この決して勝ちの目が無い戦いから命を拾う事ができる。

「……断ります」

だが、ユルキはオリヴィエの問いかけを切つて捨てる。それは、独断の行動では無い。健吾と武も、同時に目配せしていたからだ。

「ああー。この条件では足りなかつたかな？ 何が望みだい？ お金なら好きなだけ……そうだね、円だったら10ケタまでなら何とかしようとも！」

槍の一族に関する情報についてはユルキの知識は二人より大きい。実際に一度相對している、という点では健吾と武はユルキには無いものを持つていた。そして、その二つが合わさり、気付く。

相手は、その度合いこそわからないものの、この本の入手のために必死になっていると。

やろうと思えば無理矢理奪い取れるのにそれをしないのは、自分達が万が一の手段に出る事を恐れているため。

動揺を見せずに飄々としていれば自分達はこれのそこまでの重要性に気付かれないのにそうせずにはいられないのは、考える頭が無いから。いいや、この男に限りそれは無いだろう。ならば、そこに考えが及ばない程にこれに執着しているため。

「駄目だ」

ユルキに続いて、健吾は武と交互に頷き言う。

恐らく、自分達はここで死ぬ。これからユルキがする事の結果。自分達は殺される。

だが、確実に譲れないものがある。

人類滅亡の計画が書かれた本。それを熱心に求める怪物。その手に渡つてしまえば、プラスの結果になる事は無いだろう。恐らくは、



酷い事になる。だからこそ、ここで。

「お金はいらないと。お金で買えない……もしかして大切な人を生き返らせたのかい？ だったら任せてくれていいとも！ ご両親でも恋人でも、友人でも誰でも再開させてあげよう！」

明らかに焦っている。動揺している。感情の薄い、自身が死の間際にあつてすら揺らがなかった、人を逸脱したニユートンの上位者だ。だが、と。ユルキは懐からあるものを取り出し、そして。

「……コレを貴方に渡すわけにはいかない」

距離が離れていた事もあり、オリヴィエと千古が対応する時間すら与えずその取り出したもの、ライターで、本に火を付けた。

「あ……あ……」

千古が茫然と呟く。地下の汚れなのか、油でも染み込んでいたのか想像以上に火が回り、瞬く間にその全体を火が包み、灰へと変えていく。

その光景に、しかし先の自分のオリヴィエの意思を無視した事により不興を買ってしまったと恐れている千古は動く事ができず怯えながらオリヴィエを見上げる。

交換条件を提案していた時のまま硬直したその表情。

それが、徐々に無へと変わっていく。

「……千古」

「は、ひっ、」

聞いた事も無い主君の冷たい声に、千古の返事は喉で絡まり、震えた声として出される。

右目だけがきろりと動き千古へと向けられ、そして。

「殺せ」

瞬間、空気が汚泥の深海に沈んだかのような、先ほどのおぞましいものに加えて重い、息苦しさが加わったものへとにわかに変わる。オリヴィエが自身の背から槍を抜き動き出し、千古もそれに続く。

恐らく長くは持たないだろう。だが、精一杯の抵抗はしてやろう。三人はそれぞれの武器を構え、二人を迎撃しようとし。

「じょう、じ」

そこで、これまで沈黙を保っていた観客が初めて動きを見せた。

美友がいなくなり混乱し、その場に立ち止まって停止していた彼らが、突如としてオリヴィエと千古に襲い掛かる。

オリヴィエの振るった槍により一瞬で3匹の喉に風穴が穿たれるが、だが彼らは止まらず。

次から次へと襲い来るその黒の波に、さしものニュートンの一族が二人と言えど、無人の荒野のように進む、というわけにはいかず対処に時間を取られる。

しかしその足止めを一足先に潜り抜けた千古が撤退の姿勢を見せたユルキの背を刺し貫こうとする。

「させませんよ千古さん！」

「っー」

だが、そこに上空から針の塊が落下し、その奇襲に切り落とすのは無理だ、と判断した千古の道を阻む。後退した千古に再び伸びるテラフォーマーの手。

「よう美晴、何してんだ……」

呆れた様子の、しかし嬉しそうな武に対し降ってきた針の塊、変態した美晴が指さすのは、ドームの上方に空いた、最初にユルキが降ってきた縦穴だ。

だが、会話させる隙などあるのか、と言わんばかりに、千古の腕が振るわれる。着地でふらつく美晴に回避手段は無い……のだが。

「ハルハル、無茶しすぎ！ あと重い！」

焦った、少し怒るような声の後、その剣の軌道から美晴の姿は消える。

剣でそれを捉える事こそ間に合わないが、美晴がどこに行つたのか、千古はそれを目で追ひ、追撃は難しいかとテラフォーマーへの対処に移る。

美晴は、美友に抱えられ空を飛んでいた。美友の背から生えているのは、紫を内に、黒を外側に現した蝶の翅だ。お世辞にも早いとは言えず、ふらふらとした調子ではあるものの、しかし確かに宙を舞い、美晴を地面に卸した後に着地する。

テラフォーマーが突然動き出した理由。それは、彼らが熱狂する対象が、その能力を持つ人間が戻ったからだ。

「さあ、アンコールの時間だよ！ 皆、準備はいい!?」

マイクに向け美友が大声を上げ、それに呼応するかのようにテラフォーマーが鬨の声を上げ、オリヴィエと千古へと襲い掛かる。

「……」

「ハッ、させねえよ」

「美友には触れさせない……!」

美友がテラフォーマーを動かしている事を即座に把握したオリヴィエの槍の穂先が美友に向けられるが、それは 同種の武器、健吾の槍により弾かれ、その懐に潜り込んだユルキがオリヴィエの首を狙い、押し返す。

何故だろうか、健吾はそれに、弱い、という感想を覚えた。確かに未だ自身では対処困難だ。しかし、オリヴィエの動きが前に戦闘した時よりも明らかに鈍い。不調なのか何なのかはわからないが、だが恰好の機会だ。

ふと健吾が周りを見れば、いくつものトンネルから新たなテラフォーマーが集まって来る。

千古の能力と自身の太刀による斬撃はそれを切り払い、オリヴィエの手に持たれた槍もまた次々とその喉を穿つが、それ以上の物量攻撃が襲い掛かる。

背後からいつ攻撃が来るのかわからないためたびたび振り向きながら、しかし出せる限りの全力で、健吾達は走り、部屋を抜け、トンネルを駆ける。

そして、背後からテラフォーマーの声が聞こえなくなる頃合いになり、彼らはようやく息をついたのだった。

## 第95話 第三楽節

「兄ちゃん、手紙！」

「ん……？ ああ、ありがとな」

例年よりも少し早いだろうか。雪がちらついているのを眺めていた剛大に、弟から大きめの封筒が差し出される。

手紙を出されるような何かに心当たりは無い。仰々しい広告か何かだろうか。

胡乱げに封筒をひっくり返して差出人を見た剛大の眉が少しだけ寄る。

重森健吾。そこには、彼の部下の名前があった。

鼓動が少し早くなる。タイミングから言って、任務に関係した何か。任務が終わったので遊びに行きます。U—N—A—S—Aに帰るのでご挨拶を。それであればいい。しかし。

死者が、そうで無くても重傷者が出てしまった、などという報告の可能性もあり得る。何せ、わざわざMO能力者が動員された調査だ。恐らくはテラフォーマーが関わっている。第二支局所属とはいえ休職中の身だ、その詳細までは知る事ができなかった。命の危険性がある任務の結果報告。最悪の結果。

その可能性が剛大の気持ちを逸らせ、丁寧な彼には珍しく封筒の口を破いてしまう。

中に入っていたのは、健吾のものだと人目でわかる汚い字で殆どが書かれた一通の手紙だった。

深呼吸。例え何を書いてであろうとも、目を逸らしてはいけない。

一度腹に力を入れ、剛大は文章を読んでいく。

拝啓、島原剛大様。

……いきなりの堅苦しい挨拶に、いつもの剛大ならば笑みをこぼしてしまったのかもしれない。

だが、今の彼はその逆だった。健吾に似合わないその固い文章で、これが真面目な内容であるのだという予測が強まってしまう。

だが、次の数行を読み剛大はほつと胸をなで下ろした。

任務は無事に終わり、戦闘こそ起こったものの死者はゼロ。

ぶつちやけ結構危なかったけど、現地で同じU—N A S A所属の間と出会い、協力して何とか事を切り抜けました。

いきなり緩くなった文体に、今度こそ剛大の頬も緩む。こちらに来るならば、ささやかではあるが祝つてでもやろうか。そう考えるくらいには。

気分が軽くなり、すらすらと読み進める。

今回は少しU—N A S A本部の方の事情で早く帰る事になったので寄れないのが残念。

しばらく今回の任務の関係で忙しくなるので来られないかも。

弟さんと妹さんにお礼を言っておいてください。美晴のものだろうか。ヘタではあるが丁寧にした事が伺える文字。

そのような内容が、書き連ねられている。

締めには、これまた堅苦しい文末の挨拶が付け加えられていた。

追伸：班長に挨拶にも来ないあのバカは俺が代わりに一発殴つておきます。

そこだけ、健吾が書いたのだろうかやけに綺麗な字になっているのを見て、剛大は思わず、僅かではあるが口端が歪んでしまう。

「……俊輝もアイツなりに頑張つてるんだ、そう責めてやるな」

独り言をこぼし、手紙を丁寧に畳んで封筒にしまい、車椅子を動かし棚へと向かう。

その引き出しの一つを開けると、そこには何通もの手紙が入っていた。

そこに新たな一つを加え、閉める。

兄弟たちには伝えてあげたいが、戦闘が云々と書いてあったため、手紙を見せてあげる事はできないだろう。

まあ連絡が来た、とは話すか。暫く来られないとなると、寂しがるだろうな。そんな事を考えながら、剛大はふと手紙の内容を頭の中で繰り返し、車椅子を止める。

「……」

自分が先ほど考えた事を、思い出せ。日本で、何らかの調査？ 警察でも自衛隊でも、他でも無いMO手術関係から動員された戦力が事に当たっているため、同じMO手術の関係、もしくはテラフォーマー。ヨーロッパやアメリカ、ロシアでは裏社会でのMO手術の広がり、酷いものがあると裏アネックス計画時にエレオノーラやダリウス、エリシアという同僚たちから聞いていたが、日本でも？

……いや。その可能性は考え辛い。大規模な発展こそ無いが逆に大きな衰退もまた無いこの国に、大々的にMO手術を導入できるだけの土壌があるとは思えない。

狭い上に特に武器と呼べるものの規制が厳しいこの国で、強大な武力を持った組織はそもそも居づらいだろう。

日本は公務員のMO手術を推奨してはいないが、それは知らない、というわけではない。

反社会的組織がMO手術を持っていたからと言って、それに対処する際に情報漏洩を気にして警察や自衛隊を出さないというのは理屈に合っていない。

勿論、元警察官とはいえ裏社会の事情の全てを知るわけではないが、剛大はそう考える。

……ただ、格差が広がり地下に追いやられた人が多数存在する、という現状は、それが育つ土壌であるとも考えられるが。

有力なのはもう一つ。テラフォーマーだ。

地球にテラフォーマーがやって来ている、というのは各国の上層部と国家直属となる軍や研究組織、それに準ずる人間に限られている。

だが、具体的な調査とそれに続く急を要する対処が必要な程にその数が膨れ上がっているのか？

少なくとも、実際に被害や多数の目撃例などの証拠が出ているのだろう。

それも、警察や自衛隊を動員するのに際し何らかの不便が生じる場所。

さらには、U—N—S—A所属の人員が既に現場にいた？ それも、第二支局に知らされていない人間が。

何かがある。

簡潔で単純な、しかし確かな結論。剛大は一度、目を閉じ。

「伊予、電話を取ってくれ」

「はい、兄さん、どこにかけますの？」

思い出す。自分が、何故警察官を目指そうとしたのかを。

それは、庭で無邪気に笑ってはしゃぎ回る、炬燵で寝息を立てている、動きづらくなった自分の為に家事をしてきている、そんな、大切な人達を、悪逆に触れさせないために。

「U—N—A—S—A第二支局に、頼む」

—— 神殿 最深部

「今回はご苦勞様だったね、千古」

「……ありがとうございます、ごさいます」

労いの言葉に、しかし千古は上手く言葉を返す事ができず、齒切れ悪く玉座に座するオリヴィエに向け、深く膝き頭を垂れたまま返事をする。

「ああ、別に怒ってはいないとも。ごめんね、あの時は年甲斐も無く興奮してしまった」

「いいえ。オリヴィエ様のお怒りはごもつともです。私の力が至らなかったが故に、このような……！」

ぽたぽたと床に落ちる涙を拭う事も無く、震える声で千古は自身を責めるかのように言葉を絞り出す。

「千古」

「……はい」

名前だけを短く呼ばれた事に千古はびくりと肩を一度震わせ、弱弱しく答える。

名前だけを呼ばれる。それで、思い出してしまったのだ。先の任務の、己が敬愛する主の初めて見た、余りにも冷酷な声とその気配を。



「エスメラルダは死んだ。でも、君は生きている。今も、私に結果を捧げられなかった事を気に病んで苦しんでいる。でもね」

千古は特別相手の心理を読む事に長けた人間では無い。

特に主君であるオリヴィエの感情の変化は声色も動作もあまりに平坦でわかり辛い。劳いの声に感情は無く、笑みと共に向けられる声にも感情は無い。

「私には、その忠義が、そんな君が生きて帰って来てくれた事が何よりも嬉しいんだよ」

「……………」

ただ、それでも千古は思うのだ。この人は何だか暖かい、と。それはきつと、他の人は誰も思わない事で、でもだからこそ、自分だけが、と。

「そもそも、今回の件については取り逃してしまった半分くらいは私の責任でもある。やはり急ごしらえの体では弱すぎたね。せつかく有力な候補地だったんだ、リスクを冒してでも……………」

「いえ……………いえ……………！ そんな事は……………！」

苦笑しながら自身の手の甲の皮をつまむオリヴィエに、しかし千古はその言葉を否定する。勝てる相手だった。オリヴィエ様が何よりも欲していたあの本は失われてしまった。せつかくの期待を裏切ってしまった。

自身の至らなさや期待を裏切ってしまった苦痛に、涙の量が増える。

「うん、そうだね。君には罰を与えよう」

いくら言っても千古は納得しないと考えたのか、オリヴィエは千古に対し、穏やかな声で語り掛ける。

「暫くの間、この場所の警備を命じよう。本格的に動くからね、防備は有力な人に任せたいな」

「……………御意に……………」

顔をぐしゃぐしゃに歪め、そこで初めて顔を上げ、千古は己の主に、改めて、今度は違わないようにと忠誠を示す。

満足そうに頷くオリヴィエ。

「……では、予定通りに?」

そこで初めて、千古が玉座の間を訪れた時から一度たりとも口を開かなかった希?が、確認としてオリヴィエに問う。

今回の千古の処罰に関して、あまりに重いものであれば忠言を上奏するつもりであった。本来であればオリヴィエはそのような事をしないが、今回だけは勝手が違った、その恐れがあったからだ。しかし、蓋を開ければ心配は無かったようで、安心していたのである。

「ああ、そうだとも。結局、答えはわからなかった。それは残念な事だけど、まあまあ仕方がない——」

そんな希?の問いに対し、自身の従者と部下に、告げるように。槍の一族の王は目を細め——

「この世界を押し流そう。箱舟を作る必要は無い、作らせはしない。遍く全てを新世界の土壌とし、楽園を築こう」

——U—N—S—A本部 第七特務執務室

「……ふあ」

夜更け。一連の騒動が収束し、報告書を仕上げていた俊輝は欠伸をし、パソコンの電源を落とす。

「……ねえ隊長、祝賀会に出ない?」

「おう!」

そこで初めて、背後に立っていた人間の存在に気付き、慌てて振り向く。

心臓がバクバクと鳴っている事を隠しながら。

戦闘中だったり殺気を伴った相手であればいくらでも気付く事ができるのだが、今の俊輝は眠気に押されている事もあり、部屋に入つて来た侵入者に気付けなかったのである。

「なんだ美友、脅かすなよ……ライブなら今日は勘弁してくれ……死ぬほど疲れてる」

そこに立っていた部下、美友はパジャマを着ていた。

その手にはスナック菓子が握られており、彼女が暗部組織の隊員で

あるとはこの姿を見ても誰も信じない事だろう。

「ん……そうじゃなくて」

そこで、俊輝は美友の様子がどこかおかしい所に気付く。普段であればノンナと二人で二倍うるさい彼女が、どこか気落ちした様子で……というか、何か申し訳なきような表情で、自分を祝賀会とやらに誘ってきた。

日ごろからユルキとノンナと共に彼女の自作の歌を一晩中間かされる事に慣れている俊輝であるが、それとは違う様子に、不安が募る。

「祝賀会……？ ああ、今回の任務のか」

俊輝とカロラ、クロヴィスが赴いたダリウスの確保。それ以前から日本でテラフォーマーの調査に当たっていたユルキと美友。その両方の任務が晴れて終わったため、その関係だろうか。

ただ、結果としては最良に近いものを得られた俊輝達アメリカ組と異なり、日本組の二人はそうでは無かった。正確に言えば、中断を余儀なくされたらしい。両組とも今日帰ったばかりのため詳しい報告はまだだが、槍の一族の介入により任務続行は無理と判断されたのだろうか。

だから気を病んでいるのか、いつも明るいいお前らしくも無い……と  
言いかけて、それはユルキに言わせるべきだな、と思い直す。

「いいぜ、行こうか。……あんまり遅くなってもアレだけだな」

「うん……ごめんね、隊長」

冗談めかして笑う俊輝だったが、返って来る声はやはり暗く、謝罪の言葉が混じる。

普段は任務に失敗したり取りこぼしがあっても言い訳ばかりする美友だが、これはだいたいぶ気にしてるな、隊長権限で臨時で休暇でも……などと考えている間に、その祝賀会の会場らしい第七特務に割り当てられた一室の前で美友は脚を止める。

「……どうぞ」

丁寧語。本格的にらしくないな。まあ自分も仕事で気落ちする事はあるし、せいぜい祝賀会で盛り上げ役でもやってやるか。

謎の覚悟を決めながら、俊輝は部屋に入り、そしてその覚悟は一瞬

で別の方面に発揮される事となる。

「よう、隊長どの。随分と出世したなあ？ 血生臭いお仕事、ご苦労さん」

「……っ!？」

部屋の中にいた、この場にはいけない、いるはずの無い人間。思わず、背後でドアを閉めた美友を振り返る。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

震える美友。いつものような、庇護欲を露骨に煽り周囲を味方に付ける処世術では無く、本心からの怯えた声の謝罪。

「……隊長。美友は悪くない。俺の責任です、どうか罰するなら俺に」  
部屋の中にいたのは、二人だけだった。一人はユルキ。神妙な面持ちで、俊輝に縋るように美友と同じく暗い調子で。

それは、様々な料理に彩られたテーブルという祝賀会の雰囲気とは遠い、暗いもので。

そんな雰囲気とは裏腹な部屋の奥で脚を組んで座る青年は、頭に乗せたパーティグッズ、銀紙で飾られた紙製のとんがり帽子をとんとんと突き、皮肉げに笑う。

報いを受ける時が来た、ただそれだけの事だ。俊輝は目の前の青年を見て、片手を挙げて軽い調子で——勿論自嘲の意味を込めて、挨拶する。

「他の皆が来るまでまだあるからよ、ゆつくり聞かせてくれよ。仕事の事とか、可愛い部下の話とかよ」

「……ああ、わかったよ、健吾」

第七特務と第二班、任務終了記念合同祝賀会。その開始より、30分程前の出来事であった。

## 第2部 3章 生命の樹

夢を見た。

どれかが正解かもしれないなくて、全てが間違いかもしれない夢を。

自分勝手に、心では無く身が在る事を、救う事を優先し、その為ならば仲間でもと望む物質主義者の私がいた。

あの人の命を奪ったこんな世界など滅びてしまえ、と不安定に狂う私がいた。

愛する貴方が臨むのなら世界でも何でも捧げよう、捨て駒にでもなろう、と色欲に全てを捧げた私がいた。

次を食らえばこの餓えが、乾きが満たされるのかもしれない、と貪欲に求め続ける私がいた。

ただただ、世界に失望し無感動な私がいた。

己が胸の空白を満たすために他者を蹂躪する残酷な私がいた。それは自分の切実な願いで、でも幸せを願った友はそんな事を望んでない事に気付けなかった愚鈍な私がいた。

変わってしまったあの人の事が、その現実が認められず、全てを拒絶した私がいた。

神なんかいないと思う、でも神を信じろと命令するなら、貴方が神になるべきだと言った無神論者の私がいた。

自身の辿り着くべき終点に必要なであるから、人の心を集め続ける。自分は所詮人間であるとわかっていているから、人の心を探し続ける。

ただ、何故そこに辿り着きたかったのか、という本当の答えは、結局わからない。

いくら考えても、既に流れてしまった時間の内にあったそれは、知りようが無かった。

嗚呼、答えを得る機会は、永久に失われてしまった。

どれが本当の私だったのだろうか。それとも、この中には無いのだろうか。

……たどり着いた楽園で神に至り、人を愛し、永遠の時間を哲学し続けられ、いつかその答えを見つucker事はできるのだろうか。

—— 神殿 第七圈 大霊墓

「今日は、外はいい天気みたいですよ」

花束を両手に抱えて、希？は墓に話しかける。

花畑の中に突き立つ無数の十字架。

それが神殿の一階層、広大な空間を埋め尽くす墓地の全容である。

高い天井には人口太陽の光が輝き、地面はどれほどの深さがあるのかもわからない土によって構成されている。

「うーん、そうっすねえ……この前はチコちゃんが——」

そんな、生の気配が植物以外には感じ取れない、人類が滅亡した後の世界のようなこの場所で、希？は墓の隣に座る。

故人を偲ぶというよりは、まるで友達と話すような気安い調子で。

それから、いくつかの取り留めも無い話を語る。

自分の身の周りで起こった、同僚たちや主君の出来事を。

「……」

そんな希？の近くでぼんやりとしているのは、一人の女の子。

金の長髪に藍の目。一枚布を巻き付けただけの服を着たその女の子は、希？と共にここにやって来ていた。

「もう少し待って欲しいっす、リンネちゃん」

そろそろ飽きてきたかな、と考えて女の子、リンネにお願いをして、希？は再び墓に向けて話し始める。

リンネは返事をしなかったが、抗議などをする事は無く、とある場所に向けて歩き出した。

おおよそ6〜7歳程の小さな歩幅で数分歩きたどり着いたのは、辺り一帯の花が刈り取られてはつきりと数十の十字架が姿を見せている墓所の一角。

その内に一つに、リンネはしゃがみこみ、そつと、その手に持っていたものを、赤い花を一輪、添えた。

「おーい、リンネー？」

立ち上がってじつと墓を眺めていたリンネは、その名を呼ばれてそちらへと反応する。

この階層と他の階層を繋ぐエレベーターへと続く通路、この墓場への出入り口と言える場所に、リンネと同じ年くらいの男の子が立っていた。

元気いっぱい、という様子で、でも同時にどこか、恥ずかしがっているような遠慮が伺える雰囲気、その男の子はリンネへと向けて手を振る。

「……ん」

男の子には聞こえていないだろう小さな声で返事をし、リンネは男の子の方へと歩き出す。

途中で一度だけ、後ろを振り返り。その表情にはいつも通り変化は無く。風一つ吹かないこの空間で、墓に添えられた赤の花が、ぽつんと一つ残された。

「……ふふ、やっぱり、子どもって落ち着きが無いものなんすねえ……リンネちゃんはどうなのかはわからないっすけど。私はどうだったっすかねえ？ 丁度同じ年くらいだったっすけど、覚えてないみたいで」

リンネを待つて、そのまま自分をスルーして通り過ぎたマイペースなリンネにショックを受けつつも慌てて追いかける男の子。二人を微笑まし気に見やって、どこか昔を懐かしむ様子で希？は答えなど返ってこないとわかっていながら訪ねる。

「じゃあ、そろそろ行くっす。また今度も面白い話を持ってくるから、楽しみにしていってくださいね」

ふと、そんな気分になって。あなたは、自分は、オリヴィエ様に会つてすぐは、こんな口調だったっすね、と思い返して。昔を懐かしみながら、希？は小さい二人を追いかける。

『Xiwei van Gegend』と碑に刻まれた、その名前を  
後にして。



## 第96話 夜明け時

——ローマ連邦・イタリア クイリナーレ宮殿

白亜の壁が荘厳な雰囲気醸し出すこの宮殿は、イタリア国王の宮であり、大統領官邸であり、そして現在ではローマ連邦の大統領官邸として機能している。

その内部、客人用の特別な一室で、彼は目を覚ました。

「……」

体を起こし、寝起きのぼんやりした頭で壁にかけられた時計を見る。

約束の時間に遅刻するという時間ではない。

さりとて、今から二度寝をして……なんてことができるような時間でもない。

生まれて初めての柔らかさの布団で逆に落ち着く事ができず眠れなかったのである。

恐ろしく高級な布団だ……と彼は改めて苦笑する。

本当ならばもう一度身を横たえたいけど、そろそろ朝の用意を始めないと。

そう考えた彼は、自分の隣を見る。

正確に言えば、同じベッドで寝ている、二十歳を迎えたか迎えていないかというくらい、彼と同年代の女性の顔を。

少し癖っ毛だから、と普段から彼女が気にしている金の長髪は主のそんな意思など知るかと言わんばかりに無造作に広がってベッド内の青年の領地を侵略し。

どこか高貴さを感じさせる整った顔立ちではあるものの、いい夢でも見ているのかその表情はだらしく緩んでおり、懐っこい犬かなにかを彷彿とさせる。

幸せそうな表情で寝息を立てている彼女を起こそうとして、すこし逡巡する青年。

理由としてはこんなに幸せそうなのに起こすのは悪い、というのがまずひとつ。

自分のせいで、彼女には多くの苦勞をかけてしまっている。  
こんな高級なベッド、自分は逆に落ち着かず寝付けなかったが、彼女にとっては懐かしい感覚なのだろう。

ふたりの懷事情から彼女にこんな寝具を用意してやれない罪悪感もあり、起こすのは躊躇われた。

そして、もうひとつの理由。

「……ふふ」

”最近、よく笑うようになりましたわね”

彼女の寝顔を見て、その通りだと青年は穏やかに微笑む。

彼のこれまでの人生は、地獄と言ってもよかった。

孤児院とは名ばかりの研究施設での日々。

実験で薬を投与され、時には能力試験のため人を殺す事を強要されることさえあった。

それから解放されたのは、ほんの数年前のことだった。

そこから今に連なる生活は、彼に生きる実感を十分に与えてくれた。

幸せだ。

今の彼は、心の底からそう言うことができるだろう。

そしてその幸福は、横で眠る彼女の存在が大きな要素を占めていることを否定などできない。

「……起きろ、遅刻しちゃうぞー」

いたずら混じりに、彼女の鼻をつまむ。

「んむう……」という少々苦しそうな声と共に、形のいい眉が顰められる。

ちよつとだけ悪く思いぱつと手を離すと、再びその表情はふにやつとしたものへと。

別に起こさなくてもいいかな？ という考えが、青年の中に湧き上がる。

今日の用事は自分ひとりでも済む事だし、ゆっくり休んでもらっても……と。

彼女の為を思うだけではない。

なんというか、起こすのをちよつとだけ惜しく感じるのだ。  
ころころ表情を変える彼女は、いつまで見ていてもきつと飽きない  
だろう。

いや、別に表情を変えていなくても……。

そこまで考えて、少し気恥ずかしくなり。

青年は自分を誤魔化すかのように頬をかき、意味の無い独り言を呟く。

「……んう？」

そんな青年の横で、彼女はうつすらと目を開いた。

「あら……起こそうとしてくださいましたの？」

寝起きのぼやんとした目で、青年を見つめる女性。

いいえ、寝顔を見ながら悩んでいた段階です、なんてとてもいえぬ。

「おはよう、エミリー」

「おはようございます、シロ君」

ふたりは、穏やかに朝の挨拶を交わすのだった。

——数十分後、朝の用意を済ませこれまた品のいい調度品がしつら  
われた応接室に迎えられたシロとエミリーの前には、老年の男が崩れ  
た様子で椅子に腰かけていた。

澆刺とした、歳相応の老いを感じさせない男性だ。

それもそのはず、と言えよう。彼はこの国の主とっていい存在な  
のだから。

彼、ルーク・スノーレソンは微かな呆れを持ってふたりを順々に見  
る。

「眠そうだな、お前ら……」

開口一番、ルークは呆れた様子の子の声を出した。

それはルークが人間観察を得意としているというよりかは、ふたり  
の状態が誰の目に見ても明らかだったという方が近い。

最低限の礼儀はここ数年で培ってきたため、欠伸を必死に堪えてい

るシロ。

ほわほわと意識が定期的に向こう側に行ってしまいそうになっているエミリー。

そんな眠たそうなふたりに見て、ルークはふむ、と一度頷き。

「若いお前らに我慢しろとは言わないけどな、こういう日の前くらいはちよつと自制心を……な？」

爆弾をぶち込んだ。

「そ、そんなんじゃないです俺たち！」

「ななな、なにをおっしゃいますの!？」

しゅぼつ！ という音でも聞こえそうな勢いで同時に顔を赤くし、ルークにまくしたてるシロとエミリー。

そんなふたりをへつ、と鼻で笑い、ルークは話を進める。

「冗談だつての。シロ、お前みたいなヘタレは手出せねえだろ」

ぐぬぬ……と押し黙るシロ。

ヘタレという点に関しては大いに反論したいところである。

だが、それを否定すると別のところで問題が発生するのも確か。名誉を捨てて実を取った形である。

強情な子どもではなく、彼も成長しているのだ。

「んで、本題に入るが……お前らに、仕事を頼みたい」

神妙な様子の子のルーク。

雑談は終わり、ここからが本題だ。

シロとエミリーも身を整える。

ルークはふたりにとって、お得意様とでも呼ぶべき存在だ。

シロがここ、ローマ連邦に流れ着いてから3年が経つ。

まともに金を稼ぐ手段は限られている。資金もいつか尽きる。

中国の追っ手から逃れ、かつエミリーに人並みの生活をさせてやりたい。

そう考えた彼は思い悩み、そして重大な価値があるものを所有している事に気が付いた。

それは、『自分の肉体』。

臓器の需要が高まっているだとか体売るだとかそういう話ではない。

シロの体は、幼い頃にバグズ手術の被術者から受けた臓器移植の結果、本人のMO手術ベースに加えてさらにその移植元の能力も発現する特異な状態である。

中国はシロの体を検査し、同様の手法によってMO能力を複数持つ被検体を生み出そうと実験を繰り返していたが、成功例は見られず。『ファースト』や『セカンド』と比べれば劣るだろうが、それでもMO手術の発展にとって重大な意味を持つことには変わりはない。

それを、ローマ連邦の大統領府へと売り込み。

結果として、シロは定期的な検査やちよつとした実験に付きあったり、国に属さない戦力として裏の仕事をルークから任される傭兵めいた仕事を担ったりしている。

以前にシロは、謎のデータディスクの奪還を命じられた事がある。その時は想定外の介入があり失敗してしまったが、どうにもきな臭いものを感じていた。

今回もまた、それ絡みの話なのだろう。

根拠こそないものの、直感というべきものでシロはそう予想を立てていた。

そして今のシロは知らないものの、ルークから語られたのは予想通りそれに関連する任務だった。

場所はフィンランド。

とある機密研究施設の強襲、という内容である。

なるほど、具体的にはわからないがローマ連邦になにやら都合が悪い研究でもされているのだろうか？

そう考えるシロとエミリー。

「いや、設備自体はどうでもいい……頼みたいのは目標の暗殺、もしくは捕縛だ」

しかし、ルークの次の一言で首をかしげる事となる。

暗殺か捕縛？ わざわざ機密の研究室に潜入してまで？

「いや、わかるぜ。他にやり方はねえのかつてな」

ルークは忌々しそうに頭を搔く。

特定の人物が対象なのであれば、わざわざ研究室、それも機密の施設にいる時を狙う必要がない。

外に出たタイミングを狙えばいいだけの話なのではないだろうか。そもそも研究所に引きこもってる相手なのだろうか？

「……その、外に出てるタイミングってのが今なんだとよ」

そりゃ正論だけどな、とシロとエミリーの言葉を肯定した後で、ルークはだが、と説明する。

ルークの言葉の意味が理解できず、仲良く首をかしげるシロとエミリー。

「本来はもつと機密性もセキュリティもガチガチの場所に潜んで、これでも一大チャンスなんだってよ？」

付け加えられた説明に一応の納得をするふたりだったが、しかしそれでも疑問は残る。

恐らく、軍人やMO手術被術者によって守られている機密施設。

そこを『外』と表現せざるを得ない程に表に出てこない標的とは、一体何なのか？ と。

話を聞き、今回は断ろうというのがシロの正直なところである。危険すぎる。

リスクを侵すのは裏社会の稼業の常ではあるのだが、今回は目標が未知数に過ぎた。

彼にとって最優先するべきなのは、エミリーと自分の安全である。裏社会に身を置いているのも、今のシロにとってはそれが一番安定

した手段だったからだ。

だから、リスクがそれを上回ればすぐにでも逃げる。

そうやって、生き延びてきたのだ。

「ああ、言い忘れてたけどな」

だが、ルークが告げた次の言葉で、その判断は揺らがざるを得なくなる。

それは、ふたりにとって、平穏を脅かす重大な危機を感じさせる内容であったのだから。

「ヤツを放置すれば、世界が滅びるまである、だとよ。それも真つ先にウチの国が潰されかねないってな。聞いた話だけだな」

一度地獄を経験し、平穩を得たはずの彼ら。

そんなふたりの長い数日間、かくして幕を開けることとなる。

ローマ連邦 某所

地下に隠された書庫で、エロネとジョセフは静かに言葉を交わしていた。

一族の秘密の集会所のひとつであるここは、これまでの一族が関わって来た書物や論文の保管庫でもある。

会議にこれといつて向いている場所というわけではないが、急を要する案件であつたため使えそうな場所を使つたのだ。

「エロネ、君は立場、『槍の一族』については最低限の情報しか知ることができなかつたと思う」

ジョセフの言に首を縦に振るエロネ。

槍の一族、ゲガルド家が管理する『神殿』は、ニュートンの血脈が非常事態で壊滅状態に陥っても途絶えないように血族最新のクローン、当代でいえばジョセフのそれを作成し保管しておくための施設だ。

政財界にも強い力を持つニュートンの一族。

彼らが危機的状況に陥るといふ最悪の事態に至つてなお機密性を保つため、槍の一族に関する情報、特に『神殿』の所在地については厳重な情報規制が行われている。

エロネは彼らにとつて、ファティマとの雑談程度で得た大雑把にどのような存在か、という程度の知識しかない。

しかしそれはエロネの立ち位置がニュートンの本家筋から遠いからという理由ではなく、そもそも一族の一般には知られてはいけな情報だからなのだ。

それこそ、その正式な所在はニュートン一家の中ですら歴代当主とその参謀しか知らされていないほどに。

そしてジョセフの父の死により現在当主不在の中、次期当主であるジョセフにその情報は渡っていた。

「今から君には全てを話しておこうと思う」

ヤツらがどんな研究をしてきたのか、そして、どこに本拠を構えているのか。

その全てを君に伝えておきたい。

そう重みを持った声色で語るジョセフに、エロネは思考を巡らせる。

槍の一族の全てを知る事ができるのは、当主と参謀のみ。

一族の中でも決して階級が高いわけではないエロネに本来知るべきではないそれを伝えるということは、つまりはそういう意味なのだろう。

「……喜んで拝命します」

ジョセフが言外に告げたその意味をエロネは察し、頭を下げる。

それに無言で頷き、ジョセフは話し始める。

当主にのみ知る事を許された、その情報。

ある研究施設に姿を現すという情報が何人もの間諜の犠牲により掴めたため、ローマ連邦と一族でそれぞれ戦力を出し強襲を仕掛けるという算段。

そして、これから戦うべき怪物の在り方が、人間を逸脱した何かであるという事を。

「彼に会ったことはありませんが……今話を聞くと、まるで」

ジョセフの知る限りの情報を聞いたエロネの表情には、微かな困惑が見えていた。

その情報が、にわかには信じられなかったのだ。

その敵の在り方が、エロネには信じ難いものとして映っていた。

知識としては理解できても、脳が納得する事を拒んでいる。

「ああ、私たちが始末すべき相手は、我々とは違う摂理を生きている」それは、日本で行方不明になったミルチャがジョセフに以前語った言葉だった。

とつくに滅んでいるはずの存在です……いや、事実、既に滅んでい



る。

それなのに、存在し続けているのです。

お気を付けください。

ジョセフ様なら大丈夫でしょうが……決して、理解などしようと思  
いなさるな。

ヤツは、摂理から外れた存在だ。

「本来ならば、生きているはずなんてない亡霊なんだよ」

そう言つてジョセフは、本棚に手を添え。

憂鬱げに本を2冊、その背表紙を撫で、呟く。

『楽園への階』『不滅なる記憶』。

その著者欄に刻まれた、一族の人間。

彼にとっては、一族の基盤を築いた尊敬すべき先達であるはずの、  
その名を。

「オリヴィエ・ゲガルド・ニュートン……ニュートン私たちの黎明期の当主にし  
て、ゲガルド槍の一族の始祖だ」

## 第97話 朝焼けに幕が開く

―フィンランド エウラヨキ・第一生物工学研究所  
閉鎖都市、と呼ばれる都市の分類が存在する。

戦略兵器の製造・研究所や大規模な軍事基地といった機密性の極めて高い重要設備が存在するため、情報の開示や外部とのやり取りが著しく制限されている都市のことである。

ここフィンランド南西に位置する行政区、サタクンタ県の自治体であるエウラヨキ市も、その閉鎖都市に分類される地だった。

国一つ吹き飛ばせるような物騒な兵器を開発しているわけでもない。

軍事力としても都市を丸ごと機密にしてまで守る程のものを有してはいない。

そもそもの話、閉鎖都市と言うシステム自体が2620年現在ではほぼ存在していない時代遅れな体制といえる。

では一体、この都市の封鎖は何のために行われているのだろうか？  
答えは、北欧の小国であるフィンランドが世界に存在感を示す分野の先端研究が行われている地だから、である。

『生物工学』。その中でも特に生命の設計図を取り扱う遺伝子工学において、フィンランドは2620年現在中国やアメリカといった世界の超大国に比肩する程の技術水準を有している。

国を牽引する最新技術の生まれる場所。

それゆえに、この地は『生まれた人間は一生を内で過ごす』と言われる程の厳格な警戒態勢を敷いているのである。

「侵入者だ！」

静寂そのものだった地下研究施設に、突如として警報が鳴り響く。

危機を知らせる赤色灯に照らされた通路を、ドタバタと無数の足音が駆け抜けていた。

そして、今この研究所を襲っている状況もまた、必然だと言えた。

大規模な軍事力は持たず、かつ高度な技術を有する国。

そこに各国の魔の手が伸びるのは当然の話だ。

「クソっ……どいつが仕掛けてきやがった！」

自動小銃。最新式のボディアーマー。

警備員、と呼ぶにはあまりに物騒な装備に身を包んだ彼らの内ひとりが吐き捨てるように呟く。

「アメリカか、中国か、それとも本家の連中か……最悪のタイミングだ……」

……などと理由を並び立てはしたものの、技術力云々は表向きに過ぎない。

先端設備の研究施設。確かに重要だろう。

しかし、それだけの理由で都市丸ごとを厳重な監視下に置き人々に重い制限を課す、などという政策は他のどの国も行っていない。

当のフィンランド政府ですら、とある事実を知らない大多数の人間はこのような封鎖は不要である、と考えている。

アメリカ、中国に続いてもうひとつ語られた陣営。

機密性が高いとはいえたかが一研究所の警備員が口にした『本家の連中』という言葉が、現在この国を蝕んでいる元凶を物語っていた。

ニュートンの分家、<sup>ゲガルド</sup>槍の一族。

ここフィンランドは、彼らが本拠地を置く場所だ。

加えて言えば、その情報を握っているのはニュートンの本家、その中でもさらに限られた人間のみ。

その秘密を徹底的に隠匿するために、この地は時代錯誤の厳戒態勢を敷いているのだ。

「その最悪を狙ってきたに決まってるんだろ！」

もし襲撃者が本家の手の者であるならば、事は重大を通り過ぎていく。

オリヴィエの行動により、ゲガルドの離反は既に本家の知るところである。

だが、それでも両勢力はにらみ合い……というより、相互に手を出すことはしない小康状態を保っていた。

得ている情報に差こそあれ、基本的にはアメリカと中国も同様の立ち位置と言えるだろう。

敵対する理由こそあれど、それは決して今ではない。

むしろ陣営内に協力者すら存在している。

だがその静寂を破り、刺客が送り込まれてきた。

それも、この国を裏から操る黒幕と言える存在が来訪しているタイミングで。

要人の暗殺。

言うまでもなく、技術の略奪などとは比べ物にならない敵対行為だ。

たとえば襲撃者がどの陣営であれ、それが指し示す意味はすなわち――

「――腹括ったらしいぜ。少なくとも裏側でなら全面戦争も辞さない、つてな」

「ッ!？」

瞬間。警備員たちの合間を、冷たい声だけ残して辻風が通り抜ける。

流星は機密施設の防衛を任されるだけの人材というべきだろうか。

敵対者の奇襲に即座に反応し、彼らは銃口を背後へと向け躊躇なく引き金を引いた。

「ああ、やめといた方がいい。……ヘンに撃って暴発したら困るだろ」

だが、銃声は一発たりとも響かない。

彼らの持つ銃は全て、発射構造の要所を砕かれその機能を失っていたのだから。

「じゃあ後はよろしくな、エミリー」

「りょーかいですわ!」

そして唾然とする警備員たちに、突如飛来した粘着質の物体が追

打ちをかけた。

ある者は設置型の罠にかかったゴキブリのように地面にべったりと張り付けられ、またある者は脚だけを縫い留められる。

「貴様ら……どこの人間だ……！」

申し訳なさそうに彼らを跨いで駆け抜けていく女性と、奇襲をかけた下手人と思われる青年。

両者はその返答に答えることなく、研究室の深部へと足を進めていった。

「……お前さ、いつつもこんな事してたんだな」

「まあな」

呆れたような、どこか罪悪感が入り混じっているような。

血みどろの通路を駆け抜けるさ中、健吾は表情に影を落としながら隣の友を見る。

短い肯定を返した俊輝の表情から、感情の変化は殆ど読み取れなかった。

「あまり隊長を責めないでいただけますと。決して貴方に悪意があつて隠していたわけではありませんのでな」

「わーってますよ。それに関しちやこの前話がついてるんでね」

そこに差し伸べられたのは、両者の一步後ろに付き抜け目なく周囲を警戒するクロヴィスの声。

第七特務の二人と日本第二班の一人。

暗殺任務にいささか奇異に見える人間を含んでいる彼らがこの場に赴いている理由に関しては、唐突な所属組織からの命令と個人的心情の混ざった少々複雑な事情が絡んでいる。

『U—N—A—S—A本部に常駐しているMO手術被験者の戦力、そのほぼ全てを各地に派遣する』

……という決定と各所への命令がU—N—A—S—A上層部によってなされたのは、ほんの数日前のことだった。

U—N A S A 本部直属の戦闘部隊である第七特務、現在本部に長期滞在している元裏アネックス日本第二班、元裏アネックス米国第一班を主戦力とする特殊敵対勢力対策局実戦部隊。

彼らに対してそれぞれ、米国内部や他国に点在する機密拠点への移動が命じられた。

U—N A S A 本部が抱える戦力は、量の面で言えば大したものではない。

アネックス計画における有力な戦力であった日米合同第一班、二班は既に解隊され、所属人員は軍の特殊部隊へと組み込まれる、民間人に戻る、といった形で既にU—N A S A には残っていない。

軍の要請でMO手術関連の協力を行うことこそあれど、本部に滞在する戦力はアネックス計画始動時と比べれば大きく減じられていた。

U—N A S A はあくまで航空宇宙局であり、有力な軍人を多数、それも長期間張り付けておく事に難色を示す政府や軍の人間もいたのかもしれない。

故に、今回のこの命令は現在動かせる戦力を絞り尽くした乾坤一擲の作戦行動、と言えるだろう。

しかし、健吾は今回のこの命令に少なくない数の不審な点を見出していた。

まずひとつ、唐突が過ぎる。

健吾が日本第二班U—N A S A 滞在組の代表者としてこの命令を受けたのは、俊輝が第七特務の任務に身を投じていたことを問い詰めていた最中だった。

「……このような夜更けにご苦勞な事だ」

夜も更けた頃合いに、第七特務と日本班への突然の招集命令。

最悪の空気の中、俊輝とふたりで訪れた執務室には、不機嫌を隠そうともしないU—N A S A 高官の男が待っていた。

セドリック・カルヴァート。

U—N A S A 所属の実力部隊、MO能力者の政治的な元締めである。

健吾が直接言葉を交わした経験はほぼ無い。

せいぜいがU—N A S Aにおける第二班の待遇について短い相談をしたことがある、程度だ。

だが、俊輝からの愚痴という形である程度人格を把握していた男だった。

自身の保身と権力を第一に考えているオツサン。

気難しい上俺たちを見下してていつも偉そうなのが気に入らない、と。

事実、こうして話を聞いていて俊輝の言葉と違わぬ男であったが、そこはさておき。

下された任務は初めに語った通り、第七特務と第二班、両陣営の外拠点への移動および第七特務にはフィンランド内部の潜入と暗殺の任務。

「以上だ。何か質問は？ 次も問<sup>つか</sup>えているのでな、貴様らの理解力に期待したいところだが」

健吾がいるにも関わらず第七特務としての任務を堂々と伝えた辺り、セドリツクも現在の二人がどのような状況にあったのか把握していたのかもしれない。

渋面を浮かべる俊輝をよそに、セドリツクは反論など許さん、という態度で話を打ち切った。

今すぐにも荷物を纏めて出立しろ、と言わんばかりの温度感。

それは恐らく、セドリツクが報連相を碌にしない無能というわけではないのだろう。

そこまでしなければならぬ、急な情勢の変化が訪れたのではないかと健吾は考える。

そしてその上で不審点、ふたつめ。

情勢の変化を考えたとしても、今回の指令は不自然だ。

軍事力を動かすということは、それが必要になった状況ということ。

つまり、何かしらの敵対者との激突が予想される。

ならばなぜ、自分たちの本丸と呼ぶべきここU—N A S Aから貴重な戦力を引き？がすような真似をするのだろうか？

軍からの派兵で防衛能力を補うのだとしても、U—N A S A の内部状況などを考えれば自分たちのようなU—N A S A の施設構造に明るい人間が防衛に回った方がいいのではないか。

そもそも、つい先日本部への襲撃があったにも関わらずこのような本部を手薄にするような決定が通るものなのだろうか？

「どうした、副班長。難儀な顔をしているな？」

「……いいえ、自分からは何も」

結局、健吾がその疑問を口にすることはなかった。

恐らくこれは、自分が抗おうとしてもどうしようもない、大きな流れでしかないのだ。

抗ったところで、自分や仲間が余計な被害を受けてしまうだけ。

「そうか。では次だ。先ほど告げた任務の詳細説明だ。第七特務に向けての話だからな、お前はもう下がっていい」

もう下がっていい。

その言葉から、第二班は少なくともすぐに戦いに身を投じることはならないのだろう。

同じ班の仲間たちを守る。

それが、今の健吾を突き動かす理由だった。

もし皆に被害が及びそうなのであれば、健吾は迷いなくそちらに駆け付けるだろう。

だが、今はそれに次ぐ行動理由、したい事、がある。

怒り、なのかもしれない。後悔、かもしれない。

……横で居心地悪そうにしている男に対する。

—何故自分たちに打ち明けてくれなかったのか。

—わかってる。俺だって同じ状況に立たされりや言えねえよそんなの。

—何故気付いてやれなかったのか。

—俺が鈍かったから。バカ野郎だったから。

俊輝に言おうとした言葉や、自分に対する疑問。

それらがモヤモヤと胸に留まるからこそ。

この馬鹿も同じようなことを考えているのが、痛い程伝わったから



こそ。

「俺も、その任務に参加させてください」

不器用な友の決定を、目を逸らさずに見ようと思っただのだ。

——北欧・某国地下

ザツザツ、と秩序だった足音が響きわたる。

狭い地下通路を埋め尽くす軍勢が一步の乱れも無く移動し合流し、数を増し隊列が整えられる。

「ひ、なんだいきな——あぎい!？」

「う、うわあああつ!!」

かつてこの場所を流れていた、大量の水のように。

彼らの進路に存在する遍く命を飲み込み、軍勢は一点を目指し足を進めていく。

モグラ族と呼ばれる人々の住居のひとつ。

既に水が枯れて久しい大規模な地下貯水槽の跡地、その最奥部に彼らの王の玉座は在った。

「じ、ぎ、ぎゃぎゃ」

屑鉄や針金、機械部品の残骸。

文明の残滓を固めて作り上げた、現代アートを彷彿とさせる御座に、一匹のテラフォーマーが腰を下ろす。

通常のテラフォーマーと違い、頭髮の無い頭部。

その額に刻まれた『≡』を彷彿とさせる記号。

醜く膨れた、赤黒い異形の腕。

国すら押し流せるのではないか、という大軍勢を眼下に望み、彼は満足げに皿へ盛られた蚕を摘まむ。

その傍らに置かれた旧式の通信設備は、ざざ、というノイズ混じりにこの星の同盟者からの言葉を彼へ伝えていた。

「そろそろ、動くでしょう」と。

それから、より詳細な状況の説明も。

いよいよ、己の悲願は叶う。

古臭い王を廃し、己こそがテラフォーマーの真なる王へと。

「それにしても、威勢のいい事だけど。彼らは少し勘違いをしているのかもしれない」

通信機から響く、いつそ呑気ささえ感じさせる声。

同盟者の言葉に同意するように、にたり、にたりと篡奪者は笑う。

「我々と戦って、もしかしたら一方的に勝利を収められるかもしれないー、などとね」

これは戦争なのだ。

おまえたちが一方的に攻め込めるなど、夢想しているのではあるまいな？

まるで、そうとでも言いたいかのよう。

---

——U—N—A—S—A 本部 中央会議棟

「皆々様、本日はお集まりいただきありがとうございます！」

錚々たるメンツが集った場に、快活な声が響いた。

普段はあまり使用されていないが、常に埃ひとつ無いように整えられた会議室。

「セドリック氏は欠席ですか。まったく、このような非常事態に……」

「いや、彼には実務に回ってもらいたい状況だ。致し方あるまい」

U—N—A—S—A内部の予算管理、外部組織との折衷、その他各分野のトップ。

国家で例えるならば各省庁の大臣と言える人間たちが一堂に会し席を囲んでいた。

「いやはや……此度の事態……大変、大変に嘆かわしい状況です」

彼らが集ったのは、国防総省からの緊急の知らせが入った為であった。

『U—N—A—S—Aおよび軍の主要施設の防護を準戦時体制にシフトする』と。

「表立っての戦争などではないようですが、我々や軍基地が高度な警

戒を要する状況……。察するに……マフィアか何か、裏社会の大規模な掃討作戦……といったところででしょうか？」

急な状況に首をかしげる一人に、何人かが頷き何人かは沈黙を守る。

此度の戦いに関わっているニュートン家や槍の一族について、同じU—N—A—S—Aの幹部と言えど持っている情報量には違いがある。

『ニュートン本家からの要請により政府が槍の一族へ敵対的な干渉を行うため、反撃の恐れがある』という詳しい事情を知っている者もいれば、何も知らされていない者まで。

彼らに共通している認識は『このU—N—A—S—Aになんらかの武力的な危険が及ぶ可能性が存在する』である。

「しかしまあ、不幸中の幸いというべきか。準戦時体制ということは軍からも応援があるのでしよう？」

だが、場の空気はあまり重くはない。

今のU—N—A—S—Aには先の襲撃を踏まえて強化された防衛体制もあり、正規軍による増援も予定されているという状況だ。

アメリカの厳しい検問をすり抜けられる程度の規模の敵に奇襲をかけられたところで、守りは突破されないだろう。

「第七特務や対策局といった戦力も、今はありますからな。職員たちの為にも、我々が慌てつためくような姿は見せず、どつしり構えましようぞ」

だから、安心して事に当たろう。

ひとりの言葉に、うむ、その通りだ、と賛同の言葉が集まる。

「ええ。皆さまのおっしゃる通りかと！ さてそれでは、次の議題ですが……」

彼らの声は一つに纏まっている。

場の空気を認識し、議場の中央に立ち音頭を取っている男はにこやかに頷く。

「第七特務と対策局の廃止、ですね？」

それから、次の話題へと。

「このU—NASAに相応しくないいつ裏切るかもわからない荒くれ者の集団と、これまた信用の欠片も無い殺人鬼が実戦部隊の指揮官。この非常時において、彼らは大きなリスクとなってしまうのではないのでしょうか！」

すらすらと台本を諳んじるように、淀みない言葉が会議場に響いた。

第七特務と特別敵対勢力対策局、どちらも腕利きのMO能力者が所属する組織である。

彼の言葉はある種の正論であったが、しかし現実を見れば賛同しかねる意見といえる。

地球と火星の戦場を生き抜いてきた彼らは有力な戦力である。

槍の一族云々を抜きにしても各国のテラフォーマーの不審な動きが報告されつつある現在、何かの確証があるわけでもないただ不信で彼らを削ぎ落す、などという現実的でない意見は通るのだろうか。

「私ハ賛成しまシよう！ あのような乱暴者共は相応しくないト前々カラ考えテイた！」

「仰ル通り！ 迅速に事を進めるのがよろしいかと」

「いッ我々を裏切る力わかつたもノデはない！」

その結果は、同意に次ぐ同意。

否を挟む者はひとりとしていない。

決を取るまでもなく、これで第七特務と対策局の廃止は決定されたとみていいだろう。

「しかし、彼らが大人しく言う事を聞くでシヨウか？」

「よい、よい質問ですよ。ですが、問題ありません！ 軍部に要請を出して、それが通らなければ私の私兵もごさいますので！」

投げかけられた懸念にも、男は穏やかに答える。

彼の背後を見れば成程、数人の武装した人間が付き従っている。なるほど彼がそういうのであれば安心だ。

よかった、よかった。

会議の場に兵を連れてきていることに触れる人間は、誰一人としていない。

「素晴ラしい！」

「いやはや、全ク！ 貴方が特別顧問ニ就任ナされてから、話ガとんとん拍子でススミマすネ！」

「えエト、アア、次は何の話デシたカナ？」

「コレからノココノ指揮系統ヲドノようにスルカ、トイウ話アシタネ」  
「ええ、ええ！ これは間違いなく危機的状況なのですから！ 一丸となるにはやはり、一人の人間に権限を集中するのが望ましいかト！」

「ソノ通りデスナ」

「ハイ、ヤハリ貴方ハ良イ意見を出サレル！」

「つまりつまり、皆様が持つU—N—A—S—Aの各権限を、この度運営顧問を拝命しました私——」

賞賛と賛同の言葉が、拍手が、口笛が、万雷のように会議室に響き渡る。

壊れたように繰り返されるそれを一身に受けるのは、ただ一人。

「ランベール・ノウア・アポリエールへと委譲する、というお話ですネ！」

穏やかに微笑む、所々に紫をあしらった司祭服の男だった。

2620年、12月22日。

西洋諸国では聖夜を前にし人々が浮足立つこの日。

地の底の研究室を全ての始まりとして、人類の未来を懸けた闘争が幕を開ける。

## 第98話 権力の価値

——数日前 U—N A S A本部

日が回り、数時間が経とうという時刻だった。

周囲に立ち並ぶ研究施設や宿舎の殆どからは既に灯りが消え、セドリックが独り立っている訓練用の広場は一面の暗闇に包まれている。タバコの煙をくゆらせながら、彼は遥か彼方の空へと視線を上げる。

よく晴れた、雲一つない冬の夜。

天高くに見える緑の星は、今日も美しく、だが同時にどこか妖しく輝いていた。

「……」

業務を終えた後、こうして邪魔する人間のいない場所で独り静かに空を眺めながら一服し、宿舎へと戻る。

それがセドリックの日課だ。

「おや、おや！……ここにいらつしやいましたか！」

だが、彼の一日の終わりはこの日だけ、少し違った。

真夜中の広場に、音量こそ大きくはないがよく通る声が響く。

突然の闖入者に体の方向も表情も変えず、セドリックは声の主へと目を向けた。

視界に映りそのままセドリックの正面へと歩み寄ってきたのは、見知らぬ男であった。

年齢は三十半ば程だろうか。

眼鏡にスーツ姿の、U—N A S Aの職員としては珍しくない恰好をしている。

少し地味ながらも整った顔立ちに浮かんだ穏やかな表情は、しかしセドリックには胡散臭く感じられた。

「初めまして。この度、U—N A S Aの運営顧問を拝命いたしましたランベールと申します」

運営顧問。その言葉を聞いて、セドリックは己の記憶の中から男、

ランベールの名前と顔を思い起こす。

同僚、同じくU—N—A—S—A上層部の人間から先日渡された資料に顔写真と名前があった……と。

それを皮切りに、資料の内容が次々とセドリツクの脳裏に浮かび上がっていく。

第六支局からの出向。

運営顧問、というのは表向きのポジションであり、実際のところは『例の一族』に関連した事情に明るい人間らしく、U—N—A—S—Aの機密性が高い分野の職務を任せられる予定である、と。

「セドリツク・カルヴァートさん。お噂はかねがね伺っております。20年以上に渡り、U—N—A—S—Aへ向けられた刃を影から守り続けてきた功労者である」と

一族に関係した事情。

それは情報戦だけでなく時に直接的な命のやり取りも含むであろうことから、U—N—A—S—Aを防衛する軍事力の要、MO手術被験者たちを束ねる立場であるセドリツクとも関わり深い立場であるだろうとも聞いていた。

「……これもどうも、ご丁寧に。しかし今日はこんな夜更け故、詳しい話はまた後日詰めさせていただこうか」

これから協力して職務に当たるであろう相手。

しかし友好的でにやかな挨拶にセドリツクが返したのは、鉄面皮と感情に乏しい声だった。

セドリツクは海千山千、数多くの政争を生き抜き椅子を守り続けてきた老獪な政治屋だ。

その本能と実戦で培った感覚で察していたのだ。

この男は、信用ならない存在であると。

さらに個人的な事情を混ぜるとすれば、セドリツクにとって今はプライベートの時間だ。

そこに土足で踏み入られるのを彼は好まなかった。

「おやおや、嫌われてしまいましたか。ご挨拶として、貴方が好みそうなお話を持ってきたのですが」

「……」

だが、次いでという言葉にこの場を立ち去ろうとしたセドリツクの足が止まる。

「単刀直入に言いますが……我々と、手を組みませんか？」

それを『話だけは聞いてやる』という意味表示と受け取ったのだろう。

ランベールは、短く端的に用件を告げた。

セドリツクという男の日課についてわざわざ調査し、この時間であれば他の誰にも知られないであろう、という確信の元で接触したその真の目的を。

「失礼ながら、貴方のことを調べさせていただきました」

先の我々、という単語。

ただそれだけで、詳細へと入るまでもなくセドリツクは理解した。

この男が自分に提案したのは、U—N A S Aへの裏切りであると。

己は、男が属する何かへの勧誘を受けているのだと。

「いや、完璧な経歴です。名門大学を成績上位で卒業、そのままここU—N A S Aに就き、宇宙飛行士候補生から転向し経営部門に所属、それからU—N A S Aの警備・防衛を管轄する役職としてとんとん拍子で出世して最高会議の一員に。皆が羨み妬むでしょう！」

その我々、とやらの説明か。

次に語られる内容を予測していたセドリツクは想定と違った言葉に目を細めた。

まるで履歴書を読み上げるような経歴の羅列に、これまでいつもの不満げな表情が微かに歪む。

「……ですが、違う。完璧などではない。何も満ち足りていない。何よりもそう言いたいのは、貴方自身であるはずです」

「学生の頃には頂に立てる程ではなく、一度目指した宇宙飛行士の道も外れ……」

「それからは政争の日々。政敵を排除し、己の職務として外敵を始末



し。組織を敵対者から守る聖なる職務であるというのに、血に汚れた男だと後ろ指を差され、栄光ある最高会議の一員と言えど末席に近い位置に置かれている」

「……我慢ならぬでしょう？ 己はもつと評価されるべきだ。そう考えているのでしょうか？ これまで、あらゆる手を尽くしての上がり続けてきた貴方は、この程度の立場では満足していないはずですよ」

ランベールは一步、二歩とセドリックへと歩み寄る。

先ほどまでであれば間違いなく手ひどい拒絶を受けていたはずの接近に、当のセドリックは動きを見せなかった。

「実を申しますと、私も同じなのです。より高く、より高く。己の地位を、存在価値をさらに上へと押し上げたい。その欲求を持ち、その熱をがどれ程のものか深く理解している」

笑みを深くし、ランベールは手を差し出す。

「だからこそこうして、同類の貴方に声をかけたというわけですよ」

「成程な。他の連中にも同じようなこと言ってるのか？」

握手を拒否しながらも、もはやセドリックから目の前の男との話を打ち切り帰る、という選択肢は消えていた。

少なくとも言葉を用いた戦いにおいて決して愚かな相手ではない。

セドリックはランベールの事をそう評価する。

もし仮に自分がこの会話を録音しており、ランベールを『この男は外部勢力のU-N-A-S-A侵攻の先鋒である』と音声証拠と共に議会で追及しようとしても、逃れられる余地を残すようにしか語られていない。

『我々と手を組みませんか』。

その言葉は言外の意味でこそ裏切りを読み取れたとしても、『なんと、まさか録音されていたとは！ 内部派閥への勧誘を知られてしまうとは、これは手痛い！』などと簡単に言い逃れができてしまうような言葉でしかないのだ。

「いいえ。皆さんには先にぐい挨拶だけ済ませましたが……こうしてお誘いするのは、貴方だけです」

そしてランボールが会話の中で用いたのは、いざという時の言い逃れの技巧だけではなかった。

一度欠点めいた部分を指摘した後で、自分も同じ弱みを持つている、自分と相手は似た者同士である、と示し友好的感情を誘発する。あなただけを評価しているから特別扱いです、という賞賛、承認欲求を充足させる。

それらを決してオーバーに騒ぎ立てるわけではなく、あくまで自然な会話の流れに滑り込ませ、半ば無意識下の内に相手の敵対的意思を挫きこちらへの好意を沸き立たせる。

実際のところ、そのようなランボールの話術がセドリックにどこまで通用したのかは彼にはわからない。

セドリックの常に不機嫌そうな表情は、この会話を通して多少の揺らぎこそあれど殆ど変わらなかったからだ。

だが、それに関してランボールが深く思考する必要などもうなかった。

「……いいだろう。もつと詳しく聞かせるがいい」

その結果は、彼の望み通りのものだったのだから。

——U—N—A—S—A本部 中央会議室

そして、時は現在へと戻る。

普段であれば暖かな陽が差しこんでいる特殊強化ガラスの天井は、準戦時体制という事で上空からの強襲を避けるため、分厚いシャッターに閉ざされている。

そうした後に電灯の灯りに照らされた会議室では、順調な会議の進行によりいくつもの方針が決定していた。

「それでは……『U—N—A—S—Aのアメリカ合衆国からの独立宣言および宣戦布告』は全会一致の決定という事でよろしいでしょうか！」

「異議ナシ」

「素晴ラシイ！」

「問題アリマセン」

かくんかくんと壊れた人形のような動きで首を縦に振る参加者、U

—N A S Aの最高幹部たちを見回し、ランベールは喜色と共に頷く。  
「さて、次の議題は……『ローマ連邦への全面的な医療・MO技術の供与』についてですが——」

『第七特務および特殊敵対勢力対策局の解体、および機密保持の観点から所属MO手術被験者の速やかな廃棄処分』

『滞在中の元裏アネックス日本第二班の内通疑惑の追及』

『国防総省へのU—N A S A派遣部隊の撤退要求』

『敵対国家首脳への暗殺部隊の派遣』

『U—N A S Aのアメリカ合衆国からの独立宣言および宣戦布告』

わずか数十分の内に議決されたいくつもの内容は、論理的に破綻していると言つていいものばかりだった。

防衛戦力をひたすらに引き剥がし、一国家組織とは思えぬ独断先行をし、その上でアメリカという国家そのものに対して背を向ける……どころか、堂々と敵対的姿勢を取る。

「ローマ連邦は我々U—N A S Aの支局が存在する国であり、我々の重要な友邦です！ それ故に、技術協力を行うのは当然ですね！」

「まあ、少し性急な話なので……現場のミスによりローマ連邦でなく他の国に情報が送られてしまう、などという事故が起こるリスクはあります……まあ構いませんね？」

「ソレクライハ問題無イデシヨウ」

「構イマセン、構イマセン！」

「サア、コレカラ忙シクナリマスナ」

そしてまた、否はひとつもなく全会一致により会議は踊る。

「いやはや……いやはや！ ……このように迅速に話が進むのは、偏に皆様の優れた能力のおかげですね！」

外部から俯瞰して見ている者がいたとすれば一瞬でわかる事実であるが、今のこの会議室の状況は平常ではない。

正気を失ったかのような運営方針が次々と出され、それがひとつの異議もなく次々と承認、可決されていく。

いつの間にか元々座っていた人間をどかし議長席へと座っていたランベール——『紫色の枢機卿』ランベール・ノウア・アポリエールはぱちぱちとしきりに拍手をする。

まるでU—N—A—S—Aという組織そのものがひとりでに死を選ぶかのような選択を繰り返しているその異常の正体は、彼の右腕にあった。

中身が薄らと透け内部の肉が伺え、さらにはうねうねとひとりでに蠢いている。

いつの間にか変質していたそれを、一目で見てわかる異形を指摘できる平常な精神の持ち主は、もはやこの場には残されていない。

αMO手術『寄生生物型』『ユーハプロキス・カリフォルニエンシス』。

和名も無く聞き慣れないその生物は、吸虫と呼ばれる寄生生物のグループに属する種である。

寄生虫の中には、特定の生物を幾度も乗り継ぐことで初めて子孫を残せる、複雑極まりない生活環を有する種が数多く存在している。

卵が特定の生物に食べられ、さらにその生物が特定の生物に食べられ。

その困難な条件をクリアする確率を上げるため、いくつかの寄生生物は特異な能力を発展させた。

それが、『宿主の行動のコントロール』。

ランベールがその力を宿す彼らに寄生された魚類は、まるで狂ったかのように水面で激しく動き回り、時に水上へと飛び跳ねる。

その奇行の理由は決して、体内を侵される苦しみに暴れているわけではない。

脳へと入り込んだ彼らが神経伝達物質量を巧みに操作し、彼らの最終的な宿主となる水鳥に捕食させるため精神と行動を狂わせているのだ。

具体的な一例を挙げれば、セロトニンの減少によるドーパミンの過剰分泌。

人間がそれを受けることで引き起こされるのは、幻覚、妄想、興奮状態、依存症といった諸症状が挙げられている。

αMO手術による手術ベースの特性のさらなる強化と、類似の能力を有する手術ベースの研究が進んでいる中国との技術提携による特性の最適化、そしてアポリエールという家系が連綿と築き上げた精神誘導の技術。

これら全てが組み合わさる事によって、自然界を強かに生きる命の力は、最悪の洗脳技術へと結実する。

「さて、それでは皆様、少々お待ちを」

理不尽な決定の数々を実行へと移すべく、ランベールは詳細な命令を下すべく準備を始める。

既に脳を侵され正常な思考能力を失ったU—N A S Aの高官たちは、邪教の司祭の……その背後に蠢く者の意志を遂行するための駒となる。

「ああ、オリヴィエ様もさぞお喜びになることでしょう」

……決して、議会で決定した全てが上手くいくと思う程ランベールは愚かではない。

米国そのものに喧嘩を売って勝てるなどと考えていなければ、ア Nettクスの精鋭に勝るとも劣らない腕利きたちを始末できるとも考えていない。

彼に求められたのは、U—N A S Aの機能不全と信用の失墜、アメリカという国の本格参戦の抑止である。

直接的な軍事力ほどさほどではないが、U—N A S Aという組織はMOを用いた技術や医療の先進技術を数多に抱えている。

そんな彼らが国家に反旗を翻すような集団だと認識されてしまえば、国家単位での研究は大きく遅滞する事になるだろう。

仮にこの一件を解決でき敵対勢力による洗脳の結果だったという事実が判明したところで、では組織内の間者は完全に始末できているのか、という疑念も生じる。

また、アメリカが主導し国連が関わるU—N A S Aという組織を容易く侵すだけの力があると理解すれば、アメリカは槍の一族との戦い

で迂闊に戦力を派遣することが難しくなる。  
直接的な殺傷ではなく、呪毒で臓腑を侵すが如き悪意。

——ランベール君。教皇様はああ言ってるけど、私は君のような野心ある人間にこそ期待しているんだ。

ランベールへとそれを命じた主からかつて賜った言葉を、彼は生涯忘れることはないだろう。

あの日あの時から、ランベールの忠誠と信仰は教団から別の場所にある。

主よ、全てはあなた様の思うがままに。

己自身も計画を遂行するべく、ランベールは立ち上がり。

「どうやら遅刻したようだ。悪いな」

「おや、セドリックさん」

そこで、入口の大扉が開け放たれた。

立っていたのは、顔にいつもの不機嫌さを湛えた男。

ランベールに協力を誓った、U—N—A—S—Aの裏切者であった。

「事は既に済みました。もはや繕う必要などありませんよ」

「この連中は皆、お前に忠実なお人形ってわけだ」

そうか、と頷き、セドリックは己をじっと見つめる目の数々——己の同僚たちへ親指を向ける。

そして、もう正気に戻る心配は無いんだな、と確認する。

「はい。先日お話しした通り、最初から脳に『種』は植えていましたからね」

「結構だ。んじゃ、後はお前が命令を下すだけってわけだ」

ランベールの肯定に、セドリックはもう一度頷き。

「逆に言えば——ここでお前が死ねば、止まるワケだな？」

懐から取り出した拳銃を、部屋の奥に構える枢機卿へと向けた。

「なるほど、なるほど！ 実に興味深い行動です」

「実に貴方らしい考えだ。同僚たちはこのザマ、ここで私を殺せばU—N A S Aの支配権はあなたのもの！ ……と、考えたのですね？」  
しかしランベールは裏切者のさらなる裏切りに全く動じることはなかった。

銃を構えたままのセドリックに怯むこともなく、むしろ楽しげな様子さえうかがえる。

「私の傀儡になった彼らを操れたならなおよし、使い物にならなかったとしても唯一の上層部の生き残りとなれば、再建の際にはかつての体制を知る人間として頼られ、U—N A S Aのトップとなることも叶うわけだ！」

「……」

黙ったままのセドリックにひとしきり一方的な予想を告げた後。

「……それで、どうなさるわけで？」

まるで煽るように、おどけるようにランベールは両手を肩まで持ち上げた。

「ああ、何故私がこのように平然としているのか。状況を説明して差し上げましょう。ここに控える彼らは『紫色の宣教団』。私の腹心……というか、護衛ですね」

ランベールの周囲を守るのは、生気の欠片も感じられない、修道服を身に着けた無感情の男女たち。

『紫色の宣教団』。

彼らはランベールの能力を注がれ続けた成れの果てであり、彼の為に命を捨てることに一切の躊躇も無い、そのような感情が欠け落ちた信徒たちである。

「一人残らず手術によって強化済み、死も恐怖も無き精兵です。貴方ひとりで、どうにかなるとでも？」

「んな事わかってんだよ。だから、こうするっつーわけだ」

沈黙を破り、セドリックが動く。

銃の引き金を引く——と見せかけ、それをランベールへ向けて投擲する。

最初から、こんなものを使うつもりなど無い、とでも言うように。

そして懐から取り出した武器を見て、ランベールの表情が変わる。

それは、薬品が充填された注射器——変態薬だったのだから。

ミシミシと音を立て変異していく眼前の敵対者に、邪教の司祭は。

「ふ、は。ハハハハハ！ 愚か、あまりにも愚か！ ええ、エエ！

知っていますとも！ 貴方がかつて『手術』を受けていたということ  
は！ そして……」

欠片も動揺することもなく、嘲弄の声をあげた。

「バグズ2号計画の参加者として認められなかったということも！

まさか金目当てに集まったクズどもより劣るなんて、思いもしなかつ  
たでしょう!!」

まるで、これまで我慢していたものが溢れだしたかのように、柔ら  
かな笑みは邪悪そのものへと変じる。

丸眼鏡の向こうからセドリックを見下ろす瞳は、嘲笑と憐れみに満  
ちていた。

「そんな貴様ののような落ち零れのクズが、オリヴィエ様に次期教皇と  
ご期待いただいたこの私に！ ランベール・ノウア・アポリエールに  
！ 敵うと思っただのですか！」

「まさか……少し同情して似た者同士、などと言ってあげたおかげで  
勘違いしてしまったのですか!!? それは申し訳ない、あまりに惨めで  
涙が出ますねエ!!」

ランベールが小さく片手を振ると同時、宣教団とU—N—A—S—Aの幹  
部たちが一斉に動き出す。

雪崩のように放たれる罵倒と愚弄の言葉が終わり、セドリックはよ  
うやく口を開く。



「クソガキイ！ 今だ！」

それは、反論ではなかった。

突然大声を上げたセドリックに、次いで起こった状況の変化に、ランベールと使徒たちの対応は一瞬遅れた。

轟音と共に、天井のシャッターが開かれ一面に陽光が差し込む。

突然の光源と音に反応し、その場に揃う人間たちの注意が引き付けられる。

『いい加減覚えてよオッサン！ ボクにはノンナって名前があるんだけど!』

通信機から聞こえてきた少女の怒声を無視し、セドリックは駆け出す。

「防衛システムの乗っ取り……ですが、ここに兵器などは無いのですねエ！ せいぜいが一瞬の目くらましに——」

ランベールの認識は、普通であれば何も間違つてなどいない。

第七特務の協力によりシステムの一部の起動権限を奪い返しはしたが、できた事と言えば派手に機械を動かし気を引いただけ。

戦力は変わらずセドリックひとり、それも直接攻撃型のベースが殆どを占めるバグズ手術では、この物量と戦力差を覆すことなど叶わない。

ヒュン、と何かが投擲される音と共に、宣教団のひとりが小さく呻き声をあげる。

彼が己の腹を見れば、杭のような投擲武器が突き刺さっている。

だが、甲皮の一部を貫かれただけ。

致命傷などではない。

何人もの同僚たちが、突貫するセドリックの脚を掴み地面に磔にしようと試みる。

「ハハ、残念でしたねエ……まあ、落ち零れにしては十分——」

それはランベールにとって、必然であった。

何かを勘違いした旧式の役立たずが、人類としても技術としても最

先端に行く自分たちに敗れ去る。

——だが。

瞬間、衝撃と共に投擲武器を受けた宣教団の男とセドリツクに触れていた同僚たちが、死と痙攣により戦闘能力を失った。

ある者は、セドリツクの両腕に形成された鋭い顎で切り裂かれ。

またある者たちは、突然に身体を激しく跳ねさせ、地面に崩れ動かなくなる。

「な、ア？」

何が起こったのか、理解できない。

そこで初めて、ランベールの表情から余裕が消える。

びしやりと散る、赤色の彼方。

返り血を浴びながらランベールを睨む、獰猛な瞳。

その周囲には、バチリ、バチリと空気が爆ぜる音が絶えず響いていた。

——それは、バグズ2号計画最高責任者、アレクサンドル・グスタフ・ニュートンをして「手術ベースに選んだのは失敗だった」と言わしめた生物であった。

弱かったから？ 否。

彼らの戦闘能力は近縁種により強いものこそ存在するが、昆虫の中でも指折りのものを有している。

希少種でありサンプルの採取が十分でなかったから？ 否。

生息地域こそそう広いわけではないが、彼らは決して個体数が少ない生物ではない。

では、何故。

科学者に理由を問われた時、アレクサンドルはこう語ったという。

「この生物を用いるのは、5年、10年早かった」と。

彼らは昆虫どころか、あらゆる動植物を含めてもなお特異な性質を

有していた。

だが一方でその特異さ、通常変態時の出力の低さ故に、バグズ2号計画当時の技術水準では十分どころか一分さえも真価を引き出せなかった生物である。

しかし、その欠点を最新の技術で補うことができれば。

当時には存在しなかった、手術ベースの特性を強力に補助する機器を用いることができれば。

「さつきから適当な事ばかり抜かしやがって。俺がテメエを殺す理由なんざわざわざ説明させるな、不愉快だ」

セドリック・カルヴァート。

常に怒りと不満に満ち、権力欲に取り憑かれた男。

U—N—A—S—Aの職員たちは彼の人格についてそう囁き、恐れ蔑む。

それらの全ては、事実だ。

だがしかし、その怒りと不満が何に向けられているのか。

それほどまでに権力を求める理由は、何であるのか。

気難しく他者を寄せ付けない彼の事情を知る者は、U—N—A—S—Aにはもはや数える程もない。

「二つ目。勝手な推測で話を進めるヤツは不愉快で仕方ない」

——あまりセドリックを悪く言わないでやってくれ。頑固だけど、意外といいヤツなんだぞ？

——将来の夢、か……？　ほんとかな、お前と同じなんだ。でも

……

脳裏に電気信号が走り、記憶から言葉が形作られる。

思い出されるのは、もはや失って戻れぬ過去の追憶。

「二つ目。俺はプライベートの時間に土足で踏み込んで来るヤツを信用しない事になっている」

——危険なのはわかってる。でも、止めないでくれ

「……つぎけんな、力不足だったのか!! 俺じゃ、あんなクズどもより役に立てねえってか!?

——残念ながら、君がどう足掻こうがこの計画はもう止まらないのだよ

自分は何もできなかった。

あの時、自分に力があれば何かが変わっていたのかもしれない。

「——三つ目。お前は、U—N—A—S—Aに手を出した」

——もしも、だが。万一の時の為に頼みたい。

——俺の■が、その先に挑む人たちが、再び宙を目指せるようにお前は どうして、俺に面倒事を押し付けるんだ。

ああ、くだらない。まったくもって、忌々しい。

「……俺達の夢をよ、こんな奴らに渡せねえよな?」

彼はいつも、怒りと不満に満ちている。

権力を求め続けている。

「なあ、そうだろ——ドナテロ」

それがただ一人の友との約束に手向けられたものであると知る人間は、もはや数える程もない。

セドリツク・カルヴァート

国籍：アメリカ

50歳 ♂ 184cm 79kg

専用装備：M・O・H兵器・生体接続型発電器官最適化機関

『イカルス・オリエンタリス  
蜜蠟の翼』

十

対生物多目的投擲具『ボルト・エージ・マイン・レプリカ偽・雷機雷』

旧式人体改造：バグズ手術

——  
オリエントスズメバチ  
——

——  
オリエントスズメバチ  
陽光の十字軍、  
エンフォース抜剣。  
——

## 第99話 Far away 遠き友よ

—2599年 U—N—A—S—A

「ありがとうな、こんな時間に」

「構やしねえよ。どうせ毎日これくらいまで仕事仕事だ」

話したいことがある。

ハイスクール高校からの腐れ縁の男と、何故か職場で出会った。

それも、外部の客ではなくあからさまに身内側である、といういで立ちで。

困惑する俺に、奴が説明したいと言って待ち合わせ場所に選んだのは、訓練用の広場だった。

「で、なんでここにいやがる。俺なんぞより立派なトコに務めてたんじゃねえのかよ、優等生サマよ」

昔から、いけ好かないヤツだった。

勉強でもスポーツでも、どれだけ努力しても俺の上を行きやがる。

自分は優秀だと言う自負があった。

なのにアイツにはいつも勝てなかった。

その癖して、「お前が羨ましい」などと抜かしやがった。

最初にそれを言われた時には、取っ組み合いの喧嘩になったものだ。

勿論、怒りに我を失った俺が掴みかかる形で。

「あの時はさ、悪かった」

「テメエのそういうところが嫌いなんだよ」

お前が謝る理由がどこにある。

むしろ、そうするべきは俺の方だ。

俺がそう思っていることまで理解してなお、自分が謝るような奴だった。

「……んな話は今はいい、時間の無駄だ。とつとと本題に入れ」

震えるように寒い、冬の夜だった。

澄み渡る空に、満点の星が輝いていた。

その天頂に輝く緑の星を眺めながら、奴は笑った。

大学の合格通知を二人して恐る恐る確認した時のような、真夜中にいきなりガキができたと報告してきた時のような、らしくもない砕けた表情だった。

——俺、宇宙飛行士になれるんだ。

俺は、あの時アイツを祝福してやるべきだったのか。

それとも、殴り倒してでも止めるべきだったのか。

何度自分に問いかけてみても、明確な答えは出なかった。

——オリエントスズメバチ

学名『Vespas orientalis』

地上に覇を唱える生命種、ヒト。

我ら、彼らは文明を維持し発展させるための莫大なコストを賄うべく、常にエネルギーを得る手段を模索し続けてきた。

そうしてたどり着いたの答えの一つが『再生可能資源を利用したエネルギー供給』である。

地熱や水流、風。

自然から定常的に供給される資源を利用した、電力の供給。

供給量やタイミングこそ不安定であるが、化石資源などとは異なり枯渇の可能性が限りなく低いものを使用したそれらは、2620年現在では電力供給の一角を担っている。

だが。

人が頭脳の限りを尽くして生み出した技術を、大自然の設計図は遙か昔より運用していたという事実が判明したのは、およそ600年前のことであった。

「な、に……？」

肉体、頭脳共に旧時代の遺物。

その存在を知ってから現在に至るまで、ランベールはセドリックのことをそう認識していた。

ランベールがU—N—A—S—Aへと潜り込み、上層部を掌握し今この場

に立つまでに、わずか数日しか経っていない。

たとえば、内乱によって壊滅状態に陥ったアポリエール家の中から新たに選ばれた枢機卿であったとしても。

その地位でさえ、本来選ばれなかった身を彼らの背後に立つ存在が掬い上げたものであったとしても。

たかがこの程度、アポリエール家上級司祭の力を以てすれば事足りるのだ。

『紫色の枢機卿』。

教団において情報戦略を担当する部門の最高位たる存在。

持てる能力を存分に振るい、ランベールはU—N—A—S—Aの機密情報へとアクセスすることで迅速に組織を侵していった。

「馬鹿な」

U—N—A—S—A上層部の個人データは、ランベールが最初に把握した情報である。

どのような経歴の人間であるのか。どのような部門に属しているのか。接触するには、どのような手段を用いるのが望ましいか。

当然ながら、上層部のひとりであるセドリックの経歴にもランベールは目を通してている。

U—N—A—S—Aで公的にバグズ手術を受けたにも関わらず、バグズ二号計画には不参加であったという情報までも。

だが『手術ベースが何であるのか』という部分には嚴重な情報規制が施されていた。

「……時代遅れの旧式が、何故……」

やろうと思えば、ある程度の時間こそかかるものの情報を手にすることができていただろう。

だがランベールは、深い追究をしなかった。

何故ならば『セドリックはバグズ手術の被験者である』という情報は、何ら意味の無いものであると考えていたからだ。

バグズ手術。

旧式の人体改造術であり、肉体に組み込める生物は昆虫に限定されている。



そして昆虫型に限られるならば、その特性のバリエーションは決して広いものではない。

戦力として有用であろう多くは強力な顎や毒針を活かした近接戦闘能力の高い種が殆どであり、特殊な特性といってもせいぜいが毒液の噴霧や寄生バチなどに代表される宿主の行動操作といったところだろう。

であれば、何も問題はない。

ランベールはそう考えていた。

せいぜい戦える兵士が一コマ増えるだけ。寄生生物の類だったとしても、最新鋭のαMO手術によって大幅に強化されている己の特性による支配権を超えることなどないだろう。

そして肉弾戦となれば、それこそ負ける道理はない。

行動をコントロールした操り人形たちによる人海戦術。

高度な再生能力を持つ生物たちを手術ベースとしている上、痛みも死も恐れない宣教団。

これらの戦力を用いれば、たとえセドリックが敵対的姿勢を取ったとしても、赤子の手を捻るように殺すことができる、と。

「——がつ!?!」

バチリ、と空気が爆ぜる音が響く。

瞬間、セドリックに猛然と襲い掛かった宣教団のひとりが、体から煙を噴き上げ床に崩れ落ちる。

再生能力は機能せず、それどころか痙攣を続ける体は異形へと変質し、そのまま活動を止めた。

「どうした、ご自慢の最新鋭技術ってのはこんなモンか?」

四肢を腕がれようと平然と戦線復帰できるだけの再生能力を宿した一団が、またひとり無力化される。

特性発現の核、体内深くに隠されたMOを焼き切られるという形で。

——時に暖かく時に苛烈な太陽の光は、生物の生存にとって必須で

あると同時に過ぎれば害を及ぼす存在でもある。

その事実を指し示すように、彼らが属するスズメバチの殆どは日が差しているながらもそれが生命活動に支障をきたさない強さとなる早朝に活動する。

だが、彼らのみは違った。

日差しが最も苛烈な日中に最も活発な活動を示し、縦横無尽に生息域を飛び回る。

なぜこの種だけが、そのような生態を有しているのか？

「こんな、ことが……有り得るわけ……あり得ていいわけがありませんねエ!!」

ランベールの怒声に呼応するかのようになり、宣教団が、ランベールに操られもはやまともな思考能力を失ったU—N—A—S—A上層部の人間たちが一斉にセドリツクへと躍りかかる。

対するセドリツクは、ただその場に立ち止まった。

怒涛のように押し寄せる、殺意の波。

心を静かに保ち、距離を測り、接敵まで3、2、1。

瞬間。

人為変態によって得た甲皮が。

茶と黄色、スズメバチを象徴するふたつの体色がぼう、と輝き。

一面の光景が、稲光に霞む。

「……は？」

呆然と眩くランベールの傍には、もはや誰も控えてはいなかった。

その場に残されたのは、ぶすぶすと煙を立ち上らせる屍のみ。

『太陽光発電』。

それこそが、バグズ二号計画において一度手術ベースとして選ばれながらも選外とされた昆虫、オリエントスズメバチの最も特異な性質

である。

太陽光が強ければ強いほど活発に動く。

その生態に疑問を抱いた研究者たちが彼らを解剖した結果、驚くべき事実が判明した。

茶の外骨格。

それは、自然の芸術としては驚くほどに精巧な『集光装置』。

紫外線を吸収する色素、メラニンを成分として多数含む上、光を効率的に捕獲する微細な溝を備えたその組織は、受けた太陽光のわずか1%しか反射していなかったのだという。

黄の外骨格。

それは、明確な実証こそされていないものの光を受けることで電気を生成するとされる色素、キサントプテリンを多量に含んだ『発電板』。

これらを用いて、彼らは太陽光を電気へと変換し活動のためのエネルギーに使用しているのだという。

「判断が遅え。少しの想定外ですぐに焦りやがる」

ハッ、と鼻で笑う声が、思考の沼に嵌ったランベールの耳に届く。

馬鹿な、電気？ 時代遅れの技術で、外見的特徴からしても昆虫であるというのに？

ランベールの疑問は、決しておかしなものとは言えなかった。

仮にオリエントスズメバチと言う生物を知っていたとしても、セドリツクが放った一撃は、不自然なものであったからだ。

デンキウナギ、デンキナマズといった発電生物と異なり、オリエントスズメバチの生成する電気はとても攻撃に用いることができるような量ではない。

その疑問に答えるのが、セドリツクの背から生成された羽に絡みつくかのような奇怪な金属線と、その根元となる背中に接続された装置だった。

『イカルス・オリエントリス  
蜜蝋の翼』

それこそが、本来であれば攻撃的な電撃に用いることなど不可能であるはずのオリエントスズメバチの電気を最大限に増幅するための

装備である。

特殊な集光器官と増幅装置によってその電気生成を強力に補助し、戦闘に堪えるものとして運用する。

「……で、どうする？ 命乞いでもしてみるか？」

「なるほど、なるほど！ これはこれは、少し油断していたようです」

ランベールの剣となり盾となるはずの配下は、早くも全滅してしまっただ。

だが、セドリツクの挑発にランベールが返したのは意外な反応であつた。

「……ふう、いけないいけない。枢機卿とも、次期教皇ともあろう者が、少し冷静さを失ってしまったていました」

この絶対絶命の危機といえる状況で、ランベールの顔からは焦りが消えていた。

怪訝そうに眉をひそめるセドリツクをよそに、邪教の枢機卿は一步、また一步と自分からセドリツクへと近づいていく。

「貴方、もう電気を放つことができないでしょう？」

セドリツクに向けて投げかけた言葉は、質問というよりは答え合わせとでも言いたげな様子であつた。

確信を込めてランベールは尋ねる。

「ええ、エエ。回答がいただけるなどと期待はしていません。確証があるのです、わざわざ聞く必要ありませんがね」

「必死に隠しているようですが、息が切れかけていますね？」

そして彼はセドリツクを指で示し、その態度の根拠をひとつ、また一つと挙げていく。

「先ほどから電撃を放つたびに、貴方の表情は険しくなっていた。なるほど、自慢げにこちらに向けてきたその装備は急ごしらえの失敗作のようだ」

「……」

「出力こそ大したのですが、己の身をも焼く諸刃の剣。そうでしょう？」

「旧型の手術を用いている上特性の行使に多大な負担を強いるあなたの身体は短時間の戦闘にしか耐えられない。それでも私の宣教団と同僚の皆さんを屠るとは、褒めて差し上げますが」

雷に焼かれ、煙を吹き上げる死体の数々。

だが、それは敵対者だけではない。

セドリツクの身もまた同時に所々が焼け焦げ、痛ましい痕を刻んでいる。

それは紛れもない、己の電撃が身を苛んでいる証である。

「もしまだ電撃を放てるのならば、今この瞬間にでも私へと向けているはずです。違いますか？ ええ、違わないでしょう！」

ランベールの顔には、再び嗜虐の笑みが浮かんでいた。

アポリエールという家系が積み上げてきた、人心掌握術。

その中には、付け入る相手を探すための人間観察の手管も多分に含まれている。

肉体的に、精神的に追い込まれている人間にはどのような特徴があるのか。どのような反応を示すのか。

腐肉の臭いを敏感に嗅ぎつける蠅が如き、邪教の嗅覚。

それを以てして、ランベールは今こうして相対した男が弱り切っていることを理解していたのだ。

「考えてもみてください。貴方は所詮ただの人間。電撃を放つ昆虫とは驚きましたが、それも結局は旧式の産物」

一步、一步と距離を詰める。

「二方の私は人類の最先端に行く選ばれし者、ニュートンの一角。貴方とは土台からして違うのですよ」

セドリツクの5歩前で立ち止まり、ランベールは両腕をすつと上げる。

その両腕が幾何学模様を描くかのような奇怪な動きを取り、ぴたりと一点で止まる。

「……さつきからピーピーと喧しいな。結局何が言いてえんだ」

「はあ。なにやら冷静ぶっているようですが、所詮は品の無い劣等種。」

口汚くて仕方ない」

吐き捨てるような調子のセドリツクの言葉にも、もはやランベールは動じなかった。

毒蛇を彷彿とさせる独特の構え。

それこそは、既に表の世界では失伝して久しい、印度の裏社会に伝わる古代武術。

「いいでしょう、簡単に説明して差し上げます」

醜い肉塊が蠢く、表皮が半透明に透ける右腕。

それこそは、槍の一族が積み上げたMO技術の到達点がひとつ。

一瞬の接触でさえ脳を侵す無数の虫体を送り込める、αMO手術、その一分野における特性の極点。

「この戦いは一瞬で終わるでしょう。貴方風情が私に勝てる道理など、塵一つも無いわけですねエ!!」

うねる蛇のような軌道で伸ばされた右腕が、消耗したセドリツクの喉を貫かんと狡猾に迫る。

「……何故ですか、ニュートン博士！ どうして俺を外したんですか！」

ようやく許された面会の席は、酷く剣呑な空気に包まれていた。

それがモニター越しでなければ掴みかかっていたであろう勢いで、セドリツクは計画の最高責任者を問い詰める。

「手術を受けた！ 適性訓練の結果だって、参加者の平均を超えていたはずだ！ だと言うのに……！」

『その通りだ、セドリツク君。だがね、こちらにも事情というものがある』

『君が力を宿した昆虫は、貴重な性質を有している。おいそれともしかしたら身に危険が及ぶかもしれない現場に投入するわけにはいかないのだよ』

煙に巻くような言葉に、セドリツクはぎりりと歯を噛みしめる。

目の前の男は、真実を語っていない。

もしかしたら。

此度の計画は、それで済ませられるような安全なものではない。実態がわかっていいるからこそ、自分は志願したというのに。

だがそれを発言してしまえばどうなるか、という自覚もまた、彼にはあつた。

火星への人類派遣計画。移住に適しているかの調査任務。

表向きは平和的なものだど職員たちには知らされていた調査地が、実は怪物の蔓延る地獄である……という情報は、セドリックが表沙汰にできない手段で入手したものであつたのだから。

「この『特性』が実験台として役立つなら、俺以外の誰かに改めて埋め込めばいい。どうか、ご再考を……」

『……ふむ。これは伝えようか悩んだのだがね』

抗弁するセドリックに向けられたのは、少しの思考を挟んだ後の尊大な、だがどこか憐れむような声だった。

葉巻を啜えた画面先の男は、セドリックに何かを告げようとして。

「……俺が博士に嘆願したんだ。お前をメンバーに入れられないように、と」

彼の言葉を、セドリックの背後からの声が遮った。

「博士。ここからは私が説明します」

『ふむ、そうかね。私としては別に構わないが』

声の主に、その言葉に思考が停止したセドリックを間に挟んで短いやり取りが行われる。

「それで、なんだが——」

「なん、のっ……つもりだ……！ ドナテロオオオ!!」

そして、セドリックの怒りは爆発した。

背後を振り向くなり、その場に立っていた男の……彼にとつての唯一の友の襟首を力任せに掴み、引き寄せそのまま顔へと拳を見舞う。

その拳を受けた友は、よろめくことすらしなかった。

これだけ怒りに満ちていたのに身体からは力が抜けてしまっていたのか、もはやセドリックには思い出せない。

「キャプテンとか言われて随分と舞い上がってるみたいだな、アア!? そんなに俺に一方的に勝ちたいのか!? 先に宇宙飛行士になってやったぜ、お前なんかより俺の方が優秀だ、ってよ! 昔っから、どんだけ努力してもお前の方が上だったってのに、こんな時にも並ぶ事すら許さねえってか!?!」

「……すまない、セドリック」

何を、謝る必要がある。

お前はいつだってそうだ。

悪いの俺の方だったのに。

お前が何を考えてその判断をしたのか、わかっていたのに。

それを理解してるクセして、なんでお前の方が謝りやがるんだ。

「頼みたいことがある……いや」

セドリックの過去は怒りと不満に満ちている。

なぜお前はそうなんだ。

いつもいつも、面倒ごとを押し付けてきやがる。

皆の人気者だったクセに、性分も態度も悪い俺にわざわざ声をかけてきやがる。

俺なんかに、人を信じ切った目を向けてきやがる。

「お前にしか、頼めないんだ」

だからこそ、彼は。

ぼとり、と床に何かが落ちた。

脈打つ肉塊を湛えた、棒状の肉。

「ぎああああアアッ!?!」

ランベールの、右腕である。

それを成したのは、二十年もの年月を研ぎに研がれた刃。

「……はあ。知らなかったのかよ」

「っ、っ……!」

もはや、戦闘行為の一環である回避行動ですらない。



最大の武器を失ったランベールは、反射的に逃避のため背後へと飛びずさる――

「スズメバチってのはよ、強いんだぜ」

「ぐ、げ」

――ことは、できなかった。

強引に足を踏みつけられ、その場に磔にされる。

次いで左胸を毒針が刺し貫く。

秒と経つか経たぬかという早業である。

「それでもって、だ。俺は物事を勝手に決めつけて話を進めるヤツが嫌いだ。ついさつき言ったばかりだと思いがな？」

じたばたと藻掻く左腕からは、もはや戦意はすっかりと失われていた。

この動きは、捕食者に押さえつけられ必死に逃れようとする哀れな獲物のそれではない。

「ま、テメエの言うことも間違っちゃいないがな。俺は火星にや行けなかった」

「あ、あ……」

日差しが一層強く降り注ぐ。

セドリツクの甲皮が、再び薄ぼんやりと光を放ち始める。

「計画を止めることも、俺自身を無理やり参加者にねじ込むこともできなかつた負け犬だ」

「……どうか、お慈悲、を」

パリ、パリ、と細かく空気が弾ける音。

それは、ランベールの予測に対する回答であると同時に、死刑宣告の合図でもある。

「でもよ、そんな負け犬にもな……番犬くらいはできるってもんだろ？」

「ぞ、そうです！ 私を捕虜とすれば、貴方たちが望む情報をいくらでも提供できるのではないのでしょうか！ アポリエールの枢機卿として、この私が有する情報の価値は一聞に値すること間違いなく――」

お得意の観察眼で、セドリックが利く耳などもっていない事をランベールはよく理解できていた。

恐怖の涙で歪みきった視界には、不満に満ちた表情が写っていた。

「教えてやる。電気を使わなかったのは……こうして、テメエを直にぶちのめしたい気分だったから、それだけだ」

『U—N—A—S—Aの猟犬』と恐れ蔑まれた部隊、第七特務支局。

その、創始者の表情が。

「あ、あ、アアアアアアアアア!!」

そして、懇願を引き裂くように、胸を貫く針を伝って雷が流し込まれる。

それは、この戦いにおいて何もかも予想を外したランベールが唯一言い当てた予想通り。

一瞬の決着だった。

「……ハア。年長者にあんま肉体労働させんなよな……」

一面に屍の転がる会議室で、セドリックは力なく床に背を預ける。

此度の戦い、経過からとてもそうとは伺えないが、セドリックにとっては薄氷を渡るような勝利であった。

彼の身を焼いた己自身の電撃は、専用装備に欠陥があるわけではなく元来そのようなコンセプトで作られている。

最低限命を落とさない程度の防電装置、それ以外の全てを発電効率の向上に当てた、短期決戦に特化した兵装。

敵が怒りに我を忘れ一斉攻撃を仕掛けて来ることなく、有力な戦力である宣教師をひとりひとりぶつけて消耗戦に持ち込まれていれば。少なくとも、この場合は撤退を強いられていたかもしれない。

つまるところ此度の勝敗を左右したのは、敵の指揮官の愚策であった。

「こっから面倒なコトになるってのによ」

改めて部屋を見回し、セドリツクは深く溜息をつく。

自分が殺めた、同僚たちの遺体。

ランベール曰く、脳に不可逆の侵蝕を受けていたのだからどうしようもなかった。

そして戦闘で切り落とした右腕と状況を説明すれば、己が罪に問われることもないだろう。

しかしながら、U—N—A—S—Aという組織の活動はしばらくは封じられてしまったと考えるもいいだろう。

念の為戦力を外に逃がしておいたのは、僥倖だったかもしれない。これからU—N—A—S—Aは上層部を立て直すまで軍か政府かの麾下に加わることになるだろう。

そうなれば、非常事態であるとはいえ犯罪者を主体とする第七特務や日本との外交関係に影響してくる第二班を動かすことは難しくなるかもしれない。

さてこの状況に如何にしたものか。

まったく、本当に面倒ごとを押し付けてくれやがる。

いつものように愚痴を吐いて、だが同時に、小さく笑って。

セドリツクは再び、U—N—A—S—Aの権力にしがみ付き続けるべく思考を巡らせるのだった。

——これは罨だ、と理性が告げている。

——突き進め、と本能と魂が告げている。

通路の陰に、ごく一瞬だけ、ちらりと人影が見えた。

フィンランド、エウラヨキ第一生物工学研究所。

それは、第七特務と日本第二班の連合軍が、とある一区画を目指し進んでいる最中のことであった。

目指していたのは、中央管制室。

途中の部屋で見つけた施設全体の概略図から把握した、この施設全体の監視、防衛設備の管制を司る部屋である。

施設の入り口に置いた監視役からは、目標が脱出しているという報告は受けていない。

さらに言えば、合同で任務に当たるローマ連邦側の戦力との合流も必要である。

だが標的と味方を発見するため、迷宮のようなこの研究所をしらみつぶしに探して回るのはあまりにも無謀だ。

故に、施設全体を捕捉する目である管制室を乗っ取る、という判断に至ったのであった。

だが。

「……隊長。申し訳ございません」

彼だけが、それを視認できた。

この中で最も高い動体視力と身体能力を有する、彼だけが。

無謀であるとわかっていた。

味方にとって、それが理不尽で迷惑極まりない選択であるともわかっていた。

だが。

それは、彼の宿願であり、第七特務へと身をやつした理由そのものであったのだ。

そしてただ、一言だけを告げ。

彼——クロヴィスは、俊輝と健吾から離れ、ひとり別の通路へと身を躍らせた。

## 第100話 昏き底

ルメリア・H・ニュートン。

英才、が当たり前どころか大前提である一族の中にあつてなお「才媛」と謳われた彼女の名を知る者は、その功績に対して不自然な程に少ない。

2570年代にアフリカで起こっていた数多くの内戦を和平にまで持ち込んだ、ネゴシエーター 辣腕な交渉人。

ニュートン本家に生まれながら、一族全体とは別の方向で世界征服を成そうとした奇人。

彼女は正義の人だった。

どこまでも人の良心を信じ口と身振り手振りだけを武器に戦場へ身を投じ、当然のようにそれを治めてみせた。

命以外の殆ど全てを失った人々へと手を差し伸べ、当然のように救ってみせた。

止まぬ戦禍の根本に在った悪性の根源を突き止め、それを切除しようとする新たな戦場に向かい。

そして当然のように死んだ。

「……えっと」

「……いやはや」

気まずい空気が、オペレーターたちを失った管制室を覆っていた。俊輝と健吾の襲撃に対しても咄嗟に対応し、利用を防ぐべく監視モニターのシステムにロックをかけられたため、今この部屋は光源も少なく暗い。

縛り上げられ口と目耳を塞がれた職員たちの呻き声だけが、空しく部屋に響いていた。

ほんの数分前のことだ。

クロヴィスの唐突な離脱、という想定外の事態こそあったものの、事は予定通り進んでいるはずだった。

問題が発生したのは、予定通り管制室を制圧し、防衛システムの停止と監視システムの復旧を頼むべく、俊輝がノンナへと連絡した、という時である。

このまま施設内部のどこに標的がいるのか監視カメラで捕捉し、奇襲をかけて叩く。

目標完遂のため、独断行動を取ったクロヴィスを急ぎ追う。はず、だったのだが。

「迅速な制圧、感謝する。俺たちが今回ローマ連邦同盟から出向してきた

——」  
そこに、駆けこんで来る人間がふたり。

管制室を奪還しに来た新手か、と一瞬だけ戦闘態勢を取った俊輝と健吾だったが、その言葉でほっと息を付き手を止める。

此度における共同任務相手、ローマ連邦……正確には、その裏から命を下したニュートンの一族。

彼らから送り込まれてきたというMO手術被験者。

なるほど、考えることは同じだったようだと言った俊輝は納得する。

本来であればこの管制室を制圧した後、事前に共有していた暗号文を放送で流し合流の旨を伝える、という流れを想定していた。

しかし、それをするまでもなくふたりはここにやって来た。

彼らもまた、この場所を制圧し自分たちに連絡を付けようとしていたのだろう。

偶然にもお互いの行動が噛み合った、大変効率的な合流と言えた。

俊輝の目に一瞬だけ映ったのは、男女ひとりずつ。

さて、どんな人間だろうか。改めてその姿を見て。

「……げ」

俊輝と男が、顔をしかめた。

健吾と女は、そんな二人の様子に同時に首を傾げる。

ふたりはこの世界の汚い部分を知ってしまった人間であった。人の命を奪い、表沙汰にできない任に身を置いてきた。

己は人でなしである、という自覚も少なからずあっただろう。とはいえ、彼らもやはり人並みの感性がある青年ふたり。

「……この前はどうも、『裏切り者狩り』」

「……おう」

なので、前に殺し合った相手と味方として顔を合わせるのは……流石にちよつと気まずい。

「じゃあ、改めて。俺はシロ。こっちは——」

「エミリーですわ！ 仲良くしてくださいまし！」

「U—N—S—A所属、第七特務支局隊長の山野俊輝だ。そっちの……シロは知ってるだろうが、一応な」

気まずい空気が、健吾とエミリーの取りなしにより和らいだ後。

俊輝の自己紹介に、シロはこくりと頷く。

「それらしい事をさっき言っていましたけど……知り合いですの？」

「あー。この前、なんだけど」

エミリーの疑問に、シロは簡潔にその経緯を説明する。

俊輝とシロの縁はおおよそ一月前に遡る。

現在第七特務で身元預かりとなっている少女、エリンを巡った戦闘。

彼女が捕まった、U—N—S—Aに恨みを抱くテロ組織の掃討を任されたのが俊輝率いる第七特務であり、加えて囚われていたエリンと彼女が所持するデータ、槍の一族に関するものを確保するべく任務にあたっていた。

一方のシロは、そのテロ組織に用心棒と言う体で潜入していた。

目的は同じく、エリンが所持するデータを奪還するためだ。

元々はローマ連邦のものである、と当の国は主張するデータを巡っ

た、アメリカとローマ連邦の水面下での争い。

当然ながら同じそれを狙う両者は激突し、その場で戦闘へと突入した。

そして俊輝が勝利を収めシロが命からがら撤退……というのが彼らふたりの経緯であった。

ははあ、と納得する健吾。

しかし、もう一人はなるほど、で済ませられない様子だ。

「つ、つ、つまり……シロ君を殺そうとしたんですのこの人!？」

それを聞いたエミリーの動きは早かった。

俊輝とシロの間に割って入るように体を滑り込ませ、シロを庇うように両手を広げる。

「いやな?」反論のしようがないくらいその通りなんだけどさ? 戦場で会ってお互い敵同士ってなら流石にしようがないか?」

反論する俊輝の態度は、どこかしどろもどろだった。

エミリーの持つ裏社会の人間らしからぬ緩さに充てられてしまったのだろうか?

彼自身もなんでこんな言い訳がましい感じになってんだ自分、と思うような態度であった。

「おいおい、こんな可愛コちゃんを未亡人にするつもりだったのかよちよつと引くわ」

「おい健吾お前なあ……」

助け舟を期待して隣の友をちらりと見たが、まさかの裏切りである。

どうやらこの場に俊輝の味方はいないらしい。

「つと、悪い悪い。久々にバカやってた時みたいな空気だったからよ、ついからかつちった」

しかし、その弛緩した空気も長くは続かなかった。

場の雰囲気を変えたのは、壁に埋め込まれた液晶板から流れた、ザ



ザ、というノイズ。

停止していた無数の監視カメラ用映像モニター、その一つである。

『隊長、他の皆も！ 聞こえる?!』

そのシステムの復旧が終わったのか、壁一面のモニターに次々と光が灯る。

そして内ひとつには第七特務のエンジニアの顔が映っていた。

「ああノンナ、ありがとな。クロヴィスがちよつとはぐれちまったけど、それ以外は——」

『生きてるなら大丈夫！ それよりも、早く伝えないといけない事があるの』

どこか慌てた、焦燥している様子だ。

楽観的というよりは、仲間とはぐれたという事態すら、ひとまずは横に置いておくべきと判断せざるを得ないような緊急の連絡。

ノンナの感情と向こうから直接に通信を繋げてきた理由を、俊輝はそう読み取る。

「聞かせてくれ」

俊輝は短く答える。

時間を取らず、かつノンナに余分な判断をさせないためだった。

今この場には部外者であるシロとエミリーがいる。

ノンナの内容が第七特務の作戦行動に関わる連絡か他の情報かはわからないが、機密性の高い情報を含む可能性が高いだろう。

だからこそ、俊輝は先んじて「自分以外に聞かれても構わない」と伝えたのだ。

クロヴィスを追って合流するためにも、今はほんの少しでも急ぎたいところである。

『あのデータの解析が、最後の一部分以外終わったんだ』

「——！」

俊輝の意を汲み取ったノンナが端的に語った内容。

それで、場にいる人間の顔色が変わる。

健吾以外の三人が、隠し切れない驚きの感情を示す。

解析が必要な、あのデータ。

ただその情報だけで、シロとエミリーもまた、ノンナが言う内容が何であるのか理解した。

『Project:GoE』。

エリンが槍の一族から偶然にも盗み出せてしまった、彼らについての情報が記されたデータファイル。

シロが所在を追いノンナとエリンが二人がかりでプロテクトの解除を進めていたその内容が、ついに白日の下に晒されるのだと。

『……今からモニターに映すけど。隊長、これを見て判断してほしいの』

ノンナの声は、俊輝にはどことなく気分を害しているように聞こえた。

ただそれは、怒っている、や悲しんでいる、といった感情ではない。

“気持ち悪い”。そう考えているかのような。

『今回の任務、中止するか否か、って』

その言葉と同時に、管制室のシステムが再び立ちあげられ、監視カメラによる各区画の映像が映し出されていく。

モニターの数枚に、映像の代わりとしてノンナから共有された資料が表示される。

ノンナの言葉を聞いた時、反射的に「何を馬鹿なことを」と俊輝は言おうとした。

今更になつて、ここまできて諦めるなど、U—N—A—S—Aが納得しないだろうし自分も納得できない。

だが。

「……は？」

その資料を目で追って零れたのは、ただ啞然とした一文字だけだった。

何を、言っている。

理解が追い付かず……否、そこに記された内容がどういうものであるか理解したからこそ、俊輝は茫然と佇む。

「……これは」

「シロ、君」

そしてそれは、シロとエミリーも同じだった。判断を迫られる状況であるというのに、頭の中が空白に蝕まれるような、気味の悪い感覚。

「……おい、お前らー」

彼らの硬直は、健吾の声により破られた。

彼が他の三人ほど硬直していなかったのは、データファイル云々の事情に深く立ち入っていなかったからなのか、彼生来の周囲をよく見る性格というべきなのか。

ただ一人、他より早く立ち直った健吾が指さしたのは、ノンナが表示した資料ではなく、監視カメラの映像が表示されたモニターの内、二枚。

そこに映っていたのは、二つの人間。

「ノンナ、ありがとう……任務は中止だ」

僥倖というべきなのだろう。

先に見た資料のおかげで、彼らは普通であれば不可解な光景の意味を理解する事ができたのだから。

「急ぎクロヴィスの所に向かい、あいつと共に撤退するぞ」

もはや一刻の猶予もない。

それは、全員に共通した認識であった。

そして四人は、一秒をも惜しみ施設の奥部へと向けて駆けていく。

通路を、最短経路で駆け抜ける。

時に壁を蹴り、宙に身を躍らせ。

曲がり角でちらりちらりと見える人影を、決して見失わぬよう。

徐々に地下に降りている。

つまり、施設の深部へと進んでいる。

これは罠だ。

自分を分断し誘い込み、確実に殺すための。  
わざわざ状況を深く分析せずとも、クロヴィスには確信があった。

だがそれでも彼は足を止めない。  
そうしなければならぬ、理由があつたから。

慌てた様子の兵士が三人、道を阻もうとする。  
戦闘訓練を積んだ衛兵なのだろう。

彼らは慣れた動きで散開し、ある者は防弾性の重盾を構え、ある者は銃をクロヴィスへと向け、またある者は高圧電流を保つた特殊警棒を振るい、この侵入者を排除せんと交戦を開始する。

「退け」

彼らが最期に聞いたのは、暗く冷たい、憎しみに満ちた言葉であつた。

一片の油断もならぬ相手だと理解していたのだろう。

黒衣の老人へと、制圧射撃により行動を封じるべく、兵士は自動小銃の引き金に手を

「……え」

銃を構えた彼の額には、既に穴が穿たれていた。

ガアン、という轟音が、吊鐘のように響く。

何も、見えなかつた。

クロヴィスが背から狙撃銃を抜き放つのも、引き金に指を引くのも。

「っー」

血と脳漿を垂れ流し崩れる屍を背に、特殊警棒を手にした衛兵が肉薄する。

再装填が間に合う間合いではない。

このまま飛び込めば――

――刹那。死神の鎌のように空を切つて迫る長物が、彼の頭部を強

かに打ち据えた。

引き金と銃全体を支えていた手を先端部へ握り替え振るい、堅固な銃床を即席の打撃武器としたのだ。

明滅する視界に、だが彼は食い下がる。

回復した視覚に映ったのは、目前まで迫る骨ばった指。

「いぎいぎいぎ！」

グジュリ、と水分を含んだものを潰す音と共に、彼の視界は永遠に失われた。

眼前の殺戮劇に、三人の内最奥に控えていた防弾盾を持った兵士は身をすくませる。

既に彼は戦意を失っている。

まるで覚悟を決めて盾を構えたかのようなその姿は、恐怖による本能的な逃避行動であった。

そして、角度を付けた盾を踏み台にされる感覚。

自身の上空を通り、背後へと影が跳ぶ感覚。

冷たい銃弾が、自分の頭へと入り込む感覚。

それはもはや、数秒の時間稼ぎにしかなくなっていなかった。

塵殺の痕を振り返ることすらせず、クロヴィスはさらに己の脚に力を込め突き進む。

もう少しだ。もう少しで届く。

そう、己の中の衝動をどうにかすんでのところで抑え込みながら。

「やっ、と」

そして、彼の追跡行は突然に終わりを迎えた。

通路を曲がってすぐにクロヴィスを迎えたのは、これまで通りの複雑に分岐したさらなる通路ではなかった。

「この辺りでいいかな」

いくつかの筒型の水槽が外周に立ち並ぶ、気味の悪い一室。

奥には通路へと続く出口が見えるあたり、ここが最奥部というわけ

ではないのだろう。

「……ふう。童心に振り返り追いかけてつこというのも、たまには悪くないものだね」

その部屋の中央に、クロヴィスが追い続けていた男は悠然と佇んでいた。

金の長髪に、白の一枚布を巻き付けたような時代錯誤の衣装。その手に持つのは、一本の長槍。

此度の暗殺任務の標的、オリヴィエ・G・ニュートン。

「久しぶりだね、クロヴィス君。最後に会ってから、50年は経つただろうか」

クロヴィスから向けられる感情も、どこ吹く風というように。

のんびりと、旧知の仲に向けて挨拶するように、オリヴィエはこやかに手を振る。

再開の挨拶に答えたのは、銃撃だった。

会話の間、意識の空隙を巧みについて挟まれたそれを、しかしオリヴィエは体を逸らして回避する。

だが、その回避行動で生じた一瞬の間隙。それを突いて、クロヴィスは懐から取り出したカプセルを飲み下す。

「ようやく、目的を果たすことができる」

空を裂いて、長槍が喉へと迫る。

かつてであれば、ただそれだけで死を迎えていたであろう一閃。「ずつと、だ」

だがその槍は、その頬を掠めるだけに終わった。

反撃に構えた銃の予測軌道に、オリヴィエは大きく姿勢を下げ回避を試み。

「ずつと貴様を殺す事だけを考えて生きてきた」

しかしクロヴィスから放たれたのは、銃ではない。

銃を匣として手で投擲した、中空のガラス管のような生物組織だ。

「おや、おや……これは」

脇腹に突き立ったそれへと目を向け、オリヴィエの表情が僅かに歪む。

死の瞬間でさえも平然としていた男が、痛みに苦しみを見せている。

「何故私が、独りで追ってきたかわかるか」

「彼には独断行動をする理由があった。

俊輝たちと共に戦ったのでは、果たせないという確証がある目的が。

「普通に始末するなど、生温い。苦しめた末に殺すためだ」

地獄の底より響くかのような冷たく暗い声で、クロヴィスは目の前の男へと告げる。

ただ殺すなどという安寧を与えるつもりなど、無いのだと。

「……千秋一日の思いでしたぞ。長らくお待たせしてしまい、悔恨の極みです」

その口調が、声色が、普段通りのものへと一瞬だけ戻る。

まるで、この場にはいない誰かへと話しかけるように。

「ですが、ようやく。我が悲願はここに叶う」

思い返すのは褪せて久しい過去の記憶。

あの日あの時から、クロヴィスは復讐に人生の全てを捧げると誓った。

似合わない、と散々言われた拷問の技術を学んだ。

如何に人を殺さず苦しめることができるのかが知りたかったから。

その末に、最も相応しいと思える生物の特性を己の身に取り込んだ。

独自の情報網を駆使し、眼前の男の情報を集め続けていた。

真偽が定かではない情報こそ含まれているが、その執念はニユート

ン一族の上位でさえ知り得ぬものさえ含んでいた。

神のスペア。

一族黎明期の当主であり、ゲガルドという家系の始祖。

そして——歴代当主のクローンへと意識を移し替え生き続けた、魔物。

「処刑の時だ、オリヴィエ・G・ニュートン。その身を刻み、あらゆる苦痛と責苦を与えた後——」

クロヴィスは真正面に標的を見据え、その武器を構える。

650年以上前に使用されていた旧式を模った銃。

かつて彼が生涯の忠誠を捧げた主より贈られた、何よりも大切な宝。

その銃床には、今は無数の傷により覆い隠された下には、かつてひとつの英文が記されていた。

「——お嬢様の墓前に、貴様の首を膾切りにして供えてやる」

“We are the cosmos”と記されていたそこには、もはや憎しみしか刻まれていない。

クロヴィス・アルバ・ゲガルド



国籍：ローマ連邦

68歳 ♂  
188cm  
86kg

MO手術 “植物型”

ギンピ・ギンピ

## 第101話 苦痛の棘

「おっ、あんたが例の家出少年っていう？ ふーん。へー？」  
「……あ？」

血まみれで裏路地を歩いてた彼に声をかけたのは、この貧民窟にはどう考えても場違いなドレスを纏った少女だった。

「どうせヒマなんでしょう？ だったらちよつと、付き合ってくれない？」

青年が外見から察するに、十代半ば……一回り年下だ。

金の長髪、友好的な笑み。

その容姿は名の知れた絵画のごとく美しく整っており、懐っこい笑みを浮かべている。

「ね、クロヴィスくん♪」

びしっと指を付きつけながら青年——クロヴィスの名を呼ぶ少女。

決まった……と得意げな様子の彼女に、クロヴィスは。

「……」

「あっちよっ！ 無視しないで！ 悪い話じゃないからー!!」

彼女の横を通り過ぎ、足早に帰路を急ぐ。

整った容姿、ここでは偽名で通っていた自分の本名を知っている。

そこから導き出される回答はひとつ。彼女は、ご同胞である。

そしてわざわざこのような場所へ訪ねてきたのは、自分を連れ戻すか始末しにでも来たのだろう、という推測が浮かび上がる。

クロヴィス・A・ゲガルド。

彼はニュートン一族の中でも特殊な役割を担う分家、ゲガルドに生を受けた。

とはいえ、彼が生まれた家の立ち位置は他の分家筋とそこまで変わるものではない。

『神殿』の管理、維持を担う当主筋ではなく、経済界に影響を持っているごく当たり前の名家。

そこで彼は幼き頃より高度な教育を受け、長男として育てられてき

た。

優れた頭脳、運動能力。両親が経営する、いずれ受け継ぐことになるであろう企業。より性質を厳選するための、選り抜かれた許嫁。

誰もが羨んで止まないであろう境遇の全てを蹴り飛ばし彼が家を出たのは、16歳の事であった。

物心ついてからずっと、『己の生はつまらない』と思い続けてきた。何もかもが与えられ、教えられた通りに努力するだけで計算通りに進む予定調和の生。

何歳の何ヶ月、テストでこの範囲内の成績を取る。

このコンクールで最優秀賞を受賞する。

何年の何月、この人間と交際を開始して、何年後に別れる。

数多くの事例より算出された能力に基づく、一族の人間としてのキャリアの積み重ね、人生の予定表。

『レールの上を走るような人生』というのは使い古された表現であるが、クロヴィスのそれは度を超えていた。

だから、外れてみたくなった。

全てを投げ出して、周りから何を与えられることもなく純粹に自身自身を試してみたくなった。

人生というのは、理不尽で予測不能で面白いものであるのだと知れたかった。

「連れ戻しに来たなら諦めろ。服が汚れない内にとっとと帰るんだな」

そんな彼からすれば、このヨーロッパのスラム街を渡り歩くのは少なくとも実家よりまだマシだったと言えるだろう。

ストリートファイトの見世物を演じることもあった。

縄張り争いをしているマフィア共の用心棒として雇われることもあった。

「そんなんじゃないわよ！ アンタをスカウトしに来たの！」

「……はあ」

けれど、それで十分な充足を得ることはできなかった。

家の財力とサポートを捨てたとしても、彼には一族として受け継い

だ強靱な肉体と頭脳があった。

それを振るえば、大概のことは今までと何も変わらず予定調和のよう  
に上手くいってしまう。

「……何をさせるために？」

クロヴィスの内には返答を聞く前から失望があった。

結局、少女のスカウトとやらも自分を満たしてくれるようなものでは  
ないのだろう。

ひと時の暇つぶしくらいになればいいのだが。

体のいい捨てゴマにでもするつもりなら、それはそれで構わない。  
戦場にでも放り込まれて死ぬのなら、多少は満足できるかもしれない。  
い。

「世界征服」

そう考えていたから、荒唐無稽なその回答に彼は言葉を失った。

「もっと楽しいコト、やりたいんでしょ？ だったらあんた、あたしの  
執事になりなさい！ こき使ってやるから！」

少女の言葉を脳が理解するにつれ、くつくつと笑みが漏れ出る。

とんでもないバカに捕まった。

それがクロヴィスの最初の感想である。

「人集めて国取って、最後は世界も丸ごといただき！ あたしのため  
に命張ったりヒマな時の話し相手になったり、きつと飽きないわよー  
？」

それから、彼は納得する。

なるほど、最初から発想のスケールで負けていたのだと。

こんな場所でジメジメとアウトローなんざしていたら、そりゃ満た  
されるワケもない。

恵まれた才能があるから何でもできてつまらない、などとほざくく  
らいなら、それを以てしてでも無理ゲーだ、と思うようなことをする  
べきだった。

「そりゃでけえ仕事だな。報酬は？」

その時に見た笑顔は、クロヴィスには今もなお鮮明に思い出せる。

「あたしが世界の王様になるところ、一番近くで見れる権利っ！」  
何もかもが予測不能な目の前の少女は、自信満々で大真面目で、理  
不尽に満ち溢れていた。

「……ふ、む」

クロヴィスの投擲具、中空となっているガラス質の針状の武器。  
オリヴィエは己の腹に突き立ったそれを引き抜いて、放り投げる。  
栓が抜けどくどくと流れ出した血は、3秒も経たない内に塞がっ  
た。

彼の手術ベースヒトの胎芽による高速の再生能力。

この程度の傷であれば、彼の際立った継戦能力にはなんの影響も与  
えない。

反撃のため槍を構えようとしたオリヴィエの視界に移ったのは、ク  
ロヴィスが指で弾き迫ってくる針。

身をよじり、それを全力で回避しようとする体勢へと移る。

だが。

「遅い」

「――」

一步踏み出そうとした脚を、狙撃銃の重い一射が打ち抜いた。  
肉が弾け、右足が膝下から千切れ飛ぶ。

そして、クロヴィスの針は回避される事なく次々とオリヴィエの身  
に突き立った。

オリヴィエが今取ったのは、この戦いを見守っている戦士がいたと  
したら、不合理に移る回避行動だった。

クロヴィスが投擲する針は、体を貫通するような威力のものではな  
い。

通常であれば警戒すべきは、胴に直撃すれば内臓が抉れ飛ぶ威力を  
持つ銃の方だろう。

事実その結果、オリヴィエは大威力の銃を被弾し、その後、結局針までも受ける羽目となった。

「どうした、化物。もつと良い反応を期待したのだから」  
理由を明かせば、心底意外に思うかもしれない。

槍の一族を統べる王が、遙か数百年を生きる怪物が、まさか。

「痛いのは嫌だよー」とでも子供のように泣き叫ばないのか？」

一時的な苦痛から逃れるために、不合理な選択を強いられたなどと。

「いや……はや……これは、中々……」

ゆらりと立ち上がるオリヴィエの傷は、既に塞がっている。

刺さった瞬間に引き抜いた針による刺傷、破壊された右足。

先の一合の攻防で受けたいずれもが、傷痕も残らず元通りになっていた。

だがその表情には明確な変化が——額には、僅かに汗が浮かぶ。

——その毒性を語るにおいて、『致死』よりも『苦痛』が優先される植物が存在する。

ギンピ・ギンピ。

オーストラリアに生息する、イラクサの一種。

これといった特徴も無い、いつそ地味とわかっていい外見で雑草の中に混じるその植物は、しかし人間にとって凄まじい不幸を与える性質を有している。

根、茎、葉、その体全体を覆うのは、細かな棘。

そして中空構造となっている棘の中に込められているのは、凄まじいまでの毒。

猛毒。

殆どの場合、それがどれほど強力なものか説明するための事例は、こうだ。

——たったこれだけで人間が何万人と死ぬ。

——1滴にも満たない量でマウスが死んだ。

如何に少量で、どれほどの数を殺せるか。  
なるほどわかりやすい。

それではこの植物の毒について説明する文を挙げるとしよう。

——熱した酸を浴びせられたと同時に感電したかのような感覚である。

——刺されてから二年もの間、患部が痛み続けた。

——真偽は不明であるが、誤って葉で尻を拭き、痛みに耐えられず銃で己の頭を打ち抜いた人間がいた。

致死率、という一般的な毒の強さを測る基準で考えればそれほどのものではない。

死亡事例こそ存在しているものの、それは被害者全体の数に比べてあまりにも少ない。

この植物が凶悪な有毒生物として名を馳せている理由は、その毒で生じる痛みにある。

『ギンピエチド』。

彼らの刺毛に局在する特殊なタンパク質が著しい痛みを生じさせ、とある研究データによればその成分は神経細胞のチャンネルを恒久的に歪め挙動を不安定にし幾年にも渡り痛みを持続させるのだという。

そして、元のスケールでさえこのように恐れられる生物の力を、人間大のスケールで、かつ能動的に、攻勢に運用したとすれば。

「……」

これまでで棘を4発受けたオリヴィエの体内は、激痛という表現すら生温い苦痛の坩堝と化していた。

何をするにも、痛みが思考が妨害される。

生物の本能として、他の何よりも優先してそれを回避しようとしてしまう。

もはや、平常の行動を取れるような状態ではない。

「……怪物め」

だがそれでもなお、クロヴィスの表情にもまた余裕はなかった。オリヴィエの動きが鈍っているのは、痛みに対して耐性がないから、というわけではない。

むしろ、それだけで済んでいるのが異常なのだ。

常人であれば、いや、経験豊かな戦士であつても苦痛に苛まれ動く事すらできなくなる量を打ち込んでいるはずだ。

「今度は……私が追いかける番、という事……かな？」

そして、無力化できなければ一度の判断ミスでたちどころに命を奪われる相手であることを理解しているからこそ、クロヴィスは油断せず、に勝機を伺っていた。

針を牽制に飛ばし、それを回避しようとした隙を銃撃で叩く。

大銃の射程圏内を僅かに外れた距離を維持しながら。

しびれを切らして距離を詰めようと強引に動いたオリヴィエの隙を突き、銃撃により体を打ち抜く。

これまでに三発の銃弾が胴を打ち抜いたが、敵の唯一の急所、モザイクオーガン M O の破壊には至っていない。

けれど、逆説的にこれまで銃が貫通した場所に M O が存在しないという事から、おおよその位置は予測がついていた。

再び、オリヴィエが距離を詰めるべく地を踏みしめる。

それは、クロヴィスにとって明確な攻撃の好機である。

槍を構えたその姿勢は、胴の急所を晒す形となる。

狙いを違えず、照準を合わせ——

「優雅さには欠けるが、仕方ない」

その、瞬間。

射程圏外であるはずの槍が、明確にクロヴィスを射程圏に捉える軌道で襲い来た。

「……ッ!？」

一族の極まった動体視力と反射神経でオリヴィエを見れば、もはやその手に槍はない。

投擲された。

想定外の行動に、クロヴィスは一瞬、ほんの一瞬虚を突かれ対応が



遅れる。

だが、その程度の間はニュートンの身体能力にとってはさほどのものではない。

身を翻したクロヴィスの頬を辻風が掠め、槍がその身を貫くことはない。

「捕まえた」

そして、一瞬の隙に距離を詰めることもまた、ニュートンの身体能力にとってはあまりにも容易かった。

しまった、とクロヴィスは知覚するが、対応するにはあまりにも遅い。

「むう……！」

首をへし折らんばかりの勢いで握られ、喉から貴重な酸素がひゅうと零れる。

視界が明滅し、じわじわと黒に閉ざされていく。

死の間際、その脳裏には走馬灯の如くいくつもの像が浮かんでは消え、を繰り返していた。

「ん、よく……似合っ……んふふはははっ！ あは、はははははは！」

「笑いすぎですぞお嬢様」

「似合わなっ！ スーツも口調も似合わなっ!! ……あはははははははっ!!」

「従者の品格は主人の品格……だからこんな似合わんものを着てるんだろうが……」

——お嬢様……ルメリア様は、不思議なお方だった。

「この少年、いかがいたしますかな？ 指を折っていけば、内通していた相手はすぐにでも聞き出せるかと思いますが」

「食事とちゃんとした寝床を与えてあげて。後であたしから話聞きに行くから」

「……お言葉ですが、お嬢様。そのような温い姿勢では——」

「黙りなさい、クロヴィス。この子を見て決めたのよ。あたしの眼に文句があるのかしら?」

——気安い友のようであると同時に、気高い女王のようであり。

「ごこの紛争も、しばらくは大丈夫かしらね……」

「流石の手腕ですな。永久の平和という絵空事も、夢では——」

「お世辞はいいわ。あたしが死んだら、この平穩は終わりよ」

「今はあたしのすつごーいカリスマで無理やり繋ぎ止めてるけど。不安定に過ぎるのよ、今はまだ、ね」

「……は。仰る通りですな」

「だからまだまだ長生きしないとっ！ 期待してるわよ執事！ 健康的な食生活から護衛まで何でもね！」

——どこまでも現実主義者であつて、何よりも世界の残酷さを理解していたはずなのに。

「オリヴィエえ……アンタほんと胡散臭さの塊みたいなヤツなんだから、もうちよい真面目にやりなさいよ?」

「耳が痛いね。しかしそういう君も、最高会議一家の総意から離れて勝手に動いているようだが、それはいいのかい?」

「あたしはいいの！ いずれ世界の王になる女よ！ アンタも他の連中もすーぐにわかるんだから！」

「それはそれは、結構なことだ。その日が来るのを楽しみにしているよ」

「感情が籠つてない！ 言い直しなさい！」

——政敵とも平然と席を囲み、いつか分かりあえると心から信じていた。

そんな彼女の元には多くの人間が集い、同じ夢を見ていた。

恐怖による支配などではなく、人々が手と手を繋いで成す世界統一、などという絵空事にしか思えなかつた夢を。

彼女はそのまま、どこまでも高く飛んでいくのだと。

その姿を最も近くで見ていた執事は、そう信じて止まなかった。

……だが。

「……火災？」

彼の、人生で二度目に全てを変えてしまった一日の記憶は、目まぐるしく移り変わる。

客人に出す食事の材料に、買い忘れがあった。

その調達を頼まれたクロヴィスが急遽家を空けた、たった一時間のことだ。

彼の主君と僅か数人の使用人が残っていた屋敷は炎に包まれ、跡形もなく焼け落ちた。

「これはッ……どういう、こと、だ……！」

一面の炎へと飛び込む視界は、一転して豪華なホテルの一室へと変わる。

一族の最高位たち、ニュートン一家による緊急の会議。

礼儀の欠片もなく扉を蹴破った彼を迎えたのは、憐みの感情が多くを占めていただろうか。

「オリヴィエ……！ 貴様がッ!!」

周囲へと一切の意識を向けることなく、参加者の内のひとりにクロヴィスは全力で走り寄った。

一族の存続が危うくなるような事態——例えば、一家に名を連ねる人間のひとりが暗殺された、などという事態になれば、必然的に召集される家系の人間に。

……加えて。

一族に無断で日頃世界を飛び回っている彼女が屋敷に戻っている日程を知る人間——今日の客人であった男に。

「……誰の許しを得てオリヴィエ様の玉体に触れようとした、下郎が」  
だがクロヴィスが懐から取り出した暗器は、その喉には届かなかった。

オリヴィエの傍に控えていた白スーツ——椅子に座る事もなく岩のように佇んでいた青年が、クロヴィスの腕を掴みへし折らんばかりの力を込めていたのだから。

「死ぬ。我が主の御目を穢した罪過、その薄汚い命で贖うがいい」

青年が懐から銃を取り出す動きを、クロヴィスは目で追うことができなかつた。

押さえつけられた腕はぴくりとも動かせない。

「離してあげなさい、陸藍<sup>ルウラン</sup>。君の忠節はとても嬉しく思うけど……クロヴィス君をあまり責めないであげてほしい」

だが、彼の心臓を射貫こうとした弾丸が放たれることはなかつた。

不気味なほど穏やかに、オリヴィエはクロヴィスと己の従者である青年へ微笑みかける。

「主を失った従者がどんな気分なのかは、自分に置き換えてみたらよくわかるだろう?」

「……仰せの通りに」

次いでという言葉でようやく納得したのか、青年はクロヴィスから手を離す。

もはや、クロヴィスには目の前の敵へと挑む気力は失せていた。

「クロヴィス君も、こんな席に参加している場合ではないんじゃないかな」

ただ無駄死にするだけであると、理解していたからだ。

それに加えて。

「きつと彼女も、心細く思っているよ。一番信頼できる人が傍にいないと——」

「——まだ生きている、と気付いた誰かが刺客でも送り込んできたら、大変だからね」

平坦な、感情の籠っていないオリヴィエの言葉で、クロヴィスは弾かれたように会合の場を後にする。

死ぬわけにはいかないと考えた、ただ一つの理由のために。

視界が歪む。

記憶の行き止まりは、絶対安静を無視して飛び込んだ病室の中だった。

「……ごめんね、クロヴィス」

「お嬢様」

その名を呼ぶ声には、いつもの氣勢は残っていなかった。

「アンタが、飽きないように、ずっと、楽しいもの、見せてあげる、って、言ったのに」

「お嬢、様」

両眼を潰され、全身に火傷を負い手足の殆どが炭化し。

無数の管に繋がれることでどうにか命を保っている彼女は、別人のように思えた。

「報酬、払えそうにないや。約束、したのになあ……」

「よろしいの、です……私、は」

クロヴィスは想いの丈を主君に伝えようとする。

だがその言葉は、喉に悶つかえて出てこなかった。

何よりも彼女がそれを望まないのだと、わかっていたから。

「……あのさ」

「お断り、します」

嘆き、悔悟、様々なものへの怒り……負の感情の嵐が吹き荒れる。

それでもクロヴィスは、せめて貴女の前でだけはと押さえこむ。

「今日でクビ、出ていきなさいって言ったなら……聞いてくれる？」

「いいえ。私は……ずっと、お嬢様のお傍におりますとも」

「……そう。ありがとう」

不忠な執事への返答は、お叱りではなく短い礼の言葉だった。

そして、ニュートンの異端児が生涯の忠誠を誓った少女は一度だけ、小さく笑う。

彼が最初に出会った時の態度とはまるで違う、穏やかな声であった。

彼女が自ら命を絶ったのは、その三日後のことだった。

——誇り高い彼女が、心優しい野心家であった彼女が、『争うことなき世界征服』という夢を絶たれた嘆きは、苦痛はどれほどのものだったのだろうか。

あのまま、彼女が死を選ばなかったとしたら。

重傷を負った体がどこまで回復するかはわからないが、一族としての財力とコネクションで平穏な生を送ることができただろう。

退屈な余生。夢は叶わず何を成すこともなく静かに枯れ朽ちていく日常。

かつてのクロヴィスが何よりも嫌っていた、波風の一つが立つこともない予定調和の人生。

——それで、よかった。

ぼろぼろと涙が零れ落ちる。

意識が遠く、遠く薄らぐ。

彼は今でもあの瞬間を夢に見る。現実という名の悪夢に跳び起きる。

悲しげに呟く彼女に、自分がどう思っていたのか伝えることができていたのなら。

「私、は」

——貴女が生きてさえいてくれれば、それだけでよかったのだ。

「ではね、クロヴィス君。あつちでルメリア君によろしく伝えてくれたまえ。彼女はいい友人だったからね」

ミシミシと音を立て、もうすぐへし折れようとしている己の首。

まともにはできない呼吸。

だが、彼の眼に、再び光が灯った。

どす黒い憎悪に塗れた、黒い光が。

「……オ、オオオオオオ!!」

空気を裂くような雄叫びが響くと同時、オリヴィエが背後に跳びのこうとする。

そう、叫びである。

喉を押さえこまれていた状態のクロヴィスが大声を上げられたという事実はすなわち、オリヴィエによる拘束が緩んだ、という事もはや決着という局面で、何故なのだろうか？

「……っっ」

その回答は、既にクロヴィスから手を離していたオリヴィエの右腕にあった。

腕にびっしりと突き刺さった、無数の針片。

ギンピ・ギンピという植物は、先に述べた通りその植物体全体に毒棘を有する。

クロヴィスの腕——人間大へとスケールアップした苦痛の棘を、擦り付けられでもすれば。

どんな局面であつたとしても、高圧電流が流された強酸をいきなり手にかけて、反射的に引つ込めない人類など存在しない。

「これは、油断——」

困つたように呟くオリヴィエの右腕はだらりと垂れていた。

過剰も過剰に与えられた苦痛により、最早ともに動かすことも叶わない腕。

そして先程までの局面とは逆に、退避を図ろうとするオリヴィエへと一直線に迫る男が、ただ独り。

「終いだ……オリヴィエエエ!!」

意趣返しと言わんばかりに、クロヴィスはその首を掴む。

掌に直接形成された無数の毒棘が、魔物の喉笛を食い破る。

大量の針を、毒を、その身に送り込むために。

「ぐ、か……！」

オリヴェイエの身からは一滴の血も流れていなかった。

その凄まじい再生能力は、肉体損傷の尽くを無力化する。

だが、肉体の修復が対処法にならない手段であれば。

オリヴェイエに、この至近距離でクロヴィイスに抗する手段は存在していない。

もはやその動きには優雅さの欠片も残ってはいなかった。

クロヴィイスを排除すべく手足が振るわれるが、そのような対処はもはや無駄であった。

「……貴様の積み重ねた罪過に比べれば、一瞬も一瞬でしかないのが業腹だが」

「……、」

そして、数十秒にも渡る、抵抗の末。

「その苦痛を、贖いの一片にするがいい」

「……………」

数百年を生き続けた怪物の器は、その動きを止めた。

「……お嬢様。貴女はこのような行いを望んでいないのでしょうか」

しばし、物思いに耽り。

駆けてくる数人の足音を聞き、クロヴィイスは顔を上げる。

「仇は、取りましたぞ」

クロヴィイスの独断専行により戦力が大きく減り大変な苦労を強いられた仲間たちである。

さてはて、どう言い訳をしたものか。

減給を申しつけられたりしなければ、いいのだが。

そう、生涯の目標を成し遂げた復讐者はこれからの事に思いを馳せるのだった。



「おめでとう。満足したのなら、もう舞台から降りてもらってもいいかな？」

そして、予測不能に、理不尽に。

背後に現れた気配に、クロヴィスは一切の油断をしなかった。

一面に焦りの表情を浮かべた俊輝たちの表情で異常を察し、クロヴィスは身を翻し針を投擲しようとして――

「ぐ、がつ!？」

彼の全身を、無数の槍が刺し貫いた。

即死こそ辛うじて避けたが、体にいくつもの穴と裂傷を穿たれ地へと崩れ落ちるクロヴィス。

苦悶を噛み堪え身を震わせながらもどうにか視線を上げた、彼の視界の先には。

彼が先ほど討ち果たし地に沈んだ、魔物の亡骸。

そして。

「やあ私、随分と手酷くやられているようだ」

それと全く同じ姿をした何かが、立っていた。

# 第102話 Project: Garden of Eden 楽園の実

人類が作り上げた、とある叡智の話しよう。

積層造形装置。

持って回った言い方を避け一般の名称で語るならば“3Dプリンター”と呼ばれるその機械は、現在の地球において広く一般に普及している技術の賜物である。

その名の通り、紙に印刷するのではなく3次元の物体を作り出す。1980年代に原型が開発されたこの3Dプリンティングという技術は、技術が発展するにつれ様々な用途に用いられるようになった。

大量生産に入る前の製品の大まかなサンプル作成。  
機械部品の複製。

数えていけばキリがないものの、特にこの技術の恩恵が大きかった分野のひとつとして『医療』が挙げられる。

最初期には、血管や臓器の精巧な模型が。  
その後には、生物の器官を作成する事までもが可能となった。  
ただの模型などではない。

作り出す器官の『設計図』を用意し、培養した細胞を一層、また一層と積み重ねることで、生きている臓器そのものを作り出す。  
なるほど夢のような技術ではあるが、当然ながら簡単なものではなかった。

感覚で十二分に理解できるだろうが、それを叶えるためのハードルは極めて高い。

複数種類の細胞と数多の化学反応が絡み合う一部の複雑な臓器を作成するのは、生半可な技術では不可能だ。

そのような臓器の完全な作成が可能となったのは、研究機関用の高

性能機でさえ2100年代に入ってからのお話である。

——この技術に、目を付けた人間がいた。

人間を品種改良しようなどと試みる、変わり者の集団。

その黎明期の当主は、ある日こう考えた。

精巧な三次元の模型が作れるようになった。

生きている臓器が作れるようになった。

……では、その次の段階も可能なのではないかと。

「クロヴィスッ！」

腹を貫かれ崩れ落ちた部下の名を叫びながら、しかし俊輝は脚を踏み出せなかった。

「それで、私。どうだろうか、治療すれば行動は続けられそうかな？」  
「いや、これは……もう無理だね。毒も、体中に……回っているようだ」

理由は、眼前に広がった光景への警戒。

クロヴィスに仕留められ倒れ伏した男と、クロヴィスを背後から刺し貫いた男。全く同じ外見をした二人が言葉を交わしているという状況に、無策で突貫することを躊躇われたのである。

「そうか」

しかしその光景は長くは続かなかった。

納得したように、オリヴィエは落ちていた槍を拾い上げ。

「この体も安くないのだけど。残念だ」

倒れ伏していた自分と同じ姿の男へと、突き立てた。

「こんにちは、諸君。その二人は初めまして……だったかな？」

その一突きによって再生能力の中枢であるMOを破壊したのだから。

ぼぼごと泡立ちながら崩壊していく自分自身の肉体を背に、オリヴィエは悠然と侵入者たちを見据える。

「私はオリヴィエ……君たちの暗殺任務の標的だとも」

黄金比を体现したかのように整った体型、容姿。

まるで神話の一節かのように、槍の一族の王は悠然と四人へと歩み寄る。

「どうぞ、お見知りおきを」

ひらりひらりと、槍を持っていない左手を振るオリヴィエ。

次いで挨拶の言葉と、その姿が4人の視界でぶれるのは同時だった。

「……っ！」

余計な問答を交わす暇など無いだろう、とでも言うように。

ひゅ、という風を切る音と共に、オリヴィエの槍が4人の内最も非力な人間——エミリーの左胸を目掛け迫る。

動作の起こりを悟らせない縮地にも似た歩法とニュートンの脚力を組み合わせ、瞬間移動としか認識できないような動き。

「アンタ、ニュートンの中でもとんでもない奴なんだろうけど……」

しかしその長槍は、同系統にして相反する武器——短槍によって弾かれた。

「俺よりはまだ……遅い！」

オリヴィエの攻撃を弾き軌道を逸らしたのは、変態したシロの腕に生えた口吻。

自身の反応速度を超えた妨害に、きろり、と瞳だけを動かしオリヴィエの視線がシロへと向く。

「今ですわっ！」

しかしその視界の先にもはやシロの姿はなかった。

代わりに飛び込んできたのは、自身へと放たれた粘液塊。

殺せなかったとしても、自分が狙われている、と気付いたエミリーは慌てて退避するだろう。

彼ら4人の中で唯一飛び道具を持つ彼女の動きを縛れば、戦局はこ

ちらに傾く。

そう予想していたオリヴィエは、エミリーが一切退避する姿勢を見せず反撃してきたことに対し微かに目を細める。

少し、彼らを過小評価していたようだ、と。

当のエミリーは自身を狙うオリヴィエの動きを十分に目で追えていたわけではない。

ただ、確信がふたつあったただけだ。

一番弱い自分が真っ先に狙われる。

「助かりましたわシロ君！」

そして、絶対に自分を守ってくれる人がいる、と。

だからこそ、心臓を引き裂かんとする槍が見えたとしても、彼女は一步も退かずに自身の武器を放つことができた。

「さて、どうしようか——」

地球の戦場をふたりで生き抜いた逃亡者たちの連携は、オリヴィエに退避を余儀なくさせていた。

槍を锚として急停止すると同時、オリヴィエは鋭角を描いて左後方に跳びエミリーの放った粘液塊を回避する。

重力に引かれ投げ出されたかのように揺れる手足。

未熟な人形師に無理やり糸を引かれたマリオネットのような気味の悪い機動で跳ね、オリヴィエは再び戦士たちから距離を離す。

さて仕切り直しだ、と状況把握の為オリヴィエが周囲を見回した瞬間。

「合わせろ健吾ッ！」

「オーライ！」

まるで昆虫の大顎が獲物を挟み込むように、左右から長槍と刃が同時に振るわれた。

着地した瞬間の体のブレ、僅かな隙を狙って放たれた必殺の布陣。

「困ったな」

だが、オリヴィエは少し首を傾げただけであった。  
右方からコガシラクワガタの大顎を振るった健吾の目に、槍の穂先が映り込む。

左方から至近距離にまで接近していた俊輝の目に、ボコボコと内から沸き立つ衣服が映り込む。

刹那、瞬き一度の暇も与えず一本と十数本の槍が同時に放たれた。

「ちいっ……い！」

「マジかよ、えげつねえ」

右目を狙ったカウンターの刺突を避けるため、健吾は攻撃を諦め離脱する。

わかっていた事ではあるが、槍術の練度が違いすぎる。

オリヴィエの衣服を突き破り体内から生えてきた多量の槍を、俊輝は身を大きく振じて回避した。

かつてU—N—A—S—Aでの戦いでその不穏な予備動作を知っていたからこそ、すんでのところまで攻撃を諦める判断ができた。

かくして、最初の攻防は互いに傷を負わない結果に終わった。

四人が同時に戦闘態勢を取りオリヴィエの動きに対応できたのは、不幸中の幸いだったといえよう。

同じ顔をした人間同士が会話している上、片方を殺しているという光景。

それを目にして少しでも動揺を見せた瞬間、オリヴィエの槍はその人間の喉を刺し貫いていただろうから。

そう、彼らは既に理解していたのだ。

全く同じ顔をした、二人の人間がいる理由。

目の前の魔物が、一体何であるのかを。

— Project : G o E .

槍ゲガルドの一族の絶対の機密たる、『人が神へと至るための図』。

その全ての始まりは2120年代……ニュートンの一族の黎明期に立ち上がった計画であった。

目的は『一族最新の遺伝子の、効率的な保護』。

当時の当主は、会合の場で強い懸念を一族へと訴えかけた。

事はまだ興ったばかりだ。自分たちの研究は、数百年に渡り続くことになるだろう。

自分たちの目的を成すためには、莫大な資金と世界各国の要人に対する繋がりが必要不可欠となる。

そうして勢力が増すにつれて、必然的に敵も増えることになるだろう。

そうなれば、破滅的な被害を受ける可能性は低いとは言いがたい。

品種改良した人間と言えど、空を飛べるわけでもなければミサイルを弾き返せるわけでもない。

限度がある以上、不慮の事故や敵対者からの干渉による壊滅という最悪の可能性を考慮すべきだ……と。

そうして皆を説得し彼自身が設計したのが『神殿』と呼ばれる施設だった。

一族最新の肉体のクローンを作成し保管しておくための、強固に防護され隠蔽された地下研究所である。

その最奥部に設置されたのが、二重螺旋を描く巨木を彷彿とさせる塔の如き機構だ。

正式名称を「スーパーコンピュータ接続型積層造形装置」。

空間中にある分子ひとつひとつの動きさえエミュレートできるほどの高度な演算機を3Dプリンターに接続して、彼らは何をしていたのか。

「人間をポンとプリントアウトしてるなんて、笑えねえよ」

——その解答は、先ほどのオリヴィエの姿が示していた。

冗談めかして言う健吾の額には、脂汗が滲んでいる。

人体のクローンを高速で生成する装置。

無数の水槽に並べられた、同じ顔、同じ体型の人間たち。

「そうかい？ 大変便利で助かっているけれどね」

しかし、である。

それだけであれば、今オリヴィエと相対している彼らは、最初にその資料を見たノンナはそこまでの不快感を覚えなかったはずだ。

「ああ、それを便利って思えたんだとしたら、そりや便利だろうさ」

健吾は吐き捨てるように呟く。

仮に自分も同じことができたのだとしても、彼はとても実行しようなどと思えなかったから。

「……これまではよ、なるほどテメエがラジコンみたいに別の体を操ってたんだ、って思ってたさ」

彼が思い起こしたのは火星での記憶だった。

脱出を目前としたところで襲撃してきた少年、マルク。

地球に帰ってからの解析の結果、彼の脳には何らかの情報を通信していたと思わしき機械が埋め込まれていた。

さらには、第三班の班員曰く健吾たちが相対した時の彼の性格はこれまで接していた姿とかけ離れていたのだという。

「どこかに本物が隠れて、ネチネチ陰湿にやってたってな」

「ふむ、それは心外だ。こんなに苦労していたというのにな」

意外なのか、不満なのか。

酷く情動が小さいオリヴィエが何を思っているのかは健吾にはわからない。

「……ああ、その通りだ。てめえは遠隔操作なんかしてなかった——」  
しかし、これだけは理解できた。

感情が薄い、その程度で済むようなものじゃない。

「——全部の体に、それぞれ増やした自分をぶち込んでやがったんだからな」

今自分が相対している人の形をした何かは、人間として当然の何か



が欠け落ちている。

『既に生命の樹は獲得した。私が、それを思い描いた出発点の段階で』  
2100年代半ばのこと。

当時のニユートン家当主、後にその座を退き槍ゲガルドの一族の当主となる男、オリヴィエ・ゲガルド・ニユートンはそう語った。

古来よりヒトが求めて止まない理想のひとつ、不老不死。

それを既に自分は手にしたのだと主張する男に、一族の人間は懐疑的な目を向け根拠を問うた。

品種改良の傍らで、一族の人間たちは科学的アプローチから不老不死を叶えるべく、考えうる限りの手段を模索している。

この時代でもっとも有力な手法とされていたのが『脳移植』だ。

老いて病に蝕まれた肉体を、若く健康な身体へと移し替える。

確かに、常人を超えた時を生き続けることができるだろう。

だが拒絶反応など多くの条件を乗り越え脳を他者の体に移し替えたところで、肝心の脳そのものが劣化してしまえばどうしようもない。

そもそも話となるが、人間の品種改良を目的とする一族にとって自分より劣る器へと移るのは本末転倒だ。

さらに言えばよりスペックの高い器は同じ一族の者が殆どであるため、不合理な共食いにしかならない。

この方法は、彼らが望む形での不死という条件を十分に満たしてはいなかった。

だが、また別の方法をかけて当主であったこの男は見出したのだと言う。

どのような手法なのか、と期待と疑惑が合わさった彼らにオリヴィエが見せたのは、一基の機械だった。

それは、脳の形状とそこに流れる電気信号のマッピング装置。

早い話が、人間の記憶と人格データをコピーし保存しておき、他に上書きするための装置である。

説明を聞いて、一族の人間たちはそれ以上詳しい話を聞くこともな

く落胆した様子で場を後にした。

これが『口』のこの意識を他人に移し替える手段』であったならば、間違いなくそれは不死の領域だ。

物質的存在ではない意識の移植が可能になるのだとしたら、まさしく人間は永遠を手にすることができらるだろう。

だが目の前の技術を用いたところで、『自分と同じ思考の存在が増えるだけ』に過ぎない。

己が死ぬという事象に、それでは何の影響も与えられない。

誰もが記憶からこの日の事を忘れ去った十数年後、オリヴィエ・G・ニュートンは命を落とした。

ゲガルド家の当主として一族の会合に参加しようとしていた際、何者かに襲撃される形で。

元当主が暗殺される。

突如として一族を襲った事件は、彼が懸念していた『敵対者による一族滅亡の危機』を真に迫った現実として皆に認識させるには十分であった。

この一件により一族が打撃を受けた際の保険の必要性は強く訴えられ、その役割を担うゲガルド家の発言力と『神殿』への予算投資は右肩上がりを見せた。

ゲガルド家の当主にとって、『自分が殺された』という点を除けばどこまでも都合よく事が運んだこの事件の犯人は、未だわかっていない。

そして、一族を揺るがせた事件の本当の顛末は、4人が見たデータファイルに記されていた。

「……その上で、わかんねえ。聞かせろ」

故に健吾がオリヴィエへと尋ねたのは、以後尋ねることとなる内容は、全て事実の再確認でしかない。

「おまえの “一人目” はなんで、クローンに殺されたんだ？」

健吾の質問は、ただの時間稼ぎだ。

それとも、もしかしたら心の底で少しでも期待していたのかもしれない。

「身勝手に増やされた恨みで、反乱でも起こしたのか？ 人生が嫌になって、後は全部任せたって投げ出したのか？」

「……ふむ、そんなに理解しにくいのかな？」

自分たちが見た資料の記載が間違いであつたと信じたかつた。

このような存在が理解し難かつたから、勘違いであつたと思いつた。

「老いた器ひとつを切るだけでこれだけのリターンが得られるなら、そうするだろう？」

健吾がそうしたのも、当然なのかもしれない。

他ならぬ親族たちでさえ、本家の当主でさえ、彼の本質を違えていた。

そんなはずがない、と思いつ込んでいたのだから。

「合理的だと、思うのだけどね」

己の人格をコピーして増やす。

その技術自体は、他に例が存在しないわけではない。

ゲガルドの成立から遙か後の中国において、とある上級軍人がMO技術と組み合わせることで用いている。

そのコピーたちの自分以外の自分に対する認識は、『自分の別の可能性』というものだ。

つまり彼らは、己と同じ記憶を持ち同じ能力を有した存在はあくまでも『限りなく自分に近いだけの他人』だと考えている。

だから、時に不和が生じることもあるだろう。

自分がオリジナルになり替わるため、自分は一人だけでいい。

基となった人格によつては自分同士の殺し合い、などという悲劇に発展するのもおかしくはないだろう。

「そう、かよ」

だが、違った。

最初から、彼の最初の一人と彼から生まれ落ちた複製体の意見は一致していた。

他ならぬ彼のオリジナルが、書き記していたのだ。

自分自身を殺させるように。

己と同じ記憶を持ったコピーが、実行するように。

自分が神に至るための計画である、と称して。

それが示すのは――

「別に『私』が死ぬわけじゃないからね」

――この男は、己の『個我』に一切の価値を見出していない。

……哲学的な問いになるが、『自分』を『自分』たらしめているものとは何であるのだろうか。

記憶と肉体の完全な写身が目の前にいたとして、それでも己は眼前の存在とは違う人間だ、と考えられる根拠とは。

明確な回答など存在しない問いであるのは承知の上。

だがそれでも一つの解を挙げるとすれば、それは『個我』ではないだろうか。

世界は誰の視点から観測されているか。

たとえ何百何千という己の複製体が世界中に散らばっていたとしても、同時に世界各国の光景を見ることも、それに感動することもできないだろう。

目の前に広がる視界の主は、今この文章を読んで「何言ってるのかわかんねえよ」などため息をついているのは、他のどの複製体でもない一個体とそこに宿った心である。

今こうして思考している、世界の中心点。主観的な視点の持ち主。それこそが、『自分』と呼ぶべきものなのではないか。

納得できるかはさておいて、この理屈を踏まえた上で、とある話をしよう。

男の親類が、かつて彼に尋ねた問題と、その解答に関する話を。

『目の前に、自分と全く同じ記憶と体を持ったクローン人間がいる。どちらかが死ななければならずその選択権が己にあるとしたら、どうする?』

きつと、迷う人間はそう多くない。

多くの人間が、相手を死なせる選択をするだろう。

自分が死にたくはないから。

少しの人間は、自分が死ぬ選択をするだろう。

相手が死ぬのは可哀想だから。自分はもう生きていたくないから。

どちらを選んだにせよ、その理由が何にせよ、選択した人間は同じ結論に至っている。

『目の前の存在は、自分に限りなく近いだけで自分ではない』。

その価値が等価ではないと考えているからこそ、どちらかを選択でききる。

さて。

この至極シンプルな問題に、男はこう答えた。

“どっちでも変わらないから適当に選ぶかな”

……と。

「……………」

健吾が、一段と表情を険しくする。

再び思い返すのは、火星で最後の最後に立ち塞がった少年の器。

“初めまして”

だから、こういう事ができる。

自分の肉体ですらない器に意識を発生させられてなお、平然と自分ではない自分の目的のために命を落とせる。

“それではね……諸君”

次に浮かぶのは、U—N—A—S—Aで奴を仕留めた時の記憶。

平然と己の死を受け入れ、再びまみえる事を前提にしたかのような挨拶。

だから、こういう事ができる。

彼にとって己の死は、死ではなかったのだから。

“この器も潮時のようだ。いい具合に使い潰し、地下に潜るとしよう”

資料に記されたかつての当主は、己を殺す計画にそう書き添えていた。

だから、こういう事ができる。

計画の為に自ら死を選ぶ。それを殺される当の本人が『多少の損益である』という程度の認識で行える。

……彼にとっての自己の定義とは、主観の主である己自身ではないのだから。

——彼は既に、今もなお一族が求めている生命の樹を手にしていて。彼にしか認識できない、不死の在り方を。

機械による肉体と自己意識の複製。

各個人の脳に埋め込んだ高度な通信装置による、リアルタイムでの記憶情報の同期。

……そして、主観的な自我を持つ己ではなく、複製された総体を『自分』として認識する精神性。

それこそが、ニュートンの深淵たる魔物の不滅性の所以である。

技術が発展した今になってなお精神の転移ではなく複製を行っている理由は、至極簡単だ。

『自分と同じ記憶と思考を持つ存在』と『自分』は、完全にイコールで繋がる存在だと認識しているが故に。

己の精神を複製し肉体に植え付け増やすという行いは、彼にとって新しい手や足を生やす、そのような認識でしかない。

「さて、と。質問はそのくらいでいいかい？ 長話に付き合わせてしまつて申し訳ないね」

伸びをするように上半身を細かく震わせるオリヴィエ。

一方の健吾は、俊輝に目配せをする。

稼いだ時間分の作戦案は立てられたか、と。

敵に悟られないように小さく頷く俊輝。

彼は、その間に今回の任務続行について結論を出していた。

撤退すべきだ。

これ以上の交戦は無駄だ。

殺すことができたとしても滅びない。

『自己』という絶対の存在であるはずのものを、何の感慨も抱かず使い捨てることができる。

目の前の存在は、肉体的にも精神的にもヒトの範疇にない魔物なのだ。

だがその情報を得られただけでも、不滅性を支えているものの正体がわかっていただけでも、収穫と考えるべきだと。

「……成程。君たちはどうやら、私から尻尾を巻いて逃げようとしているらしい」

——クロヴィスをどうにか回収して、全力で撤退する。

俊輝が目くばせで皆に意思を伝えようとしたのとオリヴィエが静かに頷いたのは、同時だった。

「だとしたら、どうする。お前に俺達全員を殺せるだけの強さは無い。違うか？」

努めて冷静でいて、かつ強気に。

俊輝がオリヴィエへと告げたのは、極めて妥当な戦力分析だった。「やろうと思や幾らでもやれるんだぜ？　爺さん連れてトンスラこいた方が都合がいいってだけでな」

「挑発なら無駄ですわ！　あなたは何度殺されても平気だってコト、わかってますの！」

「こいつらの言う通りでな」

オリヴィエに食って掛かる健吾とエミリーを制しつつ、しかし俊輝はふたりの言葉を肯定した。

先程の攻防で、わかった事がある。

自分たち4人で挑めば、オリヴィエを殺すこと自体はできるだろう。

しかし一方で、それは即座に成せる状況ではないのも事実だ。

極まった槍術に加え、体内から突き出す複数の槍。

守りに徹されたら、相当な時間を稼がれることは間違いない。

加えて、犠牲者も無しに勝てるほど甘い相手とも考えていない。

戦闘の末にどうにか殺せるだろう、というだけだ。

一方で、いくらでも肉体の替えを用意できるオリヴィエはたとえ殺されたとしてもさしたる問題ではない――

「いいや、挑発とは違うのだけどね。ただ、今の私と相對しているというのは、君たちにとっても貴重な機会だ……という事だけは伝えておきたくてね」

「……なに？」

――はず、だった。

オリヴィエの言葉は想定の外にあり、俊輝から思わず疑問が零れる。

「まあ知つての通り、基本的には別にいくら死んでも懐が痛むくらいなのだけど……今の私が殺されるだけは、すごく困る」

普段彼が明確に感情を見せる時のような、どこか演技臭い態度ではない。



そこには、小波程度の小さなものであるが、確かな情動があった。

「この肉体は、神の器だよ。何百という私を潰した末にようやく成功した傑作だ——こう言えば、伝わるかな？」

オリヴィエの言葉が意味するところは、四人には読み取れない。

ニュートンの最先端を行く当主の写し身。

神の器とは、クロヴィスが仕留めたものと同じ、クローンで増やされたその当主の肉体を指すのではないのか？ と。

「ああ、やつぱり。その反応を見るに、アレの中身を最後まで見たわけではないのだね」

「……そうだ。お前が何を言っているのか、俺達にはわからない。言葉の意味だけじゃなく、わざわざそんな情報を話す理由がな」

確かに、オリヴィエが何を言っているのかはわからない。

だが、言葉の意図だけはわかる。

『君たちにとっても貴重な機会』『今の私が特別』『神の器』。

それらの言葉を正直に受け取るならば、オリヴィエは

『逃げない方がいい。今ここで自分のこの体を殺すべく挑むのが、君たちにとって最良の選択だ』

と、そう俊輝たちに言っているのだろう。

その内容はこうしてオリヴィエと相對する4人にとって有益な情報でしかない。

そんなにも大切な体なのであれば、何も伝えず4人が帰るのを見送ればいいだけであるのに。

わざわざ親切にもこの事実を伝える意味が、理解できなかつた。

「それは確かにね。……体も暖まってきたし、丁度いい頃合いだろう」  
俊輝の疑問に、オリヴィエは疑問も尤もだ、と肯定を返し体を微妙に沈める。

大きく肉体を動かす前兆。

跳躍、もしくは高速で駆け寄つての襲撃に備え、俊輝と健吾が武器を構える。

シロとエミリーが、油断なく敵を見据える。

「簡単な理由だよ。私にとって益になるからこそ、今こうして伝えたんだ」

だが、4人の警戒はほんの一瞬だけ杞憂に終わる。

オリヴィエの体は彼らとは逆方向、大きく後方へと跳んだ。

ゆらりと重量を感じさせない動きで宙を舞い、オリヴィエは壁際に並ぶ水槽、そのひとつの縁に過たず着地した。

手にしていた槍を手放し、その場に捨て置く。

それから彼にしては珍しい、力任せの動きで蓋を開き培養液の海へと手を入れ。

「年甲斐もない話で恥ずかしいのだけどね。私はどうやら、子供のように舞い上がってしまったっているらしい」

異形の槍を、中から引き抜いた。

「せっかくの貴重な機会に……試運転がしたくて堪らないんだ」

鳥籠を縦に引き延ばしたかのような、金属が格子状に編まれた円錐型の大槍である。

その内に閉じ込めるように充填されているのは、脈を打つ肉塊。

「まず、いい」

オリヴィエが飛び退いた瞬間には既に、4人は攻撃態勢に移っていた。

場を包み込むのは、全体が底なしの沼に沈んでいるかのような息苦しく怖気の走る気配。

激しく警鐘を鳴らす生存本能に従い、戦士たちは一刻も早くオリヴィエを仕留めんとする。

「今か今かと逃げる隙を伺っているようなものではなく……」

「何かされる前に——」

だがその突貫は間に合わない。



腰を突き破り複数生えるのは、頭足類のそれを彷彿とさせながらも先端に人間の手が形成された奇怪な触手。

両腕をびっしりと覆う、体内から析出したと思われる赤茶の所々に黒が混じる金属の欠片。

分裂を繰り返す無数の瞳がぎっしりと詰まった、異形の左眼。

それらの肉体の変質と呼応するように、彼が携えた格子状の槍の間隙から零れ出すように肉塊が増殖し続ける。

言うまでもなく、単一の生物の特徴などではない。

無数の生命体から体組織を剥ぎ取り合一したかのような、禍々しい躯体。

その姿は、邪教の神像を彷彿とさせた。

『型も手術難易度も生存率も度外視した、数えきれない回数 of MO 手術による能力の複合体』。

ニュートンの強靱な肉体が耐えられるからこそ可能とする、無謀極まりない試み。

それこそがこの世界を喰らわんとする怪物の能力の正体である。

役職上、MO 手術の中でもさらに表沙汰にできない応用技術について知る俊輝とシロは、オリヴィエの力をそう推察する。

否。

彼らの認識は部分的に真実を突いていたが、しかし決定的な箇所では違っていた。

『無数の能力を宿しているという眼前の現実がある以上、無数の手術を繰り返したに違いない』と。

だがこの姿を見て、誰が即座に荒唐無稽としか言いようがない事実へとたどり着けるだろうか？

目の前の悪夢のような光景の全ては、一度の手術で組み込まれた一種の生物を核としたものであると。

「再び、全てをここから始めるとしよう」

神の泥人形が、ゆらりと動く。

『既に生命の樹は獲得した。私が、それを思い描いたその出発点の段階で。だが、それでもまだ足りない』

『私は、もう一つの生命の樹を手に入れなければならない』

己が手にしたその力が、真に到達点へと届き得るものなのか確かめるために。

—— 生命の果実。

M. O. 技術によって神へと至るための最後の1ピースとなる生物を、槍の一族の王はそう呼んだ。

その起源は人間よりも遥かに古く。

その体構造は、人間よりもはるかに原始的かつ単純である。

だが彼らは、我々人間の常識から見れば特異な性質を数多と有していた。

マクロの世界を生きる生物とは法則からして全く異なる、ミクロの環境で繁栄するために。

それは例えば、『分泌装置』。

彼らは体内で合成した物質を複雑に編み、無数の槍を生成する。身体から突き出し標的を貫いて毒を打ち込むそれは、彼らの餌といえる相手だけではなく、時に競合相手との生存競争にも用いられるのだという。

それは例えば、『遺伝子の水平伝播』。

彼らはある時には生命の設計図を他者と交換することで、またある時には環境中に遊離したそれを取り込むことで、世代を経ることすらせず己の形質を変化させることを可能とする。

およそ、600年前。

彼らの生態について、とある研究成果が報告された。

『極小の分子機械を用いた競合相手の殺傷』。

『環境中からの遺伝子の取得』。

二つの特性を発現するための遺伝子は、いずれも特定の環境条件を引き金として同時に制御されるようになってい、と。

この研究結果が示す事実とは。

——『周囲の敵対者を殺戮し、その遺伝子を喰らい取り込み自らを変異させる』という一連の過程を、彼らは能動的に行っているということ。

「原初の海より芽吹き、星の隅々へと広がった大樹の枝葉」

『生命の樹』。

旧約聖書においてエデンの園の中央に生えた、喰らえば不死の存在となる果実を実らせる樹。

「その遍くを束ね——」

そして。

「——私が、唯一絶対の神と為る」

生物学において、系統樹を示す語である。

オリヴィエ・ゲガルド・ニュートン

国籍：？

529歳  
28歳  
0歳  
♂  
190cm  
97kg

専用装備：生体器官複合型重機械槍 『ペルペトウム・セファイロ  
ト』

+

脳神経接続型量子通信装置 『定足感知』  
クオラムセンシング

MO手術”哺乳類型”

ト

発生初期胎芽



ビブリオ・コレラ

”細菌型”

$\alpha$ MO手術

+

知恵ヒの果実ト

生命ヒの果実ト

淵澱オリの造物主ヴィエ・G・ニュートン、  
萌芽ジャーマニング。